

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03037 0274





昭和二年二月二十日印刷
昭和二年二月二十三日發行

近代日本文學大系
第六卷

(非賣品)

編輯者兼
發行者

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

右代表者

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

野中次郎

印刷者

東京市本所區番場町四番地

井上源之丞

印刷所

東京市本所區番場町四番地

凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

電話銀座

七三八三番

二一八八番

振替東京五二二九八番

〔れそ〕 (冥途 飛脚) 七一九頁 「それ(其れ)の倒詞。「そ

れ」を「れそ」といひ、「これ」を「れこ」と隠語的に倒詞を

用ゐる。蓋し或物について其の名を明らかに言はない

でも、「れそ」「れこ」と言へば話相手の者に其の意通じ

る時に用ゐる粹言葉である。冥途飛脚の爰の文の「れ

そ」は、八右衛門と情交ある遊女をいうたのである。

〔ろませ、さい云々〕 (冥途 飛脚) 七二四頁 「ろませ」

は六、「さい」は掛聲、「とうらい」は十、「さん」は三、

「はま」は八、「さん」は三、「きう」は九、「ごう」は五、「り

う」は六、「すむゐ」は四であつて、本拳にいふ唐音又は

その訛りである。

〔わせる〕 (嵯峨天皇 甘露雨) 九八九頁 「おはせる」(御座)

の約つた語。ごさる。來られる。

〔わや〕 (雪女五枚 羽子板) 三四七頁 無茶。無茶苦茶。この

語現今も中國地方で無茶の意に用ゐ、岐阜縣加茂郡東

白河村地方では無分別の意にいふ。

〔藁を焚く〕 (冥途 飛脚) 七二九頁 難癖をつけて貶すを

いふ。但言集覽に、「むだ口をいふ事、又古道具を買ふ

に色々悪しく言つて直ぎるをいふ。」と見えてゐる。

〔わるごう〕 (雪女五枚 羽子板) 三二六頁 「わるごと」の義。

いたづら。わるでんごう。

〔わんざん〕 (發摩 歌) 二八三頁 和謔に「ん」の増加し

た語。さかしら。

〔牡鹿の園の法の導〕 (心中二枚 繪草紙) 四二三頁 妻戀

ふる牡鹿に鹿苑をいひかけて、法の導といひつゞけた

のである。鹿苑は釋尊成道して佛陀伽耶の道場を離れ

て、最初に説法された靈跡の地である。

ラウマシ」をきかせた謎である。

〔桃園も、その〕（雪女五枚 羽子板） 三四頁 貞純親王をいひ、清和

天皇の第六皇子である。其の邸京都の桃園にあつたによつて桃園といふ。貞純親王の子經基に姓を源氏と賜はつた。これ清和源氏の祖先である。

〔やいとぎやう〕（今宮 心中） 六四〇頁 （灸爨）灸をす

ゑた時に食ふもので、霰（餅を采目に刻んで炒つたもの）と熬米と熬豆（黑豆を熬つたもの）とを交へ、これに山椒または生薑を加へ、砂糖で固めたものをいふ。

關西地方でこれを「おいり」といふ。

〔やぼてりがき〕（心中重 井筒） 二九七頁 古淨瑠璃助六

心中（蟬のぬけがら）道行の文に、「やぼてんじんかうつじんか。」とあるを取つて、「やぼてりがきか薄柿か。」としたもので、濃い澀染の意にいらたのである。

〔やもじ〕（賀古教信 七幕廻） 二二二頁 やみの文字詞。闇。

文字詞は足利時代皇室式微の際、女官達がその名を言

ふを忌みて何文字というた隠語より起つたものだといふ。

〔讀賣よみうり〕（卯月 絶） 四六一頁 觸賣とも繪草紙ともいひ、

天災地變や敵討葛藤の類や役者評判情死罪人の仕置など、總てその當時起つた世上の珍聞異事を拙劣な繪畫に描き、小割書をした所謂瓦版印刷物で、僅か一二枚の粗惡な小冊子である。

〔らむうけんだ〕（心中重 井筒） 二九九頁 「らむ」は以呂

波順の音を言うて、「う」につづけたまでである。うげんだはおやま形（女形）の俳優山下右源太をいふ。

〔りうくわう〕（當流小 栗判官） 一二三頁 （流黃）玉の名。

辭源に「流黃。玉也。（淮南子）流黃出而朱草生。」

〔歴節風〕（巖岫天皇 甘露雨） 九八〇頁 れきせつふうは痛

風とも稱し、關節の疼痛激甚な病氣であつて、その病狀恰も白虎に咬まれるやうに疼むものを白虎歴節風といふ。

親王の敵山彦皇子に一味し、吹目の術というて己が兩眼を虚空に飛ばす魔法を行ひ、花人親王の館を探つて其の状況を報告した、なほ心中二枚繪草紙のこのあたりにあるまのの長者、花人親王など皆用明天皇職人鑑の中にある人物である。

〔松浦瀉〕

(松山)

八〇八頁

肥前國松浦郡の濱邊を

いふ。欽明天皇の朝、大伴狹手彦高麗征伐に出征するを、その妻佐用姫別れを悲んで、松浦の山に登り領巾を振つて歎いたが、その一念化して石となつたと云ふ。

〔丸太〕

(吉野都)

七七六頁

丸太とは小唄を便りに

色を賣る比丘尼をいふ。丸太は即ち圓木で、僧を木の端はしといふより、比丘尼をも圓木の意にとりなした稱である。

〔萬年草〕

(心中萬年草)

五三二頁

紀州高野山などに自

生する苔類である。本朝世事談綺に、「萬年草——高野山の御廟にあり、一とせに一度日あつてこれを探ると

云ふ、此の枯れたる草を水に浮めて他國の人の安否を見るに、存命なるは草水中に生きて生ひたるが如し、亡したるは枯葉そのまゝなり。」と見えてゐる。

〔蟲籠〕

(堀川波鼓)

四八九頁

蟲籠窓の畧。大屋根と小屋根との間に造れる格子窓をいふ。

〔明解〕

(賀古政信七墓廻)

二一八頁

京普光寺の詩僧なり。

明解歿して其の親知の夢に、明解が地獄に墮して詩を作り、供養を頼むを見たといふ。

〔めいよ〕

(氷の朔日)

六五八頁

名譽である。ほまれ

の義より轉じて、奇妙、かはつたこと、奇怪、不思議の意にいふ。「めいよ」は「めいよう」「めんよう」などと訛つてもいふ。

〔もがり〕

(心中重井筒)

三〇三頁

垣のやうに竹を立て

並べた紺屋の物干。

〔餅屋のお福〕

(願城反魂香)

四〇六頁

往時餅屋の看板

に、馬の面にお福の面を被せたものをした。蓋し「ア

字なり、すゝむとつゞけんが爲に君の字を一字加へて云ふなるべし。」と見えてゐる。

〔べうの湯元〕 (心中二枚 繪草紙) 四二二頁 別府(べふ)温

泉の湯元である。別府を犬の鳴聲「べう」にいひかけたのである。犬の吠える聲を「べう」というた例は狂言犬山伏などにも見えてゐる。

〔卍和〕 (雪女五枚 羽子板) 三四七頁 支那春秋戰國時代楚の

卍邑の人である。玉璫を楚山中に得て之を厲王に獻じた。然るにこれは玉でなく石だ、玉を誑したものとして卍和の左足を削つた。武王の時卍和またその玉を獻じた。この時も石だとして卍和の右足を削つた。文王の世となつた時卍和其の璫を抱いて、楚山の下で哭したといふ。

〔ほじそあかなる顔付〕 (心中萬年草) 五二二頁 般若

心經呪文句の菩提婆娑訶に、赤なる顔付(怒つて顔色赤くなる)をいひかけたのである。

〔細谷川の丸木橋、ふみかへれとぞ祈りける〕 (心中萬年草) 五一四頁 飛脚の九兵衛が心細くなるを細谷

川にいひかけ、そして源平盛衰記なる平通盛の歌、「我が戀は細谷川の丸木橋、ふみ返されてぬるゝ袖かな。」に據つたもので、踏みかへざるを文返さるにきかせたのである。

〔ほでてんごう〕 (丹波 與作) 五四六頁 「ほでてんご

ともいふ。ていたづら(手悪戯)。「ほで」は手をいふ。俚言集覽に、「ほでてんがう。いたづらをする事、京にていふ。」と見えてゐる。

〔まぎら〕 (心中重 井筒) 三二二頁 糊塗。ごまかすこと。

紛らかすこと。和訓栞に、「まぎらはし。紛をよめり、目霧合の義なるべし、はし反ひなり、俗に含糊の意まぎらといふも同じ。」と見えてゐる。

〔ますら〕 (心中二枚 繪草紙) 四二六頁 巢林子作用明天皇

職人鑑の中にある悪外道の名である。この外道は花人

敵を附狙ふ芝居で、元文元年に文耕堂の作つた敵討檻
縋錦はこの非人敵討を淨瑠璃に作つたものである。こ
この文は、非人敵討の芝居はこの當時名高かつたによ
つて、これを勝二郎のもとの手代新七に當てて罵詈し
たのであつて、「どこぞでそこらの橋の下新七居やらぬ
か。」は荒木與次兵衛の口吻を傳へたものである。

〔びやくらい〕(唱歌) 留多(留多) 九七二頁 (白癩)天刑病即

ち癩病である。神佛の冥加に盡きた者がこの病に罹る
といふ迷信よりして、僞るに於ては白癩に罹る法もあ
れの義にて、自誓の詞に用ゐたものである。

〔ひよんな〕(卯月) 四五四頁 凶な意にいふ。忌々(いさゝか)

しい。變な。

〔ひわづ〕(復古教信) 七葉廻(七葉廻) 二〇四頁 弱々しきをいふ。尪

弱。和訓栞に、「ひわづ。源氏物語に見ゆ、尪弱の意に
いへり、或は嬬人をひわづひととよめり。」

〔豊于禪師が四睡〕(傾城反) 魂香(魂香) 三八四頁 豊于禪師と

寒山と拾得と虎と皆睡れる故事に據つたのである。下
學集、數量門に、「四睡。寒山、拾得、豊于、虎、四個
相依打睡、其趣可レ愛、後人寫以爲三四睡圖云々。」

〔梟松桂の枝に鳴き、狐蘭菊に隠れ栖んで〕(雪女) 五枚

板(羽子) 三三四頁 荒涼たる地と變じて、松桂蘭菊の

叢中に梟や狐の棲處となるの意。白氏文集に、「梟鳴二
松桂枝、狐藏二蘭菊叢。」謠曲殺生石に、「梟松桂の枝に
鳴きつれ、狐蘭菊の花に隠れ住む。」

〔ふりばり〕(舟波) 興作(興作) 五五二頁 「ふんばり」ともい

ふ。總嫁。立君。

〔船のせんの字を君にすゝむと書きたり〕(今宮) 心中(心中)

六二九頁 この文句謠曲自然居士に見えてゐる。謠

曲拾葉抄に注して、「説文曰、前(前)本作(本)舟(舟)、不(不)行而進(進)ム
謂(謂)之(之)舟(舟)、从(从)三上在二舟上、徐曰、坐而至者舟也、私云、
前の字又舟(舟)とも云ふなり、舟のせんの字と云は舟(舟)の字
を云ふなり、すゝむとよめり、君にすゝむとは君(君)は添(添)

をいふ。半四郎の心中狂言とは、大阪道頓堀岩井半四郎座で寶永三年夏上演した鳥部山心中狂言をいうたのである。「半九郎お染」「四郎五郎」を見よ。

〔半兵衛〕

(心中刃様 水の朝日)

六八四頁

傳奇作書附録中の

卷、心中情死人名録の中に、小菊半兵衛の名が載つてゐる。蓋し吳服屋の手代半兵衛は池田屋の遊女小菊と馴染み、主家の吳服物を取出して費用に充て情交を續けてゐたが身のたちどころなきに至つて、遂に相共に刃に伏して情死した者である。

〔ひがやす〕

(卯月 池)

四五二頁

「ひがやす」「ひがへ

す」ともいふ。瘦せ細つて弱々しきをいふ。この語蓋

し魚の名「ひがい」から出た物であらう。海録に、「ヒガイスと云ふ詞。淡海魚譜云、ヒガイ漢名未だ詳ならず、鯊魚の類なり云々、(頭書カマツカ、一名タケヲ、スナフキ、ゲンキボウ、漢名鯊魚なり。)肉性味鯊魚に同じ、食法も又同じ、其形瘦せて骨高きを以て土俗の諺に替

人をヒガイスと云ふ、この魚譜は渡邊圭輔作なり。」と見え、橋守部の俗語考に、「東國にて、ひはづに瘦やせみたる小兒などをヒガイスと云ふ。」と見えてゐる。

〔瓢潑川に口漱ぎ〕

(大覺大僧 正御傳記)

三八頁

堯帝の世の

隠士許由山中に隠れ、所持したものは一瓢のみであつた。堯帝が己に國を譲らうとすることを聞いて、耳の汗れとして潑川で耳を洗つたといふ。

〔ひし〕

(心中重 非箇)

二四五頁

三〇九頁

ひしぐ(拉)

義。碎けること。破滅。

〔ひしる〕

(大覺大僧 正御傳記)

三九頁

「ひぞる」の義であら

う。立腹する。怒る。

〔ひだの掾〕

(心中重 非箇)

三一七頁

山本飛彈掾をいふ。

手妻人形操の名人である。

〔非人敵討〕

(世説新語 世説)

六〇二頁

俳優荒木與次兵衛

の當り藝であつた歌舞伎狂言「非人敵討」をいふ。この狂言は春藤治兵右衛門、同新七の兄弟が非人となつて

を食つて世を渡る者、即ち詐欺師。妖巫の類である。

人倫重寶記卷之五に、「鳩の飼とて順禮をうたひて門々をあるき、女ばかりのさびしさうなる所にては茶煙草を所望し、それよりとり入れ、四國西國をめぐりて恐るしき事殊勝なる事とりまぜてかたりて錢銀をとる。

……熊野の新宮本宮の事をかたりては、鳩の飼料をしんぜられよとて錢をとりしより、鳩の飼といふ名はつれたり。」と見え、また和訓栞に、「はとのかひ。妖巫の類をいふ、八幡神に託し鳩の飼料をむさぼる義にや、或は鳩の卵と書けり。」と見えてゐる。

〔婆羅僧揭諦〕

（心中萬年草）

五二二頁

般若心經の眞言

呪。

〔半九郎お染〕

（總卯月）

四四九頁

實事譚に見聞覺知

の所説として記してある梗概を述べれば、若侍菊地半九郎が京都二條城普請奉行の附人として江戸から上り滞在中に祇園の茶屋娘お染と馴染をかきね、半九郎公

用濟んで江戸に歸らねばならぬ事になつたので、兩人互に別れを悲しみ、遂に寛永十三年九月二十九日の夜鳥部山で情死したといふ。但し卯月掩のこゝにいへるは、寶永三年の夏道頓堀の岩井半四郎座で上演した半九郎お染の心中狂言をいうたのである。これは前述の事柄を更に脚色したものである。その狂言の梗概は、

半九郎とお染といふ若い男女が情交密であつた。或日半九郎がお染を順禮の女であると偽つて、己が兄の篠塚孫太郎の内に引入れて共に宿つたが、戀て孫太郎は兩人の關係を嗅付けて怒り、お染を戸外に放逐した。

半九郎その夜家を忍び出で、お染と共に無常の山に行つて情死した。この時浮氣男の車屋七兵衛が茶屋女まつと心にもあらぬ情死を約して無常の山に來て、半九郎お染の情死を見て、俄に怖氣が付いて逃げ出したといふ仕組である。「四郎五郎」をも見よ。

〔半四郎〕

（總卯月）

四四九頁

大阪の名優岩井半四郎

こそと人も見るらん世を、ねばうかたうねちみやくす
るは、鬼も笑はんあすの事。」と見え、また、和訓栞、
ねちるの條に、「ねちみやくといへる俗語も熱脈なるべ
し。」と見えてゐる。

〔寶所〕

(讃歌加) 留多

九六四頁

寶所とは、珍寶の所の

義。以て安樂所の意にいふ。法華經化城喻品に、「欲
過二此道一至_中珍寶所……若能前至_二寶所_一亦可_レ得_レ去。」
と見え、「寶所在_レ近、此城非_レ寶。」とも見えて、無上正
覺をいうたのである。

〔白駝王〕

(曠曠天皇) 甘露雨

一〇一六頁

白駝王は、印度

波羅奈國の王で、鬼を搦めた剛勇の神である。安倍宗
任松浦齋に、「波羅門、白駝、四天王、韋駄天、班足王、
軍多利夜叉、提婆達多。」と見えてゐる。縛多王また白
澤王といふも同じものであらう。

〔ばくらう〕

(曾根崎) 心中

二二三七頁

竊に博勞をいひか

け、博勞町の稻荷の神社にいひとつけたのである。竊

は支那で想像の歌名、熊に似て犀日象鼻牛尾虎脚で、
悪夢を食ふといふ。白居易の鰻屏贊并序に、「鰻者象鼻
犀日牛尾虎足、生三南方山谷中云々。」と見えてゐる。
後漢書禮儀志に、「莫奇食_レ夢。」とある莫奇は、鰻だと
の説もある。

〔はしり〕

(今宮) 心中

六五三頁

(走)物を洗つた水を走

り洗すよりの名、臺所のながしのことをいふ。この語
現今も福山市地方で用ゐてゐる。

〔はすは〕

(曾根崎) 心中

二二三七頁

(蓮葉)女の心の輕佻

なるをいふ。人なれてなまめきたること。

〔はちけん放つ〕

(吉野郡) 女楠

七七五頁 「はちげん」は

「はつげん」(發言)の轉訛。「はちげん放つ。」は言ひ放つ
を強めていへる言葉である。宇治加賀掾正本の鴈金文
七に、「主人へ言譯すべいとて、はちげん放つてわめき
ける。」と見えてゐる。

〔はとのかひ〕

(讃歌加) 留多

九六八頁

誑を吐いて財貨

げた利益によつて、後に花氏城に於て正法王となり、阿耨伽と號したといふ。

〔年ばい〕 (心中重) 二九九頁 相當の年配。世の經

驗を積んだ五十前後の年頃。

〔途方に暮れて〕 (傾城反) 四一〇頁 どうしてよいか分別を失ふ。「とはう」は途方か。或は十方か。曆日の語に、「十方暮れ。」といふもある。

の語に、「十方暮れ。」といふもある。

〔とほしたて〕 (心中二枚) 四二八頁 色事に耽るをいふ。とぼすとは房事を行ふをいふ。

〔肉縛外縛の印〕 (巖融天皇) 一〇二二頁 十指を外なほはやくゆ縛たづるん



外縛印



内縛印

方に組む印契を外縛印といひ、内方に組む印契を内縛

註 釋

印といふ。

〔梨も礫もうたんせぬ〕 (曾根崎) 二三八頁 礫を打つて合圖する事も無いの義。音沙汰無きをいふ諺。

梨は無の借字。

〔二月堂の牛王〕 (薩摩) 二七一頁 二月堂の牛王

のお被札の當時配布された物には、「南無頂上佛面除疾

病 二月堂 南無最上佛面願満足。」と書いてあつた。

濟度されるを、渡りに船を得たのに喩へたのである。

〔如渡得船〕 (大覺大僧) 四四頁 衆生が佛に逢うて

法華經藥玉品に、「如子得母、如渡得船、如病得醫。」

〔女人は地獄の使、よく佛の種を絶つ〕 (大覺大僧) 四四頁 女人は罪業深く、五障あつて地獄の使である、能く佛性を斷絶させるものである。

〔ねちみやく〕 (心中萬) 五二三頁 ぐづくとねつ

いこと。執著。今様二十四孝(寶永六年刊)に、「花もさ

いこと。執著。今様二十四孝(寶永六年刊)に、「花もさ

「苦」と見えてゐる。

【つうづ】(羽女五枚) 三五九頁 通途であらう。普通。有觸れ。

【づくにふ】(蟻蟻天皇) 九七七頁 「づくにふ」で、

俗入道の畧訛であらう。蛸入道。蛸坊主。

【つこうど】(丹波) 五三八頁 「つこうど」といひ、

「つきこと」(突言)の約訛であらう。とがりごゑ。腹立。

ちげな無愛想聲。語録字義(元祿七年刊)に、「鶴突。ヤ

サシゲモナキ事ナリ、俗ニツカフドナルト云ふ是ナリ」

と見えてゐる。

【頭破作七分如阿梨樹枝】(大覺大僧) 五六頁 法

華經陀羅尼品に、「若不順我呪、惱亂說法者、頭破

作七分、如阿梨樹枝」とあるに據つたのである。

【壺の印】(御城反) 四一九頁 狩野元信の印は壺の

中に元信としてある。

【てみそ】(蟻蟻天皇) 九八九頁 「てみそか」(手密)

の畧。人に見られないやうに隱密にする手わざ。骨牌札をこまかす手わざをいふ。

【てんがう】(心中重) 二六五頁 (薩摩) 三〇七頁

【てんがう】(飛脚) 七二九頁 戲謔。じやうだん。いたづら。

「てんがう」の語源に就いては古來諸説あつて確かでない。

按ずるに令義解に、「癲發時臥、地吐涎沫、無所

覺、狂或自欲走、或自高稱三聖賢也。」とあるやうに、

「てんがう」は癲狂の吳言で、もと病名である。又關西

地方で古くから、子供などが親の仕事の手傳をせうと

して却つて邪魔をするを「てこうをする」といふ。「てご

う」は手事である。この手事と癲狂とこんがらがつた

語ではあるまいか。

【でんど】(池) 四五一頁 「でどころ」(出所)の訛

畧。公儀。公衆の見る所。

【徳勝童子】(七藝廻) 二二二頁 徳勝童子が土を

もつて甃を爲して遊戯せる時、釋尊に逢うてこれを捧

〔代待〕(今宮) 六四六頁 「だいまつり」代祭のつ

まつた語。二十三夜の月の深更にのぼるを代拜さすを

二十三夜の代待といふ。日次紀事正月の條に、「毎月毎

神社會、其身有_二故障_一、則借_二山伏行人_一、令_レ詣_二其社_一、

是謂_二代參_一、或日待月待庚申待之類亦稱_二代待_一、故到_二

其時_一則代參代待者、高聲呼_二街衢_一、則入_二人家_一而請_二米

錢_一」と見えてゐる。

〔竹本頼母〕(冥途) 七二五頁 竹本筑後掾の高弟で

美聲を以て聞えた淨瑠璃かたりである。正徳五年に國

性爺合戦の九仙山をかたつて好評を博した。其の家は

大阪新町西の大門口にあつて、鬢附香油などの化粧店

を出してゐた。そして彼は竹本座に勤める暇には、揚

屋色茶屋にまねかれて淨瑠璃を語つてゐたのであるか

ら、冥途飛脚のこゝの文は、竹本頼母様借つて來い。」

と音へるも情味深い文である。鬢附買ふとて聞きました

が。」といふ文も、竹本頼母の店で買物したことが知

れるし、頼母が遊女等と知合が多かつた事も知れる。

〔玉の緒〕(大覺大僧) 三八頁 玉を貫く緒である。命

をも魂の緒というて玉の緒に通はせたのである。新古

今集戀の部の歌に、「玉の緒よ絶えなば絶えね、長らへ

ばしのぶることのよわりもぞする。」

〔斷金の契り〕(雪女五枚) 三三五頁 極めて親密な

交はりをいふ。金は固い物であれども、二人心を同じ

うするときは、その堅いことは金をも斷つべき程であ

るとの意。易經繫辭上傳に、「二人同_レ心、其利斷_レ金。」

〔斷末魔〕(曾根崎) 二五一頁 梵語 Marnachid で

あらう。Marnachid は Marnan と Chid との合字

であつて、Marnan は支節の義で、Chid は切斷する

義である。Marnan を訛つて末魔と音寫し、Chid の

義の斷と合して斷末魔となつた語で、この世から氣息

を引取る最期、即ち生から死に移る悶絶の眞際といふ

語である。顯宗論に、「傷_二害人心_一二者、臨終受_二斷末魔

〔そんをつぎ〕

(無川波鼓)

四七九頁

後を繼ぐ義。遺傳

を繼ぎ襲ふ。(これと反對に、血統を引かないことを孫外れといふ。)具原好古編の諺艸に、「孫ソシ。其の人の苗裔

と云ふ事を其の人の孫と俗にいへり。」と見えてゐる。

〔太阿上市〕

(鞍山)

七九七頁

太阿も上市も支那古

代の名刀である。越絶書云、「妙王召ニ風湖子フウコ、令ア之ニ

吳越ニ見申歐冶子干將カ、使之爲ニ鐵劍三枚、一曰龍泉、

二曰太阿、三曰上市。」

〔だい市之丞〕

(心中刃は水の朔日)

六八三頁

市之丞は天和

頃に居た大阪の遊女である。その市之丞と長右衛門と

いふ男とが大阪の生玉で天和三年五月に情死した。そ

れが直に道頓堀の芝居に上演された。これが心中狂言

の最初であつたであらうから、心中はそれが初めの第

一といふに市之丞をいひかけたのである。

大温の物〕

(今宮心中)

六三九頁

大温の物とは大いに

温度を高める物といふことである。當流節用料理大全

(正徳四年刊)に、諸鳥、魚類、獸物類、干物類の能毒

を記すに一々その物の名を擧げて、その下に、「へいの

物」或は「ひえの物」又は「うんの物」「大うんの物」「かん

の物」「れいの物」とそれ々記してある。「へい」は平、

「ひえ」は冷、「うん」は温、「大うん」は大温、「かん」は寒、

「れい」は冷であつて、これ等總てその物を食ふによ

つて生じる體温の關係をいうたものである。今宮心中

の爰の文は、灸をする時は温熱が加はるによつて、「ひ

えの物」を食ふべきである。然るに鰯などの大温の物

を食うては、更に温熱が加はるによつて身體の害にな

るから、そんな物は食うてはいけなと、かねて申し

おいたとの意である。

〔大黒舞〕

(舞女五枚羽子板)

三三七頁

大黒天の面を被り、

頭巾を著、その一人袋を持ち他の一人三味線を持ち、

民間の門々に唄ひ舞うて、米錢を貰うた物貰ひの一種

であつたが、文政以前既に廢つた。

路、浮世小路、衣張小路、お前小路の四小路があつた。

これ等の小路には小色茶屋類のものが建ちならんでゐた。殊に浮世小路は新町通ひの駕籠の立場でもあつたし、立君も用没し手代の隠し宿も多かつたのである。

さればこゝに「小路隠れ」と云へるは、浮世小路をぞめていて色遊びをすることを云うたものであらう。

〔せかいらぎ〕(女町) 八四四頁 (春梅花鮫) 鮫皮

精義に、「春カイラギは春通りにずうと地より大きな粒の頭より尾まであるがゆゑに、春カイラギといふなり、長さ三尺より六尺許もあるものなり。」と見えてゐる。柄(つか)に春梅花鮫を巻いて作つた刀。

〔瀬戸の染飯〕(母波) 五三九頁 瀬戸は駿河國志太

郡にあつて島田町と藤枝町との間にある小邑である。

染飯はこの地の名物である。東海道名所記に、「瀬戸の染飯は此所の名物なり、その形小判ほどにして鹽飯(こほし)に山梔子(くすり)をぬりたり、うすきものなり。」と見えてゐる。

〔懺法〕(買古成信) 二一八頁 懺悔法、即ち伏敷して

善法を勤修するを誓ふ法である。天台大師撰の法華懺法などはこれを記した書である。

〔即身成佛〕(大覺天傳) 四四頁 法華經提婆達多品

に、「佛告三諸比丘、未來世中、若有善男善女人、聞妙法華經提婆達多品、淨心信敬不レ生三疑惑二者、不レ墮地獄餓鬼畜生、生三十万佛前、云々。」とありて、龍女も妙法の經力にて即身成佛してゐる。

〔染川〕(心中重) 三一七頁 染川重郎兵衛といひ、

寶永初年頃上方で名高かつた俳優である。熊坂今物語に、「片岡仁左衛門存命の折からあまたある狂言の中に熊坂今物語……其の年其の座につらなりし役者は誰々にておはしけるぞ、まづ篠塚次郎左衛門、染川重郎兵衛、杉山勘左衛門、女形には袖崎歌流。」と見えてゐる。

〔それや〕(心中重) 三〇九頁 (其れ屋) 遊女屋を、そ

れ屋といひ、遊女を「それ者」又は「しゃ」というた。

に扮し、松といふ茶屋女と心にもあらぬ情死を約し、女に引かれていやくながら情死に出で、無常の山に來て半九郎お染の情死を見、俄に怖氣が付いて逃げ出したことを演じて好評を博した。こゝの文に、四郎五郎が不心中。」とあるは、これを云うたものである。役者稽古三味線、立役之部に、「上上富。中村四郎五郎。」とありて其の藝評に、「津川殿太夫姿道中の時、下男となりて提灯持ちての供、くつわの後家かもん殿密通し白小袖著て心中せうといはるゝ時、嫌がらるゝ顔付去々年大阪にて鳥べ山の不心中にて大當し給ふ、其うつり故手に入つた藝此所大だけ、只今では諸藝大きに上り、仕残さるゝ事なし、其内あら事の武道得物、上上白吉引合、當年の當りを見、來年は御一分に黒吉に成り給へ。」と見えてゐる。(序に云ふ。寶永五年刊の役者稽古三味線に、「去々年大阪にて鳥べ山の不心中。」とあるからには、卯月紅葉の上演も寶永三年であつたこ

とを立證するもので、外題年鑑に寶永四年上演したことを記せるは誤りと斷すべきである。)

〔しんぞ〕

(曾根崎心中)

二二五六頁

「神ぞ」で、即ち「神ぞ

照覽あれ。」の畧されたもので、偽を申すに於ては、神の照覽ましますによつて、直に神罰を蒙る法もあれとの意で、自誓の詞である。

〔すがる〕

(心中二枚繪草紙)

四二二三頁

縫り合ふ意に鹿を

きかせたのである。鹿をすがるといふは、古今集の歌に、「すがる鳴く秋の萩原朝立ちて云々。」とあつて、舊説及び顯注密勘などに「すがる」を鹿の事とした臆説に據つたものである。

〔すし〕

(曾根崎心中)

二二三五頁

好すしの義、色好みなるを

いふ。また轉じて野暮やばの意にいふ。色道大鑑に「すし」を解釋して、「此方にてはさまで思はぬに、先方より馴れ親しみて言ひ寄るを惡みていふ詞。」と見えてゐる。

〔小路せうぢ隠れ〕

(卯月徳)

四五五頁

昔時大阪には淀屋小

て、霸王樹に「さちらさつほ」と傍訓してある。

〔しのきん〕

(賀古教信
七葉廻)

二二二頁

(手巾)長さ五尺

ばかりの布帛である。その布帛を紵けて帯にしたものを手巾帯といふ。僧尼がこれを衣の上から纏ひ、前で結んだによつて手巾の上帯ともいうた。手巾帯或は手巾の上帯といふを畧して手巾ともいうた。紅梅千句に「をどりに出さぬうら盆の宿、花染の五尺の布や惜しむらん。」とある五尺の布は即ち手巾であつて、踊に用ゐたのである。好色具合に「紫縮緬のくけたをしゆきんにしめ、帳一つ持つて。」分里艶行脚に「此の尼大きに取亂し、薄化粧目に立ち、藤鼠のあはせに縺子の手巾、次第に募りて此の庵を立ち出で。」と見えてゐる。

〔しのらい〕

(二枚繪
草紙繪)

四二九頁

(氷の
朔日)

六八二頁

(集禮)飲食物などの諸式勘定。もと習禮の字で、史記孔子世家に「孔子去曹適宋、與弟子習禮大樹下。」と見え、禮式を稽古することをいうたのであるが、轉

じて集禮と書いて、飲食物などの諸式勘定のことをいひ、上方言葉である。

〔しよける〕

(吉野郡
女楠)

七七七頁

「しける」の訛り。

「しげる」を見よ。

〔諸餘怨敵皆悉摧滅〕

(大覺大僧
正御傳記)

四一頁

法華經樂

王菩薩本事品に「汝今已能破三諸魔賊、壞三生死軍、諸餘怨敵皆悉摧滅、善男子百千諸佛、以三神通力、共守三護汝。」と見えてゐる。

〔素きを後〕

(傾城反
魂香)

三七三頁

論語八佾篇に「繪

事後素。」とあるに據つたのである。傾城反魂香は繪師に關する淨瑠璃であるによつて、冒頭から繪に關する故事を用ゐたのである。

〔四郎五郎〕

(卯月
繪)

四四九頁

上方で立役の名優で

あつた中村四郎五郎を云ふ。寶永三年の夏道頓堀の岩井半四郎座にて、お染半九郎の心中狂言(即ち鳥部山心中)を上演した時、四郎五郎が浮氣男の車屋七兵衛

樂しむ料金である。往來の男を見かけて袖を引き、淫を賣る女、即ち辻君を十文色といふ。當世娘氣質に、總嫁の事を記して、「往來の袖をひかへて十文づゝに情の切賣。」と見えてゐる。五十年忌歌念佛に云へるは、土百姓の野夫だけに、辻君の淫賣行爲を目撃して男女が喧嘩をしてゐるものと祭したのである。

〔此妙法蓮華經者、本地甚深之奧藏也、三世如來之所證得也〕
(大覺大僧 正御傳記) 三一頁 此の妙法蓮華經は

諸佛出世の本懐として、佛と佛とのみ證智し、三世如來の證得された甚深祕妙の眞理なるによつて、即ち奧藏である。法華經安樂行品にも、「此法華經諸佛如來祕密之藏、於三諸經中、最在其上」と見えてゐる。

〔それ釋尊は母の御爲切利天に昇り、一夏九旬摩耶報恩經を説き給ふ〕
(大覺大僧 正御傳記) 三一頁 釋尊摩利

天に昇り、一夏九旬（四月十六日より七月十五日まで其の日數九十日）の間、摩耶耶夫人の爲に法を説いて

證果を得させられた。その經を佛昇切利天爲母說法經といひ、摩訶摩耶經とも摩耶報恩經とも云ふ。

〔章甫の冠〕
(雪女五枚 羽子板) 三三三頁 章甫は殷の時の

冠の名。賈誼の弔屈原賦に、「章甫薦履兮、漸不_レ可_レ久。」

〔しやちらごはい〕
(傾城反 魏香) 三八二頁 やたらに

硬い。むやみに強く固い。「しやち」は刺多くて手のつけやうなく煩はしいことを言うたのが、轉じて、「やたら」「むちやくちや」の意になつたのであらう。

〔しやちらさんばう〕
(心中刃は 氷の朔日) 六六二頁 やたら

ら。むちやくちや。「さんばう」は三寶で、「いきなり三寶」「南無三寶」などに聯想されて附いた語であらう。霸王樹を「さちらさつほ」と云ふのも、刺多くて手のつけやうなく煩はしいから附いた語であらう。猫耳（享保十四年刊）に機石の跋文に、「つらくの椿の言の葉

しげり、霸王樹のむづかきしき編集の姿なれば。」とあつ

次郎左衛門を云ふ。寶永六年頃まで敵役を勤めて後に立役になつた。役者謀火驍(寶永七年刊)立役之部に、

「上上富。篠塚次郎左衛門。今難波の當り男は篠塚、諸人に可愛がられ、實惡にして片岡殿よりよい」と

の評判、諸見物手を入れ、なんなく實方になりすまされた。……去年まで實惡で黒吉の御位、當年より立役

故白吉、やせ肉な音羽殿と引合、大兵なれば引取つて

來年は黒吉。」と見えてゐる。巢林子作今宮心中に、「篠

塚次郎左を見る時は大佛島を思ひ出す。」とあるは、篠

塚次郎左衛門が大兵なるによつて、奈良の大佛をきか

せて大佛島と云うたのである。

〔師走油〕

しはあぶら
(今宮)
心中

六五二頁

おぼろ
映禍の意にいふ。

師走

(陰曆十二月)に油をこぼせば火に祟るといふ。

〔十二燈〕

城歌加
留多

九六八頁

十二燈は十二銅とも

いふ。燈明料として賽錢十二文を白紙に包み、捻りて

神佛に捧げる。これをお十二銅といふ。十二文は十二

箇月即ち一年間に當てたわけである。色里三所世帯、

京の巻に、「然も今年は正月に聞ありて、……清水寺の

子安塔に十二銅の絶ゆる聞もなく、當年の包紙十三文

づゝ、目に見えて一文づゝの徳。」と見えてゐる。増補

俚言集覽に、「十二銅はもと十二灯にて、燈明を奉る料

なるべし。」とある。

〔十枚糊の付紙臺〕

瀬川
波鼓

四八六頁

銀十枚と書

いた包紙を糊で臺に貼付けたもの。貞丈雜記に、「今時

付臺とて黄金一枚銀子一枚などと書きたる包紙を臺に

糊にて貼付けて、金銀をば別に包みて遣す事あり、古

は付臺と云ふ事なし、要脚何疋とて鳥目にて遣しける

なり、殿中にて鳥目など懸三御日一事はなかりしなり、

付臺と云ふ物後世し出したる物なり。」と見えてゐる。

巢林子作薩摩歌に、「大鯛、昆布、柳樟、五色の縮緬、

紅眞綿、付紙臺、三荷に擔はせ。」ともある。

〔十文〕

じふもん
(五十年忌)
歌念佛

五七二頁

總嫁即ち辻君をかうて

さである。この反には古來異説があつて、或は一段が今の六十間に當るといひ、或は六開といひ、或は五開（布の一段が三丈であるから）といふ説などもある。

〔二度〕（冥途 飛脚） 七一五頁 三度飛脚の畧。三度飛脚

は、元和元年より大阪城の定番の諸侍等が東海道各驛の驛長等と相談して、其の家隸を飛脚として、毎月三度日數八日を限つて東海道を往復せしめたに起つた。

後には大阪飛脚は其の出發を毎月二日、十二日、二十二日と定めた。

〔山路の道行〕（心中一枚 繪巻紙） 四二二頁 花人親王が玉

世姫と戀仲となり、山彦王子の亂を避けて、玉世姫の父の豊後眞野の長者の内に養はれ、山路と替名して草刈となり、草刈笛を吹いて一時世を忍ばれた。山路の道行は、用明天皇職人（道松作の）にある山路玉世の姫道行を云うたのである。

〔しかけ〕（堀川 淡鼓） 四八一頁 （仕掛）手管。手練。し

かけでやる」とは、手管でごまかして支拂ふの意。

〔じがけ〕（大覺天僧 正御傳記） 三二二頁 （自我偈）法華經壽量

品に、「爾時世尊欲重宣此義、而説偈言。」と云ひ、「自我得佛來、所經諸劫數、無量百千萬、億載阿僧祇云々。」とありて、總て二十五句偈ある。其の最初の二字を取つて自我偈といふ。

〔しける〕（今宮 歌念佛） 六五〇頁 五七七頁

〔茂〕こもる（籠）義で、即ち男女籠る事で交媾をいふ。

〔しげる〕は訛つて「しよげる」ともいふ。

〔四土不二〕（賀古教信 七卷通） 二二五頁 天台宗にては、

凡聖同居土、方便土、實報土、常寂光の四土を立つ。

されど圓融の理から觀れば四土總て不二である。

〔四とん八辯〕（乘丸） 一七四頁 釋尊の説法に能辯

なのをほめて四辯八音（ハツトシ）といふ。それを前後してかくいうたのである。

〔篠塚〕（心中重 井筒） 三一七頁 大阪の歌舞伎役者篠塚

〔酒には濱松〕（傾城反）
（魂吞）

三七四頁 當時酒宴のとき

に、「濱松の音はざゝんざ」といふ唄を謡ふことが流行つたので、酒宴には濱松というたのである。

〔さそく〕（薩摩）

二六二頁

（左足）左足を踏むなど

いふは、長刀などで突いてかゝる時に左足を踏み出すをいふ。謡曲「熊坂」に、「いらつて熊坂左足を踏み、鐵壁も徹れと突く長刀を。」と見えてゐる。

〔佐渡島傳八〕

（淫婦出）
（世濃徳）

六〇一頁

道化方の名優で

ある。三國役者舞臺鏡（元祿十二年刊）に、「天然とあがりたる道外、元來顔付やみらみつちやとし、目耳鼻の附け所違うた様な、我が身ながらも、悪いと思はるゝやら、又しても一番がけに顔の事を罵らるゝ、此の人よい人の側を去らず、何やらをなさるゝ事上手ぢや、さるによつて、寸暇なくして、彼所の此所のと引張太鼓のうはもりなり、それ故御内證あたゝか餓頭に暮さるゝ事その隠れなし。先諸藝いやしく、何を言はるゝ

と思へば、食ひ物の事ばかりを大事さうに申さるゝ。と見えてゐる。

〔さよがうし〕

（心中二枚）
（繪草紙）

四三八頁

（小夜格子）書

樓の二階窓の竹格子をいふ。南水漫遊に、「鳥之内六軒町といふは塗屋町なり、重井筒の戲文中の巻に、月にはやわたりぞめして中橋や、六軒町の小夜格子とて、娼家の二階窓の竹格子をいふ。」と見えてゐる。

〔讚對揚の次第書〕

（賀古教信）
（七幕廻）

二一八頁

法會に散

華の式を行ふとき、散華の偈を終へてから、佛法世法の常住安穩なるを希ふ偈文を擧げて佛徳を讚嘆すること。其の儀式の次第を書いたものを讚對揚の次第書といふ。

〔三反〕

（朝歌加）
（留多）

九七二頁

今昔物語に出てゐる話

が、其の後にできた宇治拾遺物語に載つてゐて、今昔物語に丈とあるのを反に書替へてあるので、反と丈とは同じ長さであることが知れる。即ち三反は三丈の長

〔こづか〕 (絶) (卯月) 四五頁 髻をいふ。「かみづか」

(髪束)を「かみづか」「からづか」といひ、「こづか」と轉訛したので、「かみより」(紙縫)を「かうより」といひ、

「こより」といふも同じ類である。かた言(慶安三年刊)に、「かうづかをこづか。」

〔戀路の闇のくらがりと〕 (艇川) (波鼓) 四七四頁 八百

屋お七の歌祭文の中にある文句である。紀海音撰の八百屋お七の中に八百屋お七江戸櫻といふ歌祭文が載せてある。その中に、「哀れなるかなお七こそ、戀路の闇のくらがりに、よしなきことをしいだして云々。」とあるは、其の頃謠はれたお七の歌祭文に據つたものであらう。

〔ごまのはひ〕 (歌加) (留多) 九六八頁 騙者。旅人を欺

いて掠奪する無頼漢。これと同意義の語に「とつこ」といふがある。蓋し眞言宗で行法に用ゐる護摩、または獨鈷を以て、人を騙して財貨をむさぼる者をいうたこ

とから起つた語であらう。和訓栞に、「ごまのはひ。護摩の灰なり、さるを無頼の徒に呼ぶは、之をもて人を騙して錢貨をむさぼりしよりいひ出でたるなるべし。」と見えてゐる。昔時護摩の灰、雲助の類は、旅客の財貨を掠奪し、金錢を強請し、傳舎に亂入し、什器を破壊するなど、最も旅人を苦しめるものであつた。

〔御物上〕 (雪女五枚) (羽子板) 三五〇頁 男色關係で主君か

ら寵愛を受けた美少年上り。

〔さいたら島〕 (雪女五枚) (羽子板) 三三三頁 小才の利いた

こと。または小才の利いて開が抜け、智愚どちらつかずの意にいふ諺。

〔さが〕 (夕霧阿) (波鳴渡) 七〇二頁 性、ならばしの義から

轉じて、悪性、悪、瑕、險難の意に用ゐる。易林本節用集に、「無レ惡。」

〔さきゆき〕 (流麗出) (世濃徳) 六一二頁 (先行)前途の意よ

り轉じて後の榮えることにいふ。

いの訛りであらう。思懸けも無いの意にいふ。貝原好古撰諺草に、「權輿。今俗に始めもなく不圖出來たる事をけんよもなきといへるは此の字なり。」といひ、その正譌の條に、「無^{ナレ}懸念^{ケンネ}。思懸けなきなり、けんによもなはい誤り。」と見えてゐる。

〔けんねじ〕

(丹波
興作)

五四八頁

互に握拳を突き出し

て掌中の物の數を當てて勝負をする戯れであつて、博奕の一種である。

〔憲法染〕

(傾城吉
岡染)

八七三頁

附子鐵漿を原料とした

る黒茶染。京雀(寛文五年刊)に、「綾小路下るけんばう町。なか頃けんばうの某とかや云ふもの黒茶染を仕出しけり、此のゆゑにけんばうぞめといふとにや、この町に住みければ町の名とす。」と見えてゐる。憲法は兼房とも書き、通稱を吉岡仁左衛門といひ、吉岡流劔道の祖とつたへられてゐる。このひとの發明した憲法染は明暦から延寶にかけて大いに流行した。傾城吉岡染

に、石川五右衛門と師弟の關係があつたことに書いてあるは、無論事實ではなうて、全くの他人の間柄である。

〔こうたう〕

(五十年忌
歌念佛)

五八一頁

(公道)はなやか

ならぬ事。ぢみ。著實。俚言集覽に、「公道。おとなしきことは物の公道なる心なれば、花やかならぬをいふなるべし。」と見えてゐる。

〔御器の實〕

(丹波
興作)

五五二頁

御器とは碗のこと。

空穂物語に、「黄金のごきよきまゐりもの。」と見えてゐる。御器の實とは、碗に盛る飯のことをいふ。

〔御けん〕

(心中萬
年草)

五一七頁

(御見)御見參の畧。

おめみえ。女の手紙文に多く用ゐられた。またもじ言葉に「ごけんもじ」とも言うた。

〔五湖〕

(大覺大僧
正御傳記)

三八頁

范蠡が越王勾踐を輔け、

吳王夫差を滅ぼして功成つて後、職を辭し、扁舟に乗つて五湖に浮んだ故事。

條に見え、第九の羅刹女を皇諦と名づけ、譯して何所といふ。この羅刹女は天上人間來往自在であり、若し歸佛の後に従はば則ち諸法皆空無染にして、住著する所なきによつて何所というたのである。

〔くわいけい〕 (今宮) 六三一頁 歡び。歡樂。くわ

つけい〔活計〕の延びた語であらう。和訓栞に、「活計はもとすぎはひの事なるを、歡樂する意に、太平記にも左京の大名衆を結んで茶の會を始め、日々寄合ひ活計を盡すと見えたり。」と出てゐる。

〔月支の遺龍〕 (賀古教信) 二三三頁 月支國の遺龍

が國王の敕命によつて法華經の外題六十四字を書き開に、其の字六十四體の佛となつて、遺龍の父が落ちてゐる地獄に行つて、父の苦患を救つたことを遺龍が夢に見たといふ。

〔けんことり〕 (丹波) 五五六頁 昔時東海道の道中

筋で賣つた一箇五文の餅である。けんこは五の符牒で

ある。夏山雜談卷之三に、「五つの數をけんことぶへるは、五は阮古切なればなり。」と見え、御前獨狂言(寶永二年刊)卷之二に、「こびんさきはげぢく／＼にねぶられ、けんこ餅ほどはげたるを手作のなべすみべつたり。」と見えてゐる。

〔けん尺〕 (長町女) 八五二頁 (劍尺) 刀劍佛像など

を度るに用ゐた物差。博物筌に、「劍尺一名玉尺といふ俗名けん尺と云ふ、吉の字もとは本に作る。凡そ刀劍佛像のたけ門戸のはゞに皆これを用ゐ、當る所の吉凶圖の文字の如し、且八卦の文字を添ふ、今用ゐるもの昔の寸と違ひあり、今用ゐるだけは曲尺一尺二寸を八段とし、一段一寸五分に當るなり」

財 病 離 義 官 墓 害 吉

と見えてゐる。 禪德 差魂 絶體 遊年 天醫 經命 禍害 生家

〔けんによもない〕 (賀古教信) 二一二頁 懸念も無

てゐる。

〔がひやう〕

(大覺大僧 正御傳記)

五四頁

がひやう(餓芋)は

孟子に出てゐる語で、餓死者をいふ。(芋は草、菱は落の義、されば餓芋は餓菱の傳寫の誤りであらう。)

〔鷗尻〕

(丹波 與作)

五五四頁

鷗が水に浮んだ時、尻の

羽が上の方に撥ねてゐる、そのやうに上の方に撥ねてゐる事。刀劍の尻が上へ反つてゐるやうに佩くを、

鷗尻に佩くと云ひ、秤竿の尻の上へ撥ねる程秤目を十分に取るを、鷗尻に取ると云ひ、又萬治享保にかけて

若衆の髪うとを出し反そらしたのを鷗鬚と云うたのも、これ等皆鷗の尻の撥ねてゐる緣によつた言葉である。

〔がんひの筆〕

(傾城反 魂吞)

三八五頁

(顔輝之筆)輝は

唐音 *hūi* である。即ち其の音を傳へたものである。顔

輝の筆とは顔輝の筆寫をいふ。易林本・節用集に、「顔輝、元朝人、畫二達磨」と見えてゐる。顔輝字を秋月

と云ひ、好んで道釋人物を描いた。宛翁家藏集には、

鬼を畫くことが妙であつたと見えてゐる。

〔九字護身法〕

(心中萬 年草)

五一七頁

密教に行ふもの

で、臨兵闔者皆陣列在前の九字呪を唱へながら、不動小刀の印を結び、指頭で空中に四横線を引き、又九縱

線を引く法である。このことは眞俗佛事編、三才圖會などにも見えてゐる。

〔くじのみやの〕

(流鯉出 世禮徳)

六〇二頁

「くじみや」を

「くじのみやの」と分けて言うたのである。圖は宮から出ればとて圖宮くじみやといひ、圖くじと公事くじと同音であるので、

公事の義に取つて、「くじみや」というて訴訟のことにいふ。

〔弘誓の櫓拍子〕

(曾根崎 心中)

二三五頁

佛が衆生誓願

を立て給ふによつて、衆生臨終の際二十五菩薩が弘誓

の舟に櫓拍子立てて、極樂の彼岸に渡し給ふ。

〔くみやうかうたい〕

(大覺大僧 正御傳記)

五五頁

九名皐諦

は法華經陀羅尼品の中の十羅刹女のことをいうてある

〔かいらぎ〕

(賀古教信 七集題)

二二八頁

〔梅花皮刀〕合類

節用集に「梅華皮」とある。地粒總て荒き鮫皮を云ひ刀
 劔の柄を巻くに用ゐる。黒川道祐撰の雍州府志七、土
 産門下服器部に、「凡鮫魚皮、阿蘭人齋、來長崎港、京都
 二條商賈行買之、歸二條店、浸水數日、而織細割レ
 竹尺許、以三麻苧二結束之、是稱二編竹、以レ是洗二鮫皮
 於水中、則其色潔白、其礫硯狀大、而其粧相齊者粧二刀
 柄。是謂二柄鮫、又粧間交二花點狀一者謂二梅花鮫一」
 〔格子祝〕 (心中重 井筒) 三〇八頁 女郎屋(置屋)の表作
 は格子になつてゐる。遊女がこの格子の内に出張つて
 ゐても、客が無い時に、客があればよいにと思つて、
 近邊などを出歩くこと。南水漫遊に、「倡家の女郎に格
 子祝といふ事をなすは、馴染の客も知る知らぬ客の呼
 出しもなく、寂しき夜は近邊などをちよと歩けば、
 必ずその夜に客來るとて、往古の女郎はかかる事をな
 したりと見えて云々。」と見えてゐる。

〔肩の好い〕

(心中萬 年草)

五二五頁

運の好いといふ意

の詞。籠耳(貞享四年成)に、「運のよいわるいといふべ
 きを、肩がよい悪いとはいふべき詞にあらず、肩に棒
 おく商人、駕籠舁、乗物舁より起りたる詞なり。」と見
 え好色萬金丹卷一に、「吉凶は痲癖の如し、二つながら
 人の肩にあるものから、好き事のみも續かず、又悪い
 事ばかりもないもの。」と見え、風流説平家卷一に、「貧
 福は痲癖の如し、是非とも人の肩によるべし。」と見え
 てゐる。

〔かた岡〕

(心中重 井筒)

三二七頁

元祿寶永頃に於ける

歌舞伎名優片岡仁左衛門を云ふ。元祿太平記卷之八に
 「片岡仁左衛門、敵役にしては三國無雙、第一男振大
 位にして勿體あり、然し物言ひじゆつなさうに聞ゆ、
 瀟事實事思はしからず。」と見え、名人忌辰録に、「元藤
 川伊三郎とて三味線彈なり、中年に俳優となり片岡と
 改む、享保元申年二月三日歿す、歳四十四。」と見え

はせ、杯の相手になつて、日頃の手並にいきつかして下んせ。」と見え、心中二枚繪草紙に、「駕籠の長介來り私が請合の菱屋の花代、津の國屋の料理代、合はせて三百四十五匁六分、扱もくせがまれます。」とある杯は、これ等の消息を語るものである。駕籠舁を御といふ名義に就いては詳かでない。一目千軒に、「中頃名高き大盡ありて、女郎になづみ通ふ事繁く、これが爲に駕の者三人抱置き日毎に赴く、或時出口にて駕を御して、是れより歩行にてお出遊ばせと駕籠舁言ひければ大盡大きに氣色を損じ、行けと言はば何處までも行くべし御せと言はば御せよと言ひしより、駕舁く者を御と異名するなり。」とあれど、附會の説で信ずるに足らない。嬉遊笑覽に、「おろせの名義いとをかし、按ずるに御は駕籠に乗るは侈奢の至りなれば、駕籠舁と稱ふるを憚りて異名を呼びしものなり。字書に舍_レ車解_レ馬脱_レ衣解_レ甲皆曰_レ御、今舟人出載亦曰_レ御など見えたり。

總て積み載せたる物を下す事なれば、唯荷物の様におぼめかしいへるにこそ。」とある説も如何。野良蟲(萬治二年刊)の序文に、「芝居終れば東山にともなひ、あんだ乗物に載せられて、はいくおろせく」と勇み進む。」と見えておれば、おろせは駕籠舁の一種の掛聲であつたのが、駕籠舁をいふことになつたのであらう。

〔おんでもない〕 (今宮) 六五四頁 當然である。

勿論である。言ふまでもない。按ずるに、「おん」は「恩がまし」「恩がらす」などいふ恩であつて、「おんでもない」は即ち「恩でも無い」の義である。この詞狂言笠の下などにも見えてゐる。

〔かい〕 (心中重) 三〇四頁 かひ(聞)でもあらう。

間に入つて邪魔となること。

〔界如三千〕 (大覺大僧) 四四頁 十界と十如とを界

如といひ、これ等が各十界三種世界を具備するにより界如三千となる。

條にも、「女房共赤前垂して縁の端に立ち出で、泊りぢやないか泊らんせ、此の雪は暮方程積ります、目高なりとも泊らんせ、水風呂沸いてござんす火燧も夜著も布圍も貸しましよ、寒か抱いて寝ましよ、酒のよい所にまづお泊りなされませい、内が綺麗でお内儀様の美しい所に泊らんせ。」と見えてゐる。いかにも往時の悠長な有様を見るやうである。

〔おつう〕 (心中刃は水の廻り) 六八四頁 元祿年開千日の墓

所で半七と心中した三勝の女の名。

〔おはつ〕 (心中二枚繪草紙) 四二二頁 巢林子作の曾根崎

心中に見える人物である。

〔おひする〕 (嵯峨天皇甘露雨) 一〇一〇頁 (笈摺) 巡禮者

が背に著る。一種の衣である。もと笈を負うて背の摺を防ぐ爲に著るより起つた名。羽織に似て袖なく、兩親在る者は兩側を赤地、中部を白地にし、兩親なき者は兩側を白地、中部を赤地にした。

〔おへ様〕 (心中萬年草) 五二〇頁 「おいへさま」御家

様の畧。中流以下の人の妻の敬稱。おかみさま。浪花方言(文政二年成)に、「お家さん。まづ大體通例此の通り唱ふ、江戸にてかみさまといふに同じ。」

〔おほぬさ〕 (心中重井筒) 三一二頁 大幣は被する時に

用ゐる串にさした四手である。被果つれば各引き寄せて撫でるものなれば、引く手数多と續けていふのである。以て彼方此方の數多の人々から引つ張られて靡く事にいふ。伊勢物語に、「大幣の引く手あまたに聞ゆれば、思へどいこそ頼まざりけれ。」と見えてゐる。

〔おろせ〕 (心中二枚繪草紙) 四二九頁 駕籠舁をいふ。色町

通ひの駕籠舁は、遊女とは特別の懇意があつたので、座敷に出て客をとりもつたり、客の遊興費時借の保證人になつたり、置屋や揚屋や遊女などの使となつて用聞きをする場合もあつた。生玉心中に、「これ駕籠の衆頼みます、私は雨氣で頭痛がして休んでゐると間に合

呼ぶ稱。女重寶記(元祿十五年刊)卷之一、女しなさだめの條に、「大名のを奥様といふ、百姓のを御方とも又蘭鞋ともいふ。」

〔おこし〕 (心中刃は 永の朔日) 六六〇頁 「おくご」(御供御)

の轉訛。畿内地方言であつて晝飯をいふ。

〔お島の心中〕 (心中重 井筒) 三一七頁 お島はもと初音

と名乗つて京の烏原に勤めた時、京の室町御池の邊の吳服商某の次男新八と馴染み、兩人俱に飄落して大宮まで逃げたのを、追手の者に發見されて捕はれ、新八は錢千貫の科料を取られ、初音は浪華の太左衛門橋井筒屋の勤女に賣られてお島と名乗つた。その後新八江戶から下つて、井筒屋に登りお島と邂逅し、以前の事を思ひ出して互に懐かしがり、新八は井筒屋に足繁く通うたが、兩人共に金に窮し、儘ならぬ身を嘆き、遂に談合して正月十六日生玉で情死した。この事は永井正流撰の本朝濱千鳥(寶永四年刊)卷之四、都の初音難

波の心中、(附たり)死に生玉曙の條に見えてゐる。

〔おそめ〕 (今宮 心中) 六五二頁 (阿染)大阪東堀瓦屋橋

通り油屋新五郎の娘で、二歳の時丁稚久松に連れられて川邊に行き、誤つて水死した。それが爲久松は新五郎に叱られて縊死したのを、情死したやうに作り替へられたとの説があれども、思ふにお染久松情死の事實があつたのであらう。

〔おぢやれ〕 (丹波 與作) 五四六頁 街道なる旅籠屋の下

婢の稱で、旅人を泊めて夜の伽をも勤めたのである。出女とも云ふ。旅籠屋の下婢が門口に立つて、旅人を見ては客引かうとして、おぢやれ〜(おいでなされの意)と呼んだのから起つた名である。おぢやれが赤前垂をして、客を招く言葉は丹波與作の中に、「これ泊りぢやないかえ、泊りなら泊らんせ〜、旅籠安うて泊めませう云々。」とあり、井原西鶴撰の浮世花鳥風月(好色四季ばなしの改題)月影うつす龍宮のすぎやきの

本永代藏には家主に「いはらじ」と傍訓してある。

〔うせまつかいさま〕 (曾根崎 心中) 二四五頁 「うそま

つかへさま」(謚眞返様)の訛りで、眞實を裏返して諷

を言ふこと。

〔歌比丘尼〕 (五十年忌 歌念佛) 五八九頁 もと熊野比丘尼

と稱したもので、佛法に歸依し熊野権現の事觸れめい

たことをしてゐた。五十年忌歌念佛のはこんなことを

して遊歴しただけであるが、一體歌比丘尼も時勢の推

移につれて、隠し白粉薄紅を附けて伊達な姿となり、

歌念佛または流行節を歌ひ、小歌を便りに色を賣る尼

となつた。これを「びくに」「びくにん」「まるた」とも

いひ、舟に乗つて色を賣る者もあつた。七枚起請など

の誓紙に用ゐる午玉の葦烏の紙などはこの比丘尼が賣

り配つたものである。歌比丘尼の事は好色一代男卷三

木綿布子もかりの世の條、好色一代女卷三、たはれのうたふね調謙歌船

の條、殘口之記、人倫訓蒙圖彙卷七などにくはしう記

してある。

〔うづく〕 (薩摩 歌) 二五九頁 疼痛を感じる。ひゞき

痛む。

〔宇都の山邊の十圍子〕 (丹波 母波) 五三九頁 宇都の

山は駿河國安倍郡にあつて岡部と鞠子との間。十圍子

はこの邑の名物である。

〔卯腹辰股〕 (傾城反 魂香) 三九七頁 灸の忌目で、卯の

日には腹に灸をすゑず、辰の日には股に灸をすゑず。

〔雨寶童子〕 (吉野郡 女輪) 七九四頁 天照大神をいふ。

右手は金剛寶棒に支へ、左手は掌上に寶珠をとりて立

ち、頂上五輪塔婆ある姿を、天照大神日向不生の像と

してゐる。合類大節用集(享保二年刊)神祇門に、「雨寶

童子。俗云日神垂迹、本地大日。」

〔えん正すけさだ〕 (傾城反 魂香) 三八九頁 「えん正」

は山城の刀鍛冶永昌。「すけさだ」は永昌の弟子祐定。

〔おかた〕 (丹波 母波) 五五四頁 (御方)農家で人の妻を

まが」などといふ類である。いたはしい。ふびんな。
あはれな。

〔稻負せ鳥〕

(丹波
興作)

五六二頁

古今集祕傳に入つ

てゐる三鳥の一である。巢林子は天鼓に、「鳥の中にも
いなおほせ、妹春をしへし。」と書き、日本振袖始に、
「かの鶴鶴を庭來鳴鳥庭叩鳥戀致鳥ともいふぞとよ。」
と書いてゐるを見れば、鶴鶴のこととしてゐる事は明
らかである。巢林子の様に鶴鶴とした説は、藤原定家
や加茂眞淵などもその説である。(按ずるに、安齋雜考
下卷に、「吳竹抄第十に、近年ある人安藝國に罷れりけ
るに、はたききおりゐてなきけるを、女のありけるが
見て、いなおほせ鳥よといひけるを聞きて、など此の
鳥をいなおほせ鳥とはいふぞと問ひければ、此の鳥來
り鳴く時、田より稻を負ひて家々に運びおけば申すな
り云々。」と見え、秋に田の畔などで鳴く鳥であらう。)
巢林子が丹波興作に「いなおほせ鳥」と云うたのは、古

説に、「いなおほせどりを馬であらう。」と云うた其の緣
によつたものである。

〔稻荷小路〕

(夕霧阿
波鳴渡)

七〇二頁

往時大阪玉造稻荷

附近の裏屋小路は淫賣女の巢窟であつた。

〔岩井の半四郎〕

(心中重
井筒)

三一七頁

二代目の岩井

半四郎を云ふ。(初代の半四郎は元祿十三年に歿した。)
大阪道頓堀歌舞伎芝居の座元となり、若衆女方に扮し
て好評を博した名優であつた。役者二挺三味線に、「女
房若衆方を勤めすまされ、當顔見世より角前髪似合ひ
まして、嘸や古半四郎草の陰にて御満足と存ずるは、
打續いての座元云々。」と見えてゐる。

〔いはらじ〕

(丹波
興作)

五五四頁

「いわらじ」とも書い

てある。女重寶記(元祿九年刊)に、「大名のを奥様とい
ふ、百姓のをお方とも又蘭鞋いわらじともいふ、下女には藁鞋
をはかするの義なり。」と見えてゐるから、農家の主婦
をいふ。但しいわらじは藁鞋であるとの説は如何。日

作日本武尊吾妻鑑には、「雲居をこゝにあまさかる、九州二島の浦々まで。」と書いてゐる。

〔菖蒲草〕

(心中兼
非奇)

三一七頁

歌舞伎役者芳澤菖蒲

をさしたのである。元祿十六年女形の第一位に上り、享保二年には古今無類の名優と評されてゐる。

〔ありべかかり〕

(曾根崎
心中)

二四五頁

あり體の通り

といふ意である。普通なみの所作。形の通りする事。手島堵庵の著に「ありべかかり」といふ本がある。人としてあつて然るべき修養法を記したので、かかる書名にしたのである。現今も福山市あたりで、「ありがま、をいふ」といふことを、「ありべ通りをいふ」といふ。ありべ通りの「ありべ」も、「ありべかかり」の「ありべ」も同じ語である。

〔あんだら〕

(傾城吉
岡染)

九一九頁

「あだ」に齏音「ん」

及び「ら」の添加した語であらう。癪。愚鈍。越谷秀眞編の物類稱呼の五に、「おろかにあさましきを京大阪に

てアングダまたアングダとも云ふ。」と見え、永代節用集に、「暗惰懶。無能。」と見え、和訓栞に、「あんだら。鄙俗の語なり、あだを強くいふ語なるべし、あだ口をきく事をあんだら口を叩く杯といへり。」と見えてゐる。

〔鹽梅よし〕

(傾城吉
岡染)

八七八頁

按排好とも鹽梅好

とも書き、田樂豆腐をいふ。元祿から正徳頃にわたつて、上方では田樂を賣るに、「蒟蒻豆腐の鹽梅よし。」と聲立てて賣り歩いたので、おのづとこの物の名になつたのである。傾城禁短氣第三編に、角行燈に、「洒小賣所、あんばいよし。」と書いた畫が載つてゐる。

〔一二九十は七七の、七つの知死期〕

(心中刃は
氷の剃日)

六

八三頁 俗説に人の死ぬる時刻は自ら定まつてゐるもので、概して潮汐の退く時刻に於て死ぬといふ。下旬では一二九十は、七寅七申四巳四亥となつてゐる。

〔いとしほけに〕

(曾根崎
心中)

二四五頁

「いとほしザ」

(悼)が轉換した語で、縁起を「ぎえん」、茶釜を「ちや

閒の山を唄ひ、往來の人から錢などを貰ふ袖乞の一種の者がゐた。京阪地方にも閒の山を唄ふ物貰ひが居て三味線の代りに胡弓を用ゐた。神都名勝誌四に、「閒の山節。往古僧行基の兩宮に參詣せし時、世人に無常を示さんとて唱歌數首を綴り、比丘尼に唄はせしが初めなり、寛文延寶の頃に兩閒の山の路傍に小屋を作り、女は紗綾縮緬を纏ひ、三絃を弾き、男は編笠を被り蓆をすり、子兒を踊らせ錢を乞ひき、其の諷ふ歌いと哀れにして、文句も能く聞分けられたるよし。」と見え、日本永代藏卷四に、「相の山袖乞までも心ながく、道者の機嫌を取りて餓ゑず寒からず、身に絹布をかざり、連れ引きの三味線に乗せて、あさましや心一つといふ一ふし、いつ聞きてもかはらず。」と見えてゐる。閒の山の歌詞は一樣でないが、落葉集(元祿十七年刊)卷七に、閒之山念佛の唄を載せてあり、又巢林子作の夕霧阿波鳴渡、傾城反魂香、生玉心中に引いてあるは、巢

林子が多少改作したものである。閒の山は物哀れな節であるので、長くは流行しないで廢つた。今も淨瑠璃に閒の山の音節があるのは、この手の残つてゐるのである。

〔天川珊瑚珠〕

(傾城反魂香)

三九五頁

阿媽港から渡來

した珊瑚珠、阿媽港を天川と書いたもので、即ち支那の澳門である。長崎蟲眼鏡(元祿十七年刊)下卷、日本渡海御停止國々の條に、「阿瑪港」に「あまかわ」と傍訓してある。澳門はアウムのの發音である。土人阿媽港と呼べるを、葡人聞き傳へてマカヲと言うた。蓋し阿媽港の名は、阿媽といふ一豪傑を敬慕して命じた物で、阿媽は日本から來たものといひ傳へられ、現今もなほバラ塔下の神として祀られてゐる。

〔あまさかり〕

(心中二枚繪草紙)

四二二頁

正しくは「あま

ざかり」で、天離即ち遠方の意。「さかる」は離れる意をしめす「さく」といふ語に對する自動詞である。巢林子

いふ跡あり。」と見え、謠曲熊坂にも、「さて北國には、越前の淺生の松若、三國九郎、加賀には熊坂の此の長範。」と見えてゐる。

〔あだて〕 (丹波) 五、四七頁 (心中刃は水の朔日) 六六二頁

「あんだて」(立案)の「ん」の脱落した語であらう。もくろみ。腹案。商人職人懷日記(正徳三年刊)卷四に、「このしんしやう一貫目が物はあるなし、今更誰か一錢取替ふべきあだてもなく。」と見えてゐる。なほこの語は近松作中、丹波與作、心中刃は水の朔日の他に、傾城吉岡染の中にも用ゐてある。

〔あつたほこしゆもない〕 (丹波) 五三八頁 「あ

つた。」は、嫌疑の意をなす「あた」と云ふ語に、音便で促音の加はつたものである。「ほこしゆもない」は「ぼつこしゆもない」「ぼこしもない」とも言ひ、「かうばしうもない、おもしろうもない」といふ意。

〔穴一〕 (心中萬年草) 五一三頁 「あたらち」(穴打)の訛

りであらう。意錢の事で、小兒の遊戯である。地に線

を畫し、錢を打つて勝負するもの、近代では錢を用ゐ

ないで骰子つがを用ゐた。日次紀事、十一月の條に「自二此

節一兒童掘レ地爲二小穴一、各以レ錢投レ穴、以二其近一穴爲二

一二次一、其後每二一人一出二錢或二錢或三錢一、各集レ錢

一手握レ之、則投二前一穴邊一、然各指二點所一撒之内一文

錢一請レ之、使下其撒レ錢人擊之、其人以二別錢一枚一擊レ

之、其中下所二散在一錢者爲レ勝、悉取納下所二聚投一之錢は

是稱二穴一一、不レ中レ錢者爲レ負、不レ能レ納二取之一、而與二

奪其一二之次人一、又如レ此、是後京極攝政良經公御記、

所謂意錢、而中華擊壤之類也、」と見えてゐる。

〔阿波座の野良鳥〕 (説書出) 五九九頁 大阪新町を

ぞめく遊治郎をいふ。阿波座は新町廓通りの名。

〔相の山〕 (夕霧阿波鳴渡) 七〇九頁 開の山節の畧。人生

の無常をうたうた俗曲である。寛文延寶頃伊勢國尾上

坂及び浦田坂の間の山で、簾せらを摩り三味線を弾いて、

註 釋

本文中*印のある語句に就き
五十音順によつて察出する

〔あかう〕（鶯女五枚） 三三七頁 （雀榕）本邦の暖地

に自生する常緑喬木で、其の質堅硬緻密、木理錯綜して頗る美觀を呈し、挽物細工や漆器製造などの料に用ゐる。巢林子の文に「あかうの胴」とあるは、雀榕の木で造つた小鼓の胴である。

〔あけすけ〕（城歌加） 九三七頁 「あけすき」〔明透〕

の義であらう。物をつゝみ隠さぬこと。心底を隠さず打明けること。助六心中并せみのぬけがら（古淨瑠璃）に、「よろづ屋の助六とて、男自慢にのぼされて、今はしんだいすつきりすけ六。」とある「すけ」も、透いてゐる意を助六の名にいひかけたのである。

〔葦屋釜〕（柳城反） 四〇五頁 葦屋釜は土佐光信が

註 釋

都の亂を避けて、筑前蘆屋の里に下り住んだ時、其の里人の製造する釜の下繪を描いて、其の模様を入れて焼かしたものである。蘆屋釜の下繪を蒐集したものに「蘆屋のけふり」と云ふ本があつて、嘉永五年頃に出版されてゐる。黒川道祐撰、雍州府志卷七、土産門下に「釜。煮湯之具也、中古於筑前葦屋里一所鑄、號葦屋釜、……今有狩野探幽并永眞等之下畫也。」と見えてゐる。

〔あそふの松若〕（柳城反） 三七四頁 「あさふの松

若」とすべきである。「あさふ」は越前足羽郡麻生津郷をいひ、松若の屋敷跡がある。松若は盜賊の名である。歸鷹記に、「淺水里に松若と云ひし盜賊の住所なりしと

藤、仲經蓑笠脱ぎ棄てつつと出で、兩方より兩腕確乎と取る。班足王の力を出し、挽ぎ放さん挽ぎ放さんと、すれどもいつかな動かせず。「我々爲には親の敵、舅の敵。天下萬民の恨みの劍受取れ。」と、刺し通しく、首かき斬つて、「朝敵退治御代萬歳。」と呼ばはる聲、重賞恩賞飽き満ちて、悦びの聲勇む聲、士農工商隔てなく、樂しむ聲や松竹に、千代の聲あり萬代も、絶えぬ此の御代、此の秋より五穀富饒ぞ續きける。

嵯峨天皇甘露雨 終

の護摩の壇上に、落つると等しく其の姿、猪甘の連が、佛の、忽然として立ち居たり。大師金剛合掌あり。汝五百生の輪廻を四百九十六度生じて、今四生を残し煩惱の闇に迷ひしに、眞言祕密の功力に引かれ、悪右馬の尉が暫しの蘇生に魂を移し、直に刃にかつて、修羅道の因果を滅し、檜原の牛の腹に宿つて、守敏に殺され、畜生道を果し、其の後大炊の介が一子と生まれ、乳房に饑ゑて瘦せ衰へ、饑鬼道の苦しきも此の時に消滅せり。いま又繪に描ける龍に一念を移し、雨を降らし國土を惠み、天上の果を得たり。即ち修羅、畜生、餓鬼、天上の四生を頌して、東寺の門前に墳をつき、四つ塚と名付け、末世に佛種を結縁すべし。四百九十六度に今の四生を都合して、五百生の生死の絆、阿字の一字にて打切つたり。殊には二人の女、四國遍路八十八箇所を順禮し、我が親の爲、我が子の爲と、渴仰供養の功德力、親となりしも汝が魂、子と生まれしも汝が魂。皆一筋の廻向となつて、彌勒を待たず、只今即身成佛す。」と心月輪の祕印を結び、佛眼眞言を唱へ給ふ。御息は三寶護念の雲と棚引き、ありつる姿を打乗せて、内證利生の光を放ち、虚空に上ると見えけるが、白雲變じて密嚴華藏、大覺圓明の佛體と顯はれ、無量の如來影向あり。龍燈天燈光を挑け、散花、音樂、伽陀の聲法の功德ぞ有り難き。時を移さず一人が妻、大夫親子、瀆頼も、天皇を供奉し參る所に、何時の間にかは入りたりけん、王子、守敏が壇の下より躍り出で、天皇目掛け討つてかゝる。參詣の中より、勝

と、大金輪大水輪の、印を結んで金剛合掌、施甘露法線り掛け責め掛け祈誓ある。梵磬、錫杖、鈴の聲、上は有頂、下は阿鼻獄に響き渡つて、眞言陀羅尼の梵音聲、頼もしくも又有り難き。妙なる御法の其の驗、東寺の方より靈雲棚引き、猪甘が、魂星の如く虚空を飛んで、繪に描ける龍に移ると見えけるが、忽ち眞の龍王と、九萬九千の鱗を立て、雲を起し霧を捲き、「今天上の果を受けし。」と、言ふ聲高き天つ空、登ると等しく天樂、天鼓、蒼天俄に搔曇り、平等一味の甘露の雨、草木國土潤ひ渡り、萬民悦び舞ひ踊り、「寶降り來る金が涌く、打出の小槌、隱蓑、隱笠。」とぞ謠ひける。守敏大きに怒りをなし、「エ、うそつきの大日如來にだまされ、今までうかく眞言を學びたる口惜しや。今日より魔法を行ひ金翅鳥となる。待つて居れ龍神めら。四大海を干瀉となし、天を暗まし地を覆し、此の仇を報ぜん。」と、獨鈷、三鈷、鈴、花皿、ぐわらりくと取つて投げ、机、禮盤踏み割りく、虚空を睨んで立つたる所に、震動雷電頻りにて、黒雲一叢渦卷く中より、ありつる龍王舞ひ下り、守敏が五體を十重二十重、くるりくとしがらんで、頭の鉢にしつかと喰ひ付き、牙を研いだる其の光、くりから不動と謂つつべし。守敏は一世の力を出し、「えいやく。」と、揉めども押せども神變力、尾俱利伽羅不動と謂つつべし。守敏は一世の力を出し、「えいやく。」と、揉めども押せども神變力、尾先の劔にて五體を劈き切り裂かれ、「エ、苦しあら苦し、苦し。」くるく縮め付けられ、血肉ながれ骨砕け、遂に敢なくなりにけり。龍は逆立つ鱗を和け、形はもとの繪に残り、魂は抜け出でて、大師

より守敏百日以前より、四大海の龍王龍神、残りなく水瓶に封じ込めたる上、「今日空海が雨乞。世界は火輪に焦る、とも、守敏かくてある中は、雨は一滴も降らせじもの」と廣言吐き、緋の衣、緋色の袈裟、壇も朱塗に火を表し、その身も日笠さしかけさせ、覽字の祕文を繰り掛け、火の印を結んで祈りければ、空に一點の雲もなく、大地も裂けて照り渡り、恐ろしなんども愚かなり。弘法大師は天竺將來の御袈裟衣。御弟子二人に灑水させ、壇に上らせ給ひければ、老若男女羣集して、或は蓑笠、高足駄、天を禮し地を拜し、「あはれ大師の御祈りに、天神地神力を添へ、雨を降らしてたび給へ。若し守敏が勝となるならば、數萬の參詣一人も生きては歸らじ。」と、共に肝膽碎きしは、殊勝にもまた哀れなり。大師暫く御目を塞ぎ、「空海苟も三寶の敕使として、明らかに是れを知る。かるが故に三界の諸天を驚かし、敬つて此の理を啓し、四趣の龍神にむかつて此の恨みをなす。若しそれ八恆河沙の水神、龍神、惡僧邪法に惱まされ、雨を降す力なくとも、地に水輪あり。星に水曜北方一德の水あり。天に銀河、天の川、苗代水にせき下せ、天降ります神々たり、佛々たり。四生、六道、二十五有一切、含識、中有の魂魄、今こゝに來現して、時を移さず日を待たず、甘露の雨を國土に降らして、萬木千草を潤し、五穀五果を實らせ給へ。山野の禽獸羽毛をのばし、江河の魚鼈鱗をと、のへ、國には九年の糧を蓄へ、萬民五袴の悦びに耽り、國土安穩ならん事、決定して疑ひなし。唵阿毘羅吽欠。」

河海の鱗まで、此の苦患幾何ぞや。空海これを救はずんばあるべからず。御邊早く立ち歸り、此の趣を王子に訴へ、日限を定め、神泉苑の東西に、壇を二箇所に構へ、守敏に旱を祈らせられよ。空海は雨を祈つて、守敏や勝つ、空海や勝つ。法の邪正、修行の淺深、其の時にこそ顯はるべけれ。はや歸られよ。」と、御數珠にて摩頂あれば、筋骨緩み足立つて、元の如くになりけり。各「あつ。」と頭を垂れ、「眼前の不思議を見て、何しに疑ひ奉らん。雨の祈りある様に言上致し候べし。さりながら、若し守敏勝つて候はば、大師、守敏が弟子と成り給ふべきか。」「中々の事。」「扱又大師の御勝にて雨降る時は、守敏を御弟子とし給はんか、御望みのこと承らん。」と申しければ、「オ、空海が勝つ程ならば、弟子にするまでもなく、諸天善神よも生けて置き給はじ。守敏が命は、其の目を限りと思ふべし。」と宣へば、百姓どもも聲々に、「今まで世界の人民を惱ましたる守敏坊主、佛神助け給ふとも、皆寄つて打殺さう。等々の御訴訟も五畿内五箇國總百姓、一統しての言上、叶はぬ時は一人も生きて歸らぬ。」「オ、合點。一人は死なぬ。」「オ、合點、相手は合點か。」「オ、くく。」「王子の館に詰め掛くる。不仁非道の惡王も、萬人の訴へ爲方なく、弘法大師、守敏僧都、行法を比べ試さるべしと、神泉苑の南に樓臺高くしつらはせ、正面に青龍王の繪馬を掛け、王子の代官として、百寮百官我もくくと參詣あり。西の壇には西寺の守敏、雜學僻見の我僧數十人相具し、壇上に上らる。固

給へども、嵯峨の天皇未だ都近くに坐す。地に二人の王あるは、天に二つの日あるが如し。殊に空海
 といふ悪法師の邪法を信じ給ふ故、天帝水神怒りをなし、天下旱魃の愁へとなる。さるによつて天皇
 を、壹岐の島へ流罪せよとの仰せなり。天皇を流しなば、空海が邪法自ら力盡き、風雨隨時に治ま
 り、目出度き御代となるべき由、守敏僧都の考へにて、只今天皇追立てのむかへの牢輿、そこ立ち退
 け。」と呼ばはりける。大師木陰に立ち寄り、「衆怨悉退散、急急如律令。」と、繰り返し、内縛外縛
 の印を結んでかけ給へば、大將大納言を始め、警護の兵士雜人まで、俄に筋骨強張つて、手足もつれ
 て蜘蛛のいに、搦みし蟲の如くにて、蠢き廻るぞ不思議なる。大納言大聲上げ、「あら痛や堪へ難や、
 千筋の繩に締め付けらるゝ如くにて、骨も碎くる許りなり、方々は何とある。」「何ぢやは知らず、體
 を取つて行く様な、あ痛く。」と泣き居たり。「ヤアあれに空海の見え給ふ、道理こそ、何事もお
 慈悲の上、さりとては御助け。」と、五體をなけうち詫びければ、大師近づき寄り給ひ、「然らば御身に
 言ふことあり。今年天下旱して、萬民苦しむ愁ふる事、皆守敏僧都が仕業なり。空海が學行に劣つた
 るを猜み、上界下界の八大龍王、百千眷族の龍神を封じて、水瓶に祈り込めたる故、水神龍神苦しむ
 怒つて、雨降らすべき力なし。これを天皇の不徳の科に取り成し、遠國に流し奉り、空海をも世に
 在らせじとの悪心は、智見の鏡に明らかなり。世界の苦しむ、人間は言ふに及ばず、山野の鳥獸、

く、映せば映る一念に、善あり智あり慈悲心ある、験もありや有明の、月は胎藏、日は金剛、兩部に漏れぬ御法ぞと、彌渴仰なしにける。

第五

阿字の殿上には、自性の月高く晴れ、光明の閣間には、微細の霧残らず。弘法大師の御法力、四海に輝き、玉體安全の御加持に、高野山より嵯峨の離宮へ、毎日通はせ給ひしか、人目には緩々と、歩ませ給ふと見えながら、三十餘里の長途を、行きて歸らせ給ふこと、只半時には過ぎざりけり。頃は弘仁八年丁酉の酉、天下大きに旱して、土乾割れ石焼け、草木枯れて焦せる如く、大河小河に流れ盡き、船は陸地の見物となる。上一人より公卿大夫、下黎民に至るまで、天に禱、地に祈り、海神河伯を祭りても、猶一滴も降らざれば、渴魚の泥に喘ぐが如く、苦しみ歎く許りなり。大師嵯峨野を通らせ給へば、近郷の土民羣集して御衣に縋り、「慈悲第一の大師様、斯程まで一天下水に渴る、耕作農業叶はぬを、よそに御覽候かや。雨を祈り國土を潤し、助けさせたび給へ。」と、野原にひつしと臥し轉び、聲を齊へて歎きしは、千草の蟲に異ならず。かかる所に、大海原の王子の出頭、百濟の大納言牟輿先に押立てさせ、兵士數多召し具し、「ヤア、土民等道を退け。今度大海原の王子帝位に即かせ

爲とぞ見えにける。大夫もほうど爲方盡き、「人力にては叶ふまじ。眞言祕密の御法力、験を見せさせ給へや。」と、「不空羅索、千手千眼、願はくは千の眼を顯はし、千の御手を伸べ給ひ、眞言の行者に力を添へ給へ。じんばらははりたやうん。」と、責めかけ、祈りければ、不思議や俄に鳴動して、家内の諸道具手足を生じ、或は一眼或は兩眼、星の如くに煌いたり。圍爐裏に据ゑたる五徳の鐵輪、眼はあれにあら釜の、鋼銼を鳴らし、三足の爪を蹴立てて歩み寄る。王子あざ笑ひ、「正法に奇特なし、何事かあらん。足無き物の歩くならば、不思議ともいふべきが、五徳に三本の足あり、サア歩め見物せん。」と、恐るゝ氣色もなき所に、湯殿の隅より行水盥、三尺四方の面魂、足を宙に飛び廻り、はつたと睨み喚く聲、煮湯を流す如くにて、流石の王子氣を奪はれ、つつ立ち上れば、小晒ひらりと飛び退いたり。「己盥め、打ち碎かん。」と互に追ひ立て追ひ込む。黄粉にしてくれんと石臼が、くわと見開くめつきり、挽木の片手を三間許りぐつと延べ、王子の太刀を奪ひ取り、宙を拂ひ、裾を雑ぎ、左右を捲いてくるく、ひらり、とはためき渡る。太刀は稻妻、鳴る音は、雷なんどの如くなり。眞言加持の法力に、王子も今は爲方盡き、「空海が法力に此の度は負くるとも、我又守敏の行力にて、一天下に變き目を見せ、邪正を思ひ知らせん。」と、八方を睨み付け、躍り上り飛びあがり、牙を嚙んで立ち歸る。大夫親子は眞言の、法力行力佛力や、信心力に勇力も、なほます鏡曇りな

銚子引くまいぞ。お肴は何故遅い、嵯峨の汲鮒は、道が遠うて間に合ふまい。東寺の水菜を一走り取り寄せ、ついざつくくくと切るに隙はいらぬこと。エ、油断な、お肴はやう」と、氣を揉みける。「いや油断はせねども、使も未だ戻らず、嵯峨、東寺は埒明くまい、如何にしても残念。我々がこの手料理のお肴で、たつた一獻思入れの杯。こつちへ退け。」と招かれて、娘も心得、膝枕そつと外しは外せしが、うはがひの襟肩に敷かれ、引けどもく骨太き、人の男の寐入つて、重き藤葛を引く如く、父母あせつて、「切つて退けく」と、そつと投げ出す脇差、おつ取り立つ所に、王子むつくと起き直り、敷いたる小褌しつかと取る。娘は脇差後手に、がたく顛ふ危さよ。王子からくくと笑ひ、「ヤイ酒の五斗や一石で、王子が性根みだるべきか。うぬらが心底見ん爲の空寐入り。嵯峨、東寺の肴とは勝藤、大炊の介がこと。來れがな、よい肴、一咬にせんものを。親子の奴ばら今生の名残、先づ娘から仕舞はん。」と、引き寄せんとする所を、小晒脇差取り直し、うはがひさつと切り放し、ひらりと退いたる早業に、王子驚き大音上げ、「ヤア糟禰宜めは敵一味に極まつたり。討ち取れやつ」と呼ばはれば、取り捲いたる軍兵ども、我もくと亂れ入る。稻荷講中十人ばかり、親子三人一手になり、追つ返しつ斬り拂ひ、小晒取つて返し、「王子やらぬ。」と斬り掛くる。「しや物々し。」と、小腕取つて足の下にどうど踏み、「一人宛は事むづかし。皆々一度に踏み殺さん。掛れや掛れ。」と怒りしは、鬼神の所

る物ぞ。」「サアそれが定なら契約の杯取り交さん。なう母様、寺朋輩の友達衆に、酒一つ盛る爲銚子、杯頼みまする。」「おう」と答ふる母の聲、しすましたりと用意の銚子、大杯をぞ出しける。「先づそれからと申すはずなれども、ちと心入も候へば、私たべて。」と手酌にて、たぶ／＼と受くるを見て、色に引かる、色好み、「扱氣味のよい杯、それを御身がみな呑むか。」「何のいの、すけて貰ふ人あり」と、ちよつと口つけ、さしければ、「ハア、一天の君に付け差とは、うい奴め、面白い。」と、ついと乾し、「すけ三杯。」と、引き受け一刻呑み。「サアさいた。」「おさへましょ。」「一天の君におさへるか、面白い。」と、又傾くるその隙に、勝手より母は心得、代銚子そつと出せば、「是れ申し銚子のつぎめ請取られぬ。」と突きもどす。「一天の君に銚子のつぎめが面白い。」と、つがせてはついと乾し、差せば、「さはつた、任せて置け。」「数が悪い、今一つ。あんまり見事今一つ。」の、一つ／＼が数重なり、舌も縫れ目も坐り、「如何な一天の君ももうならぬ。」と、とんと娘が膝枕、前後も知らず寐入らる、。大夫夫婦は手足も空に、嵯峨と東寺へ人走らせ、二人を遅しと待つ程も、屋敷の三方軍兵にて取り巻いたり。此の間に酔ひ醒めて、取り逃しては不覺なりと、座敷を覘けば高懸、死人を斬るも同然。「勝藤がな歸られかし、大炊の介歸られかし。一層討つてや仕舞はん。」と、太刀ひつそばめ、女房は長刀横たへためらへば、娘は王子の鼻に手を當て、頭振を振り、「いや／＼御酒が足らぬさうな、粗忽にお

早う男が持ちたい。こちらの父様母様は、いくつで夫婦にならしやんして、思ひやりのない事。男持つたら嬉しからうな、うにや／＼。」と言ひ消せば、「是れはどうもたまられぬ。寐言いふには問ひ様で、返事する呪ひあり。」と、左の袂を打被き、袖口より顔出し、「是れ男持たせう。色白に美しく、きやしやな男が好きであらう。」と、言ひかくる。「いやぢや／＼いや／＼。色白な男は、姫瓜の様にぬつぺりとして、勢がない。色淺黒う、底赤光のあるがよい。」「それでも髭は嫌であらう。」「嫌でない嫌でない。摺頬の後がひり／＼して、後のかたみ忝い。」「ム、ウ注文に合うて、此方も忝い。扱又脊は高いが好きか、低いが好きか。」「脊の低い口吸ふに不自由な。目元口元きつとして、脊と鼻とは高いが好きぢや、ぐぢや／＼。」と言ひければ、王子ぞく／＼たまりかね、「御好きの男是れにあり。」と、ひつたりと抱き付く。「ア、怖何者ぢや、女子の部屋へ不遠慮。」と、逃けて入るを引き留め、「男の欲しい心底も、好きな男の風俗も、寐言にとつくと聞き澄ました。一天の主大海原の王子、不足があるか。」と手を取れば、「ハア扱は寐言に、思ふことを申せしか、常々父母の、寐言いふとて叱られしが、心を見られて面目ない。此の上は何とせう、人に沙汰せまいなら、どうなりともぢやが、男の癖、あそこの娘を寐言から附け込んでの、助兵衛の何のと沙汰があるなら、妻やいやぢや、エ、恥かしや。」と、顔に當てたる兩袖に、戀と色とを包みけり。「ハテ斯うなる上は朕が后、何の沙汰をす

稻を荷ふと書いて、いなりと讀ませ、御本地辨財天五穀の福神と崇め、我々社人等弘法大師の御弟子となり、眞言の法を専らとして、神を祭り候。」と言はせもはてず、「ム、よめたく。汝が師匠の空海より預つた、兩人の客人に對面せん、是れへ呼べ。」大夫そらさぬ顔にて、「ハアウ此の山花紅葉の頃は、客人も候へども、只今の客人とは男か、但し女中方にて候か。」「いやとほけまい、勝藤、大炊の介がこと。それ込み入つて家捜しせよ。」と、まつ先に立ちければ、供奉の公卿、冠装束脱ぎ棄て脱ぎ棄て、下には鎧腹巻して、我もくくと込み入りける。「汝等は南の野原東西を固めよ、表一方は我が一人に任せよ。」と、白駝王の荒れたる勢ひ、遣戸、障子を蹴破つて、奥の一間につつと入れば、娘が向ふ姿見の、姿は見えす鏡の中、脇息に打靠れ、眠れる花は古いこと、何に譬へん衣裳繪を、物の上手が白鑱玉に、作り入れしが如くなり。王子驚き、「これは見事、天から映る天人か。」と、あこがれ見とれて現を抜かし、「透寫より正筆をちと拜見。」と、取つて除けたる屏風の陰、小晒はなほとろくと、眠る目元のあてやかさ、「百の媚ある頬先へ、ほつかりと喰ひ付かうか、姿の美景抱き付かうか、どうせうと此方のまゝ。エ、甘い所。」と、ちよつと手を付け、ちよつと撫で、君が脣我が指に附けて、「眠りもまだ覺めぬ。」髪をつやく、紺瑠璃の、玉にころく、唐猫の、そばえ狂ふに異ならず。花の顔容光り合ひ、陰脣を動かすは、「ヤア寐言さうな。」と、耳を傾け能く聞けば、「ア、持ちたいく、

語、忍ぶ程こそ忍ぶべけれ。顯はる、上は、よき討ち時節到來とは思へども、折しも悪う兩人は他行の留守、難儀は某一人。さりながら此の兩人は、弘法大師より御頼みの人々。たとへ此の大夫が一命は果すとも、師の爲と思へば惜しからず。陳する程は陳じて見て、叶はずば飛び掛り刺し違へる覺悟、御身達は足手まとひ、何方へも立ち退け。生き延びたらば又逢ふべし、先づ今生の暇を、疾々落ちよ。」と言ひければ、娘の小洒さかくしく、「ア、愚かな父様。御兩人をかくまへしと、王子の耳へ入るからは、富樓那の辯舌で陳しても、あたゝかに聞き入れうか、死ぬるもほんの犬死。音に聞えた色好み、口惜しながら親のため、自らが身を棄て、面の皮厚うしかけて、酒にどれさせ、よい時分に合圖せん。大炊の介様は東寺參、勝藤様は嵯峨の御所お見舞。人を走らせ呼び返し、討たする思案に極めたまへ。」と言ひければ、大夫夫婦悦び、「天晴でかした、分別といひ剛の者、武士の娘にも劣るまい。然らば其の手筈にして、用心の爲稻荷講中の氏子のうち、健氣者をすぐつて頼むべし。」といふ所へ、「行幸。」と呼ばはる聲、「扱こそ。」と、妻子を奥に忍ばせ、引繕うて出迎へば、王子態と車を下り、公卿許り左右に連れ、悠々たる顔付にて、「ヤア大夫。當社はもと唯一の神道なるに、此の頃兩部聚合と名付け、眞言の法にて行ふは、如何なる故ぞ。」とありければ、「さん候。弘法大師入唐の時、唐土にて大明神、稻を荷ひし翁と現じ、永く眞言の守護神となるべしとの、御契約ありしより、文字にも

文。右の外に、うぬ等が物何を取つて、取上婆とは奇怪千萬。一々に元首振ぢ切り、命をも取り上げん。それ踏み付けて搦め取れ。」と、車の前板割る、許りに踏み鳴らし、四方を睨め付け怒りしは、千里の車に乗つたりし、婆羅門王とも謂ひつべし。町人共顫ひ出し、「ア、御勿體ない、何しに誹り奉らん。恐れながら、お聞き様の悪い故に御立腹。世の中の人間の生まれ出づると申すこと、父母の力許りでは、彼の難所を念もない事。皆取上婆の御恩とて、禮物祝儀の何のかの、六日だれの忌明の、誕生日の食初のと、取つてく取上婆同然、御恩深き王子様に申す誓へに候。」と、間に合はせて言ひければ、王子すこし面を和け、「父母の恩にも勝つたるとの誓へなれば、ゆるし置く。以後にも悪口いふ奴原、きつと曲事たるべきぞ。扱かく京中を巡る事、遊山許りと思ふかや。橘の勝藤竝に大炊の介兩人、忍んで朕を狙ふと聞く。別して稻荷の宮の社人めらは、空海が眞言傳授、師弟の筋目ある山なれば、今日直に穿鑿すべし。汝等も二人が在家、見付け次第聞き付け次第訴人せよ。月一貫の課錢を免し、頭數に百文づゝ、毎月永代取らすべし。」とありければ、「有り難いお優しや。此方から百出して、王子様のお面を、摩つて上げたい事かな。」と呟き、皆々立ち歸る。王子は五條の直道を、横に車や稻荷山、大明神の社人窟の大夫、社の御番より立ち歸り、女房、娘を近づけ、「我等が方に勝藤、大炊の介をかくまへ置きしこと、王子聞き付け、詮議の爲只今是れへ来るよし、參詣の人慥かなる物

簾取放し、往來の人に羨ませ、威勢を見せて通らる。供奉の公卿御車を止めさせ、「ヤア、町人共、直に宣旨の事あり。町々宿老、行事、組頭、一人も残らず罷り出でよ。」と呼ばれば、「如何なる詮議か言付か、又何ぞ上げませか。」と、古羽織の裏の町、袴の腰の横町まで、残らず集ひ這ひ躡ひ、地に鼻付けてぞ躡る。王子寛々と打眺め、「彼等は京の町人な。此の度嵯峨の天皇を追退けし上は、普天の下、率土の濱、空飛ぶ鳥、蟲螻まで、皆朕がまゝにてある。何と嵯峨の代の政道と、朕が今の政道と、何れが善悪萬民の取沙汰、僞りなく眞直に疾々申せ。」と仰せける。町人ども返事にしかね、前の御代より善しといふは腹の立つ事。悪しといふも恐ろしく、「先づ上の町から申し上げや。」「先づ其方から。」「いや其方から。」と、互にぬすくり合ふ所に、五十許りの繰鬘親仁罷り出で、「嵯峨の天皇様は、世界の民を我が子の如く御恵み。それ故民の父母に譬へ奉り、王子様は取上婆ぢやと申しまする。」と言ひければ、王子大きに怒つてぬつと立ち、四角の眼八角に見出し、「オ、それを聞かん爲、此の王子を取上婆とは、何時何を取り上げた。地子年貢は我が地にけつかる冥加の爲、賣買三分一の運上は我が酒宴遊宴の料。これ又上を慰めの爲、毎月門竝一貫文は、よき女とあるからは、嫁、娘は言ふに及ばず、たとへ面々が本妻なりとも、差上げよと觸れたるに、或は病者と僞り、又は空海坊主が始めたる、四國遍路にかこつけ、他國へ退け、花の都に美女なき様にしなしたる、其の過忘の一貫

國分寺。六十五番三角寺。是れよりさきは讃岐路と、こゝに札うつ石槌山、小松尾山を見わたせば、
國々島々目の下に、爰も蒼海曼荼羅寺。現世の夫は、武夫の道に功ある丸龜の、天王山と白峯の、
みは高き百餘丈、兒が嶽には及ぶとも、四國遍路の御方便、思ふ矢壺は梓弓、八栗、屋島の八栗山。
南無や志度寺の、觀音薩埵の力を合はせ、大悲の縁に大窪寺、拜み納め打ち納め、巡り納めてかぞふ
れば、阿波に二十三所の靈地、土佐國に十六箇所、二十六箇所伊豫國、讃岐に二十三箇所と、合はせ
て八十八箇所は、大師の巡りそめ給ひ、二世の大願成就を教へ導き給ふごと、思へば旅も苦になら
ず。心まめしく足軽く、舟さへ輕き海の面、追手の風に法を得て、都に上りたまひけり。牧野に戈を
倒にすと傳へし先言、耳に萬里を隔て、大海原の王子義を損ひ、善を損じ、天皇を嵯峨の離宮に押
し籠め奉り、自ら十善萬乘の天子と稱し、民を貪り虐ぐり、洛中家竝に色よき女一人づゝを貢物。叶
はぬ者は毎月一貫文の課錢をかけ、其の身は瑤宮瑤臺の綾錦に纏はれ、酒を池とし、色々の肴の林、
美食の山。筋なき者も美女の縁にて、公卿大臣の位を許し、驕奢日々に盛んにして、都の町々遊覽の
行幸ごと、廻らす玉の御車も、流石に牛の恨みの報い、後怖くや思はれけん。牛をばかけぬ牛の角、
跳元結の筭髷、二十を頭に十人許り、車の轆軋らせて、脱掛小袖薰物の、香ひと色の花に挽かする
花車、えい／＼と押せども女力の、汗の白玉、花の露かと蝶鳥も、口紅吸うて轟かす。物見の

だ黒谷に墨染の袖、五番に地藏寺。六道能化の地藏大菩薩、導く玉の數々に、繫け十づ、十樂寺。十里十ヶ所足軽く、若い身にさへ修行とて、白粉もせず紅附けず、日に焼け山の嵐に、髪をとかせてさつと梳かせて、しやんと挿さばや笄に、楊枝の柳陰深く、梢に銀のせみが端、ぼつと白鷺立江寺。北に星谷、鏡石、嬰子生んだ身も生まぬ身も、胎内潛り一代の、灌頂が瀧見上ぐれば、鶴の林をつるつると、昇る朝日か朝月か、いや日に三度現じ給へる不動が瀧。是れまでは阿波の國界、早行く先は土佐の海、八濱濱中、八坂坂中さつくく。我は子故に、我は父故母川の、水の恩徳法勝の、室の御崎寺、津照寺。それかと人に唐の濱。拾へど土の蛤の、不思議を今もみつがしら。爰は日本一の宮、景も景色も清瀧寺に、入海近き渡守。月の誘はば自ら、舟も漕がれて出づらん、舟人も漕がれ出づらん。焦る、物は我よりも、妻戀ふ牧の土佐駒の、あれく花になづみて花薄、歌一本薄やいつかいつかこの、穗に出て亂れ合を、穗に出ていつかやいつ、三か四かいつかいの。穗に出て六日の晩に廻り逢を。逢はぬ夜は只泣き明す、蹉跎寺に手をすりて、拜む御寺は寺山院。是れから先は伊豫簾、かかる不思議や一年に、例七度なる栗の、佛木寺名もたかく、音に聞えし營生山。伊豫の小富士や松山の、松の調べか三味線か、のせて一ふし淨瑠璃寺。道後の湯入り伊達そめ浴衣、裾に名所の正月櫻、しやならくくく、柔かな手でちよいと招く。誰が石手寺と名付けけん。三島、佐禮山、

底如何に。」と言ひければ、「面白き料簡。助太刀までもなく、御邊の親の敵なれば、我がためには舅の敵。」「オ、それよく、此の花世が爲にも親の敵。」と、勇みをなせば、濱頼はなほ涙に咽び、「我は討つべき敵もなく、一子の爲には命の敵。是非に自害。」と押取る刀、大炊の介押し止め、「いや／＼一子を害せし其の時に、胸の中より、鏡の如き光を放ち雲に入る。成佛に疑ひなし、佛に敵あるべきか。大海原の王子は此の子が爲にいはず、祖父の敵にて佛敵なり朝敵なり、押廣めては天下の敵。心を合はせていざ討たん。先づそれまでは互に竊かに世を忍び、誠の心は状文。」の、明けぬ先にとたち歸る。恨み開けて梅の花、しらく／＼しらむ朝日影、涙の氷打解けて、結ぶは夫婦父子兄弟、五つの道も孝行を、本の契りとなりにける。

四 國 遍 路

歸るさ知らぬ旅ごろも、く、法のためとは糊つけて、張りて乾してはつばなかし、肩に笈摺同行二人、誓ひの舟にまかせ行く、世はあだ浪の浮きしづみ、阿波、土佐、讃岐、伊豫國、四國遍路と思ひ立ち、大炊が妻は我が子の菩提、勝藤が妻は父のため。それよりもなほ一筋に、夫々の此の世の願ひ、巡る利生は自ら、身の徳島に舟寄せて、拜み始むる靈山寺。こゝが此の世の極樂寺。菩提は山の小牡鹿の、招けど更に金泉寺。煩惱は家に飼ふ犬伏村や吹田村眺むれば、月白妙の夜半なれや。た

え、消え入りく泣きければ、大炊の介聲を荒らけ、「ヤ誰に歎つ其の涙。但し人々を迷惑がらする涙か。何時ぞや瀧頼殿奪ひ取りし時、妹が孝行奇特にも哀れにも、思ふに忍びず、妹になりかはつての志なれば、恩にかける方もなく、禮を受くる人もなし。死骸を見て悔しくば、山に棄てよ。」と叱りける。「いや悔みは致さねど、一昨日より泣きたいを、怵へくして包みしもの。これ程は泣かせて下され。」と、抱き付けば大炊の介、「それなら我も今少し。」と、夫婦死骸に抱き付き、聲も惜しまず歎きしは、ことわり過ぎて哀れなり。瀧頼むつくと居直り、「扱此の爺が身に附いたる肉は、あの子の肉よな。幼いを餓鬼道に墮し、喰らひ太つてなにかせん、冥土にて返辨せん。」と、胸おし寛け、傍の刀押取れば、勝藤止めて、「暫くく。我に先だち給ひては、大炊の介の志に背く道理。我が最期を見届け、其の後の御自害。これ大炊の介、此の上は首差伸べて討たるゝとも、よも討ち給はじ。尤も勝負はなほ爲難し、夫婦これにて刺し違へん。首を討つて親の敵、本望を遂げ給へ。サア来い女房、只今。」と刺し違へんとする所を、大炊の介取つて押し退け、「これ勝藤。首差伸べて討たれんとなれば、御邊の命は、この大炊の介が取つたる同然。扱我が親は二代に二人の敵あり。前の生は悪右馬の尉仲間、敵は御邊。たゞ今一太刀討つて、即ち命を取つたれば、これ本望は遂けたるぞ。次の生は、牛の體に魂宿つて、大海原の王子に殺さる。然れば王子は、我がための親の敵。助太刀を頼みたし。心

呑む乳房、朝夕我に含めらる。様々辭退し斷りても、呑まねば却つて恨みの色。是非なく乳房に命を繋ぎ、老の憂き身を長らへたり。其の證據には、此の爺が肌膚は斯様に潤ひて、幼い子は骨と皮、異國の崔南が妻の、乳にて養ひし、それは姑、是れはまんざら他人なり。他人の親を憐ぶも、我が親に孝行の、深きが上のあまりかや。我に何の好みはなし。敵が討ちたいくと、たゞ一筋の思入り。斯様の武士には一禮述べ、首差伸べて討たれてこそ、天の恵みもあるべきに、寐込に踏ん込む此の慮外、武運に盡きたる淺ましや。」と老の縲言縲り返し、口説き立てて泣きければ、勝藤も咽び入り、「恥かしき御心底、眞平御免。」とばかりにて、泣くより外の事ぞなき。花世泣くく手を合はせ、「其の心の兄上に、手を負はせしは天罰か、此の子の乳にて爺様を養ひ給ふ志、何とお禮申すべき。いとしや此の子の隻顔見せてたべ。」と、抱き起さんとする所、女房押へて、「いやく見れば涙の種。」と、押し隠すを押し取つて、抱き上げ見ればこは如何に、餓鬼の様なる嬰子の、喉吭を一刀突殺したる死骸なり。「ヤア此の子は斬られて死んでぢやが、父御母御は知らずか。」と、狼狽へ歎けば勝藤親子、「これは如何に。」と立ち騒ぐ。女房、「わつ。」と聲を上げ、「深う隠し置きしもの、由ない事を見給ひし。妾はかよわき生まれ付き、一人にさへ足らぬ乳を、此の子が呑みたいノと、夜晝分かず泣き喚く。賺してもたらしても乳は細し、爲方なく父御前の手にかけて、一昨日の暮方。」と、かつばと伏して身悶

大炊殿討たれたまはば、己が元首取つて押へ、お内儀に首討たせんと、空寐入して控へたり。誠や鳥にあらざれば、鳥の心を知らず。魚にあらざれば、魚の心を知らねども、人の心は人が知る。おのれ父濱頼を討つたりとの高札を見て、只今斬つて入つたる心、嗚無念にありつらん。我が身の無念を知るならば、大炊殿の父仲成を、汝に討たせし此の年月の無念さを、何故思ひやらざるぞ。疾づくに出合ひ、大海原の王子を亡ほすまでは、君に擲つ大事の一命。其の間の命を預け置かれよと、尋常にこゝとわらば、兩方の心ばせ世の聞えも見事なり。我も奪ひ取られし時、死なんとすれど刃物は隠す、舌を嚙まんも齒とはなし。縊れ死なんとせし所を、夫婦の衆が縊り付き涙を流し、「これは勝藤を釣り出すまでの囀なり。親の敵が討たれぬとて、敵の親を殺して、さもしき大炊の介が意趣返し、人違へ同前のうろたへ者、武士に似合はぬ仕方と、笑はれては侍の名を朽す。随分老體の身を大事に頼み入ると、起き臥しまでの心付け。此の寒夜にあれ見よ。其の身は赤裸、妻子まで肌薄に、我に許り物取り著せ、誠の親より深切の、志は淺からねど、此の爺が身になつて見よ。我許り暖かにならうものか、あるまいか、身を切り裂くがごとくなり。されども是れは大事なり。若し年寄の風引いて、煩ふか凍え死んでは、大炊殿の悪名立つと思ふ許りの身養生。ヤレ死なう／＼と思ふより、生けう生けうと思ふのが、年寄はなほ苦しいぞや。殊に此の齒抜けが食物、貧家の爲方なきまゝに、一人の子の

みにて、障子一重の竹縁。「これ究竟」と、飛び上りく、障子を一度にはらりと明くる。女は著の儘一子の添乳、男は色々とり重ね、寒氣をふせぎ頭を包み、雪に油斷の深寐人。天の與へにつこと笑ひ、胸板に乗掛り、刀を差し當て、「これ大炊の介、橘の勝藤なり。鹽漬の親の首、汝が首一所に請取らん。」と、引き起せば白髮の老翁、「南無三寶人違へ。」と、ためらふ所に、丸裸に肌褌袴、太刀抜きをばめ、「大炊の介是れに待ち受けたり、親の敵。」と、勝藤が左手の肩先、切先下りに斬り込んだり。花世すかさず、「舅の敵。」と、兄が眞甲耳際まで斬り付ければ、女房も起き合はせ、花世を確乎と抱き止むる。各血に染みながら、勝藤聲を掛け、「きたなし大炊の介。我其方と出合はぬを臆病と思ふかや。大海原の王子を亡ぼすまでは、私ならぬ命。それをも察せず、老鼠の穴に隠るゝなどと悪口し、剩へ九十に餘る老父を殺すなどとは、女童の意趣返し、きななしさもし。賣人土民にも劣つたる仕方。人でなしの手にかゝりし、父が不運是非もなし。親の敵。」と討つてかゝれば、濱頼牀を這ひ出で、「其の刀で我を斬れ、サア我を斬れ勝藤。」と、むしやぶり付いたる顔を見て、勝藤夫婦は、「はつ。」と許り、あきれて詞もなかりけり。父は物を言ひたけに、頭を振り胸を摩れども、齒の無き口は氣息漏るゝ、思ひに老を嚙み交せて、暫し涙にくれけるが、「ヤレ某が起き合はぬを、寐入りたりと思ふかや。なまゝ起きては事やかまし。勝負を見届け、己が討たれば、續いて我も自害せん。若し

の事。」と、雪に喰付き泣きけるが、「いや／＼愚かな、泣く事も何もいらぬ。嬉しと刀は差いて居る、舅の敵、たつた今お禮申さう。」と、獨言して身拵へ、たち寄る軒の木陰の雪、白小袖の高繫け、大小ほつこみ來る者あり。「すは曲者。」と飛び退れば、勝藤も柄に手をかけ身構へして、互に氣を付け眼をくばり、睨み合うたる雪の光。「ウムウ離別の女房花世か。兄と心を合はせ、父を討つて餌にかひ、我を釣り寄せ本望遂げん志、神妙々々。さりながら兄と一所に勝負はせず、女の腕一人しては危ななもの。されどもそれも心次第、サア來い。」と抜かんとす。「ア、これ／＼始終を御存じあるまい。父御を我が庵にて、はごくみ介抱致せしを、兄大炊の介が奪ひ取り、敢なく討つて棄てたる由、たつた今札を見付け、舅の敵斬り入らんとする所。此の上は離別も入らず、サア一所に入つて本望遂げん。エ、お年寄をやみ／＼と殺させ、面目ない口惜しい。」と、齒嚙をなして身をふるはし、涙は霰のごとくなり。「ム、大炊の介と我とは、兩方親の敵にてあひ狙ひ、其方は格別、夫は親の敵にて、兄は舅の敵なり。親が重いか舅が重いか、重いかたへ附け。」といふ。「はて男子の身には親が重し。女は親より舅なり。」尤も／＼其の念は變らぬな。「いや／＼翻す事はない。」「オ、頼もしい、夫婦一所に斬り入らん。氣息を限りに働くぞ、咽潤せ。」と雪を掴んで口に入れ、目釘はよいか帯締めよ。」と、頷く薄枯れ残り、雪に傾く椀垣押し破り／＼、荒れたる庵の要害、見れば彼も貧家の松の破れ戸、後は藁堀頼

見えず。在所の人々鉦、太鼓。狐のわざか天狗の所爲かと、稻荷の山は夜なく、愛宕、高尾の山の奥、比良や横川の奥まで、残る隈なく尋ねれど、今宵まで四十餘日、それかと似たる影もなし。今は此の世に亡き人の、直にその日を命日と、思うても思はれず、返せくと呼び歩く。今日は極月の寒の入り、手足も凍え氣息切る。なう修行者。と取り付けば、朽ち残る秋の案山子の鳥威「ハア我も狐に魅されしか。夫に別れ舅を失ひ、孝行かへつて不孝となる、因果な身ともなつたよな。こ、は所も狼谷、せめて誠の狼が、喰ひ殺してもくれよかし。」と、太鼓も鉦も打棄てて、雪の上にかつばと伏し、足すりして泣く涙、袖の氷柱と凍りけり。「ア、寒や。あの人家を叩き、湯湯一つ所望せん」と雪打拂ひ、踏み分けて立ち寄れば、門の前用ありけなる高札。「ハアもし舅御を見付け置いたる知らせか。」と、雪の白みに讀みて見れば、「橘の武者所勝藤、親の敵たる條、俱に天を戴かざるの恨み。身を風塵にかけ狙ふと雖も、勝藤臆病にして、老鼠の穴にかくれ逃げ迷ふ、卑怯至極の侍なり。これによつて、親濱頼を奪ひ刺し殺し、首を鹽に漬け置き畢んぬ。勝藤人間の心あらば、尋ね來つて親の首を請取り、速かに勝負を決すべき者なり。悪右馬の尉仲成が孝子、大炊の介仲經宿所。ハア、扱は兄の大炊の介、我が留守に奪ひ取り、討つて棄てたか。エ、情なやおいとしや、さもししい心の兄めかな。其の時早う戻つたら、兄であらうが鬼であらうが、生けて戻しはせまいもの。因果な身とはこ

や。」と、泣き叫べは、口を抑へ、「ヤレ目が覺める、聲立てな。慈悲も情も知つたれども、親の敵にかへられず。殊に殺すことでもなし、敵を釣り出す人質の囚。そこ退け。」と、つつと入つてしつかと抱く。「心得たり」と、枕の刀に手をかくる。「これ申し、卒爾はいたさず、仔細あつてお供申す。委しき次第は宿所にて、家名を名乗れば得心の筈、尋常に出られよ。」と、抱き起せば掴み付き、「エ、無念無念。」と、敵を嚙んで怒れども、力なきさの枯木の松、根ながら引けや荒磯波の、表の枝折戸しつかと取り、「こゝで殺せく。」と、意地張つたり。「いやく殺さぬ。貴殿を同道申さねば、侍のすたること。我が武士を立ててたべ、頼み申すたのみ入る。」頼むと聞いてさすがにや、少し心もしをり戸を、もぎはなし引抱へ、暮る、深山の道もなき、谷を分け行く。三重なうくあれなる道行き人。桂川には渡舟の候、べきか、何夜更けてはあるまいとや。木幡の關は通さうか、何これもはや戸を鎖さうとや。悲しやな今宵のうちに、宇治、御室、淀、一口、八幡、山崎をも尋ねんと思ひしに、道さへ埋む今宵の雪、跡は塞がり先見えす。「空はこぼすが如くにて、松の吹雪はぼうくと、返せくと呼ぶ聲も、鉦も太鼓も届くまいとは思へども、返せと呼ぶが力なり。」返せく、子供も同じ老の身の、行方知れぬは迷子よ、迷子返せ。ヤ其の笠被て立つたるは修行者か。修行者ならば、野山をも廻る人、九十餘りの老人の、若し死骸でも見たまはぬか。尋ぬるは我が舅、過ぎし十月二十六日、夕暮方より影

へ人質に取つて置くならば、いやでも敵、名乗りて出ねばならぬ所。いかゞ思ふ。」といひければ、「オそれはよい智畧なれど、聞けば孝行な妹御、易々と渡しはなされまい。」「はて妹が爲にも親の敵道理を詰めて言ひ聞かせ、渡さずば妹を、討つて棄つるまでの事よ。」といふ所へ、京の方より山賤ども、馬追ひ連れて歸り来る。大炊の介袖を控へ、「粗忽ながら此所に、もとは武士の奥様、連合と離別し、舅をはごくみ居る人は、御存じないか。」と問ひければ、「オ、それはお花のこと、即ち此の家。それそこへ戻られう、一門衆なら貢ぎでも召され。奇特な人で、毎日京へ商ひに出て、百許りな舅を樂と養はる。舅に齒は一枚もなし、結構な甘い菓子を毎日買うて戻らる。辛い身過ぎの商ひは山椒の皮、叔は鞍馬の火打石、膝の皿から火が出る。」と、語り散らして通りけり。夫婦悦び顔合ひ、庵の戸口そつと明け、差覗けば實に誠、月もる程のあばら屋の、嵐を防ぐ便りかや。女の小袖にて、障子をはつて一間に圍ひ、舅と思しき老人の、思ふ事なき樂寐入、枕もとに色々の、菓子、熟柿を盆に盛りそへ、壺に白蜜甘蔓ねり、竹の筒に菊紅葉、老をいさむる孝行の、心の色を染めなして、見るに哀れぞ優りける。大炊の介も氣後れせしが、「いや／＼願うてもない所。あのものの言はんより、引抱へて退くべし。」と、入らんとするを女房止めて、「ア、あの孝行な仕様ども、妹御が歸つて見て、歎きの程がいとしい。まそつと待つて合點のうへ、預つて行たがよいわいの。エ、情を知らぬお人ぢ

通り、離別の女、夫の留守に立ち入るは道にあらず。とかく老人が心を養ひ、壽命を保つ爲なれば、望みに任せ女が宿に誘ひ、心の儘にいたはるべし。」との教諭。「あつ。」と二人は手を合はせ、嬉し涙に沈みけり。「それ／＼引出物せよ。」との宣旨。内侍の局硯の蓋に黄金入れ、巻絹添へて、「これは上より下さるゝ。又このおあし一筋は木の實の代物。これは御祈禱の供物なれば、格別なり。」と渡さる。花世額を地に付けて、「冥加に餘る畏さ。夫に去られて、此の方の思ひも晴れし悦び、申し上げん。詞もなし。さりながら此のおあしは、木の實の代物、いかにも申し受くる筈。黄金、巻物頂きては、妾がはごくむ道立たず、御辭儀申し參らする。御恵みには明日より、木の實も柴もお得意に召して下され。いざお暇。」と手を引くや、舅の年も百近き、錢差し結び腰に付け、籠うち擔げ頬被、形も構はず人目をも、恥ぢぬ我が身の嵯峨の御所、お暇申し立つ月日、早神無月末つ方、雲交りの初時雨、冬編笠に世をしのぶ、大炊の介仲經が夫婦の中に、男子をまうけ寵愛の、子を持つて知る父母の恩。親の敵勝藤を一太刀と心がけ、夫婦うき身を碎けども、更に行方知れざれば、なほも野山に枕して、苦勞のなかに乳香兒を、妻の背中の重荷さへ、いとしさ故か荷にならぬ、二の瀬村にぞ著きにける。「これ女房、爰へ来て思ひ出したり。妹の花世、敵勝藤とは離別し、なほも貞女の道を立て、舅濱頼をはごくみ孝行盡す、住家はたしが鞍馬道、二の瀬村と聞きたるが、いざ尋ねて妹を賺し、其の親を此方

や嫁よめの事こと、左程さほどに思召おぼしめさるゝか。これ嫁よめの花世はなよぞ。」と頬被ほのかぶり取りければ、「ヤア嫁御よめごか、懐なごかしや。」と、御前ごぜんも忘れわすれすがりつき、手てを取り交かはし泣なきければ、六位ろくゐの官人仕丁くわんじんしろうやうども、「勝藤かつとう離別りべつの女房にようぼうは、朝敵あそ仲ちゆう成なりが娘むすめ。如何いかなる工たくみか、油斷ゆだんすな。」と、桿棒よりぼう竝ならべて押取りおつとり巻まく。「マア申まうし、狼藉ろうじやく致いたす女むすめでなし。お公家様くきさま、上蔭じやういん様さま不ふ便べんとも思召おぼしめせ。父仲成ちゆうなかつなりは朝敵あそ故ゆゑ、夫勝藤かつとうが討取うとる。此この上うへは親おやの敵てきなりと、義理ぎりを立て去さられしが、我等われらには大炊おほひの介仲經すけなかつねといふ兄あにもあり。退のき去さりしても馴染なじみ中なか、討うたれもせず添そはれもせず、磯いそへも沖おきへも寄よる邊べなき、憂うれき身みは一人ひとりにとゞめたり。御恩ごおんふかき舅御しゆうごの病やみ煩わづらひも餘所よそに聞きき、生死いしにも知らず暮くらすかと、おもへば悲かなしさやる方かたなし。五年跡ごねんあとに八十四はちじふしで、過すぎ行ゆきたまふ姑御しうご嫁よめ姑こ中なかよいはもつけの内うちとの世よの譬たとへ。お身みにかへての不ふ便べんがり、腹はらはかさねど娘むすめぞや。爺様ぢいさまの事こと頼たのむとの御遺言ごゆいごん、骨身ほねみにしみて忘わすれられず。お顔かほなりとも見度みだけれどども、去さられし女むすめが夫をつとの家いへへ踏ふん込こむは憚はやりと、賤しづの女めに交まじり、此この間氣あひだきを盡つくせし志こころざし、天道てんどうの憐あはれみ、只今ただいま相見あひみる有あり難がたさ。鐵かねの鐘かねで撃ついても、限かぎりの知しれた御老體ごらうたい。せめて寢臥ねふしのだき抱かへも、お心置こころおきなき様の宮仕みやつかへ申まうしたく、勝藤殿かつとうどのの留守留守の中うち、我等われらが柴いしの庵いほりに預あづけ置おかれ候さからふやう様に、奏問そうもんして給たまはれ。」と誠まことを盡つくし泣なきければ、濱頼はまよりも涙なみだにくれ、「可愛かほゆき嫁よめが心根こゝろね、彼かれが宿やどにて一日いちじつも介抱かいほう受うけたく候さう。」と咽なみだび入いりたる嫁舅よめしゆう、哀あはれといはぬ人もなし。天てんの御階ごゝうに出御しゆつぎあり。「無む二にの孝心かうしん哀あはれにも奇特きとくにも、感かんじても餘あまりあり。彼かれが申まうす

きて、花梨、榴梿、玄甫の梨、梅津の梅、桃園の桃、李、杏子は時過ぎて、身をもゆりかけ櫻桃、別
れは恨み有の實も、解けて逢ふ夜は隔てなし。何時青梨と引締めて、肌のよいのは姫胡桃、肌理の粗
いは山核桃。夏過ぎ秋も末廣の扇に似たる銀杏の實、石榴が笑める口元に、紅付けたとて笑ふ毬栗、
鐵漿付けし柴栗小栗繰り返し、絲に絶れや佛の手、花柚、香橙、蔓葡萄、柿は木酩、八王子、初霜寒
く置きそめて、色づく木練、君遷子、その品々は筆柿も、書き盡されず。」と賣りにけり。上藤達、殿
上人、「ヤア何時もの商人、今日は何とて遅かりしぞ。これは大事の御祈禱の供物、毎日百種の木の實
入ることなり。早々これへ。」と、三方にとりく清め盛り給ふ。中にも頬被せし女、濱頼を懐かしけ
につくく、と打守り、「ア、貴方はいかいお年寄、百にも遠うはあるまい。お齒が無うて物の味、さこ
そと思ひおいとしや。お毒にならぬ此の熟柿慮外ながら上げましたい。山家の賤が志。」と、木の葉
に載せてぞ出しける。思ひがけなく濱頼は、物をも言はず居たりしが、「扱々奇特な人があるよなう。
此の爺は酒飲まず、甘い物を好めども、今は鹹ばつかり、萬心に任せず。此の春までは孝行な嫁を
持ち、手づから食物すり刻み、様々調味し養ひしが、侍の義理爲方なく、倅と厭かぬ別れして、嫁
に離れてめたくと、身に皺も寄る腰屈む。何かに思ひ出す折から、そなたが志過分におぢやる、
戴きます。これに付けても、嫁は何とかしつらん。」と御前を憚る老の涙、包めども包まれません。「有り難

官濱頼年積つて九十三、烏帽子の額地に傾き、腰も撓の梓弓、家を忘れぬ太刀刀、鳩の杖に縋りよろ
 よろと、御前と見るより杖を棄て、打咳きて畏まり、「誠に我等近年倅勝藤に官職を譲り、隱居仰せ
 付けられ、老の身を安樂に暮す朝恩、何を以てか報じ奉らん。天晴大海原の王子と引組んで、刺し
 ちがへんとは存すれども、耳も眼も正しからず、腕弱つて弓引かれず、足立たねば馬にも乗られず、
 奥齒向齒落ち果て、食物は赤子同然。役に立たぬ此の爺め、御宿直申すこともなく、生きたる甲斐も
 候はず。」と、老拜みてぞ申しける。天皇感じ思召し、「汝が一子勝藤、舅仲成を討つて、最愛の女房を
 離別し、猶王子を討たん爲、九十三の親を振り捨て、諸國に身を棄す。かかる忠節の者の親、何時ま
 でも生けて置かまほし。勝藤が立ち歸り、親子伴ひ參内の姿を見せよ。」と敕誥あれば、上臈達、「こ
 れ年寄は御免あり。足の痛いにゆるりと居て、此の嵯峨の秋の色、ながめてお伽申されよ。あれは清
 瀧、嵐山、是れは横尾、梅尾。」と、指さす方の奥の山道だつくりほつくり、小石まじりの崖道を、し
 やならしやなく打連れて、男まさりの擔ひ賣り、山家なれども京近く、振も會釋もよい女房の、肩
 に俵おく露がおく、在所は何處、梅が畑とて香に匂ふ、物賣聲も互えくと、「月輪山の梢には、木の
 實數々鳴瀧山の、果物召せく召されよや。持ちし木の實は何々、櫟、樞、榛、榧、柑子、金柑、
 馬手葉椎、枳や無花果、胡頹子、棗、千代の苦むす岩梨の、岩にも花の松の實や、唐木の種を誰が時

逃け入りけり。サア此の上は王子をほつかけ討つべきか、現在の敵妹婿勝藤を討つべきか。イヤ王子をや討つべき、勝藤をや狙はん。」と、峯に登り谷に下り、行きつ戻つ思案分別、二つに別る、牛の角、牛の亡骸うち擔け、「よし此の度は助くるとも、遅牛も淀早牛も、廻る報いの車牛、恨みの劔一太刀。」と、女房を先に立て、谷川山川飛び越え跳ね越え、岩壁岩角とうくくくく、とうくくどうど岩倉山、歸るもうし歸らぬも、牛の亡骸泣くくも、擔ひて我が屋に歸りけり。

第三

天照御神、素盞鳴尊の所業あぢきなく、岩戸に籠り給ひけん、例さがなき嵯峨の山。勿體なくも天皇は、大海原の王子、守敏僧都を語りひ、玉體を調伏し、世を傾くる惡逆、宸襟を惱まされ、北嵯峨の假御殿に忍び移らせ給ひける。野宮近き黒木の御所、小柴垣し渡して、伺候の公卿上藤達、都をよそに廣澤の、月の鏡も小倉山、枕に近き鹿の聲、慣はぬ山路の宮仕へ、中々叡慮も慰むべし。弘法大師は上の山、一叢しける森の中に壇を構へ、玉體安全の御祈り、孔雀王經、七佛藥師、一字金輪、虚空藏、六字河臨、八字文殊、普賢延命の法、丹誠を凝らし修し給ふ。陀羅尼真言、鈴の聲、絶えず御耳に觸れければ、如何なる惡魔怨敵も、近づくべうはなかりけり。こゝに橘の勝藤が父、前の判

ちのもの。ヤイまいす坊主、王子は俗體、悪事を思ひ立ちたまふとも、教化をもすべきところ。オ、結構な御出家、守敏が眞か、茶瓶が眞か、守敏でも茶瓶でも、叩き碎いてくれんず。」と、夫婦抜き連れ喚いて蒐る。さしも嶮しき岩倉山、追ひ登し追つ下し、火水になれとぞ斬りまくる。王子は郎等數多討たせ、「最早構ふな左衛門、とかく油が大事の物。きやつには構はず、壺を持つてはや立ち退け。」と、下知し給ふ。「どつこい／＼さうはさせぬ。點し油さへ高直の世の中、我が親の油、かこひはさせぬ。」とほつかくる。難なく追ひ詰め、壺かたけたる左衛門が首打ち落し、奪ひ取り、元の所に立ち歸り、「これ女房。此の油にて一萬燈をたて、帝を始め諸人ともに調伏とや。いま打割つて棄つるは、人を助くる大善根。」と岩手に打ち當て、どう／＼と流る、油の中よりも、父が、魂現はれて、女房が懐に入つて、我が子と生まるゝも眼に見えず、心にも知るべき様こそなかりけれ。これを見て守敏僧都、天魔の荒れたる面魂、「己この法師を茶瓶とは、どの頬杢からぬかいた。」と、切り倒したる大木を引つかたけて、會釋もなく打つてかゝる。ひらりと外し、しつかと取り、「えいやうん。」と、一ねぢ振ちて挽ぎ奪り、どうど棄て、つつと入り、大の法師をさまたにかけて引摺み、目より高く差し上げ、「茶瓶坊主の割れ物がいはれぬ働き。打碎くも易けれども、流石に法師、死なぬほどに思ひ知らせん。」と、「えいやつ。」と投げ付くれれば、切株にて打ち當てられ、腰を摩り膝を揉み、はふ／＼山路に

父仲成が忠義に免じ命は助くる。重ねてかかる慮外せば、うでほし挽いで挽ぎ折らん。」と、首筋掴んで引立つる。「ヤア愚かなり。命生きんと思ふにこそ、畜類に生は代へたれども、現在の我が父、目前に殺されながら、何面目に立ち歸らん。親の敵一寸も引かせじ。」と、又飛びかゝるを取つて伏せ、「はて扱生も懲りもない馬鹿者とは其の事。己が父を討つたる、誠の敵は外にあるを知らざるか。おのれ勘當せられて後、橘の武者所勝藤といふ者を壻と取り、妹花世をめあはせ、親子の因はなしたれども、天皇の味方に武士立して、壻勝藤が討ち取つたり。是れ程正しき親の敵はさし置き、此の王子を敵とはうろたへ者。但し勝藤が怖いか、地腰抜け。」と、言ふより仲經胸にこたへ、「扱は父は妹壻が討つたるな。然れば二人まで親の敵を持つたる身の、然も敵に組み敷かれ、無念の死を遂ぐるかや。せめて小刀一本持つたらば、王子は扱置き、鬼神なりとも犬死はせじ物を。」と、土に喰ひ付き怒りをなす。王子空嘯いて、「ハテ腹のへるに圖なう駒く奴かな。殺すも無益の殺生。跳ね廻つて喧しし。縛り付けて歸るべし、それはや繩。」といふ所へ、何としかは聞き付けけん。女房大小かいこんで、木の根に取り付き、山路に分け入り、それと見るより、「南無三寶。」と、王子を目掛けて、一文字に討つてかゝる。さすがの王子もたまりかね、ひらりと飛んだる其の隙に、仲經むつくと立ちあがり、「やれやれ鼻がよい所へ来てくれた。あれ見よ、牛を殺されたり。此の刀がほしかつた、サア是れからがこつ

か。おつつけ天の責を受け、恥を死後に曝し給はん。あさましきよ笑止さよ。」と、齒嚙をなして身を悶え、大聲上げてぞ嘆きける。王子なほも怒りをなし、「扱は己は仲經よな。俸の時にかはらぬ。願、生意見聞きたくなし。己とは事かはり、親仲成は忠義のもの。生き代りに代り、某に力を添へんと、日頃の詞を違へず、今また牛と生を代へ、身の油を我に與へ、天皇調伏の加勢をなすこと、古今稀なる忠臣。牛を助けば、却つて仲成が志を背くに似たり。急いで油を取るべし。」と、詞の下より早雄の侍ども、斧鉞にてえい／＼聲、枯木を切り伏せ打ち倒し、周圍には柴薪、山の如くに積み重ね、上方より松明雨霰と投げ付くる。折節谷風どう／＼、颯と吹き上げ吹き下せば、煙は空に舞ひあがり、猛火熾んの其の中に、牛は黄なる涙を流し、頭を振つて喚く聲、十萬の法螺貝を一度に吹くかとあやまたれ、山河も崩る、其の響、大炊の介は父が苦しみ、思ひやらる、胸の火は、猛火にも十倍して、大地を叩き我が身を噛み、叫べと甲斐も嵐に連れ、なほも焰立ちのほり、八億四千の毛穴より、流る、油は峯に降積む白雪の、朝日に解けて岩間水、谷に落つるもかくやらん。銅の壺にとう／＼と流れ込みし有様は、阿鼻地獄の苦しみに、勝つつべうぞ見えにける。守敏きつと見、「サア牛はくたばつたり、火を鎮めよ侍ども。早大望は成就したり。」と、大聲上げての、しれば、王子につこと打笑ひ、「オ、心地よしいさぎよし。見物したるか大炊の介、おのれ振ぢ殺すは易けれども、

聲を上げ、「よし／＼きやつに構ふな。それ火炙の用意せよ。」「承る。」と遙か梢に大綱下け、牛の四足を搦め付け、眞逆様にぞ釣り上げた。仲經見るに心消え、起き上らん、跳ね返さんと、牙を嚙んでもがけども、大磐石を押すごとく、心ばかりは早瀬川、綱代の魚のごとくなり。王子から／＼と笑ひ、「ヤアもがくまい／＼。我が足下に踏まへしもの、摩利支天がかゝつても、びくとも動かす事なし。親兄弟を害せられれば悲しむも道理。いはば畜類牛一匹に、おのれが命を代ふるか、うろたへ者。」と腕め付ければ、無念涙をはら／＼と流し、「オ、親親類を殺され、悲しむ道とは御邊も能く知つたるな。やれ其の牛は孕牛、胎内へ宿りし小牛こそ御身が家臣、悪右馬の尉仲成が魂魄。かくいふは嫡子大炊の介仲經、父が悪事を諫めかね、十歳の昔勸當受け、土民となつて數年なれば、面忘れは尤も、御邊の逆心露顯によつて、父は刃に相果てしと傳へ聞く。然るに此のほど夜なく、父仲成が魂魄夫婦の枕に立ち寄り、娑婆の悪念畜類の果を受け、汝が手籠の黄牛の胎内に宿る由、夫婦七夜の現夢の告。悲しきかなや、父仲成が刃の死も、今畜類に生まるゝも、もとは御身の逆心に組せしより起つた事。我こそ悪しみ深くとも、父は御邊の忠義の者。昔の好みを思はれば、あの牛の命を助け、悪しと思す大炊の介、炙りなりと刻みなりとも、すき次第にさいなまれよ。エ、扱情なや、悪の報いは目の前に、父が牛となつたりし、これ此の證據を見ながら、悪念とめて逆心を、翻さうとはおほさぬ

と退つて頂戴し、「コハ有り難き仕合。賤しき者の手飼の牛、天子の御用に相立つ事、冥加に叶ひ有り難し。」と、一禮述ぶるその間に、守敏つつ立ち、牛の角兩手に攔んで引伏せ、若者原に胸せすれば、手々に大繩提げく、情なくも牛の四足搦めんとする所を、「南無三寶。」と飛び掛り、先に立つたる奴原蹴倒し、蹈み退け、守敏が前にどつかと坐り、「こりや何をする捨坊主、禁裏御用の牛なるぞ。芥子程も過ちあらば、坊主頭はつてく、はり碎くが合點か。」と、せきにせいて詰め掛くる。守敏からからと笑ひ、「いやはや見事なうつけ者。大内の御用とは僞り、あれに渡らせ給ふは大海原の王子。かくいふは守敏僧都とて、御祈りの師。此の度君の御謀反によつて、嵯峨の天皇調伏の爲、此の奥山に三七日籠り祕法を修す。丑の年の丑の月の、丑の日の丑の時に、出生したる黄牛の油を取り、一萬の燈明を挑け、大威徳の法を行ひ、天子を始め、卿相雲客皆殺し、日本の地は悉く王子の御手に入ること。サア其のまゝに牛を置いて歸ればよし。意地張らば先づ一番に、己から締め殺すが、何と何と。」と詰め掛くる。又二郎大地を打つて齒嚙をなし、「エ、たばかられし無念さよ。此の牛の油にて帝を失ひ、天下國土を亂さんとや。たとへ骨は拉がれうが、身は八つざきに裂かれうが、いつかなくわたさぬ。エ、今日に限つてこの丸腰。かたはし攔み殺さん。」と、守敏を目掛け走りかゝるを、王子怒つて岩を飛び下り、小腕片手に攔んで、「えいやつ。」と打ち付け、脊骨も折れよと蹈み付くる。守敏

只今牽かねばならぬ。」といふ。「ム、それはあんまり急なことに、在所の衆何とせう。」「ハテそれが思案の入る事か。牛も成佛、そなたも果報のつき時。錢や小判の掴み取り。」「取りく藁屋の戸を開き、牽き出す牛の胎内に、宿りし父が悪業は、晴るゝ世難き樗原、牽いて都に上りけり。されば其の頃守敏僧都とて、我慢邪慾の悪僧あり。空海に法力の超えられたるを憤り、大海原の王子の師檀となり、天下を覆し、恨みを空海に報ぜん、さしも險しき北岩倉、人も通はぬ深山に、王子諸共引籠り、三七日がその間、大威徳の法をぞ行ひける。鈴の響、數珠の音、嵐に靡く護摩の煙は、黒雲棚引く白雨に、雷なんどの落つるかと、身の毛もよだつてすさまじし。多治見左衛門春國は、牛を牽かせ立ち歸る。又二郎、左衛門が袖を控へ、「昨日は内裏と仰せられしが、物すごき深山へ、此の牛の御用とは心得難し。」と尋ねれば、「エ、譯を知らぬ土民よな。長くも一天の君の御車を挽く牛、すぐに大内へは叶はず。深山にて、貴き聖七日七夜の祈りあり。今四五町も來るべし。」と、先に立つて行く程に、伐木丁々として山さらに幽なる、鳥の啼く音も嵐吹く遙かの谷へぞ分け入りける。守敏待ちかね、「ヤア多治見歸つたか、首尾はいかに。」と尋ねれば、「さん候。召し連れし男は樗原の土民又二郎。牽いたるこそ彼の牛にて候へ。」と申し上ぐれば、王子大きに悦び、「ム、聞き及びし樗原の土民、又二郎とは汝よな。無雙の牛を得させし事大慶。それく褒美取らすべし。」と、黄金千兩前に置けば、「あつ。」

れたる武士、案内もなくつと入る。又二郎見答め、「ア、御歴々の、賤しき在家へ如何なる御用ぞ。」
 と尋ねれば、「オ、不審尤もなり。さ言ふは此の村の土民又二郎な、汝が手飼に丑の年の丑の月、丑の
 日の丑の時に、生まれたる黄牛ありと傳へ聞く。買ひ求めたき望みあり。價は汝が所望次第に任すべ
 きわ。」と言ひければ、「ハア委しう御存じなされしな。仰せの如く牛一匹もつては候へども、孕牛と申
 し、殊に深き仔細あつて、賣る事はなり難し。外の牛を御詮議あり、御求め下さるべし。」といへば、
 「否々私事ならず。某は多治見左衛門春國といふ檢非違使、敕諭によつて、其の牛求めに來り
 たり。知らずは言つて聞かせん、慥かに聞け。總じて天子崩御の時、御葬禮の御車を挽く牛を位牌額
 と名付け、又日出度き行幸の御車を挽く牛を、天人牛と名づく。即ち丑の年の丑の月、丑の日の丑の
 時に生まれたる、黄牛ならずして外の牛はなり難けれど、さりとは世に稀なり。汝が牛は天人牛
 といふ事かくれなく、求め取るべしとの敕命。急いで禁裏へ差上げば、汝等一家一門とも、うかみ上
 るのみならず、牛も天子の御用に立てば、畜類の果も遁るゝ事。」と、いふを聞いて女房、夫の袖を引
 き、「あれ〜今の詞を聞かずか。こちと妻夫が出世より、あの牛が畜生の果を遁るゝとの勅諭。こ
 れは佛のひき合はせ。早うお請け申さつしやれ。」「オ、さうぢや〜。いかにも差上げ申さんが、孕
 牛と申し、懐いた牛に名残も惜しし。二三日中に私牽いて參るべし。」「いや〜明日行幸なれば、

吊とらひもせざりしに、此この程ほど夜よなく、不思議ふしぎの夢ゆめ。父ちちの仲成枕なかなりまくらに立ち、我われ大海原おほうたはらの王子わうじの謀反むほんに組くみし、敢あへなく刃やいばに身みを失うしなふ。娑婆しっぽの惡業あくごふ惡緣あくえんを引き、汝なんぢが家の孕牛はらみうしの胎内たいないに生せいを享かうくる。生うまる、子牛こうしは父ちち仲成なかなり、汝なんぢが家いえにて育そだててくれよ。人界にんがい、畜類ちくるい、生しやうは二ふたつにかはるとも、孝子かうしの汝なんぢが手てにかゝらば、苦くるしみの中なかの樂たのしみぞと、まざくしき夢ゆめの告つひ。夫婦ふうふおなじく七日ななかまで見みしに違たがはず。牛うしは孕はらむ。此この頃人ころひとの目めに、牛うしの玉たまと見えたるは、正まさしく親おやの魂たましひ。かくまで重おもき罪業ざいごふ、人々ひとびとに懺悔ざんげして弔とぶらひ受うけん志こころざし。因果いんぐわの報むくいを思おもひ遣やり、念佛ねんぶつ申まうして給たまはれ。」と、語かたりもあへすかつばと伏ふし、夫婦ふうふ諸もろ共とも泣なき叫さけぶ。在所ざいしょの者ものども手てを打うつて、「さりとは不思議ふしぎの物語ものがたり、笑止せうしともいたはしとも、挨拶あいさつすべき様やうなし。」と、皆々みなみな涙なみだを流ながしける。中なかにも與茂作よもさく、「何いづれもよう聞きいて、悪わるい心こころお持ちもちやんな。これについても、うららが父生世ていせいの時ときは博打はくち好きずき、一昨年をととしの九月くぐわつ、莊屋殿しやうやどのの日待ひまちに、骨牌打かるたうちくついで轉ころり。臨終りんじゆうはそれもましなれど、此この世よの手てみその報むくいで、若もし青馬あやうまの腹はらへ杯生なまじゆうまれては行ゆかれぬか。但たゞし釋迦しやくかになられたか。いちかばちかが知しりたい。」といへば、九郎右衛門くろゑもん噴ふき出だし、「いやはや臍へそがお茶ちやをひく。わごりよが親父おつちは、村一番下むらいちばんした拔ぬきの名人めいじん。そんな悪わるい根性こんじやうで釋迦所しやくかどころへ行ゆく事ことか。馬うまの腹はらは扱さ置き、今頃いまころは豚ぶたの腹はらへ生うまれて＊わせるであらうまで。念佛講ねんぶつこうで弔とぶらふとも敲鉦たきざねは無用むじゆうにしや。はりが強つよくば又目まためを廻まはして、地獄ぢごくの釜かまへ七しちほんくと落おちられう。笑止せうしさよ。」とぞ笑わらひける。話半はなしなかばへ表おもてより、供人ともびと數多あまた連つ

地體あの牛は隠れもない事、丑の年の丑の月、丑の日の丑の時に生まれた、大吉相の牛なりと、三ヶ
 村が集まつて、我買はう人買はうと、七兩二歩まで直上りしたを、あの和郎がついちよろり、三兩二
 歩に買ひ取り、内へ引いて歸るや否や、吹き付くる仕合。ころぶ所が錢儲け、内證には牛の寢た程、
 金もつくねて居るけな。又其の上に、牛の玉の出る孕牛繫いで、又其の子が何百兩にならうやら。
 總じて牛の玉と馬の角は結構な寶物、田地買ふ端、倉建てる端。ヤ箸の次第に氣が付いた、お箸なさ
 れ、何れも」と、汁椀、壺皿、平皿の蓋、とりん、不思議な顔付の、中にも太次兵衛膳突き出し、「こ
 りや何ぢや又二郎、在所の者なぶるか。茄子汁に豇豆の浸物、焼豆腐の煮物。鰯一疋するぬはお齋か
 非時か、眞言宗なりや念佛講でもあるまい。喰ひたい飲みたいではなけれども、在所では此の連衆、
 歴々の鼻毛をよんで遊ぶな、サアよまりよわい。幾筋ある、よんで見よ。」と、腕捲りしてかゝれば、
 夫婦は目と目を見合はせて、「それかうあらうと思つた、早う言譯さつしやれ。」といへば、夫はしくし
 くと、涙にくれて居たりしが、「オ、腹立尤も。なる程これは非時の心。恥かしき因果物語聞き届けて
 御免あれ。某が父は隠れもない、大海原の王子の家臣、悪右馬の尉仲成、親ながらも世に知れた無
 道人。我十歳の時、幼心にこれを歎き、數度の意見憎しとて、此の様に勘當受け、十餘年の今日が
 口まで、音信も絶え果てしが、聞けば父は病死とも、刃の死とも取沙汰あり。實正を知らぬ故、とひ

三界六道の中、生きとし生ける数々より、草木國土に至るまで、形あれば魂も、有明かたぶく西の岡、檉原の土民の軒、曉ごとに輝くは、星か螢か憧れ出でて、昔と今を娑婆と冥土に行き通ふ、其の魂とは人知らず。空吹く風に飄颻と、光は生けるごとくにて、消えみ消えずみゆらく、ゆらりゆらりと行く方の、光の後に尾を引いて、牛繋ぎ置く廢に入れば、見る人毎に、「こりやこの牛の玉見た、我も見た。目出度い寶」と在所中、賑ひ渡る悦びの、あたり鄰へ酒一つ、森際の與茂作、色も眞黒九郎右衛門、二人は莊屋脇ぞとて、先へ太次兵衛、千松後家、辰巳角の道雲まで、十五六人どやどやと入り集ひ、「なう又二郎。何やらわけは知らぬが、地下の若い衆が又二郎にもめさする、目出度い事があるとおしやる故、誘ひ合せて參つた。目出度いと聞けば嬉しい。さりながら構へて造作入らぬこと。何なりと魚澤山に、味噌濃汁一色でおきめさ。サア皆下に。」と擧足の、又二郎夫婦前垂掛け、「オ、たまぐのこと。馳走の仕様も知つたれど、二反一畝の下作では、鋤鋤うつても手が届かず。先づ悦んで下されわ、こちらの黄牛に牛の玉が出るとて、在所の衆が見付けて、身共にも見せらる。其の上にあの牛が孕んだ、何やかや悪うはない事。日ぐらしに話さう爲、今朝人をまはした。どれども缺けずにようこそ、サア先づろくに。」と挨拶も、角取折敷、獻立は、一汁三菜仔細顔、夫婦が心ありたけなり。地下の者ども手を打つて、「冤角わごりよは果報者。其の牛の玉はこちとも見た。

た去つた。」と、言ひければ、「いや未練ではなけれども、お年寄つた父御様の御恩深く蒙つて、明暮お側を離されず。お袋様の御臨終頼むとのお詞故、誠の親よりおいとしく、大事にかけし舅御に、何と離れて退かれうぞ。夫婦の縁を切らば切れ、下種、下女と思召し、お側にて御奉公頼み入る。」と泣きければ、はつたと睨んで、「男と添うての舅にて、退けばあかの他人なり。何のかのと言辭は、敵討が恐ろしいな。腰抜け女はなほ添はれず、來世までの離別ぞ。」と、取つて突き退け、「今まで腰抜けの女と知らで添うたるは、勝藤が色にまよひ、眼くらみと指さるゝが口惜しい。」とて、はらく降るは涙か春雨の、萎る、花世も氣を取り直し、「是れ腰抜け女に添うたりとの、夫に恥辱は與へまじ。情は情、恨みは恨み。親の敵はこの花世が討つ。」「オ、頼もしし、必ず討てよ。」「オ、討つ。」討てよ現も時の間に、夢となしたも妹背の中、今朝の比翼の朝居の牀、連理の枕忘れかね、たちかへりては涙くみ、又たち返り口を見合はせ、睨み合うても憎からぬ、中を別るゝ武夫の、夫も夫、妻も妻、思ひ切つたり、言ひ切つたり、夫婦の契り修羅の縁、同じ蓮を引換へて、刃を磨く心の玉、清き名をこそ照らしけれ。

成透垣を跳ね越え、思ひも寄らぬ後より、「勝藤やらぬ。」と斬り付くる。さしつたりとかい潛り、腕首
掴んで振ち上げ、太刀もぎ棄てて顔を眺め、「扱念の入つたる悪人かな。總領大炊の介とやらんは、幼
少より勘當とや。男子にも女子にも我が妻花世一人の子、かはゆくは悪念。翻されよ。命を助け恩賞
を申し與へん。」と言ひければ、「ヤイ現世は天輪淨王の果報を受け、未來黄金佛になるとても、一念は
ひらぶへ
翻さぬ、鈍な事ぬかすな。」と、言はせも果てず一捻り、大地へどうど打ち付け、水もたまらず首打
ち落す。片時の程の魂は、假の宿りと去りにけり。あたりも響く大音上げ、「朝敵大海原の王子一味
の張本、悪右馬の尉仲成を橘の勝藤討取つたり。」と呼ばはる聲に、さしもの王子荒肝取られ、八方
に敗軍して、行方知らず落ち失せけり。花世は夫の聲を慕ひ走り寄れば、飛びしさり、「これく侍
の女房は持つにも義あり、去るにも義あり、言はずとも合點ならん。去るといふは此の時、暇のしる
しは是れなり。」と、首投げ出し立ち出づる。袂に縋つて、「ムウこれ故の離別か。夫は親の敵なれば、
縁を切つて狙へとのお心。其の外見落しとてもなく、厭きも厭かれもなされぬの。」「ハテ見落しあれ
ば今まで待たず、常座に去る。」「ア、それなれば有り難い、離別せいで済む事。我には大炊の介仲
經といふ勘當の兄上あり。總領といひ男の役、親の敵は兄が討つ。離別に及ばぬ事。」といへば、「シテ
兄があれば、妹は敵を討たぬ法か。縦ひ此方からやらすとも、其方から取る暇。近比未練千萬、去つ

執晴らして得させん。成佛せよ。」と呼ばはる聲、仲成聞くより、「何我が君の御出陣とや、心地よし。ひとたび死したる某、たつた今蘇生仕る。病み抜いたれば足手も達者。軍のお供し、壻めを始め、殿上人も大臣も、撫斬にしてくれん。それ具足、兜、弓よ筋。」と立ちあがる。母も花世も足手にすぎり、「たつた今無常を見て、その涙も乾かぬに、日本の主の王様を失はんとの悪心。なう一度よみがへれば、も死なぬ事と思つてか。其の身の罪業許りか、妻子に當る報いの罰、不便と思ふ氣はないか。」と、泣き叫ぶを突き退け、「エ、阿房くさい。善をなしても一代、悪を作つても一代。閻魔王さへ手を措いて戻された此の仲成、一度死んだれば結句心太くなる。どうやら我が悪心に、加勢の副うたる心地にて、氣は百倍強うなつた。」と、太刀押取つて躍り出で、王子の陣にぞ加はりける。其の隙に勝藤、妻戸の陰にて身繕ひしてつと出で、「ヤアこれく、内裏へ寄せらる、までもなし。嵯峨の天皇の瀧口、御番の預り橘の武者所勝藤是れにありあうたり。宗徒の一味は舅殿、たつた今蘇生り、案内巧者の冥土の道、王子をはじめ諸軍勢の導きせよ。一日に二度三度、娑婆と冥土の上下の旅は、達者な病人、無類な悪人業人罪人。現世は牢獄、未來は墮獄。三國一の壻が手竝を受けて見よ。」と、太刀眞甲にさしかざし、一千餘騎を左右に受け、初瀬の嵐、吉野の吹雪、花を飛ばして戦ひける。利慾を貪る我利武者ども、素肌の勝藤たゞ一人に斬り立てられ、しどろになつて見えたる所に、舅の仲

らせのありければ、壻の勝藤取敢へず驅け付けて、「舅殿は病死とな。人死して目出度いとは此の事、此の人無事にて王子の謀反に組し、すは合戦といふときは、人手にはかけさせず、舅の首は此の壻が討つ所、互に本意ならぬ事。よき時分の病死、その身も我も仕合。王子の謀反の自ら鎮まつて、天下の静謐、萬民の喜び。朝敵の名を取らぬ間の病死、世間晴れて憚りなし。親子の禮儀に葬送せん、いざ暇乞の廻向を。」と、夫婦諸共香を焼き、手向くる露も涙の数珠、四百九十七生の猪甘が魂魄、その業報の因縁の廻りくくして、仲成が中有に迷ふ魂と、一つに結ぶ悪と悪、舊の體に納まりて、凡夫の目にはそれぞとも、よもや黄泉を立ち歸る。「あれく父のお顔にほつこりと色が出た、これは不思議。」と手を當てて、「なう温まりがきたわいの。」と勇めば、氣息をほつとつき、「水一つ。」と目を開く。「やれ蘇生り。夢か誠か有り難い。」と、家内喜びざゞめき渡り、「もう死んで下さるな。」と、抱き付くやら摩るやら、嬉し泣こそ道理なれ。挨拶不和の勝藤は、對面して無益と思ひ、妻戸の陰に身を忍び立ち歸らんとせし所に、大海原の王子錦の鎧直垂、一味の武夫一千餘騎、華やかに出立たせ、門外につつと立ち、「仲成終に病死とや、後家、娘の力落しさこそく。頼み切つたる仲成、我も兩腕打ち落されたる如くなり。何時の時をか期すべき。仲成が弔ひ軍、直に内裏へ押寄せ、一番に武者所と、廣言吐く勝藤が首取つて、公家ばらを斬り散らし、天皇を捕つて流し者。我十善の位に即き、冥途の安

に籠め置かれし、無惡善の額を引き出せしより事顯はれ、味方の難儀は堦めがわざ。これが舅へ孝行かヤイ。己が兄に大炊の介仲經といふ奴ありしが、五常だてを耳にはさみ、身の慾知らぬうつけ者。十歳の時、ちつさいぎまで、親に意見が面憎く、勘當して遂ひ失ひ、己を育てて堦を取り、男子持つたと樂しみしに、舅に敵するは親に敵たふ不孝者。ア、腹が立つわい憎いわい、エ、息せい張つて胸苦し。仲成が最期只今、臨終に物寂しく、もし善心も起つて、極樂の入口を覗かんかと按ぜしに、瞋恚を燃して、直に地獄へたんだ走り。せめてもうぬらが孝行、ヤレ妻の女房、下人ども、我牽しくなるとても、經もいや追善いや。一味の軍兵に力を付け、大海原の王子を帝位に即け奉り、空海坊と堦勝藤が首討つて、墓の前に供へなば、昔の下にも悦びて、地獄の呵責も忘るべし。」と、刀抜いて逆手に取り、牀にがはと突き立て、からくくと打笑ひ、其の儘氣息は絶えてけり。花世も母も「はつ。」と許り、死骸に褥と抱き付き、前後不覺に泣きけるが、母は泣くく聲を上げ「善人も惡人も百年生きぬ體を持ち、今死ぬる今までも、惡といふ惡作りつめ、未來の程がいとしい。」と嘆けば、娘は「これ母様うろたへてか、死人に意見があることか。私や惡人でも業人でも、何時までも置きましたい、呼び助けて下され。父上なう、父様なう仲成殿。」と、呼べどその甲斐なき骸は、次第々々に冷えきりて、色かはれども、魂は我が屋を去らず、永く輪廻に迷ふとは、人知らぬこそ哀れなれ。かくと知

勝藤殿は情も仁義もある侍。世間を見れば舅に恨みありとては、十人が九人女房去る。此の勝藤はさうでない。總じて女が夫に添へば、誠の親は他人にて、夫の親を親とする、是れ烈女の道なれば、その方より暇取らば取れ。たとへ舅仲成と刺しちがへて死するとも、其方とは二世まで縁切らぬと、なほも隔てぬ親しみ。かうした届いた夫の心、有様は残り多く離れ難さも第一で、退き去りせぬを不孝者と、末期の湯水取ることも、かなはぬ程の身の因果。深き望みを申すにこそ、花世と許り御最期の御詞一つ下され、なうコレ、憎い子になす慈悲が、誠の親の御慈悲」と、あひの妻戸をうち叩き、縋り焦れて嘆きける。仲成耳をそばだて、「ヤア次の間でとこほえるは女郎めか。きやつら夫婦は病の神、あれ引きすり出せ。いで臨終の善根に、掴み出して取らせん。」と、起き上らんくとする所に、母縋り付き、「なう花世、お氣に障る。先づ歸りや、御臨終も程あるまい。此の世の孝行思ひ切り、跡の弔ひ廻向して、孝行盡しや。」とありければ、「母様、悲しいこと許り。弔ひは弔ひ、位牌に詞はかされぬ。二度と見られぬ親の顔、今一度見たい。」と走り入り、父にかつぱと抱き付き、聲を上げて泣きければ、むくくと起きて小腕取り、妻戸にどうど打ち付け、齒をがたくと身を顛はし、「エ、業曝しの不孝者。今年五十八まで、思ひ立つ事翻さぬ此の仲成、大海原の王子に御謀反勧め、王位を覆さんと企つるに、己が夫が意見面、一味せぬさへ奇怪なるに、嵯峨の天皇調伏のため、賀茂の社

如何なる者の體をもかつて出生し、五百生滿つる時、寶篋印陀羅尼神呪を修行せば、人天の善果をうくる必ず疑ふ事なかれ。」と、幽靈の額に外五鈷智拳印の祕印を結びかけ給へば、「あら有り難や。」といふ聲許り、翁は消えて金色に文字残つて、苦むせる五輪の石となりける。空より出でて火、風、空、地、水の泡のうたかたの、假に結びつ假に消え、縁にふれつゝ様々に、生まれ出づるも世のなや、千差萬別の人心。大海原の王子の家臣、悪右馬の尉仲成といふ老武者あり。橘の勝藤が舅なれども、婿には引代へ、途轍もなき無法者。今度王子の御謀反、婿勝藤は仁義の勇者、諫言を加ふれども、舅は主君の悪心に覆輪かけたたる鐵鐔の、無地に道理を辨へず、挨拶不和になりけるが、生老病死は人界の四苦、鬼をも拉ぐ仲成難病に冒され心熱炙るが如く、身體痛み苦しむ事、白虎骨を咬み拉ぐ歴節風ともいひつべく、妻の女房、家内の男女、味方の士卒心を碎き、藥療、針、灸手を盡し、看病更に驗なく、今日を限りと見えにける。娘花世も夫につれ、父が對面許さねば、夜詰め日詰めも、勝手から覘けば、顔も寝れ果て、目はぎろくゝと頬骨荒れ、色も黒みし悪相の「ヤレ苦しや骨痛や、あら熱や。」と身を悶え、呻き叫ぶ苦痛の聲。花世今はこらへかね、「なう父様。他人の上さへ、病む目より見る目とは申さぬか。現在親の死病、覘いて悲しむ子の心、可愛とも思うて下されぬ。我が夫勝藤殿に恨みあるは、それこそ親の、くわいけん取りかやしたがよいわいの。夫を譽むるでなければども、

此の世を去つて四百年、三惡道を行き廻る。我世にありし昔は、大和國猪甘の連とて、朝家に仕へし者なるが、其の時の帝顯宗天皇、大初瀬の惡王子に襲はれ、御流浪ありし時、勿體なくも僅かの御糧を盗み剥ぎ取り參らせ、憂き目を見せ奉つたる科によつて、御卽位の後、首を此の所に刎ねられ、兩足兩手を五畿内五所に切りさばかれ、直に地獄に墮落して、今日まで無數の責を受くる。今の世には大海原の王子の家臣、惡右馬の尉仲成と申す者、我が末孫にて候へども、四百年前の先祖は名も知らず、年忌命日も弔はず、無緣法界の廻向さへ、罪深ければ受けられず、苦患に苦患を増す許り。あはれ大師の御慈悲に、高野山に戒名立て、罪を助けおはしませ。」と、又涙にぞ沈みける。大師暫く御目を塞ぎ、「淺ましや、汝は四百年以前の、人間一生と思ふかや。おことが先生は億萬劫の過去の昔、拘留孫佛の衆生なりしが、大乘般若祕密經を誹謗したる罪によつて、五百生六道に沈み、こゝに生まれかしくに死し、或時は人と生まれ、又或時は鳥類、畜類、魚類とも生まれ、四百九十六度目が、彼の四百年以前の汝、猪甘の連にてありしなり。これより後に今四度、若しは善緣によつては善人と生まれ、又惡緣に引かれては、惡人の魂とも生を受け、或は牛とも馬とも生き替り死にかはり、五百生の都合生死の業を果さねば、廻向も通ぜず、弔ひ却つて無間の業。佛說何ぞ虚妄ならん。さりながら、娑婆を離れて四百年、生まれ出づべき縁切れたり。いで空海が四大五蘊の結緣して得さすべし。

士だてするとも、搦み殺して棄てんす。」と、足手を張つて働けども、光明骨を搦むが如く、眼を見出し拳を握り、踏み立つれば踏み挫き、「エ、無念口惜し。」と、心許りは上見ぬ驚、綱に掛りし有様に、はふく館へ歸らる。即心秘密ぞ有り難き。炎光雲居にをさまれば、何時の間にかは空海は、もとの如く御階の下に、黙然として坐し給ふ。天皇褥を下りさせ給ひ、「誠の大日如来ぞ。」と、掌を合はせ給ひければ、諸卿各合掌し、隨喜の思ひ淺からず。即ち弘法大師と直宣旨、「朱雀門の東、鴻臚館を東寺と名付け、眞言の靈場とし、國土安穩の御祈念あるべし。」と、山鳩色の御衣、手づから下し賜はりし。袈裟は九條の名にし負ふ、東寺の塔の彌高き、御法の威徳や有り難き。されば先佛既に去り、後佛は未だ世に出でず中間有爲の夢さむる、其の曉と説き置きし、法の教へぞ頼もしき。弘法大師は洛陽靜謐の御祈り、都の廻りを只一人、行道の月澄み渡る鈴の聲、蟲の聲々うちしきる、車大路の藪陰より、「なうく和上、物申さん。」と呼び掛くる。誰なるらんと見給へば、翁さびたる麻衣、袖も朽木の杖を立て、「此の度開基し給ふ高野山は、即身即佛の靈場、彌勒出世の値遇とかや。此の尉も參詣は望みなれども、嚙な微妙の橋柱、重き罪障覺束なし。大師慈愍を垂れ、我を誘ひたび給へ。」と、思入りたる氣色なり。大師や、觀念あり、「いやく詞に僞りあり。おことは此の世の者ならず、娑婆を去つたる幽靈よ。懺悔すべし。」と宣へば、尉は暫く濟々と泣いて、「懺悔申すも轉てやな。

善の字に又十二畫、三字合はせて三十五畫、三十五本の大釘にて打つたる體。當年聖壽三十五歳にな
らせ給ふ。御年の數引結んで、嵯峨の天皇なくばよからんと、賀茂の社に祈誓し、玉體に釘打つて、
御命を失ふ調伏の隱語。此の頃の天變このしるし。逆臣征罰あらずんば、天晴天下の御大事。」と、見
通す如く述べ給ふ。天皇を始め奉り、堂上堂下舌をまき、恐れ給ふぞ道理なる。大海原の王子すつく
と立ち、「ヤア空海。かくむづかしき文字の裁き、舍利弗、文殊の智慧にても、卽座にやはか解くべき
か。和僧が辯舌立板に水、さら／＼さつと判じたるは曲もの。これ皆己が作よな。入唐とやら渡天と
やら、唐土へ渡り、異國の王に頼まれ、日本の忠臣共を逆臣と難をつけ、死罪流罪に失ひ、天皇を亡
ほし、此の日の本を毛唐人のやつことなさん企て。逆臣とはづくにふ己が事。大海原が手にかけ、朝
敵坊主締め殺さん。」と飛びかゝれば、空海の御姿はつと消えて、久方の日輪の中に、安祥と阿字觀に
住し見え給ふ。御聲はなほ近々と、「本有毗盧の法身、大日覺王如來の加護、金剛不壞の御手を伸べ、
日輪の中へ抱き取られし空海、太刀も鉾も及ぶべきか。誰ぞとさして言はずとも、逆臣はあらはるべ
し。懺悔々々。」と教化ある、聲の中より光明一筋、焰の如く、王子の頭を照らせしが、五體にこた
へて、熱きこと熱鐵に焼き付けらるゝ如くなり。されども王子齒をくひしばり、ぢだんだ蹈み、「エ、
空海坊よりにつくい奴は勝藤め。え知れもないことを見付け出し、時の騷動己がわざ。武者所とて武

王位を傾け犯すべき天の告あなかしこ。御慎み。」とぞ奏せらる。詞もいまだ終らぬに、瀧口の武者所
 たちまのよんぐわんかつふら
 橘判官勝藤、旅立ちにて参内し、無悪善といふ三字、大筆にて書きたる額御階に差上げ、「某
 本國江州に下り、只今歸京の序、賀茂の明神へ社參致せしに、何者の業にや、御寶殿に打付たり、
 願主の名字無ければ繪馬にもあらず。神號ならねば額とも見えず。流石に賀茂は王城の鎮守、事を好
 む國賊の、世上を諷する仕業と存じ、釘こじはなし、叡覽に供へ候。」と言上すれば、卿相雲客「け
 に珍らしき熟字や。」と、各不審晴れやらず。大海原の王子「えせ笑ひ、「ヤア何れも學問なき故に、さ
 してもない事に不審立つ。無悪善の文字に點を付ければ悪無うして善と讀む。御代政正しく、悪
 き事なく善なりと、帝を祝ひ譽めまゐらせたる判じ物。それく公家達、御賀の御酒を勧められよ。」
 と、顔色とけてぞ見えにける。天皇御簾をか、けさせ、「如何に空海。王子の判斷さることなれども、
 なほも深き義理やある。考へ申せ。」と宣旨あり。空海謹んで、「さん候。世俗に文字謎判じ物など申
 せども、もと隠語とも造語とも申す。文字にて謎を作ること、史記の滑稽傳、左傳、漢書を始め、唐
 土の書にまゝあること。凡そ此の無悪善の三字は、御代を呪詛し、君調伏の隠し詞と考へ候。其の
 故は、我が君、北嵯峨に離宮を經營ましくして、嵯峨の天皇と稱し奉る。然るに悪の字をさがと讀
 む訓あり。これにて讀めば、さが無くば善からんとの隠し詞、扱無の字に十二畫、悪の字に十一畫、

嵯峨天皇甘露雨

第一

十萬里程多少難、五天到る日頭白かるべしと、渡天の人を嘆美せし、月は落つる長安半夜の鐘、遠く日本に響き來て、入唐求法の眞言祕密、君が祈りの御修法の護摩、金胎二器の加持香水、王化に潤ふ秋津民、つきぬ五つのたなつ物、をさまる千代のふる道や、嵯峨の天皇のしろしめす、安國そ殊に平らけき。弘仁格式の掟、聖代の古風を仰ぎ、佛法に御歸依あり。慈悲を叡慮にまつりごち給へば、士農工商朝野遠近靡かぬ方もなかりしが、太上天皇の第二の宮、大海原の王子とて生年二十三歳、人我が相面にあらはれ、董卓が眼、祿山が髭、放逸無慙の驕り人、我當今の從弟なれば、王位を踐まんに何條事かあるべき」と、屢大内に徘徊し、三公の上に威を振ひ、逆心の萌あらはなり。こゝに大法師空海あわたゞしく参内あり。「抑愚僧先年入唐、渡天、文殊の淨土に到り、眞言祕密の奥藏を究め、大同年中に歸朝致せし其の口より、玉體安全鎮護國家の御祈念、怠らず候所に、此の頃打續き朝日夕日に不思議の光現じ、白虹日を貫く事な、めならず。空海倩考ふるに、都の内に逆臣起り、

に乗りかゝり、とゞめの劔さし通し、悦び勇み立つ所に、齋藤左衛門越中の次郎兵衛、「小松殿より歸參の奉書、本領安堵の御朱印。」と、聲を上げ扇を上げ、招きよせて頂戴す。夫婦兄弟親子の奇縁、忠孝の徳和歌の徳、神の威徳や神かぐら、太鼓はてんくから辛崎の、松は萬代横笛の、竹は千歳の若縁、さか行く家こそめでたけれ。

らみしか。左京之進義次、お局もかくまへたり。長く悪業さらさんより、腹をきれ。」と呼ばはつて、
各あらはれ出で給へば、「エ、たばかられし無念やな。たとへこの湖千尋萬尋深くとも、渡りつきて
舳先に取りつき、ひつくりかへしてくれんす。」と、裾ねぢからけ腕まくり、身づくろひする所を、瀧
口横笛遙かに見つけ、瀧口いつさんに驅けつけ、後よりとあしをかいて、眞逆様にどうど伏せ、背骨
にどつかと乗りか、れば、横笛はあたまをはり、足を抓つて責めさいなむ。「エ、小冠者めに組みしか
れ、一生の不覺取つたり。」と、手足をもがくぞ心地よき。義次聲をかけ、「殺すなく。上御慈悲にて
助けおかせ給ふを、我々殺すは私なり。同類を待ち受け、討つて捨てよ。」と、舟さしよせとびあが
り、手足一つに搦めつけ、口にねぢわらおし込みく、手拭にてぐるくまき、乗物に取つて投げ入
れ、「サア大悪の御本社をしめたれば、末社々々は今のま。」と、社の陰にぞ忍び寄る。程なく無藏源九
郎、大息ついて馳せ歸り、「旦那も見えずさんぐの仕合。先づこの婆めが不吉者、しまうてのけん。」
と、乗物の兩方に立ち別れ、簾越に刀に突込み、「えいくくく。」と思ふ様につき通しさし通し、金が
なくとも何ぞはあらう、懐さがせ。」と引きすり出し、朱になつたる死骸を見れば、南無三寶師高な
り。「無藏ぬかるな。瀧口か義次か、こゝらにをるは極まつたぞ。油断するな。」といふ所へ、「オ、よい
すまりやう。左京之進義次齋藤瀧口是れにあり。」と弓手右手より切り掛けく、打ち伏せく、二人が二人
推量。

面倒めんどうな。」と、乗物のりものの戸とを引ひつたくれば、思おもひもよらぬ刈藻かりもの前まへ、「ア、はつかしい師高もろたか様。」と、しをしをとして出いでければ、さすがの師高もろたかよつとして、「これはどうちや。」とばかりなり。「今更いまさら悔くやんでかへらねども、一ひととせ嬉うれしいお詞ことばを、無下むげにしたる人罰ひとばちにて、左京さきやうめに捨すてられ、あまつさへ落氣りんきするがにくいとて、この湖みづうみへ沈しづめにかげんと申まうせしを、漸やうやう逃にけてせん方かたなく、あき乗物のりものを幸さいひひに、前後ぜんごわかすにこの通とほり、どうぞ昔むかしのお心こころが、半分はんぶん残のこつてあれかし。」と、おもはゆけにぞ仕しかけける。「扱さては姉あなめは逃にけをつたか、姉千あねせん人ともかへはせぬ。昔むかしの心半分こころはんぶんとはつらい仰おほせ。その時ときより百倍ひゃいまし、身みの上うへ萬端ばんたん予よが請うけ込み、少すこしひねてしんめうくれ、女房にようぼうふりがあがつて、いとゞ思おもひはますほの薄すさき、殺ころしくされ。」と抱いだき付つく。「あれ人ひとが見みるわいの。あの舟借ふねかつて沖中おきなかで、人目ひとめ厭いとはずしつほつてはなんとあろ。」「びやくらい女房にようぼうがあがれば智慧ちゑもあがる。これ船頭せんとう、最前さいぜんは捨舟すてぶねかとおもひしに、その方ほうが舟ふねよな。石山いしやままで貸かして乗のせまいか。」「オ、ちよつと見るより戀こひと見たみ。船頭せんとうは戀こひの渡守わたしもり、運賃うんちんもかまはぬ。戀こひにこがる、浮舟うきふね、サア召めせく。」といひければ、「これこそほんの渡わたりに舟ふね。」とのらんとするを、「是これく岸きしが高い、危あぶないく。一人ひとりづ、女中ぢゆうぢゆうからサアござれ。」と、刈藻かりもを抱いだいてどうど乗のせ、さを取りとりなほし、「えいく、」聲こゑ、「これはく。」といふうちに、三反さんだんばかりさし出いだす。師高もろたか大きに腹はらを立たて、「人買ひとかひ船ふねか盗人ぬすびとめ。」と、淺瀬あさせを尋たづねかけ廻まはる。義次よしつぐ蓑笠ふかき取とつて捨すて、舟縁ふねべりにつつ立たち、「天罰てんばつに眼まなこ

とふりかへり、「あの乗物の内さうな。」「オ、こ、ちや／＼。刈藻殿なつかしや、これへ／＼。」と呼ぶ
聲に、したがひ立ちより戸を明けて、「ヤアお局様か、この姿は何事ぞ。淺ましやおいとしや。」と、抱
きおろして繩を解き、たゞ泣くより外のことぞなき。戸無瀬やう／＼涙をおさへ、「横笛瀧口はいづく
にぞ。上よりそもじ達の行方を尋ね召しかへせと、神々へ御代參の折から、弟の悪人め、御扶持を
はなされ盜賊となり、斯様に搦め置いたるが、おつつけ是れへ來るべし、恐ろしや／＼、いざ歸らぬ
そのさきに、一まづ都へ同道せん、早う／＼。」とせき給へば、義次打笑ひ、「我々參りあふからは、何
事か有るべき。瀧口横笛もおつつけ、參詣致す筈、都へのほるは四人一所、暫く是れに待ち給へ。も
し師高が立ちかへらば、御身乗物に入りかはり、左京之進に捨てられしと辯舌を以てたらしこみ、あ
の舟へつれてのれ。我船頭のふりをして、すんどよい思案あり。」といへば、刈藻心得て、「高をさへの
みこめば、その上は時の才覺、手つがひようし給へ。」と、乗物に入りければ、「オ、ぬかりはせぬ。」と
龜若をかき抱き、戸無瀬の局諸共に、舟引きよせて打ちのり／＼、舟底に二人をかくし、上に苦を打
ちおほひ、その身は蓑笠ふか／＼と、空ねぶりしてゐたりけり。程なく師高大汗になつて走り歸り、
乗物叩いて、「是れ姉ぢや人、大津の宿でもしるしがなうては渡さぬ筈。晝中にどや／＼と押入もなる
まい。金銀衣服わたす様に、しるしを渡すかサアどうぢや／＼。」と、いへどもさらに返答なし。「エイ

皆ちりふにぞ逃げにける。戸無瀬、「わつ」と聲を上げ、「何者かと思ひしに弟の畜生めか。お主には御苦勞かけ、多くの人をそこなひ、すでに落ちるその首が、誰がかけで胴に付いて有る。この姉が蔭といふも、中宮様の御慈悲。御恩報じ罪ほろほし、出家沙門ともなりはせず、その態になつてもまだ合點がいかぬか。地獄の釜の釜焦め。」と、はがみをなして泣きたまへば、「コレその合點がいくほどなれば、このざまにはならぬ。姉弟の情に命は助けた。おのれが身代知つてゐる。五兩や三兩は懐にも有る筈。サア出せ、出さねば殺す。」とねぢふする。「ヤイさもし根性な。おのれが氣に引きあつて、金出させねば殺すとは、縦へ千兩萬兩でも、命にかへて惜しまうか、中宮御所の局ともいはる、身が、懐に金銀をたくはへて何にせう。殺さば殺せ。」と泣き給へば、「ム、これはかう、懐には有るまい、大津の宿に有るはず。取つてくるまで動くな。」と、用意の早繩取り出し、踏みつけ、縛り上げ、乗物に取つて打込み、「サア來い兩人。七日逗留の用意なれば、金銀はしつほり。扱は葛籠挾箱、著換から夜のもの、見事な事。」とかけ出す、身の行末ぞ恐ろしき。左京之進義次は、夫婦の中に子をそだて、世に不足はなけれども、今ひとたび都に出で、主君の恩を報ぜずば、人たる道にあらずとて、親子三人日參の、志賀幸崎の大明神、松の名におふ小松殿、をかむ心と頭をたれ、祈る姿ぞ殊勝なる。かたはらより誰とはしらず、「なう刈藻殿義次様。」と、呼ぶ聲頼りにきこえたり。「不思議や。」

御代參の仰せをかうぶり、大津の町に宿をとり、山王と辛崎へ、七日詣の乗物に、供人少々召し具して、辨當小筒さゝ波や、志賀辛崎の一つ松、木陰に乗物たてにけり。局あたりを見廻し、「ハアいつも禰宜様、三太夫は見えぬか、尋ねて見よ。」とありければ、無藏心得、「いや私即ち三太夫が親。お神樂でも十二燈でも、仰せ付けられ。」と出でければ、「扱々三太夫は、もはや六十の上とも見える。その親には若いなう。」「いや〜三太夫は親で、その子の二太夫と申す者。」「ム、ウ三太夫の息子が、これこゝへ〜。」と招きよせ、「みづからは忝くも都中宮様の御代參。三太夫の話あつたかしらねども、横笛刈藻といふ女中、戀故流浪ありし事、御不便に思召し、この志賀のほとりにその男、左京瀧口といふ人一緒にある由お耳に立ち、「尋ね出し参れ。」との仰せにて、山王様とこの神様に願をかけ、大津の町に宿を取り、七日參の今日五日目。もし左様の人聞き及びもない事か。行方の知れるその祈念ひとへに頼む。」と、神前を一心不亂に禮拜ある。師高編笠傾け、參詣のふりにて後に立つて聞きすまし、飛び掛つて局のもと首ひつゝ、かみ、仰向けにひつかへす。「なう悲しや何者ぢや。」と、「わつ。」とさけばば若黨六尺、「盗人め逃すな。」と、ばら〜と取りまはせば、「ヤア寄るまい〜うす蟲めら。あれ撲ち伏せて引剥け。」「心得たり。」と源九郎、舟よりあがつて切つてかゝれば、無藏も抜いてひらめかす。此の勢ひに恐れをなし、いふにかひなき若黨中間、「晝強盗よ追剥よ。出あへ〜。」を力にて、

君の御恩の有りがたさ。」と、各一度に手をつきて、都の方を禮せらる。主君は親なり佛なり。かりそめながらしばしが程も、身を墨染の衣の恩、導き給ふ御身は釋迦、むかへあひたる我等は彌陀、願ふ都は西の空、かへり入るべきつき弓の、引矢の家督子寶と、育てて時をぞ待ちにける。

第五

勸善懲惡は國政の始めとかや。加賀の郡司師高、惡事讒言あらはれ、死罪に行はるべかりしを、姉戸無瀬の局が縁といひ、慈悲を表の政、命ばかりを助けられ、帝都追放せられしかば、すでに朝夕にせまり、一とせ舟岡山にて害せられし、岩村源五が一族岩村源九郎、鎌須の無藏、彼等をかたらひ、路頭にさまよひ、或は驅りはとのかひ、追剝押入ごまのはひの強請取り、その日くくの氣轉の身過、これよき事と思ひ込み、見えぬ我が身の志賀の浦、辛崎邊に徘徊す。師高二人を木陰に招き、「今日は申の日、山王まゐりも有るべし。あれに捨舟あり。源九郎はあの舟に乗つて、船頭になり人をのせて、沖中で剝いでとれ。明神の拜殿に、禰宜の烏帽子装束あり。無藏はあれを著て社人にばけて、初穂賽錢十二燈をしてやれ。我は道にぶらついて、うつかりづらの旅人の、腰の廻り懐、念がけるとこつちの物。サアめんく油斷すな。」と、うなづきあうてぞ別れける。戸無瀬の局は中宮の、御願

に落ちけるか、なんの罰ぞ報いぞや。法體の父に還俗させ、常精進をおとしたる、佛の咎めましまさば、我が又この五年、發心出家の功德を捨てさせ給ふかや、情なや恨めしや。やれ横笛、瀧口がかはゆくば、たつた一言我が夫と、言うてくれよ。」と許りにて、空しき死骸を抱きしめく、聲も惜しまず歎きしは、目もあてられずいたはしし。義次夫婦はかきくれて、身にもかへんと歎きしが、「あまり本意なき最期なり。この上の念はらし、焚火にあてて、五體を暖め見るべし。」と、山柴くゆらせ額をおさへ手足をなで、様々看病いたはれども、さらに驗はなかりけり。刈藻は取りわけ、幼きより中宮の御側にて、共にそだちし傍輩の、過ぎし昔を思ひつけ、せきくる涙のひまよりも、守袋をひらき、「是れは藥王香と申す名香、唐土の帝より、後白河の法皇様へ參らせられ、中宮様へ傳はり、三國無雙の寶なるを、横笛とみづからに、二世までも主従のしるしなりとて、中宮様よりいたゞき、この人の守にも有るべけれど、みづからが二世を伴ふ約束の燒香、中宮様のお志。」と、おし戴きて焚くとひとしく、匂ひ家内に薰じ渡り、横笛が肌あたゝまり、ほつと息つき目を開き、「なう瀧口様か。」といふ聲に、人々驚き、「ヤアよみがへり。」と悦びの、皆よみがへりし心地にて、夫婦々々がすがりあひ、つらさと今の嬉しさと、泣くも笑ふも道理なる。「只今息も絶えはてて、夢ともわかぬその中に、名香の薰して、中宮様の御聲にて、横笛々々と召さるゝとおもふより、二度此の世に立ちかへる。主

上に降り埋み、夜はしけくと更け渡り、打拂ふ雪は幣とちり、袖のつら、はがらくと、神樂の鈴
 に異ならず。遙か向うに幼聲、「なうく旅人、主は是れへ。」と呼ばはる中、二人づれにて立歸る。「宿
 借りたいとは此方か。」「いかにも我等。主殿とは、ヤア灌口か。」「なんと義次。是れはく不思議の
 對面。先づく大事の預り物、是れこそ御邊が胎内にて別れし子よ。なう刈藻殿。」と呼ばはれば、夢
 かとばかり走り出で、「是れぞ我が子よ。」「父なるか。」と、すがりつけば抱き上げ、顔を見合はせ手を
 取りかはし、親子三人聲を上げ、悦び泣くこそ道理なれ。「これ程縁のあふものか。いで義次が土産に
 は、是れ横笛を作うたり。」「それは深切、朋友の誠あらはれし。是れ横笛々々。」と、ゆりおこせども
 音もせず。雪打拂ひ抱きおこせば、身もすくみて息絶えたり。人々あわて立ち騒ぎ、くひつめたる齒
 をこじ明け、藥さまざま吹き入れても、脈の玉の緒切れはてて、この世の縁は絶えにけり。灌口は前
 後にくれ、膝に抱き上げ我が身の肌につけ、「さてもく淺ましや。如何なる宿世の悪縁にて、互
 に思ひそめけるぞ。我は彼故身を苦しめ、彼は我故憂きめに逢ひ、せめて一日半時も、夫よ妻よと世
 間はれ、一家にすまひし夜半もなく、五年此の方在所も知らず、一生物を思ひつめ、一生人目を忍び
 つめ、今宵といふ今宵、わが夫の門とも知らず迷ひ來て、詞もかはさず不便にも、内に焚火のまさま
 ざと、あるを見ながら凍え死したるよな。餓鬼は水を火と見るとや。御身は又火を見て、八寒地獄

きな慈悲になる事。その中あるじのお歸りならば、我々言譯いたすべし。是非々々頼み奉る。「いやなんほでもなりませぬ。」然らばその湯を一つお振舞に預りたし。「いや／＼これは湯ではない、これは藥。一番煎じがまだあがらぬ。」扱はこれにも御病人あるかや、御病人とはどなたかは。「いひければ、されば我が母様久しい御煩ひ、あの障子の中に、夜も晝も寢てばかり。朝晩のまゝも、皆御坊様の手わざ。今宵もそこな茨川まで、藥取りに。」といひければ、「然れば主の御留守でも、お袋があるからは、この通り申して、平に一夜の御無心が申したし。」「いや／＼あの母様を大事にかけ、人が連れていなかとて、『留守の間は誰がきても入れるな。』とのいひつけ。それ故ならぬ。」といふ所に、奥より女の聲細く、「なう龜若、旅のお方の宿かりたいとや。この冷えるにおいとしや、その中主もお歸りならん、先づ呼び入れよ。」とありけれども、童心の一筋に、「いや／＼たとへ見知つた人なりとも、『留守の間は門明けな。』とのいひつけ。つい呼んで參らん。」と、壁にかけたる竹笠を、取つて被くもいたいけに、締緒結ぶもしどけなく、宵よりつもる大雪に、姿は半ば隠されて、笠の歩むが如くなり。「ム、主は出家と見えたれば、妻をかくすも尤もく。子は弟子とがなひなすらん。この間にそつと内に入り、横笛を先づ火にあて、我も寒氣を凌がうか。いや／＼主が歸つて不興せば、一夜の宿を借りそこなふ。まさつとの堪忍。」と、なやみふしたる横笛に、二人の笠をうちきせて、掩ふが

もりし雪ゆきに息いきもきれ目めもくらみ、明日あすまで生いきんと思おもはれず。お情なさけには念ねん佛ぶつす、め、未み來らいを夫つまの瀧たき口ぐちと、ひとつ蓮はらすに往わう生じやうさせてたび給たまへ。」と、はやたえぐの息いきづかひ、かつぱと伏ふして泣なき給たまふ。同じおなじ思おもひの義よし次つぎも、共ともに心こころは亂みだるれど、病びやう者じやに氣きをつけんと聲こゑをあらかけ、「エ、曲きよくもなき横よこ笛ふえ殿どの。刈かる藻もが事ことをも思おもひやりたまふ程ほどならば、など心こころを取とりなほし、雪ゆき氷こほりはおろか、火ひの中なかにも分わけ入いつて、瀧たき口ぐちにめぐりあひ、三人さんじん一いつ緒しよに刈かる藻もが行ゆく方へ、尋たづねてくれんと思おもふ心こころはないかひの、エ、いひがひなし。」とひつ立たつれば、今いまを限かぎりの横よこ笛ふえも、「ア、あやまつたり。我われながら心こころ弱よわし。」とゆふ闇やみの、さきはそことも白しろ妙たへの、雪ゆきの光ひかりをしるべにて、足あしに任まかせて 三さん重じゆう人じん里りは、まだ遙はるかなる一ひとつ屋やの、雪ゆきにふすぶる焚たき火びの影かげ、幽かすかに見みゆればたどりつき、内うちをのぞけば來らい迎げうの三さん尊そん、燈とう明みやう細こくねぶたけに、五ご六ろく歳さいなる童わらんべの、柴しば折をりくぶる圍いろり爐ろ裏りには、湯ゆのにえたつも羨うらやましく、心こころまでこそ凍こほりけれ。これぞ寶ほう所じよの宿やどりと思おもひ、「ちと頼たのみませう、頼たのませう。」といひければ、童わらんべ伸あがび上たり、「誰たれぢや、何なに者ものぢや。」「ア、苦くるしからず。今こゝ宵ひの雪ゆきに道みち踏かみ迷まよひし旅たびの者もの、連つれとても只ただ兩りやう人にん。その片かた隅すみに夜よ明あけまで、休やすませて下くだされかし、頼たのみまする。」といひければ、「易やすいことなれど、こゝの亭てい主しゆの御ご坊ぼく様さまのお留る守す。」必かならず門かどを明あけるな。」とのいひつけ。なりませぬ。」とぞしをらしし。「オ、いづかたも川かう心しん時とき、御ご尤もつともなれども、つれと申まうすは女をんななり。殊ことに煩わづらうてるる者もの、盜ぬすみなどいたす様やうな者ものでなし。おとなにいふ様やうに不ふ調てう法はふな事ことながら、大おほ

る方より凍りきて、道は劔を踏むごとく、比叡の根風ばうくと、横ぎる風に横笛は、この頃いたはる身のつかれ、頼むは義次たゞ一人、頼まるゝ身も只一人、藥あたへん手だてもなく、「これ病氣には氣遣ひない、追付瀧口に逢はせう。」と、詞を香婆とも扁鵲とも、力をつけていふ聲も、「ア、忝し。」といふ息も、共に嵐の吹きとちて、口もこゞえし雪の暮、あゆみかねたるばかりなり。道理々々。せめて二三日宿を取り、雪の晴間養生と存すれども、時分がら師走の空、ひとり坊主ひとり女、一夜を貸す人もなく、百日許り野山のおきふし、幼きより柔かに御所そだち、思ひやりていたはしや。「半道ほど行くさきは志賀の里、家さへ見たらば泣きくどいても、今宵はあかさせ參らせん。歩みたまへ。」とひつ立つれば、横笛も行かんとするに足すくみ、たじくよろくと、どうどふして泣きけるが、「扱もくゝ忝や。御身の上にも尋ぬる人、憂き苦の積りし御身にて、年月の御介抱、達者な身でも有る事か、死に掛つてゐる者を、不承な顔も見せ給はず、他國三界この雪に、御身にかけてのいたはりは、先の世の親か兄弟か、たゞの御縁と思はれず。御身様とは縁あつて、二世とかけたる瀧口様、かくまでめぐりあはざるは、ア、あやにくの世の中や。中宮様の勿體ない、御身にかへての御あはれみ、冥加につきたる天罰かや。我が身のうさにつまされて、思ひやればいたはしや、刈藻殿は懷妊、それよりは早五年、御身様の物案じ、刈藻殿の心根、思へばこれも病の一つ。我が身の上人の上、つ

れ身を投けるわ。ありやく／＼投ひるわ／＼。」と、呼ばはる聲に主の僧、あわてさわぎて走り出で、錠
 ねぢ切つて抱きとむれば、「なう瀧口様か。」と抱きつく。「エ、是れ／＼瀧口ではないわいの。」「いやさ
 うはいはせぬ。」と、なほ取り付くを引き放し、「ヤア横笛殿か。」「左京様か、あら悲しやうらめしや。
 中宮様の御情にて、うき命たすかりしも、瀧口殿に今一度と、思ふばかりの嬉しさなるに、この頼み
 も切れ果てしか。殺してほしい左京様。」と、衣の袖にすがり付き、又むせ返り歎かる。義次も涙に
 くれ、「我等も主君小松殿の仁心にて、不慮に存命いたし、遁世の身とはなつたれども、心に起らぬ道
 念、忘れぬは刈藻が事。御身が體を見るに付け。不便や刈藻がまつその如く、我をしたひ歎くべし。
 瀧口も亦我等が如く、御身を慕ひ歎くべし。現世にてさへ別れ／＼の四人の中、未來の一蓮思ひもよ
 らず。一所不住はこゝが徳。庵へも入らず御身を伴ひ尋ねなば、瀧口とても刈藻とても、みな思ふ者
 持つたる者、遠國へはよも行くまじ。この一念の響は、太鼓鉦にて尋ぬるにも勝るべし。」と、庵は下
 僧にのづり捨て、「佛は何國も一佛にて、行くさき同じ佛なり。いとま申すに及ばず。」と、悟りは重く
 身は軽く、心も軽き墨の袖、行方さだめず三重しるべなく、何國泊りとあてもなく、夫にはなれし鶯
 鶯と、妻にわかれし野邊の雉子、つれて音を啼く風情にて、我が妻ならぬ旅衣、袖に涙を拂はまし。
 花の吹雪と詠じけん、志賀の山路に著きにけり。頃は極月初めつかた、空もとゞろにふる雪の、つも

すがら、袖乞どもにとらせしが、何なりとも欲しいもの、今度持て来てやらうぞえ。「あのさだめし鼻紙はあるで有らう。」「オ、くその様な物手拭などは持ち合うた、どうぞ頼みます。」「まかせておけ。」といひ捨てて、飛んで庵に入りけり。下々程正直に、愚かなるものはなし。我がための結ぶの神、今宵はこの庵にて、夜すがら積る事どもをと、思へば嬉しさ氣はすゝむ。顔の見たさに氣もせきて、そゝろ顫うて待ち給ふ。稍あつて道心、すごくとして立ち出づる。「なうどうぞいのく。」「どうはふつとり埒明かぬ。假令知つても知らいでも、女子といふ名が付けば、人間は扱置き女犬でも雌鳥でも、物もいふ事かなはぬと、誓文立てていひきられた。袱紗一つ棒に振つたと思召せ。」といひければ、横笛とかうのこともなく、「わつ。」と許りにむせび入り、土の上にかつぱと伏し、消え入りく泣き沈み、「變ればかはるものよなう。互に焦れ慕ひしを、二年三年は耳なれて、淺はかな様なれど、日数は千々の夜晝を、思ひくらし泣きあかし、又なれそめては世をつゝみ人目を忍び、七生も變るまいぞや變るなど、契りし中にあすか川、せめては波の聲なりとも、聞かせてたべ。」とかきくどき、柴の編戸にすがり付き、聲もをします泣き給へど、あはれ事とふものもなし。「ア、愚癡ななげくまじ。夫ひとりを楽しみの、夫に捨てられ世に存へ、月も花も何かせん。あの川に身を沈め、せめて夫の往來の影、うつるを未來の樂しみ。」と、思ひ定むる思ひの數、千鳥が淵へとたどらるゝ。道心驚き、「や

ば、明後日おぢや。」といひければ、「つがもない、それは何の事ぞいの。もとからお心の一道なも知つ
 てる。お目にかゝればあなたも合點。たゞ一言傳へてたべ。」ム、扱は馴染か、とうからさう言
 たがよい。まちつとそこに待つてや。」と、走つて庵に入りけり。跡見送つて、「常々瀧口様、氣に入
 りの草履取ありと宣ひしが、共に道心起せしか。しをらしや殊勝や、下々には奇特な主思ひ。」と、深
 く感じ給ふ所へ、「なう怖やく。」と飛んで出で、「御上臈待つてか、あゝら怖やくの。右の通り申したれ
 ば、叩鉦程な目をぐつと見出して、やいそこなうつけ者。その様な使する物か。此所へ引き込んで、
 振袖でも詰でも、いつよんだ事が有る。先づ第一に金がない。おのれが好きならせに、女子を見れば
 びろくくと、鰻を見ればぬらくと、ぬらつく物に持ちあぐんだ。重ねて使しをるなと、撞木おつ取
 り、この頭こんくくこんどござれ。」といひければ、「けに實、みづからが言ひ様のわるい故、聞き
 まがひ有るは尤も。大儀ながら今一度、中宮の御所様から參つた女子と傳へてたべ。それであなたに
 御合點。」いかなく。中宮はさて置き、内宮でも外宮でも、のみこまる、顔でなし。又頭くはされ
 う。一度の懲せず二度のかけ、あらいやや。」とかぶりふる。「なうそもじも見れば今道心、嘸つむりが
 冷えさうな。ア、頭巾がやりたい、これこれなりとも。」と、袂より袱紗物取り出し、垣越にひらりと
 投げ給へば、道心被つて見て、「ヤア表は縮緬、裏は紅裏、中に包んだ物はなかつた。」オ、それは道

しや。流る、水はとうくと、鳴瀧川にぞ三童著き給ふ。嵯峨の奥、あそこの谷々この峯、世を捨て人の隠れ家の、庵数々多ければ、いづれかわが夫瀧口の住家ならんと、行き暮れた、すむ細道や、里の女の菜をつみて、畠つたひを歸りくる、袖を捲へて、「なう姉御、このあたりに都方の若侍、御出家有りておはします、庵室はどこの程ぞ。」と宣へば、「ハア、御侍の果てとは、それはどれぢやな。念西坊は獵師の果て、道らん坊は切のはてなり、毎日京へはつち請ふ、七に出られた道さい坊は投げらる、オ、それ、近き頃平家方の御侍、この往生院と申す寺にて髪をそり、あれあの見越の松の下道を、二町程その先に、念佛の鉦の音、それをしるべ。」といひ捨て、しやなく振りてぞ歸りける。横笛嬉しさかぎりなく、「平家方の侍の、この頃の發心とは、夫の瀧口にまがひなし。」と、ならひし道を走りつき、庵の編戸にやすらへば、鉦の音幽に念佛の聲、なほも飛び立つ心地して、編戸を敲き、「なう申し、此の庵のあるじ様に申したき事あり。錠明けてたべこ、明け給へ。」と、垣も編戸も打敲き、聲をはかりによび給へば、「お、い。」と答へて、四十ばかりのみそかす坊主、絲髻の跡毘の跡、青布子きて垣越に、「ワアちがうた。油掛から明日のお齋米、持つてかと思つたれば、齋にも非時にもはづれた。食ひかけんな夜食が來た。是れお住持は若けれど、下地が武士ですんと堅い。なんほ甘う持ちかけても、いかな蓋も取る人でない。おららも今日明日は精進ぢや。きりぐらゐで合點なら

第 四

横 笛 道 行

尋ね行く、哀れなるかな横笛は、あや菅笠にて顔隠し、忍び居たりし花山をば、まだ夜をこめて出
 で給ふ。鳥がなく、音羽の山をあとに見て、歩みもならはぬ黒土を、たどろ／＼と行く程に、愛
 宕の寺をばたてになし、南を遙かにながむれば、稻荷の山の薄紅葉、青かりしよりとよみ給ふ、和泉
 式部のながめある。そなたの空も薄霞、かの深草の少將の、その名ばかりやア、残るらん。加茂川こ
 えて見渡せば、五條あたりを車が通る。誰そと夕顔の、唄やんれ花車、花見車はおもしろや。しるし
 はこ、ぞ古の、光源氏の物語、思ひつらねて行く程に、夫にはいつか大内の、山又山に出づる月、
 雲の林にやどるらん。御室の里の吳竹の、うきふししけき世の中を、何を小鹽の岩倉の、名も良峯と
 聞くからに、頼みてしばし松のをの、千代もとむすびしかね言の、あだになり行く朝顔の、花の上な
 る露よりうすき契りをば、ア、恨めしやいとほしや。扱我が夫の浮世をすてて衣手の、森のしけみを
 わけ行けば、匂ひも深き梅津川、渡りの舟に棹さして、筏を下す大堰川、その水上は清瀧の、高根は
 地藏大権現、よそながらも伏し拜む。北に向へば高尾山、紅葉の御遊の古を、思ひ出つればなつか

その功德は小松殿、中宮の御所御兄弟にとゞまつて、六萬恆沙の佛を作り、阿僧祇劫がその間、百萬僧の供養にも、人の命をたすくる功德、勝ると聞きし御慈悲心。これ盛次よその事と思はれな。弟の命我が子の命、弟姫、總領姫、四人の命給はりし、御恩は何と報せん。」と、さしも剛なる弓取ども、手に手を取り組み聲をあけ、小松殿の御方と、中宮の御方と伏し拜みく、感涙更にせきあへず。戸無瀬もともに涙にくれ、「恥かしやこれにつけ、大悪人は只一人、申さぬとても御推量。父母のなき我々が、弟は子も同然、不便とは私ながら、かくまで敏く御利發の、中宮様小松様、お目にあらで有るべきか。妾も同罪とのおほしめしは、必定と覺悟は極め候へども、六親眷族諸共に、奈落に沈む誓ひにかけ、妾が露ちり存ぜぬこと。亡き跡までも上つ方の、御疑ひの悲しさを、推量あれ。」と泣きければ、勝頼も盛次も、ともにあはれむ心の底「我も人も世の中の、子の心親しらず、弟の心兄しらず。君君たり天天たり。日月は心中に、神こそおはします鏡、ゆがんで向へばゆがんで映り、すぐに向へばすぐなる影。御前とても其の通り、たゞまつすぐに御披露あれ。」と、しるしの首桶取りかはし、いとま申して立ちかへる。禮義亂れぬ白絲の、瀧口歌口横笛の、よゝに聞えし御政道、太刀取恨みず繩取も、恨みなき世ぞありがたき。

廣廂にぞ畏まる。「扱横笛を中宮様御手にかけてられ、御自身首桶に封をつけられ、左京之進が首をあらため請取り、横笛が首をも渡し申せとの仰せなり。」と述べければ、畏まつて左衛門、小刀抜いて首桶の封ふつとときり、蓋を開けばこはいかに、首にあらで義次が髻を切つて重しに石を入られたり。
 各、「はつ。」と驚けば、戸無瀬の局もさすがをもつて封おし切り、蓋をとればこれも又、首にはあらぬ笛竹を、歌口かけて二つに切り折り、おもりに土を盛られたり。三人一度に手を打つて、「これはこれは。」とあきれしが、中にも左衛門とつくと思案し、「ハッハイやしき我等が詞をかけ、申すも恐れ多けれども、あつばれ小松殿御兄弟、天のなせる賢人、地に奉ぜる賢女かな。御兄弟の御仁心、いつ言ひ合はせ給はねども、竹をわつて合はせし如く、寸分ちがはせ給はぬは、尊くもありがたし。義次をうち給へば、刈藻もたすけおかれぬ法、髻を切つてその身を落し給ひし事、出家は生死の世間をはなれ、法名つけば死人なり。重りの石は標の石。手にかけて給ふ理は同じく、命たすかる事はすぐれ、理同事勝の法門に、かなはせ給ふ御心。中宮もその心、横笛を討ち給はば、瀧口ながらへ有るべきか。
 笛竹に十二律、五行五音の理をそなへ、笛に聲有り、魂有り、名は體をよぶこの横笛、御手にかけて討ちたまひ、重りの土の昔の下、今はこの世になき人と、いはんに誰が非をうたん。命一つと思召せども、たすかるは二人なり。二人と思へば四人なり。親有り兄有り一門有り、縁類ゆかりの悦びの、

けてぞ歎きける。「いや、女なれどもみづからが側の者、男なれば腹切らする。そのかはりに、我が手にかゝるを本意とせよ。」と、御衣の褌かいはさみ御袴のそば高々と、かひなくしけなる御姿、日の守の御劔を取つて、弓手の小脇にかい込んで、「最期場は殿上の楡形、サア來れ。」と宣ひて、横笛を先に立て、しづ／＼として入り給ふ。世を恨みたる御腹立、御顔ばせにあらはれて、御いたはしくも勿體なく、見る人身をぞひやしける。兩人とつくと伺ひ聞き、「何と左衛門。只今中宮の御振舞御詞、小松殿の御沙汰とは、雲泥裏表の相違なり。これはまさしく中にて、迷はし偽りたる讒言ありと覺ゆるぞ。御邊と我とが意地ばりあふも私事。又瀧口義次が身の上とても輕き事。上と上との御不快、御中絶とある時は、大事の基亂れの端。いざ和睦して詮議をとけ、事の筋をあきらかに、聞きわけまいか。」といひければ、左衛門うなづき、「オ、我もさこそ思ふ所。先づ御分と和睦して、諸人に氣をつけ心をつけ、油斷するな。」と兩人が、四方を見まはす面魂。師高座にもたまられず。「あいた／＼、サア／＼持病の疝氣さし起つた。ア、痛いわ／＼、どうもかうもたまられぬ。御兩人頼み入る。この通りよい様に／＼。あいた／＼。」と顔しかめ、腹をかへて歸りけり。二人は跡をきつと見て、「きやつはこの御所支配の役人、かかる大事の御用の時節、持病とはくせ者。」と、おくを見やつてひかへし所に、戸無瀬の局首桶か、へ立ち出で、「いづれも是れへ。」とありければ、「あつ。」とこたへて兩人は、

よび出せ、物ごしに自ら言ひ聞かする事どもあり。師高もそれにてきけ。」と、御涙おしのごひ、御氣色正しく、貝桶に腰打ちかけさせ給ひしは、氣高くも美しく、空恐ろしくぞ見えたまふ。取次の小上藤、「二人の武士お次まで。」と披露あれば、中宮御聲高々と、「小松殿は自らが兄なれども、今にては臣下なり。されども位は内大臣の身をもつて、義次を手討とは、狂氣とならでは思はれず。その上こも雲の上、横笛を討たせんと、太刀取檢使に踏み荒させ、雲居の庭に血をあやし、汗れもはかり給はずや。可愛や不便や、横笛が振袖白齒の昔より、側去らず使ひし者、情なくもやみ／＼と、武士の手にかけてさせうか。女なれどもみづからも、弓矢の家に生まれて、大相國清盛の娘、人切る様はならはねども、討つに討たれぬ事有るまじ。横笛を手討にして、首を檢使に見せんぞや。盛次とやらん、檢使の作法知つたらばよう見て語れ。義次が首もその時見ん。やれ横笛、斯くまで心を碎けども、とても逃れぬ命ぞや、これへ出でよ。」とばかりにて、猛く勇める御目元に、御涙をはら／＼とうかめ給ふぞあはれなる。伏籠おしやり横笛も、涙にひたれさしうつぶき、「須彌より高き御厚恩、海より深き御情、何と報じ奉らん。御手をけがし申さん事、天の咎め未來の罰。この上の御慈悲に、太刀取の手にかけてたべ。八つ裂になるとても、浮世に恨みは残らねど、夫には來世で添ふ世もあり、七たび生まれ代つても、又逢ひ難き御情の、御主に別る、悲しや。」と、御前にかつばと伏しまろび、聲をあ

これを制し給はねば、武家の法ともいひがたし。たとへ如何なる科のあるとても、奉公において露程も、おろそかのない横笛、何故に殺させう。主と頼み下人となるも三世の縁。みづからが中宮の位にかへ、身にかへても思ひもよらず、殺させぬ。」と、御手を廻し伏籠の下、横笛が手をしかと取り、「今日よりみづからは、横笛がためには妹と思へ母とも思へ。娘は殺させぬ、妹は殺させぬ。よい様にいひ直し、たすけてくれよ師高。」と、御涙せきあへさせ給はねば、横笛は有り難さ、冥加につきる勿體なさ、身の悲しみより悲しさの、御手にすがりおしいたゞき、もだえなげくぞ道理なる。師高猶も心強く、「太刀取檢使つめかけ候上は、すごくとは歸り候まじ。横笛が命は中宮様の御をしみ、瀧口を深し出し、その方にて首討たれよと申すべきか。」といひければ、横笛堪へかね、衣おしのけて出でんとするを、中宮は御涙の袖を人めのまがきにて、おししづめ、とゞめ給へばのびあがり、御耳に口をよせ、「御慈悲を無下になす、御にくしみはゆるさせ給へ。我が命助かれれば、夫の命とらるるとや。我を渡して瀧口をたすけさせませ。」と、歎くも道理、止むるも御理に、さ、やきの聲も涙ももる、やと、おもひ伏籠のそらだきの、共にこがる、ばかりなり。や、有つて中宮居直らせ給ひ、「扱は横笛か瀧口か、二人の内一人は、命をとれとの小松殿の仰せよな。よし、心得たり。齋藤左衛門、越中の次郎兵衛、太刀取檢使として來りしとや。それ、女房達、二人の武士を次の間まで

て、さあらぬ體にておはします。程なく師高打萎れたる體にて罷り出で、「小松殿よりは是非もなき御使御座候。左京之進義次、刈藻と不義の密通にて、刈藻懐妊致せし故、この御所御暇取り候こと、重盛公のお耳に立ち、左京之進を御手討になされ、首を中宮に御覽に入れ申せと、齋藤左衛門勝頼持参仕る。それさへ有るに、瀧口をも同罪と思召せども、遁世して行方知れず、その代りに横笛を討つて参れ。もし中宮より横笛を御渡しなくば、瀧口をさがし出して討つべき間、その通りを中宮へ申し上げ、横笛が首討つて参れとて、太刀取は則ち齋藤左衛門、檢使には越中の次郎兵衛盛次、兩人中門に伺候仕る。小松殿には似合はざる、情もしらぬ御仕置。出家の瀧口を討たせんより、横笛を引き出し、首討たせ候べし。御奉公もよくつとめし者、かはゆき事に候。」と、そら泣してぞ申しける。中宮はつと御胸塞がり、や、御いらへもまします。横笛は伏籠の下、聞くより心きえんと、はつともあつとも聲立てられず、袂を口に押入れて、落つる涙は村時雨の、軒の雫にあらそへり。中宮御涙にくれながら、「御兄ながら、小松殿は狂氣ばしし給ふか。主有る人に通ふこそ、佛もいましめおき給ふ。戀は心の誠のもと、歌の道にも戀の歌を手本として、在原の業平は二條の后に忍びあひ、齋宮の女御に通ひ給ひしも、歌の情にゆるされし。その例あれば公家の仕置ともいひがたし。和泉式部、小式部、紫式部、赤染衛門、思ひ／＼に忍び男の有りしかども、その時の武將頼光頼信など、

前大僧正行尊、諸共にあはれと思へ山櫻。この下の句は自らか、すぐに合はせて取るぞ。」とて、「花より外に知る人も、なしとないひそ諸共に、あはれを知るはみづからよ。やよ横笛。」とかほばせを、つくく〜と御覽ありければ、憂さも忘るゝ忝さ、いとゞ涙の種ならし。「サア〜早う急いでとれ。柿の本の人丸、あしびきの山鳥の尾のしだりをの。」「ハテ取つてつらいはいつまでか、長々し夜を獨寝せうか。」「サア謙徳公。哀れともいふべき人はおもほえで。下の句取つたは小萩か。まだ十三や十四で、身のいたづらになるまいぞ。中納言家持、かさゝぎの渡せる橋におく霜の。」下の句とつたる小侍従が、「南無三寶、毎夜々々のお夜詰がねふたいに、白きを見れば情ない、また夜がふけう。」とうち笑ふ。「サア崇徳院、せをはやみ岩にせかるゝ瀧川の、瀧といふ字も面白し。いは岩石にせかれても、わけても末に逢ふ下の句、とつたる者は諸願成就。あれが見えぬかあれ〜。」と、横笛に御目を替し、御顔にて教へ給へば、横笛飛び立つ嬉しさの、女中おしのけおよびごし、「サア取つた。せかるゝ瀧と横笛と、わけても末に逢ふよ。」とて、抱いて悦ぶ歌がるた、おほしめしやる中宮も、共に奥にぞ入り給ふ。かかる所に表使の老女あわたゞしく、「加賀の郡司師高、急にお直に申し上ぐる事ありとて、只今は是れへ。」と被露する。「ハア局を以ていはざるは、何事か氣遣はし。先づ横笛はしばしこれに隠れよ。」と、伏籠に深く忍ばせ、「聲ばし立てな音すな。」と、縑の御衣を打ちかけ、御そばに引きよせ

はせてとれ。その歌の心にて、めん／＼その身の願ひ事、かなふかかなはぬか、住吉王津島に立願か
 け、御くじの心のつい松ぞや。サア上の句讀むぞ。蟬丸、これやこの行くも歸るも別れては。これは
 横笛に取らせたい、人にとられな、随分に目をきかせよ。」誠にこの下の句は、しるもしらぬもあふ坂
 の關。別れし人に逢ふ歌、この横笛が願ひぞと、心に樂しみ目をくぼる間に、お腰元の小櫻が、小賢
 しけに小さし出て、「これ／＼こゝに。」と、合はせてとるこそ本意なけれ。「サア藤原の實方の朝臣、斯
 くとだにえやはいぶきのさしも草。」「コレさしもしらじなもゆる思ひは。」と、合はせてとつたる十六
 夜が、心の願ひは明日か明後日お暇申し、灸すゑんと存ぜしに、伊吹艾の諸願成就。」と悦べば、「サ
 ア伊勢大輔、いにしへの奈良の都の八重さくら。これはめでたい下の句、次第に花の色をまし、けふ
 九重に勻ふとは、末に願ひのかなふ歌。それ横笛。」「あい。」といふ間にまんがちの、おし合ひせり合
 ひ、右近が取つて、「嬉しやこの暮の衣配りのおしきせを、いくへも／＼七重八重、けふ九重とのねが
 ひぞや。」「コレ大中臣能宣の朝臣、御垣守衛士のたく火の夜はもえて。」せめて一首と横笛が、たまた
 まとつたる下の句も、今の憂き身に吟ずれば、「ひるは消えつ、物をこそ、思へ。」ば我に思へかや。「サ
 ア右大將道綱の母、なけきつ、ひとりぬる夜のあるまは。」つゞけてこれも横笛が、合はせて取りし
 下の句の、いかにひさしきものとかは、その身ならずばしる人も、よもあるまじと涙くむ。「これこそ

盛次もつつと立ち、「これ左衛門、御邊はあつとお請を申すが、見事我が弟の首實檢の御使を致し、横笛が首を討つべきか。」「オ、してまた御分は、檢使を見事つとむべきか。」「問ふまでもなし、我は檢使をして見せう。若しお使の仕様、首の討ち様わるければ、御邊をこの盛次がのがさぬが合點か。」「オ、若し又御分、檢使の仕様わるければ、此の勝頼がのがさぬが合點か。」「オ、言葉をつがうた忘るゝな、サア來い。」「いけ。」と脇をはり、兩方にらんで連れだちしは、老木若木の巖の松、風にもみあふ 三重

中宮歌がるた

夕されや／＼、時雨まじりの初霰、御庭の梢落葉して、菊もうつろふ御徒然、中宮の御遊び「雙六は采の目の、心に合はぬもねたましく、偏突はむつかしし、貝被ひは手もつめたし。いざ續松の歌が、るた、いかゞあらん。」と宣へば、「けに賑やかなるお慰み、早はじめん。」と、若き女中の座をくみて、手箱の蓋をとり／＼に、文字に目じるしの、めけば、横笛はあけくれに、夫の戀しさ身の辛さ、思ひに沈み思ひくれ、ならぶる歌の下の句の、我が衣手と諸共に、ぬれつ、袖の宮仕へ、もるゝ涙ぞ不便なる。中宮あはれと思召せども、それとはさして宣はず、「なう人々、歌がるたは常のこと、たゞ取つては珍らしからず。ちと心入れある故に、みづからは取らずして、上の句を出すべし。何れも随分合

ひし者なれば、せめて切腹させんと思へども、中宮へは、かりあり。主従の情には、重盛が手にかけ
 て得さすべし。兄傍輩にも暇乞し、奥の小庭へはやく廻れ。」と宣ひて、御座を立つて入り給へば、
 義次座敷を見上げ、「なう盛次殿、傍輩達も聞き給へ。身の過りは宿世の因果、今生において果報者。
 主君といひ日本の賢人、小松殿の御手にかゝり、最期に情の御詞、名僧貴僧の引導も、何この上のあ
 るべきと、未来の成佛うたがひなく、現世に心は残らねども、とてもならば長らへて、もしもの事の
 あらん時、御命に代り御馬の前にて討死せば、弓矢とつての面目ならん。心にかゝるはこれ一つ。さ
 らばく。」となみだぐみ、奥の御庭に入りければ、その座にありあふ諸侍、日頃疏きも親しきも、
 思ひ切つたる盛次も、忍び涙はせきあへず。やゝあつて盛次、勝頼を尻目にかけて、「ア、嬉しや。もし
 遁世などさせたらば、君の御なさけにもあづからず、引出されて雑兵の手にかゝり、坊主首討たれな
 ば、何ほう口惜しかるべきに、弓取の本望、あら嬉しや。」といふ所に、主馬の判官盛久、首桶もつて
 奥より立ち出で、「これく齋藤左衛門。只今左京の進を君御手にかげられ、首をこの桶に入れ、上に
 封をつけられたり。御邊中宮の御所へ持参し、封を切つてあらため、中宮の御覽に入れ、さて横笛が
 首を討ち、直にこの桶に入れ、封をつけて歸らるべし。越中の次郎兵衛は、檢使を仰せ付けらるゝと
 の御謎。兩人いそぎ参らるべし。」とありければ、「左衛門畏まつて候。」と、首桶持つて立ち上れば、

を、防がんとための用心なり。油断とやいはん、不心掛とやいはん、やみくくと奪ひ取られ、その身まで斬り殺されし不覺者。しやつが死骸を礎にし、眷族を罪にふせ、主人の汝にも腹切らする、これを武家の法といふ。武家にもあらず公家にもあらず、律令に背きし掟、重盛は心得ず。されども中宮の仰せは救誼同然、左京之進は今日中に首を刎ね申すべし。いかに盛次、弟義次を召し出せ。掎横笛は御所にて害せられんとや。太刀取は誰ぞ、覺束なし、又奪ひとられ御所の騷動如何なり。檢使太刀取この方より參らすべしと、罷り歸つて申し上げよ。重盛が御返事はこれまでなり。掎また誰かは知らず、御所の女中に文玉章を通はし、その戀かなはぬ恨みには、悪み苦しむる侍ありと聞く。これこそ實の大罪人。汝が仕置を聞き入れずば、重盛にしらせよ。きつと罪に行ひくれんずやつ。」と宣ふ聲、耳の根にこたへあら肝とられ、たゞ「はつ／＼。」とばかりうろたへて、袴につまづき疊にすべり、はふ／＼御所へぞ歸りける。無慙やな義次、兄が内意の召のお使、御成敗とは夢にも知らず、長髪ながら裝束改め參上す。盛次中門に出で向ひ、「大小これにぬきおき、御白洲へ廻れ。」といふ。掎は我が罪極まりしと、「あつ。」と應へてにつこと笑ひ大小ぬき、面體すゞしく覺悟の體、あつばれ武士の手本やと、見る人涙を流しける。小松殿御覽じ、「珍らしし左京。中宮の御所より御咎めにて、首を刎ねよとの御誼。その身に越度ある上は、是非なしと存すべし。不便や幼少より、側近く召しつか

の郡司師高罷り出で、「扱も御所の女中の内、横笛は齋藤瀧口、刈藻は左京之進義次、思ひくの密通
 の男を持ち、御法度亂れ候上、刈藻懐妊いたし、御奉公もなり難く、中宮様以ての外御機嫌損じ、
 急度仕置に行ふべき由仰せそむきがたく、舟岡山にて首を刎ねさせ候所に、何者とも知れず太刀取
 某が家來、岩村源五を切り殺し、刈藻をぬすみ落ち失せ候。疑ひもなく左京がわざ、掟をかるし
 め上をないがしろにする大罪、中宮様御にくみ深く、早速左京之進が頭をはね、御怒りをやすめらる
 べし。又横笛をもおつつけ御所にて首をうち、かさねて御左右なされんと御使なり。」とごのべにけ
 る。小松殿しばらく黙然としておはせしが、「珍らしき中宮の御仕置、古今その例を聞かず。昔の和泉
 式部は宮つかへの身にて保昌にかよひ、又橘の道貞に馴れて、小式部の内侍を生む。赤染の衛門は
 中の關白に契り、紫式部は西の宮の左大臣に密通せしも、皆奉公の時なれども、その時の女院上
 東門院、いさゝかとがめ給はず、かへつて末代に名を残せり。穩かならぬ御政道、汝も姉の戸無瀬の
 局と心を合はせ、諫言は申し上げずや。」と宣へば、「さん候姉も我等も再三諫め奉れども、中宮様
 はもと君の御妹、武家より出でさせ給ふ故、諸事武家の御作法なり。」と誠しやかにぞ申しける。「い
 やいや武家の法ともいひがたし。太刀取源五とやらんが、刈藻を奪ひとられしが武家の法か。總じて
 刑罰人に槍長刀を抜身にして、厳しく警固すること、科人の警固ばかりと思ふか。同類ゆかりの狼藉

へなり、俸瀧口、上の御仕置をも待たず、遁世させしを、貶すると覺えたり。切腹にても打首にても御意次第、今にても召し還す。なんと遁世すれば、御仕置はかなはぬか。御分が弟左京之進、不行跡の浮名を厭ひ、病氣分にして追ひこめ置きしとな。オ、いか様にも左京、そのまゝ置くならば、御家中の若侍見るを見まねに、友をそこなふは必定なれば、追ひこめ置きしは珍重。さりながら、我が君慈悲深く、何ごとなく召使はれば、面の皮厚く武士をたてさせ、諸侍にまじらはせんと思ふよな。義を知るものの分別、御分などが合點のいかぬこと。イヤ猿といふ獸はな、おのれが面の赤い故に、我が顔に違ふをもつて、金色の佛の顔を笑ふといやい。コリヤあの蟹といふ蟲はな、おのれが横に行く故に、直に歩む人間を笑ふといやい。オ、澀柿の青柿が、甘い熟柿の、烏に食はるゝを見て笑ふといやい。ヤイ 磔が獄門の首を見て淺ましい足の下に居るといふて笑ふといやい。「ヤア扱は御邊は、獄門の鹽梅よつく覺えしな。」「ムウ御分は未だ鹽梅知らぬか。ちと知らせうか。」「ヤアみごと我に知らするか。」「おんでもない事、望みならば今なりとも。」と、互に刀に手をかくれば、一座の諸武士ひいきぐ、兩方へたち分つて、すはや喧嘩のさや持だて、固唾をのんで密語く所に、「中宮の御所よりの御使者。」と、中門の案内お式臺の小取次、御廊下の申次、御前の取次、段々に披露して、君御對面有るべしと、上段に出で給へば、勝頼も盛次も、威儀を改め伺候する。中宮の御使者、加賀

は左程の年でもなく、もの忘れしらるゝか。御分は五位の兵衛の尉、我は四位の左衛門の尉、上に坐するは何事か有る。扱々いかい物忘れ、ちと樂のんで養生めされ。」と、空うそぶいて居たりける。「イヤサさがれといふにさがらずば、小腕つかんで引摺りおろす。荒立てたらば烏帽子すべつて、坊主頭振りまはり、恥かくが笑止なり。但し手をかけうか。」と、苦々しくつめよれば、「オ、老人とてあなどるか。小腕取らば取つて見よ。先づ五位の身柄にて、四品を下に付けんとは、いづれの家の有職か、サア言へ〜。」とたゝみかくれば、盛次ちつともさわがす、「彌老筆に極まつた。なんぞ四位の櫛のとやかましい。勿論御分は四品なれども、隠居して法體の身、御役御番ともに御免ならずや。今日は御邊が倅瀧口が當番。瀧口は身の放埒、不義の悪名をつゝみかね遁世したるとな。いかさまにもその儘あつては御家中の若侍、見るを見まねに友をそこなふは必定なるに、遁世は一段。さりながら、御仕置は上の御心、切腹仰せ付けらるゝか、御成敗なさるゝか、下としてかられず。遁世すればすむと思ひ、法體の親が還俗して、御番勤むるとはとつく聞きたれども、參會は今日はじめ。それ以來御番がへもなく、今日は瀧口と相番の常日。然れば御邊は瀧口が代り、代番といふもの。かくいふ盛次は五位、瀧口は正六位、終に一度も瀧口が下座に著かぬこの盛次、ひがごとあらば言へ聞かん。」と、氣色をふるひ理窟をたゞし、席を打つてぞ怒りける。勝頼あざ笑ひ、「ム、和殿が言分は、座争ひは脇

され、瀧口があつたら身を捨てさせし。瀧口が身代の敵は義次なり。」とさ、やけば、義次入魂の人々は、「瀧口といふ好色者に伴ひ、浮名を流す左京之進、善悪は友による。瀧口にかつて、義次が兄の盛次まで面目失ひ、その無念つもりなば、瀧口が父左衛門とは、どこぞで言分喧嘩のはし。」と、御番所御廣間若侍のこれ沙汰、互に耳に漏れ易く、齋藤左衛門勝頼、越中の次郎兵衛盛次、傍輩つきもぶしくと、心よからずなりにけり。折節盛次御對面所の當番にて出仕有り。義次ひいきの若侍、我もくと出でむかひ、「めづらしや盛次殿、御舍弟左京殿の御身の上承り、氣の毒千萬。我人若き者は悪しき友の附合にて、心のほかの若氣、悪道へ引き入れらるゝ。近頃御笑止々々々。」とありければ、「いやく左様の事ならず。弟左京めは病氣さんぐ。」と許り挨拶して坐しける所に、齋藤左衛門勝頼相番の役なれば、ほんのくほまで烏帽子引込み、顔をかくして出仕ある。瀧口ひいきの若侍、「これはく勝頼殿、御子息瀧口は遁世とや、扱々残念。善悪は友による、損者三友益者三友。兔角悪い友と辻風には、出合はぬが手柄。さぞ御心底に友達への恨み、鬱忿推量いたし候。」と、傍から喧嘩のすを買ふも、これ堪忍の瀬越しなり。勝頼は盛次に目禮して、上座にむすと坐したりける。盛次聲をかけ、「これ西頼坊主、老眼故見違へしか。越中の次郎兵衛盛次なり。座次が違うた。とうく下座へさがられよ。」といひければ、勝頼うちわらひ、「オ、老眼なれども傍輩の顔は見ちがへず。御邊

ける。なほも残る奴原を、追立て／＼追散らし、走り歸つて、「これ刈藻殿見知つてか。」「瀧口殿か。」
 「いかにも／＼。御身のうへも我が身のうへも、先づこの所を立ち退いて、心靜かに承らん。扱源
 五め、法師のいはれぬ殺生、逃げばにがさんと思ひしに、壓にうたれて死んだよな。いで戒名に戀者
 業譽、號付け引導して弔はん。」と、死骸に向つて合掌し、「ア、悲しきかなや、おもしに壓されてひし
 やけし亡者。さつさ鯖の鮨やおされてひらく。それは人の口に、くう／＼じやく／＼。この亡者の鮨
 は、煮ても焼いてもくはれんじや、胴譽ひつしやり禪定門。南無阿彌陀佛。」と打笑ひ、肩に刈藻を引
 つ掛け、首には鉦鼓ひつかけ、えてにひつかけ身にひつかけ、曉かけて立つ空の、雲の林の名を頼
 む、紫野ゆき、しめ野ゆき、行く道筋は多けれど、戀よりいりし法の道、迷ひしまひて後の世に、
 迷ふべき様なかりけり。

第三 三

風無うして荷葉動くは、水底に魚の行くこと決定せり。この理を以て萬事を推さば、人心何をか
 苦しまん。されば小松殿、人の非を顯はし給はず。今度義次瀧口が噂、一向に御沙汰もなく、空知ら
 めふりにてましませども、ひいき／＼の人心、瀧口懇意の輩は、「左京之進といふ浮氣者にそ、のか

燒刃に文を唱へかけ、よくく加持し申せば、その身に唱へたまふも同然。「ヤアそれは珍重。然らばむづかしながら御出家の慈悲、いざ加持を頼み奉る。」と、抜いたる刀うかくと、手に渡すこそ愚かなれ。瀧口嬉しさ心も勇み、これ太刀取様、畢竟祕文もなんにも入らず。この女性をさへ殺さねば、報いもなければ祟りもなし。利劍卽是彌陀號、彌陀の利劍にて煩惱惡業を切りはらひ、善心にかへれとの祕文、愚僧が加持はこの通り、一聲稱念罪皆除。ア、南無阿彌陀佛。」と申しける。源五大きに怒つて、「扱は刀を奪はん爲の僞りな。芋掘坊主め、その刀ぬつくりとおのれに持たせて置くべきか。いはれぬ人を助けんとて、うぬが命失ふたはけ、これ見よ。」と飛びか、れば、入道ひらりとひつばづし、「ヤなされなく。坊主の手に入れた物、俗の身で取らんとは、それこそほんの寺から里。この上臈もこつちのもの。」と、かるもをひつ立て奪ひ取り、「利劍卽是とはこの事。」と、一文字に切りか、れば、源五を始め雜兵ども、「やれ推參なる法師め。」と、一度にどつとかけ寄るを、「心得たり。」と大太刀振つて、八方をなぐり立つればかなはじと、むらくくづれ逃げ散つたり。中にも源五は太刀を奪ひかへさんと、大石塔の陰に隠れて待ちかくる。下人原とつてかへし、「法師やらぬ。」と、弓手馬手より討つてかゝるを、追ひまはし追ひまはされて大勢が、石塔にまくりつけられ、我知らずにおすほどに、さしもの大石、源五が上にどうど伏し、「うん。」とばかりを最期にて、微塵になつてぞ失せに

お侍さむらい暫しばしく。」と、刈藻かりもを圍かこうて立ちふさがる。源五げんご驚おどろき、「やあすて坊主ぼうず、いはれぬ命いのちもらひだてか。ならぬく。」といひければ、「いや／＼左様さやうでは候はうはず。これは洛外らくがわいの三昧さんまいを廻めぐる夜念佛よねんぶつの修行者しゆぎやうじや。この女中ぢよちゆうにとがあればこそ御成敗ごせいはい、汝なんぢが罪汝つみなんぢを責せむ、それは是非ぜひなし。さりながら懷妊くわいじんと仰おほせなれば、罪つみもなき胎内たいないの子こを殺ころさるゝ、御太刀取おたちとりの報ひぐいかばかりと思召おぼしめす。いく月つきが存ぞんぜねども、月々の守しゅ神守かみまもり佛ほとけある故ゆゑ、その月つきにあたる神佛しんぶつの御怒おいかり、太刀取たちとりにあたつて、或あるひは惡病あくびやう、或あるひは劔難せんなんにかゝり、忽たちまちち命いのちをはること、むかはりを待まちたすといふこと、摩耶夫人經まやぶにんきやうに説とかれたり。されど武士ぶしのならひ、懷妊くわいじんとても討うたでかなはぬ事ことあり。その時は身みに報ひぐはぬ大事だいじの祕文ひもんを傳授でんじゆして、三遍唱べんとなへて討うつ事ことなり。愚僧ぐそうこの文もんを知しりながら、科人かじんは是非ぜひもなし、科かもなき太刀取たちとりさまを、見殺みころしにするは目の前めまへの殺生せつじやう、お笑止せうしさよ。」とぞ申しける。源五げんご驚おどろき、「扱々さてく夢ゆめにも存ぞんぜぬこと。さすが御出家ごしゆつけようこそ／＼。卒爾そつじながらその祕文ひもん、只今ただいま御傳授でんじゆなるまいか。頼たのみ入いる。」といひければ、「我われも三七日にちの荒行あらかやうにて、受け授さづかりし祕文ひもんなれども、参まゐりかゝつた不祥ふしやうなり。必ず他言遊かたごんあそばすな。いで／＼傳授でんじゆいたさん。」と、耳みみに口くちよせ小聲ここゑになり、「利劔りけん卽すなはち彌陀號みだごう、一聲いっしやう稱念じゆんねん罪皆除ざいがいじよ、この文もんを三遍唱べんとなへ討うち給たまへ。御身おんみにけし程ほども祟たりあらば、この法師ほふしが生うんでかやし申まうすべし。」「いや三遍べんは扱さて置き、一遍べんも覺おほえられず、こむづかしいちんぷんかん。どうぞ短みじかい覺おぼえやすい文もんはないか。」といへば、「然しからばその刀かたな此方こなたへたべ。」

しその人も、今日は又、明日の人にさきだつ身とぞなりにける。ハア思へば嬉しくも、かかる姿となりしよ。」と、おもふも佛の御誓ひ、「攝取不捨。」と鉦うち鳴らし、「南無阿彌陀、南無阿彌陀、南無阿彌陀佛、願以此功德平等施、一切同發菩提心。」と、廻向をなすこそ殊勝なれ。かかる所に岩村源五、乗物さきにおつ立てさせ、此處よ彼處と墓原見廻し、一本の松の下陰、「これ屈竟の所、こゝへく。」と下させける。瀧口それとも思ひよらず、「ヤアこれも死人ぢや。時日もきはすわれさきと急ぐ冥土の旅、我等が先ばらひの宿わり衆。おつつけ誰も追ひつく身。」と、念佛申して弔ひける。武士ども乗物より、手を取つて引き出すを見れば、やあ、死人にはあらず、やんごとなき上臈なり。いかさま仔細有るらんと、卵塔の陰に身を潛め見る所に、岩村源五大音上げ、「如何に刈藻、サア只今が最期、首が落ちては悔んでも埒明かず。主人師高公はそのま、討てとの御意なれども、いかにしても残念。その身ばかりか胎内の子に日のめも見せず、ともに殺すは不便とは思はずか。命有つてから義次には逢ふことならず、未來は猶見えぬ事。師高公の北の御方となれば、我々までも主人とあふぎ奉る。一生大事の返事承らん。」といひければ、「推參なり下郎め。おのれが主人にさへ返答するが口惜しきに、なんの心が變らうぞ。よしない最期に腹立てさせ、未來の妨げせんよりも、はや首討て。」とありければ、「エ、しぶとい女め、こりや今が最期ぞ。」と、太刀ぬき放し背後に廻る。瀧口入道躍り出で、「これ

たい問ひたい志こゝろざし。なんぢや心こゝろにしたがはば、師高ちろたかが北きたの方かたとはどれどの顔かほで。よく／＼佛神ぶつじん三寶さんぼうにも、捨て果すてられし女をんながあらば知らぬ事こと、この刈藻かりもなどへは慮りよわい外わいないひ分ぶん。君きみが一日いちにちの情なさけに、妾せふが百年ひゃくねんの命いのちをうしなひ、心任こゝろまかせにきりさいなめ、さりながら、これそのさもしい心こゝろから、この仇あだを義次よしつぐ殿どのへあたへて、敕諭ちよくん宣旨せんじと偽いつはり、いかなる罪つみにか沈しづめんと、悲かなしいはこれ一つ。エ、あはれ知らず邪見じやけん者もの、世よを生き通とおしと思おもふかや。一たびは死ぬる身みの、後世ごせも報むくいもないと思おもふか情なさけなや」と、恨うらみつ口説くゞいつ伏ふしまろび、聲こゑを上あげてぞ嘆なげかる。師高ちろたかした、か恥はぢしめられ、大おほきに怒いかつて、「彌いよく罪科ざいこ極きはまつたり。いかに岩村源五いはむらげんご、かねていひしは合點がてんか。舟岡山ふなおかやまへひつたてよ。」承うけたまはる。といふより早く、小腕取こでぶとり、髻たぶきを掴つかんでねぢふせ／＼、乗物のりものに打込うちこんだり。下女げぢよども歎なげき取り付つくを、取とつてつきのけ踏かみちらし、世よの憂うれき淵瀬ふちせこがれ行く、舟岡山ふなおかやまへと三重急みやこきやまぎける。けに紅くれなるは染そむるにしたがつて色いろをまし、道みちは學まなぶによつて智ちをみがき、心こゝろも清きよき瀧口入道たきぐちにもにふぢやう、法名ほふみやうを西俊さいしゆんと改あらため、嵯峨さかの奥おく往生おうじやう院いんに引籠ひきこもり、暫しばらく世塵せぢんをのがれしが、こゝも都近みやこぢかければ、憂うれきふし聞きくも絆ほだしの種たね、高野山かうやさんへと思おもひ立ち、故郷こきやうのなごり、父ちちの後生母ごしやうぼの菩提ぼだい、法界順逆ほふかいじゆんぎやく血縁けつえんと、洛外らくぐわいの三昧さんまいを、夜よなく／＼めぐる道心どうしんの、廻向えきやうにつれて知る知らぬ、共に導みちびく蓮臺野れんたいの、舟岡山ふなおかやまに著つきけるが、長ながき數かずそふ高卒たかそ堵婆とほ、石塔せきだふ五輪松りんまつのしるし、誰たが名なを殘のこす形見かたみぞや。鉢叩はちくちこゝに消きゆれば向むかうには、今燃いまもえそむる無常むじやうの煙けぶり、昨日きのふ後のちれ

文にも口説く通り、なびくといふたゞ一言、聞くと等しく直に屋敷へ連れ歸り、師高が北の御方、嫁入の乗物。又いやといふが最後、罪科に行ふ牢輿、あれ乗物は一ちやう。サア牢輿になりとも、嫁入の輿になりとも、あけすけの返事したがよい。むごういふのもいとしさ故。」と、目元に愛をもたせしは、見るもいぶせく面憎し。刈藻は態とにつこと笑ひ、「科深きみづからを、御憎しみもなく、北の方になされんとは有り難や忝や。あつと申して夫婦になりたう候へども、左京之進義次、よも堪忍致されまじ。その時はいかゞ遊ばすぞ。」「ア、氣遣ひない事。左京めは敕説といひなし、討つて捨てるに何の事があるものぞ。」「できたく。してこの胎内の子はおろさうと思つてか、悦ばせうと思召すか。」「いや／＼おろすは母にも氣遣ひ有り。請取りにくいみやけなれど、そもじがいとしい。やすやすと平産させ、某が總領の若君ともり立つる。」「さればその事。この子は左京之進義次の子、智慧づいて親の敵と師高殿、そなたを生けて置くまいが、この御思案が聞きたい。」といへば、「その時はその餓鬼め、ひねり殺して捨つるに、猶氣遣ひのない事。」と、いはせもはてず膝立てなほし、「扱は夫を殺され子を殺されし師高殿と、添うて居さうなこの刈藻と見つけたか。生盲の死畜生。男も女も戀といふもの、命をかばひ身をかばうてなるものか。みづからがお暇を願ひしも、身を遁る、爲でもなく、名を包む爲でもなし。義次殿兄御の不興と聞きしゆゑ、火の中へも尋ね入り、共に憂き目を見

たはふれ、恨みも情も水鏡、去つてとゞまるかけもなし。この戀我が身の善知識。さぞ横笛が恨みの
 歎き、煩惱菩提の廻向によつて、皆極樂の縁たるべし。流轉三界中恩愛不能斷、棄恩入無爲眞實報恩
 者。」と、自身の受戒さしぞへ抜いて、髻ふつつと切つて捨て、父が脱ぎ置く褌衫の、衣を取つてお
 し戴き、「思へば父は我が師なり。師資相承のこの三衣、世に在る父世になき母、妻も我が身も隔てな
 し、期する所は九品の臺。南無阿彌陀佛。」と三界の、家を出づるぞ三重あはれなる。たまさかに、あ
 ふ坂山のさねかづら、人は知らじと通ひしも、苦しや女のならひとてはや懷妊の重き身と、うき名
 御所の外まで隠れなく、御奉公も憚りと、たつて御暇を願ひ給へども、郡司師高こだはつて、埒明け
 す、ひたや籠りの局すみ、傍輩達の見舞まで、堅く禁制との掟、憂きをとぶらふ人もなく、召使ふ下
 婢二三人、泣いてふするの刈藻の牀、涙にくる、ばかりなり。加賀の郡司師高、雜人に乗物かかせ、
 局の中へつかく、と踏ん込み、「これ刈藻奉公の身をもつて、出入きびしき御門を忍び、築地を越え垣
 を越え、放埒のしかた、剩へほてつ腹は、壁に茶壺とやら、今になつてお暇下されとや、さうはな
 らぬ。左京之進義次は、兄越中の次郎兵衛が追ひ込んで置きし段、定めてよつく聞きつらん。この道
 ばかりは相手づく、その方とても只置かれず。殊に奉公人なれば、きつと罪に行ふ大法あり。されど
 もこの師高が執心かけしおぬしが事、今とても憎うない。サア今日から魂を入れかへ、年月段々狀

烏帽子狩衣。」と、褌衫脱ぎ捨て、「これ懲らしめの嚇しなどと思ふな。七年以來の常精進、たゞ今落つるあさましや。」と、兩眼に涙を浮べ、「エ、是非もなや、主君の御蔭にて隠居の身を安樂に、一筋に菩提に入り、先だちし母め、一蓮托生と願ひしに、おのれは父母の地獄の手引するぞや。」と、せき上げせき上げ涙の下、「精進落つるこれ見よ。」と、小四方引寄せ、毘布にそうたる慰斗ひつ掴み、口に入るれば、瀧口あわてすがりつき、「勿體なや情なや。向後色の道ふつと存じきり、恥をしのぎ御奉公仕らん。まつびら御免。」と泣きければ、おしのけつと立ち、「オ、親はともかくも、世間は何といひ譯せん。越中の次郎兵衛が手本を出して渡されたり。」と、烏帽子狩衣肩に打ちかけ、太刀刀ひつさけ、「ヤア下人ども供の仕度せよ。齋藤左衛門尉勝頼が、二たび小松殿へ出仕なり。」といひ捨て、奥をさしてぞ入り給ふ。瀧口も前後に迷ひ、涙にかきくれ居たりしが、膝を打つて、「ア、さうぢやよしなやな、父の恨みは至極の道理。成りんじことをば説かず、遂けんじ事をば諫めず、既に往んじことを咎めず。身のあやまりは、悔んでさらに甲斐もなし。君賢人にてましませば、勤めによつて思召しもなほさるべし、世間の恥辱も雪ぐべし。冤にも角にも悲しきは、父の菩提の妨げして、母上まで永き世を惡道に沉めん事、八逆五逆十惡の、無量の罪にもまさるべし。遠く昔をとふまでなし、まぢかき文覺西行法師、戀路を種の發心にて、六親九族を引導せり。よしや幻の境界、譽れも誇りも夢の

はやし、諸人の思ひいれ、主君の御威光、親の光をもつて立身近日に候。と、いひも果さず、西頼
 はつたと睨んで、「ヤアだまれく、聞きたうない。某年よつて御扶持は下さる、なんにも浮世に
 役はなく、寐ても忘れぬは、未來のことより我が子の上、風の吹くにも心をつけ、よしあしの噂を聞
 くものを、おのれが行跡知らぬと思ふか愚かやな。横笛といふ女中にほだされ、御所にて山雀を取り
 にかし馬鹿をつくし、加賀の郡司師高に悪口せられ、すでに罪科に極まりしを、中宮様御慈悲にて、
 隠密に治まりしこと、その日に我は聞きたるぞ。北山の御遊にも、横笛をそ、のかし浮れまはり、師
 高に見つけられ、剩へおのれが非を持ちながら、師高を追ひちらし、狼藉は何事ぞ。隠居の我さへ
 知つたれば、諸人が知らで有るべきか。諸人の知るもの、小松殿の御耳に立たで有るべきか。この君
 は當代の賢人、色には出し給はねども、底意に見限りまします事、たとへば草木の根をやいて、土に
 うゑしが如く、自然に枝葉枯れ凋み、いつ花の咲くこともなく、身のなる果ては家の滅亡、エ、淺ま
 しや口惜しや。おのれもよつく知りつらん、越中の次郎兵衛が弟、左京之進義次、刈藻とやらんに密
 通し、度重なつてこの刈藻懐妊し、悪名かくれなく、義次は兄次郎兵衛病氣分にして、追ひこめ置き
 くと傳へ聞く。その如くおのれを追ひ込んでも勘當しても、一子なれば家の斷絶。平家重代の我が家
 を、おのれ故にたやさうか。今日より某還俗して御奉公相つとめ、もとの左衛尉勝頼、その爲の

ひ捨てて逃けてゆく。兩人どつと打笑ひ、「逃足はやきお侍。まだ追驅けるまねをして、おどしてあそべよ慰み。」と、木の根をたき聲をかけ、手頃の石をおつとりく、はらくはらりくとうちかけく、谷の川水さつくく、さらくさつと、踏みたて蹴たて踏みちらし、紅葉踏み分け鳴く鹿の、戀も互の身の上と、連れて假屋に歸りけり。

第 二

佛種は縁より生ずとかや。瀧口がち、齋藤左衛門尉勝頼は、平家譜第の御奉公、丁七十の頭の霜、そりてかへらぬ梓弓、刀もやめて樂坊主、隠居領とて下さる、十人扶持も寺まるりに、月日を送る常精進、名を西頼と申せしが、藍摺の狩衣烏帽子取り出し、一子瀧口を招き、「これは一年小松殿、大臣の大饗ありし時、著して御配膳仕れとて、拜領したる召しおろし。汝に是れを譲らんが、著して彌我が家を嗣ぐべきか。この頃はお事が勤め方の善悪を聞かず、御前體の御覺え、如何あるぞ。」と問ひ給へば、瀧口謹んで、「さん候。不肖の身に候へども、親の御恩の有り難く、御前體の思召し諸傍輩にすぐれ候故、心まめしく相勤め、殊に中宮の御所様より、御目をかけられ、御所のお使は皆某が承り、さる北山の御遊にも、こへも瀧口、かしこへも瀧口と召し出され、女中方のもて

かづきは刈藻の前。某數年心をかけ、我が心にしたがはば、後々中宮に申し上げ、我が北の方にそなへんと、立居につけてくどけども、おのれが邪魔とはとつくより知つたるぞ。御法度亂す不届者、我がためには女敵同然、女めも同罪。」と、飛びかゝつて衣ひつたくれば、齋藤瀧口太刀ひねくつてねめつくる。「はつ。」と許りにあきれしが、「ムウ汝奴が是れに有るからは、横笛も居る筈、氣取つて早くも隠せしな。よし／＼後日の詮議。みな來い／＼。」と逃げ歸る。義次瀧口弓手馬手に立ち塞がり、「後日は後日今は今。なんで侍のかづきし衣を、ひつはぎ歸るとてかへさうか。中宮の御所に威をふるひ、女中をおどしたその格とは、はらりつと違ふべし。この埒あけずに歸つて見よ。諸すね切つて切りするゑん。」と、兩方よりつめかくれば、「これ／＼、不義と申すは横笛と刈藻が事。その役なれば隅々まで、詮議せねばならぬ事。お氣に障らば御免あれ。これ手を合はする。」とうそ顫ふ。瀧口から／＼と笑ひ、「その役人がたつた今、刈藻に年月心をかけ、立居につけて口説くといふは不義ならずや。御所にて汝がぬかした通り、踏み付けてくゝしあけ、しばらく首打つ不義の科。それ義次繩かけよ、太刀とりはこの瀧口。下人原からしまうてとれ、遁すなやつ。」と呼ばはつたる、聲におどされ下人ども、棒提灯もなけちらし、谷底にころび落ち、命から／＼逃げ失せけり。ふるひ／＼師高大音あけ「よいよいぬらには負けたりと、この代りには横笛刈藻二人の女に、なんとあたる待つて見よ。」と、い

「ヤア瀧口か。」「ウム左京か。あぢぢやくの。」「そつちもあぢぢやの。此方もかくの仕合。」「互に
隠密沙汰なし。」と、行き違うて別れしが、二人の女中振返り、どうやら名がちがうたが、横笛殿ぢや
ないかいの。「かるも殿か。ワアウ男が違うたわ。」「ヤアウ男がちがへば、女房もちがふ。」とおろし
置き、衣引きのけ頬冠取つて、四人一度に横手をうち、「せいての上の皆粗相、俄鬼の目に水見えすと
はこの事。いかに懇仲とても、まだしも背中に負うて珍重。前に抱いたらよいものか、兩方無疵に
返辨。」と、取りかはせば二人の君、「サア今こそ前にだかれう。」と、しと、憑れて身をよせて、松が根
枕こけむしろ、ながき契りとなりにけり。かかる所に上の峯より、人大勢月夜に提灯棒つきちらし、
山廻かとする所に、蝶の丸の紋付は、加賀の郡司師高。「サアきやつはむづかし一期の浮沈。女中達は
谷越に、みごと假屋へ歸られうか。」「オ、／＼これも戀ゆるゑ、劔の刃をも渡らんもの、するぶん首尾
よく遊ばせ。」と、かひなくしくも手を引きあひ、谷をつたうて歸らるゝ。瀧口きやつに手をとらせん
と、横笛の衣ひつかつぎ、女の眞似して待つ所に、郡司山をかり廻し、「刈藁横笛見えざるは、そゝの
かす男覚えあり。」と、喚き叫んで、「あれ／＼人影、それがすな。」とおつとり巻き、「ヤア不義者は左
京之進、搦め取れ。」とひしめきける。義次わざと迷惑さうに、「近頃難儀の御咎め、夜の紅葉を見た
め、只今是れへ参りしに、不義とはさら／＼覺えなし。」と、いはせもはてず、「いやぬかすな。あの衣

皆一同に放さるれば、翼をかはし羽をのして、百悦びの聲をあけ、あなたこなたへ翔り行く。慈悲心
 深き小松殿、一しほ感じ入りたまひ、「これぞ實の放生會。紅葉は明口御覽あれ。」と、夕暮はやき奥山
 の一鹿の妻こふ夜の聲、聞しめさるゝ爲なれば、よひより御格子なるべし。」と、假屋に入らせ 三重給
 ひけり。五え行く月も奥山の、繁みに暗く更くる夜に、越中の次郎兵衛が弟、左京之進義次は、刈藻
 の前とこの年月、心許りを通はして、逢ふ夜は今宵と約束の、時こそ來れと頬冠、お庭の籬に佇んだ
 り。横笛も灌口に、今宵逢はんといひかはし、友傍輩の寐入ばな、そつと起き出で衣被ぎ、籬の陰の
 頬冠、招けば男も招き寄り、互に頷く頤に、物をいはせて、それかかれかと名も問はず、背中向け
 ては顔見えず、氣のせくまゝにひつたりと、負はるゝ腰を後手に、ぢつと引きしめ負ひしめて、重き
 戀路を軽々と、負うて行くこそあやなけれ。刈藻はもとより左京之進に、契約をたがへじと、はや月
 影も夜半過ぎ、相圖の時と衣引きかづき、左京や來ると待ち居たり。灌口は猶横笛と、ぢきに契りし
 北山の、あふせは今宵と頬冠、御庭に忍び入る。刈藻はそれぞと招き寄せ、兩方待つも待たるゝも、
 問ふに及ばず引寄せて、背中にとんと負ふ戀の、我より外にあるぞとは、思ひがけなき崖道や、そこ
 つの山路 三重踏み分けて、谷の小川のしよろくゝ水、灌口は流れにつき、左京之進は川上へと、のほ
 る道にてはたと逢ふ。兩方よけつよけられつ、忍ぶとすれど朝夕に、つきそふ傍輩おもかけ見えて、

小鳥づくし

はや日限も北山の、茸狩の御遊とて、紅葉を背きて御假屋、御亭主方には小松殿、小松の陰に庭籠
をくみ、数の小鳥をこめらるゝ。中宮立ち出で御覽あれば、百千の鳥の籠なれて、見知らぬ袖にも懐
くらん、遊ぶつばさに誘はれて、罪も消えつゝ、紫の、雲の臺に法の花、ほふ法華經よむ鶯の、初
音和く國なれば、心も花の都鳥、神の恵みの深き世に、大瑠璃小瑠璃燕、袖にむつれてなく聲は、
ひいや鶉どり、四十雀、色も勻ひもふくみ聲、鶉衣のつまごとの、ひゞきに通ふうその聲、野澤の
水に影見えて、あがるもくだる夕雲雀、憂き事聞かぬ木兔や、百舌鳥の撞木を手に取れば、搖ぐか玉
の尾長鳥、胸の鵲に立つ煙、むらく雀てりましこ、輕き羽風の山雀小雀五十雀、まだ十二雀、鶉雀
鶉雛に松むしり、菊戴が菊のませがき、そなたへくるり、くれはのとりに、聲のあやなす連雀
や、思ふ中には名もつらき、人目の鶉雛うちとけて、いつかは廻り鶉雛の鳥、忍び大標鳥こよひ小標
鳥と、人に鶉の行々子、鳥にいふな樺鳥、知らせまいとて鳴の羽搔、としよりこいゝ口まめ鳥に、
ほつとあいたよ杜鵑の、一聲に友呼子鳥かほよ鳥、ア、三味線の駒鳥や、山鳥の尾のしだり尾の、
長き千歳の友鶴を、はなちてやるは鴛鴦と、おほしめせども人のため、瀧口と横笛が、うき名をつゝ、
む御情 後生菩提にかこつけて、鳥の色音を樂しむも、よしなやおなじ佛性と、籠の口あみ打開き、

しあけ、しぱり首打つ法ならば、汝からふみつけん。」と、飛びかゝれば飛びしさり、「よつて見よ。」と
 ぎしみ合ひ、御所中上下騒ぐ聲、中宮かくと聞召し、表近く御出であり。「あれしづめよ。」と宣へば、
 女中聲々、「これ宣旨がある、御前なるわ。」と制せられ、「あつ。」と頭をさげにける。中宮仰せ有りける
 は、「横笛に不義ありとは、それは人の虚言ならん。横笛にかぎらず、いづれにても不義あれば、吟味
 の役をかうぶりし師高がみな越度、何しにあやまり有るべきぞ。瀧口が山雀を逃せしも、餌を飼ひ水
 をかふたびに、籠の戸あけまいものでもなし。籠鳥の雲を戀ひ、羽あれば何かたへも、飛び行くは不
 思議でなし。殊にその山雀は奥の庭へ來りしを、手づから捕へて、伏籠の中に入れて見せ參らせんと、北山の
 もてなしに、庭籠の用意ありと聞く。その山雀も諸鳥の中へ、ひとつに入れて見せ參らせんと、お返
 事よろしく申すべし。横笛も瀧口も、必ず／＼氣にかけな。切腹とやらいふことは、聞くもうるさし
 恐ろしや。九獻でも取りはやし、機嫌ようしてはや歸れ。」と、慈悲深き御詞、二人は身にしむ有り難
 さ、「忝し。」と頭をさげ、涙を流すばかりなり。師高は灑面つくり、肘をはつたる無念顔、中宮御覽
 じ、「やい師高。よしあしにつけ今日の噂、堅う致すなと下々にきつといひ渡せ。その上にも沙汰あら
 ば、其方があやまり。」と、入御ならせ給ひける。人の歎きの山雀を、打ちかへしたる上々の、御なさ
 けこそ、三重たゞならぬ。

蹴はなし驅け出で、瀧口には一言の挨拶なく、横笛の小がひな取つてつきのけ、はつたと睨んで、「なんとこの御所を茶屋揚屋と思ふか。たとへ男御所にも、使者奏者には作法あり。上から下まで女子原、ことにこの師高が、仕置をも守らず、尾籠の振舞、不届とも慮外とも、名をつけていひ様なし。あまつさへ大事の鳥を取り逃し、ようのめくと生きてゐて、人中へ面が出さるゝか。重々の罪科、侍なれば仕様あれども、女なれば死罪をゆるして牢舎なり。中間ども横笛に繩かけよ。」とねめつくる。瀧口すゝみ出で、「いやこれ郡司殿。今日の次第、横笛いさゝか存ぜられず。某一人の不調法、切腹と覺悟致せし所に、何とやらん見苦しき耳こすり。瀧口も耳あれば、よつほどあたつて聞きにくし。侍なれば仕様ありとは、サアその仕様承らん。瀧口は侍どうなさるゝ。」ときめつくる。「いや異な事を耳にかけめさる。某が支配するこの御所の侍が、斯様の不義不届有るなれば、踏み付けて括しあげ、しぼり首はねて獄門にかくれども、お手前は重盛公の御内衆、をどつてもはねても、腰元衆と狂はうが、山雀をむしつて焼鳥にしてくらはうが、この方にかまはぬこと。腹が切りたか切りめされ。ヤア何とおそなはる。横笛に繩かけて、牢屋へ引け。」と呼ばはりける。横笛居丈高になり、「これ御所の仕置をする人が、みづからを始め女中衆へ、狀文つけぬは一人もない。この言譯から聞かん。」といへば、瀧口刀に手をかけ、「小松殿のお家のならひ、外の家も吟味する。蹈みつけてくゝ

候。山雀も戀ひしたふ袖になつきくる人よ人めのわを潛れかし。お奏者の御返歌、聞かまほし。」とほのめかす。横笛は魂も、ぬけて心もどきくと、山雀も目につかず、御口上も耳にとまらず、嬉し恥かし氣はもやつく。ねぢ寄りすり寄り身を跳き、「ア、おもしろき御歌、返歌はかうもござんしよか。山がらや山のもみぢばこがれなば谷のくるみとわれもしづまん。」「ムウこの御返歌は明後日、紅葉の御遊覽の、北山の谷陰にて、忍び逢はんのお詞か。」「ハテ紅葉より茸狩に、そもじ様と只二人、こちや谷間の松茸を。」と抱きつけばぞつとして、「かんまへてさうぢやぞや。こつちは違へぬ忝い。」と、抱きつくやら吸ひつくやら、山雀籠を打ちこかし、餌も水もうちあけて、輪もちりふくにつれたり。「南無三寶。」とあわてふためき籠の戸を開け、兩手を入れ、こゝをなほせばあちらが離れ、さか様にしつ横にしつ、鳥はばたつく氣はむしやつく。「エ、辛氣や。」と頭をかく、そのひまに鳥は籠を飛んで出で、お庭の梢、御殿の軒、枝うつりして飛びめぐる。二人は狂氣の如くにて、「あれくそこへ。」「それそこへ。」と、飛びあがり追ひ廻し、「來いくく。」と手を振れば、さすがなれたる曲鳥の、宙にて羽がへし二つ三つ、くるりくとうち返し、行方知らず飛び去りしは、さても是非なき次第なり。瀧口も爲方なく、横笛はなほ途方に暮れ、あきれはてて立つたる所に、中宮の侍所加賀の郡司師高は、戸無瀬の局の弟にて、御所中に威をふるひ、五常をしらぬ我慢者、聞くとひとしく遣戸

は一人もゐらず、かけ這入せまいぞ。」と喚かれて、「南無三寶、雷婆がおこつてきた。臍つかまれな。」とちりぐに、皆々奥にぞ入り給ふ。横笛は日頃の思ひ、胸もだく／＼聲ふるひ、「御使者是れへ。」と立ち出づる。瀧口も積る戀、顔を見合はせうつかりと、思ひと戀の山雀も、中にうかる、瓢箪の、氣もぬけがらとなりけるが、「ヤ先づ御口上申しあけん。」と手をつきて、「主人小松の大臣申し上げらる、は、北山の御遊、彌明後日、早天より御車を出さるべし。此方は曉まで、とほんと思ひ明しては、寢られぬま、に夢にも見ず。晝は晝とてやるせなく、御姿が目のさきへ、ぶらり／＼とぶらついで、御奉公も身につかず。夕暮方の戀しさ、武士の涙は一代に、一度こほすかこほさぬもの。ほんに男のあることか、朝から晩までこの様に、しく／＼／＼と、泣いて／＼泣きつめる。誰が泣かすると思召す。ヤハア何を申すやら。先づもつてこの山雀は、人の手を振る手先につき、輪をくゞり水をくみ、様々の藝鳥。それ故都の手ぶりと名づけ候。中宮様、花鳥に御心をよせらる、と承り、小松の内府献上いたされ候。いで御奏者の御馳走に一曲。」と、手をあけて、「ひらりくるり、ひら／＼ひら、くる／＼／＼、はつとうつたる中返り、ま一つ返れとんほう返り、一二の輪ぬけ三の輪くゞり、四も五もくはぬ、戀の悟りの輪をぬけて、唄かはいややさし、情つるべのつん／＼つるべの、しとんしと、ん、しとん／＼、つん／＼つるべの、水を汲むこそしをらしや。これにつき瀧口が一首つらね

がない。上にも下にもすぐ風俗、男の上々きつするとは、齋藤瀧口頼方。なう横笛殿、さうぢやないか。と口むしられ、「エ、皆物好が至らぬの、瀧口ばかりが男か。尤もきれいな生まれつき、悪いとはいはれぬが、あの風は必ず器量自慢して、根性が悪いもの。この横笛は身ふしたえ、嫌ぢや〜。」と有りければ、残りの女中一同に、「こりや憎い〜。刈藻の様に打明けて、左京之進義次はいとしらしい男ぢやといへば、一そう手がつかぬ。この横笛は身ふしたえ、いやぢや〜が尙いやぢや。それ程いやな瀧口を、いつぞや小松様のお鞠の時、葛袴の綻び縫うてやるとて、袴のまちをいたゞきやつたを皆見つけた。まだそればかりが瀧口の、口のごやつた汗手拭を、むまさうにねぶりやつた。それでも身ふしたえていやか、すりめぬかせ〜。いざこの過意に帯といて裸にせん。」「拜む〜ゆるしたも。」「こそぐれつめれ。」と高笑ひ。女中仲間ばかりそめの、じやれも男の噂なり。かかる所に瀧口は、山雀の籠持たせ、小松殿よりの御使者齋藤瀧口。お取次の女中たのみません。」と案内す。「そりや彼の君よ。」と氣を上げて、「今日の奏者は横笛殿、仕合なあやかりもの。横笛まではおよびがない、せてて尺八になつて、あの瀧口で吹かれない。お茶でも持つていきたい。」と、おしあひへしあひ覗きあひ、「あの愛敬ある頼さきへ、ほつかりと食ひつきたい。ぢつと抱かれて締められて、締め殺して貰ひたい。」と、身悶えそゝる折から、局の聲にて、「女中衆召しまする、さつきにからお手がなる。お側に

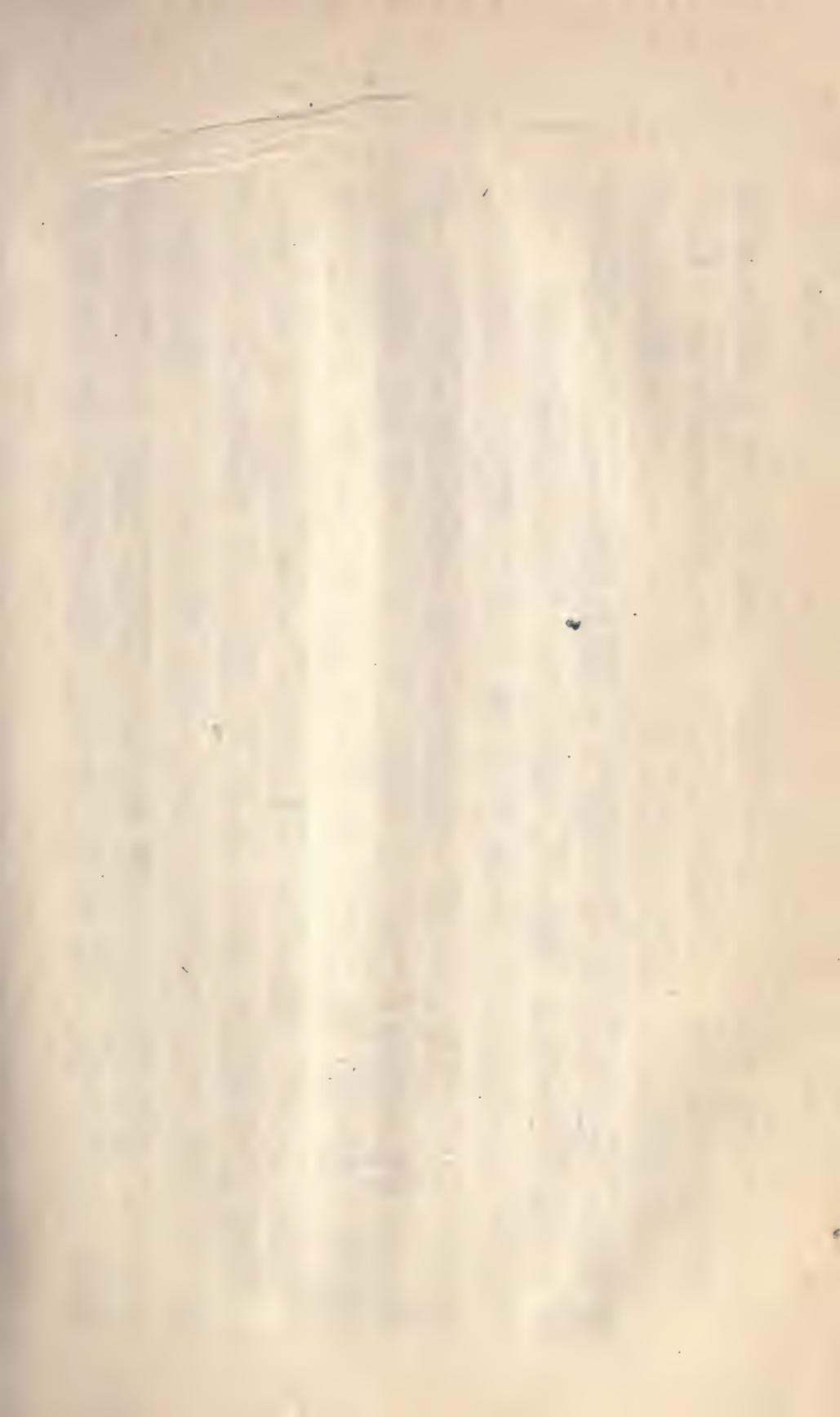
と、山の紅葉はつけたりに、わかい男を見る樂しみ、「早う日も暮れ明日になれ、そのあくる日に早なれ。」と、宮仕さへ手につかず。中にも横笛、刈藻とて、二人は美女の名をとりて、心利發に情あり。器量も人にこえければ、中宮のお氣にいり、傍輩づきもむつまじく、今日は横笛お奏者番、廣廂に詰めければ、非番の女中ばら／＼とあつまり、これ横笛殿、茸狩の御遊が十二日に極まつた。腹一はい男見ようぢや有るまいか、何と御供は誰である。平家の御一門はどなた／＼が御出でで有らう。あはれかし、よい男すぐつてお供なされるれば、どつというた祭ぢやが、もし能登殿の様なすさまじい、女子といはば七八間、取つて投げさうな衆が見えたらば、どうもをかしうあるまい。」といへば、刈藻聞きもあへず、「いや一概にいはいれぬ。盲千人、目あき千人、とかく縁次第。平家一番の若衆といふ、經正殿もこましくやくれて、十四の春から聲がはり、せゝこましうてこちはいや。敦盛様はほつとりと、抱いて寝たい風なれど、はや奥様があるからは、願の雫叶はぬ浮世。越中の次郎兵衛盛次殿の弟、左京之進義次は、見す／＼情もありさうに、いとらしい男なれど、かたい兄御の毛蟲殿、吟味づようてこれも叶はぬ浮世なり。とかく天道のあてがひ次第。」といひければ、八雲、お花詞をそろへ、「天道任せにして置いて、悪七兵衛景清、上總の五郎兵衛といふ様な、つはものに取りあたつたら、面白うも有るまい。主馬の判官盛久は、去年北山の茸狩に、一曲一奏は出来たれども、ぬらりととして張

月を、北山にて御覽あり、二三日も御逗留ある様に、計ひ申し上げられよ。」と、御返答ありければ、
 局悦び、「御嬉しやく、中宮様にもさぞ御機嫌。おそばつきんの若い女中達、なま年よりし我々
 まで、春の花秋の紅葉、一年に二たびの稀の行啓の事なれば、この御遊を待ちかねしに、はやくお
 返事申す爲、お暇申し参らする。木々の錦、野邊の蟲、打續き日和はよし、月も一入御機嫌と、下が
 下までのお嬉しさ。お侍衆その日はいづれも御苦勞すもじ致せし。」と、挨拶辯舌ながる、瀧の、戸
 無瀬は御所にぞ歸らるゝ。重盛公、主馬の判官盛久、越中の次郎兵衛盛次を召され、「秋に一度の茸狩
 の御遊、路次の警固、山の掃除、御假屋に至るまで、例年の如く、随分疏畧なき様にまかなふべし。
 さて中宮は花鳥に、御心をよせ給へば、假屋の前に庭籠をくませ、四季の小鳥の品々を、放ちて御覽
 に入るべきぞ。はた又この頃門脇殿より賜はりし山雀、輪をくゞり水を汲み、人の手にしたがひ様々
 の藝あるよし、重盛これを愛せんもおとなけなし。中宮の御慰みに参らせん。いかに齋藤瀧口、使者
 の用意仕れ。委細は女中まで披露の文を認めん。なほ口上もあるべし。」と、書院の一閒に入り給ふ。
 瀧口は昨日今日、前髪とつて十九歳、お小姓立の使者男、衣紋つくろふ出立の、器量見に来る姫ぐる
 み、山雀の御使、御所をさしてぞ三重あがりける。上臈御所の掟にて、男とあれば侍より、中間仕
 丁に至るまで、六十以後の隠居頃、きんか頭に照る月の、秋の御遊の日も極り、女中仲間はざわく

娥歌加留多

第一

夫婦は大倫なり。關雎は樂しんで淫せずといへり。敷島の我が御神天の浮橋に立ち、天の御柱を廻り、飛び來る鶺鴒の鳥にならひし妹脊の道、人に教へて人の種、八百萬代もつきしなき、人王八十代高倉の院の御宇、太政大臣清盛公の嫡男、小松の内大臣平朝臣重盛公の、賢徳四海にかゞやけり。武藝文學に長じ給へば、源平の武士重く敬ひ申す上、御妹の姫君中宮の宣旨をかうぶり、女御に立たせ給ひ、安徳天皇の國母として、建禮門院と號し奉り、公家のもてなし世に越え、家門さか行く常磐木の、陰に靡くや都人、賢人とあふぎ奉る。頃は養和元年九月九日、中宮の御方より、御祝儀の御使戸無瀬の局が折にあふ、菊の著綿置綿に、白髪交りの下髪も、千代を深めて勻ひけり。重盛公座をたつて、「御口上承らん」と宣へば、「先づ今日のおめでたさ、千歳の秋をかさね菊、さかりについで山々の、紅葉もさざと、御覽せられたき思召し候へば、毎年の如く北山の茸狩、御催しあれかしとの御使なり。」とぞ述べにける。重盛公聞き給ひ、「是れより申し上げんと存せし所。來る十三夜名殘の



死骸を擱んで差し上ぐる。憲法も吉岡も、二目とも見られもせず、「わつ。」と許りに伏し沈み、絶え入り絶え入り歎きしは、目連尊者の愁歎も、これには如何で勝らんと、見る人袖をぞ絞りける。涙の隙より諸見物、師匠といひ主の子を、膝の上に抱きもせず、石川ほどの者なれども、最期には氣も亂れ熱さに堪へかね主の子を、下に敷いたか淺ましや。」と、どつと笑へば、今を最期の石川、眼をくわつと見開き、「やいあんだらの大馬鹿ども、此の子を下に敷いたるとは、命生きる五右衛門が、主の子なればいたはしさに、苦痛をさせず殺さんと、思つて下に敷いたわやい。骨まで徹る煮油に、煎り付けられてこの様な、思案が出るものか出ぬものか、己等こゝへ入つて見よ、仇口ぬかす其の口で、念佛頼む。南無阿彌陀、南無阿彌陀佛。」と許りにて、遂に空しくなりてけり。憲法今はこれまでと、叔父の舍人を引摺み、「二人が最期の供せよ。」と、煮え立つ釜に打ち込んだり。何かはもつてたまるべき。煮えあがり沸き返り、骨もとろけて失せたりける。直に二人の追善の、大法事大吉事。本國本領出世あり。瀧に登るや龍門の、家も繁昌國繁昌、民も賑ふ釜が淵、底の知れざる大福德、末吉岡の憲法染、洗へど落ちぬ富貴なり。

傾城 吉岡染 終

しかりける有様なり。かかる所に憲法は、遠坂舍人を宙に引立て飛ぶが如く、檢使の前に大息つき、「お尋ねの憲法久太郎と申すは拙者が事。石川五右衛門は盜賊なれば、釜煎も鍋煎も御勝手次第。釜の蓋を明けたらば、五右衛門が逃げうかと、科なき倅を同罪は何事ぞ、但し此の憲法が代りならば、サア本人が罷り出た。拙者を如何なる科にも行ひ、倅は元の如くにして請取り申さん。殊に某禁中にて、狼藉致せし起りは、此の舍人。きやつが科をも糺明なくては、御政法は立ち申さじ。」と、血眼になつて理窟を言ふ。詞の中にも釜の中、我が子の方を後目に見て、坐に涙を流しける。檢使の人々聞き給ひ、「尤も倅に科なしと雖も、御邊の在處分明ならず。親に子を代へ刑罰に行ふ事、其の例なきにあらす、今は悔みて益なき事。一子が追善供養の爲、龍門一家、兄大炊之助本領安堵、我々は命に代へ、宣旨を願ひ下すべし。しやつは聞ゆる大悪人、上に申すに及ばず、心任せに致されよ。」と、詞を盡し教訓あれば、鬼神を拉ぐ憲法も、兄の出世に納得し、差俯向いてぞ居たりける。「最早氣息もあるまじき、蓋を明けて死骸を出せ。」と鐵杖にて大石劔ね退け、大勢熊手差延べて、蓋引き外せば、油煙四方を暗ませる、中より五右衛門焼け爛れ、ぬつと出でたる有様は、凄まじくも又哀れなり。憲法聲を掛け、これく五右衛門、死の縁無量是非もなし。一大事は最期の一念、倅が苦しみ不便やな。せめて死骸を一日見て、此の世の名残。」と泣きければ、釜の底を掻きさがし、煎り焦れとろけたる、

我が盗みはもと主君の爲、師匠の爲と思ひしが、盗まれた人々も、主の物師匠の物、報い積つて油責め、我が身許りか、主師匠の子を、同罪に煎り付くる。是れ程近き罰利生、あると知らざる石川が、愚癡といふ病より、恥を曝す淺ましや」と、鬼の様なる眼より、涙を流すぞ哀れなる。「エ、よしなき長口上。そろく油へ火も廻る。顛倒の戲言と、笑はれんも恥かしし、さりながら世上の人、不用心から盗みに遇ふ、盗人は悪き人、用心せぬは癡人、人に違ひはなけれども、皆一心のなす所、五右衛門が辭世の、一首の歌を聴けや」とて、「石川や濱の眞砂は盡くるとも、世に盗人の種は盡きせじ。火坑變成池、南無阿彌陀佛、皆々念佛頼みます」と、首引き入れし其の後へ、幼き者は顔出し「あついあつい。」と泣き喚く。母は生きたる心もなく、「なう久吉か、いとしやなう。十惡五逆の科人さへ、慈悲の上には助かるもの、西も東も知らぬ子が、何の科してあの責ぞや、諸萬人の方々、命を貰うて下され。」と、聲を上げて泣きければ、警固の武士も見物も、七條河原一まいに「わつ。」と叫びし其の聲は、天にも響きて哀れなり。釜の中より五右衛門が、引込めば顔出し、ひき入るれば顔出し「あつやあつや。」と、二三度は悶えしが、次第に猛火熾んにして、薪の煙炭煙、油の沸く音どうくく、煎り付けば又注ぎ入れ、湯煙雲に渦巻き上り、蓋の隙々逆る、油はさながら熱鐵の氷柱を下けたる如くにて、重りの石もどろくく、躍り上る許りなる、焦熱地獄大焦熱の、苦しみも目前に、恐る

其の上父の憲法が、禁中にての狼藉、御詮索の眞最中、彼此遁れぬ倅が因果、地獄の釜と思ふべし」と、涙ぐみ給へば、吉岡力も落ち果てて、「扱はふつつと叶はぬか。よし此の上は此の母も、一つ釜に煎り付けて、せめて我が子の苦しみを、母にも分けて見せ給へ。」と、かつばと伏して泣きければ、残る人々聲々に、「我々も共に責めてたべ。」と、聲も惜しまず泣き給ふは、目も當てられぬ風情なり。「時刻移るそれ／＼。」と、襦掛けたる役人ども、油を釜につきかけ／＼、下には薪炭火を熾し、煽ぎ立てたる黒煙、外より見るさへ愠きに、中でこがる、苦しみの、幼心の不便や」と、見物貴賤老若も、目を塞いでぞ念佛す。漸う油に火氣移れば、蓋の穴より五右衛門首をさし出し、につこと笑ひ、「オ、夥しの見物や、此の大勢の見聞衆に、今五右衛門が油責め釜煎に遭ふを見て、よい氣味と悦ぶ人、可笑しと笑ふ人、憎しともいひ、不便とも様々評議あるべきが、それは皆僻事、面々我が身の師匠ぞと、思うて念佛頼むぞや。某は日本國に古今無雙。盜賊なれども、企んでこれを仕始めず。我人盜みの始まりは、自然と先から持つて来て、盜めと言はぬ許りなもの。其の堪忍が佛の手引、其所を恠へず盜み取る、それこそ天魔の導きなれ、樟の太木も、二葉の時は、童にも摘み取られ、己がま、に茂つて後は石となる。盜みとて其のごとく、始めに思ひとまらねば、次第に増長し、止めん／＼と思へども、下る車を追ふ如く、車は早く心は後、惡に追ひ付く善心なき、これ人界のならひなり。

垣を結び廻し、大鐵輪に釜を据ゑ、蓋の重りの大磐石、同じく銅の筒を通して、油をつぎこむ漏斗とし、油樽を積み重ね、廻りに薪、炭俵、檢使の棧敷、横目の幕、杖突き棒突き、刑部職の下司、數百人立ち並び、「すは時刻ぞ。」と呼ばはる聲、洛中洛外近國鄰郷、見物羣衆の念佛の聲、拔身の兵具日に映じ、諸人の肌骨を驚かす。「己が罪といひながら、例少なき刑罰。」と、皆魂をぞ冷しける。道明寺の住持、龍門親子、大炊入道片足駄にて母引き具し、吉岡諸共七人連、諸見物を押し分け、檢使の前に一通の訴狀を捧げ、兔角の事も言はずして、伏し沈みたる許りなり。右筆訴狀を開き、高らかにこそ讀み上げけれ。「道明寺の老比丘等恐れながら言上、傾城吉岡が愛子久吉、盜賊石川五右衛門同罪の御縛め、歎きても餘りあり、愚母吉岡渡世の爲、三軒屋に身を寄せ候刻、彼の五右衛門強盜をうち候、凡そ萬人に知らるゝは遊女の習ひ、先年關東三谷に於て、一座面友の好みによつて、彼を帶し落ち失せ、共に釜中に捕はれ候。假令父母によつて、御科の仔細ありといふとも、三歳の幼稚何ぞ其の科に預るべけんや。重罪遁るゝ所なくんば、各七人の首を刎ねて、一子の一命に代へられば、生前といひ、萬劫の御慈悲たるべく候。依つて訴狀如件。老比丘尼道林、龍門の後室、同娘舞樂の前、同妹和琴の前、香春大炊之助入道、同老母、久吉が母傾城吉岡判。」とぞ讀み上げける。檢使の人々聞き給ひ、「近頃不便の事なれども、前代未聞の科人と一緒にありしは、罪なしともいひ難し。

拜み願へば、「なう尼前、きやつは石川五右衛門といふ盜賊の張本、天下第一等大事の囚人、此の倅に科は無けれども、倅を出せば五右衛門を取り放す、蓋を取らねば、倅とても出されず、是非に及ばす同罪。叶はぬく」といふ聲に、吉岡、「わつ」と泣き出し、「なうお比丘尼様尼御様。あの子の母は自ら吉岡と申す者、悪い所に居合はせて、俘囚となつたが身の因果、語れば様子もあること。先づくあの子の命を、申し受けて助けてたべ、今生後生の御慈悲。」と、聲をはかりに歎けども、姫君姉妹世を憚り、それとても名乗りもせず。住持の尼も爲方なく、皆々、「これは。」と許りにて、泣くより外の事ぞなき。追手の武士も、「此の上は吉岡に科はなし。落著までは此の寺に、預け置くぞ。」と、繩切り解き、「サア此の釜を直に、京都へ送れや。」と昇き上ぐる。吉岡は、「今一度聲なりとも聞きたや。」と、取り付けば拂ひ退け、立寄れば追拂ひ、先を拂ひの警固の聲、母は悲しみ叫ぶ聲、あらかしがまし釜の蓋、何時か明くべき七月の、十六日も程遠き、都を指してぞ上りける。頃は慶長の庚戌、暮春の天も明らけき、國政遁るゝ所なく、強盜の張本石川五右衛門、自縛に掛り俘囚となる。此の者飛鳥の術を得て、空をも翔ける曲者なれば、取り放しては不覺なりと、牢屋へも移されず。憲法が一子諸共に、もとの釜に入れながら、蓋に小さき穴を彫りて、食餌を與へ、頭ばかりを差出し、あるに甲斐なき蜂蟻の、其の日々と長らへて、既に今月今日の、釜煎の刑にぞ極まりける。洛陽七條河原方三町に大

ば「近郷の在々まで起し、却つて追掛くる、我等許りは免も角も、此の子が命助くる爲、何になりとも隠れたし。」と、覗き廻れど隠所なく、接待の大釜の蓋を明けて、「これ／＼天の助け、有り難し。沙汰遊ばして下さるゝな。」と、飛び入りて身を潛め、内より蓋をかき寄せて、「佛の慈悲。」と悦ぶも、地獄の釜とぞなりにける。津の國、河内兩國の武士、かねて王命蒙り、見付け出せし事なれば、在々の百姓驅り催し、夜廻りは吉岡に、繩を掛けて一手になり、梅の林を探し寄せ、寺内へどつと込み入りて、道心尼の部屋々々より、二階、天井、縁の下、社壇の内まで探せども、行方のあらざれば、追手も今はあぐみ果て、森の四方をとり巻きしが、「宙を飛んで逃げけるか。」と、各呆れて休み居る。住持を始め弟子達も、「扱は重き科人、されども目の前殺生なり。助けばや。」と陶し、竈を取巻き立ち給ふ。物馴れたる侍大將、組頭、竈を隠すに心を付け、十人餘り領き合ひ、聲を合はせてつと寄り、邊の比丘尼を取つて突き退け、立ち掛つて釜の蓋、一度にどうど押ふれば、中に、「わつ。」と子の泣く聲。「サアこれにあるには極まつたり、釜を搦めよ。」「心得たり。」と、雑兵、百姓我劣らじと、大石を重りに掛け、大木伐つて十文字「繩よ鏈。」と犇いて、八重無盡にからけしは、綱を懸けしに異ならず。住持も今は叶はじと、「なう如何なる科かは存ねども、神前といひ寺の庭、殺生戒も勿體なや。さりながら罪ある人、助けてたべとは申すまじ。せめて幼い子の命、此の尼に御芳志あれ。」と、

け、其の身は直に歸られし。」と、語り給へば親子の人、「虚無僧は知らねども、上臈とは若し妹か、逢はせてたべ。」と嘆かる、聲を聞き付け和琴の前、「なう母上か、姉君か。」と、驅け出で給へば、「やれ生きて居たか、我々もまだ死なぬわ。」と許りにて、親子三人手を組みて、暫し涙にくれ給ふ。や、あつて和琴の前、石川五右衛門が手に渡り、三軒屋へ賣られし次第、憲法の情の義理、吉岡の身を替へて、郭を遁れし憂さ辛さ、語るにつけ問ふにつけ、「憂き節繁き憂き世の中、疾く捨てざりし事ぞ悔しき。共に御弟子。」と禮拜ある、菩提心こそ殊勝なれ。住持重ねて、近頃頼もしく候へ。叔當寺には毎月二十五日、攝待供養を執り行ひ、參詣往來に茶を施す、初發心の沙彌尼の役。あの火釜を洗ひ磨き、水を汲み茶を煎する。皆様は大名の姫君達とは申せども、寺法なれば黙されず。天満宮への御奉公、面々後世の爲なれば、御苦勞ながら。」とありければ、「檀特山の法の水、法の薪と存すれば、何か苦勞に候はん。」と、襦袢取り甲斐々々しく、佛に仕ふる修行の様、貴くも又いたはしし。かかる所に泥塗れなる大男、三歳許りの子を負うて、氣息をはかりに驅け來り、「借錢に請ひ詰められ、所を驅落致す者、債權方が追つかくる、お比丘尼様たち頼みます、影をかくして下され。」と、運盡きぬれば威も落ちて、虎に似たりし石川が、身のなる果てぞあさましき。「オ、いたはしけれども、寺とても聞所なく、三疊敷の部屋々々は、隠し甲斐もあるまじ、在所の内で百姓衆、頼んで見や。」とありけれ

濁り江の、濁りに染まぬ蓮の絲、引かれ結ばれ引き取られ、救ひ取られて紫の、雲に入るてふ雲雀
山、揚る雲雀や鳴く雉子、歸る鴈がね飛び來る燕、己が様々取々の、浮世の様も思はれて、春の野邊
こそ長閑なれ。高嶺の花は散り初めて、青葉隠れに一輪二輪、残る九輪の多武の峯、後に隔てて風吹
けば、沖つ白波立田越、下りて下りて見上ぐれば、日影も空に仄曇り、雨の笠置の山越に、彌陀の後
光と拜むには、上求菩提も頼もしく、麓に法の花田村、願ひ深江の寺近く、下化衆生の廻向の種、南
無阿彌陀佛、彌陀佛と、手向くる露の一雫、三界六道残りなく、遍く咽潤して、地獄の猛火すゞし
むる、法の冷水求め來て、道明寺にぞ著き給ふ。そも河内國道明寺は、忝くも菅丞相の御姨君、
道明尼公の古跡とて、千歳の後も松梅の、墨の衣の尼寺にて、天満宮もうつります、現世といひ後世
の種、誠に殊勝の靈地なり。舞樂の前親子の人、かねてしるべの便りして、かくと案内し給へば、住
持の老尼立ち出で給ひ、「よくぞく。何日ぞやより、發心のお望みとの訪れゆる、極樂世界の友待ち
かね、今日かくと存ぜしに、嬉しき親子の思立ち、何暗からぬ御身にて、菩提の道に入り給ふは、
これこそ誠の道心にて、佛も悦びたまふなれ。それに付き、一昨日の暮方、虛無僧一人若き姫御前伴
ひ、龍門殿の姉姫、母御は當寺に在すかと、尋ね來り給ひし故、未だ是れへは見えねども、豫々其の
案内にて、近き中に御出での筈なりと答へしかば、然らば此の上藤引合はせてくれよとて、當寺に預

立ち舞ふべくもあらぬ身の、名もうとましき舞樂の前、妙莊嚴の跡追ひて、母も勸むる法の道、夫は何とか難波瀾、短き蘆の節の間も、世々の報いを晴らさんと、我も足駄の行人や、戴く桶は千代能が、これも昔の跡とめて、水たまらねば月影も、宿定めず何處にか、袖を櫓の露をそぐ、經木の廻向とりわきて、乳房の母よ父の爲、有縁無縁の鐘打ち鳴らし、「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、彌陀の御國を頼む身は、生まれし里の住居さへ、宇陀郡を立ち出でて、願ひの道も明らけき、道明寺へと修行ある。親子の様ぞ殊勝なる。振り返り見る故郷の空、何を恨みて墨染の、烏が嶽の山の名に、まだ寐ても見ぬ曉の、別れ苦しき鐘の聲、初瀬の山はさもなくて、我に烈しき山嵐、杉の下風杉間吹く、三輪の神代の謂れを聞けば、これも姫神殿神の、晝をば如何で烏羽玉の、夜の契りのきぬくの、歸る所を知らんとて、苧環に針をつけ、裳裙にこれをとちつけて、跡をひかへて慕ひ行く。まだ青柳の絲長く、結ぶや早玉の、おのが力にさゝがにの、絲くり返し、かへり三笠山、大佛殿を伏し拜み、見渡せば奈良の京、けに古の都とて、春の錦とこきませし、柳櫻の八重襲、疊み込めたるつら山、葛小笠や菅の小笠に、はらりほろりはらほろく、零れかゝるは雨か霰か、雨でないぞの百千鳥の、鳥の羽風に花の露、袖に落ちては解けやらぬ、今も涙の郡山、天の香具山白妙に、霞絶えく當麻山、木々の若芽も夏近く、淺葱、水色、空色の、縹の帽子の影残す、中將姫も我が如く、繼母の心

る、智畧ちりやくを知らず。「遁のがすまじ。」とつつと入る。此方こなたの戸口とぐちへひらりと抜け、入り替かつて兩方りやうほうの、襖戸ふすまどをはたくと、さしもの侍籠さむらいひかの鳥とり。襖越ふすまこしに兩方りやうほうより、刀かたなを突き刺さし突き通とほし、盲突めくらちきに突き合あひしが、外そとは明あかし内うちは闇やみ、石川いしかはは手ても負おはず、民部左衛門みんぶさゑもん數箇所かずかしょを突つかれ、襖戸ふすまども朱あけに染そみ、のた打ち喚をく聲許こゑほかり、終つひに最後さいごと見えにける。いで立ち退のかんと思おもへども、人數じんず四方ほうに満みちりたり。石川いしかはも爲方せんかたなく、縛しばりし女房じやうぼう引き寄せ、「盗人ぬすびとは二階かいより、屋根越やねこしに脱ぬけたると、聲こゑをはかりに呼よばはれ。さなくばこれぞ。」と切先きつさきを、胸むねに押し當あて引きすり廻まはる。女房大事じやうぼうだいじと、大聲おほごゑあ上げ、「あれ盗人ぬすびとは、二階かいから屋根やねへ脱ぬけた。そりやく」と、呼よばはる聲こゑに裏表うらおもて、ばつと散ちつて亂みだれ立ち、「弓矢ゆみやは無なきか、射いて落おとせ、梯子はしご出だせ。」と騒さわぐ間に、子こを負おひながら石川いしかはは、走はしり出いで辻々つじくの、此所こゝでは、「そりやく」盗ぬす人びとよ。」彼所かしこでは、「それそこへ、ありや盗人ぬすびとよ。」と大聲おほごゑあ上げ、驚おどろかせば驚おどろきて、町人ちやうにんも侍さむらいも、西にしの方かたへはむらくくく、東ひがしの方かたへはむらくくく、むら羣鳥むらがらすな鳴なきわたる、ほのく、明あけの朝霞あさぐすみ、人目ひとめ掠かすめて退のきにけり。

下之卷

法のあしだ

變つた男め、何の面恥、生畜生」と、頼輔をはたと打ち、こづかを掴み引籠り、大の男を引寄せ引寄せ、食ひ付き敲き恨み泣き。さすがの五右衛門もてあつかひ、「あ痛く。これ夢見たか吉岡殿、目を覺して下され。」と、手を合はせてぞ拜みける。吉岡漸う心付き、「ヤア五右衛門殿かいなう。此方を見ても恨めしい。彼の人故に目を煩ひ、其の身に此の子を苦勞して、袖乞非人の所爲をもし、擧句の果てに、吉野といふ端傾城、嫂の妹を五右衛門が賣つての、何のかのと手管をして、置換へに遇うて吉岡は、元の水に歸つた。」と、膝に靠れて泣き居たり。五右衛門斯くては叶はじと、「エ、吉岡とも言はれし人の、世につれて氣が僻んだ、吉野といふは和琴の前、命に替へても郭を出すと、常々の念願遂げられしと覺えたり。卑しい氣を持つ且那でなし、尋ね逢うて聞き届けば、恨みも憎みも晴る、こと。只今で五右衛門が、定まつた宿もなく、山の奥、谷陰を家居とは致せども、明日は如何なる大名とも見せ掛け、槍、引馬で本陣宿へ泊らうとも、大商人のまねをして、手代數多に銀荷を引かせ、問屋の馳走に遇はうとも、自由自在の所在とは強盜。もと兵法を覺えしゆゑ、旦那憲法殿の御厚恩。縁の末にも疏畧はなし、いざお供して退け申さん。先づ若旦那は此方へ。」と、脊中に差向けしつかと負ひ、抱帯にて二重三重、我が胸にゆはへ付け、吉岡の手を引いて、既に出でんとせし所に、同類の退際を泊舟が見付け出し、辻番より内通し、二十騎組の夜廻り二頭、裏町を押し破り、表の格子を押し

いらぬ、錢も重たい、金銀と衣裳は何處にあるぞ。」と連れ歩く、「いのちに換ふる實はなし。何しに隠し申さん。」と、貯への金箱、金袋、衣裳箆筒、革葛籠、持ち出し／＼積み重ね、「もうよいわ／＼。十分は却つて一分。尤龍悔ありといふ事、石川が家の大事。我これを守る故、一度も盗み仕損ぜず、寅の刻より一陽兆す、陽は顯はれ陰は隠る。ぬしに利あるぞ、時移すな。海手の水門より、次第々々に持つて退け。」「承る。」と同類ども、打擔け提げ、懐に振ぢ込んで、我も／＼と持ち運ぶは、水を深ふるが如くなり。石川どうど座を組んで、「これ女房、この家に吉野といふ新造あらう。これはもと歴々者、此の五右衛門が師匠に付き、由緒ある姫なれども、不慮に出合ひ勾引し、肝煎頼んで賣つたれども、銀を取つて仕舞うたれば、又此の姫は故郷へ歸す。サア呼び出せ。」と言ひければ、「いや其の吉野は身請して、今日の晝郭を出し候。」と、言はせも果てず又引ん抜き、「謹をぬかすか、これなるぞ。」と、刀を咽に差當て、「何と吉野を渡すまいか。」と責め付くる。「此の上に傾城一人咨みて、何になり申さん。然も請手は、虚無僧久之進とやら、跡で聞けばお尋ねの憲法。江戸吉岡といふ太夫の果てと引換へ、銀なしに取遣し、其の吉岡は奥の間に、これが證據。南無阿彌陀南無阿彌々々々。」とぞ顛ひける。吉岡と聞くよりも、奥の間に驅け入りて、見れば江戸の三谷にて、見し吉岡に違ひなし。夢に驚き、魔はれ苦しむ其の息差。「吉岡殿々々々。」と揺り起す。むつくと起きて、髻を押取り、「心の

けにどうど蹴返し、早繩解き縛り上げ、「サア金銀、衣衣、財寶の在處案内せよ。」と、睨み付けたる眼ざし、無體至極の仕業なり。下女は恐れて裏口へ、走り出づるを同類ども、踏み伏せて猿縛り、大黒柱に括り付け、残る奴原刀を抜いて振り廻し、傾城、禿の枕の上、「聲を立つるな。鼻息でもするならば、斬り殺すぞ。」と閃かす、刃も光る目も光る。夜著引被り、今を最期の油汗、下男、飯炊は梯子の陰、走の下土に食ひ付き身を顛はし、念佛申す者もあり。恐ろしなんどもおろかなり。中にも大將頭巾を取り、「三人の者ども未だ夜のした、めせず、食物は何處にある。我も一つ飲むべきに、酒肴のあり所サアぬかせ。」と、するりと抜く。「ア、申しませうく。お飯はあの膳棚、酒はその手樽に。お菜は何も仕舞うて、參らるゝ様な物ぢやなければ、蒲鉾と乾瓢の煮染が少し、鱧の皮の炙りも、かうばしうてだんだない物。おしやうじがあるなら、乾蕪の蜜物が赤いお椀に御座んする。私が膳に付いたれど、片脇せ、つたばつかり。ほんに昨夜お出でなされたら、餘所からお萩が来たものを。」と、追従言はば助かると、下女が心ぞ憐れなる。同類ども居流れて、思ふ様に食ひながら、「やれ女め、やかましい。」と睨め付くれば、「あの様達の目元わい、御器の中から人見さんす。ぬもじ様の根本ぢや、何もなくとも、ようあがつて下されませ。」お茶はあれども盗人に、「お湯が薬罐にしやりく。」と、いうても繩は解かざりけり。酒食仕舞うて、樽も椀も踏み散らし、「サア来い。」と、主の女房繩引立て、「外は

三番太鼓限りに、屬託落居あるまでは、大門締めて客吟味、郭の内も静かなり。夜番が通りしその跡に、又五郎が門の戸敲いて、「川口屋からで御座る。太夫様達でも天神でも、ちやつとお一人送らつしやれ。お供して参らう。早うく。」と敲く音。眠り驚く下女、「あたやかましい、何處からぞ。お名も言はずに誰様でも、女郎をくれといふ様な素人らしい。こちや知らぬ。」と、半分黙で答へけり。暫くあつて又門敲き、「今宮屋から来ました、遣手衆に逢いたい。こゝ明けて下され。」と、呼ばはれば腹を立て、「うを眠たいに何ぞいの。遣手衆は皆揚屋にぢや。今時分ぶらくと、何の内に居やらうぞ。且那樣も留守なり、男ざれば少なし、世間が物騒な。代官殿の御用でなくば、更けて門を明けるなど、此中から言付ぢや。」と盗人の導きを、教へてやるこそ愚かなれ。今度は門の戸夥しく、「明けよ明けよ。」と敲くにぞ、主の女房驚きて、「先から、けしからず門を敲くは何事。」と、いふ内も猶敲きしに、女房内より、「何處より何の用ぞ。」と尋ねれば、小聲になり、「これは代官所よりの御使。お尋ねの石川五衛門在處、あらまし知れたる故、年寄又五郎に密かに諜し合はする事。若し留守ならば内儀に逢はん。」と、直化にたばかられ、「ア、私即ち又五郎女房。」と、門を明くれば、深山の様なる大男、兜頭巾を一樣の、同類かけて四人連強盜提灯提げ、つかくと押入つて、門口を礎と鎖し、女房が胸座しつかと取り、「なう悲しや。」と叫ぶ口、握り拳を突込んで、「いきほね立てば締め殺す。」と、俯向

歌吉野の花に目がくれて、流れし此の身は捨小舟、ふつとやめよ、いややめまいよ。はたと打つても
敲いても、憎いの裏が可愛なり。歌小面憎いいけずか。傍にがさりと寝たるは、稗栗、澀紙、粗筵、
のり立つた布に霰笠、鴈木鏞鮫肌、突く様で刺す様で、しつくりほつくり、寝返り打つては寐られな
い、閨の扇の風の便りも、絶えて三年のあはれけに、憂き事語る友にさへ、言ふに言はれぬ柳髪、誰
にか黄楊の櫛鏡、四季の仕著の花摺衣、單衣も手には流れの女の、先の世は扱如何ならん。凡そ心な
き草木、飛花落葉の恨みあり、鳥に四鳥の別れあり、斯くは思ひ知りながら、思へば恨みあり、思へ
ば嫉まし。ありし昔の百入千入、紙に染め込む吉岡染の、よしや吉野の、餘所に落ち来る瀧の水、洗
はば洗へ晒さば晒せ、胸に鋭き憲法黒茶の眞黒々、黒き鋼に食ひ付く齒形、鬼とも蛇ともならばなり
なん。二人伏籠の思ひの煙、昔の名香、匂ひ變じて今の燼、おのの黒木と燻るとも、誰にか著せん
脱ぎはやらじとくるくく、くるりと巻いてひらくく、ひらりくるりと巻いつ解いつ、取つ
置いつの憂き涙。主は何處に空蟬の、蛻のから衣いとせめて、戀しき時は烏羽玉の、夜の衣を身に重
ね、闇はあやなし梅の花、梅の梢にゆかしき人の、ありやなしやと攀ぢ登れば、枝も嶮しき劍のやり
梅、こはそも如何に淺ましや、我が魂魄の、魂は飛梅止るは白梅、紅梅落梅梅風順風、さつ／＼
として、夜半の鐘も埋もる。霞も夢も朧々と見えし姿も假枕、梅が香許りや残るらん。更くる夜の

りぞ此方寄れ。」と、臥したる我が子を、かき寄せ、前後不覺の泣き寐入、哀れなりける有様なり。亭主は篤と聞き澄まし、差足して戸際を退き、女房、遣手小手招き、「扱は今の虚無僧はお尋ねの憲法、此の分にては後むづかし。程は行くまじ追掛けて、たらしめて連れて歸るべし。何ほう兵法遣ひでも、いうても町人染物屋。たつた憲法一匹の染賃、大判十枚は握つたもの。」とひそめきて、三重跡を慕うて出でにける。

夢中のおぼろ染

諸宵々に、ぬぎて我が寝る狩衣、かけてぞ頼む同じ世に、住む甲斐あらばこそ。忘れ形見もよしなしと、捨てても置かれず、取るも嫉まし腹立ち寐入、思ひ切る瀬と切らぬ瀬の、瀬々の綱代木顯はれて、深き恨みの水行く川、蜘蛛手にかゝる夢の浮橋、夢とも分かぬ魂は、澤邊の螢燃えもせず、又消えもせぬ埋火と、こがれあこがれ迷ひ出で、梅が香暗き春の夜の、朧染なる形見の小袖、袂に映る吉岡が、姿はこゝに寐姿も、ありし所にありくと、陰と日向と二重形、染めて寫せし如くなり。數ならぬみのお山の夕時雨、つれなき松も二葉より、雲居の枝と契りしも、何故に結ぶの神無月、色も紅葉も枯れくゝに、なる身ぞつらき徒の男め。いつそ謠なら謠ばかり。誠交りにほだされた、起請も反古になるならば、神も佛も友達か。言へばいぶりの空涙、措いてたもくゝとの、雪の吹雪よの。

ければ、江戸詞にきめられて、流石の遣手も二言と出す。又五郎聞き付けて、「ヤアこれ〜吉岡今更さうは言はれまい、兄虚無僧が手形、これを見よ。」と押し開き、「此の吉岡丸年三年、傾城奉公勤め申すにつき、吉野と申す太夫と引換へに御暇下され、吉野代りになり候。上は、假令此の吉岡に、如何様の深き客出來候とも、連合方より少しも構ひ申さず、屹度勤めさせ申すべく候。請人虚無僧久之進、判も手形も覺えがあらう。」と見せければ、吉岡はつと心も迷ひ、繰り返し巻き返し、見れども讀めどもまがひなし。「ハア、出し抜かれた騙された。心を盡し、身を盡し、親をも非人の身となして、子にも憂き目を見せたるは、誰が爲ぞ男のため、子のある二世の女房賣つて、其の代りに我が戀の、吉野とやらを請出すとは畜生め。此の手形は去狀か。オ、去狀ならば手から手へ、直に取らう。」と駆け出づる。亭主夫婦、遣手も取り付き引止め、駆け出づれば引止め、閨に押し入れ引き据ゑて、おの／＼外に走り出で、間の戸はたと鎖しにけり。吉岡は人々の、立聞するとも知らずして、憲法染の形見の小袖、顔に當て身に付けて、絶え入り／＼泣きけるが、「おぬしの手染とありし故、こゝろの誠は此の衣に、染め込みたりと嬉しさに、身に離さじと思ひしが、能く／＼思へば此の小袖、吉野に遣らん爲なれど、當座の心やしなひに、我が方への偽り言。たらされしはこれ故、恨めしや口惜しや。」と、くる／＼と引絞り、庭へ取つてふはと投げ、力にも便りにも、頼みにも樂しみに、其方許

に其の日もくれなるの、花を揃へて花ざろの、色であかりの夜見世かや。數々點す燈火に、玉を連れ
綺羅をやる、これぞ長者の萬燈會、中に貧女の吉岡は、又古に返る波の、幫間女郎引舟を、太夫仕
立の衣裳つき、武士をこなしの江戸力み、出立ばえして比びなし。水揚分の口開き、扇屋に先の聲掛
けられ、そこへ遣手の杉が来て、「これ太夫様、扇屋からはお客様が見えたとして、七度半の使が立つ。
頭から其の様では、三軒屋の勤はならぬぞえ。江戸風措いて貰はう。」と、聲高なれば、吉岡はつと思
ひ、「ム、お客様が見えたとは、それは誰が事。此の吉岡は幫間女郎引舟の約束、粗相を言うて恥かき
やんな。遣手するなら、目を明いて遣手しやれ。」と言ひ返す。「ア、目が明いたか明かぬか、親方の言
ひつけ。よしば當座の挨拶に、客させまいといふとて、銀二百枚、八貫六百目、引舟は扱置き、假令
龍頭りうとうけきしひ首でも、客もせずに取りらうとは、あたゝか饅頭まんぢゅうよね饅頭まんぢゅう、そりや淺草にあるけな。」と、あざ笑
へばこらへかね、「これさ長々しい御託を述べるな。聞きたくないす。なまぬるつこい上方の女郎を、
廻した格を突出したら、當が違ひ申すべし。此の吉岡がすがりの花なればこそ、ぬし達に身をぶんま
かする。客と寢べいななら、何のわづかな銀見たくない。親方殿も聞きなされ。びやくく客はしない
さ。お江戸の傾城は、水道の水を呑んで骨が堅い。ぬしが様な、切先の鏽びた鏽遣手に、廻さるゝこ
んどぢやないす、今一度言つたら、おつかないめにあはす。そこつっぱしつて、なくなれく。」と言ひ

法、亭主の傍に寄り、「最初は吉岡が聞く前、銀子をと申せしが、此方の新造吉野に、すこし譯の候へば、二百枚の銀よりは、吉岡と吉野と引換へに、今日お暇下されば、吉岡が年を二三年も切り増すか、お望み次第に仕らん。如何様とも御憐み偏に仰ぎ奉る。」と、思ひ込うたる色目なり。亭主夫婦顔を見合はせ、これは變つた望み事。幸ひかな吉野が元の出所明らかならず。それ故に町儀の連判も未だせず、出入のない内に、慾を離れて換へもせう。されどもあの吉岡は、牀を勤めぬ損がある。總女郎同前に、異議なく勤めさせんといふ、其方が證文召されうなら、如何にも換へてやらん。」といふ。「何が扱傾城に賣るからは、左様の手形は千枚でも仕らん。」と、請合ふにぞ、又五郎も喜びて、「それ女房共、吉野に其の分言ひ聞かせ、連れて來い。」と、懸硯、手形の案文取り出し、「サア此の通り。」と見せければ、憲法披見し、「ム、これでは假令吉岡に、男があると申しても、去狀同然の文體、此の上異議は申すまじ。」と、さら／＼と書き認め、聽て判をぞ据ゑにける。姫は誰とも知らねども、郭を出づる嬉しさに、足も空に走り出で、「抑如何なる御好みに、斯許りの御情、心得難し。」と宣へば、「御尤も御人も。道すから我等が名、仔細も語り申すべし。母御、姉御は河内國道明寺尼寺に閑居の由、伴ひ逢はせ參らせん。寸善尺魔のなきうちに先づ／＼お暇。いざさらば。」と立つ、鳥の跡、二五の十年一口に、思ひがけなき身請して、行くや寢耳へみす知らぬ、人に誘はれ出で給ふ。既

といふ詞の中、吉岡は押取つて、「いや兄様は急用の旅立なれば、私が身の代今日中にも下されば、我が身も直に勤めません。明日と延びては、御相談成り難し。」と言ひければ、夫婦喜び、「それこそ願ふ所なれ、後とも言はずたつた今銀渡さん、ざつと濟んだ手を打つた。」さらり／＼と手を打つて、「それ遣手共、吉岡に身仕舞させ、風に合うた衣裳四つ五つ仕立てよ。其の子が乳母を早う聞け、先づ先づ奥へ。」と勇みける。無慙やな吉岡は、今逢うて今別れ、何れも夫の爲ながら、急に談合極まれば、俄に腕を熟と、男の顔をうち眺め、「なう此の上は此所に、半時も足止めず、一日路も所を去り、ちよつと自筆の文一つ。此の子が事も氣遣はず、只お命を大事に。」と、涙くみたる面相に、男も心憎々と、肩に懸けたる平包「これには今の流行染、憲法が手染の小袖、其方に著せんと拵へし。肌に觸れて慰め。」と、投げ出せば押戴き、「朝夕心の力にも、樂しみにもこれ一つ。今が眞のさらばや。」と、名残惜しさ愛憐さの、思ひを昔に染め返し、やき返しては憲法の、戀地も弱る黒小袖、泣く／＼奥にぞ入りにける。郭にばつと沙汰あれば、「名高い女郎御抱へ。」と、方々の悦び使、揚屋から日を極めに來る、家内の繁昌賑ひを、見るに付けても憲法は、心の内に思ふやう、「和琴の姫を五右衛門が賣り、今日吉岡を賣ること、皆我が爲といふ中にも、吉岡は夫婦合點づく、彼の姫郭を出さでは、死しても一分立ちがたし。」と、思ふ折から又五郎「虚無僧殿、いで銀渡さん手形せられよ。」とぞ申しける。憲

酒よと飲み食ひし恥かしさ無念さ。せめて心の言譯に、此の郭を走らせんと、折々は門に立つ。よし此の事は捨てません。一錢の貯へなき、親子三人山家にかくれ、飢死せんも口惜しかるべし、訴人あつて捕つたにあはばそれまで、一天の君の御遊の庭、名を表はしたる憲法が、無手々々とは捕られまい。」と、言はんとすれば、「ア、高い。」と、夫の口に袖を當て、お身に過りにして、石川が合力受け、同罪遁れあるべきか。殊にお咎め深き身で、一夜も手足は伸ばされず、幸ひと私が古よりの此の紙子、袖乞せしも名代となり、爰の主人御手洗屋の又五郎殿、牀勤めすの座敷の花、幫間女郎の合點で、此の子諸共厄介し、三年切で銀二百枚、今でも談合せんとこの事、互に無事の便宜を聞けば、三年逢はぬは堪忍なる、二百枚の價では、山の奥でも辛々に暮されまい物ではなし。妹にして我が身を賣り、其の金持つて何方へも、早々退いて下さんせ、あの如く繪圖に描き、屬託掛つた其の中に、狼狽へて見付けられ、後悔しても返らうか。何とて廣い此の世界、狭いお身にはなつたぞ。」と、忍び口説きて泣き居たり。又五郎夫婦、遣手伴ひ立ち出でて、「ヤア吉岡が親仁も往生せられたけな。豫々もいふ通り、其の子の養育、男のため、座敷を勤める許りで三年を二百枚、虚無僧何と思召す、傍から強ひて下され。」と、言ふを折よき幸ひと、「申し、縁は深きもの、互に昔を語り合へば現在の妹幼少よりちりくくの、貧乏神の奉加の爲、近日他國仕る。銀子も少し入用なれば、兔も角も。」

となりしも親の蔭、今は私が手一つで、三味線弾いつ脊中には、負うた子よりも抱き縮めた、男はこれでも忘れぬ。」と、三味線からりと脊脱に、身を投げ伏して泣きければ、虚無僧も笠傾け、其の座の女郎新造も、「道理々々。」と許りにて、共に袖をぞ濡らしける。「可憐しや、それでは三味線も身にしままい、所望するも心ない。かねぐ内親方の、噂せられし事もあり。身の立つ談合ありもやせん、虚無僧様あの人を、必ず其所に留めてや。」と、皆々奥に入りければ、憲法見送り人目の隙、「太夫か、我ぞ。」と笠を取る。「オ、初めからさう見付けた。常闇の世となつても、傍に居る男を見違へてよいものか。」と、夫婦齧と抱き合ひ、また濟々と泣きけるが、「なう恨みつらみ懐かしさ、語りたし事、泣きたい事、十日や二十日や一年で、盡きしなけれど方々にて、恐ろしい噂あり、此の町にもあの様に、繪圖に描いて詮索は、誰が事ぞお身の上、如何に野太い氣なればとて、此の人立へのらくと、命知らずといふもの。先づ五年でも十年でも、世間の鳴の靜まるまで、深山の奥の山里へも、親子三人陰をして、遁る、だけと思召せ。斯ういふ中にも身が震ひ、恐ろしさよ。」と言ひければ、「けに尤も至極ながら、あの石川とは、かの江戸の五右衛門よ、師匠を重んじ、我を育むその間、不慮に盗みを仕覺え、今強盜の大將なり。爰の新造吉野といふは兄大炊之助が小姑和琴の前、五右衛門が勾引し、傾城に賣つたる其の金とも、知らずに我は合力受け、樂々と年を取り、後で聞けば、嫂の妹を、雑煮よ

らはらくの泣き姿、一雫が百兩づ、黄金涙」と悦びて、奥をさしてぞ入りにける。情ある傍輩にて、「我人此の身に染りては、酷さに變る事はなし、忘れ種には戀と酒。よい戀がな肝煎りたい。門へ来る物貰ひに、紙子吉岡とて、三谷で口をきいた人、男故に袖乞しても、戀が命を結びつく、絲切三味の歌の聲、今日も來よかし聞かせたい、先づわつと飲みかけん。」と、いさめてもいたはしや、蘭省の花の時錦帳の下、姫君様とかしづかれ、昔忍ぶの軒の下、深編笠の虚無尺八、聲細々と怨むが如く、慕ふが如く泣くが如く、我も泣かする戀慕かや。竹の音色に誘はれて、歌三味線鹿が寄る。歌「エイソレ我も妻故身を震す、我が中は、千賀の鹽竈近くて、袖が潮たる。エイソレ近くて、袖がしほたる。」有合ふ女郎聲々に「あれ今言うた紙子吉岡、よい所へ見えたなう、いとしや今日は子を負うて、いつもの父御は何として、氣色でも悪いか。虚無僧様も一所に腰掛けて一曲、此の新造の慰め頼みまする。」と言ひければ、編笠越しに憲法は、それと見るより心もくれ、目もくれ竹の尺八の、袱紗に涙を絞りけり。吉岡も恰好は似たると許り笠の内、覗かれもせず問はれもせず、餘所ながら身を摩り寄せ、涙に心を通はして、「ア、皆様はしをらしう、親の事までお尋ねか。あとの涅槃の名残の雪、宵の寒氣を苦しみて、夜明の霜と失ひし、昨日が三十五日なり。母の爲には身を賣りて、巾ひ巾ひも致せしが、父親には末期まで、男ゆるに苦勞をかけ、目を煩へば手を引かれ、孫の面倒見届けて、人

吹き付けまする。」と羨みける。又五郎も機嫌能く、「これく吉野、あの繪圖の兩人、客の中にも知人にも、似た者あらば隠すまい、塵一本でも貰ふか、預り物でも致さば、包ます申し上げんとある、町中の連判、印判なくは筆の軸でも、しるしをしや。」と言ひければ、年いかねどもさすがにて、「これは大事の御詮議。申して返らぬ事ながら、隠して判を致す事の、恐ろしさに申すぞや。自身はもと弓取の家、父には後れ、自身が母と姉上とまゝ、しき中のさがくしさ。母の悪念われ故と、吉野川へ身を投げ、死にもやらす漂ひしに、あの石川五右衛門といふ、繪圖に少しも變らぬ大男、引き上げ助け、尼にせん法師にせんと、いたはる體にて方々と連れ歩き、身に覚えなき叔父とやらんに引合はせ、其の方より奉公に抱へられし事なれば、明さ暗さを其の人に、尋ね究めて自らが、いまの流れの憂き苦患遁れて、古郷に歸る様に料簡あつてたべかし。」と、袂を顔にさめくと、語りもあへず泣き給ふ。亭主もはつとは思ひしが、「いやくもとは川流れであらうが、瓢箪であらうが、肝煎慥かに親、請人の手形あれば、其方も此方も難儀はかゝらぬ。さうでないかお町衆。」尤もく、來歴を詮議しては禿一人も置かれぬ。先づとくと合點させ、其の上の義になされ。お暇申す。」と立ち歸る。主人は家の姉女郎、定家、小太夫呼び出し、「新造と酒事して、氣を浮かせて煩はすな、随分大事にかけてくれ。傾城といふ者は、涙脆うなければ大金にはなり悪い。今の涙を見なんだか、袂を顔に押し當てて、は

圖に表はし、大判十枚の屬託。年寄なれば又五郎が、格子の前に立てらるゝ。見物の貴賤口々に「哀れ似た者見付け出し、大判をあたゝまらう。」と、人々顔をきよろ／＼と、見らるゝ者も見る者も、互に繪圖と見合はする。慾の世界で水臭き、禿、遣手も立ち掛り、「なうお杉殿、あの大きな小判の名は何といひまする。」「オ、あれか、あれは一步の祖父様といふ者。」「ム、それが定なら、客様達のやらんした、こな様の一步も祖父になるまで、取つて置いて見さんせぬか。」といひければ、「さればさう思へども、此方が手へ渡ると、一步の壽命が短うなる。明日は晦日家賃時、折角ゆゝべ貰うた一步の最期が近づく。」と、とり／＼喚き羣集する。其の日の行事五人組、町代、用人打連れて、「お觸書の通り懇に申し渡し、太夫より端まで頭數、二千三百四十五人の傾城人別の、判形相濟み歸りました。」と言ひ入れける。年寄又五郎立ち出で、「早速に埒明き御大儀々々々。」と、帳面披見し、「これは扱此方の新造、吉野が判がまだ濟まぬ。なう何れも、此の頃珍らしい新造を抱へた。いか様元は、歴々の侍の娘と見えた。器量は十人竝なれど、心の發明、行儀の堅さ、一風あつて位も備はる。掘出かと存ずる、ちと見て下され。遣手ども、吉野呼べや。」と言ひければ、幃はしや和琴の姫、古の知行所の吉野を、今の我が名にて、人の見次第折り次第、來て寢次第の木陰の花、主人の前にぞ出でらるゝ。間衆も手を拍つて、これは金山白鼠、吉野藏が建ちませう。何でもどつとお被には、お振舞の御座船、

手負は數多、我が身には薄手も負はず働けども、鐵石ならねば手も弱り、刃も彫となつたれば、築地を跳ね越え落ち延びんと、門の扉を後に當て、刀二振、槍三本、棒三本を相手にして、止觀水月心明劍。本來空の夜の霜、太極の劍、無極の劍、今ぞ一世の以心傳心、此の身即ち摩利支天、六臂の切先ひらくく、ひらりく、ひらりく、の山雀落し、門をひらりと躍り越え、行方知らず隠笠、隠れみの藝、身の寶、天が下にぞ残しける。

中之卷

難波潟、戀の舟著來て問へば、如何なる罪も、三軒屋には消えて、浮世の榮華町、四國西國引受けて、數々迷ふ人心、幾夜續けて泊舟、通ふ千鳥や千金の、金は當座の淡路島、手管の灘を打越して、碇を下す客もあり、明日も來んと、歌よい手の風に、謔の川口漕ぎ離れ、沖を乘るてふ人もあり、所は梅の譽ある、天神の花の袖、太夫榮ゆる姫松や、住吉も程近き、御手洗屋の又五郎、即ち郭の年寄にて、上下の女郎、禿をかけて、三百餘人の色間屋、三ヶの津にてならびなし。殊に此の頃京都よりの御沙汰として、「お尋者の御詮議、一人は禁中にて、人をあやめ驅落したる狼藉者、兵法の師吉岡憲法、一人は石川五右衛門といふ強盜、彼等が在家訴人の者は、御褒美を下さるべし。」と、二人が形を

づる浦波の、聲を導に出舟の、知盛が沈みし其の有様に、眼も暗み心も亂れて、前後を忘する許りなり。憲法少しも騒がずして、元の所に悠々と、何時歸りしとも白波の、船辨慶見て居たりけり。總馬それとは見付けしが、面魂の底氣味悪く、此の度は見ぬ顔して通る所を、「これ／＼總馬、此の憲法が頭が高い。何と今一度敵いて見ぬか。」と、聲を掛けられ、振り返る眞甲を、懷中より一尺八寸抜打に、二刀重ねかけて打つたるは、たゞ稻妻の如くなり。「すはや喧嘩よ斬つたわ。」と、男女、「わつ。」と騒ぎ立つ。雲上人、女官達、玉體圍ひ奉り、殿上も大牀も、上を下へと打返す。お能の役人逃げ廻り、諸人の中へ亂拍子、蹈んづ蹈まれつ狎々の、亂れ立つたる大勢は、鎮めん様こそなかりけれ。奉行の官人聲々に、「斬手は吉岡憲法、兵法の達人、大方にては叶ふまじ。諸人を残らず追ひ出し、御門を締めて引包み、討つて取れ武士ども。」「承る。」と南門開けば數萬人が、一同に流れ出でたる其の音は、瀧の落つるが如くなり。纏て貫木しつとと下し、突棒、刺股、槍、長刀、切先揃へ驅り立つれば、思ひもよらぬ空柱の陰よりも、つつと出で大音上げ、「禁庭に血をあやし、朝家を騒がし奉る。天罰恐れありと雖も、遺恨は龍門一家にあり。末世にのこす兵法一流の、元祖となるしるしを見よ。」と、斬つて出づる。唯一人に八十餘人、入れ替へ／＼、討ち留めん突き止めんと突き出す、槍の柄を十八本、瞬く間に切り折つて、紫宸殿の大庭を、追つつ返しつ半時許り、手を碎いてぞ切り立つる。

ねてより、拜見の札を頂戴し、女は東、男は西、御門々に詰め掛けて、俗は上下、法體は衣を著し笠頭巾、被せぬ頭も丸腰に、刀、脇差、刺刀まで、刃物堅く禁制は、民を憐む明王の、芻蕘の者雉免の者、悦びありや此の所、外へはやらじと面白き、面を黒き二番叟、鈴も終れば脇能を、謠ひ出せる尾上の松、老木の母に別れてより、名字も吉岡憲法と、四條西の洞院に、身を古に染物屋、好みを求め忍び居て、妻子の行方を尋ねん爲、今日のお能の雲居の庭、諸人に交り居たりけり。舟越總馬立ち廻り、「宮中なるぞ、扇翳すな手を翳すな、頭が高い、低うく」と、棒振り廻しちらと見付け、「ヤアきやつは憲法、何日ぞやの遺恨あり。天狗を働く兵法も、丸腰は女同然、よい打ち所」と、さあらぬ體にて、「これく頭が高い、是の頭が高いわ」と、杖の先にてはたと打ち、知らぬ顔にて過ぎ行けば、憲法はつと振り返れば、兄弟意趣ある總馬なり。「憎し穢し、合口一本持つならば、杖を引く間はあらせじものを」と、能くく見る心も荒磯の、松風も早過ぎにける。總馬始めに味はひて、「いや面白し、これぞ打ち徳、今一打」とまた振上げて、「こりや此の頭が高過ぎた、持ちあぐんだ頭ならば、敵きひしいでくれうか」と、續け様に打ち掛くる、棒の先を確と取り、「御遊の場なれば堪忍する。邪魔になる頭ならば、何と出て歸らうか。」「オ、長居をして打たれうより、歸つたがまし。立ち上れ。」と、言はれても憲法は、態と忪々諸人の中、「御免々々」と辱艱に、御門の方へ立ち出づる。「思ひぞ出

母も共に走り出で、一家の主人と迎へし人、一夜も屋形に備へもせず、御出家とは情なや。此の上は我
我も、一所に伴ひ妹が、行方も共に尋ねん。」と、走り寄りんとし給へば、舎人大勢かけ隔て、「ヤ、
ならぬノ、別々に退かば退け、一所にやつては後むづかし。寄つて見よ。」と、槍、長刀、閃かいて
隔つれば、姑は大聲上げ、「我も悪心翻す。目前の哀れを見て、其の振舞は何事ぞ。妻子珍寶及王
位、天子の位も捨てて行く、火宅の娑婆に淺ましい、家も所領も惜しからず。今まで憎みし繼娘、思
へば後世の導師なり。いざ一蓮。」と手を引けば、大炊親子も手を取つて、西と東に立別れ、互に交す
教化の詞、會者定離、愛別離苦、常寂光の都あれば、國郡も惜しからず。璣瑤莊嚴の衣には、綾も
錦も代へ難く、綱代の輿より乗物より、大白牛車こそ乗りよけれ。邪正一如、善惡不二、思ひ切つた
り思ひ切れ、煩惱の表門、菩提の裏門もと一つ。さらば。」と、別れ出でけるが、「三十二相具はれば、
此の世の跋も恥ならず、笑ふもよしやこれ見よ。」と、なほ足曳の大和路や、山路を分けて夏木立、左
近の櫻散り残る、御垣が原の時鳥、ほどを知らせて大内の、更衣の御遊とて、十二番の御能組、南殿
の正面に假舞臺を設ひ、掃部寮より陣の座まで、樂屋口は二重幕、御簾の内には主上を始め奉り、
女御、更衣、十二の局、三公、親王、月卿、雲客、武家は白洲に膝を折る。中にも大和國龍門は、警
固の當番たるによつて、叔父遠坂舎人装束改め、家の侍宮中に、杖振り廻し警固する。洛中洛外か

と出でて行く。「やれそちには子があるぞ、母が爲には孫ぞかし。孫までは勘當せぬ。」と、残す詞に憲法は、ものをも言はず手を合はせ、伏し拜みく、行方知らずなりければ、兄は母に抱き付き、前後不覺に歎きしは道理過ぎて哀れなり。姑は始めより、物をも言はず居たりしが、「ハア、過つたり我が心、繼母は同じ繼母にて、彼方は佛我は鬼、目の前の地獄の、爰にありとは知らなんだ。繼子を憎い嫉ましいと、卑しき心に一大事の、胸の蓮華を汗したか。如來に懺悔申すからは、各も今までの科を御免。」と泣き口説く。一念發起ぞ誠なる。時に奥より女房達、「なう情なや、妹君和琴の姫様、身を投げるとの書置して、御行方はなし。」といふ。は、は心も狂亂し、「それは誠なるか、追手をかけよ。」と奔いて、奥を指して驅け入れれば、大炊之助も覺悟を極め、「悲しきかなや、一人の弟には生別れ、姑一家に敵を持ち、剩へ只今の騷動は何事ぞ。時節到來とはいひながら、大炊之助が一生の、身の固めの今宵しも、かかる災難諸佛の教へ、いつの時をか期すべきぞ。御免候へ母上。」と、差添抜いて黒髪を、ふつつと切つて西へ投げ、「棄恩入無爲とは申せども、野山の末まで御供。」と、既に出でんとせし所へ、舍人總馬大勢引具し込み入つて、「ヤア跛め、出家とはよい分別、兩足の長短、よい加減に切つて棄て、首打落し後先を、揃へてくれんと思ひしが、兵法遣ひの憲法めが、歸るを待つて遅なはり、生けて還す残念ながら、坊主首は取られまい。早歸れ。」とぞ罵つたる。舞樂の前は懂れて、

を受けてたへ。」といへば、憲法泣くく、「詞を返すは恐れながら、龍門一家の人々、兄上の足の不具を俘囚にし、嫁御諸共追ひ出さん殺さんなどの取沙汰、承る折しも忠節の下人、某をみつぎの爲、御道具とも存ぜず、不慮に取つて歸りし故、幸ひと身に著し、大炊之助と假名をし、命を棄てて家を鎮め、其の後に心安く、婿入なさせ申さん爲の誠の心、却つて不忠と罷り成る、境涯こそは拙けれ。」と、溝々と泣きければ、「やれそれを知らぬ母にてなし。龍門一家の人々に、其の返答をしかねうか。唐土の蘇武は片足を斬られても、典屬國といふ位に登り、大國の主となる。大炊之助も先づ其の如く、形こそ不具なれども、心に五常備はる。汝は手足揃ひても、心の底が跛にて、直なる道を守らぬは、五體不具に劣つたり。母が心を無下にして、今日の我儘言語道斷不孝者。兄の出世を見るまでは、親子の対面叶はず、其處を立つて失せぬか。」と愛想なげに叱られ、悄悄として立ち出づる。大炊之助つつと出で、「弟御免なき事、某が身に取つて、有り難しとは申せども、彼が心底不便千萬、理を非に枉げて御免を願ひ、御承引無きならば、在るに甲斐なき不具者、某切腹仕る。」と胸押寛け既に刀に手を掛くる。母は驚き絶り付き、「御身が義理に、弟を勘當するで更になし。草葉の陰の父上へ、母が立つる夫婦の道。お事に今腹切らせ、冥途の父と此の母が、二世の縁を切らするか、思ひ止まれ大炊之助。まだ出て失せぬか憲法。」と、兄を宥め弟を叱り、心を碎く親の氣に、逆らふまじ

入り終らせ給ふ御顔容、此のお心を察して見れば、妾が心あさましく、繼子あたりがつらうても御遺言の上なりと、妾がうき名を庇はせ給ふ殿御の慈悲、忘れられうか忘れうか。それよりはなほ疎かもなく、兄を大事と育つれども、繼子の足折つて、不具にしたと世の中の、雑口に戸は立てられず。繼母が繼子を憎むといはれては、第一は才の恥、父御の石塔卒堵婆にまで、恥與ふるも本の子故、何卒家を出さん爲、母が目を眠つて、態と汝に悪性つけ、勘當はしたるぞや。五人十人ある子さへ、親の因果に、一人も棄てたいと思ふ子は無きに、まして一人の子を棄てしは、夫の爲、兄が爲、母も道を立てん爲、母が道さへ立つならば、汝も人の憐みあり。よも辻門には立つまいと、此所を思ひ彼所を思ひ、汝を勘當してよりは、一夜も泣かずに寐た夜はなく、母は壽命を縮むるに、汝は盗みに夜を明し、母とも思ひ出すまい。」と、聲を上げてぞ泣きたまふ。「聞けば江戸の遊女の腹に、男子もあると聞く、其の根性では、妻子にも嘸つらからう。盗みも妻子の爲ならば、憎い内に哀れもある。身に著飾つて騙事せよとて、親は生み付けぬ、情なの性根や。」と、足駄押取り四つ五つ、丁々と叩き付け、「今は打つても叩いても、此の恥は雪がれず。」と、足駄をからりと投げ棄てて、かつばと伏して泣き給へば、憲法は涙にくれ、兄も兎角の詞なく、親子三人聲を上げ、人目も恥ぢず泣き居たり。大炊之助涙を押へ、「皆我人の御仁心、兎角申し上げ難し。なう憲法、言譯あらば申し上げ、序に御勘當の、御免

り、「それくく。」と我が膝を、たいて致ふる隙間より、繼母きつと見、「見たぞく。」婿姑の對面の、晴の座敷へ高足駄、禮儀を知らぬ不具者、こちらは驅りめ。二人共に叶はぬぞ、皆寄つて引きすり出せ。」と、猛り蒐れば大炊之助、「身の疵を露はす上からは、誰をか恥ぢん、彼奴を引きすり出さば出せ、我に於ては動かぬ。」と、股立高く振ち上ぐる。憲法も突立つて、「合點づくで歸れば歸る、引きすり出せとは誰が事。」と、弟は兄を庇へども、兄は弟の心を知らず、蔑み合ひたる勢ひは、危かりける有様なり。老母は斯くと聞くよりも、徒跣にて走りつき、二人が中へ分け入り給へば、兄は足駄を脱ぎ棄てて、「あつ。」と敬ひ手をつけば、弟も蹲り、御懐かしや。」と許りにて、顔を見上げて泣き居たり。別れて久しき我が子を見て、母も心は亂るれども、さあらぬ體にて、「ア、これは姫君達の母御様か。そもじ様へも嫁君へも、儀式の對面致す筈、かかる無禮の有様はお恥かしや。さりながら我人子を持つ親の身は、人に思はぬ慮外もして、跡で詫言する許り、料簡して御免候へや。やれ憲法め、汝を勵當せし時に、言ひ含めたる母が詞、はや忘れて此の體か。妾も聖人賢人の身ではなし、打明けて言ふ時は、あの大炊之助よりも、腹に十月の宿貸した、汝が不便は勝るなり。其の汝を勵當せしは、先だち給ふ佛達人の、奉公といひ世間の道。いとほしや前殿の、臨終の枕の下、兄の大炊は身も不具、町人か出家にして、弟を總領に、香春の家をと許りにて、死病も憂へぬ兵の、御涙に咽び

かつかと寄り、能くく見ればこは如何に、異腹の弟久太郎憲法なり。思ひがけなき大炊之助、呆れて咎むる詞もなく、溜息吐いて坐し居たり。憲法は豫てより、思ひまうけし思案の上、少しも騒がず、「これ姑御前、祝言の杯は何とて延引なさるゝぞ。但し頭から姫の閨へ参らうか。」と、言はせも果てず大炊之助、「否これ姑殿、因幡國淀山の城主の末孫、香春大炊之助顯定といふ、龍門の家の姉婿は、日本國に某一人、何とて祝言の杯は延引ある、押掛けて姫の閨へ罷り通る。」と立たんとす。憲法、「どこへ。」と膝を直し、「いはれぬ事を長々と、名乗立て召さつて、赤恥かいて取り返しがなるまい。龍門の家の、入婿家督は某嗣ぐからは、姑御前を始め、叔父御前であらうが、執權であらうが、身が下知は背かせぬ、一日でも家を嗣げば、此の家は我が物、其の後は誰にでも、譲りたい者に身が譲る、僞事して化露はれ、他人は堪忍致すまい。はやお歸りやれく。」と、苦々しくあひしらふ。「ヤアいき盗人の騙りめ。僞事とは汝が事、此の家に望みならば、一旦家督を某嗣ぎ、骨肉の好みある其の後は、汝にくれう。道知らずめ、立つて失せまいか。」「否々そなたの器量では、此の家は今宵一夜も嗣がれまい。」「オ、嗣いで見せたら何とする。」「オ、見物致したい。」「どの眼で。」「この眼で。」「見事見るか。」「見せるか。」と、互に膝立てぎしみ合ふ。兄は跛を隠さん爲、袴を長く仕立てさせ、右に足駄を履いたるも、せい丁忘るゝ膝捲り。憲法、姑に見せじとて、身を振振つて陰にな

と、疊たみはりの尋常じんじやうさ、大小だいせうの差さしこなし、肩衣襟付袴かたぎんえりつきはかま越こ、作りつけたる如ごとくなれば、各案おのくめんに相違さういして、怪顔けつてんしたる其その顔色がんしよく。壻むすめは猶なほもしとやかに、「ム、和女あなたは御老母ごちやうぼ姑しやうめ御前ごぜん候まうな。これまでの御迎おんむかひ恐れ入おそり候まう、執権舟越總馬しつけんふなこしちうまとはお手前てまへか、祝儀しうぎの座敷ざしきは何處どこもとぞ、案内あんないがてら先さきへ〜」と述のべければ、「いや案内あんないまでも候まうはず。座敷ざしきに飛び越こえ溝みぞもなし。氣遣きづかひなしに御通おんとほり。さりながら龍門りうもん一家いつけの者ものどもは、兩足達者りやうあだつしやうに生まれ付つき、高敷居たかしきゐ、中敷居なかしきゐ、上段じやうだん、下段げだんの間所まどうち多く、上あがり下おり嘸御大儀まごたい。御用心ごようじんあれ。」といふ。ヤさてこそ聞ききしに違たがはず、きやつ原壻はらむこをなぶるよな、此方こちよりなぶり返かへし、心底しんていを試ためさんと、わざとちが〜〜〜ちん〜、千鳥足ちどりあししてやう〜と、座敷ざしきにはたと直なほりける。主従目引しうじゆめひき袖そでを引き、「オ、目出度めでたい〜、謠うたへ〜。」「秋あきの夜よの杯さかづき、影かげも傾かたが入り江いりえに枯かれ立たつ、足あしもとはよろ〜と、足あしもとはよろ〜と、三國さんごく一いち。」と、二三遍べんおし返し舞まひ謠うたひ、「嘸叔父御満まふぢおごまん足あし、先まづ御知おんしらせ申まうさん。」と山屋敷やまやしきへぞ走はしりける。又また玄關けんくわんの若侍わかざむらひあわた慌あわしく、「只今ただいま香春大炊之介かほはるおほひのすけと名な乗のつて、以前いぜんの出立いでたちに寸分すんぶん變かはらぬ壻殿御出むすめどのみでし故ゆゑ「同じ人ひとが二人ふたりあらうか、罷まがり歸かへれ。」と申まうせども、聞きき入れもせず、これへ推參すゐさん仕つかまつる。」と、言いひもあへぬに大炊おほひの助顯定すけあきさだ、つか〜と立入たちいつて、座敷ざしきをきつと見みわたせば、刀脇差かたなわきざし、衣裳いしやう、袴はかまに至いたるまで、我わが身みに少すこしも變かはらぬ男をとこ、眞中まんなかに坐ざしたりけり。「ヤア京三條きやうさんじやうの旅宿りよしゆくの盜人ぬすびとごさんなれ。壻入むこいりの見參けんさんに盜人ぬすびと掬くめて、姑しやうめ一家いつけに手柄てがらを見みせて。」と、つ

されぬか、こりや總馬、大炊之助が内證。犬を入れて聞いたれば、是れも繼母が、りにて、幼い時に繼母が、片足を打折つて、跛を隠して居るといふ。龍門の家のほまれ、大内御遊の警固の家、五體の内、指一本でも不具なれば、參内院參叶ひ難し、隨分足に氣を付けて、隠し跛を見付け出し、追付禁中衣更の、御能の警固の役を、某が勤むるからは、我龍門の家督にて、和琴の姫と夫婦になれば、妹が總領に立ち、姉の舞樂は跛めと、一所に屋形を追ひ出し、知行所の在郷に、三人扶持か二人扶持付けて、追込め置く思案、何と悪いかく。」といへば、繼母も莞爾と「壻の母御も繼母なれば、この工みを聞いては、先にも腹の立たぬこと、繼子の片足打折る程のお袋ならば、自らとても心が合ふ。近付になつて話したら、女夫ながら打殺す、思案のあるまいものでもなし。」と語れば、總馬も頷き合ひ、「一段の御分別、其の義にて候はば、叔父御様は山屋敷に、人數を揃へ御控へ候べし。お袋様と某は、座敷に出でてあひしらひ、見付け次第に御注進仕らん、大勢とつと取りかけ、姉御諸共追ひ出し、妹君を家督に備へ、今夜中に御屋形す、ぎ上げ申すべし。」と出来たく、定めて足を隠すべし。長廊下を歩かせて、隨分恥を見付け出し、報知を待つ。」と座を立つて、天神山の山屋敷、忍びて人數を集めけり。玄關の若侍、「只今壻君大炊之助殿御出でなり。」と、申し上ぐれば、「それそれ。」と繼母主從胸せし、迎ひにこそは出でにけれ。壻は出で立ちきらやかに、少しも隠せずすらく

ん付け手先を揃へ、おとがひつきた 頤突出せ作り髭、なまざる 鍋墨こそけて打懸けて、つくや火打の石川が、のち 後は釜煎釜の下、みやうくわ 猛火の種とぞ聞えける。やまとげんじ 大和源氏の庶流とかや、りうちんどの 龍門殿と名も高く、けいあつた 系圖正しき家なれども、せん 先君御死去の後、かどく 家督たるべき男子なく、ななし 舞樂の前、まへ 和琴の前、まへ 姉妹二人の姫君さへ、あね 姉の舞樂は繼しき中、ごけいぼ 御繼母と不和なれば、むじり 婿取も延引あり。おぢ 叔父遠坂舍人感言にて、としつき 年月を送られしが、いふはのくにか 因幡國香春の總領大炊之助顯定、いりへ 入家の取組調ひて、けふ 今日吉日の婿入と、しきさんこん 式三獻の飾物、かざりもの 姉妹立ち出で見給ひて、「なう姉様、此の高砂の尉と姥、共白髪になるまでの、いはひごと 祝事は聞えたが、なせ 何故に子は御座んせぬ。不思議さよ。」とありければ、まがく 舞樂の前打笑ひ、「あの高砂の謠を聞きやらぬか。をさむる手には壽福を抱きと謠はぬか、じゆふく 壽福とは子寶を抱く心よ。」と宣へば、「ム、出来たく。そんなら頓て姉様も、こたから 子寶を抱いたり。今宵は殿御を收むる手に、抱き付かしやんしよ。」と言ひ捨て、はし 走り入り給へば、「オ、千秋樂には撫でさすらう、わるくちい 悪口言ひめ覺えて居よ。」と、お 追ひ掛け奥に入り給ふ。しつげんふんこしろうま 執權舟越總馬、おぢ 叔父、けいぼ 繼母の傍に寄り、よ 小聲になつて申すやう、「内々は御妹和琴の姫、よとり 世取にせんとの御企て。然るに此の度大炊之助、あねひめ 姉姫への御談合、いか 如何あらんと申せども、ごふんべつ 御分別ありとの事。如何様の御分別かは存ぜねども、こんや 今夜これへ呼び入れて婿姑の御杯、そうりやうむすめ 總領娘の夫なれば、おほみのすけ 大炊之助は龍門の家の世嗣と申すもの。我等は合點參らず、ごし 御思案如何。」と囁けば、おぢ 叔父舍人うち笑ひ、「ム、扱はお袋未だ話し召

お刀筒お預けぢや。四條の道場お居間の牀に立て置いて、御番なされと仰せられ、則ち鍵もお渡し。」と、青貝時繪の刀筒わたせば、五右衛門うちかたけ、「先から持て来る大仕合、殊に鍵まで請取つて、盗みの口が明いて来た。」と、心はいきくはいくと、もとの小橋に立歸り、溜息ついて、「重ねくの福徳。たゞ取るほどの徳はなし。初手は怖し、二度目は儘よ、三度目からはするく。此の拍子ではまだ取れる。高高では如何なり、夜明までにゆるくと、運んで取らん。」と川邊に下り、繋ぎ捨てたる高瀬舟、苦の下に刀筒、葛籠を押込め、立上らんとする所に、又腰元の聲高く、「髭の候介御用がある、髭は何處にぞ。候介は居やらぬか。なう髭々。」と頻りに呼ぶ。「ヤア下部の奴、心得た。又してやつた。」と帯を解き、下著きり、と棲高に、帯はつつこみ、後下りに髪かき下け、裾三のづまで引袷け、「ないく。」というて出でけるが、「ヤア忘れた、髭がない。ぬつべりでは埒明くまい、エ、何とかな。これ幸ひと辻行燈の火を一つ、御無心。」と言ひ様に、指に油煙を隠し取る。これも盗みの内ならん。頬けた鎌髭、鼻の下、推當に作り髭。「髭よく。」と呼び掛けられ、「髭はこれに。」と出でにける。粗相な彼の人は、面々の受取りの挟箱は構はずに、なにを爲て居て呼ばしやるぞ。四條の道場のお宿へ持つて往きや。」と、叱らるゝを幸ひに、顔を傾け迷惑さうに、眞面目に持つて出でて行く。「これこれ今の過意に、宿入の下馬先して、一振振つて持つて見しや。」「ないく。」「角内追つたてろ。」「踵踏

上下も入れてある。四條の道場へ持つて往て、宰領衆に渡しや。」と言へば、五右衛門合點は行かねども、引き上げて見て、これは餘程重たい物、お金でも入りましたか。「否々お金は入らぬ。お差替のお脇差、小さ刀も入れてある、封を檢め渡しやや。」と言ふより始めて五右衛門も、天の與へと思ふ氣の、付きそめぬるこそうたてけれ。「ぶらさけては往かれまい、棒を借つてかたけん。」と、乗物の息杖二本、紐を通して足早に、出でて行きけるが、さすがの五右衛門、そら恐ろしく胸も踏れば、小橋の上にとど下し、腰打掛けて、「ム、ウ何とせうなあ。思へばくうまいこと。いやくこれでも盜めば盜人なり、此の石川五右衛門が、とても盜人になるからは、異國の盜路、本朝の熊坂にも、勝つてこそは本望なれ。これ程しきの小盜、なまなかにおいてくれうか。いやく何の道にも稽古あり、沙彌から長老になる者なし、稽古の爲にして見ようか。」善と惡との道二筋、一足の蹈み違へ。どうかうかと思案半ば、又女中の聲として、「新五平殿、新五平殿。」とぞ呼うだりけり。「ヤアこれは徒士か若黨か、侍分合點。」と、葛籠を橋の欄干の外面に押し隠し。上著を解いて打掛け、羽織だけに裾端折り、息杖二本大小に、柄は手拭ぐるく巻き、さしも利發に引袷け、大跨ぎに手を振つて、「ハッア只今お召しなざる、は、拙者事で御座りますか。」と、店の先にぞ躡ひける。「ム、御一門衆からお雇ひの、新五平殿といふお徒士衆は此方か。」「中々。拙者新五平と申す者で御座ります。」「殿様より此の

顔容を見ん爲、夜を日に嗣いで急がせ候。叔某は四條の道場と申す所に、宿取らせ候へば、一先落付き、下々にも休息せさせ、更けて又お見舞申し上げん。」と、申さるゝ。「オ、母が旅寢を大事にかけ道中いそぎの孝行、満足申した、嬉しうおぢやる、其方の行跡丁寧の心入れ、見るにつけても憲法めは、不義不孝の奴かなと、思へば胸が痛いぞや。それにつき、夜もすがら語りたい事もある。其方は此の儘こゝに居て、荷物其の外下々は、道場とやらんへ歸されよ。乗物直に。」と立ちたまへば、「冤も角も御意次第、いざお先へ。」と色代あり。乗物奥へぞ通しける。「殿様は此の所にお泊り。お侍衆、中間衆は、四條の道場のお宿へ、まるれとの御意なり。」と、言ふ聲に下人ども、「サアこれから此方の正月だ。可内、四五介合點か。何でも今夜は鹽梅よしでもぶち食らつて、小半切のけんどん酒、頭割に十文出し、びくにん呼んで念佛講、丸太ぶしんでしよけるべい。おせくくく。」とて歸りけり。暮過ぎ行けば石川五右衛門、雇ひの談合せん爲に、燈屋が店の先に、「御亭様々々々。」と、奥を見入りて立つたる所に、葛籠かたぐ、腰元二人昇いて出で、「なう七藏々々。七藏は何處へ行きやつた。」と西東見る折柄、五右衛門思はず、「何の御用で御座る。」といふ。「ム、お國から雇ひの人足七藏とは其方か。」「やい。」「イヤ七藏とは其方の事か。」「あゝゝゝ、私七藏、お國からお供致しました。」と、心ならずも答ふれば、「ハテあの人ばかりと、何が性根に入るぞいの。此のお葛籠はお召替、お

法に、隨順してぞはごくみける。三條、五條の夕霞の、上り下りの旅籠屋の、門々覗いて、泊のお衆に人はお雇ひなされまいか。荷物でもお駕籠でも、伊勢へなりと熊野へなりと、銀安で二人前の働きを致さう。」と、言うて立ちまふ雲助や、我が身ながらも口惜しし。大橋詰の鑑屋に、千石許りの風體の後室方の泊と見え、暮打廻し金具の乗物。茶辨當くむ女中もあり、屏風の小陰に休むもあり、庭に竝べし据風呂の、竈賑ふ其の氣色。五右衛門宿屋の主人に近づき、「泊のお衆に人はお雇ひなされまいか。何處のお衆で御座るぞ、明日のお立ちで御座らう。」といへば、「オ、因幡から和州へお越しなされる衆、若旦那は四條の道場まで、今宵お著きなされる、筈、まだ四五日も御逗留。お國よりの傭人は京でお暇下され、また是れより京者を、お雇ひとやら聞いた。入るが定なら肝煎らう、但し慥かな請人があるかや、其の合點なら後におぢや。宰領衆に引逢はせう、請人あるか。」と言ひければ、「否それは氣遣ひなされる、な。打見こそ此の體なれ、申すは過言がましいが、角屋敷ひき廻して、五間に七間の二階倉、朝晩見て居る西鄰、三疊敷の御主人。後に來ましょ、頼みます。」と、笑ひてこそは歸りけれ。先走りの若黨、小橋の方より驅け來り、「若旦那大炊之助様、只今お著き。」と言ふより早く、七つ道具の宿入の、足も揃ひて潔し。母上表に出で迎ひ、「これく其の儘く、乗物は是れへ。」とありければ、「憚り御免候へ。」と、乗物の戸を明けて、「明日上著と存じ候へども、旅宿の御徒然心元なく、御

した浪人、心ざし頼もしく下人の様に附添ひ、一所に落ち失せ申せども、是れも故郷を存ぜぬ者。御勘當とは申しながら、お血の筋は憎かるまじ。御威光にてお行方を尋ね出して下されば、娘や孫への御慈悲。」と、咽び入つて申しける。「オ、〳〵行方を尋ぬる許りこそ、卑下恥辱にもならねども、此の度兄の大炊之助、大和國龍門殿へ壻名跡の家督となり、一門書に漏れたれば、心に千萬思うても、口に噂も叶はぬぞや。随分方々廻り合ひ、一本立の久太郎、介抱頼み入るぞ。」とて、旅硯より香包、金子入れしを其のまゝに、其の子に何か人形でも、買うてやりや。」との御手づから。吉岡も泣き出し、「恐れ多きことながら、此の子が爲には祖母御様、私には姑御、嫁よ孫よのお詞を、とてものお慈悲。」とかき口説けば、母上は、「其方より此方の心推量あれ。言ひ度い事の海山も、世の憂き節に隔てられ、人目のあれば何事も、こゝに〳〵と胸を撫で、涙をおさへ乗り給へば、お興まるれ、立ちませい。お先く。」と呼ははる聲。吉岡も、「よしさらば、又も御縁のあるまで。」と、言ひ返し繰り返す。三味線の糸、笠の端に、涙ほろつく花曇、花に別る、鷹がねの、便りの風も通させぬ。紙子の皺の寄邊なき、憂身の末こそ無慚なれ。千里も一歩に始まり。人の善惡一念の兆によつて、苔のむす巖ともなるさゞれ石の、石川五右衛門といふ者あり、憲法に兵法の師弟の契約深切にて、一言芳恩の下人となり。共に武州を立退き、上方に塾居して、或は肩に棒を置き、または日傭に小働き、主師たる憲

出で、餘所の事かと思ひしに、其の憲法とは妾が子、其の子は正しき孫なれば、抱き上げ顔も見たけれども、父めを勘當せし上は、孫を懐けん様なしと、最前より乗物に、包みかねたる我が思ひ、洩れこれまで出でたるぞ。」と、孫を餘所目にしみるゝと、ゆかしさうなる涙の色、武家の行儀に恥ぢ恐れ、心安けに吉岡親子、お側近くも寄り付かず、平伏してこそ泣き居たれ。母上重ねて、「其の久太郎めが名乗、憲法と書いてけんばふと讀む故に、常々にさはいひつるが、替名にしたると覺えたり。彼めが兄は香春大炊之助顯定。たんだ二人の子供の中、兄の母御は果て給ひ、妾は後づれ。久太郎を喜び、殿にも後れ、兄弟ながら後家親の養育にて、家の武藝も勵ませ、實子繼子の隔てなく、人となしたる其の中に、兄大炊之助は胎内より、片足不具に生まれしは、如何なる過去の因果ぞや。世上の口のさがなさ、繼母が胴慾で、繼子の片足打折つて、大炊之助は世間がならぬ。あつたら武士に疵付けたと、沙汰を聞くも情なく、所詮弟を町屋へ出し、無實の難を清めんと、思ふ中に悪性付き、身持の悪きを幸ひに、勘當はしたれども、腹を貸した我が子なり、行くさきも不便さに、少々金子を取らせしが、仕慣れぬ町屋の家職に疎く、身を立てるすべ知らず、所を退きしと思はるゝ。附添ふ下人、友達とても無かりしか。勘當の子の行方、生けうが死なうが母の身で、問うて益なき事ながら。」と、また涙にぞくれ給ふ。親磨勤に手を束ね、「されば兵法のお弟子の中、石川五右衛門と申す尾羽打枯ら

つま武藏野に、一叢薄初冠、染めかざしたる檜扇や、吉野川には花、筏、立田山には鹿、紅葉、肩
 から落す菊の瀧、紺と淺葱の水玉を、碁石散の濱千鳥。「はんま千鳥の友呼ぶ聲は、ちり／＼やちりち
 り、ちん縮緬、紗綾や緞子の雛形、三河に架けしは八橋の、澤邊に勻ふ杜若、根芹、澤瀉、澤桔梗、
 水にまかせて染めしもよし。波は立つ波、かたを波、青海波に網の手や、紫苑、龍膽、女郎花、一叢
 竹の茂葉に、千羽雀の飛び違ひ、風に揉まる、模様もあり。富士と清見を染分けに、裾に千本の松原
 や、田子の入海帆掛船、また柳に雪降りて、枝も撓むやしつほりと、積れる陰に白鷺の、物思ひけに
 つつくりと、止りたる雛形あり。扱又模には雲隠れ、月に猿猴、松に琴、松をしぐれの染めかねて、
 眞葛が原の戀風のざ、んざ、さつと吹きしをりたる絞染の模様もあり。鳥屋出の鶯が餌に飢ゑ、み山
 を捜す所に、雪の根笹の其の下に、捜る兔を目に懸けて、眞一文字に落すを見て、兔は谷へ逃げんと
 するを、追掛け／＼追詰め、引掻い攫んで巖に上り、引裂き食らふ其の景色、さも凄まじき模様
 もあり。御簾に唐猫、烏帽子に鞠、衣紋流しの柏木や、柳、櫻、松、楓、梅に鶯、水に鴛鴦、牧の連
 駒、狂ひ獅子、蝶に蒲公英、葛葛、鳳凰唐草、桐唐草、扇流し、筆流し、蟲盡し、貝盡し、小紋、中
 形、丁子紋、絞鹿子、染鹿子、打出鹿子に我々が、戀に心は芥子鹿子も候。」と、撥音も亂るれば、
 詞の花も打萎れ、「一錢の御合力、なうお情あれ。」とぞ謠ひける。御老母夢とも辨へず、乗物より轉び

男の行方を尋ぬる爲、面白からぬ三味線弾き、お袖の情の施し受け、諸國をさまよふ憂き身の果て。
古は一步小判石な飛礫となしたる罰。唯一錢の憐みを、此の子にかけて。」と言ひ差して、涙の末を
三味線に、弾き紛らすぞ哀れなる。乗物より御意あれば、お側の腰元承り、「これ／＼其の憲法とい
ふ人は、もとは何處衆。其の子を負うた親仁は、吉岡の爲に何人ぞ、お尋ねなり。」といひければ、「ハ
ア私は吉岡が父、江戸品川にて染物商賣仕り、彼の者の母長々煩ひ相果て、薬の禮物、弔ひ弔ひ
も爲方なく、十一の年、吉原へ子を賣つて食ふ親心、無念やな恥かしや。あはれ誠あるお客もがな、
一期の片付あれかすと、神佛を祈りし内、香春久太郎殿と申すお侍、替名は憲法、お國は親御の勘
當にて、侍止めて江戸住居、兵法の師をする人、末々までの契約と申す故、親の身なればうれしさ
に、憲法様と知人になり、それよりは我等が商賣染物の道をしならひ、色々の物數寄仕出し、本郷に
大店借り、吉岡染憲法染と世にはやる根本は、此の倅が父親なり、雛形づくしを唱歌に連ね、節を付
けて弾く謠、お聞きなされて唯一錢、御合力。」と泣きければ、吉岡涙の三味線の、調子をかへてぞ謠
ひける。

紙子ひ、ながた

歌夜さ來いの玉章翼にかけて、裾にかり田の秋の鴈、裾を、裾を小褌に染めかけしは、これぞ江戸

渡りかねたる世の中を、人の情や恩をきる、紙子の袖の三味線の聲に誘はれ、「お乗物の内へ申しまする、私は江戸吉原三浦が内の吉岡と申す傾城のなれの果て。上つ方には御存じない事、傾城遊女の勤め程、世にも淺ましい悲しい物は御座りませぬ。左程はかない憂き身の上にも、申し戀といふ一字を心の力、本郷の憲法様と申した殿御と、新造の春の花より、脇詰の秋風まで、五年六年の霜雪に、浮名を捨てて逢ひましたれども、固よりお國は勘當の身、一門衆の貢ぎとてはなし。自ら御身代も傾き、御不自山なるに付け、揚屋へも疎々しく、日本堤の茶屋の鼻が、二度する返事も一度になり、駒形の船頭まで、押すに押されぬ世は金銀。私も身を苦しめ、親方の仕著も代なして、男の恥辱は雪けども、身を飾るは流れの役、爲方盡きて風俗を洒落に紛らし、衣裳を残らず紙子にして、門立、道中揚屋入、數多の太夫、天神の、花を飾つた一座へも、紙子で公界を勤めし故、後にはそれが異名となり、紙子吉岡、紙子傾城と、例なき名を立てられしも、彼のお一人を思ふゆるゑ、重なる馴染のしに、あの子を設けし事なれば、手鍋提けても一所の生計、泳ぎつく様に存じましても、身請をすべきあだてはなし。年明くまでの月日を、あくべなう思召されてか、但しは世を見限つての遁世か、おいとしや憲法様、一昨年の六月、一夜に本郷の宿を仕舞うて、それより不通に、行方が知れませぬ。私は二世かけた憲法様に別れ、明暮涙に此の如く、目を煩ひて勤めもならず、残る三年暇を貰ひ、

傾城吉岡染

上之卷

人よたゞ、衣紋氣高く染色も、深密と伊達との中昔、主を嫌はぬ黒小袖、憲法流の兵法の、其の一流より色心流、夢想流とも立ち別れ、因幡國の何某、香春大炊之助顯定は當國淀山の城主の梢、未だ二葉の帚木や、母の養育あさからず。永祿の春の花軍、元龜の秋の村紅葉、亂れし御代も治まれば、大和國宇陀郡龍門殿の姉姪へ、婿名跡のいひ入れに、自身母御の御出でと、さすがは武士の後家親の、なほも世間を播磨路に、蒐つて押せや行列の、二つ道具の槍の柄に、押分けらるゝ山櫻、ちりちり對の挾箱、青皮の覆ひ埋もれて、二月の雪のふり出す臺笠、立笠、天鷲絨の、お袋様の御供にも、殿様風の徒歩の衆、旅は慮外も御免ある。兵庫を御影、西の宮、茨墨髭、奴ども、茶屋の牀几に腰掛けて、餅に砂糖の尼が崎、上戸は冷も神崎も、茶碗傾け五つ六つ、七つ長柄のはした錢、八つ八幡の其方ごと、九重近き大黒舞、東寺口にぞ著き給ふ。水菜の花を山吹の、露の色かと浮されて、朱雀の蛙歌ひ出す、聲は女の笠の中、目元の闇も子をおもふ、親と思しく手を引きて、脊中に孫を賺しかね

薄紅葉、夜明よあけの嵐あらしに散り失せし、はかなき最期さいごぞ是非せひなけれ。〇歎なげきの聲こゑは何事なにごとか」と、向むかひ鄰裏どなりうらじや借か屋や、潜戸くもりどけ蹴はな放かし驅かけ入いつて、「やれ女の腹切はらきり自害がよ」と、組中年くみぢゅうとしよりつきざやうじ寄月行事ちやうたいやはん、町代夜番ちやうだいやはんが棒ぼうちぎり木ぎ、ばつたくさばにおく霜しもの、はかなき命いのちなむ南無阿彌陀あみだ、南無阿彌陀佛なむあみだぶつうたが疑がひなき、西方極樂淨瑠璃さいほうごくらくじやうるりに、語かたりて哀あはれを留とどめける。

長町女腹切 終

兄様、最期の時に預りし甥なれど、著替一つ帯一筋、何をやさしき事もなく、預りし甲斐もなかりしに、大事に替る命、其方には遣らぬ、皆兄様への奉公ぞや。伯母さへ死ぬれば、科は一人に極まつて脇差は上り物、ほかに御詮議は残るまい。刃物の祟りも三代濟む。行末目出度う出世して、親祖父の苗字をつぎや。サアはやう行きや〜。」と、深手に息もきれ〜の、血汐に落つる涙の體。花は、「わつ。」と咽せ返り、半七は猶涙にくれ、「伯母伯父は親同然。礫に懸るとて、一寸も退きませぬ。」と、取りつけば甚五郎、「エ、不合理的な。其方が爰に狼狽へて、伯母に犬死さするか。」と、二人を取つて突き出し、鐙櫃しつととおろせば、「なうそんなら退きませう、ま一度逢はせて下され。」と、夫婦は門に打ちもたれ、聲を揚げてぞ泣き居たる。伯母は苦しむ息つかひ、「ナウ甚五郎殿、人立のない前に早う死にたい。とゞめはどこちやく〜。」と悶ゆれば、涙ながら甚五郎、「女なれども武士の切腹。とゞめとは勿體なし、介錯せん。」と立ち寄れば、「否々人の切つたと我が切つたは、傷あらために顯はれて、此方の言譯むづかしい。急所を教へて下され。」と、男増りの自害の體、夫はいよく心くれ、「爰を爰を。」と我が喉笛を、指せばうなづき振り上ぐる、手も弱りはつたと落ちて、太股に突き立つる。また振り上ぐれば突き外し、肩先がばと突き込んだり。左手へはづれ右手へはづれ苦しむ顔容、夫は悲しむ。「南無阿彌陀、南無阿彌陀佛。」の聲を力に、喉のくさりを一刀、「うん。」とばかり、目もくれなるの

ざる甚五郎殿。男を養ふ女子も有る、二十年足らず連添うて、何を男の爲もせず、身の難儀をかける事、恨みにあらう憎からう。それが悲しい面目ない、許して下され甚五郎殿。」と、夫の膝にどうど伏し、聲も惜しまず歎きは、理過ぎて哀れなり。甚五郎も男氣の「夫婦の中に何の面目。女房の甥の仕業存ぜぬと言うて、此の甚五郎が立つものか。見ず知らずにも義理によつて、命を捨つるは男の役。氣遣ひするな、首切られうが牢へ入らうが、皆我が科に引きうけ、半七に憂き目は見せぬ。」と、心は利發にはやれども、さし當つて相手づく、思案にくれてぞ見えにける。女房は手を合はせ、「ア、情の末とて忝い。侍衆は斯様の事を皆御存じ、脇差のいはれを申し、伯母一人の科に落し、こなたにも半七めも、罪をのがれて下され。」と、脇差取つてするりと抜き、「ほんのは信國これは下坂、作は替れど焼刃寸尺一對なれば、一家に祟るは同じ事。これ故に父様が、人を討つて其の刀で、まづ此の様を押肌脱ぎ、逆手にとつて左の脇、ぐつと立てて。」といふ詞、すぐに突きたて右へさつと引き廻す。「これはいかに。」と甚五郎すがりつけば、半七夫婦飛んで出で、「伯母様狂氣か情ない。身に覚えある故に、死にに來た半七。」と、脇差にとりつくを突き除けて、「ヤイたはけ者。そちを殺す程ならば、何の伯母が長口上、自害をもするものか。手の悪い事したれども、驅落して身も隠さず、伯母婿の難儀を思ひ、身を捨てに來た心、さすが筋目程あつて、せめてもこれはでかしたな。そちが父御は我が

とろと假寐の、寐耳にははしい叩きやう。」と、潛戸明くれば甚五郎、せきにせいたる顔色、血眼になつて驅け上り、「ヤイ女房ども、甥のとのに掛つて、此の甚五郎が身代破滅、命の大事になつてきた。此の脇差折紙つき、正銘の信國を、今の世の廢り物、下坂にすりかへ、鉦を似せて突きつけた。先は武家方出入の門、盗人は女房の甥、此の甚五郎が存せぬといふ言譯ならず。京へ詮議に上つては、驅落者と町内へ、付届けにあうては、人中で口利かれず。死ぬるより外、文殊の智慧にも能はぬ。」と、脇差からりと投げ出し、溜息ついたる許りなり。伯母は、「はつ」と胸塞がり、さては半七が身に覺えある詞のはし、思ひ當つて途方にくれ、しばし返答もせざりしが、半七元より覺悟の前、長持の蓋押しあけ出でんとするを、睨みつけく、脇差取りあけ、「なう甚五郎殿。私は女子の物の道理は知らねども、ついて廻る身の因果は、大名高家智者學者も免れず。是れは正しく半七めが業なれども、半七がして半七はせぬ心。何を隠さん元彼の信國は、常々語りし我が家に、三代までは祟るといふ、性にふさはぬ脇差。一目でこれとは思ひしが、武士の上こそ刃物の相性、町人職人に成り果てて、何の咎めの有るべき。親もない一人の甥、これをつてに、一國のお細工の得意つけたさに、私がさもしい心から、律義またい半七に、悪根性がつきそめ、身の大事仕出したも、往き廻つて三代目の手に觸れしその祟り、知つて居ながら此の伯母が、押事したる其の咎め、因果とほかは思はれぬ、恥かしようこ

聲慄ひ、「聞えぬ事いうて下んする。悦びも悲しみも、二人が身に引受ける約束ぢやないかいの。甚五郎様に逢ひまして、有無の事を聞くまでは、私や爰を動かぬ。伯母様も女子ぢやが、男の一世の大事の時、見捨てられうかコレ半七様、むごい事いふお人や」と、恨みかこちて泣きければ、二人の顔をつくく見て、「其方衆がいふ事は、何の事やら此の伯母は、すつきりと合點がいかね。此方の配偶甚五郎殿は、武士附合して堅い人。半七も侍筋、行儀強い若い者と、常々自慢し置きしに、それにお山を同道し、初めて對面させられうか。一町北は皆宿屋。二人ながら早う往て、甚五郎殿に逢ひたくば、半七ばかり明日おぢや、夫婦にもなりおほせ、首尾よい後はお花とも對面さしよ。今にも歸られ此の體見せ、大事の甥を連合に、見限らするが口惜しい、此の世話やむも大切さ。サアはやく」と氣をせば、「お憐みのかたじけなさ、涙が溢れ有り難し。然らば伯母御へちよつと内證申す事あり。」と、にじり寄れば、「マア待ちや、歸られうかと思ひあぶくする。」と、庭におりて潛戸の襪をしやんとかけ、「サア何事ぞきづかはし、語りや聞かう。」と言ふ所へ、甚五郎あわたしく門叩いて、「今日が暮れて門鎖める、明けよく」といふ聲に、「そりや情なや歸られた如何せん。」借屋の路次へも廻されず、押入には夜著蒲團、何所へ隠さん、かやはかくるゝ。帷子入れて夏過ぎし、空長持に秋の鹿、妻もこがれて諸共に、押し隠すこそ哀れなれ。蓋を押へて、「聲立てまい。」とあくびながら、「ア、とろ

いらぬか。萬一お氣にいらいで、甚五郎殿や伯母様に、難儀のかゝる事あらば、其の難を私が身に受けうと存じ参つた。其の次第が氣遣ひな、どうで御座る。」と言ひければ、「ア、爰な人つがもない。細工がお氣に入らぬとて、何の此方や其方に難儀がかゝる物ぞいの。其の上悦びや、一昨目下ると其の儘、お屋敷へ持参めされしに、柄まはり縁頭鞆の塗、萬事殊の外御意に入り、「甚五郎が女房はよい甥を持つた仕合者。後々はお屋敷の御用もおほせ付けられ、出入りさせ。」との御懇。愈細工に精出しや。」と、聞くより二人は手を合はせ、「エ、有り難いかたじけない。天道のお助け命拾うた。お花悦びの冥加、今日また俄にお屋敷から、脇差について、何やら急なる御用とて、甚五郎殿を召しに来て、晝過から参られ、今において歸られぬ。定めて悦びに刃わたしの御祝儀、お振舞があるさうな。定めし酔うて戻られう。」と、いへば半七色違へ、「ム、脇差について急用とて、又呼びに來ましたか。サアお花京から道中いふ通り、かう有らうと思ひし事、我はこれに待ちうけ、甚五郎殿に對面し、脇差の御祝儀身に引受けて祝ひ、運によつて今夜中にお屋敷へ、召し出されうも知れぬこと、和女は此の邊旅籠屋に一宿し、明日はさうく親許へ。」と、言ふ聲つきもしをくと、「さうしては半七が一分は立たねども、ア、なんとせう暇乞ぢや。」と、胸に手を組み俯向きて、涙を隠すばかりなり。お花も涙に

下
の
卷

くは、たゞ逢ひまして、またの御見をまつかしく、その言の葉も昨日といひ、今日と暮して飛鳥川、流れの里ははるくと、跡にながらの夕あらし、髪のおくれのはらくと、ともに亂る、我心、曇りある身は恐ろしの、お城も近き難波江の、よしあし知つてはまる身を、意見は釋迦にきやう橋の、此方の森を隠れ家と、しばらく疲れを三重晴らしける。

下
の
卷

急ぐとすれど秋の日の、短きあしの難波瀉、京橋より暮れかゝり、問へど隠れも長町の、伯母の作り常々の、話に大方かぎあてて、「伽羅細工の甚五郎様は此方か。」と、潛戸明くれば、「ア、いかにも是れが甚五郎、どれからぞ。」と言ふ伯母の聲。「イヤ京の半七下りました。」と、お花諸共つと入る。「ヤアこれはく珍らしい。文の來たは一昨日、間もなう何の用あつて。ヤ連もあるさうな、どなたぢやこれへ。」とあひしらふ。「伯母様お久しうござんす、いつぞやお目にかゝつた花と申す者。御無事で目出度う御座んす」と、腰打ちかくる二人の體、心得がたくや思ひけん、「ハアよろこそ。」とばかりにて、不思議さうにぞ見えにける。半七色を悟られじと、「お花ことも奉公の年明き、和泉の親許へ歸る道、幸ひ同道致しました。イヤまづそれはさう、あつらへの脇差、先様は侍衆、お氣に入つたか

へ帯・しやんと結んで引締めて、歩むとすれど行き馴れぬ、道はかどらぬ女旅、これも何ゆる男山、作りし罪は山崎の、麓はあれよあはれけに、いつか都へ歸る山。春は梢にいろ／＼の、花咲く山にと山巡り、となりは青し夏山の、かしは散るてふ卯の花や、山時鳥山あひの、景色の花に顔つくる、笠を傾け山めぐり、秋はさやけき月影の、いたらぬ山は無けれども、わけて名高き山うけの、月見る方へと山めぐり、さてまた冬は遠山の、雲もてくる雲の脚、賢き鷹は南向、北を後に山のこす、山また山や峯白し。雪をさそうて山めぐり、めぐり／＼て山姫の、山衆まじりの淨瑠璃も、夕かぎりの口癖や。今日は姿を町風に、やつすとすれど隠れなき、帯の枚方近くなる。松原過ぎて、河邊を見れば、あれ／＼五つばかりの子の真中に、乗合舟の女夫づれ、思ひなき身の高笑ひ、餘所のつまごと羨まし。眼流れわたりの情であると、綱の目にさへ戀風が溜る。萩の／＼上風身に染み／＼と、「せめて一夜は讒なしに、ほんの女夫といつゝの世に、いはれついはん情なや。」と、抱き締めたるそぎ袖も、涙にひたすばかりなり。閒夫で逢うたも一昔。それ覺えてか一昨年、十七日のおほろ月、宵の我酒にほの／＼と、二人火燵のじやらくらを、憎や冷泉島に起されて、あかぬ別れの朝より、日文血文のつけ届け、半太夫いよしごけんと書いたるは、ほだしの種か花すゝき、ほんに誓文いとしさに、幾夜の夢を結び文、方様まるる花よりと、思ひまるらせ候べく、わけの杯色見えて、わきていづみの思は

とへ首くびになるとても、もう取返とりかへしのならぬ事こと。此この上うへながらも罪つみに逢あはば我われ一人ひとり。伯母おはは婿むこ伯母おははにも難なん儀ぎをかけず、そなたの行未ゆくすゑ頼たのむため、こゝろざすは大坂おほさか。實まことにそなたの繼父まことが、盗人ぬすびとというたも諷うそでない。我が身わがみで我が身わがみが恐おそろしい。」と、語かたればお花はなも身みを顫ふるはし、「サアそんな事ことであらうと推量すゐりやうに違ちがはぬ、いとしや私わしゆる種々いろいろにお身みを狂くるはする。詮議せんぎのときは皆私みなわしが業わざにして、身みを逃のがれて下くださんせ。」
「ハテ罪つみに遭あふとも逃のがるゝとも、わけへだてはないわいの。」「ほんにさうぢや女夫めをとぢやもの。」と、又また締め寄よせて泣なく中に、跡あとの二階かいに、「花はな様さま遅おそい。こりや豆腐とうふに買かはれてか、迎むかひに往いけ。」と聲こゑ々の、南みな無む三寶ほうみつ見み付つけられては足許あしもと暗くらき、いせきの石いしに踏ふみくじき、長ながき紅絹もみうら裏あし足もと纏まとひ、走はしるとすれど夜中よなかの太鼓たこ、どん團栗どんぐりの辻つじを出いづれば建仁寺けんじんじ、「だらりが鳴なるぞ。だらつくまいぞ、駕籠かごよく。」と呼よばれども、無ないか聞きかぬか耳塚みみづかの、西にしに錢座ぜにざの名なのみにて、小錢こぜになければ草鞋わらじも、二足そくを小判こはん一兩りやうで、買かうてはく身みぞ、三重みへあはれなり。

お花半七道行

いくよくの憂うき勤つとめ、七枚起請まいぎしやうぞら誓文せいもん、日本國にっぽんこくの神かみさんを、欺だました罪つみか欺だまされた、人ひとの恨うらみのねたみぐさ、竟つひに我が身わがみの下くだり舟ふね、乗のりおくれたる淀堤よどづゝ、淀よどの河水行未かほみづゆくすゑは、いかなる罪つみにあふ坂さかの、道ちかがどこやら何里なんりやら、身みは初鴈はつかりよ初霜はつしもに、寢亂ねみだれ姿すがた忍しのばしと、前垂まえだれとつて丸まるくけの、櫻たずきをじみな抱かか

布子を。はぎさん鳥さんこれも如來は外れた。サアこれからは花様、きりくもみ顯明けさんせ。」
「ア、せはしい何ぞいの。私が様な因果人が、なんの阿彌陀になるものか。これ見さんせ。」と押し開
けば、「そりやこそいはぬか。サア花様が阿彌陀ぢや、名代は叶ひませぬ、よね様に豆腐買はして、居
ながら田樂喰べませう。きつう座敷がしやれて来た、サア面白い。」と笑ふにぞ、お花は何がなかこつ
けに、出たいは心一杯、猶も色目を悟られじと、「ア、迷惑、そんな事に今まで歩いた事なけれども、
てんほの皮往てのけう。其の間に用意しておかんせ。」「オ、用意拙子鉢せつかい拙子木しやに構へ、
待つて居ります早うく。」「ハテ其邊は合點ぢや。」と、姿も下女ににせかけし、男の爲や徒歩跣足、
つひに被なれぬおき手拭、急げばまはる、小褌ほらく、杉が前垂かり橋を、足もしどろに行き過ぐ
る。半七は番屋の陰、ちらと見るより、「コレくくく爰に居る。」と招かれ、「ヤア半さんかいの、逢ひ
たかつた。」と抱きあひ、とかうは涙ばかりなり。「コレ泣いて居てはすまぬ事、今宵中に大坂まで退か
ねばならぬ。サアおぢや。」と手をひけば、「マア待たんせ、先の小判どうしての才覺ぞ。爲方なさに恐
い事などさんせぬか、有様いうて落著かせて下んせ。」「いふまでもない事。此の身になつた半七を、
粉にはたいても一步一つ誰が貸さう。先度の脇差三十二兩に賣拂ひ、銘なしの下坂、寸も焼も替らぬ
を、八兩で買ひ替へ、二兩で銘を彫らせ、こしらへすまして大坂へ下し、其の賣りへぎの二十兩、た

わけもない事いはん。」「紋紗の衣著て、ぞめき姿ののら坊主、後姿見た様な。」「オ、それよ、あれは愚僧が五人組、萬年寺の同宿、忍び戀路の掴みどり。」深緑屋の小丁稚が、一中節の川風に、聲も廣がる扇屋の、仲居のまんが供して通る。あれは澤村長十郎、あつたら男を頓て大坂へ下り舟、歌流金子も難波津へ、咲くや此の花其の花の、噂も戀の種ぞかし。苦のない女郎の仇口を、聞くにも勝る涙の露、お花は一切氣も浮かず、四條の河原幾萬人、ぞめきの中に彼の人、もしやと目をも花色の、長範頭巾しよんほりと、番屋の陰に佇みしは、たしかにさうぢや。ア、ちよつと逢ひたい。いひたい事も山衆の手前、客の手前もはかりかね、牀柱にうちもたれ、念佛まうして紛らかす。料理人の傳介杯を下に置き、「ヤア花様の念佛で思ひ出した事がある。三味線小歌もふるめかし、町方に流行る阿彌陀の光といふ事して、御一座のよね様方、どれにても阿彌陀如來に當つた者が、豆腐と酒と買ひに行く役人。色里に無いづなさわぎ、よね様方いかに。」といへば、「オ、これは珍らしい、はやうく。」と紙押し廣げ、蜘蛛の巣御光延紙引き裂いて錢の高、「もみ鬮は恵方果報、後に無理いふまいぞ。サア今が大事の所。」と、鼠なきしてしめあけに、「さよ様どうぢや。」「十六文。」「お仕合く。」「藤様は。」「三十六文。」「小めろの林は。」「十文。」「それははま波さゞ波や、しが様たつた二文か。お杉はなんほ。」「悲しやおれは三百ぢや。エ、儘よ、前垂質に置かうまで。」「オ、いやるまでない、錢がなくなば

足になら草履、足にはたらぬ半七が、髻を擱んで引立てしは、目もあてられぬ次第なり。「サア親父も先づ歸つて、諸事談合は明日のこと。」「ハッアそれもさう、然らば明日参りませう。申すまでは及ばぬが、花めを敷居より外へ手放して下さるな。ヤイそこな不孝者、おのれ明日来てなんとする、待つてをれ。エ、息せい張つて咽が渴く。」と、ごぶりくくとにえばなの、茶びん天窓を振り立てて、河原を西へと歸りける。かかる哀れの最中、二階の階子ぐわたくく、藪から坊主の佛頂顔「お花ここに何して居る。さつきのおさへの杯は、いつの世に戻ること。總體今夜は和女が顔、浮々せいで酒が飲めぬ。氣を替へて西石垣の關東屋で騒がう。太郎山衆貸してたも。」「ハア残りの子供は西石垣が天竺へも御同道。お花一人は我等が内、手ばなしては内證に氣遣ひありまの。」「いふな、皆までいふな湯の談こか、湯治するなら遣ひ銭、見事な事か。」と金三兩、衣の下より投げ出せば、「これこそほんの忝有馬の湯のだんこ、唄やれゆのだんこのだんこ、今はありまのゆのだんこ、しよんがえ。西石垣へ。」と三重騒ぎける。同じ所も西側は、祇園圓山前にうけ、芝居の櫓暗き夜も、行きかふ人の提灯は、月もおろかと照りわたり、見おろすく、おろす駕籠からぬつと出た、炮烙頭巾の醫者殿は、薬師如來の引きあはせ、壺屋の客と脈をとる。「それくく、花車も亭主も櫛で庭掃く人よびに、走る足元おかるぢやないか、お玉ぢやないか、お玉やあい。」「はて是れから呼んで届くものか。

刀屋の半七とは其方か、どれ顔見よう。はれよい男の、江戸元結にしゆす鬢、天窗つきは兩替町、内證は曾我殿、見せかけ力身おいてくれ。此の年まで敗毒散一服飲まぬ此の親父、ゆすりはたべぬ。ア慮外ながら、親も許さぬ女房とは、栗田口へ往きたいか。此の娘女房に持てば、小判がいるが合點か。小豆粒程な細金さへない様で、なんぢやお花を女房ぢや、いきがたりとはその事。いつそ手をよう、巾著か屋尻切れ。」とぞわめきける。半七ぐつと急きあけ、「ム、ウよういうた。小豆粒は持たねども、小判といふ物持つて居る。來年の給分二十兩渡すからは、お花は身が女房。」と、紙入より金二十兩取り出し、「サア金でした小判といふ物、近付になつておけ。」と眞甲に投げつくる。「ヤイ半七。あの娘はまだ五十年が百年が、顔に色氣の有る中は奉公さして喰はねばならぬ。千兩道具の娘を、二十兩の目腐金で、女房に持たうや、べかこ、まあなるまい。何所で盗んでうせたやら、後の穿鑿やかましい、おのれにくれる。」と投げつくる。「イヤ金貰はう好みがない、おのれにくれる。」と投げ返し、投げつけ打ちつけ摺みあひ、お花は、「わつ。」と泣き出す。太郎左衛門つつ立ち、「コレ半七、お花はこちらの奉公人。親父とのせりふなら、何所ぞ外でしたがよい。門には大勢人だから、客の邪魔して貰ふまい。それ男ども追ひ出せ。」こゝろえ太兵衛長兵衛五介、ばらくと立ち蒐り、無理無體に引き出す。お花は譯も正體も、涙ながらに取りつくを、「どこへく。」と押し分くる、親父を中の關守の、雪駄片

年も近づく、届いた男を見定め、末の片附心がけ、身を安樂にして見せいと、いはぬ親は御座らぬ。節季々々にせびらかし、足らいで又年を切りまし、男にまで添はせまいとは、あんまり酷うござんする。ほんの親より繼父は、なほ大事と嗜み、随分孝行つくせども、こなさん私にみぢんも憐みはござんせぬ、殺しなりと何様なりと、分別次第にさあんせ。半七様と挨拶切り、勤めはせぬ。」とばかりにて、人目も恥ぢず大聲あけ、身を悶えてぞ泣き居たる。傍若無人の繼父冷笑ひ、「よう吐すな、盗人の晝寐も當がある。おのれが母に何の見込はなけれども、おのれを賣つてくはうため女夫になつた。今の詞は誰が教へた、半七のすりめにならうたか。べりくしやべる頼けた、蹴放してしまはん。」と、武者ぶりつくを井筒屋夫婦、「年季の内はこちの物、疵つけさせぬ。」ともぎはなす。「思ふ男に添はれぬからは、殺しやくく。」「オ、殺しかねうか。」と、ぶちあひねぢあひ大喧嘩。破れかぶれと半七、裾ひつからけ井筒屋の、庭へつかくく、「柄巻屋の半七。」と聲をかけ、九兵衛を取つて突きつけ、真中にどかつと坐り、「コレ親父、其方はお花が繼父、すにつけ粉につけ憎いのも理。此の半七をすりの騙りの強盗のとは、いつ騙りした盗みした。半七が目には其方の人賣と見た、もがりと見た。よしそれば免も角も、お花はおれが女房。すべい奉公仕舞うては、繼父殿でござらうが、もがり殿でござらうが、主のある女房、分別して物をいへ。」と、せきくる顔の青聲、叩き散らして詰めかくる。「ム、ウ

りの拂ひさへ埒明かず、東ふさがりになつた者、打ちみしやいでも粒三文ないは知つて居る。あの様なごくだうと腐り合つた、お花が行末流浪は知れた事。少さいからの馴染なれば、よい事聞く様にはござらぬ。どうぞ意見でも召されぬか、壁に馬乗りかけては明くべき埒も明かぬもの。前びろに手形しよう爲に、呼びに遣つた。」と語りける。門口には半七、聞けば悲しさ無念さの、格子の柱嚙みひしぎ、齒をくひしぱり泣き居たる。親父は横手ちやうど打つて、「さてくにごい、親方殿にお世話をかけ、不孝者と申さうか。その刀屋め知つて居る、無頼者の大將菰被りの下地。ヤイ花めはどれに居る、爰へ来い用が有る。引摺りに往て、お客の前で恥かかさうか。」と、昔作りのつこと聲。お花は人目の恥かしく、「アイあの杯、藤さんよさん預つて下んせ。」と、言ひすておる箱梯子。「ヤア父さんか、夜更けて何しにごさんした。」と、傍へ寄るを突き倒し、「ヤイ不孝者。親方殿お話で、一から十まで聞き届けた。半七めといふ騙りめと夫婦にしては、年寄つた此の親が、鼻の下が乾あがる。二十兩といふ金が、天から降るか地から涌くか。騙りめが挨拶はらりしやんと切つてしまひ、年切増して奉公するか、否と言へ分別有り、サアく、どうぢや。」と腕まくり、掴み付くべき顔色なり。お花は、「はつ。」と胸ふさがり暫し涙にくれけるが、「なう父さん、傍輩衆は内證、客さん達の手前もあり、さもしい事を言はんする。勤めする身の親達は、どの口聞いても、可愛や親ゆる苦勞をする。定めの

ではわつさり恵比壽顔して見せまじや。サア笑やいの。」と、せりたつれば、「ア、太郎おだまりく、あれは我等に甘えるの、腹立つ所がなほうまし。鼻衆二階へ連れておぢや、今宵はよね衆の總揚見事な事か。古手の肴取りおいて、蒲焼一種で飲みあかす。鰻四五本さかせにやりや。南無阿彌陀佛。」と騒ぎ立て、皆々二階へ上りける。既に傾く宵月の、夜もはや四つ半七は、銀の才覺ならず者と、茶屋にはせかれ親方に、見限られつゝ、筒井筒、心の水もかへ乾して、流れ歩きにとほくと、格子の陰に身をひそめ、お花が便を待ち居たる。爰に誰とはしら髪まじり、きんか天窓に無川の提灯、門口にてふつと消し、「ハア太郎左衛門様お宿にか。花めが父西陣の九兵衛でござる。」と、たつみあがりにいひければ、亭主夫婦、「ヤア親父来てか、こちへく。」と茶釜の前、太郎左衛門顔顰め、「此の頃段々いふ通り、そなたが娘お花が事、そもく小めろの時分から、手形の表丸十年、親方に損もかけず、おつけ年季も明くぞや。なれども勤めの慣ひ、小間物屋の煙草屋の、紙屋で候、呉服屋で候の、すのこんにやくのと借錢が、今の金で七八兩。その上親父も長者ではなし、あの子にかゝる身でないか。がらり二十兩ま一年切りまし、居なりに居れば借錢も先づ其の分。賣買高い此の節、二貫目近い二十兩、其方が手取にあたゝまれば、兩寫と思ひ世話やけども、かの柄巻屋の半七といふ蟲がさいて、何の彼のと入れ性根、お花が一切呑み込まぬ。これからは勝手次第。半七といふ職人の弟子、爰らあた

このこ振舞や半七。」と、二人引き寄せ寢所の、障子の中に押し入れて、伯母は氣とほり堀河通、二條通の高瀬船、直に大坂へ三重下りける。

石垣町 井筒屋 中之巻

名は堅く、人は和ぐ石垣町。前には戀の底ふかき、淵に憂き身をほんと町、都の四季の月花を、爰にとゞめて通ひ路や、馴染々々の色遊びの、中にお花は忘れても、忘れ難なや刀屋の、半と深きつま戀に、なつく八つ乳の糺三味線、心くらべの連引に、思ひの色をしのび駒、忍ぶに餘る涙かな。浮氣烏とそやさされて、月夜も闇も此の里へ、光満寺と云ふ坊主客、お花に馴れし鶯の、ほけきやうとも念佛とも、知らぬが佛の戸帳ぞと、井筒が暖簾撞木杖にてひらりと上げ、「太郎内にか、四五日お目にぶらさがらぬ。」「エ、珍らしい、どつち風が吹いたぞい。」「イヤ、どつち風でもない、今夜はしよさいの無常風。沙汰はない事葬禮のもどり、ちよつと寄りたし心はせく、どうせうかかう焼香場を、候べく候にやつてすて、引導も何いうたやら、不便や今日の亡者も、碌な所へ往くまい。これもお花へ心中。」と、雪の頬さき遠慮なく、髭口寄せて、頬ずりは、山葵おろしにぬきの玉子、痛そな顔の痛々し。お花が浮かぬ顔付に、花車も亭主も氣の毒がり、「コレお花どうぞいの。お寺ならば大黒、爰

れ焼、もつての外の不吉の脇差、寸は一尺四寸五分、けん尺は災難、是れを其の儘持つならば、三代までは祟るとある。占に驚いて、捨賣に賣り放し、廻り廻つて十三年め、お屋敷方より此の脇差、こちらへ仰せ付けられて、孫子のそなたの眼にかゝると、はや親方の打擲の、難儀に逢ふも此の不思議。武士羨ましと思やんな。一言の咎めより、親祖父の命を絶ち、子孫まで零落れしは、前世の業とは思へども、愚癡な心に淺ましい、此の脇差がないならばと、科ない刃物に恨みが残り、折つても捨てたい氣なれども、今では大名のお腰の物、家の敵の此の脇差、主人の様に撫でさする、その時々身過ほど、悲しい物はなきぞとよ。子にも甥にも唯一人、奉公大事に勤めてたも。可憐の身や。」とかきくどき、膝に靠れて泣きければ、半七も伏し沈み、お花ものかぬ身の上と、語るも聞くも主の内、顔き合ひつさ、やきの、忍び涙ぞ哀れなる。「ヤアうか／＼話して、あれ店さし時。伯母はすぐに伏見まで、夜中でも船はある。來年のお祓には必ず下りや。此の脇差の拵へ、註文の通り随分急いで下したも、旦那殿内方様へよい様に頼むぞや。お花女郎にも縁でがな、又頓てや。」と出でければ、「イヤ私も東、道までお供致しましよ。」「ア、折角來て素戻りか。これ半七伯母は粹ぢや、跡でしつぽりとはなしやいの。」「イヤ／＼別に話す事もござりませぬ。」「そんなら祝うて口濡らしていなしや。」「イヤ最早お茶も飲べました。」「ハテ茶ばかりで濟むものか。しんこの様な物なりと、茶の子甥の子、の

此の脇差を賣りに來て、諸傍輩のつきあひに、祖父様も望みにて、買ひ求めたい志、彼の高木も望みをかけ、代物問へば三百貫の折紙。心安さの常座の座興、とはいひながら高木が癡忽、文平お身の身代では、高い物ぢやがおかやるかと、ふつといひしも互の不運、苦笑ひにて一座は濟み、その取沙汰の國一杯、いはれぬ猪瀬が齒も立たぬ、刃物好して高知行の、高木颯と張合うて、人なかで恥辱うけ、あれでも武士かといひはやす。此の脇差を買はいでは、一分立たぬ祖父様の、武器馬具衣笠夜の物まで代なして、三百貫の折紙代一倍まし、二百拾兩に買ひ求め、直に中心に一字銘、高木に勝つとの心にて、風といふ字を彫り記し、明くれば九月十五日、登城の道に待ちうけ、高木やらぬと聲をかけ尋常に討ちおほせ、屋敷へ歸つて祖父様は、娘子供に暇乞、『命に替へし此の信國、必ず人手に渡すな。』と、お腹へぐつと押したてて、右の脇まで一筋に、唯一言の義によつて、身上を果されたり。其方の父様は、伯母が爲には兄様。その折しも江戸番、直に江戸より浪人あり、永々の憂き苦勞、悲しい暮しが病となり、愈辛き其の中にも、遺言にて、『此の脇差、乞食するまで離すな。』と、薬も飲まず、祖父様の第三年、同じ月に病死ぞや。悲しいともつらいとも、情なやお袋も又歎き死。跡に残るは伯母とそなた、まだ九つの頑是なし、伯母が心を推量あれ。三年に三人まで同じ月に死ぬる事、不思議と思ふ氣がついて、刃物の相性見る人に、目利して貰ひしに、祖父様父様同じ火性、刀は水の流

生きる死ぬるの場になりても、やくたいもない氣を持つまいぞ。世間多い心中も、銀と不孝に名を流し、戀で死ぬるは一人もない。流れの身にはとりわけて、悲しいこと酷いこと、そこを死なぬが心中ぞや。眞實男可愛くば、五度逢ふものを三度逢ひ、二度を一度になす時は、親方も機嫌よく、戀に身をうつ事もない。二親もない半七、伯母一人甥一人、元は知行も取つた筋、職人の弟子と朽ち果つれど、可愛いとも不便とも、思ふ者は此の伯母一人、末かけて頼みます。今日伯母が上らずば、二人の命は有るまいもの。有り難や忝や、愛宕まるりの一驗、佛神のお蔭ぞ。」と、意見も親は泣寄りの、二人が肝にこたへつ、泣くより外の事ぞなき。伯母はかさねて、「やれ半七、涙ついでに今一度、泣かねばならぬ此の脇差、見知つてゐるか。」と差出せば、半七棒鞘の柄引きぬき、中子を見れば信國、裏目釘の穴際に、風といふ字の一字銘、横手を拍つて、「これはさて、我が家の重代ぞや。親の祕藏が年を経て、めぐり來るも不思議なり。二度武士に立ち返る、瑞相なり、嬉しや。」と、推戴く脇差を、伯母引つとつてからりと投げ、「なう情なの侍や、武士になれとて見せはせぬ。此の脇差故、家筋のкауおちぶれた因縁話、小耳にも聞きつらん。お花とやらも繋がる人、悲しい話の一通りを聞いてたも。もと我々は伊勢の龜山者、先祖は猪瀬文平とて、あの子が爲には祖父様、お持砲の織砲大將百五十石取つた人、同じ家中に高木宮内とて、八百石取る旗頭、互に無二の中なりしが、上方の取賣が、

は伯母なれど、年は甥より二つ下、伯母甥のよしみとて、親しうするを知らぬ目で、女夫と見るに咎
はなし。」と、非の入りさうな事どもを、いひくろめたる情の程、二人はあつと嬉しさも、夢に夢見る
如くぞや。主の石見まんまとくひ、「ム、ウ二人ながら伯母御か、よい年して不調法、あやまつた免し
てもらを。伯母御怪我は無かつたか。」と、脊中さすれば彼方向く、「オ、若い人の道理々々。そちらな
伯母様頼みます、機嫌取つて下され。これ半七、言譯してくれ。」と、もぢくくと勝手へ出で、「皆の奴
等うつかりと、なぜ茶漬でもして出さぬ。腹の立つた擧句ぢやに、けんどんを取りに遣れ。マア杯
を出しておけ。むつかしからう、おれは出店へいてゐるぞ。はれやれ腹の立つ勢ひ口に、伯母をも知
らいでみしらした。」と、足早にこそ出でにけれ。後見送つて半七は、伯母の前に手をつかへ、「何にも
態と申しませぬ。面目ないと有り難いと、胸は二つに裂けます。」と悔み歎けば、お花も涙にしみじ
と、「私は四條石垣町、井筒屋といふ茶屋に、花と申す勤めの者。半七様とは末々まで、面倒見あふ契
約に、ちといき詰つた憂きふしの談合に、逢はいで叶はぬ事あつて、横著な此の有様。伯母様なら大
事の甥を、そゝのかすとお憎しみ、そこも許して下さんせ、いとしいがたゞ因果ぞ。」と、共に歎ち
て泣きければ、伯母も同じ涙にくれ、「さう見たく、配偶は大坂で伽羅屋といへば、町のよい衆屋敷
か、人に知られて世の有爲無常、此の伯母とても知つて居る。色事は若い役、此の上にとのやうな、

す。と突き倒し、柄差帚おつとつて、さんぐくに打ち敲く。伯母は此の體聞くよりも、はつと人目の恥かしさ。憎うもあれど甥子が難儀、思ひやられて何とがな、此の場の首尾をと氣を碎く。半七花は身の科を、いひくろめんと眞顔にて、「申し／＼旦那様、お氣がちがひはしませぬか。私は冤も角も、伯母者人を打擲あり、必ず後悔なさるゝな。」と、いはせも果てず、「ヤイ盗人たけん／＼しく、其の態になつてさへ、まだ總嫁めをいたはるか。主の身代空になし、天道をかすめをる。ヤイ天罰といふ物で、大坂の伯母が上られた。目の前へ連れていて、敲き殺して腹をいる。サアうせぬか。」と杖振り上げ、はた／＼と打つ音に、伯母は悲しく走りより、「旦那様しばらく。」と、とりつけば振り放し、すがりつけば突き倒し、とかうする間に思案して、「ヤア、こりやお吉か、和女は此所へどうして來た。コレ申し旦那様、あれは私が妹。」と、いへば旦那は興さめ顔、半七はなほ合點せず。花はきよろ／＼うろたへる、袖をひかへて、「コリヤ妹、ヤイお吉これ姉ぢや。姉が顔を見忘れたか、狼狽者。」と睨めつけ、目まで知らすれば、やう／＼と心づき、「ハアほんに姉様。姉様々々ぢや。」と言ふ聲慄ふ許かりなり。伯母は色目を悟られじと、「ヤイ大膽者、五條の木賃宿へ行きはせて、姉さへついで來ぬ内へ、騙りらしいこというて來た故にこんなこと、旦那様のお山ぢやと御覽じたま御尤も。今日も愛宕で私をお袋とはかいひませぬ。それも道理ぢや。あの人は腹がはりの兄弟で十五ちがひ、半七が爲に

半七によく似たり。さては奥なは似せ物めと、思へども念のため、「これはくいはれぬこと。女房どもは寺參、戻つたら見せませう。してつきもしほもなう半七に、何川有つて上られた。」と、いへば伯母は打笑ひ、「いや半七にさのみ川もなければ、且那樣へ少しお頼み申す事。配供甚五郎上らるゝ筈なれども、お屋敷方の御川は多し、飛脚でも如何とて、さて私が上りし。」と、下人に持たせし風呂敷より、棒鞘の一腰を取り出し、「これはこれ信國とや。」さる大名の若殿へ、藏屋敷から上げらるゝ、大切な拵へ物、大坂にも彼此と、職人衆も多けれど、京細工と申し甥がため、内方へ頼みます、注文は此の通り。さぞ方々の請取御忙がしいは存じながら、どうぞ近々に頼み上げます。此の次手に半七めが顔も見たさ、何やかやに上りました。」とさし出せば、石見は脇差註文見合はせ、「これは此方の商賣、心得た。」とすつと立つて、「これ伯母御、戀ひしがらるゝ甥がさまを見せませう。しばらく其處に。」といひ捨てて、思ひがけなき一間の障子、蹴破つてつつと入る。二人は、「はつ。」と驚いて、うろたへ廻る胸ぐらを両手につかんで、「ヤイ半七のいきすりめ、ようもく親力を踏みつけたな。あの女が来た時から、ござりんすが呑み込まれぬ。りんすの正體顯はれた。お山やら總嫁やら、厚皮面な晝日中、大坂の伯母で候と、目利の家へ似せ物を、ぬくくゝと寢所へまで手びきさせ、主に一杯、己めは甘い所を喰うたな。親代々の刀屋を、太鼓持にするのみか、座敷を揚屋に仕くさつた。お禮申

がつかぬ。」と、いふ内に半七は、そつと起きて障子の隙、覗けば馴染のお花なり。「南無三寶、さては内々苦勞にした、慾づらの繼父めが、年切増のもがりごと、急々にせがむと見えた。其の工面に來たさうな、何にもせよ出過ぎたこと。逢ふもあぶなし逢はぬもまた、仕舞のつかぬ我が身ぞ。」と、夜著ひつかぶり、生きたる心地はなかりけり。親方は正直一遍、「半七はなぜ出ぬぞ、頭痛でまだ起きられぬか。他人では無し、なう伯母御寢所へいて逢はつしやれ。お山狂ひで酒やら何やら過ぎる故、煩ひ暮して物も喰はぬ。ちと意見してください、そりやそこへ案内せい。」と、下地はすきに据ゑる膳、甘い首尾とぞなりにける。や、時過ぎてこれもまた、愛宕參の花お札、風呂敷包下人に持たせ、「刀屋の石見様とはこなたか、大坂甚五郎が女房、半七に逢ひたい、伯母が來たとおつしやれて下され。」と、いひ入るれば家内の上下びつくりして、「ヤアこりやどうぢや。門にも伯母内にも伯母、騙りか狐に極まつた。」と、不審がるやら怖がるやら、中にも亭主は二理窟、「ヤアざわ／＼とかしましい。奥へ聞えりや詮議がならぬ、黙れ／＼。」と小聲にて、「表の伯母御通らしやれ、爰へ／＼。」といはる、にぞ、綿帽子取つてしとやかに、「これはまあ／＼結構なるお内方、ついしか御出入申さねば、何方様が何方やら。コレ其所な前髪殿、盆一枚かさつしやれ。私が事なりや心まで、奥様へ上げまする、樋の上の切荒布、花の都へこんな物、お恥かしや。」と差し出す、伯母の年ばい恰好を、見ればどこやら面相も、

そめ、我が親さめのつれなさを、問ひ談合も中絶えし、いとし男も親方が、り、首尾はどうぞと案じほれ、顔の見たさもやるせなく、駕籠昇雇うて草鞋かけ、浴衣を假の旅出立、ほんほり綿もひねくろしく、脊中に皺のよるべなき、石見の店へ頼みませう、ハ、こりや旦那さんで御座りんすか。内方に居さんす半七どのに、ちよつと逢ひたう御座りんす。」親方ぎよつとし、「はていかう、りんす〜といふ女子ぢや、そなたは半七が女房か。」「ハアつがもない。私は大坂者、半七が伯母で御座りんす。」「アレまたりんすぢや。ムウ大坂の伯母御とは、伽羅細工の甚五郎の内儀か。」「ア、伽羅々々、何かのお禮に疾うまるる筈なれども、主は細工の人だから、貧な世帯の隙なしで、今日までの御無沙汰。大事の甥が出世のかど、祝月を心がけ、愛宕かけての上り船、乗合の窮屈さ、とろ〜と寐よとすりや、後からせゝるやら、前からは毛の生えた、大きな足を突き出すやら、齒ざりをするやら、寐言やら、可笑しい事の數々は、山崎から連もあり、上つてお山を一息に、嵯峨へ下りたりや仕合と、釋迦様の開帳の、相伴やらおこッやら、旅籠屋で支度して、すぐにはれへ。」と出次第の、口は手管に馴々しく、「みな様御免、ア、しんどう。」と腰かけて、煙管取る手もぞんざいに、「皆様半七の傍輩衆か、しんくな仕事で御座りんす。」繻子の肌著に色さらしなの、伯母と名乗りて刀屋に、見するは胡散者なりし。ソレ喜八、伯母が逢ひに上られたと、半七に知らせてやれ。誰ぞ茶を進せぬか、幾人をつても氣

工、菖蒲作りの拵へも、五月からの誂へ、何として出来ぬぞ。長刀直しを研いだらば、辨慶山の町へ持つて往け。兩替町の銀作り、御池の町の縁頭、小川通りのせかいらぎ、今日明日に持たしてやれ。さつきにわたした下の町の酒屋のかみ、入増かはひる引出物にしたいが、娘が望む道具ちやと、大切先のだんびら物、身ばかり買うていなれたは、後家鞆にきまつた。」と、堅い親仁の軽口も、刀屋とてやふるみ。古身なり。重手代の忠二郎、旦那の前に帳面控へ、左介喜八は算盤の、さざんの九月節前、算用の高見合はして、「ヤア此の半七の大のらめは、帳面も埒明けず、今朝から爰へ面出しせぬ。何所へうせた。また祇園狂ひか宮川町か繩手か、朋輩共が知つてをろ、詮索せい。」とわめかる、「イヤ半七は昨日から、頭痛するると鉢巻で、小座敷に寝て居まする。」「なんぢや頭痛ぢや。若い身でまたしては、頭痛のつかへの何のとは、皆茶屋酒が過ぎるから、粥でも焚いて喰らはしたか。」「アイ粥の事はさておき、おも湯も咽へ通らぬと、漸うと今朝酒の爛して飲んで見て、どうでも色のない酒は飲まれぬと、苦い顔しながら、中腕にたつた三杯。」と、いへば主も興さめて、叱る心も拍子ぬけ、笑ひ暮せし秋の日の、西山近き染浴衣、愛宕詣に袖を引かれた、これもあだなる世のつとめ、四條の水に名を流し、身の憂き数を積みあけし、石垣町の井筒屋の、お花よざかり戀盛り、身を賣る品はかはれども、刀屋の半七と深い中ごと正銘の、互の誠とき入れて、しめた心のもろひねり、其の柄絲のほつれ

長町女腹切

上之卷

一のついで
例の童の言の葉に、言ひよる品もよし蘆の、難波の京の物語、今の狂歌に取りなせし、京童の口吟、落首洛外とりづくに、その一節を繪雙紙や、下立賣を堀河へ、引き廻したる角屋敷、刀屋石見何某とて、諸役御免の受領職、折紙太刀の御用まで、御所は勿論屋敷方、男たる身の魂の、御刀脇差拵へ請取所と大看板、店は弟子に打任せ、誰が下人やら頭やら、はなし目貫の性よしも、つい焼きつけて悪性に、身を研ぎへらす奉公や、跡のこじりの帳面の、つばめ合はせと親方が、鞆鳴するぞ道理なり。主人石見は禪門の、白いあたまに黒眼、仕事場を見廻つて、「ヤアおれが登音聞いたやら、皆細工に精が出るよ。煙草ばかりが仕事ぢやないぞ。彼岸過ぎたりや、めつきりと日が短い。夜仕事さしよにも、此の油の高さでは、儲ける程皆戻る。ヤ戻る次手に戻橋の鐺は戻つたか。一條の御所様の菊鐺も、九月の御用ぢや合點か。黒鞆が出来たらば、烏丸殿へ渡しておぢや。二口屋のはみだし、猪熊の革柄、なぜに遅いと毎日二三度使が走る。醒井の親粒もまだ入れてやるまいな。三條小橋の下細

は、四天王してんわうが勦殺なぶりころしの手玉てたまぞ。」と、貞光季武さだみつすけたけりやうあしと兩足取れば、公時片手きんとときかたてに角つのを持ち、「えい／＼。」聲こゑして引
 く程ほどに、難なんなく首くびを捻ねぢ切きつて、左右さいうへさつと退のいても退のかぬは、夫婦ふうふ主従しうじう、一門いちもん一家いっけ、縁者えんじや親類しんるゐ類るゐ豊ゆた
 かなる、流れながを汲くんで源みなもとの、氏うぢも繁昌はんじやう國くに繁昌はんじやう、五穀ごこく豊饒ぶねうの民たみ繁昌はんじやう、蓬萊ほうらい國こくの秋津島あきつしま、治ささまる御代みよ
 とぞ祝いはひける。

るものか。」と、御廉や几帳に身をちよめ、顛ひ戰慄き給ひける。關白道理に服し給ひ、奏聞衆議判力なく、檢非違使敕を蒙りて、政盛に繩をかけ、四天王に渡さる、「こは有り難し。」と引伏せ、「サア一人は片付けたり。とてもこの事に清原の右大將高藤といふ大悪人の、鬼神の棟梁も賜はらん。」と言上すれば、諸卿目と目を屹と見合はせ、片唾を飲んでおはします。關白殿眉を顰め、「忝くも高藤は女院の御弟、いかに罪科あればとて、右大將の官人、武士の手へ渡されし古例なし。この儀に於ては叶ふまじ。」と宣へば、「ム、御尤もく。」成らぬ事を是非とは申さず、さらば鬼の繩解け。」とつとよれば、「ア、くゝ氣の短い渡邊殿、談合せう綱殿。」と、周章て騒ぎ給ふ處へ、右大將つと驅け出で、「ヤア推參なる童ども、汝等如き匹夫の分にて、某を滅ぼさん事、蓮の絲にて大石を釣り下けんとするに似たり。早くその場を立ち退くべし。」と、嘲笑つて立つたりける。綱は堪らず驅け出で、高藤が雙膝搔いてどうど引敷き、「ヤア匹夫とは誰がこと。おのれが罪は、天下一統存じの所、白狀に及ばず。」と高小手手にぞ縛めたり。時を移さず舅中納言兼冬卿、頼光を誘引し參内あれば、「叡感甚だ麗はしく、源氏の本領舊の如く、鎮守府の將軍に任せられ、兼冬の娘澤瀉姫、四位の女官に補せられ、御祝言の吉日まで、敕誼あるぞ有り難き。」叔、「右大將の配所は鬼界が島へ、政盛は鬼神と共に誅す可し。」との綸言。「こは有り難し、それ計らへ。」「承る。」と政盛を引き出し、首宙に打ち落し、「残る鬼神

の實否を糺され、賞罰を願ひ奉る。それ／＼とありければ、公時が繩取にて、三人四方を取り圍み、庭上に引据ゑたる。鬼神は怒り喚く聲、宮中に鳴り渡り、帝を始め月卿雲客、宮女上下の男女まで、恐れをの、くばかりなり。關白忠平御階近く出で給ひ、「變化退治の武功御感淺からず、この恩賞によつて頼光出仕御免ある。早々鬼神の首を斬り、淀河の伏漬に沈むべしとの論言なり。」と、詞も未だ終らぬに、渡邊るたけ高になり、呵々と笑ひ、「こは一天の君の敕諭とも覺えぬものかな。もとより罪なき頼光が御免ありとは何の事。鬼神退治の恩賞は、望み次第との御高札によつて、我々一命を擲ち、鬼神を生擒り候へども、未だ洛中に平政盛といふ恐ろしき鬼神住んで、科なき者を讒し、國土を騒がし候。彼奴を我々に賜はつて、この鬼神と一緒に退治仕らん。これ第一の望みなり。」と、憚りなくぞ申しける。關白殿を始め、有合ふ諸卿色を損じ、「威勢盛んの政盛、假令如何なる過りありとも、誅せん事叶ひ難し。何にても外の儀を望むべし。」とありければ、貞光を始め季武公時口々に、「叶はぬ望みをまだ／＼と申しても無益の至り。此方御無心申さぬからは、其方の御用も承らぬ。この談合さらりつと元へ戻し、この鬼神の繩を切り解き、庭上に放ち、我々も腹搔き破り、共に悪鬼と現はれ、禁裏はおろか日本國中に仇を爲さん。」と、既に繩を切らんとす。卿相雲客、「あら怖や。やれ待て渡邊、兎相しやるな、貞光殿季武殿、公時とやら好い子ぢや。頼む繩解くな。鬼を放してたま

化だに、名劔の徳に恐れ、大半滅び失せにける。大將破顔鬼怒りをなし、頼光を目鬼け飛んでかゝるを、公時表に立ち塞がり、「ヤアさせぬく、顔の赤いが自慢か。其方の顔が赤ければ、おれが顔も眞赤いな。母様よりの譲りの力の鹽梅見よ。」と、ゆふ日に輝く紅葉ばの、何れをそれと紅の、兩手をかけて組んだれども、二丈に餘る鬼神の姿、二尺に足らぬ公時が、膝節までも届かばこそ。幾年経りし楠の、根を纏ひたる朝顔の、朝日に消ゆる命の程、危くもまた不敵なり。鬼神いらつて片手を伸べ、公時が胴骨擱んで軽々と差し上げ、微塵になれと投げ付ければ、宙に翻然と跳ね返り、落ち様に鬼神の兩足、一つに擱んで羽交締、大地にどうど打付け、起き上るを踏み倒し、打ち伏せ捻ぢ伏せ、馬乘にしつかと乗り、一息ほつと吐いたりしは、悪鬼に優りし勢ひ、「實に山姥の御子息、いやくどつ。」とぞほめにける。渡邊、季武、貞光など、我もくくと馳せあつまり、千筋の繩をぞかけたりける。「オ、心地好し潔し、只此の儘に都へ引け。」「合點ぢやまつかせ。」公時が胴より太き大綱を、確乎と擱んで、音頭「ヤア遣るぞえ、本綱中綱木遣でせい。ヤアてんまのひよえい、えい。」天魔の通力を悉く滅ぼして、凱陣あるこそ三重目出度けれ。斯くて帝都には、高懸山の變化の討手、諸卿詮議ある處へ、大納言兼冬公參内あり。「扱も某が壻源頼光、敕宣の御高札に任せ、江州高懸山に分け入り、變化を生捕り入洛仕つて候へども、敕勘の身を憚り、某を以て奏問仕り候、早く俊臣

斯くて頼光四天王を相具し、鳥も通はぬ高懸山、屏風を立てたる如くなる、惡所を嫌はず主従五騎、木の根に取付き岩間を傳ひ、足に任せて行く先も、次第々々に道暗く、山とも谷とも知れざれば、とある木の根に腰打懸け、少時休らひ給ひける。頼光仰せありけるは、「斯程峻しき山中を、早二三里も過ぎぬれど、何の不思議なき事は、必定世俗の虚説ならん。實否を糺し重ねて取巻き討ち取るべし。いざ開陣せん人々。」と言はせも果てず、あら恐ろしや、虚空に數萬の聲ありて、「不思議なきや不思議ありや、思ひ知らせん思ひ知れ。えい／＼。」どつと笑ふ聲、波の打ち來る如くなり。時に向うの松が枝に、五尺餘りの女の首、鐵漿黒に色白く、眼の光赫奕と、川邊の氷一面に、朱を流せし如くにて、につと由ばむ容顔は、身の毛も豎つ許りなり。季武進み出で、「よう／＼どうも／＼、鬼の娘に御見もじ、この季武奴が思ひの種、八幡一夜のお情あれ、心中づくなら後とも言はず、今日の前に陸奥の、千曳の石と我が戀と、重き思ひを比べよ。」と、大石を「えいやつ。」と、片手に擱んで投げ付ければ、變化の首は其の儘に、搔消す様にぞ失せにける。時に山河震動して、雷電稻妻夥しく、二丈餘りの惡鬼の形、火炎を降らし枯木を投げかけ、石上に突立ち、「しうぞくだつばが／＼がつ。」と呼ばはる聲に、此處の山陰、谷陰、岩陰、杉の木の間、に散亂し、數多の眷屬、一度にどつと喚いてかゝる。「さしつたり。」と頼光鬚切をさしかさし、數萬の中へ亂れ入り、喚き叫んで、三重戦ひける。通力自在の變

の勢いきほひに惡鬼退治思召し立ち給へ。」と、す、め申せば頼光、「それこそ武運開くべき瑞相。多くの人數無用なり、主從五人山續きに分け入つて、鬼神が自在に身を變じ、千騎とならば千騎を討ち、萬騎とならば萬騎を討ち、天下泰平の忠義を顯はし、敵を亡ぼす前表、はや打つ立て。」と進み給へば、公時悦び、「オ、鬼神退治面白からう、これ人々、この公時は生所も知らず宿もなき山姥の子なれば、産所も山、産屋も山、育つ所も山なれば、山道の先陣仕る。」と、眞先に立つて出でければ、「オ、でかしたでかした。心に懸る事はなし、母はもとより化生の身、有るとも無しとも陽炎の、影身に添うて守の神、これまでぞ公時。」「これまでぞ我が君。」暇申して歸る山の、峯にいざよふ月かと見れば、まだ中空に暮れぬ日影の、暮れしも通力、庵と見えしも、輪廻を離れぬ妄執の雲水、流れくつて谷に音あり梢に聲ある、風に消えく嵐にちりく、塵積つて山姥となれる鬼女が有様、見るやくと峯にかけり、谷に響きて今まで此處に、あるよと見えしが、山また山に山廻り、山また山に山廻りして、行方も知らずなりにけり。

第五

蕭蕭臺霜滿てり、一聲の玄鶴空に鳴く。巴峽秋深し、五夜の哀猿月に叫ぶ。物凄まじき山路かな。

ち寄つて、「ヤイ慮外者。彼方は常々言ひ聞かせし源頼光様、今日よりお事が殿様。御奉公精出しましよとまうしやいなう。」とをしへられ、はつと手を突き一禮し、「随分奉公精に入れ、敵の首いくつでも引抜いて上げましよ。」と、生先見えたる廣言に、御悦びは淺からず。母重ねて、「あの岩窟に熊猪を追ひ入れ置き、折々力を試し見れば、御覽候へ、あの如く引き裂き候。これお目見の印に相撲所望」といひければ、すんと立つて窟の口に立つたる磐石、かろくと取つて投げ退け、兩手を廣げ突立つ處に、内より荒熊飛んで出るを、「どつこいまかせ。」と確乎と抱く。熊事ともせず捻ぢ付けんとするれども、いつかな動かばこそ。搦み付けばこち放し、組み付けば押し伏せ、呻き猛る咽笛を、二つ三つ叩きつけ、怯む處を取つて押へ、片足擱んでくるくく、二三間かつばと投げ、「ア、草臥れた、乳が呑みたい母様。」と、母の膝にぞ憑れける。頼光甚だ御喜悅あり。「例なき強力、母が子にてありしよな。即ち只今冠させ、坂田公時と名づけ、四王天の四天を表し、貞光、季武、綱、公時、頼光が家の四天王、四夷八蠻を切り靡け、源氏の威光四海に照りさん徴ぞ。」と、各さゞめき合ひたまふ。綱貞光詞をそろへ、「君は知召されすや、近江國高懸山には、悪鬼栖んで國民を惱まし、折々は都方へもあらはる、故、諸國の武士に悪鬼退治の宣旨下さるといへども、お請け申す者もなし。武勇に長ぜし武士、鬼神退治あるにおいては、勳功勸賞望みに任せらるべしとの高札、所々に立てられたり。こ

く、人倫離れし山に籠れば、何時の間にかは山廻り、一念の角聳ち、眼に光る邪正一如と見る時は、鬼にもあらず人にもあらず、名は山姥が山廻り、春は三芳野初瀬山、高間の山の白妙に、擬ふ霞もそれかとて、花を尋ねて山廻り、秋はさやけき空の色、かはらぬ影も更科や、姥捨山の名にめでて、月見る方にと山廻り、冬はさえ行く比良が嶽、越の白山時雨れ行く、雲を起して雲に乗り、雪を誘ひて山廻り、廻りくして我が君に、廻り逢ひしも我が夫の、念力通力神力にて、渡邊綱、碓氷貞光、只今是れへ招くべし。あはれ我が子をも譜代の家人と思召し、敵御征伐の御馬の口をも取るならば、父が一期の素懐を遂げ、母が鬼女の苦患を遁れ、成佛得脱疑ひなし。二世の苦しみ助かるも、只大將の御慈悲。」と、角を傾け手を合はせ、平伏してこそ泣き居たれ。斯かる處へ綱貞光、草木押分け、「ヤア我が君是れに御座候。兩人今夜信濃路を通りしに、誰がいふともなく源頼光は、この山の彼方に、あの谷の此方にと、手を取つて引くが如く、覺えず是れまで参りし。」と、申し上ぐれば頼光、鬼女の神變委しく語り、奇異の思ひをなし給ふ。叔兩人を季武に引合はせ、「この上は女が望みに任せ、汝が一子に主従の契約せん。これへ召せ。」と宣へば、は、は悦び、「快童丸々々々。」と呼びければ、「あい。」と答へてつつと出で、どつかと坐したる顔の色。「なう母様、あれは何處の叔父様ぢや。土産貰はう嬉しい。」と、手を叩いて悦びし。愛敬ありて凄まじき、宛ら愛染明王の、笑ひ顔かと誤たる。母立

の武功を押へんと、魔障變化の爲す所、追つかけて討留めん。」と驅け出づるを、「やれ待て、變化と知つて立ち騷げば、彼に心を奪はるゝ。この方は静まつて却つて彼奴を誑し、戮殺しに退治せん。さもあれ彼が詞に従ひ、奥の一間を見ずに置かんも怯れたり。」と、主従覗き見給へば、あら凄まじや、五六歳の童、五體の色は朱の如く、蓬の産髮四力に亂れ、餌食と思しく鹿狼猪を引裂きて積み重ね、木の根を枕に臥したる様、誠の鬼の子これなんめり。知らず我羅刹國に來るかと、身の毛豎つばかりなり。時を移さず主の女、栗を手折つて振り擔げ、歸る處を頼光、膝丸を抜き放し、はたと打てばひらりと外し、ちやうど斬ればつと開き、退つて白眼む容顔變り、角は三日月、兩眼は寒夜の星と輝けり。怒れる面にはらくくと、翻る、涙にくれながら、「うたてや恥かしや、恨みなき我が君に仇をなさんと思はねども、御太刀影に驚きて、自性を顯はし候ぞや。この上は力なき、枯野の薄穂に出でて、身の上懺悔申すべし。我元は遊女の身、坂田何某と幾世をかけし契りの中、夫の父を物部に討たぬのみか、その事故に源氏の大将、漂泊の御身と成り給ふ。今生のこの身にて、この鬱憤晴れ難し、腹搔切つて、魂魄汝が胎に宿り、日本無雙の大力、一騎當千の男子と生まれ、敵の餘類を滅ぼさんと、天に訴へ地に叫び、誓ひの刃に伏したりし。それより我が身も只ならぬ、子をもち月の影深

る肩助け、里まで送る折もあり。又或時は織姫の、五百機立つる窓の梅、枝の鶯、絲繰り綿、繰り紡績の宿に身を置き、人に雇はれ手閒仕事、櫛さへ取らぬ亂れ髪、女の鬼とは理の、世を空蟬の唐衣千聲萬聲の、碓に聲のしつていく、しつていからころ槌の音、裾に響く山彦も、皆山姥が業なりと思ふも見るも人心、諸煩惱あれば菩提あり、佛あれば衆生あり、衆生あれば山姥も、などかは無からざるべき。都に歸りて夜語にせさへ給へや。終夜語り参らせん。」と、庵に誘ひ三重入りにける。小高き所をしつらひ、頼光を請じ奉れば、「いや／＼左様になさるゝ者ならず、一夜のほどは櫓の下にも明すべし。見申せば一人住の女性、この方へお構ひなく、渡世の營みせられかし。」と辭したまへば、「いや、紅は園生に植ゑてもかくれなし。大將軍の御骨柄、まがふ所候はず。實や源攝津守殿は清原右大將平政盛等が讒奏にて、御身を危めさすらへさまよひ給ふとは、山の奥にもかくれなし。それとも名乗り給ひなば、みづからが身の上をも語り参らせん。ヤア定めて旅疲れ、何をかな御もてなし。折節山々の木の實も皆落ち果てぬ。實に思ひついたり、筑紫宰府の山に、毬栗一枝昨日までありしもの、これを取つて参らせん。」と、戸外に出でしが振りかへり、必ず／＼奥の一閒を覗き給ふな見給ふな。おつつけ歸らん待ち給へ。」と、岩根を踏む事飛鳥の如く、山深く飛んで入りにけり。季武横手を拍つて、「筑紫宰府までは五百餘里、今の間に歸らんや。彼奴が仕方言分始めから呑み込まず。君

が嶺木曾の山、昨日は淺間伊吹山、比良や横川の花曇り、雪を擔ひて山樵の、樵路に通ふ花の影、休む重荷に肩をかき、月を伴ふ山路には、雪月花を弄ぶ。心は賤の目に見えぬ、鬼とや人の言はば言へ。よしあし引の山姥が、山廻りするぞ苦しき。暮るゝも早き山陰に、行き暮れ給ひて頼光、道なき方に踏み違ひ、里は何處と誰にかも、東西分かす立ち給ふ。御供の季武四邊を見廻し、「ヤあれに柴刈る女休らふからは、人里も早遠からず、究竟の案内者。これ女この山は何といふ。麓の里へ下る者、導きせよ。」といひければ、「これは信州上路の山の嶺。御覽の如く道もなく、麓の道とて東北は五十餘里、秋田の地幾重の谷嶺、繩を渡して橋となし、恐ろしや唐土の蜀川、天竺の流砂、葱嶺とやらの難所にも優るとかや。北は越後越中の堺川、これも谷二つ越え、十里に餘れば今日の中には思ひも寄らず。おいとしや、我等が方に泊めましたう候へども、何れも若き殿達、この柴鼻が柵家はお嫌であらん。」といふ風情、不束ならぬ山人の、薪に花とはこれならん。頼光打笑み、「イヤそれは逆様、荒くましき若者ども、和方こそ厭はれん。行き暮れたる山道、柴刈は愚か山好の柵家でも苦しからず。」と宣へば、はつと驚く容顔にて、「ム、扱はみづからが、山姥と見えけるか。山姥とは山に栖む鬼女、よし鬼なりとも人なりとも、山に栖む女なれば、さ見給ふも理や。誰そも山姥は、生所も知らず宿もなし、只雲水を便りにて、到らぬ山の奥もなく、人間ならずと恐るれど、或時は山柴の、山路疲る

ほうど呆れ、「我十餘年の今日まで、多くの者に出で會ひしが、一度も斯様の不覺は取らず。さもあれ御身只人ならず。包まず語り聞かされよ。なう底の知れぬ對手ぢや。」と、舌を巻いてぞ居たりける。頼光打笑ませ給ひ、「オ、さもあらん。凡そこの土に生あるもの、我が名を知らぬ事やある。源満仲が嫡子攝津守頼光ぞ。」と、聞くよりはつと飛び退り、頭を大地に摺り付け、「ア、勿體なや〜。さればこそ始めより、尋常ならず見奉り候。扱は平政盛、清原右大將が讒言にて、斯かる御身となり給ふよな。所こそあれこの處にて、あひ奉るも宿世の御縁。我は卜部熊武と申す山賊の張本、向後一命を擲ち、君に仕へ奉らん。御沓取とも思召され候へかし。」と、おもひ入りたる詞の末、頼光御喜色斜ならず、「オ、頼もしし、然らば今日より主從ぞや。子孫に長く武功を傳へ、幾千代かけし壽に、卜部季武と名乗るべし。」と宣へば、「有り難し〜。昨日までは追剝、今日よりは忝くも源氏の郎等卜部季武御供申し、山も谷も草も木も、皆我が君の御領内、この山の獸も鳥も蟲も皆傍輩、懸けたる首は傍輩の烏殿への置土産、さらば〜。」と見返るや山路歸るや。三重一洞むなしき谷の聲、山高うして海近く、谷深うして水遠し。前には海水濺々として、月真如の光を挑け、後には嶺松巍々として、風常樂の夢をやぶる。刑鞭蒲朽ちて螢空しく去る、諫鼓苔深うして、鳥驚かすとも謂ひつべし。心は昔に變らねども、一念化生の鬼女とや。人は陸奥の信夫の山にあるかとすれば、今日は甲斐

ぐれば、こは如何に、老若男女の血汐の生首、梢にひつしと懸けたるは、たゞ熟柿の生つたる如くなら。頼光些とも臆せず、ム、言はれぬ狐狸殿、落人と侮つて魂を抜かんとな。シヤ物々し。」と髭切抜きかけ、瞬きもせず守りつめて立ち給ふ。時に向うの木陰より、小山の様な大男、丸駄船を漕ぎ出す如く。ぬめくつて歩み寄り、頼光の元へどつかと坐りし有様は、追剥の大將と看板打たぬ許りなり。頼光ものさばり聲、「こりやく男、汝が面相只者ならず。商賣も合點なり。某は善光寺參詣の上方者、路銀を切らし一宿すべき様もなし。近來無心千萬ながら、和主が常々盗み貯めし、金銀衣類はいふに及ばず、身にまとひし古纏袍、腰にさいた候しも、早々抜いてわたせ、命ばかりは助けくれん。」と、言はせも果てずからくと笑ひ、「ヤアラ丁稚奴が味をやるよ。身が一席の臺詞の裏を食はずは曲者。意地張つて大怪我まくらんより、汝が纏袍腰に指いた赤鬨も、早く此處へまけ出せ。渡さぬだてを吐き出さば、こりやくこの首の連中に加へん、西の枝か東の枝か、サアと望め。」と詰めかくれど、頼光返答も仕給はず、「ア、この程の旅疲れ、とろくと寐てくれん。」と岩稜に驅け上り、首二つ三つ引揃んで飛び下り、「オ、日本一の枕ござんなれ。」と、兩脚ずつと踏み伸ばし、ゆたかに臥したる御有様、不敵にもまた恐ろしし。山賊いまは堪りかね、柄に手を掛け抜かんくと腕けども、神武智勇の名將の、三徳兼備の威に押され、眼も眩み腕痿れ、覺えず顫ひ出でけるが、さすがの山賊

らぬ藁沓に御足を痛ましめ、草の露散る影にだに、今は憂き身を置く方も、鳴子に噪ぐ羣鳥の、ちりぢり別れ落ち給ふ、御有様ぞ哀れなる。美濃のお山は其方とも、いざ白菊や秣刈る、牧の童に道問へば、花によそへて紫蘭々々と子供さへ、悔る蔓蔦蔓、這ひ蔓りて行く先を、せき留めよと關が原、日高の袖も打曇り、さつと袂に一時雨、少時宿かる笠縫の、里を遙かに見渡せば、野分に亂す秋亡、野守の鏡埋もれし、浮世の曇吹き拂へ。伊吹の里に檐端吹く、苦は荒みて寂しきも、繪に寫しては美しき、賤が藁屋に立つ煙、消えては結び靡きては、風のまに／＼立ち迷ふ。ア、人界の善惡に、誘はれ靡く人心、斯くやと許り觀ずれば、五慾七情様々の、罪を宇留間の里近き、友にも疎く親しきも、不破の中山山深く、木の間に漏るゝ入相の、鐘こう／＼と物凄く、谷の棧橋と絶えして、峯に妻戀ふ鹿の聲、子を悲しみて猿鳴く、夜半の鶴鳥夜の鶴、涙を添ふる種ならし。暮れ行く空は風絶えて、四方の山々默然と、坐禪の相を現はせば、谷の川音森々と、寢物語は美濃近江、國の堺よ世の中の、盛者必衰の堺かと、我が身に問へば我が答へ、否にはあらぬ稻葉山、後に見なして何時か復、世にも青野が原ならば、今を昔の世語と、思ひ續けて行末は、垂井赤坂青墓も、それぞと許り夕まぐれ、松の嵐のとう／＼、さら／＼さつと吹き下し、雲の往來も餘所よりは、はや暮れ過ぎて物凄く、名をだに知らぬ山中に、茫然として 三重立ち給ふ。草木繁つて、崑々たる岨陰横折れし、枯木の枝を見上

かりに五體を投げ、消え入る許りに歎かる、心の内こそ哀れなれ。母は涙の隙よりも、「ア、人は筋目が恥かしい。流石満仲の御胤にてありしもの、このお心とは露知らず、臆病なりと心得て、賤しき母が口にかけて、言ひ恥ぢしめたる勿體なさ、恐れがまし冥加なや。中有の旅の御供して、言譯せん。」と太刀取り上ぐれば、判官押へて、「ア、不覺なり。御身は慥かに生の母、我ばかりは現在の主君、死なば我こそは死ぬべけれど、頼光斯くと聞召さば、よも存へんとは宣ふまじ。時にはこの子も犬死、我々夫婦も不忠の者、敵の使頻りなり。密かに頼光を落し參らせ、一まづこの首の額に、智識の剃刀を。」戴く天の誠の道、守れば守る御佛に、後世を任せてこの世には、忠義を磨く魂祭、濁りに染まぬ蓮葉の、花を君子に譬ふれば、儒佛の教へ暗からぬ、人の心を頼もしき。

第四

源頼光道行

次第 仇なりと名にこそ立てれ櫻花、く、散りても終に根に歸る、都の春を頼みても、浮世の淵瀬常ならぬ、流れの行方汲みて知れ。源頼光は判官夫婦が情にて、御命遁れしと、又もや餘所に杜の下風木の葉の雫、落人の身となり給ふ。戰場出陣の折ならで、召しも習はぬ武者草鞋、それにはあ

なし。」と、櫛篋引寄せ髪を解き、元結取れば髻の中、一通の文を結び込め、「母様參る冠者丸。」と書いてあり。夫婦不審晴れやらす、「扱は覺悟のありけるが、但しは何ぞ望み事でもありけるか。」と、泣く泣く披き讀上ぐる、聲も涙に埋もれて、文の詞もしどろなり。「松は千歳を盛りとし、朝顔は一時を一期とす。萬事は前世に定まる夢、何を現と定むべき。然れば我等滿仲公の不興を受け、判官殿の子となり、十三の春より十六のこの秋まで、養ひ親の御高恩申すにも言葉なく、殊更母の御恩徳、七生生まれ替りても報じ難なく存する折節、我が首討つて頼光の御身代との志、物陰より見參らせ、望む處と存すれども、常々母の御不便、荒き風にもあてられず、御身に代へての御寵愛、その期に臨んで歎きに沈み、よもや討ち給ふまじ。所詮我等、臆病者未練の體を見給はば、御憎しみの怒りの刃、御心安く討ち給はんと、態とさもしき卑怯の最期、命惜しむと思すなよ。西東覺えてより、終に一度も御氣に違ひし事もなく、一生の別れ今はの際、御腹立の御顔容見奉らん悲しさは、來々世々の迷ひなり。さりながら君には忠親には孝、母の貞女の道立てば、身においての悦び、三世の諸佛も照覽あれ、命は更に惜しからず。悲しみの中の悲しきは、年長くるまで母上の御寢間近く起き臥して、今宵よりの御歎き思ひやられていとほしく、御名残は盡きせず候。返す／＼。」と書き留む。母は文を身につけ首搔寄せ、抱きついてかつばと伏し、聲を上げて泣き給ふ。思ひ切つたる判官も、「わつ。」とば

くば殺すまい。せめて一言潔く、弓取らしい詞を聞かせ、恥を雪いでくれよ。」とて、聲を上けて歎
 かる。判官嘲笑ひ、「これ／＼御邊の心底は顯はれたり。生きとし生ける者、命惜しまぬ者やある。
 その一命を義によつて捨つるを、弓取武士と名付け、惜しむは賣人土民といふ、左様の下郎を御身代
 に取つて何の益あらん。この上は頼光の御運次第。」とありければ、冠者色を直し、「ア、有り難き御料
 簡、命一つ拾ひし。」と逃げ出づるを、母とつて引据ゑ、「エ、恥知らず。可愛さも不便さも、ふつり
 とさめ果てたり。長き恥を見せんより、母が慈悲ぞ。」といふより早く、拔打に討つ太刀風に、盛りを
 待たぬ小椿や、首は前にぞ落ちにける。胸にせき來る涙を押へ、髻提げ夫に近づき、「過去の業拙く
 畜生を生みながら、人とおもひて育てしは、面目なくも恥かしし。斯かるものを、大將の御身代とは
 恐れながら、我々が忠孝の志を立て給ひ、御情には君御出世の後までも、この子が最期は健氣なり
 と、必ず恥を隠して給べ、言ふに甲斐なき最期や。」と又咽せ返るぞ道理なる。斯かる處に外様の侍
 六七人馳せ來り、「ヤ、右大將より御返事遅しとて、使度々に及び候。急々に有無の御返答然るべし。」
 とぞ申しける。判官少しも騷がず、「あれ聞き給へ、君の御難儀只今に極まつて、先途の御用立つ事
 は、御身誠の志、弓矢の冥加に適ひたり。とてももの事に最期清くせざりし事の残念さよ。血の別れ
 とて容顔は、頼光に似たれども、丸額と角額、この分にては渡されず、この首に角入れば頼光に擬ひ

も討たれず、爲方盡き、「判官殿はおはせぬか、出合ひ給へ。」と呼ばはれば、「さしつたり。」と、妻戸蹴
破り飛んで入る。冠者丸も飛びしさり、互に顔をきつと見合はせ、呆れて詞はなかりしが、母は泣く
泣く聲を上げ、「御不審は尤も。やれ冠者丸、右大將より頼光を討ち奉れ、おことを源氏の大將と仰
がんとの内通、判官殿の名の大事、お身を害して、頼光の御首と敵を誑し、御難儀救ひ、御身も母
も末代に、女の道忠孝の名をとゞめんと、この太刀を幾度か、打付けんくとはしたれども、いとし
かはいに目も眩み、如何でも母もえ討たれぬ。なう判官殿、はやくあの子を討つて給べ。こりや狼
狽へな、お主といひ元は兄、お命に代るは本望なり譽なり。母方が賤しうて、未練の最期と笑はる、
な。目をふさぎ手を合はせ、尋常に討たれてたも。」と口説きたまへば、冠者丸顔色さつと蒼くなり、
わぢく顛ひ、「ヤア何と、我等がこの首討たんとや、親分ながら判官殿は元他人、頼みにしたる一人
の母、情なや慘らしや。假初の煩ひにも、薬よ灸よと宣ひしは偽りか。首討たる、科ありとも、助く
るこそ親の慈悲、無情い母や恐ろしや。」と逃げんとするを、母飛び蒐つて引き留め、「エ、淺ましや口
惜しや。ヤイ科あつて討たる、程ならば、母がこの身を一分試に刻まれても、見殺しにするものか。
子の命は親の命、假令御身が思ひ切り、捨てうというても捨てともない、御身が命は御身より、母が
百倍惜しけれど、それを殺すば人界の、義理といふ字に責められし、母が心を思ひ遣れ。死にともな

付手元も今の間の、形見と思へば胸逼り、物言ふ聲もしどろなり。「これ冠者丸、現世の親より未來の親が先づ大事。行水せしこそ幸ひ、帷子著替へ身を清め、御經讀んで父精靈の手向け、若き身とて無常の命、いつ何時の定めはなし、自他平等の廻向しや。」「あつ。」と答へて冠者丸、親の襲ぬる死装束、その身はそれとも白帷子、思ひ染めぬぞ哀れなる。能勢判官仲國は、「妻の小侍従、頼光を瞞討に打たんとは螳螂が斧、かへつて御佩刀にかゝり、顯はれては一大事、あら氣遣はし胸安からず。」と、佛間の妻戸に窺へば、靜かにお經の聲聞ゆ。「すはや是れぞ頼光の御聲。かく御心を許されし上は何事かあらん、物音のそよともせば、妻戸一重蹴破つて唯一討。」と、鉦元抜きかけて、耳をそばだて控へたり。冠者丸は一心不亂、誦む御經の日もたけたり。ア、歎くまいおくれまいと、母は刀をするりと抜き、後に立ちは立つたれども、髪黒々と色白に、讀誦の辯舌爽かに、百人にも優れし性質、見るに目も暮れ心消え、太刀振り上げし手も弱り、涙の闇に迷ひしが、「さてかはいやな、後よりこの母が、切り殺すとは露知らず、慈眼視衆生福聚海無量と、誦むが不便やな、親を殺す子に許り、天罰當るは何事ぞ、我が如く子を殺す親にも罰の當れかし。奈落に早く沈みなば、この世の思ひはせまいもの。」と、太刀振り上げては泣き沈み、消え入りては又振り上げ、聲をも立てすかつばと伏し、からりと投げし太刀よりも、胸を切り裂く思ひの刃、涙玉散るばかりなり。御經も早卷軸の時刻過ぐれど、討つ

取らず二も取らず、源氏の破滅この時なり、いたはしながら討ち奉り、冠者を源氏の大將軍、清和の系圖を繼がせんは、我が身の幸ひあの子が果報。」と言はせも果てず、「オ、皆まで聞くに及ばず。こそ思ひて尋ねし事、御首討つて今日の中、用意せん。」と立つ處を、「これなう御身の爲には相傳のお主、世の譏り天の咎め、佛神の怒りも恐ろしし。みづからが一太刀に、瞞し寄つて刺し通さん、場所はこの持佛堂。千に一つも仕損ぜば、聲をかくるを合圖に驅け付けて首取り給へ。」「オ、潔し、然らば御身討たれよ。次の間に忍び居て、聲次第に驅け出でん。必ずせくまい。」「氣遣ひなされな、首尾よう。」と、別れて座敷に立ち出づる。跡見送つて北の方「耽かしや、男も女も慎むべきは舌三寸、子を思ふ餘りの詞に心を見探され、疑ひうくるも尤も、詞の言譯まことしからず、所詮御身代に冠者丸が首討つて、頼光の御難をすくひ、邪なき誠の心、この佛こそ證據ぞ。」と、貞女の道を守刀、袂の下に押隠す、數珠も我が子に別れの涙、今日一日を現世未來、障子をさつと明けければ、冠者丸立ち出で、「今日は佛事の日とは申しながら、片親にてもある者は、別きて祝日、目出度きお顔見せ給へ。」と、莞爾なるを見るにつけ、母は心も亂るれど、さあらぬ體にて、「オ、この祝日に、髪をも結はず、取上髪は何事ぞ、頼光様は何方に在す。」「さん候。築山の涼み處に御入り、我等もお側にありけるが、殘暑凌ぎ難く、行水いたし髪も解き、自鬢に取り上げ見苦しからん。」と、つと搔き撫づる手

心にも懸子なし。御身も亦偽りなく、眞直に返答あらば、語るべき事あり、心底聞かん。」とありければ、「ア、今めかし。何事か存ぜねども、常にも偽り申すにこそ。殊に大事の孟蘭盆の、年に一度の客の精霊、佛の前にて露程も、虚言の御返事致さうか。語らせ給へ。」と仰せける。判官首肯き、懐中より文一通取り出し、「コレこれ見られよ、頼光これに御座の由、右大將傳へ聞き、急ぎ詰腹切らするか、但し密かに刺し殺すか、首打つて出すに於ては、一子冠者丸はゆるしよある者なれば、源氏の大將と奏聞し、取立てんと文に、起請を書き添へこされたり。されども某かかる非道に與すべきか、頼光を密かに落し奉り、右大將より咎めに逢はば、腹切るまでと心に藏め、打投つて置きけるが、御身昨日の口説き事、偶満仲の若君を誕生せし甲斐もなく、平人の判官が子と埋もる、冠者丸、明暮本意なく悲ししと、水に住む蝌蚪まで思ひつゝ、けて悔みの體、母たる身にては道理なり尤もなり。畢竟この判官が爲には、我が子にて子にあらず、現世の親とは御身の事。頼光を失ひ冠者丸を世に立つべきや、後悔の無き様に、心の底を眞直に聞かまほしし。」とありければ、小侍従はつと胸塞がり、文繰り返し、巻き返し顔を傾け目を塞ぎ、胸に手を組みさし俯き、思案とりん／＼さま／＼に、少時答へもなかりしが、「ア、實さうぢやもの、なう判官殿。假令頼光様此處を助け落しても、かくまで榮ゆる右大將、御首を見ずしては、雲の裏にもよもや助け置くべきか。時には冠者丸も世に出でず、一も

が手足となり、常の蛙となる故に、歎き悔むと傳へしが、それは天地自然の道理、みづからはたまたま、源氏の大將を産み落せし悦びは夢なれや。覺めては平人の子と成り給ふも、この母が戒行の拙き故と、積る涙は濁江に、夜晝泣かぬ隙もなき、蛙に劣りしこの身や。」と、御前も人目も打忘れ、かつぱと伏して泣きければ、君を始め渡邊貞光諸共に、皆々袖をぞ濡らさるゝ。稍あつて頼光、「小侍従の悔み至極ながら、子を見る事父に如かずといへり。滿仲の深き御心入こそありつらめ、今右大將政盛等が逆威に責められし頼光が、弟美女御前とあるならば、かく安穩にあるべきか。判官が子となりしゆゑ、先づ此の度の難を遁れし事、父の慈悲のこれ一つ。御勘氣の上からは、元のごとく出家ともなし給はず、判官が子に賜はつて、弓矢の家を立てさせらる、父の慈悲のこれ二つ。我世に出でてもあるならば、末を見よや三つの慈悲、親の形見は兄弟ぞ。」と、打涙くみ給ひければ、判官親子は、「あつ。」と許り、渡邊も貞光も、末頼みある源氏の光、挑け添へたる燈籠の、影に門出の杯や、御暇賜はり、三重立つ雲の明くれば七月十五日、亡魂祭る持佛堂、北の方は只一人、香を燻き水手向け、捧ぐる花は蓮葉の、露の數々亡き人の、頓證菩提と廻向の折柄、判官立ち出で、同じく香花奉り、暫く念誦事終り、「なう小侍従、あれ見給へ、本尊は三世常住の佛菩薩。殊に今日は盂蘭盆にて、親祖父の聖靈、滿仲公の亡魂も、この持佛堂に來らせ給ふ。尊靈の御前にて申すからは、詞にも虚言なく、

と、あの子が果報の薄き事、日頃よく思ふ事、思ひ餘りて涙がこぼれ、御祝儀を醒せしぞや、御
 大將にも綱殿も御存じ、貞光殿への物語。妾は初め小侍従の局とて、御父満仲公に宮仕へ、源氏の胤
 を身に宿し、誕生せしはあの若、美女御前と付け給ひ、御寵愛ありしかど、頼光様の御母、御臺所の
 御心を憚り、出家にせんとて、十一の春より十三の秋まで、山へ上せ給ひしに、經の一字も習はず、
 斬つつ張つつの弓馬の藝、満仲公の御憤り、なだめても歎きても、御憎み晴れやらず、藤原仲光に
 仰せ付けられ、首打たる、に極まりしに、情ある仲光忠義を重んじ、我が子の幸壽丸を害し、あの子
 の首とて見せ參らせ、當座の命は助かりしが、終にその事顯はれ、二度の御勘氣御立腹、御親子の縁
 切れて、妾一所に判官殿に下され、今みづからは能執判官仲國が妻、あの子は一子冠者丸とは申せど
 も、元は満仲公の御子頼光の御弟、美女御前にて在す。ア、悲しきかなや、同じ源氏の種と生ま
 れ給ふほどならば、御臺所の御腹にも宿り給へかし。然らば出家の御沙汰もなく、頼光様は大將軍、
 あの子は又副將軍と、千騎萬騎の軍兵も從へ靡け給はん御身の、末代に残る源氏系圖の卷にさへ、美
 女御前といふ名を削つて入れられず、漸うと郷侍、鋤鋤取の大將とは、痛はしとも淺ましとも。數
 ならぬこの女の腹をからせ給ふ故、御出家と仰せ出されしが、果報の花の散り初め、井出の蛙の蝌斗
 の、小さき時は尾緒あり、宛然魚の如くにて、母蛙が親に似ぬ、龍を生みしと悦べども、次第に尾緒

海を一番みにし、萬民の歎き遠かるまじ。兩人お暇賜はつて、都の體をも窺ひ、諸國の御家人驅り催し、科なき旨を奏聞し、佞臣原一々に搔首し、御本意遂げさせ奉らん。如何にしても、此のやうに安閑としては、筋骨たるんで精根盡き果て候へば、はや御暇。」とぞ申しける。頼光聞召し、「我も然こそ思ひつれ、さあらば兩人は伊勢路紀路へ赴くべし。我は又北國にかゝり、源氏志の勢を集め、都九條六孫王の誕生水にて出で會はん。門出といひ、貞光には未だ主従の杯せず。名乗の一字を譲る上は、向後源氏の家の子ぞ。」と、御杯を下さるゝ。貞光退つて頂戴し、「天が下に二人ともなき大將軍を主君に持ち、下地の勇力十倍増し、一騎當千と思召され。」と、三杯續けてつつと乾す。能勢判官座を立つて、「オ、目出度し。貴殿、渡邊殿の武勇にあやかり申す爲、其の杯を一子冠者丸に下されかし。」とありければ、「お辭宜も申すべけれども、武勇にあやかり給ふ爲、お望みに任せん。」と、さす杯を冠者丸、戴き、敬ふ體、母は見るより打萎れ、袂を顔におし當てて、包む涙も自ら、聲に現はれ色に出で、人々、「これは。」と御座敷、興醒めてこそ見えにけれ。判官見かね、「御祝儀の折柄、不吉の落涙狂氣したるか、罷り立て。」と引立つる。渡邊とめて、「オ、尤も、貞光の杯不足に思はるゝこと、母御の氣には道理至極、此處は綱が頂戴せん、冠者殿いざ指し給へ。」といひければ、母は漸う涙を押へ、「御不審は御理。貞光殿をゆめ、輕しむにても候はず。我が身の運の拙さ

數々廻る杯の、影に映るふ燈籠の、色をかへ品をかへ、切籠太鼓のなりも好し。籠に入れたる造
 り花、桔梗、蓮葉、藤の花、風に揉まれて百合の花、奥の奥山の一本薄、何時穗に出でて亂れ、亂
 れあふひの花菖蒲、我が思ひは深見草、誰か憐れとしら菊や、紫苑岩菲に罌粟子、繡線菊の花桶に、
 枝垂櫻や絲柳、水なき空の釣舟も、焦る、色の紅椿、手鞠山吹杜若、歌仙の姿おきあけに、文字を透
 しの透し燈籠、額燈籠、手際優しき花葛、振分髪を比べ來し、井筒燈籠井戸屋形、這ひ纏はる、朝顔
 の、花の臺の輪々毎に、燈す燈火きら／＼と、さながら秋の、螢飛び交ふ宇治川の、網代燈籠、緞子
 燈籠、洲濱團扇、唐團扇、扇車に水車、油煙につれてくる／＼と、廻り燈籠、影燈籠、月も更け行
 く夜嵐に、廻れ／＼、品よく廻れ風車、小車の花見車に忍びの車、ア、／＼百夜の車、餘所に主ある
 袖引くな、袖褌引くな女郎花、戀を董か美人草、四季に色ある造り花、手を盡してぞ飾りける。頼光
 甚だ興に乗じ、酒宴酣の折から、渡邊綱碓氷貞光御前に罷り出で、實に此の度判官殿の忠節にて、
 我々まで安座の段淺からず候へども、何時まで斯く悠々としてもあられず。御大將は誰あらん、忝
 くも六孫王の御孫、攝津守源頼光。郎等には先づこの渡邊、新參の碓氷貞光、一席に唯二人なれ
 ども、兩腕に百人宛、胴骨にも百人宛、押取つてこの座に許り六百騎、何を浮々待ち給はん。惡道に
 は加擔人多く、直なる道には入る者少なし。右大將が威勢をかつて、半家盛んの世とならば、政盛四

せましまして。」と、姫君に一禮し、「今よりは我何處を其處としろ。」妙の、三十二相の容顔も、怒れる眼物凄く、島田解けて逆縁に、たちまち夜叉の鬼瓦、唐門、樓門、四脚門、塀も築土も飛び越え跳ね越え、跳ね越え飛び越え雲を分け、行方も知らずなりにけり。

第三

佞人の詞は甘きこと蜜の如く、人を損ふ事刃よりなほ速かなり。清原右大將、平政盛に荷擔し、源頼光武勇に誇り、狼藉者を引込み民家を騒がし、我々が手の者大勢討取り、剩へ都まで切り上らん企て、上を輕しめ下を傾け候。」と、再三讒訴しきりなれば、終に甕成乳虎の牙にか、つて、都蒼鷹の忠臣の翼も折れ、勅勘の身と成り給ひ、美濃國能勢判官仲國は、累代の被官といひ、内縁深き好みによつて、暫時忍びおはします。判官の妻小侍従、一子冠者丸十六歳、夫婦親子等閑なく、家内の男女いたはり仕へ奉り、御心置く方も、夏過ぎ秋も始めなる、西面の欄干に、色々の燈籠を飾らせ、この夕暮の御徒然と、御杯を參らすれば、頼光も淺からぬ、淺茅が露に燈籠の、光り合ひつ玉しける、昔の秋を思し出し、數杯を傾け興に入り、長歌作り朗詠し、謠ひ給ふぞ面白き。

燈籠の段

山深谷を柵家とし、生まるゝ子を養育せよ。さらばく。」と諸共に、劍を抜けば紅の、血は白雨を
 争ひし、最期の念ぞ凄まじき。あら不思議や、切口より火焰の轉がせ、女房が口に入れば、「うん。」と
 許り其の儘息は絶えてけり。斯かる處に若侍五六十、無二無三に羣つて、館の四方をおつ取巻き、
 一ヤアく兼冬。右大將高藤公より、汝が姫を召さるれども、頼光と縁組とて承引なき條憚り千萬、
 それによつて姫を引立て來るべしとの御使。亂れ入つて奪ひ取れ。」と、をめき叫ぶその聲に、兼冬公
 驚き給ひ、「ヤア主ある娘を奪はんとは、人畜類の右大將、返答するに及ばず。あれ追つ散らせ。」と宣
 へども、言ふに甲斐なき公家侍、防ぐ方なく見えたる所に、伏したる女むつくと起き、表に立つたる
 奴原を、取つては投げく、姫君の在す御簾を圍うて立つたるは、宛然鬼女の如くなり。政盛が家
 子太田太郎「數にも足らぬ下種女、何事か仕出さん、あれ引き出せ。」と下知すれば、「なに某を女と
 や。オ、女ともいへ、男なりけり胎内に、夫の魂やどり木の、梅と櫻の花心、つまとなり子と生ま
 れ、思ふ敵をうつ蟬の、身體は流れの太夫職、一念は坂田藏人時行、その験これ見よ。」と二抱へ餘り
 の椋の樹を、片手振り、「エイやつ。」と捻ぢ折つて、寄り來る奴原ばらくく、はらりくくと薙ぎ
 立つるは、人間業とは三重見えざりけり。この勢ひに恐れをなし、返し合はする者もなく、皆ちりち
 りに落ち失せけり。「オ、さもさうずさもあらん。我が魂は玉の緒の、お命恙なく、行末長く待た

らで、娘をころりと落したと、首をころりと落すとは、雲泥萬里」と恥ぢしむる。時行ほうど行き詰り、「アッア左様ぢや過つた。然らば是れより頼光の御行方を尋ね、御家來となり、御威勢をかつて、政盛が首引き抜かん。」と驅け出づるを又引留め、「たつた今恥ぢしめた舌も引かぬに無分別。武勇正しき頼光様、御内には渡邊源五綱とて一騎當千の兵、同じく碓氷荒童、鬼も欺くその中へ、生温い姿をして、妹に先越され、敵を討たぬ無念故、御奉公致したいと言はれうものか、言はしやるか。お取上も無い時は、すごくくとは戻られまい。棒戴いて戻ろより、往かぬ方がはるかに優し。どうぞ分別は無いかいの。エ、情ないお人や。」と、突き倒してぞ泣き居たる。時行道理に責められて、行きつ戻つつ齒嚙をなし、拳を握り立つたりしが、「もうこの上の分別なし。」と、革籠の中より、氷の様なる鎧通押取り、腹にぐつと突き立て、脊骨をかけて引き廻す。女房、「これは狂氣か。」と縄りつけば、「アツく音高しくおことが今の悪言は、伍子胥が吳王を諫めたる、金言より猶重し、恐らくこの一念、項羽紀信が勇氣にも劣るまじと思へども、時來らねば力なし。それまでまだく存命へ、臆病者腰抜と指さされんは、無念の上の無念なり。我死して三日が内、御身が胎内に苦しみあらば、我が魂やどりしと心得、十月を待つて誕生せよ。神變稀代の勇力の男子となつて、今一度人界に生まれ出で、政盛右大將を亡ぼさん。おことが身も、今日より常の女にこと替り、飛行通力あるべきぞ。深

仇口、エ、恨めしや。」と許りにて、無念涙にくれければ、女房いよ／＼嘲笑ひ、「ム、あのまが／＼しい顔わいの、親の敵は幾人あるぞ。此方の妹御絲萩殿とやらんが、先月二十三日、佐夜の中山で討ち給ふ物部平太は、敵ではないかいの。」時行はつと驚き、「何妹が敵平太を討つたるとは、必定か。」
 「サ定か實か、碓氷の荒童といふ人を語らひ、易々と討つて、源の頼光様を頼み、驅け込みしとは日本に隠れ無い事。」と、聞きもあへず、「南無三寶、天道にも見放され、弓矢神にも捨てられし、口惜しの運命や。」と、我が身を擱んで泣き居たり。女房側に立寄つて、「これなう今悔んで済む事か。忝くも頼光様、妹御をかくまへ給ふ遺恨によつて、敵の主人右衛門頭平政盛、清原右大將と心を合はせ、頼光様を讒奏し、救助の身となり給ふ、これ程大きな騷動を今まで知らぬとは、狼狽者の浮名を世間へ觸れうといふ事か。前後を思案して下んせ。日頃の心に似ぬの。エ、おとましい、世に連れて心までが腐つたか。」と、縋り付いて泣きければ時行突立ち、「扱は敵ゆる、頼光の御難儀となつたるとや。妹に先越され、親の敵は討たずとも、政盛右大將は敵の敵なり。いで二人が首取つて頼光の御恩を報じ、名字の恥を雪がん。」と躍り出づるを引留め、「それ／＼それは悉皆氣違か。討つに討たる、程ならば、頼光様に油斷があらうか。彼等は威勢真最中、討たれぬ仔細があればこそ、日陰のお身となり給ふ。此方が今驅け出して、心易く首取らうとは、重ねて恥がかきたいか。此方が今まで徒

座んする。ア、あんまりしやべつて息切れた。お茶一つくださんせ。」とぞ語りける。姫君をはじめ腰元衆、「さて心中の女郎や。假令如何なる身になつても、おもふ男と添ふからは、面白からう。」と宣へば、「されば末を聞いて下さんせ。その男の父親が、暗討に討たれ、暗討たねば適はぬと、私とは縁を切り、行方もなう別れて、親の敵を狙ふとは、跡方もない赤讎。我が身に秋風立ちけれども、何を潮に退かれもせず、親御様の死なんしたを、屈竟一の託言に、敵討との口上は、釋迦でも一杯參る事、まんま私を誑り、女房には紙衣を著せ、その身はちやんと榮耀らしい、若い女中に立交り、三味線彈いて居けつかり、くさりくさるを見る様な、日本國の姫御前の、因果を一つに固めても、我が身には及ぶまい。初對面の皆様へ、ありし昔の懺悔話、お恥かしや。」とばかりにて、おろく涙にくれければ、「オ、道理々々、身にかゝらぬ此方とさへ、煙たうて堪られぬ。さりながら、構へて短氣な心を持ちちやんなや。未だ話したい事もある、奥へ通せ。」と姫君は、簾の内へ入り給へば、「サア苦しくない奥へおぢや、此方へく。」と人々は、皆々一閒に入り給ふ。跡見送つて八重桐、さらば奥へ參つて、憎さも憎し男の懺悔、言うてのけうと入らんとするを、時行取つて引き戻し、はつたと睨め、「エ、流石は流れの女ぢやな、親の敵を討つまでと、相對づくの離別ならずや。只今の詞は誰にいふあてこと、未だ敵の行方は知れず、心を碎く夫の體、衰れとも思はず、おのれが榮耀に引き當てて、面白さうな

ぬ嫌ぢやぞや。サア男を給るか給らぬか、否か應か應か否か、二つに一つの返答が聞きたい。』と、胸づくしを引摺む。此方も一期の大事ごと、弱身を見せず、『こりや小田巻とやら、くだ巻とやら、ひかりは喰はぬ出直しや。この廣い日本に、あの人ならで男は無いか。よし無いにせよあるにせよ、それ程ゆかしい男なら、何故に先に惚れなんだ。男盗人いき傾城。』と、言ひさま取つて投げつければ、明障子打ち破り、繼三味線を踏み碎き、縁より下へころ／＼と、這柏檣までこけかゝり、木柵南天めつきり／＼、切石の上に眞俯向、蚬は一石六斗三升五合五勺、『そりやこそ喧嘩が始まつた、大事の此方の太夫様に、負をつけては叶ふまい、加勢をやれ。』と言うた程に、遣手、引舟、仲居、飯焚、出入の座頭按摩取、巫女山伏に占算、雪駄片足に下駄片足、草鞋懸で來るもあり。臺所から座敷まで、『太夫様の仕返し。』と、彼處では叩き合ひ、此處では撲ち合ひ踊り合ひ、茶棚、竈、煙草盆、當る物を幸ひに、打滅ぐ打破る踏み碎く、めり／＼びしやりと鳴る音に、『そりや地震よ、雷よ、世直し桑原桑原。』と我先にと逃げ様に、水桶盥にこけ掛り、座敷も庭も水だらけになる程に、『南無三海嘯が打つて來るわ、なう悲しや。』と喚くやら、祕藏の子猫を、馬程な鼠が啜へ驅け出すやら、屋根では颯が躍るやら、神武以來の悋氣争ひ、この事世上に隠れなく、かの男はその場より、親御様の勘當受け、我が身も郭を夜脱して、根本懸路の浮名取る、鍋の蓋取る杓子取る、馴れぬ世帯のその日過、男め故で御

煙草賣の源七も、何心なく側近く、顔と顔とを見合はすれば、「ヤア離別せし女房、南無三寶。」と木隠の、女はそれとみづくさき、男畜生人でなし、赤恥かかせて退けうかと、飛び立つ胸も人目の關、押し鎮め、心を碎き折々に、後目に睨むも戀なれや。姫君何の氣もつかず、「これなう紙衣、和方の物ごし褌外れ、如何様常の女子でなし、さうした姿になりやつたは、定めし深いわけあらん。一河の流れも他生の縁、包ます語りや。」とありければ、「ア、何方かは、お優しいお詞、おたづねなくとも言ひ度うて、胸のたぐる折しも、さらばお話しませう。恥かしながら、私が昔は憂き河竹の傾城、萩野屋の八重桐とて、大夫仲間の立者と、言はれし程の全盛の、末も遂けぬ仇戀に、登り詰めて此の通り。夜なく替る大盡の、中も坂田の某とて、水揚の初日より、ふと逢ひ初めて丸三年、何が互の浮氣盛り、上る程に、初利天の中二階、夜晝なしの牀入に、懸綯様と異名を受け、水も漏らさぬ中なりしに、又同じ郭に小田巻といふ太夫、かの男にゆきつきて、毎日百通二百通、書きも書いたり癡話文は、大方馬に七駄半、船に積んだら千石船、車に載せたらえいやらさ、木遣でも音頭でも、祈つても呪うても、微塵けもない二人が中、いよく募つて逢ふ程に、小田巻大きに腹を立て、忘れもせぬ八月の、十八日の雨上り、月は山より朧染の、褶ひらりと取つて捨て、白無垢一衣にひつしごき、脛もあらはに驅け來り、私が膝にふうわりとんと居懸つて、これ八重桐、「あんまり見られ

もう面白い。何を言ふもお氣慰め、平に頼む。」と強ひられ、源七下地好きの道、「てんほのかはやりませう。」と、箱より出す三味線の唄は昔にかはらねど、弾くその主の成れの果て、親の撥駒紙駒の、音色優しく三重弾きなせり。紙衣の袖に置く露と、共に離れし妹脊の中、あはれ昔は全盛の、松の位も多枯れし、風呂敷包行く先は、知らぬ旅路にとほくと、築地のかげに休らへば、「ヤア珍らしい三味線。なんほ大内方でも、しやれの浮世。」にめぐり来る、車寄よりたち聞けば、「ハア、不思議やあの小唄は、我が身郭にありし時、坂田藏人行殿に馴染染め、作り出せし替唱歌、かの人ならで誰が傳へた懐かしや。何卒入り込み見たい物ぢや。」と、出放題に聲張り上げ、「これは浪花の遊女町に、誰知らぬ者もない傾城の右筆、濡一通りの状文なら、恐らく私が一筆、叶はぬ戀も假名書筆、びらりしやらりのかすり墨、生娘、遊女、妾者、後家、尼、人の女房まで、段々の書分は、私が家の傳授事、若しそんな御用なら、お頼みあれ。」とぞ言ひ入れたる。奥には女中耳を澄まし、「さつても變つた賣物、いざ呼び入れて、癡話文書かせてお慰み。更科掃部呼んでおぢや。」「あい。」と答へて、二人連にて走り出で、「これなう、傾城の右筆殿は此方か、この御殿の姫君、何やら其許に御用ある、此方へいざ。」と手を取れば、「ハア御用とは何ならん、おめもじ様に。」とゆふ顔の、庭の飛石すなくなく、ちよこちよこくと奥座敷へ何の遠慮もなみ居たる、内裏女郎に場うてせぬ、何れそれしやと見えにけり。

枕、この長の夜を誰と寝よ。おりや泣くまいと思へども、涙が如何も堪忍せぬ。怵へてたも。」と、はらはらと玉を貫く御目元、腰元茶の間仲居まで、「お道理様や。」と諸共に、貰ひ涙にくれければ、お局は氣の毒がり、「ア、何ぞいの、お力はつけもせで、和女衆までめろく」と、忌々しい置いてたも。ヤアそれはさう、煙草賣の源七はまだ見えぬか。氣さく者の通り者、今にも來たらお姫様、まじくらに迎鬼して遊ぶまいか。」「こりや氣の替つた思ひつき。早う煙草が來れかし、煙草々々。」と待つ宵の、松葉煙草の柔かき、女中仲間ぞ賑しき。昔は色に上り詰め、今は浮世に下り坂出時行と、埋もれし名も父の仇、晴らさんと思ふ志、厭かぬ夫婦の中をさへ、三行半の生別れ、袖は涙の革行李を、今身過と引つかたけ、「刻み煙草油引かす。」と賣り歩く。「そりや煙草が來たわ。」と腰元中、「早うく。」と呼び入れ、「これ源七、先づこの革籠は預る、尻褰けも下しやいの、お姫様より御意がある。そなたも以前は歴々で、悪性ゆゑに仕損ひ、その姿になりやつたけな。傾城とやら郭とやら、大内には珍らしき、三味線の一曲を、常々のお望みゆゑ、コレ三味線も調へ置く、サアく所望。」とありければ、「アアつがもない。尤も以前は傾城の一つ買も仕り、三味線、鼓弓、淨瑠璃、文作、のら一卷の諸藝なら、此方へ任せておく座敷に、吉野の山の連弾も、昨日の昔今日は又、吉野煙草の刻み賣、股引がけで三味線とは、茶漬に鯉のお望み、ひらさら御免。」と逃げ出づるを、女房達引留めて、「その言ひ様が

白し心地好し、君に追つ付き奉らん。疾う／＼急け。」どう／＼／＼、どうと踏んだる街道も、武勇の道も一筋に、古參の渡邊、新參の碓氷貞光奉公始め、門に手柄をあらはして、二王二天に四天王、出づべき兆と聞えける。

第二

※松浦沼領巾麿山の石よりも、積る思ひはなほ重き、岩倉大納言兼冬公の御娘、澤瀉姫と申せしは、源頼光と御縁邊の契約も、互に待てば久方の、月日重なり年も立ち、情盛りも徒らに、右大將高藤が讒言ゆゑ、頼光は行方なく、御文の音信さへ、枯野に弱る秋の蟲、世に便りなき憂き節に、若し御短慮の事もやと、御寢間の奉行不寐の番、女中の外は男混ぜずの大役は、女護の島に異ならず。お局の藤波御側に立寄り、「なう爰な御子、何故に浮き／＼なされませぬ。これ程大勢集まつて、浮世噺の高笑ひも、皆御前を諫めの爲。お煩ひでも出た時は、親御様への御不孝、日頃のお氣には似合ひませぬ。」と、いさめられても勇まぬ顔、「ア、又局の氣詰りな、意見聞きたうない。日本國の花紅葉を、今この庭に移しても、何の心が勇まうぞ。吉日極まり、頼光様へ嫁入して、今頃はお腹に帯をも結ぶはずを、あの右大將づら奴に妨げられ、剩へお行方知れず、何處を當處に一筆の、問はせの文さへ長

供人大半討たれ、貞光流邊只二人、攻め來る敵の眞甲、腕骨、胴切、たてわり、車切、薙ぎ立てく
三重追ひまくる。さしもの大勢、しどろになつて見えけるが、近郷の農人浪人ども、右大將が威勢に
與し、我もくと入れ替へ、射る矢は雨の如くなり。貞光も渡邊も、心は彌猛にはやれども、飛
び道具を防ぎかね、「なんと貞光、若し我が君にかすり矢でも當つては末代の瑕瑾、一まづ落し奉ら
ん。」と彼方此方と見廻れども、皆高堀に周圍は堀、裏門堅く鎖したり。「ヤアこの門一つ押し破るは易
けれど、跡より寄手の込み入るもやかましし。上へそつと持ち上げて、蹴込の下より落し申さん。」
「尤も。」と棟門高き瓦葺、尺に餘りし四角柱、二本を二人が面々に引抱へて、「ヤアえいやうん。」とさ
し上ぐれば、さしもの大門礎離れ、天より吊つたる如くなり。頼光も笑はせ給ひ、「門を守る金剛力
士、二王を家來に持つたれば、我が行く先は關もなし、女は兄が行方を尋ね、兄弟打連れ來れ。一足
も早落ちよ、我は美濃路を上るべし。汝等もあらましに切り散らして追ひ付け。」と悠々として退き給
ふ、御有様ぞ不敵なる。その隙に寄手の軍兵、餘すまじきと込み入つたり。兩人「今は心安し、雜人
原一人宛切つては手閒どほはか行かず。後日にこの門建て直して遣る許り。」と、門柱引放し、手々に
提げ、大勢を左右に受け、醉象が岩を割り、飛龍の波を叩くが如く、はらりくと三重薙ぎ立つる。
馬も人も堪らばこそ、さしもの大勢打挫がれ、高藤政盛力なく、跡をも見ずして逃げ去れば、「オ、面

二人はあつと頭を下け、悦び涙を流しける。かかつし處へ、平政盛大勢を引率し、門を叩いて、「ヤアヤア頼光。忝くも右大將殿の御前近く、人をあやめし暴者をひつ込み、天子同然の右大將殿を輕しむるは、朝敵にもまさつたり、女童に繩をかけ、頼光渡邊主從共に切腹せよ、異議に及ばば蹈ん込んで、片端に踏み殺さん。」と、傍若無人に罵つたり。渡邊くつくと吹き出し、「ヤア天子同然とは誰が事。おのれ等腕は叶はず手は立たず、口ばかりは人らしく、官位を以ての脅しは喰はぬ、さりながら、ぎしみ合ふも大人氣なし。サア渡す、請取らば取つて見よ。」と門の戸さつと押し開き、すつくと立つたるその勢ひ、政盛主從色違ひ、膝わなくとぞなりにける。荒童續いて飛んで出で、「これ旦那。宵までも旅籠屋の下種喜之介、今は頼光の御家人碓氷貞光。渡せよ出せと言はずとも、幸ひ此處も旅籠屋なり、此處へ來て搦め捕れ。サア入らんせ、泊ちやないかえ。旅籠の料理はお望み次第、頭から爪先まで、刻んでくさくさ汁、眞二つに胴切の血腥い焼物、冥土の道は合宿なし、焦熱地獄の水風呂も沸いて御座んす。ざつと行水阿鼻地獄。泊らんせく、泊ちやないか。」とまねきける。右大將高藤遲馳せに驅け來り、「ヤア臆したるか政盛、頼光渡邊なればとて、鬼神にてもあらばこそ。後詰は高藤。」と、いふより政盛いきり出し、「乗り込んで踏み潰せ。」と承る。」と切つて入り、源氏方にも餘さじと、兩勢どつと入り亂れ、火水になれとぞ三重戦ひける。頼光は忍びの旅、小勢の

俱ともに天てんを戴いたかぬ恨うらみを、一ひと太刀たち報ほうぜんと狙ねらへども、一ひとり人の兄あには行方ゆきかた知らず、女をんなの力ちからにかなひがたき物もの語かた見捨みすて難がたく、今宵こよひ清原よしみはら右大將のうだいしやうの泊とまりに敵てきを見出みいだし、思おもひのまゝに討うちと取り、首持くびぢ參さん仕つかまつる。打物うちものは此この太刀たち、この女をんなが重代ぢゆうだい、智慧ちゑ文殊もんじゆの化身けしんと傳つたへし、平泉ひらいづみの文殊もんじゆ寶壽ほうじゆが千日せんじち潔齋けつさいして鍛うつたる利劍りけんの驗しるし、片手かたてなぐりの一打ひとつうちに、御覽ごらん候さうらへこの大首おほくび、女をんなが持もつたる髻ひげ一房いっぼう、兩股りやうも兩膝りやうひざ只ただ一刀いっとうに、大だいの男をとこ七しちつに斬きつたる業物わざもの、今宵こよひの御情おんこけを謝しやせんがため、この女をんなが獻上けんじやう、御佩替おんはきがへとも思召おぼしめさば、生前せいぜんの悦よろこび、なほ御芳志ごほうしには死骸しがいを隠かくし給たまはれ。サア今生こんじやうに思おもひ置おく事はなし、いざ來こい刺さし違ちがへん。」とつとつと寄よる。

「やれ渡邊わたなべ、あれ止めよ。」と押し分けさせ、太刀たちを抜ぬいて御覽ごらんあれば、明々めいめいとして芙蓉ふきようの開ひらくが如ごとく燒刃やきはは星ほしの列つらなる如ごとく、光ひかりは波なみの涌わくが如ごとく。「唐土ちゆうど晋しんの武帝ぶていてんか天下てんかを治をさめて、吳國ごこくの方に紫むらさきの雲氣うんき立たつを怪あやしみしに、雷らい煥くわんと言いふ者もの天文てんぶんを考かんがへ、土中どちゆうを掘ほつて干將かんしやう莫耶ぼくやの二劍にけんを得えたり。然しかるにこの宿しゆくに當あたつて紫むらさきの雲氣うんき躑たみきし事こと、遠とほき異國いこくの昔むかしを思おもひ、必かならず名劍めいけんあるべしと、鷹野たかののに事ことよせ一宿しゆくせしに、今宵こよひこの太刀手たちてに入いること、源家げんけの武功ぶこう天てんに適かなひしその威德ゐとく。首くびを討うつ餘あまりの銚さつき、風かぜにも散ちる髭ひげを切きり、兩膝りやうひざかけて落おちたる事こと、日本にっぽん無雙むさうの名劍めいけん。名なは體たいをあらはせば、則すなはち髭切ひげきり膝丸ひざまると名なづく可べし。」と、謹つとんで頂戴ちやうだいあり、御子孫ごしそん長ながく傳つたはりし、和國わこくの寶たからとなりける。「扱さてその女をんなに見あるとや、重かねて故郷こきやうへ送おくるべし。荒童あらいどうには我わが頼光らんこうの光ひかりを讓ゆづつて、碓氷うすひ貞光さだみつと名な乗り奉ほう公こうせよ。」との御誕ごたんの趣おもむき、

で地踏鞠踏んで、「エ、口惜しや無念やな、政盛に對つて詞なし。よし地を潛り雲に入るとも、高藤が
 威勢にて、搦め捕らで置くべきか。追つ驅け討取れ者ども。」と、怒れる聲は松吹く嵐、月日に擬ふ目
 の鞆の、佐夜の中山手分をして、上を下へと三重返しける。二人は漸う宿端まで走り著き、ふり返
 れば追手の提灯八方を取巻きて、落ちんす様こそなかりけれ。「エ、口惜しや、なまなか追手に討たれ
 んより、御身を害し、腹切らんとは思へども、敵に首を取り返され、我等が首をも渡さん事、骸の上
 の無念なり。誰が泊か知らねども、此處を頼んで刺し違へ、死骸を隠して貰はん。」と、碎くるばかり
 門の戸叩き、「粗忽ながら我々は、親の敵を討つて立退く折柄、追手厳しく候へば、何方かは存せねど
 も、御庭を借り切腹仕りたく候。御恵み頼み奉る。」と大音上げてぞ申しける。所こそあれ頼光
 の泊りの宿、渡邊聞くより飛んで出で、「實否は知らねど、敵討とは心地好し」と、手づから門を押し
 開き、「サア圍うたお入りやれ。攝津守頼光の旅宿。かくいふは渡邊源五綱、日本國が起つても、蚊の
 喰ふ程にも思はばこそ。ゆつくりと休息あれ。」と、元の貫木しつとと下し、御前に伴ひ出でにけり。
 頼光對面まし、「彼等は夫婦か兄弟か、假名實名、敵討の首尾具に聞かん。」と宣へば、「さん候、
 某は信濃國碓氷の莊司が倅、稚名は荒童丸、父歿して孤兒となり、當所に賤しき下種奉公。この女
 と朋輩の好みに承れば、この女が父、坂田の前司と申せし者、平政盛が家人物部平太に討たれ、

上手な髪結あるまいか。「ア、〳〵お易い事、どりや呼んで上げましょ。」と立たんとすれば、「いやいや、少と様子あつて男はならぬ。女の髪結あるまいか。」といへば、はつと心付き、「なう〳〵お前はお仕合。私は地體町代の娘、髪月代一通りは、小額、眉際、中剃、逆剃、こそけ剃、お顔はたつた一剃刀にごし〳〵、脣なりと鼻なりと、お首なりとも、ころりつと剃り落して上げませう。」「ア、忌々しい、氣味悪い。仇口きかずと早剃れ。」と、剃刀出し髪おつさばき、縁先の水桶に、頭浸して紅葉の、焦る、小糸が心の内、喜之介は襖の陰、今や出でん〳〵と、互に目配氣を通はし、「これ〳〵頭が未だ揉めぬぞ。かう剃りかゝつて、氣を急くことはちつとも無い。揉めぬ中に剃りかゝれば、剃刀がはづれる。」と、いへども更に氣もつかず、消ゆる命は塵取に、落つる雫のはかなさよ。「サア今が大事のほんのくほ、うつむかんせ。」と髪撫で上ぐれば喜之介は、襖を密と締め明けに、後に立つても親の敵、聲をかけねば口惜しと、ためらふ色を女は悟つて、「申し旦那様。お前は強さうなお侍。定めし人斬らした事もあらうの。」「オ、斬つたとも〳〵。」「オ、その斬つた坂田が娘絲萩。親の敵。」といふより早く扨討の、首につらねて髭一房、兩膝かけて一太刀に、水を切つたる如くなり。「サア仕果せた立退かん。」と、甲斐々々しくも首提げ、女を小脇にしつかと抱き、一散にこそ落ち失せけれ。右大將が侍ども、「こは何事。」と走り出で、「南無三寶平太討たれ候。」と呼ばはる聲に、高藤驅け出

用心尤もながら、この高藤がかくまうたり。某が威勢の程、人間は愚か鬼神にても、某が側近く狼藉仕出し、指でもささば、天子に弓引く朝敵同然、身を知らぬ者やあるべき。何の用心、月代剃らせ櫛けづり、世間廣くのさばれ。高藤がかく言ふからは、樊噲張良に抱かれて居ると思ふべし。」と過言上なく罵れば、政盛悦び、「有り難しく、彌頼み奉る。明朝御見舞ひ申さん。」と一禮してぞ歸りける。喜之介小糸は襖の陰、後先とつくと聞き届け、「あれく父様討つた平太奴に極まつたり。日頃頼みし契約は今宵ぞや、女の腕にて仕損するは必定、必ず跡を頼みます。」と小袂引上げ身繕ふ。喜之介押へて、「急くまいく、和女に兄御もあるけな。その兄も出で合はず、まして女の仕損じては恥辱なり。粗ごなししてやらう、止めを刺せば同然。」と躍り出づれば、「ア、忝い。とてももの事に、父様の譲りの銘の物、常に人の氣のつかぬ、思ひがけのない所に取つて置いた。」と一間牀板疊を引き上げれば、一腰の黄金作り、人こそ知らね紫の、虹立ち昇る名劍の、不思議と後に知られける。喜之介鞘口抜き見れば、氷の焼刃玉散るばかり。「サア本望は遂けたるぞ、必ず急くまいく。」と、いふも關路の朝鴉、飛び立つ心ぞ道理なる。「それく、奥から行燈提けて誰やら来る。怪しめられな。」と目撃し、ちやつと忍べば、小糸はそらさぬ顔、鼻唄で座敷取置く玉帯、紙屑拾うて居たりけり。敵の平太燈火そむけ、「こりや女物頼まう。明日の御立は明六つ、その點に合ふ様に、月代一つ頼みたし、

嫌直して杯事。幸ひ肴はこの鯨、先づ祝言の心持。」「そんなら祝うて女房から、私が手酌でこれ獻いた。」「我等は得物のこの茶椀、吸物は煮賣の豆腐、目出度う詣はう。唄寂光の豆腐茶椀酒の、樂しみもかくやと思ふ許りの鯨かな。」「相よ助よといふ紅の、前垂膝に打ちもたれ、「可愛奴。」とぞ戯る。かかる處へ、「右衛門頭平政盛參上。」と案内すれば、喜之介小糸口上の趣を、奥へかくとぞ取次ぎける。清原右大將出でむかひ、「ヤア政盛、近うく。」と對座に請じ、「さても御邊と某、昨日まで泊々同宿にて、名所古跡の物語、旅宿の徒然忘れしに、今宵は頼光奴にさへられ、思はぬ別宿。明日の泊を待ち兼ねる、今宵の淋しさ、推量あれ。」とありければ、政盛謹んで、「御懇意の餘り、申し上げ度き仔細の候。その故は、某が家來物部平太と申す者、先年坂田の前司忠時と申す浪人侍と口論し、彼の坂田を討ちは討つて候へども、彼には男女の子供あり、親の敵と狙ひ、若し平太奴を討たせては、某武道立ち申さず。一寸も側を離さず、旅の末まで召し連れ、幸ひ君と御同宿、御威勢を以て、昨夜まで心易く臥したるに、今宵野端の別宿、平太奴に過ちも候うては弓矢の不覺、あはれ彼の者、御次に宿せさせ下されば、生々世々の御厚恩。」と、いひも切らぬに右大將、「オ、何より以て易い事、其の者これへ。」といふ間に、駕籠を内へ昇き据ゑさせ、六尺ゆたかの大男、日影見ぬ目の色蒼く、月代のびて髯長く、野邊の薄に異ならず。右大將近く招き、「物部平太とは和主よな。敵持の

濟まして息休め、煙草くはへて立ち居たる。下女の小絲忙がしげに、「これ野良松、暇の無い旅籠屋奉
 公、殊に今日は、清原様とやら麥葉様とやら、お公家様の大客。上つ方は物靜かで御料簡もあるべき
 が、下々の癖に口悪く、膳が遅いの何のとて、いぢらせてたもんなや。何故にきり／＼働きやらぬ、
 煙管は私が預る」と、ひつ奪れば喜之介、「エ、小喧しい、男の仕事がもどかしさうな。これ料理した
 り水汲んだり、椀拭いたり門掃いたり、打つたり舞うたり、この手一つで百足の代りも仕る。貴様
 の様に毎夜々々、旅人寢房へ引入れ、煮焼もせぬ加減の好い、味い手料理振舞うて、うめく程錢儲け
 て、緩りと朝寐召さるゝと、我等が仕事は格別。呟ためた錢纏脱いたり差いたりせまいか。」「されば
 いの。」「オ、謙ぢやない。」とぞ笑ひける。「ム、これは聞き所、なんぢや、毎夜帯解き、勤めするとの
 言分か。それそんな小絲ぢやないぞや。朋輩衆は面々に、勤め次第に錢金貯め、親里貢ぎ、身に一重
 も飾れども、私は此方を思ひ染め、面倒見よう見られうと、頼もしづくの言ひ替せ、若し末の縁あり
 て、一緒に暮らしたいと、随分と身を嗜み、旅人の酒の挨拶肴に、小唄諺うたり、僅かの錢を頂く時
 は、涙が翻れて口惜しけれど、若い此方が奉公の身で、義理順義もあるものと、一錢も身につけず、
 皆此方に渡すぞや、一言可愛というたとて罪にもなるまい。眞に思ふ程にもない憎い男」と、首筋に
 齒形ぞ戀の極印なる。喜之介ほろりと涙ぐみ、「オ、過つた。こらや／＼、サアわつさりと仲直り、機

と睨み、「ヤアおのれは頼光が下人、綱といふ童よな。この度右大將殿、東の名所御遊覽に御同道申すからは、相宿のせき札誰に憚る事あらん。主従共に口頭瘡もきれぬ小倅共、元の如くに札立て直せ、但し割られれば割つて見よ。」と、太刀の柄に手をかくる。渡邊莞爾と笑ひ、「オ、源氏のならひ、御邊の様なる相手は、大人の手を出すまでもなく、前髪立の子供の請取、主君頼光に宿を明けさせ、右大將の威を藉つて、御邊ぬつくり泊らんとや。あたゝかな事、右大將一家の外、踏み込まば空臚難がん。」と、せき札微塵に踏み碎き、二王立に立つたるは、金輪際より忽ちに、生え抜いたるが如くなり。政盛そゞろ怖ろしく、身は顫へども押ししづめ、「おのれ生けて置く奴ならねど、高官の御同道、騒動も畏れあり。此處は某おとなしく、宿端に別宿す、よつく性根に覺えて居れ。」と、おめぬ顔にて立歸れば、渡邊は見向もせず、右大將の宿入の中、押し割つてのさくと、はがひ延したる夕鴉、泊りぢやないか。「旅籠屋の、門賑しく三重暮れかゝる。上り下りの旅人の、粹と野暮とに、摺れて揉まれても共摺の、招く薄も、おぢやれくが戀を呼ぶ、假の契りも末かけて、唄其方百切、おりや九十でも、心次第の蘆枕、笠も預る、股引洗ふ、洗足の湯と膝立と、ぐわつた菱屋の門構へ、本陣宿の忙がしさ、數多の出女下男、中に若葉の喜之介が、跡の期よりも角前髪、土氣も取れて顔の色、白瓜鱈夕飯の、拵へいそぐ薄刃の音の、ちよつきく、ちよきくく、ちよつきり切盤百人前を夢の間に、仕立て

脇を張り、むら／＼と立ち蒐り、「ヤア／＼當宿に、この家ならで御本陣になりさうな家なし。先だつての宿札何者ぞ、幕も札もはや／＼まくれ。」と呼ばはりける。亭主驚き、「これ／＼粗忽なさるゝな。忝くも攝津守頼光、源氏の大将の御宿札。」と制すれども、「何の頼光、源氏でも毛蟲でも、清原右大将殿御威勢には叶ふまじ、のじばらば幕引断り、宿札打割り、引摺り出せ。」と罵りける。渡邊綱聞きもあへず、「何條先に打つたる宿札、指でも指さば踏み殺さん。」と躍り出づるを、頼光「暫し。」と鎮め給ひ、「同じ武家にもあらばこそ、長袖に勝つて譽ならず。殊に彼は右大将、女院の弟、朝家に敵するなどと讒せられては不覺なり。密かにこの家を立ち出で、宿端に一宿せん。汝残つて穩便に明け渡すべし。」と、手廻少々御供にて、裏の小道の松陰より、山路に添うて出で給ふ。時刻移ると、頼光のせき札引抜いて、清原右大将殿御泊りと、高々と押し立て、引並べて、右衛門頭平政盛同じく泊りと、せき札二本ぞ立つたりける。渡邊今は堪り兼ね、躍り出でて下人原、取つて突き退け大音上げ、「清原右大将は、右衛門頭政盛と名を二つ付けられしか。先に打つたる宿札替ふる法はなけれども、主君頼光、若輩なれども御思案ふかく、驕者の右大将に張合ひ、後日の讒を受けん事、犬にくはれし同然と、おとなしく宿を替へられしに、定めてこれは平家の大将政盛な。彼と相宿召さるゝからは、頼光も相宿」と、政盛がせき札取つて引抜き、叩き割らんとする處へ平政盛、怒れる聲にてはつた

嫗こもろ 山やま 姥うば

第一

漢かんに三尺さんじやくの斬蛇ざんじやあつて、四百年ねんの基もとを起おこし、秦しんに太阿たいう工市こうしあつて六國こくを合あはす。古いにしへの君子くんし、是これをもつて自ら衛まもると、子路しろうが諂うたひし劍けんの舞まひ、返かへす袂たもとも面白おもしろき、我わが神國しんこくの天叢雲あまのむらぐも、百王ひやくわう護國ごこくの御守おんもちり、のえふす民たみこそ目出度めでたけれ。されば、今上天曆きんじやうてんりやくの帝みかど、御代みよしろしめすいつくしみ、波靜なみしづかなる遠江とほたふみ枝えだを鳴ならさぬ時津風ときづかぜ、灌松かみまつの宿しゆくの邊へんにあたつて、空そらに紫むらさきの雲氣うんきたなびき、斗牛とぎうの間に英々あひだたり。爰こゝに清和天皇せいわてんわうの正統しやうとう、攝津守源頼光せつづのかみみなもと十八歳さい、かくと傳つたへ聞き給たまひ、「唐土たうどの張華ちやうわが名劍めいけんを得えたるためし、疑うたがひもなく、此この邊へんに天下てんかの重寶ちゆうぼうとなるべき名劍めいけん、埋うづもれあるに極きはまつたり。尋たづね求めて、父滿ちひまん仲ぢゆうの武功ぶこウを繼つぎ、源氏げんじの子孫しそんに傳つたへん。」と、同年どうねんの若者渡邊源五綱わかものわたなべのけんつなに御心みこころを合あはせ、近鄰きんりんの宿々しゆくぐふ二夜ふたよ三夜みや泊とまり鷹野たかのにことよせて、歩あるき尋たづぬる名劍めいけんの、小夜こやの中山なかやまにお宿やどを召めされける。その頃胤子こういんし女院によゐんの御弟おんおと、清原右大將高藤きよはらのうだいしやうたかふぢとて、僅わずかの儒家じゆけに生うまれながら、當今たうぎんの御外戚ごぐわいせき、姊女院あねによゐんの威勢ゐせいをかつて、中納言なごんの右大將うだいしやうにへ上あがり、榮耀えいさう奢おごり身みに餘あまり、諸國しよこくの名所めいしよを遊覽いんらんし、「今宵こんよひこの宿御泊しゆくおんとまりと、宿割やどわりの侍さむらひ

し貫き、虚空にひらめき歸らせ給ひ、元の鞘に納まりしは、有り難かりける次第なり。一見よく悪魔降伏の、寶劔は勇神璽は智、我が内侍所は仁の鏡、智仁勇の三寶も、佛法僧と王法の、民安全に守るべし。」と、御託宣のうちよりも、御形は鏡と現し、内侍の袖にうつらせ給ふ。天下一統源氏一統、太平國に太平の、君が威光は萬々歳、治まる御代こそ久しけれ。

吉野都女楠終

り、盛長が頭の上、ひらめきかゝり追ひ廻し、劔の刃風神風の、三重逃ぐるを追うて千早ぶる、忌垣も越えてにけて行く。吉野の敕使北畠の准后親房卿、新田義貞、楠正行、三種の三祇、御迎ひに來り給ひしが、「三輪山の震動何事か。」と急ぎ驅け付け、「こはそも如何に。」と驚き騒ぎ、兩人の繩を解き給へば、内侍は夢の心地にて、「小山田が妻の情にて、逢ひ見る今の嬉しさ。」と、盛長宰相が悪逆くはしく語り、嬉泣こそ道理なれ。足利尊氏三社の靈夢蒙り、吉野殿へ參らんと此の所にゆきかゝり、驚き給へば新田、楠「すは大將と大將との、相手づくぞ。」と身構へして、既に危く見えし所に、和田の新發意宰相が首ひつさけ、「ア、これ／＼粗忽せまい。」と眞中へかけ入り、「先づ悪人一人は亡びし」と、首投げ出し義貞に向ひ、「尊氏卿朝敵のとがをひるがへし申す爲、量仁親王を御位に立て京の内裏と崇め、後醍醐の天皇を吉野の内裏とうやまひ、新田足利和睦して、帝を守護せしむべきとの願ひ、玄惠法印の取次我等そのお使」と、申す詞の中より、白雲棚引き異香薰じ、杉の梢に懸りしは、不思議なりける次第なり。雨寶童子の御相好、妙なる御聲あざやかに、「天に二つの日なし、地に二人の王なし。量仁親王に新帝の位を授け、後醍醐の天皇は院の御所と仰ぎ、帝都は尊氏これを固め、吉野の都は義貞守護し奉れとの神敕なり。我が國の三つの寶のあらん限りは、國富み民も豊かにて、敵するもの有るべきか。寶劔の威徳疑ふ事なかれ。」と宣ふ所に、有り難くも寶劔は、盛長が首をさ

より、首筋擱んで一締しめてはかつばと投げ、しめては投げ付けくく、宰相に飛んでかゝれば、
叶はじと、山をさして逃けて行く。源秀あまさじいつまでか、身を逃るべき三輪の山、檜原をわけて
追ひかくる。二人の女中公家達も、「何事か起りしぞ。所は三輪の御神前、これは神代の御寶、守めも
つき給ふかや。神力を添へ給へ。」と、あわて給ふぞ道理なる。かかる所に大森彦七盛長、手勢ひきく
しどつと驅け寄せ、「年來心を盡したる内侍はあれよ、先づ生公家ばら引括れ。」「承る。」とひつぶせ
ひつぶせ、二人に繩をぞかけたりける。「扱その櫃は心得ず。何が有る開けて見よ。」と、いふより早く
郎等ども、御箱にすがれば、兩人涙を流し聲をあけ、「やれ情なや勿體なや。それこそ忝くも我が
國の御寶内侍所、十善の御身にさへ拜み給ふ事かなはず。不淨無禮の手を觸れんとは、忽ち眼くらん
で立ちすくみに死なん、淺ましや情なやそこ立退け。」と泣き給へど、「扱事をかしい。神よりこはい軍
神の、眞先かける兵に、何の罰。」といふまゝに、からけの布を切りほどき、蓋をとれば恐ろしや、
御箱の内鳴動して、いなびかり天地に輝き、神鏡朝日の登るが如く、虚空にあらせ給ひける。近づ
いたる雑兵ども、忽ち悶絶血を吐いて、のつけにそつて死してけり。無道の盛長ちつとも恐れず、「よ
しよしさはらぬ神に祟りなし。心をかけし女を連れて歸る許りに、罰も祟りも有るべきか」と、走り
よつて内侍をひつ立てんとする所に、杉にかけたる寶劍の、鞘を離れて刀の光、天に輝き地に鳴り渡

は坊門の宰相楠、可愛や生まれはよけれど、持ちなし悪さに灑楠に劣つたな。公家ならば公家の様に、楠の本の流れをくみ、腰折歌でもよますして、身にも熱せぬ武家交はり、終に刃にさし通され、串楠とならん笑止さよ。」と、かんらくとぞ笑ひける。宰相覆面取つてすて、「エ、口惜しや、勾當の内侍を大森彦七盛長に授けんと、契約せしをおのれに邪魔を入れられ、天皇を押し籠め尊氏より恩賞を受けんとすれば、あの尼めに奪はれ、今又三種の神器を奪ひ、尊氏公へ奉らんと欲する所、又妨ぐる推參者。これ程までしこみし事、本意を遂けしておくべきか。下り坂の楠新田に組せんより、運に垂つたる尊氏公に従へ、取次せん。」といひければ、源秀大口あいてかつらくと笑ひ、「ヤイ尊氏は名大將、奴らが様なる不忠の臣、あたゝかな、用ゐられんや。天子に向つて弓引く朝敵の名を恐れ、後伏見院第二の宮量仁親王を御位に立て、吉野の内裏は後醍醐の天皇、京の内裏は新帝とあがめ、義貞とも和睦し、一家の交はり舊の如く有り度き願ひ、玄惠法印を以て奏聞ある。内奏の爲只今某吉野殿へ、參る折から出で合ひしは、うぬらが因果の木まぶり、梢に残つて鳥の餌食とならんより、熟柿首のすり落し、踏みつぶしてくれん。」と、飛んでかゝれば下人ども、一度にはらりと取りまはし、「ヤア奇怪なる雑言。おのれこそ赤面の熟柿坊主、踏みつぶしてのけん。」と、左手右手より取りつけば、「ムウ、この源秀を熟柿とな。熟柿にたかる目白ども、捻り殺して見せうか。」と、引きよせて片端

の御箱、吉野までかき申したし。鼻息かくるも恐れに存し、覆面もいたしたり、御許し下され。」と望めば兩人、「オ、望みの者は幾人にも其の身の祈禱、かき奉れ。」と有りければ、「ハア有り難し、これそこな衆、先肩でも後肩でも、何れもよつて片はな爲され。片はなは我等一人、吉野まで同道、先へ著いて覆面取り近付になるべし。道中萬事申し合はせう。サア來い。」といひければ、各密々囁いて、「いや其方が相かたに我々はなるまい。こつちの組へわたすか、さなくば其方一人か、いかやうともすき次第。知らぬ者どし交る事は、此方はいやぢやく。」といひはなす。「やあら珍らしい。知らぬ者どし相肩いやとは、錢を取る出駕籠ぢやと思ふか。冥加の爲身の祈禱、願ふは誰も同じ事。どうも我等一分立たぬ、嫌ふには様子が有らう、それを聞かう。」と理窟づめ。「ア、小むづかしい何の様子、見た所お手前は人間はづれのせい高島、肩が合はぬによつての事。どうでもならぬ。」といひければ、「ム、聞えた。肩が合はずば昇くまい、お供すれば同じ事。サア皆よつてかき奉れ、ひつそつて我等はお供。」と、身拵へするを見て、「いやく、所詮此方構はぬ。供なりと昇きなりとうぬがさんまい、皆來い。」と立ちかへる。「ヤアやらぬく。」と道中に、大手をひろけ踏んばたかり、「拙者と同道いやがるは、面こそ見えね大方夫れと知つたな。尤もく、御所柿と澀柿とは、皮むがいでも知れる物。これ見よ和田の新發意源秀といふ御所柿。」と、覆面を取つて捨て、毘沙門立にすつく立ち、「ヤアうぬ

神風や、みもすそ川の流れたえせぬ神國のしるし、御醍醐の天皇楠正行が守護によつて、吉野山に皇居あり。新田義貞馳せ参じ、都造りと聞えしかば、北の方勾當の内侍、千草の頭の中將洞院左衛門督心を合はせ、三種の神寶内裏に残り給ひしを盗み出し奉り、神璽寶劔は内侍の身につけ参らせ、小山田が妻御供すれば、内侍所のしるしの御箱、頭の中將左衛門督兩人擔ひ奉り、人目忍べばこれも亦、晝をば何と烏羽玉の、夜道に同じ山陰や、三輪の里にぞ著き給ふ。鳥居の前なる御手洗の水舟石に御箱をすゑ、内侍は寶劔を神木の杉にかけ、暫しやすらひ給ふ所に、覆面したる男、同じ出立十人許り道端につくばひ、「我々は近邊の土民ども、今度天皇様吉野山にいらせられ、新田殿楠殿内裏を吉野に御造營なさるゝにつき、天照大神より傳はりたる内侍所様と申す御寶を、只今吉野へ御供遊ばす由、お公家様のお身にて御大儀千萬。まだ是れより二十四五里中々お足つゞくまじ。賤しき下々の身ながらも、日本の地にすむ冥加の爲、その箱を吉野まで肩にのせ申したし。息をかけるも恐れに存じ、皆々覆面いたし、垢離を取り身を清め候。仰せ付けられかし。」とおもひ入つてぞ申しける。兩人聞き給ひ、「叔々奇特の志。これこそ内侍所しるしの御箱とて、天照大神の御魂御影のうつりし御鏡、汝等が肩に掛らせ給ふ事、よくも冥加に叶ひたる、果報の者ども有り難く存じ、擔ひ送り奉れ。」と宣ふ所へ、六尺豊かの大男、これも覆面目許り出し、「我等も當所の百姓、冥加のため寶

正行思案し、刈り捨てたる稻かき集め、五尺許りに束ねあけ、社人の鳥帽子淨衣をきせ、木の間に密と立てければ、「すは天皇よ餘すな。」と、さし取り引取りさんぐに射る矢さき、薬人形に留まつて、針を植ゑたる如くにて、味方の矢種となりたりし。幼心に孔明が、昔を耳にふれつらん、頼智の程こそやさしけれ。「エ、目出度し。」と又太郎、矢をかなぐつて大音上げ、「いかに寄手の人々、早天よりのお出で、随分御馳走申せとて、新田殿の御意を受け、本間孫四郎さび矢少々持參せり。何なくとも賞翫あれ。」と、矢つぎばやに射かけしは、嵐に雪の飛ぶ如く、表に立つたる山口兄弟、弓手馬手ハ射伏せられ、一陣しらけてさつと引く所を、正行親子打物かざし、「きたなしかへせ。」と追驅くれば、山口入道隙間を見て、「女中ならぬ。」とむんずと抱く。正行すかさず上帯つかんで宙にさし上げ、「えいやつ。」と井手の深みの泥水へ、眞倒様にぞ打込んだる。残る軍兵恐れをなし、四方へばつと散亂し、近づく敵こそなかりけれ。「軍の手合はせ門出よし。」と、勝鬨の聲太鼓の聲、松に神樂の千代萬歳と、君を馬に駕し奉る。長年は項羽が勇、正行は孫子が智、母が教へは孟母が仁、これ大將の智仁勇、合はせて三つのみよしのや、吉野の内裏に御幸なる。

第五

しめし、松原をおつ取巻き、しめよせて討ちとれ。」と、ひしめく所に正行長年、木の根をゆすり梢を動かし、弓の鐙にて驚かせば、驚かされて數萬の鳥、聲を立てて鳴き騒ぐ。山口親子大きに驚き、「塙の鳥の俄に騒ぐは、この松原に天皇方の軍兵の、隠れ居るに極まつたり。深々と近づくより、切り立てられては悪しかりなん。」と、大將を始め諸軍勢、進みかねて控へたる。童心の楠が、智慧一つに廻されて、一千餘騎の兵の、どまぐれ亂れ狼狽へし、智畧の程ぞ恐ろしき。山口入道聲をかけ、「あれく東も白みたり。天神の森に陣を取り、備へを立てて攻め寄せん、いざ來い。」と見渡せば、こはいかに、朝霧深き森の木の間、色々の旗翻り、嵐に靡く有様は、只花紅葉の如くなり。「南無三寶、前にも敵後にも敵、何所に命をのがれん。」と、大將始め諸軍勢、具足顛ひのがたくく、鳴子をひくに異ならず。相圖をたがへず神樂太鼓、どうくくと打つ聲に、「そりや攻め鼓なう怖や」と、主は下人の後に屈み、子は親を楯にして、腰を抜きし氣を失ひ逃げ惑ふ真中へ、名和又太郎長年、楠帶刀正行と名乗りかけ、わり立ておんまはし、火水になれとぞ三重戦ひける。臆病神に眼もくらみ、二人を千騎萬騎と見て、逃足落足深田にふんごみ岩根に乗りかけ、我が打物にて死するもあり、片時が間に手負死人三百餘騎、生きたるものは落ち失せて、残りすくなになりければ、「矢攻めにせよ。」と山口兄弟、森に向つて立並び、矢種を惜しませ射かけたり。味方には弓一張矢は一本もなかりしに、

やそれも一圖の軍法。若し又敵の大勢が、この森へはかゝらず、汝が籠る松原へ先にかゝらば如何せん。「オ、その時こそ松原の泊り鳥を追ひ立てん。明けぬ先より立つ鳥は、歸鴈列を亂るなる、隠し勢と心得取つてかへして、この森へかゝる時には彼の手だて、鳥と旗とに威されて、中に漂ふ寄手の眞中、たゞ一驅に踏み散らすは、蚊を殺すより猶やすく、骨を折らずの勝軍、案のうちに候。」と申し上ぐれば天皇も、「天晴正成が子なりけり、末頼もしき若者や。」と、忝くも感涙に、御衣をしほらせ給ひければ、「又太郎は三十五歳、十一歳の正行に、今日の大將軍御下知に任せ候。」と、手を束ねたる武士の、弓矢の禮こそ正しけれ。母は悦び、「オ、でかしたく。總じて大將は必ず弓矢を帶するもの、母がその心にて持つたるは長刀ならず、これ見よ。」と鞘を取れば、弦をはづせし村重藤。「おことを慕ふ忙がしき、箆負ふ間もなかりしぞ。薄なりともおし切つて、鎗矢射るは軍神の祭ぞや。」と、弦袋そへてたびければ取つて戴き、「あれく、追手の松明近づいたり。夜明とて程もなし、母上は我が君を社の森へ御供あれ。敵は小勢と侮るとも、味方は必ず大敵とて、恐るゝ事有るべからず。何萬騎寄するとも、亂るゝまでは音するな。」と、下知する聲も若緑、松原さして三重入りにける。追手の大將、山口入道嫡子八郎久國、二男九郎宗重その勢一千餘騎、もみにもうで馳せ來り、「この松原こそ怪しけれ。いうても二人か三人か、草村の蟲を取るより易かるべし、骨折つて何かせん。松明をふみ

るべからず。父正成は三百騎に足らぬ小勢にて、十萬の敵を幾度か破りたり。軍は奇正變化にあり。時はや寅の一點、我が計畧を廻らさば、千騎は愚か何萬騎も、驅け破つて見せ申さん。」と、廣言吐けば母上、「エ、小面憎や、童なら童の様にしてゐや。出るまゝの軍法だて、サア味方二人で、千騎の敵に勝つべき智畧があらばいうて見や。道理が悪いと正成の子でないぞ、サア申せ。」と問ひかけられ、「さん候。總じて子供の争ひにも、強きは弱きをあなどつて、油斷の負をするものなり。君落人の御身にて、御供とても一兩人、千騎に餘る追手の兵、多勢を頼みに油斷するは必定。我等と長年兩人は、向うの松原に隠れ入り、母上は君の御供して、天神の社に忍び、上を始め各下著の小袖をぬいで、裏表一幅々に解き放し、本社末社の鉦の緒ともに、大旗小旗の尺に切り、石を括つて森の梢、此處彼處に投げかけ、敵寄せくるとも靜まりかへつて、ほのく、明の朝風の、霧のひまゝ、森の樹陰に、旗の手のひらりくと閃くを、小勢と見る者有るべきか。一呑みに侮つて油斷したる追手の勢、と胸を衝いて色めく所を、神樂堂の大太鼓、亂調に打立て給はば、先陣より崩れ立ち、後陣もともに亂るべし。その時我々小松原より横あひに切つて出で、十方無盡に切り散らさば、陣をわれし敗軍の、踏みとまつたる例なし。多勢かへつて枷となり、人にて人にせき塞がれ、同志討友討度を失ひ、八方へ逃げ散つて、味方の勝利正行が掌に握つたり。母上いかに。」といひければ、「いやい

後醍醐天皇。」と、いふより親子は、「はつ。」と許り、しさつて額を地につくれば、君も泥土におりさせ給ひ、「汝は帶刀正行、汝は母、何れも正成が形見かや。妻子を御覽有るにつけ、父が忠節をこそ思召し出せ。」とて、正行が髪かきなでて、龍顔に御涙をうかべ給ふぞ有り難き。扱坊門の宰相返忠にて君とらはれとなり給ふを、小山田が妻と心を合はせ、奪ひ奉りし有様委しく語り、「尊氏方の追手の軍兵千騎許り、あれあの松明事急なり。先づ御邊の館まで、急ぎ御幸なし申さん。」といひければ、正行頭を振つて、「いや〜我等が館へ君を入れ奉り、追手の勢を引受け、狭間もきらぬ堀一重、溝同然の埋れ堀、一日もこらへず攻あ落され、敵に分量を見さがされ、後日の合戦なり難し。この所につつ支へ、追手の大勢打ち散らし、出合頭の初軍に、敵に一しほ氣をつけて、驅け惱ます程ならば、重ねて軍に二の足踏まは必定。是非この所に喰ひ止めて、一合戦。」とぞ申しける。母上睨んで、「ヤイこしやく者。たつた今意見したその舌も引かぬに、御前とも憚らぬ利發だてなそれなんぞ。兄というても大事な長年殿、武勇といひ年かさ、おことに習ひ給ふべきか。假初ながら大事の所、あなたの下知に任せてるや。」と、ねめつけ給へば又太郎、「年に足らぬ正行殿、この所にて戦はんとは、勇有つて頼もしし。さりながら味方は貴殿と某只二人、追手の勢は一千餘騎。死物狂ひはそは知らず、勝つべき道理更になし。」といはせも果てず、「ア、さな宣ひそ。無勢なりとて戦はずんば、戦ふ時節は有

はずして、一騎武者の働きに、いかなる手柄したればとて、その名を揚ぐるばかりにて、天下の爲には益もなし。幼くとも楠正成が子、六十餘州を重荷に持ち、大事の身とは思はぬか、恨めしや情なや。サア歸ればやかへれ、重ねて母は口ではいはぬ、つめ／＼するぞ覺えてるや。これにつけても正成殿、今三年世に存へ、おことが十四十五ならば、かく憂き世話もせまいもの、はかなの浮世や淺ましや。」と、諫め口説きて泣き給へば、さしにも勇む正行も、母の歎きに亡き父の、顔を今見る心地して、母の膝に抱きつき、聲も惜しまず泣き居たる、親子の歎きぞ哀れなる。かかる所に又太郎長年天皇を負ひ參らせ、森を目にかけ來りしが、ヤア心得ぬ、夜はまだ深きに幼き身に物具かため、女も長刀横たへしは、ム、ウ例の山立よな。幸ひく彼奴を威して、夜道の案内させんと思ひ、「こりやこりや山賊、熊野詣の同道に病人有つて迷惑なり。夜明まで看病すべき所や有る。送つてくれればきつと禮をせん。」といへば、母聞きもあへず、「いやく我等山賊にてはなし。熊野道者の御病人とは殊勝にもおいとしし。我が宿所は三里許り、折節これに馬も有る、召されて御入り候へかし。」「いや志は嬉しいが、人を忍ぶ我々、その中に夜明けては氣の毒。三里行けば隠れもなき楠に縁ある故、かたがたを頼むまでもなし。」と行き過ぐれば、「これ申し、楠に縁あると宣ふは何方ぞ。これこそ正成が妻や子にて候へ。」「さてはさうか、我こそ隱岐國名和又太郎長年と申す者、負ひ奉りしは忝くも

力の、示現は今もあら人神、天神の森にぞ著きにける。あら不思議や、後の方に女の聲、「待てよ待てよ。」と呼びかけたり。何者やらんと振返れば、衣引きか、け腰刀、長刀かいこみ追ひかくるは母上なり。「南無三寶、我を止めん爲なり。」と、一鞭くれてかけさする。息をはかりに走り付き、鞍の鞍手をむすど取り、留めても引いても驅馬の、二三十間引きすられ、「やれ物がついたか帶刀、母にも知らせず何處へ行くぞ正行。母は息切れ死ぬるをも構はぬか、馬を留めぬか俸め。」と、叫び給へば正行、馬より飛んでおり、土に手をつき頭をさけ、「父の忌のあき候へば、弔ひ軍仕り、尊氏を打果さんと思ひ立ち候。御暇申さぬ段眞平御免トされ。」と、さし俯いてぞ居たりける。母はとかうも涙にくれ、「エ、如何に幼ければとて、十に餘れば大人役、などさ程にも辨へなき。梅檀は二葉より香しといふ諭へもある、正成の子ならずや。日本半分切り取つたる尊氏に、おこと一騎かけ向ひ、一太刀合はするまでもなく、多勢が中に取巻かれ、當座に討たればまだしもよ、生捕となつて面縛せられ、恥辱のうへに命を失ひ、いつの世にか天皇様を御世に立て、父亡魂の本意をばとぐるぞや。親の敵討たんとて、軽々しく身を捨つるは、葉侍の上の事。父ごぜの櫻井より、汝をかへし給ひしとき、生先までの教訓を、母にも語り聞かせしが、百日経つやたたすにて、その諫めを忘れしか。一族かたらひ軍兵揃へ、菊水の旗眞先に押し立て、古今無雙の名將とよばれたる足利尊氏に、一あぐみあぐませんとは思

里の、柴の庵もなつかしや。庵も柴の、柴の庵もなつかしや。戀しゆかしと聞くからに、實に九重も遙々と、跡に名残の男山、さかゆく事も有りこしに、今の憂き目を三津の浦、西に霞みて淡路瀨、須磨の關守呼び起し、通ふ千鳥のちりくくと、よせくるく、波もよせくる、面舵取舵拍子そろへてさ、舟唄 面白やく、さつさ堺の浦遠く、帆を十分にあげた所が、面白いよの。何にたとへん五手舟、鹽風さむく吹き通ふ、笠も袂もひらくく、ひらの若江も過ぎ行けば、日影もさがる藤井寺、はや告げ渡る鐘の聲、こん金剛山もはるかなり。「あれ御覽候へ。霞みて見ゆる高嶺こそ、志貴の毘沙門にて渡らせ給へ。」と奏聞すれば、主上御手を合はせ禮拜あり、「佛法擁護の本地の月、垂迹和光の影清く、再び朝憲明らか、四海を照らさせ給へや。」と、丹精無二の御祈り、神慮も暗に測られて、ただ頼め、年ふる松の壽を、御代にゆづりて高安や、それにはあらでこれも亦、沖津白波立田越、夜半にや君が一時雨、雲行く空を木陰かと、濡れて佇み 三重給ひけり。取り傳へたる梓弓、光陰矢の如く楠正成が百ヶ日、立つやその名も忘形見の一子帯刀十一歳、父が最期の無念さの、胸に止まり骨に沁み、幼心に只一騎、弔ひ軍思ひ立ち、鎧の袖に小櫻の、花を手向の法の駒、曉深き星の影、ともに輝く銀覆輪の、鞍の山がた山道の、小石まじりの小笹原、そよ吹く風にくりかけて、取つたる手綱濃紫、藤井寺を弓手になし、馬手へさらくしとくく、かつしくと歩ませて、神の昔も念

クセ 世は末世に及ぶととも、日月は地に落ちぬならひとこそ思ひしに、我等いかなれば、王位を出
でてかく許り、人臣にだにまじはらで、雲居の空をも迷ひきて、行方いづくと白露は、草葉のうへに
おきもせで、袂に寒き秋の霜、菊月も末つ方、故宮を忍び出で給ひ、あやしの賤の神詣に、やつせど
馴れぬ菅の笠、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、憐れを催す時しもあれ、おんいたはしや先
帝は、梁園の昔の御遊、華軒香車の外を出でさせ給はぬも、いつしか馴れぬ單皮脚巾、千歳の坂と詠
ぜしも、耳にはふれて手にふれぬ、うきふし繁き竹の杖、長年一人御供にて、知らぬ野山を此處彼處
たどらせ給ふ御有様、よその見る目も恐れあり。こゝはいづくと里人に、いざ鳥羽繩手秋の山、岩に
砕くる瀧川の、どうくくく、どつとよせくる追手の聲か、それかあらぬかいやまでしばし。あれは
野面に誰招く、案山子の影に落人の、鳥よりさきに驚きて、ともにむら立つ鷺の森、急ぐとすれど玉
鐙の、ならはぬ道のけはしきに、御足もかけ損じ、御草鞋に流る、血は、草葉に染めていさら川、紅
葉しがらむ如くなり。哀れけに昨日まで、玉樓金殿の牀に坐し、月に戯れ色香に染み、花やかなりし
玉體の、今日は岩間の苦筵、かたしく袖に御涙、せきあへさせ給はねば、さしもに猛き長年も、涙は
胸に關戸の院、こゝは名高き山崎の、釐にみだす荻萩薄、踏み分け啼くや狐川、東の空を眺むれば、
あれく宇治の河霧たえくの、瀬々の淺瀬に童の、小手さしつる、聲々に、嗚故郷戀しや我が故

「ヤアウ番の者は一人もなく、擗押し破りしは心得ず。敵の忍びの入りけるぞ。こみ入つて討取れ。」と、喚いて入らんとする所に、又太郎大肌ぬぎ、棒ひつさけつと出で、「我等は酒賣の又六と申すもの。誰とも知らず十人許り、我等が酒鮮飲み喰ひ、番衆にも振舞うてまんまと抱き込み、錢を拂はず、扉を破つて入り候。我等が爲には喰逃の敵、奥に氣遣ひなさるゝな。是れへ追ひ出し申すべし、酒臭い者を相圖に討取り給へ。」といひければ、「オ、出かしたく、急いで是れへ追ひ出せ。」「承る。」とつつと入り、無二無三に追ひ立つる。三人の酔ひざめども逃げ出づれば、「そりや討取れ。」ととり廻す。「イヤ我等は御内の傳五平。」「傳五平でも酒臭いはしれものなり。」とはたと斬る。「我等も御家來源藏。」「やれく彼奴も酒臭い。」「拙者は軍太。」「此奴は取分け酒くさい、一人も逃すな。」と、片端切つて捨てにけり。又太郎とんで出で、「お手柄く、裏門は大かた仕廻ひ、表門の酒くささ、鼻がもけていにする。皆々表へ御廻り。」「オ、心得た、随分鼻をきかせよ。」と、表門へと駆け出す。その隙に高家が女房天皇の御手を引き、走り出づれば數多の犬跡先を取巻いて、吠えかゝれば又太郎、「討漏らされの今井の四郎、手なみを見よ。」と、餅も餅も投げ出し、虎の尾を踏み毒蛇の口、犬の脊中を躍り越え、大和路さしてぞ 三重

天皇かちぢの御幸

竹の皮一枚たも。」と木陰に立寄り、懷中より一通の文ぐるく巻き、魚中に入れて、「こいこい。」と、投げ出せばひつくはへ、堀の破れに入りける。又六とつくと見すまし小聲になつて、「これ比尼丘殿、そなたは異國の范蠡をやるるゝの。この所は坊門の宰相下屋敷、天皇様を押し籠め置く。定めし其方は新田殿よりの案内と見た、違ふまい。某は出雲國名和の又太郎長年といふ者、御厚恩の繪旨を受け、近寄るべき便り。斯様の商人せめて一人荷擔人の有れかし、奪ひ出し奉らんと心を碎く所なり。御身の上有様に聞かまほしし。」といひければ、「オ、我等は小山田太郎高家と申す者の妻、新田殿の情を受け、夫高家は討死し、みづからは尼となり、勾當の内侍様とひとつ住居のその中にも、天皇様を奪ひ新田殿の御本意をと思へども女わざ、せめての便りに御力を、付け參らする許りなり。」と、語れば長年大きに悦び、これぞ御運の開くる時、をりしも番の者は喰ひ酔ふ。この堀一重踏み破り、やすく奪ひ奉り、吉野の奥に皇居をする、根來法師熊野武者を語らひ、吉野十八郷を都と定むるものならば、北國西國靡く事案の内ぞと、あん餅の擔棒にて堀一間、どうくくつき崩し、つつと入れば犬の聲々、一犬吠ゆれば萬犬に、番の者ども目を覺し、起き上れどもひよろくく、よろりくくと踏躑きながら、「南無三堀を破つた。又六めか丸太めか、一打にしてくれん。」と抜きつれ抜きつれ入りけるは、危かりける次第なり。既に夜半の番替り、引連れて宰相檢見の爲に來りしが、

人の御番こなたは加番に青のほん様、かるたには太鼓の二、杯には太鼓の一、私から。」と引受けて
ついとほし、「サア丸太様へ。」とさしければ、各口を揃へ、「その杯を二人の中氣に入つた男にさし
給へ。その者が枕並べる、鬮取よりこれがまし、思ひざしになされ。」と、面々衣紋つくろひ、鬢かき
撫でて並びける。「いやくそれで氣がしれぬ、茶椀三つで面々杯、私を思ふ數程飲んで、心中を
見せさんせ。茶椀の數の重なるが、私が今宵の男ぢや。」「ヤア面白い酒の賣れる瑞相。」と、茶椀並べ
て三升樽、「すぐにお酌。」と立ちければ、何れも、「合點まつかせ。」と、初手一杯はつい／＼飲、二杯目
は早我呑にて、三杯からが義理一ぺん、後には義理も瓢箪も、ふらり／＼が忽ちに、ころり／＼と息
つきて、前後も知らず臥しにけり。「これ／＼寐入らぬさきに錢しませう。これ旦那衆はて手のわるい
狸寐入、酒代早う。」とゆり起す。「マアよいわいの、たつた今寐入ばな。今夜は歸つて明日でも取つた
がよいわいの。」と、いへば又六腹を立て、「ム、扱はあひぢやの、サアそなたから錢せう。」と、ねだれ
かゝるその間に、堀の破れに月影の、白犬一疋尾を振つて、箱の鮓を覗ひつけ、唾へる所を又六、「ど
つこい。」と首玉おさへ、「犬も人もこの屋敷は食逃の大よせ、まかりならぬ。」ともぎはなす。「これ／＼
いうても畜生執心がかはいい。その價はわしがやる、中で一番大きなを、おなかの飯取つて魚ばかり
賣つてたも。」「これは犬殿大盡がついた、何も商賣、丹後の鯖の一番三十八文合點か。」「合點々々、

替りに定めしからは、氣のつまる間もなし。番所は禁酒にして、萬に氣をつけ油斷すな。追付尊氏より大國を賜はり、この宰相も公家をやめ、武家の大名となる時は、みな相應の知行とらすべし、奉公に精出せ。又後程見廻らん。」と、上屋敷へぞ歸りける。番の者ども伸をして、「やれ氣つまりやこれおびん、旦那が往なれたもう樂ぢや。諺はうと踊らうと、夜中まではこつちのもの。爰へく。」と招かれて、「ム、ウ殿達は三人、私がおてきはどれぢやえ。氣が定まらぬ。」といひければ、「ハテ誰有らうこの鼻。」「ヤア傳五平それはまんがち、今夜は身が留風呂だ。」「吾身が先だ。」とせり合へば、「これく傳五軍太競合は無用、この源藏に任せておけ、寢る時はもみ鬪でしづいてこい。先づそれまでは一杯あけてしよけるべい、ヤ酒賣の又六がもう來る時分。」と、比丘尼一人に侍三人、役目の番はよその町、聲高々と荷賣り、大名深草大納言、唐人分別ぬらりころりの兼平、やい大名とは白餅、深草とは鶴餅、大納言は小豆餅、唐人もろこし分別餠餅、ぬらりころりは鰻の蒲焼山椒味噌、兼平とは木曾殿の御内は今井すし、酒盛にかくれなき一騎當千の御肴、磯打つ波のまくりのみ、蜘蛛手かくなは十文ぎりの、茶椀に一ばい酒でも餅でも旨い物の勢揃へ、錢次第。」とぞ賣りにける。各悦び、「又六來たか。是れ見よかうした色遊び、酒も鮮も有りたけはだけ買うてやる、汝も飲んで太鼓もて。」「ア、それは忝い。商ひして酒飲んで、その内で利を取るはめでたい。西が吹いてきて、丸太舟の港入、三

忠孝深き法の海、ともに弘誓の舟岡山、煙の末も一筋に、亂れぬ御代の教へなる。

第 四

唄「よさ様の寐姿窓から見れば、花ならば初櫻、月ならば十三夜、盛りまだしき閨の内、さては野に
さく百合の花、しよがえ、少くわんく。」とぞ諍ひける。「ヤイくやかましい丸太めら、暮に及んで
何事ぢや、番所が目に見えぬか、うぬ等が来る所でない、通れく。」と叱つても睨んでも、「さては野
に咲く百合の花、しよんがえ。」「扱々無禮者この所を知らぬか。坊門の宰相様の御下屋敷、尊氏將軍
と御内通、後醍醐の天皇をこの所に押籠め、近日隱岐國へ流しもの、夜の目も寐ずの大事の番、宰相
様も只今奥に御入り、追付お歸りそこ退いてをれく。」ときめつくる。「ア、堅い侍ぢや。これより
嚴しい番所、波にゆらるゝ繋り舟の中までも、小歌は付けたり假寢の伽によばんす。寢しめての寢心
は、髪の有るより無いかたが、びらくせいでもいけな。番衆は猶用心、すはといふ時早鐘まさざり、
私が頭を打たんすりや、はやくわんく。」とぞじやれかくる。奥より、「殿のお歸り。」とよばはれば、
番の者ばらくとかしこまる。宰相、悠々と立出であたりを見廻し、「あの裏の方は堀一重、犬のく
つた道も有る、いかにしても無用心。明くる早々めぐりに蠅手を結はずべし、彌番を怠るな。夜中

參らせ、尊氏公より大國を賜はつて、榮華を極むる果報より、義理と情に命を捨て、獄門にかゝるこそ武士なる者の果報なれ。おいとしや御最期まで、心に懸るは父御の不興、御免有るとの一言の、息をお顔に吹きかけて、親子の縁を二世までも、結んで進せてたび給へ。」と、縋りかきよせ抱きよせ、消え入り／＼泣きければ、内侍も、「扱は我が夫の、命の親ぞ。」と諸共に、聲を揃へて歎ちなき、警固の匹夫下部まで、袖を絞らぬ者はなし。父の前司も愁歎の、涙に搔暮れるたりしたが、「エ、あつばれ我が子やでかしたり。只残り多きは十二歳より、一日安堵の思ひもなく、貧苦で死なせし可愛さよ。情にもせよ義理にもせよ、義貞を助けし子の親は、主君尊氏へは不忠の者、奉公すべき理窟なし、御前にてこの首が、義貞にてなきときは、獄門の木の下にて、腹切つて伏すべきと、はちけん放つて申せしは斯様の爲、尊氏の御手にかゝると思ひ、我が首てづからかき落し、勘當は冥土にて直に逢うて許すべし。内侍様をかしづき、情の恩を報ぜよや。三世の諸佛大悲の力、親子一緒に導き給へ、これまでなり。」と、刀を首に両手をかけ、「えい／＼／＼」の聲の中、二人ははつとすがれども、はやそのかひもあらしの庭の、老木につもる白雪の、脆く落ちてぞ消えにける。會者定離とはいひながら、逢ふも今別れも今、これ目前の愛別離苦。憂きを重ぬる涙の袖に、舅の首をおし包む。内侍は、「夫の命の親、これも我が爲舅ぞ。」と、身にひきそへて諸共に、實ありける現世の道、仁といひ義となづけ、

振上げて打ちかくる。女房馳つて、「なう悲しや、内侍様も止めてたび給へ。親の勘當受けし身は、未
來も暗に迷ふと聞く。勘當御免なき上に、親の手づから子の首に、刃をあて給はば、迷ひの上の迷ひ
なり、最期の様を聞き分けて、許しのお詞かけ給はば、名僧知識の引導も、それにはなどか勝らん。」
と、口説き立てく、歎けばさすが親心、「いふ事あらばはや語れ。」と、咽び入りたる許りなり。女房
なほも涙にくれ、「いたはしや我が夫の、今度の軍は高家が、主親の勘當を許され、昔にかへるはこの
時と、軍兵に交り幾度か出て給へども、浪人の貧しき身、鎧一領あらばこそ、素肌武者の鑢刀、拾ひ
弓に拾ひ矢、畠につかふ野飼の馬、うてどもあふれども飼はねば瘦せて足立たず。いかなる猛き武士
の、三條小鍛冶の劔にも、なう貧苦の敵は防がれず、腹を切らんとし給ふを、妾様々力をつけ、兵
糧秣の志、盗みかゝりし青麥の、畠は敵の領内、高手小手に縛られ、大將の前に引き出し、罪に沉
む筈なりしに、敵ながら義貞は情ある大將、身の上を聞き届け、命助かる其の上に、召替の錦の鎧、
太刀刀まで賜はり、この恩有るとて必ず我を庇ふな、それゆゑ夫が名は問はぬと、仁義深き御詞、語
り聞かせし我が夫の、心魂に染みたるか御命に替り、我源義貞と名乗りてあへなく討たれたまふ。
たとへ千金萬金をのべたる鎧太刀にもせよ、高家程の侍が、飢ゑに臨んで死すればとて、鎧一領太
刀一振に目がくれて、そもや命が捨てられうか。これぞ實の情の死とは夫の事。恩を忘れ義貞を討ち

には譜代相傳の御家人、小山田前司高春生年六十七歳、命長ければ恥多しとは、我が身の上知られ
たり。十八年以前彼奴はその時十二歳、猪狩の御供せしに、年ふる猪の峯越すを、「誰か有るあの猪射
留めよ。」との御説。太郎ござかしげに小弓に矢をはけ向ひしを、尊氏はつたと既ませ給ひ、「小腕にて
仕損ぜん、罷りしされ。」と宣ひし、御詞も終らぬに、弓と矢大地へ投げ付けしを、彌立腹在し、「誰
に當つて投げうち、年にも足らで慮外者、親前司はなきか、あれ引立てよ。」と御怒り。それより君の
御不興なれば、親もすなはち勘當して、十八年の春秋は、風の便りも絶え果てし。首も性あらばよつ
く聞け。世間の親の勘當は、遊女博奕大酒の沙汰、それさへ親は子を思ふ子心にも弓矢の道、主君に
向つて意地を立てたる御憎しみ、親の身でも憎い半分、嬉しいが又半分の勘當ぞや。今度の軍に義貞
方の名有る兵、首取つて來れかし。君の御前はいふに及ばず、天下の武士にほめさせ、我も世上の
親たる者に羨まれん。今やぐるくと毎日の高名帳、夜は繰つて翌日を待つ、親に孝なく義も知ら
ず、所領恩賞に恥をかへ、敵に手をさげ膝をつき、義貞に降参し知行に命を捨てしよな。とても捨
つる命をなぜ尊氏に奉り、名のためには捨てざりしぞ。親は年よる子は犬死、小山田の名字の譽
誰が末の世に残すべき、エ、淺ましや。」と齒齧をなし、持つたる首をかつぱと投げ、どうど坐して泣
きけるが、「思へば汝は義貞の郎等、我は尊氏の御家人、親子ながらも敵味方、首なりとも一太刀。」と

と泣き、籬の菊の狂ひ咲き、花を争ふ蝶鳥の、露にしをる、如くなり。前司聲をかけ、「エ、はしたなし先づしばらく。」と、二人を左右へ押し分け、「首は一つ内侍は二人、是非一人は偽りなり。これ後に来た上臈、義貞と札はうつたれども、疑はしき事あり。心を沈めてよく御覽ぜ。」と、獄門を取りおろし、見するもあへなき生首を、なまめく膝にかきのせて、一目見てさへなれし夜の、面影だにもまがはぬ物、よく見ればその原や、ありとも知らぬ死顔に、ぞつとこはさの、「ア、恐ろし。」と、拂ひ退けて身を顛はし、「いや〜これは人違ひ、目元口元義貞殿には似てもつかず。かねて我が夫宣ひしは、軍は時の運、いつ討死も計られず。敵に向ふ度毎に、帝より賜はりし、蘭奢待の名香、内兜にたきしめん。鬢の髪に名香かをる、首取つたりといふ人あらば、義貞が討死と思へ。」との御詞。軍の騒ぎに淺ましい、下郎の首と取りちがへ、實のお首は勿體なや、草村に埋もれしか、尋ねてたべ人々。」と、歎き給へば以前の狂女泣き出し、「エ、口惜しや。いかに見しりなきとて、下郎の首とは餘りぞや。我が夫は身貧にて、名香はたかねども、弓取の心の花は、梅櫻よりかんばしく、仁義に命を捨てしもの、屍に恥を與へるが、情なやいとほしや。」と、首抱きよせて伏し轉び、聲も惜しまず泣き居たり。前司飛びかゝり取つてつきのけ、首の鬢を掴んで、涙をはらくと流し、「六十の老眼に見しも違はず、我が子の小山田太郎高家にて有りけるよ。おことは連添ふ女房な。我こそ彼が父、足利尊氏卿

れども、菩提をとふは本妻の役、お首は我に下され。」と、押し退くればおし退けて、「さいふ御身が一
夜妻か遊女か、筋なき事な申されそ。勾當の内侍とは大内の女官、御代にたつた一人の女、義貞殿の
本妻我ならで誰あらん、物に狂ふも夫故、本性は違はぬぞ。サア實の内侍ならば、義貞殿の参内の出
立ちありまおぼ
立有様覺えしか忘れしか、よもや知らじ。」と宣へば、「なう忘れんとすれど忘れぬ、その出立は紫
裾濃、梅檀の板冠の板、金銀にて中黒の、印をうつて黄金札、大立擧の臍當、黄金作りの太刀刀、赤
地の錦御著長、妾が取つて著せければ、ゆつて上帯ちやうど締め、につこと笑うて、あつばれ我なが
らも弓取かな。今日の軍に譽を得て、名を末代にとゞめんと、馬引寄せゆらりとこのつたるはなう、大
將軍にまがひなし。近づく敵の鬨の聲、味方に轟く攻め鼓、峯の木枯磯打つ波、よせくる勢をまくり
切り、大敵を見て勇む事、荒鷹が雉を見て、鳥屋をくゞるに異ならず。雨や霰と飛びくる矢さき、あ
がる矢にはかいくゞり、さがる矢には飛びあがり、向うてくる矢は小太刀をもつて、切つては落し受
けては拂ひ、はらりくくと切り拂ひ、須彌の四方の四天王、摩醯首羅が放つ矢を、一度に切つて大海
に、拂ひ落すが如くにて、面を向くる敵もなし。かかるゆゑしき武士の、運つき弓も矢も折れて、修
羅の奴となり給ふ、後世とふ者は我許り。」と、獄門に取り付けば、「イヤヤ／＼／＼、それは軍の出立。
大内のことを知らぬ身が、内侍とは偽り。」と、引き退けては、「わつ。」と泣き、押し退けては、「わつ。」

歸り給へ、正體なや。」と諫むれば、「うたての人のいひごとや。伊勢の濱荻難波の蘆、所にかはるは草の名よ。異國はしらす本朝に、名もひとり身もひとり、又と一人はなき人なるを、さもなき首を何故に、墨くろくくと高札に、新田義貞とするしたる、其方こそ狂人よ。我は元より氣違の、こほさぬ水のあはれを知らば、さのみ人目にさらさずとも、あの首を妾にたべ。煙となしてなき跡の、菩提を弔ひたう候。」と、袖に縋りて歎かる、「オ、御歎きといひ、御不審はさる事なれども、この首は盛長が討ちは討つて候へども、義貞とは見えがたく、外に似たる者の有る故、曝して實否をたゞさん爲、かくの通り。」といふ所に、東の辻に人立して、これも女の物狂ひ、まゆかきくもり黒髪も、おどろにばつとふりかたけたる笹の葉の、亂れ心や狂ふらん。「あら憚りや恐れをしらぬ京わらんべ。忝くも我が殿御は、源氏の大将左中将義貞、参内の道そこのけとこそ。唄なつかしや我が夫の、雲居を出てしは卯月の空、秋よりさきに必ずと、夕の数は重なれど、こぬ夜つもり怨めしや。獄門に誰がさらしなの、月日待ちしも徒らごと。後世とぶらひ自身も、死出三途をとまなはん。御首たべなう警固の人、お情あれ人々。」と、獄門の木に抱き付き、人目もわかず泣き給ふ。以前の狂女走りより、「これ義貞殿の妻といふ御身はそも何人ぞ。」「オ、聞きも及び給ふらん、勾當の内侍とはみづからよ。」「イヤ實の勾當の内侍とは妾が事。御身は定めて思ひ者か一夜妻、假の情を忘れかね、跡まで慕ふは優しけ

へちろり東へちろり、ちろり／＼とする時は、扇おつ取り刀さいて、いなうよ戻らうよというては、
妻戸にたゝすみし、えにしなきり、んな。君が心に秋風吹かば、いなうとも戻らうとも、何とそなた
の御はからひと、いうては小腰に抱きつきて、結ぶの神の媒は、比翼連理も磯枕、朽ちせぬ中を葛
の葉の、うらみは風の科もないもの。誰が手にかけてうつ山、蕙の葉かづら亂れそめ、狂ひ出でた
る。我が身は何とならの葉の、露より薄きお情や。宵は待ちかね夜中は歎き、曉起きて空見れば、
兒の様な傾城が、紫杯手にするて、一つ參れ我が殿、二つ參れこの殿、三つめの着には、白瓜唐
瓜唐梨唐梅、西王母が園の桃、百とせ千年の御命、情なくも失ひし。誰その修羅の敵は誰ぞ、大森彦
七盛長とや。夫の敵いざ討たん、持つたる柳を劍と定め、噴患の焰は焦る、紅葉。いふに甲斐なき狂
女なれども、夫の弓矢のはけしき嵐に、なれてもまれて、四方の櫻の四方へばつと、よりくる警固、
さす手も引く手も武士の、物狂ひとて咎むるか。よし咎めても威しても、歎きても口説きても、一人
は歸らじ我が夫たべ、夫たべなう人々。」と、かつばとふして泣き沈む、涙の袖も黒髪も、亂れ心を哀
れなる。警固の下郎棒振り廻し、「騒がしき氣違め、そこ立退け。」と追ひ拂ふ。前司押へて、「さなせそ
さなせそ、言ふことあり。」と立ちよりて、「さては義貞の北の方にて在すな。いかに狂氣し給ふとも、
年月馴染の夫婦の中、容顔も忘れ給ひしか。心を沈めよく見給へ、義貞にては候まじ。歎きを止め

内侍狂女の段

三重うたてやな、是れ御覽ぜよ。今までゆるがず折つて擔けしこの柳、風の誘へばこそ一葉も散るなれ。たま／＼心すぐなるを、戀こそ我をくる、くるはすれ。風狂じたる秋の葉の、萩のおとづれ今か今かとたのもの鴈よ。唄君が玉草つばさにかけて、我が手に渡せ渡せや渡せ八橋の、澤邊に勻ふかきつばた花菖蒲、にたりや似たり新田と聞けば懐かしやなう。ヤア／＼わらんべどもは何故に立ち騒ぐぞ。なに新田左中將義貞といふ大將軍に打負け、敵に首を取られて、獄門にかゝり給ふとや。あら實しからずや、その中將といふ人は、元より弓馬は家の藝、雲の上人に交はりては、歌連歌の道にも達し、鞠は曲鞠の品々まで暗からず。又酒盛などの折柄は、諷いで人々に亂舞舞うて見せんとて、水干直垂取り出し、衣紋うつくしう著ないて、縁塗取つて打ちかづき、手拍子人に囃させ、扇おつ取り、なるは瀧の水、たえずとうたり／＼落ちくる瀧の、音羽の嵐に地主の櫻はちり／＼。ア、淺ましや、散るは櫻かふるは涙か、まことにあれよ、あの獄門こそ涙の種。めぐりに厳しき槍長刀、劔の枝のさかしき中の、梢に萎む花の顔容、目もふさがり色かはるとも契りは變らじ。我こそ妻の勾當の内侍、何なう内侍と召さる、かや、いで參らう。思ひ出せば早昔、人目忍ぶの袖打ちかざし、逢ひ初めし夜の睦言も、語りつくさぬ鐘の聲、鶏籠の山に響きて、森の小鳥八こゑの鳥。曉の明星が、西

概似たらば似た通り申し上げられよ。凡そ道具の目利でも、只一言で千貫の道具が似せ物になることもある。粗忽いうて盛長が、高名を消すまいぞ。」と、色をかへてぞ申しける。前司かさねて御前に向け、二人面體よく似たるとは存すれども、某が心にて決定してもまうされず。所詮一條大路の獄門にかけ、諸人の噂を窺はば、是非明白にあらはれ、義貞に極まらば、味方の勝利盛長が高名。もしさもなき首にて候はば、六十に餘る前司めが、粗忽を申して面目なしと、獄門の木の下にて、腹かき切つて伏すならば、恥は某にとまづつて、盛長が不覺もなく、味方の恥辱も候まじ。この實否をたゞす事、某に任せ下さるべし。」と、望み申せば尊氏卿「然らば兔も角も計らふべし。さりながら都方は義貞ひいきの萬民、詞も直には受けがたからん。」と宣へば「さん候。壽永の昔木曾殿北國合戦に、手塚太郎光盛、齋藤別當實盛が首を取りしかども、名乗らねば名もしらず、見知る人もなかりしを、樋口二郎が朋友の好みに語りし詞の色、染めたる墨の鬢髪を、あらひてそれとは存じて候。友達の好みにさへ、心をあかすは人情の慣ひ、殊に義貞は情有る大將、好みの者も多かるべし。北の方は勾當の内侍と申す内裏上臈、かくと傳へ聞き給はば、忍ぶに餘る涙の袖、諸人に紛れ給ひても、思ひは外の色に出で、そのかくれ有るべきか。實盛がひげを洗ひしは、それは篠原池の水、これは情の底意なく、誠を顯はす涙の水に、洗はせて御覽候へ。」と、申しもあへず首を持ち御前を立ちけり。

の者なれば、よつく大將義貞に忠信深き侍よ、とはれて誠を言ふべきか。若し御邊運盡き敵に生捕られ、味方の謀を問ふならば、ありの儘にいはんずな、覺束なし。」と宣へば、盛長は詞なく、赤面したる許りなり。大將重ねて、「我義貞と一家なれども、使者の通路許りにて、終に直に對面せず。見知りたる人あらば、申されよ。」と宣へば、諸大名立ちより、「關東以來此の度の合戦にも、遠目に見たる許りにて、近附きし事なければ、臍けの事は申されず。」と、更に實否は極まらず。小山田前司高春、末座よりのび出でて、見れば面ざし顔のかゝり、若年の昔勸當せし、我が子の小山田太郎高家に似たりと見たる親子の縁、六十の老眼にも、紛ふかたなく胸にしみ、はつと驚き居たりしが、さあらぬ體に心を沈め、「新田殿の御顔は、先年鷹狩の折から、一兩度も見參らせ、大かたに覺え候。」と、近々と立ちより右へまはり左へ向き、ためつすがめつ、見れば見る程疑ひもなき我が子の高家。南無三寶、勘當して十八年、この世にながらへ有るならば、此の度の合戦に、大將の御目に及ぶ程の高名せよかし。それを品に勘當赦し、御前もと、のへ老いが世の、子孫の榮えを見んものと、頼みし心の綱も切れ、そゞろ涙のこぼるゝを、「ハア、老眼のかすみ定かならず。」と、目をおしのごふその中にも當家譜代の身を持つて、敵の大將義貞と名乗つて死せしは心得ず。申す詞にさしあたり、前後にくれたる許りなり。大森彦七つと出で、「これく前司殿、生顔と死顔は相好の變る物。その料簡して大

大將軍の首の標、伺候の諸武士横手をうち、「さては義貞を討つたるか、今度の譽は盛長一人。弓矢の冥加に叶ひし侍、お手柄くあやかり者。」とぞ羨まる。尊氏卿しばらく思案し給ひ、「錦の直垂を著し、新田左中將義貞と名乗つたるを、それぞとして討ちつらめ、それに虚言も有るまじ。さりながらこの尊氏も義貞も、同じ清和の後胤、八幡殿の嫡孫、敵味方とはなつたれども、共に一家の源氏の棟梁、殊に天皇に頼まれ参らせ、官軍の總大將、相隨ふ門葉に、大館大井田里見鳥山、大島堀口脇屋の歴々數をしらず、譜代重恩の武士も多かるべし。義貞程の大將が討死せんに、我さきにと驅け合せ、冥途の供として一人も討死せぬさへ不思議なるに、残る軍兵播播路まで逃げたるは心え難し。一とせ楠が焼首を以て欺き、義貞の智畧に乗せられ京童の笑ひ草、にたくしき首どもを、まさしけにもかけたりと落書を立てられ、六波羅の愚將共が、恥かきしと聞き及ぶ。彼等は天性武畧智謀備へたる英雄、引くも驅くるも理に當り、生きるにも死ぬるにも、勝負の損徳を守る名將、いかなる謀をやかまへつらん。卒爾にもてはやし、義貞にてなくんば味方の恥辱はいふに及ばず、汝不覺人の名を取るべし。方々如何思はる、評定あれ。」とぞ仰せける。大森つつと出で、「いや御評定までもなく、生捕の者に見せ御尋ね候はば、實否早速しれ申すにて候。」と、こさかしけに言上す。尊氏大きに笑はせ給ひ、「イヤ生捕に問ふ杯とは、名もなき者の首の事。命を捨てて働き入り、生捕らる、程

周の武王は木主を作つて殷の世を傾け、漢の高祖は義帝を尊んで秦の國を亡ぼす。されば尊氏將軍天理を恐れ、後伏見の院宣を申し給はり、朝敵の名を遁れ、忠戦の鋒先鋭くして、兵庫湊川の合戦に打勝ち、楠正成に腹切らせ、新田義貞を驅け散らし、馬鞍休め物具も、ぬぎて紐とく花の都、東寺を假の館城、大將の御所とぞ定めらる。猶も殘黨洛中を犯す事もやと、口々の警固怠らず、生き殘る義貞一家、かさねて討手に向ふべし。先づく軍の疲れをはらし、樂しみを諸人と共に樂しむ酒宴の興、此の度の合戦に、分捕高名の帳面を開かせ、其々に御褒美ある。仁木細川吉良石堂、南部桃井高上杉、武田赤松畠山、澀川岩松一色荒川小笠原、この人々を始めとして、外様の大名小名、御家人は言ふに及ばず、雜兵葉武者に至るまで、太刀刀馬鎧、金銀時服の御褒美、昨日今日の足輕も、知行の感狀賜はつて、首一つが一筆に千石になるも有り、數にもあらぬ首どつて、御褒美を貪れども、僅か銀子三枚兜、拾うて著せてもあきらけき、名大將の賞罰と、仰がぬ人こそなかりけれ。爰に大森彦七盛長、腹巻に直垂うちかけ、揉烏帽子引きたて、血塗れの兜箱御前にさし出し、敵の大將楠討死の後、總大將新田義貞西の宮の軍破れ、味方の多勢に取巻かれ、求塚の上に驅け上り、腹きらんと致せしを、某矢竦めにして討伏せ首取つて候。殘る軍兵落ち行く所を、播磨路まで追つかけ申せし故、御帳にも付き申さず、只今實檢に供へ候。」と、蓋を取れば錦の直垂、袖を斷つて包みしは、

すくめに疎められ、「今はこれまで。我義貞の命にかはり、其の隙にやすく落し、情の恩を報ぜん。」と、求塚に駆け上り、遠からん者は音にも聞け、近き者は目にも見よ。清和天皇の後胤新田左中將義貞、十善天子に頼まれ参らせ、屍を戦場の土に埋む。功ある大將の最期の體、よつく見おいて手本にせよ。」と、高紐切つて解くところを、大森主従をりかさなり、切り伏せくおさへて首をぞかいたりける。直垂切つておし包み、「官軍の總大將新田義貞を、伊豫國の住人、大森彦七盛長討取つたり。」と名乗りしは、いかめしうこそ聞えけれ。此の聲に驚き、馳せ散つたる味方の勢、「大將を討たせては、一人もいきで詮なし。」と、八方より引き返す。義貞も取つて返し、「ヤアく同士討する狼狽武者。實の義貞是れにあり。」と、切つてかゝり給へば、「イヤ義貞が二人あるものか。新銀古銀同じ通用、これで堪忍仕る。」と、一散に逃けて行く。味方の大勢追つ驅くるを大將おさへて、「しばらくらく。彼は聞ゆる佞人、愚癡愚蒙の狼狽者。かかる者の敵陣にあるは味方の利運ぞ。」と、諸卒をしめす謀、智謀は居ながら天に入り、波をもくゞる尼が崎、山崎過ぎて名將の、譽は雲居の桂川、打越えかけ越え渡り越え、世に立ち越えてならびなき、我が立つ杣や都の富士、西坂本にぞ入り給ふ。

第三

態と敵に組み敷かる、者や候べき。足利尊氏の家の子小山田前司高春が、一子、小山田太郎高家、不足の敵と思召さば、只首打つてすてさせ給へ。」と、兩手をゆるめて働かず、「いやくこの物具は、夜前女に與へし義貞が著捨の鎧、扱はその夫よな。恩を報ぜん志、しをらししやさしさよ。さりながら天下に比ぶる義貞が命、僅かの鎧一領にて助からんとてはとらせぬぞ。主親の勘當につき望み有る者ときく。目を驚かす高名して、本望を達せよ。只今にても跳ね返し、義貞と今一勝負、爲ばせよかし。」と宣へども、小山田は涙にくれ、「重ねくの御情、冥加の程も恐ろしく、申し上げる詞もなし。いふに甲斐なきこの高家がかせ首、義貞公の御手にかゝり申す事、いかなる先陣魁にも、まさつて身に過ぎたる譽、勘氣の父が聞くなれば、さぞ悦び申すべし。この上の御芳志に、はや首打つて捨てさせ給へ。」と、申し切つたる兩眼に、涙を流すぞ道理なる。「エ、義理ばつたる男や。」と、取つて引立て塵打拂ひ、「義貞に助けられしと、人に語るな、我も人には語らぬぞ。」と、手負ひし馬を引立てて、靜かに打つて過ぎ給ふ。武將の氣質備はつて、古今に語るも理なり。小山田は茫然と、義貞の仁心心にしみて立つたる所に、大森彦七盛長手の者五十騎許り、どつと駆け寄せ大音上げ、「赤地の錦の直垂中黒の鎧は、敵の大將義貞遠目にも見違へず。射取れや。」と矢先を揃へ、よこぎる雨と射かくる矢先、「さしつたり。」と小太刀をぬいて、はらりくと三重切りおとす。されども鎧の隙間々々、矢

て、追付そこへ。」と立歸れば、「これ討死は軍の習ひ、いきて歸れば仕合。先づ今生の暇を、かならず泣くな。」コレ武士の妻になるからは、そこは合點。「死出の山路の一二のかけ、おくれはせまい。」と別れしは、はや修羅道の先陣と、後にぞ思ひ三重しられける。傾く日影西の宮、大手の合戦入り亂れ、人馬四方に馳せ違ひ、喚き叫ぶその聲は、山を崩すが如くにて、官軍既に戦ひ破れ、堪へつべうは見えざりけり。大將義貞唯一騎、返し合はせく、十六度まで驅け散らし、御身を吃と見給へば、數箇所の矢疵、馬鞍に立ちし矢は、枯野の薄に異ならず。「エ、軍の勝負今日にかぎるべからず。」と、追ひくる敵を斬り拂ひく、求塚の小松原、心靜かに打ち給ふ。高家それぞと見るより大音上げ、「大將軍と見奉る、まさなう後を見せ給ふ、引返して勝負あれ。」と、おつかくれば振返り、「日本一の義貞に、聲をかくるはこざかし。」と、鎧にかけてはつたと蹴散らし、たゞよふ所をひらりと飛びおり、片手をのべ一突つけば、風にかせの倒るゝ如くにて、横投にどうど伏す。義貞すかさず弦走りにつ掛り、首をかかんとし給ひしが、鎧出立つくくと御覽じ、「ム、ウ天晴おのれはしれ者かな、義貞に易々と組み敷かれん力とは覺えず。何とて我を組み敷かぬ、定めて仔細有るべき。さりながら汝が主の尊氏を、組み伏せたらんはしらず、汝如きの侍を五十百首取つても、さのみ義貞が手柄本望とも思はず。サア仔細を語つて名乗れく。」と宣へば、「コハ御説とも覺えず。いかに大將なればとて、

ど打ち、鎧引きよせ、熟見て、「矢留金物押著の板、發傳高紐上卷附、太刀は鳥首兵庫ぐさり。ム、これは大將の拂ひ物、大抵では賣るまじきが、但し損料でばし借つたか。」と、いへば女房くつくと吹き出し、「ア、つがもない。日がな一日玉綿繰つて、錢二十取るや取らぬもの、八百年の手間賃でも、なか／＼買はるゝ物かいの。馬の草もなきゆゑに、昨夜義貞の領内の、青麥盗み刈りたるを、番の者に擲められ、殺さるゝ筈なるを、さすが義貞は憐れを知つた大將、夫の身の上聞き届け、命を助けその上に、この太刀具足。サア早う出立つて、手柄してござんせ。」と、綿嚙取つて著せんとす。高家つきのけ、ム、實に義貞は五常を守る名將、物の憐れをしること、敵味方の隔てなき人と聞く。義貞に貰うた鎧を著し、直に義貞に打つてかゝらん事、心よからぬ軍なれば、思ひ切つたる高名もなるべからず。エ、よしない情を受けたり」と、悔み顔にぞ見えにける。「エ、こなたとも覺えぬ。義貞程の大將が、さもしい返報受けうとて、何の情をかけられう。それ故こなたの名も問はず、用捨なく我を討てと、詞に念を入れ給ふ。義貞の目の前、この具足著て働き、あはよくば義貞をしてやらうと思ふ氣はないか。エ、おくれた人や。」とせきければ、「ム、分別した合點有り。一度著して見せずんば、其方を騙りなどとさみせられんは男のはぢ。サア小山田太郎高家が出陣。」と、鎧取つてなげかけ、上帶高紐小躍して、引締めく太刀わきばさみ立ちあがれば、「オ、あつばれ武者振よい男、私も馬に草かう

繩手綱、ちぎれ具足もあらばこそ。剩へ女房の、昨夕に出でて歸らぬは、心もとなさ氣遣ひさ、足に任せて此處彼處、在所を尋ね求塚、小松原より振りかへれば、コハいかに、遙か向うの山々に、黒の旗二つ引兩、巴の旗も輪違に、東へ靡き西へ靡き、磯山風に翩翻して、馬煙矢叫び天に響き地に満ちて、新田足利の國争ひ、今を限りと見えたりける。「ア、羨ましき殿原が合戦や、せめて古具足の一領もあれかし。取つて投げかけ何百萬騎が中なりとも、只一揉に驅り破り、兩陣の目を驚かせんものを、何をいうても浪人の、紙子頭巾に鋤一丁、思ふに甲斐のあらばこそ。貧は諸道の妨げと、世の諺もわが身の上、エ、無念口惜しや。」と、拳を握り牙を嚙み、男泣きにぞ泣き居たる。かかる所へ女房は、危き命をまぬかれ、降つて涌いたる太刀鎧、夫に見せて悦ばせんと、足早に歸りしが、「ヤアこちの人爰にか、このなりは何ぞいの。さぞ待ち兼ねてで有らうと思ひ、いきせきして戻つた。これわしぢや女房ぢやが、なぜに物いはんせぬ。氣合が悪いか高家殿。」と、抱きおこせば涙をおさへ、「オオ氣合もどうでようはない。ヤレ女房あの向うの山々に、入り違ふ旗を見よ。今ぞ合戦眞最中。あの軍中には主君尊氏公、父前司殿も在すらん。正しく主君老いたる父が、天下分目の晴軍と、命を惜しまず戦ふを、子の身として安閑と、見物して日を送る、これが無念に有るまいか。」と、いはせも果てず、「コレくくく、その泣言はもういらぬ。これ見さんせ。」と太刀鎧投げ出せば、高家横手をちやう

かゝれ、敵ながらも見物せん。はやとくく。」と宣ひて、いましめの繩を解かせらる。女は、「アッ。」と頭をさげ、「情ある御大將、ありがたき御恩の程、何と報じ奉らん。さりながら我が夫はまさしく尊氏公の御家人。すは合戦に及ばんととき、今給はつたる鎧を著し、太刀を持つて義貞公に向はるべきか。用捨しては尊氏への不忠。是非なく一矢仕らば、恩を知らぬ弓取と、末代までの笑ひ草、御恩は却つて仇となる。只御慈悲には自らを、盗み一ぺんの科に落し、はやく殺してたまはれ。」と、首さしのべて泣き居たる、心の中こそすゞしけれ。義貞なほも感じ給ひ、「オ、その心を察してこそ、わざと最前より夫が假名實名をも尋ねず、互に知られず知らぬ相手、名乗つて勝負を遂ぐる時、いづれに用捨の有るべきぞ、さ程の事を汝等に、教へらるゝ義貞ならず。いらざる詮議に時移れり、はやはや歸れ。」と太刀鎧、手づから取つてたびければ、おし戴きわきばさみ、「お情はこれまで。明日の合戦には、夫婦諸共心を合はせ、恐れながら御運によつて御首を、給はることも候べし。お許しあれ御免あれ。」と、御前を罷りたつかゆみ、ひきはかへさじ武士の、妹脊の義理ぞ三重頼もしき。既にその夜も明け行けば、勝にのつたる尊氏の軍勢雲霞の如く、湊川より討つてかゝる。義貞も西の宮より取つてかへし、生田の森を後にあて、入り亂れ攻め戦ふ。太刀の鐺音闐の聲、いかなる修羅の鬪諍も、これには過ぎじとおびたゞし。小山田太郎高家は、心許りは春の花、身は埋木の力なき、野飼の馬の

招くか情なや。然らば包まず申すべし。妾が夫は足利尊氏の相傳の侍なるが、聊かの事有りて主親の勘當うけ、この國の土民となり、忍びて暮すうき身にも、此の度の合戦、これ屈竟の時節到來、お免しなくとも戦場に馳せ加はり、分捕高名譽を顯はし、主の不興父御の勘當免されんと、思ひ定めし我が夫の、心は彌猛にはやれども、鎧一領有るにこそ。手綱ゆりかけ乗つたりとも、一町もとばぬ野飼の瘦馬、住むもわびしき藁屋の窗より、鬨の聲矢叫びの音、かすかに聞ゆるその時は、齒ぎしみしての無念がり、傍で見ろさへ胸せかれ、おのれやれ二世とかはした大事の男、このまゝにては果てさせじと、様々に思案し、麥を盗んで兵糧の、便よくば陣所に忍び、寐入りたる軍兵原が、太刀物具思ふまゝに盗み取り、我が夫に打著せ、みづからも太刀脇ばさみ、夫婦諸共軍して、名を後代に揚ぐべしと、思ひし事も徒らに、かかる繩目にあふ事も、夫の武運の拙き故。仔細といふもこのあらまし、とてもながらへ果てぬ身ぞ、憂き物思ひさせんより、はやく殺して給はれなう、御慈悲なるわ人々。」と、聲も惜しまず歎きは、目も當てられぬ風情なり。義貞もや、落涙あり。「オ、あつぱれ武士の妻にてありけるよ。命がけの盗みして、夫の武勇を勵ます心、感じても猶餘りあり。罪をゆるし義貞が、著捨の鎧太刀をもそへて取らすべし、それく。」と宣へば、御召替の錦の直垂、黄金造りの一腰、女が膝にぞ置かれける。「サアく歸つて物具著せ、明日の合戦には、義貞が陣に向つて打つて

博突のどう取、この頃續く不仕合、鍋釜疊釣おまへ、糠味噌桶まではたけ出し、爲方盡きて二三日、麥をかるたのかたにはり、ひねつてもく、二寸より上目なく、あけくに今夜三寸繩に、縛られまし。と泣きにける。三番目は若き出家。「三衣に似合はぬ麥盗人、仔細を申せ。」と睨め付くる。「されば愚僧はあかしがた、蓮臺寺といふ淨土寺の後住に、無海と申す法師なるが、學問の憂き晴らしに、ふと室の津へ出かけ、梅花の移りをかぎそめて、抹香の勻ひきづまりさ、欠伸は百八煩惱菩提、いつそお山に宗旨をかへ、好色修行と志し、通ひ詰めたその擧句が、それはいかいしやくせん檀の、阿彌陀佛まで質屋へとばし、手ぐらまぐらに調へ、今少しに手づかへ、ふつとした出来心後悔先へた、きがね、只今斯様の責め念佛にあふ事も、出家の身にはあぬまい事、あぬまいく、ア、ぬまいだ。」とぞ語りける。遙かの後に年の頃、二十餘りの女房、盗み取つたる青麥を、背中に縛りつけられて、恥かしげにぞ泣き居たる。義貞つくく御覽じ、「彼が體盗みすべき者とも見えず。仔細ぞあらんまつすぐに申すべし。」とありければ、女ちつとも騷がず、「ハア、仔細と申して麥を盗みしより外の仔細もなし。はやく法に行ひ給へ。」と、恐れもなげにぞ答へける。義貞なほもいぶかしく、「仔細を言はずんば往還にさらし、諸人に恥を知らすべきぞ。」と宣へば、女は「わつ。」と許りにて、暫し涙にくれけるが、「ア、是非もなや。盗みをするも夫の恥、包まんと思ふ爲なるに、諸人に面をさらさん事、恥を

戦破れ、楠正成討死すと雖も、總大將新田左中將義貞、西の宮に御陣を召され、士卒をなづけたまひければ、馳せ集まつて味方の勢、四萬餘騎とぞ聞えける。侍所長濱六郎左衛門松明持たせ陣屋を廻り、囚人四五人擲めさせ、義貞の御前へひつする、「彼奴ばら今夜近邊の田畠を荒し、御馬の飼料に残せし青麥を、盗み刈り取りしを擲め取つて候。見せしめの爲首斬つて、獄門にかけ候はん。」と言上す。義貞聞召し、「抑今度の合戦は朝敵を亡ほし、民安全になすべしとの敕諭なれば、賣買耕作に妨げず。田畠の一粒をも刈り取る者は、急度刑罰すべきよし諸軍勢に相觸れ、所々に立てたる高札を背きしは、敵方のおふれ者か但し盜賊か、白状させよ。」と御諭有る。雑兵繩付ひつ立て、「サア大將の御前なるわ。眞直に申すべし。僞らば首捻ち切らん。」ときめつくる。「これくそこつなされな。我等も此の國の大將。」「ヤア大將とは。」「いやく巾著切の大將、鉄の彌市と申す者。或は花見の開帳の、又は傾國猿芝居、人立多き所にて、人の懐腰のまはり、手が觸るとこつちの物、資本いらすの商賣。この軍始まつて國中のよい衆は、草鞋がけで逃げごしらへ、遊山所はいかなこと、我等がしよざいひつしやりほん。御法度を背きしは、いつそてんほの皮巾著、お根付衆に咎められ、くゝられました。」と申しける。その次なる大男、「うぬが面相たゞ者ならず、眞直に白状せよ。のじばらばしやつ面を、はつてくゝはりまはさん。」「ア、餘りはるくゝ御意なされな、はりが過ぎてこのさま。我等は

偽りか、何處へいかんす。いとしかはいと言はんした、言の葉はうそかいな。オ、しんき、跡じよりさんすは、早秋風か。」と、見あけ見おろす高入道、しやならくの八文字は、二王をゆるがす如くなり。彦七五體縮めども、弱味を見せじと大音上げ「ヤア」源秀智仁勇を兼ねしといふ、楠さへ討取つたる盛長。いはれぬ腕立せんよりも、腹をきれ。」とぞ呼ばはりける。源秀今は堪られず、長持の棒おつとりのべ、「ヤイ禮儀知らずの國賊。楠一族國の爲君の爲死を善道に守つて、潔く切腹せしを、何ぞや汝が討留めしなどとは、どの頬けたから吐き出した。いざ來い源秀が手なみを見せん。」と討つてかゝる。盛長猶も口へらず、「侍たる身が坊主を相手にする物か。」と、言ひ捨てて逃けて行く。「ヤア出家侍、犬畜生餘すまじ。」と、ほつ立てゝたゝき立て、八方微塵に打ち立つれば、あたりに近づく者もなく、皆ちりんに逃けてけり。「さもさうすく、これより河内に立越え、正成の最期を傳へ、重ねて義兵をあぐべし。」と、甲斐なき首を取り集め、怒れる眼にはらくと、涙貫く玉鐙の、道は生田の森の露、末の雫や末の世に、譽を永く傳へける。

第二

將の謀泄る、時は軍利なし、外内を闘ふ時は禍制せずや。坊門宰相清忠が内通故、湊川の合

す大森彦七、大勢引具し込入つて、一々に首かき落し、「オ、目出度し心地よし。抜かぬ太刀の高名、楠が首尊氏公に奉らば、三箇國は取れた物。日頃心を通はせし、勾當の内侍も坊門宰相が討らひにて、今宵我が手に入る筈。甘い事の摺みどり、早う内侍の顔が見たい。」といふ所へ、女房二人先に立ち、長持を昇き入れさせ、「宰相殿のお使。」と、聞くより彦七大きに悦び、「オ、満足々々。人目を憚り、長持とは宰相殿の一策。さりながらいとしい君の箱入、氣の詰るもおいとしい。先づく御見。」と蓋をあくれば、恥かしげに薄衣深く顔かくし、籬の梅の早咲の、雪に埋もれし風情なり。彦七猶も心うかれ、其のおほこながなほ甘し。そさまを我が手に入れん爲、此の度の軍も某が手を碎き、御覽候へ楠一家を討留めたり。これより義貞が首捻ち切らんは、寐鳥を差すよりいと易し。世になき新田に心中を立てんより、日の出の我等に靡かれよ、色こそ黒けれ心は伽羅。先づ我が陣屋へ同道して、新枕の酒盛せん、いざさせ給へ。」と肩にかけ、二足三足は歩みしが、ア、ラ不思議や今まで輕き上臈の、俄に重き小夜衣、我が妻ならぬ念力か、大磐石を肩先に、疊みかけたたる如くにて、五體ちつとも働かず。「ヤアラしれ者ござんなれ。」と、太刀に手をかけ振仰げば、コハいかに、和田の新發意源秀、くわつと見開く眼の光、二面の鏡研ぎ立てて、額につけたる如くなり。大森わな／＼顫ひ出し、こは／＼下にそつとおろし、逃げ入らんとする所を、「これ／＼彦さん手がわるい。幾瀬心を盡すとは

んでどうど打付け、首をかかんとせし所へ、薬師寺十郎同じく次郎、弓手馬手よりむすと組む。「しや物々し。」と兩手をのべ、草摺摺んで捻ぢ合ふまに、大森小脇をそつとぬけ、跡をも見ずして逃げ失せけり。「エ、大事の敵を洩らせしもおのれら故。」と、兩脇にしつかと挟み、「えいやうん。」としめ付くれば、眼口より血を流し、二人一所に伏したりける。これを見て吉良、石堂、高、上杉六千餘騎、楠を討ち留めんと、八方より喚いてかゝる。正成元より討死と思ひ定めし晴軍、望む所と太刀さしかざし、打つて出づれば正季正員和田五郎、宗徒の兵ぬきつれく、死物ぐるひのをかみ打、當る者を幸ひに、なぎ立てく。三重追ひ廻す。されども敵は百萬餘騎、入れかへく攻め立つれば、七十三騎に討ちなされ、正成今はこれまでと、一村在家に走り入り、是れ屈竟の最期場と、心靜かに鎧ぬぎすて、「いかに方々、抑最期の一念によつて、善惡の生を引くといへり。九界の間に何が御邊の願ひなる。」と問ひければ、弟の正季からくと笑ひ、「只七生まで同じ人間に生まれいで、朝敵尊氏を亡ぼさん事、我等が願ひの一つなり。」と、いはせも果てす正成嬉しけに打ちうなづき、「罪業深き惡念なれども、我も斯様に思ふなり。いさや同じく生をかへ、この本懐を達せん。」と、いひもあへす押肌脱、ぎ氷の刃一文字、脊骨をかけて引きまはせば、宗徒の一族十六人、従ふ兵五十餘人、我もくと刺し違へ、同じ枕に伏したりし、惜しかりしく、日本無雙の名將の、最期の程ぞ潔き。あひもすかさ

つて押戴おしいたすき、めのとの恩地おんぢに馬引うまひかせ、手綱たづなかいくり打乗うそのつて、親子おやここの世よの別わかれの詞ことば、さらばとたにもいはばこそ。「慾よくを忘れ情なさけを知り、義ぎにたくましき大將たいしょうは、百萬騎ひゃくまんぎにかこまれても、恥辱ちじやくの死しはせぬ物ものぞ。此この理りも背そむく武士ぶしは、勝かつも實まことの勝かちならず、恥はぢを子孫しそんに残のこすなり。心得こころえたるか正行まさつら。」「承うけたまはり候きこらふ。」と、互たがひに駒こまを引きかへし、東西とうざいに別わかれしが、振り返かへりく、親おやは我が子この身みの行方ゆくへ、子は又また親おやの最期さいごの末すゑ、思おもひつゝ、みて弓取ゆみとりの、泣なかぬを今いまの涙なみだとは、よその袂たもとにせきかくる、湊河みなとがはへぞ三重寄よせにける。明あくれば五月ごがつ二十五日にち、尊氏たかうちの軍兵海手山手ぐんひやううてやまてひやくまんよき百萬餘騎ひゃくまんよき、楯たてをならし簾えひらをたゞき、鬨とどをどつとぞ揚あげたりける。楠くすのき手勢ていしちひやくよき七百餘騎しちひゃくよき、同時どうじに鬨とどをつくり立て、多勢たぜいが中なかにわつて入り、喚をき叫さけんで三重さんじゆう戦たたかひける。味方みかたは小勢こぜいといひながら、一命いちめいを義路ぎろにかけ、名なを末代まつだいにとゞめんと、思おもひ切きつたる勇士ゆうしども、北きたより南みなみへ追おひ躰なびけ、西にしより東ひがしへわつて通り、息いきをも續つがせず攻めかくれば、さしもの大勢たいせい支さへかね、須磨すまの上野うへのへさつと引き、後陣ごぜんの勢せいをぞ待ち居ゐたる。大森彦七おほもりひち盛長もりなが、駒こまかけする大音上たいおんあけ、「鬼神きしんならぬ楠くすのき、某それがしが一軍ひといくさに、正成まさしげ兄弟首取あにけつて、敵味方てきみかたの目めを覺ささん。彦七ひちしちを手本てほんにせよ。」と、廣言吐くわつげんはいて打うつてかゝる。正成まさしげも駒こまかけよせ、「何大森なにおほもりとや。合あはぬ敵不足てきかそくながら、心こころざしのやさしや。」と、まつしぐらに驅かけ出す。この勢いきほひに氣きを失うしなひ、逃鞭打にげむちうつてひつかへす。「きたなしかへせ。」と追おつかけしは、早瀬はやせの鮎あゆを鵜うの鳥とりの、追おうてまはるが如ごとくにて、程ほどなく追おひつめ盛長もりながが、上帶うはおびつか

あふ軍兵感涙に、鎧の袖をぞ絞りける。正成も共に涙は先だてども、わざと聲をあららけ、「ヤア弓馬の家に生まれて、討死するが珍らしきか。おことを年月養育せしは、父が最期の供せよとては育てぬぞや。戦ふべき所に進み、引くべき所に退き、天下に功をたつるこそ、よき弓取とは名付けたれ。傳へ聞く西天に獅子といふ獸有り。その獅子子を産んで三日の内その子を、數千丈の巖壁より眞逆様に投げ落す。獅子の氣分なき子は、岩角に身を破つて當座に死す。勢ひそなはる獅子の子は、中よりひらりと跳ね返り、身を全うすと傳へたり。我が子の心を見る事は、畜類とても斯くの如し。今諸國八方にそばだつたる敵の中、幼き汝を歸す事、かの巖壁に抛つ獅子の子よりも猶危し。汝勇士の氣分備はらば、數萬の敵の鋒先の岩石も、凌ぎて碎く獅子の勢ひ、太平の御代と跳ね返せ、吉野初瀬の名木も、老木は次第に枯るれども、こぼる、種の色香をつぎ、花の名高き山ぞかし。二葉の苗を残すこそ、巖とならん楠が、永き世までの形見ぞ。」と、鎧の引合より一卷を取り出し、「これぞ我が祕する所の軍術、この書を讀みて道を得ば、父正成が存へ有るも同然ならん。」と、一卷を手を渡し、「サアこの上にも聞分なく、腹切らばきれ供せばせよ。父がいふ事これまで。」と、馬引きよせひらりと乗り、思ひ切つたる心にも、ゆゝしき我が子の武者振を、見るも限りと目に脆き、涙に手綱くりそへて、駒をひかふる許りなり。正行も理に當る親の教訓爲方も、涙を押へ、「御詞一々承り候。」と、一卷取

と、義を重んずる許りなり。今度の合戦味方必定打負け、王法忽ち傾き、御代を奪はれ給はん事、鏡に照らすか如くなれば、我一つの謀を以てさま／＼お諫め申せども、坊門の宰相邪の理を進め、君用ゐさせたまはねば、力なく打立つたり。父が一期の名残の軍、花々しく戦ひ、一戦に腹を切るべきぞ。おことはこれより故郷に歸り、父が最期と聞くなれば、彌身を全うして、二十にも餘る時、金剛山を要害として、住吉天王寺に打つて出で、近鄰を劫し、討手向はば一命を、養由が矢先にかげ、義を紀信が忠烈に比べ攻め戦ひ、君を御代に立て參らせ、父が憤りを散せん事、いかなる佛事孝養も、これにはなか勝るべき。今生にて汝が顔見る事もこれまでぞ。必ず詞を忘るゝな。」と、勇氣撓まぬ弓取も、恩愛父子の浮世の別れ、涙をはらくとぞ流しける。正行聞きもあへず、「口惜しき父の仰せやな。楠正成が嫡子正行こそ負軍を考へ、道より逃けて歸りしと、世の嘲りに落ちん事、屍の上の恥辱候。殊に親の討死と、思ひさだめし軍場を、見捨つる子や候べき。是非御供につれられずば、我等一騎かけぬけ、敏達天皇の後胤、井手の左大臣橘の諸兄公の末葉、楠河内判官が嫡子帶刀正行、生年十一歳と名乗つて好き敵にかけ合はせ、引つ組んでさしちがへ、冥土の道の魁と思ひ詰めたる正行、敵の旗をも見ぬさきに、歸れとは恨めしや。幼くて戦場の妨げと成るならば、只今茲にて腹切らん、介錯してたべん人々。」と、芝の上にごうど居て、聲も惜しまず泣きければ、あり

持に押入れて送らるゝ、なうやるかたなさ便りなさ。乳母が慕ひくるとは知らず、頭も上らず息もならぬ長持を、搖るやら振るやら打付け廻る、その響胸にこたへ、目もくらゝと幾度か死に入りし。火の車にのせて行く、地獄の迎ひもかくやらん。この上のお情に我が夫の陣屋まで、送り届けて給はれ。」と、乳母諸共手を合はせ、かきどきてぞ泣き給ふ。正成打首肯き、「さこそく。我大内を出でしより、斯様の事のあらんとは、宰相が詞の色にて察せしなり。義貞の御陣所へ送り申すはやすけれども、宰相かくと洩れ聞かば、陣場に女中を召されしと悪様に奏聞し、叡慮を以て御夫婦の中をさかば、御恥辱を招くに似たり。それく源秀、これより都へ御供し、玄惠法印に預け參らせよ。道中人に悟られぬ用心第一、疾くく。」と有りければ、「合點々々。智畧はお家、勸學院の雀、任せておけ。」と小躍して、郎等二人が具足をぬがせ、長持に入れ棒差通しになはせて、「これ内侍様も乳母御も、慮外ながら下女にして、我等は又この體。」と、内侍の裨褙鎧の上か衣かづき、二王の様なる大入道、五日歸りの花嫁と、しやならくくとふりかけて、「サア腰元衆、早うおぢやや。」と夕影も、眼は朝日照る月の、都の方へと急ぎける。正成遙かに見送つて、嫡子正行を招き涙を浮め、「汝幼くともよく聞きおけ、忝くも我帝に頼まれ奉り、命を敵の矢先にかけて、身を戰場になけうつ事、譽を取つて名を残さん爲にもあらず、子孫の榮華を願ふにもあらず、朝敵を亡ほし國家安全の、叡慮をやすめ奉らん

ば、「承る。」と和田の新發意、畦を傳うて走りよる。其の丈六尺七寸、古の辨慶もあざむく許り、鬼のやうなる赤入道。二人は、「あはや。」と手を合はせ、飛び入る所を引寄せて確と抱く。「なうさうせいでも死ぬる身を、せめて身體に疵付けず、死なせてたべ。」と飛び入るを、「これ上臈、殺す程なら何のとめう。あれなるは楠判官正成、物の憐れを見捨てぬ氣質、仔細とつくと聞き届けよ。」との使なり。」と言ひければ、「扱は楠殿とや。自らこそ新田義貞の妻勾當の内侍なり、お情に新田殿の陣屋へ送りたべかし。」と、宣ふ所へ二人の下部立歸り、「ヤアウ長持の錠捻ぢ切つた、おのれ取逃し手振で歸つてこちとが命有る物か。此方へうせう。」と取り付く所を、源秀二人が首筋ひつ掴み、「手振で歸れば取らる、命、爰にて取つてくれんず。」と、蘆間にかつぽと打込めば、五體を搦む菱かづら、泥に酔うてぞ失せにけり。その隙に楠親子馬乗りはなし、とかういたはり給ひければ、内侍も涙にくれながら、「常々夫の物語、『楠判官正成は慈悲第一の大將と、聞きしに變らぬ御情、何と報じまるせん。ひとせ猿樂見物の時、伊豫國の住人大森彦七盛長とやらん、みづからに心をかけ、坊門の宰相を媒にて、威勢でおどし文でぬらし、色かへ品かへ口説きしを、つれなく返事もいたさぬ間に、新田義貞の妻となつたるは、上様よりの敕誼、天下はれての夫婦ぞや。それにこの度義貞殿、西國發向の留守を覗ひ、宰相理不盡に亂れ入り、先約は大森、媒の宰相義理が立たぬの何のとて、無理無體に長

押竝べてうちければ、舍宗正季一族和田の新發意源秀、おなじく新兵衛尉紀六左衛門恩地の左近、馬物具を輝かし、心の花も咲きかくる、櫻井の宿に著きけるが、まだ雲こりて五月雨の、やゝ夕立と降る雨は、瀧の落つるが如くにて、人馬の足を立てかね、生田の森に打入れて、暫く晴間を待ち居たり。雨に波よるこやの池、堤を急ぐ蓑笠は、早苗の賤かと思すれば、下部二人に長持かかせ、四十餘りの女房の、雨にあらそふ涙の雫、萎れまろびて走りくる。下部ども長持どつかとおろし、「エ、どう因果の夕立や、目も鼻もあかれぬ。いざ来い、あの森で少し晴らして行くまいか。コレそこな女子殿、長持預けた番めされ。」と、二人は森へぞ走りける。女とかうにかきくれて、歎き沈みて立ちけるが、思ひよりある顔附にて、長持の棒取つて捨て、石を拾ひてちやうくく、敲く手先に力なき、女力も念力の、天や見透す鍵の穴、錠前はなれ落ちければ、「なうありがたや、サアお出で。」と、蓋を取る手にすがりつき、二十許りの上臈の、涙ひまなく息籠り、顔にばらつく亂髪、柳櫻をこきまぜて、水にうかめし如くなり。「いざ下部どもの來ぬさきに。」と、抱き出せば、「ア、嬉しや、この池こそみづからに、菩提を進むる功德池よ。そなたも數珠を持つてか。」「お肌に御本尊かけてか。」「オ、ほぞんかけたる時鳥、あやめの沼は水淺し。」と、深みを尋ねさまよひたる。正成馬上より遙かに見付け、「あれく、身を投ぐる女あり。敵か味方か何れにもせよ、源秀かけつけ助けられよ。」と有りけれ

より私の怒りに忠を忘れぬ良雄、彌面をやはらけ、仰せにては候へども、その大森彦七が内通にて、味方勝に極まらば、猶以て正成向ふまでも候はず。さりながら詩歌管絃は殿上の御遊び、弓馬合戦の道は武門の諫言に任せられ、是非に都を明け渡し、敵に一旦勝を與へ、重ねて畢竟の勝を御覽あるこそ、謀を帷幄の内に廻らし、勝つ事を千里の外に顯はす籌策にて候。と子房が祕藏孔明が骨髓、残る方なく奏せらる。宰相大きに色を損じ、「御邊がいふまでもなく、弓馬合戦の道なればこそ、賤しき汝等禁庭へ召さる、條、有り難しとは存せずや。先年御邊千早赤坂の城郭にて、六波羅の大勢を傾け、相模入道亡びしも、全く武畧の手柄にあらず、君の聖運天に叶ひ、宗廟社稷の大小の神祇、王法を守護し給ふ故、殊に今度は目に見えたる勝軍、大森が御蔭にて、手柄すべきは此の度。早うつ立て。」と有りければ、軍法不覺の卿相雲客口々に、「敵の内通有るからは、天の與へこの時、是非是非楠馳せ向ひ、朝敵尊氏一戦に攻め亡ほし、宸襟を休め奉れ。」と、衆議一決の敕諭は、轉てかりける御運なり。正成も、「この上はさのみ申すに及ばず。」と御前を立ちけるが、これぞ最後の合戦と、思ひ定めし忠臣の、屍は刃にきゆれども、義は碎かれぬ楠と、朽ちせぬ名をこそ三重留めけれ。元來正成智仁勇を兼備し、死を善道に守る良將、今度の合戦味方必定負軍、討死の時極まれりと、本國へも立歸らず、直に五月十六日、有りあふ手勢五百餘騎、嫡子帶刀正行十一歳、父が馬に

きに驚かせ給ひ、楠判官正成を臆て御前に召されける。「掇義貞が注進事急なり、罷り向つて合戦を致すべし。」との敕説、楠 畏まつて奏せしは、「數年の軍に疲れたる御方の小勢、筑紫方は新手的勢機に乗つたるに驅け合はせ、常の如くの合戦は、御方打負け申さんこと決定。先づ新田殿をも召し還され、君は比叡山へ臨幸なり、正成も河内に退き、敵を都へ誘き入れ、河尻をさし塞ぎ、籠の鳥の如くにして、兵糧をとめ敵軍次第に疲れ落ちん所を、新田殿は山門より押寄せ、正成は搦手より攻め上り真中に包んで、一蒸しむす程ならば、朝敵一戦に亡びん事、正成が方寸の内に覺え候。軍は必ず一旦の勝負を見るなかれ、始終の勝こそ肝要にて候へ、たとへ官軍百度戦ひ百度負くるとも、正成一人生きて有ると聞召さば、聖運終に開かるべしと思召され候へ。」と、世に頼もしくぞ奏しける。

坊門の宰相清忠、御簾の前につと出で、「ヤア臆したるか楠。尊氏が多勢に聞きおぢして、一戦にも及ばず河内へ退き、君を比叡山へ臨幸なし奉れとは、命の惜しさに帝位を輕しめ申すよな。總じて新田義貞、勾當の内侍に思ひを残し、都に心引かる、故、軍手ぬるく敵にきほひ付きたるに、御邊も河内へ引かんとは、故郷妻子がゆかしいか。伊豫國の住人大森彦七盛長といふ武士、尊氏に組すると雖も、某に縁有るゆゑ、裏切して味方に力を加へんとの内通あれば、味方の勝利目前にて、御邊らが命に氣遣ひのない事はこの宰相が請合、早々發向有るべし。」と、嘲り顔して申さる。楠もと

吉野の都女楠

第一

往んじを尋ねて來れるをしる、大權聖者の未來記見つんべし。東魚來つて四海を呑み、西鳥來つて東魚をくらひ、海内既に一に歸し、二度九五の御位、後醍醐の帝と重祚ある。逆臣相模入道が一族亡びて後、足利治部大輔尊氏聊か朝家を怨み奉り、東國勢を引率し、矢矧鷺坂竹の下、數ヶ度の軍に勝ち誇り、己と征夷將軍におしなつて、帝都ま近く攻め入りしを、新田左中將義貞、楠判官正成、陳平張良が肺肝より出でたる如き名大將、命を風前の塵にかけ、義を金鐵より堅くして、驅け破り驅け惱まし、千變萬化の合戦に、さしもの尊氏つひに打負け、筑紫をさして落潮の、八重九重や都の内、萬歳をこそ唱へけれ。時に建武三年五月十五日、新田義貞早馬を立てて奏聞ある。「抑朝敵尊氏大友少貳を従へ、九州の軍兵五十萬騎、兵船數千艘にて攻め登り、尊氏が弟直義、山陰山陽の大勢陸路をうつて雲霞の如く、播州の赤松敵に組し、苜繩の城に立て籠り、官軍を遮り候を、義貞備後備中に支へ、挑み戦ひ候間に、敵船はや須磨明石をばせ越え候。」と、追々注進頻りなり。天皇大

なく捕人の役人、夫婦を搦め引き來る。孫右衛門は氣を失ひ、息も絶ゆる許りなる、風情を見れば梅川が、夫も我も繩目の科、眼も眩み泣き沈む。忠兵衛大聲揚げ、一身に罪あれば覺悟の上、殺さるゝも是非もなし、御廻向頼み奉る。親の歎きが目にかゝり、未來の障礙これ一つ。面を包んで下され、お情なり。と泣きければ、腰の手拭引絞り、めんない千鳥百千鳥、泣くは梅川河千鳥、水の流れと身の行方、戀に沈みし浮名のみ、難波に遺し留まりし。

かゝる、おつつけ今に戻られう。」と、いふところへ忠三郎、息を切つて駆け來り、「これはく忠兵衛様、親父様の話で段々聞いて來た。此方の事でこの在所は、大坂からいぬが入り、代官殿から詮議ある、劔の中へ晝日中、運の盡きたお人ぢや。此方の振を見附けたやら、俄に在所家竝の片端から家探し、親父様を今探す。これから私が家の番。親父様はいとしや、『早うぬかしてくれよ。』とて、狂亂になつてぢや。鰐の口とは只今、サアく裏道から御所街道、山へかゝつて退かつしやれ。」と、いへば夫婦は狼狽ふる。女房は譯知らず、「私も一所に退きましょか。」「阿房らしい。」と引退けて、夫婦に古蓑古笠や、雨のあしべも亂るゝ心、死しても忘れぬこの情、深く忍びて出でにけり。忠三郎、「先づうれし。」と、息を吐いだる處に、莊屋年寄先に立ち、代官所の捕手の衆、忠三郎が門口背戸口二手になり、どやくくと込み入つて、筵をまくり簀子を破り、唐櫃、米櫃、灰俵、打返してぞ探しける。土間かけて二十疊にも足らぬ小家、何處に隠れん様もなし。「この家は別條なし、野道を探せ。」と言ひ捨て、茶園畑の間々を、かり立ててこそ三重通りけれ。親孫右衛門跣足にて、「如何ぢやく忠三郎、善か悪か聞きたい。」「ア、好いく氣遣ひない。夫婦ながら、何事無う甘々と落し濟ました。」「ハア有り難い忝い、如來のお蔭。直に又道場へ參りて、御開山へ御禮申さう。なう嬉しや有り難や。」と、二人打連れ行くとところに、龜屋忠兵衛、槌屋の梅川、たつた今捕られた。」と、北在所に人だから、程

泣き寄り、親子なり、殊に母もない倅、隠居の田地を賣つても、首繩は付けさせまい。今では世間廣うなり、養子の母に難儀をかけ、人に損かけ苦勞をかけ、孫右衛門が子で候とて、引込んで置かれうか、一夜の宿も貸されうか。みな彼奴が心から、その身も狭い苦を仕居る。嫁御にまで憂き目を見せ、廣い世界を逃げ隠れ、知音近付親子にも、隠れる様に身を持ちなし、碌な死もせぬ様に、この親は生みつけぬ。憎い奴とは思へども、可愛う御座る。」と許りにて、「わつ。」と消え入り泣き沈む。分けたる血筋ぞ哀れなる。涙の隙に巾著より、銀子一枚取り出し、「これは難波の御坊の御普譜の奉加銀、今此處に有合はせた。嫁御と存じて遣るでもなし、只今のお禮の爲。この邊にぶらついては、能う似たとて捕へるぞ、良人は猶以て。これを路錢に御所街道へかゝつて、一足も早う退かつしやれ。此方の良人にも詞こそは交さずとも、ちよつと顔でも見たいが。いや／＼それでは世間が立たぬ、どうぞ無事な吉左右を。」と、涙ながらに二足三足、行きては還り、「何と逢うても大事あるまいかい。」「何の人が知りませう、逢うて遣つて下さんせ。」「ア、大坂の義理は缺かれまい。どうぞして逆様な廻向させなと、懇切に頼みまする。」と、咽せ返り振返り／＼、泣く／＼別れ行く後に、夫婦は、「わつ。」と伏し轉び、人目も忘れ泣き居たる、親子の中こそはかなけれ。忠三郎が女房、雨に濡れて立歸り、「待遠に御座りませう。此方の人は莊屋殿から、直に道場に參られ、それゆる逢ひも致さず。もう雨も霽れ

親父様の、形身にさせたう御座んす。」と、塵紙袖に押包む、涙ぞ色に出でにける。詞の外れに孫右衛門、熟と推量し、さすが恩愛捨て難く、老いの涙にくれけるが、ム、そなたの舅にこの爺が、似たというての孝行か、嬉しい中に腹が立つ。年たけた倅を仔細あつて久離切り、大坂へ養子に遣はせしに、根性に魔がさいて、大分人の金をあやまり、擧句に土地を走つて、この在所まで詮議の最中、誰故なれば嫁御故。近頃愚癡な事なれども、世の譬へにいふ通り、盗みする子は憎からで、繩かくる人が恨めしいとはこの事よ。久離切つた親子なれば、善いにつけ、悪いにつけ、構はぬ事とはいひながら、大坂へ養子に往て、利發で器用で身を持つて、身代も仕上げた、あの様な子を勘當した、孫右衛門はたはけ者、阿房者といはれても、その嬉しさはどうあらう。今にも探し出され、繩か、つて引かると、時、好い時に勘當して、孫右衛門は出来した、仕合ぢやと褒められても、その悲しさはどうあらう。今から思ひ過されて、一日も先に往生させて下されと、拜み願ふは今參る如来様御開山、佛に諷はつかぬぞ。」と、土にどうどひれふして、聲をはかりに泣きければ、梅川も聲を上げ、忠兵衛は障子より、手を出し伏し拜み、身を揉み歎き沈みしは、道理とこそ聞えけれ。猶も涙をおし拭ひ、「なう血の筋は悲しい。中の好い他人より、久離切つた親子の親しみは世のならひ。盗み騙りをせうよりも、何故前方に内證で、かうくした傾城に、かうした譯の金があると、密かに便宜もするならば、親は

ぎて後、未來でお目にかゝりましょ。」と、口の中にて獨言、諸共に手を合はせ、咽び入りてぞ歎きける。孫右衛門は老足の、休みく門を過ぎ、野口の溝の水氷、すべるを留る高足駄、鼻緒は斷れて横様に、泥田へがばとこけ込んだり。「ハア悲しや。」と、忠兵衛もがけども、騒けども、身をかへりみて出もやらず。梅川あわて走り出で、抱き起して裾絞り、「何處も痛みはしませぬか、お年寄のおいとしや。お足も濯ぎ、鼻緒もすけて上げませう、少しも御遠慮なさるゝな。」と、腰膝撫でて勞れば、孫右衛門起き上り、「何方やら有り難い、お蔭で怪我也致さぬ。若い上臈のお優しい、年寄と思召し、嫁子もならぬ介抱。寺道場へ參つても、これ此處の一心が、邪見では參らぬも同然、此方がほんの御生願ひ、もう手を洗うて下され。幸ひ此處に藁もある、鼻緒は私がすけましょ。」と懐中の塵紙を取り出せば、梅川は、「好い紙が御座んする、紙捻撚つて上げませう。」と、延紙ひき裂きし手元、孫右衛門不思議さうに、「先づ此方は此處邊に見知らぬお人ぢやが、何方なればこの様に、懇切にして下さる。」と、顔をつれくながむれば、梅川いとゞむなづはらしく、「ア、我等は旅の者。私が舅の親父様、丁度お前の年配で、恰好もその儘。外へする奉公とは、さらく以て思はれず。お年寄つた舅御の、臥し惱みの抱きかゝへ、給仕は嫁の役、御用に立てば私も、なんほうか嬉しいもの。良人は猶親御の事、飛び立つ様にもある筈。この紙とこの紙と換へて私が申し受け、良人の肌に着けさせ、父御に似たる

嫁姑の未來の對面させたい。」と、目もうろ／＼となりければ、「それは嬉しう御座んせう。さりながら、私が母は京の六條、定めしこの閒詮議に人が往きつらん。日頃が眩暈持なれば、何うならんした事やら。ま一度京の母様にも、一目逢うて死に度いぞ。」「オ、道理とも。我も其方のお袋に、壻ぢやというて逢ひ度い。」と、人目なければ抱き合ひ、涙の雨の横時雨、袖に餘りて窗を打つ。「ハア、降つて來たさうな。」と、西受の竹櫺子、反古障子を細目に明けて、見るや野風の畠道、後しぶきに降る雨は、傾けて急ぐ阿彌陀笠、道場參り打連れしは、あれ皆在所の知つた衆、先なは樽井端の助三郎、これも在所の口利、あのお婆は荷持瘤の傳が婆、ア、いかい茶飲ぢやがの。其所へ見える剃下は、昔は大貧乏、年貢に詰つて娘を京の島原へ賣り、大盡に請出され、奥様にそなはり、壻の庇で、田も五町藏も二ヶ所の富限ぢや。同じ傾城請ける身が、我はそなたのお袋に、憂き目をかける口惜しい。あの爺は弦掛の藤次兵衛、八十八で一升の飯残さぬ、今年は丁度九十五。其處へ來た坊主は鍼醫の道庵、彼奴が鍼で母者人を立て殺した。思へば母の敵ぢや。」と、憂き目につけての怨み言。「あれ／＼、あれへ見えるが親父様。」「あの緞の肩衣が孫右衛門様か、ほんに目元が似たわいの。」「それほど能う似た親と子の、詞をも替されぬ、これも親の御罰ぞや。お年も寄る、足元も弱つた。今生のお暇。」と、手を合はすれば、梅川は見始めの見納め、「私は嫁で御座んする。夫婦は今をも知らぬ命、百年の御壽命過

今は留守で御座る。」といふ。「ム、忠三殿におか様はなかつたが、此方は誰でばし御座るぞ。」「ア、私も三年あとにこれの内へ嫁入して、前方の知る人は、誰が何うも知りませぬ。ヤア眞に皆様は、もし大坂では御座らぬか。これの親方孫右衛門様の繼子忠兵衛殿と申すが、大坂へ養子に往て、傾城買て、他人の金を盗み、その傾城連れて走られたというて、代官殿より御詮議。孫右衛門様は疾うに親子の久離を切り、構はぬとはいひながら、眞實の親子なれば、年寄つての氣苦勞。これのは馴染の事なれば、もしこの邊狼狽へて、見付けられてはいとしい事と、内外へ氣をつけらるゝ。莊屋殿から呼びに来る。寄合の、印判の、節季師走にこの在所は、傾城事で煮え返る。なううたてのお傾城殿や。」と、遠慮もなくぞ語りける。忠兵衛はつと思ひ、「如何にもく、大坂でもその取沙汰。我等は夫婦連で年籠りに參宮の志、懐かしさに寄りました。ちよつと呼うで来て下され、立ちながら逢うて歸り度い、大坂者といはずに頼みます。」といひければ、「扱はいかうお急ぎか、往て呼うで來ませう。さりながら、鎌田村のお道場へ、京のお寺のお下り、毎日のお讚歎、先から直にお道場へ參られたも、いさ汁の下さし燻べて下され。」と、襦がけして走り行く。後の門口梅川が、はたと鎖して鑿かけ、「これはほんの敵のなか、大事ないか。」といひければ、「忠三郎といふ者は、百姓に稀な男氣を持つたもの、頼んで一夜逗留し、死ぬるともこの處、故郷の土に身を成して、生の母の墓所、一所に埋まれ、

らさつと鳴つたは、我を追手の尋ねるよと、覆ひ重なり影隠し、振放見れば人にはあらで、妻戀鳥の羽音に怖ぢる身となるは、如何なる罪の報いぞと、口説き歎きて行く姿泣くか笑ふか、富田林の羣鴉、せめて一夜の心なく、咎むる聲の高閑山、あの葛城の神ならで、晝の通路つゝ、ましく、身を忍ぶ道戀の道、我から狭き浮世の道、竹の内帖補濡れて、岩屋越とて石道や、野越え山くれ里々越えて、行くは戀ゆる三重すめる世の掟正しく、畿内近國に追人かゝり、中にも大和は牛國とて、十七軒の飛脚問屋、或は巡禮古著買、節季候にばけて家々を、覗きの機關、飴賣と、子供に飴を甜らせて、口をむしるや良の鳥、網代の魚の如くにて、逃れ方なき命なり。無慙やな忠兵衛、我さへ浮世忍ぶ身に、梅川が風俗の、人の目立つを包みかね、借駕籠に日を送り、奈良の旅籠屋三輪の茶屋、五日三日夜を明し、二十日餘りに四十兩、遣ひ果して二分残る。かねも霞むや初瀬山、餘所に見捨てて親里の、新口村に著きけるが、「これお梅、此處は我が生まれ在所、二十歳まで育つて覚えしが、師走の果てにこの如く、諸勸進諸商人、春とても無い事。あれ彼處にも立つて居る、野外れにも二三三人。胸騒ぎもして来た。四五町往けば、眞の親孫右衛門の家なれども、不通といひ繼母なり。この藁葺は忠三郎とて下作あてた小百姓、腹の中から馴染み、頼もしい男。先づ此處へ」と打連れ、「忠三郎宿にか、久しうお目に懸らぬ。」とつゝと入れば、鼻と思しく、「誰で御座るぞ。これのは今朝から莊屋殿へ詰められ、

顔より此方様の、肌にこれを。」と風防ぐ、びらり帽子の紫や。色で逢ひしははや昔、今日はしんみの女夫合、頼まば願ひかのえ申、庚申堂よと伏し拜み、振り返り見る勝曼の、愛染様に愛敬を、祈る芝居の子供衆や、道頓堀のいろくや、馴れし郭のそれぞとは、紋で覚えし提灯の、中にはかなや榎屋内、この木瓜にうち添ひて、私が紋の松皮の、松の千歳を祈りしに、定めぬ契り提灯の、消ゆる命の夕には、この紋付けて我が中の、經帷子と觀念し、「冥途の道をこの様に、手を引かうぞや。」引かれう。」と、又取交し泣く涙、袖の氷と閉ぢ合へり。誰が關据ゑぬ道なれど、問ひく行けば涉ゆかず。今朝の姿をそのなりに、素足に雪駄しみづけば、空に雲の一曇り、霞交りに吹く木の葉、ひらり平野に行き懸り、「此處は知る人多ければ、此方へく。」と袖覆ひ、里の裏道畦道を、すぢりもぢりて藤井寺。「あれくあれを見や、何處の田舎も戀の世や。背門に菜を摘む十七八が、唄門に立つたは忍びの夫かえ。野風身の毒、此方這入らしやんせえ。」餘所の陸言妒ましく、それ覺えてか何時の事、かの初雪の朝込に、寢衣ながらに送られし、大門口の薄雪も、今降る雪もかはらねど、變り果てたる身の行方、我のゑ染めて可憐しや、元の白地を淺葱より、戀は譽田の八幡に、起請誓紙の筆の罰、其方を除けてと泣く涙、唄暫し人目の、ヤ許しはあれど、申しこれなうさりとては、私が身とても儘にはと、未は涙に果てしなく、延紙の三つ折絞るにも、裾に裏る、小笹原、霜に枯野の薄原、ばうくさらさ

華も人の金、果ては砂場を打過ぎて、後は野となれ大和路や、足に任せて 三重

下之卷

忠兵衛あひやひかご
梅川

攀帳紅圍に枕並べし圍のうち、馴れし唄襖のよすがらも、四つ門の跡夢もなし。さるにても我が夫の、秋より前に必ずと、あだし情の世を頼み、人を頼みのナ綱断れて、夜半の中戸も引替へて、人日の關にせかれ行く。昨日の儘の鬢付や、髪の鬚目のほつれたを、わけて進じよと櫛を取る、手さへ涙に凍えつき、冷えたる足を太股に、相合火燧相輿の、駕籠の息杖生きてまだ、續く命が不思議ぞと、二人が涙こぼれ口、明けぬ間は暫しとて、駕籠の簾をあけてさへ、膝組み替す駕籠の内、狭き局のありし夜の、逢瀬に似たは似たれども、炭の埋火何時しかに、朝の霜と置替へて、夜半の嵐に呼ばれては、應ふる野邊の禿松、過ぎしその夜が思はれて、いと涙の種ならん。「何くどく」と思ふぞや、これぞ一蓮託生」と、慰めつまた慰みに、比翼煙管の薄煙、霧も絶えく晴れ渡り、麥の葉生の風荒れて、朝出の賤や火を貰ふ、野守が見る目恥かしと、駕籠立てさせて暇を遣る。値の露の命さへ、惜しからぬ身は惜しからず。猶も惜しまぬ徒歩跣足、惜しむは名残許りぞや。終に著馴れぬ綿輪子、一私か

そなたの心の無念さを、晴らしたいと思ふより、ふつと金に手をかけて、もう引かれぬは男の役、かうなる因果と思つてたも。八右衛門が面相、直に母に叶す顔、十八軒の仲間から、詮議に来るは今の事。地獄の上の一足飛、飛んでたもや。」と許りにて、継り付いて泣きければ、梅川「はあ。」と慄ひ出し、聲も涙にわな／＼と、「それ見さんせ。常々いひしは此處のこと、何故に命が惜しいぞ、二人死ぬれば本望、今とても安い事、分別するて下さんせなう。」「ヤレ命生きようとおもつて、この大事がなるものか。生きらる、だけ添はる、だけ、高は死ぬると覺悟しや。」「ア、さうぢや生きらる、だけこの世で添はう。今にも人が来る爲、此處へ隠れて御座んせ。」と、屏風の陰に押し入れ、「ア、私が大事の守を、内の箆笥に置いて来た、これが欲しい。」といひければ、「ハテかかる悪事を仕出して、いかな守の力にも、この科が通れうか。兎角死身と合點して、我はそなたの廻向せん。そなたはこの忠兵衛が、廻向を頼む。」と屏風の上、顔を出せば、「ハア、悲しや忌々しい、ちやつとおいて下さんせ、嫌な物によう似た。」と、屏風にひしと抱き付き、咽せ返りてぞ歎きける。越後主従立歸り、「サア何處もかも埒明いた。お出での勝手近ければ、西口へ札が廻つた。」と、いへども夫婦はわな／＼と、「さらばさらば。」も慄ひ聲、「おさぶさうなが酒わいの。」「酒も咽を通りませぬ。」「日出度いと申さうか、お名残惜しいと申さうか、千日いうても盡きぬ事。」「その千日が迷惑。」と、ゆふつけ鳥に別れ行く、榮耀榮

林も玉も五兵衛も一兩宛ぢや来い〜。」と、金銀降らす邯鄲の、夢の間の榮耀なり。「サア今の間に埒明け、今宵の中に出る様に、頼む〜。」といひければ、主人俄に勇みをなし、「無い程は無いも金、あの段には有るものかは。氣を死なさう事でない、川様嬉しう思はんしよ。ヤ大事の金を持つて往く、林も玉も供しや。」と、引連れ走り出でにけり。八右衛門は濟まぬ顔、實とは思はねども、「只さへ貰ふこの小判、返す物をいはれぬ辭儀。五十兩慥かに請取つた、手形返す。」と投げ出し、「梅川殿好い男持つてお仕合、よね様達これに。」と、金懐中し出でければ、「私等もいざ歸りましよ、川様目出度う御座んす。」と、皆宿々へぞ歸りける。忠兵衛氣をせいて、「花車は何故遅いぞ、五兵衛往つてせつてくれ。」と、立ちに立つてせきけれども、「イヤ身請の衆は親方が濟んでから、宿老殿で判を消し、月行事から札取らねば、大門が出られませぬ。ま些と隙が入りませう。」「エ、其處邊を早うこりや頼む。」と、又一兩投げ出す。「おつとまかせ。」と足軽く、走る三里の灸よりも、小判のききぞこたへける。「サア〜この間に身拵へ、べたくした取姿。帯もきり、と仕直しや。」と、めつたに急けば、「何ぞいの、一代の外間、傍輩衆へも杯事。暇もわけようして、ゆるりと出して下さんせ。」と、何心なく勇む顔。男は、「わつ。」と泣き出し、「いとしや、何も知らずか、今の小判は堂島のお屋敷の急川金、この金を散らしては、身の大事は知れた事。随分忪へて見つれども、友女郎の真中で、可愛い男が恥辱を取り、

聲を上げて泣きけるが、「情なや忠兵衛様、何故その様に逆上らんす。そもや郭へ来る人の、假令持丸長者でも、金に詰るはある慣ひ、此處の恥は恥ならず。何を當に他人の金、封を切つて撒き散らし、詮議に逢うて牢櫃の、繩かゝるのといふ恥と、この恥と換へらるか。恥かくばかりか梅川は、何となくといふ事ぞ。とつくと心を落しつけ、八様に詫言し、金を束ねてその主へ、早う届けて下さんせ。私を人手に遣りともない、それはこの身も同じ事。身一つ捨てると思つたら、皆胸に籠めて居る。年とてもまあ二年、下宮島へも身を仕切り、大坂の濱に立つても、此方様一人は養うて、男に憂き目かけまいもの。氣を静めて下さんせ、あさましい氣にならんした。かうは誰が仕た、私が仕た、皆梅川が故なれば、忝いやらいとしいやら、心を推して下さんせ。」と、口説き立て、小判の上にはらはらと、涙は井出の山吹に、露置き添ふる如くなり。忠兵衛氣も有頂天、前後括らぬ間に合筈、敷金の事思ひ出し、「はてやかましい、この忠兵衛をそれ程たはけと思やるか。この金は氣遣ひない、八右衛門も知つて居る。養子に来る時、大和から敷金に持つて来て、餘所へ預け置いた金、身請の爲に取戻した。花車此處へ。」と呼び寄せ、「先へ手付に五十兩、今百十兩、合はせて百六十兩、これ川が身の代、これ又四十五兩、いづぞやしめた帳面、買ひ掛りの借錢、五兩は遣手、九月からの揚錢、萬事十五兩程と覺えたが、算川がやかましい、二十兩で帳消しや。この十兩は、此方へ御祝儀やら骨折分、

川に藁を焚き、彼方へ遣らうといふ事か、おいてくれ。氣遣ひすな、五十兩や百兩、友達に損懸ける忠兵衛ではござらぬ。ア、八右衛門様、八右衛門奴、サア金渡す手形戻せ。」と金取り出し、包を解かんとする處を、八右衛門押へて、「コリや待てやい忠兵衛、餘程の戯けを盡せ。その心を知つたる故、意見をしても聽くまじと、郭の衆を頼んで、此方から除けて貰うたらば、根性も取直し、人間にもならうかと、男づくの懇だけ。五十兩が惜しければ、母御の前でいふわいやい。てんがうな手形を書き、無筆の母御を宥めしが、これでも八右衛門が届かぬか。その金嵩も三百兩、手金の有らう様もなし、定めて何處ぞの仕切金、その金に疵を付け、八右衛門仕た様に鬘水入では濟むまいぞ。但し代りに首遣るか。逆上り詰めるその手間で、届ける處へ届けて仕舞へ。エ、性根の据らぬ氣違者。」と、割つつ碎いて叱れども、「いや／＼仁義立ておいてくれ。この金を餘所のは、この忠兵衛が三百兩持つまいものか。女郎衆の前といひ、身代を見立てられ、猶返さねば一分立たぬ。」と、包解いて、十、二十、三十、しじう詰らぬ五十兩、くる／＼と引包み、「これ龜屋忠兵衛が人に損をかけぬ證據、サア請取れ。」と投げ付ける。「男の面へ何とする。忝いと禮いうて、返し直せ。」と投げ戻す。「己に何の禮言はう。」と又投げ付けつ投げ返し、腕捲りしてぎしみ合ふ。梅川涙にくれながら梯子驅け下り、「なうすつきり私が聞きました。皆島八様のがお道理ぢや。これ手を合はせる、梅川に免して下さんせ。」と、

け、これも買はば十八文。如何に相場が安いとて、五十兩を二分五厘替、神武以來無い事。友達さへこれなれば、他人を騙るは御推量。この次は段々に巾著切から家尻切、果ては首切、如何にしても笑止な。あの如くに亂れては、主親の勘當も、釋迦達磨の意見でも、聖徳太子が直に教化なされても、いつかなく直らぬ。郭でこの沙汰ばつとして、寄せつけぬ様に頼みます。梅川殿へも吹き込んで、此方から挨拶切り、島屋の客にさらりつと、請けさせて仕舞ひ度い。皆あの流が心中か、女郎の衣裳を盗むか、碌な事は出来さず、片小鬘剃りこぼされ、大門口に曝され、友達の一捨捨てさする、人でなしとは彼が事。可愛くば寄せ付けて下さるな。」と、語るを聞けば梅川も、悲しいといとしいと、身の果敢なさ搔混せて、胸引裂ける忍び泣き、「あ、刃物がな鉄でも、舌を切つても死にたい。」と、煩悶え伏したる苦しみを、下には各推量して、「ひよんな心にならんした。肩の悪い梅川様、いとしばいは川様一人に留めた。」と、下女、料理人、うら若き禿も袖を絞りけり。忠兵衛元來悪いわし、押へかねてずんと出で、八右衛門が膝にむんずと居懸り、「これ丹波屋の八右衛門殿、常々の口程あつて、オ、男ぢや、見事ぢや。三人寄れば公界、忠兵衛が身代の棚下ししてくれる。忝い、コリヤこの水入も男同士、母の心を安める爲、請取つてくれるかと、謎をかけて渡したを、この忠兵衛が五十兩、損かけうかと氣遣ひさに、郭三界披露して、男の一分捨てさする。但し又島屋の客に賄賂取りて、梅

が長者でも、龜屋へ養子にこすからは、高の知れた百姓。かういふこの八右衛門も若い者の慣ひ、一年に五百目一貫目、揚屋の座敷も踏まねばならぬ。身にも應ぜぬ忠兵衛が、梅川にのほり詰め、鳥屋の客と張合ひ、五月より此の方大方は揚け詰、身請もこの頃極まり、百六十兩の内、五十兩手付渡したけな。それ故に方々の届け金が不埒になり、當る處が誑八百、いかう小尻が詰つて來た。今でも梅川が、サア出るに極まらば、借錢もあらうし、泣いても二百五十兩、天から降らうか、地から涌かうか、盗みせうより外はない。かの手付の五十兩、何處から出たと思召す。身が方へ來る江戸爲替、中で取つて遣うたを、それとも知らず請ひに行き、養子の母御がいとしほや。上つたは知つてなり、渡せくとせつかれて、忠兵衛が戻した小判、お目にかけてうか。」と一包取り出し、「コレかう見た處は五十兩、さらば正體纈はして、獄門の種御覽あれ。」と、包を切つて切解けば、焼物の鬘水入。主人も一座の女郎も、「はあ。」と許りに怖氣立ち、身を縮むれば二階には、顔を疊に摺り付けて、聲をかくして泣き居たり。短氣は損氣の忠兵衛、「伯城は公界者、五十兩の目腐銀取替へた借上、若い者に恥かかせ、川が聞いたら死にたかろ。懐の三百兩、五十兩引抜いて、面へ撲付け存分言ひ、我が身の一分川が面目雪いでやらう。ア、されどもこれは武士の金、殊に急用、爰が大事の堪忍。」と、手を懐へ幾度か、兔やせん角やしようけ鳥、鴉の嘴の齧齧ふ、心を知らぬぞ是非もなき。八右衛門水入取り上

とつ、と入り、柄差帚逆手に取り、二階の下から板敷を、ぐわたくと突き鳴らし、「女郎衆あんまりぢや、此處にも人が聞いて居る。如何なる男でそれほどに戀しいぞ。男がなうて寂しくば、お氣には入らずと、これにも一人貸してやろか。」と喚きける。梅川はそれとも知らず、「デモ逢ひたいが情ぢやもの、憎いなら来て叩かんせ。清様下なは誰さんぢや。」「イヤ大事御座んせぬ、中の島の八様。」と、聞くより梅川はつとして、「これく、あの様には逢ひともない。皆様下りて下さんせ、私が二階に居る事を、必ずく言ふまいぞ。」「其處らは粹ぢや。」とうちうなづき、皆々座敷に出でければ、「ヤア千代歳様、なるとせ様、歴々の御參會。梅川殿は宵の口、島屋を貰うて往なれたけな。忠兵衛も未だ見えそもない、花車此處へ寄らつしやれ。女郎衆も禿どもも、忠兵衛が事につき、耳うつて置く事がある、此處へく。」と密々すれば、「ハア、何事やら氣遣ひな。」と、いへども二階の梅川に、悪い噂も聞かせんかと、皆氣を配る折節に、忠兵衛は世を忍ぶ、心の氷三百兩、身も懐も冷ゆる夜に、越後屋に走り著き、内を覗けば八右衛門、横座をしめて我が評判、はつと驚き立聞きます。二階には梅川が、心を澄ます壁に耳、漏る、ぞ仇の始めなる。斯くと知らねば八右衛門、「斯ういへば忠兵衛を憎み猜む様なれど、るすくみぞ、あの男が身の成る果てが可愛い、尤も千兩二千兩、人の金をことづかり、暫しの宿を貸すけれども、手金とては家屋敷、家財かけて十五貫目、二十貫目に足らぬ身代。大和の親

請けられては、我が身一つは死んでものけう。天神太夫の身でもなし、卑しい金に氣が觸れた、見世
 女郎の淺ましさと、世間の稱へ傍輩のこともん殿を始めとして、格子女郎衆の手前もあり、忠様と本意
 を遂げ、とやかう人に諂はれし、面が脱ぎ度う御座んす。」と、泣きしみづきて語るにぞ、一座の女郎
 身の上に、思ひ合はせて尤もと、連れて涙を流せしが、「ア、甚う氣がめいる、わつさりと淨瑠璃にせ
 まいか。禿どもちよつと往て、竹本頼母様借つて來い。」いや先に鬢附油買ふとて聞きました、芝
 居から直に越後町の扇屋へ往かんしたけな。私は頼母様の弟子なれば、能う似た處を聞かんせ、サア
 三味線。」と夕霧の、昔を今にひきかけて、「傾城に誠なしと世の人の申せども、それは皆辭事、譯知ら
 ずの詞ぞや、誠も謙もひとつ。例へば命なけうち、如何に誠を盡しても、男の方より便りなく、遠
 ざかるその時は、心彌猛に思ひても、かうした身なれば儘ならず、自ら思はぬ花の根引に逢ひ、掛
 けし誓ひも誠となり、又初めより僞りの、勤めばかりに逢ふ人も、絶えず重ぬる色衣、終の寄邊とな
 る時は、初めの謙も皆誠。とかく唯戀路には、僞りもなく誠もなし、縁のあるのが誠ぞや。逢ふ事か
 なはぬ男をば、思ひくゝて思ひが積り、思ひざめにもさむるもの、辛やしよさいと恨むらん。恨まば
 恨め、いとしいといふこの病、勤めする身の持病か。」と、戀に浮世を投首の、酒もしらけて醒めにけ
 り。申の島の八右衛門、九軒の方より淨瑠璃聞きつけ、「ヤア皆聞き知つたよねの聲々、花車内にか。」

て、立寄るよねも氣がねせず。底意残さぬ戀の淵、身の憂きしほど梅川も、此處を思ひの定宿と、餘所の勤めもかきの本、島屋をちよつと島隠れ、「申し清さん、今日は島屋で、かの田舎のうてすにせびらかされて頭が痛い。忠様はまだ見えぬかえ、せめての由縁に、此方様の顔が見たさにかしに來た。」と、入るさの門の障子戸も、明るるあしたの形見かや。「さつても能う御座んした。あれ二階にも、女郎様達が、大勢遊びに御座んして、お客待つ間の酒事、拳をして御座んする。此方様もお氣晴らしに、一拳して酒一つ。傍輩様も御座んす。」と上る二階の隙間風、男交ぜずの火鉢酒、拳の手品の手もたゆく、ろませ、さい、とうらい、さんな、同じ事とよ豊川に、こゑの高瀬が差す腕には、はま、さんきう、ごう、りう、すむる。「それ、何と、地體一つは鳴渡瀬様。」「あれ梅川様の御座んした。なう好い處へ來て下んした。此方様拳の上手。宵から千代歳様に仕付けられて無念な、敵取つて下さんせ。銚子直しや。」といひければ、「ア、うたての酒や。拳をする氣もあらばこそ、この梅川が今の身を、少しは泣いて貰ひたや。田舎の客が身請の事、今日も今日とて島屋にて、理窟を詰めてねだれ事、腹が立つやら憎いやら、とはいひながらこれは先、忠兵衛様は後手といひ、宿の勢力一つにて、手付も渡し、約束の年限切れるも言ひ延ばし、今日までは繋がりしが、忠様も世帯持、養子の母御の手前といひ、屋敷方歴々の町方を引受けて、東路かけての大事の商賣。如何なる事が邪魔になり、田舎の客に

にお届け。方々の爲替金高八百兩、ぐわらりくと取り出す。忠兵衛いよく勢ひよく、「白銀は内庫へ、金子は戸棚へ。母者人、私は直にこの小判、お屋敷へ持参する。人の金を預れば、表も氣を付け早う締め、火の用心が一大事。戻りはちつと遅うても、駕籠で往けば氣遣ひない。夜食仕舞うてはや寢よ。」と、金懷中に羽織の紐、結ぶ霜夜の門の口、出馴れし足の癖になり、心は北へ行くと思ひながらも身は南、西横堀を浮々と、氣に染み付きしよねが事、米屋町まで歩み来て、「ヤアこれは堂島のお屋敷へ行く筈、狐が誑すか、南無三寶。」と引返せしが、「ム、我知らず此處まで来たは、栢川が用ありて氏神のお誘ひ、ちよつと寄つて顔見てから。」と、立歸つては、「いや大事。この金を持つては遣ひたからう。おいてくれうか、往つてのけうか。往きもせい。」と、一度は思案、二度は不思案、三度飛脚、戻れば合はせて六道の、冥土の飛脚と 三重

中之卷

明えいゝく鴉がなく、浮氣鴉が月夜も闇も、首尾を索めてあはうくとさ。青編笠の紅葉して、炭火ほのめく夕まで、おもひゝくの戀風や、戀と哀れは種ひとつ、梅かんばしく松高き、位はよしや引き締めて、哀れ深きは見世女郎、さらさ禿がしるべして、橋が架けたや佐渡屋町、越後は女主人と

たも、包は解くに及ぶまじ。いらうて見ても五十兩、如何してたもる。」と差出す。八右衛門手に取つて、「ハテ誰ぞと思ふ、丹波屋の八右衛門、請取るに仔細はない。これお袋、江戸爲替棧かに請取りました。不動参りに待ちまする。」と立つ處を妙閑實と思ひてや、「これ忠兵衛、仕切爲替の作法は、金と手形と引替へ。もし御持参なきならば、一筆ちよつと書かせましや。物は念ぢや。」といひければ、「オオそれく、母は無筆の一字も讀まれねども、證許りに一筆。」と、硯出して目配せすれば、「易い事易い事、忠兵衛文言これ見や。」と、筆に任せて書き散らす。「一つ金子五十兩請取り申さず候。右約束の通り、晩には郭で飲みかけ、我等は幫閒實正明白なり。何時なりとも騒ぎの節、屹度参上申すべく候。仍つて紋日の爲、鬘水入件の如し。」と、阿房のたらく書き散らし、「さらばお暇申さう。」と、表へ出づれば妙閑は、「書いた物こそ物言へ。」と、又瞞されし正直の、親の心や佛の顔も、三度飛脚の江戸の左右、待つ夜もやうく更けにけり。表に馬の鈴の音、「こりやくく駄荷が著いたぞ、中戸々々。」と聲高に、手々に葛籠擔け込む。忠兵衛親子機嫌能く、「サア拍子が直つた。來年も仕合馬、馬子衆に酒よ煙草よ。」と硯控へつ帳付けて、家内どんどと賑へば、手代の伊兵衛けうとけに、「なう堂島のお屋敷から、金三百兩九日に來る筈、前狀が上つた、何とて遅いと、お侍の甚内殿が睨め付けて歸られた。何とく。」といひければ、宰領がうちがひより、「その三百兩合點。これ急々の御川、今夜中

に額を付け、「忝い」。父二人、母三人、親は五人持つたれども、その恩よりは八右衛門、貴殿の御恩忘れぬ。」と、とかうは涙ばかりなり。「さう思へば満足。サア人も見る、その内。」と立別れんとせし處に、内より母の聲として、「ヤア八右衛門様か、忠兵衛これへ通しましや。」と、聲かけられて爲方なく、もぢく連立ち入りにけり。母は律義一遍に、「先程はお使、又御自身のお出で、御尤も、御尤も。これ彼方の金の届いたは十日も以前、何として延引ぞ。胸にとつくと手をおいて、能う思案して見や。遅う届けば飛脚は入らぬ、何が其方の商賣ぞ。サア今渡して上げましや。」と、いへども渡す金はなし。八右衛門も底意は聞く、「これお袋、恥かしながら八右衛門が、五十兩や七十兩、急に入る事もなし。これより直に長堀まで参れば、明日でも。」と立たんとすれば、「否々大事のお金、預れば氣遣ひで夜も寝られず。なう忠兵衛、きりく渡しや。」と急り立てられ、「あつ。」といふより納戸に入り、うろくしても金はなし。入れもせぬ戸柵の錠、明ける顔してびんといふ、鍵の手前も恥かしく、胸に願立て神降し、狂氣の如く氣を揉みしが、「ヤレ有り難や、この櫛箱に焼物の鬘水入、これ氏神。」と三度戴き、紙おし廣げくるくと、駿河包に手ばしこく、金五十兩墨黒に、似せも似せたり五十杯、母には一杯参らせし、その悪智慧ぞ勿體なき。「これく八右衛門殿、今渡さいでも濟む金ながら、母の心を安めるため、男を立てる其方と見て、爲方なうて渡す金。さつぱりと請取つて、母の心安めて

合かける。この方は母、手代の目を忍んで、僅か二百目、三百目のへづり金、負ひ倒されて生きた心もせぬ處に、請出す談合極まつて、手を打たぬばかりといふ。川が歎き我等が一分、既に心中する筈で、互の咽へ脇差の、ひいやりとまでしたれども、死なぬ時節か、いろくの邪魔ついて、その夜は泣いて引別れ、明くれば當月十二日、其方へ渡る江戸金がふらりと上るを、何がなしに懐に押込んで、新町まで一散に、如何飛んだやら覚えばこそ。段々宿を頼んで、田舎客の談合破らせ、此方へ根引の相談しめ、かの五十兩手付に渡し、まんまと川を取留めしも、八右衛門といふ男を友達に持ちし故と、心の内では朝晩に、北に向ひて拜むぞや。さりながら、如何に懇なればとて、前に斷り立て置いて、遣へば借るも同然、後では如何と思ふ内、その方からは催促、諺に諺が重なつて、初手の眞實も虚言となれば、今何を言うても實には思はれじ。されども遅うて四五日中、外の金も上る筈、如何様とも仕送つて、一錢一じ損かけまじ。この忠兵衛を、人と思へば腹も立つ。犬の命を助けたと、思つて料簡頼み入る。これを思へば世の中に、御仕置者の絶えぬも道理。この上は忠兵衛も、盗みせうより外はなし。男の口から斯様の事、言はれうものか推量あれ。咽より劍を吐くとても、これほどにはあるまじ。」と、しほり泣にぞ泣き居たる。鬼とも組まん八右衛門ほろりと涙ぐみ、「言ひ難い事能う言うた。丹波屋の八右衛門男ぢや、料簡して待つてやる。首尾能うせよ。」といひければ、忠兵衛上

處に、「北の町からいかつげに來るは誰ぢや。ヤア中の島の八右衛門、彼奴に逢うてはむづかし。」と、東の方へ出違へば、「これ忠兵衛、外すまい〜。」と聲懸けられ、「ヤ八右衛門、この中は久しい。昨日も今日も一昨日も、人遣ろ〜と思つて、なにやかや延引した。めつきりと寒いが、親父の疝氣は。婆様の癖は。ア、いかう酒臭い、過しやるなく。明日は早々人遣らう、ヤれそが言傳したぞや。近日一座致したい。」と、たくしかくれば、八右衛門、「おけやい。口三味線に乗せかけても、乗る様な男でない。其方が商賣は三度でないか、身が方へ上つた、江戸爲替の五十兩は、何として届けぬ、五日三日は料簡もあるぞかし。心易いは格別、高駄賃かくからは、大事の家職、十日に餘れど埒明かず。今日も使を遣つたれば、手代奴が嵩高な返事した。よもや側へはさうあるまい、八右衛門を黜るか、北濱、鞆中の島、天満の市の側まで、親父とも言はる、八右衛門、なぶつて好くばなぶられうが、金は今日請取る、但し仲間へこたへうか。先づお袋に逢はう。」と、内へ入るを引留め、「さりとてはやまつた。これ手を合はず、たつた一言聞いてたも、拜む〜。」と嘯けば、「又口先で濟まさうや。梅川を瞞したと、男の意氣は違うた。言ふ事あらばサア聞かう。」と、苦々しくきめつけられ、「これその聲を母が聞けば、死んでも一分立たぬ事。一生の御恩ぞ、さりとては面目ない。」と、はら〜と泣きけるが、「何を隠さう、この金は十四日以前に上りしが、知つての通り梅川が川舎客、金づくめにて張

して入りければ、丁稚小者も笑止がり、「早う歸つて下されかし。」と、待つ日も西の戻り足、店鎖頃になりにけり。駕籠の鳥なる梅川に、焦れて通ふ郭雀、忠兵衛はとほくと、外の工面内の首尾、心は蜘蛛かくなはや、十文色も出て来るは、南無三寶日が暮れると、足を空に立歸り、門口には著きけれども、留守の内に方々の催促づかひ、妙閑の耳に入つて、如何様の首尾になつたも氣遣はし。誰ぞ出よかし、内證をとくと聞きて入りたしと、我が家ながら敷居高く、内を覗けば飯焚の、萬めが酒屋へ行く體なり。彼奴は木で鼻もぎどう者、只は言ふまじ。濡れかけて、瞞して問はんと、思案する間によつと出る。樽持つた手をしかとしむれば、「アレ旦那様の。」と聲立てる。「ア、かましい、こりや粹奴、おれが首丈なづんで居る。思ひ内であれば、色外にあらはる、目付をそちも見て取つたか。可愛らしい顔付で、氣の毒がらすは如何ぢやいやい、いつそ殺せ。」と抱き付けば、「ム、謹つかんせ。毎日々々新町通ひ、延の鼻紙二折三折、結構な鼻をかまんすもの、何の私等に手洩もかみたうあるまい。あの謹つきが。」と振切るを、また抱き付いて、「そちに謹ついて何の徳、實ぢやく。」といひければ、「それが定なら、晩に寢處へ御座んすか。」「オ、成程々々忝い、それに就いて今ちよつと問ふ事あり。」といひけれども、「それも寢處でしつほりと聞きませう、必ず瞞しにさんすなえ。そんなら私はお湯沸いて、腰湯して待ちます。」と、言ひ捨て振り切り走りけり。忠兵衛はうそ腹の、立煩ひて居る

坂を廣う狭うする龜屋、そこ一軒ではあるまいし、遅い事も無うては。今でも旦那歸られたらば、此方から返事せう。五十兩に足らぬ金、あた姦しう言ふまい。」と、かさから出れば氣を吞まれ、使は眞面目に歸りけり。母妙閑は火燵の側、離るゝ事もななどを出で、「ヤア今のは何ぞ。丹波屋の金の届いたは、たしか十日も以前の事、何故忠兵衛は渡さぬの。今朝から二軒三軒の、金の催促聞いて居る。親父の代からこの家に、金一匁の催促得ず、終に仲間へ難儀をかけず、十八軒の飛脚屋の、龜鑑といはれたこの龜屋。皆は心もつかぬか、忠兵衛がこの頃の素振が、如何も呑み込まぬ。昨今の者は知るまいが、地體これの實子でなし。もとは大和新口村勝木孫右衛門といふ大百姓の一人子、母御前にお死にやつて、繼母掛りのわざくれに、悪性狂ひも出来るごと、父御前の思案で、この世取に貰ひしが、世帯廻商賣事、何に愚かはなけれども、この頃はそはくと、何も手につかぬと見た。意見のしたい事あれど、養子の母も繼母も同然と思はうか。せはく言ふより言はぬ身を恥ぢ入らせうと、思うて目をねぶつても、聞き處見所は見て居る。何時の間にやら大氣になり、延の鼻紙二枚三枚、手に當り次第、重ねながら鼻かみやる。過ぎ逝かれし親父の話に「鼻紙びんびと遣ふ者は、曲者ぢや。」といはれたが、忠兵衛が内を出で様に、延紙三折宛入れて出て、何程鼻をかむやら、戻りには一枚も残らぬ。身が達者なの、若いのとて、あの様に鼻かんで、何處ぞで病も出ませう。」と、よまひごと

に、金子三百兩差上せ申すべく候。九日十日兩日の中、その地龜屋忠兵衛方より、右三百兩請取り、内々申し置き候事ども、埒明け申さるべく候。乃ち飛脚の受取證文、この度上せ候間、金子請取り次第、この證文忠兵衛に渡し申さるべく候。これこの通り仰せ下された。今日まで届かぬ故、大事の御用の手筈が違ふ、何故斯様に不埒な。」と、鼻をしかめていひければ、「ハ、御尤も。さりながらこの中の雨續き、川々に水が出ますれば、道中に目がこみ、金の届かぬのみならず、手前も大分の損銀。もし盜賊が切り取るか、途からふつと出來心、萬々貫目取られても、十八軒の飛脚宿からわきまへ、芥子程も御損かけませぬ、お氣遣ひあられな。」と言はせもはてす、「これさ。いふまでもない、御損かけては忠兵衛が首が飛ぶ。日限延びては御用の間が明くにより、それゆゑの穿鑿。迎ひの飛脚を遣はして、早速に持參せい。」と、徒士若黨も刀の威光、銀拵へも胡散なる。なまりちらして歸りしが、また、「頼みませう。中、島の島丹波屋八右衛門から來ました。江戸小舟町米問屋の爲替銀、添状は届いたが、金は何故届きませぬ。この中文を進じて、返事も御座らず、使を遣れば、酢の蒟蒻のと、何時届けさつしやるぞ。この者に渡して人をつけて下され、手形戻すと申さる、サア金子請取らう。」と、立ちはだかつて喚きける。主思ひの手代の伊兵衛、騒かぬ體にて、「これお使、八右衛門様はその様に、理窟臭い口上はあるまい。五千兩七千兩、人の金を預つて、百三十里を家にし、江戸大

忠兵衛
梅川 冥土の飛脚

上之卷

湊標浪速に咲くやこの花の、里は三筋に町の名も、佐渡と越後の間の手を、通ふ千鳥の淡路町、龜屋の世繼忠兵衛、今年二十歳の上はまだ、四年以前に大和より、敷金持つて養子分、後家妙閑の介抱ゆる、商賣巧者駄荷つもり、江戸へも上下三度笠。茶の湯俳諧棊雙六、延紙に書く手のかど取れて、酒も三つ四つ五つ所、紋羽二重も出ず入らず、無地の丸鐺象眼の、國細工には稀男。色の譯知り里知りて、暮れるを待たず飛ぶ足の、飛脚宿の忙がしさ、荷を造るやら解くやら、手代は帳面算盤を、おく口ともにとやくと、千萬兩の遺繰も、筑紫吾妻の取遣も、居ながら金の自由さは、一分小判や白銀に、翼のあるが如くなり。町廻の狀取立て歸つて、それくと、留帳つくる處へ、「誰を頼まう、忠兵衛に居やるか。」と、案内するは出入の屋敷の侍。手代ども慇懃に、「ヤアこれは甚内様。忠兵衛は留守なれば、御下し物の御用ならば、私に仰せ聞けられませ。お茶持ておぢや。」とあひしらふ。「いやいや下りの用はなし。江戸若旦那より御狀が來た、これお聞きやれ。」と押披き、「來月二日出の三度

遺言召され。サアく暇を遣つた、郭を連れてお出でなされ。」と、切れ離れたるいきかたは、さすが所に住めばなり。今を限りの夕霧莞爾と笑ひ。「ア、何方もく有り難い御志、お禮申して下されませ。これ源之介、この金は親方殿より下された、そなたに母が譲りぢや、由々しい町人になつて、父様の名を擧げてたも。わがみの出世を草葉の陰より見るならば、萬僧供養にも勝りて母は佛になるぞや。さりながら伊左衛門様、源之介に妙順様を並べて、三尊の來迎と拜みたう御座んす。」「ヤ妙順様呼びに走れ。」と立ち騒ぐ。「いや呼びにやるまでもなし、氣遣ひがつてアレ門口に。」と手代伴ひ入りければ、「なう花嫁御、珍らしやく、嬉しい對面。實の佛は西方のお迎ひ、此の妙順は此方の家へ迎へ取り、金づくめにして養生し、この姑が精力で本服させて見せうぞ。」と、家内が勇むきほひに連れて、諸病は氣より本服の、顔もいきくにこくと、立つて躍るや扇屋夕霧、憂ひ却つて悦びを語り傳へて三十五年、又五十年又百年、千歳の秋の夕霧を、なほ萬代の春の花、見る人袖をぞつらねける。

遊女の事。この水は、極樂の八功德池の水と思ひ、雨甘露法雨愍衆生故と聞く時は、これを飲んで心身を露し、九品の淨利に往生し、半蓮を分けて待つて居や。これ其のしるし。」と、同じく髪を押切つて、親子夫婦の手向の水、哀れにも又頼もしし。かかる處に吉田屋の喜左衛門、六尺に金箱持たせ、「これは平岡左近様の奥方お雪さまの御使。『夕霧を請出す所、その管違ひ是非もなし。されども代金八百兩、その爲の金子なれば、外に遣はん様なし。御病氣以ての外、由、この金にて請け出し、一時なりとも郭の外にて、往生させませ。』とのお使なり。」といふ處へ下袴の若い者、金箱數多かたけさせ、「これ／＼扇屋殿、我等は藤屋伊左衛門様の御老母、藤屋妙順様よりのお使。伊左衛門様は父御の御勘當、今はこの世に亡きお人なれば、お袋様の我儘に勘當御免はなりがたし。夕霧様には御一子である事、嫁御孫御に勘當はなし。藤屋妙順が嫁を郭の内にて殺されず。一時なりとも郭を出し、外にて往生させましたいとのお願、金子二千兩持參致す。サア／＼片時も郭を出して下され。」と、きほひ勇めば扇屋了空、「御尤もなれども金子を取つて隙を遣るとは、ゆく末の年月無事で勤める女郎の事今死ぬる夕霧に、大分の金銀取つて隙をやるは、この扇屋は盗人と申す者。殊に全盛して、親方に大分儲けてくれられたこの太夫、命さへあらうならば、この扇屋が身代半分は入れます。この金子夕霧をなたに遣る。臨終に金やるとは異な事申す様なれど、この金では萬部の經を讀まる、跡の追善

る事もなく、何をか後世の土産とも、いさしら露の仇し野や、相の山野邊より彼方の友とては、櫛一枝一筆、これが冥土の友となる。知邊となれやこの詞、形身ともなれ廻向となれ。迷ふな我も迷はじ。」と、思ひを籠めし一節に、聞く人あはれを催せり。扇屋夫婦情深く、「なう此方は聞き及ぶ藤屋の伊左衛門殿さうな。忍ぶ事も時による。娘とも思ふ夕霧が、臨終の心がたんのうさせたい、早う逢うて下され。」ア、忝いと走り寄り、「太夫また逢ひに來たわいの。」伊左衛門様私や死ぬるわいなう。「母様死んで下さるな。」と、すがりつけば家内の上下、「わつ」と一度に聲を上げ、泣き沈むこそ道理なれ。重き枕に手を合はせ、「旦那様稚さい時より御苦勞に預り、御恩も報ぜず死にまする。これさへはかなう御座んすに、いとしい男、可愛い子に逢はせて下んす、もう私や佛で御座んす。とてもものに伊左衛門様の手で、この髪きつて貰ひ佛の形になつて、親子の手から水をく。」といふ聲も、絶え絶えにこそなりにけれ。「オ、髪飾は假の戯れ。佛の三十二相とは、新木作の卒堵婆をいふ。只今某が切る髪は阿字の一刀、彌陀の利劍を以て、煩惱のきつなと觀念せよ。」と、差添抜いて、二人添寢の寢亂れ髪、ふつつと切れば源之介、「あつたら髪を。」と身に添へて、悶え臥してぞ歎きける。重ねて櫛の水を携へ、「これ夕霧。人界は一生造惡の娑婆世界、わけて遊君流れの身は、面に紅粉を飾つて數多の人を迷はし、綾羅錦繡を身に纏ひ、多くの酒を汲み流し、煩惱の種を植ゑて、菩提の根を絶つとは

聲にも血の涙、子は安方の囀りや。

相の山

相の山「夕晨の憂き勤め、花一時の眺めとは、知れども迷ふ数々の、文に染めても誠はうすく、思ふ方へと駈河なる、富士も麓の戀の山、我踏み分けて我迷ふ、夢の中戸の夢枕、月を憎みし夜半もあり。辛い座敷を貰はれて、餘所に行く身を彼の人に、一寸鹿島の神も知れ、しんぞ嬉しさ可愛さの身にもこたへて忘れめや。初手二度まではふる雪の、つみも恐れぬ無理起請、神も佛も二つの耳に、諛と誠をさゝやきの、橋の蜘蛛に物思ふ。枚子叩くを相圖にて、稀の御見も籬越し、何を歎くぞ歎きても、身は十年の繋ぎ船、出船の今日の名残の牀、明日の朝ごみ枕より、跡より遣手の責め來るは、呵責の責めより猶辛く、仕舞太鼓の音までも、寂滅爲樂と響くなり。死出の山路は誰とても、一つ泊の旅の宿、浮世隔つる涙川、この世に浮名さら科や、姥捨親捨身を捨てて、櫻花かや散りく。五つでは絲をより初め、六つや難波にこの身沈めて、八つで遣手に附きそひ、九つで戀の小使、十や十五の初姿、髻入れずの地髪房々衣装のこなし、心利發で道中好うて、戀知り譯知り文の文章、思ひ々、べく候。牀は伽羅々々、沉や麝香の薫まで、今の手向と燻らす。種蒔き捨てし撫子の、花の盛りを餘所に見て、惜しや三途の川霧と、消ゆるその身も人目にも、昨日今日とは今までに、數珠を手に取

せる事も、見る事も成るまい。」と、嘯けば源之介、「早う逢ひたい事ぢや。」とて、父に縋りて泣き居たり。「梅庵様お歸り。」と、表へ出づれば遣手杉、家内の上下ついて出で、「病氣は如何で御座ります。」梅庵頭をふつて、「耆婆扁鵲でも叶はぬ。物に譬へて言はば、乾上つた土器に燈心一筋燈いて、風吹きに置く様なもの。今日の日中か遅うて初夜限り、もはや毒も何も構はず氣任せにしたが好い。ア、惜しい人ぢや。夕霧々々というて、親方にかい金儲けて遣つた女郎ぢや。達者な内にこの梅庵、彼の人を一年持てば、今頃は匙取らんでも樂するもの、あつたら金を彼の世へ遣る、これ本の來世金ぢや。」と言ひ捨て歸れば、扇屋一家はうち萎れ、返答する者もなし。「ヤレ源之介、醫者の言分聞いたか、もう叶はぬ思ひ切れ。」「ア、悲しや。何卒母様の死なしやれぬ様にして下され。」と、取り付き歎くぞ不便なる。扇屋了空夫婦、涙片手に蒲團手づからおうへに敷き、「今の相の山が奥へ聞えて、太夫の慰みに、これへ出て聞き度いと仰有る。これへ這入つて面白い事唄うて慰めて下され。」「あつ。」と親子は笠傾け、奥を見遣れば夕霧は、芙蓉の背衰へて、夕待つ間の玉の緒の、今ぞ断れ行く息遣ひ、遣手禿に手を引かれ、肩に懸りしその姿、親子は目もくれ胸塞がり、漏るゝ涙を夕霧も、それと見るより飛び立つ如く、心を胸につみ疊む、蒲團の上にかつばと伏し、思ひを涙に通はせて、人目を中に憚りの、せきたぐるこそ哀れなれ。「サア、相の山、早う。」と言ひければ、「あつ。」と涙の玉彫、謠ふ

るかや。今逢うて今別る、あの子をせめて相薦籠で、いざおぢやや。」と抱き寄するを引き放し、「それは喜左まで迷惑。これ世にも人にも恨みなし、左近もいはば尤も至極、女房が情といひ、誰か親子三人に仇する者はなけれども、親に逆らひ寶を費し、身を奢りたるその報い、あれあの天道に睨まれて、何國にて身の立つべきぞ。百里來た道は百里歸る。昔の榮耀ほど憂き目を見ねば罪消えず。男の苦勞と思ひ、歸つてくれ。」と泣き諫め、賺し乗すれば弱々と、言ひ度い事の數々も、せき來る涙せき來る胸に命の中に今一度、容顔見度い逢ひ度い。末期の水をあの子の手から、頼むく。」とゆふ霧の、名に立ち替る夕霞、見送り見送る門々の、松に太夫が面影を、残して別れ三重歸りける。

下之卷

※ 相の山一夕 晨の鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、聞いて驚く人もなし。野邊より彼方の友とては、血脈一つに數珠一連、これが冥土の友となる。「エ、物貰ひでもめかりを利かしや。これほど醫者の出入り、神子の御符のと、屋内が持てかやいて、七種難す間もないが目に見えぬか、通りやく。」といふ處へ、梅庵御見舞四枚肩、おりるの衣長羽織、醫者は奥へぞ通りける。伊左衛門編笠傾け小聲になり、「やれ源之介、母が氣色が重さうな。命の内にま一度見せたく、この姿にてきたれども、も早見

の。母ゆるゑの御浪人、其方も憂き目見せまじと、左近殿の子といひしが、實の親の假親の、心はさしも違ふかや。左近殿も其方を、よも憎うはあるまいが、我が身の無念一旦の腹立に、いとしい其方を捨てらるゝ。あの父様やこの母は、今の如く人中で、踏まれぬ許りに恥をかき、いひさけられても其方を抱くが嬉しい、逢ふが嬉しい。肉身分けし本の子は、斯うもいとしい物かいの。母がこの氣色では、もう逢ふ事はなるまい、父様の事頼むぞや。せめて一年しつとりと、一つ寢臥もしたいぞ。」と、かき口説き染みくと、眞實盡す憂き涙。源之介聞分けて、「此方が本の母様か、父様は此方か。傾城でも駕籠舁でも、本の親がいとしい。」と、涙まじりの笑ひ顔、血の筋見えて衰れなり。「オ、でかいたでかいた。侍とても尊からず、町人として賤しからず、尊い物はこの胸一つ。氣遣ひせまい伊左衛門が妻子、憂き目はさせぬ、力落すなく。」と、いへども我も力なく、只茫然となりにけり。吉田屋喜左衛門駕籠舁雇ひ、「是非なしともお笑止とも、參り掛つて我等の迷惑。外の事ならば何卒思案も致すべきが、申しても霧様は親方が、殊に病中大事のお身。先づ連れ歸つて扇屋へ手渡しせねばお爲にも如何、いざ召しませ。」と昇き寄する。「扱は二度別れて郭へ歸るかや、ハアウ。」と許りにかつはと伏し、既に息も絶えんとす。伊左衛門抱き起し、吉田屋は印籠の氣付、様々看病し、やうく性根付けるが、「昔より幾人か斯うした身の憂き難儀、話にも聞きつれど、これ程の辛い事、重なれば重な

ひ、知らぬ子に智慧つける。ヤレ稚くてもこの子はな、馬に乗り槍つかせ、生先立身たのしむ身の、倅に恥を與へん爲か、左近が武士を捨てん爲か、色に迷ひ馬鹿盡し、女どもが手前も恥かし。エ、恨めしや是非もなや、倅を返す連れ歸れ。町人の子に刀脇差無川なり。」と、引き寄せてもぎ取る處へ、奥方は北り出で、「なう情なや。この子が事は我とても、直の話を聞きしかども、調べてはお侍の一分廢ると思案して、貰ひ切つたるこの子なり。今返しては武士が立たぬ、一寸も離さぬ。」と抱き上ぐるを引き放し、「身を立て名を立て、一分を立つるといふも子孫のため、實子を持たぬこの左近、誰が爲に身を惜しまん、一分捨てる合點。」と、大小もぎ取り突き出す。「いやくたへと此方は返しても、契約して子にしたからはこの雪が返さぬ、夕霧も戻さぬ。」と取り付くを引き退け、絶り付くを引き放し、「夫をもどく見苦し。」と奥方ひつ立て、玄關をはたとざして入りにけり。伊左衛門も夕霧も、後に暮れて途方なく、源之介泣き出し、「コレ父様母様、おりや駕籠昇の子ではないわいの、傾城の子にはなりともない、父様の子ぢやわいの、母様の子ぢやわいの。此處開けてくれ。やい侍ども明けをれやい。」と、玄關の戸をとんくと、叩く楓のわくらばに、應ふる者もなかりける。夕霧息もたえだえながら、「これ源之介合點しや、眞實其方は左近殿の子ではない。母こそは夕霧、父御はそれ藤屋伊左衛門、さもしい人と思やるな。江戸までも知られて、左近殿より大身の、武家に親子もあるぞい

う、おりや父様に言うて来う。」と、驅け入る處を夕霧抱き留め、「これまうし、乳母が始めての御訴訟頼み上ぐる。」と泣きければ、「乳母のいやる事なら言うて遣らう、父様なう。」と抱き付くを、「オ、忝い、父ぢや〜。」と嬉泣き、夕霧も羨ましく、「ついでに私も母ぢやと言うて下されかし。」「オ、言うて遣らう、これは母様。」「オ、私が子ぢや。」「これは父様。」「おれが子ぢや、二人がなかの思ひ子の親子夫婦の寄合ひは、また今生では叶はぬ。」と、泣いつ笑うつ種々に、寵愛こそは道理なれ。奥より左近が聲として、「藤屋伊左衛門、藤屋伊左衛門。」と呼ぶ聲す。「南無三寶。」と逃げ出づれば、續いて左近走り出で袖を控へて、「これいにしへ參會せし、阿波の大盡と異名を呼ばれし平岡左近、其方に恨みはなけれども、夕霧に言ふ事あり、それにて聽聞致されよ。」と、がばと突き退け涙を浮め、「エ、偽り多き遊女のならひ、驚くべきにあらねども、これ程まで能うも〜この左近をつもりしな。この子は伊左衛門が倅とは、先年死したる遣手の玉が話にて、とつくより聞き付け、無念とも口惜しとも、心一つに堪へかねしが、いや〜改めては侍の身分立たず。殊にこの子も、我々夫婦を實の父母と思ひ睦ましく、不便さも増す故に、縁でがなとあきらめ、二世と連れ添ふ妻にも深く包み、夕霧が生んだる某が實子と偽りしかば、さすが女房の優しくも、夕霧が心を憐み、乳母と名付け、この内へ呼び取りしは、皆この倅が可愛さ故。それになんぞや淺ましい體にて忍び入り、親よ子よのと名乗り合

久しう御座んす。奥様のお慈悲にて、あのお子のお乳母に附けらるゝ、筈ながら、のらぞんざいの私
身、氣色もしか／＼はかどらねど、先づ和子様を見たさに。」と、つく／＼うちまもり、「あれ喜左衛門
様、さても氣高い好いお子や。聞き及びしよりおとなし様、常體の者の子が、七つや八つで斯うあら
うか、人は筋目が恥かしい。さすが父様のお子程ある、父様のお心がさこそと推量せらるゝ。」と、表
の方へ目をくばれば、伊左衛門も首延ばし、魂脱けて嬰兒の、袖に飛び入る許りなり。左近夫婦は
氣もつかず、「サア喜左衛門、先づ少しなりとも金子渡さう、いざ座敷へ。これ源之介、あの人是我が
身の乳母、馴染をかけて愛憐がり、この母同然に、大人になつても乳母は見捨てぬものぢやぞや。吉
田屋此方へ。」と、莞爾に、打連れ座敷に入りけり。夕霧四邊を見廻し、「なう懐かしや、さつきにから
抱き付き度うてならなんだ。」と、縋り付いて泣きければ、伊左衛門も走り入り、思はず知らず、「やれ
可愛の者や。」と抱き付く處を、源之介飛び退き、「やい駕籠舁奴、穢い態で侍に抱き付く慮外者奴。」
と、脇差に手をかくる。「ア、く／＼まうし、眞平々々御免なりませ。私が倅に、ちやうどお前程なが
御座れども、小さい時から人手に渡し、見度い／＼と存する折節、お前を見付け如何も堪へられず、
心亂れて慮外の段御免遊ばし、あこぎな申し事なれど、お侍のお慈悲に、父かというて、私に抱
き付いて下されませ。」と、額を疊に摺り付けて、手を合はせてぞ泣き居たる。「何のおのれを父といは

心も至り目恥かしい。粗相して笑はれな、杯の用意せよ。」と密語く聲に、左近勝手へ入りければ、
「これなう豫て申せし夕霧の事、吉田屋の喜左衛門が垢明け、連れ立ち来たとの案内。なんとこの雪
が様な、愠氣せぬ氣の通つた女房は、御座んすまいが。」と笑はるれば、「オ、御奇特々々々。さりなが
ら座敷にかたい軍兵衛が居らる、今内へは呼ばれまい。表に置いても目に立つ、どうかかうか。」と
思案半ば、門前には喜左衛門、「ア、いかう冷い。夕霧様は御病後、早う内へ入れまし、火になりとも
あてましたい。頼みませう。」と呼はる聲、若黨仲間ばらくと、「小栗軍兵衛迎ひの者。」と奴の
聲、揚屋の聲、遣手はなくて傾城に、槍持交りやかましし。や、日もたけて軍兵衛、「お暇まうす。」と
立ち出づる。左近親子送つて出で、色代あれば軍兵衛、「オ、源之介殿おとなしう御座るよ、追付殿の
御用に立ち召されう。随分弓馬の稽古精出し申さうぞ、永日々々。」と暇乞して歸りけり。左近親子立
關に立ちやすらひて見送る體、伊左衛門遙かに見て、「あれは我が子か、昔の伊左衛門ならば人の子に
爲さうか。大小こそさせずとも、數多の手代若い者、若旦那と侍かせ、京大坂の町人の誰にかは劣
るべき。」侍とても負けまじき、母親の駕籠を父が昇き、我が子の門にはひつくばふ、我が親に背き
たるその罰、ひつしと思ひ知り、悔み涙に頬冠の、手拭ひたす許りなり。奥方も端近く、「なう、喜
左衛門か、その駕籠これへ。」と他事なき風情、それを力に夕霧は、駕籠も思ひも漏れ出でて、「平様お

褒美にこの鳥目百疋下さるゝ。「扱角介は慮外な、餘所の大事のお道具に手をかける狼藉千萬。重ねてこの事言ひ出さば旦那様へ仰せられ、討首になさるゝ。」との御意ぢや。」といへば、頭かく介佛頂面、竹は悦び、「ア、冥加もない有り難い。兎角お禮は好いやうに。」と戴き、「これ右衛門殿、これ持つて往なつしやれ。何を見込みにこの様に可愛いぞ。」と、譬への裸百疋を、直に男にやり持に、過ぎたる妻が三重優しさや。人の情に夕霧が、思ひも寄らぬこの春の、子の日を根から根曳の松に、か、藤屋の伊左衛門、我が子の顔の見まほしく、ならはぬ駕籠の片端を、隠れて忍ぶ頬冠、夕霧も簾越し、子を見る今日の嬉しさより、夫に別るゝもの憂さは、上本町にぞ著きにける。宿札を見て喜左衛門、「誰方ぞ女中頼みませう。」「ハウ何方からぞ。」と腰元出づれば、「私は九軒町吉田屋喜左衛門と申す者。奥様よりお頼みなされし扇屋夕霧身請の事、随分と驅け廻り、金子は當月一杯に、お渡しなされる、約束で、えいやおうと首尾成り、只今これへ同道。扱々節季の急がしいなか私の働き、春の用意正月のお客の穿鑿、錢金の請け拂ひ押詰めての節分。」大豆で打出す鬼の首、取つた様にぞ申しける。「成程奥様にもそのお噂、扱は彼が傾城殿か。」と、駕籠を覗いて、「ハウアウ傾城といふもの始めて見た、矢張常の女子ぢや。」と走り入つて、「奥様々々、傾城が参りました。」「ヤアかましい。皆物見から聞いて居た。傾城々々言ふまいぞ、今よりは源之介のお乳の人、侍町人の歴々につきあうて、

大きな鏡に小鮎添へて据ゑられた。藤の棚のねち兵衛は此方程槍は振らねども、お祓の練衆御番替、人の氣に入り雇はれて、眞性者といはれたゆゑ、片町のふりを内へ呼び入れ、師走に披露があつたぞや、これでこそ女房の肩も怒るわいの。此方と言ひ替して明けて四年、給分一文身につけず、皆此方に入り上げる。それに何ぢや、よい年して、長屋へ比丘尼ひき入れ、日が暮れると濱せり、まだその上に、稻荷邊の裏屋小路を覗き廻り、あけくにこの頃は、夜見世狂ひも付いたけな。私とても木竹ぢやなし、愒氣もしたい腹も立つ。エ、憎いとは思へども、ア、左様ぢやない、女子に生まれた因果ぢや、男のさがを顯はすまいと、随分私が身をつめ、三度つける油も一度つけ、雪駄履くを草履にし草履履くを跣足で仕舞ひ、鍋釜の煤煙搔くにも、此方の髭に入ると思ひ、好い處を除けて置く。我が身の事には元結一筋買はぬは、男を大事にかけるゆゑぢやないかいの。女房には苦勞をさせ、榮耀が餘つて色弁ひ、聞えぬ人ぢや。」と締泣に、恨み口説くぞ不便なる。「これ此處の御奉公は、中途にまるつて馴染はなし、お國までも御内衆が、悪名立てるが悲しい。この上張の袷を脱ぐ、角介殿これで済まして下され。」と、帯を解かんとする處へ、御腰元のりん走り出で、「これく竹、そなたの心底身様物見よりお聞きなされ。」さてく奇特な、上々までも女たる身の鏡。」と、ことなうお感じなさる。御奥様にも少とお氣の濟まぬ事あれども、其方を手本にお心が納まつてお嬉しさ。師匠とも思召し、御

した、お林殿好い氣味か。「わしや痞が下りました。「おしゆん殿は何と。「此方や金拾うたより嬉しい。」と、身に徳もなき法界悋氣、これぞ女の慣ひなる。「あれ北から十文字の道具、御藏屋敷の小栗軍兵衛様年頭の御禮。御一門の中でも彼方は堅い、そりやく。「物見の簾下す間に、早女關に、「物まう。「どれい。「小栗軍兵衛御慶申す。「旦那幸ひ宿にあり。いざお通り。」といひければ、軍兵衛立關に立つて、「これ家來共、御用について左近殿と申合はする事あり、暫く隙が入るべきぞ。屋敷へ歸つて八つ時分迎ひに來い。「ない。「その中少と早く來い。「ない。「油斷するな。」と入りければ、若黨始め草履取挾箱、皆々宿所へ歸りしが、道具持の槌右衛門、一人残つて臺所覗き、「誰ぞ頼みませう。飯焚の竹呼び出して下され。」といふ處へ、馬取の角介苦い顔して、「ヤ槌右衛門、汝や見事武家に奉公するかやい。この角介が僅かな切米の内、五百五十といふ錢を取替へた。冬年一言の斷りもせず。今も先づ身に逢ひたいといふべい處、竹を呼出してくれとは野太い者だ。錢の濟むまでこれを取る。」と、槍の柄に縋り付く。「待て角介。槍持が槍を取られては、槌右衛門が首が無い。五百や六百で賣る首ぢやない、成らぬ。「ヤア取つて見せう。」と競り合ふ最中、竹走り出で、「オウ角介殿道理ぢや。錢は竹が濟ます、堪忍して下され。エ、情なの性惡男奴や、世間を見て恥を知りや。お小人町の久六は此方より若い人、八軒屋の龜とたつた一年懸して、小錢貯めて宿持つて、冬年も鶴が橋のお婆へ、

これ此のやうにはい／＼、はい／＼／＼。」と親の心もしら泡嚙ませ、門内へ乗り入りし振りたいけにおとなしし。今の詞に腰元衆、口をとちて奥様の機嫌を窺ふ體なれば、「これ／＼源の話を聞いたか。道通りが左近殿を太夫買ひというたけな。この前大坂お屋敷役の時、新町通ひに夕霧といふ太夫に馴染をかけ、源之介を設けたは定めて皆も聞きつらん、人の見知るも理。大名高家も母方の吟味はなし、大事なとはいひながら、あの子が心は、この雪をうみの母と思つて居る。必ず／＼夕霧が子といふ噂禁制ぞや。その夕霧をも請出し、あの子がお乳に置くはず、傍輩並にあしらや。」と、仰せも果てぬに腰元中口々に、「ア、奥様のあんまり結構過ぎました。我々がなんほ沙汰を致さずとも、あの傾城のぼしやれ者、それを言はずに居ませうか。お袋振つて鼻高う、お家をありたい儘にして、奥様を踏み付けるは今の事／＼。まだそれ許りか下地がにやこい旦那様、小舌たるう仕懸けたら、ほつかりと喰ひ付いて、田も遣らう畦も遣らうで、奥様はうつそり鼻明いて仕舞はんしよ。小無益しいあた分の悪い、こりや御無用に遊ばせ。」と、焚き付けらるゝ女心、「ア、いへばさうぢや、己はいかい阿房ぢや。祈りも除きたい戀の敵もつて居てあてがふは、盗人に藏の番磁石に針、皆に氣をつけられて、はやもや／＼と腹が立つ、後に悔みの出るは定、請出すことは止めに遣らう、皆でかいた、能う言うてくれた。」「扱は彌止めになされますか。」「はて止めにせいで何とせう。」「ア、氣が薩張となりま

道場の玄關構へ借り座敷、お國の御用新玉の、此處に年取るまめ男、阿波國平岡左近と宿札も、門の飾に時めきて、武家は綺羅ある春なれや。表の物見に女中の聲々、「申し奥様、珍らしい大坂の正月を始め見物致し、お國へ歸つて好い話。これもお蔭。」と悦ぶにぞ、「オ、〱其方達がいふ通り、主のお蔭は忝い。御用について左近殿、我々連れて、僅か逗留の旅宿へ、今朝から禮者の絶えぬ事、皆殿様の御威光。左近殿は源之介連れて、天満とやらの神明様へ惠方参り、親の子としてしほらしい、六つや七つで馬に乗る。追付左近殿の名代、御奉公つとめるを見るであらう。」と御悦びの處へ、旦那の御歸り、前供走る黒羽織、すつ〱素槍栗毛の馬、のつし鬘斗目に麻上下、親に〱いて源之介、明けて七つの乳のまう。饅頭形の中剃も、目許賢きうなる松、千代を唄ゆる土佐駒に、手綱かい繰りしやん〱〱、轡の音ははり、ん〱、りんとすわりし袴腰、物見の前を乗り廻せば、これ〱源之介戻りやつたか、目出度い〱。嘸馬上は寒からう、おとなしい出来しやつた。」と、招かれて源之介、「まうし母様、惠方参りに天満へ寄つて、これ買つて來ました。」と、土人形の天神手綱に持ち添へ「私がこれ持つて居るのを、道通りが見付けて、父様を見知つて居るやら、親は太夫買ひ子は天神買ふといつて笑ひました。おれにも大きな太夫買つて下され。」と、あどなき詞に、腰元共氣の毒がり、「これしい〱。」と目ませずれば源之介、「ヤイ駄賃馬の様にしい〱とは不調法な。侍の乗馬は、

をぞ濡らしける。伊左衛門つ、と出で、一ハ、ア賢女かな貞女かな。左近殿とは夕霧ゆる遺恨はあれども、それは私。拙者もかの俸を力に、出世の望み御座れども、武家のお名には換へられず、進ずるといふまでもなし。以前夕霧が申す通り、左近殿の御子息、伊左衛門が子では御座らぬ。」「ア、忝い夕霧殿もさうぢやぞや。」「はて主の合點の上からは、私が否とは申されぬ。さりながら、命の内ちよつと見せて下さんせ。』と、涙に咽ぶぞ道理なる。』オ、心得たく、萬事胸に込めました。身請のことも吉田屋と、近々に談合しませう。あの子が成人するにつけ、伊左衛門殿も樂しみ、サア契約の堅めの杯、いよ／＼あの子は此方の子、平岡左近が總領。』さり／＼と手を拍つて、郭でざ、んざ珍らしし。日も暮れか、れば若黨仲間駕籠釣らせ、阿波の旦那のお迎ひ。』これ下人も忍ぶこの姿。』元の男となりふりつくり、頭巾大小印籠巾著。』亭主さらば。夕霧事は追付これより便宜せう。萬事たのむ。』請け込みました。』と膝を屈める、腰屈める、腰元つれるをひき換へて、駕籠昇が送る大陣や、口をきこより奥様の深き情や、三重立ち歸る。

中之卷

春や延寶六年と、明け渡る世も昔の京、難波の今朝は珍らしき、妻子ひき具し舊冬より、上本町の

して、この中で物申すはおはもじながら、かの阿波の大盡平岡左近が本妻雪と申すは我が身事。夕霧
どのの假の情、連合の子を誕生とて此方へ請取り、言はばわが悦ぶ子、腹も痛まず苦勞せず、産んで
貰ひし忝さ、あだにもせず傳り育て、手習讀物弓槍までも器用にて、國鄰の土佐駒引かせ、乗つた
姿は天晴平岡左近が世繼、七百石の主なりと御家中の褒め者、嘸見たからうし見せたし。一つはあの
子が冥加の爲、夕霧殿を請出し、一緒に伴ひ暮さんと、心根も聞かん爲、おはぐる落しつあらぬ態
で、只今聞けば我が連合を誑して、伊左衛門の子を突きつけたと、聞くよりはつと胸塞がり、夫の武
士は廢つた。エ、恨めしい夕霧、男に化けたを幸ひに、飛び掛つて刺し通し、我も死なうと刀を取り
は取つたれども、死んだ跡でこの雪が、傾城に格氣して阿呆死と言はれては、いよく男の名を出す
と、留るも殿御を思ふゆゑ。無い事さへ言ふ世のさがなさ。阿波の平岡左近こそ、町人の子を傾城に
突き付けられたと取沙汰し、殿様の御耳に立たば、好い仕合で御改易、阿房拂ひか切腹か、死しても
悪名消えばこそ。この處を料簡し、あの子を其の儘トされば、侍一人の取立て、生々世々のお情ぞ
や。我人我が子は大事のもの、殊に思ふ人の子を、思はぬ人の子といふは、何しに心好からうぞ。そ
れは流れの身の辛さ、侍の妻には又此の様な憂き事あり。女子と生まれしこの因果、女御更衣にな
るとても、羨ましうは思はぬ。」と、心の底を口説き立て、涙わりなき物語。夕霧夫婦吉田屋の一家袖

りけり。伊左衛門も涙に暮れ、「オ、過つた。外にさして恨みはなけれども、命にかへぬ大事の女房、奥座敷の若い者、我が物面がむつとして、思はぬ腹立こらへてたも。我とても浮身の體、實の正體見給へ。」と、小袖くるりと脱ぎければ、肌に拾の破れ紙子、四十八枚彌陀の願、つぎは平等施一切、胴顫ふこそ哀れなれ。伊左衛門涙を拵へ、「さてかの俸は無事で里に居る事か、何としたぞ。」と言ひければ、「さればその子を里に遣りしと申せしは偽り。儘ならぬお身の上、苦勞にさせます氣の毒さ、かの阿波の大盡平岡左近といふ人と、私とが中の子といひかけて塗り付けて見たれば、人は愚かな、ままとたらされ受取つて、「腹は假物武士の胤。」と、寵愛に逢ふと聞くにつけ、身の憂き時はいろ／＼の怖い智慧も出るもの。」と、語りもあへぬに伊左衛門、「ム、ウさもあらう事。さりながら我がいにしへの手代ども、その子をつきたて母へ訴訟し、藤屋の家を取立て度いとの談合あり。何卒譯を言うて取り返す思案がしたい。」といふ處に、奥より内儀色違へ、「なうおとましやく。お二人爰の話が奥の座敷へ筒抜け、お客様は不興顔。『直に逢うて言ふ事あり。』と今此處へお出で。なう喜左衛門殿、此方の人。」と、皆々怖がりひそめく處へ、客は刀を提げ、「ア、これ伊左衛門殿夕霧殿、驚くことは少しもない。これその證據。」と頭巾を取れば、突出し鬢の下笄、籠甲差櫛、さしもの粹ども、呆れて不審晴れやらす。「オ、いかにも不審の立つ筈。男に化けたるその間は何のそのと思ひしが、女子の姿を顯は

ければ、「ム、ウ此の夕霧を萬歳とは。」「オ、萬歳傾城の因縁知らずか。侍の足にかけて蹴らるゝを萬歳傾城といふぞや、誠に目出度うさぶらひける。しかも足駄履いて蹴るやら、年立ちかへるあしだにて、誠に目出度うさぶらひける、聞えたか。さりながら何も身すぎ、あの様な好い衆には、蹴られても損は往かぬ、慾を知らねば身が立たぬ。慾若に御萬歳や、年立ちかへるあしだにて、誠に目出度うさぶらひける。町人も蹴る伊左衛門も蹴る、蹴るくく。」と蹴散らかし、「これ喜左、餅でも米でも遣つてやりや。」と、煙草引寄せ吹く煙管の、さらぬ體にて居たりけり。夕霧「わつ。」と咽せ返り、「エ、こなさんとも覺えぬ。この夕霧をまだ傾城と思うてか、眞の夫婦ぢやないかいの。明ければ私も二十二、十五の暮から逢ひかゝり何年になる事ぞ。設けた子さへま些とで早七つ、誠を言はば今頃は一門中の狀文にも、伊左衛門内よりと書いても人の咎めぬ事。私に恨みがあるならば、こなさんにも恨みがある。去年の暮から丸一年、二年越に音信なく、それは幾瀬の物案じ、それゆゑにこの病瘦せ衰へが目に見えぬか。煎薬と練薬と、鍼と按摩でやうくと命繋いで、たまさかに逢うて此方様に、甘えうと思ふ處を逆様な、こりや慘らしいどうぞいの。私が心變つたら、踏んでばかり置かんすか、撲いてばかり置かんすか。これ死に懸つて居る夕霧ぢや、笑ひ顔見せて下んせ拜んます。エ、心強い胸忿な、憎や。」と膝に引き寄せて、叩いつ擦つつ聲を上げ、涙亂れて髮解け、わけも性根も無か

り香包、名木火鉢にくゆらせ、「嗅これへ來やれ。身なんどが様な奉公人は、殿の御前に相詰め、たまさか遊興所へ參るも氣晴らしといふ内に、第一は夕霧殿に戀あるゆゑ、君の機嫌の好い様にお身を頼む。一つ飲みやれ着せん。」と、ひらり紙花七九寸木枕に打敷いて、横になるとの阿波大盡、夕霧が襦褌に兩足ぐつと入れければ、「扱もなめたり」。この夕霧に足もたすは、こりやちつと慮外さうな。それ程足が苦にならば、打折つて捨てたが好い。」と言ひ捨ててつ、と起ち、次へ出づれば伊左衛門、ちやつと寢轉ぶ肘枕、空寐入りして高敷、はつとばかりに夕霧、我が身を共に襦褌に、引纏ひ寄せとんと寢て、抱き付き締め寄せ泣きけるが、「なう伊左衛門様々々々々、目を覺して下んせ。私や煩うて疾うに死ぬる筈なれど、今日まで命ながらへたは、ま一度逢はせて下さるゝ神佛の控へ綱。これ懐かしうはないかいの、顔が見たうはないかいの、目を開いて下んせ。」と搖り起し、抱きおこせばむつくと起き、横さまに取つて投げ、「これ夕霧殿とやら夕飯殿とやら、節季師走此方の様に隙ではない。七百貫目の借錢負うて、夜晝稼ぐ伊左衛門、この様な時寐ねばならぬ、邪魔されな總嫁殿。」と、轉りと臥して又ごう／＼と空敷。ム、ウ身に覺えはなけれども、恨みがあらば聞きませう、寐させはせぬ。」と引き起す。「これ何とする。この體でも藤屋の伊左衛門。今のごとく奥座敷の侍に踏まれたり蹴られたりする女郎に近付は持たぬ。此處な萬歳何城、萬歳ならば春おちや。通りや／＼。」といひ

眞實か。「はて諺か誠か、鄰座敷視いて御覽なされませ。」伊左衛門はつとせいたる顔色にて、少時詞もなかりしが、「なう内儀、天地開け始まりて、誠ある傾城と、迦陵頻の雄鳥は、繪に書いたも見たものない。總嫁の様な傾城奴に、微塵も心は残らねども、知つての通り彼奴が腹から出た身が倅、しかも男子で明ければ七つ。元の遣手玉が才覺で里に遣つたとやら。今日來たはその倅が事について來たれども、定めて里に遣つたも偽り、捻ぢ殺してかな捨てつらん。阿波の侍といふは合點、この前我と張合うた河波の大盡平といふ者。つらく思へば、傾城買より紙屑買がましぢや。金出して此方へ取る物は狀文ばかり、七百貫目が紙屑では、富士の山の張拔も樂な事、仕合の悪い時は何で損をせうも知らぬ。無用の涙で紙子の袖濡らした、繼ぎ目が離れぬ先に罷り歸る。」と立たんとす。ア、餘り御短氣、奥のお客は平様では御座りませぬ。「いや／＼平でも壺でも、此方支度よう御座る。」と立ち上る。「それはお前の慳貪と申すもの、先づ夕霧様に逢はせましょ。」「いやとでもけんどんなら、夕霧より蕎麥切に致さう。」とすねまはる。その中に奥座敷より手を叩く。「あれ禿衆は何處にぞ。」と言ひつゝ、出づる内儀に連れて、襖の陰より差覗けば、兩人馴れにし牀柱、もたれ懸るも形見ぞと、忘れもやらぬ物ごしは、慥かにかの人、何がなしほに座を立つて、逢ひたや見たやと心もせき、そむけて向ふ客の顔、さも大名の小姓立、風よしの衣装付き、ぱつぱの鯨翰象眼鐔、若紫の焙烙頭巾、懐中よ

衛門つくく見て、「エ、浮世ぢや。藤屋の伊左衛門様に、この吉田屋の喜左衛門が著せまする小袖、假令蜀江の錦でも戴いて召しませうか、ほんに涙がこほれます。」と目をするを見て、「否これ喜左、この紙子の仕合、さらく無念と存ぜぬ。總じておもたい俵物材木でも、牛馬が負ふは珍らしからぬ、犬か猫が負うたらば、これはと人が手をうたう。我等も其の通り、紙子の拾一枚で、七百貫目の借錢負うて、ぎくともせぬは恐らく藤屋の伊左衛門、日本に一人の男。この身が金ぢや、それでひえて堪らぬ。」「ヤアウこの身が金とは忝い。喜左衛門が餅搗に、大きな金がお入りなされた。これ喚、まだ蓬萊は飾らねども、先づ正月の心、三寶飾つて持つておぢや。」とて入りければ、内儀は「あつ」と譲葉に、穂長折り敷く橙柑子、蜜柑や何やかや搗栗、「おゆかしや、久振りで御無事なお顔、お嬉し様や。」と出でければ、伊左衛門とかうの挨拶なみだぐみ、「夫婦の衆が懇切に、蓬萊とまで氣がつけども、夕とも霧とも言ひ出さぬ。仄かに聞けば夕霧が、身が事を氣病にして、命あぶなしと聞き及びしが、いかう重いか、但し無常の夕霧と消え失せてしましたか、歎きをかけまいとて言ひ出さぬか。誓文で泣くまい、語つて聞かしや、泣かぬく。」と言ふ聲も、氣遣ひ涙に濁りけり。「いやこれはお道理。霧様の御氣色、秋の頃は散々で、勤めもお退きなされしが、寒に入つてちと御快氣。すなはち阿波のお侍、正月もなさる、筈で、今日これに。」と言ひも果てぬに伊左衛門、「ヤア、それは

んせ。」「何が扱御氣任せ、如何なりとも候べく候にやらしやんせ。」と、座敷へこそは出しけれ。冬編笠も垢張りて、紙子の火打膝の皿、風吹き凌ぐ忍ぶ草、忍ぶとすれど古の花は嵐のおとがひに、今日の寒さをくひしばる、はみ出し剣も神さびて、こじり詰りし師走の果て、胡散らしく吉川屋の内を覗いて、「喜左衛門宿にか、ちよつと逢はう。喜左衛門々々々々。」と鼻に扇の大柄なり。男ども口々に「ヤア彼奴は何物ぢや。風の神か鳥威しの様な態で、何ぢや、喜左衛門に逢はう。百貫目も遣ふ大盡の言ふ様な、棒まかれな。」といひければ、「オ、百貫目がそれ程貴い物でもない。喜左衛門といふべき者でいふ程に、逢はせてくれい。」「どりや逢はせてくれう、こんな目に逢はせてくれう。」と竹帚持つてかゝるを、喜左衛門飛び下り、「強請者か知らぬ、粗相を爲な、誰方で御座る。」と笠を覗いて、「ヤア伊左衛門様か。」「なんと喜左。」「これは夢か七つか、さてお久しや懐かしや。京大佛の馬町に御遁塞と承る、霧様よりは數通の御状、飛脚も二三度、奈良大津まで尋ねさせ、たつた今もお噂。先づお馴染の小座敷で、二年積るお物語、いざお通り。」と袖ひけば、「ア、紙子觸りが荒い、これ引けば破れる。」掴めば跡に師走坊主師走浪人、昔はやりが迎ひに出る、今は漸う長刀の、草履を脱いで編笠の、中の座敷に通りが、「お寒からう。」と喜左衛門、縮緬に紅絹裏の小袖をふはと打掛くる。「ア、これはいはれぬ。寒晒の伊左衛門、少しも苦しからねども、志を著致す。」と戴いて著る有様、喜左

たり面疲せて、藥も日數ふる雪の、重らぬ先の養生と、勤めも心まなれど、深きよしみの吉川屋は足許輕き道中や、暖簾くゞるも力なく、「今日は目出度う御座んす、ア、しんどうや。」と腰うち懸け、我が身を横に投入の、水仙きよき姿なり。喜左衛門機嫌よく、「これはく、太夫様、御氣色も好いかし、聞いた程瘦せもなされず、お顔持もずんと好い。先づ今日は嘉例の餅搗、格子へお出でなされてより去年の今日まで、伊左衛門様とお兩人、一度もお外れなされぬに、今年の餅搗ばつかり、伊左衛門様は流浪遊ばす、お前は御病氣、嘉例を外す處、この喜左衛門頭痛八百。ちよつとなりとも呼びびましたいと願ふ折柄、今日のお客は四國のお侍、頭巾で頭は見えねども、角前髪のお小姓らしい。その器量のよさおほこさ、道頓堀の若衆方女方、ひつさらへてもけも無い事。四國西國隠れない夕霧といふ太夫に、近付になりたいて、わざく大坂で御越年。お氣合ひに構ふとて、初對面はお勤めなされぬも存じながら、呼びに進ぜた。流石お馴染の喜左衛門、いやおうなしのお出で、身祝ひと申しどつというた餅搗、鼻も尻餅搗いて悦びます。これ杉、沖之丞、中の間へ行て善哉祝や。此處は冷えます太夫様、先づお座敷へ。」といひければ、「ア、私が氣色も好いが好いには立たねども、伊左衛門様と二人連、一度もかさぬ今日の日なれば、命の内にもちよつと来て伊左衛門様に逢ふ心。此方様達の顔見たいと思ふ折節、よびに來たを幸ひに此處までは來ました。座敷は氣儘に勤める、左様思うて下

夕霧阿波鳴渡

上之卷

年の内に春は来にけり。一日に餅花開く餅搗の、にぎくはしや九軒町、嘉例の日取よし田屋の、庭の竈は難波津の、歌の心よ蒸籠の湯氣の大杵、駕籠昇の長兵衛が大汗で、「やあえい。」中居の萬が白取の、「さつ、やあえい、さつやあえい、さつ。」「さつさ搗けく。」「ハッア木遣で搗きやれな。」先づ恵方棚神の棚、鏡取るく遣手衆の、顔に取粉の面白いとてよね衆の笑ひ、禿が手折る柳の枝の、春も近づく、年も近づく。やがて郭も谷の戸も、出でて初音の鶯の、羽づくろひの君もあり。正月買ひのだいく盡、太夫様より付届け、門を賣る聲山草や、ちよつと祝ひましょ。裏白、讓葉、鱒で御座んせの春永に、いよしも替らぬ御見まで、逢瀬をちぎる餅は杵、ついて離れぬお客を祝ひ、白八入れます、ますく全盛、座敷は善哉、庭には節季候、こりや又目出たい揚屋の餅搗、紋日の長持、お客に青間、こりや又賑々、女郎衆に槍持、お家は金持、代々福々、松まつ吹くく松風や、松賣る聲こそ。三重戀風の、その扇屋の金山と、名は立ち上る夕霧や、秋の末よりぶらくくと、寝たり起き

南無阿彌陀佛。」を力にて、襟引き寄せて剃刀の、柄までぐつと一刀、突かれて、「うん。」と反り返り、三重のたうつ藍の蟲の息、苦しむ體に氣も迷ひ、「かはいくア、かはい。」と、ともに苦しむ男の心、「南無三寶後れじ。」と、落ちたる文をくるくく巻き、口押し割つて含ませ、剃刀押取り、喉のめぐりを切りさきく、つゞくは首の骨ばかり、刀で切つたるごとくなり。その剃刀の返す刃を、我が喉笛につく息も、いる息もはや絶えくくの、おなじ枕の死出の山、しでの田長かほとゝぎす、聞きにきたの藍鳥、藍に染めたる魂魄と、廻向に色をぞあけにける。

心中刃は氷の朔日 終

息災に、はやく下り、待ち祝ひ々と遊ばせし。父様今年は丁七十の賀の祝儀、一門衆の振舞も、そもじ下りを待ち受けて、生御魂の祝ひ一所にと、盆まで延すと書かれしが、盆にも我は新精靈、親子の杯みそはぎの、露の手向とひきかへて、戴く我は草葉の陰。嗚父母のお歎きを、思ひ遣られて情なや。何事も追付目出たくもじにて、申しまるらせ候べく候、めでたくかしくと止められし、これがなんの目出度い事。子を祝ふ親心、無下になしたる身の罪科は、先の世からの約束か。二枚重ねの御文を、金水引にて綴ぢられし、水引の紅落ちて、おつやといふ字は血に染みたり。子の血は親の血の別れ。血筋が教へてこの如く、先へしらせのあるからは、今の最期を物の告げ、嗚や夢見が悪からう。明日は占夢ちがへ、違へても祈りても、返らぬ後の悔み言。いとほしの父母や、名残をしの伯母様や」と、文を抱き締め肌につけ、悶え焦れて泣きければ、男も共に伏し沈み、「皆この歎きは我故」と、二人が膝に凭れあひ、咽せ返りてぞ歎きける。「あれ、明星様も高々と、あけ方に程はない。この文口に啣へて未來までも持ちまする。最期の苦患に離れたら、含ませて下さんせ、念佛も心で申す。こな様口で高々と勸めて殺して下さんせ」と、文ひん巻いてしつかとくはへ、兩手は合掌心に念佛、顔で剃刀教へつゝ、早うと急ぐ目元にも、可愛男を見舐めの、涙は玉を列ねたり。夫も今を限りの詞、「さあ」と許りにふり上げて、見れば目も眩れ二目とも、塞ぎ俯き、「南無阿彌陀、

松町、伯母様の家も二三町。伯母様の近くで死したらば、縁に引かれて後の世は、親にもあひ。」に藍
山、藍より出でて藍より青く、罪より罪の重からん、來世を待つこそはかなけれ。男剃刀取り出し、
「扱も因果な身の果てやな、人は高きも賤しきも、死しては出家の剃刀を、頂く物に極まるに、その
剃刀で死ぬるかや。生國は大和田原もと、幼少で二親に離れ、今は在所の兄より外、一門眷族一人も
なし。鍛冶屋の槌の一本立ち、親兄弟とも頼みたる、親方には勘當うけ、我が身許りか其方まで、殺
して一家に憂ひをかくるこの科は、地獄の火焰に躡かけ、無間の底の鐵牀にのせられ、呵責の槌に骨
骨を、打碎かれんは今の事。よし夫れは厭はねども、其方は國の弔ひうけ、六道の辻の憂き別れ、こ
れが今から悲しい。」と、縋り付いてぞ泣き居たる。「ア、つらい事言うて下さんすな。私とても親伯母
の心を背き歎きをかけ、幾瀬の罪を造りし身が、よい所へはよも行くまい。無間奈落の底までも、こ
の手は離さぬ、こな様も私が手離して下さんすな。」と、互に引き寄せ寄せられて、抱きあひてこそ口
説きけれ。「母様のお文をも、來世で讀まんと肌につけ、封じ目も切らねども、親子は一世、冥土にて
苛責に逢はば目も眩み、妄執の雲に文字消えて、讀むもこの世の名残ぞ。」と、親子の縁も封じめも、
切つて披きし文の中、「これなう鬘斗と昆布とに節分の、まめで下れの祝ひごと、今が冥土の門出と、
御存じないか痛はしや。母様常が血の道もち、長文書くことお嫌ひが、子の可愛さか細々と、舟の中

道、魂は冥土に到れども、魄となりたる今の世の、おつうは母の形見ぞや。この曾根崎に埋もれぬ、大坂三十三番に、名を残したる普陀落や、大慈大悲の誓ひにて、竟には兜率天満屋の、お初も佛なまかや。道具屋おかめ與兵衛とは、思へば近き町續き、世は何事も難波橋、よしとあしとの境筋、中に立つたる賤が身は、不便と思へ備後町。夫れのみならず吳服屋の、唄手代半兵衛はかの池田屋の、小菊にたんと金入れなれば、心どんすな者でもないに、身のしゆすこしに氣は縮緬の、見世の帳面皆ぬめりんす、らしやもない事いはしやりんすの、はや人魂も飛びざやぬいて、共に刃の諸羽二重の、同じ枕にふしつむぎ、重井筒の戀の水、結び汲む手は多けれど、色は様々紺屋染、胸はもえぎに紅ひはだ、さやけき色はこれぞこの、とくさに染めてさしも實に、心中みがく縁かや。花紫に薄淺葱、桔梗花色地白型、紺屋ののりの道廣く、到り先だつこの人々を、今身の上の知識ぞと、頼む外には菩提をも、若きは別ちあら人神の、天満の方に見ゆる火は、我を尋ぬる提灯か野邊の螢か、神の御燈か神垣や、神明宮にお暇の、後世は鳥居の二柱、二人離れず立ち添へど、こほす涙の雨にさへ、千代の老松つれなくて、地水火風の若草は、因果の嵐無常のわけ、時を別たす時ならぬ、夏の枯野に迷ひたる、あかつき露に身もひたれ、帷子裾に纏はれて、歩みかねたる二人が様、「これなう十里も來たる様なれど、まだ爰にさまよふは、爰で死ねとの神明様の、教へならめ。」と泣きければ、「ア、あの町は老

下之卷

平兵衛小かん夜の朝顔

よそのつらねも我が命も、一よぎりなる憂自や、憂き身の果ては主親の、ばちに掛りし三味線の、
二十二三の絲きれて、残る一期も暫しぞや。いかに今年の空梅雨も、哀れ袂のさみだれに、心は今も
皐月闇、木の下闇にどまくれて、覚えし道も幾度か、同じ所にまひ戻る、跡に尋ぬる願立に、神や佛
の控へ纏、のばす命と知らばこそ。「ア、これ又元の道なるわ、これも今来た道ぞかし。この世からさ
へ踏み迷ふ、六道の辻覺束な、迷ふまいぞや。」迷ふな。」と、泣くぞ迷ひの種ならし。あれ寺町の鐘
の聲、一、二、九十は七々の、七つの知死期、最期も早と來にけらし。狼狽へて白たへくゞる畠垣、仇の
譬への朝顔も、今咲きかゝる花の露、夫れより先に凋む身は、明日の朝日にこの體、干さん曝さん淺
ましと、縋る涙の龍骨車に、あひの水さへまかすらん。世の中に絶えて心中なかりせば、冷泉二世の
頼みもなからまし。誰か仕初めしこの契り、音に聞きしは生玉の、それが初めのたい市之丞、つれて
男も名の高き、大和國や三笠山、笠屋三勝舞の袖、褌と褌とを引き寄せて、結ぶ無常の薄煙、千日寺
のはかなしや。別れし跡の寐姿は、夜中の鐘に目を覺し、母よくと乳呑子の、歎きを捨てし修羅の

たし。しゆらいも書付あるならば、代物遣らん。」と言ひければ、心得たんほを漬生姜、しほがひに花鯉、書出出し算盤に、しばらく時こそ移りけれ。伯母も宿へ行きつく頃、門を明けてたち歸り、「なう曾根崎の際まで往つたれば、中町の方が騒がしう、屋根へ上れのなんのといふ。手過ちが氣遣ひて、夫れ故に戻つた。」「ヤア心許ない。」と、内の男は追ひくゝに走つて出る。傳内刀押取つて、鉢巻引締め裾からけ、身拵へしつかと固め、實に侍の心掛け、奥へ入らんとする所へ、内の者ども走り歸つて、「ア、氣遣ひないくゝ。盗人さうなが二人連、濱筋の屋根傳ひ、中町の辻へおりて、福島の方へ走つたを、道通りが見つけて、聲を立てて騒いだ分。お騒ぎなさるゝ事でない。」と、いへども伯母も傳内も、「先づおつや様起しませう。」と、連れ立ち奥に入りけるが、案の如く小かんはなし。「これはこれは。」と戸棚を明けつ、庭の隅々詮索すれば、著替の帷子ひきほどき、庇の垂木に結びさけ、屋根へ越したに疑ひなし。「なう悲しや小かんが居やらぬ。」と、伯母が泣く聲、「落人あり。」といふ聲に、家内の男女驚き騒ぎ、「扱は今のぢや、程はない。随分追驅け、死なぬ先。」連れて北野はあんまり近い。死んだら體を梅田は爰ぢや。町衆までに御厄介、近頃御無心ながらへ走れ。八つの太鼓がでんくゝでんほ、あとがやとやの伊丹へいけだ、茶屋中組中駕籠の衆、國の侍交りしは、鬼に鐵槌煎餅屋の、伯母は小橋へ三重急ぎける。

明を寄せ誓紙を披き、「無南阿彌陀佛。」と合圖の詞、さつと引き裂き身を摺りつけ、待てども内より音もせず。「無南阿彌陀佛。」と引き裂いては身をつけ、引き裂きく男の刃、今やくと最期を待てど、内には疑ふ怨みにや、静まつて音もせず。「エ、死ぬる事さへ叶はぬは、これが誓紙の罰ぞ。」とて、寸に引き裂きて、どうど伏して泣きければ、「オ、尤も理や、つれなういふも身の爲。」と、皆々袖をぞ絞りける。涙を留め漸うと、「サ、氣が勞れて頭がうつ。母様のお文も見たし、些と爰で休みたい。誰も人の來ぬ様に、障子もさいて皆起つて下さんせ。」「オ、道理々々。傳内も端へおぢや。」と出でければ、「まうし伯母様平野屋へござんしたら、女夫のお衆傍輩衆、内外の者へも懇に、これから直に遠い國へ往きまする、もう此の世では逢ひますまい。年月の御懇わすればせぬと、つどくくに頼みます。伯母様もさらば。」と、外にいひさす襖さす、さすや障子の薄紙一重、見えざることこそ是非なけれ。はや臺所も仕舞ひ頃、丁稚起して、「こりやく安治川の宿へ往て、明日明六つに乗る程に、舟の用意せよといへ。内衆頼む、七つ過ぎに駕籠二挺、安治川まで約束して貰はうぞ。伯母様は氣が盡きよう、夜食でも上りませ。」「いやなう此の程胸がつかへて、夜食は思ひもよらぬ事。歸つて父にも悦ばせ、明日見立てに來ませう。」「夫れなら酒がようござらう。」「ハテなんの辭宜がある者ぞ、酒も何にも。」「ほしもない、闇夜を辿りて歸りけり。傳内も氣くたびれ、「内衆酒の爛しやれ、一つ飲んで寢み

死病うけたりとも、母様のなつかしさに臨終も仕損ひ、如何なる恥を晒さうかと、案じすぎしする程に、親の事は忘れぬ、あんまり叱つてたもんな。」と、文を顔に押當てて、消え入り絶え入り泣きけるが、封じ目切つて見たけれども、文體見たらば氣も落ちて、彌心が引かれうす。平様に談合したけれども、襖一重が七重の關、一人の思案に落ちかねて、暫し案じて居たりしが、いや／＼口でいふは安い事、どうなりとも間に合はせ、今宵の所を遁れんと、派拭うて、「ア、さうぢや、今とつくと合點した、親には思ひ替へられぬ。此方をふつつと思ひきり、なる程國へ下りましょ。伯母様も傳内も、今宵は歸つて明日早々。」といふ中にも、起請文を取られじと、守袋を後手に、棚の戸を細目に明けそつと入るれば、男も心得受取りしが、二人の心の危さよ。伯母傳内も悦び、「御承引辱し。とてもの事にかの男の誓紙を、只今破つてお見せなされよ。」といはせも果てず、「ハテ思ひきるからは起請は有つても反古なり。その上誓紙は男の方へ渡して、爰にはない。」とぞ陳じける。「いや／＼今まで懐に守袋が見えました。是非にお隠しなさるれば、慮外ながら手をかけます。」といへば男は神の中に見付けられては悪しかりなんと、守袋を戸の間より、小かんが袖に、顫ひ／＼返せしは、彌危き契りなり。「ア、待ちや／＼、尋常に破らう。」と、守袋を解くなかにも、「サア二世の固めの起請文、破るは佛神三寶の守めも切れ果てた。片時も生きてなかにせん。合圖の最期は爰なり。」と、襖戸棚に

ではすはなる身にぞまり、上の空なる世に習ひ、親の事も古郷の事も、忘るゝ程のお心には、いつなりはてた情なや。心なき者類も鳥は古巢を慕ひ、北國の馬は北風に吠くとは申さぬか。鳥獸もさうはない、親ない者は身を樂に、旅他國致せども、親の墓へ詣るとて、百里貳百里戻るもある。此の度御國の兄御様、御知行拜節親御達は御隠居、髪を下して樂々と御法體の筈なれども、おいとしやお母様、つやが戻つて、二人の親が法體の顔見たらば、何ほう残り多からう。ま一度髪の有る顔を、おつやに見せたいばかりに、惜しからぬ頭の雪、解くも撫でるも子の可愛さ。早う連れて歸つてたも、傳内様頼みますと、家來の我等に様つけて、待ち焦るゝ親心、私許りすごとくと、戻つて生きてござらうか。手を出して兩親を殺すも同じ不孝人、堅牢地神のいたゞきに釘を打つとの教へあり。釘は鍛冶屋が細工にて、打ちかけはなされまい。曲もないお心や、我等が母はお前の乳母、養君の顔見んと、目を數へ指ををり、待ち憧るゝ母が心、思ひ遣られてお母様の、御心底の悼はしや。即ち母御の御文。」と、懷中より取り出し、「この直筆を御覽あり、篤と御思案あそばせ。私が腹立も皆おいとしさ故なり。」と、泣いっつ叱つつ様々に、詞をつくし諫めしは、奇特にもまた哀れなり。小かんも母の文と聞き押戴き、上書見れば、「おつや殿參る母より、この方無事。」と書かれしが、「お筆に年のよつた事。十五年の年こゝへ來て、八年をがまぬ親の顔、見たうなうて何とせう。生身は死身、若しひよつと

存する。」と侍泣にぞ泣き居たる。伯母涙にくれながら、「さりとては面目なや。何もかも伯母が科、あの人ばし恨みやんな、身を賣らせたも我故。この度國の出世につき、下るはその身の仕合なれど、あの人も大坂に思ひあうた方ありて、深い約束逃れぬ中、其方に隠して金調へ、伯母が力でかの男と夫婦になして年月の、望みを遂けて遣りたさに、身を碎いても煎餅屋、押せば碎ける身代の、底を見せたる恥かしや。この上其方が心入れ、國へはよしなに言ひ遣つて、あの子が大坂で彼の男と、添はるゝ様にはなるまいか。遙々上つた乳兄弟、よからぬ事を聞かするも、皆此の伯母が身の因果、世の中の浮き沈み、子を賣る親は多けれど、姪を賣る伯母は我許り、恨めしの娑婆の境涯や。」と、聲をはかりに泣きければ、小かんも共に涙に咽び、「知つての通り胤腹一つの兄もあり、妹もあれど如何なる縁にか母様の、わし一人が祕藏子で、海にも山にも譬へられぬ、御恩をうけたこの身なれば、明暮逢ひたさおゆかしさ、身體は大坂に残つても、魂魄は母様の懐に入つてゐる。これ程に思へども、生なか武士の娘とは、薄知に人も知る、免れぬ義理にからまつて、大坂の土とならねばならぬ。其方に任する、免も角も煩ひとなりとも、いつそ艶は死んだとも、何様なりともいうてたも。其方を頼むこの儘に大坂に置いてたも、國へは嫌ぢや。」と手を合はせ、拜み口説くも哀れなり。傳内、「わつ。」と聲をあけ、免角も言はず歎きしが、「扱もく浅ましや、口と心が皆違うた。氏より育ちが恥かしい。は

免なりませ。」と、奥の座敷に通りが、客といふは國許の迎ひの人。伯母は「はつ。」と許りにて、「小かんはあの人見知らずか。あれこそ其方の乳母の子乳兄弟、今度の迎ひに上つた人よ。」「ヤア知らなんだ恥かしや。」「いや其方より伯母が恥。この勤めをする事、國の人に見つけられ、最早言譯ないわいの。」と、伯母姪ひと抱きつき、聲も惜しまず泣き居たり。侍鎮めて、「サ、これ／＼些とも苦しからぬ事。親御達御浪人とは申せども、國では賤しき業もならず、大坂は誰知らず、如何なる身過なされても、名字に疵は附かぬとて、覺悟の前で上されし。夫れ故他人はさし置いて、乳兄弟の拙者が参る事、御内證の恥恥辱承つてよい様に、計らへとのお迎ひ。いかにしてもこの間、伯母様の詞といひ萬事合點参らぬ故、客と偽り方々を聞き合はすれば、平野屋の小かんは鐵杵煎餅の如の由聞き届け、猶念の爲一昨日表向の御一座、稚顏疑ひなしと藏屋敷にて金調へ、今日晝の間に堀江とやらん前の親方、平野屋亭主と對談し、本金十二兩相濟まし、一札取つて今宵から、自由の御身に致したり。最早氣遣ひ遊ばすな。私は乳母が倅、和田傳内と申して家中に若黨仕る。おつや様と御同年稚名は石松。五つの頃までは夜晝お傍に付きそひ、一緒に遊び育てられ、七歳より男の身は、大身小身隔てなく、奥へ参らぬ武家の作法、互の顔は見忘れても、乳兄弟なり主従なり、私迎ひとあるならば、恥も恥辱も振捨てて、御息災な容顔見せて下さる筈なるに、お心までが變つたは、些と御恨みに

細く、切れかゝりたる玉の緒の、結び續がれぬ二人が命、危くも又無慙なり。はや家々に行燈あけ、面々約束々々の、客も見ゆれば酒肴、吸物にする蜷川、水も色めき賑へり。小かんが揚の侍も一僕連れて、「何とおさが遅かつたか、小かんは來てか。」と腰かくる。「これはく、小かん様は今朝から待ちかねて、たんと腹を立ててぢや。ふられさんすな、恐いこと。いざ先づ奥へ。」と伴ひける。小かんは色を曉られじと、「この長い日をうつかりと、よう待ちほうけにさんした。南か堀江かきつと吟味も仕たけれど、馴染が無いだけ免してやる。そのだいに酒飲ます。」と、挨拶もおしきせの、袂を戸棚に打覆ふ。北野の伯母は二三日、夜も寐ぬ目許とほくと、「和泉屋殿は此方か、平野屋の小かん殿をちと呼び立てて下され。北野鐵柳煎餅といへば合點、頼みます。」といひければ、さかも日頃は薄知の、座敷へ出でてしなく、囁き、「一寸立つて逢はしやんせ。」と、いへども跡の氣遣ひに、棚のそばも離れ難く、座敷へ伯母も呼び難く、どうか斯うかと思ふ顔、客は見てとり、「ア、これく、我等は一見、明日は國へ下る者。お客衆でも苦しいない、これへお呼びなされ。」といふ。「いや私が伯母様、話したい事がある。自由ながら其の間、端へ立つて下さんすか。」「何が扱く、話の時分は立ちませう。近付にもなる爲、早うこれへ。」と言ひければ、さが打笑ひ、「粹かなく、當世は田舎衆程氣が通る。」と走り出で、「これ伯母様お客へ斷り申した、奥の間へ通らんせ。」「それなら斯う通りましよ、何れも御

死神の誘ふ命のはかなさよ。和泉屋には、「小かんさまく。」と呼ばはる聲々、「南無三寶最期の邪魔さらば。」とばかり平兵衛、堤をおりて身を何と、なすび畑に隠れけり。和泉屋の男ども門に出で、「そこに何してぞ。屋内がお前を尋ねて、太鼓鉦がいらうとした。」と言ひければ、「ア、仰山な。涼みがてらに紙鳶見に出た、太鼓鉦がいらうとは、朔日早々祝うて貰うて、忝い。太鼓鉦も鏡鉞もやがていらう。」と涙ぐみ、跡に心は残る日の、影と入りつ、暮れにけり。空にたなびく紙鳶、次第々々に引き下す、中に小袖の絹紙鳶、風を含みて下りかねしが、絲真中よりふつつと切れ、和泉屋の小座敷の、軒にひらめき落ちたりけり。「あれよく。」といふ程こそあれ、紙鳶主大勢ひき連れて、「貰ひませう。」と驅け入れば、あたり近所の血氣者、「それ遣る物か。」と走りこむ。道行く人はこれ次手に、お山見べしに込み入るを、内の者ども押へても、我人差別あらざれば、天の與へと平兵衛、羣集に紛れ奥座敷の庭までどやく入りける。小かんは見つけ氣をあせる。免角する間に漸うと、扱ひ詫言たらしくにて、紙鳶を貰うて立歸れば、皆入り込みの大勢も、残らず表に出でて行く。小かんは男を招きあけ、違棚のづし戸を明け、夫を押し入れ、「すはといふなら此方から、南無阿彌陀佛と聲かけう。それを合圖に其の剃刀で、わしが肋を襖越しにぐいくとゑぐつて、うんというたらこなさんも、尋常に死んで下さんせ。」と、戸を引き立てて寄りかゝり、口に鼻歌心には、彌陀の名號一筋の、紙鳶の絲よりなほ

ち次第、拭ふも人目つ、ましや。男は笠のうち情れ、「親方も道理の勘當これ以て恨みなし。そなたを國へ下さずば、親に不孝の冥罰、行末善からうやうもなし。下したいも一杯なり、別る、は猶憂し。この平兵衛が胸一つで、本國の親達まで歎きをかけ苦をかける、免したも悪縁ちや。」と笠を傾け泣き居たり。「あれやくと忘れて居たもの、親の事又言ひ出して泣かさしやんす。打たる、杖もゆかしといふ物を、拳一つ當てられず可愛がられた理在の親、これは懺悔ぢや忘れぬ。迎ひに來たは乳兄弟、顔恰好は覺えねども、親達と申うて見たけれども、町方に居る分に言ひ成した私が身が、ばしやれた形で逢はれもせず、親の事を思ふやら、こな様の事思ふやら、心を推して下んせ。」と、又さめざめと泣きけるが、「これではすはといふ時に、國へ心が引かされて、未練の出來まいものでなし。こな様に逢ひ次第、死んでのけうと覺悟をする、剃刀は身を離さぬ。これ見さんせ。」と、袖口から手を引き入れて懐の、剃刀の柄包ながら、男の手にしつかと持たせ持ち添へて、「南無阿彌陀佛。」と我が腹に突き立つるを、挽ぎ取つて引つたくれれば、「こりやなぜに、もう逢ふ事は優曇華、こな様の手で死にたい。」と、囁き口説くぞ哀れなる。「はて悪い合點な。まだ人立もある中に、思ふ様に死なさうか。その心底に極まらば、まそつと爰にさまよつて、日の暮るゝに程はない、人顔見えぬ時分に、足を限り何處でも、見事に身體を並べたい。平に待ちや。」と制すれば、「同じくは今爰で些とも早う。」と、

のいふは皆悪口、閒夫の何のといふ様な、深い譯では更々なし。今でもふつと見えたならば、どこぞでそつと逢はせてや。此方からとんと埒明けて、手を切つて退けましょ。」と、口にはいひて目は涙さがは五音で推量し、「ア、そんな事氣に掛けて、この勤めがなる物か。世間の口に戸をたてて、錠おろすその錠鍵は、いかな鍛冶屋の平様に説へてもなるまい。」と、夕暮近き入日かけ、「お客様達見ようぞや、行燈の用意しや、甜瓜も冷しや、湯もとつてたも。小かん様もお行水、私も汗を流さう。」と、奥に入れば一座の色、「私から行水してこよう。」と、皆々表に出でにける。空も涼しき夕風に、はやる今年のいかのほり、雲に舞鶴とんびいか、から風招く唐團扇、鬼の頭も色里の、上に揚ればたよ／＼と、しなだれ上る藤の花、誰がふみいかの一結び、その思はくの紋つけて、袂すゞしき小袖いか、杯いかの品もよく、菊や牡丹の花いかを、戴きあぐるたいこいか、鰻、瓢箪、鯉いか、吹かぬ風もつ扇いか、雲をゑどるに異ならず。往き來の人も立ち留る。此の内にかの人の見えよかしと、紙鳶見る顔で表に出で、上下に氣をつくれれば、梅田橋の西詰に、淺葱縞に深編笠、「ア、あれさうなが。」夕顔の、黄昏たどる覺束なさ、先にもみつけて編笠の、下目遣ひ届かねば、心の中に招きあひ、目はいかのほり爪先は、其方の方へゆく水の、橋の詰までそろ／＼と、跡の恐さに身も慄ひ、傍へ寄り寄つたれども、人目にせかれ抱き付かれず。「文を見てから私が氣は、死んで居るぞ。」と許りにて、泣くにも涙落

提灯屋の息子走つてきて、「小かん様爰ぢやけな。提灯が出来ました、二つで四匁四分ぢや。」といひ捨ててこそ歸りけれ。「うれしや、さが様つい參つてきませう。むづかしながら四郎兵衛殿、この提灯の紋の脇に、書附して下さんせ。」といひければ、料理人は「お易い事、目出たう一筆みしらせう。」と提灯あくれば紋なしに、眞白四郎兵衛興さまし、「こりやどうぢや。四匁四分で白提灯、氣轉の悪い提灯屋、ちやつと紋を書かせてこう。」と走り出づれば、「これくもうよいわいな、提灯屋に科はない私が佛にうけられず、願の叶はぬ知らしめ、さうして置いて下さんせ。馳て梅田へ行く時に、どうで入らねば叶はぬ。」と、浮世をすねし言葉のはし、一座のよねや下女久三、「仕直しに遣つたらば、多分晩の時合にならう。歸らぬことは悔まぬもの、いうて歸らぬく。呟いうてなかへらぬ死出の旅。サア飲みませう。」と祝うても、定まる前世の約束を、逃れざるこそ哀れなれ。平野屋の小めらうが風呂敷包うちかたけ、「ア、熱や。」とて走り入り、「さが様ちとお耳借ろ。」と耳に口よせ、「内儀様のいはしやんす、アノ小かん様には、鍛冶屋の平様といふ間夫のお客が御ざんすが、様子あつて逢はせませぬ。晝からちらく此の邊で見えまする、門より外へ出しません、行水もそこで頼みます。氣をつけて下さんせ。」と、囁き散らし歸りけり。小かんははしく聞き附けて、「さが様今のは何のこと、平様の事であらう、さりとては氣の毒な。先の人は親方持、浮名が立つては職人の、身の爲に宜からぬ噂、人

納めの紋日ぞと、思ひ／＼の揚の客、小かんは田舎の侍に、初手は内にて二つめは濱筋の和泉屋、
さがが許へと出かけた。女亭主の譯よし、穂長の煤を打拂ひ、人に情を掛鯛の、むしり肴と春
めかす、そのかきもちの氷より、涙の氷とけやらぬ、うき身の上こそ無慙なれ。「あれ／＼勝曼参りの
よね様達、駕籠が戻る。」といふ中に、早表まで昇きよせて、簾打ちあけ、「コレさが様、今下向しまし
た、小かん様爰にか。こなさん参るといはんしたが、道寄りせずにおとなしう、早う下向さんした夫
れも合點。早う逢ひたい人がある。」と、ざゝめき戻る駕籠の數々、衆人愛敬愛染の、威徳も見えて頼
もしし。さがも其々挨拶して、「松屋丸屋河内屋の、よね様達も此方の揚けて参らせましたが、遅い事
や。」といふ所へ、程なく駕籠を「き入る。」皆様緩りとやらしやんす、道頓堀でござんしよの。「よ
いする／＼三十郎の初日見て、芝居では大酒戻りは駕籠でむしたてる、熱いこと／＼。この暑さでは
霍亂して、伊田森のうらみくづ水、一つ飲ましや。」と叫びしが、「ヤア小かん様、こな様は参らずか。
定めし昨夕平様と、手を引きあうてで御ざんせう、小憎い事や。」といひければ、小かんはつと肝にし
み、「さうした事ではないわいな。今日の客は一けんの田舎の侍、日が暮れて見える筈。それまでは
愛染様へ参らうと儘なれども、心に大願あるゆゑに、提灯二つ紋付けて、今日の間に合ふ様に、一昨
日から誂へ、今にも提灯出来次第参りたうござんすが、提灯の出来ぬのも氣に掛ります。」といふ所へ

ければ、親方もこれまでと、焼鐵おつとり大地へどうど投げつけ、「エ、欺された騙られた。十八年此の方、たとへ犬猫飼うたりとも、これ程にはよもあるまい。半時も内には叶はぬ、叩き出せ。」と飛びかゝり、胴骨をどうと踏む。情なき丁稚ども、柄長の鐵棒手々におつ取り、目鼻もわかず打ち出す。平兵衛大聲あけ、「假令擲たうが叩かうが、この平兵衛はこれの中より外、往き所はよそにはない。死ぬるともこの内から直に死ぬる。」と、驅け入るを敲き出し、走り入れれば敲き出し、なんなく辻へ打ち出し、打つて清めの鹽水や、跡は火を替へ水を替へ、表をかふる備後町、へりも切れはて縁切れて、とこ離れゆく。三重戀路なり。

中之卷

戀草の種うゑんとて固めしは、神か佛の堂島を、きて見よとてや田蓑橋、夜々を重ねて大江橋、橋のゆきけた雪ならば、幾たび袖を拂はまし。花のふゞきの櫻橋、梅田のみどり曾根崎の、青葉隠れの鳥の音も、法華長屋の名を立てて、神祇釋教戀無常、中にこめたる中町や、その家々の吉野川、流れの数の多ければ、よねが情のはなの綱、採ひとられぬ人もなし。色里に誰が身の樂で身を捨つる、人はなけれど取りわきて、平野屋小かん一まきは、語るも聞くも哀れなり。今日は六月朔日の、正月

でかしやつたく、それが其方の身の果報。」と、皆々悦びほめにけり。親方も機嫌を直し、「流石男ぢや満足した。この上ながら此方の心の落著くため、誓文の誇據に。」と、三尺許りの棹鐵の、夕日の如く焼けたるを、鐵挾にて引き出し、鐵牀にどうど直し、「これはこの度禁中様、お内侍所の釘下地。この内侍所には日本の神々御ばん有り、八萬餘座の神の司の御寶殿、その釘になる黒鐵。今の誓文偽りないと見る前で鐵火を握れ、心に誠ある者は、氷よりもひややかなり。少しも偽り有る者は、腕焼けたゞれ落ちるといふ。佛神に誑はない。其方も發起して、今の誓文立つるからは、熱いことはあるまい。サア握れ。」といひければ、平兵衛色變り、只、「は、く。」と許りにて、後退りにぞなりにける。女房笑止がり、「ハテ爰な人うろたやる。思ひ切つたが定なれば、鐵火に怖い事はない。但しは當座まかなひに、金取り欺しの空誓文か、さりとては悪い合點。一生の病をぬき、身上の固まる事、さつぱりと思ひ切りや。思ひあうた馴染の中、離れがたない筈なれど、それは一度の皮切り、なんほいとしい戀しいも、身が立たねば叶はぬこと。但し思ひ切られぬか、サアいやおうの返事しや、どうぞく。」と手詰になれば、平兵衛顔も心もうろくと、否といへば主人の慮外。おうといへば年月の、小かんが情仇となる。思案涙に胸つまり、「なう旦那様おへ様おつま様も頼みます、その御返事は私が身に成り代つてどうなりとも、思ひ分けて下さりませ。鐵火は御免。」とばかりにて、かつばと伏して泣き

いて無念な親方の、心の内を推量せよ。さきにも仁介長三めが、噂をするを叱りつけ、今で彼等に面
目ない。去年の春から際々に、或は百日八十目、懸の算用不埒にて、何時の際か帳面の、さつぱり濟
んだ事が有る。夫れのみならず堺筋の絹屋から、紺縞子の女子帯五十六匁、緋縮緬八尺三十五匁とい
ふ書出し、覺えが無いとて返せども、跡からは持つて来る、不思議な事と思うたに、今日といふ今日
内の鼻が緋縮緬の正體を見届けて歸つた。ヤレ勿體ない冥加ない、灰まぶれの鍛冶屋の仁藏、身にさ
へ著にくい緋縮緬に、足を四本踏んごんで、その罰はなんとせう。身のゆく末が可愛い。」と、聲をあ
けて泣きければ、女房娘諸共に、「悪う聞きやるな平兵衛。」と、共に袖をぞ絞りける。罰利生有る親
方にて、涙を止め、「こりや平兵衛、いうて居ては果てしが無い。今までの事は皆免す、これから魂
入れかへ世帯を持つて出るまでは、茶屋の見世へも揚るまい、お山と詞もかはすまいと、屹度誓文た
てうならば、此の度の金縦へ四兩が五兩でも、今出して取らするが、サアなんと。」と、いひければ、
平兵衛飛び退り、兩手をついて頭をさけ、「申しおへ様おつま様、旦那様へ詫言して、御禮申して下さ
りませ。道知らず恩知らず、大悪人の私に、金まで出してこの難儀、お救ひに預ること、親も及ば
ぬ主の慈悲。今日は祝ひ月二十八日御縁日、不動の刃に喉笛を突き通され、身の家職の鐵牀に打ちみ
しやがる、法もあれ、又や二度悪性ごと、ふつつと思ひ切りました。」と、涙を流しいひければ、「オ、

の道一通り、火を清めるといふ事は、商賣なれば知つて居て、その上でする商賣。一旦はさきも有れ、一生主に逆らはず、詞一つ返さぬこの平兵衛が、是れほどまで逆らうて申すからは、身拔のならぬ譯有りとお目にみて下されて、その御恩を忘れる平兵衛めではなきものを、但し銀を引きこんで損懸けうとの氣遣ひか。年の切は去年明き、身を質に置くからは、お氣遣ひはないこと。平兵衛が身一生、生きる瀬か死ぬる瀬の、大事の銀に行きつまり、漸う大和の宿村が、詭物を天の與へ、時の間を合はせたく、奉公して十八年目、始めて旦那に叱られ、あたはぬ身にはあたはぬ金、命を捨つるも世のならひ、夫れに悔みは残らねども、額に毛貫もあてる者、見世の前で晝日中、町の衆、道行く人、友傍輩も見ざるぞかし、丁稚小者をやる様に、曲もない打ち擲き、脊骨は折れうが碎けうが、打たる、杖は痛うない。憐れを知らぬ親方殿、見て居て打たするおへ様やおつま様の情ない、お心の鐵槌が身節にこたへ染み渡り、痛い悲しい恨めしい」と、泣いては恨み恨みては、我が身の科を悔み泣き、色に迷ひの心の闇、推量られて不便なり。親方彌腹をたて、「鹿を逐ふ獵師は山を見ずとは汝が事よ。お山狂ひに眼がくらみ、人の理非も身の上も、一寸脇が見えぬよな。汝が身の立つことならば、彼等に商ひするまでなく、五百目や六百目は、この利右衛門が出しかねぬ。遣うても止りの知れぬ悪性金、氣儘にさするはおのれが身に、毒飼といふものよ。内外の者も町衆も、三人寄ればおのれが評判聞

けるこそ尤もなれ。平兵衛至極に詰れども、懐の銀に離れ難く、「ようござる。今の間に私が打つてやる。地鐵は後で算川」と、横座に直つて足鞠、地鐵打ちくへ吹きたて、「丁稚ども、傍輩の好みに相槌一つ打つてくれ、平兵衛が一生の恩に受けう」と頼めども、親方の顔色みて、誰か詞の相槌さへ、打つ者とはなかりけり。平兵衛恨み泣き、「エ、さうはせぬもの聞えぬな。うぬらが草臥れ眠たがる時には、おれが代りをして二人前を働いて、宵から寝させたり休ませた恩徳を忘れたな。よい頼まぬおきをれ、裏鐵の千足や二千足、平兵衛片腕半日の仕事に足らぬ。親方傍輩ひとつになつて、この平兵衛が一分すてさせ、この首尾なら死なうも知れぬ。死んだらばこの一念、汝等が首引抜いて。」とてこゝとつてらこゝと、とてこゝと打つ槌に、落つる涙も溢れそひ、湯玉とたぎる許りなり。親方土間に飛んでおり、鉦鐵抜取つて投げ、「朝晩清める鐵牀に、涙をかける罰あたり。」と、槌の柄をおつ取り直し、胴骨を四つ五つ、たきつけ、「汝が敵はこの銀。」と、懐に手押し入れ、「これ銀を返せば言分ない。此方には請取らぬ、どこぞ外で誂へや。」と、投げ返せば二人の者、詮議無益と思ふ顔、「手附の一貫覺えたか、平兵衛重ねて取りに来る。」と、いひ捨ててこそ歸りけれ。平兵衛、「わつ」と大聲上げ、近邊も恥ぢず歎きしが、「さりとては旦那殿、舊功なした育ひ立てを、可愛が定か憎いが定か。只今のお詞は弟子子不便ないひ様で、又此の仕方は平兵衛に、首縊れとのなされ様。鍛冶

有る。奈良郡山左手右手、吉野郡の奥までも、雪駄屋衆は皆存じた。御兩人の御在所は、何方。」と問へど聞かぬ顔、あちらへすべらし紛らかし、只名所を隠すにぞ、平兵衛も親方に、根問ひさせて悪しかりなると、「サア請取は仕舞うたり、渡して早う戻しましよ。」と、取らんとすれば亭主押へて、「否この商ひはせまいわい。銀請取つたら早戻せ、始め聞けば請取らぬ。あの衆は大和の金銀たんと持つた村の、牛馬まで持つた様、あの衆の誂へ物、この利右衛門は受取らぬ。我等が家職に疵がつく、勿體ない。」とかきさらへ、引抱へて奥へ入る。「先づ待たつしやれ、それでは私が立ちませぬ。損のいく細工でなし、銀に一厘不足なし。手付取つて手形して、渡す段に變改して、職人が立ちますか。様子が有らば有るまで。それなら私が内證の自分仕事にませう、時には家に難つかず、疵がつけば平兵衛が疵。渡さねばならぬ。」と、取付くところを突きこかし、はつたと睨んで、「うつけ者、疵が附けば平兵衛が疵とは、どの口で吐いた。この利右衛門が目代にして、弟子手間取をも引廻す、汝に疵を附けまい爲よ。京御所方の御普請の下細工の釘請取り、火水を清める最中に、正しうもない銀を取り、作ひつきあふ汝が先いきせうと思ふか、冥加が有らうと思ふか。五兩に足らぬ腐り銀、寶の山と惜しみを、根性の甲斐なさで商賣がならうか。けつく丁稚の時分には、人にも成らうと思つたが、エ、こくに立たぬ根性。」と、涙を浮め齒ぎしみし、「向ひ鄰へ聞えぬうち、銀を戻して去なせをれ。」と、怒り

かけの代に引きがない、こなたのはうにはこれが徳。ちよつと一筆請取して、出来た分くだされ。」といひも仕舞はぬ半分間、三兩三分につかみつき、「これでざつと濟みまする、まあ二分や一分は伯母がどうぞ仕やりましょ。」と、われ許り合點の、數もよむやら讀まぬやら、懐におし入れ、「請取でも手形でも起請でも、仰せつけられ。」硯紙とり出し、「これ旦那様、上物の裏金二千足戸棚にあらう。取り出し下さりませ。」とぞいきりける。亭主は裏金束ねながら持つて出で、「平兵衛が話で聞きました。大和の雪駄屋殿は各で御座るか、これはあはぬ細工。私が聞けば請取るまいに、平兵衛が在所から、懇仲ぢやと申して、どこでやら請取つて。重ねて斯うは成りませぬ。それおつまお茶進じや。」「あい。」と返事も色づきし、赤繪の茶椀手にするて、「出花ひとつあけましょ。」とさし出せば、「これはくゝ忝い。」と、取らんとせしが、「いや／＼お茶はたべますまい、御無用になされ。」といふ。「お前は嫌なからお連様。」「いや私も御免なれ。」「平にお一つ上りませ。」「何しにお辭儀申しましょ、兩人ながらお茶は得たべませぬ。」「そんなら白湯でも上げましょか。」「いや／＼所望に御座らぬ。」と、いへばおつまも打笑ひ、「ハア愛想もない事や、こりや仁介煙草盆持つてこい。」とて入りにけり。仁介が奥より煙草盆、鍛冶屋炭火のおこり立て、有る火はおいて懐より、火打に火口打ち出し、煙草のむ身は石の火の、光の間をも持ちかねて、身の程知らるゝはかなさよ。亭主これに心付き、「何れも大和のお衆と

少と借錢を輕めん爲、味な商ひからくんで、三兩餘りは今日明日に請取る筈の約束。はて頬は面、この銀を請取り次第遣りませう。二分や三分の足らぬ口、それはその時どうもなる。何とぞ首尾して、小かんを手へ入れる様に頼みます。國へ下るに極まれば、この平兵衛から死にます。二人の命を助ける慈悲、眞の後生に成りませう。伯母様偏に頼みます。」と、又手を合はせ泣きければ、「いや頼む事ではござらぬ、私が身に掛つた事、その銀さへ調へば、何の案する事もない。ちつと胸が開いた、平野屋へも立寄つて、小かんにいうて落ちつかせう。そんなら早う歸りましょ。内方へも能いやうに。」と、出づれば、「これくこの傘小かに返して下さりませ。」「なうくこれは幸ひ。」と、差いて出でたる傘や、虎が涙も引換へて、牛天神の野邊の露、消ゆる間近き三重命なり。見送る道もしみつし、草鞋に編笠の田舎商人二人づれ、「ヤア平兵衛殿いかい暑さでござるの。誂へ物ども出来ませう、今日受取つて銀も濟まし、明日下りたうござる。」といふ。「いかにもく上物は皆出来たが、急な細工が支へて、中から下の竝物が揃ひにくい、銀を先づ請取つて出来次第に跡から下しませう。銀を持つてござつたか、何程持つてござつた、四兩あしもござるか。」と、そゞろに高をぞ聞きたがる。「いや上物さへ出来たれば、竝は遅うて大事ない。誂への分算川は、今日残らず仕切つて。」と、腰のうちがひ取り出し、「先度手付に一貫文渡し、今三兩三分、相場は金六十目、錢十五匁合はせて二百四十目。し

ちと女夫は當惑して、様々思案して見ても、今で請出すあだてはなし、恥を捨てていうたならば、國の迎へが藏屋敷で、つい銀を調へ國へ連れて歸らうし、時にはこなたと縁切れる、どうした物で有らうと、小かんに問うて見たれば、いとしやあの子も泣き入つて「國へ歸つて親達の、顔も見たうはござれども、平様に一寸も離れうとは得言ひますまい。協はぬ首尾に極まつて、國へ下るが定ならば、私見事に死にまする。伯母様を頼みます、國へ遣らずに平様と、長う添はせて下され。」と歎くも可哀し道理なり。恩を受けた大事の姪、爰は一つと思つても、手業にいかぬは銀事。國の迎ひは早うといふ。あの子は「どうぢや。」と氣をせきやる。爲方つきてこな様と談合に來ました。三年を十二兩、一年半は勤める。残つて半銀六兩なれど、ひき日の何のと適切七兩は入りませう。私が方で二兩二分は身の皮剥いでも調へましょ。まあ四兩二分あればあの子をしやんと請出して、こな様と疾うから夫婦にしたといひなし、國へ遣るにも女夫連、婿入させて濟ませども、その四兩が見えぬ故、大事の姪が望みも遂げず、死に生きも出來かねまいと、思へば胸も塞がつて、今朝はおもゆばつかりで、何も喉が通らぬ。これ程しきで此方様へ、身代打明け話すこと、恥かしい口惜しい無念にござる。」と、手拭も絞る許りに泣き居たり。平兵衛、「はあ。」と吐息をつき、「はて扱思案に行きあたつた。私も近年彼故に、旦那の懸錢も何もかも、しやちらさんばう、近附中に痛手を負はせ、動かれぬ身になりし故、

千年百年生きようが、大福長者にならうが、女房の奸に身を賣らせ、その金取つて立つものか。腹を切る。』とて喚かれたを、可愛やあの子が涙を流し、『伯母様許して下さりませ。國の父様母様が浪人になければ、こなさま達へみつぎの筈、そのならぬが悲しさに、私が身を捨てました。他人でも有ることか、伯母は親の片割、こな様達許りぢやない、國にござる母様への孝行と思ひます。伯母様を母様と私や思うてゐます。』と、病みほうけた伯母に抱き附いて、聲をあけて泣きやつた顔、今に忘る、事もない。その蔭で人參の百服餘りも飲んだ故、病の根を抜きこの様に身代の尾も見せず、暮すは小かん孝行故。こな様元は知らぬ人、小かんがいとしがる人と、いうて互の懇あひ、命を助け身を助け、奸ではなうて親ぢやもの、如在にせいといやつても、私等に如在はない物を、恨みが結句で聞えぬ。』と、邊を忍びしくくと、泣きくどきて語りける。平兵衛手を合はせ、『餘り氣遣ひ切なさに、恨みらしい詞つき、眞平々々御免し。此方を伯母御といふ事も、小かんがいうて知つてゐる。先づ此の度ひよんな事できたといふが氣遣ひな、落付かせて下され。』と、猶氣をせくこそ道理なれ。『オ、さればいの、内々國の親御前へ、茶屋奉公は隠して、大坂の歴々の奥様へ預けた分。所に今度小かんの兄御、殿様より呼び返され御奉公にありつかれ、それ故あの子を國で縁につけるとて、乳母の息子の乳兄弟が、昨日の朝おつや様迎ひにきました。』と、幼名いうて上つて安治川に宿をとつてゐる。こ

もの、お残りおほや。」と挨拶す。「さればの事、平兵衛の懇と、かねて話家も知つてゐまする、重ねてから寄りませう。あれみなおここの時分ぢや、サア先づ内へ。それ平兵衛馳走しやや。」と人あひよく、皆々奥へぞ入りにける。平兵衛あたり見まはし、傍へ寄つて小聲になり、「なんとしてござつたぞ。今日立ちながら平野で、小かんにちよつと逢うたれば、物案じ顔して、『今夜中には是非共ちよつと来て下され。ひよんな事が出来ました。』と、跡先もなういうたれども、供の事なりや二言と聞かず、おうというて戻つたが、どうした曰くぢや氣遣ひな。萬事此方を頼んでおく、何事ができたぞ。」と、恨み顔にぞ見えにける。女房も早涙ぐみ、「オ、道理。さりながらついでに濟まぬ事、せかすと様子を聞かつしやれ。今までは私が身を、小かんの肝煎取次のと、此方へも隠したが、眞實はわしが姉の子現在の伯母好。父親は播磨で鷹匠頭の奉公人、五十石に五人扶持、二本差いた人の子なれども、親ごぜが殿様の御祕藏のお鷹をそらし、お氣に違つて浪人し、あの子許りを大坂へ、伯母を便りに何方へも、仕附けてくれと上されしが、折節悪う不仕合、こちの夫の長煩ひ、漸う本復めさつたりや、一昨年の大地震。私は氣癪で牀に付き、身代どうも立ち兼ね、すでにかまどを破る處、あの子が私等に隠して肝煎頼み、堀江の茶屋へ三年を十二兩に、身を賣つてくれました。私は聞いて目をまはす、夫は男の腹をたて、『身こそ貧なれ大坂三郷隠れもない、鐵槌煎餅三郎兵衛、かゝが氣色が本復して、

ア、御免なりませう、大文字屋の利右衛門様とはこなたか。北野鐵榎煎餅三郎兵衛と申す者の女房。此方の若衆平兵衛殿ちよつと呼び出して下さりませ。」「ハア、中々や。平兵衛は今日か、や娘が不動参りの供をして、此方の近所へ往つたが今に戻らう。煙草でも呑んで待たつしやれ、茶進ぜや。」といひければ、「ア、お構ひなされますな。平兵衛殿とはふとした縁で懇に致しあひ、今では親子同然。とうに内方へもお禮に参る筈なれども、夫婦の手ばかりの商賣、手があけば口があくで、おのづから御無沙汰。今日は平兵衛殿に用ついで、内儀様にもお目に懸らうと存じ参りました。これはと、の手焼鐵榎煎餅、さまに進げて下さりませ。皆平兵衛殿の朋輩衆か、暑い時分に熱い仕事、御大儀でござんする。あれ〜辻まで平兵衛殿お供して見えまする、おへ様さうな。」といふ所へ、内儀娘平兵衛が、差掛傘の印にも、新地平野屋墨ぐろに、櫻の丸の花の露、花の雫も艶きて、人々かへれば、「ヤ、戻つたか、雨にあうて氣がせかうなあ。」「いや〜平兵衛の近附多うて、傘も借つたり休んだり、ゆるり〜と蛸川の新地を、おつまに始めて見せました。」と、語ればおつまも、「なう父様、平兵衛の案内で、美しいお山衆をたんと見て來ました。」「オ、そりやよい慰み一段々々。北野の煎餅屋のお方平兵衛に逢ひたいと、先から待つてぢや。鼻土産がある禮をいや。煎餅屋殿も先づ内へ。」と、亭主は奥に入りければ、「ア、おへ様でござりますか。今日は宿にをりましたら、澀いお茶でも上げましよ

「雨が降らうが雪が降らうが、平兵衛の供からは氣遣ひは御座らぬ。堂島新地蛭川、茶屋暗屋煮賣屋で、鍛冶屋の大盡平様と、誰知らぬ者もない平兵衛殿、傘の五本や十本を、借りがねは仕やるまい。わし等が持った傘では、お山衆の濡驅は堪るまい。」とて動かねば、親方利右衛門、「やいこりやく。又しては汝らが、謗りはしりに兄弟子の、中言をいひをるか。アノ平兵衛めはこれの見世を任せる程の久しい者。なんほうでも身をうつつて仕損ふ者でない、平兵衛が眞似したら汝等當が違はうぞ。同じ様に汝等が文の使も仕をるけな、連立つたも知つて居る。あの邊は人を釣る、甘い餌に喰ひ付きお山の味を喰ひ覺えたら、それ限りに追ひ出す。」と、苦々しくいひければ、「いえく私や文持つてたつた一度、仁介は先度も連立つて、お山喰うて來たけな。」「エ、あの人の讒吐きやる、おれがどこに喰うたぞ。」「オ、わがみ度いやらぬか。本山寺の開帳から、平兵衛殿と新地へいて、喰うて來たとサアなんといやらぬか。」「わあいそれはの平兵衛の、茶屋へ連れていて、旦那様にいふまいなら、甘い物喰はせうとて、主は奥の座敷でお山を喰やつたさうなれど、私は端の上口で鰻の蒲焼許り、お山は口へも寄せなんだが、めいよな鰻といふ物は、喰へば喰ふ程お山が喰ひたうなつてくる。鈍な物ぢや。」と笑ひける。親方も返答を、他へそれたるの音、てんく天氣も照り降り雨に、五十餘りの女房のとつて置きをば濡らさじと、「嬉しや此方さうな。」とて走込みしは、「誰でござるぞ何方からぞや。」「ハ

心中刃は氷の朔日

上之卷

さりとても戀は曲者みな人の、地金をへらす焼釘は、敲き直いて意見して、焼き直いても悪性の、酒と色との銚や。煮ても焼いても嚼まれぬは、鐵橋焙籠鐵火箸。その癖細工は器用にて、精さへ出せば二人前、せねば釘貫抜けていく、讀み書きかな文鐵挾、兔角萬能一れん物、鐵槌答へぬ糟釘で、後は吹きあけ靴ふく、唄 鍛冶屋のてこの衆てつからり、ころりてんくからりちんからり、ちんくからりと打ちあけて、帳面許り合ひに合槌、いかな打出の小槌なりとも、續くべき様なかりけり。弟子子大勢つかふ身は、油斷させじと旦那から、灰猫の顔振りあけて、「ヤア虎が涙のしるしが見えて空が曇つた。五月二十八日雨三粒でも降らねばおかぬ。女房や子供が不動参り、氣の毒や雨に逢はう。仁介でも長三でもちやつと傘持つて走れ。大降りがするならば、おつまが帷子濡らさうより、八分ぐらるで駕籠をかれ、女房にも足袋をぬぎやといへ。雪駄を腰に挟むとも、新しい紙遣ふまい、釘包んだ古反古、一二枚持つていけ。」と、匆々氣のつく職人の、金出來す氣ぞ格別なる。弟子共は不承顔、

ば、「わつ。」と泣き、叫ぶ聲々雷神も、思ふ中をばよも裂けぬ。涙の雨に二重三重、締め付けく、二丈の絹も我々が、一つ蓮は一丈ぞ、往生淨土は一寸も、のべも縮めも、「サアよいか。」首の結びめ生々世々、解けぬ契りの堅結び。「サアもう物はいはれぬ。」「いひたい事は御座らぬか。」「其方は無いか。」「私は父様母様が、懐かしいこれ許り。」「我はかみ様旦那の事、いうて盡きせぬこの外は、唯南無阿彌陀佛ばかりぞ。」「サア唯今かなむあみだぶつ、く、南無阿彌陀佛。」と踏み外し、落つる袂を引寄せて、抱きついても苦しみの。寄りては離れ離れては、足を縮め手を伸ばし、虚空を掴む臨終の、互の目には見えながら、物はいはれず岩代の、松にかゝれる下り藤、嵐になやむ如くにて、次第々々に弱り果て、消え行く星と諸共に、一度に息絶え目を塞ぐ、衿丈揃ひし死姿、刃に伏すは古手にて、これ心中の新物と、聞く人廻向をなしにける。

今宮心中終

や。「オ、おんでもないこと。假へ畜生界に落ち、蟲けらに生まるゝとも、同じ蟲と生まれうと、思ひ詰めたか。「つめました。「さ、はさりながら何にならうも知らぬ身の、人界の見をさめ、ま一度顔がよう見たい。「私も見たい。」と引きよせ、「我故に殺すか。「女房故に死なしやんすか、いとしいぞや。「いとしい。」と、盡きせぬ歎きぬ思ひ、思ひ亂るゝ夏草の、しをれ伏してぞ泣き居たる。「あれゝ夜明も近づくか、ちらゝ人の通ひも有る。二人が帯を結び繼ぎ、いうた通り。」と解かんとすれば、「いや帯を解いては見ぐるしからん。この絹は親方の商ひ物、盗みはせねども、斷りいはねば盗みも同然。これをこの木にゆはへつけ、旦那の絹にて首縊れば、旦那の手に懸るも同然、一つの罪や脱るゝ。」と、昔の例求塚、これも男と女郎花、それはくねるこれは又、うねりし松に手をとりにて、渡るも夢の浮橋や、無明の橋のいと細き、心の罪に踏み滑る、足を踏みしめ踏みしめても、上り煩ふ男の體、女子の身でさへ上る物、こりやどうぞいの。」と手を引けば、二郎兵衛涙を灣々と流し、「ア、主の罰の恐ろしや。この足袋の片足は旦那のお古、常は免もあれこの時は、頭にも戴くはず、土足にかけしその咎め、お許しなされ下され。」と、脱ぎ捨て登る松が枝に、「そりや雷光鳴らうぞや、吃驚して落ちまいぞ。」と、夕立頻る雷神、目指すも知らぬ松陰に、「何やら暗うて見えてこそ、慾深い事ながら、貌をよせて下さんせ、雷光の影になりとも、顔が見たい。「見せたい。」と、くわつと光れ

るとも、我が妻を避けて涙の袖おほふ。いや我は男よそなたをと、互に覆ひおほはれて、今死ぬる身も生身には、目に恐ろしき稻光、野なかの水に飛ぶ螢、御堂の影はまがはじと、歩みよろ／＼足たたぬ、恵比壽の森にぞ三重著きにける。二人は松の下陰に、どうど座を組み泣きけるが、男は氣弱き若い者、ア、譯もないことしたわいの。うちに居る時はしりのさきの、菜刀でなりとも一人死ねばよいものを、死ぬるに連を拵へて、旦那には事缺かせ、家の名を出すといひ、女房の親兄弟に、難儀をかけるのふとい奴と、死面をまぶられ、日頃立てた正直も無になり、よしない者に縁ふれたと、そなたも世間の評議にあふ、許したもや。」と許りにて、涙正體なかりけり。「なう死に際までその様に、私が事思うてか、嬉しう御座る忝い。」と、共に打伏し泣きけるが、「されどもそれは愚癡ぢやぞや。格好こそは大ぐれなれ、昨日今日の前髪を、姉というても大じない、きさめが酷や殺したと、憎みは我が身一つにて其處は露塵いとはねども、世間晴れて宿小屋持ち、若い衆のつき合ひに、老女房持つたとて、人が笑うが譏らうが、この兩の手のありたけは、命限りに稼ぎ出し、まあ十五年辛抱すれば、こな様は三十六、私はちやうど四十一、老女房の威徳に、男に家を買はせたと、譏りし人にうらやませ、男に鱧を付けうぞと、思うたこと言うたこと、違へば違ふ現世さへ、未來はなほかし覺束なや。中有の旅の雲霧に、見失ふこと有るとも、犬死と思つて下さるな。六道の辻にて必ずめぐり逢はうぞ

かる。おれが殿御は日本おろかよ唐物町にも、稀な男のちよきりこきり小女房、花の様なる和子を設けて、久太郎町とて馳て寺入久寶寺町、その豫言もいつしかに、徒寝の夢の馬喰町、誠に私もこなさるんも、後には親のかれ残る、老木の老いの世は逆に、順慶町も空ごとや、安堂寺町も子故の闇に、迷はせません不孝の罪、何と脱れん淺ましと、又引寄せて泣く涙、袖にさし來る鹽町や、長からぬ世に長堀の、樂な世界を心から、九の助橋もこれやこの、明瓦屋橋とや油屋の、油しめ木の音に聞く、おそめに染めし久松は、いつの時雨の一雫、洗へど落ちぬナヨイ戀衣、世にひろがりし浮名を、よそに謠ひし言の葉や、その油屋の一節も、師走油が身の上に、かゝる涙とこほれそひ、明日より同じ三味線に、のりの燈油屋の、廻向をなすこそ哀れなれ。ひとつあるさへ惜しき世に、今宵限りとほりつめや、命二つを二つ井戸、深い縁とて死にたいも、皆罪障の大和橋、あの千日に立つ煙、無常の雲のさつき雨、降らぬ先にと、明死に場尋ねて露にしみづく帷子、肩と裾とはおほろ花色、腰に弘誓の舟に帆掛けて、妻に磯馴の松原、これを最期に京橋やら、西に川口船の帆柱、此處に惠比壽の松原、松のくろみか雨雲か、降らぬさきとて道急ぐ、早曉の旅人や、明死に行くものヨ未知らいで人の、浮世仇口曲もなや。知らいで人のヨ未知らずや人の、浮世念佛も頼もしく、傾く月を知邊にて、空を拜めばをちかたに、とゞろくと遠くなるをの海かと聞けば、あれくとよそに轟く、雷鳴の落ちか、

口はたと鎖す。「危や地獄極樂の堺筋からこれ爰。」と、招かれ寄りて、何事も先づ此の近所を退いての事。あては無けれど南の方、人や咎めんくるく。」と、絹をも包む世を包む、其の風呂敷の木綿幅、身のなる果てこそ 三重

下之卷

二郎兵衛おきさ道行

唄一つとや一つ涙の瀧の絲、落ちて三途の川となる。二つとや筆もあれかし我が心、書いて後世に留めたや。三つとや見たや聞きたや故郷の、親の生顔夢にだに、夢さへ見せぬ死出の夢、覺めてはいつか此の娑婆へ、歸りこんどの敷入は、女夫連でと約束の、盆正月の十六日を、待ち樂しみし我々が、哀れ地獄の釜の蓋、開くを待つべき罪人と、呵責の責は豈夫その、愛しいこなた可愛い其方、脱すまいぞや脱さじと、縋り抱きよせ泣く姿、咎めて吠ゆる犬の責、この世に地獄見せけらし。これも思へば親の罰、私は親よりお主の報い、育てられたるお情や。後生願ひの親方の、宵にや和讃夜中にや念佛、早真夜中の月しろの、空を力に東堀、澄み行く水に影映る、我が身の濁り恥かしし。唄恥は暫しの浮世なりとも、戀をする身の手本町とは、二人が心一つに米屋町とも、思ひ量りて後生七生助

羨ましく耐らぬ。此方も盆には在所へいて、粟畑で※けろと、ころりと寝たる音許り、鼻の闇はあやなしや。漸うと門口の貫の木堅き家の風、鍵は久三が預りにて、朝比奈ならねば門破り、爲方つきて立ち居たり。預けられたるきさが身の、出でては姉の迷惑と、知れど夫のゆかしさと、分けてわりなき菊の、紋の風呂敷引包み、菱屋の門口樞の穴、覗いても音信は、蚊の聲ならで便りなく、胸じやくりして泣く聲の、内へ微に聞ゆれば、二郎兵衛も樞の穴、顔を寄すれば鬢の香の、梅花の薫は、「おきさか。」「おいの二郎様か、語りたい事許り。爰がどうも明けられぬ、此の戸一重が關守。」と、互に身をすり氣を跪き、泣くより外の事ぞなき。浪花橋の辻に寝し犬一疋吠え掛る、聲につれて方々より七八疋、きさを威して吠え立つる。恐ろしなんども爲方なく、放れがたなく門口に、猶取り付きて立つたりしが、中の間の竹目を覺し、「あれ久三門にいかう犬が啼く、何も無いか起きて見や。」「おう。」と答ふる寐聲の返事。「そりやこそ久三。」ときさは東へ、二郎兵衛は中戸の陰にぞ隠れける。久三は例の襦袢一つ、桿棒提げ貫の木明け、くゞり開いてつゝと出で、「ハテなんにもないもの、非人がな通つたか、来いくく。」と。呼べば犬ども尾を振りかゝる。「エ、蒸暑いが、外へ出づれば極樂の西風、エ、忝い」と涼む間に二郎兵衛、積み重ねたる染地の日野絹、壹反解いてくるくく、身も頭も眞白に引包み、くゞりをぬつと飛び出づれば、「なう悲しや幽霊ぢや、幽霊よく。」と逃げこみ門

にきさを遣りませう。」ム、それが定なら誓文立て。」來月は母の七年忌、此の頃取越し致したこの母を、奈落に墮しませう。」と、跡先知らぬ誓文の、ひとつは罰も當るべし。「オ、出来いたく。此の家久しい重手代、由兵衛と張合つて、勝つて負けといふもの。何事も貞法が美しう濟まして遣らう。二階へ上つてもう寝ぬ。」と、戸棚の錠前しとおろし、「阿房めが、おきさ許りが女房か。あの様な洒落者より、おむくむくくの手いらすを抱かせうぞ。南無阿彌陀佛々々々々々。」とて、奥に入る心殊勝に哀れなり。二郎兵衛夢とも誠とも、氣もうつとりと成りけるが、「さもあれ、かの手形隠居の破つて捨てしとや、今やぶつたは何ぢや知らぬ。」と取り出し合はせて見れば、「南無三寶、七貫五百目上本町の家質の手形、この晦日に元利残らず相濟む筈、はあく。」はつと明いたる口も、何に塞がん身の罪科、一災起れば二災起る。雨雲の空恐ろしく、よろめく足もと、判の破れを引寄せて、合はせて見繼いで見て、繼ぐに繼がれぬ命の難儀、「どうも生きては居られぬ。死ぬるとも生きるるとも、きさは離さじ離れじ物。」先づこの家を脱殻の、ひよろつく足を踏み留めく、表へ出つる中の間の、合の戸密と明けければ、竹が帳蚊に丸裸、蚊を焼く紙燭明々たり。「エ、邪魔な、爰を通らば咎むべし。ア、如何せん何と扇子の一煽ぎ、はつと消ゆれば、「ア、悲し、憎の風めや火を消した。今宵一夜を蚤と蚊に、この肌を手向けるぢや。可惜物を、久三でもおぢやらいで、二郎兵衛殿とおきさ殿、挨拶見れば

られうか口惜しや。どうも私は堪へまい。」と、無念涙は目にあまり、袖を喰ひ切り我が身を攔み、身を慄はして歎きしは、心底道理にむざんなり。「いや申す程お主への慮外、冤に角元の戸棚に入り、彼奴が致した通り、錠を卸して下されませ、直に牢へ參らば、これ今生のお暇を、御恩を報ぜぬ段は御免あつて下されませ。」と、這ひ入る所を引き出し、「やれ恩知らずの物知らず。」と、腹立ち涙の隙よりも、「十二の歳より飼育てし、二郎七の昔忘れたか、三日にあけず煩ひて、とても用には立つまじき、『去なせく。』と人毎に、言はぬ者もなかりしを、此の婆一人情をはり、在所へ戻さば死ぬるは定、眞の慈悲とはこの事と、十八の春まで呪禁よ藥よと、孫子にもせぬ世話をして、四郎右衛門にも物入させ、漸うと人になし、朋輩どもも嫉む程、人に勝れ目をかけしに、牢櫃に入る時『菱屋の婆が阿房盡し、盗人飼立て親方は眼病なり、身代あけるも知らぬ。』と、四郎右衛門まで誹らせても、おのれが一分立てたいな。御堂のあさじ参りにも、女子ども起して苦勞かけては後生にならぬと、おのれ許り連れしに、明日より朝じに參られず、願ふ後生も願はせぬ、淺ましい氣が附き初めた。この家に馴染で犬でも猫でも、貞法はむごいめが見ともなく、可愛さにこそ口た、け。この上にも我を立てて、おのれが情を情にたて、死にたくば戸棚へ入れ。」と、泣いつ威しつさまぐに、慈悲心餘る涙の意見、後世に入りたるしるしなり。二郎兵衛聞き入れて、「や御尤もく、今合點參つた。思ひ切つて由兵衛

お耳へ入れず、澁む様に斬み上げます。あの眞直な旦那殿、お心の蔑み、首切らるゝより悲しい。」と、隠居の膝を敷き、疊に喰ひつき泣き居たり。「やれその言辭はおのれが心の料簡よ。主の腰の巾著あけ、屋内の鍵を盗み取り、このだいそれた言辭が、でんどでそもや立つべきか。由兵衛が我儘な手形とは見たれども、其の場は其の日の亭主方、無興とおもひ其の手形は、とうに破つて捨てたぞや。きさめと己を夫如にして、末では世帯に窮けんと、この年寄が苦に持つたも、かう破れては水の泡、何ほど慈悲がしたうても、理を非には曲けられず、目の明かぬ主と由兵衛などが言ひ立てては、朋輩どもも氣がふれて、跡で人も遣はれず、おのれに不便もかけられず。思ひ切つてきさを由兵衛にやれ、時には四方圓くなり、其方もこゝに勤めよく、主の恩も送らるゝ。おのれが心持ち次第、池田の好の中にも、女房には事かかぬ。きさを遣るか何様するぞ。」と、我が子に意見をすゝる如く、叱りつ泣いつ割り口説き、二郎兵衛も只泣き入つて、暫時返事もなかりしが、「一々のお詞聞き入れぬは、畜生に劣る二郎兵衛なれども、あつと申して御恩はよも送るまい。元服を致したものを、丁稚よりなほ押下けて、さしもない事言ひ立てに、踏まぬ許りに擲ちたゝき、蟲でも堪忍なりがたき、無念を凌ぎ参りしも、お家のお蔭で一日も、きさと一緒に住居をせば、由兵衛が面を踏み返した同然と、思へば今日の奉公も、心まめしう勇みしに、やみくゝときさめを渡し、こりや見たかといふ面が、見て居

ア貞法様奥へござつてお寢み。我等も明日早々、久三も表を能うしめて、夜ざとに寢や。」とて出でれば、欠伸を直に、「あゝ。」といふ。返事眠たき夜なかな聲、二十三夜の代待や。門の通はまだ四つ、内は靜まる燈火も心も細く三重更けにけり。物の憐れ深きこそ、後生願ひの心なれ、人も寐入りて貞法は、寐覺の牀を起き出でて、戸棚のそばへ差足し、「こりや二郎兵衛いきすりめ、聲聞き知つたか阿房め」と、ことごとと敲かるれば、地獄で地藏に逢ふ心地、「ア、かみ様かお恥かしや、庖丁でも薄刃でも、柄を脱いて戸の閒から、密と入れて下されませ。お馴染だけのお慈悲ぞ。」と泣く聲漏る、許りなり。「ヤレ死ぬる程の性根で、さもしい事を爲るものか。」と、袖を覆うて錠鍵の、音せぬ様に戸を開けて、「其所へ出をれ、町人といひ年寄の婆なれど、菜刀でなりともおのれが首は切つて遣らう。」と、わざと詞をあら、かに、叱られてしよほくと、這ひ出づる帷子も、汗にひたりて時の間に、顔も瘦せたる惨らしさ。流石子飼の主心、叱る心は脇へなり、思はず涙を流さるゝ。二郎兵衛顔ふり上げ、「貞法様面目も御座りませぬ、お主の罰。」と許りにて、確と俯伏し泣きけるが、「御存じの通り今までに、一錢掠める我等でなし、氣も違はねども恥かしや。きさと懇致せしを、由兵衛めが妬にこみ、何かな見出さうくと、文言知れぬ手形を書き、きさ親子に判をさせ、旦那のお手に入りし事、いかにしても覺束なく、この手形取らん爲ばかり。戸棚の内ぞ微に聞けば、旦那のお耳へ入らぬとやら、何卒

許り、顔を眺めて居たりけり。貞法鍵を腰につけ、「四郎右衛門はもう寐てか、旦那に聞かせて免も角も、思案が有らう。」と有りければ、由兵衛先づ町代を呼びにやり、宿老殿へ知らせて、町中へ提灯、繩よ棒よ。」と擗けば、奥より、「由兵衛々々々。」と、手を叩いて呼ばはる、「あい。」と答へて奥に入れば、四郎右衛門小手招き、「次第とつくと聞届けか。子飼と思ひ肌を免し、扱もく憎い奴、灸の間に鍵取るは、恐ろしい仕方、さりながら俺が聞いては難しい。夜中にわやくく町内の外間もよからず、外へ物さへ散らさば、おれが聞かぬ分にして、濟まし様も有らうこと。何いうても夜が更ける、二郎兵衛めは籠の鳥、その分で戸棚に置き、きさめは今夜請人の、姉めにきつと預けてやりや。せいては粗相も有るもの、とつくと分別して見よう。女房子供が恐がらう、直に出見世に泊らしや。手代どもも向ひへ、母者人は爰へ来て、お寝みなされと申して、其方も歸つて明日おぢや。必ず何にも穩便に宵の内にみな寝さしや。」と、蚊帳に入れば、由兵衛元の所に立出で、夜中に旦那のお耳に入り、眼病に障れば如何、何事も明日の事、これ長兵衛權兵衛、大儀ながらこのきさを、請人の姉女夫に、急度預けて直に出見世へ往つて寝や。サアきさ立て。」といひければ、「まうしかみ様参ります。私が身は構はねども、二郎兵衛に科の無い段は申譯の有ること、おへ様へもお取成し萬事頼み上げます。盗人の名を取り、是れが悲しう御座んす。」と、わつと泣き出し送られ行く、目もあてられず不便なり。「サ

まする。日頃は恨みも有る筈を打捨ててその詞、生々世々まで忘れませぬ。一生の内この御恩、どうしてなりとも送りませう。どれ鍵貸さんせ明けましょ。」と、取り付けば押退け、「ヤアうまい事いやんな。何時ぞくと今まで釣られたは何十度、この以前貴様が津山玄三殿に奉公した時から、惚れて居たこの由兵衛、是非思ひを晴らさうなら、そなたの口へ手拭捻ぢ込んで、寝る術も知つたれども、それは戀とは云はれぬ、此の戸棚が明けたくば、此の首尾について一寸、身を汗して下されちよつと一寸。」と、取り付けば突き放し、遁けて廻れば追ひ廻し、抱き付く所を、「あな面倒な。」と突き倒し、「由兵衛の生畜生、文言知れぬ手形に、能う判をさしやつたなう、いま其方と寝たらば、何ちや戸棚を明けてやらう、忝い嬉しい。それが嫌さに此の苦勞、いひたくば言や大事ない。二郎兵衛殿と此のきさと懇を仕て居る、戸棚の中には二郎兵衛、私も科は脱れぬ。靡かぬ仇に訴人しや、生畜生の死畜生。」と所存極めし涙の體。由兵衛聲をたて、「ヤア若い衆は出見世にか、盗人が入つたぞ。久三や竹は背の口、何所に居る。」と呼ばはる聲、貞法始め長兵衛權兵衛、皆跣足にて驅け付ける。由兵衛威丈高になり、「これ御覽あれ。旦那衆の腰を離れぬ此の鍵を盗み出し、あの如く箆笥を明け戸棚を明けし所へ、身が来るを見て戸棚の中へ逃げこんだ、所をしやんと錠を卸した。中に居るは二郎兵衛、手傳ひは此のおきさ、證據人はこの由兵衛。」と出来し顔の腕捲り、きさは涙に性根もなく内外の者ははつと

主の目を晦ませば、胸が慄うて恐ろしい。誰ぞ来るか番しや。」と、合はせて見たる箆笥の鍵に、あたるも地獄の錠前を、明けて搜せど衣類の外は、三原の合口時代の印籠、箱に入れしは蓮如様の名號。「ハア合點のいかぬ。手形箱は何時も土藏へは入らぬが、戸棚に入つたか知らぬ。」と、常兒覺えし戸棚の鍵、何の苦もなく戸を引明け、搜せば一通上書に手形と有り。「サア忝い。之が欲しさの狂亂。」と、戴きく二つ三つに引裂き、懷中に捻ぢ込んで跡しまはんと爲る所へ、「門を明けたは誰ぞ。」「だんない者。」と由兵衛、上り口までつかくと、影を見るより二郎兵衛戸棚の内へ這ひ入れれば、きさは前にひつそうて、「ハア由兵衛殿か、上らしやんせ。」と後手に、そろく戸棚を鎖しにける。由兵衛とつくと見澄まし、「旦那は灸をなされたけな。」と、つゝと上つて、「こりやなんぢや、大事の鍵どもとり散らし、箆笥の口も明けて有る。これおきさ退きや、この世間物騒に、戸棚の錠は何故おろさぬ。さらば鍵も腰につけ、錠をおろして置きませう、ヤアしやんとな。」とおろす錠の音、内に響けば消え入る心地、きさはわなくくくと、直に死にたい許りにて、前後にくれてぞ見えにける。由兵衛きさが手をむすとり、「これおきさ、先度舟へ石打たれた其の疵がこれまだ治らぬ。此の打人が知れました。今宵旦那の戸棚へ入つた盗人と同人。定めて此方も助けたからう。戸棚を明けて沙汰なしにして遣るか、旦那の耳へ入れうか、此方の心一つぢや。なんとく。」といひければ、「手を合はせて頼み

おへ様かみ様旦那様、三人の外介さまへさへ持たされぬ。何時ぞ序にかみ様頼み、文言見たがよいわいの。」と、いふ所へ四郎右衛門、「何ときさ二郎兵衛、艾がまだ出来ずば、向ひの出見世へいて、女房共にも扱つて貰へ、更けぬ先にしまひたい。どうぢやく／＼気がせく。」「あい／＼灸も皆出来ました、御勝手に遊ばしませ。」「そんなら爰で斯う向いて、それ二郎兵衛菓子盆、あられ煎豆山椒に、小蒲團敷け。」と、捨くるりと灸のば、前を後に目は見えず、何をせうとも領いて、くすり／＼の灸はし、癬話の便りの薄煙、十四の灸に水が湧く、盛りの女盛りの男、手をしめ身を撫で口を寄せ、誰を忍ばんさしも草、これぞ困果の皮切りなる。漸う灸もすゑ卸す、主人の帯の前巾著、後へ廻る紐とけて、繋ぎし鍵に巾著より、半分こほれかゝりたり。二郎兵衛見つけて、箆筒に指さしきさに目くばせ、天の輿へと取らんとす。きさは「嫌ぢや。」と手を振れば「大事な。」とて頭ふる、手をふる頭ふるひふるひ、手を出し手を引くから猫の、板をいらふ危さや。「申し旦那様、熱くばちと押へましょか。」「いや熱うはないが精がつきた、よい加減におきたい。」「ま少とでござんす、それまちつとぢやく／＼、そりやよいわ。」と鍵引出せば狼狽へて、箸の灸を取落す。「熱やく／＼、もう／＼これでしまはう、奥へ往てちと寝よう。二人ながら休んでくれ、能う仕てくれた過分な。」と、悪事と知らぬ主の慈悲、仇となつたる身の果ての、冥加に盡きしも道理なり。二人は顔を見合はせて、「鍵を取りは取つたれど、

茶臼形ちやうすなまになるを見て、おきさも呆れ、「いつそ泊つて御座んせ。」と、佛頂顔ぶつちやうがんに二郎兵衛じろべゑ、艾あゐに火ひをつけ庭にはの隅すみ、卜庵ぼくあんが雪駄せきだの裏うら、物は試たまひと煽あふぎ立て、煽あふぎ立ててぞ燻くゆらす。呪詛まじなひは理外りぐわいにて、卜庵ぼくあん氣きにや徹てつしけん、これは不思議ふしぎ千萬せんばん、俄にわかに宿やどへかへりたい。もう往いにましょ、滅多めつたに往いにたうなつて來きた。「ハテまちつとお遊びあそびなされませ。」「いや〜俄にわかに往いにたうなつて足あしの裏うらがこそばい。」と、疊たみに足をすりつけ〜降りおりければ、二郎兵衛じろべゑ雪駄せきだをちつくと直たほし、「まうし卜庵ぼくあん様さま、旦那だんなの眼めも直なほりませう、灸きうが早はやう験ききました。」と、いへども我が身みの上うへとは知らず、「オ、卜庵ぼくあんが名人めいじん御覽ごらんあれ、一炷ひとひで験けんが見えましょ。」と、足あしの踵かかとのきび悪わるけに、雪駄せきだ擦すらせて歸かへらる。「サア旦那だんなの出でられぬ間に、手形てがたの文言もんごん早はやう聞ききたい〜。」「さればいの、文言もんごんは何様どようやら讀よんでも聞きかせず。宛名あてなは菱屋ひしや四郎しじろ右衛門ゑもん様さま、貞法ていはふ様さま、親子おやこが印判いんはんしました。」と、語かたれば二郎兵衛じろべゑはつと驚おどろき、「エ、由兵衛よしべゑめが文言もんごんを聞きかさぬは曲者くせもの。娘むすめきを由兵衛よしべゑ殿どのへ遣つかはさうと書かいたやら知しれぬ、日頃ひごろそなたに心こころを盡つくす由兵衛よしべゑめ、何様どようこけてもうぬが爲ためのよい様やうに書かいたは定ぼちやう。三田さんだの親仁おやぢも粗相そさうな、手形てがたの文言もんごん吟味ぎんみなしに判はんするといふ様やうな、これ後の邪魔じやまとは其その手形てがた。どうぞ手形てがたを盗ぬすんで破やぶつて捨てたいものぢや。」といへば、「ア、苟且かりそめにも盗ぬすむといふは恐こほい〜。」「ハテ錢銀ぜにかねの手形てがたか慾徳よくとくになるにこそ。朋輩ほうはい由兵衛よしべゑとの色いろづく、旦那だんなに損徳そんとくか、らぬ事こと。何時いつもあの箆筒たんすに手形てがたども置おかる、鍵かぎはそこらに見みえぬか。」「何なんのこゝらに置おかれうぞ。

やぞやむごいぞや。先度から染みんと、物いふ間も無いゆゑに、心底が語りたさ、傍へ寄ればびかしやかと拙言の有るじやう、安堂寺町とは何事ぢや。ア、嫌らしい。これなう誰しも此方の年輩では、十六七の振袖を好きこのむ最中に、四つも五つも年嵩の、私に惚れて下された。私やその心に打込んで、親兄弟も捨てたぞや。在所は生まれ古郷なり、両親の傍に居る物が、往きともない筈はない。何の由縁に大坂に、執心はなけれども、此方といふ人に離れるが悲しさに、お主を欺し親に背き身を狂はす心を、可愛やともいはずに面白さうに拙言。コレ死んで見せうか死に兼ねは仕ませぬ、二郎兵衛殿。」と抱きつき、聲をも立てず隠し泣き。二郎兵衛もしをくと、「こらやく。」と背なかを撫で、共に涙を流せしが、「シテ先度の手形の文言は、何様ぞ。」といふところへ、卜庵奥より立出づる。「ヤこれはもうお歸りなされますか。」「されば歸らうか、まそつと遊んでやいと行の相伴せうか。やあえい。」と、煙草盆ひき寄する。二人は艾拵へながら、此の首尾に語りたし。早う去ねがなくと蹴けど去ぬる氣色なく、「何と灸行言ひつけはなかつたか。冷麥か素麵か、なまなか茶漬位なら、いつそ戻つて寢てくれう、内證知らしや。」といひければ、きさは悦び差心得、「旦那さまは毒斷で夜食はあがらず、卜庵様へはつい茄子の淺漬で、茶漬進せ。」と内儀様の言付、早う歸つて御寢なつたが、増して御座ろ。」と誑せども、「何ぢや茄子の淺漬ぢや、一段よからう、それに出家をつけたらば。」と、

破つてもだんないか、それは何様して打破る。「まづ此の様に打破る。」と、槌振上げて打盤を、とんとんく、「何處やらの男とよそくの女と、渡らぬ先にとんくくとんとん。」とぞ打ちにける。重手代口々に、「やい／＼ほたえな。それ向ひの出現世から、旦那のわせる見えぬか。」と、いふ所へ四郎右衛門は、眼病に毒とは知れど渡世の世話。「何と仙臺の注文は仕舞うたか、秋田の荷を積んだらば今橋へ往て銀請取りや。ヤアト庵老はまだ見えぬか、ト庵が見えたら灸をせう、女子の手が薬ぢや。きさにするて貰はうし、二郎兵衛に手傳ひさしよ。手のふるはぬ様に仕事しまへ、残りの者は出現世へいけ。」といふ所へ「物まう、澗川ト庵御見廻申す。」と、つゝと入れば「ヤアお出でお待ち兼ねました、先づこれへ。」と上座へ通せば、ト庵、今日は二十三夜なれど、一向宗はお構ひない。明日から八専土用前、一段とようござろ、どれ脈を見ませうか。私の申した通り、薬喰ひをなさるゝか、ハアいかう脈が良うなつた。卵を參る験に、左の脈がふはくと打ちます。ム、魚の中にも鯛などは大温の物、兼て無用と申した、よもや喰ひはなされまい。右の脈があたまがちなは、もし播粉木などは參らぬか。風氣もなし點を致さう、硯々。」といひければ「奥で點を頼みませう。これきさ、二郎兵衛油火燈して艾をもみ、先づ二三百ひねつて置きや。」と、打連れ奥に入りける。「あつ。」というて二郎兵衛、行燈燈しつ土器あぶり、艾出して揉まんとするを、きさはたち寄り胸倉とり、「これあんまりぢ

て、阿房くさい振舞が戻つた。御座れ戻ろ。」と立ちあがる。「オ、其方はせめて振舞を喰うたが、此方は物入ふるまうて、あけくにした、か踏まれた。向後振舞致すまい。御馳走が身のひしや、酒盛つて尻踏まれた。」と、獨言して 三重歸りけり。

中之卷

本町や新物店の若い衆は、女とも見えず男なりけり、女子交りの針仕事、つい一針が永き世の、縁の端縫しどけなく、尻も結ばぬ絲櫻、綻びかゝるうたてさよ。二郎兵衛は在所より戻つた顔して二三日、仕事は常より精出せども、きさにすね言ねすり言、乾反し直し上下を、盤にかけて打ちけるが、「エ、これは糊加減の悪い袴ぢや。よそくの人の心の様に、彼方へはひつたり此方へはひつたり、移り易い胴根性。なうおきさ殿、此方が頓てかみ様の肝煎で、安堂寺町へ嫁入の時、この袴を壇殿に著せたらよかる。その晩に石打たれて小鬢先割られぬ様に、抱き締めて居さつしやれいの。おきさ殿やいのおきさ殿う。」「オ、かましい、おりや聾ぢや御座らぬ。これこの私が仕立てる布子も、誰やらが氣によう似て、なんほすぐに縫うても、横へくといきをる。聞分の無いものは、此方に似合ふ著さつしやれ。私等が氣には入らぬ。」と言へば、「ハテ氣に入らずば打破つてのけたがよい。」「ム、打

無三寶、こりや何様ぢや、目出度過ぎて目が出た。」と、抱へてこそは歸りけれ。猶も續けて打つ石に提灯も打破れ、由兵衛も敗亡し、「おきさに心有る奴が、てんがうかはくに紛れない。船頭船をやつても、久三おぢや。此奴めを踏んでくれう、任さつしやれ。」と上るを見て、二郎兵衛よこへきれてぞ三重歸りける。由兵衛久三大汗にて、「何方へうせた。」と、橋へ廻れば年輩なる浪人侍、髭奴の草履取何心なく來るところを、「うぬ覺えたか。」と久三郎、奴を橋へ横投に、眞甲を四つ五つた、みかけてくらはする。主人これはと立歸り、久三を擱んで打ちつけ、踏みつけ、踏む所へ、由兵衛驅けつけ、「ヤア爰にけつかるか、よう舟へ石打つた。」と、擱みつく手を確と取り、「何さ石打つたとは誰が事、慮外者め。」といふを見れば歴々のお侍。「ア、御免なりませ。人違へで粗相致しました、御免されて下されませ、御慈悲で御座る。」と泣き叫ぶ。「何のお慈悲。」と捻ぢ上げ、向脛を俯向けに磕と蹴返し、「これ奴、腸の出る程此奴踏め。」「任せておける。」と土足にかけ、「うなよく身を打たせたナア、覺えて居ろ。」と胴骨尻骨うんと踏めば、「きやつ。」といひ、眼玉も出づる許りなり。「もうよいわく、死なぬ程にしておけさ。此方へ來い。」と主従は、悠々として歸りけり。命からく、由兵衛、あ痛くと起き上り、「久三其所にか、エ、聞えぬぞや。今の様に踏み居るを見て居やる筈は有るまい。」「ヤ此方が聞えぬ、此方故に最前からはされたり踏まれたり。エ、振舞喰うた許りに、言はれぬ人の肩持つ

一言邪魔させまいとの、手形が取りたい物。」と差込めば、貞法打領き、これは由兵衛がいふ通り、手形を取つて置きたい。「それでも父様無筆なり。明日でも私がかみ様へ、手形して上げませう。」と、辭退する程由兵衛、「否々たとへ無筆でも、判がなくば筆の軸、手形は我等筆取る。」と、煙草盆の硯ひき出し、はや書きつける提灯の影、二郎兵衛見すまし聽きすまし、「ヤア彼奴が勧めて手形させ、かみ様賺してきさを貰ふ分別。この判させては一大事何とせうぞ。石を打つて提灯を打消してのけん、石を尋ぬるその間に、手形の文言思ふ通りに書き濟まし、これ宛名は菱屋四郎右衛門様、貞法様、親三田村太郎三郎。サア印判。」といひければ、「御念が入つて忝い、私の荷が下りました。」と、巾著の印判くろくくと、「サアおきさ我が身も判を据や。」「いや私は印判持ちませぬ。」「そんなら父が裏判を。」と、同じくするて、「貞法様いよく頼み上げます。」と差出せば、「オ、くこれで此方も如才がならぬ。」と、珠數袋に納むる内、二郎兵衛溝の石をあけ、由兵衛目がけて打つ石が、舳板に當つて一はすみ、川へざんぶと水散つて、由兵衛一絞り。「そりや暴れ者が石うつわ。」と、立ち上る所を續けて打てば、由兵衛が額に當つて、「あいたしここれは危し、皆々屋形へ。きさも乗つて戸を閉ちや。」と、無理無體に舟に乗せ、「親仁も早う去なつしやれ、怪我さつしやれな。」といひけれど、「否々これは目出度い。きさが嫁入の談合に、石打とは吉左右、目出度う御座る。」といふ小鬢に、はたと當れば、「南

方の荒働き一年と續くまい。身に藝もない事か、銀の涌く手を持つて居る、二百目近い給分を、唯の女子にかこうか。廣い大坂に男養ふ商賣とはあれらが職、五人三人は針一本で、樂々と過す手を持つて居る、山家在所へ煩ひに往かうとは、無分別かと思はるゝ。この談合は取りおいて、きさはこの貞法にとんと預けて置いてたも。此方の内にも子飼の者躰る者がたんと有る、善い婿取つて後々は、親達も大坂へ呼ぶ様に仕て遣らう。」と、念の入つたる割り口説、由兵衛叔はあのきさを、我等へ隠居の心當、日頃の念願成就と、「これ親仁、隠居様へ任せて在所は變改したがよい。この由兵衛も旦那の蔭で、安堂寺町に手も廣う商賣し、手代の一人も遣うて今日のやうな振舞に、二兩三兩遣ふも皆親方の光。まだ女房を持たぬはかみ様へ、とんと任せて彼方の媒妁待つて居る。かみ様のお心で、此方と私が婿舅に、成るまい物でも御座らぬ、なうきさ左様ぢやないか。」と、いへどもきさは胸塞がり、「ア、何様やら知りませぬ。」と、打傾きて居たりけり。太郎三郎一々に聞き届け、「きさめが申した分では、さら／＼胃の腑に落ちませぬ。かみ様のお御意で發起致した、御尤も／＼。親方の躰けらるゝと申すに、先は幸ひ一門中、何の仔細も申すまい。この上にきさめが縁付は、何様なりとも。もうお暇。」と立たんとすれば、由兵衛分別顔にて、「これ貞法さま、これは大事の請取物。おきさも若い人の事、後日のもやく／＼喧しし。ちよつと親子に手形させ、きさが縁付貞法様のお指圖背くまい。外から

これへ見えませう。私わたくしが口の合あふやうに、在所ざいしよの嫁入よめいりをお止めなされ下くだされ。」と、つどく語かたる下した心こころ、二郎兵衛じろべゑは合あてにて、「あの言いひ分ぶんは我故われゆゑ、男をとこに親おやを見返みかへる心しん中ちゆう者ものめ。」と、材木ざいもくに抱だき付つきぎぞくく悦よろこび居ゐたりける。親おつはとほく尋たづねつき、「菱屋殿ひしやどののお船ふねはこれか、きさが親おや三田さんだの太郎三郎たろさぶらうで御座ござります。」「ヤア親仁殿おつちどのか、それ酒進さけしんせ茶進ちやしんせ。」と、取とりて、「挨拶あいさつありければ、「否いやお茶ちやもたべました。定めさだめめてきさめが話はなしでお聞きなされませう、在所ざいしよでなづけの方かたより、急きふ々に欲ほしいと申まうすにつき、中途ちゆうとながら一生しやうの身みの固かため。道理ごとうり立ててお暇取いとまとれと申まうせば、在所ざいしよへは往いくまい大坂おほさかで男をとこを持つと申まうす。夫それは我儘親わがままおやのいひ條ぢゆうを背そむくかと、叱しかつても聞き入れず「俺おれが男をとこは内方うちかたの、かみ様次第さましだいに任まかせてある。是非ぜひとも親おやのこうけんけんに、在所ざいしよの男持をとこもてならば、おりや死ぬしるが合あてか。娘殺むすめころそといふ事ことか。」と大聲おほこゑ上あげてほえまする。お主しゆうのお慈悲じひに御意見ごいけんを頼たのみます。在所ざいしよの壻むこと申まうすも、喰くひ兼かねぬ身代しんだい、行ゆきをればあいつくわほう。世帯佛せたいぶつ法ほふはら念佛ねんぶつ、口くちに食くらふが一大事だいじ。彼奴あいつが食くふは違ちがうて、大坂おほさかの男をとこに喰くひ付ついたかやい、其處そこな虚氣者うつげもの。在所ざいしよの男をとこぢや大坂おほさかの男をとこぢやとて、食くふに二ふたつの味あぢはひなし。一人ひとりの娘むすめに親おやの身みで、もむない男をとこを食くはさうか。エ、親おやの思おもふ程ほどにもない。」と、涙なみだを流ながし恨うらみける。おきさも流石親さすがおや心思こころおもひやれども、二世にせかけて交かせし事ことも捨すてられず、「唯ただかみ様さまのお情なさけを、頼たのみまする。」と許ゆるりにて、同おなじく泣ないて居ゐる姿すがた。貞法ていほふも不便ふびんさに、「親仁おつちの言いひ分ぶん理りが聞きこえた。さりながらあのきさが病者びやうしやで、在所ざいしよ

上うへには、手てのない様やうに仕立したて口ぐち、在所ざいしょはいかな横堀よこぼりの、知邊しるべの許もとに隠かくれ居ゐて、暮くるれば其處そこへと通路かよひぢの、仄ほかに見みゆるあの舟ふねの屋形やかたには、貞法ていぽう様おへ様さま、舳へさきには安堂寺町あんどうじまちの由兵衛よしべゑ。「ヤアこれならぬ、はづしませうありや何様どうぢや、菱ひしの提灯ちやうちんまう久三くさうが持つて、跡あとから來くるはおきさぢや、様子やうすが無なうては叶かなはぬ筈はず。」と、氣きももやくつて蒸暑むしあつさ、材木納屋ざいもくなやに立隠たちかくれ、事ことのやうをぞ窺うかがひける。きさは程ほどなく走り寄より、「これはく皆様みなさま今日はけふはお慰なぐさみと、只今ただいま久三くさうの物語ものがたり。私わたしが氣色きしよくもしかくとは無なければども、かみ様おへ様さまへ、頼たのみ上げます御訴おそしやう訟事ごと。直すぐにこれへ參まゐりしも、ア、おとましい事こと出來きまして、一倍はい氣合きあひに當あたります。」と、溜息ためいき吐ついて居ゐたりけり。貞法ていぽうも熟見つくぐみて、「此方こちへ訴訟そしやうの事こと有ありとは、どうした事ことぞ話はなして見みや、成なるべき事ことなら聞きかいでは。」と、さも懇ねんごろの詞ことばの末すえ。「ア、お馴染なじみとて忝かたじけなや。昨日きのふの暮方くれかた三田さんだから私わたしが父親おやのぼ登のぼられ、幼少ちひさい時ときから在所ざいしょで、約束やくそくしおいた男をとこの姑しやうとめの煩わづらひゆるゑ、急きふに嫁入よめいりを急いそいで來きた。此この度たびお暇いとま申し請うけ、三田さんだへつれて歸かへりて嫁入よめいりさすとの申分まうしぶん。御ごぞんじの通り私わたしは幼こい時ときより大坂おほさかに育そだち、手ていたい事は仕付しつけず、殊ことに病者びやうしやな身みを持つて、在所ざいしょの手業てわざが何なにとして、それ故ゆゑ當あた座ざの間に合あひに、内方うちかたのかみ様さまが御懇ごねんごろに遊あそばし、「きうこうなした若わかいものども數多あまたの中うち、一つにして此この大坂おほさかで、物ものの見事みごとに躡しつけて遣やらう。必かならず外ほかへ約束やくそくすな。」と常々つねづねのお詞ことば。これが反古ほんこになる物ものか。在所ざいしょへとては歸かへるまいと、私わたしは申まうします。それでは親おやの一分ぶんが立たたぬと、いうての親子爭論おやこいさかひ。多分たぶん

れが好きの心中を語らそもの。「オ、さればいの。せめてきさが居たらば、祭文を聞かうもの。」と、いへば由兵衛興醜顔、「ム、二郎兵衛は母親の年忌に當り、在所へ参ると申したが、きさも一緒に二郎兵衛と連れだつて参つたか。」「ア、つがもない、きさは此の頃風ひいて頭痛がすると宿へ往た。」と聞きもあへず由兵衛、「エ、内方も此方等が居た時分と違ひ、自墮落になつたなあ。青二歳の二郎兵衛め丁稚上りの分として、「母の年忌で候。」とて、此の忙がしい最中に、十里近い法隆寺へ、うせざまが氣に入らぬ。殊にきさが煩うて宿へ歸つた時分に、同じ様に家を出で、碌な事は仕出すまい。」と、滅多無性に一人腹、人も知らぬ心を苛ち、船辨慶に有らねども、知盛が沉みしその有様に、又由兵衛がしんきをもやし、舟端蹴たて杯踏みわり、前後を忘する許りなり。菱屋一家の人々は、何の心もつかざれば、「早日も暮れた、最早これから歸らう。」と、上り支度を由兵衛、「危い事は些とも無し、提灯用意致せし。」と取り出せしが、「南無三寶、蠟燭を忘れた。これ久三、大儀ながら一走り、此の通りの百貫町、四五丁往けばおきさの宿、定めて知つてで有らうぞ。由兵衛が申す、蠟燭一挺貸してたも、些と氣色がよいならば、ちよつと爰まで出てたもと、いつて同道しておぢや。序に内に氣をつけて、誰もなにか見廻しや、早うく合點か。」「心得ました。」と帯もせず、繻絆一つの裸身や。百貫町へぞ走りける。昨日今日前髪取つて下手代、未だ新物の二郎兵衛おきさとふかき中入の、南京綿の

やくちやくあらや橋、跡へはんなり入花の、茶びんご橋はこちく。と、寄せよく濱際の、瓦町橋にぞ著きにける。菱屋介五郎は如法なる氣も丸宿莞爾に、「申し婆様母様、この永日の馳走ぶり、亭主由兵衛さぞ草臥れ。暮も近し、これからお上りなされ。」と有りければ、隠居の貞法七十三、眼鏡いらず杖つかず、齒は一枚も抜目なき、男勝りのかみ様にて、「オ、それくこれ由兵衛、念の入つた馳走でいかい慰み。此方の内から出た人が、店一軒の主に成り商賣もしにせて、親方一家を振舞ふとは、此方ともくわいけい其の身の手柄、さりながら女房が無ければ、人の世帯は落付ぬ、身代薬の女房をはやう持つて落付きや。さうでないか。」と有りければ、内儀もともにもうち笑ひ、「何故に女房持ちやらぬ。但し何所ぞに思入れが有るかいの。」由兵衛思ふ圖に乗りて、「誠に今日はお心ようお遊びなされし忝さ、其のうへ女房の事までお尋ね、御意の通り些と思ひいれ御座れども、この女房がいきやすうていきにくい。どうでかみ様おへ様の、お口を借らねば參らぬこと。」「はて此方とがいうて濟む事ならば、肝入らいで何とせう。その思入れの名は何といふ誰ぞいの。」由兵衛殆んど笑壺に入り、「ヤア有り難い忝い、三度禮拜仕る。名を申せばつい御存じ、されども先づ唯今は、お名をばえ申すまいよのしやんく。サアこれからが本酒、亭主から又はじめ。憚りながら介様へ、お着に替女殿一節頼む。」といひければ、介五郎杯うけ、「申しか、様、二郎兵衛が法隆寺より戻つたら伴れて来て、あ

續く者がないわ扱。」「袖島源治は新鞆ぢやおつしやる。」「それ何故に。」「鹽物町のしたゝるたる、然も藝には骨が有るといの。」「桂木常世は江のこ島とよ。」「なぜく。」「ゑのころころく、抱き寄せて手飼に愛らしや。」「扱又嵐三十郎かつを座橋とおしやる。」「心はの。」「何の料理に遣うても仕立しが甘いわ扱。」「櫻山庄左衛門福島ぢやおしやる。」「心はの。」「小體なれども張り詰めて、舞臺一杯かさも有り、藝に身も有る口中の、しよりくしたる雀餅、それで蓼穂の何所やらが、ひり、とす。」とぞ答へける。「音羽二郎三を雜魚場とは。」「鰯が有るとの譬へかや。」「上村吉彌は伏見堀ぢやとおしやる。」「義理はの。」「舟板町の舟板の末には沖に乗出し、帆を十分の印とて、今から人や焦るといふ事。」「扱市村玉柏梅田橋と見立てたり。」「それ何故に。」「はて渡れば色町越れば火屋、濡れにも憂ひにもよううつるわ扱。」「杉山平八を四つ橋とはこれどうぢや。」「江戸からも京からも四方へ引釣り引張つた。踏んばたがつて山村が、くわつと擴けた兩足は、百閒堀を思ひ出す。善惡二つを噛み分けて、六義を糺す柴崎に、思案橋を思ひ出す。篠塚二郎左を見る時は大佛島を思ひ出す。三代續く奴風、嵐が風俗を譬ふれば、その江戸堀を思ひ出す。嘉十郎が貌付に炭屋町を思ひ出す。敵は三原重太夫、序にて作りし悪心の、切で返報のくる時は、猪喰屋橋思ひ出す。思ひ出しく陳ね行く、先づ是れまでが片おもて、裏の御堂もたかくと、立賣堀を漕ぎ廻し、辨當濟まば椀家具も、釜もち

二郎兵衛
おきさ
今宮
心中

上之卷

音頭えい／＼／＼えい／＼、月見花見は何所も同じ。諸國名所のその中々に、類なにはの舟遊、老いも若いも下人も主も、男女がござ／＼船に、袂涼しき川風は、秋といひても諷でないよの、じやれでないよの本町橋を、漕ぎ出で見れば天満川、市の側なる初甜瓜、買うて冷してひいやりと、瓜を二つに打割れば、似たりや似たり燕子花、紫帽子河水に、映らふ影を水汲が、汲んで擔うて持ちや桶の棒、坊主頭を振り立てて、道正坊の金柄杓、あれ／＼撫でて通れば一撫に、はや本復の伊丹酒、茶舟で下る樽肴、在所嫁御の里がへり、上荷で送る葬禮や、世の有様のさま／＼を、一時に見る舟遊、これ常になきお肴と、ひとつ勧むる杯や。諺然れば船のせんの字を、公にす、むと書きたり。船の屋形に三味弾けば、納屋に油の白を引く、橋のいよ此の橋のうへにて賣る聲は、「煙管團扇煙草入、役者評判扇賣、浪花藝者の風俗を、橋々名所に擬へて、書き集めたる藻鹽草、伊勢をの海士に有らねども、そのはま萩野八重桐を、龜井橋ぢやとおしやる。」「心はの。」「先はおたびの神かけて、跡先に又

び上り、跳ね上りたる淀鯉の、瀧壺より涌き出づる、白銀黄金の鶏寶、時は勝鬨悦び時、五畿内五ヶ國神々に、先づ願ほどきに、三重悦びの、幣帛をあけ神樂をあけ、参り治まる八幡山、此の難波津の惠方神、民安全こそめでたけれ。

淀鯉出世瀧徳 終

七、女房は死ぬる親はなし、一人の弟は相果つる。雲のうらを尋ねても、お主より外世の中に大事の人はなきものを、隔てて下さる旦那殿恨めしう思ひます。」と、どうど伏して泣きければ、吾妻を始め亭主親子町内近所の者までも、誠の心を感じつ、皆々涙を流しけり。勝二郎飛んで出で、「ア、過つた過つた。斯様な身と成り果てたも、其方を踏んだ下人の罰と、かねく悔み歎いた、藤五郎を弟と知らいで吾妻が殺したも我故ぞ。主故に身上潰し其の體となつたを見て、此の勝二郎がいかにか畜類なればとて、見ても聞いてもゐられうか。死ぬるにも死なれもせず、とてもの情に其方が、此の足にかけ以前そちを踏んだ様に、勝二郎を踏んでくれ。一つの罪も脱るゝ爲、さりとは新七某を踏んでたも。」と、足の下に背中を向け、手を合はせて泣きければ、吾妻は縋つて、「弟御の敵は私、刺し殺して下さんせ、どうも生きては居にくい。」と、歎き悔む聲々。新七は飛び退り、「ア、勿體ない冥加ない。」新七と思召すが定ならば、御夫婦心を全うして、出世を見せ下さらば、踏み殺されても大事ない。」と、三人顔を差寄せて、聲をはかりに泣き居たり。斯かる所に八幡の神主紀の太夫より、御吉左右の早飛脚、いきり切つて案内す。「そりや吉左右とは悦ばし。」と、状箱開くも疾し遅しと、封じ目切つて拜見す。「何々江戸屋勝二郎事、家來新七數年の歎き感じ思召され、關白左右の大臣御憐みに依つて、八幡の本地舊のごとく返し與へらる、追つつけ歸宅あるべき。」と、讀みも終らず八拜九拜悦び躍り飛

前に新七を恥かしいと思召さば、御身代は潰れませぬ。まづ斯う有らうかと存じたゆゑ、様々の強意見。新町橋でお足にかけられ、踏まれながらも御意見は、親旦那の御恩の送りたさ。女房お半はお身の上を苦に致し、氣病を煩ひ去年の春終に空しうなりました。彼れも元は御家來、お主を苦にして相果つるは、下人たる者の本望、聊か悔みも致さばこそ。親旦那のお蔭で少しのもとで家屋敷、在所龍田の親どもも餓ゑ凍ゑぬ程なれども、否々お主は流浪の身、家來の安樂道ならずと、家屋敷田地まで賣代なし、有銀十八貫目御覽の通り。我が身には碌な布子も著ぬ體ながら、親旦那の十七年忌は内證で、お前から遊ばすと申しなし、恐らく江戸屋の追善と笑はぬ程の法事を致し、御出世の願ひの爲京都公家方、折々の付届け油斷もなく、残る金二百兩いとしや吾妻殿、新町の殘金ゆる此の所に勤めと聞き、御兩人の氣を思ひやり、弟の藤五郎が請出す分で沙汰なしに、お二人一緒に置きましたれば、貧苦の中のお樂しみ、高いも低いも親たる身の悦びといふ此の悦び、お前の御機嫌よい顔を、草葉の陰の親旦那に、見せましたい心ざし、御奉公の仕納めと存じ立ちたる所に、藤五郎は吾妻殿の手にかかつて死んだか、でかいたく。此の新七はお主のため心ざしの奉公はしたれども、一命の奉公は其方に劣つた、兄に優つた忠の者。これく御亭主、只今申す通りに虚言はない、兄が言分ないと云ふ證文を致すからは別條は有るまい、それとても是非處の作法下手人を取るならば、水いらすに此の新

れば後より、掴み立つたるその寒き、寒風肌も縮み胸ふるひ、半死半生の手負、のり返つて、「うん。」といふ、聲に驚き階子より、ばたくどとと落縁の、隅に屈んで顫ひ居る。手負は惱み苦しみて、續いて階子轉び落ち、呻く聲に妙慶親子、家内の男女我もくと驅け出で、「ハア南無三寶藤様を切つたは、切り手があらう。」と、爰彼處尋ね探して縁端に、「人こそ。」と引出せば、「これはく吾妻殿、それ取放すな縛れ括れ。」と立騒ぐ。「いかにも切るも私が切る、金も私が取つたからは、氣遣ひしやるな逃げはせぬ。」と、尤もきような白狀。「まづく龍田の一門衆兄御の方へ、注進をぬかるな。」と、追人を走らせける。勝二郎は約束の時分過ぐると紙子に股引、直に丹波の旅出立にて来て聞けば、吾妻が客を切つたと町のもやつき、つゝと入つて、「これく亭主。身は江戸屋勝二郎と云ふ吾妻が男、何科なりとも同罪にしてくれ。」と、座敷にどうど坐しければ、吾妻は泣いて目も明かす、「無分別なことをして、思ふが仇となりました。」と、顔をさけてぞ居たりける。町の役人龍田より走り歸つて、「手負の兄御只今これへ御出で。」と、いふを見れば古の手代新七木綿布子も物さびて、「御免あれ。」と座敷に入り、主従顔を見合はせ互にはつと驚く中、勝二郎赤面し、「面目なや恥かしや、其方に顔は合はされぬ。」と、兩袖を顔にあて、蹲りてぞ隠れける。新七恨みの兩眼に涙を浮め大聲あけ、「エ、聞えませぬ旦那殿、我等に顔を隠さるゝは面目ないか恥かしい。コレその恥かしがりが遅かつた、五年以

せ。」と、言へどもふらく居眠りながら、「はて一夜でもお客の中は、弓矢の禮儀はつまぬ。」と、言ふ中に脇差の柄を膝に押へて、「いかう更けたに休まんせ。」と、言へども柄には氣もつかず、「明日御見なりませう、鹽茶を飲んで寐てくれう。」と、脇差の鎧を持つて立つ程に、柄は残れど下は見ず、目は空鞘をぶらさけて、ぶらく勝手へ入りにける。「ア、く有り難い神佛の宛行か。」と、戴きくひつそばめ、立つて見ても後より、又誰ぞ來る様な、危さ恐さ右左、足もすわらぬ行燈の、我が影に吃驚して、わなくふるふ箱階子、ぎしくぎしく鳴る音も、耳にこたへ胸にしみ、氣を押へ息をのみ、漸く惱み登りつき、溜息吐いたる女業、我が身ながらも興覺むる、藤が臥したる北枕、いとしや科もない人をと、恐ろしながら脊に腹、胸先にうち跨ぎ、切先さしあてどうど乗る。乗られてふつと目覺す。「これくく聲立てまい、此方に怨みも罪もない。假にも惚れてくれた人、殺したうはないわいな。殺さるゝ、此方より殺す我が身が悲しい。」と、涙は刃に傳ひしが、「なう生けて置いては請出して、めをと女夫になるが情ない。私には大事の男が有る、其の男と縁切れる戀路の仇となる故に、今刺し殺す、懐の小判も貧な男に遣りたい。殺生の罪盗みの罪男の爲につくる心、すこしは恨みを晴れてたも。」と、又はらくと泣きければ、得心やしたりけん叶はじとや思ひけん、目を塞いで返事もせず。「サア只今。」と、ぐつと刺し、止めまでは手も弱り、其の儘捨てて懐の、小判を兩の袂に入れ、階子下る

め殺さうか、いや緩りとする間はあるまい。煙草で燻へ殺さうか、酔うて先へ此方が死なう。何とし
てよからうぞ。鉄でも剃刀でも鐵物がな。」と、座敷中を差足し、うろくうろく尋ね廻り、「ヤ思ひ
付いたぞ火燵の火箸、火に焼いて喉笛を買さば、刀も同然。」と、蒲團をあけて手を入れ、「熱やく。」
と懐中の、袱紗に持ち添へ陸奥の、韓紅の錦木や、枝珊瑚珠と焼き付けたたり。「嬉しや冷めぬ間に。」
と立上らんとする所へ、仁三郎が母妙慶、「吾妻様まだ起きてか。」と、によりく来れば肝潰し、袖の
陰に押隠し、「ハアかみ様か、私も早休みまする。冷めぬ間にこな様も目の覺めぬ間に暖かに、熱うし
て寝やしやんせ。」と、狼狽へ挨拶跡先なり。妙慶更に氣も注かず、「お前は果報なよね様や。郭で繁昌
しつめて間もなう根引の松様、千年も萬年も藤様との御中覺めぬ様に遊ばせ。其のいとらしいお氣
立ては覺めまいく、明日お目に懸りませう。」と、辭儀を陳べて立歸れば、火箸は氷と成りてけり。
「エ、いはれぬ長口上、焼きなほさん。」と、蒲團あけても火燵も冷し。「エ、阿房らしいなんほう覺め
ぬと言やつても、炭火までも冷めきつた。」と、吹いつ扇いつ氣をせく所に、二階より仁三郎酔醒の長
欠伸、客の脇差持ちながら、目をすりく階子をおり、「ヤア吾妻様爰にか、叔酔ひました。」と、下に
居る吾妻脇差に心づき、「それは藤様の腰の物、こなさんも先づ氣の通らぬ、客の刃物預るとは渡り並
の客のこと。藤様とは女夫に成り、明日請出さる、今宵となり、心中はせまいし其の儘置いていかん

夜は更くる、もう分別は無いとて、そなたも死にやおれも死なう。」と、若い同士は氣を嗜み、死を先だてて涙を隠す、歎きの色こそ哀れなれ。吾妻死身と胸を据ゑ、「これ申し勝二郎様、死ぬる覺悟に極まらば、死なずに免るゝ思案あり。こなさんは先づお歸り、内を仕舞うて夜中過、八ツの時分に又ござんせ、金調へて置きませう。其の金持つて丹波へ退き、來年私を年前に、迎ひに來て下さんせ、心安うて出らるゝこと。早う往んでくださんせ。」と、囁けば勝二郎、「それは至極の才覺、其の金は借るか貰ふかどこから出る。」はてそれは構はんすな、悪い様にはしませぬ。早う往んでござんせ。」とせがめば領き悦んで、「これぞほんの丹波越。」と、不道化言うて忍び出づる、氣の愚かさも育ちから、憂き事知らぬ印かや。吾妻はほんの出來心、ふつと言うたは言うたれど、これからが大事の思案、火燵の槽を談合柱、お腹の痞たくくと、胸にをどるを擦りさけ、二階の客を刺し殺せば、明日の難儀を脱るゝ徳、金を取れば勝二郎様のお爲になるこれが徳、是れ程よい事有る物か、足元によい思案、こけて有るのが見えなんだ。殺して退かうと思ひ立つ、目の前ばかり脊中を知らぬ、女の智慧こそ果敢なけれ。夜は何時ぞ臺所は、夜中を告ぐる鼯も有り、更け行く儘に恐氣立ち、膝の慄ふを踏み締め踏み締め階子の口から覗いて見れば、客は酔うて前後も知らず。仁三郎が浮氣酒いき倒れては性根つかず。「サア仕濟まいた。」階子三つ四つ上つて見て、「ヤアこりや何で殺さう刃物が無い。帶を解いて絞

かす。奥二階より手を敲き、「禿衆吾妻様呼びましや、吾妻様々々々。」と呼ぶ聲す、「それ人が来る、ア辛氣、どこへがな、これ〜火燵へ隠れさんせ。」と、蒲團を明くれば勝二郎、「此の夏爰の芝居へ、竹本が弟子が下つて重井筒を語つた。サアこれから夕霧代つて重井筒火燵の段、北濱邊のよい衆は火燵に水を入れます。紙子一枚の我等とてもものに、火刑になりたい。」と、蒲團とつて引被る。仁三郎二階より障子をあけて、「申し〜吾妻様、只今唇を詮索すれば、明日は天赦鬼宿日、萬事揃うた大吉日、銀はお身に附けてなり、なに不足ない上は、善は急げ明日の朝、目出度う郭を出します筈、その用意なされませ。飲まうぞ〜、大きな物で飲んでくれう。」と、障子引立て入りにけり。火燵よりむく〜起き、「今のはなんぞ。郭を出すとは善か悪か氣遣ひな、聞きたい。」と氣をせば、「サアされば、夫れ故胸を痛めること。先度の文にも云ふ通り、龍田の藤が事いの、作病發して振つて見つ、色飽かる、工面して、退く様に仕掛けても煩惱の犬かして、爰の妙慶挨拶にて請出す談合極まると、聞くから胸が騒ぎ出し、今に心が落付かぬ。どうした物で有らうやら、最早智慧にも能はぬ。」と、泣くばかりこそ力なれ。勝二郎も泣き出し、「扱も〜悪い事も續けば續くものかな。五年い前に在所を出で、無量のつらさに遭うたれども、諦めつ慰めつ心で埒を明けたるが、命かけたそなたを人の物になす悲しさ。二百兩といふ大敵には、弓鐵砲も叶はぬ。」と、齒を喰ひしほり歎きしが、「左右云ふ間に

厭なり、言はねば悪し。罪深い事ながら、今の間にあのお人の、身に妨げも出来よかし、此の病が募れかし、今夜の夜が常闇と明けずにあつてくれよかし、身請の時が延ばしたいと、科なき天にも難をつけ、歎き怨むる世のつらさ、我が身ながらも淺ましや」と、とんと伏して泣き沈む、涙も階子を傳ひけり。通ふ心や格子前、耳にこたふる謠の聲、謠「一度は榮え一度は衰ふる理の、誠なりける世の習ひ、住み所求むとて東の方に、吾妻々々」と、謠ひ忘れた顔つきで、我が名を呼ぶは知つた聲と、行燈の影から表を見れば、戀しゆかしの勝二郎、飛びたつ様に懐しさ、表には人目あり、それから廻つてかうくと、指で教へて招かれて、小暗がりをば密と抜け、つゝと通れば縫りつき、「なうよう来て下んした、逢ひたうてならなんだ」と、しつかと抱きしめ泣き居たり。よい衆の果ての流石にて、貧苦を貧苦と思はばこそ。「此の形を見てたも、思へばく不算用。そなたの身を賣らする程ならば、三百兩もして遣つて、うりへぎの百兩も手に持つたがよい筈。大坂の親方へ二百兩渡さねば、井筒屋の太郎左衛門と約束の義理が外るゝとて、差も引もなうきつと堅う、二百兩に賣らさいでもだんない事、此の鈍さから此のつら。何にも徳は無けれども、坂田藤十郎が夕霧をま一度見たいと思つたが、此の紙子で手夕霧を仕る。太夫又逢ひに来たわいの、サアそなたも爰で泣きや」と言へば、「ア、泣く分は夕霧に負けはせまい。」と泣きければ、男も心しをくと、「可愛や」と、「物真似に誠の涙を紛ら

詰め、今ではどうも下りはがな。總じて鯉と言はんすは勝二郎様故かいな、あのさんは八幡の人、
 八幡に鯉は有るまいが、合點がいかぬ。」と言ひければ、「それならば今日より、ごんほ様と申さうか。
 よねさまに牛蒡はいかッ、ヤア夫れも大事か、かッの牛蒡と云ふこと有り。そんならいつそう毛牛蒡
 さま、追付旦那の引抜きごんほ、目度いごんほ。」と座をもてば、「エ、憎い口や敲きごんほに仕たい
 ぞ。」と、二階下る、も勇まねど、うはべ許りの笑ひ顔、言うて泣くより猶辛し。藤も彌機嫌よく、
 「今日は嬉しい事揃へ、第一そなたの氣色もよし、仁三親子の働きで身請の埒が明いたぞ。懐中した
 金子を里に残いて、そなたの身と兩替して、一兩日に吉日極め、立田へお供仕る、サアく二階で
 酒々。吾妻はこれのお袋へ、よう禮言うて跡からおぢや。仁三此方へ。」と手を引いて奥の二階へ上り
 ける。吾妻はつとけてんして、「夢見た様な事どもや。根引にするの請出すのと、取りしづめもない僭
 上は、十人が十人で思はれたさに言ふこと、どこで帶さへ解かぬ身によもやと思ひ、頼みますると僞
 りしを、先は正直喜んで、はや談合が極まつたか、扱も胸をついた事。誰にどうと談合せん、勝様
 からは便宜もなし。サア今でも出ると云ふ時には、泣き口説いても叶ふまい。其の際にならぬ先、と
 んと打明け云ふたらば、義理詰に詰められて、思ひ切らる、事も有る。」と、階子半分上りしが、「いや
 いやひよつと言ひ出し、先に呑込みない時は、勝二郎様のお爲まで取返しのならぬこと。ア、言ふも

れば、氣が變つて達者になる、そこに氣遣ひない事。これに付いても一刻も早う請出したい、四年の年を三年遣ひ、ま一年の所を元金の二百兩で請出さうと言ふからは、親方も不足ない所。エ、親子の衆が無精な、餘所へ取られて、此の藤が一分立たず死なねばならず。今日は金を突きつけて、是非共詫びて貰ふ思案、耳を揃へて懐中した、これ袖口から手を入れて、諺か實かこれ見や。どれく、ホウホウく可愛らしい小判女郎。「これは嚴い詮索。扱油断とお恨みなさるれど、前髪もある私が親程な山城屋、算用だても申しにくし。母妙慶を遣りまして、割つつ砕いつ言はせてさらりと埒を明け、只今お知らせ申さん。」と、硯引きよせ墨をすり、鹿の巻筆妻戀鹿「鹿は春日の藤様め、果報者め金持めあやかり者め。」と騒ぎける。「それは大慶、先づ吾妻に逢ひたい呼うでたも、何所にぞ。」「いつもの二階にござります、これ林之介、吾妻様呼びまじや。」「吾妻様太夫様、林之介。」と呼ばはつても返事もせず。「これはどうぢや又例の勝二郎といふ淀鯉を、思ひ出して泣いてかな。鯉が付いて居るさうな、鯉なら煎餅まいて見よ。」「いや手拍子を打つて見よ。」「心得。」たんくたんくたんと手を拍てば、心浮かねど身の勤め、悲しい顔を見せまいと、態とにこくわさくと、二階の口に立つを見て、「そりやこそ鯉が現はれた。杯をさしみにせう。爰へちよくと御いり酒、甘い事ぢや。」と喚きける。吾妻二階に腰かけて、「これ仁三様たんと口が上つたの。あんまり鯉々言はんすな、鯉も瀧へ登り

とならざらし、縦横沙汰を聞きふれて、戀の大和の色好み、吉野の花も振捨つる、三輪の索麴喰ひ付いて、買ふ人あまれど賣る日は足らず。中にも龍田の藤と云ふしなだれ男纏ひ付き、揚屋も諸分吉田屋の仁三郎を定宿にて、二階を一間に宛てがはれ、命有りたけ、首尾有りたけ、金有りたけと勤むれば、四天王の名取をも、今の吾妻が下に見て、獨武者とぞ流行りける。藤も在所に稀男吾妻に深く染附の龍田や沖津白波の、太鼓も連れず今日も又、通ひ木辻の吉田屋の、「仁三内にか、ヤアよね様たち歴々のお寄合。おてき様の待合我等が座敷へも、少と貸して下されかし。」と言へば薰小紫、「珍らしい藤様の外の女郎をからんすか。男の心の一筋に、脇へふれぬは、傍から見ても憎うない物なれど、こなさんと吾妻さまとは餘りで小腹が立つ。しんきのわく程羨ましい、見ぬが増しぢや、戀のめんめん稼ぎぢや。」と、はらく立つてぞ入りにける。仁三郎忙がしけにしよこくと立出で、「ヤア藤様いづから爰に御鎮座。手でもお敲きなされいで、夢にもしらがの母者人藤様のお出でぢや、吾妻様の御氣色も今日は心よささうな。申し醫者の名も起縁のもの、始めは西の京の道へんと申す醫者の薬で、どうへんに有つた所を昨日から、三條の元喜と申す醫者で、めつきり元氣が見えました。御祈禱を本院息災法印を頼みませう、銚子々々。」と手を敲く。「これはく吾妻が氣色よいとは、あたままで善い事聞き初めた。さりながらあの病氣は、彼の江戸屋勝二郎が昔を忘れぬ物思ひ。根引に此方へ取つた

に勻にほひ炷たきしめて浮舟うきふねにかけるふ、紅梅こうばい竹川橋たけがはし壙ひめに手てならひ、我が名なゆかしきあづま屋やでこれ様さまの忍しのび寝ね、世よも忍しのぶ人目ひとめも忍しのぶ道みち芝しばに、駕籠かごかるすべも白妙しろたへの、晒干さらしほすてふ楨まさの島しま、はんま千鳥ちどりも友ともを呼よぶ、我われは伴ともふ人ひとととも、なき顔かほ隠かくせ笠取山かさとりやま、隠かくすとすれど心こころなや、宇治うぢの川霧かはぎりたえくくに、あらはれ渡る網代木あじろぎの、川瀬かはせの水みづに袖そでひちて、互たがひに影かげをみつ鏡かみ、やつれさんしたやつれたぞ。明離あきはなれくくの、あの雲見くもみればく、明日あすの別わかれが思おもはる、つらき我が身みはいろはの文字もじよく、袖そでに涙なみだの忍しのびもせず、木の葉散はちりぬる木幡こはたの里さと、徒歩かちでこれほど行くことも、初名月はつめいげつや一口いもあらひ、堤つみつたひの長繩手ながなはて、續つづく里々山々さとくやまくも、皆近付みなちかづきの山やまなれど、今日けふの憂うれき身みは心こころから、さぞ見ぬ顔かほと袖そで覆おほひ、袂たもとを覆おほひ笠覆かさおほひ、空そらを覆おほへば冬ふゆの日ひの、いと短みじかくはや暮くれて、夜よは長池ながいけの水みづの泡あわ、水みづの澱よどみに我われもとて、よどみ休やすらひ明あかさる、。

下之卷

奈良坂ならざとや木辻きつじも戀こひの札所ふだしよにて、女郎屋揚屋ぢよらうやあけや三十三軒けん、昔むかしの京きやうの八重櫻やへざくら、九重ここのへか薫かる小紫こむらさき、小藤こふぢをこ、の四天王してんわう、續つづく勢せいこそ無なかりけれ。哀あはれや吾妻あづまは義理合ぎりあひの、金かねの契約けいやくもだされず、此この里さと一番名はんなの高たかき山城屋やましろやといふくつわへ、中年ちうねん四年ねん二百兩にひゃうりやう、命いのちがらりに身みを賣うりて、大坂おほさかの埒らちは明あけたれど、又傾城またけいせい

勝二郎 初もめん

眞春の夜の夢驚かすくだかけの、其のしだりをの結ほほれ、とくる思ひはいつかはと、いはで心に
 かこち草、根引にせんと言ひ交す、身は捨草の捨てもせで、浮名は流れの淀川や、何をたよりに水鳥
 の、波にゆらるゝ世の習ひ、疎きは人の情なり。廣き世界は廣けれど、京や浪花の住居さへ、せき留
 められし水車、月の影さへくるくくと、彼方此方に汲みわけられて、行けば丹波路戻れば大和、行く
 も戻るも二人連、女夫鳥のとほくと、昨日の閨の花紅葉、今朝ふる霜に朽ちそめて、身をこがらし
 の森の下道、憂きしほ踏むもあぢきななき、馴れし故郷の草も木も、今の名残を留めかね、までくと
 啼く吉原すゞめ、よしみくの言の葉に、魅され渡る狐川、仇に暮せし年月の、榮花は夢の杯の、
 酔醒め枕。眞其れは若草身をうらみ草、何の其方にあいだてはなし、飽きも飽かれもせぬ中の、戀と
 命が寶寺、昔の里の寐覺には、伽羅で暖む牀の内、起き別れゆく曉の、袖から袖に手をいれて、出
 口の風も寒からず。今の憂き身の旅寢には、ちつと寄せたる肌と肌、吹きわけて吹く山おろし、麓に
 立てる女郎花、りんき辛氣と艶きて、くねる心の男山、いとし男を古の、世に引返せ弓八幡、神に
 暇と伏しをかみ、東を見れば名にも似ず、諸月こそ出づれ朝日山、山吹の瀬に影見えて、大黒舞渡つた
 渡つた光君の渡つた、夢の浮橋六十帖を渡り詰め十帖と詠じた。一に一夜のお情の夕顔の若ばえ、二

金子は申受けまい。親祖父の貯へを、冥加も知らず遣ひ捨て、金の罰が當つて金銀に疎まれ、手ぶりになつたる我なれば、此の度きつと身を懲らし、一錢得難しと云ふ事を、我が魂に思ひ知らせ、貧苦の修行の稽古の爲、金銀とては貰ふまじ。さりながら服部煙草煙草入、煙管の餘計あるならば、一本所望申したし。「ア、お安いこと、煙管のらうは細くとも、お心を太うして心中などあそばすな。」「いやるがくだい、不足なうて死ぬるこそ、ほんの誠の心中なれ、金に詰つて心中する勝二郎でない證據、薬も少々貰ひたい。」「實にこれは御尤も。懷中至寶の一包。薬屋は命堅い石見の掾」と祝ひければ、遣手の杉が太夫様へ花色繻子の前巾著、人參いれてお餞別、仲居の初は延紙二折、ちよつと假寐もあるものと、あぢな所へ氣をつくる。駕籠の衆の仲間から、三尺手拭抱へ帶とて進上す。「これはかの五尺いよこの手拭と、歌に諡ひし手拭か。」「これは又加賀菅笠、しめをあらくと召しませとよ。」「けにも誠の志。さまが土産の菅笠と、踊に踊りし笠よなう。」それは吾妻の花嫁子、これは吾妻が身請の果て、腰をよぢらす供もなき、紋日の夜牀引きかへて、禿もつかぬ草蒲團、夜見世の太鼓音たえて、山崎寺の鐘の聲、早こうくと響けども、我が迎ひにはいつ來うぞ。お二人まめで中ようて、随分無事で御座舟で、迎ひに參る男山、八幡の弓の弦きれず、便りを待つぞ待たるぞ。さらばさらばと泣く聲ばかり、耳に残りて面影は雲に消えけり。

曲がない情ない。くつわの譯が立たぬとて、再び郭へ立歸り、身の恥は扱置いて、勝二郎様の恥辱はこれが何と雪がれう。こなさんの請合は私が命有る限り、微塵も難儀はかけますまい。新町ばかりが傾城町であればこそ、京の島原奈良伏見、茶屋風呂屋へも身を賣つて、見事に分は立てませう。世に落ちようがどうしようが、勝二郎様の女房になる程の吾妻ぢや。じめんづくに頼むからは、雫もこれに偽りない。再び新町の勤めをのがれ、勝二郎様の一分立てて下さんせ、これ手を合はせて頼みまする。ほんに／＼此のよな事降り涌かうとは夢にも知らず、伊勢兩宮へ太々神樂、愛宕清水住吉様へ金燈籠、八幡様へ萬燈其の外神々宮々へ、鳥居立てての何のとて、金のいる事厭はずに、神佛への約束も今では違へる身と成り果て、人間どしの遠契約は騙りの様にも思はんしよ、夫れが悲しうござんす。」と、歎き侘びたる口説言、眞實見えて哀れなり。揚屋もさすが只者ならず、「よい／＼二言と御意なされな、義理詰になつてきた。茨木屋の手前は此の太郎が請取つた、手形一枚なされいでも、今の涙を手形にして、お前を爰で手放します。お身をどこぞへ片づけて、二百兩お立てなされませ。契約お違へなされても、此方からは尋ねませぬ。勿論催促仕らぬ、これから互の心底づく。」と、きれはなれたる詞の末、「それは定か有り難い、胸がちつとは開けた。」と、伏し拜みてぞ泣き居たる。時に向うの堤の上、大勢人の喚く音、追放人の作法とて、八幡公文所の役人数多、手々に割竹大地を叩き、

に置くとして、何とやら申す位たかいお公家様の姫君を、勝二郎が嫁に呼ぶ其の物入との言立、その公家様のお袖判を偽判し、金の取手はよみ人知らず、大内方より御詮索。科人は惣兵衛一味のあひすり十人あまり、栗田口にて獄門にかゝる筈。手代の業とは言ひながら、名指す所は勝二郎、存ぜぬとは言分立たず、金銀財寶山田畠、京大坂方々の家屋數まで取上げられ、著の儘での御追放、何所をしやうどにござらうぞ。腹の内から今日まで、荒い風にも當らぬお身、嘸や途方があるまいと、思へばいとしう存じます。」と、語れば一度に手を拍つて、呆れ果てたる其の中に、吾妻一人の物思ひ、「とかく私那不仕合。」と、餘の事言はず泣き居たり。井筒屋も溜息つき、「お笑止とも氣の毒とも、いうた許りでせう様なし。太夫様は先づお歸りなされませ、殘金二百兩は八幡の馬おりに請取る筈。惣兵衛とつうくつ致し、茨木屋をば私請合ひ、手形の上で今日お供仕り、斯様の御難儀出來の所、うかく八幡へ參つても、貳百兩の金子誰から請取り申さんやら。お笑止ながら太夫様を茨木屋へ渡しませねば、我等が手形消えませず。世間にはつと知らぬ内、早うお歸りなされるれば、私が爲と申し、太夫様もお首尾よし。サアお歸り。」と言ひければ、吾妻、「わつ。」と泣き出し、顔をも上げず居たりしが、「むけな言分して下さんす、歸れなら歸れで濟む。歸れば吾妻が首尾よいとは、さうした吾妻ぢやないわいな。可愛い男の流浪したのを聞きながら、身の首尾を思ふ様な傾城ぢやと思つて下んすは、

郎と云うては、石火矢でも崩れまい、長者の家と云うたれども、咸陽宮も亡び時、一時の間にいとし
ほや、彼も言はば金故、なまなか持たぬ我等しき、寐覺が樂ぢや。」といふ跡から、「科は何ぢや知れぬ
が、勝二郎は追放で八幡は煮える、おりや見て来た、百兩や五十兩は彼でも取つて退かうか。」「なん
のいの編笠さへ被せぬもの、請出された吾妻とやらはどうなる事ぞ可惜もの、やすうて此方へ貰ひた
い。」何の彼のとの悪い沙汰、口々言うて通りけり。吾妻ふつと耳に立ち、「太郎様今のはどうぞいの。
いやな沙汰でござんす。」と、氣遣ひがれば供の下女、駕籠の者まで色違へ、辨當持も首さけちう、喉
に詰りし餠餅の、案に相違の顔付なり。井筒屋も氣にか、れど、氣落させじと、「これく粹の様に
ない。あれは人の法界悋氣、太夫様を見知つて、氣遣ひかけて面白がる嫉みで皆言ふこと。ぎえん直
しに酒にせう、毛氈敷。」と勇んでみても、どこやらさまが明樽の、底の心は澄まざりけり。「あれあ
れ彼處へ泣きく走つて来る人は、勝二郎様のお草履取、佐五介ではないかいの。」と、言ふ所へ佐五
介息もきれく、「なう太夫様、ひよんな事が出来ました、私や何と致しませう。」と、泣いて詞も無
かりけり。「扱こそ噂に違ひはない、ちやつと様子を話してたも。泣いて居てすむ事か、きつと性根を
附きやいの。」と、叱られて涙をとめ、「事の起りはみな惣兵衛め、旦那をいとしいくと吐いたは己が
慾。お金には御一門の封が付いて自由にならず、結構な茶入かけぢお家の寶黄金の、鶏まで、京で質

ぢや、思案ある。」と驅け出づるを、女房すがつて、「思案とはどうぞいの、短氣を出さずと待たしやんせ。」と、引留むれば、「しや緩慢い、最前に惣兵衛め斬り損うたも女房ゆる。短氣も短慮もいる事か、思案は此の胸にある。」「サア其の思案が聞きたい。」「いやこれ許りは儘にして放せ。」「思案聞かねば放さぬ。」「くらはするが放さぬか。」と、男思ひの女房と主思ひの男と、誠餘りて摺みあひ、女夫争ひ犬くはぬ、犬の愷氣に威されて、辻の番太が夢くらふ、ばくろ町をぞ三重歸りける。請出すといふ其の日より、衣裳をも皆町風に、縫針の茨木屋より嫁入とて、婿は八幡の石清水、浴びせませんと井筒屋の、亭主は送る傍輩の、太夫天神餞別を、持たせ遣手の杉重に、樽の名酒を守口や、佐太の煮賣を見る事も、郭で成らぬ誰が野に、紅葉たけ／＼なべが茶屋、牧方楠葉これも又、吾妻請出す山崎見ゆる、そこで乗物たてにけり。吾妻乗物の簾をあけ、「これ太郎様、最早八幡も近いけな。かねて鯉さま道まで迎ひに出やんす筈、そこを此方から先越して、によつと押しかけてはどうござんしよ。」「八幡太夫様これはすんど洒落れませう。」「そんならとんと賞笠で、供やら主やらごちや／＼は、面白かる。」／＼飛びおりて、「ア、氣が晴れたわつさりと、嬉しや傍で山見たも、勤めの皮切堪へた故、憂沙ふんだは身のやいと。十四の冬より今年まで、それにしみたる風俗は、いかな家にも走り出て、お山見じと目をつける。上から下る魚荷の戻り、歩き／＼の高話、扱々浮世は知れぬ物、江戸屋勝二

門詰も踏まされず取次申す者はなし。よしお屋敷へ伺候して、六尺どもが手にかゝり、打殺されうば殺されう、主従の冥加は忘れまいと、朔日二十八日には御門に禮して罷り歸り、さもなき時にも月中に、二度三度臺所の口まで参り、傳手さへあらば、内證から申し上げんと存すれども、さりとは人は無情もの、古の傍輩も見ぬ顔し、目を懸けてひき廻した丁稚小者飯焚まで、詞を懸ける奴等もなく、馴染とて可愛や、白犬が見知つて尾を振つてしなだれる。犬に劣つた畜生共、恨むまいとは存すれども、凡夫心の淺ましき、無念でならぬ女房ども。「エ、口惜しい新七殿。但し我々僻言ならば、親旦那の魂魄、冥途から蹴殺いて下されかし。」と夫婦は橋に平伏して、聲をはかりに歎きしは、不便なりける心なり。酔醒の氣は上る、ぐつとせいて勝二郎、「オ、親父までもない事、身が蹴殺いて見せんす。」と、飛び懸つてひつ伏せ、胴骨を散々に踏み付くる。女房、「これはお情なし。」と取りつけば、「其の儘おけ、手向ひすな。お腹の癒る程踏ませませ。」「オ、踏まいでおかうか、重ねて斯様な慮外をせば、下々に打殺さする。用心せよ、駕籠持て來い。」と打乗るも、腹立紛れ譯もなく、後向くやら前向くやら、豎に乗るやら横堀を、急けくと走らせし、若氣の程ぞ笑止なる。新七は齒齧をなし、「エ、く口惜しい無念な。天逆様の事にても、主に踏まれて恨みはない。傍輩の言ひなし故踏まれたと思へば、腸が燃え返る。」と、橋板殴き欄干も握り挫ぐ許りにて、涙に眼も眩みしが、「よい合點

を求め、お出入の醫者浪人、田地買うたり銀かして、分限になるが御存じないか、御懇の醫者はあれど、善し悪しを嗅ぐ鼻がきかぬ鼻缺醫者が、入れ残しの目薬でも、お目が明かぬか情なや。此の新七めが親は大和の貧乏人、幼少の時藤田小平次と申した、狂言役者へ奉公やら養子やらに參つて、女形を致したを、親旦那のお蔭で、お家へ參り手代並になされしが、流石育ちが恥かしい。算用算勘存ぜねば、何を奉公御恩を送らう様はない。律義を我が身の奉公にして、お爲にならうと存ずる一念、五臟六腑に染み込んで、お主を大事に存じまする。茂庵様の御臨終に、「勝が事を頼むぞ。」お氣遣ひなされな。」と請合うた效もなく、斯様にお身を持ち崩させ、佛へ言分何とせう。お墓所へ參つても顔振りて、戒名をろくに拜みも致されず、涙に沈み居まするわいの。夫れさへあるに此の盆から、お前の言付けか、惣兵衛めか、私が若旦那の勘當の者、お旦那の墓へは參らすなと、お寺へ屹と言付け、插いた花も取り捨て、手向の水まで打ちあけて、未來に在す旦那にさへ、疎ませうといふ事か。お爲を思ふ新七が、左程お氣にいらぬは、水と火との合性か、餘りと云へば曲がない。さうではない若旦那。」と主の意見の恨泣き、詞を過し推參言ふ、涙は主の薬ぞや。勝二郎大酒の上、猶々氣にや障りけん。「ヤア意見言ふも所がある、途中に駕籠より引きすり下し、恥かかせて意見せよと、親者人の遺言か。サア此の慮外の言分があるか聞かう。」と怒らる、これ申し勝二郎様、密かに御意見申さうも、

何が悪うて新七が御意見は御意にいらぬぞ、頼もしいないお主様や。」と、涙を溢さぬ許りなり。實に酒の酔ひ本性忘れず、お半を突き退け、「因縁話おきをらう、新七めが意見聞きたうない。おれが親父はな一年に八千兩九千兩づゝ、三十年遣はれたれども、つひに浮名は立たなんだ。こちが身代で五百兩や千兩遣うたら何ぢや、ナア慮外ながら夫れを新七めが、遣ひ潰すの身持が悪いのと、一門一家町年寄壯屋まで觸れ歩いて、藏々に封を付けさせて阿房者にしてくれた。忝いことの、何ぢやそちに心が残つて悻氣ぢやあ、おけよ。尤もはじめは惚れて居たけれども、今新七めが喰べ汗して、裏までかやして喰ひさがいた物を、此方所望にごさらぬ。ア、慮外ながら新七めが口ゆるゑに、揚屋の届けも無沙汰になり、若い者の一分を捨てうとした、此の恨みは盡きせぬ、勘當の上の勘當ぢや。サア駕籠やれ。」と乗らんとするを、新七飛び出で縋り付き、「お情ない旦那殿、何とて左様に邪にお聞きなされる、ぞ。新七が御一分捨てたとは恨めしい、捨てまい爲の御意見。金の事は申さぬ、千兩が萬兩でも金程つゝの、お身につくお慰みが有るにこそ。惣兵衛めが計らひにてもがり共を太鼓につけ、十兩の物入を百兩に附立て、九十兩は分取にしてたはけにして笑ひますが、此方は御存じござらぬか。吾妻殿の身請の金も、私にお家にある時分、七百兩と申す金惣兵衛に渡した。其の上に此の度名物のお家の道具、京三界質に置き、二千兩餘の御借金が出来たけな。旦那には借金させ、手代の惣兵衛屋敷

昨日からの酔ひ醒めず、女郎の小袖を打掛けながら、舌も廻らぬ夢半分、太夫爰まで送つてか、エ、
 かたじゆけ南京の八幡酒には酔はぬ。今のは兼平の能の手、木曾殿が泥田へ踏み込まれた所、露末白
 雪の薄氷、深田に馬を驅け落し、引けども揚らず打てども行かぬ望月の、駒の頭も見えばこそ。こは
 何とならん身の果て、いやはあ、何と面白い事か。と、ひよろ／＼正體なかりけり。申し旦那様、こ
 れはどうしたお身持ぞ。お前のお蔭で榮耀する今夜の人も大勢あるに、お駕籠に一人附く者ない、こ
 れが江戸屋の勝次郎様のお行儀とは言はれまい。私が男の新七にお暇を下され、お出入さへ止められ
 たれど、眞實お爲になる者は、お家で新七ばかり。御身上のかいをなす惣兵衛めと新七と、思ひ替
 へて下さんすはお馴染とも思はれぬ。其の上忘れはなされまい、前方私御奉公致した内、お寢聞へ來
 いのお傍に寢よのと、人頼みまで遊ばした。私は一つも年嵩なり、若いお主を、熊手よ慾よと
 言はるゝも口惜しく、奥様お呼びなさるゝ時の、もじやくじやも如何と、お暇を乞ひましたれば、心
 ざしを感じた、さりとては女子に奇特者。あの新七といふ者は、親茂庵不便をかけ我が子の如くせられ
 て、兄同然の新七と夫婦にして一生見捨てぬ。』お約束、其の新七を追ひ出し、敵の様になさるゝは、
 其の時から私を憎さに夫婦にあそばしたか。憎まるゝ覺えはなけれども、お心に従はぬ恨みを、杵で
 あたり、杓子であたるお仕方か、但しは今にお心残り愠氣ゆるの憎しみか。夫れなればなほ穢い氣、

には何がなる。新七が言分なく身のあつさに切つたと、皆手前のふみかぶり。無念を堪へてお爲になり、親旦那様の御恩を、送る心はないかいの。其の様に短氣では、私や心元ない。」と、恥ぢしめ止むれば新七「夫れも皆合點、理が非になるとは知つたれども、今の悪口聞かぬか。彼奴が此の前親旦那の悪性金を、十四貫目横取して曲事に遭ふ筈を、兎角おれが精力で沙汰なしに事済んだ。其の時には命の親と手を合はせて拜んだ。それから十年たたぬ間に、少しも爲になりさうな、古い手代を嫉み出し、恐らく涼しい此の新七に無い難つけて暇出させ、旦那の身代空にして今の様な雑言、仲し上つた頼見れば、火に入ることもおもはれぬ。」と涙を流すぞ道理なる。時に揚屋の上する女子下男、門番起いて、「ちと門を頼みます。これは此方の大事のお客、浮世小路までお歸りぢや。甚う酔うて御座んす故、斷り云うて内からお駕籠にめさせます、氣を通して下んせ。」と、言ふより早く門番「皆まで言ふな合點ぢや。」と、潛り開いて目を眠るも、日頃の金の威光ぞかし。夫婦「すはや。」と橋詰にて、駕籠の後前しつかと捉へ、「お駕籠待つて下され。」と、引留むれば駕籠の者「ヤアこりや狼藉して、息杖の胸打を喰ふか。」と振上ぐる。「狼藉は致さぬぞ。旦那のお爲に致す事、打たば打て毆かば毆け。旦那へ一言申さぬ間は、駕籠をやらぬ。」「否放せ。」「否遣らぬ。」と捻ぢ合ふ勢ひ、駕籠を打明けて躰ながらの勝次郎、橋板をころ／＼川へ落ちんとする所を、お半ちやつと引起し、後を抱へて膝の上、一

張られ、夫れで顔が引釣つた西瓜の様な顔なれど、色は黒實ずんと風味のよい男。神ぞ一切振舞ひた
い。ホ、くくく。」笑ひて南へ歸りけり。暫く有つて、「井筒屋の能が濟んだ。」と出入の者、兵法遣ひ
座頭茶の湯者古道具屋、大酒食悅お陰を蒙り八十末社。流石の郭駕籠きれて、雪駄片足の酔潰れ、遙
かの跡よりのさくと、彼奴は手代の惣兵衛め、同道は佞人組能の師匠の富川め、京の浪人軍四郎、
醫者はすれども本道守らぬ目薬師なんど、中にも惣兵衛かさ取つて、「なんと、何れも旦那のはを御
覽じたか、あれみな我等がさする事。とかく此の惣兵衛と肌を合はせ、羽交に付いて廻らつしやれ、
一期の身代固めて遣らう。はて旦那の身上で、一年に千兩二千兩は筒落でも有ること、旦那を名代に
立てては、どうくろめうとも自由なこと。かの新七のいきすりめ、お爲顔で旦那をひづめ、家久しい
我等を押し退け、一人威勢を振はうと仕居つたを、旦那へ吹きこみまくし出してのけたが、聞けば大
坂に狼狽へて、此の惣兵衛と公事のみやのと吐すけな。あはれでんどへ出やれかし、五畿内をせいて
見しよ。今の間に御器さけて心からの非人敵討、どこぞでそこの橋の下新七は居やらぬか。」と、口
合悪口僭上はり、どつと笑うて通りける。新七どうも堪へられず、胸を擦り鎮めて見ても、律義一偏
に眞直に一筋な若い者、末の事も思はれず、「切つてくれう。」と飛んで出る。女房抱き付き、「これこ
な人、女夫の者が世話やくは、勝次郎様へ御意見申す爲ではないか。彼奴一人切つたとて、お主の爲

とぞ笑ひける。女房お半も手分をして、見はづまいの目もきよろ／＼、立賣堀邊さまよひ来て、夫を小陰へ咳拂ひ、招き寄すれば新七合點、密と寄れば耳を寄せ、「なう今まで西口につけて居ましたが、爰へはまだ見えぬか。」と囁けば、「ム、よい／＼様子は知れたぞ、まだ井筒屋に居らる、けな。程は有るまいぬかりやんな、人が見れば不審が立つ。」と、一つ所に立ちもせず橋を越えたり渡つたり、忍び佇む女夫の姿、夜見世戻りが氣を付けて、「ヤアこつてりと味な事、よね狂ひよりあの方の實入がよからう。」といふも有り、「時分がら心中の下地か。又義太夫が口の端に、新町橋をかさゞぎの、橋。」と語りて行く人も、絶えて其の夜も更けにけり。「なう彼を見や、中から提灯引舟まじくら、禿が諂うて客送る。そりやこれに極まつた。そなたは駕籠に取りつきや。」「こつちへ任せて置かしやんせ。」と、大門際に待ちかくれば、「遣手のつなぢや、羅生門あけてたも。」と言ふ、茨木屋の大盡、鯉にはあらで、「雑魚場の人すゞ木様、明日駕籠の衆頼む。」「合點。」と、北へ走れば新七夫婦、なむ三枚肩見送りて口を明きてぞあきれたる。「それ／＼そこへ又提灯、今度はよもやはまるまい。」と、潛りくゞるを手ぐすね引き、女房しかと引捉へ見れば色は眞黒に、横肥つたる菊石面、道頓堀の佐渡島傳八。はつとしらけて立退けば、傳八も膽潰し、これは君何し給ふ。人違へとは存すれども、色に袖を引かれて、神ぞ忝う思ほゆる。ホ、／＼。賤も昔は戀をみがき、年中郭に入り浸り、太夫天神に引きつり引

とした人、まだこゝに遊んでか、どうでござる。」と尋ねける。「ア、されば井筒屋のお客は、隠れもない、八幡の住人江戸屋の勝次郎殿、替名は鯉様。拾萬兩遣うても、こちとが百の錢落したとも、思はぬ程の身代なれども、新七とやらいふ手代、堅むくろにせいたうし、一門衆町所まで頼んで、土藏に封をつけ、一步の金も遣はせなただけなを、惣兵衛といふ相手代、若い旦那の氣を詰めさせ、煩はせてはならぬと新七を追ひ出し、氣儘にぐわんぐわと遣はせる。鯉が生簀を飛んで出て、日比駒染の茨木屋の、吾妻をとんと請出し、明日は直に八幡へ。今宵郭の名残ぢやと、井筒屋で大振舞。何ぢやは知らず井筒屋の、庭から門まで長持で通られぬ。今夜の物入ざつと積つて二百兩。扱も金は片いきな、有る所には有る物か。私等は夜晝あがいて三百は儲けかねるに、よう飲んだとて一步取り、よう笑うたとて二步取り、兩肌脱いでこそぐられ、鼻の穴へ胡椒入れて、くしやみしても一角。いかな鯉でも鯛でも、一藏あかう。」と語りける。新七さてはと恨めしく、腹の立つにも主思ひ、「ム、それは聞き及うだ分限者、すんど若い人ぢやけな。仰山な酒香と聞いたが、今宵も酒であらうの。」「ア、ア、並びもない呑みぬけ、親茂庵というたも命を酒に替へられた。鯉殿の母御前も元爰に勤めた人、どちらへ似ても蛇の子孫。夫れでもよい衆のしるしには、萬事に達した器用人、能の脇師を手いけにして、九軒で主の座敷能、常住酒で足ひよろつき、三番叟も高砂も、皆狸々の亂れかと、思ひます。」

淀鯉出世瀧徳

里郭住居は時雨の雨よ、ふつつふられつ、むら村雨の、まだひぬ露もまだひぬやよ。ア、霧は不
斷の伽羅をたき、晝にもまさる燈火は月常住の夜見世かや。朱雀三谷もいかな事、直下にみつの難波
の里、戀も所の氣につれて、よろづ手廣き大郭、色に擲つ金銀は、土か砂場の西口や、思ひ綻ぶ袖口
を、九軒阿波座の野良烏、月夜はなほか闇の夜も、瓢箪町を腰付に、意見ふる手の印籠の、底に焚き
がら吸ひがらの、煙に油煙たな引きて、霞が關か東口、爰ぞ浮世のだての大木戸、あけぬは銀の富樫
の關。夫れつらくおもんみれば、大盡客衆の秋の月は、小判の雲に光り、小傳よびましや長返辭、
驚かすべき夜半もなし、三番太鼓つてんてん、天下は夜なか八つ過、郭は戀の晝中や、駕籠やろ許り
ぞ寐聲なり。頃しも初冬立猪餅小豆織のべんがら縞、羽織の上に手拭おび、頭巾鼻まで顔隠し、女郎
買ふべき風にもあらず。さながら用なき體にもあらず。どちらへどうとも片づけて、思案に落ちぬ風
俗、新町橋の橋の上、橋辨慶が薙刀の、鞘拾うたる如くにて、うろくとして立ちたりしが、ちよこ
ちよこと立寄つて、「これ駕籠の衆、率爾ながら物問ひませう。今宵九軒の井筒屋の、客は何處衆の何

まれけり。

五十年忌歌念佛 終

勘十郎が七十兩、盗みしといふには證據なし。しかれども勘十郎、おのれ一旦主人の金子をわだかまり、清十郎親子に無實を言ひ懸け、迷惑させしふとゞき、もと皆おのれが悪心より事おこつて、お夏も自害におよびたり、主殺しともいひつ可し。屹度しおきにおこなふべきが、手を出して人もころさず、盗人いきはまる證據なければ、慈悲をもつて助け置く。命のかはりに髪をおろし出家して、かれ等が菩提をとぶらふべきか。」と仰せける。「ハ、有りがたし。」と、勘十郎頭を地につけ三拜し、小刀抜いてもとゞりより、ふつと切つて捨てければ、「オ、神妙々々。佛弟子となつたれば、たとへまことの科あつても、いよく命は取りがたし。このうへは汝が行くする、彼が後生のためぞかし。和睦して恨みを晴らさせ、往生させよ。」とありければ、勘十郎一念發起して、「これ清十郎、今は我も懺悔せん、かの七十兩の小判は、この勘十郎坊主が盗んで、源十郎奴に塗らんと思ふをりふし、斬られしを幸ひに、その方に負せたり。恨みを晴れて成佛あれ、跡とぶらはん。」といふ處を、「さてこそ盗人顯はれたり、其奴縛れ。」うけたまはる。」と、踏み付け腕捻ぢ上げ、はや斬繩にぞかけてける。「直に國中引渡し、獄門に斬りかけよ。」とひき立つれば、妄執も晴れつ、清き清十郎、臨終顔も菩薩の數、二十五歳の命は消えて、浮名は今に残りける。お夏もともに取りつくを、宥めともなひたち歸り、その夏衣墨に染め、年忌々々の手向草、花の帽子に修行の笠、笠が能く似た阿彌陀笠、彌陀の御國に生

代の慣ひ、我等ばかりに限るでなし。あの清十郎は朋輩を斬り殺し、金七十兩盗み取る。これも手代の慣ひか、エ、残り多い。まそつと早う生まれたら、熊坂長範か、石川五右衛門が手代にせば、好い給分を取らうものを」と、憎體にこそ申しけれ。今を最期の清十郎、眼をくわつと見開き、「やいく勘十郎、廣い世界を汝が口から、世間手代の慣ひとは、えらが過ぎて聞き憎い。悪い事を慣ひといはば、主殺し親殺し、屋焼、強盜、世間の慣ひと許さうか。人を殺せば我が身も死ぬる、此の清十郎が七十兩や八十兩の、金に換へる命でなし。旦那の御恩、お夏様の情に捨てうと思ふ身を、おのれが口一つにて勘當させ其の恨み、汝をたつた一討に仕舞はうと思つたに、仕損うて口惜しし、エ、く無念な、口をきかするなあ。ハツ／＼我ら故にお夏様の自害、御恩の旦那の憎しみも、嗚や増らん、情なや。この年までの御面倒、御恩を報ずる事もなく、御苦勞をかくる事、これぞ黄泉の障りとなる。これ親父様妹ども」と、呼び向け顔をじろ／＼と、言ひ度き事のありさうに、目は働けど息切に、人脈絶ゆる兩眼より、涙ばかりを暇乞、親子他人の隔てなく、皆々哀れを催せり。佐治右衛門涙を流し、「申し殿様、勘十郎がお主の銀を引負ひし、我らを瞞した慥かな證據出づるからは、七十兩も彼奴が盗みに極まつた。御詮議なされ、清十郎を御助け下され」と、大聲上げてぞ申しける。代官職聞き給ひ、「尤もく、不便なれども清十郎は、人を殺せし白狀まぎれなき上は、斷罪遁るゝ處なし。又

心配の、臟腑を破りし長煙管、頼む方なく見えにける。程なく、但馬屋九左衛門、手代勘十郎、一家残らずお召しによつて参りたり。」とぞ訴ふる。斯かる處へ老いたる百姓、周章しく狼狽へ来て、一目見るより、「南無三寶しなしたり、待てむさく」と一人は殺さぬ、敵を取つてとらせう。」と、せき來る涙を押しのごひ、「謹んで、我らは清十郎が親、和泉國水間の佐治右衛門、年寄ながら面目なや。その勘十郎奴に瞞され、お主を大事、子が可愛さ、由ない手形なんほう後悔仕る。それにつきその時分、娘子供が道頓堀にて、取違へ歸りたる笠を、此の頃取り出せば、頂きの下にこの文あり。御詮議なされ、清十郎が科を輕め下され。」と、涙を流して訴訟する。「それくこれへ。」と、取り上げて披見ある。幸便に任せ一筆啓上せしめ候、此の度お夏様嫁入道具の代金百四拾兩の内百二十一兩、爰もとにて鹽問屋へ相渡し、貴様の損銀残らず相濟まし、乃ち請取手形殘金十九兩上し申し候、追付御下り待ち入り候、但馬屋勘十郎殿参る、同じく源十郎。「何とこの手蹟相違なきや。」と仰せける。九左衛門一見して、「相果てし源十郎が筆、判形ともに疑ひなし。サア返答あるか勘十郎、御前にて申せく。」と責めつくれば、勘十郎少しもひるまず、「尤も我ら私商ひ、損金の流用に道具の代金、暫く取換へ置きたれども、追付右の金は才覺して、道具屋へ濟まし置く。商賣の慣ひ、廻金の無き時は、氣轉を利かせ表裏をつかひ、主人の金を手前へ加へ、自分の銀を主の銀に廻し、間に合はするは世間共に手

逆の睡りを覺し、充滿吾願如清涼池。」と嘯きて、「地獄、餓鬼、畜生、修羅、此の四惡種の苦患を解脱し、吹き出す煙は沙羅林梅檀の霞と變じ、三寶供養の燒香となつて、三十三天に薰じ渡らば、日月は兩の眼に入り代り給ひ、梵釋二天に手を引かれ奉り、佛の御前に此の度は、たち別る、とも藻汐燒く、煙は同じ鷺の山、靈山淨土で待つべきぞや。南無阿彌陀佛。」といふより早く、煙管押取り鴈首まで、咽の内へ押込んで、眞逆様にぞ伏したりける。警固の上下ふためきて、「それ殺すな。」と引き起せば、色も變はつて目眩き、血は紅の瀧津瀬と、口に流る、風情を見て、「口惜しや後れたり、我こそ清十郎が二世の妻但馬屋のお夏、人々の情には同じ土に埋みてたべ。南無大悲觀世音助け給へ。」と、立てたる拔身の槍押取り、咽笛くつと突き通す。二人の比丘尼抱き付き、「なう皆様頼みます。」と、泣けど叫べど囚人の、自害に各仰天して、勞る人もなかりしは、是非にかなはぬ次第なり。城下に斯くと注進す。代官所の役人、馬を飛ばして驅け來り、矢來の内に飛んで入り、大聲上げて、「ヤア早まつたり清十郎。汝朋輩の源十郎を、人違へにて殺めし段は、白狀紛れなしと雖も、盜人の科未だ分明ならぬ故、曝し者として成敗の日を延ばし、盜人の本人あらはれなば、汝が命を助けんとの評議なりしに、近頃残念千萬なり。只今但馬屋一家を召寄する。事の詮議濟むまでの命を生きんと思はぬか、狼狽者」と力を付け、二人が口に氣付を入れ、種々看病なし給へば、お夏は少し息出づる。清十郎は

今の口惜しきせん方なく、高き山の巔にて、一杯の水を求むるが如しとは、此の身の上に知られたり。この羣集の中にこそ、清十郎が一命に代らんと歎く人もあるべきぞ。必ずく僻事なり、存命へて追善し、菩提を弔ふ善根こそ、命を助け、不老不死の薬を興ふるよりも嬉しきぞや。人々の廻向を受け、佛の御國に至らんと、思へばく、此の世の羈絆はふつと思ひ切つたぞや。ア、思ひ切つても切られぬは、いとし可愛の只一人。よしこれも夢の戯れ、頓生菩提、南無阿彌陀佛。」と、潔くはいひけれど、お夏が歎き妹の、變れる顔を尻目かけ、覺えず「わつ」と泣き出せば、お夏を始め二人の尼、警固の上下、縁もなき貴賤羣集に至るまで、皆々袖をぞ絞りける。稍あつて清十郎「如何に警固の方々。口濁きて苦しきに、煙草一服所望したし。この羣集のその中に、姫路の人もあるならば、吸ひ付けて給はれかし。情のお主の御手より、末期の水と觀念せん、如何あらん。」と言ひければ「苦しからじそれく」と、煙管煙草を出しける。お夏悦び「なう我こそ姫路のもの。一樹の陰も他生の縁、まして一つ國なれば、未來も一つに生まるゝため、約束の煙ぞ。」と、餘所ながら暇乞、煙草吸ひ付け垣越に、警固の者取次ぎて、清十郎に渡しける。夫婦は物も言ひたけに、顔振上けしが咽せ返る、涙を中の鬚の戸にて、とかうの詞も出でばこそ、泣くより外の事はなし。漸う涙を押留め、「人もおほきに御身の手より、末期の一服を受くる事の有り難さよ、本望さよ。この煙草にて十惡五

う此處に居る。これ此處に顔を向けて下され。」と、呼ばはる聲も往來の、羣集の歎き念佛に、紛れ聞えぬ哀れやな、不便やな清十郎、顔も容も瘦せ衰へ、最期極まる心にも、後生菩提も思はれず。お夏が歎き古郷の、親兄弟は如何ぞや。お夏に知らせ今一目、せめて面影ばかりでも、姫路の方をと見廻して、目と目をふつと見合はせて、お夏は、「わつ。」と泣き出す。清十郎は聲立てず、膽より出づる憂き涙、刀の刃より先づ前に、思ひに命絶えぬべし。涙を中の架橋と、心通はす心の色、世に取沙汰のことわざ、諺や、奥清十郎殺さばお夏も殺せ、生きて思ひをさしよよりも、思ひを生きて、生きて思ひをさしよよりも。エなまみだく、南無阿彌陀、南無阿彌陀佛なまみだく、南無阿彌陀佛。」と廻向して、皆背袖をぞ絞りける。清十郎涙を押へ、「何れも有り難き御廻向、千金萬金より、一遍の廻向に優る寶なしと承る。最期の悦び何事か之に如かん。さりながら心に懸るはこの高札、主人の金七十兩、盗むとは身に取つて覚えなし。相手勘十郎を斬り殺さんと思ひしに、過つて人違へ、遁るゝも業悦びならず、殺さるゝも業歎きにあらず。某生年二十五歳、十一歳の春より奉公し、主人の養育み情にて、商人の道一通り、藝能文字の元末まで、人並になりたるも、皆これお主の御高恩。明暮主の教へに任せ、親に孝行主に忠、口正直を守つて、一言も偽りをいふまじと、毎朝天道氏神を祈りしかども、若き者の悲しさは、只今非業に死なんとと思ひも寄らず、佛とも法とも一遍の、念佛なせし事もなく、

憂き物に出で給ふ。今は我が名を包みても、何かその甲斐夏果つる、扇の女の物狂ひ、その人の名は清十郎、有りし姿は變るとも、未だ佛は残るべし。教へてたべの人々。」とて、伏し沈みてぞ泣き居たる。二人の比丘尼繼り付き、「さてこそは餘所ならぬ、一つ流れの和泉國、その人のためにこそ、我は妹我は姫、親の歎きを宥めかね、共に亂る、我が身ぞや。狂女といふも何故ぞ。そなたは妹脊の忍ぶ草、身は兄弟を思ひ草、おなじ由縁の草葉ぞ。」と、手に手を取つて泣き叫ぶ、物の哀れをとゞめける。「なう淺ましや。今里人の語りしは、但馬屋の清十郎は、人を殺めし科によつて、方々へ追手か、り、長崎とやらんにて終に捕はれ、囚人となり、あの松陰の竹垣にて七日曝し、其の後は但馬屋の門口に、獄門にかけらるゝと語りし故、せめて餘所目の暇乞に、これまでは參りしが、御存じなきか。いとほしや。」「なに我が夫は捕はれて、終に首を斬らるゝとや、それは誠か。今までは狂氣の中にも若しもやと、頼む念力切れ果てて、同じ刀に斬られん。」と、驅け出づるを二人の尼、「歎きは替らぬ我我なれど、最期に心亂れては、人の譏り後世の爲、皆其の人の仇ぞ。」とて、泣くく制し止むれば、早先拂の警固の者、山賊夜盜のその如く、嚴しく堅め引き出す。生きての思ひ死する罪、元一筋の縛めの、繩目に遭ひて清十郎、引かれ出づるぞ無慙なる。矢來の内に土壇を構へ、高手を許し羽搔縮、北向に引据ゆるは、目も當てられぬ風情なり。お夏は涙に目も明かれず、聲も立てねど伸び上り、「な

してたべなう。否御僧とは空目かや。我も焦る、丸太船、浮世渡る一節を、謠へや謠へ泡沫の、唄小舟作りてお夏を乗せて、花の清十郎に櫓を押さしよえくわん。観音薩埵の誓には、枯れたる木にも花笠、笠に插いたは柵の葉、腰に插いたも柵の葉、一枝二枝、三日に三枚七日に七枚、起證誓紙の牛王のうらなく、灰に焼きつ、互に飲んだる、水も漏らさぬ中々に、引きも合はせぬ神心、熊野の神のお留守かや。足柄、箱根、玉津島、貴船、三輪の明神も、神とも覺えぬ神ならば、尋ぬる人に逢はせて見や。それく逢はせず逢はせぬは、皆偽りの御神と、譏つても祈つても、神の力も叶はぬか。」と笠も髭もかなぐり捨て、狂ひ歎くぞ哀れなる、共に濡らせる尼衣、二人の比丘尼も涙を押へ、「我も尋ぬる人故に、假に扮せし修行の道。思ひ當る事あらば、知らせ申さん國處、有様語り給へとよ。」「嬉し人の問ひ事や。國は播州姫路の者、尋ぬる夫の容姿、姿は詞に語るとも、心は筆も及びなき、ぼんじやりとして屹として、花橘の袖の香に、昔男の業平作り、黒い羽織が好きすき油、鬢付髪付眞黒々、黒目勝なる目の中に、鼻筋通つて櫻色、年頃は二十歳餘り、丈高からす低からす、茶の湯、盤上、打囃、男の藝に一つでも、疵なき玉の杯の、酒もよい酒、假名文書手の萩の露、轉び寢し夜の説經 睦語は、俺と其方が中ならで、岸の濱松根掘れても、漏らすまいぞや顯はすな、變るまじきと末かけし、末の松山浦の波、上越す人もなかりしに、友朋輩の猜みにて、犯さぬ罪の仇名を啣ち、世を

下之卷

お夏笠物狂

唄「夜さ來いといふ字を金紗で縫はせ、裾に清十郎とねた處、裾に清十郎とねた處エ、少しくわん。
歌念佛觀すれば夢の世や。寢て温めし懷子、何時の閒にかは浮れそめ、三界をたゞ家として、袖笠雨の宿りにも、心とゞめぬ假枕、流れにあらぬ河竹の、笹の小笹のびんざゝら、花の手おほひお手を引かれた、これも熊野の修行かや。姉様のこれの勸進柄杓の、笑顔好しとて柳が招ぐ。柳の髪を何ゆゑに、浮世恨みて尼が崎。尼が崎とは海近く、何故に其方はしほが無い。」節は哀れに身は伊達に、歌は念佛の歌比丘尼。唄「向ひ通るは清十郎ぢやないか、笠が能く似た、菅笠が。能く似た笠が、笠が能く似た菅笠がえ。笠をしるべの物狂ひ、物に狂ふも我許りかは、鐘に待宵鳥には別れ、戀する人の夜な夜なを、氣違とてな笑ひ給ひそ。諸傳へ聞く、孔子は鯉魚に別れ、思ひの火をば胸に焚き、白居易は又我が子を先だてて、枕に残る藥恨むは道理や。それは子故の別れの涙。親より子より我が身より、いとし殿御のいとしほや。それより便宜音信の、聲も聞かねば顔も見ず、我は秋鹿夫を戀ひ、唄かいろと啼くと知らせたや。なうくあれなる御僧、我が殿御返してたべ、何國へ連れて行く事ぞ。男返

たは落ちつらん、引入れあるか吟味せよ。」と、上を下へと返せしが、「なうお夏様が御座らぬわ、ヤアこれぞ曲者、探して見よ。」と、二階、内藏、縁の下、湯殿まで探せども、蚊帳の内は氣もつかず、「表の口に錠下し、裏を探さん。」「尤も。」と、提灯とほして驅け惑ふ。お夏は我が身の恐ろしさ、清十郎が氣遣ひさ、氣も逆立つて散亂し、「南無天照大神様、觀音様、氏神様、死ぬとも二人一緒。」と、胸を騒がす折柄に、勘十郎が聲として、「蚊帳の内を見なんだ、探して見よ。」といふ聲す。「南無三寶。」と飛んで出で、表には錠下りたり、裏には大勢充ち満ちたり、跡へも先へも因果の網の、懸る憂き身は佛神の、直なる法も横町の、相の細路次蹴破れば、さつと開くも戀路の念力、かけし願ひの神力の、神變奇特毒蛇の口、遁れ出でたる如くにて、落ちんと契り西の辻、東の辻に、「なう我がつまく。」と聲を限りに往き還り、「扱は俘となりけるか。」と、ハヤ狂亂となる鐘の、響の末に、「あれお夏く」と呼ぶわいの。おうく其處にか、何處にぞ。いやくく待て暫し、あれは我が屋に父の聲。我を尋ねて我を呼ぶ、親もゆかしや、夫も戀しや。」父は子を呼ぶ夜の鶴、我は妻呼ぶ野邊の雉子、追驅け行かん、夜は何時ぞ、鐘は幾つ、八つか七つか 曉風の、辻行燈を吹き消して、道も心も眞暗くらく、くるくくく、狂ひ亂れ泣き亂れ、亂れて唄ふ 鶏の、卵を渡る危さの、狂女となるこそ 三重哀れなれ。

エ、憎さも憎し、とても斯うなる憂き身なり。身代の敵、此の首尾に助けておめくと戻られず。勘十郎奴を刺し殺し、有甲斐もなき我が命、しぞこなうたら浮世は闇。後前見えぬ出来心、内の勝手は覚えの庖丁、心の鑪も荒砥の研ぎ立、尋ね寄れば高齋、前後も知らず不思議の本望、夜著引退けて咽笛を、ぐつと扶れば源十郎、「うん。」といふを引きおこし、肝先を一刀、又刺し通して息を留め、耳に口を差寄せて、「こりや勘十郎、まだ魂はよも去るまじい、よつく聞け。朋輩に科を被せ、身の爲にせし報いの劔、名乗り合うて殺さぬは、近頃残念至極ながら、讒訴したるこのえら骨。」と願かけて斬り下げ、「此の胸から企んだか。」と、鳩尾前を脊中まで、思ふ様に止めを刺し、死骸を夜著におし包み、たち上れば血落ちて、滑つてのつけにどうど伏す。はつと起きて蒲團にて、足摺り拭ひ静々と、身仕舞して立つたる處に、奥よりお夏は手燭の影、表へ出づるを、「これくくく。」「ム、其處にか。」と走り寄り、血に滑つて、「ア、怖。」と、聲を立てるを押鎮め、様子をさ、やき、「此のうへは一緒に退かん。」といふ處へ、行燈提げて勘十郎、納戸の方より来る體、「南無三寶人違へ、よしこれもうぬが身の。」火を吹き消して車戸を、押し明け飛んで出でにけり。遅れてお夏は爲方なく、蚊帳打上げ身を潜め、生きたる心地はなかりけり。此の音に勘十郎、走り寄つて手燭を上げ、夜著引捲つて、「ヤア源十郎が斬られたわ。」と、呼ばはる聲に主下人、男女残らず起き合はせ、「疑ひもなき清十郎。門の戸明い

たか、ちと談合あり、目をさませ。」と、頬杖してぞ寢轉びける。「いや寢入りはせぬ、サア話せ。」と、夜著の内より煙草盆、寢ながら行燈引寄せて、顔を並べて語りける。源十郎小聲になり、「其方が頼うだ鹽商ひの損金、彼の金子で濟まして、請取手形も剩り金も一緒に上した、届いたか。」といへば、「オオ過分々々。慥かに届き請取つたが、其の状も請取も大事にかけ、笠の頂きに入れ置き、其の笠を道頓堀の羣集に、芝居の木戸に預けて、餘所の笠と替つて、詮議しても知れなんだ。それは失せても大事ない、お蔭で萬事忝い。」といへば、源十郎、「一段々々。それにつき、清十郎奴が諸道具、七十兩の小判まで、旦那が身共に預けられた。お夏女郎と清十郎奴が盗み出した分にして、仕てやる様な工面がなと、分別すれど能はぬ智慧。其方が今度のおぞい仕様、魔法でも叶ふまい。如何ぞ思案はあるまいか。」といへば、勘十郎うなづいて、「嫁入道具の代銀を、此方へ遣うて損を埋め、まんまと間には合はせしが、一度大坂へ上す銀、あれをと胸に當てて居る工面を聞け。」と、嘸き合うて吸ひ付ける、煙管の先にて行燈は、消えて闇とぞなりにける。清十郎は幸ひと、釜の内より這ひ出づる。酒に酔ひたる源十郎、とろく寢入る體なれば、勘十郎揺り起し、鼻に手を當て、「仕濟ましたり。七十兩を盗み取り、預り人の此奴に負はせんもの。」と分別し、密と起き出で、源十郎を我が寢處に押し遣つて、夜著打被せさし足し、奥の納戸に入りにつけり。清十郎はそれとも知らず、「扱は彼奴等は寢入りしな。

爲にもならぬ事、先づ御入り。」と、衣裳をしるしに清十郎を取巻き、連れて内に入りけるに、お夏續いて入らんとす。「これ清十郎殿、お夏様がいとしくば、先づ往んだがよいわいの、男の様にもない人ぢや。」と、恥ぢしめ突出し、大戸を礎と鎖しければ、清十郎は爲方なく、部屋へ入る體にして、大釜明けて身を縮め、そろりくと忍び入り、申より蓋をぞしめにける。お夏は門に憧れて、入るべき便りを待つ處に、炊婦の玉はそろりと、門口明けて、「なう清十郎様清様。」と、お夏が袖を撻と取り、「ア、此方は戀知らず。私が此方に絆されて、御主様を袖になし、朝晩に心をつけ、しんぞ思ひを盡せども、お夏様に心中立て、一度も靡いて下されぬ、恨みの焰火吹竹、七や十四五すつとんとんと、撲ち度いが、ア、可愛いが因果の種。人は落目の志、コレ此の餅は正月の在所へ遣らうと思へども、君に何が惜しからん。恥かしながら此の玉を食ふと思つて、賞翫して下さんせ。」と、懐に押し入る。お夏は色を知らせじと、ぢつと抱き付き締めければ、「オ、悚然する程お嬉しい。恨みの雲も晴れ渡り、これで千倍々々。とても事に杯せう、酒取て來ましょ。」と入る跡に、引續いてつゝ、と入り、部屋に驅け込み夜著引被ぎ、身を顛はしてぞ臥し居たる。清十郎は斯くとも知らず、お夏は外に如何ぞと、釜の蓋明け見廻せば、奥には人も寢入ばな。勘十郎は親方と、寢酒の相伴ひよろ酔うて、夜著蒲團引き出し常の所に臥しにけり。跡より又源十郎、これも微酔ひ來りしが、「勘十郎もう寢

も、布子の袖に入るばかり、身は脱殻の力も切れ、若しやと部屋をしのび出で、門の戸明けてそつと出で、四邊を見れば人影の、「お夏様か。」「此處にか。」と、いふより先に抱き合ひ、聲を立てじと諸共に、肩の縫目に喰ひ付きて、忍び音に泣く許りなり。「今の間の物思ひ、ま一度逢はせ下されと、いくらの願を掛けたやら。清十郎の清の字なれば、先づ此處の清水様、京の清水、室の明神、書寫山、伊勢の御神様、住吉様、金毘羅様、不動、愛染、大師様、拜み頼みし験にて、顔を見て有り難や。サア二人連にて立退きて、如何なる遠國小借屋でも、二人遣ふを一人遣ひ、一人遣ふを手鍋でも、暮されまいものでもなし。いざ立退かん。」とありければ、「いやそれでは、情の親方の憎しみも増るべし。在所へ歸り、親どもと勘十郎奴が善悪糺し、身の垢脱いで詫言せば、御機嫌も直るべし。それまで辛抱遊ばせ。」と、泣くく宥め慰むれば、「戀しゆかしは身の氣隨。男の爲には憂き苦勞、厭はずながら只一人、つき放して遣られうか。これ此の小袖と脱ぎ換へて、其の布子を逢ふまでの形身に著ん。」と、涙ながら互に帯解き身を合はせ、片袖づゝを脱ぎ換す、肌睦まじき志、戀路ならすば何故に、生まれて知らぬ木綿物、袱紗の衣と引締めて、顔と顔を見合はせて、「わつ。」と泣き入る心底に、萬の涙籠るべし。物にて顔をおし包み、「さらばや。」といふ處へ、腰元下女ども、「お夏様が御座らぬ、裏よ井戸よ。」とひそめきしが、門口明けて、「こりや此處にぢや。ア、申しお夏様、お前は悪い合點な。何方の

責も斯くやと哀れなり。錠前を叩き破り、提物差換取出せば、包の小判七十兩。これは扱、この金子はお夏様へ、婆々御よりの譲りの金、身が包ませて覚えあり。極まつた大盗人、首のあるは旦那の慈悲。叩き出して追つ拂へ。」と、手足を取つて引き出す。清十郎大聲上け、「ヤイ勘十郎。盗人する男でなし。おのれが私商ひに、赤穂鹽買うて損をして、首縊らねばならぬ首尾、何卒と談合したる故、お夏様へ申しておのれに貸す爲に預つた。戀する者の因果で、朋輩の機嫌取り、追従したが身の仇となつたるか口惜しや。おのれが損は入れ合はせ、今は銀も要らぬといふ。察するに此の度の嫁入道具の代銀を、遣らずにおのれが引込んで、我が親騙つて一札させ、人を損ふ上面とは、鏡にかけて知つたれども、相讀なければ是非もなし。これを見よ、清十郎は破れ布子一枚で、非人の體にはなつたれども、心の内は紗綾縮緬、錦より潔い。エ、辛いぞや、やれ恨めしい。」と、齒嚙をなして泣きけるが、「旦那にさら／＼恨みはなし。十一歳の彌生の花、いろはともちりぬるとも、知らぬ者のこれ程まで、算勘商賣讀み書きの、硯の海より山よりも、優つたる御高恩、拳一つ當らぬ身が、如何なる月日か今日の今日、主従の縁切らるゝ、如何なる神の咎めぞや。今一度旦那の顔拜まん。」と驅け入るを、情なくも男ども、手取り足取り大道へ追ひ出し、門口はたと鎖しけるは、爲方もなき三重次第なり。未だ二月の朧夜や、涅槃の雪の名残の門、立留りつ立去りつ、凍え狼狽へ佇めり。無慙やお夏は魂

一札取つたに胡亂があるか。暇をくれた、出て失せう。こりや女子ども男ども、彼奴が這出に著てう
せた布子があらう。尋ね出し引剝いで著せ換へ、追ひ出せ。」とぞ喚きける。お夏は斯かる有様を、目
も當てられず涙にくれ、「言はば我が身も遁れぬ科。餘りといへば親ながら、無得心なるお心や。人の
譏りも思召し、すこしは宥免あれかし。」と、聲を揚げてぞ泣き居たる。「オ、惨いも辛いも知つたれど
も、おのれが母の遺言に、「傾城の娘とて侮られうか淺ましや、未來の障りはこれのみ。」と、返すく
も歎きしに、「氣遣ひするな、好い婿取つて名を揚げさせう。」と請合ひしを、嬉しさうに打笑ひ、「それ
で成佛々々。」とて、死んだかほばせ忘れかね、千兩附ける嫁入を止め、大事の娘を唆し、惑ひ者に
なしたる恨み。但馬屋の九左衛門は、胸慾者惨い者といはれねば、亡き人の位牌に對うて言譯ないの
胸慾者には誰がなせし。」と、「わつ。」とばかりに堪へかね、咽せかへりてぞ歎かる。其の間に下部ど
も、衣裳を剥いで振袖の、汗れし綿衣に著せ換ふれば、さしも美形の清十郎、山田の案山子どうぞ顫
ひ、二目とは見られぬ容貌。お夏は「我も一緒に。」と、飛びつくを下女腰元、引分け宥め教訓し、常
の部屋にぞ伴ひける。父は彌腹を立て、「勘十郎は何處にある。何に恐れて引込むぞ。清十郎奴が入
物吟味し、衣類諸道具押へ置き、追ひ出せく。」と、いひつけ奥に入りければ、「心得ました。」と勘十
郎、半櫃箆筒昇き出させ、ぐわらりくと打明けて、衣類引出し取散らすは、三途川の奪衣婆の、荷

が小腕引き出し、清十郎も這ひ出づれば、「その儘居れ、身動きせば男共ぶちのめらせ。」と取廻せば、蚊帳の内にすごとくと、晝の螢の影消えて、籠に裏る、その風情、外にお夏は夏の蟬、聲の限りを泣き盡し、思ひを比ぶるばかりなり。親は腹立涙にて、「やれ女郎奴。おのれが母は流れの者、空言に身はまぶれても、心のたまかさこうたうさ、千人にも稀なりしぞ。何時慣うてそのいたづら。遊女の腹とて何方へも、嫁に嫌ふは聞きつらん、その袖下は何事ぞ。左様な事をせんよりも、おのれが額に傾城の娘と、何故看板を打ちをらぬ。」と、齒切をしてぞ泣きけるが、「やい丁稚奴、不義一通りは免しもあり、十一の年から子同然に育てし奴、事によらばお夏奴と、ひとつにせまいものでなし。在所の親奴と言ひ合はせ、嫁入道具に邪魔を入れ、親方に恥かかせ、但馬屋の家を覆さうと企んだな。口の明かれぬ事見せん。」と、證文出し、「これ見たか。おのれの請狀にある親奴が印判、妹とやら嫁とやらが文とも合はせて吟味した、芥子程も違ひなし。覚えがあらう、あらがふな。主の寐首を搔かんも知らず、エ、憎や。」と蚊帳越しに、額を三つ四つ喰はせて、涙を翻して怒りける。清十郎はつと驚き、「親の印判、妹の手跡とはいひながら、親にさへ逢はぬ身が、夢程も覚えなし。在所の親を召寄せて吟味もなされず、片手打のなされ様。勘十郎奴何處に居る、言はせねば堪忍せぬ。」と、蚊帳より出づるを取つて押へ、「ヤレ勘十郎源十郎は、この九左衛門が兩の眼の代りをする。その手代が穿鑿して、

めば手に縫り、「女房を拜む事かいの。これほど思ひ合つた中、何故に女夫になられぬ。」と、辛氣泣にぞ泣き居たる。「ヤア申しお夏様、いつぞやお前に借りました、七十兩の小判の事、私が遣ふ金にてなし。朋輩の勘十郎、私商ひに損をして、平に頼むと申したゆゑ、取替へやらんと存ぜしが、思ひも寄らぬ仕合して、損を埋めしと途次の話。もう入らぬ金子なれば、戻しませう。」といひければ、「ア、好いわいの、婆々様の譲りの金、如何しても大事ない。人の來ぬ間に、あの蚊帳の開眼をせまいか」と、こはく、顫ふ春風も、人目を忍ぶ緜子の蚊帳、蚊帳はお夏に縁深く、神の結ぶの釣手かと、戯れ交す手枕も、心せはしき契りなり。内手代の源十郎、「お夏様、旦那の呼ばつしやる。」と出でけるが、はつと廣げし手も打たれず、呆れて立てば清十郎、お夏が褌を引被ぐ。お夏騒がす袖にて隠し、「これ源十郎、其方も男ぢや、引かせはせぬ。忍んで逢ふは清十郎、見遁しにして給らぬか。沙汰をするなら爲るといや、幸ひ刃物も此處にある、直に二人が死ぬるまで。サア助けてたもるか、殺しやるか、屹度した誓文で承らう。」と、弱身を見せず、責め付けられて源十郎、「沙汰して私徳もなし、商ひ冥利穩密なり。偽りならば各より私我先に、清十郎が脇差にて、止めを刺さるゝ法もあれ。」と、言ひ捨て歸るその舌も、引入れず寄親の、勘十郎に打明けて、斯くと語りし不實さよ。二人は五體に冷汗の、露の命も消ゆるばかり、居直つて溜息を、つきもあへぬに親手代ばらくと走り出で、お夏

の富士と一里塚、及ばぬ事をエ、阿房な。」と、舌打してぞ頭振る。お夏涙をおし拭ひ、「其方とわが身は實事にて、口説などする挨拶か。此の度の祝言を、好きこのんだる事でもなし。知つての通り、母様は室の女郎。今の内の母様に、あの弟が出来るまでは、我も室で育ちしゆゑ、母方が悪いの、傾城の風があるのとて、何處の嫁にも嫌はるゝ。これぞ好い事幸ひと、なほ女郎の風を似せ、人は隠せど我は只、母様は傾城と、一季半季の者にまで、觸れ廻りたる村時雨、縁にはつかじと願ひしに、彼の立野の阿房頼、敷銀に目がくれて、嫁に取らうと嫌らしい。此のお夏ばかりは、言うた事を違へるか、恨みもつらみも後を見て言うたが好い。總じて和方もこんな時、どうなされかうなされの、主侍遇が聞えぬ。私から詞を直しませう、なう此方の人、此方向かんせ。」と、袖口から手を入れて、ほとほと叩いて抱きしむる。清十郎四邊を見廻して、「然しお前に聞えぬ事がある、この袖下は何事ぞ。若衆の前髪、女の脇詰、男が知らいで立つものか。出来ぬ仕方。」といひければ、「其處邊を忘れるお夏でなし。ま一度振袖見せ度さに、皆々お針が縫うたれど、祝うて我も縫はんとて、片袖ばかり縫ふ顔して、これが諠か。」と帯解いて、上著を脱けば右左、振と詰との片ちぐに、片枝は蕾片枝は、開き初めたる花衣、二人前見る誰も皆、斯くぞ仕立てて著せまほし。清十郎は身をなけうち手を合はせ、涙が翻れて忝し。それ程に此の男を、不便と思召さる、かや。冥加に盡きん勿體なや。」と、取り付き拜

ず渡し、職人の手前は濟みながら、不落居な事にて、道具を留められ下りませぬ。」と、言ひも果てぬに九左衛門立腹し、「それは如何ぢや。餘る程銀は遣る、但馬屋九左衛門が娘の嫁入道具、止められう覺えは無い。總じてこの祝言お夏が氣色に日限延び、漸う此のたび脇まで詰め、今日明日となつて、道具が出来ぬなんのとて、この嫁入が延ばされよか。世間からは道具屋へ銀渡さぬと評判せん。それをうか／＼銀渡し、素手で戻るといふ様な、子供遣つたも同然。」と、算盤の割れる程、疊を叩いて叱りける。勘十郎迷惑さうに、「御立腹御尤も、拙者もぬかりは致しませぬ。證文をお目につけて、密かな處でお物語致し度い事御座る。」といへば、「オ、言譯あらばサア聞かう、源十郎も来て聞け、勘十郎此方へ来い。」と、打連れ裏の小座敷へ、苦い顔して入りにけり。清十郎奥を見て、「ハア、餘所には嫁入があるさうな。此方や洗足でも致しませう、やアえい。」と沓脱に腰を懸ければ、お夏つか／＼走り出で、「又ねすり語ばかり。同じ口で可愛やといふ事がならぬか、意地の悪い。」と抱き付き、「戀には涙脆いぞや。」清十郎は懐手、「ア、思へば阿房な者。身の正直な勝手して、人の詞をまん誠に、世間の奉公する者は、わざ／＼隙を貰うては、春は親に逢ひに行く、この清十郎は親里の近所に、十日二十日逗留しても、親の所に許嫁の女房分があるゆるに、これに逢ふと思はれては、心中が立たぬと思ひ、親へ便りもせず歸る、これに懲りよどうさい坊。ほんに孫子に傳へても、主の娘と懇など、駿河

へども、お夏はさらに氣に染まぬ、心の内の緞子の蚊帳、色香を外に漏らさじと、「ア、俺や風引いたさうな。」とて、洒打ちかみて紛らかす、忍び涙ぞ道理なる。心を知らぬ腰元ども、「お夏様と増様と、この蚊帳でしけらしやんしたらば、いかな藪蚊もけなりかろ。此方は蚊帳は及びもない、せめて嫁入の紙帳なりと、肖りたい。」と口々に、「申しお夏様、新し蚊帳の御祝儀、少と浮きくとなされませ。賑やかに酒盛して、謔ひませう。」といひければ、「ア、何をざわくしやるぞい。蚊帳が出来ようが、紙帳が出来ようが、この氣あひで今やなど、嫁入する氣は微塵もない。あつたら手間であの蚊帳を、生絹の衣にして著たい。只無常氣でをかしようない。」と、後を見れば父親は、内手代の源十郎に、帳を讀ませて算盤の、「つづく言やんなやかましい、先づ来て祝や。」と赤飯の、こはい目付は我が戀を、知つてさうなと百千に、くだき割りたる胸算は、いかな算者も及ばじな。斯かる處へ清十郎、勘十郎同道してぞ戻りける。九左衛門悦び、「ヤア好い處へ戻つたわ。今日はお夏が嫁入蚊帳の祝ひ。この拍子ならば、大坂の仕合もよかる。」といへば、清十郎庭に立ちながら、「旦那の病になされた、中國北國残らず賣つて、爲替手形濟みました。利合は高で二十四五貫目。」と、目を合はする二人が中、無事な顔見て嬉しいと、心に心を言はせたり。九左衛門上機嫌、「お手柄く、お夏が嫁入は只出来た。扱なんと勘十郎、蒔繪道具も出来つらん、跡から来るか如何ぞ。」といへば、「お道具も出来致し、代銀残ら

引、その中には清十郎、隙を取らうが走らうが、氣遣ひな事はなし、勘十郎に任されよ。この舟今宵出づると聞く、然らばこれに。」と乗り移り、「方々此の度下つては、清十郎が爲にも悪しし、好い時分に便りせん、その時必ず待ち入るぞや。數年馴染の清十郎、悪い様には致すまじ、何れもさらば。」といひければ、親子の者は船より上り、手を合はせ涙を流して、「朋輩の好みとて有り難し忝し、生の親の我等より、清十郎めが命の親、嫁も娘もやれ拜め。辨へもなき清十郎、弟とも下人とも思召して御意見なされ、美しくお暇取り、再び在所へ來る様に、偏に頼み奉る。」と、敵と知らぬ愚かさの、親の情は子の爲に、薬といへどこれは又、毒を合はする佐治右衛門、心は律義一ぱいに、煎じ詰めたる水間の里、船は別れて 三重くだりける。

中之卷

所さへ、戀知り顔に姫路とは、何時名づけしぞ但馬屋の、お夏が父は九左衛門、國一番の米問屋、有銀箱も十宛に、六十近き月雪や、花も紅葉も算盤に、かかる親には似ぬ娘、お夏は深きぬれ故に、菩提心と意地ばりて、嫁入も丈も延びくの、それも戀する氣の前か、二人の親の顔までも、飾磨のかちち播磨瀧、國に浮名や立ちぬらん。今日は蚊帳の祝儀とて、萌黄の生絹六布七布、屋の内祝ひ賑

しける。薛繪師の手代冷笑ひ、「ハテサテ悪い工面ななされ様。これ娘に構ひあるならば、それは先との詰め開き、此方に構はぬ事。如何でもこれは廻し者、近頃悪い仕方。」といへば、「ヤアなんぢや廻し者。オ、男ぢやもの廻しをせいでよいものか、若い時は小相撲の一番も捻つたおれぢや、男につかふ詞がある。廻しかいたかかかぬか、来い見せう。」と褌褰け、胸を叩いて力みける。薛繪師も聞かぬもの、片肌脱げば二人の娘、船頭船方居り合はせ、「まづ堪忍。」と取り付きける。勘十郎も分け入りて、種々宥め押鎮め、「塗師屋殿も悪い合點。道具は其方の、銀は此方の、銀遣らずに此方へ請取らうといふにこそ。其方と我とにあの仁から、一筆取つて置くならば、我も旦那の手前が立ち、其方も下細工へ手間遣らうでも大事なし。身に任せて黙つて居や。これ親父、なんと一筆召されうか。」「ハテお前の御料簡ならば如何なりとも。それおさん、お望み次第に書きや。」といへば、清十郎立寄つて、「但馬屋のお夏祝言につき、構ひこれあるにより、嫁入道具押へ留め申す所件の如し。但馬屋勘十郎殿、薛繪師権之丞殿、清十郎親佐治右衛門。」と、好む通りに書きければ、親は悦び巾著明け、墨黒々と捺したりし、因果の程ぞ不便なる。一札巻いて勘十郎、懷中にしつかと收め、「サア埒は明いた。塗師屋殿萬事は國より一左右せん。先づお歸り。」といひければ、塗師屋は船中一禮し、辭宜を述べてぞ歸りける。「なう親父殿。この勘十郎が好い時に居合はせて、此方親子の仕合。道具さへ下らねば祝言は延

屋、誂へのお道具、今宵船に積まんと存じ、銀子請取り申さん爲、参りたり。」とぞ言ひ入れける。「あれ親父聞いてか。銀を渡せば道具が下る、道具が下れば嫁入がある、嫁入があれば清十郎は引張帆。なんと此處が談合。身は國へ歸つて、旦那へは道具屋が出来さぬ分、濟まし置く。あの道具屋の手前は親父から、百五十兩か八貫目渡してさへ置いたれば、波風立たず嫁入が延びる。延びさへすれば清十郎、隙を取らうと走らうと、この勘十郎請取つた。此處は親父大儀ながら、八貫目何ぞいの、田地賣つても子の爲ぢや、出したがよい。」と言ひも果てぬに、佐治右衛門ぎよつとして、「エ、有様は一口に八貫目。假令清十郎引張帆にならうが、鹽鮭にならうが、世が泥の海に成るとても、一文も銀は無。い。エ、此方は皮か身か、合點が往かぬ。」と顔しかめ、立つて入るを引留め、「それは親父廻り氣な、然らば銀も入らぬ思案がある。彼の蒔繪屋にむかうて、この娘には構ひあつて嫁入はさせぬ、道具は其方へ預けた。銀渡したら損であらうと、一言いへば濟むぢやが、成るまいか。」といひければ、「ハテ金さへ入らぬことならば、我が子のためぢや申さいでは。」と、表の間にぞ出でにける。「播磨の姫路、但馬屋の嫁入道具を請取つた蒔繪屋はこなたか。身どもは和泉のどん百姓、土掘せりでおぢやれども、但馬屋のお夏には、此方に先の構ひがある。外の男を持たせぬからは、嫁入道具を押へた。勘十郎殿先刻にから切羽脛金する通り、金渡したら御損であらう、斷つて置いたぞ。」と、苦りきつてぞ申

になれば炊きます、飯になれば食べます、何ぢやし唯居る間とてなく、御無沙汰。」とこそ語りけれ。勘十郎打首肯き、「尤も、何方も隙はなし、して此の船に乗つて何方への下りぞ。」といへば、「先づ旦那へ春の御禮も申し、清十郎にも逢はんと存じ、これは妹お俊、彼は行くく、清十郎が留守をもさせんと存じ、おさんと申し娘分、連れて姫路へ罷り下る。とてもこの事に御同道致さん。」といひければ、「イヤこれ逢ひたいといふは其の事よ。まづ下る事は入らぬ物、清十郎が沙汰を聞かれぬか。さてさて氣の毒笑止なこと、旦那の娘お夏様と密通して、お夏様のお腹は茶壺を抱いた様になる。それに立野の一門中へ祝言が極まつて、嫁入道具も出来揃ひ、身共が道具を請取つて下り次第の嫁入。彼の腹の土産物壻から詮議があるは定、否でも應でも清十郎は、片假名のキの空で、此の様に手を廣げ、引張帆は知れた事、親兄弟も同罪なり。何卒嫁入の無い先に、身を退く思案がさせたさに、知らせませする。」と威しける。親は在所の律義者、何の企みのあるとも知らず、「ア、お前は如來様。内々如何やら承り、氣遣ひ致せし折柄なり。朋輩の好みとて御知らせ有り難し。年六十に餘つて、火屋へ片足踏み込んで、一人の倅が木の空で、引張帆になるのが、そもや見て居られうか。倅が命助かる様に、御思案頼み奉る。さりとては誰に似て、下心の悪い倅め。」と、何處で聞いてかいふ事と、泣いて口説くぞ哀れなる。時に船場に案内して、「姫路の本町但馬屋の勘十郎様のお船は是れか、難波橋は時繪

んづして居たを、いくはなか見て来た。扱ひになりしやら、錢をついたも慥かに見た。大坂の喧嘩は大方相場は極まつて、十文では事が濟む。喧嘩は降物。和御寮達萬一の事があつたりとも、いかな九文半錢でも、堪忍ばしめさるな。」と、眞顔にいひしも殊勝なり。二人の娘うち笑ひ、「さればいの、今日も一日芝居見て、それから此處の川口の、八景とやら見物して、つい今になりし。」とて、船に乗れば佐治右衛門、草履菅笠片付けて、「先づく休めや。」といふ處へ、向うの船の船頭來り、「和泉の佐治右衛門殿はこの船にか。此方の船の乗手衆が、ちとお目に懸り度い。播州姫路但馬屋の勘十郎といへば、合點ぢやけな。」とぞ申しける。佐治右衛門聞きもあへず、「オ、知つたく、但馬屋の勘十郎殿、私が子息の朋輩衆。參つてお目に懸りませう。」と、上らんとする處に、「これへ見えし。」と勘十郎、「何と何と親父様、さても年も寄りぬわ、不思議な處で逢ひました、先づ御無事にて一段。清十郎も息災で、商ひの用事にて此處へ上りしが、早下つたも存ぜず。旦那も折々噂なり。何故に見えぬ。」といひければ、「えい勘十郎殿様お久しう御座ります。嫁子供が申すにも、親父ちと旦那様へ往かつしやれ、何かのお禮も申さつしやれと申します。オ、くとは申しながら、正眞の貧乏隙なし。物作りの事なれば、いや大根時の、綿時の、瓜を蒔くわ、茄子を作るわ、牛蒡島、豆腐、粟よ、黍よ、藍時よ、麥を蒔くぞ、赤らむぞ、田を植ゑては草を取る、穂が出れば刈りまする、粃になれば磨りまする、米

おなつ
清十郎 五十年忌歌念佛

上之卷

通ひ車は、小町が仇の情に乗せられ、閨の扇は、斑女が親骨にせかれ、形身の烏帽子は、行平のいひかぶり、柏木の鞆、山路が笛、古今其の品かはれども、皆これ戀路の寄せ櫃、根太も根強き門柱、その伊馬屋の初色に、立つや浮名の濡れ草鞋、笠がよく似た菅笠の、雫積りて戀の淵、湧きて流る、和泉國、水間の里の佐治右衛門、畠作りの田烏や、鶯が産んだる高給取の、手代は主の代りをも、清十郎といふ子を持つて、老いのいりまへ暮し好き、正月著物播磨瀧、延引ながら年頭に、娘はおしゆん嫁の名も、三人連の木賃宿、明日は出船の名残とて、道頓堀の芝居過ぎ、名所々々は大坂の、娘子達に交りても、うてす押されず手入らずの、田舎生まれのおほこにも、父の乗りたる便船の、印は如何に錯綱、手繰り著いたぞ、「日は傾く、いざ急がん。」とちよこく走り、とはかは口にぞ著きにける。親佐治右衛門苦打上けて、「ヤアこりやく、此處ぢやく、ハレやれく、大膽な。暮れるまで大坂の町を漫然と、女の身にて何事ぞ。昨夜も東の横堀で、男と女子と喧嘩して、濱納屋の下で組んづ轉

丹波與作待夜の小室節

代^よぞ樂^{たの}しき。

丹波與作待夜の小室節 終

情詰 如才ない儀の貞女にめでて、金も投げ出し房との中を、あすは神明こよひの月ぞ、思ひ切つた
と誓言すれど、こよひ契りの戀風は、生薑酒でも防がれず、氣もふはくの玉子酒、まゝ、よいつての
きよ、左様もなるまいか。どうせうか、かうしやうが酒。辻にしよつつくばうて、思案中橋戀しさ勝
る。胸かきまはす玉子酒、心二つに打ちわつて、きみが方へと走り行く。跡は内儀がナ獨り寢てさ、
房は日くれて人待つ隙の、火廻しすれば飛脚がせがむ。肥後屋の迎ひはやとく徳兵衛、兄の病氣を見
舞顔で、來てもたがひの心の底は、いふにいはれぬ鴛鴦の、立たんとすれば病者のくせの長話、何と
せん氣のあら腹痛や、痛やくと空腹病めど、そら寒き夜に是非に泊れといふ霜の、おくの火燧にふ
とんと轉けて、泣いて忍ぶは鄰の二階、そろりく、そろく、そろく、さし足は、誰ぢや房か。徳様
かいの、これは夢かと抱きつきすがり、憂さをさ、やき、辛さをくどき、死なでかなはぬ身のさしづ
めと、なりゆく果てぞあはれなり。房を脊中に大屋根づたひ、足もよろく、夜は何時ぞ、七つ八つの
芝居の仕組、浮名ばかりは残れども、残らぬものは命ぞと、いとゞなみだの樽屋町、おりて再びこの
娑婆へ、いつか高津の日親様で、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、蓮華ひとつと
脇差を、胸におしあてたゞ一刀、あつとさけびし一こゑに、づんぶり染の紺屋の徳兵衛、お房が頓説
菩提の廻向、水を手向けてふた、び盆を、重井筒の名の立つにさ。千歳樂萬歳樂、をどりよろこぶ御

披露あれ女中衆。」と、呼ばはれば御乗物、ざんざめかいて昇き寄する。お乳の人も與之助も、さすが武士の子武士の妻、御前なれば手をついて、四人目と目を見合はせ、「何事も姫君様、御慈悲ゆる。」と許りにて、嬉し涙に咽びける。姫君與の内ながら、與作丹波の伊達男と、歌に謠ふはあの人か、關の小萬も雙紙にある、繪で見たよりはよい女房。聞けば踊が上手ぢやけな、明日は一日逗留せう、踊を踊つて見せてたも。家老共に言ひ付けて、知行をたんとやらせう。」と、生まれついたらる御詞、其の一言に千石千兩、千貫松の千代に八千代に萬、與作がもろ果報、小萬が戀も通町、仕合よしで今はお江戸の刀差ぢや。しやんと一筆ふみ馬御免。踊子よする笛鼓、馬も太鼓をうつくしき、踊浴衣の上から下まで、色めき悦び、三重賑へり。

與作をどり

クドキエイくくくく紺屋の徳兵衛、房に元よりこいそめこみの、内の身代灰汁でも剝けず。口入頼みて銀四百目を、かりにやとうて女房と名づけ、阿房三太をらむうけん太で、やまけふづくる内儀の心、男いとしし子も亦可愛い。蓄い隠居の手前を包み、宵寐する子を我が夫ぞと、いひまけすます鬢かづら、徳兵衛不義ぢやとはやまるきほひ、顔は澀面工面もいらす、羽織ひらりと、やつくこのこのくくく、我が子のこのく胸ぐら取つて引きすり出す。宵よりつもるうき涙、理詰、義理詰、

へんとする所を、左内飛び入り脇差もぎ、二人を兩へ踏み倒し、はつたと睨んで齒齧をなし、「ヤイ道知らずの人外め。さすが以前は御家中の物頭、采配まで御許され、二つ道具をつかせし身が、心まで上々の馬方になつたよな。諸傍輩多けれども、親左近右衛門が烏帽子子、與作といふ名を附けたればこの左内とおのれと、兄弟分が口惜しい。死なう／＼とやかましい、死ぬるが左程珍らしいか。弓馬の家の死といふは、城攻の一番乗、野合軍の一番槍、よき敵の首取つて討死するを、侍の死に難い死とはいふぞ。覺えて置け。關の小萬と心中の討死を手柄とは、一切經にも無い事。僅かの恥を思はんより、主君の恩を報ぜぬは、侍たる身の大恥と知らざるか。叔淺ましや後指をさされうが、犬畜生と言はれうが、我が身の恥をふり捨てて、厚恩の主君に忠節を勵むこそ、恥を知つたる侍、大丈夫の武士のきつすると言ふものぞ。此の道理合點なく、死んで勝手がよいならば、左内は止めぬ心任せ。さりながら侍ならぬ馬方を、刃で死なすは勿體ない。舌をくうか身を投げるか、似合つた様に在郷馬の、口取綱で首絞れ、情に見物してやらう。エ、侍でもない者に、心を盡して氣がつきた。」と、大欠伸して居たりける。與作、「わつ。」と泣き出し、「誤つたり左内殿、此の仕合の上なれば、心も闇と罷りなる。萬事貴殿に任せ置く。」と手を合はすれば膝立て直し、「合點いつたか過分々々。それでこそ與作なれ。御前は拙者が受取つた。」と大音上げて、「與作は御意を重んじ、生害思ひ止まる由、御

ぞ。一 生懸命の時節到來、死損はせてくれるか、エ、口惜しい。」と身をもがく。遙か彼方に立てられたる乗物より御意を請け、若侍走りより、「ム、珍らしい與作、故傍輩鷺坂左内見知られつらん。今度姫君關東御下向御悦びの時節、今夜の始終御憐憫淺からず、吟味仰せ付けられしに、小萬が箱より貴殿の實名あらはれ、三吉事も實子與之助に紛れなく、殊に内室お乳の人神妙の志、かれこれ感じ思召し、三吉が命を助け、母儀も同じく御供にて、兩人を助けんため、忝くもあれまで、お乗物を出された。大殿の御前相濟むまで、五十人扶持の御合力。小萬もお家に引取り、重ねてよろしく御料簡あるべしとの御意の趣、有り難う存じ、サアお乗物のお供して、歸られよ。」とぞ述べにける。與作叢に頭をつけ、「大殿以來例なき御厚恩、報じ奉る事もなく、不奉公の天罰にて、あらぬ様になりくだり、親子も知らず恥辱の骸をさらすべき所、姫君の御愛憐、生々世々に忘れがたし。さりながら女どもも倅も、人の笑はぬ志も立てたるに、拙者は何を面目に、おめくと諸人に生顔があはされん。傍輩の情に死んだ跡と御披露あれ、最期のお暇申し請ける。小萬が事はその代りに、頼み存ずる左内殿。」といひもあへぬに、「これくくく、この小萬に残れとは、お内儀様の思召し、私許りに恥さらせか、一人歎けか、物思へか。口でいへば人そばえ、先だつて埒あけう。」と、取り付く脇差おし止め、「さうぢやく、恩も禮儀も忠孝も、死ぬる身には絲瓜の皮。爰へよれ南無阿彌陀。」と、刺し違

「オ、念を残すが迷ひとなる。たとへ奈落に沈むとも、親の事と子の事が、思はず言はずに居られうか。」「さうでござる。」「さうぢやもの、いつそ言うて罪作り、親のため子のために、地獄へ落ちてやりませう。」と、二人ひつしと抱き付き、聲の限りを豊國野の、風も哀れを添へにけり。「あれ／＼あれへ見える早提灯、走り飛脚と覺えたり。道端はいか／＼なり、いざ最後場を換へまいか。」と、半町許り草わくる。飛脚どもは汗水にて、「お乳の人の御立願、あす四つまでに命乞の太々神樂、御願叶へば御祝儀の御褒美は知れた事、急げ／＼。」と走り行く。「あれ聞きやつたか、何方のお乳の人、命乞の御願とは、養ひ君の煩ひか。いらぬ命が二ツ有る、ア、換へらるゝ物ならば。」と、悔めば小萬涙ながら、「夫れが叶ふ程ならば、他の子よりも此方の子、切られて死ぬる身代りに、とても死ぬるこの身體、髮頭より爪先まで、一分だめしに試されても、代りたい助けたい。」と、歎きしづみし實の心、百千萬の祈りより、などか祈禱にならざらん。時に人足四五十人、ひそめて來りしが、「ヤア主なき馬の夜中と言ひ、繋がれあるは訝し、提灯立てよ。」と呼ばはつて、忍び提灯さやはづせば、萬燈會の如くなり。「遠くはあらし一二町、野をかれ。」と大勢が、「與作小萬。」と聲をかけ、漏るゝ方なく取巻きたり。「南無三寶、見付けられては二度の恥、いざ死なん。」と、ひらりと抜く刃物の光「そりやこそ。」とお徒士衆、やにはに二人を縋りとめ、兩方へ引きわくる。「やれ侍ならば情を知れ、もとは伊達の與作

の寺。泊りくは多くとも、十萬億土馬次なしの、西は百味の旅籠屋に、觀音勢至手を取りて、蓮の臺に泊らんせ。夫婦の外は合宿も、なむ阿彌陀佛彌陀佛。」と、國府の阿彌陀の影頼む、其の誓願の詞の縁、千貫松にぞ三重著きにける。與作も名ある弓取の、家に生まれし氣質とて、きつと死身に胴すわり、土手へ飛びおり馬を小松の根に繋ぎ、小笹の露を打拂ひ、「此處へく」と、小萬が手を取り顔を眺め、「二十一と三十一、二人合はせて五十二歳、これだから長命といふ程の年でもなし。いとしい人を殺すよなう。心にかゝり言ひたい事は、ないかく」と言ひければ、「ハテかはいい男と死ぬる身が、浮世に心なに残らう。さりながら只一つ、いうて返らぬことながら。」と、言はんとするを、「ア、もうくそれもいらぬ事。人間の念慮限りなく、息の通ふ間は六根の樂慾にひかれ、思ふ程言ふ程なほつきず。皆罪障の種となる。この念を拂ふを生死を離れ、涅槃門に入ると云ふ。我とてもしひたい事、千萬無量を打捨てたり。されども一つの粗相には、そなたに預けし箱枕に、先祖の由緒所々の勳功、知行付の一卷あり。死後に諸人にさみせられ、家名をながさんこの無念、よし夫れはまゝにもせん。不ैयाかはいや與之助が、最期まで親とも知らず、親戀し父親戀しと、思ひ死に殺されん。その思ひは親の業、親ではなくて敵ぞ。」と、かつばと伏して泣きければ、「それ私には言ふなくとて、こな様言うて泣かしやんす。そんなら私も父様が、年よつて子を先だて、途方があるまいとしほや。」

外にとふ人も、ないてくれるか優しや。」と、鞍にひれ伏しはらくと、袖には涙梢には、木の實こほる、椽本や。契り初めしは一昨々年、抜け参宮の道連に、唄そなた櫛田の真中程で、深き思ひをやれ紫帽子、ほんに口説いたその眞實が、關の地藏を誓ひにかけて、戀の重荷の馬追ふとても、足も輕々心もひろき、豊國野とこそ樂しみし、あかれぬ中をあきの霜、今宵ぎりぞと氣もへりて、窪田に浮名埋むかや。祭文小萬泣くくヨイ申すやう「縁は異な物その時に、起請一枚書かねども、雲津の川瀬二世三世、指切しでのいひかはせ、枕定めぬ参宮に、寢て居て胸をやかうより、手を引きあうてゆるくと、歩み慰むヨイ夕暮は、一把の火繩に火をつけて、相合煙管思ひ草、思ひし甲斐もなつの蟬、春秋知らぬ世の譬へ、與作小萬が身の上と、「昔忍ぶの露涙、今を恨みのうき歎き、此のも彼のものあののもの、安濃の松原しぐれ行く、阿漕の海士のおこぎにも、過ぎにし方を思ひ出で、二見の浦の二つ石、清めし肌引きかへて、刃に穢し死する身の、形見となれや石塔の、唄標の石を思ひ出す。忌垣越えしも戀の罪、末社々々の宮巡り、地獄巡りを思ひ出す。返らぬ昔思ふまい、啼くなくと啼く鳥、人の末期を知らすとは、音に聞きしが今ぞ知る、朝熊の嶽淺ましや。彼の齋宮の忌詞、いまはしやとて道もせに、曝す身體を道者にも嫌ひ憎まれ、人々のよもや廻向も情なや。唄過去もエイ未來も現世で知る。」と、男見る目は泣く目もと。「ヤツサありやそりや、早明方のお八つの太鼓の聲は高田

歎なげきける。女をんなも共に涙なみだにくれ、「因果いんぐわん人ひととも業ごふじん人じんとも、ようもく罪業ざいごふを、重かさねたは二人ふたりが身み、死しなうといふ氣きの付ついたこそ、まだも冥加みやうがに叶かなうたれ。何なんのかのと暫時しばしでも、この世よに居をる程罪重ほどつんおもし。サア「ござれ。」「オ、さうぢや。」と、立たたとすれど腰立こしたたす。「口惜くちをしや腰ぬけた。」「エ、氣きの弱よわい。」と、引ひき立たつれども膝ひざをるを、抱だき上あけても腰折こしをれの、三十一期ごうの憂うき思おもひ、最期さいごは伊勢路いせぢ育そだちは近江あつみ、生うまれは丹波栗毛馬たんばくりけうま、夫をととを抱いだきかき乗のせて、妻つまは口取くちとるはいどうく、今六道いまだうの次傳馬つぎでんま、三途さんづの川かはを打う跨またぎ、昔むかしの小歌こうたひ引ひきかへて、あひの土山つちやまし死出しでの山やま、冥土めいどの旅路たびぢ通とほし馬うま、たどるや夢ゆめの 三重

與作小まん夢路の駒

與作よさく丹波たんばの馬追うまおひなれど、今いまは野末のぜゑの放はなれ駒こまぢや、しやんとさせ與作よさく。與作よさく思おもへば照てる日ひも曇くもる、關せきの小萬こまんが涙雨なみだめか。しやんとさせ與作よさく、與作よさく々々よさくと呼よび呼よばれつる、稻負いねおほせ鳥とりも音ねをいれて、野邊のべの刈かり萱かや、軒端のきはの萩をぎ、馬うまの秣まぐさにかひ残のこす、草くさも我わが身みもこの曉あかつきは、共に枯野かれのの戀蟲くつむし、人ひとを乗のせたが乗のせられて、限かぎりの旅たびの坂さかの下した、なうあれ夜深よふかに急いそぐ乗掛のりかけも、泊とまりは知しれて四日市よつかいち、我われは泊とまりも七七日なななぬか、中ちゆう有ゆうの旅たびの馬羊うまひつじ、歩あゆめしいく。ア、しぶとい、口くちを引ひけどしやくれど行きかぬる。畜類ちゆうるるながら性しやうあれば、最期さいごを惜をしむ綱つなすくみかや。與わし私は十二じふにで人ひとよび初はじめて、今年ことし二十一じふいちまる九年ねん、泊とまめし旅人たびびと何なん萬人まんじんぞ。關せき一宿しゆくは狹せまけれど、男をとこ女をんなに幾いくたりか、伴とも佑たすけの好こしみも時ときの花はな、無常むじやうの風かせに散ちり果はてて、馬うまより

かり持つて居た。心が、りは残らぬの。」「ハテかう左繩になるからは、父様の事も埒あかぬ。もじやもじや言へば氣がもどる、餘の事おいてサア早う、こゝが出たうござんする。」「オ、嬉しいく。裏の軒に繫いだ馬を人手へ渡しては、主たる人への不調法。死場へ馬も牽くまいか、その間に身を出る程、この竹格子をはなして見や。」「いや此處も小善の悪性で、つい推せば離れる。」「ア、、小よしは逢ふ夜の通ひ窓。最期近づく二人には、冥土に通ふ鐵の門。』と、くどきく馬牽き出し、「預けて置いた脇差は。」「そこらはぬからぬ、私が腰にさいて居る。」「できた、夫れならこの馬の鞍を踏まへてそつと下りや。ア、危いぞ怪我すな。』と、かばはる、身もかばふ身も、はつる二十日の月毛の駒の、尾髪亂れて置く露に、袖の涙を争ひし。ひらりと飛びおり、一町ばかり足早に立退き、「海道は往還伊勢路の方で死ぬまいか。」「ア、それに付いて待たしやんせ。三吉が預けし守袋、如何なる神の御札やら、私が懐にも太神宮の守お祓、穢すは後生の障りなり。地藏堂へ納めませう。」「オ、氣が付いた。』と取り出す。浮線綾に紅梅裏の袋を開き、月影に讀んで見れば、正一位大原太神宮、丹波國の住人、伊達の與作が、一子與之助息災延命、南無三寶。さては三つで別れたる、我が子の與之助なりけるか。我を親とは知らねども、與作と言ふ名を大切に、慕ひし物を氣もつかず、盗みをさせておきめにあふ。手を出して我が子の首を、切つたと同じ事よ。』とて、とんと座して足すりし、聲を上げてぞ

と、本繩ほんなはに縛しばりあけ、「宿しゆくの莊屋しやうやへ預あづけおく。この方ほうよりも人ひとをつけ、代官所だいくわんしよへ渡わたすべし。たち上あれ。」と引立ひきたつる。母はは性根しやうねも泣なき入いつて、前後ぜんごもわかすみだるれど、「このお目出度めでたい道中だうちゆうに、繩付なはつきなどは見ぬもの。」と、人ひとに誘さそはれ力ちからなく、見返みかへり／＼奥おくに入る。子は又母またはを見送みおくりて、顔かほをうなだれ目を塞ふさぎ、聲こゑをも立たてず歎なげきしが、「ム、これぞ本望ほんまう々々。悪名取あくみやうとつて人ひとには踏ふまれ、助たすけられても生きて居ゐぬ。一人死ひとしのより人ひときれば、往いにがけの駄賃だちんぢや。父様とつさまも母様かさまも、誰たれも一度は死しぬるもの。來世らいせで緩ゆるりと逢あはうまで。あの世よから來きてあの世よへ歸かへる。戻もどり馬うまやろい、ほてつばら奴め。」と惡わるびれぬ、所存しよせんは侍勝さむらひまさりかな。「惜をしい奴やつぢや。」と涙なみだくみ、引ひいて歸かへれば本陣ほんじんは、火ひの用心ようじんの聲許こゑり、物靜ものしづかにぞ成なりにける。與作よさくは取沙汰とりさた聞きくと等ひとしく、科とがを我わが身みに引ひきうけんと、驅かけつけ見れども、早落はつらくらうく著しして竊ひそかなり。本陣ほんじんも門かどしまり、四邊あたりもびつそと靜しづまつたり。小萬こまん待まちかね格子かうじ叩たたけば走りより、「どうぢやどうぢや仕損しそんうたけななう。」「ア、仕損しそんうただんかいの。私わしや爰こゝから規のぞいた、八藏やうざうまで殺ころいたわ、ありや皆私等みなわしらが身代みがはり。明日あすの日中ひなかに斬きらるゝけな、可愛かほいい事を仕しまする。」と泣なきさゝやけば、「南無阿彌陀なむあみだ、南無阿彌陀なむあみだ、そりや皆みなこちが殺ころすわ。こちとはいかい業人ごふじん。」と、顔かほを見あはせ泣なき居ゐたり。「なう三吉さきちより一時ときも跡あとに下さつてなるまいが、こなさんどう思おもうてぞ。」「ム、その覺悟かくご極きはまれば、もう落おち著ついた満足まんぞくした。宵よひからさうは思おもうたが、親父おやぢの難儀なんぎを見捨みすてては、死しなぬ氣きであらうかと、胸むねにば

は存ぞんぜねども、お前まへ一人ひとりに恥はづかしい。父とう様さまのためかとは、恨うらめしの仰おほせやな。父とう様さまがある程ほどなれば、馬うま追おひは致いたさねども、在所ありかしらねば顔かほも見みず。又また母はは様さまも持もつたれども、女をんな子ごの身みの不ふ甲が斐ひなさ、奉ほう公こう人にんのはかなさは、今いまでは他た人にんも同おなじ事こと。たどへ言い譯わ立たつてから、盗ぬす人びとの名なを取とり、見み苦くるしいめにあうては、父とう様さまに顔かほはむけられぬ。早はやう殺ころしてもらひたい。その様やうにおつしやれて、可か愛あいがつて下くださる程ほど、どうやら心こころがうろたへて、死しにともなうなりさうな。奥おくへ入いつて下くだされ、もう顔かほ見みせて下くださるな。」と兩り袖そでを目めにあてて、泣なきしづみたる利り發はつさに、母はははなほしも心こころくれ、「命いのちはお乳ちが貰もらうた、助すけけて下くだされ侍さむらい衆しゆ。」と、「わつ。」とひれ伏ふし聲こゑを上げ、人ひとの推す量りやう思おもはくも、忘わすれはててぞ泣なき居ゐたり。家か老らうの本ほん多た奥おくより出いで、「様やう子すつぶさに承うけたまはる。盗ぬすみ物もの出でるといひ、殊ことに道ぢやう中ちゆう他た領りやうの者もの、これ式しきの事こと評ひやうぎ議ぎに及およばず。お助すけけなさる、立たち歸かへれ。」と、引ひ立たつれば三さん吉きち、「この恥はぢかいて助すけけられ、何なんと生なきてゐられう。慈じ悲ひなら切きつて貰もらはう。」と、猶なほ座ざをしめて立たたざりし。「エ、小こしやく者もの。輕かるい科とがを成せい敗はいとは、古こ今こんの掟おきてにない事こと、立たつて失うせう。」と怒いからる。「ム、この分ぶんではどうでも命いのち助すけかるの、オ、聞きえた。」とつゝと立たち、「こりや八やう藏ざうめ、おのれは己おれをよう踏ふんで、面つらに疵きずをつけたな。元ぐわん來らい我われは武ぶ士しの子こぢや、人ひとに踏ふまれて生いきては居ゐぬ、覺おぼえたか。」といふ詞ことばのうち、中ちゆう間けんが脇わき差さひらりとぬき、飛とび掛かつて八やう藏ざうが、首くび打うち落おせし早はや業わざは、また、く間あひだの稻いな妻づまなり。「すは人ひと殺ころし。」と取とつて伏ふせ、「もうこのうへは料れう簡けんなし。」

む目の中に、無念涙をはらくと、思込んだる腹立の、稚心の念力は、悚と身の毛も立ちにけり。母お乳の人聞き付けて、驅け出で見れば大勢に、取り圍まれし我が子の體、「あつ。」とばかりに腰もぬけ、呆れて泣くより外はなし。人々に悟られては、今まで包みし甲斐もなく、お姫様の乳兄弟、馬方して盗みしてと、言はれんも口惜しく、不便さ憎さ腹立さ、「ヤイそちは國から目をかけて、情を加へた甲斐もない、さもしい事をし出したな。筋目も有りそな者なれども、さすが育ちが恥かしい。その心ゆる親々も、知つても知らぬ見ぬ顔して、その馬方とはなりつらめ。此方も子を持ち覚えがある、皆親心は同じ事。若し母などが聞き付けても、我が子の命を助けたため、火水の底へは沉まうが、この場へ助けに出らる、物か。見殺しにする様なれど、心の中では神佛に、命乞して跪くぞや。年にもたらぬ心から、恐ろしい事する筈もない。父親が貧しうて、言ひ付けて盗ましたか。但しは人に頼まれたか、言譯あらば仕てくれよ。母の心を推量し、この頃の馴染もあり、兔に角命が助けたい。姫様のお名を思はずば、このお乳が産んだ子で、姫様の乳兄弟と、いうてなりとも助けたい。何うなりと斯うなりと、言譯あらば仕てくれ。」と、魂の底心の底、肝より出づるうき涙、當番吟味の人々に、推量もしてくれかしの、心遣ひ目遣ひを、夫れとも知らぬぞ是非もなき。三吉も母の顔、見え見おろし、涙にむせび居たりしが、「申しお乳様、さもしい盗みいたしても、馬方の事なれば、誰恥かしく

つて、内より戸をぞさいたりける。夜廻つゝいて飛び付き、乗物の戸をしつかと押へ簾を揚げて、「ヤア奴めか、これは御前のお金袋。サア馬方の三吉めがお金袋を盗んだ、出あへく。」と呼ばはりし。これぞこの世の地獄おとし、かゝる鼠の如くなり。本陣の上下残りなく、下宿の諸侍、鄰町鄰家の旅籠屋ども、棒、ちぎり木にて驅け付け、海道の真中に乗物かきする高提灯、四邊厳しく取り巻きたり。當番下知して、「丁稚づれに仰山な、それ引き出せ。」と畏まつた。と荒子共戸を明けて、「サア出ませい。」と小腕取つて引き出す。「これ旦那殿、盗んだ金は返します。」ときよろりとしてぞ居たりける。「いか様にも幼少な、彼奴許りではあるまい、同類を穿鑿せん。馬差は居らぬか、當宿に泊つたる馬子ども、残らず召しよせよ。」「あい。」と言ふより觸れまはり、皆々一緒に相つむる。八藏も大酒して宵より關に泊りしが、「盗みかは何奴ぢやい、ヤアませの自然薯めか。おのれなら尤もろくで果てまい奴ぢやと、常に言うたが違うたか。馬方仲間の恥さらし、エ、磔柱め。」と、脊骨をどうど踏みければ、俯げにかつぱと伏し、額を石にすり破り、血は紅と流れたり。「無念なおのれ踏んだか、肢骨もいでくれう。」と、立ち上ればひつするく、「そこな馬子めも慮外者。武士の前にて脛ざんまい。」と、さんくに叱らるゝ。「エ、彼奴に踏まれたか。下々の刀でさへ、切られまいと思ふに、脛にかけこの様に、顔に疵を付けたなあ。首がとんだらおのれが面へ食ひ付いてくれうぞ。」と、はつたと睨

込んで頼むと、のほせば此奴がのほされて、成程盗んでくれうといふ。なれば上々、ならねば元々。」
いひもあへぬに、「いや／＼／＼、人まで罪に陥す事、止しにして下さんせ。」「ハテ氣の細い。現はれ
て彼奴が打たる、分。三吉いよく頼んだ、ひかせはせぬ。」と言ひければ、「はれやれ／＼／＼し
ちくどい。盗んでいらすば捨ちやいの、この自然薯が頼まれて引きはせぬ。ハテ親はなし一門なし、
けんこ取りよる小さい首、意氣づくなら取つていけ。盗みして現はれ首きらる、が不思議か。」と、義
を立てぬきし侍氣、盗む黄金もくちせざる、筋目恥かし哀れなり。「オ、頼もしい、命掛けて頼んだ。」
と、ありたけそやされ、「ハテイ味方があれば氣がおくれる、何處ぞへとつと退いて居や。ヤア小萬女
郎、この守が預けたい。」「ハテ守はかけて居やいの。」「いや／＼これには私が本名が書いてある。若
しあらはれて捕まへられ、人に見せれば恥辱ぢや。」と、解いて預けし神妙さ、裾ねぢからけて忍び入
る。「坂の下の彌六が方へ退いてゐて、夜中時分に戻らう。小萬もはひりや。」「わしやあぶなうてきや
きやする。南無地藏様々々々。」「エ、今願立がきくものか。聲が高い潛かに／＼。」「ひそ／＼と、胸は
だく／＼／＼ほくの、坂の下へと別れける。武家は道中控にて、半時がはりの拍子木の、數も九つ、
十に餘るやあまらずの、子供心の愚かさは、盗みおほせし嬉しさに、拍子木を除けもせず、金欄の財
布さけながら、門口へずつと出る。夜廻ちらりと氣をつけて、しだひ寄れば狼狽へて、乗物に逃げ入

と言ふ博奕打の盗人めに、有りたけこたけ仕揚けて、夏の物は半がいに、襦袢が一枚なささうな。與作が掛が餘程ある、皆おれが請合ぢや。帳面は忘れぬ、旅籠が六かたけ、酒が四升五合、十文盛が七十杯。芋と鯨の煮賣が八十五杯、食らひも食らうた蒟蒻の田樂を百五十串、蒟蒻の錢ぢやとて、砂にしてすはせうか。盗人におひなれば、この出入はこちや知らぬ。與作めが身の皮はいでも、二石二斗が物はない。馬を質に押へて、彼奴に屹と濟まさせ、小萬を内へ入れておきや。皆御大儀でござる。」と、辭儀もそこく戸を立てて、錠さす音こそ厳しけれ。莊屋、問屋、組頭「扱々與作といふ奴は、存じの外の大食、旅籠から盛切から、蒟蒻食うて煮賣食うて、その間に小萬といふお山を夜食に食ひをる。」と、面々宿にぞ歸りける。與作は肌冷汗流し、やうく這ひ出で櫃の節穴、葎の隙間覗け覗けど見えばこそ。竹欄子の出格子に首を伸ばして取り付けば、内より顔がによつと出る。ちやつとひけば、「ア、大事ないく、コレ私ぢや。」「小萬か。」「與作様か。今のを聞いて下んせ。悲しい事に成りはてて、籠の鳥になりました。私がかうなる上は、父様へ難儀はもうかゝらぬ。こな様にあふ事はならうやら成るまいやら、これが別れにならうやら、下から上ははかられぬ。」と、手に取り付いて泣きければ、「イヤこれくもにしろが出来てきた。どうした縁やら三吉めが、與作と言ふ名にほれて、常におれを大事にする。乗物の内でたらしこみ、鄰にとまつた大名の、金を盗んでくれまいか。男と見

横腹を踏みくさる、何者ぢや。」と、小丁稚が大欠伸してによつと出る。「ヤア石部の自然薯か。」「與作殿か。」「そちは爰に何して居る。」「おりや江戸へ通しの馬追うて本陣に泊るが、夕飯過ぎから眠たうて、爰でぐつとやつたもの。あり様はこりや何事ぢや。」「いや氣遣ひな事ではない。鄰の旦那に逢ひともない。爰へ隠してくれ。」と言へば、三吉四邊をすかし見て、「其所なは小萬か。エ、く甘いな甘いな、おりやとうから知つて居る。外の人なりや成らぬが、與作といふ名でいとしい。與作の事なら引きはせぬ、隠してやらう、サアはひりや。」と膝おし合ひし志、知らねど親に孝行の、通ずる念こそ哀れなれ。程なく亭主門口から、「内外の者ども皆起きよ。問屋殿、莊屋殿、組中残らず御座つた。鼻も起きて出やく。」と、わめく聲に出女ども、いはらじ諸共表に出づる。莊屋、問屋、口を揃へ、

「おかたお聞きやれ、今日の寄合は、これの小萬について代官所のお差紙。小萬が父親横田の彦兵衛四年このかた二石二斗の御未進にて水牢に入れられたを、小萬が願ひ請負故、出牢仰せつけられた。宿中としてきつと取立て納めませいと、すなはち小萬をお預けぢや。ようお聞きやれ。」と言ひ渡す。

小萬うつむき涙くむ。女房も驚きて、「おとましい事仕出しやつて、主に厄介かけやるか。」と、言へば亭主とがり聲、「なんの主の厄介、一文もこちや知らぬ。上り下りの旅人衆も、關の小萬と言ふ名に恥ぢて、百やる人も二百やる、一匁の貰ひも鷗尻に取りをる。百目や二兩は半年にもたまれども、與作

て堪忍したら、其方はよから、おれがわるい。與作めの博奕うち盗人と、この門からわめいて往く。」
「なうこれ／＼爰に百三十匁、命がはりの金なれども、男の爲ぢや惜しうない。これで濟まして下され。」と取り出すをひつ奪り、「必ず跡もすませよ、錢の直段はどうせうぞ。」「ハアテそこらは構はぬ、そなたの勝手にしてたも。」「そんならこれで拾貫分、相場は十三もんめん。」巾著、振ぢこんでこそ歸りける。小萬は小首を傾げ、溜息ついて立歸り、「さきの金を渡してやう／＼といなせた。あれ等との交際、重ねておいてもらひたい。」とつぶやけば、與作肝つぶし、「その金渡してよい物か。取りかやさう。」と立ちあがる。「これ待たしやんせ。人の物負ひながら、返さいでよいかいの。昔とちがうて當代は、道中筋も吟味つよく、馬借問屋へ斷られ、惡名が立てば、とん／＼とすたつて出入の門も塞がれば、おのづから逢ふことも成らぬ様に成りはて、萬一お國へ聞えての恥辱は二度返らぬ。父様の未進もいひ延べるだけ言ひのべて、叶はずば水牢へ代りに私が入る覺悟。差し當つた男の難儀、救へば私为本望。」と、いへども與作聞き入れず、「馬方風情に何の恥辱、うき身窵すは親の爲、その金をやるものか。」と驅け出でしが、「南無三寶こりやならぬ。これの旦那の左次殿が、何事が出来たやら、問屋組中つれだち、それ其處へ戻らるゝ。なんの彼のが喧しい、一寸隠れて逢ひともない、馬も何處ぞへ引いてくれ。」と、隣の店の幕の陰、乗物あるを幸ひに、戸をあけ片足踏こみめば、内より、「あ痛／＼。」

藏殿、こなたは粹の様にもない。其方も此方も親方持、馬をやつて能からうか、取つてこなたを褒めうか。聲高にいはすとも、料簡づくがよいわいの、情なや。」と泣きければ、「ヤイ爰な引下れ。その涙は與作に泣け、こちや忝うないわい。取るべき錢はとらずに、馬を取るが料簡ぢや。」「いやそりや成らぬ。この門に繫いだ馬は、この小萬がやらぬ、關の小萬がやらぬぞ。」「イヤ死女郎のふりばりめ、竹の鞭をくらふなよ。」「オ、女子を相手にならばしや。」「ヤア仕かねうか。」と、鞭を持つてはたとぶつ。與作、小萬を押し退けて、「あれは餘所の奉公人、なぜくはした。」「オ、汝が女房ぢや所であらはした。」「ム、ようくらはした。女房どもの返禮。」と、拳を固めて目鼻の間、缺けてのけと打つたりけり。「來い、する氣なら仕て見せう。」と、互にこづかを取つては投げつ投げられつ、ぶつつぶたれつ掴みあふ。誠に馬子の喧嘩とて、馬の踏み合ふ如くなり。八藏は力許り、與作は取手柔術取、すりちがひに小腕を取り、胼を蹴返し、「こりやあ。」と取つて投げつくる。門柱に腰骨うち、よろつきながら睨みつけ、「どうすりめ覺えてけつかれ、問屋、馬差、親方へことわつて、海道筋の御器の實をぶちあけ、薦かぶかせて見せう。」と、身を振ち振つて立歸る。小萬追付き、これ八藏殿、公用勤める馬方が、馬差、問屋へことわられ、何處で身が立つものぞ。この小萬が手を合はせる、男は當つて碎けいぢや、堪忍して下され。」と、詫びる程なほつき上り、「十六貫といふ錢貸してその上に、投げられ

殺させはせまいと、瘦我をはつての出来心。千三百石から馬追まで、成り下るほんのくほ、よい事はない筈と、思はなんだは身が不覺。これは主の天罰とあきらめて濟ますが、しこり博奕の榮耀とは、さりととは小萬むごいぞや。皆これそなたの親の爲、胸に書付あるならば、爰が立割り見せたい。」と、打ち叩いたる胸當も、しほる許りの恨み泣き、小萬、「これは。」と手を合はせ、「忝うござんする、とうに言うて下んせば恨むまいもの、堪忍して下さんせ。父様の出入も夏の物ども人手に渡し、傍輩にも無心いひ、百三十匁と、のへ、まちつとの所は賃麻もよつほど績みためた、これ見さんせ。」と、芋小筒より金取り出し、「父様の命代、落著いてくださんせ。日が暮れて間がある、よもや八も來るまい、泊人はなし私も隙、馬は向ひに繋いで、中の間に寢ていなんせ。互の憂きを散せう。」と、草鞋の紐解く所へ、石部の八藏きよろ／＼目して來りしが、「ヤア與作か。人の馬をことわりなしに、美濃路まで隠れもないひぬかの八藏、目の荒い男知らぬかい。十六貫を只せうや、どうすりめ。」と、馬を解く手を飛びかゝり振ちあけて、「こりややい、われがひぬかの八藏なれば、おれは丹波與作ぢや。二百目のかたに五百目の馬をほしいか、遣つたら機嫌がよからうな、三百目のつりを持つて來い。五十三次に汁かけて、かみこなす與作ぢや。すないやい／＼、ほてつばらめ。」と振りちぎる。「ヤイ男達はおいてくれ。錢濟まいてしたかせい、腕づくならサア來い。」と、ぶつて掛れば、小萬取り付き、「なう八

一文はねて六文にして、當ててとらうと思つて、一文しやんとくろめて、ついで見たれば悲しやの、八文であつた物、一文はねて七つにして、彼奴が壺へあてがうたは、どうした因果の固まり。此方やけんなりとなる程、八めはいきつて、『馬を取つた。』としがみ付く。今日の乗手は氏神、『約束の馬次までやれ。』と促まる。八めも武士を乗せたれば、『なぜ馬を追はぬ。』と目のぬける程叱られて、『窪田で旦那を下して、追付馬を取りに行く。』と、早追程に追つて来る。親方の馬をとられては、この街道はいふに及ばず、木曾街道、中仙道、たゝすみか叶はぬ。八藏めが來ぬ中に、早う内へ往にたい。と、溜息ついて語りける。小萬心も暗闇にて、『人の沙汰に違ひはない、世につれるとは云ひながら、さもしい心にならんした。古はお歴々、私等ふぜいは下司にもお遣ひなされまい。縁なればこそ膚ふれて、抱いつ締めつのわりない事、嬉しいやら悲しいやら、一倍いとしさ増すものを、悪い病がつかまりました、そりや雲介の身持ぞや。友達仲間の交際で、引かれぬ事があるにもせい、私が親の未進米この六日の吉書に立てねばもとの水牢。この世から八寒の地獄へおとす私が心、苦にかけうではなけれど、案じても下んせす、しこり博奕のわる遊び、扱もつれない氣と思へば、熱い涙がこぼる。』と、せき上けく泣きければ與作、『わつ。』と泣き出し、『そりや曲がない。』慰みにも慾にもせぬ、其方の親の未進米、二石二斗は何程ぢや。昔與作が草履取、馬取の切米。これで可愛いそなたが親を

そ、金に直いで一步二朱の借錢負うて、肩の重い石部の八藏に請合うて貰うた。これを軍の始めとして、大津八町で八百まける。小野の宿の小町塚で、九十九文してやらるゝ。磨針峠の氣が細うては勝たれぬと、綾村の上で分別しかへ、守山の觀音堂で、三十三匁が質おいて、心は鬼神と出たれども、土山の田村堂で、つい平らけてのけらるゝ。伊勢へ通しにいつた時、宵から曉の、明星が茶屋で飲み干す様な大ぐさり、借錢の利を一月に二月をどる松坂越えて、雲津の渡で算用したれば、二貫宛四つ合はせて、二四が八藏めに八貫の借錢。これはならぬと思ふ所へ、向うから馬追うてうせをる、じたい八めはぶうくになり。おれが胸座しつかと執つて、「こりや貸した錢はどうする、見忘れたか八ぢや八ぢや。」と螫すやうにいひをる。諄々と見苦しう、詫言もして居られず、「錢と言うて今はない、正味でかつた錢ではなし、數ばかりの勝負づく。一晚切について見て、八貫を濟ますか十六貫負ふ物か、サア來い。」というたれば、八めは數年の通り者、「こちは八貫出して置く、負ければそれで取り遣りなし、勝てばむして十六貫、何で濟ます合點ぢや。抵當もなうてはいやぢや。」といふ。此方も引かれぬ言ひ掛り、「これこの馬を知つたか、池鯉鮒の市で九兩一分、親方の物なれど、十六貫の代りに、五百目の馬ならしてこい。」と、木陰へよつて錢にぎり、「サアどうぢや。」というたれば、「三まいせい七つぢや。」と二文張りをつた。まつかせとつく程に手の内に残つたは、確か七文、南無三寶しまつた。

とも白子屋の店頭みせさきに馬引うまひきつ付け、「こりや小萬こまん、この旦那殿だんなだん馳走ちそうしてとめましや、お供ともかけて三人じんぢや、サア下りおさつしやれ。」と荷物にもつ解とく。小女郎こぢやうらう、小善取こよしとりく、「それお足の湯あしゆ、先づ奥おくへ、合宿あひやどもござりませぬ、ひろくくと御休おやすみなされませ。」と、奥おくにもなひ入りにけり。與作よさくは荷物にもつも跡付あとつけも、そこに投げ下おろし、「小萬こまんこの中途ぢゆうあはなんだ。無事むじで嬉うれしい、臆おそて逢あはう。」と馬うまの口取くちとり驅かけ出す。手綱たづなに縋すがつて、「これなんぞ、語る事ことがたんとある。此方こなたもいふ事ことある筈はずぢや、そはくせすと待またんせ。」と引き戻もどせば、「エ、邪魔じやまな、その話はなしはいつでもなる。急きふな事ことぢや遣やつてくれ。」と、振りふりきれば抱だきとめて、「これどうぞいの。何がそれ程ほど忙いそがしい、どうで心こころに一物いちもつ有ある、譯わけを聞きかねば遣やりはせぬ。」と、店みせにとんと抱だきすゑられ、「ハテ荷物にもつさへおろしたに、一物いちもつが有あるものか。氣きづかひさうなに、短みじう話はなしして聞きかせう。この不仕合ふしあはせを聞きいてたも。傍輩ほうはいどもがけんねじついで、錢ぜに儲たくわけする羨うらやましさ、勢多せたの久三きうざがどうの時とき、百切ひやくきりはつて見たみれば、勝かつ程ほどにくひといき一息ひといきに七百しちひゃく。こりや門出かどでが面白おもしろいと、腰こしにひつつけ、しやんぐくと鈴鹿すずかで皆みなついて居ゐる。爰こゝへもちよつと出でかけて、又また六百ろくにしてやつた。これでおけばよい物を、慾よくには見えぬ目川村めかはむらの、馬子まごども寄よせて我われらがどうを取とつたの。當あたらぬかく、晝ひるさがりから七つまで、一文もんと六文むんの錢ぜにの顔かほを見みぬ程ほどに、前まへの勝かちをぶちこんで、五百いほひ餘あまりのしすごし。どつこい何處どこぞでこの損そんを、梅うめの木きの是齋ぜさいの辻つじで、身みを粉こなにはたいてやつて見たみた。和わ中散ちゆうさんでもきくにこ

親方の駄賃の算用も立たぬけな。聞けば小萬の知音の與作も、博奕の友ぢやけな。與作がいとしか意見しや、小善も取沙汰聞きやらう。」といへば、小善小聲になり、「さればうちの旦那が、龜山の問屋で聞いて来て、これの小萬が、懇する馬方の與作めは、博奕打の大將ぢや。あれから盗みの下地ぢや、重ねて来たともあしらふな、餘程彼奴に掛もある。丸裸にしてなりとも、懸を取つてそれからは、門詰も踏ませまいと、夫婦嘯きうなづいて、寄合にいかんした。」と語りもあへぬに、小萬はらく涙にて、勤めの身にもおぢやれの身は、下の下といふは爰のこと。傍輩衆へもいはなんだ、横田村の父様二石二斗の未進につまり、六十六で水牢。男にも娘にも、子とてはこの身ばかりなり。しよさいこそ出女なれ、お大名へも知られた關の小萬が父親を、水牢では殺されず。參宮するとて隙もらひ、女子の身で代官所を、秋納めまで請合うて、牢を出しは出したれども、何をあだてに何とせう。前の様に客は勤めず、私仕事に賃麻績み、女中とまりの袖の下、小萬といふ名でほつくと、鶴の哀れや淺ましや。請合の日は近付く、氣がいさまねば身もやせて、辛苦するのもある人の、身をもくろめて遣りたいの、念力一つで立てる身が、世間で悪う諺はれて、まめしけもなき浮世や。」と、芋小筈にひれふし歎きしが、「あれくあそこへ諺うて来る、本小室のひんぬきは、與作々々。」と小手招き。唄扱も見事な、ソソレハおつら馬や、七つ蒲團に、ソソレハ曲录拵ゑて。「我も昔は乗りし身を、人は夫れ

掛子かけこをこひには、戀こひに心こころを捻ひねり麻その、葶け持がせ亂みだいた胸むねの中うち、何なんとなら麻そのうき身みぞや。「なう小善こよし、小女こぢよ郎らう、かうした勤つとめさまへあれども、君傾城きみけいせいといふ者は、この類るいでの王様わうさま。それから段々だんぐある内に、おぢやれの身みには何なにがなる。朝あさの夜よるから店みせざらし、晝ひる休みやすみから泊とまりまで、吉原雀よしはらすずめの鳴なく様やうに、息いきのありたけしやべつて、それでも泊とまり人ひとある事ことか。如何どうした事ことやらこの頃は、一膳盛ぜんもりの客きやくさへない。鄰となりにはあの様やうに大名だいみやうのお姫様ひめさま、今日けふで三日さんじつの逗留とまりう、宵朝よあした百六十人ひゃくろくにん、どつばさつばと忙いそがしい。これの内うちはいかな事こと、下宿げしゆくさへ泊とまりが無い。晚ばんにはみんな覺悟かくごしや、且だん那殿なだののにかい顔かほ、日頃ひごろ生はえた角つのに股またが咲さかうぞ。なう怖こはや。常つねにひいきな馬子衆まごしゆも、こんな時ときに客きやくひいて、くれそな物ものではないかいの。やそれについて小女郎こぢよらう、そなたのおてき松坂まつざかの七二しちじは、何なんとして見みえぬぞ、口説くぜつでもしやつたか。梯子はしごの下したのごそくが過すぎて、氣色きしやくでもわるいか。餘あんまりごそくごそついで、馬うまは追おはいで願ねがひで、蠅はへお追おやろぞや。」といひければ、「ム、その七二しちじとは九郎助くろすけの事ことか。それは未生みしやう以前いぜんで、今は挨拶あいさつきりなくす、しといふ馬追うまおひ聲こゑも聞きかぬわいの。初はじめはたんと可愛かほゆうて、元結もとゆひの脚絆きゃはんの鬘げんげ付け買かふの帶おび買かふの、沓くつの錢ぜにまで續つづけた、その私わしが目めをぬいて、一人ひとりか二人ふたりか水口みなくちの、火繩屋ひなはやのおけん、まだ土山つちやまの櫓屋くしや後家ごけ、庄野しやうののふとのお米よねが依腰たはらしに喰くひつ付ついて、馴染なじみのおれを鼈かめぬきに逢あはせた。それもいうたら止やむにもせい、ほでてんごうの貧乏神びんぱがみ、何なんもかもほつきあけ、今は布子ぬのこと襦袢じゆはんと、たつた二枚まいの四九しやうをやつて、

「これ泊りぢやないかえ。とまりなら泊らんせ、泊らんせ。旅籠安うて泊めませう。上旅籠中旅籠おのぞみ次第すき次第、椀家具も綺麗な、座敷はこの夏表がへ、寢道具ようて酒ようて、お茶は上。木賃でなりと、据風呂もしやんく、掛り湯取つて加減見て、旅の汗れのおかつきは、七つ立か八つ立か。枕のお伽が御用ならば、振袖なりと詰なりと、足摩つて腰打つて、吸付煙草の煙管の鷹首首筋もとから、ぞつと庄野の六藏でないか。よい女郎衆乗しやつて足許が軽いの。」「おいてたも、アしやら。」「草津の三介三藏、石部金吉泊りならとめてたも。何ほ先へ行かんしても、旅籠屋は皆一つ。同じねを啼く鶯の、春はござれの伊勢衆でないか、目元にしほがこほれる。爰へ見える坊様はこの暖かなに紙子著て、仙臺の坊様か。あの旅人は京の八幡の生まれやら、足に牛蒡の毛がむくくぢや。向ひ通る菅笠様。足許腰元身のまはり、すつきり綺麗に掃いた様なは、伯耆の國の人と見た。これく、爰な若衆様、越後衆か明石か、鬢がちつくり縮んだ。あれへ大名一かしら、瓜ざね顔の旦那殿、東寺から出た人さうな。後から御座る角前髪、吉野の衆か鼻が見事。これへ見えた飛脚の、足許のねばいは三河者に極まつたぞ。常陸の衆は帯で知る。これこ、な奴殿、越中國の人と見た。なんで見たればこの下紐を、解いて一夜は泊らんせ。」夕暮は急ぎの人も呼びとむる、色こそ道の關の地藏、白子屋の左次が内、小萬、小女郎、小善とて、百二十里の名取ども、人呼ぶ片手の袖の下、苧小笥の

目を隠し、脊見まつべて腰につけ、見すほらしけな後影、「こりやま一度こちら向きや、山川で怪我しやんな。雨風雪ふり夜道には、腹が痛いと作病おこし、二日も三日も休んで、煩はぬ様にしてたも。毒な物食はずに、腹や麻疹の用心しや。可愛のなりやいた／＼しや、千三百石の代取が、何の罰ぞ咎めぞ。」と、式臺の段箱に、身を投げ伏して歎きしが、懐中の有合はせ一步十三袷紗に包み、これたしなみに持つて居や」と、涙ながらに渡さるゝ。三吉見返り恨めしけに、「母でも子でもないならば、病まうと死なうといらぬおかまひ、その一步もいらぬ。馬方こそすれ伊達の與作が總領ぢや、母様でもない他人に、金貰はう筈がない。エ、胸愆な母様、覺えて居さつしやれ。」と、「わつ。」と泣き出すその有様、母は魂消え入りて、「養ひ君お家の御恩思はずば、扱一人子を手放して、なんの遣らうぞ。奉公の身の淺ましや。」と、悶えこがれて歎きける。時に奥口さ、めいて、「早御立。」と姫君の、御輿昇きあけ行列立て、お乳の人の乗物を、平付にこそ昇き寄せけれ。お乳はさあらぬ顔付して、「姫君のお伽に、最前の馬方をこの乗物に引きつけ、お慰みに諂はしや。」「畏まつた。」と宰領ども、「こりや其處な自然審め、諂ひ居らう。」ときこつなく、「ヤア此奴はほえをるか。何ぢやこりや忌々し。」と、握拳を二つ三つ、いたゞきなから泣聲に、奥坂は照る／＼、鈴鹿は曇る。土山、間の、間の土山雨が降る。降る雨よりも親子の涙、中にしぐるゝ、三重雨やどりの。

の乳離れ、お苦しみをかけまし、身に餘つたお家の御恩、誰がいつの世に報ぜん。残つて御恩を報じてくれと、父様のことわり故、第一は男のため、夫婦の義理を忠義にかへて、あかぬ離別をしたわいの。男の子は幼うても、御勘氣の末氣遣ひな。與作の子とばし言やんなや、サア早う御門へ出や。アいかなる因果な生まれ性、現在我が子に馬追させ、男の行方も知らぬ身が、母は衣裳を著飾つて、お乳の人やお局よと、玉の輿にのつたとて、これが何になる事」と、聲を忍びに泣くばかり。子は生まれつき賢くて、聞分有る程なほ泣き入り、「悲しい話を聞きました。さりながら常に姥が申したは、姫君様と私とは、乳兄弟の事なれば、母様にさへ逢うたらば、父様も出世なさる、由、御訴訟なされ下されかし。」と、いへばちやつと口を押へ、「ア、く、勿體ない、その乳兄弟いはぬ事、姫君様は關東へ養子嫁御にお下り。高いも卑いも姫御前は大事のもの、先は他人の世間體、三吉といふ馬追が、乳兄弟に有るなどと、どう妨げにならうやら、蟻の穴から堤も崩れる、軽い様で重い事。ひそくいうて人も聞く、先づはやう出てくれ。」と、泣くく言へば三吉、「ア、母様あんまり遠慮過ぎました、先づいうて見て下され。」「まだいひ居るか聞分ない。夫の事我が子の事、母に如才が有るものか。合點の悪い聞分ない。」と、制するうちに奥よりも、「お乳の人はどこにぞ、御前から召します。」と呼ばはれば、「あれ聞きや、人が来る、出たも。」と、手を取つて引き出す。不便や三吉しくく涙、頬冠して

點させ、恥ぢしめて返さん物と、涙のこうて氣を鎮め、「爰へ來い與之助。」と、引寄せて兩手を取り、「扱も大きうなりやつたの。とても成人せうならば、侍らしう何故尋常にも育たぬぞ。顔の道具手足まで、母はかうは産みつけぬ。美しい黒髪を、この様に剃り下けて、手足は山のこけ猿ぢや。ぼんに氏より育ちぞ」と、又さめんくと泣きけるが、「これ物を合點しや。腹から産んだは産んだれども、今では子でも母でもない。あさましう成りさがつたを、嫌うていうではさら／＼ない、爰の譯をよう聞きやや。母はもと御前様の奉公人、與作殿は奥小姓、互に若氣の戀風に、すれつもつれつ一夜が二夜と度重なり、通はせ文をお次に落し、小姓目附に拾はれ、武家の作法といふ内に、殊にお家は御法度きびしく、御家老衆の評定、父も母も御成敗と極まりしを、御前様のお身にかへ、お命かけての御訴訟、殿様の御慈悲にて科を許されその上に、表だつて夫婦になされ、與作殿は段々に、奏者役番頭千三百石までお取立、追腹程の御恩の家、その間に其方を設け、上には姫様御誕生、御内證の好意にて、母が乳を上げまし、首尾さへよければ、其方も今家老衆の子同然に、二番と下座に下らぬ人。

情なや父様が江戸詰の山谷がよひ、大事の所を仕損ひ、また切腹に極まつた。なれども腹を切らせては、女房お家に置かれぬ時には、大事のお姫様の乳離れ、御病氣も出れば如何とて、母をその儘残さう爲、父様の命助かり、奉公構ひの御改易。その時母も一緒に退けば、尤も夫婦の道はたつ、お姫様

んの無い事申しませう。私が親はお前の昔の配偶、この御家中にて番頭伊達の興作、その子は私、此方様の腹から出た、興之助はわしぢやわいの。父様は殿様のお氣に違うて、國をお出なされたは三つの時でお覚え。沓掛の姥が話には、母様も離別とやらで殿様に御奉公、此方を姥が養育し、父様に逢はせたう思へども甲斐もない。母様の細工の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人滋野井様と尋ねよと、懇に教へて姥はおれが五つの年、久しう痰を煩うて、擧句に鳥羽の祭に往て、餅が咽につまつて、遂に死んでのけました。在所の衆が養ひて、やうく馬を追ひならひ、今は近江の石部の馬借に奉公します。これ守袋を見さしやんせ。何の謠を申しませう、お前の子に紛れはない、外に望みは何にもない。父様を尋ね出し、一日なりとも三人一緒に居て下され、みごと沓も打ちます、この草鞋も私が作つた。晝は馬を追うて夜は沓打ち草鞋作り、父様母様養ひませう。父様と一つに居て下され、拜みまする母様。」と、取りつき抱きつき泣き居たり。お乳ははつと氣も亂れ、見れば見るほど我が子の興之助、守袋も覺え有り、飛びついて懷に抱き入れたく氣はせけども、アツア大事の御奉公、養ひ君のお名の瑕、傷つて叱らうか、イヤ可愛けにさうもなるまい、まあちよつと抱きたい。ア、どうせうと、百千色の憂き涙、二つの眼には保ちかね、咽び沉みて居たりしが、いやく我が子ながらも賢しい者、偽つて實とせず、母の心のきたない者と、蔑まるゝも情なし。譯を語つて合

お江戸に著き給ふ。「一の裏は雙六の、さいはひあり喜びあり、慰みありける道中。」と、どつと興にぞ入り給ふ。お傍の衆に囃されて稚心の姫君、「かう面白い吾妻とは、今まで己は知らなんだ。サアサア往かうはや往かう。」「やア御座らうと仰しやるか、そりや目出度いわく。又もや御意の變らぬ間に、行列揃へ。」と立騒ぐ。お乳の人は勇みをなし、「そんならま一度、大殿様お袋様とお杯。これも馬子殿おかけぢや、出来いたく。其方には禮いふ褒美やる、其處に待ちやや。」と、ざゝめき渡り奥に御供し入りにけり。馬方は遂に見ぬ金の間をうそくと、覗き廻れど筵の外、踏みもならはぬ備後表、「エ、この座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ。大名の家よりも、此方の内が結構で御座る。」と、獨言して居たりけり。お乳の人は大高に、お菓子さまく文匣に盛り入れ、「どれく三吉其處にか、まあ其方はけな者ぢや。道中雙六お目かけ、夫れ故に姫君様、お江戸へ御座ると御意なさる、お上にも御機嫌、これは御前のお菓子、有り難う頂きや、お錢三筋買ひたい物買やや。殊に其方は通しぢやけな、道中ながらも用あらば、お乳の人の滋野井に逢はうといや。見れば見る程よい子ぢやに、馬方させる親の身は、よくくで有らう。」と、いと懇の詞の末、三吉つくく聞きすまし、「由留木殿の御内、お乳の人の滋野井様とはお前か、そんならおれが母様。」と抱きつけば、「ア、こは慮外な、おのれが母様とは、馬方の子は持たぬ。」と、もぎ放せばむしやぶりつき、引きのくれば縋りつき、「な

とどさ草津、お姫様より先づ姥が餅、一口二口水口泥鰯跳り越え、坂へ越すのも采次第、采を振れ振れ、振るや鈴鹿を後に下れば、負けまいとせきに關より龜山に、煙草火打の石薬師、おつと桑名の舟渡、宮へ上れば池鯉鮒へ四里の、宿にころりは 唄 岡崎女郎衆々々々々々、岡崎女郎衆と、纏れ寝よやれ藤川に、思ひくの君待ち受けて、解く前垂の赤坂や、吉田、二川 唄 白須賀ちよいと越えて、手判御座るか振袖に、ヤこのく新居、今切、舟に召せく、蛤召せの、蛤々濱松まで、舞坂三里ナ馴染見附の泊と聞けば、誰も惜しまぬ縞の財布の袋井や、のり掛川を飛びおりて、機嫌笑顔やサア目坂の蕨餅、腰なは何ぞ日本一の大井川、采に無の字を打出せば、水の出ばなの八十川の、島田、金谷に二日のよどみ、仕合よしの旅すご六里。七里八里も只一足に、先へくと咲き掛りたる、藤枝、岡部、瀬戸の染飯、宇都の山邊の十園子、所々の名物買うて、おあしつくくつく手鞠子に、ひいふうみいよ、府中、江尻にすつとんく、とんと打つたる興津波、松原はる、膏藥買うて、月をすひ出せ清見寺、由井、蒲原や吉原の、花の蒲燒名物の、鰻のはだへ沿津の宿、三島越ゆれば箱根へ三里、采目次第にせきこゆる。悪い目うてば手判をとり、元の京へ立歸る。合點か、オ、呑み込んだ。小田原外郎、大磯、平塚、藤澤の、さはりもなしに雙六の、さいさきも宜し門出よし。道中早めてとつかはと、急ぐ程が谷。神奈川越え、川崎を越え品川越え、まづ先驅のお姫様、一番勝に勝色の、花の

の丁稚に、持つて參れと呼うでおぢや。」「心得ました。」と御門に出で、連立ち來たる馬方が、片肌脱いで捌髪、御前近くも無遠慮に、縁先にあけ足して、「やれくく、あり様達はあつたほこしのものない。傍輩どもとかけどくに、道中雙六打つて、沓の錢程してこませうと思つたに、人を呼び廻つてないでやる。はれやれくく、きりく乗らつしやれ、馬やろい。」とぞつこうどなる。「扱々利口な野郎ぢやな。船頭、馬方、お乳の人、此方も其方と同じこと。して年は幾歳、名は何といふぞ。」「年は今年十一。五つの歳から馬追うて、一代若衆にならずに、はえぬきの念者ぢや。所で名は自然薯の三吉。」「扱もよい名ぢや。聞けば道中雙六が有るけな、腰元衆もうつて見や、姫様も遊ばせ。サア三吉も爰へ來い、苦しうない。」と呼びければ、「あい。」といふより慮外をも、かへりみじかき煙管の煙、立交りたる女中の傍、そぐはぬ様に見えざるは、さすが童の一徳と、繪を取り出し雙六を、皆打交り遊ばるゝ。

道中雙六

「これく御覽ぜうたしやんせ。是れこそ五十三次を、居ながらあゆむひざ膝くり毛馬、はいしい道中雙六。」南無諸佛分身と、書いた六字を六角の、采は櫻木、花の都を真中に、思ひくしのしるしを置いて、さらば此方から打出の瀧、大津へ三里、爰で矢橋の舟賃が、出舟召せく旅人の、乗り遅れじ

ぬ。サアよいお子ぢやお輿にめせ。」と、威してもそやしても、「いやく、皆の欺しぢや、何の吾妻が
好い所 腰元どもが謠ふを聞きや、サアみんな爰へ出て、いつもの歌を謠へく。」とせめ給へば、お
伽小姓の頑是なし、十二三なが手を揃へ、奥山も見えざるかりそめに、江戸三界へ往かんして、い
つ戻らんす事ぢややら。殺して置いて往かんせの、放ち遣らじと泣きければ。「ア、おきやく、
お大名の宮仕へ。琴の組でも謠はいで、誰に習うて派手な歌、姫様などに教やんな、必ずおいてもら
はう。」と、お乳の人の不機嫌さ。本田もあまり爲方なく、「申しお姫様、あれは人の口てんごう。花の
お江戸は京優り、浅草上野の花盛り、又堺町木挽町の、てんつくくでこのほう、辨慶や公平が、
えいやつとと、えいなどと、切り合ふを見せませう。道中の面白い事、富士の山と申す、天までとゞ
く山を、御目にかけまするサアお輿に召しませい。」と、力一ぱい賺しても、「いやく、江戸へは行き
はせぬ、どうでもいやぢや。」と泣きたまへば、お乳も今はあぐみはて、どうしてよからう御家老も、
呆れてこそは居られけれ。お仲居の若菜は、旅立に菅笠持つて、門外より走り入り、「なうお乳の人
様、面白い事が御座ります。十ばかりの剃下の小ほけな馬方が、道中雙六とやら、東海道の繪をひろ
け、味な事して遊びます。御機嫌直しに、お目かけなされませ。」と、「オ、く、ようぞ氣がついた。
夫れは聞きおようだ道中の繪を見せまし、お心も移るため、馬子でも子供は大事ない、お免しぢやそ

通りだ。若黨、仲間、荒子、小者に至るまで、大酒を致さぬ様に、馬次舟渡し等にて、がうぎがさつを仕つたらば、曲事でおぢやんべい。又とさ、泊り／＼の赤前垂に、じやらくら致さない様に、第一お乗物の先で見苦しい。さりながらとさ、長の道中下々が退屈致すべい。若しぬれなどを企つるとも、目だたぬ様に物陰へよつて、ちよこ／＼／＼、ぬれたがよ／＼おんじやる。目出度、折柄と申し、殊に女中のお供だ。少々の事は見逃しにして、置き召されつちや。「あつ。」と答へて宰領ども、「サア御立。」と催す所に、奥より女中聲々に、「ア、待たつしやれ／＼。氣の毒やお姫様、關東へ往く事は、嫌ぢや／＼と、やんちやばかり御意なされ、お袋様も殿様も、たらしつ叱つつ遊ばせども、どうでもいやぢやとおむづかり、お乳の人の滋野井殿、種々と申されても、夫れ程江戸へ往きたくば、乳母ばかり往きをれと、お乳の人の脊中を、とん／＼と打たしやんして、御機嫌が損ねました。」といふ所へ、肩泣きはがし姫君は、「江戸も東もこちやいやぢや、おれは往かぬ。」と、泣く／＼走り出で給へば、侍衆も下々も御門に驅け出で、家老の外男ぎれこそなかりけれ。お乳の人色を變へ、「これ申し御姫様、下々の子供さへ、九つ十では物の聞きわけ御座ります。あれ見さんせ、百里彼方の山川越えて、白髪かづいた家老殿、皆歴々の侍衆が、迎ひませに參つて、江戸へ御座れば、入間殿の總領嫁御と、傳かれるお身ぢやぞや。お乳の育ての難になれば、女でこそあれ、乳母は腹を切らねばなら

丹波與作待夜の小屋節

大名に生まるゝ種の一粒が、何萬石ぞ幾萬人、腹の内から敬ひて、持囃したる舌鼓、丹波國の一成主、由留木殿のお湯殿子、しらべの姫はお國腹、金水引の初元結、まだ十歳の襦襦も、すらりとしたる生まれつき、東の高家入間殿より、御養子分の約束にて、蕾からとる花嫁御、御迎への諸侍、五千石を頭にて、騎馬が二十騎、稚兒醫者は御興つき。扱大上臈、小上臈、御差、抱乳母、御乳の人、中臈、下臈の供乗物、又者駕籠はいろは付、以上四百八十挺、金、銀、瑪瑙、枝珊瑚樹、研出し蒔繪の長柄の傘、長刀袋、傘袋、時代の金欄、鶴菱、襷、花兔、窠に籠、大内桐、覆ひかけたる挾箱、濃い紅の大紐を、高々と結びしは、盛りの牡丹に異ならず。臺所荷は次傳馬、御葛籠荷物は通し馬、三十駄の馬方の、小歌がなつて小綺麗な、聲のよいのを選られしも、金にあかせし吟味なり。刻限は巳の上刻との定めにて、御迎ひの奥家老本田彌三左衛門、數獻の杯足許はよろくと、猩々緋の道中羽織、白い所は髪ばかり、きんか頭に顔色も、繻珍の裁著凜々しけに、「何とく、御供廻りが揃つたら、お先手から乗り出しめされ。是れさ文左、源五左、身はおさへを乗り申す。萬事夜前申し渡す

姉御に逢ひ、親御の御骨の側にて、羨ましい最期ぢやが、私は父様母様の、悲しい申にも不孝者と、吐られうかと氣に掛り、これが迷ひとなります。」と又泣き出せば、「これく、宵に母御の下されし杯は爰にあり。手に觸れられし物といひ、志の籠つた形身はこれぞ。」と取出す。「ア、有り難い。丈長の伸びた私を、親の心で何時も童と想着て、抱いて寢て下さんした、その心で死にましょ。」と杯肌に手を合はせ、刃を待つたるその顔。「オ、綺麗なく。其方は母の形身を持つ、我は父の骨の側、夫婦親子一蓮の、示しの時刻延ばされず、只今ぞ。」と脇差抜き胸に押當て、「おんあほきや、べいろしやのまかもだら、まにはんとまじんばらははりたや、うん。」と突込む切先の、膽に當れば反り返り、「はりたやうん。」とくり通す、阿囔の息も消えくくと、反つつ返しつ苦しむ聲、姉主従は驚きて走り寄つて、「南無三寶、人殺しくよ。」と呼ばはれども、山中夜中聞く人も泣いて籠へ走りけり。久米之介身を隠し、立歸れば骨桶に櫛を添へて残したり。押戴き三拜し、分けて賜はる骨肉を、一つに返す阿字本不生、阿字の一刀これなりと、咽にぐつと突立てて、死骸の上に法の花、梅と枕を並べける。地水火風の風は山、水は谷水土は又、土砂の功德の眞言祕密、善男子善女人堂、心中かくとぞ聞えける。

ば、切めて死目に逢はうもの、男の身ならば一山を、驅廻つても逢はうもの。女と生まれし悪業は、淺ましや悲しや。」と、聲を上げてぞ泣きければ、夫婦も共に伏し沈み、お梅涙の隙よりも、「親御様をもお誘ひか、但し姉様許りか。」「なうその事よ。父様が去年の冬から煩ひで、この二月の朔日に、六十九にて御臨終、明くる二日に煙となし、今日七日の弔ひを、兄弟一緒に拜まんと、このお骨を持つて上りしに、弟も同じ骨となし、すごく歸つて母様に、何と申さん、定めなの浮世や。」と又灣々と泣きければ、久米之介は我が親の、骨と聞くより氣も亂れ、お梅は一目も見ぬ舅、縁といはうか、因果といはうか、心に含み目に漏るゝ、涙を袖に堰きかねて、「わつ。」と絶え入る許りなり。側に臥したる供の下女、「あれ申し七つの鐘が鳴りまする、善か悪か夜が明けたら知れませう。ア、此方は草臥れて、何が善やら。」欠伸やら、ふらくゝ眠る心なき。「ア、それも左様、御用あるも存ぜず、引留めて長物語、これも他生の御縁でこそ。もし久米が事を聞き付けなされなば、お知らせを頼みます。何れもに別るゝも殊更名残惜しうて、久米之介が臨終の暇乞をする様で、心細うて悲しや。」と、物が知らずる血の由縁、涙すゝむる許りにて、言はず知らせず別れしは、本意なくも三重又哀れなり。堂の小陰に身を潜め、「片時も娑婆に居る内は、見るも聞くも皆罪障。夜明も近づく、この上に如何なる苦しみに身をか見ん、いざ死なう。」と囁けば、「早う死に度う御座んする。さうながら此方様は、餘所ながらも

まいぞ。」と取交す、袂は涙手には珠數、頼めや頼め一筋に、一心頂禮萬德圓滿、釋迦如來信心舍利、舍利々々佛になるとても、又は三途に迷ふとも、一つ廻向の水汲めや、手向の梅の花折坂、辿り越ゆれば曉の、五障の雲に埋もるゝ、女人堂にぞ三童著きにける。若い心の一向に、死んで來世で／＼と、思ふこゝろのがつくりと、「サア著きました嬉しや。」と、勇むは跡の歎きなり。堂の内には我より先に、泊りし女中の眼を覺し、「申し／＼。」と呼びかくる。「あい。」といふのも怯氣立ち、身を抱き合ひて居たりしが、「イヤお氣遣ひな者ではなし。私わたくしは播磨の飾磨にて、成田武右衛門娘さつと申す者、南谷の吉祥院に、久米之介と申す弟を尋ねて、今日の暮方、下人どもを登せ訪はせても、ありとも無しとも知れ難く、坂の籠神谷の宿を尋ねよといふ人もあり。皆様所のお衆か。もし御存じもあるまいか。」と、他人に見なす姉弟、後世の闇路も知られたり。弟は骨肉恩愛の、涙にくれて答へもなく、暫し躊躇ひ居たりしが、「久米之介とは聞きたる人。昨日の晝より俄に大病引受けて、今宵限りの命なりと申せしが、夜明けなば、生死の定説隠れあるまじ。」と、涙をかくす聲つきを、姉はそれとも猶知らず、「さればこそ思ひ當つたれ。このお山の萬年草は、人の命の生死を示し給ふと申すゆるゑ、餘りの事のいぶかしさ、守に入れし萬年草を、あの谷川の水に浸け、久米之介と志し、半時ばかり浸しても、次第に枯れて萎みしが、弟が命あるまいとの大師様の御告か。遙々尋ね來て、昨日にも著くなら

と顔とを摺寄せて、零す涙は自ら、互の口に傳ひ入り、末期の水となりけらし。刃を急ぐ我が命、未短夜の春の霜、羨ましやな朝まで、消え残るか和白妙に、里の夜鍋も時過ぎて、干すや神谷の宿はづれ、生まれ在所の名残さへ、親より殿を思ふぞや。「我は其許の親御の恩、戀と思ひに縛られて、情の絆、縛の繩、不動坂にもさし懸り、死出の山路を越ゆるかと、真心ほそしや卒堵婆谷、此處な塚はと引留め問へば、此處は古の刈萱殿の、しるし繁りし春の草、問うて語つて味きなや。かの刈萱弓取の、猛き心や梓弓、彌生の空の月の前、櫻が下の杯に、開いた花は散りもせで、花の荅に身を捨てし、無常の夜語身の上に、十九十八一盛り、今宵散り行く初櫻、兒が瀧。」とぞ涙ぐむ。「彼へ越ゆればあまの口。去年母様と連立ちて、拜みし事の忘れられず。哀れ佛の御母も、女の罪の捨岩や、それさへあるに我が身の科は、明五月雨に、ほど戀慕はれて、終にな、秋田のよ落水、山は眠りて物言はず、谷の流れよ聲立てて、人に語るなこの姿。私が心を此方様に、隠す事とて持たねども、頼む佛の御名問へば、我をば外の不動様、二親よりも捨て難き、嗚や若木の花の兒、歎き恨みの數々も、二人が上に罰受くる、天竺の山嵐、締めた肌にしみるくくと、サア悲しえ、いとしいふも今の間の、冥土の苦患覺束な。この世からさへ嫌はれて、深く心を奥の院、渡らぬ先に渡られぬ、御廟の橋の危さも、後世のみせしめ蛇柳や、鬼が千疋責めうぞ、責められつ、さいなまる、と離れまい。放す

も恐ろしく、母に知らせぬ足音をば、火を踏む如く爪立てて、顛ひく沓脱まで忍び出で、母、久米之介に嘸きて、「此方は命の亡い人なれど、お梅がなげく不便さに、此方夫婦が料簡で、今宵の命を助ける。お梅は男定まれば、思ひきらねばならぬぞや。これはお梅が飲んだ杯、これを形見の縁切。」と、懐に入れければ、二人は死ぬる覺悟の上、心の中の暇乞、顔は見られぬ暗闇に、ま一度聲をとためらへば、「遅い〜。」と氣を急きて、急ぐは我が子の死を急ぐ。産み出すも母、死なすも母、生死二つの門口を、明けて出て行く先も闇、後も子ゆゑの闇の夜に、迷ふ親こそ 三重悲しけれ。

下之卷

久米之介お梅道行

眞幻や、定業の限りとは、いかに如何なる娑婆ならん。世は何の譬へぞや 逢ひ初めて早三年、影許りの契りにて、夫は野中の一ツ井戸、名は後の世の形見かや 残す形見は親の爲、我はそ様の前髪、長き來世も私がこの、直さぬ額この儘で、見たり見せたり六道の、辻の衢は多くとも、紛れまいぞと夕月は、早入り果てて更け渡る、まだ如月の八重霞、隠れ忍ぶによけれど、顔が見憎の朧夜や、二ツ好い事あらし吹く、木の下露の玉川の、毒の雫も降るならば、身に疵つけず死に度やと、顔

ばお梅が首がないぞ、抜かるな。」と謀し合はして酒肴、下では下人盛り潰し、二階を母の酌人は、怪我あらせじの氣遣ひや。作右は母に辭宜もなく、差いつ差されつ辭宜作法、大杯四五杯引つかけ、「なうお袋、姑に酌とらせ、むやくしいか知らねども、斯う召さつたがよい筈。作右衛門ほどの婿は、慮外ながら取り憎い。久米之介は若衆で前髪はあらうが、おれが様に小判の前髪はあるまい。あの様な奴等が娘子供を咬し、京大坂にもある事、大方果ては心中。ホ、嫌な事、お梅は命拾やる、親御は娘拾やる。おれは杯ひらはう。」と、又三杯引続け、「サア寢ませう。お袋彼方へ往なしやれ。」と、夜著引立てんとする處へ、大石をはたと打つ。「これは。」と驚く頭の上、障子雨戸を打破り、大石小石隙間なく、はらり／＼と三重投げければ、お梅は此處を大事ぞと、久米之介に抱き付き、作右衛門門はひよろ／＼足、「お梅は、あぶない夜著被ぎや。」とたち寄れば、母親燭臺踏みこかし、やれ暗いわ火を燈せ。」と言ふ聲に、與治右衛門、下の火残らず吹き消して、常闇の夜となりにけり。母は這ひ寄り、久米之介が手を取つて引き出す。びつくりするも夢心地、お梅は久米が帯を取り、付いて出づるも闇の夜の、母はかくとも知らばこそ。作右衛門度を失ひ、「お梅は何處に。」「イヤ此處に居まする。」「暗闇で怪我しやんな。お袋は何處へぞ。」「火を取りにでがな御座んしよ。此方様勝手知らずぢや、動かずに御座んせ、私も此處に居まする。」と、聲が残れば母親も、一人と思ひ連れて出る。お梅は後

私がかうして出るのは詫言といふもの。それでも合點ないからは、氣に入らぬであらうまで、田舎育ちの私ぢやもの、何の都の目に入らう。」と、身振もすねて見えにけり。壻はお梅にゆすられ、につこ
と笑ひ、「これ親父、お袋黙らつしやれ。彼が此處へ出てくれて、今の詞で千倍ぢや。頭の上で踊つて
も、去る事では御座らぬ。サア寢所へ。」と手を引けば、二親屋内打ちうるほひ、「ハア目出度いく。
さりながら、まづ此處で杯事。その間にそれく。」と、氣をつけて腕けども、「いやく今宵も四つ
過ぎ、聽て夜半眠る間がない、目出度う閨の杯。」と、寢處急ぐ氣の毒さ。「平に此處で酒盛なされ、
その間に内との者一獻酌めや、酒を酌め。そりや酌めく。」とあがいても、何處へ落さん久米之介、
夜著引被ぎ身を縮め、生きたる心地はなかりけり。壻は蒲團に延し上り、「ヤア誰ぞ寢たやら暖かな。
さらばこの夜著を被て、杯せう。」と久米之介が、臥したる夜著を取らんとす。「ア、これく、此方
様ばかり寢やうでの。とんと二人が一度に寢る。杯濟むまでいかな事、夜著に手をもかけさせぬ。」
と、もたれかゝりし夜著の袖、足を攪り手をしめて、夫に力をつけければ、「一つに寢ようは忝い。
銚子早う。」と呼ぶ内に、夜半の鐘も鳴り渡る。下には夫婦手に汗握り、九兵衛その外小隅へ寄り、供
の者にも酒盛つて、「酔うた時分に臺所の火を消して闇に爲い。二階の酒のしゆんだ頃、祝儀の石を打
込んで、騒ぐ拍子に蠟燭を踏みこかし、どやくや紛れに久米殿の、手を引き門へ脱かさうぞ。仕損へ

親孝行と思はば、必ず死んでくれるなど、まづ斯ういうて留めたらば、よもやとは思へども、若い心の一筋に、恥かしいことばつかりで、若しや死なうか悲しや。」と、知らせの詞一つをも、皆兩方へ架橋の、二階にも聞き取りて、抜いたる脇差さすが又、死にもやられず聲立てず、抱き合ひてぞ泣き居たる。「なう親はどれも變らねど、母の名汗すも雪ぐのも、娘の育ちの善し悪しから。お梅が一期の疵つけば、三十年添うた此方の人に、面皮拭うて添はれもせず、是非に一旦杯して、男の手柄に何時でも、退き去りは世のならひ。子が立つてこそ慾もあれ。屋財家財代なしても、返す物を返さずに置く與治右衛門でさらくなし。母がこの歎きを聞き、お梅が此處へ出るならば、それをしほに和睦して、祝儀を渡して下され。縦ひお梅が我を立てて、座敷へ出まいといふとても、先の小姓も木竹ではあるまいし、まづ行きやくといやる筈。それも聞かねば不孝者。子を一人育つるに、生きる瀬か死ぬる瀬か、七度あるとは稚い内。十七八に脊丈伸び、親に夜の目も寐させぬか、憎いものには世話焼かぬ。子を持つたらば思ひ知らうぞ、恨めしの世の中や。」と、聲を上げてぞ口説きける。久米之介も聞き取りて、「後は免もあれ、親御の心安める爲、涙も拭うて下りてたも、拜むく。」と進められ、口惜し涙ひつしよなく、梯子とんく踏み鳴らし、驅け下りて、「これ母様、いたづらの悪性も、男持たぬ前ならば、いはれぬ構ひぢやあるまいか。それに意地無地いふ人は、放からかいて置かしやんせ。

つた。」と、いふより九兵衛もじりくくと、門の方へ後退去り、亭主もはつと二階を見れば、女房賢く、「いやくく、そのふんでは胡亂な。此方の人、娘が垢を脱かつしやれ。狼狽へて娘一人捨てさつしやるな、これく。」と、膝を突けば合點し、「オ、飲み込んだ。こりや男、雷が鳴つたとて、此方の娘が不義のある證據にはなるまいぞ。如何でも今宵祝言させ、括りつけて往なさねば、雜賀屋の與治右衛門が町へ面が出されぬ。手柄に壻にして見せう。」「オ、おれが身代見掛けては、定めて壻に欲しからう。二十八貫目の銀では、疵のない手入らずの女房が持たる、俺が銀で拵へた、夜著蒲團から取つてくれう。」と、二階へ上れば與治右衛門「腕疾ぢ折らう。」と引下し、上を下へと掴み合ふ。久米之介は脇差抜いて、すはといはばと縋り付き、お梅が「わつ。」と泣く聲も、下には聞かず叩き合ふ。女房中を押し分けて、「此方の人から黙らつしやれ、待つて下され壻殿。」と、彼方を拜み此方を拜み、漸う兩方おし鎮め、かつばと伏して泣きけるが、「都衆とも覺えぬ、物の情の無い事や。これ程まで取結び、サア祝言の場となつて、打破つて此方夫婦、世間が立たうか身が立たうか。男を持たぬ娘子は、誰が身の上は何事の、あるまいと言ひ難し。過ぎつる事に二親が、迷惑するを聞くならば、氣の細い娘なり。先の小姓も堪へかねて、死なうとするは必定。留めに往かる、時宜でもなし。必ず死ぬるな死ぬまいぞ。此處は死ぬる場でないぞ。親に歎きをかけるといひ、その身も無い難受ける事。

商あきなひに、九貫目くわんめのほこりを取り、さきも見えぬ秋買あきかひに、十五貫目くわんめの前銀取まへぎねとり、祝言しゆげんの仕入しにいれに四貫目取よわんめとり、男をとこのある娘むすめを被かつがせて、去きらせて構かまはぬ工面くめんぢやな。此邊こちではまだ流行はやるか、京大坂きやうおほさかでは、その手ての騙瞞もがりは廢すたつた。サア娘むすめの首くびを渡わたすか、二十八貫目くわんめ戻もどすか、二つ一つの返辭へんじを聞きかう。ヤイ一升入いっしやういる袋ふくろは海川うみかはでも一升いっしやう、肩かたの好よい者の仕合見しあはせみよ。杯さかづきせぬ許はつかりで二十八貫目くわんめ拾ひろうた。惠美須ゑみす、大黒だいこくが乗り移うつつた作右衛門さくゑもんをこかさうや、措おいてくれ。」とぞ罵ののしける。與治右衛門よぢゑもん眞直者まなつすくもの、ぐつと急せいて、「ヤア京々きやう々とやかましい。頼たのめたが過すぎる。七十萬石まんごくの下したに住すむ與治右衛門よぢゑもん、氣きのせばいおのれらが蔑あはみとは違ちがはう。銀返かねかやすは易やすけれど、言いひ詰つめられて戻もどしたと言いはる、が口惜くちをしい、娘むすめにも疵きずがつく。サア男をとこのある證據しやうこを出だせ。何處どこぞで糞わらを焚たかれて、銀かねが惜をしうなつたか。慮外りよわい申まうした御免ごめんあれと詫言わひごさせてその上うへで、是非ぜひに祝言しゆげんさせねば、娘むすめの垢あかが脱ぬけぬ。サア證據しやうこを出だせ。」とにちければ、家内かないの上下うへしたしみ凍こほり、二階かいには逃にげ場ばもなく、死しぬるより外分別ほかふんべつの、泣ないっ顫ふるうつ狼狽うろたふる。作右衛門さくゑもん押ししづめ、證據しやうこ々々と涼すずしさうに言いやるな。身みは明日立あすた立つ合點がつてんで、今朝けさから御山おやまへ上あつたが、八やつ時ときでもあらうか、俄にわかに山やまが暴あれ出だして、大雷おほがみなり雨風あめかぜ、一期いちごに覺おぼえぬ怖こはい事こと。さる寺てらへ驅かけ込んで、様子やうすをつぶさに聞ききたれば、南谷吉祥院みなみだにきちやうあんの小姓こしやう久米之介くめのすけといふ者と、雜賀屋さいがやのお梅おむめと數年すねん密通みつつうして、山やまを穢けがしたその祟たふり、それ故今追ゆゑいまおひ出いさるゝと一山いっさんが見物けんぶつ、後姿うしろすがたを俺おれも見た。飛脚ひやくやくの様な奴やうなやつが供ともして籠かごへ下

た。今宵の物いり仕拵へ、此方には一文入れさせず、娘を裸で受取る壻は、世間に些とありかねる、なんと九兵衛」といひければ、「イヤ久米之介様も小判の事は請合はれぬ。お梅様を裸でならば、鬼に鐵棒で御座りましょ。」「コレ阿房な事は言はずとも、壻がおぢやるか出て見よ。これお梅、久米様二階へ連れまして、新しく出来た寢道具を見せましょ。こりや女子ども、肴を鼠に引かるゝな」と、鼠の用心しながらも、二人二階へ上げたるは、これこそ猫に鯉魚なれ。二階には、もと渡りの大紋緞子の夜の物、二つ枕の總付を、妬ましさうに久米之介、「ム、京の男と、この枕を並べて、この夜著を被て、二人しつほりと寢さんしよの。ア、ひよんな物見せて、又泣かせて下さるか。」と、ほろ／＼涙を流しける。「エイ嫌がらす様な事聞き度うない、京の奴と何の寢よ。今夜中に連立つて走るぞえ、胸を極めて下さんせ。この夜著蒲團に今の奴が寢くさる筈、エ、嫌らしい煩さや」と、踏みちやく／＼くつて擲け投り、「これは又私のが、新しい寢道具、祝うて寢初めて欲しけれど、人が来うかと氣遣ひな。ア、辛氣や」と、覺みし夜著にもたれ合ひ、誰も勿來のせき心、花のお梅に蠶の、人來と厭ふわりなさよ。時に美濃屋の作右衛門、小僕を連れてつゝと入り、與治右衛門が髻を取つて引寄する。女房始め下々も、「これは聊爾」と取付くを、「寄るなく」と撲ち拂ひ、取つて引拵ゑ、「こりや與治右衛門。京の者を購立したら返報を食はう、用心せい。親代々の得意で二十年以來、二千貫目足らずの

何として、呼びに遣りたい處へ、能うこそく、まづ内へ。鼻、久米様が御座つたぞ。暮れたに何故に火は燈さぬ、お梅が祝言常とは違うた、二階は蠟燭、庭もお上も、燈心を掴み込んで赫々とやれ。」と、勇む處へ母親は、形振を心得難くや思ひけん。「何時の間に九兵衛は、此處へも寄らず山へ往て、お梅が祝言聞いてお出でなされたか。」と、不審相なる顔色を、九兵衛見て取りつゝと出で、「久米様のお仕合、未だお聞きなされぬか。お國の親御御隠居で、跡目をお繼ぎなさる、筈で、私も在所から早飛脚に雇はれ、打通りに上りました。日頃の懇暇乞の爲、一寸つれて寄つてくれ。祐辨様もおつつけ其處へとある事、今日からはこれ七百石の御世繼。旦那様物は談合、お梅様の御祝言まで杆なされぬさき、彼方を變改なされて、久米様へ進ぜられまいか。私やお爲申します、祐辨様も大方その御心と見えました。千貫目持ちても商人は、一時の損が知れませぬ。照れ降れなしに七百石、すればお前もお手柄、雜賀屋の壻殿が、ひんく跳ねるじやく馬に乗つて、娘御は金物の乗物に乗らつしやる。サアしやんと打ちませう。」と、手を廣けても、「イヤまあ打つまい。」ハテねちみやくした。そんなら舅姑御夫婦も乗物やじやく馬。」と、乗せてもいかな乗らばこそ。「いやじやく馬は馬連、牛は牛連、今日祝言する壻殿は、京三條烏丸美濃屋の作右衛門、お梅を欲しいばつかりで、年々の殘銀九貫五百匁、百六十兩で帳消して、この秋の買入に、紅の花の様な小判二百五十兩、先へ預けて置かれ

今朝からとんと死んで居たわいの。」と、絶り付いて泣きにけり。「オ、そなたは氣が死んだか。私は叩かれ引摺られ、身も心も死にまする。諺ならこれ。」と、手を取つて袖から、「脊中がハアたんと腫れてあるわいの。鬢もそけた、顔も泣いた顔ぢや。こりや如何ぞいの。」といりわりも、言はず知らず泣き居たり。九兵衛不祥な調子にて、「エ、兎相なお梅様。文を封じ違へて、久米様への濡文が、法印様のお手に入り、何が日頃法印様、眞言陀羅尼讀んだ目で、くどくは御見思ひまるらせさふらふと、讀んで婆羅僧揭諦を立て、ほじそあかなる顔付。念者坊の祐辨様は、踏み殺すとて熱えさつしやる。一災起れば二災起る。お國からは弟の敵ぢやとやら申して、理窟臭い侍が脊打を喰らはする。弘法大師御入場八百年以來の一山の騷ぎ、飛脚の詮議もあるさうで、私は据つた膳箸も取らずに隠れ居る。その間にお山が暴れて来て、天狗殿が鼻を怒らかし、大雨、大風、霹靂、大事の山を久米之介が穢したと叩き出されて、かくの體にて在す。お二人の御蔭で、煙草入を落しました。中に頼母子の懸錢七十四文あつたもの、定めて狗賓に擱まれたで御座らう。正眞の天狗頼母子ぢや。」と、ぶつくさ言ふも道理なり。「オ、その様な事内へ沙汰してたもんなや。山は暴れても崩れても、久米様に逢へば嬉しいく。こな様嬉しうないかいの。ちと笑うて見せて下さんせ。」と、いうても後前思はれて、泣顔見ゆる不便さよ。親は「お梅よく。」と、門口見遣りて、「誰ぢや。ヤ、久米様か。九兵衛これは

み、「急な事いうて下さんす。杯ざへ延べて欲しけれど、親のかうけん是非なうて、如何なりともと言ひました。京上りは先づ待つて、氏神へも参りたし。阿房でも兄は兄、花様にも知らする筈。日頃懇切あそばして、お守よ御符よと、御恩を受けた祐辨様。お山には未だほかに」と、その人の名は言ひ兼ねて思ふ邊をかすらする、これも思ひの餘りかや。母親もうち首肯き、「オ、それも左様ぢやが此様な事、懇な方へ知らすれば、驢の祝儀のと、厄介かけるが迷惑ぢや。兔角壻御の心次第。サア御座れ。」と、納戸へ入れば、奥治右衛門、「これ唄。壻の供の者ども、これの内の奴等にも、何がしに三百宛、お引をやるが合點ぢや、筒ごかしの顔でつらりと九文十文づゝ、百の口を抜いて置けや。」「ハテ此方もあんなまりな。お梅が一世一代に何が惜しいぞ。やつぱり九十六文で、百宛遣つて置かしやれ。」と連れて納戸に入りにけり。お梅は稚き時よりも、甘やかされて二親に、我儘言ひしならはしも、心に疵を持ちたれば、いぶりもならずねられず。「ア、九兵衛は何故遅いぞ。久米様の返事は。」と、そろく表へ出でけるが、女子丁稚が口々に、「ようお梅様、晩には立聞いたしましたよ。京のおか様にならつしやる。」と、黝られても浮々せず、「ア、なに言やる。京へ往こやら冥土へ往こやら、知れた事か。」と門に立ち、坂を見上げて居る所へ、久米之介は頬冠り、九兵衛も投首して、辻へ見ゆれば走り寄り、「なう能う來て下さんした。文にいうてやる通り、京の奴めと今夜杯する筈で、私が氣は

殿、妹が事は氣遣ひさつしやんな。此方の居所知れるまでは、おれが女房に持つてやる。」と、聞くも苦しき名残の山、鬢も髻もひき亂れ、涙亂れて目も暗く、「さらば」とふり返り、啼く音もかる、鶯や、お梅に通を失ひし、久米が心ぞ三重あはれなる。

中之卷

逢はぬ昔の白紙も、忍び重ねて厚紙を、人に裂かる、横紙に、袖濡紙の漏れやすき、浮名やばつと鹿紙の、嵐に脆き鼻紙や、まだ十七の懐子、名さへお梅は氣もすしや。親與治右衛門、活々として外より返り、「お梅が祝言いよく、今宵に極まつた。今朝いひつけた通り、市介、傳九郎鎗をかけ。夏よ雑煮の用意を爲い。竹膳立も綺麗に爲い。壻殿は京烏丸の人なれば、黒椀が好からう。塗杯は入らぬぞ。年の往かぬ娘ぢや、土器を三寶に、口取は炭斗昆布、肴は鰯、車海老、熊野から貰うた鹽貝があらう。ヤ鹽貝の次に女房どもは何處に居る。」と、うれしがるのも親心。「おへ様は中二階に、お梅様の髪梳いて。」といひければ、二階の口まで駆け上り、「こりやく宿老殿へ往て談合した。みな内證勝手づくの祝言なれば、廣めは重ねて下つた時。今宵杯濟んだらば、娘は最早壻の物。とんと先へ渡いて女夫連で、明日早々上して退けいと言はる。」と、きほひ掛る親の顔、見るよりお梅は涙ぐ

い」と、さすがは武士の神妙な。久米之介、「わつ。」と聲を上げ、「只今の脊打も、打つて打たる、身の報い、恥辱とも思はねども、山の名残に、法印様の御機嫌損ふ悲しさと、二世と頼みし兄分を、袖にしたとの恨みの詞、悲しうてく死んでも迷ひとなります。疾くに髪を剃つたらば、この悔みもあるまいもの、坊主頭のすけない顔、兄分に見せる悲しさに、せめて二十歳を越すまでと、鬢を撫で顔つくり、身躰が身の敵、お梅に思ひ初められた、これも前世の因果かや。お梅に逢うて斷り立て、縁を切つて來ましたら、元の様に懇に可愛がつて下さるか。」「おんでもない事、女と縁さへ切つたらば、身にかへても法印様へ、詫言申して懇せうが、實縁を切らずば、大師の罰を受けうといふ誓文を立てうか。」「如何にも誓文立てませう。」「サア立て、サア何と。」「エ、此方は切らうと思へども、お梅が合點せぬ時は、なんとしませう悲しや。」と、かつばと伏して泣きければ、「それその心のつくこそは、罰の當つたしるしぞや。はや出て失せう。」とどうど伏し、共泣するこそ道理なれ。その隙に法印、以前の文を取り出し、「山に置くは穢らはし。持つて失せう」と投げ付け給へば、恥かしさうに密と取り、肌懷に入れけるが、男女破戒の御咎め、俄に吹き來る天狗風、岩も枯木もどうくく、震動雷電雨霰、天地一つに黒雲覆ひ、長夜の闇とぞ三重なりにける。「すは一山の大事なり。不動坂まで追ひ出せ。」と、下僧下僕が小腕引立て、「棒よ杵よ。」と奪いたり。さすがよしみの花之丞、「これ久米

皺しわの寄よつたこの法印ほふいんを、梅干うめぼしに譬たとへたか。師匠ししやうと思ふな、弟子でしでもない。あの御使者おししやの手てにかゝり、死しなうが生きようが構かまひない、あれ引摺ひきずり出せ叩たたき出せ。十一じゅういちから教おしへた經文きやうもんも眞言しんごんも、魔道まどうへ捨すてたか勿體ちつたい。」と、腹立はらだち涙なみだにくれ給たまへば、久米くめ之介のすけは伏ふし沈しづみ、ありあふ小姓こしやう同宿どうしゆくも、側そばから何なんと千右衛門せんゑもん、呆あきれ果はてたる許あかりなり。祐辨いうべん律師りつし走り出いで、久米くめ之介のすけが袴腰はかまこし、破やぶる、ばかりに踏ふみ付けく引ひき起おこし、齒齧はがみをなして涙なみだを流ながし、「エ、見損みそこなうた倅奴せがれの。その根性こんじやうとは夢ゆめにも知らず、兄弟はろがらの契約けいやくの懇ねんごろしたは何事なにごとぞ。雜賀屋さいがやにはお梅おむめといふ若い娘むすめもある程ほどに、出入でいりするには行儀ぎやうぎが大事だいじ、浮名うきなばし立てられな。若衆わかしゆのたしなみこれ第一だいいち、兄分あにぶんに恥はぢかかすなと、起居たぢるに言いうたを忘わすれたか。これ千右衛門せんゑもん殿どの、今いままで愚僧ぐそうが存ぞんぜしは、彼奴かれめは敵持かたきもつたる身み。若もしも覗ねらふ人ひとあらば、拔刀ぬきみの下したへ此この法師ほふしが、驅かけ入いつて討うたれんと、一命いちめいやつたる中なかなれども、只今ただいま懇切こんせきの上うへは、金胎こんたい兩部りやうぶの大日だいにちも御照覽ごせうらんましませ、不便ふびんとも存ぞんぜず。御舍弟ごしやていの敵かたき、サアお手てにかけられ。」と、座敷ざしきの下したへ取とつて投なげ、「俗あその女をんなを慕したふより法師ほふしの身みにて少人せうじんを、思おもふは幾千いくせん優まさるぞや。その兄分あにぶんを袖そでになし、志こころざしを無下むじやにした。憎にくや無念むねんや淺あさましや。」と、氷こほりの樣やうなる眼まなこより、涙なみだをはらくとぞ流ながしける。千右衛門せんゑもん續つづいて下おり、「心こころないには似にたれども、寺てらを出いつれば弟おとの敵かたき。討うたでは武士ぶしの道立みちたたず。」と、するりと抜ぬいて脊打むねうちに、四よつ五いつつ丁ちやう々くと打うちつけ、「これからは死ししたる人ひと。この方遺恨ほうゐこんなきうへは、心次第こころしだいに師弟していの中なか、何卒なにとぞ挨拶あいさついたした

右衛門とは身どもが事。その頃は數年の在江戸、後日に聞けば、殿よりは切腹との御評詮、父母が料簡にて、子の可愛いは同じ事、親達へ歎きをかけ、討たれし者の爲でもなし、出家させて、稚い者の後世弔はせんとの扱ひにて、我が親どもが命を助け、當山へは登らぬか。一人の弟が死骸をも見ぬなつかしさ。せめての形見にその方を一目見たさに、此の度のお使を望み受け、小姓衆の名を尋ね、久米之介と聞くよりも、弟があらば今年は十八薔む花、つれなくも討つたかと思へども、改めて恨みを言はん様もなく、仇を恩なる出家して、後世を助けてくれるかと、思へば形見の心地もする。恨めしいとのかしいと、未練の涙をこぼしたが、口惜しいぞ久米之介。たとへ親の敵でも出家は格別、在家となれば見遁し置かれぬ弟の敵。この山が下り度いとは、それこそ望む處。籠に下つて八年以來鬱憤を散せん。法印にことわり申す爲、御意を得ん。」と立つ處へ、法印驅け出で、「様子詳しく承る。やれ若衆奴、おのれは未だ髮こそ剃らね、九字護身法傳授して、禮拜加行を勤むれば出家も同然、殊に大師以來結界清淨の御山、假にも女犯の穢れがあれば、一山暴れて震動し、其の身は狗賓に五體を裂かれ、木の枝に懸けらるゝは、目にも見せ話も聞かう。それを知つてこの寺を、能うもく穢したな。國許の親から珍らしい文を得た。この年になれども、思ひまゐらせ候べく候。御けんの如く二世三世、くされくと血判を据ゑた、小舌たるい女子文、手に觸れたは今日始め、梅よりとは誰が事。

ついしか割つて見ませぬ。無念な事。」とぞ眞顔なる。使者も返答しかぬれば、傍輩は笑止がり、「これ
 しいく。」と袖を引く。久米之介はお梅が噂、聞くにつけてもかの文の、法印の手に渡り、今や詮議
 のあるかとして、思ひ痛める胸の中、釘を打たる、八寸の、給仕も更に手につかず、目に涙持つばかり
 なり。使者重ねて、「御自分はお年嵩と見え申す。お名は何と、生國は。」と問ひければ、「我らは播州飾
 磨、成田武右衛門が倅同苗久米之介。」「ム、さては同國武右衛門子息、高野にあるは此方か。」と、見
 上げては泣き出し、見下しては涙にくれ、打萎れて見えなければ、身に思ひある久米之介、心使りも無
 き折柄、故郷の人の染々の、涙に絆され側に寄り、「一見に馴々しき事ながら、同國のよしみと申し、
 御落涙の様子、御心底の優しさを、推し量つて頼み奉る。私事此の山に、一夜も足を留め難き身
 の難儀出来致し、幸ひ國より迎ひも参る。詳細の事は麓にてお物語いたしません。お詞を添へられ、
 法印より暇を取り、今日中にこの山を連れてお出で下されば、生々世々の御恩に受け、命の親と存じ
 ませう。」と、身の置き處なき儘に、粗忽の無心も戀路故、若氣ゆるこそ是非なけれ。使者膝を立て直
 し、「これ久米之介。お主が山へ登つたは、末は出家の筈なるに、今この山が出度いとは、還俗したい
 心よな。ヤレ出家する因縁を忘れたか、恨めしい。お手前十二歳の時、傍輩は伊吹重太夫が二男、卯
 之介といふ十一になる友達と、雞合はせの友達喧嘩、敢なくお主が手に掛つた卯之介が兄、伊吹千

山に石碑を建て、日牌を供へ申すにつき、祠堂銀五百枚奉納いたされ候。御受納あつて末世末代、不退轉の御廻向頼み存じ候。」と、包の白銀目録添へて渡しければ、「武門の御身に、御信心御孝行の御追福、感じ入り候。それ我が山に卒堵婆一本残せし人は、五十六億七千萬歳の後、彌勒の出世に逢はせ給はん御誓願、などが疑ひ候べき。先づ此の銀子の請取認め申さん。」と、法印奥に入り給へば、豫て用意の勝手より、銚子杯重箱や、はや吸物の椀折敷、善盡したる馳走なり。御住の弟子祐辨律師を始めとして、納所、同宿、入り替り立ち替り、「山中と申し、風情はなくとも御時分好し。お吸物でもお代へなされ。それ小姓衆相手になつて、御酒一つ。緩りと上つて下され。」と、あひしらへば、愛嬌の小姓は、「お相。」と色めきける。使者も數獻を傾け、「さて、御器量なる小姓衆、いづれもお名は何と申す。御生國は何國々々の御方ぞ。仰せ聞けられよ。」といひければ、「我等は有村主膳と申す。當國田邊の者。」「私は世嗣八彌と申す。大和の者。」「身共は伊賀の上野の生まれ、小栗右門と申す。」「私はこの麓神谷の宿、雜賀屋の花之丞、年は十九で法印様の御内儀。私が妹にお梅と申して、すんど伽羅めで御座れども、惜しい事は女子で、坊様の口へ這入りませぬ。私が顔は花の様で、花之丞と申します。妹をお梅といふ譯は、如何した事か知らねども、あの梅といふものを、此方は割つて見さしやつたか。中に平たい物がある。此方のお梅の中にも、それがあるやら無いやら、

無い。外の者に添はせては、生きて居られぬ二人の中。親の命とあるからは、法印料簡ないととも、暇請ひ捨て出でやすし。先づ文見ん。」と封じ目切り、讀まんとすれば南無三寶、上包はお梅が文、久米様との名宛にて、中は吉祥院法印様參る。成田武右衛門、親の文。「ム、さては聞えた。お梅が常々男手を能う書く故に、國許の狀をも人頼みするなど、下書書いて渡せしが、斯く忍んでする事として、封じ違へて我が文が、法印の手に渡つたか。これはく。」と色違へ、立つても居ても仕方なく、狼狽へ廻る打柄に、主膳立出で、「これく飛脚、法印直に問ふ事あり。先づ休息召されとの事なり。」と言ひもあへぬに久米之介、「なう主膳殿。最前の文を法印様は、はや御披見なされたか。封じ目お切りなされずば、密と取つて來て下され。一期の御恩。」といひければ、「イヤその狀は、法印様繰り返し披見あり。反古棚へ入れ錠下し、手が汗れた勿體ないと、跡で手水をなされたが、如何なる狀で御座るぞ」と、問へども譯は話されず、はつと許りに胸躍らし、詮議に逢はば如何せうと、飛脚の九兵衛が心まで、細谷川の丸木橋、ふみかへれとぞ祈りける。時に麓の山どよむ。木遣に法の、「ひんよえい。」聲播磨路の大名より、御募引くこそ三重殊勝なれ。則ち宿坊吉祥院、僧達立合ひ、石塔請取り給ひければ、使者は座敷に直りける。法印聽て出で迎へ、「遙々のお使者御大儀々々々。いざくこれへ、それお杯、お茶持て參れ。」と挨拶ある。使者の侍殿懃に、「旦那が妣母第七年に當りしゆゑ、御當

し。といひければ、「いや別儀にてもなく、御老體の武右衛門様、御隠居の願ひにつき、久米之介を呼
び戻さんと、御一門の談合極まり、法印様への御狀段々の御口上、兔角は首尾よくお暇の出る様に、
御傍輩様達へも頼みませとの御使。」と、文取り出せば久米之介、「これは思ひ寄りぬ事。父が老後の大
望を、違背ならずといひながら、我が口からは申されず。何れも傍輩言ひ合はせ、お暇の出る様に、
執りあはせ頼みます。狀も進せて好い様に、いづれもに任する。」と、手を合はすれば人々も、「心一ぱ
い申して見ん。」と、一度に、座敷を立ちけるが、花之丞ふり返り、「これ久米殿、お暇貰うていなしや
らば、糠袋はおれに下され。巾著にして穴一の粒入れます。」と打連れて、皆々奥にぞ入りにける。飛
脚はそつと側に寄り、「申しお國からとは偽り。雜賀屋へ出入いたす、岸の和田の九兵衛と申す駕籠の
者、お梅様のお頼みで、密かにお話致せとある。かの御存じの京の紙屋、この中下つて逗留し、二三
日中に祝言し、其の明くる日お梅様を京へ連れて参るとて、内方にも御用意。兔角お前が片時も早く
山をお出でなさるゝと、何處ぞへ一緒に立退くか、分別もある處。それ故内々約束の如く、お國の親
御の偽狀で、お暇取つて今日中に、久米様連れて来てくれと、いとしほやお梅様、涙を流し手を合は
せ、お頼みなされた手前もある。何卒お供致したし。詳しい事はお筆に。」と懷中よりお梅が文、取り
出してご渡しける。久米之介も心せき、「成程々々其の筈。其方も知つての上なれば、隠す事は少しも

れから身持になつたやら、ほてれんぢや。」と腹摩り、傍輩は皆小小姓の、顔を赤めて挨拶せず。久米之介は年嵩にて、「なう花殿、笑止な事いふ人ぢや。これに御座る主膳殿、八彌殿、右門殿、年は三つ四つ下なれど、此方の心が足らぬゆゑ、黻られて居さつしやる。此方は他國者なれば、當地では此方の里を頼みにして、一家同然の此方を笑はせて本意でない。この久米之介が居る内は、侮らせはせまいが、おつつけお暇申し請け、國へ歸つたその跡では、高野一山の黻り者。少と嗜んで下され。」といへばむつと腹を立て、「鈍な事言やんな。法印様の女房が法印様と竝んで、善哉餅食うて孕んだがをかしいか。コレ忝くも、おれが親は、神谷の宿で隠れもない、雑賀屋の奥治右衛門、母様と一つに何時も物を食やるで、おれも生まれる。お梅といふ美しい妹まで生みやつた。其方も何時も此方へ来て、妹のお梅と二人土藏へ這入つて、善哉餅を食はしやるやら、お梅が聲で味い〜というたを、おりや聞いたぞ。」といひければ、久米之介は赤面し、残りの傍輩は口々に「賢い人の言ふ事を、氣にかけてははてがない。さりながら正直な法印様の、お耳へ入りては言譯ならぬ、小姓仲間の恥辱なり。沙汰しやるな。」と制せられ、六尺どもも聞き流し、「阿房に油斷は尙ならぬ。」と、目まぜしてこそ入りにけれ。稍ありて表より、「成田久米之介様に逢ひ申したい。お國の親御武右衛門様よりの飛脚なり。」と、若黨一人刀の先に、文箱附けてつゝと入る。「ム、久米之介とは身が事。國許よりの使とは氣遣は

高野山 女人堂 心中萬年草

上之卷

唄女嫌うたんなきらやる高野かうやの山やまに、なぜに女松めまつは生はゆるぞや。なぜに女松めまつが生はえまいならば、夜よ這星はびしでも飛とぶまいか。松まつより梅うめより柳やなぎより、お寺てら小姓こしやうの兒櫻ちこぎくら、兒文殊ちごもんじゆの御相傳ごさうでん、大師だいしの廣ひろめ置き給たまひ、俗みやくも尊たつとむ若わか衆しゆの情なさけ、衆道しゆだう祕密ひみつのお山やまとかや。南谷みなみだにの吉祥院きちやういんに、播磨はりま大名だいなみの使者しやありとて、庭にはの掃除さうじの下僕しもをとこ、小姓こしやう衆しゆは客殿きやくでんの、牀とこに掛物かけもの臺子たいすの埃ほこり、掃はいつ拭ぬぐうつ忙いそがしさ。「これ長助ちやうすけ、關介せきすけ、掃除さうじが大方おほかた出來きたらば、不動坂ふどうざかまで一走りひとほし、御使者おししやが見みえるか見て戻もどりや。急いそぎやくく。」とありければ、「いやそれは餘よの者遣ものやらしやりませ。私わたくしどもは皆々みなくさま様の髪かみを結ゆはねばなりませぬ。寺方てらがたのお小姓こしやうは、俗みやくの内儀ないぎと同じ事こと。法印ほふいん様の奥様おくさまの、髪かみは結ゆはずに濟すみますか。」と、洒落しやれをまうけの顔かほひねて、足たらぬ心こころの花はな之丞のじやう、「ム、左様そんなら此方こちは法印ほふいん様さまと女夫めをとか。エ、在所ざいしよの父様ととさまや母様かゝさまは諺うそつき吐つぢや。山やまへ登のぼれば魚食ととくふ事ことがならぬ程ほどに、豆腐とうふや蒟蒻こんじやくを、鯉たひや鱧はむぢやと思おもうて食くへ。山やまの芋いもを鰻うなぎと思おもへ。法印ほふいん様さまを親おやと思おもへとばつかりで、女夫めをととは聞きかなんだが、ア、思おもひ當あたつた。一昨日をと、ひのお日待ひまちに、法印ほふいん様さまの相伴しやうはんで、善哉餅ぜんざいもちを十三杯じふさんはい、そ



れば甲斐もなし。去年一度に死したりと思召しきり給ひ、歎きも悔みも御留め、只佛壇にさし向ひ、夫婦の御廻向あるに於ては、六尺屏風の隔てもなく、眞直に受取り、先だつ妻の跡繼となり、共に三途のかは葛籠、一荷に手を取りうち渡り、西方淨土に一文字、越ゆるは下品下用櫃、忽ち上品膳棚に到らんと、思へば最期急けども、返すくも伯母御様、御名殘惜しき椀家具、法界行器の御廻向偏に頼み奉る。南無阿彌陀佛彌陀佛と涙を染めて書き留む。毎日評判朝暮の供養、佛法繁昌の廻向を得るも、その身の果報と承る。

卯月の潤色 終

ば、御菩提を弔ひ奉るこそ、順とも孝とも申すべけれ。去年はお龜が憂へを見せ、今年是我等が歎
 きを掛け、お心を苦しめ申す事、罪に罪を塗長持、孝行の元直に外れ申すなり。さりながら子弟主從
 父子夫婦、五倫の親しみ何れ愚かは無き中に、妻となり夫となり、偕老同穴の枕屏風、鴛鴦の襖障
 子、疵も破れもなき契り、今捨賣にはなり難し。殊にお龜と我等事、從弟同志の水入らず、鼠入らず
 の竹戸棚、釘も離れぬ中といひ、去年最期の折からも、一緒と思ふ頼みにて、二十歳に足らぬ女の身
 清く相果て候ひしに、我等思はず存命し、六道の辻に只一人、今やくときこそ待ち兼ね申すにや、
 現に現はれ夢に見え、幻に來り歎く様、見る度毎に片時も、生存へて有る心、思ひ遣らせ下されと
 よ。今は此の世に亡き妻を、二度娑婆に掘出しする、小道具屋の身にもあらず、無常の風の荒道具、
 身蓋揃はぬ離れ物、浮世の直打更になし。輪廻の塵の置き古し、無明の夜市に賣り下けられんよりは
 と、今宵亡妻の忌日を期して、去年お龜が死したる剃刀、縁と縁とを合砥にかけ、二十二歳一睡の夢
 を拂つて、清月己が眉間に施し、今月今日剃刀の刃に滅し畢んぬ。悲しきかなや娑婆に親、伯母、冥
 土に妻、未來に情理世に慈悲、中に憂き身を挾箱、何時の世にかは一對の、一つ蓮に生まるべき。こ
 れも因果の車長持、轟く穢土は假の宿。有漏路、無漏路の中休み、割籠辨當茶辨當、剥けぬ間の戯れ
 なれば、誰か端に残るべき。縦ひ此の度生存へても、重簞笥の抽斗の、一重足らぬ如くにて、お龜な

下之卷

助給書置

古道具屋與兵衛入道助給、末期に親、伯母の御方へ申し残す書置の事。つらく思へば老木返つて春を迎へ、蓄める花の先に散る世のならばし、かたちの長持、嫁に傳はり出来合飯櫃風呂の下の霞となる。老少不定の境、會者定離の掟、末世一代教主の如來も、免れ難しと思召せ。それ一河の舟に棹をさし、一樹の陰の合宿りも、他生劫の縁と聞く。況んや親となり子と生まれ、伯母と言はれ甥となり、一日養育の御恩は、蘇迷廬の山より尙高しとこそは承る。況して他年の御面倒、譬へを取るに物なし。殊に去年五月の十七日、不慮の御難儀かけ商ひ、命を捨つる身の損銀を、他目には榮耀者。呆氣者氣違者と、人の譏り世の嘲り、親伯母の御歎き存ぜぬ我にも候はず。然れども生きて居られぬ心の中、今更申せば人を損ふ毀ち家の、立つ方もなき夫婦の者、涙で暮す朝夕は、湯水も喉に錠前の懸硯の海かへ干しても、書き盡されぬ我が身の上、二人が胸に埋れ木の身にならずして、誰人か推量には及び申すまじ。其の節お龜諸共に、相果て申す程ならば、二度の歎きは掛けまじき。とても助かる程ならば、生存へ出家成就して、御恩の伯母様情の親、百年の御壽命過ぎ、目出度く往生あそばさ

受け、堅牢地神は大地を破り、奈落到に沈め給ふべし。罪業深きこの身體。」と我と我が身を搔き抓り、
 食ひ付きて聲を上げてぞ泣き居たる。や、更け渡る野寺の後夜、八聲の鶏も啼き交す、明方も近づき
 たり。後れじものと位牌に向ひ、「これお龜、去年の五月に伯母御より、緋縮緬を下されて、御身と我
 が肌廻り、自害の恥を隠したり。時しもあれ今宵又、白縮緬の紵帶、これも二人が申し受け、永き形
 見と身に附けん。我も受取る受取れ。」と、位牌のひれに結び附け、端を左手にしつかと絡み、斯う持
 つたる心こそ、最期は後れ先だつとも、手に手を取つて行く道は、只一筋の白縮緬、のばさぬ時刻只
 今と、剃刀取つておし當てしが、「ア、思へばく、名残惜しの伯母御様、身を達者に長生し、後世弔
 へとて只今も、お藥までも下されし、志を無下になす、御恨み御免あれ。神も佛も御慈悲に、我等
 を地獄に沈めても、伯母御の二世を助けてたべ。南無阿彌陀佛。」と剃刀を、咽にがばと突立てて、笛
 のくさを刎ね切つたり。まだ死にかねて目眩く。苦痛はせじと押取直し、人脈筋を四つ五つ、聲を
 掛けて刺し通し、「うん。」と許りにかつばと伏し、反つつ返しつのためを打ち、苦しむ中にも妹脊のし
 るし、お龜が位牌に抱き付き、むかはり待たぬ花橘、昔の人と短夜の、雲隠れして世の人の、袂し
 をる、藻鹽草、書置に名を残しける。

いてある。洗足して休息あれ。」と、いひつゝ、筆を早めける。道心何の氣も付かず、「オ、構はずと遊ばせ。扱石山の繁昌、京大坂がうちあける。ヤア夫れに付き戻りがけ大坂へ立寄り、此方の里へ見舞うた。在所にも何事なく、長兵衛殿もお息災。立賣堀の伯母御から懇の言傳、進上物を渡さう。」と平包おし開き、「來月の十七日はお龜様の周忌、供物になされてと、これ菓子に二袋。お齋でもなされうばと、大坂の名物樋の上の切荒布、嵩高な許りで錢安な物なれど、これ齋にも非時にも重寶な一分が二つ届けます。梅雨も近づくと土用前、喉の疵が發つたら、この藥を參つて、隨分命延ばはつて、伯母様の後世菩提頼むとある言傳。これは又白縮緬のしゆきん帶、衣の上に宜からうと、氣の付いた伯母御様、必ず疎かになさるゝな。幸ひ文の次手なり、皆々慥かに届いたと懇に遊ばせ。愚僧も一宿仕り、様々御馳走忝いと、一寸入れ筆頼みます。言傳どもは明日。長道中の草臥、我等は最早休みます。」と、我が事許り言ひ仕舞ひ、奥に入りてぞ臥しにける。この間に助給は、書置細々と書き納め、伯母よりの贈物、一つに取つて押戴き、位牌の前にも供養して、暫し絶え入り歎きしが、扱も扱も有り難や。益にも立たぬ甥一人、ある時は氣を痛ませ、心を盡させ身を碎かせ、苦勞の上に苦勞を掛け、一口盡せし孝行なく、不孝第一の某を、勘當不興も仕給はず。如何なる合縁奇縁にや、親も及ばぬ御厚恩、送りもやらず自害して、又もや歎きを掛けん事、不孝の上の不孝の科、日月の怒りを

の原や、伏屋に立てる我が妻の、位牌に隠れ消えにけり。「ヤレお龜女どもお龜く」と尋ねれども、山彦許りに姿もなし。「ま一度顔を見せよかし。つれなの人や」とかつばと伏し、消え入りく歎きしが、漸うに正氣つき、「ア、狼狽へたり南無三寶、思へばお龜は死したる者。扱は魂魄止まつて、まざまざ詞を交せしか、不便の者の心や」と、又咽び入るばかりなり。「エ、口惜しや淺ましや。去年一緒に死ぬるならば、迷ふとも共に迷ひ、浮むと共に浮むべし。つれなくも死に後れ、中有の闇に迷はせし、今出家とはなりたれども、知識智者の身でもなし。文盲不學の青道心、念佛廻向なしたるとて、亡者の功德によもならじ。今日は卯月十七日、この命日の明けぬ間に、今宵の中に自害して、來月のむかはりは、未來で一緒に付添はん」と、胸を定めて死を急ぐ。戀しき人は先にあり、この世に残す心はなく、涙も溢れぬ死用意、無慙といふも愚かなり。「ヤア待て暫し、大坂の伯父、在所の親、恩深き伯母のあり。狂亂したりと歎きをかけ、不孝の罪も恐ろしや。一筆づゝの書置を残さばや」と、佛前の經机引寄せて、油も細き燈火の、消ゆる間近き我が命、心あまりて事足らぬ、筆のすさみぞ哀れなる。かかる所に相住の道心、石山より立歸り、「何と助給御無事なか。今下向致した。やあえい。」と平包、どうど下して休みける。助給はつとおもひしが、イヤ此の坊主は、いろはのいの字も讀み書きならぬ幸ひと、「まめで下向羨ましい。今にいかい参りか。在所の文を書きかけたる間に、温湯も沸

の住居でも、女房がなうてはちつと事が缺けませう。鍋蓋と女房は、無うて叶はぬ筈なれど、鍋蓋あつても女房が無い。事の缺けぬは不思議ぢやまで、眞に忘れたその筈ぢや。道具と女房は有合せ、尤もぢやく、道具屋の娘ぢやもの。」と、とんと背けて身をすねて、口舌仕掛くる目元なり。色氣を離れた道心も、何様やら心浮いて来て、「ヤアいかう口が上つたの、斯うして居ても面白い事、芥子程も持ちませぬ。うさな事が有るならば、拷問なされ。」といひければ、「それその口が憎いわいの。此方覺えがござらぬか。立賣堀の伯母様の、聞けばあの與兵衛は、家の茶が飲み足らぬか、茶屋へもちよこちよこ遣ふとある、その詞を覺えてか。夫れから尋ぬる折もなく、今で胸に黙つて居て、詮索せう許りに、今日は遙々來ました。茶屋で此方の參る茶は、新造の振か詰茶か、但しは白の白茶か、風呂で焚いた煎じ茶か。私が様な薄茶は、交した詞も冷め切つて、水臭うて吞まれまい。互にこひ茶の初昔、私は忘れはませぬ。」と衣の袖にひつたりと、抱き付いてぞ泣きにける。助給打笑ひ、「エ、かふにも立たぬ悋氣ぢやなう。今は左様の色茶もなく、只お茶湯で暮します。さらば釜を焚き付けて、お茶湯一服供へませう。」と、火打箱引寄せて、はたくと打ちければ、お龜すつくと立ち上り、「なう熱や堪へ難や。愛著戀慕の迷ひの火焰、縁に引かれて石の火の、身を焦す淺ましや。これまでなり。」と驅け出づる。「我を捨てて何處へぞ。暫しく。」と縋れども、影も形もなき人の、ありとは見えてそ

事ぞ。」といへば、「さればいな今日は四月十七日觀音様の御縁日、此方様と父様と、中の好うなる願立に、二十二社廻り仕まして、その次手に神子町の、黒格子お辻の方へ、在所の衆が呼びしやんして、一寸逢ひに寄りました。去年此方様の生口を、寄せてから近付になり初めて、再々私を呼び出して、父様にも伯母様にも、折々は逢ひます。神子殿さへ合點なれば、何時逢はうと儘なるに、なぜ此方様も折々は、呼び出しては下さんせぬ。」と、そゝろに咽ぶ恨みの涙、世に亡き人と氣も付かぬ、夫の心ぞ哀れなる。「ム、先づ駕籠は預らう。爰へ通りや。」と呼びければ、「嬉しや誰もなさうな。」と、裾を搔い取る身も軽く、おりのの簾捲き返す、駕籠は亂れて失せにけり。助給内に案内し、「これ見や今はこの身持。結構な事はなけれども、浮世の世話を餘所に見て、藜の羹紙傘、先づ盗人の恐れなく寐覺がよい。」といひければ、お龜は庵の體を見て、「ア、ほんに扱も氣樂な住居ぢや。釜一つ鍋一つ、谷から水を汲んで来て、山から柴を折つて来て、米ごしくと洗うて、組板に白瓜菜刀取つて、てき／＼ヤ、てき／＼く／＼ヤ、てき／＼しやんと、揉み瓜に、なれ／＼茄子秋茄子、嫁を譏る姑はなし。相伴は如來様、火吹竹は一本、火箸は二本國中に、怖いと思ふ今めは居ず、此方様と只二人、寢たけりや宵から長枕、寢ともなくば起き通し、誰が叱らうとも思はばこそ、世界の樂とはこの住家。女夫一緒に居る内に、せめて一日片時でも、斯うした暮しはしもせいで、今これが何になる。何ほこ

ぬ面影は、夢ともなく現とも、無き人爰に有りくと、昔を見るも歸るさ知らぬ死出の旅、く、露の仇駕籠急がん。戀と言ふそのたう綱にからまれて、浮みもやらぬお龜とは、外には人も水くらき、澤邊の螢、稻の殿、影かあらぬか簾の隙に、漏るは卯の花白妙の雪のな、振袖ちらくとな、ありし昔に奈良團扇、風かろくと駕籠昇が、昨日の旦那今朝の幻、夢の浮橋一つ橋一跨げぢや。」合點ぢや。」手にも取られぬ臙駕籠、姿の山に肩替ふる、賤が袂も幽なる。折節助給は念佛に氣を屈し、茫然と眠けざし、物に化されたる如く、うつかりとして表を見れば、山家に見馴れぬ女中駕籠、不思議と思ふ氣もつかず、身をも所も打忘れ、とほんとしてぞ居たりける。細谷川の小石原、息杖の音かまびすく、川瀬が鳴るか空耳か、女の聲にて高々と北久太郎町古道具屋笠屋與兵衛様と申すお方は此の邊では御座らぬか。」と、尋ぬる聲と諸共に、駕籠は庵に近づきたり。助給は元より魂魄に、氣を奪はれたる夢心地、「オ、これく、その與兵衛は爰ぢやく。」と、扇を上げて打招く。「ヤレく嬉しや、彼處ぢやけな。駕籠の衆頼みます。ま些と急いで下さんせ。」と、機嫌よけなる高笑ひ、程なく駕籠は庵室の、柴の戸口に昇き据ゆる。簾を上ぐれば妻のお龜、莞爾なる緑の眉、芙蓉の目元、わさわさと、「さつても熱い事かな。それそこな密の葉の、水一つ下さんせ。」と、汗おし拭ふと見えにけり。「いやく水はいらぬもの。釜の下を焚き付けう。して先づ今日は駕籠に乗つて、何處へ行きやつた

き罪を作りし。」と、杖をからりと投げ捨てて、前後不覺に伏し沈み、聲をはかりに歎きしは、道理せめて哀れなり。至極に詰り一言も、傳三兄弟顔を下げ、伏目になれば長兵衛も、漸う涙をおし止め、道理とも尤もとも。皆某が誤りなり。この上は身に替へて、與兵衛が命を助け出家させ、娘が願ひを立て申す。落居の後は今兄弟、家を追ひ出し申すべし。外間といひ親の身で、のめく生きて居る心、伯母御推量遊ばせ。」と、又濟々と泣きければ、「オ、夫れはせめてもその詞、違はぬ様に頼むぞ。ハア神子殿へも面目なや。いつぞや爰へ生口寄に參つたけな。美しい娘こそ今大坂の口の端に、かゝる梓も縁ならめ。拜んで下され頼みます。」と、出づれば神子も門送り、「いとしほ様や。」と諸共に、思ひの数も百二十、袖に涙を包錢、繋がる因果や巡り行く、月にも日にも秋風も、捨て果てたりし與兵衛が、生き効も無き身なれども、親、伯母も心黙されず、髮剃りこほし發心遂げ、妻の菩提も我が後世も、助け給へといふ文字、その名を助給法師と改め、二度難波の故都へは、踏み返さじと足曳の、大和國平羣谷、大念佛派の庵室に、知邊をもとめ閉ぢ籠り、妻の位牌の手向草、いうくたる谷に下りては、去此不遠の水を荷ひ、盤々たる山路に薪を拾ひては、十萬億土の月を攀ぢ、霜に憧れ霞に伏し、櫻が閉す柴の戸も、躑躅にあけて今年も早、卯月中旬になりにけり。相住の道心は、二三日以前より、石山參りの留守なれば、助給一人佛前に、心も細き鐘の聲、廬山の雨の世捨人、捨てても捨て

姪子共、可愛がらせう爲ばかり。月に一度しひて二度三度とは往かねども、家のさだつも見て取つた。この擲み頼兄弟が、お龜女夫を踏み付けに、せこめ廻すといふ事を、盲目でさへ知つて居る。其方に二つ眼は無いか、但し知つての指圖か。お龜は其方が死なした、お龜を返しや奸返しや。如何に妾が可愛いとて、我が子に思ひ換へるとは、酷いぞや愛いぞや。」と、せき上げく泣き叫び、傍なる竹杖押取りて、「姪の敵。」と長兵衛を、散々にこそ打つたりけれ。傳三も今も継り付き、これ申し伯母御様、人中といひ女中の身、如何に弟御なればとて、近頃非道千萬。」と、もぎ放す手をふり解き、「ア非道とは誰が事。その非道といふは汝等兄弟。同じ女子と生まれても、汝等とは違うたぞ。善し悪しは噛み分ける。エ、扱この伯母が手前、冤も角もするならば、お龜夫婦を引取つて、分立つて商ひさせ、くじみやしても汝等に、がやくく口を利かせうか。貧の病に肩身もすほり、可愛や氣弱な甥姪を、踏付にさせたよなあ。せめて片眼見ゆるなら、起居素振に氣をつけても、斯う闇々とは死なせまじ。その胸慾な心からは、二人が死に出るていを、見ても見ぬ顔仕かねまい。恨めしい者どもや。」と、盲目打ちに擲り打ちく、聲も惜しまず泣きけるが、「不便やお龜が存生に、汝等が驕る面殿きたからう擲ちたかろ。若い身なれば齒切して、堪へた心思ひやる。これはお龜が打つ杖。」と、折る、許りに四つ五つ、又ちやうくと擲ちつけて、「今は打つても擲いても、死んだお龜が歸るにこそ、由な

ひ弔ひにもます鏡、冥土の曇が晴らしたやなう。「いやこれなうお龜様、女夫の衆がこの今を、酔で
さいて飲む様に、言ひたいがいと言ひ籠めて、死んでも又言ひ足らぬか。榮耀が餘つて此方衆が、ほ
たえ死ぬるを、おれ兄弟が知つたか。それに何ぢや兄弟の犬めらとは、オ、私や犬ぢや黒犬ぢや。
試し物になる與兵衛の身體を、がりくくくと嚙んでやる。梅田堤で其方の死骸、嚙まいで残り多い
わいなう。「なう死人に妄語はなきぞとよ。恩を知らぬは犬畜生。身の皮剥いても母様の、御恩を思
はば幡天蓋、袈裟の一重も上げはせず、著衣裳までもが取り、家一杯に荒鼠、父御を誑す見苦し
や。それに弟の傳三めが、旦那増りにとほし立て、提灯に釣鐘と、主ある我が袖褌引き、與兵衛殿
を失ひて、夫婦になつて家の跡、繼がうというたを忘れたか。此方等夫婦は下人にて、今兄弟は旦那
顔、車は海へ舟は山、皆逆の憂さ愁さ、語れば親の恥晒し、言へば詞のくづいをの、夜の衣の我が
夫の、命を助け出家となし、家を晦ます黒雲を、祓はば晴る、胸の月、守りの神とゆふつけ鳥の、別
れは又の逢瀬あり。今は返らぬ三途の川、影は留らず手に取られず。冥土の使繁ければ、浮世の名残
これまで。」と、梓の弓に弔に、弦走りして失せにけり。伯母は涙に沈みながら、神子の前とも思は
れず、「これ長兵衛の邪見者、亡者の寄口聞きやつたか。我は其方の姉ぢやぞや。身こそ貧なれ一文一
錢、合力は受けまいし、何輕薄が言ひたかろ。現在弟に殿様付、内外の者に追従するも、母のない

中。」と呼ばはる聲に、里人を合ひ、池に飛び入り引上ぐれば、女は死して眞菰草、薦や蓆に死骸を埋む。男は淺疵半死、「殺してくれい。死なしてくれ。」と、泣き叫ぶ間に縁者一門驅け付けく、「北久太郎町心齋橋古道具屋の跡取婿養子。」と、とりづくに見物人の山をなす。「斯くてはすまず。」と、與兵衛を駕籠に打乗せ、ながらへし甲斐もあるかや蜷川 跡白波とぞなりにける。

中之卷

廣がりし浮名は何とすほめても、笠屋夫婦の心中と、歌に唄はれ繪に賣られ、或は狂言淨瑠璃の、三十五日に早なりぬ。父長兵衛は一人子を、あへなくなせしその悔み、婿與兵衛が疵もまた、立賣堀の伯母諸共に、傳三兄弟引連れて、河内の親の手に預け、天王寺の東門を、大坂の方へ歸りしが、下女のふりは、神子町を見遣りて、「わつ。」と泣き出し、「申し伯母御様、お今女郎、今までは物見、見物物参り、又はこのよな時節でも、お龜様も打揃ひ、ひらり帽子に加賀普笠、大振袖の後帯、いかな者でも見返りて、お供についた私等まで、眞に肩がいかつたに、大事の花を失うて、物足らずなお供には、歩けど足を引戻す。何時やら爰の神子町へ、それがお供の仕納めか。冥土の道の一人旅、誰がお供しませうぞ。おふり如何ぢや斯うぢやと、愛想らしい聲付が、耳に残つて有る様な。元結一筋、紙

龜は常々信仰の、「南無觀世音菩薩様。母様の戒名教養樹林信女、一つ蓮に導き給へ。南無觀音様觀音様。」と、手を合はせて待ちけれども、男は目眩れ差しうつぶき、只泣くより外の事ぞなき。「エ、憂き目を見せて何事。」と、夫の手を取りわが咽喉に、おし當つれば思ひきり、「南無阿彌陀佛。」と笛のくさり、剃刀の刃も折れよと一剎は剝りしが、若き者の悲しさは、とゞめの急所を知らずして、未だ息絶えず悶ゆるを、疵の口を隠さんと、抱への帯をぐるぐると、二三遍引廻す。憂き目の程ぞ不便なる。「我も臆て追つつかん。」と、咽喉にあつる剃刀の、刃は鋸と折れ碎け、皮肉ばかり切れけるを、力を入れて突きけれども、通りつべうはなかりけり。「南無三寶。」と剃刀すて、傍に抜き置く脇差の、鞘を持つて引き上ぐる。鐔は重し手は弱る、弾んではぬる勢ひに、脇差ぬけて樋の口の、井出の水草の漲つて、さんぶと許り沉んだれ。「エ、しなしたりこは如何に。」と、這ひ下る、堤の露、灑れし血に足滑り、池へどうど落ちたりけり。池は深くて泥土深し。底の脇差尋ねかね、浮きぬ沈みぬ漂ひしが、今を最期の眼にも、夫を思ふお龜が心、引き揚げんとや思ひけん。這ふく岸によると見えしが、眩む眼に氣も亂れ、同じく池へどうど落ち、互に助け引き揚げんと、抱き上ぐればどうど伏し、かき上ぐればかつぽと伏し、心許りを力にて、「なう與兵衛様々々々。」「お龜く。」と呼び交す絶えく切るる息の下、この世からなる地獄かや。哀れ果敢なき 三重有様なり。朝出の土民が見つけ出し、「ヤレ心

けかけて泣きたるなり。「ア、愚かや愚癡や淺ましや。永き來世があるぞかし。さりながら心にかゝるは其方の父御。二人とも無き獨子を、憎や壻めが殺せしと、さこそ恨み憎しみの、これ罪障となるぞ。」とて、共にひれ伏し泣きければ、「いや父様は男氣の、思ひ諦めあるべきが、いとしや在所のお袋様、姑なりとて一日の、みや仕へした事もなく、大事の子をば嫁故に、失うた殺したと、お叱りなされんこれ一つ。目の不自由な伯母様の、力となるはこち女夫。嗚今頃は泣き悲しみ、眼でも眩はぬかどうしたと、胸に塞がるこれ二つ。又母様の十三年、觀音經を書きませう。佛になつて下さんせと、墓に向うて約束の、これが違うた。何やかや斯くまで重き罪科の、閻魔の前には黒鐵の、帳に付くと聞くものを、よい所へよも往かじ。火水の地獄も厭はねども、夫婦別れて行かうかと、これのみ猶も迷ひぞ。」と、聲もをします歎きける。さすが男は力をつけ、「一途に行かうと別れうと、皆一心の向け様ぞ。氷の地獄、火焰の地獄、劔の山へ登るとも、とり交したる手は放さじ。」と、心強くは言ひけれど、まだ蒼む花出づる月、玉の様なる若い者、若い女の頑是なさ、慰めらるゝも慰むるも、分けて分たぬ涙なり。「あれ早東も白うだり。サア念佛。」といひければ、「心得たり。」と懐より、剃刀二挺取り出し、「これも母様の額たれとて譲りなり。私はこれで死にたい。」と、泣くく出すその中に、向うの野道を通ふ。「あれよく。」と心は急く。二挺の剃刀一つにとり、「南無阿彌陀佛。」と引寄せれば、お

三十過ぎての初子とや。その譲りから馴れ初めて、一夜離れた事もなく、交す枕に子種のないか。是れも生ますの數ならば、根を掘る竹の伏見町、高麗橋の西東、牀も定めぬ立君は、これも世渡る習ひとて、浮世小路の細き聲、唄うて歸るその歌の、品ある中にも來ぬ人を、まつほの浦の夕風に、やくや藻鹽の身をこがす。それは吾妻の物語、耳に聞きたる許りぞや。そもじと我は浪速津の、貴賤羣集の見るめかる、尼ヶ崎町過書町に、はや北濱や中の島、明日は天滿の橋々賣りて、唄梅田の、梅田の堤をそめし、紅葉笠屋のな女夫の心中、男二十一お龜は十五、年にあはすりや、いたづらくちや。サア繪雙紙へ、餘所の口の端、ア、餘所事を買ひ求めては慰みし、この身の果てを讀賣に、誰が節つけて田舎まで、唄ひ流さん蜷川、水も濁りてこの世へは、いつかへりすむ根なし草、左手は無常の燒草と、惜しからぬ身はをしからず。灰となさうかこの肌。「煙となるかこの形。」「惜しや。」「いとしや。」「悲しや。」と、引き合ひし手を猶締めて、涙の限り泣き盡す。杜の小鳥、川千鳥、がつほう鳥も聲さびて、早東雲も近づけば、小田守る賤に忍ばんと、右へ下れば綱舟の、目にや懸らん行く先は、早曾根崎の宮奴の、朝淨めする折なれば、今は仕方夏草の、人目堤の下陰を、爰ぞ夫婦の最期場と、泣くく休らひ立ちにけり。お龜は夫の顔を見て、「連立つ冥土の道とは知れど、今今生の別れとて、言ひたい事の何やらが、胸にはあつて口へ出ず。飽く程顔が見て死にたや、心なの短夜。」と、身を投

あとお
ひ心中 卯月の潤色

上之卷

末後の道行

今捨つる身にも怖ろし犬の聲、辻を隔てて見歸れば、あれで生まれし町所、家の馴染も十五年、その春夏のこの月は、祝月とて物忌ひ、しの字をさへも嫌ひしが、死して死骸を知る人に、その死恥もつ、ましく、其方の鬚亂れずや。いや我よりもおの様の、鬚撫で附けて搔きなでて、死んだ跡までよい殿と、人に言はせまほし明、今宵の月を月々に、待ちしも遂にひきかへて、冥土の使我々を、待つらんものとかきくれて、涙曇りの十七夜、二人が袖に宿しけり。よしや地獄へ墮つるとも、假令佛にならんとても、必ず契り米屋町、本町筋の軒深く、思ひ染みたる中なれば、埋まば同じ安土町、生まれ變りて又いつか、娑婆の便りの備後町、思へば我も元服し、私も若いに鐵漿つけて、逃れし賽の河原町、三途の瀬戸の淡路町、超ゆれば親の古里の、名にも別る、平野町、曙近き時太鼓、どう道修町これやこの、修羅の太鼓の響かと、共に驚く袖と袖、抱き寄せつ、泣くばかり。聞けば私も母様の、

いてひらりと飛び、橋の上まで斬り出づる。四丁町より、「すは喧嘩。」と東西の門を打ち、「擲き殺せ。」と集まつたり。二人女房大音あけ、「訴へ申した敵討外の人には構ひなし。聊爾をするな。」と聲をかけ門の左右に突立ちけり。二人は爰を大事ぞと、息休めては打合はせ、命限りに火を散らし、花を亂して三重切り合ひしが、然れども彦九郎侍の身で、町人を見苦しとや思ひけん。その身は然のみ働かず、うちかくれば追拂ひ、二三度揉ませて是れまでと、射る矢の如くつゝと入り、弓手の肩先右手のさがりに、ざんぶと切つて落せば、犬居にどうぞ臥したりける。文六やがて飛び懸り、「母の敵。」と切りつくる。藤が爲には、「姉の敵、受取れ。」とちやうど打ち、同じくゆらは、「嫂の敵、恨みの刀。」とはたと切る。四人一緒に乗り掛つて、一度にとゞめを刺いたるは、前代未聞の振舞なり。一町集まり棒突き並べ、「敵討とは申しながら、町内の念の爲、腰の物を預つて、有無の御下知有るまでは、外へは落し申されず。會所へ取つて押込めよ。」と、四人の男女打圍ひ、しんづくと歩み行く。見事さ立派さ心地よさ、世上にばつと嘩し立て、いひ渡したる山鉾の、ちやんぎりしつきり切つたりや、討つたり敵妻敵討、話のとほり眞直に、いへば言はるゝ舌三寸の、操の御評判とぞなりにける。

こそ小倉彦九郎。妻女種と不義の段露顯によつて、女は先月二十七日に刺し殺す。妻敵やらぬ。」と聲をかけ、抜打にはたと切る。「さしつたり。」と足をあげ、梯子に手をかけ、「えいやつ。」と、二階へ上るを追ひ縋り、上らんとせし所を、源右衛門が女房、かけたる長刀おつとり延べ、上げはたてじと切り結ぶ。下人共は物合より、桿棒杖よ帚木よと、支ふるもかせとなり、躊躇ふ中に源右衛門、蟲籠より手を出し、軒に立てたる槍おつとり、上り口より差下しに、「上らば突かん。」といふ儘に、眞下しにぞ突きかけたる。彦九郎あざ笑ひ、「何の己が鼠突。鼓の胸こそ握るとも、槍の柄握る習ひは知らじ。身の好いたる細工槍、手竝を見よ。」と、蛭巻よりかつしと切つてぞおとしける。「ものくしや。」と腕の力、棊盤片手に振上げて、「こりや、我は元より武士ならず。槍持つすべは知らねども、鼓のお蔭でうつ事覺えた。この棊盤うけて見よ。」と、狙ひすまして礮とうち、雙六盤將棊盤、とつては投げく、後には火入煙草盆、風呂釜茶枕箱、ぐわらりとうちあけ手にさはるを、ばらりくくと投げたるは、たゞ降る雨の如くにて、寄るべき様もなき所に、妹のおゆら表へ廻り、辻の門に手をかけて、柱を傳ひ貫木ふまへ、尾垂より這ひあがつて、抜打にちやうど切る。源右衛門仕方なく四尺屏風を倒しかけ、上よりとつて押ふれば、勿ね返さんと挑みあひ、終に脇差もぎとつたり。その隙に彦九郎、梯子を上つて餘さじと、追立てく切り結ぶ。手ひどくなれば叶はじと、大道へこそ飛んだりけれ。追續

如何はせん。」ととりふくに、小聲になつて談合す。文六耐へぬ若者の、「斯様にいうてはいつまでも、本望遂ぐる時節はあらず。下郎共あらばあれ、めざす敵は只一人。助太刀あらば撫斬の、それからは運次第。いで切り入らん。」と驅け出づる。「やれ待て思案できたり。」と、押鎮めて彦九郎、又門に立ち暖簾あけ、「これ申し頼みませう。先程これより編笠召して、お出でなされた殿達は、山鉾見にがなお出でならん。三條上る室町で喧嘩じだして、大勢に取巻かれてござります。お知らせ申す。」と呼ばはりける。「これはしたり。」下人ども、はらくと驅け出でて、「三條とはどう行くぞ。室町とはどちらへ行く。北か西か。」とおつとり刀、我劣らじとぞ走りける。「サアこの方の謀、當らすといふ事なく、運の盛り刻限先勝の時至れり。」と、衣脱ぎ捨てふはと捨て、親子の脇差兩人の、女に渡せば心得て、鐺打ちならしほつこんで、鉢巻り、しく抱へ帶、紮けし膝口しろくくと、小足を踏んで立つたるは、男勝りといひつべし。「南無正八幡大菩薩、神力威力を添へ給へ。」と、心中に祈念して、二人の女は堀川口、親子は立賣西東へ、立別る、と見えけるが、中戸障子を蹴破つて、ばらくと驅け入つたり。思ひがけなき家内には、下女も下人も、「あ、怖や。」と、裏口さして逃げ出づる。「あれこそ宮地源右衛門。」と、お藤に聲をかけられて、安閑たる源右衛門、立ち上つて二階梯子、半ば上つて腰打ちかけ、拳を握り左右を睨んで控へしに、隙間もあらせず二人の女、兩方に引添うたり。彦九郎大音あけ、「我

込み阿彌陀笠、上に衣をひつ張つて、暖簾の褌よりさしのぞき、かねて覺えし普門品、本望遂ぐる身の祈禱、案内檢見のたよりととも、力を添へて、「只頼み、妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五、爾時無盡意菩薩、即從座起、徧袒右肩、合掌向佛、而作是言、世尊觀世音菩薩、以何因緣名觀世音菩薩。」

「エ、かましい黙りや。遣らう。」と走り出る、下女が手の内うらどうて、「申し女郎様、早々からの御容さうな。誰様で御座る。」と問ひにける。いづれ下部の口まめに、「あれは田舎の御侍、これの旦那殿の鼓の弟子。お國の殿様から鼓故に、御加増があつたけな。これも師匠の御蔭ぢやてて、今度禮に御座つたが、旦那様へ銀十枚、内儀様へ一步五つ、私等までつらりつと、三百宛あた、まつた。わがみの一日朝から晩まで、咽喉の穴の痛い程、觀音經を讀みやつたとて、三百は貰やるまい。さらりと經をとりおいて、手鼓なりともうつたがよい、今からでも鼓をうちや。」と、問はず語の口早に、言ひ捨て内に駆け入りける。彦九郎うちうなづき、「様子は聞いたり。今からでも鼓をうてとは吉左右よし。」と皆々さ、やき勇みける。時を移さず客人は、上下脱いで脇差許り、編笠かづき只一人、あたりを忍ぶ風情にて、立賣を東へ、洞院南へ下りける。人々一緒にこぞりより、「これはきつと推量するに、只今の侍が下人どもを殘しおき、おもてに槍も置きながら、その身はこれにゐる體にて、祇園會の山録を、見に行くと覺えたり。七八人の下人ども留まつてあるからは、却々容易く討たれ難し。

「心得たるか。」「心得た。」「サア込み入らん。」と突立つ所へ、あれ見たか油の小路を此方へさし、らふそく槍の槍印、知行ならば三百石、二十餘りの若侍、茶宇の袴に緞肩衣、若黨三人挾箱、對の奴草履取、十枚糊の付紙臺、足うち早め敵の門、「物まう。」といふもなまり聲、内より下人が、「どれい。」と答へ、溝端につくばへば、何かは聞えず稍暫し、頭をふり廻つて口上のべて、進上臺を差出せば、下人は受取り腰屈め、其の儘内に入りける。文六天窗をかいて、「エ、拍子に乗つたる先を折る。如何はせん。」と跳ししを、「いやく屈する事なかれ。屋敷方か御所方か、囃子を勤めし禮物と見うけたり。返事を聞いて返る分、隙はいるまじ待つて見よ。」と、いふ中に以前の下人立出でて、「これへ。」といへる氣色にて、主人内へ入りければ、若黨中間草履取、槍を軒端に立て懸けて、皆々内に入りけるは、事緩やかに見えてけり。外より様子を窺はんと、立ちより見れども中戸を閉め、人音許り聞えし所に、托鉢の道心者、「はつちく。」と門にたつ。下女の聲して、「忙がしい通りや。」と、きこつなけにも高聲なり。すこく通る法師を呼びかけ、「これく御坊。御身が衣の、破れまはつて見苦しさよ、この金子を報謝する。新しいを買うて、夫れをこれに脱いでいきや。非人にとらせ喜ばせん。」と小判一兩與ふれば、夢かとおもふ顔つきにて、「ア、これは如來様。」と、いたゞきく伏し拜み、「夫れなら御意に任せませう。」と、古著は脱いでぞ通りける。彦九郎うちふるひ、辻なる門の片陰にて、頭巾引

るさへ、心に懸るその上、今の石賣か、どもが、馬の脊が打たれぬ。打たずに引いて歸れとは、如何にしても氣懸りなり。その上世間に同じ名の、あるはならひといひながら、折しも悪う一人をば、お藤と呼んだは何事ぞ。味方の心おくれては、仕損ずるは定のもの。天道よりの御しらせ。又翌日の日もあるものを、今日は延引せまいか。」と、いへば皆二の足にぞなりにける。斯かる所へ西橋詰の髪結どよ床より、さばき髪の若い者、楊枝くはへて來りしが、友とおほしく行き逢うたり。「ヤアこれは早々から、髪も結はずにどこへ。」といふ。「然れば、祭に行く今日のはれ、月代刺らせにいつたれば、扱も切つたわ、荒がみそりの刃は劔、天窓をうち切りちやくつた。あいつが手にかけては、幾人でも切りさうな。これを見よ。」と言ひければ、「ハア、切つたり。これで客に行つたらば、祇園祭ではなうて、軍神の血祭ぢや。」と、笑ひてこそは別れけれ。四人嬉しき辻占の、「今のを聞いたか。」「聞きました。サア破軍がなほつた仕済ました。」と、そゝろに笑うて勇みをなす、心底思ひやられたり。「いさこの運に乗つて討たん。時刻延ばすな用意せよ。」と、帯締め直し身を輕め、内の勝手を知らざれば、爰にて談合無益の沙汰。女二人は堀川おもて、小店に上つて障子蹴破りつ、といれ。我々親子は立賣の、門口より中戸を蹴破り込み入るべし。面體を見知らぬぞ。人違へさするな。神妙に意趣を述べ、もの見事に討たんする。はやまつて欺討、卑性などといはするな。合點か。」「合點ぢや。」

下之卷

寺、御幸、麩屋、富柳、堺町、相の東は玉敷の、御垣にかこふ五つ緒の車、烏丸、兩が室、衣、新
釜、西小川、油、醒井、堀川の、岸の平砂を白波に、照らせば今も夏の夜の、下立賣のほのく明、
六月七日祇園會の、長刀鉾の切先に、うちかちどきの鶏鉾と、門出を祝ふ力紙、拳をかため四つ辻
に、四人さまよひ立ち居たり。常さへ賑ふ上京の、折しも今日の祭客、下へくと朝霧の、隙に門
掃き打つ水の、かかる姿を咎むやと、西と東に行き別れ、立休らへる折柄に、豆腐商ふ商人の、「きら
すきらす。」と聲高に、賣る辻占の耳に立ち、心おくれとなりやせん、南無三寶と橋詰に、各寄れば
向うより、白川石をあきなひに、賤のかゝらが馬追ひ連れて、連を呼ぶさへ同じ名の、「お藤や、今日
はあきなひ早終うて、祭に行かうと氣がせて、馬に奮さへ打たなんだ。」「オ、然れば同じ事。今朝
は少し寐過して、こちらも杵を打たずに来た。誰も今日は皆打たれぬ。いつそなたに此の分で、と
つとと引いて歸りやいの。」と、どつと笑うて通りける。京童の口ずさみ、家々ごとに朝もよひ、よ
ろづに心もみ瓜を、刻む音さへ比叡の山、峯に響くと傳へたる、洛中の今朝のあなかまと、心亂る、
ばかりなり。中にも藤は小聲になり、「いづれもなんと思召す。最前の豆腐屋が、きらずくと賣つた

で、刺し通してぞ居たりける。哀れなりける覺悟なり。藤文六は、「あつ。」とばかり涙は胸にせき來れど、萎れぬ主人の顔に恥ぢ、齒をくひしぱり歎きる。彦九郎刀を抜き、とつて引寄せぐつと刺し、返す刀にとゞめをさし、死骸おしやり刀を拭ひ、しづく仕舞うて立つたりし、武士の仕方のすゞどさよ。今朝脱ぎ捨てし旅装束、又おつとつて笠草鞋、刀おつとり、これ文六、我はこれより番頭へ訴へ、御暇申し捨て、直に京都へ馳せ上り、女敵を討つ間、おのれは足弱引連れて、一門方へ立退け。」と、言捨て出づれば藤文六、ゆらも同じくひき添うて、「共に行かん。」とせり合うたり。彦九郎大の眼に角をたて、町人風情一人に、おのれらを召連れて、この彦九郎にいよく恥を與ふるか。一人にても付き來らば、勘當なり。」と怒りける。各一度に、「わつ。」と泣き、「それは餘りに情なし。我等が爲には姉の敵。」「我が爲には母の仇。」「いや我が爲にも嫂の、敵を見捨ておかれうか。然りとては連れてたべ。」と、三人一緒に手を合はせ、聲をあけて泣きければ、夫も今は包みかね、勇める容顏しをしをと、「さほど母姉嫂を、大切に思ふ程ならば、など最前に衣をきせ、尼にせんとて命をば、なせに貰うてくれざりし。」と、空しき體に抱き付き、「わつ。」と叫び入りければ、残る人々諸共に、涙につれてたち出づる、物の哀れや武士の、身こそ三重あだなるならひなれ。

ないかいやい。ム、さこそく、返答はあるまじき。さて不義は中立同罪たり。藤は中立知らぬか。」と言へば、「ア、愚かなり彦九郎様。中立をしる程ならば、斯様に恥を見るべきか。」と、又さめくとぞ泣き居たる。「扱は下女めが中立ならん。其奴呼べ。」と呼び出せば、がちくくく身を震はし、「ア、御勿體なや、私はなんにも存じませぬ。この間お種様、人に隠して、子墮薬を買うてくれとおしやりまして、一服を七分宛、三服を二匁一分で、買うて參つたばかり。然りながら旦那様のお聞きなされたら、高い物を買うたと叱られうかと思つて、錢はしかけてやりました。」と、何をいふやら譯もなし。彦九郎はつとおどろき、「扱は懐胎したるか。やい文六、おのれ若年なれども、これ程家中の沙汰といひ、何として源右衛門、疾くに討つては捨てざるぞ。」「いや我等も今朝承り、家來どもに申し付け、彼が旅宿へ討手に遣はし候へば、二三日以前に京都に歸り候。」と言へば、「ム、是非に及ばず。それ持佛堂に火をとませ。女立つて持佛へ來れ。」と言ひければ、女房涙おし拭ひ、「未來の末の後の世まで、御にくしみのあるべきに、持佛堂へ參れとは、さすが馴染の御情、一つの世にかは忘るべき。その御心をこの年月、知つていとしき我が夫を、袖にしての不義ではなし。夢見たやうな身の上の、間に憎い奴もあれど、いへば卑怯の未練の死。夫の刀の先するは、如何とは存すれども、これは我が身の言譯なり。免してくだされこれ御覽せ。」と、胸押し開けば九寸五分、膽さきに切羽ま

刀とり延べ閃かし、たるまば切らんす勢ひなり。彦九郎横手を打つて、「ム、これは珍事を聞くものかな。その源右衛門とやらん、音には聞けど面は見ず。遂に家内へ出入せず。證據やある。」と問ひければ、「オ、三五平ほどの者が、證據をとらでいふべきか。即ち傍輩磯邊牀右衛門、氣色を見てとり見廻にもてなし、兩人忍び逢ひたる夜の、兩袖切つて取つたるが、御家中取沙汰ある上は、隠しても隠されず。いかに傍輩のねんごろとて、直にはこの事しらせれずと、夫の三五平殿に注進ある。是れ御覽ぜ。」と懐中より、二人の袂を投げ出し、「これにも何と疑ひか。」と、色を違へて申しける。彦九郎取りあけて見て、男の袖は知らねども、女の衣裳に覺えあり、「こりや妹、たつた今其方が恥辱を雪いで得させんす。此方へ來れ。」と打連れて、座敷にこそは通りけれ。家内の上下これを聞き、鳴をひつそと静めし時、主人少しも騒がず、「女房ども來れ。倅文六來れ。」と、詞少なに呼びければ、いづれもすはや大事ぞと、そろ／＼夫の前に出で、頭を下けて居たりしは、身も冷え渡り魂消え、息を閉ぢたるその中に、無慙や種は心にも、工まぬ不慮の惡縁の、身の鑢刀夫の手で、刃に掛るは覺悟のまへ。やがて逢はんと永の留守、辛抱盡せし効もなく、去年發足の前の夜の、枕が限りの枕とは、今殺さるる今までも、思はざりしと思ふにも、今一度夫の顔、見たやとは思へども、涙にくれて目も開かず、差俯向いてぞ泣き居たる。主人兩袖投げ出し、「妹ゆらが言分、定めていづれも聞きつらん。女言譯

に歎きをかけ、來世に御座る母様の、屍に苦患がかゝるわ。」と、くどきつ恨みつ聲をあけ、伏し沈みてぞ泣き居たる。姉は詞も涙にむせび、「好みし酒も今思へば、前世の業の毒の酒、無明の酒の酔ひさめて、自害せんと思ひしが、夫の顔を今一度、見たい／＼と思ふより、今日と延び明日と暮れ、世間に恥を晒す事、我が身に悪魔の魅入りか。」と、返らぬ愚癡の繰言に、姉妹縋り抱きあひ、聲をしまし泣き居たり。よに是非もなく哀れなり。時に門外さわがしく、「口論あるか先づ暫し。」と、姉妹奥に入りければ、彦九郎妹のゆらは、長刀をとりのべて、兄彦九郎を追ひ驅け來り、「是れ兄様、妹とはいひながら、政山三五平といふ侍の妻なれば、義の立たぬ事あれば、兄とても許されず。いかにいかに。」と申しける。彦九郎はつたと睨み、「ヤア、さかしき女郎めが、兄彦九郎に向つて、義の立たぬとは推參千萬。仔細をぬかせ、ぬかさずば、長刀持つたる腕ほし共に、捻ち折つてくれんず。」と大きに怒つて言ひければ、ゆら呵々と笑ひ、「ヤアしをらしい腰拔殿。様子をいうて聞かせ申さん。」此方内儀は鼓の師匠、京の宮地源右衛門と密通して、御家中この沙汰眞最中。それ故土産に眞苧を遣はし氣をつけても、女敵をも得討たず、聞かぬ顔する腰拔の彦九郎、その妹とは添ひ難し。」と、夫の政山三五平、我に暇をくれられて、「兄が腰立つたらば、その時は立歸れ。元の如く夫婦にならん。」と、離別して來つたり。これ腰拔の兄御、我が夫に添はせうか、添はせぬか、其方の一心一つぞ。」と、長

は見た。こなた一人で親兄弟、男の武士まですたつた。」と、聲を上げて泣きければ、姉はとかうの詞もなく、「常の意見を聴かざりし、酒が敵。」と許りにて、泣くより外の事ぞなき。妹せき來る涙をおさへ、「なうその悔みがもう半年遅かつた。これ妹が心の物思ひ、もはや姉の名はすたる、せめて命が助けたやと、とり／＼様々思案して、彦九郎様との縁きれて、暇の状さへ遣らせなば、海道の真中でうませても大事ない。命に障りはない筈と、はかない女子の思案から、姉の男に執心と戯らものに身をなしたも、姉様ばかりの孝行ならず。お果てなされた母様へ、孝行と思ふ故ぞとよ。おいとしや母様の、御臨終の二日前、兩人を枕の右左、遺言のお詞をよもや忘れはなされまい。そち等二人は小さいから女子の道を教へ込み、讀み書き縫針絲綿の、道もそれでは恥かかず。第一女子の嗜みは、殿御もつてが大事ぞや。舅は親ぞ、小舅は兄よ姉よと孝をなせ。ほかの男と差向ひ、顔をあけて見ぬものぢや。總じて夫の留守の中、男とあらば召使、一門他人おしなべて、年寄若いのへだてなく、この嗜みが悪ければ、四書五經を宙で讀む、女子でも役に立たぬぞや。この遺言をそち達が、論語と思つて忘るゝなどの御詞が、骨にしみ肝に残つてえ忘れぬ。姉は父御のそんをつぎ、後紐から酒を飲む。藤よ母になりかはり、意見をせよとその跡は、はや息ぎれのやつれ顔、身に付添うて忘られず。朝夕位牌に向へども、この遺言をお經と思ひ、一遍づゝは繰つて見る。姉様ははや忘れてか。この世の妹

て膝に敷き、「親にも子にも換へじと思ふ、稚馴染の我が夫、一年隔てし長の留守、月よ星よと待ちうけて、漸うと今朝殿御の貌、見たぞ嬉しや來年までは、一つに寢臥もせうもの、悦んだ矢先に己めは、姉を去れの離別のとは、ようもいうた畜生面、生けておくも腹立ちや。」と目鼻もわかず打叫く。

「なうこれには言譯だん／＼あり。取りさへてたべ人々。なう息も絶ゆる。」と叫ぶにぞ、「先づ言譯をお聴き。」と、たつて支ふれば姉お種、「サアさあ言譯が立たぬからは、この度は命を取る。言譯あらばして見よ。」と、とつてひき立て突き退けしは、理道理至極なり。妹くるしき息をつぎ、亂れし髪を搔撫で／＼涙を押へ、「この言譯は姉様と差向ひにいふ事ぞ。皆々次へ。」と言ひければ、いづれも立つてぞ退きにける。「ヤア仔細らしうせずとも、言譯を聴かん。」と言へば、妹涙をはらくと流し、「これ姉様、自らが彦九郎様へ状をつけ、姉様去つて下されと、言うてやつたは姉孝行、こなたの命が助けたさよ。いふに及ばず覺えがあらう。鼓の師匠源右衛門と懇してござらぬか。」と、いふ所を飛び懸り、口を押へ、「これだまりや。かりそめながらやす大事。何を見てさはいふぞ、證據を出せ。」と言ひければ、「オ、證據までもないことよ。このお腹には四月になる子は誰が子にて候ぞ。下女の林に買はせられし、墮胎薬は誰が飲むぞ。人は知らぬ様なれど、家中一ばいこれ沙汰で、今も今とて方々から、眞芋の土産に來りしも、彦九郎様にしらせの爲、最良の方から氣をつけに、來たものなりと私

はなほこの文につぶさの事、分別きはめ書きましたれば、否でも應でも、合點してもらはねばなりませぬ。」と、封ぜし一通、姉婿の懐に押し入る。彦九郎苦い顔して、「ヤア其方は狂氣めさつたか。尤も姉を呼ぶ時分、其方の談合もあつたれども、縁なければこそ姉と夫婦と定まりて、十何年といふ年月を重ね、子まで養ひ置いたる中を、いか程に思はれうが、去つて其方に添はんとは、この彦九郎はえ申さぬ。斯様な文は手にもとらぬ。」と、投げつけ表に出でにける。姉のお種奥より見て、つかつかと出で文を拾うて懐中す。「いやその文は大事の文、人には見せぬ。」と取りつくを、はたと蹴倒し櫻欄帯木おつとつて、散々にうちふする。「あれよく。」といふ聲に、文六下女ども驅けつけて、「何事か存せねども、御堪忍。」と縫りつき帯をたぐれば、荷物につけしはなねち引きぬき、顔も頭もわかれてのけと、續け打にぞ打つたりける。お藤は聲あけ、「なう痛や死ぬるわなう。助けてたべ。」と泣き叫ぶ。文六はねぢに取りつき、これ母様いか様の事が存せねども、詞にてお叱りもあるべきに、あらけなき打擲。叔母様目でも眩うたらば、何と言譯なされん。」と、苦々しく言ひければ、「いや打殺しても大事ない。姉の夫に執心懸け、江戸まで文を遣つたるを、たつた今慥かに聞く。今も拾うたこれ見よ。」と、封じめ引切りさつと明け、「ある事か姉を去つて暇をやり、私が夫婦になると、生爪放して入れたる文、これが諳か讀んで見よ。え、憎や腹立ち。」と、飛び懸り髪を取つてくるくと、手にからまい

ろ目出たかる、さこそ嬉しからうどの、君々たれば臣もまた、しんたるの酒さ、んざや、濱松の葉の散り失せず、萬代不易國入りの、國こそ久し三重かりけらし。家中の上下、親妻子に一年ぶりの對面に、彼方此方の悦び使、祝儀土産のとりやり持、中間小者に至るまで、ざゝめき渡るぞ賑しき。中にも小倉彦九郎、數年の務め舊功によつて、東發足のきざみ拔羣の御加増賜はり、若黨下人彌増して、一子文六お種兄弟、悦びあふ事限りなし。爰に主人の妹婿、政山三五平といふ馬廻、これもこの度歸國なりしが、お種の方へ使を立て、「先づ以て道中何事もなく御供にて、久々にて御對面、さぞ御満足候はん。此方とても同然たり。扱何がな土産と心ざし候へども、さして變りし品もなし。これは關東麻とて名物の眞芋、如何しくは候へども、御留守の間お種様、眞芋をおうみなさるゝと、道中すから家中の沙汰、罷り歸り承れば、御當地にても其の沙汰故、進上致し候。」と言ひもあへぬに、彼方のこれは誰様より、此方の是れは何兵衛様、お種様へのお土産とて、送るにつけても女房は、心に應へ取沙汰の、夫の心もつくやとて、顔を見れども夫はさせる氣もつかず、「それ此方も荷をときて、相應に土産物見合はせて送るべし。ヤア忘れたり。まづ舅殿へ參らうぞ。それ〱袴。」「あい。」というて女房は、やがて奥にぞ入りにける。すり違うて妹のお藤、する〱と走り出で、袖に取りつき、「これ彦九郎様、エ、おまへは曲もない。お江戸まで二度進じた、文の返事はなぜなされぬ。私心

る。火影にすかし牀右衛門、よくく見れば下女子。「エ、勿體なやいまくし。鯛で精進おちようとした。」と、跡見返らず逃けて行く、闇のうつゝ、ぞ三重うつくしや。

中之卷

唄さても見事な葛籠馬や、七つ蒲團に曲築するて、蒲團ばりしてナ小姓衆を乗せて、海道百里をはなでやる。はなもさき手の供道具、素槍片鎌十文字、からのかしらの紅の、きぬ紅梅魚は鯛、いふも管槍人は武士、奴が今朝の朝酒の、天目鞘に禿鞘、ふれくふれや白雪の、富士も浅間も跡に見る、道も長柄の數槍の、鞘に掛りし木綿著鳥、關より西に隠れなき、名を望月の引馬や、轡の音のしやんしやん、りん／＼しやりん／＼と、心拍子に乗掛は、六番頭使番、侍大將奏者番、旗大將の跡先に、續きて靡く旗棹の、世時治まり四方の海、波靜かにて天つ空、風もなぎなた見えたるは、醫者よ儒者よと物識も、知らぬもなべて行列に、舌をまくぐし挾箱、引きもちぎらぬ持弓の、滋藤塗りこめその數は、いさや白木にそば黒の、弓に鞞に矢籠矢箱、二重の覆ひ著長の、その具足櫃甲立、立ちて程なき東路も、一歳越えし國の留守、七つ何事七つ道具の、臺笠立傘馬印、これぞと名にしおほ鳥毛、御召の駒も乗替も、己が故郷の北風に、勇んで嘶ふ勢ひや、跡におさへの對道具、國久しか

し俯いてぞるたりける。忠太夫は待ち兼ねて、猶荒氣なく門叩く「あれ父様に見られては、死なねばならず如何せん。」と、此所彼所にはひ隠れ、下女が臥したる夜著の内、うろたへ入れれば飛び上り、丸裸にて「なう悲しや。うらが寐た懐へ盗人が這入つて、雪の肌を荒すわ。」と、わめきまはる勢ひに行燈を踏みこかし、戀路の闇のくらがりと、うたふは物かこれもまた、由なき事の迷ひなり。表は頻りに聲を立て、「明けよく」と叩くにぞ、お種も男も顫ひさ、やき、後手に袖を引き、我が身で男をおし隠し、鏝明けて、「父様か。サア御入り。」と言ひければ、親にてはなかりけり。牀右衛門顔隠し手をさし延べ、兩人が袂を一つにしかと取り、「サア不義者證據をとつたる。」と、聲をかくれば、「南無三寶。」と、潛戸はたとさしけれども、とつたる袂放さばこそ。仕方なくも源右衛門、腰の脇差するりと抜き、二人の袂きり放し、戸を引明けていつさんに、わが屋をさしてぞ逃げ去りける。牀右衛門は袖下を懐中に捻ぢこんで、戸をこち明けて内に入り、「さりとは御内儀曲がない。人には死す下紐の、我にはなぜつれないぞ。この事隠してくれならば、今宵のお情頼みます。」と、くらがり手に手を擴げ、尋ね廻るぞ怖ろしき。立舞ふ内に裸身の下女にはつたと行當り、「こりやこそ爰に」と抱きあふ。下女は勝手は覺えたり、我が寐所へと逃げ行けば、「こは忝し有り難い。」と、夜著引被ぎかつばと臥す。下女はいやがり捻ぢ合ふ間に、「お種様のお迎ひに、りんが只今参りました。」と、提灯ともし來たりけ

おし戴いて飲んだりけり。お種も餘程酔ひはくる、男の手をしかと取り、「コレこな様とても主ある者のつけざしを、まるるからは罪も同罪、何事も沙汰する事はなるまいぞ。」と詰めければ、「いやはやかかる迷惑。」と、飛んで出づるを抱きつき、「エ、あんまり戀知らず。扱もしんきな男や。」と、兩手をまはして男の帯、解けばとくる人心、酒と色とに氣も亂れ、互にしめつしめられつ、思はず誠の戀となり、「サアこの上は今の事、沙汰はならぬが合點か。」「オ、く餘所かと思へば我が身の上。この事を隠さいでなんと。」障子を押し明けて、うた、寐枕かりそめの、縁の端また因果の端、うたてかりける契りなり。稍更け渡る時しもあれ、父の成山忠太夫下人も連れず立歸り、門の戸荒く敲いたり。お種はつと耳に入り、酒の酔醒目もさめて、我が身を見れば帶紐とき、男とそひしみだれ牀。「南無三寶あさましや、牀右衛門めが不義の沙汰、世間の口止爲んために、わざと戯れ仕懸けしまで、たしかにそれは覚えしが、その後は酒に酔ひ、夢現ともわきまへず。酒をとまれと常々に、妹が意見を聞き入れず、我が夫ならで一生に、覚えぬ男の肌ふれて、身を汗したか淺ましや。女の罪の第一にて、未來は愚かこの世の恥、親兄弟まで名を捨つる、身をいかにせん悲しやな。夢になつてもくれよかし。」と、咽び上げてぞ泣きるたる。歎きの音に源右衛門目を覺し起き上り、これもおなじく酔ひ紛れ、男たる身の道を背く、「はつ。」とばかりに目を見合はせ、互に「はづかし。」と、面はゆけにも涙ぐみ、さ

ろしや、人が聽いたそりやく〜。と、おどされて牀右衛門、「今のは何も皆じやれぢや、謔ぢやく〜。」と言ひ捨てて走つて表へ逃けてけり。無慙やお種は氣もすわらず、恥かしや京の客、今のあらまし聞き給ひ、欺していふとはそも知らず、心のさけしみばかりかは、家中一はいする人の、世間の沙汰を如何せん。胸のだくつき堪へ兼ねて、下女呼び起し酒の爛。「おもても閉めてもう寢よ。」と、ひとり酒汲み憂きつらさ、忘るゝうちも忘れぬは、江戸の夫の事ばかり。涙にいと、朧夜の、月さす縁に人音す。「ヤア是れは源右衛門様、お前はどれへお越し。」と言へば、「イヤ女中ばかりは遠慮に存じ、罷り歸る。」とたち出づる袖をひかへて、「扱はお前は今の事、御耳に入れたるかや。勿體なや恐ろしや。彦九郎といふ男を持ち、眞實にいふべき様はなし。當座の難を逃れんため、欺して申した分の事。御沙汰なされて下されな、偏に頼み参らす。」と、手を合はせて泣きければ、源右衛門も仕方なく、「いや聽いたでもなく聽かぬでもなく、餘り傍から聽きにくく、謠をうたひ紛らしたり。申してもやす大事。拙者は他言致すまいが、雖は袋と外よりの取沙汰は存ぜぬ。」と、振りきり出づるを縋りとめ、「さりとは酷い御詞。御身様も若い殿、我も若い女の身。實のかうした事聽いても、隠しかくすは世の情。この分でないせては、私心落著かす。いふまいとあるかための杯、取交して。」と銚子を取り、濃茶茶碗にちやうどつぎ、つつと干してまた引受け、半分飲んでさしければ、「こは珍らしいつけざし。」と、

振放して退きけれども、身の毛も立つて怖ろしく、わぢく慄へて居たりしが、「こりや侍畜生め。彦九郎殿とはねんごろなり、人間の道に背くと言ひ、御家中の後指、殿様のお耳に立たば、身代の破滅となるが知らぬかや。小倉彦九郎の女房ぞ、侍の妻なるぞ。推参な事をして、必ず我を恨みやるな。沙汰はせまい。サア歸りや。」と、にがくしくも言ひければ、「いやくくく、人の譏りも身の恥辱も、思うてしまつて上の事。よし御承引なきからは、此方と爰で刺し違へ、上方に流行る心中と、國中に沙汰をさせ、ともに恥をさらさんと、覺悟を極め來りし。」と、刀を抜いて胸座とり、「どうぞどうぞ。」とおどしける。女心の誠と思ひ、犬死と言ひ無き名を取るも口惜しし。たらさばやと分別して、「ム、これは眞實か。」「オ、殿様の御勘當うけ、歩に首討たる、法もあれ。僞りはない。」といふ。「扱も嬉しき御心底、何しに無下に致すべき。されども爰は親の家、今戻られては如何なり。明日の夜にても我等が内へ、密と忍んで下されなば、打解け思ひ晴らさう。」としととうつてぞたらしける。無智無學の牀右衛門、一言にだまされほろりとなり、「忝い御情。この上はあこぎながら、とてももの事に今こゝで、ちよつとく。」とすがりしを、「聞きわけなや。」と逃げまはる。襖の彼方に源右衛門、鼓を打つて聲をあけ、蓋「邪淫の悪鬼は身をせめて、く、劔の山の上に戀しき人は見えたり。嬉しやとてよぢ登れば、劔は身をとほす。磐石は骨を碎く。こはそも如何におそろしや。」「なう怖ろしや怖

また重ねて。」と辭儀を述べ、暇乞して歸りけり。文六もおとなしく、「私も旦那の屋敷、今宵は客もある筈なり。お暇申し候はん。祖父忠太夫歸らるゝまで、御師匠様はこの所に、今暫く御座なされ下されい。」とぞ申しける。源右衛門は、「ともかくも、さりながらお袋様と、さしでこれには如何なり。あの御座敷へ參らん。」と、その座を遠慮し立ちにけり。お種は文六送つて出で、「これなう其方は内へちよつと立寄つて、祖父様にお歸りなされと申したも。我もまた戻りたい。りんを迎ひに起してたも。」「心得ました。」と打答へ、主人の屋敷へ歸りける。門さし時の町はづれ、女主人の年若き、夫はながの東留守、心たしかに持つためと、一つ過する酒好み、亂れぬ顔もほかつきて、おもたき頭なで櫛や、向ふ鏡に餘情あり、殿待顔の夕かな。同じ家中の相役人、磯部牀右衛門は病氣とて、江戸供ゆるされ在國せしが、下人も連れず酒戸あけ、「御見舞申す。」とつつと入る。お種はつと鏡を退け、「忠太夫は今朝ほどより出でられ留守にて候。」と、言ひ捨てて入る所を抱きとめて、「これ申し、お留守を存じて參るからは、御親父に用はなし。そもじ様故こがれ舟、人めの岩に波せきて、碎くる磯邊牀右衛門、今年お江戸を勤むれば、御加増あるは知れた事。武士の立身振り捨てて、虚病を構へ願ひをあけ、御國に止まるも皆君ゆゑと思召せ。病氣も諛で諛ならず、戀が病のお種様、假の情のお藥を、ちよつと一服頼みます。拜みます。」とぞ抱きしむる。女房ちと酒には酔ふ。「エ、嫌らしや面倒や。」と、

客振きやくぶりの、よきにすぎては仇あだとなる、先さきの見えざるうたてさよ。「すぐにこれを文六ぶんろく殿返蓋申す。」と言いひければ、「爰こゝは母ははがおさへまし、あひを致いたしてあけません。」と、また引受ひきうけてついとほし、「酒さけがお氣きにいつたらば、一つあがつて下くださんせ。」と、置おかせもあへず杯さかづき取り、「何がさて下くださん。」と、たんぶとうけて一息いきのみ、文六ぶんにぞ戻もどしける。今度こんどもちよつと口くちつけて、「憚はづかりながら叔母おほはな様へ上げませう。」とさす所ところを、「はてさて如何いかに飲のまぬとて、あまり素氣すけない一つ飲のみや。母ははがあひをませう。」と、たぶたぶ受うけてつと干ほし、「母ははの身みで我が子このあひ、目出度めでたい上の目出度めでたさに、江戸えどの父御ちちごの名代みやうだいに、爰こゝは一つ重かさねませう。サアおあひを頼たのみます。」と、又源またげん右衛門えもんにぞさしにける。「扱さては御内儀ごないぎ様には、ちと御用ごもちると見みうけたり。馴々なれくしき事ことながら御手許ごてもと見ん。」と突つきもどす。妹いもうとは笑止せうしがり、「いやく深ふかうは飲たべられず。殊ことにこの頃ころあてられて、氣色きしよくも勝すぐれぬ折柄せりからなれば、姉様あねさまもうおかしやんせ。」と、側そばから強たつて止とどむるが、張合はりあひになる上戸じやうこの癖くせ、「エイ何言なにいやる。お肴さかなもない酒さけなれば、飲のんであけるが御馳走ごちそう。」と、得手勝手えてかたよりかへ銚子てうし。客きやくは手鼓てづみ一曲きよくの、「これでは一つ。」とさし廻めぐる、杯さかづきとつて天晴あつはれな諸もろつはもの交まじはり、頼たのみあるなかの酒宴しゆえんかな。杯さかづき數返傾へんかたける、目ひも晩景ばんけいに及およびしかば、妹いもとの主人しゆじんの屋敷やしきより中間ちうけん來きたつて、「これ申しお藤女ふぢぢやう郎らう、迎むかひに來きましたお歸かへりなされ。御門ごもんがしまる。」と呼よばれば、「オ、く、角藏かくざうか大儀たいぎぢやの。姉様あねさまさらば歸かへりませう。お客きやく様さまへも無禮ぶれいながら儘まならぬ奉公ほうこう人。

幡山、國育ちとは思はれず。妹お藤も立ち出でて、「私は藤と申して、これなる者の妹にて、御家中に奉公つとめ參らすが、文六に御ねんごろ、お嬉しうこそおはしませ。姉の配偶彦九郎殿、留守の事なり小身なり、閒所とても無き儘に、洗濯よろづに至るまで、斯様に親の所にて致す譯にて候へば、文六鼓の稽古まで、此所にては何事も、御不自由に候はん。彦九郎殿が戻られては、内へも申し入られましょ。それお杯でも持つてこいやい、父様はお留守か。ひとり女子が這ひ出なりや、お客が一人あつても、ア、不都合な事許り。ア、眞にえへえ、お恥かしや。」と會釋する目元は姉に劣らじな。「いや何もお構ひなさるゝな。」と、挨拶とりくくなる中に、下女は心得、酒肴取揃へてぞ出しける。女房お種は酒すきにて、「オ、これは氣がついた。浪人の親なれば、お肴はなくとも、お慰みに一つ。」と言へば、「御用もあらうに近頃これは忝し。まづそれより。」「いや其方よりお辭儀なし。」「然らば文六殿より。」と、言へどもさすが酒好み、手まづさへぎる杯の、「母甲斐に私からお燭を見て。」と、引受けてさらりと干し、文六にぞさしにける。「我等はかつて飲べぬ。」とて、ちよつと飲んでお師匠へ慮外ながらと禮をなす。源右衛門戴きて、もとより上戸の家の者、舌鼓たんくと打ち、「ハツく天晴御酒かなく。拙者も深うは下されぬが、ちと御酒を好む故、方々吟味致せども、これにはなかなか京酒も及びなし。色よし香よし風味よし、御亭主様の御心まで、御なつかしう候。」と、酒挨拶の

干上りて、物干棹の棹竹の、よい仕事して嬉しやな。江戸の男を是れからは、まつ風きかん。」との、めきける。一子文六奥よりも、「これ申し母ぢや人。内々御聞きなされたる、鼓の御師匠宮地源右衛門様、只今稽古も御仕舞なり。次手ながら知人に、御なりもや。」とぞ申しける。「オ、さればく、さきより然は思ひしかども、張物にしかゝりて、遅なはり参らせし。」と、襷もといて身繕ひ、座敷にこそは出でにけれ。源右衛門膝をなほし、「我等は、京都堀川下立賣に住居の者、御家中の方々へ鼓の指南仕り、ゆくゆくは御奉公の望みも叶ふべき様子により、折々御當地へ罷り下り、一年半五ヶ月三ヶ月逗留仕り候へども、未だお配偶彦九郎殿には、御近付にもなり申さず。この頃御子息文六殿、鼓御所望に付き、師弟の契約致せしが、中々御器用千萬。嗚お袋の御満足、推量致し候。」と、殷懃にこそ申しけれ。女房會釋し莞爾と笑ひ、「母と仰せ候へば、彦九郎も私も年寄に聞え候が、もとの者は我等が實の弟を、つれあひ養子に致されまし、僅か御扶持の小身者。先づ只今は御家中の、然る方へ預け置きて候が、何とぞ御師匠様の御世話にて、鼓の一番もうち習はせ、御直の御奉公に出したきとの念願にて、配偶留守の内なれども、祖父御が御頼み申されたり。この五月には配偶も御供にて歸られん。その時分は一番もうつて、父御に聴かする様に、一しほ頼みあけます。」と、挨拶さはいしとくと、物やはらかできつとして、姿なら面體なら、京のどなたの奥様にも、誰が否とは因

つきが、目にちら／＼と見る様で、ほんに忘る、隙もない。ふだん戀して居る様で、いつか／＼とまつ。』の木に、衣張結び細引の、いうて思ひや晴らすらん。妹のお藤打笑ひ、「姉様それは榮耀ぢや。私が様に根から男のない身でさへ、みんなごと堪忍しまするぞや。殊にお屋敷行儀づよく、この様な親里でも、一夜泊りも法度なり。姉様なら死なしやんせう。人が聞いたら笑ひましよ。」「アレ奥に鼓の稽古がある。高い聲さつしやるな。しいしく。」を張物に、かいまみ覗く鼓の手に、心も乗りて配偶を、うはの空なる戀衣、松に打懸け干す内に、曲も終りの掛聲、「ヤアかたみこそ今は仇なれ是れなくば、忘るゝ隙もありなんと、よみしも理や。猶おもひこそは深けれ。」「あら嬉しや。あれ配偶のお歸りぞや。いで／＼迎ひに參らう。」と走り寄れば、「これ姉様、エ、正體ない。彼は庭の松の木よ。彦九郎様は江戸にぢやわいの。氣が違うたか。」と恥ぢしむれば、「エ、愚かなお藤、何の氣が違はうぞ。男の留守の徒然の、せめての心慰みよ。爰は所も因幡國、松としきかば歸り來らんと、うたひつ鼓の頼もしさ、あら頼もしの御歌や。立ち別れいなばの山の峯におふる、まつとしきかば今歸り來ん。それはいなばの遠山松、これは懐かし君爰に、すまの浦わの松の行平、たち歸りこば我も木陰に、いざ立ちよりに磯馴松のなつかしや。松に吹き來る風も狂して、夫の留守居の寂しき折から、鼓に心を慰むなり。吾妻灰りも早近々の、風の便りの風もすゝしの絹袴、洗ひてはるの長閑なる、影に程なく

堀川波鼓

上之卷

讀さても行平三歳が程、御徒然の御舟遊び、月に心はすまの浦、夜潮を運ぶ海士少女に、姉妹選ばれ參らせつゝ、折にふれたる名なれやとて、松風村雨と召されしより、月にも馴るゝ、須磨の海士の、鹽焼衣色がへて、かたりの衣のそらだきなり。それは鹽焼くあま衣、これは夫の江戸詰の、留守の仕事の張物や、妹のお藤は折よくも、幸ひの里歸り、サア手傳とゆふ禪、糊つけしほる姉妹の、袖しづくだる風俗は、國に名とりの濡者と、聞えしもさる事ぞかし。一否なうお藤、必ずお主の氣に入つて、いつまでも奉公しや。男やなんと持ちやんなや。身につみてこそ知られたれ。彦九郎殿とは様子ある夫婦故、よめりの時の嬉しさは、警へん方もなかりしが、小身人の悲しさは、隔年のお江戸詰。お國に居ては毎日の御城詰、月に十日の宿直番。夫婦らしうしつほりと、いつ語らひし夜半もなし。然れどもぬしは侍氣、かうつとめねば侍の、立つ身がならぬとて、心づようは言ひながら、去年六月の江戸立に、又來年の五月にお供して、下るまでは逢はれぬぞや。無事で居よ、よう留守せよとの貌

期の眼まなこにも、夫をつとを思おもふお龜かめが心こころ、引ひき上あげんとや思おもひけん。這はふく岸きしに寄よると見みえしが、眩くらむ眼まなこに
 氣きも亂みだれ、同おなじく池いけへどど落おち、互たがひに助たすけ引ひき上あげんと、抱いだき上あぐればどど伏ふし、かき上あぐれば
 かつばと伏ふし、心こころ許ゆるりを力ちからにて、「なう與よ兵衛へいゑ様さま々々く。」「お龜かめく。」と呼よび交かはす。絶たえく切きるゝ息いき
 の下した、この世よからなる地獄ぢごくかや。哀あはれ果敢はかなき 三重みへ有あり様さまなり。疵きずの口くちに水みづ入いつて、女をんなは生しょう年ねん十五さい歳さい、
 時ときも皐月きつきの菖蒲あやめ咲さく、沼ぬまの泡あわとぞ消きえにける。夫をつとも死しなんと脇差わきざしを、尋たづね漂たぶ朝嵐あさあらし、里人さとびと下くだりあひ、
 「すは心中しんぢゆう。」と飛とび入いりく、夫ふう婦ふをとつて引ひき上あぐる。女をんなは死しして池水いけみづも、みな紅くれなゐに名なを留とどむ。
 男をとこは生いきて生甲斐いしがひの、かひもあるかや蜷川しづみがは 跡白浪あとしらなみとぞなりにける。

花出づる月、玉の様なる若い者、若い女の頑是なさ、慰めらるゝも慰むるも、分けて分たぬ涙なり。

「あれ早東も白うだり。サア念佛。」といひければ、「心得たり。」と懐より、剃刀二挺取り出し、「これも母様の額たれとて譲りなり。私はこれで死にたい。」と、泣く／＼出すそのなかに、向うの野道を人通ふ。「あれよく。」と心は急く。二挺の剃刀一つにとり、「南無阿彌陀佛。」と引寄せれば、お龜は常々信仰の、「南無觀世音菩薩様。母様の戒名教譽樹林信女、一つ蓮に導き給へ。南無觀音様々々々。」と、手を合はせて待ちけれども、男は目眩れ差しうつぶき、只泣くより外の事ぞなき。「エ、憂き目を見せ何事。」と、夫の手を取り我が咽喉に、押當つれば思ひきり、「南無阿彌陀佛。」と笛のくさり、剃刀の刃も折れよと、一刹は剝りしが、若き者の悲しさは、止めの急所を知らずして、まだ息絶えず悶ゆるを、疵の口を隠さんと、抱への帯をくる／＼と、二三遍引廻す。憂き目のほどぞ不便なる。「我もやがておつ付かん。」と、咽喉にあつる剃刀の、刃は鋸と折れ砕け、皮肉ばかり切れけるを、力を入れて突きけれども、通りつべうはなかりけり。「南無三寶。」と剃刀すて、傍に抜きおく脇差の、鞘をもつて引きあぐる。鐔は重し手は弱る、弾んではぬる勢ひに、脇差ぬけて樋の口の、井出の水草の漲つて、さんぶとこそは沉んだれ。「エ、しなしたりこは如何に。」と、這ひ下る、堤の露、翻れし血の足滑り、池へどうど落ちたりけり。池は深くて泥土深し、底の脇差尋ねかね、浮きぬ沈みぬ漂ひしが、今を最

て、早東雲も近づけば、小田守る賤に忍ばんと、右へ下れば綱舟の、目にやか、らん行く先は、早曾根崎の宮奴の、朝淨めする折なれば、今は仕方なつ草の、人目堤の下陰を、爰そ夫婦が最期場と、泣く泣く休らひ立ちにけり。お龜は夫の顔を見て、「連立つ冥途の道とは知れど、今今生の別れとて、言ひたい事の何やらが、胸にはあつて口へ出ず。飽く程顔が見て死にたや。心なの短夜」と、身を投げかけて泣きるたり。「ア、愚かや愚癡や淺ましや。永き來世があるぞかし。さり乍ら心に懸るは其方の父御。二人とも無き獨子を、憎や婿めが殺せしと、さこそ恨み憎しみの、これ罪障となるぞ。」とて、共にひれ伏し泣きければ、「いや父様は男氣の、思ひ諦め有るべきが、いとしや在所のお袋様、姑なりとて一日の、みや仕へした事もなく、大事の子をば嫁故に、失うた殺したと、お叱りなされんこれ一つ。目の不自由な伯母様の、力となるはこち女夫。さぞ今頃は泣き悲しみ、眼でも眩はぬかどうしたと、胸に塞がるこれ二つ。又母様の十三年、觀音經を書きませう。佛になつて下さんせと、墓に向うて約束の、これが違うた。何やかやかくまで重き罪科の、閻魔の前には黒鐵の、帳につくと聞くものを、よい所へよも往かじ。火水の地獄も厭はねども、夫婦別れて行かうかと、これのみ猶も迷ひぞ。」と、聲も惜しまず歎きける。流石男は力をつけ、「一途に行かうと別れうと、皆一心の向け様ぞ。氷の地獄火焰の地獄、劔の山へ登るとも、取交したる手は放さじ。」と心強くは言ひけれど、まだ蒼む

るとても、必ず契り米屋町、本町筋の軒深く、思ひ染みたる中なれば、埋まば同じ安土町、生まれ變りて又いつか、娑婆の便りの備後町、思へば我も元服し、私も若いに鐵漿つけて、のがれし賽の河原町、三途の瀬戸の淡路町、超ゆれば親の古里の、名にも別る、平野町、曙近き時太鼓、どう道修町これやこの、修羅の太鼓の響かと、共に驚く袖と袖、抱き寄せつゝ泣く許り。聞けば私も母様の、三十過ぎての初子とや。その譲りかや馴れ染めて、一夜離れた事もなく、交す枕に子種のないか。是れも産ますの數ならば、根を掘る竹の伏見町、高麗橋の西東、牀も定めぬ立君は、これも世渡る習ひとて、浮世小路の細き聲、唄うて歸るその歌の、品ある中にも來ぬ人を、まつほの浦の夕風に、やくや藻鹽の身を焦す。夫れは吾妻の物語、耳に聞きたる許りぞや。其許と我は浪速津の、貴賤羣集の見るめかる、尼が崎町過書町に、はや北濱や中の島、明日は天満の橋々賣りて、唄梅田の、梅田の堤を染めし、紅葉等屋のな女夫の心中、男二十二お龜は十五、年にあはすりや、いたづらくぐぢや。サア繪雙紙え、餘所の口の端、ア、餘所事を買ひ求めては慰みし、この身の果てを讀賣に、誰が節つけて田舎まで、唄ひ流さん蜷川、水も濁りてこの世へは、いつ歸りすむ根なし草、左手は無常の燒草と、惜しからぬ身は惜しからず。「灰となさうかこの肌」「煙となるかこの形」「惜しや」「いとしや」「悲しや」と、引き合ひし手を猶締めて、涙の限り泣きつくす。杜の小鳥、川千鳥、かつほう鳥も聲さび

せ、身を悶えてぞ歎きける。町の夜番が時申し、又長持の蓋あけて、抱きあひてぞ忍んだる。夜番は物に心をつけ、けはしく門を叩き立て、「これ起きたく、二階の蟲籠をはづいて、上から帯がさけてある。長持も出してある。盗人さうな。」とわめくにぞ、家内一度に目をさまし、二階へ上れば娘はなし。「お龜様が見えぬわ。そりや提灯よ釣鐘よ。八つ過ぢや八軒屋、河内よ堺よ川口よ。」と、足許へは氣もつかず、手分をしてぞ追つ驅けける。夫婦は隙間に長持より、そつと出でて四邊を見、先立ち失せし心中の、戀の移りの香をとめて、梅田橋へとこゝろざし、二三町こそ三重走りけれ。

下之卷

末期の道行

今捨つる身にも恐ろし犬の聲。辻を隔てて見返れば、あれで生まれし町所、家の馴染も十五年、その春夏のこの月は、祝月とて物忌ひ、しの字をさへも嫌ひしが、死して死骸を知る人に、その死恥もつゝましく、其方の鬘亂れずや。いや我よりもあの様の、鬘撫で附けて搔きなでて、死んだ跡までよい殿と、人にいはせまほし明、今宵の月を月々に、待ちしも遂に引きかへて、冥土の使我々を、待つらんものと搔暮れて、涙曇りの十七夜、二人が袖に宿しけり。よしや地獄へ墮つるとも、假令佛にな

皆我々が不運なり。如何様になるとても、親をも人をも恨みとは、思ふまいぞ思やるな。」と、一聲い
うたばかりにて、誰がものいうても返事もせず、歎き沈みし有様は、目も當てられぬ風情なり。二日の
内は外聞悪し。表を縮めて追ひ出せ。」と、薙下して情なく、引き出せば伯母お龜、「なう今暫し。」と取
り付くを、もぎ放し、門より外へ押し出し、潛戸をはたとさしければ、内には妻の叫ぶ聲、外に
夫の忍び泣き、涙に曇る十七夜、月に別れて三重出でにけり。宵より二階に引籠り、待てど暮せどそ
の人の、そよとばかりの音便も、早九つの鐘の聲、書置涙に文字消えて、先へ死んだもましならめ、
萎れ侘びたる折節に、ひそかに人の足音す。そつと二階の障子をあげ、覗けば夫もかき暮れて、互に
聲も立てばこそ、うなづきあひたる許りにて、泣き崩折れしぞ哀れなる。用意仕置きし差替に、夫の
白き帷子、緋縮緬に結びさけ、下せば下より受取りて、死ぬる覺悟と心得ける。南無三寶西町より、
新町戻りの駕に提灯、走つて近く車長持、蓋をあげてぞ隠れ入る。漸う遣り過し出でければ、いつか
は釘を放しけん、蟲籠を外し帯結び下け、傳うて下りんその用意、夫は長持ひきいだし、心を碎く二
階には、消ゆる許りに蜘蛛の、糸にかゝれる身の命、露の便りの危さよ、憂さよ怖さよわな／＼と、
三重 顛ひ傳ふを抱きおろし、二人が顔を見合はせて、息つき胸をしづめしが、「この頃とだえし添寢の
牀、ゆかしなつかし戀しや。」と、互にひしと抱きしめ、齒を食ひしほり息をつめ、顔と顔とを打合は

め殺さんとする所を、與兵衛壁より這ひ出でて、むんずと組んで引きければ、お龜は奥に逃げ入りける。「已不義者身上の敵。」と、掴みついて組み合ひしが傳三郎は剛力者、非力の與兵衛を取つて投げ、足をもためず逃げ失せしは、残念なりける次第なり。「さわがしきは何事。」と、亭主歸る折節に、手代も皆々立歸り、裏へ通れば與兵衛は、南無三寶と起き上り、狼狽へ廻つて切り明けし、倉の壁へ這ひ入る所を、長兵衛飛び懸り、兩足掴んで引摺り出し、「ヤレ與兵衛めこそ倉の家尻を切つたれ。」と、呼ばはる聲に驚き、伯母はお龜に手を引かれ、「そも實か。」と許りにて、あきれ果ててぞるたりける。「道具はあるか吟味せよ。」と、鍵投げ出すを手代ども、戸を明け内に走り入り、「なにも道具は違ひなく、これぞ不思議。」とふすほつたる、火繩艾を取り出すは、仕方なうぞ見えにける。親ははらく涙をこぼし、「如何なる天魔が入り換つたか。町衆を騙つて讓狀を取り出し、大恥かいたる昨日の今日、親の倉の家尻を切り、この火繩の火は何にする。ヤレ罰當りめ、八百屋お七を見居らぬか。聲山立てて町へ聞え、下で濟まぬ詮議になれば、如何なるおきめにあふとか思ふ。そこをせめても不便さに、高い聲も得爲ぬわい。これでも己が心には、伯父をつらしと恨むらん。本氣ではよもあらじ。碌な死をせまいかと、却つてこれが不便なり。」と、涙を流し目を顫はし、色を違へて怒りける。お龜涙をおさへ、「これ與兵衛様うろたへまい。言譯なされ。」と言へば、「イヤ證據もない言譯、見苦し氣に何かせん。

氣、水晶に火移りて、艾燵り出でけるを、火繩に移しやすくと、荳に氣をぞ休めける。お龜は伯母を寐入らせて、倉をほとく敲きける。與兵衛顔を差出し、「これは何たる不仕合。いふ事爲る事に違ひ、獨り綱にかゝりしは、如何なる因果。」と泣き口説く。お龜は思案やしたりけん。「かうなる上は一心を据ゑ、壁を破つて逃げ出で、二人連にて在所へ行き、今兄弟と公事をせん。この暮紛れに早う早う。」といひければ、「オ、我もさう思ふ故、壁は餘程崩せしが、壁下地の太竹を、切る音の響きては、如何あらん。」といふ所へ、「あれ〜芝居の替りの太鼓。サアこの間がよからう。」と、脇差抜いて切り破る、音も嵐の三右衛門、替り〜と打つ太鼓に、隠れて餘所には三重知れざりけり。今が弟傳三郎、かくとも知らで来りしが、「旦那は留守か。お龜様は奥にか。」と、裏へ通つて後より、遠慮もなく確と抱く。「エ、暑くろし誰ぢやいや。ム、傳三郎か。主といひ主ある身に、この様な無作法は、覺悟なうては成らぬはず。その根心が聞きたい。」と、騒がぬ顔で裏問へば、「ハテ根心とて別はなし、與兵衛のたはけめは、どうでもこゝには置かれぬ談合。君さへ合點なされるれば、賤が婿になるぢやけな。但し阿房がお好きか。」と、猶理不盡に抱き付く。「オ、聞えた。扱はかの讓狀も、其方が欺して取らせたか。」「如何にも〜。町儀が何とも濟まぬ故、手盛にさせて食はせたる才覺を御覽ぜ。」と、いひも果てぬに、「オ、それを聞かうといふ事よ。あれ間男よ。」と聲立つる、口に袂を振ち込んで、絞

ひしが、色變りしか知らねども、若い者はたしなみぞ。與兵衛と其方が肌の物に縫うてしや。男も女
 子も旅他國、どこでどの様な事あつても、肌の物の善し悪しにて、常まで思ひ知らるゝ」と、渡せば
 お龜、「忝し。」と、夫諸共戴きて、跡まで清く顯はせし、心の色の緋縮緬、縮む命ぞ果敢なさよ。
 時に亭主立歸り、店の道具を見廻す間に、「あれ父様の。」と言ひければ、與兵衛裏へそろりとぬけ、細
 目にあいたる倉の戸を、明けて内にそつと入り、くろゝをはたと落しける。長兵衛は不機嫌顔、「ヤア
 伯母御出でなされたか。手代共は一人もをらぬ。何處へうせた。」といひければ、お龜聞きもあへず、
 「はて、忘れさしやんしたか。一人は河内のをぢ様へ、一人は尼ヶ崎へ買物にやらしやんした。」「オ
 オ夫れを何の忘れはせぬ。まだ歸らぬか野良共。」と、表裏を見廻して、「これはく、男切は一人も居
 ず、倉に錠も下さぬか。扱々無沙汰千萬。」と、つぶやきく錠おろし、鍵巾著に打入れて、「伯母御遊
 んでお歸りなされ。我等は町の年寄へ、婿の拘摸めが談合に、參る。」というて出でけるは、苦々しく
 ぞ見えにける。お龜は様々心亂れ、「伯母様ちつとお息み。」と、奥の間にこそ入りにけれ。無慙やな與
 兵衛は、綱代の魚の如くにて、倉の窗より顔出し、「水にても湯にても、せめて貰喫みたやな。煙管火
 繩は懐中す。お龜來らば火がほしや。」と、咽喉かわかし待ちけるが、「エ、思ひついたり。」と、倉の案
 内覺えたり、水晶の根附尋ね出し、艾を少し押し當てて、入日の窗にさし向へば、實に炎天の酷陽の

親の辛苦一つにて、仕出いたるこの身上、夫れをまねぶが子の作法。何であらうぞ、唐物屋衆さへならぬ程に、ぞべくと著飾つて、謠講の俳諧の、若い其方を女房にもつて、内の茶が飲み足らぬか、茶屋へもちよこく遣ふと聞く。意見をすれば燻りを出し、商賣は袖にして、小路隠れの家出のと、聞く度ごとにこの伯母が、胸には釘を打つ如く、いふさへ涙がこぼるゝぞや。これなうお龜、年はいかねど男を持ってば大人役、夫の身持悪ければ、女房の名が出るぞや。戻つたりとも寄せ付けず、江戸長崎へも追ひ下し、鹽を踏ませて人にしや、とはいひながら與兵衛めは、氣の弱い生まれつき、無分別の出ぬ様に、女夫あひをようしやや。内に惡魔のある事も、憎い者は生けて見よ、これも世上の不祥ぞかし。ア、淺ましやこの伯母が、年はよる目は見えす、配偶には離るゝ、子は養子なり嫁掛り明日が日往生申しても、骨を拾うて眞實に、泣いてくれるは與兵衛とそなた、子同然にいとほしく、よいが上にもよう仕たく、朝夕の看經にも、其方女夫を祈るぞや。お袋がこの世にならば、これほど苦勞は聞かじもの、恨めしの娑婆世界、片時も早う参りたや。」と、咽せ入りく、或は憐み或は叱り甥子を思ふ實の涙の、與兵衛もまろび出で、物は言はれず手を合はせ、拜めばお龜は聲をあけ、「只伯母様を母様と、思つて頼む。」と許りにて、絶りあひてぞ泣きるたる。道理すぎて哀れなり。伯母は涙の間よりも、懐より縮緬一卷取り出し、「これ此の緋縮緬は、今はこの手は渡らぬとて、この前人に貰

見るよりも、「これ誰もない大事ない。これなうこれ。」と呼ばはれば、笠をも取らずつゝと入り、二人ひつたり抱きつき、伏し轉びてぞ泣きるたる。稍あつて與兵衛、「ム、この白無垢を仕立つるは、死ぬる合點か嬉しや」といへば、「オ、さればとよ。これは斯うはして置けども、是非に叶はぬその時は、私が方から知らせをせう。必ずそれまで短氣な心持たんすな。こな様いかう狼狽へてぢや。心を納めて下さんせ。ひよんな心を持つまいぞや。」と、力を付くるその中にも、流石は年も童氣の「いつそ連立ち走りたい。」と、また縋りつき抱き寄せ、引寄せく歎きける、有様こそは不便なれ。下女のふりはさし心得、門に立つて西東、心をつけてるたりしが、「あれ立賣堀の伯母御様、駕籠が見える。」と驅け入れば、「こは何とせん。伯母様の目は見えねども、内の者が見つけやせん。」と、店に立てたる賣佛壇の、戸を明けてこそは隠れけれ。程なく駕籠を昇き入れて、伯母も下るればお龜は、「これはようこそ。」と、手をひき奥に入りければ、供の女は駕籠舁に、「錢をわたしも歸りませう。晩方迎ひに参りませう。」と、言うてその儘歸りけり。伯母は溜息ほつと吐き、「爰のはまだ戻らるか。今朝こちへ来て、與兵衛が話をめさつた故、あるにもあられす氣遣はしく、さてこそ見舞に來たるぞや。總じて入家人増に、小言のあるはならひなれど、和女や與兵衛が親々は、伯母が爲には兄弟なり。私御寮達は甥姪なり。どちらに最良偏頗もない。まんろくをいふ時に、皆與兵衛めが悪いぞや。胸前垂に草鞋がけ、

り呼び懸けて、息をはかりに泣きかはす、山時鳥草月雨、涙の雨もふる道具屋の、聲ばかりして佛は、隠れ笠屋の憂き名残、別れくくに三重なりにけり。

中之卷

花婿と、名にこそ立てれ下草や、娘ぞ家の心齋橋、女夫の間は烏鶺鴒や、笠屋お龜は夕より、寐られぬ目元落窪み、思ひ染みたる身の大事、仲よき下女にも語らねば、誰も斯くとは白無垢を、仕立つる縫目大針に、二度と著まいと思ふにも、涙先だつ折柄に、町内の娘友達二三人、「お龜様内にかえ。今日は五月の十七日、とうからの約束、三十三番連れだちませう。サノ拵へさんせ出さしやんせ。」と、なんの氣もなく誘ひける。観音様と聞くからに、未來の縁も嬉しけれど、「父様も留守なり、これも仕立てて仕舞ひたし。今日は連になりますまい。よう拜んでや。」と言ひければ、「夏白無垢がいる事か。參らしやれ。」といふもあり。「よしかおかしやんせ。今のおぢやつて見やつたら、留守明けたとてやかましからう。」「ほんにお龜様も、よい姑を持たんした。こちらばかり廻りませう。與兵衛様とこな様と、一つ蓮と拜みませう。」と、言うて出づるも常なれど、思ひあればや身にぞ染む。かかる所へ與兵衛は、今朝までうかく、彷徨ひ歩き、心も空に行くともなく、我が家の門を徘徊す。お龜はちらと

與兵衛夫婦に譲り申し候。外より違亂すこしもなし如件。これ見よ。」と與兵衛が目にしつくるを、よく／＼見れば紛ひもなき、我が方への譲状、「ハア、南無三寶。叔は傳三郎めが賢人面を見せかけて、我を取つて陥さん爲、裏の裏を喰はせしを、知らではまりし悔しさよ。たばかられし口惜しや。」と、齒がみをなして泣き居たり。長兵衛も怒りの涙「こりや卑性者、人な恨みそ。皆己が誤りぞや。母なき娘が大事に思ふ婿が、何とて憎からん。皆根性のひがみから、親にも恨み出で來るぞ。恨めしの心や。」と、譲状を與兵衛が面に打付けどうど伏し、大聲上げて泣きければ、妾はいきつて、「咎もない傳三郎に、いひかふせ仕やるな。」と、啼りかゝつて怒りける。娘は我が親、我が夫、中に立つたるやるせなさ、傍で泣くやら喚くやら、往來もとゞまるばかりなり。神子町中がをり合はせ、「人がたかる何事ぞ。早を通りや。」と叱りける。「ア、御尤もく。御町の妨げ御免あれ。サアおのれ在所へ駕籠で送らせん。」と、ひがやすな與兵衛を、引立て駕籠に押し込めば「何の面目在所へは行くまい。」と、駕籠の左へつゝと抜けた。親もつゞいてつゝとぬけ、又引捕へて乗せれば抜ける。親子くるくるく、出つ入りつ、どこぞのはずみに長兵衛、駕籠をぬけるを町人ども、「エ、面倒な。」と押し込めて、駕籠鼻き上ぐれば長兵衛、「ヤアこりや違うたく。」と、わめけど更に聞き入れず、大坂の方へ昇いて行く。お龜は歎きこがれしを、下女や手代が手を引いて、なだめ歸れど立歸り、とまり見返

郎に跡式取られ、この奥兵衛がすごくと、生きて在所へ歸られうか。これ誰が業ぞ、その女めとの談合ならん。この事を某には、誰が知らせたと思ふぞや。おのれが弟の傳三郎、今まで己ら一本と思ひしに、奇特にも傳三めが、天道がおそろしさに、知らせますると告げし故、後日の證據に取つたるぞ。おのれはおのれと思へども、さりとては親父様、可愛い娘の男なり、甥子とは申さぬか。さうはなされぬ筈なり。」と、聲を上げて泣きければ、お龜は傍に引添うて、「母さま生世の折ならば、彼等に口を利かせうか。母様はこの世になし、伯母様といへば目は見えず。夫婦は誰を便りにせん。」と、くどき歎くぞ哀れなる。長兵衛眉を蹙め、「これは努々覺えなし。おのれを町へひろめして、直に出した讓狀、身が目を塞がぬその内は、年寄行事も封を切らぬ書置を、傳三が知らう筈がない。讓狀を奪ひ取つて、親に難題言ひ懸け、今兄弟に無實をいひ、大坂に置かぬ公事だくみ、おのれ一人が智慧でない。サア讓狀が物を言ふ。三つ鐵輪で讀んで見よ。」と、懷中へむさほりつく。「いやこれ親父様、でんどで披く讓狀、後の證據に封じも解かず持つたれば、此方の手へ渡さうか。權柄になさるるな。」と、もぎ放せばこづかを取り、引伏せく踏んづ叩いつ、散々に打擲し、引起いて讓狀、奪ひ取つたる有様は、目も當てられぬ次第なり。「オ、成程、身が判封の儘、只今披くこれ聽け。」と、封を解いてぞ讀みたりける。北久太郎町心齋橋表口五間半、裏ゆき町並二十間家財残らず、娘お龜増

母様の、十三年忌の口寄に、ちよつと寄つたまでの事。して父様はあの人連れて、何方へ。」と言ひければ、「オ、されば與兵衛めが、在所へは戻らいで、町の會所の帳箱に、入れ納めた讓狀、身が使と詐つて、取つて往んだと年寄から、斷りがいうて來た。彼奴に讓る讓狀、取つて何になる事ぞ。家を棒に振りをるか、但しはどうぞ公事企みか。日頃は此所な女子と、いひごと小言が絶えねども、五分五分に聞いて居た。彼奴が悪いに極まつた。河内の親に言ひ渡し、直に埒を明けんため、來ればあれで見付けたが、こゝらへはうせぬか。」と、うそ／＼見廻し神子の門、「こりや爰にけつかると引出せば、與兵衛は被き菅笠身に纏ひ、うろ／＼出でしその風情、お龜は、「わつ。」と泣き出す。笑止千萬哀れなり。妾笑つて、「これ與兵衛様、このせいするな私を、鷹の熊手の掴みづらのと異名をつけ、八町まちへ名を立てて、オ、心の直な跡取様、かうした事をなされても、これでも家が立ちますか。コレ與兵衛様、やあ與兵衛殿様。」とぞ喚きける。與兵衛はさしうつぶいてるたりしが、顔を上げて、「これ女かましい。エ、恨めしい親父様。あの家屋敷家財まで、私夫婦へ讓りの約束、なれば親子と存する故、ふしようの事も堪忍し、心一ばい働けども、何をするのもお氣に入らず、在所へ歸れ戻れとは、オ、／＼道理がなく、家屋敷家財まで、今が弟の傳三郎に、取らせるとある讓狀、この與兵衛が聞いてゐる。明日まで親父様、萬一の事も有つた時、町衆が立合ひ讓狀を披いて、傳三

様。「どれどこに。」「これはお龜か。」「與兵衛様か。あんまり便宜もない故に、生口寄せに來ました
が、なぜに戻つて下されぬ。おりやどうならうと構はぬ氣か。」と、継りついてぞ泣き居たる。「オ、お
れとてもそなたに心が引かされて、在所へもえ歸らず、大坂中をたち迷ふ、雲介同然の身持となり、
今日は河内へ行かうかと、小堀口までいつたれば、親父とかまの今めとが、これも在所へ行く風で、
跡から來たをちらりと見て、漸う逃けて戻つたが、おれを見たか知らぬまで。怖い事ぢや。」と語りけ
る。「はて見付けられたら大事か。恨みも腹の立つ事も、私に免じて下さんせ。昨日は私が氣晴らしと
て、父様と半四郎の心中狂言見たれども、餘の事は耳へもいらす。半九郎お染が最期の臺詞、此方の
胸に皆こたへ、二人死ぬなら死にたいが、こな様死んで下さりよか、どうかかうかと思つて居て、四
郎五郎が不心中、面白いとて笑へども、私や一日泣いてゐた。泣いてばかり居たわいの」と、袂に
取り付き聲をあけ、十五になるやならずにて、夫を思ふ眞實の、歎きの涙ぞ奇特なる。「あれあれへ見
ゆるは親父ぢやないか。葛籠笠は今めぢやわ。逢うてやかまし茲御免。」と、神子の門にぞ隠れける。
親長兵衛は手代を連れ、大汗流いて來りしが、いま大聲上げて、「ヤアこれはお龜様、二十二社巡りと
て、味な所へ來てござんす。如何に男を持つたとて、若いなりしてびらしやらと、あんまりほたえさ
つしやるな。」と、嚙み付く様に夕立の、鳴る雷の如くなり。お龜ははつと怖ろしく、「今日の次手に

よかと、涙が溢れて口惜しいわいなう。「おいとしやく。あの今めといふ奴を、出入も止めうと思へども、母様の存生より居たる者の事なれば、生若い私が身で、出過ぎた事を控へしが、この秋は母様の十三年忌も仕舞ひまし、ふつつと出入をやめさせん。してこの間五七日は、河内へ歸りて御入かや。そよとの便りもない事は、扱は我にも秋風かや。「ア、何しにそもじに秋風の、立田の山の初紅葉、古郷へは錦を著て歸ると申す。今すぐくとこの姿、何とて在所へ歸られん。晝は生玉天王寺、天満小橋に河口を、終日歩む時もあり、或は芝居で目を暮し、旅籠に命を養ひて、暮るればそもじが懐かしく、人目忍びて門に立ち、軒の下なる長持に、そつと隠れて折々は、若しも二階の格子から、顔も見えるか聲するかと、蓋を明方近づけば、立出で歸る夜毎には、なほしも思ひ深草の、櫛に通ひし車長持、巡り逢ひたや語りたや。語るに盡きぬ生口も、今はこれまで棗弓。「引いては歸る習ひなりとも、暫しが程と、せめて留むる甲斐もがな。「甲斐こそなけれ縁あらば。「あふも不思議。「あはぬも不思議。「逢はずは何を玉の緒も、絶えなば絶えね。」と伏し沈み、死したる人に逢ふ如く、名残を包む涙の袖、寄り来るよりの生口は、神上りして覺めにけり。親の意見は直なれど、傍のとりなし横時雨、どこをしやうどにさして行く、笠屋與兵衛在所へも、面目なしと戻りかね、心は有頂天王寺、神子町に迷ひ來りしが、お龜は神子に一禮して、立出づる門口に、下女が見付けあて、れ與兵衛

て、何か恨みのあるぞとよ。」「オ、二世と契りていとしいもの、そもじに恨みのあるべきか。小夜衣とは親ならぬ、親の手かけの芝草、目をつく様に家の内を、立てうと伏せうと儘にして、陰言中言ささへ口、立つてはふすべ居ては譏り、何かな見出さう聞き出さう、目に角立てる仁王顔。物には阿伝ある故に、道具仲間の商賣に、損もする又徳もとる。揺れば落ちる木の葉の露、我が身にかゝる商賣の、それにおろかのあるべきか。又してはく、道樂者でのら者で、在所へ戻せいなせとて、額に角も入れた者、丁稚小者をいふ如く、内の手代や庭寶の、侮り者になし果てて、あの女めが弟を、内へ入れうといふ企圖。町内からも小柴垣、ゆひ立つれども世の中の、藥の灸は身にあつく、毒な酒は甘いとや、何を言うても氣に入らず。牛は叫き馬は哮え、理は非に落ちる左繩、ゆひ甲斐もない身なれども、在所に歴と親もあり、敷金してあの下種めに、使はれう筈はない。エ、口惜しいわいの、腹が立つわいの。舅の家を出るからは、下種めたつた一討に、仕舞うてのけうか。いや出所へ連れて出て、首に繩をかけうかと、様々思案はしたれども、家の名を出す夫れのみか、そもじと縁が切れうかと、これが第一悲しうて、情ないやら無念なやら、弦なき弓に羽拔鳥、立つもたたれず、居るも居られぬ家の内、そもじに心引かされて、破れ曆にあらねども、徒な月日を數へたよなう。粉糰三合有るならば、入増すなといふ事は、我が身の上の譬へかや。十貫目といふ敷金を、あの女めにちやかさり

格子の若神子の、口と口ともよせまほし、「して先づ御用の事ありとは、生口か死口か。」と言へば、「否さればとよ、頼みたきとは生口なるが、海山隔てし方でもなし、只二三里の道を越え、五日六日の便りもなし。どうがなかうがなくよく」と、案じ侘びたる御身の程、寄せてたべ。」とぞ仰せける。神子は合掌目を塞ぎ、珠數をくりひく梓弓、神下して寄せにける。「天清淨地清淨、内外清淨六根清淨、天の神地の神、家の内には井の神、庭の神竈の神、神の数は八百萬、過去の佛、未來の佛、彌陀、藥師、彌勒阿闍、觀音勢至普賢菩薩智慧文殊、三國傳來佛法流布、聖德太子の御本地は、靈山淨土三界の、教主世尊の御事なり。この御教への梓弓、釋迦の子神子が弦音に、引かれ誘はれ寄り來り、逢ひた見たさに寄りきたよ。なうなつかしの相の枕や。」我懐かしとは覺束なみの、寄り來る人は誰ぞいの。「誰とて二人おもふ身か。」一つねふしの二股竹、與兵衛を夫と思へばこそ、問うて給つて嬉しやの、問はれて今の恥かしや。扱世の中の憂節はなう、わが善きに人の悪しきがあらばこそ、破れ車でわが悪い、とは言ひながら、扇の影の立烏帽子、舅といひ元は伯父、跡嗣の約束なれば、今では親子ぢやないかいの。何しに粗畧にする物ぞ。在所の生の親達より、猶孝行を盡せども、丸い葶小筒に角の蓋、心が合はねば是非もなし。恨みも仇も外になし。憎いも辛いも只一人、重きが上の小夜衣なう。「恨みありとは私が事か。おの様の女房よ。仕方の悪い事あらば、なぜ殺しなりともなされずし

守を一社と伏しをがみ、扱十四番十五番、南東の門前の、牛頭天王に我が願ひ、幾つとはなき生玉の、玉の光の透き通り、神は見通し言はずとも、心の底の只一つ、それを頼みに北向の、八幡宮の御誓ひ、世々に高津の坂道を、唄登ればさつさ、下ればさつさ、さつさ三六十八番、こゝも難波の大君を、唐土人の褒め詞、咲くやこの花今はとて、梢も青き夏木立、西を遙かに百舟の、入江の秋の海面に、沖津白浪さばけて忍べ、碎けて遊べ、中よい月に、戯れ遊べえい、遊べえい、えい、えい、えい、照るく月、月てるく、君と寝たらば何とよござるまいかの、照るく月、照るく月、月讀のく、旭の神明額づきて、仰向く顔に當る日を、袖で翳しの玉造、稻荷の宮居爰も亦、伊勢の内外の内平野町、太神宮よと色々の、諸願の種を上町の、座摩のお旅所に二十二社、拜み納むる袖かぐらをとめ、神子町に、問ふべき占のあればとて、まだ日の足も南へと、駕籠の息杖息つがず、走りせてこそ、三重急ぎけれ。幼きときより氣に入りて、幾春秋をふりといふ、年季の下女を身になして、隠す事をも語りしは、黒格子の辻とかや。上手と聞きし神子の門、「あ、申し、ちと口寄を頼みませう。」とぞ案内ける。弟子の小女郎心得て、「お通りなされ。」と戸を明くれば、お龜は一間に入りけり。暫くあつて立出づる、神子も餘程見えるもの、「ア、ようお出でなされました。大坂のお衆で御座りますか。お供の爰へ上つて、先づあふいで上げさつしやれ。お茶もておぢやや。」と待ひは、あい黒

本の外までも、御威光四方に飛梅の、天満の社に手習子供、書いて上げたる龍虎梅竹。絲屋の小絲、
 姉は十三妹は十二、殿御ほしさに宿願かけてえ、月の参りは二十五日、やつさ、ありやそりや、こ
 りや堀川の恵比須殿、北野は天満と御一體、現人神と音高く、轟々と鳴神も、よもや破らじ、よもや
 裂けじの、幼馴染の女夫合、この神明に祈らばや。扱六番は曾根崎の、宮の木立も何時頃よりか、名
 立てがましき天満屋お初、餘所に聞くさへ身に蜷川、身の流れの勤めの憂身、どうで女房にやもたれ
 ぬ中の、死ぬる生きるは愚かの沙汰よ。己はそれをと願ふぢやないが、男故なら命も資産も取つてゆ
 け。どころへの、爰らでの、お手を引き合うて二人の死骸、茲に梅田のナ橋に寐テサ、夢を津村の新
 御霊、人の祈りは様々の、大明神やその次は、仁徳帝の宮所、拜み巡りて十番に、數も願ひも三津寺
 の、正八幡に早つきぬ。道頓堀の絲竹や、太鼓の聲にひかされて、心も足もしやなくしやなら、ち
 よつと立見の手鞠の曲は、一ふう三よう、五むな、八よころく、とんとはすむも可愛らし。明日も
 來うぞの恵比須橋や、恵比須橋越えて、見たや見せたや難波橋、難波の今宮これからは、野道の風の
 涼しさに、笠も帽子もはれぐと、兩の袂に吹きたまる、身も冷々と心よき、肌を締めさせ、しめて
 貰はば此方からも、じつとしめく、空も濕りて五月雨の、雲のすゞしの帷子の、衣紋繕ひとりなり
 直し、鬢搔き撫づる差櫛の、蒔繪に似たる松原は、安井の天神これぞとよ。天王寺には十五社の、鎮

道具屋
おかめ 緋縮緬卯月艶

上之卷

二十二社めぐり

古き都や浪速瀾、く、二十二社詣で急がん。戀といふ其の水上を尋ねれば、神と神とが肌觸れて抱き寄せ給ひし腹帯の、解けてほどけて世に溢れ、産みひろめにし人種の、次第々々に孫つぎて、色の道には發明な、町の小娘若嫁の、眞似る芝居の女形、髪かみの結振小利口に、ひつくるくくく郭様、今はむかぬと縫箔の、それにはあらぬ白の風、風呂の煙のたち居まで、姿似せれば心も共に、そまる紫縮緬の、小皺こぢわのよりし姥唄まで、情こめたるこの時代、年経て爰に石の上、古道具屋の古格な、堅地の父の親の手を、水離れせぬお龜とは、一人娘の命をば、萬代祝ふ名なるべし。正五九月の神参り、殊ことにこの頃我が親と、初元結の我が夫、婿と舅の挨拶の、中に節だつ早苗月、皐月の雨は神心、夫の身の上安穩に、田島を潤すその如く、苗代水に堰きかけて、恵めやあまの川崎の、大権現を伏し拜む。この御神の君が代を、聞くも語るも有り難き、蝦夷か千島や朝鮮國、琉球筵敷島の、この日の

死んで見ぬ死出の旅、連立たうやら連れまいやら、逢はうやら逢ふまいやら、二度生きて生顔を、見るは此の世の限りかと、物をも言はず面影の、顔を悄々見合はせて、「わつ。」と消え入り泣き居たり。

「ヤア後れるな。」「後れませぬ。」「合點か。」「合點ぢや。」「南無阿彌陀佛を忘れまい。」「南無阿彌陀佛。」と喉笛に、がばと突きたて兩手をかけて、くるりとゑぐれば兩方の、面影消えて無かりけり。無懣や、二人はなから死、男は女の姿を尋ね、女は、「市様々々。」と、のつつ返しつ苦しみの、くらむ眼に手を伸べて、尋ね迷ふぞ不便なる。終に一息切斷の、經絡六脈絶えくくに、息の通路ふつつと切れ、「うん。」と許りを此の世の名残、いざよふ月の朝霜と、一度に命は絶えてけり。弟善次は川端に、捨てし衣裳と書置を、拾ひ驚き驅け著けて、見ればあへなく事切れたり。「南無三寶。」と歎けども、せんなし甲斐なし面目なし。せめては兄の報恩と、恥も身體も衣裳に包み、負うて一先立退きける。扱こそ世上に此の男、死んだ風説死なぬ沙汰、生死二枚の繪草紙に、戀路の廻向をうけにける。

互の形、茫然とこそ現はれけれ。夢か現か空蟬の、もぬけの魂とも知らばこそ。「こは何としていつの間に、一所に死なん嬉しや。」と、連れ取りつき連れ合ひ、實の形影の人、歎けば歎き泣けば泣き、こひにせぐりの玉の緒の、己が思ひにたぐられて、一里の道は隔たれど、鏡に映すごとくなり。「月は白みて曉の、あれ明星もさし昇る。近づく最後一筋に、一つ蓮と願へども、思へばく我が身の科。養子の親には疎まるゝ、實の親のありとても、親知らず子しらす。たとへ冥途で逢うたりとも、何をしるしに誰をか見ん。悪業深き我が身や。」と、聲をあけてぞ泣き居たる。お島が心の歎きには、「一人の母の老いの世に、いつかお主が年明きて、せめて一日片時なりとも、湯水取られて往生せんと、是れのみ一つの願ひなりしに、病で死するは是非もなし。いとほしや母様の、薬舂め灸せよ、身養生して勤めよと、大事にかけて下されし、此の體をば血に染めて、明日は堀江へ使たち、呼び寄せ母の目に見せば、死に入る様の歎きの顔、今見る様で聞く様で。」思ひ過しの胸の中、五體の涙締め寄せて、手にも袖にもせき餘り、漲る瀧に異ならず。爰にくゆるは吉原よ、あれにふすほる梅田の暮。他所の無常の煙を見るも、明日は我が身も何處の雲、何處の煙と立上り、誰に此の骨拾はれん。冥途は六つの春ぞや。迷はぬしるべ彼の煙の、消えざる内に我々もと、夫が脇差抜く形、島が幻後れじと、用意の剃刀横へて、サア只今ぞ一足も、はやかるな遅かるな。手に手を取らんと思へども、未だ

べ、これを限りと百八の、數とる度に繰り盡す、命二つを珠數二連、これが冥途の迎ひぞや。見送る
 軒と見返る野邊と、中に飛びかふ夜這星、行いて歸らば言傳てん。出でて返らぬ魂の、憧れ添ふと
 は知らねども、傍に夫のある心、夫はお島と連れだちて、歩む心のともすれば、目にちろ／＼と幻
 の、此は其の人か實かと、抱きつけば仇野や、風ほう／＼たる閨の戸に、どれ市様はお島はと、尋ぬ
 る袖にふる涙、夜半の時雨となりにけり。これこそ曾根崎天神の、松と櫻欄との連理の森、書き集め
 たる言の葉の、餘所に聞きしも今は又、餘所に嵐の身にぞ染む。お島も同じ我が庵は、お初徳兵衛の
 その曉の、夢も破れてまだ閉もないに、心中宿世の報いの業か。そのみならず親方や、親の苦勞
 と思ひは知れど、男死なせて見て居られうか。女房先だて生存へあらば、そりや犬猫も同じ事。同じ
 中にも鹿となり、鴛鴦と生まれて女夫池、生ける間もなく身を果し、猶や藻屑に埋まんと、又一向の
 憂き涙、落ちて三途の川となる。男心もくれはてて、西か東か何處ぞと、月に向へど我が影の、映
 らざるこそ不思議なれ。女も向ふ燈火の、壁にも窗にも障子にも、我が影見えぬ怪しさを。あ、味氣
 なや果敢なやな。實や人の物語に、死する時節は人魂飛んで、其の身の影の無きと聞く。噫やお島も
 市様も、かくぞ最期の近づく、合圖の珠數の念佛の、一萬遍も繰り詰めて、九千遍にぞ早なりぬ。
 心細くも便りなや。今千遍の命の内と、思へど我が身は思はれず、先には如何いかにぞと、案じ交せ

はせては、招き合ひく、われと我が身を抱き締めて、齒を喰ひ詰めて歎きける、深き思ひごあぢきなき。弟の善次郎、鳥が詞に發起して、悪心を翻し、兄の命を助けんと、こ、彼處と尋ね歩き、元の格子に走りつく。兄は人ぞとたち隠るれば、善次郎門を叩き、「長柄の市郎右衛門は是れには居られ申さぬか。近江屋にて尋ねれば、はや歸られたと申さるゝ。御存じないか。」と呼ばはりける。内よりは、「やかましい。夜更け廻つて、そんな人は知らぬ。」と言へば、「南無三寶。」と走り行く。斯くと心を語りなば、死なで止みなん二つの命、隔て疑ふ因果と因果、定まる業ぞ力なき。「彼奴追つかけて討つて捨てん。いやく見苦し最期の邪魔。」と、心を鎮め小聲になり、「サア夜明も近づく人立あり。一所と思へど仕方なし。我は在所の堤にて、最期の所はかはるとも、連れだつ道は唯一筋。今より珠数を繰り初めて、一萬遍にをはる時、それが互の合圖ぞや。追付待つ。」と言ひければ、「合點しましたさりながら、同じ枕に死にたいなあ。心はついて往きませう。」「オ、我とても其の二階、顔を並べて死にたいなあ。心は跡に残るぞ。」と、あこがれ出づる玉の緒の、互の目には見えねども、残し置くのと連れ行くと、兩刃に死する剃刀の、一つ刀の亂れ焼、亂れ心は、三重

血死後の道行

死神の導く道や、かけろふのはかなき蟲もたまは、朝の露に生き残る、それよりも猶あたら

なんたる胸慾ぞや。私等が今の此の勤め、伊達にも派手にも身の爲でも、一日片時なる事か。親兄弟のいとしさゆゑ、面白からぬ勤めをも、つらいと一度いひ遣らぬは、親兄に苦を掛けまいため。か程大事の親里の、貧苦を助けしお主なれば、御恩は更に忘れねども、生身は死身殊にまた、此の頃酒に當てらるゝ。若し頓死でも致しなば、下された茶が末期の水。」と、管まく體に紛らかし、「わつ」と許りに堪へ兼ね、しやくり上げたる泣き上戸、人目に見せし下心。市郎右衛門は忍び泣き、弟は身の悪顧みて、恥ぢて悲しむ悔み泣き、心は三つに替れども、おなじ涙に曇る月、時雨の闇の本意なさよ。人影見てや町内の、犬吠え渡れば兄弟は、見付けられては悪しかりなんと、西東へぞ逃げ去りける。亭主夫婦は氣も付かず、「管をまかずと早う寢や。皆々仕舞へ。」といひければ、「あい。」と答へて、箱梯子上りか、つて、「コレ旦那様内儀様、みんなさらばや〜。」と言ひすて二階に上りける。下女は見上げて、「ハテ小きびの悪い聲つきぢや。長兵衛門もよう締めやや。有明の消えぬ様に、油もたと差いたも。消えてもこちは火は打たぬ。おれには火打が禁物ぢや。打つ音聞いてもぞつとする。」と、つぶやきてこそ臥しにけれ。稍しづまれる小夜格子、市郎右衛門は立歸り、軒の下にてしはぶけば、お鳥はそれぞと二階の窗、覗けど我が姿は見えず、聲を立つべき様もなく、柄つけの鏡差出し、星影映してひらめかし、爰に有るとぞ知らせける。夫も心得扇を抜き、聲立てられねば金物の、光に物をい

で舌が廻らぬ。此方さんは弟の身で、けなりや機嫌がよささうな。禮言ふ事があるござんせ。」と、胸ぐら取つて引いて行く。善次は「いづれも頼みます、頼みます。」と仰向にそり、引摺らるれば下女下男「これは島様なんぞいの。サア内ぢや這入らんせ。」と、無理無體に押し入るれば、上り口にひよろひよると、かたみをとんと横に投げ「水給や。」とて伏しにける。夜こそ更くれど一町の、行燈仕舞へば天満屋の、しめたる門口くら闇に、善次は島が心根の、恐ろしければ格子の陰、身を引きそばみ立聞きます。市郎右衛門は近江屋の、人目にせかれしかくと、死際の契約せず。便りもがなと門に立ち、弟ありとも知らざれば、弟は兄があるとも知らず、傾く月に東向き、暗き格子を隔てにて、内の様をぞ聞きにける。亭主夫婦これを見て「島は甚う酔うたさうな。これいて休みやお島く。」と茶を汲んで、「一つ呑みや。」と言ひければ、「あい／＼こりや忝い。」と戴きて、「ほんに實にお主たる身が勿體ない、大事に掛けてくださんす。是れを思へば勤めの身が、心中などで死ぬるのは、お主へ對してぶしつけ、損を掛けるは身の罪科。さりながら死んだ者が生き返り、其のいり譯を言ふにこそ。命に替へる者はない。夫れを捨てて身を果すは、言ふに言はれぬつまつた事。憎まう者でもござんせぬ。斯う言うて私が心中する氣は無けれど、爰にも前の初様に、手懲の事も有る故に、こりや前書の話ぞや。私が馴染の市様の勘當は、弟御の無實の難を身にかづき、所の住居もならぬとよ。これは

此方の島ゆるぢやと、女夫池で聞いて来て、知らぬかと言はる、故、とつかはして戻つた。前のおはつに懲り果てた。家名の出るも迷惑。客をたふすがみめでは無い、商賣せいで大事ない。それ早う呼びに遣れ。」と、わめき散らせば女房も、「エ、皆も氣がつかぬ。こちに言はる、事かいの。又淨瑠璃にのしやんなや。早う連れて戻りやいの。」と、女心のせはくし。譜代の下女は門より入り、「市様はお馴染ゆゑ、遣るは私が遣りましたが、勘當とも分銅とも、知つたらなんの遣りませう。たつた今も近江屋へ往て見たれば、島様はきつう酔うて居さんして、何を言うても譯がない。そんな事なら戻しませう。お初様のかの夜さり、二階梯子を踏みはづし、おれが胴骨踏まんした、形見の痛さが漸うと、此の頃止んだに勿體なや。又踏まれてはならぬぞ。」と、驅け出してこそ走りけれ。かくて弟の善次郎は、兄にあふせて銀盗み、所々のびらくらを仕舞はんと、此の所へ來りしが、お島は酒に酔ひくづをれ、ひよろり／＼となまになり、近江屋出でて濱すぢや、今宵一途に三途川、越えんと思ひつめたれば、心にはたと戸をたつる、風呂屋の前にて善次に逢ふ。ひらりとはづすをちらりと見て、「これ善次様々々手が悪い。」と、よろ／＼と縫り付いて、「此方さんな聞えやせんぞえ。前はさい／＼ごあんして、何が恐うて逃げさんす。これ兄嫁の島ぢやいな。たつた今まで近江屋で、兄さんと逢うて居て、今日の様子を聞きやした。大事の己の男が、勘當受けてござんしたりや、胸が痛うてちつとの酒

産の親は見す知らず、養ひ親には不孝を爲し、此の市郎右衛門めは親の罰が當つたり。せめて心の念願にて、死して再び親子と生まれ、今の御恩を報じたき其の證、此の杖の片折を、未來の形見と推戴き、いかに講中組中も、今生の暇乞、頼み申すは親の事、孝行盡せと妹に傳へてたべ。死するとあらば御廻向も頼み申す。」と言置も、涙ながら餘所ながら、見置きながらの橋柱朽ち行く身こそ、三重

下之卷

哀れなり。逢ひ初めし一夜を戀の水上に、三夜四夜五夜十夜百夜、通ひぐるまの蜷川、變る瀬枕沈む淵、思ひ二つの中町や、更けて苦しむ待宵に、明くる侘しき別れ路の、憂きをつぎ木の梅田橋、うめて冷せと色茶屋の、色の出花の里そとは、醒めぬ花香を汲みてしれ。實にや士農工商の、品数々の、其の中に、情で賣れば情で買ふ、歌人の評判つけ置きし、よき衣著たる商人も、誠を守る天満屋の、亭主は外より歸りしが、「なんと女子どもは仕舞うたか。島は今宵はどうした。」と言へば、「島様は今宵は長柄の市様とて、馴染の御客が久しぶりて、近江屋まで見えまして、夫れで島様も近江屋へ、送りました。」と言ひければ、「扱こそくさう有らう。今宵丸屋のうたひ講に往つたれば、町衆の話に、長柄の市郎右衛門と言ふ人、報恩講の銀を盗み、親の勘當うけて、白晝に在所を追ひ拂はれた。是れも

と打ちつけて、大聲あけて、「わつ。」と泣き、「たとへ千兩萬兩でも、銀惜しいとは思はぬが、すたる己が名が惜しい。近頃面目無けれども、人々も聞いてたべ。此奴は疾くに殺す奴なれども、今ならでは申さぬが、元我々が實子でなし。大坂のさる人の、四十二の二つ子にて、産屋より貰ひ守り育て、後に弟が出来たれども、それには替へず可愛さに、育てるに従ひ性悪く、勘當せんと思ひし事、五度三度には限らねど、若しや己が寐心に、養子と言ふ事知るならば、眞の親ならかうあるまいと、我々夫婦を疎みやせんと、義理もあり不便もあり、殊に母が最期にも、弟より彼の兒を、繼母に掛けてくれるなど、言うて死んだは小耳にも、定めて覺えて居らうぞや。仁義も慾も身の上も、本子には忘るゝに、其の本子より己をば、大切にせし甲斐もなく、湯を沸して水いらすの親の内て盗みをする、これは如何なる性根ぞ。」と、聲をあげて泣きけれども、子は覺えなき事ながら、言譯も無きしだらとなる。親も道理子も道理、心に籠る哀れさの、兩人の涙せきあへず。「エ、免角言ふも耽の耽勘當ぢや出てうせう。親子名残の形見の杖、身に覺えよ。」と押取つて、散々に打ちければ、杖は中よりふつつと折るゝ。飛び掛つて踏む所を、妹下人継り付き、泣く／＼奥へぞ入りにける。市郎右衛門涙を潑潑流し、「何にも申す事はなし。親ならぬ親子ならぬ子、眞實の親子にも勝つたる御恩徳、いつか報じ申すべき。とくにも斯様に承らば、如何様とも孝行の、盡し様も有るべきに、口惜しさよ後悔さよ。」

餘の悪性は若い者、有らう事とも言はれうが、あれ掛硯の口明いたり。鑢を入れたる鼻紙袋、明けて我に見付けられ、仰天するは盗人な。身が銀ならば親の慈悲、沙汰なしにもして遣らう。身の油にて講中が、御開山へ奉る、御茶所の銀ぢや盗人め。一文一字違うても、おのれが生けて置かれうか。我等一人は縁者の證據。それく講中組中。」と、呼ばはる聲に向鄰、一在所が驅け集まり、とざまの詮議ぞ是非もなき。介右衛門大きにせき、「サア何れもの目の前で、掛硯を開かん。」と抽斗見れども金銀は、一錢とても無かりけり。介右衛門地團太踏み、涙を流いて、「エ、口惜しや、何代か此の家に小言の有つた例もなし。歳六十に及んで、一在所といひ講中の、大口小口動かする、おのれ許りが恥と思ふか。盗人を捕へて見れば我が子なり。此の手閒でこれ程な、能い事を仕たならば、親の身ではどれ程の、自慢で有らうと思ふぞやれ。成人の子を持てば、親の心やすめぞと人も言ふに、おのれには寐の間も心休まらず、擧句にかかる大事を仕出す。内で斯うした心からは、外で何がな仕置きつらん。誰に似て此の根性、憎いが餘つて不便なり、不便の餘りの憎さや。」と、地空を叩いて無念泣、實に尤もに憐れなり。市郎右衛門顔を擡け、「鼻紙入は明けたれども、金銀には、手をささず。盗人は外に有らん。心を鎮めて御穿鑿。」と、泣くく言へば飛び掛り喰ひ付きて、「エ、腹の立つ。盗みをする子を持つて、何と心が鎮められうぞ。親の心を知らぬか。」と、懷搜せば以前の一步、「これを見よ。」

家來まで、何れも野畑へ出でたれば、誰に首尾問ふ便りもなく、上り口にとほんとして、寒さは寒し
 酒一つと、膳棚さがせど酒もなし。「ヤア荒神の御酒がある。冷でも一つ戴いて、胸のもや〜晴らさ
 ん。」と茶椀引寄せつぎければ、「こりやどうぢや。酒の中より壹歩が涌く。寶の泉有り難い。」と、皆打
 明けて、是れは夢か現か、三寶荒神の御利生か、死したる母の御授けか。」と、嬉しいやら恐いやら、
 分別に能はねども、「久々で金氣に逢うた。先づめでたう一步の上汁吸ひませう。」と、戴き〜ぐつと
 飲み、一步を紙に押包み、懐に納めける。黄金は人の身を富ます寶なれども、此の身には命を刻む
 刃となる、善惡こそは哀れなれ。所へ善次ひよつと出で、「ヤア兄者人お歸りか。推參な御意見なれど
 も、お身持がさうでない。親仁も機嫌さんぐの上、蜷川の何處やらから、悪い所へ文が來て、親仁
 が見付け、それそこな鼻紙袋に入れ置かれた。我らは南の御堂へ、親仁の使に參るなり。跡で首尾よ
 うなされ。」といへば、市郎右衛門は肝潰し、これはとあきれ居る中に、善次はそつと後手に、御酒徳
 利を隠し取り、表に出でておし戴き、一さんに驅け出でし、心の中こそをかしけれ。斯くとも知らず
 市郎右衛門、「常々不和なる弟の、さすが恩愛なればこそ、よくも知らせて有りける。」と、鼻紙袋の
 紐をとき文を捜す所へ、親つかく〜と出で後に立つて、「それは何する市郎右衛門。」「はつ〜と驚き飛
 びしさり、さし俯いてぞ居たりける。介右衛門聲をあけ、「己は天魔がみいれたか、佛罰が當つたか、

ぬ。「何でも無いとは、己等までが一つになつて、親の目を抜き居るか。」と、文捻ぢたくつて、「これいづれも。田地賣らせた女めが、市様まるる身よりとは、はて扱々あたじたたるい。皆の手前も面目ない。待ておのれどうする。」と、鼻紙袋へ文をも入れ、ぐる／＼捲きし小撚より、細きお鳥といち命の、終る端とぞなりにける。講中も挨拶なく、「男の子は何處もそれ、先づお暇申しませう。なんと太郎兵衛、若い衆がよね／＼と言ふ程に、何うした事と思つたが、田地を賣つて買ふ故に、それでお山をよねと言ふ、今講釋が聞えた。」と、堅い輕口いいて歸れば、介右衛門も苦笑ひ、奥の間にこそ入りにけれ。善次郎は唯一人、外の事は耳にも入らず、一心不亂に掛硯の、銀に性根を奪はれて、そろりと立つて錠前を、押して見引いて見捻ぢて見て、奥を覗き表を見、箱ぐち取つてもち上ぐれば、慄うてどうと打落し、我とおびえて飛び上り、種々様々に盗み様、工夫するこそ恐ろしき。「ヤア忝い。鍵の入れたる鼻紙入、親仁が忘れ置かれたり。」引解き鍵取出しまんまと明けて、鍵は元の紙入に、初めの如く納め置き、掛硯の抽斗明け、二包の白銀を、下懐へ押しこんで、小判は頭巾にぐわらりと入れ、裸一步を手に握れば、奥より親の聲として、「善次々々。」と呼び懸くる。「あい。」と言へども此の一步、置所に動轉して、口へ入れたり目へ入れたり、うろたへ廻つて、釜の上なる御酒徳利へ、さらさらと移し入れ、親の前へぞ出でにける。かかる所に市郎右衛門、内へ歸れど敷居高く、心おかる、

皆宿所に歸りける。親介右衛門は六十餘り、頭に積るお霜月、講中お茶所の冥加錢、残らず爰に持ち集まり、お勤め過ぐれば表に出で、介右衛門いひけるは、「何れも講中有り難いと思召せ。毎年のお霜月、懈怠もなう上ぐる事、自力では叶はず、御恩徳のお蔭なり。扱去年の通り此の銀を、兄市郎右衛門に持たせて、京へ遣るはずなるが、在所の沙汰も聞かれつらん。新地狂ひに身代あけ、方々の借錢、堤際の田地をも、七百目の質に入れ、四貫目の手形したと聞く。かうした性になるからは、一錢も持たされず。あの弟めは一日でも、居らねば年貢の埒明かず。身共が上りませう。」といへば、弟は律儀な顔つくり、「大儀ながらさうなされ。ア、何れも性の能い兄貴にて、年寄られて親仁の苦勞でござる。」といひければ、「それはきようがる今聞いた。」と、頭を振り顔を蹙めける。介右衛門かさねて、「白銀五百目二包、小判二十五兩一步合はせて四十切、改めて預つた。」と、數讀み揃へ懐中より、掛硯の鍵出し抽斗開けて、金銀取入れ錠おろし、錠を袋に入れにける。時に表へ駕籠の者「頼みませう。」といひければ、「どれい。」と云うて妹のお吉「何所からの使。」といふ。「私は蜷川天満屋のお島様より、市郎右衛門様へ急な使に参つたり。此の文進せて下されませ。」と、高聲にいひければ、「ア、爰な人、高い聲さつしやんな。兄様は昨夜から未だ歸られず。私が預り届けませう。」「お歸り次第頼みまする。」と、言ひ捨ててこそ歸りけれ。介右衛門聞き付けて、「お吉今のは何ぢや。」「イヤなんでも御座りませ

す。其の上お前は當もない、花車や娘仲居にまで、仕著をして取らせうと、約束許りでまるらぬ故、私が宙でも取つたかと、毎日毎夜の使立。内は常住師走にて、何とも迷惑仕る。今日は是非に請取りませう。それに成らずば、親旦那へ訴訟申す。」といふ所へ、五十餘りの女房、綿帽子にて顔包み、「編笠島の笹屋の鼻でござんする。御人體とも覺えませぬ。我等が僅かの商賣の、元手も利くひの月躍る、泥鰯汁のしゆらい代、取り切る間は何所までも、「著き纏はる、藤の棚、谷町から。」と言ふもあり。九軒のおろせが揚錢の、残りも今日はすつきりと、取つて九兩二分の銀。道頓堀の水茶屋の、或は饅飩けんどの、傍で聞くさへ笑止なり。善次郎もて扱ひ、「尤も掛は負うたれども、節季でもある事か、つきともない今日に限り、此の様にせがむのは、ム、合點ぢやく。兄市郎右衛門のうつけ者、天満屋のお島にぐわりりと片鼻うちあけて、親父の機嫌散々にて、半勘當の身となつた。夫れを聞いて我までを、氣遣ふと見えたが、兄とは格別、こんな銀譯悪うする男でない。親父に言ふなら言うて見や。一文にも成るまいが、遅うて此の月一ぱいに、濟まそといふから誼はない。十三國島北南の長柄で、男といはれたる、善次郎ぢやが何と見た。僅が二百日内外で、捨てる善次が名ではない。親父にいうて此の善次を、勘當させて腹いるか。但しは自然に銀取るか、勝手次第。」と投げ出し、立派に言へば掛乞ども、いかなれ誼はながら川、砂にはよもや成るまいぞと、幾日々々の日切して、皆

中之卷

こがれ行く其の名は言はじ。名を問へば父は長柄の田地持、市郎右衛門が弟善次郎なれど悪性も、人の意見も馬の耳、餘所吹く風のふうくにて、夜歩行日歩行とほしたて、歸れば小宿で衣裳を仕換へ、稼ぐ體をば親兄に、これみやの前大根を、擔うて家路に戻りける。斯かる所へ、下男つかつかとよつて棒鼻取り、申し善様、これお見忘れなされたか、毛馬屋の七兵衛、エ、お前は譯の悪い。術によつて待てならば、待つまいものでも無けれども、幾際かく、今日遣らう明日遣らう。假初ながら五百目餘り、五匁も埒明かず、夫れに昨夜も鄰までお出でなされ、此方へは音信なし。餘りな爲され様。今日は親御様へ、直に申して取つて來いと、旦那が申し付けました。斷りました。」と入る所を引留めて、「こりや聞えぬ、日比の己ぢや知らぬかい。五百目や一貫目、今でも遣るは合點なれど、親父が手前をあぢにして、末永う出よう爲、すこしの銀を延引した。そちがさはいで二三日どうぞ頼む。ヤアいつやらの紙花も、思ひの外に遅なはり、面目ないく、これも拂ひと一度に遣ろ。今改めて、こりやばつとうちなほすわ。」と捻ぢて出せし鼻紙の、しらごかしこそ笑止なれ。所へ駕籠の長介來り、「私が請合の菱屋の花代、津の國屋の料理代、合はせて三百四十五匁六分、扱もくせがまれま

と此の節に違ひがあるか。」と言ひければ、「オ、よい推量、おつつけお島を請けて見せう。なんほせい
ても張合うても、金で語る淨瑠璃は、ちつと喉につまらうぞ。こりやこれ見よ。」と、お島にしつかと
抱きつき、「なんと腹が立つか。」と言へば、又扇の拍子を拍つて、「あら不思議や、ますらが行ふ魔法の
形、天上に現はれ出で、異形は手を伸べけんびるしが肩合を、破れて退けとはたと打つ。ハア、拍子
にか、つて粗相々々。」「ヤアおのれ擲つたぞよ。もう聞かぬ。」と立ち上るを、島は縫つて「なう情な
や、是れ私が詫事ぢや。エ、供の衆氣が利かぬ、船頭衆頼みます、舟に乗せて下んせ。」と、泣き叫べ
ば人々は「折も悪し場も悪し。是非御堪忍々々。」と、無體に舟へ抱き乗せ、櫂を早めて漕ぎ出す。
猶船中より聲をあけ、「銀も持たいで言はれざる、戀の意氣地の淨瑠璃だて、身が前ではおいてくれ、
おけくおけや。」と、舟端た、き手をた、き、笑うて舟は上りける。市郎右衛門四邊を見廻し、「ハア
ア我ながらしどもなや。氣が違うたか南無三寶、一期と思ふ女房を、我が物顔の見にくさに、苛つは
戀の癖なれども、思へばくやしかうせいでも、三匁では彼の頬を、うつけたことと思ひやせん。島が
心の恥かしや。氣遣ひかけし可愛や。」と、見送る方もほのくくと、明石の客の乗る舟に、お島も隠れ
島がくれ、鯉川へと三重

を、初段から切まで語りぬかさにや堪忍せぬ。」と、ぎしみ廻れば、お島一人が氣を苦しむ、「これ申し此方様な粹様が、これは又氣のとほらぬ。彼のひと私と、譯ある様に見さんしたさうなれど、みぢんそんなことではない。腹立てさんすを面白がつて、法界悋氣に言はんすわいの。おとなしうして、サア舟に乗らんせ。」と、手を取れども聞き入れず。「いやよくおつしやれなく。他國から登つて此の大坂で、よねづかを握る者が、通例の男と思ふか。どうでもかうでも聞かにも置かぬ、語らせにや置かぬ。」と、堪忍せぬ顔つきに、お島は難儀手に汗握り、これ爰な人も誰か知らぬがよつほどな。勤めする身が客に引かれ、芝居へいつたが珍らしいか、船に乗るが不思議なか。淨瑠璃はそなたより、私に能う覚えてゐる。晩に此方の見世へおぢや。能う合點のいくやうに、教へて遣らう。」と世話やけども、市郎右衛門もいひが、り、「いやよく此方に習はいても、此方の胸中にある淨瑠璃は、此の鼻が覚えて居るお聴きやれ。」と、扇をうつて、「扱もますらが此の目の玉ぐつと脱け出で、花人親王の蜷川の御所の體、とつくと見届け候へば、まのの長者同然の大銀遣ひに思はれて、金銀小袖を仕て貰ひ、深い男をふり捨てるのほり詰めて、擧句には姫君を請出すとて、料理獻立表換、眞最中と見て候。兩人が中へ某が毒氣を吹き込み、男と女と不和になし、同士戦の口舌をさせば、姫君は見放され、はしばしのくら屋へさがり、後には濱の納屋の陰、一本立にて候。」と、語りけるこそ不思議なれ。「なん

か。「何がさて御所望ならば語らいでは。則ちさんろの四段目、檢非違使が鹿島の事ふれ、鳥様とつくとお聴きなされ。是りやこなたへ御免ならう。是れはお島ではござらぬ、お鹿島大明神よりまかり出た、事ふれでござりや申す。總じておかしまと申すには、上の客が三十三人、中の客が三十三人、拙者が様な見る影もない粕客がたつた一人。正月七日神前に於て、おやおつかない誓紙を書く。其の誓紙の文言に、かやうに申し交すからは、未來までも變るまい、謔をつくまい隠すまい。勤めの閑外に深い男を、持つまいと申す起請を取交すから、僞りは申さないと存じ、盡す程にける程に、只今は向臈から、でつかちない光物が飛んで來て、巾著の扉が八文字に開け、内の首尾が八角にわれ、神馬のお馬の太鼓持にも見捨てられ、大恥をかいてござある。されどもおか島大明神、氏子を不便とも思しめさず、或時は餘國の大じん宮に身請の談合を仕かけ、或は紋日をかづかせひき日の立前、跡からはける禿頭、親里の合力などと申して、厄介しつかいむくりこくりの上手ごかしに、むくり取られたとの御託宣、無上しんれい神道加持、これ是れが眞實戀のある淨瑠璃。鳥様ようお聞きなされい。」と、よそながらこそ恨みけれ。男は二人が色目を見て、「はてさてかはつた文句ぢやの。なんと餘國の大盡に、身請の談合とは珍らしい事ふれ。これお島、そなたは今のが面白からうが、此の貞は耳に立つ。とても所望しか、るからは、まあ一節所望いたさう。お島とお身とが連節で、戀の籠つた淨瑠璃

舟は目に立つのゑ、どれに限らず皆見さんす。なまなか咎めて、一本かたけ恥かこより、ハテ彼方が
ら見るなら、此方からも見て大様にして居さんせ。」と、言へども更に聞き入れず、驅け上れば續いて
揚り、見ればいよくまぶの男。これ市様と、言はんとせしが日はじきして、「是れ申し此方は他國の
お衆ぢやぞ。所の衆なら粹である、何を言懸けさあんしよと、言分してくだんすな。何方の爲にも悪
いぞ。」と、心を揉むこそ道理なれ。貞は臆はり靨面つくり、「こりや編笠、五度や三度は堪へうが、何
うしたことに舟につき、女を乗せたる船中を、見るも大かた方圖が有る。それ程見たくば、近くへ寄
つて見られに來た。一サア我が存分に見けつかれ、見やうが悪いと免さぬ。」と、聲をなまつてりきみけ
る。市郎右衛門も差當る意趣は無けれど、當分の妬ましさばかりなれば、口論しては如何ぞと、「イヤ
申し、別にお腹の立つこととも存ぜず。我らも下地淨瑠璃すき、折々稽古仕るが、此の山路の道行
は、戀を含んだ節付なるに、只今お島様とやら遊ばした淨瑠璃の、節は少しも變らねども、情を御存
じない故か、誠の心少なうて、御眞實の無い故か、如何にしても道行が、浮氣に聞えて、底意に戀が
ござらぬ。」と、片眼でお島をねめける。男あざ笑ひ、「ヤアぬかすまいく。島が淨瑠璃よかれあし
かれ、己が冷えにも熱氣にもなる事か。何様でも外に様子があらう、但し又おのれが言ふ戀を含んだ
淨瑠璃の、語りやうを知つたらば、只今こゝで語つて見よ。節が違ふとぶち据ゑるが、なんと語らう

ぐ鎌の、砥石も心碎けとや。夢にもかくとしら玉の、玉世の姫は胎内の、まだ見ぬや、の別れごと、つれなき母に誘はれ、行く道筋は多けれど、笛に誘はれ妻戀ふる、※牡鹿の園の法の導きはれなれや。互にそれと道芝の、※すがるばかりの戀草も、芽は繁りそふ母子草、千草八千草思ひ草、おそろし鬼のしこ草に、隔つる中の垣根草、力草なく泣きかはす、心ぞ思ひ遣られたる。草ばし刈るな笛を吹け。野路にふたりが悔み草、毒の草をも身の上と、知らぬ手元の暗さには、燈臺草を思ひ出す。思ひ出でずやありし夜の、亂れあひにし枕には、かつら草をぞ思ひ出す。彼のほのくのほのぐらき、黄昏早く寢し時は、かやつり草を思ひ出し、人目思はで肌觸れて、起きつ轉びつさゝめして、相撲取草を思ひ出す。通ひ路遠き獨居の、班女が閨の寂しさは、茶引草をも思ひ出し、心細しや絲薄。えい／＼えい、風かと聞けば山の下には、嵐吹く／＼、さりとて嵐吹く、山をはなれて風となる、風も昔に吹き返れ。「ヤア淨瑠璃待ちやく、舟も留めい。なんと皆は氣がつかぬか。先から陸を見れば、うそ汗れた八丈縞に、花色の羽織、茗荷の丸の紋つけて、編笠著たる男めが、道頓堀を乗り出すから、此の舟に目を放さず、跡へ下れば走りつき、先へ抜ければ立ち留り、つけて廻るは合點ゆかず。ありやありや、また彼處に立つたるは、喧嘩しかける體と見た、だまつて居るはひけたこと、揚つて一つ詰め聞かん。」と、脇差押取り出でんとすれば、鳥引留め、「ハテはでな人様ぢや、私等が様な者が乗つた

連れて出る。いづくはあれど曾根崎の、縁の芝居初様も、定めし佛金色の、身あがりと聞く外題に引かれ、終日見物慰みて、芝居果つれば繫がせし、屋形に皆々乗りいだす。提重ひらき替間ども、「なんど鳥様、今日の山路の道行は、本で語ると直に聞くとはまた格別。大盡様のお慰み、船の著くまで道行を、所望々々」とどよめけば、「イヤこりやよかろ。おれも鳥の一弟子で、餘程節は覺えたが、おつけ鳥を引摺み、國へ連れていつたりとも、國元は堅い所、こんな遊びはなりがたし。此の船中をぶらぶらと、たゞ行くも愚癡の至り。大坂の名残にちつと聽聞致したし。サア皆つけやや。」と言ひければ、供の丁稚が懐中の、本取出してお島に渡し、「東西々々。此の所が山路草刈の道行、師弟連節。東西東西。おきに戀路の、まだいろは船、惚れてほの字の帆が見ゆる。ほの字の、誰に、ほの字のはつを花、小すけしらすけ岩間菅、此の一叢は刈り残せ。つまごめの夜の牀にせん。塙の蟲ともろともに、刈り取る鎌の鋭くも、聲きり、す轡蟲、牛の鞍にも音を泣きて、歸る家路をまつ蟲や。さらば笹原笹蟹の、秋に染絲繰り出し、五百機立てし機織や、其の藤袴破るなど、泣くかいばらのつるさきに、野飼の駒の優しくも、古郷の風の北にいばえて嘶けば、越路の雪にふる郷の、空を慕ひて泣く犬の、べうの湯元はあれとかや、いかに言はんや久方の、天津雲居をあまさかり、賤の仕業はいづ君が、ゑにかくならで思ひきや、見しや聞きしやと許りに、草も刈り兼ね忍び兼ね、涙をうけて研

心中二枚繪草紙

上之卷

既に今年の酉もたち、戌の顔みせ朝木戸を、曙深く提灯の、影きらくくと初霜の、おきな面の
にこやかに、始まり呼ばう聲に引かれて、老いも若きも見人、餘念なじみに御最良に、ようお出
やつた朝日影、御代も御國も久方の、此の日の本のならはしの、歌を種なる諸物、天地を動かし鬼神
を感ぜしめやかに、妹脊も猛き武士も、心「やはらか饅頭や、菓子に火繩に番付。」と、賣る聲にまで
節籠る、「竹の紋つく道行の、本を召せく。」目塞笠「笠も預る預けて御座れ。」紅のくけ紐淺葱紐え、
繁昌々々、イヤ此の所繁昌毛氈敷島の、其の難波津の冬籠り、今を春べの顔みせに、日もなが事
の御退屈、今日のお暇と、散らし太鼓の下轟き、明日はとうから唐錦、彩る空は夕陽の、山は夕の雲
の帯、腰の廻りの御用心。おすまいくおす毎日の、入りくる人や歸るさや、花山の幕が袖續く、貴
賤羣衆は冬ながら、心ぞ彌生となりける。中に家名も君が名も、世上に高き天満屋の、お島と言ひ
て彼の里に、おはつが跡繼かくれなし。此の頃あかしの貞と云ふ、馴染の客に揚げられ、今日は南へ

傾城反魂香

にけり。

傾城反魂香 終

ほどき酒漬の、死骸は更に色變らず、唯其の時の如くなり。名古屋袴のそば取つて、近々と寄り、彼を討ちしは、先月二十日、曉月の時鳥、名乗りかけしは欺さぬ證據、向う傷に斬り伏せ、とゞめを刺さんとのつか、り、胸おし開けば懷中に金子あり。此の儘置いては實の盗人、來り搜し取らんは必定時には山三が盗みしと、後日の難を察せし故、鳩尾さきをゑぐつて、金子は彼奴が身體の内、肺の臟に押込んだり。五臟の中にも肺は金、同氣もとめて朽ちもとろけもよも爲まじ。いで見せん。」と、手を伸ばしぐつと入れ、朱に染みたる緞子の財布、引摺り出して、「これ見たか。これでも山三が盗人か。弓矢取る身の仕方を見よ。」と、道犬にはつたと投げ付け、死骸を踏まへつつ立てば、役人衆を始めとし、元信其の外門弟等、「出來たく、あつぱれく御分別、後學なり。」と勇みをなす。道犬は言句も出でず。雲谷はひるまぬ顔にて、「相手の言譯立つからは、此方は切られ損、お歸りなされ。」と立つ所を、役人衆飛びか、り、鐵棒ふり上げ打つほどに、面も眉間も打裂かれ、胸骨碎くる許りなり。頓て繩をかけさせ、道犬親子は世間流布の重罪、上を犯す科といひ、只今の始末、諸人の見せしめ、親子諸共獄門に曝さるべし。まづそれまでは兩人ともに牢屋へやれ。」と引立つれば、狩野も名古屋も勇みつ、「サア唄へや唄へ雅樂介、其の外の門弟中、永く知行に墨筆や、家をさいしく繪具筆、隈筆、泥引筆、その筆先に金銀も、わきて和泉の壺の印、ならびなつ毛の狩野の筆、末世の寶となり

役人きつと見、「不砵伴左衛門をお手前が手にかけしこと紛れなき上、父道犬願ひによつて、吟味を遂けらるゝ處、盜賊の罪遁れがたく、曲事に行はるゝ條、召捕り來れとの御誼、尋常に繩を掛られよ。」とあれば、名古屋すこしも騒がず、懷中より亡八の手形數通の文を取り出し、「斯様の愚蒙の返答は、申すも似合はぬことながら、片口の御裁斷、如何にしてもかろくし。これ此の手形を御覽ぜ。葛城事は三月二日に親方が暇を取り、拙者が本妻、借宅見たての間、揚屋に預け置きし所に、伴左衛門數通の艶書、斯くの通り不義者の女敵なり。」と、詳かにぞ申さるゝ。道犬つつと出で、「きたないくゝ、こりや山三。倅伴左衛門葛城を請出す手付として、金子五百兩懷中せり。女敵討は聞えたが、なぜ金子は盗んだ。五百兩の金子を身につけた伴左衛門、切りは切つたが、銀は知らぬと言ふとても言はせうか。盗人でないならば、言譯せよ。」と詰めかくる。「オ、サ言譯はして見せん。其の跡は合點か。」「イヤまづ言譯から聞かん。」と競合へば役人衆、「これくゝ名古屋、問答までもなし。其の爲の我々、人にこそよれ、兩力共に弓馬の身柄、盜賊といひかけ分明ならぬ訴訟、且は上を掠むる越度、言譯たば道犬は、存分に計らふべし。又盜賊に極まらば、下知の如くお手前に繩をかけ申す。」と、理非明らかかに述べらるゝ。名古屋勇んで、「この山三春平は外の事は不調法。傾城の買ひ様と人切る様は大名人、恐らく宗匠ござんなれ。それくゝ伴左衛門が死骸をこれへ出されよ。」「心得たり。」と役人封切り

なつても、思ひなき世は和歌の浦、梢にかゝる藤代や、岩代峠潮見坂、畫きうつす繪は残るとも、我
は残らぬ身と聞けば、いとしやさこそ我が夫の、なみだにくれて筆捨松の、しづくは袖にみつ潮の、
新宮の宮居かうくと、出島に寄する磯のなみ、岸打つ波は普陀落や、那智は千手觀世音、いにしへ
花山の法皇の、後の別れを戀ひ慕ひ、十善の御身をすて、高野西國熊野へ三度、後生前生の宿願か
け、發心門に入る人は、神や受くらん御本社、證誠殿のきざはしを、おりて下りて待ち受けよろ
こび給ふとかや。われは如何なる罪業の、其の因縁の十二社を、めぐる輪廻を離れねば、疑ひふかき
音無河、ながれの罪をかけて見る、業の秤の錘には、それさへ輕き磐石の、岩田川にぞ著きにける。
「皆妄執のあだ夢と、さめくもろき涙の露の、玉の臺の牀の内、連理の蓮片しきて、永き契りを待
つぞや待たん。しるしはこれ此の一見、卒塔婆永離三惡道、南無や三熊野本地の三尊、迎へ給へや導
き給へ。」と、唱ふる聲は伏屋に残つて、形は見えず消えにけり。元信抱き留めんと、縋りつけば影も
なく、「うん。」と仰向に目くるめき、忽ち息切れ絶え入りしを、名古屋、揚屋、門弟等驚き騒ぎ、藥さ
まざま呼び助け、やうく一間に三重休めけり。夜もほのくくと明け行く頃、管領の役人衆不破の
道犬、長谷部の雲谷誘引し、伴左衛門が酒漬の死骸を昇かせ、どやく亂れ入り、「此の所に名古屋山
三春平やある。管領よりの御下知有り、對面せん。」と呼ばはつたり。名古屋遅々せず出で迎へば、

三熊野かげろふ姿

あら惜しやあたら夜や。夫婦のなかに咲く花も、一夜の夢の眺めとは、知らぬ男のいたはしやと、泣くより外の事はなし。昔の朝のみじまひに、髪に炷いたり裾にとめ、そよとふくさの色風も、今焼香に立つ煙、反魂香と燻ゆるかや。香爐の灰の灰寄せも、順をいふなら此方様を、我こそあらめ逆さまの、水の流れの身のならひ、所々の死水を、誰にとられんあさましと、よそに言ひなす言の葉を、世に亡き人とはそも知らず。ア、いま／＼し。老木の末の思ひおきはよしなやな。こちも其方も若松の、千代の杯ざ、んざ、濱松の音、七本松の七本を、女は卒塔婆に數ふれど、男は今日の七五三、嫁入ごとせし戯れも、今は實と嬉しけに、手を引きあうて笑ひ顔、我は朝顔しほみゆく。花の上なる露とは知らぬ果敢なさよ。月は缺けてもみつの山。娑婆の便りは片便宜、文も届かず言傳も、いはで心の熊野路や、照手の姫のやつれぐさ、常陸小萩も夫故、身を旅籠屋の水だなの、はしに目鼻の餓鬼阿彌を、夫とは更に白絲の、縁はきたなき土車、心は物に狂はねど、姿を物にくるはせて、引けやひけやヨヤ此の車、えいさら／＼／＼筐の葉に、死出の旅路の後世の友、一ひきひけば千僧供養、二ひきひけば萬能の、薬の湯元と聞くからに、四百四病は消えもせん。骨になつても癒らぬは、私かそ様を戀病、變る心を案じては、神の御名さへぞつとする。飛鳥の社濱の宮、王子々々は九十九所、百に

と夕顔の、黄昏照らす行燈の、障子に映るを能く見れば、元信は元の人體にて、女の影は五輪と、みやが物ごしばかり、人間の地水火風の風脆き、木の葉に結ぶ陽炎の、露の姿ぞ哀れなる。四郎二郎はらう／＼と、疲れ侘びたる如くなり。雅樂介なほ訝しく、「此の菅笠は、里の便りに参りしが、何に入ることぞ。」と言へば、「なう嬉しや／＼。ほんにこれがほしかつた。私が熊野を信ずる事、敦賀では遠山、三國での名は勝山、伏見へ賣られて浅香山、山と云ふ字を三度つき、それ故に木辻では、三つ山とつけられし。思へば熊野三つのお山の名を穢し、牛王の咎めも恐ろしく、お主と夫婦にして下さらば、連れだちお禮に詣でませうと、笠の紐まで紵けおきし。おつつけ別るゝ身なれども、一日でも斯う添ふからは、願ひは叶うた同然、神佛に誑はないと、此の襖戸にお山の繪圖を頼みまし、参つた心で拜まんと、思ふ所へこの笠は、どうした便りに來たことぞ。餘の事は何も言はずか。又の便りに傳三殿へ、假令如何なる事ありとも、四郎二郎様へ歎きの懸る事などは、知らせまして下さんすなと、よう言ひ届けてくださんせ。」と、菅の下まで我が夫を、いたはる心ぞ不便なる。「サア女夫連で参りませう。こなさまは勝手へいて、後夜の鐘の鳴るまで、念佛きらして下さんすな。似合うたか知らぬ。」と、笠打被たる五輪の影、五つの假の夢現、餘所のことではなく／＼も、元の座敷へ人々は、宗旨宗旨の手向草、題目眞言念佛の、廻向に更くるも 三重

の時には念佛といふものも、何の穀に立ちませぬ。南無阿彌さへすうく、陀佛までやらすに、轉りと取つていきました。」と、「わつ。」と叫ば人々も、「扱は定よ。」と手を打つて、皆々袖をぞ絞らるゝ。名古屋も呆れるられしが、「疑ひもなく夫にひかる、魂魄、假に形を見せけるぞや。さもあれ様子を尋ぬるため、腰元々々。」と呼びければ、「あい。」と答へて奥より出づる。「何とおみやは機嫌はよいか。」と問ひければ、「アイ機嫌ようにこくく笑うてござんする。さりながら、志有るとて酒も魚も口へよせず。櫛の香の煙絶やすな。煙絶ゆれば爰にゐる事ならぬとて、お寢間の内は抹香で、ふすほります。」と言ひければ、「して四郎一郎はどうしてぞ。」「ア、さればおみや様のお頼みで、お寢間の襖に、熊野の繪をあそばいてござんする。」「扱はみやの幽霊、疑ふ所もない。」とあれば、腰元驚き、「ア、怖や。なう知らいで傍に居ました。」と、膝の傍に這ひ寄りて、身を屈むこそ道理なれ。雅樂介心を決せんと思ひ、「さもあれ狽野干の業も有る。實の死したる幻は、形あれども影映らすと承る。某參り、直に逢うて筈をわたし、燈火をたて、實否を試し申すべし。方々は小庭より、障子の影を御覽あれ。假令怪しいこと有りとも、必ずわつといふまいぞ。」「何が怖いこと有る。」と、誰も口では夕暮や、小氣味の悪くも竹めり。雅樂介何心なき調子にて、「これは暗いお座敷。みや様はそれにか。火を燈したらようござらう。」「ア、さればいな。心の迷うた身の上、闇に闇を重ねるつらさ、晴らして欲しや。」

佛も、やくたいもない骨佛にしてのけた。と、さめくくとぞ泣きける。人々更に實とせず。酒に酔うたか狂氣したか。みやは少し様子あつて、姫君に替り四郎二郎と祝言し、五日前より奥に夫婦ならんでぢや。戯けたこと吐すまい。「イヤ私を戯けになさる、か。七日前に死んだ人が、五日前に来るものか。蓮臺寺專譽様の御引導、舟岡山で灰になし、和國様をはじめ、女郎衆から名代に、禿どもが灰寄せ、五輪まで立てたもの、何の偽り申しませう。」と、眞顔に言へば人々も、ぞつと怖氣も立ち寄りて、「して眞實か。どうして死んだ事ぞ。」と言へば、「眞實かとはいとしほけに。常が癪持、ぶらくとはしなから、一日と寝られたこともない人が、いつぞや葛城様身請の晩から、頭痛するとて引きこみ、それから枕上らず、次第に重つてくる程に、お客衆のひきくで、柳原の法印さま、半井の御典薬、幸ひと和國様へ、對馬の客から参つた朝鮮人參、尾張大根見る様なを、刻みもせず丸口、人參の風呂吹を一期の見始め、人參でも鐵砲でも、いッかな咽を通すにこそ。もう無いに極まつて、私を呼び寄せ、今までは隠した遠山というた昔から、四郎二郎様と夫婦の契約し、目出度う願ひ叶うたら、めとつて熊野参りを致さうと願ひをかけ、此の笠の紐も手づから拵けました。これを著て四郎二郎様、熊野へ参つて下され。死しても心は連れ立たう。書置もしたいが、口でさへ盡されぬ。筆には申中廻らぬと、目をほつちりと明いて、南無阿彌陀佛々々々々々と七八遍は聞きました。が、なう肝心

る。其の日もやう／＼傾く頃、名古屋山三春平。「お見舞申す。」と案内ある。雅樂介出で迎へ、「先づ以て此の度は、姫君様料簡うつくしく、おみやも念晴れ、元信も落ちつき申す事、皆是れ貴公の御蔭、門弟中も忝く、悦び存じ候。」と、いづれも禮をなしにける。「これは迷惑。元信ためと存すれば、各同然の大慶。扱今日は五日め、五百八十の餅を搗いて、里歸りといふ事、縁邊の式法なれども、親元は遠所、祝うて我らが宅へ呼びたいと、葛城も申すが、ちよつと尋ねて見たい。」とあれば、雅樂介打笑ひ、「イヤ尋ぬるに及ばず、やがて別る、日切の女夫、寐入る間も惜しいと、顔と顔を突き合はせ、頭も振らぬしたたるさ。里歸りはさて置き、臺所へも出られませぬ。夫れは仰な喰ひつき様、さうして互に飽かせたら、跡の爲には珍重。元信筆は達者なり。一日一夜に、半年の仕事は出来う。」と笑はる、斯かる所に無紋の色に淺葱の上下、編笠取つて入るを見れば、舞鶴屋傳三郎、出口の奥右衛門、打菱れたる風情なり。名古屋を始め門弟中興醒めて、「これ傳三、あんまりそれは粹過ぎた。聞かぬといふことあるまい。葬禮の戻りに、祝言の家へたち寄るは、無禮すぎた不道化、をかしうない。歸れ／＼と苦々しく叱られ、鼻打ちかみて目を擦り／＼、姫君様の御祝言と、遠慮致して見ましたが、わきから沙汰があつては、お恨みの程もいかゞと、女房が心をつけてまして、今日七日目の慕参り、ついでながらのお知らせ、常々氣だてが結構で、おみやとはいはず佛々と申したに、あつたら

がよい。元信は豫てより、傾城いきと聞きしゆゑ、此の小袖を見や、郭模様に言ひつけた。是れ著ていきや。」と袴襦脱いで、「七日といふも忌々し。來月一ぱい貸すぞや。」「ア、お志は有り難けれど、終に別るゝ此の身なり。然らば七々四十九日が其の中は、私が妻と思召せ。此の分で死んだらば、定めし男の餓鬼道へ墮ちませう。」と、泣くく立てば姫君、「さう言うて皆吸ひ干しやんな。どこぞ少し残してたも。こちはこれから腰元つれて歩いて戻る。あの乗物でみな供しや。」と、歸るさを見て遠山は、「姫君様の情程、我が身の罪は重なる。借る時の地藏菩薩に捨てられ、返す時の閻魔の廳、どう言うて遁れう。」と、涙をかこふ神垣や、神も佛も見通しに、酸いも甘いも梅青む、北野の假屋に、

下之卷

三重 嫁取の、嫁の手道具、御廚子、鏡臺、うちみだれ箱、葛籠、貝桶、挾箱、長刀持たせて遣手のみやが、來るとは思ひがけもなし。其の心底の届きし事、姫君の情といひ、かたゝく黙し難ければ、門弟雅樂介、采女隼人、大學など宗徒の弟子ども、すべよく賄ひ、春平にも内意を得、表向は銀杏の前御入り有りしと披露すれば、方々の音物樽よ肴よ巻物よ、太刀折紙の馬代銀、五十目がけの蠟燭の、明けぬ暮れぬと賑ひて、今日五口目の麻上下、雑煮の黒餅、子持すぢ、つきくしくぞ見えにけ

り、越前の敦賀で遠山と申して流れを立て、四郎二郎殿とは故あつて、起請一筆書かねども、釘鏝より離れぬ中、されども方々をうろたへ、今は六條三筋町、上林が内みやといふ、流れの身よりあさましい、遣手はしてもおのれやれ、一度は狩野元信が、内儀とは言はれうくと、四年が間の氣の張弓、はつたりと弦切れて、泣くにも力あらばこそ。無理とも損とも、餘り無法なことながら、永うはいらぬ一七日、今宵の嫁入を下されば、跡は御前と萬々年。七日添うて別れて後は、此の世の牛顔見せまいし、たとへ死んでも彼の人の、未來の廻向は受けますまい。もう此の跡は申しませぬ。」と、涙を流し手を合はせ、伏し轉ぶこそ哀れなれ。姫君呆れておはせしが、「聞けば笑止慚はしや。いやと言ふはたいいてい、胸慾者といはれうす。心得たと言うてから迷惑するは我一人、新枕はどうかうと、きほひか、つて行く嫁入、道から貸して歸るとは、話にも聞かぬこと、こちや義理づくめになつたか。」と、途方に暮れて泣き給ふが、や、有つて涙をおさへ、「ム、よし／＼合點した。和女が其の思ひからは、男も心にかゝる筈。二人の縁の離れぬ中へ、嫁入してをかしうない。蓋も懸子も打明けたこそ女夫なれ。男を貸してやる程に、互の心を晴らしたも。さりながら、餘りかけごを明け過し、底抜きやつたらこちや聞かぬ。」と、涙ぐみつゝ、宣へば、「ア、有り難や」と遠山は、姫の膝に抱きつき、貸すお心より借る心、御推量あそばせ。」と、泣聲よそに飛梅の、神も憐み給ふべし、「サアとてもなら早い

入する身に女の際で、只のことは思はぬ。四郎二郎殿の妾か、但し時の戯れに、末では妻にせうな
どと、男の當座間に合はせを、一筋な心から、其の恨みでござらうの。我が身に知らぬことながら、
殿を持つ役なれば、聞くまいとはいはぬ。道理さへ立つことで、負ける道なら負けもせう。又筋もな
い道言うて見や。我にも手も有り足も有る、銀杏の前が理不盡と、言はれては大人氣ない。相手むか
ひにしておきや、サア何ぞ聞かう。」と、口は陸路をわけながら、胸はしどろの山坂や、顔は躑躅の如
くなり。女溜息顔を上げ、「ア、流石でござんすな。其の美しい出やうには、かう取つた胸倉を、放し
やうに困つた。我とても中々、狼藉する氣は微塵もなく、お乗物に縋つて歎きを申し、お情を受けう
と、七本松から跡先に、これまで窺ひ参りしが、頭のかゝりがどうもなく、思はず慮外致せしなり。
仰々しい白無垢著たは、討ち果しての何のといふおどしでも見せでもない。思ふ願ひが叶はずば、西
所川原か舟岡へ、直に飛ばうと思ふ氣で、私のための修羅出立。高いも低いも女子には、大なれ小な
れ此の氣はあれど、いはぬでもつた世の中、色に出さぬをたしなむと、心で心を叱つて見ても、いか
なる慾もはなれうが、男に慾は得離れぬ。さりとてはきたない氣、恥かしうござる。」と聲をあけ、譯
をも言はず泣きりたり。瀬兵衛を始め女房達、「御祝言の時刻ちがふ。道行ばかりいはずとも、要るこ
とばかり申せく。」と責めければ、「オ、御尤もく。私は土佐の將監が娘なるが、親の憂瀬に身を賣

郎二郎様、私や何にも申しませぬ。御息災で姫君と、夫婦になつて下さる。と、「わつ」と叫び伏しければ、共にせきくる四郎二郎、「オ、よい合點々々。郭の衆は涙もろく、目出度いことにも泣きたがる。身請する女郎衆に、名残惜しいは尤もながら、他國へ行かす死にはせず、おつつけ逢はう泣きやるな。」と、外に言ふさへ包みかね、目はうろ／＼になりけり。「サアお乗物が參つた。早うお出でなされませ。」「いや／＼乗物古い」と立ち出づれば、一家の太夫、天神、圍、葛城さまさらばでござんす。「門まで送れ、後賑やかし、打つたり舞うたり、舞鶴屋、傳三が萬うけこんだ。置土産を遣手衆お春お夏。」と、勇めども、みやが心はあきがらの、腰の中著ぶらくと、物寂しけにぞ三重見えにける。花の三月はや過ぎて、娘の年も二十棹、何時の間にかは長持に、桐の葉茂るよめり月、銀杏の前の御祝言名古屋山三の謀計にて、四郎二郎元信を、北野の社人に假座敷、名古屋が家の子世繼瀬兵衛輿添にて、供女中の出立や、地黒、淺葱、紅檜皮、右近の馬場にぞ著き給ふ。竝木の櫻暮れかゝり、また人貌も白無垢著たる、若き女の横合より、嫁入の供先おし分け／＼、打つも敵くも事ともせず、しつかと縫つて引くほどに、乗物の戸は碎けて放れ、姫君「あつ」と叫び給ふを、胸ぐら掴んで引きすり出し、土堤に押しつけ引据ゑたり。瀬兵衛刀の反を打ち、六尺徒士衆おつ取りまはし、「そこを放せ放さずば、ぶち殺せねち殺せ。」と口々に呼ばはれば、姫君制して、「ア、黙つて居や、構やるな。」嫁

聞きすれば伴左衛門を討ちとめた物語。「ア、うれしや、女房事は出ぬさうな。まちつと聞かう。あの耳語は何ぢや知らぬ、聞きたいまで。」と耳をよせ、「ア、悲しや、連れて歸つて姫君と、女夫にせうと言ひくさる。こちの男が利口さうに、こなたの詞は背きはせぬと、吐しづらは何事ぢや。エ、聞かまぬ物を腹の立つ。」と、耳を塞いで立ちつ居つ、身を揉み歎くぞ哀れなる。舞鶴屋の傳三郎、遣手、引舟、下男、いきりきつて大聲あけ、「こりやく、葛城様の身請さらりつと埒明いた。あとの三月二日に暇をやるとの一札、王様の御諭旨より高直な物握つた。乗物の戸をぐわらりと明けて、今でも大門にお出でなされ。」と喚く聲に、人々悦び走り出で、「扱々お手柄く。酒嶺童子の首より取りにくい事、主もたぬ身は爰が過分、手を引きあうて門を出で、名古屋山三と葛城と、後々までの話を残さう。ヤア亭主、近付になつて置きや。狩野四郎二郎元信と云ふは此の人ぢや。廻り逢はうばかりに、互の苦勞は知る通り、身は葛城を請けだす、四郎二郎は大名の、お姫様をほり出す。祝言の夜は勝手へ見舞や。扱みやの禮は今申さぬ。前垂鍔を捨てさせ、武家が公卿か町人が望み次第に、數ならねども拙者が親分。先づ姫君の祝言には、待女郎に頼まう。」と、勇みかけても投首に、目も泣き腫らして返事もせず、堪へ兼ねてつと出で、言はんとするを四郎二郎、柄に手をかけ腹をさすれば、手を合はせ泣くく退れど、なほ堪られず、思ひきつて言はんとす。四郎二郎腹押明くれば、「ア、く、申し四

を碎いて、何の波風ない様に、十の物が九つ、追付埒が明く筈で、あれ奥におやわいな。」「是れは大慶、先づ通つて對面せう。」「イヤ、待たんせ、そりやならぬ。こな様を尋ね出し、姫君と夫婦にせねば侍がすたると、今も今言うた人に、逢はずといんで下さんせ。」「エ、愚癡な事ばかり。我故に一命を果さうといふ山三ぢやないか。逢はずに歸つて人外の名を取れか。けしう逢はせまいなれば、爰で腹を切らうか。」と、脇差に手をかくる。「ハテ死なんせではないわいの。外に奥様持つまいといふ誓文立てて逢はんせ。」「オ、姫君は扱置き、たとひ餅屋のお福、山姥と祝言するととも、山三が詞を一たん立てすにおかれうか。エ、世間見た様にもない、氣が狭いぞや。」と恥ぢしむる。「世間は唐土まで知つても、氣は武藏野程廣うても、大事の男を人には添はさぬ。山三様に逢うて、四郎二郎が女房は、此のみやでござんすと、罷り出て斷らう。」「オ、言ひたくば言や。詞の中に脇差を、この腹へ突きこむ。サアどうぞく。」と詰められて、泣くより外は、何をいふも大切さ。「そんなら言ふまい、息災でゐて下んせ。さりながらどうぞ言ひ抜ける、なら、言ひ抜けて見て下んせ。」と、まだぐとくしの忍泣き、「尤もく男のつら役、斯う言ふと何の如才が有る物ぞ。弟子衆こちへ。」と涙ながら、奥へ行く間も惜しまれて、「これ采女様雅樂様、祝言の語が出たら、言ひ消して下さんせ。」と、頼む返事の否應は、涙に紛らし入りにけり。心許なさあぶなさに、心騒ぎて落著かず。襖の際にさし足し、立

や。それをとんと打ちこして、主親方にも背きしゆゑ、奈良伏見まで賣り渡され、今此の京で遣手となり、花の都も我が身には、鬼界が島に住む心、戰凍瘡に苦しみても、手足の苦勞はなりもせう。心を痛めるばかりぢやない。力業にも才覺にも、かなはぬものは逢ひたいと、思うて遣瀬がなかつた。」とあまえ口説くぞ不便なる。四郎二郎も盡きせぬ涙「オ、道理々々、いとほしや。度々文でもいふ通り、和女の蔭にて、大事の繪を書き譽を取り、契約たがへず身請をせうと思ふ間に、不慮の事ども、命が有るといふ許り。恩をきた名古屋山三、我ら故の浪人、行く先もく、目出度いといふ字は書き様も忘れて、今は團扇の繪、葦屋釜の下繪に露命を繋ぎ、大津で問へば奈良にといふ。難波で聞けば伏見とやら。是れは采女雅樂介、二人の弟子の介抱で、丸四年めに顔を見て、嬉しいことはどこへやら。おれといふ者ないならば、疾うによい仕合、前垂鑑はさけまいと、親御の事まで思はれて、生きた心はせぬぞ。とて、男泣に泣きければ、「ナウさう打明けて下んすが、ほんくの御眞實。私は寧ろ親のこと、思ふ所へいかなんだ。私に罰が當らずば、當る者は有るまい。」と、口説き立つるぞ哀れなる。稍あつて四郎二郎、「先づいふべきは、名古屋山三春平此の所にて不破伴左衛門を討つて、詮議に遇ふ由、洛中のこれ沙汰。意恨のものは某故。聞き捨てておかれぬ挨拶。郭の説はどうぞ。」と言へば、「さればいなア、詳しい事も聞きました。山三様にする世話は、こなさんへの奉公と、さまざま心

れ催す相の山、我に涙を添へよとや。夕朝の鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、聞いて驚く人もなし。
「通りや。只の時さへ相の山、聞けば哀れで涙が溢れる。悲しうてならぬどうぶくらに、あた聞きともない。通りやく」と、いひて涙をおし拭ふ。相の山野邊より彼方の友とては、血脈一つに數珠一連、これが冥途の友となる。「ア、しただるい、手の隙がない。通りやく」といへども、心に苦のない新造禿、ばらくと走り出で、「此方は好きぢや相の山、聞いて泣きたい。所望々々」と立ちかゝる。「エ、意地の悪い子供ぢやわ。それ程何が泣きたい事。やつて去なそ」と巾著の、紐を解いて取り出す、錢は一錢二世の縁、切れても切れぬ笠の内、泣き沈みたる顔見れば、戀しゆかしの四郎二郎、互に、「あつ」とばかり、目くれ心はしみんと、抱きつきたうも邊には、禿が目元小ざかしく、堪へるだけと包めども、咽びふくろび泣きるたり。「ア、去なせましたらよい物か。まちつと哀れな所を、諒うて聞かせてくださいせんせ。」
「あつ」と涙にするさゝら、鼓弓の弦も細き聲、相の山定めなき世に捨てられて、身の寂滅が知らせたく、文は書けども便りなし。麻覺の友とては、夢に見た夜の面影か、これが麻覺の友となる。「をりしも二階奥座敷、來いよく」と手をたたく。「あいよく」と禿ども、立つ間遲しと走りより、「これかうしたこともあらうかと、憂き命をも捨てなんだ。よう顔見せてください」と、縋れば男も抱き締め、涙の外は聲もなし。「なう戀しいのゆかしいのとは、大抵戀路の習ひぞ

送りて、「おいとしやく、傳三様、どうぞ首尾してくださんせ。まきぞへが入るならば、私が種子の帯も有り、八丈の袴もござんす。」と、歎けばともに泣聲の「オ、奇特によう言やつた。おれも男ぢや氣遣ひすな。嗚を總嫁に賣つてなりとも、埒を明けぬといふ事は、ない。」て出づるぞ頼もしき。みやが憂き身の憂き思ひ、口でいはねば氣につかへ、目に流るゝは百分一、胸に涙のとゞこほり、山三様に骨折るも、男の心の悲しみを、思ひやり手となつたるものの、ぞんざいで成られうか。戀がかうじて遠山が、此の様になつたとは、知らぬか聞かぬか、男めが何所に居るやら死んだやら、梨も礫もうつとりと、煙草飲んでも煙管より、喉が通らぬ薄煙、人の見ぬ間に思ふ程、泣くを所在か味氣なや。内を首尾して葛城は、走つて來るより驅け上り、「みや殿爰にか、いかい世話であつたけな。忝いぞや、土になつても忘れはしませぬ。おれが心を察したも、ほんにく物日なかに瘡せたわいな。こなたは今は何の苦もなうて樂である、遣手の身は羨ましい。山様は奥にかのちよつと逢うて來うぞや、後にく。」と言ひ捨て、行くを見るにもなほ涙、「つらいぞ憂いぞといふ中にも、男を傍へ引きつけては、憂きを凌ぐも力が有る。此の身には苦も有るまいとや。明暮つきあふ人目にさへ、樂な様に見えるもの、遠國隔てた男氣に、思ひやりのないことは、無理ともいはれず。さりとは、せめて有所が聞きたい。」と、聲をたてねばないじやくり、氣も沈み入る時しもあれ、心細けな鼓弓の聲。哀

エ、主持たぬ身の無念さよ。」と、齒切をしてぞ涙ぐむ。みやは聞く程我が男の、身に遛りくる悲しさの、何卒よい分別して、進せて下され頼みます。」と、身に引つけて歎く體。亭主しばらく思案し、「これ／＼よい仕やう有り。爰へよりや」と小聲になり、「これをついでに、葛城様をとんと請出し、奥様に定める時に、親方と肌を合はせ、手形の日づけをとつと跡の月にして、外様へは借宅見たての其の間、郭に少し逗留分、すれば御夫婦といふものよ。昨日まで伴左衛門が口説いた狀文、握つてからは密夫の證據慥かなり。女敵討は天下のお許し、千人切つても切り徳。此の分別はどう有らう。」みやは悦び、「ア、できました／＼。目出度い／＼、智慧者め。」とあふぎ立つれば、「イヤ／＼むしやうに目出度がるまい。當分請出すお銀がないが、もしお腰の物を、それまでの質物に遣はされば、私が加判で太夫様をたつた今、門を出して見せませう。さりながらお侍にお腰の物とは、なうおみや、どうも申しかねるわいの。」ハテおのしの身ばかりか、不便になさる、四郎二郎まで、命を助かることなれば、御料簡あそばしませ。」と、手を合はせるやら歎くやら、山三も共に涙をうかめ、「オ、／＼何ぞが扱何が扱、皆の衆に苦勞をさせ、何しに否と言はうぞ。近頃過分千萬、コレこれは重代の左文字、二千五百貫の折紙有り。惜ししとは思はねども、七歳の時より今日まで、竟に脇差一本で、他所へ出たこと知らぬ身が、刀の冥加に盡きたか。」と、涙は雨や鮫鞘の、脇差ばかりで奥に入る、後姿を見

三味線の、天柱に貌を筋かひ身、絲の音色も目の色も、人を斬つたる體はなく、亭主は結句色違へ、
「先づお話しいらぬ物。内外の者ども必ず仇口聞くまいぞ。」と、わなく慄ひ手酌にて、滅多に飲ん
でぞ居たりける。みやも聞くより驚きて、さては我が二世までと、思ひ込うだる四郎二郎様に、かく
まで深き恩を見せ、お命をも捨てんとは、ア、頼もしや忝や。我こそと名乗つて一禮いはうか。い
やいや姫君とやりに聞えては、御祝言の邪魔ぞと、追ひざけらるゝは知れたこと。只餘所ながら彼の
お方の爲に成り、お命を助けるこそ、我が夫への奉公と思ひ定めて、「これ傳三様、お侍の覺悟の上
を、女子の料簡推參なことながら、あのさんに腹切らせ、恩を受けた四郎二郎とやら、何國の浦で聞
かれても、よもや生きてはゐられまい。人の由縁は知れぬ物、どれからどれへどうつつて、誰が悲し
みとならうやら。山三様のお身の難、脱るゝ工面は有るまいか。思案は今でござるぞや。」と、よそを
言ふのも夫のこと、案じて餘る涙の色、胸撫でおろすも道理なり。「オ、わが身がいふ通り、おつ取つ
て郭の迷惑。お仕置には法が有る、腹切りたいとおつしやつても、ようあたゝかに、見苦しい罪に粟
田口、下からどうもはかられぬ。」と言へば、山三はつとして、「ア、よい所へ氣が付いた。三味線所
ないわいの。相手は主持こちは浪人、あばれものにしなされ、木兔の止つた様に、獄門などに曝され
ては、先祖一家の恥辱。今さつぱりと腹切つても、其の段からは死骸まで、いよく恥が重なる。

る、額に千石、兩の手に二千石、主人の外一生に、此の式作法はえや一人。これが禮ぞ。」と手をつけば、「ア、勿體ない、何のお禮が入りませう。ちよつと葛様に逢はせて、去なせましたい物ぢやが、私が行けば目に立つ。和國様一筆進せて下さんせ。」「いや文もいかぢや。私ら直に誘うて、遊びに出るかほで、連れまして來ませう。サア皆ござんせ。」と、座敷をこそは立ちにけり。然らば爰は人も來る、二階へお通りなされ。」といへば、「ヤレ何が怖うて隠れうぞ。伴左衛門を斬つたるは誰とか思ふ。此の山三が手にかけ打つて捨てたるぞ。葛城が意趣は僅かの事。彼めと傍輩たりし時、狩野四郎二郎を身が取持にて、奉公に出せし所に、伴左衛門親子、雲谷といふ繪師を引き、御在京のお供の留守に無實をいひかけ刃傷に及び、四郎二郎はゆき方しれず、剩へ外戚腹の姫君銀杏の前、四郎二郎に心をかけ、御祝言有る筈を、妨げ入れて狼藉し、某までも讒奏し、浪人の身となつたれば、重ねくの意恨あり。殊に四郎二郎は隠れもなき名筆、大内繪所の官にも進む身を、某強ひて國に留め、難儀をかけて居られす。姫君と夫婦になし、四郎二郎さへ出世すれば本望々々。生けて置かば四郎二郎は、如何なる仇をかなすべきと、傾城の意趣を幸ひに、討つて捨てたる伴左衛門、知れて切腹する許り。四郎二郎故に捨てる命、聊か惜しいと思ふにこそ。武家に生まれた不祥には、大門口で立腹切り、新造衆や禿どもに、芝居でするやうなこととして見せう。ヤア葛城はどうぢやの。亭主諸へ。」と

こりや遣手め、重ねての詮議には、水をくれる用心せよ。」と、おどして立てどもおぢもせず、「エおかせ。銀くれる遣手に水くれるとは悪がうな。」と、笑ひをしほに言ひしらけ、先を拂ひて立ち歸る。權威を見せて突き鳴らす、ちぎり木の音三味線に、引きかはりたる三筋町、戀の市場と三重なまめかし。名古屋山三春平は、通ひ馴れにし六條の、道には石が幾個有るまで、よみ覺えたる一貫町の、茶屋が葺簀のよしやよし。里に擲つ命ぞと、大門口の與右衛門も、門番には二代の後胤、平の供して口軽く、舞鶴屋にぞ入りにける。亭主傳三を始めとし、數多の女郎遣手まで、「これはく様子はお聞きなされうが、先づ四五日も御出でなされぬがよい筈。日頃意趣ある伴左衛門、斬手は名古屋山三ぢやと、何處ともなしの取沙汰、葛城様のお案じ、我ら夫婦の氣遣ひを、此のおみやが辯舌で、今日はすらりとやりましたが、伴左衛門が死骸を、奈良漬にして後日の詮議。殊にお客の名所書き記せとの言ひつけなれば、お身に覺えがなうてから、詮議まんぎも喧しし。お前を外様へつくばはせては、此の傳三が立ちませぬ。帳面に留めぬ間に、まづお歸り。」と言ひければ、「いや傳三さうでない。お手前こそ懇なれ、郭中の女郎衆へ苦勞をかけた此の山三が、穿鑿にあふが悲しいと、屈んでるほどならば、里通ひも妓交りも、あたまからせぬがよし。まづ和國様から御禮申す。大事の遣手をお貸しなされ忝い。さてみやの働き心さし、詞の禮はいふ程古い。三千石取つた山三が、手をつけて頭を下け

上からは、名古屋山三が妨げ言うても叶はぬ筈。然るに違亂に及ぶとは、汝等がもがりと覺えたり。斬手も知らいで叶はぬ筈、眞直に申せ。」と詞あらく問ひかくる。少しも臆せず會釋して、「御意の通り賣物とは申しながら、神佛の奉加と同じことで、銀出しながら拜まするは、恐らく世界に傾城ばつかり。買うてくれるが嬉しいとて、親掛りやお主持の、戀路の闇の一寸先、見えぬ所を傍から見ても、買人のお身も廢らす、女郎ものほさぬ様に、舵を取るが引舟、目の鞘はづすが遣手の役、大事にかける證據には、世間に心中十あれば、郭に一つ有るかなし。伴左様は御大身、お銀に不足も有るまいが、御主人のお耳に立ち、お身のがいとも成る時は、御一門の評議にのり、人をはぐの欺すのと、おつる所は郭の難。爰の意氣をたてるが色里のたしなみ、身請の談合破れたも、伴左様のお身の上、大事に思ふ上の事でごさす。道で切られさんしたは、そこまでは存じませす。さだめし死にとも有るまいし、尤も遅けても見さんしよし、そこに如才も有るまいが、先の相手が強かつたか、身の取廻しの悪さにか、知らんでやんす。」と答へける。檢使の人々もてあつかひ、「能いわくもう黙れ、一時に詮議成り難し。死骸を酒に浸し置き、後日の評定たるべし。それく。」とて役人衆、「桶しつらひ死骸を納め、酒汲み入れて繩がらみ、牢屋へやれ。」と昇き上げたり。役人重ねて、「これく年寄々々、商賣なれば傾城には構ひなし。さりながら夜前よりの買手ども、事済むまで名所を、一々に書き留めよ。」

「これくおみや。檢使の衆が葛城が遣手を召さるれども、玉は愚鈍で臆病なり、何をお問ひなされうやら、いひ教へて濟まぬこと。郭中の頼みぢや。葛城が遣手になつて出て、請返答をしてたも。恩に受けう。」と言ひければ、「あの死骸の傍へ出るることか、ア、ゑづ。さりながら、いやと言ふも仔細らし。いひ損うたら大事か。口にまかせて遣つてくれよ。てんほのかは。」とぞ出でにける。役人ちぎり木横へ、「おのれは葛城が遣手めか。用有つて召し出すに何として遅なはる。横著者氣隨者。」とかさをかけて叱らるゝ。「ア、彼のさんわいの、頭から叱らんす。なんの氣隨でごあんしよ。十二人の太夫様を一人して廻せば、辨慶遣手が忙がしさ、口説のなかを押隔て、打物業にて叶ふまじと、日に幾度の詭言やら、よるの身持は揚屋の吸物同然、ちよつちよと座敷へ出る度に、一杯づゝも飲む酒に、ふらふら眠りのいき倒れ、朝から晩まで緋の袴、花色縞子の巾著も、中は秋の夜の、長紐提けた鍵の穴から天を覗けば、ほのく明け、妓様達の身仕廻ひ、風呂の手洗水の髪洗ひの、鍋よ杓子よ白よ杓よ。正月しまへば節句朔日、今日は二日の拂ひ日なり。灸もするたし、卯腹辰股脊中に腹、商賣には換へられず、皮切こらへて出る心、其の様に言はんすな。郭は諸國の立合なれば、常住切つてのはつてのと、是れ程の喧嘩は、お茶の子く茶の子ぞや、ア、仰山な。」とわらひける。役人怒つて、「いやさおのれが身の上は問はず。此の伴左衛門千二百兩にて、葛城を請出すとな。傾城は賣物、直段極まる

京童の物見だけく、手負見がてら傾城見に、羣集は押しも分けられず。「すはや檢使。」と人を拂ひ、管領の役人供人引具し、死骸を解いて疵改め、「江州高島の執權、不破の伴左衛門に極まつたり。扱此の者の買うたる傾城は何といふ。意趣有る者の覺えはなきか。口論杯はなかりしか、眞直に申せ。當分隠して、後日に知れなば、曲事なり。」とぞ仰せける。年寄罷り出で、「上林の葛城と申す大夫を、千二百兩にて請出さるゝはずの所、名古屋山三と申す浪人衆と葛城と、行末深い約束とて、談合成りかね申せし故、「兩方意趣を含み居られしが、これならで覺え候はず。」と、詳かにぞ言ひわくる。雜色一々口書し、「名古屋山三は浪人なれども、元は伴左と傍輩、かたぐゝ大事の詮議なり。まづ葛城が遣手と呼ばへ。」遣手出ませ。」と呼ぶ聲に、玉は臆兩年寄なり。「やら恐ろしや、私が出て何と云はう、縛られたら如何せうぞ。なう悲しや目がまうた、氣付は無いか。」と泣き居たる。これでは埒が明くまい。どれぞ氣轉な遣手衆を、頼んで見ん。」と言ふうちに、「出ませく。」と頻りの使。「エ思ひついたの。一文字屋の和國についてゐる、みやといふ遣手は、越前の敦賀で、遠山と呼ばれた全盛の太夫、戀故今はあの體、すゝどけなうて智慧まんく、闇魔の廳でもいひぬける、此のみやを頼まう。あれく彼處へ、大福帳かたけて來るは、みやぢやないか。」といふ所へ、おしよほからけの忙がしけに、「皆さんこれにござります。まあくけうとい事が出來まして、御苦勞でござんす。」と、言ひ捨て通るを、

山の時鳥、まだ初聲の口は吃り、心は鐵石金剛に、勝つた優れた、越えた峠は日の岡の、石原草原足もしどろに、吃り廻つて上りけり。

中之卷

里は都の末申、通ひても通ひたらぬぞ三筋町、西洞院中道寺、衣紋が馬場の一方口。まだ大門の遅櫻、忍びて聞け一番門、とんと打つたる太鼓の番太、「ヤレ何者やら、大門口に切られてゐる。」と呼はる聲に、亡八、揚屋、茶屋、駕舁、郭の年寄立ち合ひ、見れば年頃三十ばかり、屈竟の侍、二つ重の白無垢白茶字に、縫紋紅裏に、源氏雲の裾ぐ、み、南蠻ごろの大小、對の金鐔、毛彫は波に山王祭、七所御物蒔繪の印籠、天川珊瑚珠は然もなくて、大疵五ヶ所肝先にとゞめありと、委細に書きつけ、管領所へ訴へさせ、死骸を圍ふ横梯子、二階から女郎買手、遣手のかめは首のばし、松は寐ほれた顔出し、まだ起きくの禿ども、常彌幾野と、手を引舟も走つてきて、擲にくらかけ木に取りつき、「薰様あれ見さんせ。吉野様の大膽な。掃溜山へ上つて、海老の皮で足突かんすな。」「突いたら大事か、切られて死ぬる人さへ有る。」と、あだ口々の喧しさ。「あの切られてゐる人は、葛城様の大盡、不破の伴様に似たちやないか。」「ほんにさうぢや伴様に極まつた。」「サア伴左衛門が切られた。」と、

さじものと、續いて掛る、團八が弟犬上三八、二八ばかりの小人、枕返しの曲枕、押取りく、はらりくはらりく、うつ波枕かず枕、枕重に打ちみだれ、散りくりにこそ引いたりけれ。伴左衛門怒りをなし、手にも足らぬ雜人ばら、しや何事か有るべき。武士の刀のあんばい見よ」と、眞一文字にかけたりけり。「あら凄まじや、こはいかに。」姿は沙門、頭は鬼神、鬼の念佛嚙み碎く、牙を鳴らし角をふり、向ふ者の眞甲、撞木を持つて叩き鉦、くわんくくく、耳にこたへ骨に染み、進みかねては引足も、隼、荒鷹、鷲、熊鷹、一度にさつと飛び來り、むらがる勢を八方へ、追つ立て蹴立て、つきたて、翼の嵐夜明の風、鷲の聲々、三重逢坂の、本綿著鳥にしろくと、白み渡れば白紙に、有りし形は彩色の、繪に寫りたる筆の精、天骨の妙ともいひつべし。又平勇んで女房の袖を引き、物は言ひたし、心進んで舌まはらず、只、「ウ、く」とばかりなり。「エ、爰な人。敵が詰めかけ事急な。廻らぬ舌を言はれぬ事、舞でく。」と言ひければ、「オ、それよく氣がついた。今目前の不思議を見よ。我らが手柄で更になし。土佐の名字をついだる故、師匠の恩の有り難さよ。敵の中へ驅け入つて、命限りに追ひ散らさん。」と、大勢に割つて入り、西から東、北から南、蜘蛛かくなは十文字、割りたて追ん廻し、さんくりに切り立てられ、さしもの軍兵堪りかね、八方へ遁け散つて、残る者こそなかりけれ。「さあしてやつた。此の上は、爰には片時も叶ふまじ。都の方へ。」と姫君を、逢坂

うなういやや。」と身顛ひし、舌を捲いてぞ恐れける。「何を吐す狼狽へ者。人三人とも住まぬ荒屋、何者か有るべきぞ。察する所店に張つたる三文繪を生物と見違へしか。怖いと思ふ心から、眼が眩んだ腰拔ども、それく部をこじ放せ。ぬるい。」と下知すれば、鳶口引懸け、「えいやく。」と、なんなく店をこじ放し、内を見れば不思議やな、言ひしに違ひも荒奴の、影ともわかず幻とも、まだほのぐらき 曉の、鳥毛の槍先揃へしは、土佐が魂寫し繪の、精靈なりとも知らばこそ、我もくと騙け向ひ、打てども突けども手に取られぬ。露の命を君にくれべいと、そめしだいなし嫌ひなし、相手えらばず防ぎたり。雲谷が弟子長谷部の等嚴、「數にも足らぬ精奴、我に任せ。」と捲りかゝれば、片肌ぬいだる立髪男、大杯をひらりと閃かし、眉間にふつたる唐芥子、「オ、辛、オ、から。」唐錦、あやめも別かす引返す。師匠の雲谷たまりかね、「片端より打ちみしやぎ、手なみを見せん。」と飛んでかゝる。やさしや優者の、女わざには奇特頭巾、藤の竹刀をおつとりのべ、引ん纏うてはたと打ち、しとと打つをひらりと外し、受けつ解いつ、麻衣の玉襷、甲斐々々しき若き法師の現はれ出で、勇みかゝれる有様は、なみや鯨の瓢箪々々、持つて開いて鉢叩き、叩けばすべり、打てばすべり、ぬらりぬらりと手に堪らず、倦みはててぞ支へたる。不破が郎等犬上團八、「そこ退き給へ人々。」と打つて出づるや理の闇の、座頭一人とほくと、とほつく杖をふり上げく、盲目打に打つてんけり。餘

野の弟子雅樂介に頼まれ、お迎へに參る折柄なり。必ず包ませ給ふな。」と、囁けば嬉しげに、「オ、自らこそ銀杏の前。道犬、雲谷が追手すき間なし、よい様に頼むぞや。」と宣へば、又平土邊に額をすり付け、悦びの色勇みの色、氣を急げば尙物言はれず、心を仕形の腕まくり、力み反打ち居合の眞似、抜打、撫切、拜打、組合、捻首、手にとつて、握り拳の武士氣を顯はし、埴生にかくまへ參らする。夫婦が所存ぞ頼もしき。程なく八丁走井の間屋、組頭、組町引具し、おこしかへつて聲々に「六角殿の姫君朱印を盗み出で給ひ、御家老より御穿鑿、裏屋小路もあらためよ。別して繪書は家搜し有る。人は勿論犬猫も内を出すな。」と、裏口門口ばた／＼と、さしもの又平取りこめられ、狩場の鹿の如くなり。不破伴左衛門長谷部雲谷、著込の兵百騎ばかり、むら立ちきたつて家々に、押入り／＼搜しける。又平一期の浮沈ぞと、女房諸とも姫君を押しこひ、鄰をがばと蹴破つて、ぐつと抜けたる壁厚き、氷の様なるだんびら物、さし出す首は片端から、キ、く／＼／＼切り竝べん。」と、壁に添うてつつ立つたり。雲谷聲をかけ、「ヤア／＼これぞ音に聞く、土佐が弟子吃の又平めが住家なり。敲き毀つて搜して見よ。」「承る。」と一番手、「捕つた／＼。」と、どつと寄せしが、しどろになつて引き返し、「なう怖やすさまじや。何かは知らず家内には、人大勢みち／＼て、或は奴の形も有り、又若衆女も有り。人間ばかりか猿、野猪、鷲、熊鷹、爪を研ぎたて眼を怒らし、寄りつかる、ことでなし。な

や。」ともぎ放せば、女房を取つて投げ、はたと蹴て、「おのれまでが氣違とは、エ、女房さへ侮るか。不具は何の因果ぞや。」と、どうど座を組み疊をうつて歎きける、心ぞ思ひやられたる。將監重ねて、「汝能く合點せよ。繪の道の功によつて、土佐の名字をついでこそ、手柄とも言ふべけれ。武道の功に繪書の名字、譲るべき仔細なし。成らぬ。」と言ひ切り給へば、女房居直り、「サア又平殿覺悟さつしやれ。今生の望みは切れたぞや。此の手水鉢を石塔と定め、こなたの繪像を書きとゞめ、此の場で自害し、其の跡の謚り號を待つばかり。」と、硯引きよせ墨すれば、又平領き筆を染め、石面に差向ひ、「これ生涯の名残の繪。姿は昔に朽つるとも、名は石痕に留まれ。」と、我が姿を我が筆の、念力や徹しけん、厚さ尺餘の御影石、裏へ透つて筆の勢、墨も消えず兩方より、一度に書きたる如くなり。將監大きに驚き給ひ、「異國の王羲之趙子昂が、石に入り木に入るも、和畫において例なし。師に優つたる畫工ぞや。浮世又平を引きかへ、土佐の又平光起と名乗るべし。此の勢ひにのつて、姫君御朱印諸共に、取り返せ。」と有りければ、「はつ。」とばかりに又平は、「忝し。」とも口吃り、禮より外は涙にくれ、躍り上り飛びあがり、嬉し泣きこそ道理なれ。將監夫婦悦び、「心剛にて志厚けれども、敵に向つて問答せんこと、いかゞ有らん。」と宣へば、女房聞きもあへず、「常々大頭の舞を好き、妾諸共つれわきにて舞はれ候。節の有ることは少しも吃り申されず。」といふ。「やれ夫れこそは屈竟よ。試み

ウウ、うば奪ひ取つて歸りましよ。」將監きつと見、「ヤ面倒な吃りめが思案なかばに邪魔いる。そこ立つてうせぬか。」と、叱られてもおぢるにこそ。「イヤ膝とも談合と申す。口こそ不自由なれ。心も腕も天下に怖い者が無い。胸に覚えがござります。拙者が分別出し、叶はぬ時はえん正すけさだ、あつちへ遣るか此方へ取るか、首がけの博奕、命の相場が一分五厘。浮世又平と名乗つては、親もない子もない。倅のときから舊功なし、命にかへ申し上ぐるも、師匠の名字を繼ぎたいばつかり。拙者めを遣はされて下されませ。申し、さりとては御承引ないか。吃りでなくば斯うは有るまい。さりととはつれないお師匠ぢや。」と、聲をあけてぞ泣き居たる。將監なほも聞き入れなく、「不具の癖の述懐涙不吉千萬、相手に成つては果てしなし。これく修理之介、御邊向つて思案を廻らし、奪ひ返し來られよ。」「畏まつた。」と言ふより早く、刀ほつこみ立ち出づる。又平むんと抱き留めて、「マ、まんく待つてくれ。師匠こそつれなくとも弟子兄弟の情ぢや。此の又平を遣つてくれ。拜むくく。」「いやこりや又平、某彌猛に思つても、師の命は力なし。爰を放せ。」とかけ出づる。「イ、くいやハ、ハ、く放しやせぬぞ。」「放さねば抜いて突くが。」「ツ、つけコ、くく殺せ。ハ、くくくく放しやせぬぞ。」修理之介ももて扱ひ、「放せく。」と捻ぢ合うたり。將監夫婦聲を懸け、「放せく。」と留むれども、耳にも更に聞き入れず。女房取りつき、「あれお師匠さまの御意がある。おとましの氣違

を吃りに産みつけた、親御を恨みさつしやれ。」と、頼みなく／＼又平も、我が喉吭を掻きむしり、口
に手を入れ、舌をつめつて泣きけるは、理見えて不便なり。時に藪の内よりも、「將監殿光信殿。」と
呼ばはつて、痛手負うたる若者、縁先によるほひ立ち、「狩野の弟子雅樂介、御見忘れ候か。」「實に
も實にも雅樂介、まづ此方へ。」と座敷に入れ、「承れば四郎二郎殿、雲谷不破が悪逆にて、難に逢ひ
給ふ段々、具に聞きつけし。」とありければ、「さん候。某も供仕り雲谷と戦ひ、斯様に深手を負ひ
候。頼み切つたる名古屋山三殿は在京なり。元信危く候ひしが、漸う遁れ落ち失せたるも承る。
こゝに難儀の候は、姫君銀杏の前元信を憐み、七百町の御朱印を持ちて落ちたまひしを、敵奪うて
下の醜態に隠れし由、二度姫君屋形へ移し、御朱印奪ひ返さでは、永く繪師の瑕瑾なり。某手負の
身は叶はず。御加勢頼み申さん爲、忍び参り候。」と、語りもあへぬに、將監「皆聞くまでに及ばず。
狩野と土佐は一家同然、力に成つて参らせん。されども彼奴らと太刀打は、いつかな／＼叶ふまじ。
姫君にも負傷あらん。どうぞ辯舌のよき人に、御屋形の御意といはせ、誑つて取りかへす分別がござ
らう。何れも言うてお見やれ。」と、額に小皺頬杖つき、各小首を傾くる。又平何ぞ言ひたけに、妻
の袖引き脊中つき、指差しすれども合點せず。しんきをわかし、女房を引きのけつと出で、師匠の
前に雙手をつき、唾を飲みこんで頭をふり、「此の討手には拙者が参り、姫君もゴウ御朱印も、ウ、ウ

來ませう。ア、おはもじや。」と笑ひける。北の方聞き給ひ、「オ、ようこそ祝うてたもつた。今宵は奇妙なこと有つて、修理は名字を免され、土佐の光澄と名乗るぞよ。其方もあやかり給へ。」とあれば、又平時節と女房を、先へ押出し脊をつき、我が身も手をつき頭をさけ、訴訟有りけに見えければ、女房心得進み出で、「實に道すがら百姓衆の話を聞き、身は貧なり不具なり。弟弟子に土佐を名乗らせ、兄弟子はうかくと、いつまで浮世又平で、藤の花擔けたお山繪や、鯨おさへた瓢箪の、ぶらぶら生きても甲斐なしと、身を揉んでの無念がり、尤もとも憐れとも、連れ添ふ我等の心の中、申すも涙がこぼれまする。奥様までは申せしが、お直の願ひは此の時節、今生の思出、死しての跡の石塔にも、俗名土佐の又平と、御一言のお許しは、師匠のお慈悲。」とばかりにて、涙に咽び入りければ、又平も手を合はせ、將監を三拜し、疊にくひつき泣きさるたり。將監元より氣短く、「ヤア又してもく、叶はぬ事を吃りめが。こりや此の將監は、禁中の繪所小栗と筆の争ひにて、救勸の身と成つたるぞ。今でも小栗に従へば、富貴の身と榮ゆれども、一人の娘に君傾城の勤めをさせ、子を賣つてくふほどの、貧苦を凌ぐは何ぞ。土佐の名字を惜しむにあらすや。修理は只今大功あり。己に何の功がある。琴茶書畫は晴の藝、貴人高位の御座近く參るは繪書。物も得言はぬ吃りめが推參千萬。似合うた様に大津繪書いて世をわたれ。茶でも呑んで立ち歸れ。」と、愛想なくも叱られて、女房は力を落し、「此方

な繪書殿に、よいお山を十人程書いて貰ひ、金儲けがしたい。」と言へば、一人が聞いて、「オ、くく冬年お目に懸つたら、借錢乞の帳面を爰から消して貰はう物。お暇申す。」と打笑ひ、在所々々へ歸りけり。爰に土佐の末弟、浮世又平重起といふ繪書あり。生まれついて口吃り、言舌明らかならざる上、家貧しくて身代は、薄き紙子の火打箱、朝夕の煙さへ、一度を二度に追分や、大津のはづれに店借して、妻は繪具、夫は晝く。筆の軸さへ細元手、上り下りの旅人の、童賺しの土産物、三錢五錢の商ひに、命も錢も繋ぎしが、日影の師匠を重んじて、半道餘りを夫婦づれ、夜なく見まふぞ殊勝なる。夫はなまなか目禮ばかり、女房傍から通事して、「まだこれはお寝りませぬ。實にめつきりと暖かに、日も永うなりまして、世間は花見の遊山のと、ざはくくく致します。こなたは山陰、御浪人のお徒然をいさめの爲、嫁菜のひたしに、豆腐の煮染、小筒でも持ちまして、關寺が高觀音へお供して春めく人でも見せませうと、夫婦申して居ますれども、心で思うたばかり、道者時分で店は忙がし洗濯物は支へる、仕事にははかいかず、日がな一日立ちすくみ、何をするやらのらくらと、急げばまはる瀬田鐵、只今膳所からもらひまして、練貫水の天津酒、ゆめくしうござりますれども、此の春からお仕合がなほつて、鰻の穴から出る様に、御世にお出でなされませ。ほんにつべこべノと、私が言ふことばつかし。こちの人の吃りと私がしやべりと、入り合はせたらよい頃な、女夫が一細出

の處に逼塞し、將監年は寄つたれども、某は門弟修理之介正澄といふ者、油斷はせぬ。」と、棒ふり廻しいさかふ聲、將監夫婦障子を明け、「聞いたく、天地の間に生ずる物、有るまいとも極め難し。諸共探せ。」と槍熊手、提げく、えいく聲、たい松ふつて狩り立つる。一叢竹の下陰に、「そりやこそ物よ。」と火を上ぐれば、暴れに暴れたる猛虎の形、人に恐る、氣色なく、脊を撻めてぞ休み居る。將監横手を打つて、「あら不思議やがんひの筆の、竹に虎の筆勢に、少しも紛ふ所なし。これは實の虎にあらず、名筆の繪に魂入つて、顯はれ出でしに極まつたり。然も新筆。今是れ程に書かんず人は狩野祐勢が嫡子、四郎二郎元信ならでは覺えなし。いづれにもせよ、證據には足跡有るまい。」「物は試し。」と百姓ども、若草わけて尋ぬれども、虎の足形あらざれば、「書き手も書き手、目利きもめきき前代未聞の名人や。」と、心なき土民等も、拜む許りに信をなす。修理之介七足退つて師匠を拜し、「ア、有り難や、此の虎を見て、繪の道の悟りを開き候。その印、我が筆さきにて、あの虎を消し失ひ申すべし。名字名乗をさづけ、御許しを受け度く候。」と、懇望あれば將監悦び、「オ、今日より土佐の光澄と名づくべし。」と、印可の筆をあたふれば、修理はいたゞき墨を染め、虎の寸にさし當て、四五間間をおきながら、筆引くかたに從つて、頭、前脚、後脚、胴より尾先に至るまで、次第に消えて失せけるは、神變術ともいひつべし。百姓ども舌をまき、子孫までの話の種。なうあの上手

力者、組み止めんといどもあふ。虎は猛つて爪をとぎ、邊を蹴たてて三重揉み合ひしが、元より不思議の猛獸、道犬が襟鬚引唾へ、打ちかたけくるりく、くるりく、くるりくと持つて廻り、一振りふつて投げければ、瞬を打越し敷石に、面をすつてぞ打ちつけける。虎は勇んで元信の、縛めを噛み切り、脊を差向けてそばえたり。元信頓て心づき、袴の股立しほり上げ、ひらりとこそは乗つたりけれ。虎は千里の足早く、風に嘯く身も軽く、追ひ來る敵を追ひ散らし驅け散らし、堀も築地も躍り越え、飛び越え跳ね越え驅けり行く。豊干禪師が四睡の虎、李將軍は虎を組む。繪にかく虎を動かすは、古今一人乗つたも一人、天下一人一筆の、譽は世にぞ三重残りける。けに獸君の一靈、山野にはびこり草木を踏み折り、田畠を荒す事な、めならず。近郷の百姓聲々に、三井寺の後から藤の尾までは見届けた。此の山科の藪かけへ逃げ込んだに極まつた。皮に疵をつけずに殿き殺せぶち殺せ。」と、とりく喚き評定す。庵の内より棒ついて、小提灯提けたる男、「や、何者ぢや、人の軒際にて打ての殺せのとは胡散なり。」とぞ咎めける。「いやこれは矢橋粟津の百姓どもなるが、此の頃設樂山から虎が出て暴れる故、鄰郷がいひ合はせ、此の藪へ追ひ込んだ。探させて下され。」と口々に呼ばれば、侍あざ笑ひ、「やい、虎といふ獸が日本に出た例なし。途方もないこと。扱は汝等は夜盜押入の手引ならんが、此の庵を誰とか思ふ。土佐の將監光信といふ繪師、仔細あつて先年救勘を蒙り、此

るを、女中手々に枕槍、長刀にて引つつ、み、圍ひ防げば餘さじと、奥を差してぞ追つつめける。腰掛に控へし雅樂介、斯くと聞くよりたまられず、かけ向つても奥方の、勝手は知らず中口の、明けすの門碎けてのけと扉をたき、狩野四郎二郎元信が弟子、雅樂介之信と云ふ草履取主といひ師匠なり、死ぬる道なら共に死なん。高が繪書の丁稚づれ、怖いことも有るまい。相手の首取る分のこと。開けよ明けよ」と、貫木も折る、ばかりに踏みたき、鳥居立にぞ跨つたる。元信内より「雅樂介か満足した。身に過りなき上に、慮外をして、姫君の御身のあやまち氣遣はし、歸れ」と呼ばはれば、「ア、慮外といふもことによる。明けずば踏んで踏み破る。」と、わめき散らせば雲谷不破「雅樂介を打殺せ。」と、引返して門の貫木、はずす所をつけ入つて、雲谷が小額すつばと切り下げたり、「あいつたつた」と躍りあがり、二人抜きつれ打ちかくる。あなたへ追詰め此方に支へ、城下をさして三重切り出づる。四郎二郎地踏鞠踏んで、「エ、佞人ども。むざくとは死ぬまいぞ。親よりつたへし一心の繪筆はこゝぞ。」と觀念し、右の肩に齒を立てて、ふつつくと喰ひやぶり、口に我が身の血を含み、襖戸に吹きかけく、口にて虎をご書いたりける。電目雷威の眼の光、怒り毛怒り斑怒り爪、千里も馳けん勢ひなり。道犬は姫君の、行きがたたつね廻りしが、「まづ繪書めから仕まはん。」と、太刀を抜かんとせし所に、俄に吹き來る風騒ぎ、繪にかく虎は形を現じ、牙をならして吼えかゝる。道犬も強

厚化粧、三平二満の口紅、しなだれ懸る會釋顔、「これがなんの藤袴、しやちらごはい皮袴。」と、どつと笑ひのどやくや紛れ、盡きせぬ妹脊と成り給ふ。かかる所へ不破伴左衛門宗末、雲谷を伴ひ、遠慮もなく上座にすつかと直り、「これ四郎二郎、汝如何なる野心にか、お屋形を調伏し、亡ぼさんとの存念あり。きつと詮議を遂ぐべき旨、父道犬が下知、申譯仕るか、直に繩をかけうか。」と、はや繩たぐつて見せかけけり。四郎二郎ちつとも騒がず、「せめてかたちの有ることに、申譯もあるべし。御屋形調伏とは、此方の言譯より、まづ御咎めの證據承らん。」とぞ答へける。雲谷下座より、「こりやこりや證據は某よ。總じて繪書の祕密にて、繪をかいて調伏すること、人は知らじと思へども、此の雲谷が見つけた。此の懸繪は和主が筆、梅に山鳥雪に雉子。抑當家は高島の御屋形と號す。山偏に鳥と書いては、嶋とよむ文字なり。梅の梢に山鳥の高々と止りしは、これ高島にあらずや。雉子にほろゝの聲有つて、雪はふるとの心あり。讀み下せば高島亡ぶる調伏。狩野とは狩の野と書けり。姫君と心を合はせ屋形を亡ぼし、一國をおのれが狩場の野原にせんずる表相、重罪遁れず繩蒐れ。」と、取りつく所をひつばし、胸板はたと蹴倒すまに、飛びかゝる伴左衛門が眞甲、刀の柄にてはつしと打ち、直に抜かんとするところを、隠し置きたる取手の者、十手八方鐵鞭を、ぶち立て、捻ぢ伏せて、高手小手にいましめ、黒書院の牀柱に、思ふさまに縛り付け、「姫君の御朱印を、奪ひ取れ。」と羣

せの返事、聞き切り参れとお使。私も一分立つ様に、お返事なされ。」と述べにける。元信額を疊につけ、「冥加に餘る仕合ながら、度々お返事申す如く、諸傍輩のそねみと申し、慾心に紛る、事世聞のあざけり。よし御機嫌に違ひ改易仰せつけらるゝとて、御恨み候まじ。御うけとては成り難し。よき様に御取りなし、頼み入る。」とぞいひ切つたる。「ハ、アにべもなう埒あいた、如何にとしても上つ方へ、左様な慮外申されまじ。少し物に品つけて、始めより約束の女房ありと申しなば、お胸の晴ることもある。さりながら、其の女房は何者と、ごどをつかるゝ念の爲、今こゝで私と夫婦かためる杯して、とつと前から藤袴と、契約ありと申さば、いかな主でも大名でも、此の道許りは先が先、此の談合はどう御さんしよ。」「オ、ウ幸ひ望む所。サア杯仕らう。」「いや／＼／＼／＼、我とても假にはいや、佛神掛けての女夫ぞや。」「誓文々々、繪筆をとらぬ法もあれ、かうぢや／＼。」と抱きつく。「近頃嬉しい忝し、これ祝言の杯。」と一つ受けて元信に、「妻の杯戴く作法、儀式は同う。」と四海波、腰元中が謠ひつれ、奥よりお局島臺に、七百町の御朱印箱、「姫君様の御祝言、三國一。」とぞ祝ひける。四郎二郎合點ゆかず、逃げんとするを抱きとめ、「藤袴とは假名ぞや。自らこそは銀杏の前、誓文だての杯、いや成らぬ。」と宣へば、「いや我らの名さしは藤袴、外に妻はこれなし。」と、なほ意地張れば腰元衆、「そんなら本の藤袴、早う／＼。」と呼びいだす。お茶の間のきりかが五十餘りの

の辭儀無用の沙汰。」と、四郎二郎に刀の鐙、打ちあてく袴の裾、踏みたくつて睨みつけ、お次の間にぞ出でにける。御留守といひ女中の邊、なほ穩便にことともせず、御好みの掛物、梅に淡雪雉子山鳥、仕つて候。」と、紐を解いて懸ければ、「このよし披露致さんに、サアまつゆりとお茶進じや。」と、局は奥に、「あい／＼。」と愛想らしき聲々の、男の側へ寄ることは、常に梨地の煙草盆、落鴈、かすてら、羊羹より、菓子盆運ぶ腰元の、饅頭肌ぞ懐かしき。物に臆せぬ男なれども、女中の色に目うつりして、氣を取られたる折ふし、十八九なる脇詰の、後結びも格別に、銚子杯前に置き、しとやかに手をついて、「私はお姫様のお髪上、藤袴と申す者。しみ／＼お話致しませいと、御事ぞや。」御存じの通り、お妾腹のお姫様、御臺様への憚りにて、大名高家のお望みなく、心次第縁次第と田上郡七百町、御朱印握つて殿好み。つれないは其許様、いづぞやより種々と、お乳の人、お局、口のさい程勧めても、どうでもお請ないとのこと。おいとしや姫君は、あまりの事に戀ひこがれ、私をお寢間へ召し、ヤイ藤袴、せめてのことにそちなりと、四郎二郎と名をつけて、心のかしに抱いて寢よ。そちもおれを抱きしめて、姫可愛いと言うてくれと、もがき言がおいとしさ。とんと下紐打解けて、寢る程抱く程締める程、二人の心せく許り、どちらぞ男に成りたいと、言うても泣いても叶はばこそ。なう大名の手業にも、有るべき道具の足らぬのは、ひよんな物とておむつがる。自らにいな

あり。立ち歸るも不覺なり。幸ひく、奥へ通路の鈴の綱、ふりはへ引けば鈴の音、「おう。」と答ふる女の聲、宮内卿とて中老の局立ち出で、「ヤア狩野殿か。姫君様も御待ち兼ね、お直の御用もあるとのお事。サアく、此方へ。」とありければ、畏まつて四郎二郎入らんとすれば、伴左衛門聲をかけ、「待て待て、お家の掟を知らずんば、なぜ物頭には伺はぬ。知つて背か不届千萬。上より御許しなき時は、刀物を帶し奥方へ進ること、禁制との御條目。あれ大小挽いで引摺り出せ。當番々々。」と呼ばれば、宮内卿、「いやこれは私ならず、姫君様より殿様へ御伺ひ、即ち京より名古屋山三殿の指圖にて、奥へ召さる、四郎二郎、なんのお咎めござらう。」と、いへども更に聞き入れず。「お留守を預る家老の耳へ承らぬ御意なれば、殿の御意でも叶はぬこと。それ伴左衛門挽いで取れ。」「まつかせ。」と立ちあがる。四郎二郎も身がまへして、縋らば切らんず眼ざし、左右なくも寄りつかず、「サア渡せ。」と、詞でおどすばかりなり。時に奥よりお腰元、つかくと出で、「これく、いづれもお姫様より御意が有る。四郎二郎には直に御用の事あれども、丸腰でなければ、奥へ通さぬ御法度と有れば、是非に叶はず姫君様、此の所へ御出でとの仰せなり。四郎二郎は御用人、其の外の男の分、雲谷は言ふに及ばず、御家老殿を始め御前へは叶はぬ。皆お廣間へ立ちませいく。」との權柄さ。道犬親子無念ながらつつと立つて、「サア雲谷、姫君の御前へは、男たる者罷り出でず。男でもない奴原に、侍

きつとお仕置然るべし。」とぞ支へける。道犬うなづき、「つとと寄せ雲谷。總じて此の四郎二郎めは、相役名古屋山三が取持にて召し出された。山三は元來お小姓立、前髪まへがみの酒林さかばやしで殿とのを酔よはせし男傾城おとこけいせい口くちばしの黄きな小雀こすずめが、家老からうらぬ竝ならにつらなり、威ゐを振ふるふ其そのの山三さんざめを甲かみにきて、のさばり廻まはる四郎二郎しろうじろう、我々われく親子おやこが睨にらめども、事こととも思おもはぬ奇怪きくわいさ。其その方ほうとも同然どうぜんたり。また乙おとの姫君ひめぎみ銀杏いんぎようの前まへは、御愛子おあいしなれども脇腹わきはら故ゆゑ、御臺所おだいどころを憚はぶり給たまひ、田上郡たがみこほり七百町ちやう七百の御朱印ごしゆいんを付つけられ、京都きやうとう有徳とくの町人ちやうにんか、由緒有ゆゑしよある御家中ごかきやうへも、下くだされんとの御内意ごないい故ゆゑ、某それ嫁よめに申まうし請うけ、此この伴左衛門はんざゑもんに縁組えんぐみし、七百町ちやう七百をぬしづかんと、當あてはめて置おいたもの、姫君ひめぎみ狩野かのめに心こころを通かほはし、今日こんにち密々ひみつひみつ祝言しゆげんありと、奥目付おくめつけより聞ききたれども、御意ごいとあれば詮せん方かたなし。御在京ごにやきやうの其そのの間あひだは、山三さんざめも留守るすなれば、彼奴かやつが方人かたうどする者ものなし。少しすこしにても過ありまを、随分ずいぶん見出みだせ、聞き出きだせ。慮外りよぐわいをせば打殺うちころせ。御留守ごるすの間あひだ國中ちゆうこくは、某それがさばきなり。此この不破ふはといふ鰐わにが見みいれて、あまり程ほどは有あらせまい。試たして見みたい新刀あらたなはないか。一の胴どうか二にの胴どうか、望のぞんで置おけ。」と言いひければ、雲谷うんこく甚たた笑壺わづはに入り、「政道せいどう正ただしき御家老ごかからうらぬ様、お屋形やかたの心柱こゝろはしら。」と追従つゐしやうたらん見みぐるしし。斯かくとは知らしらず四郎二郎しろうじろう、櫻さくらの間まに伺候しこうし、姫君ひめぎみ銀杏いんぎようの前まへ様さまより、御掛物おんかけものを仰おほせつけられ、持参ちさん仕つかまつり候まうら。御取次ごとりつぎ頼たのみ奉たてまつる。」と、言いへども入道にふどう伴左衛門はんざゑもん、じろりと見みたる許ゆるりにて、返答へんだふもせず脱だつめ付つくる。ヤアしれ者ものよ。そばには雲谷うんこく。いかさま我われに手てを取とらするたくみ

ア沖漕ぐ船の帆のほの見えて、さす腕には壽福の枝、をさむる手には不老の枝、垂れて雪見のひかへの枝、これくくく、すつと伸びたるながしの枝、松は非情のものだにも、傳へし心の色は尙、宛ら青々條々として、松の生木のいきくと、若やぎ立てる其の風情、狩野は一點違ひなく、書きつらねたる筆勢、何れを寫繪何れを立枝、紛ひつべうぞ見えにける。元信「家の幸甚たり、早速歸り本懷遂げ、此の報恩には御身の上、父御の事も請取り申す。萬のお禮は本國より」と、立ち歸るを「これ申し、神の告げに任せしからは、恩にはかけず未かけて、情を思召すならば、必ず外に内儀様持つてばし下んすな。奴殿頼みます。」「何がさてく。天神様より太夫様、追付お二人連理の松、中に立つたる此の松は、鳥臺持ちての取結び、千年萬年萬々年、とぞ付きひつ付き松脂の、離れぬ中」とぞ三重壽きし。されば江州高島の館、左京大夫頼賢卿、參勤の上洛あり。執權不破入道道犬、同嫡子不破伴左衛門宗末、國を預る留守居なり。御家の繪師長谷部雲谷、遠しく、入道親子が前に手を束ね、「近頃過言に候へども、某事は雪舟の嫡傳として代々の御扶持人、此の高島のお館にて、繪筆を取つて誰人が拙者が上につき申さん。然るに此の度、狩野とやらん申す二才、武隈の松を書きしとて、過分の恩賞を下され、古參を踏み付け御前にはびこり、剩へ今日は奥方へ召され、姫君様よりお料理を下さるゝと承る。殿様の御留守、誰が許しての推參。御家老の仰せ、一國に違背申す者はなし。

これは斯うもあらうと、御料簡ついでに、お交際もあまたなり。賦ひのかなふ使りも有らば、御世話頼み奉る」と、思ひ入つてぞ語らる。女郎はつと顔を眺め、「扱は狩野四郎二郎元信様とは御身の上か、恥をつゝむも時による。何を隠さん私ことは、土佐將監光信が娘なるが、父は一年救勸うけ、今浪人の憂き渡世、此の身に沈むは申さずとも、推して泣いて下さんせ。扱武隈の松の圖は、土佐の家秘密の繪本、漏す事は叶はねども、昨夜不思議や天神様の夢の告げ、狩野と云ふ繪師下るべし、武隈の松を傳授せよ、父が出世の種ならんと、見たはまさ／＼正夢。」と、語りもあへぬに四郎二郎、感心感涙肝にそみ、天を禮し地を拜し、懐中の繪筆繪絹を廣げ、「サア遊ばせ、御傳授頼む」と悦びける。いかにも傳へ申さんが、親の許しもなき中に、筆取ることは如何なり。ア、何とせん、實に思ひ付きたり、あの御供の人の立姿を、松の立木になぞらへ、笠を枝葉の笠となし、此處にてまなび見せ申さん、それにて寫し留め給へ。これそこな奴様、爰へござんせ、雇ひましょ。」「ない／＼／＼。」手ふる頭ふる年ふる松の、松根によつて腰つきも、千年の縁寫せしは作意なりけり。先づ歌人の見立には、一本松を二木とも、三木とつらねし言の葉の、それは老木の松が枝なれど、寫す若木の奴のこの、此の膝のふし松の節、前へ地摺の下枝に、ぬつと出せし片足は、盧外千萬貫枝、筆捨枝や久方の、天津少女のかたくま枝や、腰掛枝の三蓋松、月にさはらぬ枝々の、さゞれ小枝の松かけを、サ

へ現はれ出で給ひ候。ヤアくはやあれへ御出で候。我らはお暇給はり候べし。御逗留の閒御川の事は承り候べし。「たのみ申し候はん。」心得申して候。高き名の松の門立たちなれて、人待ち顔の暮ならん。町は敦賀の懸作り、まぶこそ潮のみちひなれ。誰をかも知る人にせん此の郭の松となりしも親の爲、賣られ買はれて北國の、土氣の賤の里なれど、米の育ちは上田の、水損なしの太夫職、名を遠山と呼ばれしも、人に登れの戀の坂、おろし歩みの道中は、花の立木の其の儘に、ぬめり出でたるごとくなり。雅樂介、「これ申し見事な者が夫れそこへ。夫れく」といへば四郎次郎、「ヤア何と、松が見えたか現はれたか、寫しとめん。」とふつと立ち、女郎にはたと行き當り、「これは扱、松かと思つてはまつた。眞の松を尋ねて見ん。丁稚來い。」と行き違ふ。袖を控へて、「これ申し、此の遠國の我々と、京の郭の松様達と、比べさんすが不覺の至り。併し不粹なお方には、松と見られ嬉しうなし。杉と言はれて腹立たず。桑の木とも榎とも、こなさあに似合うたあはうの木とも見させ。」と、無駄言なしの言ひ捨ては、田舎妓とて笑はれず。「オ、御機嫌そこねし御尤も。實にく松とは太夫さま、我等は悪う心得て、不調法な御挨拶、眞平々々お詫言。これを御縁にお知人になりましたし。下拙ことは狩野四郎二郎元信と申すわづかの繪書、さる御方より武隈の松の圖を仕れとの仰せ。すなはち天満天神の夢想に任せ、此の所にて名ある松と尋ねしを、太夫さまとの取りちがへ、

る人なし。我これを書き顯はし、譽を得させ給はれと、天満天神を祈りし所に、武隈の松を見んと思はば、越前國氣比の濱邊に行くべしと、あらたに靈夢を蒙れども、それは陸奥爰は越路、何を知邊に尋ぬべき。哀れ里人の來れかし、物問はん。」とぞ呼ばはる、〇所の者の御用とは、都人にてありけに候。御尋ねありたきとは、何事にてばし御座候。」御覽の如く都の者、天神の教へに依つて松を尋ねる仔細あり。此の所にこそ名高き松の候らめ。教へて給はり候へとよ。」これは思ひも寄らぬ事を承るものかな。此の北國にてお尋ねあらうならば、越前布越前綿、若しは實盛の生國なれば、お供の奴の髭にぬる、油墨などのお尋ねもあるべきに、名高い松とは流石優しい都人。先づ當國の名木は、西行が鹽越の松、あそふの松牛若が物見の松、金が崎には義貞の腰掛松、山の山松、庭の庭松、門には門松、酒には濱松、肥えたは肥松、振ぢたは振松、わり松たい松ぬつほり松、我らが息子に岩松長松と申す嬰子もあり。莊屋の名は松兵衛、若い時には相撲取、赤松ぶちわつた様に御座ありしが、今老松になられて、力も元より下り松、腰も屈んで、るざり松くと所の人は呼び候。ヤア誠に天神の御告げとあるに思ひ當つた。當所敦賀の町に名高き松の御座候。これぞ京にも類なしと、心を懸けぬ人もなき、色よき松の候が、若し左様の松にては御座なく候か。」實にや往來も慕ふとは、疑ひもなく我らが尋ねる名木よ。急いで見せて給はれかし。」いつも夕暮毎には、此の所

傾城反魂香

上之卷

素きを後と花の雪、く、野山や春を畫くらん。聞きに北野の時鳥、初音を啼きし其の昔、清涼殿に立てられし、はね馬の障子の繪、夜毎に出でて萩の戸の、萩を喰ひしも金岡が、筆のすさみの跡絶えず、傳はる家や畫工の譽、狩野四郎次郎元信、丹青の器量古今に長じ、心ばへ好き男振、親の繪筆の彩色に、生まれつきたる美男なり。比は文龜の彌生の空、天満天神の告げありて、越前國氣比浦へと旅羽織、我は笠著て大小の、柄にも袋きせる筒、丁稚がこしの白山も、去年の縁に歸山、山の頂青々と、雲に映るふ月代の、湯尾峠の孫じやくし、盛りこほしたる花重ね、重ね重ねし旅籠屋が、情もあつき爛鍋の、敦賀の濱にぞ著き給ふ。四郎次郎一僕を招き、イヤイ雅樂介、外の弟子にもかくし、此の所に下りし事餘の儀にあらず。近江國の大名六角左京大夫頼賢殿と申すは、佐々木源氏の旗頭高島の館とて、系圖所領並びなき大將なるが、將軍家の御意を受け、本朝名木の松の繪本を集めらる。然るに奥州武隈の松と云ふ名木は、往古能因法師さへ、跡なくなりしと詠みたれば、名のみ残つて知

諸輪違、一文字、十文字、拂ひ落し、かけ落し、百手を千手と手を碎き、數多の敵に驅け向ふ。目覺しかりける。二重働きなり。胸板胸骨、眉間眞甲打割られ、弓手馬手へぞ伏しにけり。一時分は好きぞ乗つ取れ。」と、搦手より細川勝秀、城中へ亂れ入り、堀際堀際追つ詰めく、一騎も残さず討ち留めしが、赤沼親子を見失ひ、此處よ彼處と尋ぬる處に、中川が亡魂は、花の吹雪の雪女、一念の鬼女となつて、「あら恨めしや如何に赤沼、たとひ何處に隠るゝとも、助けはやらじ吉野山、花を尋ねて山めぐり、最期の寒風また此處に、互えかへりたる雪氣の雲の、雪を誘ひて山めぐり、めぐりくゝて輪廻の恨み、思ひしれや。」と、入道親子を引立てく、「來れく。」と、大將の御前に引据ゑ、なほ行くすゑは源氏の白旗白雪の、守神ぞとのふしでの、雪を散らして失せてけり。大將御喜悅淺からず、二人が頭を斬り掛けさせ、凱歌三度三々九度、斯波細川に御杯、藤内五人に五箇國の、御加増御褒美段々に、樂車打つて囃した、囃した繁つた松竹の、世よし人よし物なりよし、仕合よしの今年ぞと、祝ふ春こそめでたけれ。

雪女五枚羽子板 終

あれ、我もく木戸押開き、槍先揃へてさゝへたり。何處よりか來りけん、藤内三郎高手小手に縛められて陣中に跳り出で、一城の大將聞いてたべ。先日古川が館にて、兄の二郎に搦め捕られし、藤内三郎武治なり。情なき兄奴が生けもせず殺しもせず、やりばなしの放飼、近頃無念千萬なり。繩を解いて給はれかし。兄二郎奴が首取つて、此の無念を晴らしたし。如何にくく」と呼ばはれば、城に籠る藤冠者「まかせて置け。」と飛んで出で、「ヤア三郎か珍らしや。大事の味方一人、搦めさせては口惜ししサア働け。」と解く處を、「忝し。」と腕首取り、前へとつて引寄せ、どうど押伏せ、「一日の出來心、兄に背きし後悔さに、たばかつたるぞたはけ者。すぐに此の繩いたゞけ。」と、三寸繩に縛り上げ、兄弟のなかなほり、土産にする。」と廣言して、味方の陣へ押立て行く。心地好かりし働きなり。弟の五郎いりかほり、「今までは大炊介、今日よりは藤内五郎。四人の兄は親のしつけし亂舞藝。我等は自身の才覺にて棒を一手覺えたり。我と思はん者あらば、某が棒先に當つて見よ。」と呼ばはつて、白金にて筋金入りし、檜の桿棒搔い込いで、進み出づれば四人の兄弟「我々が一藝も揃へて軍の目を覺さん。棒に合はせて囃せや鼓、吹けや横笛、打てや太鼓、討つたり敵。」と戯れて、一聲を奏すれば、「こは花々しの者どもや。討ち取つて高名せよ。」と、走井久七、久八、羽根田頓藏、根地大藏、栗生熊藏、石坂九郎、獲物々々を提けて、討つてか、れば藤内五郎、棒の秘術の水車、横車、腰車、片手輪違、

氣を受け、傍輩には疎まる。此の身の前生は、何者が生まれ變りて此の身ぞや。」と、諸軍勢の見る目とも、恥ぢず歎くぞ哀れなる。「エ、思ひきはめたり。軍をすとも侮つて、好き敵は向ふまじ。雑兵の五騎十騎、討つとも何の益あらん。兩陣の真中にて腹搔き破り、生々の業煩惱を晴らさん。」と、腰刀するりと抜き、「此の刀こそうみの親よりゆづりの刀。これを添へて捨てられしと、養親の物語。二度指すべき鞘にてなし、共に冥途の供せよ。」と、鞘の真中、二つにさつと切り割つたり。不思議や鞘を二重にほり、父の筆と覺しくて、一通の證文あり。諸人不思議の思ひをなし、鳴りを静めて聞きければ、高らかにこそ讀みたりけれ。「五番目の男子に書き置く一通の事。抑我等が氏は藤原、生國は河内國、よつて家名を藤内と呼ぶ。久しく浪人に沈淪して、五人の男子をまうく。一藝に名ある者は、用ゐられずといふ事なしといふ本文を忘れず、藤内太郎より、二郎三郎四郎まで、笛鼓を習はしむ。汝は襦袢にて母に後れ、父また今死にのぞむ。孤兒とならんいとほしさ。路頭に棄てて養育の、また餘の親を待つ事も、實の親の情なり。共に孝行忘る可らず。藤内五郎忠治へ、慈父藤内大夫實治判。」と讀みも終らず、太郎四郎も立ち寄り、見れば父の手蹟なり。「ありしとばかりに見ず知らぬ、乙の五郎なりけるかや。」「兄々達かなつかしや。」と、兄弟ひしと抱きつき、慕ひ歎くぞ道理なる。城の内には聲々に、「かくとも知らばおびき入れ、とつく討つて捨つべき者を。あれ餘すな。」と言ふ程こそ

り。門を開き城内へ入れて給べ。」とぞ呼ばはつたり。斯くと聞くより新判官、堀の上に顯はれ出で、

「ヤア表裏者の恩知らず。汝不義の科によつて、害せられんずる處に、父入道が情を以て、命を助け

落せしに、其の大恩を振り捨て、一大事をなど藤内には語りしぞ。犬猫の畜類も、食を與ふる恩は知

る。蟲同然の奴原を、此の赤沼が味方にせんずる様はなし。とつく歸れ。」と言ひすてて、城の内へぞ

入りにける。大炊介も詮方なく、寄手の陣を見渡せば、藤内兄弟三人陣頭に控へたり。大炊介きつと

見て、「珍らしや藤内太郎、定めて沙汰にも聞き給はん。某御勘氣御免の願ひ申し上げたる處に、大

將軍の仰せには、赤沼父子が中、首取つて來らば、其の時御免あらんとの御詔につき、味方といつは

り城に入り、たばかり討たん心入れ、門外までは來たれども、敵心を許さねば力なし。方々偏に頼み

入る。斯波殿へも様子を語り、御執り成しにて御免あり、心すゞしく好き敵と引組んで、討死遂けた

き心底をあはれと思ひ、好き様に披露して給へ藤内殿。」と、涙を流して頼みける。太郎聲を荒らけ、

「情知らぬに似たれども、大事の攻口、小事にかゝはる暇なし。軍はじめの味方に對し、涙の體は不

吉なり。餘人を頼まば頼まれよ。」と、愛相なげにぞあしらひける。「はつ。」とばかりに大炊介「さては

ふつつと叶はぬか。」と、どうど座を組み歎きしが、「敵も味方も聞いて給へ。某程世にあぢきなき者はなし。實の親は見す知らず。捨子となつて拾はれし、苗字の親の一角殿には死に別れ、主君には勘

らからくく、とんくからくどんがらが、つってん天の時判り、地の利に合へる名將の、出陣こそは三重ゆ、しけれ。さる程に、斯波左衛門義將は、大將軍の御出でに、面目開く花櫻、吉野に籠る大敵を、血潮になれと赤沼が、大手の木戸に向はるゝ。搦手は細川勝秀、三萬餘騎を引牽し、貝を吹き太鼓を鳴らし、鯨波の聲をぞ上げたりける。軍大將竹東際に駒を立て、「清和天皇の後胤、足利の類葉、斯波左衛門源義將寄せ來る意趣は、赤沼入道父子謀逆を構へ、帝都を騷がし武將を弑し、四海を覆さんとする罪科據なし。誅戮せしむべき旨うけたまはつて發向す。救命といひ、天道いかでか免れん。速かに腹切つて、親子首を渡せや、やつ。」と呼ばはつて、しづくと乗り入りしは、勇々しかりける武者振なり。入道門の矢切に立つて、「大將を亡ほし、國家を望むは、弓矢取る身の定まる法、和漢其の例を知らず。忠孝にことよせて、位牌知行に膝を屈むる臆病者、入道一家を討たんとは、鷲の巢を鼠が狙ふに異ならず。誰かある、討つて出で追散らせ。」と、采押取つて下知すれば、城にも鯨波をどつと揚げ、大手の木戸口押開き、切つて出づれば寄手の大勢、入り違へ入り亂れ、もみにもうでぞ三重戦ひける。かかる處に金の御獄の方よりも、若武者一騎、卯の花緘の鎧著て、大手の木戸に突立ち大音上げて、「城内へ申すべきの事候。我こそ入道殿に一命を救はれ參らせし、義教の奥小姓一色大炊介久常、御高恩忘れ難く、命の親の御先途に、槍一本の御役にもと、御味方に參つた

打つたり敵も討つたり、物臭い赤沼に、胸が悪うて頭もうつ。太刀も刀もいらばこそ、撥二本が干將
英耶、一曲所望か、サア来い。」と、あたりを睨んで立つたりけり。「相手になつて犬死すな。遠矢に射
取れ。」と差詰め引詰め、雨あられと飛び来る矢を、「樂車太鼓の曲撥見よ」と撥押取つて切り拂ふは、
前代未聞の、三重拍子なり。矢種盡くれば敵の勢、太刀抜きつれて討つてかゝる。大將も太刀さしかざ
し、支へ給ふ其の隙に、藤内太鼓を轉ばせ寄せて、天も響けどうくくと、打鳴らす其の聲に、「す
は事こそ。」と三人は、我もくと引返し、大勢にわつて入り、斬り立て薙ぎ立て追散らすは、潔か
りし働きなり。熊橋犬二郎満景取つて返し、藤内に討つてかゝる。「しやしれ者奴、太鼓の撥の鹽梅見
よ。」と、目とも鼻とも言はせばこそ、無二無三にたゞきつけ、太刀打落いて小股をかき、うつぶせに
取つて伏せ、やがて繩をぞかけたりける。程なく三人立ち歸り、「御事初の御吉相、なほも目出度き驗
には、たゞ今あれにて承れば、赤沼入道吉野山の古城にたて籠り候を、斯波細川が攻め寄すると
の風聞、兩將が陣へ御入りあり、逆臣亡ほす謀、時刻を移すべからず。」と、言上すれば御大將、
「實にも。」と同じ給ひける。藤内四郎は、犬二郎が脊中に太鼓をくゝりつけ、「御出陣の武者揃へ、味
方を集むる觸太鼓の、祕曲を打つて祝はん。」と、撥かろくと打鳴らし、聲張上げてふれにける。「明
日より吉野の山にて大合戦、寄手の勢は三萬つゞき、敵役は赤沼入道、御望みの方々、明日は疾うか

負はせて置くべきか。御勘氣御免の御執り成し、頼み申す。」と許りにて、御前を立ち去りし彌猛心ぞ頼もしき。大將彼が後姿を遙かに見遣り給ひ、「如何に方々、彼奴が詞は心得難し。大炊介奴が瘦腕にて、赤沼父子を討たんとは、實に螻蛄が斧なれば、叶ふまじきと歎かんこそ實の心なるべきに、たやすく討つて參らんと、輕々しく立つたるは、思へば彼奴は入道が恩を送らん爲、義教が有様を窺ふと覺えたり。おつかけ討つて來るべし。疾くく。」と宣へば、血氣さかんの若武者ども、あせるばかりに思案もなく、「討ち取つて御門出の一番手を祝はん。」とさ足を踏んで三人は、藤内四郎相具して、もみにもうでぞ追掛けける。御運のなせる處なり。旅人の休らふ體にもてなし、側に寄り給へば、何處よりか來りけん、矢一つ來つて、左の袂に立つたりけり。「こは如何に。」とかなぐり給へど堪らばこそ。なほ亂れ來る矢を凌がんと、笠を持つて受け給へば、刈り残したる村薄、枯野に立てる如くなり。「今は叶はずこれまで。」と、此處の木陰、彼處の草叢、隠れ顯はれ遁れんと、佇む處に赤沼熊橋、弓箭の武者百騎許りが、一面に矢襖つくつてどつと寄せ、「ヤア義教、都よりつけ來るを、それと知らざる愚かさよ。速かに腹を切れ。異議におよばば、なぶり殺しにせんす。」と、鎌を並べし其の勢ひ遁れつべうは無き處に、藤内四郎取つて返し、矢面に驅け塞がつて、「ヤアこりやなまこび過ぎたる奴ばらかな。畠山が郎黨づでん天下に隠れなき、太鼓打の藤内四郎、定めて音にも聞きつらん。太鼓も

衛門に、争でか面が合はされん。仁義ある忠臣に見捨てらるゝも、義教が運の極め」とばかりにて、御涙にぞ咽ばるゝ。かかる處に十八九なる若者、編笠脱いで御前に畏まり、頭を地につけ申す様、「某は御近習に召使はれし、一色大炊介にて御座候。御壁書を背き不義の科、高眼を掠め女を相具し、驅落重罪遁るゝ方なく候へども、全く色に耽り、御成敗を恐るゝにも候はず。もと我らは一色が實子にて候はず。元來父母もなき捨子とやらんにて候ひしを、養父一色兵衛拾ひ取り、御目見えおほせ付けられ、總領に立つべき處に、段々實子出生いたし、養父兵衛尉世を去り、母にて候もの、若年の弟を總領と申し上げ、年かさの某を末子と沙汰し、式日の御禮も、俄に末子の座に列なり、御供に候六角島山山名を始め、肩を比べし諸傍輩に、面を向けんも面目なく、所詮一色が家を出で、誠の親の由縁を尋ね、此の面目を雪がんと存じ候折柄、心の外に御法式を背き、御所を立ち退き候。慈悲は上より御免を蒙り、御馬の前にて討死仕り候はば、生前の思出」と涙を流し申しける。大將御立腹まし、「一など以前首を斬つて捨つべかつしに、入道奴が助け落したれば、おのれは入道が大恩を受けし者を、召使はん様はなし。誠あらば立ち歸り、赤沼入道父子の中、首取つてきたれ。其の時は勘氣を許し召使はんす。罷り立て。」と御誕ある。大炊介承り、「有り難き上意。赤沼父子の首取つて、御憤りを安んじ奉らん。如何に傍輩達、若し仕損じて討死すとも、敵に半死半生の深傷を

白浪を、花の綱代と朝ほらけ、鸚の鳥鳶飛んで、天に戻れば魚淵に、躍る教も上下の、道明らけき鳩の峯、正八幡の鎮座なる、「我が氏の神軍神、武運を守りたび給へ。」と、頭を傾け給ひければ、各遙かに禮拜し、君が行方を祈念ある、御有様こそ殊勝なれ。見渡せば山の名の朝日に氷解けわたり、水や煙をまきの島、宇治の里の子打羣れて、唄萌ゆる女萎摘む若菜摘む、茅花杉菜にさいたづま、妻は誰が妻老いぬれば、露の姑々、水無い川で船漕がば、そなたは目籠で水を汲め、露の姑々。あの松山の松葉をよめや。嫁菜蒲公英土筆、葶菜摘みて童の、相撲取草立つ方に、勝てや勝てく、凱歌の、聲高無雙武士の、櫓にかけて播磨投げ、上ぐる團扇や扇の芝に、はや三番の勝相撲、名乗りて過ぐる郭公、待たぬに春を漏れ出でて、弓馬の道もさきがけんと、張り渡す長池や、水草かきわけ鳴く蛙、蛙軍の勝ち負けに、お身の上の占問へば、水の源、淀みなく、にこりなき世に泉川、しばしが程の泡沫に、沉まば沈め頼みある、瓶の原にぞ三重著き給ふ。さて其の後に、畠山小將監進み出で、「某召し具し候は、藤内四郎光治と申す郎等、太鼓の妙を得、戦場のかげひき、御陣の押太鼓、萬里を響かす名人ゆるゑ、乃ち御代々の太鼓を預け召し連れ候。斯波左衛門が家臣、藤内太郎が弟にて候へば、此の者を御使として、斯波が方へ内通し、一先づ御頼み然るべし。」と申し上ぐる。義教公やや涙ぐみ給ひ、「我もさこそは思へども、斯波が諫めを用ゑず、今かかる身となつたれば、今生にて左

かさね引きかへ、何時の間に鶉衣と綻びて、ほつれ出でさせ給ひける。従ひ仕ふるものとは、御側近き旅衣、狩場に馴れぬ若鷹の、鳥立も知らぬ若草や、二番生えなる若侍、六角左近太則冬、尊氏公の白旗を、守袋にまもりとて、覺み込めてぞ持ちにける。山名伊織介氏廣が、眩にかけたる袷紗には、代々に傳はる軍配團扇、昔を勻ふ梅の鞭、畠山小將監高顯が袋に收め腰に指す。同じく郎等藤内四郎光治、彼らもせめて攻太鼓、勝色見せてまた何時か、都に歸り花軍、開かん御代の關路の鳥も、此の曉を今しばし、忍べや我も忍ぶごと、門出の鷹に驚きて、笠打掩ふ人々の、世のなる未ぞいたはしき。思ふに違ふあらましに、昨日と過ぎつ明日はまた、いさやしら木の弓の弦、おもひ斷れども思ほえず、かへりみらる、九重の、残んの雪のほのくと、花に明け行く比叡の嶽、霞にこめて鞍馬山、鞍置き馬の數々を、繫がせ牽かせ歩ませて、折にふれたる乗り心、我が北山の御所櫻、春の眺めも櫻陰、咲いた櫻になぜ駒繫ぐヨノ。勇めば駒が、駒が勇めば、天にも上る雲雀毛や、夏は梢もあをの駒、祭に賀茂の河原毛や。紅葉に通ふ小雄鹿の、鹿毛も近えたる月毛の駒の、駒の銜さへさへくと、手綱搔繰りくと栗毛に、乗つた馬上はよしや蘆毛に、雪のよつじろ白覆輪や金覆輪、今は梨子地の鞍籠、馬はあれども此の身には、徒歩路越え行く木幡山。左手にみつこの行く先は、山柵原と聞くからは、世に隠らふる我々が、此の身包むに頼もしく、明けすもあれな淀川の、岸にかけたる

はじめの初看はつぎかな、これを香さかなに姫君ひめぎみを、御供申おんとまもつして御祝言ごしうげん。月代刺さかやきつたを幸さいはひに、お輿添こしあにも女おんなども、待女まちぢよ郎らうにも女おんなども、侍さむらいにも女おんなども、お腰元こしもとにも女おんなども、四揃花揃よろはなぞろ、きりばねつんばね、二役二役ふたやくふたやく、ゑがつく、徳とくつく、色いろがつく、人思ひとおもひつく、知行ちぎやうつく、民たみもつくく、筑紫つくしの果はても、東あづまも驛なだく官領職くわんりやうしやく、武家繁昌ぶけはんじやうの御代みよに遇あふ、この正月しやうげつこそ目出度めでたけれ。

下之卷

源義教公道行

興文武おんぶの花はなも榮さかえた。初花はつはな咲さいた見みさいな。藤内四郎とうないらうどのナ、太鼓打たいこうちの役やくで、代々よゝゝの太鼓たいこを、あそこらもとに置おかせて、金かねの撥はちを手てに持もち、てれつくにはつってんくく、とうからつとんと打惚うっぱれた。なるかならぬか、こひのなつかの町まち、なつかのく中の町なかのまちを、とほり度たうはないが、七草ななくさた、いててつへい若水わかみづ。はだか花壇はなむこひやくわん百貫ひゃくわん、くわんくくとも鳴なるは夜明よあけの、鐘かねはつんく辛つらいかつてん、天てんの道みちせばからず。立つ春はるは、うぐひす啼なかぬ離はなれ島じま、雪ゆきの深谷ふたにの奥おくまでも、知しればやしろしめされたる、御身おんみの上に如何いかなれば、御運ごうんも今はうすがすみ、花はなの晨あしたもたたなくに、袂たもとは露つゆに夕ゆふの色いろ。赤沼あかぬま父子ふしが逆心さかしくしんを、防かへぐ力ちからもつき弓ゆみの、月つきの都みやこを月諸つきもろ共に、をち方人かたびととさすらふる、羅綾らりようの袴錦繡はかまきんじゆうの

二つの日なし、地に二人の殿御なし。夫のために捨てん命、塵灰芥、吹けば散る煽けば飛ぶ、高の知れた浮世の中、たとひおのれら鬼神にてもあらばこそ。斬らば切らん、突かば突かうす、飛ばば飛ばん、跳ねば跳ねん、命かぎり腕限り、三つ四つの男首、此の一つの女首、かへば換へ徳。サア来い。と、身もかるくときそくを踏み、目の中鋭く、身は凜々しく、勇み掛れる有様は、昔の巴山吹が、生まれ變りといひつべし。「やア口の過ぎたる女めかな。あれ討ちとめよ。」と下知すれば、父權頭打物抜き、母も姫も長刀構へ、「主といひ婿といひ、親に敵たふ大悪人、あますまじ。」と入り違ひ、しばし支へて三重きりむすぶ。其の隙に盛治は、覺を上げて板敷を、やす／＼と切り破り、大童になつて顯はれ出で、「藤内二郎とは我が事よ。敵に勝負なけれども、差當つては弟の三郎奴、首ねち斬らん。」と飛んでかゝる。「三郎討たすな者ども。」と、どつとをめて驅け合はせ、彼方へ追つ立て追ひ捲り、二郎危く見える時、女房さかしく、障子に張りし大綱はづし、勇んでかゝる新判官、藤冠者が後より、どつくと綱を打ちかけて、「えいやつ。」と引きければ、仰反に打ちこかされ、「これは／＼。」と手足も叶はず、はごにかゝりし野末の鳥、心地よくこそ見まにけれ。此の勢ひに盛治は、三郎をとつて伏せ、高手小手に縛め、寄せ来る雜兵、四方へばつと追散らし、立ち懸つて綱繩を、牀柱に縛りつけ、「彼ら二人は左衛門殿より舅殿への御年玉、活けるも殺すも御勝手次第。弟は拙者が正月の料理は

むる不覺ふかくさよ。此この通りとほにて乾殺ほしころしに逢あひ、餓鬼道がきどうに落おちんより、一思ひとおぼひに腹切はらきつて、修羅道しゆらどうにおちよかし。」と、一度ひとにとつと打笑うちわらひ、鯨波くじなの聲こゑをぞ上げたけり。權頭ごんのかみ夫婦ふうふ姫君ひめぎみ諸共もろとも走り出いで「ヤア物ものに狂くるふか悪人あくにん奴め、仁義じんぎある斯波殿しばどのと縁えんを組みくみて、忠ちゆうを盡つくし身みを立てたてん心こゝろはなく、謀反ひほんにん人に與あひ、賢人けんじんの大事だいじの婿むこをも討うたんとは、天魔てんまの障礙しやうげか淺あまし。」と制せいし給たまへば、「ヤア聞ききともなし、大義たいぎには親おやを殺ころす。それ搦かめよ。」といふ所ところへ、庭にはの一木ひときの陰かげよりも、「オ、しばらくくく、斯波左衛門しばのさゑもんこれにあり。」とのふ闇照やみてらす黄金こがね作くり、五尺餘しゆくあまりを指さし貫つらぬき、搖ゆるぎ出いでたる有様ありさまは、鷗羣かめむじれ居ゐる潮干しほひ濕ぬ、蘆分あしわけ鶴つるののさのさと、物ものに恐おそれぬ威勢ゐせいなり。藤冠とうくわん者じや驚おどきて、「今いままで此處こゝに聲こゑしつるが、何處いづくより逃にげ出いでけん、それ討うち取とれ。」と呼よばはれば、「ハ、ア愚おろかしく、蟹かには甲かぶに似にせて、穴あなをほるとは汝なんぢらが事ことよ。天下てんかの管領くわんりやう承けたつて、六十餘よそ州しゆうの政道せいだうを司つかさどる斯波左衛門しばのさゑもん義將ぎしやう、身みはひとつなれども、命いのちにかはり名なにかはり、幾人いくにんにならうとまゝ。これさ藤内三郎とうないざぶらう、なんと此この左衛門さゑもんは、其方そのほうが、嫂あによめの小晒こせりしといふ女おんなに、よう似にたとは思おもはぬか。オ、似にたも道理だうり。誠まことは藤内二郎とうないじ盛治せいちが妻つま、小晒こせりしといふ女房にまよぼうなるわ。うつそりども、女おんなと思おもひ怪我けがするな。並なみやつ※うづの女おんなでない。浪人らうにんの憂うき難儀なんぎ、針はり一本ほんの力ちからにて、夏なつの物ものを冬ふゆにしつ、鏡立かみだてを米こめにしたり、硯箱すずりばこを味噌みそにする。古葛籠ふるつづらを忽たちまちに、目めの前まへで家賃やちんにせし、神變かみへん自在じざいの女おんななるぞ。さりながら姫君ひめぎみの牀入とこいりには、神通じんたうも叶かなはぬいたはしさよ。サア此この上うへは案あんじもなし、天てんに

きの大綱を、そりり／＼と引延ばし、四方に張つて包みしは、逃れ難なき手段なり。しすまし顔になづき合ひ、面々が懐中より、大釘鐵鎚取り出し、襖遣戸に手を揃へ、一度に打つて打ちつけたり。藤内二郎「南無三寶。」と、此處彼處と明くれども、釘付けの戸の明かばこそ、障子を破り差覗けば、大綱かけて軍兵ども、兵具提け圍んだり。天へや飛ばん地や潛らん、六神通の阿羅漢も、遁れつべうはなかりけり。障子の内には大音上げ、涙を流いて「古人の詞に偽りなし。七人の子は生ずとも、女に心ゆるすなとは、今身の上には知られたり。敵は敵とも思ふべきが、おのれ女奴、此の儘にて死するとも、大天狗となつて思ひ知らせん」と、戸障子叩き踏み鳴らし「敵の奴らよつく聞け。昔が今に至るまで、君を弑し父をなみする族はあれども、主と壻とを討ちとつて、世に立ちし例やある。汝知らずや。長田の莊司は、主君義朝、壻の鎌田を害し、其の日に其の身も討たれたり。因果は下れる車の如し、報はん程を思ひ知れ。せめて冠者奴か判官奴か、一人討ちとり、雑兵の五騎も十騎も、左右の脇にかいこうで、思ふ様に締め殺し、心變りし女奴を、蹴殺いて死なんずものを、エ、無念なりくち惜しし。」と、踏んだる板敷どう／＼、どう／＼／＼と踏み鳴らし、血の涙をハラ／＼／＼、はらりはらりと襖を切り裂き牙を齧み、跳り上つて怒りをなす、無念なりける有様なり。障子の外には、女といふを姫の事と心得て、「ヤア愚かなり左衛門、敵の娘兄弟と知りながら、悠々と壻入して、女を恨

もなし。此處の娘御、左衛門様を戀病の、心ゆかしの伽にとて、だましてかくはなした事。それにつ
いて琵琶の姫、大將の御判を兄の持つたをうばひ取り、牀入したらばくれうといふ。さまざま思案し
て見れども、千日千夜案じても、女子同士の牀入は、文殊の智慧にも能はぬこと、腹を立てずと御判
を取る、分別したが好いわいの。コレせく事ではないぞや。」と事を正して言ひければ、盛治聞いて、
「それは案の外の事、でかいたく、まづ其の御判が取りたいが、どうしたものであらう。」といふ。
「これ重疊の思案がある。今宵も姫の忍ばれん。こな様私と入り替り、暗がりには姫と寝て、すかして
御判を取り給へ。」「ハテそれがどうなるものぞ、餘の分別をせい」といへば、「エ、いはれぬ斟酌、私
さへ慾を離るれば、お主の爲ぢやないかいの。」「いやく、終には左衛門様御夫婦の姫君に、疵がつ
いては後難なり。然らば某閨に待ちうけ、姫君忍び給はん時、仔細を語り、連れて立ち退き參らせ
ん。時には御判も取戻し、姫君も御夫婦と本意を遂げさせ給ふのみか、我々が忠義も立つ。好き折柄
に來合はせたり。此方へ任せ、案内せよ。」と盛治は、上段の戸をさし廻し、臥したる體にてもてなせ
ば、女房は植込の數寄屋に隠れ、首尾合はせ、一緒に連れて立ち退かんと、手筈を取つて別るれば、
早暮六つの時計の聲、一閃々々の大蠟燭、星の下りし如くなり。謀じ合はせし藤冠者、赤沼判官、藤
内三郎、郎等には走井久七、久八、根地大藏、息をも立てず抜き足して、帳臺を押取りまき、まりが

御取次頼み存する。」といふ。番の侍聞き届け、「さいはひ廣間にお出でなり、かうお通り。」「御免あれ。」と奥に入れば、上段に器量の、しき若侍、茫然として坐したりけり。我が女房の小哂に、よくも似たる男かな。さもあれ、これや斯波殿ならんと、額を覺につ、しんで「近來憚り千萬ながら、藤内太郎家治が兄弟なれば、お主同然の忠義を重んじ奉る。當代のならひ、親が子をたばかれば、子は親に楯を突く。況んやこれは赤沼が一族、ことに御小舅藤冠者は、君を討ち滅ぼさん結構と、密々に承る。御運盡きて不覺の事も候はば、色に溺るゝの嘲弄通れ給はじ。とつく御供申さん爲、參候仕る。」とぞ申しける。顔を上げねばそれとも知らず、「ヤア誰なればちんぶんかん。殊に此の左衛門を色に溺るゝとは、宿に残せし思ふ人の、傳へ聞かんも恥かしし。まづおのれは何者ぞ、罷り立て。」とぞ仰せける。「イヤ某は御家來藤内太郎が弟、同じく二郎盛治。」と顔を上げれば、「なう藤内殿か我が夫か。」と、走りよつて縋りつくを、小腕ねぢて取つて投げ、「やれ物狂ひ奴、大名の若君のおさし奉公と僞り、所こそあれ赤沼一家、あまつさへ女の身の、斯波殿と名乗つて、月代刺つて、其のさまは唐天竺にも例を聞かず、爪一つ髪一筋、夫に任せし體ならずや。察する處、敵に頼まれ、斯波殿をすかし審する計畧か、但しは不義か。とても助けず自狀せよ。」と、せいて聲さへ慄ひけり。女房動せず、「ア、コレ聲が高い。不審も腹も立つは道理。さりながら不義をする私でもなし、敵に與せんやう

は、あの子が氣色本復までは、寢る事無用とある上に、ぬけがけしては一分立たず。是非に寢よなら寢もせうが、鞆と鞆とで切り合ふ様で、齒ぎれがせまい。」と笑ひける。「しや堅い事ばかり、毒藥變じて藥となる、袴なりとも解かしやんせ。」と、取り附けば飛びのきて、「ア、譯もない。此の袴の下には鬼がすんで、いッかい口で噛みつきます、怖い事ぢや。」とありければ、姫さめぐくと泣き沈み、「つれもなきお心や。男に立つる心中は、珍らしからぬ事ながら、みづからが兄藤冠者氏連と、叔父赤沼と心を合はせ、將軍義教公の御判をもつて、偽廻文を致せし所を、みづから御判を盗み置き、新手枕の引出物に參らせんと、兄叔父の敵となり、隠し置いたる心といひ、あんまり辛き我が殿。」と、恨み啣ちて歎かる。「御尤もく。御判も請取り義教公へ奉り、御身の思ひも晴らさせたいが、肌を觸れて寢ることは、凡夫の業に叶はぬこと。どうぞ抱きつくばかりではなるまいか。」といひければ、「それほど寢るが嫌なもの、よう婿入はなされたな。今ならずは今宵の中、今宵ならずば明日明後日。」「少將程通うても、叶はぬ間はかなはぬなり。」「能う覺えてや。」と啣つ目に、涙を浮べて歸らるゝ、心中こそそわりなけれ。藤内二郎盛治は、女房とは夢にも知らず、「左衛門殿婿入の風聞あり。赤沼一家に縁を組み、心を許し給ふ事、飛んで火に入る御身の上、如何にしても氣づかはし。」と、借著いでたち古川の式臺に立ち懸り、當番に近づき、「斯波左衛門が家來にて候。主人にそと逢ひ申し度き事の候。

法然上人の一の御弟子と有り難き、熊谷の二郎直實に、三代の一人娘、靜御前は血の道持、扱こそ御子まします。常に冷えたる腰越より、追返されさせ給ひにし、九郎大夫の判官源の義經の、の谷の鴨越、眞逆様に落し子の、末葉も茂る桃園や、清和源氏のちやくく、嫡流斯津尾張守家氏、左近の大夫時氏、其の子に宗氏、其の子に武衛高經が三男、斯波左衛門義將とは、我らが事にて御座んす。」と、口に任する系圖の卷、うさんな處を言ひかすめ、いきつき次第に言ひければ、「さても廣き御一家、舅に過ぎたる増殿や。三國一ぢや、増にとりすまいた。」とぞ諍ひける。權頭夫婦の人、長物語に女の姿、現はれては如何と思ひ、「ちと御休息候べし。我らも勝手へ罷り立つ、皆々これへ。」とうちつれて、座敷を立つてぞ入り給ふ。小晒はたゞ一人、「さてもあぶなや氣づまりや。眞似をするさへ術なきに、よう殿達は彼のようにして、生きて居さんす事ぢやまで。」と、獨語して身を横に、手枕してぞ休み居る。琵琶の姫立ち歸り、さし足して寢姿の、うしろに立つてつくくくと、見れば見る程好い男、「日の暮れるまで待たれぬ。」と、とんと抱きつき臥し給へば、「なう悲しや。」と起きあがる、袴の相引しつかと取り、「こりや騒がしい如何ぞいの。暮れるを待たぬ新枕、御さけしみも恥かしながら、おことの忍に氣病して、こらへせいなく落ちつかず。帯紐といてくださんせ、寢て見もせいで嫌はんすか。」と、じろりと見たるかほつきは、惚れて欲しそな目元なり。小晒も當話なく、「親達のいひつけに

傳受と聞えたる、百人一首の巻頭、天智天皇十八代の帝、陽成院筑波嶺の峯より落つる源の、頼光に亂腹ひとつの御弟、頼信の跡取り頼義の總領、諱でないよの愛宕白山、八幡太郎義家に五代の後胤上總介義兼が末葉、兵庫頭坂田公平には、顔真赤いな他人にて、渡邊綱こそは、茨木童子が片腕、ただひと太刀にうちわも内輪、叔母婿ぞや。叔母の子息の競瀧口、源三位頼政の小姓立、猪俣太とは行き合ひ兄弟、近衛院の御宇かとよ、鶴といひし獸の、帝を惱まし奉る。頼政敕誑蒙つて、ただ一矢にころくく、落つる處を猪俣太、九の刀ぞさいたら畠、畠山重忠も、縁者つゞきの先祖にて、三浦大介が痲氣筋、四代の末孫朝夷の三郎義秀は、音に聞えし大力、曾我の五郎時宗が、鎧の草摺無手と取つて、引いて見せんと蹈みしめて、蹈んばたがった股野の五郎、力損にて我らまで、いかな殿御もしつかとだきしめ、だけばあられの佐々木どの、土肥の二郎も従弟筋、従弟程ようにたんの四郎、富士の御狩の高名は、末代末世記録に載つた、猪武者の争ひに、負け腹立てて讒言いふ梶原とは何でもなく、鎮西八郎爲朝の下戚腹、瓜の蔓になすの與一、扇の的より精兵の達者、弓の傳受の家ぞとは、これぞ系圖の始めなる。それより代々に傳はりて、楠多門兵衛正成が嫡子犬坊丸、二男悪源太義平、三男山邊の赤人は、古今無雙の歌人にて、公家にも一門在原の、業平の中將の妾腹のもちごもり、妻もこもれり若草に、けふはな焼きそ武藏坊、辨慶の七番目末子、七つ道具の椀換頭、

く仕合。」と、たゞ禮してぞ居たりける。藤冠者、此の體を心得ずや思ひけん、「これ／＼左衛門殿。貴殿の御事は、斯波の武衛のお館とて、系圖正しくこれある由、氏は何氏、いづれより別れしぞ。」承らん。」と申しける。南無三寶と思へども、知らずと言はば悪しかりなんと、「ム、扱は私を實の左衛門にてはなきと思ふ疑ひか。拙者が家の氏系圖、存ぜぬ事や候べき。末永く緩々と、御物語致しません。」とぞ答へける。冠者何かな詞質にせんと思ひ、「オヤ重ねては重ねて、冠者奴も言ひか、つて、聴かねば一分異なるものなり。是非語りともなくば、どうぞまた語らせ様もあるべき。」と、苦々しくぞ申しける。今は遁る、方もなく、「然らば語つて聞かせ申さん。」と、まざ／＼しくは言ひけれども、夢にも知らぬ斯波の系圖、何處へ取りつき言ふべきやら、こは如何せんと、思ひ亂れて居たりしが、此の上は力なし、いにしへの大將兵を、思ひ出すをさいはひに、口へ出るまゝ、論八百、言うてのけんと心を据ゑ、膝立て直し息次し、さもありさうにぞ語りける。

もんさく系圖

抑斯波の武衛の館と申すは、代々左右の兵衛に任ず。兵衛の官の唐名なれば、家を武衛と名づけたり。斯波の氏は源氏なり。そうじて源氏もしな／＼の清和源氏、宇多源氏、村上源氏、嵯峨源氏。中にも斯波は清和源氏。源氏々々が四源氏御座る、中に清和ぞ世に光る、光源氏は敷島の、歌道の

父母嘆きて申しつかはし候へば、左衛門も合點し、今日墮入仕る。我らには何も知らせず。これぞ天のあたへ、手を合はせて討ち取らんと、内通致せし處に、早速の御くだり。大慶々々。」とぞ申しける。判官悦び、「さてなういつぞや、此の處にて失ひし將軍の印判も、必定琵琶の君の盗みしに疑ひなし。奴とて油斷せられな。それにつき、此の者は藤内太郎二郎が弟、藤内三郎武治、兄を疎んじ我に仕へんと申す故召抱へ候。かかる處へ墮入する左衛門奴は。死にに來る同然。」と、笑壺に入つてぞ笑ひける。「ヤアこれく、下人共には一味もある。父母聞かば事やかまし。隨分忍べ。」「忍ばん。」と、座敷を立つて判官は、土民の家に宿を借り、案内をこそ待ちにけれ。殿御見んとて琵琶の君、今日はハラリと氣も軽く、此の頃になき笑ひ顔、男といへる妙藥に、耆婆も匙をや捨てけらし。父母ばかり合點にて、深く包む事なれば、兄藤冠者家來まで、實の斯波殿御出でと、伺候の侍頭を下け、「御通り。」と申し上ぐる。女心の男の眞似、顔に紅葉の錦縁、疊ざはりも足浮きて、舅君にも姑にも、どう挨拶を諸禮やら、無禮やら、唯「あいく」と禮をして、頭下けるにひまもなく、割り膝痛くともすれば、女子居住居しどけなく、行儀つくるもいたくし。姫君心わくせきと、「申し左衛門様、何がお氣に入らぬやら、祝言の取り遣りも、渡守なきこがれ船、片破船の片思ひ、よう煩はして下さした。」と、恨めしさうに宣へば、「こがれ船でも何船でも、手前に帆柱持ち合はせず。本意を背

顔に我と我が、別れの涙亂れ髪、共に落ち來る膝の上、小枕捨てて丈長も、捻元結に大髻、眉の引黛男眉、鐵漿落す磨砂、磨楊枝の青柳に、櫻咲いたる二役や、女とも見え男なら、御物上りの若者と、まがふ許りになりにけり。衣裳あらため太刀刀、衣紋繕ひ待つ處に、引き馬乗物徒士侍、七つ道具を押し立てて、「古川權頭清氏より、花塙斯波左衛門義將公の御迎へ。」と呼ばはれば、「アレ馬がでん／＼うつわいの。ア、怖や。」とぞ逃げにける。肝煎も氣の毒さ。「これ／＼これは何事ぞ。小訛になまつて、どうすべいかうすべいと、男らしうやらうぞや。」と、囁けば打ちうなづき、「ム、何と身が方へ、舅殿よりお迎へだといふか。オ、大儀々々、目出度い折からだ。酒でも打飲らつて、唐辛をかつ嚙り、寒風を凌いで供をせろ。先へ行くべい奴様、許さしやんせや。」と口掩ふ、袂張肱のし／＼と、歩むとすれど襦の、身癖顔癖引包む、殿御模様の重著の、うら懐かしき女肌、男女の二面、このてかしはや此の手振れ、ふれ／＼お前おつ立てろ、まかせておける春の霜、古川館へぞ三重迎へける。花塙がねに相生の、島臺飾る座敷構へ、さも賑しくぞ見えにける。家の總領藤冠者氏連は、妹の祝言と、装束改め居る處へ、都より赤沼判官下向の由にて案内し、密かに冠者に對面し、「此の頃は御飛脚、殊に斯波左衛門義將婿入との御知らせ、これぞ屈竟の時節と存じ、罷り下り候が、してそれは必定にて候か。」といへば、冠者小聲になつて、「中々の事。妹の琵琶の姫、左衛門を戀ひ焦れ、病氣重り候を、

へかかる事。猶行く先が思はるゝ。」と、泣けど悔めど甲斐もなく、思ひ直すも亂るゝも、心一つの涙なり。「嘆きて歸らずともかくも、せめての事に様子を語り、たんのうさせて給へかし。」と、泣くくいへば肝煎悦び、「オ、語らねば叶はぬ事。寺と申すはいつはり、心を静め聞き給へ。此の國の大名、古川權頭清氏殿の一人姫、琵琶の君とて美人あり。斯波左衛門義將殿といひなづけ。されども父權頭殿は、赤沼入道幸満と、みづいらすの伯父甥とて、斯波殿の御祝言、今に延びて沙汰もなし。おいとしや琵琶の君、二十歳の花は散り過ぎてても、殿御の顔を見給はず。唯斯波殿を戀ひ慕ひ、思ひ積つて氣病となり、今養生の眞最中。それゆゑ器量の好人を、斯波左衛門義將と名づけ、心に勇みつけたらば、おのづと薬もまはらんと、醫者衆の指圖なれども、眞の男はならぬゆゑ、男らしい女中のお尋ねにて、かくまで談合なりし事。月代剃るが嫌ならば、三十兩を今此處へ、立てて歸りや。」と語りける。女房あまり可笑しくなり、「寺よりそれはましならん。常々聞きし事もある。左衛門様の眞似をして、合戦軍の話でも、見事間には合はせうが、みづからと姫君と、肝心の夜討には、如何も勝負はつくまい。」と、笑うて憂さを晴らしけり。「さては合點か悦ばし。」と、荷物を解き櫛道具、衣裳品々取り出す。女房常に配偶の、髪月代は手馴れしが、自剃自鬢の初元結、もむ黒髪を玉水の、底の玉藻と水鏡、油の梅花剃刀も、勻ひを惜しむ額際、剃ればあくたの花かづら、髪おきしての幾年か、見馴れし

ず。三年の内逢はれぬぞや。死なうも生きようも知らぬもの。迎への來ぬ間についちよつと、門出祝ひを、御座んせ」と、泣きはれし目をつこりと、涙片手の暇乞、あはれわりなく三重別れ行く。跡は霞の八重一重、山吹の瀬を我が中の、天の川瀬と又何時か、馴れにし夫の盛治に、逢ふはたまさかたま／＼も、歩みならはぬ大和路や、涙にもまれ駕籠のりて、額重しと徒跣足、道の伽とや媒介が、咄も今の氣にあはず。まだ春淺き御室山、花には雪をやとひどが、戀知らぬやら荷も輕き、かたにの端にさけ煙草盆、折々休む道草の、今の悲しさ忘れ草、思ひ燻らせ思ひけし、胸に解かせ手に拵ぶ、玉水の邊に著きにけり。肝煎の老女こわづくり、これ申し内儀様、今宵は奈良に泊らせ、明日はお國へ著く。此の處で月代剃らせ、衣裳もかへて袴を著せ、男の姿になします。用意なされ」と申しける。女房大きに仰天し、「それは噺様何事ぞ。寺方への奉公と、聞くも心に入らねども、それはいうても返らぬ事。月代を剃り袴著て、男の眞似する約束は、こちやしませぬぞあんまりな」と、煙草を吹いて顔をふる。「ハテ此處な人、あんまりぎし／＼言はしやるな。金遣つて手形は取る、それが嫌なら如何なりと、三十兩の金立てて、此處から往んで貰ひましょ。オ、生暖い」と上著脱ぎかけ、汗押拭うて居たりけり。女房しく／＼泣き出し、「何事の報いぞや。奉公の身の代が、男の身にもつく事か。三年経つは夢の中、月代剃つた髪つきを、戻つて男に見せられうか、人に面が合はされうか。道でさ

ひ遣る。我も生きんす覺悟なかつしが、下和が三度足切られ、本意を磨く夜光の珠、韓信は市に股を
潛り、勾踐は石淋を嘗めて會稽の恥を清めしためし。それ程こそはあらずとも、盗人の虚名を忍び、
武功を立てて一天に名を留むべき念願。繩目の恥を遁れしも誰が情ぞや。妻ながら親にも劣らぬ厚恩
を、生々世々に忘れはせじ。思へば如何なる貧乏神、由なき處へ導きて、思ひも寄らぬ難に遭ひ、情
の妻の身の代を、無下になさうか口惜しや、淺まししの運命や。」と、男なきにぞ泣き居たる。女房はつ
と心暮れ、勇む心も弱々と、「さてもく、先の見えぬは浮世ぞや。夫の爲に捨つる身は、いづれも同
じ道なれど、世に立てて所領の主、乗り馬よ引き馬よと、綺羅をみがいて浪人の、すほんだ肩のいか
るをも、人にも見せつ見ん爲に、添うて間もなき女夫の中、三年といふ年きつて、生き別れする身の
代を、無實の難にかへんとは、口惜しや本意なやな。金惜しいとは思はねども、夫婦別る、三年の、
月日が惜しい。」とばかりにて、聲も惜しまず泣き居たり。警固ども、「遅しく、金子を渡せ。」と聲々
にいふ。「ハテ渡すまでもなし。其の金子取つてうせう。」といひければ、「請取らいて置かうか。」と、小
判吟味し數讀みて、皆々京へぞ歸りける。盛治かれらを見おくりて、「エ、心ない雜人かな。盗まぬに
は極まつたり。此の歎きを見るからは、情も料簡もあるべき事。此の上はわやにする。取り戻してく
れんす。」と、驅け出づるを女房、「ハテ好いわいの。金より命が大事なり。迎へが來れば往かねばなら

がしけにぞ出でにける。かかる處へ藤内二郎、大勢がとりまいて、「逃げだてしたら撲ちする。撲ち殺せ。」とどよめけば、「逃げはせぬ棒あてな。」「逃けたら撲つぞ。」「棒あつるな逃げはせぬ。」と、命からがら來る體。女房屹と見だしなみの、手槍提けつつと出で、「仔細は知らねど我が夫。其處を放せ、放さずは片端に突きとめん。」と、突き出す槍を桿棒にて、打つつ拂うつ叩きあひ、既に危く見えたりけり。盛治聲をかけ、「やれ女房早まるな。此の人々にも一理あり。様子を聞け。」と制すれば、小晒ははがみをなし、「エ、腑甲斐なや。理にもせよ、非にもせよ、浪人なれども藤内二郎盛治といふ侍ではないかいの。白晝に手籠めに逢ひ、其の恥が立身の害にならないのであるものか。夫を出世させん爲、奉公に身を賣つて、たつた今手形して三十兩取つたる金、皆空事になつたよな。賤しき下々相手には不足ながら、夫婦此處で討死し、名を潔う残さん。」と、金子を大地へばらりと捨て、杖も棒も厭はばこそ、無二無三に突き立てしは、人の妻たる手本なり。二郎手籠めを振り解き、勇んで勵む女房が槍の柄をしつかととり、「オ、健氣なり頼もしし。先づ静まつて仔細を聞け。さりとては武運拙きは、今日都本阿彌にて、百貫の折紙道具盗まれし場へ行き懸り、我が盗まぬに極まれども、言譯もなき首尾となり、既に牢舎の縛り繩、かゝらんとせし處に、御身が情の三十兩、ふつと思ひ出せし故、それをあがなふ約束にて、口惜しながらおめくと、面を拭うて來つたり。御身が無念の心底を、尤もと思

み、「サア歩め。」といふ處へ、姫玉椿走り出で、「やれ其の人は御存じなし。いとしほなけに何事ぞ。許してたも頼むぞ。」と、泣き叫べども聞きいれず。先を拂つてみちすがら、面も恥も名もさらしの、宇治の里へと三重送り行く。世もかすかなる陽炎の、森の下庵軒荒れて、月の影さへもり治が、妻の女房小晒は、夫の出世の物入りに、我が身を捨つる志、哀れ優しき貞女なり。媒の老女、供の男に財布持たせ、「内儀様御座りますか。今日御契約の日限ゆる、金子も渡し手形をも、極めません。」と腰かける。小晒悦び、「なぜに遅いと心待ちいたせしに、先づ此方へ」と請じ入れ、「さて配偶には、大名方の若君の、おさし奉公と言ひ聞かせ、夫の判も預りしが、世間へも其の通りに、いうてさへ下されなば、茶屋郭の外は、何なりとも嫌はねども、先のお主の名を聞いて手形も仕度い。」とありければ、小聲になつて、「勿體ない。お山や女郎に遣るものか。先のお主は、さる御本寺の大寺の、悟り開いた長老様。寢酒のお伽にそれ様を、三年限つて置きたいとの御事。此方から沙汰が仕度うても、彼方がきつい隠密。三十兩は捨て金、四季のしきせにつかひ銀、未來も悪うはあるまいぞいの。サア金渡さう判なされ。」と、手形と共に出しける。女房はつと涙ぐみ、「如何に夫の爲なるとて、出家に思はれ、來世まで取りはづさん悲しや。」と、そゞろに涙はす、めども、差當つて變替も、なく／＼判をおしければ、價の金を讀み渡し、「たゞ今迎へを連れ參らん。御亭様とも暇乞、門出祝うて待ち給へ。」と、忙

焼きつけてやけどすな。」と、雑言たらしく脇指抜けば、あら身の疵物。「こりや／＼刀の身を見よ。竹
 の篋。扱も見事なお侍。冬としならば此の刀を、疊叩に借らうもの。」と、一度にとつとぞ笑ひけ
 る。藤内涙にせきくれて、「盗人とは無實の難。天道も晴らし給ふべし。武士の刀に竹の篋、こそけて
 も此の恥をすゝぐ事のあるべきか。舌食ひきつても死にたし。」と、我が身を掴み腕に噛みつき、大地
 を踏みつけ齒をたゞき、絞り泣くこそ道理なれ。いや／＼少しき恥を忍んで、大功を立つるは丈夫の
 勇と思ひ定め、「これなう心あらん人は聞いて給べ。毛頭おほえなけれども、折悪ければ言譯なし。さ
 りながら一門兄弟歴々、主も持つたる者、我も望みある身なり。繩か、つては一家の破滅。又後日に
 盗み人あらはれなば、此の案内主人下人、何十人あるかは知らず、犬鶏に至るまで、生けて置かぬ
 が合點ならば免も角も。されどもそれも無益の事、願はくは料簡あれ、某身上かせぎの爲、妻の女
 房今明日に金子三十兩、借り調へると申したり。刀の折紙、いか程か知らねども、盗人の實否立つま
 では、右の金子を渡し置かん。逃げ失せる身にもあらず、所で人にも知られたり。繩を許して此の料
 簡、頼みいる。」とぞ申しける。家のおとな文平次、「ム、きこえた／＼、好い言分。折紙は百貫、町人
 方の賣り道具、旦那の留守に失うては、此の文平次が譯立たず。三十兩あるに極まらば、五兩は某
 まどふべし。宿へ送れ取り逃すな。」と、兩人兩手を引張れば、一人は髻を取り、四方を棒にて取り圍

なるまいか。」と、皆までいはせず姫悦び、「おやすい事く。將軍様の御重代、天國小鍛冶義光、其の外名に負ふ銘の物、今日は御鏡開きにて、奥の座敷に飾られたり。玄關からは人目あり、それ露地の錠明きやや。沙汰しやんな。」とゆふ節の、人に紛れて入れにけり。藤内三郎武治は、兄が歸るさ待伏し、投げてくれんと元の道、本阿彌の門の内、奥の露地口細目に明く。何かは知らず入つて見て、「叱られたら出る分。」と、獨語して身を細露地の、取次の桁縁の、障子を明けて牀の間の、牀に置かれし一腰の、好き折紙に相州物の、中に取つても出来心、盗むといへば氣もおくれ、前後棒鞘身は慄ひ、足もしどろに取つて出で、行き方知らずなりにけり。暫くありて家内には、「折紙道具失せたり。」と、家來は面々身開きに、上下騒いでとも吟味、出入りを詮索する處へ、露地より歸る盛治を、門外までつけだして、「盗人知れた。」とおつとり巻く。二郎騷がす、「これく率爾せられな。我らは宇治の邊に居住の浪人。用事あつて出京し、女中方の誘引にて、御太刀頂戴いたせし分。うろんならば女中衆へ、尋ねられよ。」とことわれども、「ぬかす程晝強盜。旦那の留守をねらひ、女子子供をたらし、手の好い盗人、打てよく、れ。」といふ處へ、外より歸る下部の男、「たつた今一二の橋にて、棒鞘の刀持つて、走つて下へさがつた。」といふ。「さてこそはや同類に渡したな。大小もいで搦めよ。」と、六尺中閒立ちかゝり、「意地張らば打殺す。」と、ねぢふせて大小取り、「いやはや見懸け許りの金ごしらへ、

四といふ聲に、姫振り返り、「アレ彼のお人の拾うてぢや。意地の悪い。これ此方へ下さんせ。」とありければ、藤内眞顔になり、「誰方の羽子が存せねども、年の數つけば夏瘦もせず、蚊が食はぬと申すゆゑ、ちとの間借ります。女中方の大事の物、長うつきは致しませぬ。早うついでのけませう。一、二、三四五七八九。」と口早に數ふれば、玉椿打笑ひ、「お年は其のよに往きそむないが、數はたと取らしやんす。ほん／＼にお幾つが、ぢやうぢやまで。」と手を取れば、「ホ、ウお家程あつて好い目利。我らは丁度疵なしに二十六、羽子は疾うにつき仕舞ひ、これは又女共が名代に突く羽子なるが、なう此の女が、私に六十二の老女房、當年八十八歳。顔の皺は漣や、志賀の山越え頭は雪、それでも八十八ぢやとて、我が手に米とやられます。此の米の八十八、一日には突かれまい。數取り許りで仕舞ひましよ。十、二十、三十、四十、五十、六十、七十、八十、五、六、七、八。なう草臥や。」といひければ、姫は羽子を引つたくり、「お内儀様はあるまいが、いかに謙を言はしやんす。羽子突く事も上手なり、謙つく事も上手なり、だきつく事も上手である。此の抱付の上手奴に、抱かれて見たい。」とだきつけば、流石の藤内しよけになり、扇の骨で白壁に、小坊主書いてぞ居たりける。腰元ども取りついて、「扱も小氣な、往來も見ろ。門の内へ御入り。」と、手を取つて引きければ、藤内これぞ幸ひと思ひ、「何と此の家に、將軍より御預りの銘の物、數多あると承る。武士たる者の冥加のため、戴く事は

み合ふ。目の鞘はづしの下はゞき、身は竹刀抜きかねて、暫し挑みあひけるが、三郎飛びしきつて、「これ二郎、好い加減に引きもせず、我らが大小、本身でなしと侮るか。組み伏せて赤沼殿へ引いて行くも合點なれど、兄弟の好み許し置く。おつつけ大小調へて、眞劍の勝負せん。待つて居れ盛治。」と、上は立派な鞘口に、篋を遣うて別れける、心の中こそ不覺なれ。二郎見おくり、「弟と思ひ甘やかす情が、却つてあたまがちになりけるよ。」と、あきれ立てちし垣越に、とりんく響く羽子板の、音は娘の集まりや、笑ひに春の色籠る、祝儀も籠る、伊達籠る、情も何もかも羽、雉子の風切り思ひ羽や、思ひの數を唄ひとふた三、四、十二三までまだ君知らず、十五六から鶺鴒の、羽子の數々年の數、よむ聲聞けば姿まで、さこそと思ひやり羽子は、正月めきし景色なり。藤内二郎も曲者にて、扱も閒の好い羽子板の音、姿見たしと思ふ處へ、仕舞うて戻る、「萬歳殿、鼓を少しこへ寄つて見物せよ。面白い事して聞かせう。」と、戀もなり手の曲鼓。垣の内には本阿彌の、一人娘の玉椿、腰元までが拍子聞き、鼓に合はせてつく羽子の、打合はせたる如くにて、三重往來もとまるばかりなり。しづ心なき春風の、羽子を吹き上げ横ぎつて、藤内が襟袖に、はらくと落ちとまる。二郎袂に拾ひ入れ、鼓を渡し萬歳に、目禮してぞ返しける。羽子板もつて玉椿、腰元諸共走りいで、藤内には氣もつかず、其處か此處かと梅の枝、搖りつ振ひつ尋ねける。藤内羽子を取りいだし、扇を廣げて一二三

より、斯波の左衛門は勿論、宗徒の郎黨一人にても討ち來らば、三千石は相違なしと、これたしかな書中到來す。御内方の調へ給ふ金子、少々配分あれ。身のまはり大小こしらへ、斯波が面うち、赤沼殿に奉公し、三千石では仕好い事。二人扶持や三人扶持の御合力、兒貴其處邊は引きませぬ。」とぞ廣言す。二郎むつと空笑ひ、「兄なればこそ二人扶持の合力とは先づ過分。さりながら二人の兄が主と頼まん斯波殿の大敵、赤沼に隨ふ其方に、此の大切な金子與へて、敵に勢つけうとは言ひがたし。天下の忠臣賢人と呼ばるゝ斯波殿に、嫌はるゝを口惜しと思ひ、手を下けかせいで奉公し、斯波殿にも戀ひ慕はれんと思ふ心はなく、末頼みなき佞臣の、赤沼を主に取らんとは、道に背く無分別。おつつけ獄門の相伴せんずる瑞相。エ、笑止な。」と教訓ある。氣短き三郎ぐつと急き「春早々から獄門の相伴とは、兄ちや人嬉しう御座る。此の三郎が相伴するか、賢人の斯波の左衛門を木のほりさするか、今御覽ぜ。」と言ひ返す。「ム、さては斯波殿につく我々なれば、太郎殿も此の二郎をも討つべきな。」「オオまさかの時は、此の三郎も弟とて容赦はあるまい。すれば組んで落ちる一戦に及ぶ時、貴殿の首は某が討ちとり、兄甲斐には獄門の木を太うして、外よりは五六寸も高う上げてやらん。」といふ。二郎腹にするかね、「うぬが知行になる某が首、戰場までもなし。今でも取られれば取つて見よ。」と、脇指に手をかくる。「イヤ此の三郎がとりかねうか。」「サア討て。」「サア來い。」と、柄に手を懸け、睨

ありやこりや、はつあ新玉の、春ぞ長閑なる。折知り顔に白梅の、路地の垣穂に咲きこほれ、研ぎ拭ひたる玄關前。これは本阿彌の屋造と、目利したるも理なり。藤内三郎武治奥を見入つて、「これ兄者人。本阿彌右衛門太郎清祐が居宅、此の身代は羨ましからず。此の内に澤山な、銘の物の大小を持つならば、好い主取つて立身を致す物。何をいうても此の竹光、何時か此の無念さを、はるといふは名許り、心は未だ師走ぢや。」と、小首を投げて悔みける。二郎盛治聞きもあへず、「浪人の町住居、鼓太鼓に武士の道忘れたかと思ひしに、頼もしの心懸け。然らば話す事のある。兄の太郎家治の主君、斯波どのは、近日義兵を起し、佞臣赤沼を攻め滅ぼさんとの用意と聞く。此處ぞ我等が立身の種。斯波殿の御味方に加はり、兄太郎殿諸共、軍功を勵まんと思へども、刃物とては脇指一本、ちぎれ具足の一領も、才覺とて叶はず。如何せんと思ふ所に、これ女房は持つべきもの。黄金三十兩調へてくれうといふ。此の金子では、御邊と我が軍用意は物の見事、斯波殿の御手に屬し、藤内太郎二郎三郎と名乗つて、赤沼親子が首提け、目覺し高名御感狀を拜受し、今の泣言やめうぞや。」と、語れども三郎は、少しも乗らぬ顔色にて、「オ、主早魃はいかす。斯波に扶持を受けんとは勿體なし。いつぞや兄太郎殿の肝煎にて、某奉公望みしに、氣に入らぬとてありつかず。斯波に嫌はれ無念の折節、赤沼入道幸滿殿へ、肝煎らんといふ人あれども、こしらへにもとでなく、延引に及ぶうち、犬二郎滿景

申せども、花實の時を違へず、實に陽春のとつくり爛鍋屠蘇の酒、三杯機嫌の朝ほらけ。物まう、どれい。先づ當年の御吉けいはく慶庵。めつきり今年は若うなるく、なる程く、目出度い事の言種山草、穂長は白妙交讓木の淺縁、わつさりわざく、紙衣の袖にも春立つと、いふばかりにて銀かけて、買った袴のしはすの氷、叩いて碎いて若水の、湯殿始め著衣始め、衣紋繕ふ若い者、藤内二郎同じく三郎、合はせて五郎は曾我に劣らぬ住家にも、ごまめなますの素浪人、雑煮の上置輪ん切大根、すんでんどうど打ち治まつた、時世に逢ふも他生の御縁、花の宴、縁から落ちたお乳の人、打つた處がふくく、福德、千歳を呼ばふ鶴の聲。此方に似あつて雀はちうく、鳥はかあく、鳶とろ、山の藪、勢のついたる妻戀猫、猫の化粧鼠の嫁人、ち、つちつくり色をやる。戀から生まれた人間萬事、寒翁が馬のうつた太鼓の撥、狸がうつた腹鼓、うつたら鳴るべい、何になるべい、知行に成るべい。なれくくく、花に馴れ來し王城の町。其方は高山去年の雪、これ香爐峯の心なんめり。簾を捲けばお香に、嵐が雪をもつてきた山東山、西によね里戀郭。正月買ひの初君の、袖をつらぬる、裳褌をつらぬる。ぬるくぬつと出づる日影に、南枝花初めて開く、梅に鶯紅葉に鹿、獅子に牡丹昆布に山椒、小粒な男も陽氣をうけて、和歌を囀る、一曲奏つる。つるくくく、つた所を恵方棚賑ひ申す榮え申す、おさへ申す、食へ申す、色めき申す、ときめき申す、御亭を祝つて御禮申す。

れば其の通り、先づ新春の御吉慶。「此方も。」「其方も。」「互に目出度い御越年。」「此の春よりの御悦び。」「十分の御仕合珍重々々。」「お杯は永日々々。」「然らば春永末永、月永日永。」年も壽命も永永と、傳はる御代の時に逢ふ、春の門出を祝ひける。

中之卷

ほんじやり咲いて、匂うた梅の花が見さいな、藤内二郎。アリヤコリヤ、殿ハナ、小鼓のヤ、え
てもの。*あかうの胴に加賀革くれ、紅の調べを、千鳥がけにかけさせ、合はせ打つたるは、さつて
も打つた小鼓と、上の町下の町、どつとほめて通した。ほんのり明けてうたうた鳥の、懸聲聞きやい
な。藤内三郎殿大鼓の上手で、しつたんにしつたんく、七段つくる御百姓、明年は八段ぢや。さ明
年は十六たんく、丹波國の御百姓と、勇みうつたるは、さつてもうつた大鼓と、どつとほめて通し
た、はるめく大路ぞゆたかなる。ヨイ、一夜押開けて四方の春、空の顔にこやかふくやか、につこ
りほやりの笑顔は誰だア。それだかこれだか、春の司の保佐姫君、霞の衣當流仕立、しやんと著こな
す四尺八寸。あざを握つて押せく、おしこめ乗りこめ米俵、でつかり踏まへた大黒々々、*大黒舞と
囃されて、天の戸袋だんぶくろ、くわつと開けた初日の色、あら面白やお目出度や。草木心なしとは

て某それがしが向むかうたる討手うってなれば、むざと腹はらは切きらせぬぞ。サア御邊ごへんの心底しんてい承うけてらん。」とありければ、「ム、聞きえたり、さぞあらん。此この左衛門さゑもんも其その通り、勝秀かつひでは愚おろか、變はんくわい噺わらわが討手うってなりとて、恐おそろしとも思おもはず。諫言かんげん申まうすも君きみの御駕おんたのめ。死しせる孔明こうめい、生いける仲達ちゆうたつを走はしらしむといへり。死ししても思おもは忘れまじ。一旦たんゐる都みやこを立たち去きり、御邊ごへんとも内通ないつうし、悪人あくじんを退しりぞけ、我わがが君きみを名將めいしやうと仰おほがんと思おもひし處ところに、案あんに違ちがひ、御分討手おんぶんうってとあるからは、浮世うきよの望のぞみも切きれ果はてて、さて生害しやうがいに及およぶなり。弓矢ゆみか取る身みの討手うってを蒙かうり、手てを空むだしうは歸かへられまじ、介錯かいしやくせよ勝秀かつひで。」と、自害じがいせんとする處ところを、「待まてく左衛門さゑもん、實まじに満足まんぞくせり満足まんぞくせり。日頃ひごろ語る傍輩はらうばいの、かほどに心こころの合あふものか。此處こゝは死しする處ところでなし。筑紫方つくしへも身みを忍しのべ。我われも本國ほんこくに引籠ひきこもり、世上せじやうの安否あんびを内通ないつうし、佞臣ねいしんの榮枯えいこを窺うかがひ、義兵ぎへいを起おこし討うつて出いで、悪人あくじんを攻せめ滅ほろぼし、聖賢せいげんに優まさる名將めいしやうとなさんとは思おもはずや。」と、理りを盡つくし諫いさむれば、左衛門さゑもん横手よこてを打うつて、「ハア、さうぢや過あやまつた。君きみの御駕おんたのめ大事だいじの命いのち、此處こゝは死しぬる處ところでなし。一先ひとまづ落おちん、御身おんみも退ひくか。」「中々なかの事こと。」「やれ勝秀かつひで、斯程かほどに揃そろひし忠臣ちゆうしんに、君きみ君きみたらば、唐土たうども靡たふけ從したがへ治なめんものを、無念むねんにないか勝秀かつひで。」「口惜くちやくしいは左衛門さゑもん。」と、互たがひに鎧よろひの袖そでと袖そで、とりつき縋すがり泣なき居ゐたる、忠義ちゆうぎの涙なみだぞ哀あはれなる。「ヤア時刻がくときうつして益えきもなし、傍輩はらうばいの縁盡えんじんきす。」「まれ逢あふ事は命次いのちついで第だい。」と、泣なくく左右さうへ別わかれしが、また立たち歸かへつて、「これく思おもへば、明あけていまだ對面たいめんせず。これ當年たうねんの逢あひはじめ。」「さればさ

えにけれ。斯波左衛門義將は、腹巻に小具足固め、侍には藤内太郎家治、若黨少々、旗指一騎相具して、都を隔つる山崎や、關戸の院にぞ著きにける。かかつし處に緋緘の鎧、月毛の馬に乗つたる武者、直兎五十騎許り引牽し、「やあくく左衛門、御暇申しすて、京都を開く慮外者、討ち取つて參るべしと、大將軍義教公の仰せを蒙り、細川右馬丞勝秀向うたり。引返せ。」とぞ呼ばはりける。左衛門聞きもあへず、「なに勝秀とや。たとひ千萬騎向ふとも、打物の續かん程、攻め戦はんと思ひしが、勝秀と聞くからは、すみやかに腹切らん、首取つて歸れ。」とて、どうど座を組み居たりける。勝秀馬より飛んで居り、「やれ待て左衛門。和殿が切腹に三箇條の不審あり。勝秀が武勇に恐れての切腹か、これ一つ。日頃水魚の傍輩の、討手に向ふ恨みの腹か、これ二つ。まつた浮世を軽く見て、身を見限つて切る腹か。三つに一つを言うて死ね。」とぞ申さるゝ。左衛門打笑み、「ホ、ウ流石勝秀程ありけるよ、問ひ憎い事を能う問うたり。然らば其方にも不審あり、人こそ多きに御邊が此の討手は、此の義將が諫言を、僻事と思ふか、一つ。但し某程の弓取の首取つて高名せんとおもふか、二つ。まつた佞臣赤沼と一味の心か、三つの中、明さば我も明さうす。勝秀如何に。」とありければ、「オ、尤もの疑ひ。某が心はな、管領の其の中にも、御邊と我は斷金の契りなるに、我にも知らせず都を開くこゝろざし氣遣はしく、死すとも生くとも、朋友の交はりを違へじと、山名に討手とありけるを、請ひ受け

國をめぐむ糧盡きん。時には四海野心を含み、四夷八蠻一度に起つて、攻め來らんは必定。其の時には御寵愛の佞臣奸臣、味方を捨てて敵に下り、君一人敵の擒となり給ひ、元祖尊氏公の御勳功も一度に朽ち、御父義滿公の七寶八貨に、金銀をちりばめ造り給ひし北山の金閣、室町殿の花の殿、三條の紅葉の殿野原となつて、梟松桂の枝に鳴き、狐蘭菊に隠れ栖んで、畚山彦ならで、誰か昔を訪ふ人の候べき。其の時には、此の斯波が詞を思召し出され、天を望み地をつまだて、臍を嚙んで悔み給はん事、掌を指すが如し。三度諫めて用ゐざれば、身を奉じて去るといへり。左衛門が一生の諫言もこれまでなり。仲尼は炊水をうけて、衛の國を去り給ふ。某も其の如く、宿所へも歸らず、直に他國仕る、お暇申す。」と罷り立つ。赤沼判官つたつて、「こりや左衛門。主君に暇出す推參者、あまさじ。」と飛んでかゝる。藤内太郎驅けへだたり、「ヤアおのれ如きの鑢刀が、主人の身に立つべきか。ま一度身もだえするならば、御前とは言はせぬ。」と、はつたと睨めば義教公、「やれ侍て赤沼、討手もつて左衛門が首を取る。静まれく。」と御諛ある。左衛門少しも臆せず、「討手とは有り難し。すみやかに腹切つて、穢首を差上ぐべし。さりながら討手の人は誰ならん。其の相手によつて、一軍の勝負を決し、討手の首を此方へ拜領いたし候べし、慮外と思召されぬため、御斷り申し置く。藤内太郎供をせい。」と、御前を立つて悠々と、顧みもせず立ち退きしは、臣下の手本、弓取の鑑とこそは 三重見

氣色變つて、「折こそあれ祝儀の座敷。おのれ一人智慧ありけに、愚將とは誰が事ぞ、罷り立つて閉門せよ。」と、おほきに怒つて仰せらる。左衛門つつと進み出で、「愚將と申すは我が君の事よ。愚將と申すが御耳に觸る程ならば、など佞臣忠臣の詞を聞きわけ給はぬ。淺ましきよ愚かさよ。御祖父義詮將軍、御父鹿苑院殿義滿公、御舎兄勝定院殿義持公、御先代義量公、我が君までは五代。我々は三代管領職を承つて、終に閉門の例候はず。左程あやまりある左衛門ならば、閉門までもなく、御指料をもつて御手討になさる、か。たゞし御氣に入りの赤沼入道、子息新判官、此の歴々に討手を仰せつけられ、軍勢をもつて此の左衛門を、など攻め滅ほし給はぬぞや。オ、赤沼なんどの手に及ばぬは理々。軍といふは、酒宴遊興に事かはり、命づくのものなれば、鯨波の聲矢叫におそれて、馬より落ちて目を廻さんより、追従言うて世を渡るが、一段の思案ならん。エ、これ我が君、莫耶を鈍しとし、鉛刀を鋭しといひ、周の鼎を棄てて、瓢箪を寶とするといひしは、御身の上と御存じなきか。麒麟も繫がれて動かねば犬猫に同じ、渴しても盗泉の水を飲まずとは、義者の恥づる處。章甫の冠を沓にはかれんより、首陽山に蕨餅をねり、汨羅に沈んで、江魚の腹中に葬られんには如かじ。某都を聞きなば、赤松細川畠山、結城長沼仁木石堂、大内今川山名京極宇都宮、凡そ名ある諸大名、頼もしけなき世をいきどほり、面々分國に引籠らば、民百姓は貢物を私し、地頭郡司に收斂ありて、

御咎めを恐るゝ由。それ程の事は、某が申譯をして遣らん。エ、氣の狭い左程のこと、氣苦勞に召さるゝな、左衛門殿。」とぞ申しける。藤内太郎飛んで出で、威丈高になつて、「これ入道、兩刃の劔にて人を切るに、振り上げさまに、我先づ切らるゝといふ譬へあり。まづ其の如く、人を惡に陥さんとて、身の惡を囁るか。其の御笛は、此の藤内太郎家治が預り奉り、先日北山の御門にて、一色大炊介を、己が頼んで切らせたを忘れたか。功ある者の心懸け、實の小水龍は庫に藏め、影を作つて持つたる故、うぬが頼んで切らせたは、其の影の笛なりしは、うつけ者。誠の小水龍といふ御笛、天曆の帝の敕筆の銘ありて、天下の大事におのれと鳴る。たゞ今も音を出し、怪しさに馳せ參ず。これを見よ。」と差出し、「これ程大事の御寶を、何として御邊は大炊介を頼んで、切れ折れとは言ひしぞ。笛を切るが好きならば、おのれが咽笛切り折らん。」と、つめかくれば義將「ヤア藤内。御前といひ、主をさしおき憚り千萬、罷りしされ推參者。赤沼入道ともあらん人が、笛を切り折り、遺恨を晴らすなどといふ、若輩わざのあるべきか。よしそれはあるにもせよ、上は天下の武將たり、御譜代忠功の斯波の武衛、笛一本に思召しかへられんや、とは思へども忠臣をいとひ、佞臣に心を許し、酒宴妓樂に御目眩み、枕元の太刀刀、取らるゝ程の大愚將。山鷄を鳳凰とし燕石を玉と見て、國を失ひ身を破り、名を末代に損ひ給はん、口惜しの御所存や。」と、拳を握り席を打ち、涙をながして教訓ある。大將御

身みば衣え紋もん引ひきつつくろひ、御お太た刀ち持もつてししづくと、廣ひろ閒まに立たつて、「お小こ姓やう衆しゆ」。斯し波は左さ衛ゑ門もん義ぎ將さう御ご機き嫌けん伺うひ申まうす。」と、高たか々くと宣のたまへば、「すは左さ衛ゑ門もんよ討うち取とれ。」と、赤あか沼ねま親おや子こ犬いぬ二に郎らう「心得こころえたり。」と出いでけるが、流き石す五ご常じやうの徳とく備とくはり、威ゐあつて猛たけからぬ忠ちゆう臣しんの、威ゐ光くわうに氣きを吞のまれ、「ヤア斯し波は殿どの奇き特とくの御お出いで。」と、手てをもんでこそ居ゐたりけれ。大たい將しやう、斯し波はと聞き給たまひ、寢ね惚ほれ髪かみに烏え帽ぼう子し引ひ懸け出いで給たまふ。左さ衛ゑ門もんにつこと笑わらひ、「義よし將さきは今こゝろ宵よめづらしき夢ゆめを見、御おん物もの語がたりの爲ため伺こう候こう仕まる。いやはや夢ゆめはをかしいもの。これ赤あか沼ねま殿どの、御お氣きにばしかけれな。貴き殿さん逆ぎやく心しんの企くはてにて、尊たかう氏し公こうより御ご相さう傳でんの御ご印いん判はんを賺すかしとり、御お腰こし元もとの中なか川がはを瞞たまし、御お太た刀ちを奪うばはせ、罪つみを某それがしに負おほせて、此こゝの左さ衛ゑ門もんに切せつ腹ぶくさせんす。謀はかりと、まざ／＼と見みたる夢ゆめ、覺さむるとひとしく、枕まくら元もとに此こゝの御お太た刀ちのあつたるは、何なんと正まさ夢ゆめとは思おぼさぬか。夢ゆめなればこそ御お仕し合あ。若もし誠まことにてあるならば、赤あか沼ねまどのでも青あを沼ねまどのでも、御ご前まへにてたゞ中なかを、親おや子こつなぎに突つき抜ぬか。また一せん戰せんに及およぶとも、わぬしごときの相あひ手てに、騎き馬ばを向むけるまでもなし。左さ衛ゑ門もんが足あし輕がる十じゆ騎きばかり差さ向むけば、朝あさがけに擒いけつて洛らく中ちゆうを引ひ渡わたし、なんでも柱はしら一本ほんの、主ぬしにしてくれんもの。さりながら春はるの夢ゆめは合あはぬもの、必かならずお氣きにかけられな。」と、かんらからとぞ笑わらはる。赤あか沼ねまも言いひ込こめられじと、「いやこれ義よし將さき、和わ殿どのが今いまのいひぶんは、其その身みの過あやまり、人ひとに言いはせぬ前まへ置おきに、かさから出でる詞ことばなりと、此こゝの入にふ道どうは聞き申まうした。オ、思おもひついたり。御お預あつかりの小こ水すゐ龍りゆうの笛ふえを打うち折をり、

將は、今宵しも小水龍の、おのれと音を出す不思議さよ。君の御事氣遣はし。」と、人馬も具せず、藤内一人提灯ともさせ、雪踏み分けて赤沼が、門の此方に著きけるが、俄に持たせし提灯の、吹き消すやう消えてけり。塚の内より白鷺の飛ぶ如く、雪うづまいて提灯に、映るとひとしく女の姿、白衣白髪白妙の、雪女ともいひつべし。左衛門主従、太刀の柄に手をかくれば、「なう見忘れ給ふか藤内殿。口たがひに忍びて落ち合ひの、漏らさぬ水は御身と我、思ひ二つの中川が、幽霊これまで來りたり。口惜しや、赤沼親子逆心にて、君の御判を奪ひ取り、みづからには御太刀を奪はせ、左衛門様我が夫にも、其の科おほせて失はんとくみと知らで盗み出づる、道の前後錠下し、今宵の雪に埋もれて、凍やかし殺されし。此の世から八寒の、苦患は我が身一つにて、いと可愛の我が夫主従の御命、助けたや救ひたやと、おもふ一念こほりつき、たゞ今知らせ申すぞとよ。此の御太刀を義教公へ差上げ、御身のいひわけ立てて給へ。名残惜しの我が夫や。此の世の縁の薄雪も、ながき契りは厚氷、結び添へ結び添へ、生々世々によも解けじ。さらばく。」と泣く涙の、雲と消えて失せにけり。藤内涙を押し拭ひ、「おのれ入道奴、妻の敵國家の仇、首引き抜いてくれんす。」と跳り入るを、「やれまてこれは一應ならず。申しても天下の大事。大將の御座といひ、御直衆に慮外せしといはれては理非立たず。これに控へて窺ふべし。罷り出でば勘當ぞ。」と、なだめ給へば藤内太郎、「あつ。」としづめて控へたり。其の

あらしは五體をつんざけり。袂はまいて防けども、襟に溜りし雪解けて、膚は水に浸さる、足は膝まで埋もる、鬢の氷柱は白銀の、瑤瑤かけし如くなり。「ア、寒や苦しや」と、顫ひあがりて齒も合はず。「通ひ路ならでこれも亦、男の爲ぢや戀ぢやもの。此處を一つこらへう」と、身を抱きしむれば息切る、雪にて口を濕せば、身の内までもしみこほり、寒苦鳥の苦しみかや。「立ち歸つて湯一杯」と、腰まで埋む大雪を、押し分け踏み分け遣戸にすがり、押せども引けども明かばこそ。「南無三寶、誰かは錠を下せし」と、立ち歸れども時の間に、分けこし跡を降りうづみ、波路を凌ぐ其の風情、土戸はなほも明かばこそ。次第々に降り重なり、身も埋もる、其の苦しき。「エ、さてはたばかられたか、口惜しや、病に臥し刃に伏し、火水に死するはあるならひ、殺しやうもあるべきに、雪に凍やし殺さんとは、おのれ入道奴、むざ／＼とは死ぬまい。」と、埋る、雪を這ひ出づれば踏み込み、這ひ上り踏み落し、嵐は咽に吹きせまり、呼ばはる聲も立たばこそ。手足も凍え身も冷え渡り、「寒やつめたや苦しや。なう藤内殿々々我が夫なう。ま一度逢うて死にたいぞ。」と、雪にくひつき涙の氷、眼も口も閉ぢられて、天ぎる雪はばう／＼、寒風しきりにさつ／＼と、五臟六腑にさす如く、息のたもちもあらばこそ。二十の春の花待ちあへぬ、雪に先立ち消えけるは、あへなき最期や。三重東南に雲起つて、西北に風靜かならず。夕暗の空も轟く雪も夜の、あら物凄の景色やな。斯波左衛門義

上には事ことない九く獻けんにて、御おん獻げんの最さい中ちゆう、そつと御おん太た刀たうを取りませう。「オ、それ／＼目めの覺さめぬ先さき、片へん時しもはやう太た刀たう刀たう奪たうひ取り、高たか遣や戸どの小こ庭にわから、椿つばき畑はたけの妻つま戸どを明あけ、鞠ま場ばの口くちに待まちたれよ、土つち戸どの錠じやうを明あけさせん。それを合あ圖ずにそつと抜ぬけ、左さ衛ゑ門もん方かたへ落おちられよ。呑のみこんだか、仕し損そんすまいぞ。」

「ア、身みにか、つた事ことぢやもの、其そ處こらに氣き遣づひなさる、な。」と、奥おくをさしてぞ入いりにける。「そりやまた彼か奴やつも食くはせたわ。屋や敷しきの内うちをうろつかせ、曉あかつき方かたに引ひ捕とへ、斯し波は左さ衛ゑ門もん逆さか心しんにて、家け來らい藤とう内ないが密みつ通つうの女おんなに、御おん太た刀たうを盗ぬすませしと、謗しやう據こをいだす上うへからは、好よい仕し合あせ切せ腹はら道だう具ぐ。今いま宵よひは如何どうした夢ゆめがな見る。此こ方かたはまことの寶たから舟ふね、舳へ先さきが向むいた、飲のめきほへ。」と、勇いみ頭づつをふる三さん重じゆう雪ゆき空からの、雲くも凄すさまじく更かけにけり。時じ分ぶんは好よしと中なか川がは、義よ教のう公こうの枕まくらの太た刀たう、奪たうひ取とつて出いでけるが、思おもへば品しなこそ替かつたれ、慾さ心しんならで此この太た刀たうも、主ぬしの目め抜ぬきの盜ぬすみ物もの、生いきる死しぬるの切せ羽なぞと、心こころも後おくれ手ても顛かるひ、持もつたる太た刀たうの柄つかざら鮫あや、鰐わにに追おはる、心こころ地ちして、檜ひのき書き院ゐんに出いでにけり。遣やり戸どをそろりと明あけければ、吹ふ雪ゆきと跡あとの恐おそろしさ、すくむ心こころの駒こま下さ駄だに、「怪あやしめらるなエ、儘まよ。」と素す足あしの雪ゆきに飛とび下おるれば、劔つるぎを踏かむが如ごとくなり。後あとより赤あか沼ぬまつけ來きたり、遣やり戸どに錠じやうを下おろせども、中なか川がはそれとはしら雪ゆきを、打うち拂はらひ／＼、土つち戸どを押おせども開ひらかねば、「さてはまだ早はやかりつ。」と、しばし待まちつ間まのかきたれて、こほすが如ごとく降ふる雪ゆきの、庭にわも埋うもれて白しろ妙たへに、立たち寄よる櫓のきも横よこ吹か雪ゆき、袖そで打うち拂はらふかけもなし。佐さ野ののわたりもさのみやは、

「サア熊橋してやつた。いかに厄を拂ふとて天下を治むる此の印判、人手に渡すうつそり、滅ぼすに思案はいらず。むづかしいは斯波細川、此の判を以て義教の下知と偽り、鎌倉勢を催し、一戦に討ち取るべし。此の年越からまんが直つた。これ熊橋、來年はめつきりと好い年取らせう、精出せ。」とうなづき憎ぶ折節、御腰元の中川、つかくと走り出で、「これ赤沼殿、只今の御判はお厄落の呪ひに、すこしの間お預りかと思ひしに、戻さず其處に留め置いて、なんとやら密々と、私はどうとも飲込まれます。女子なれども、御臺さまよりおつけなされた此の中川。サア其の御判を戻さうか、戻さぬか、戻しやらねば思案がある。」と、男優りの氣色なり。入道動ぜぬ面相にて、「オ、好い處へ來召された、これにこそ仔細あれ。斯波左衛門義將諫言申すが御氣に入らず、密かに諸國の軍兵を集め、左衛門滅ぼす御催し、それを聞いて笑止さに、御判をさへ取つたれば、軍兵一騎寄せる事もかなはぬ故、やうやうすかし取つたる御判。聞けばそなたは斯波が家來、藤内太郎家治と夫婦の契約して居るけな。これについて大事がある。藤内太郎は御預りの笛を折る、それを越度の仰せにて、今宵これへ召し寄せて、お手討になさるゝ筈。今宵さへ過しなば、明日某御訴訟まうし、藤内は助くべし。どうぞお側の刃物ども、盜む事はなるまいか、如何にしても笑止な。」と、誠しやかに言ひければ、さすが女の一筋に、「ア、忝き御しらせ。夫の命助くると申し、斯波殿とても夫の主人、よしなき疑ひ恥かしや。

めり／＼と、くたばり外れにあやかりなされ。父等母等に爺媪息災、めなご小俵産みの儘なる餓鬼十
 二疋、錢金俵や小袖の中から、目玉むき出し耳朶でつかく、五百八十七曲、惡魔外道打拂つて、西の
 海へ打投げける。こつきやつこう。」と祝ふとかや。此處に名に立つ色郭、揚屋女郎の厄拂、又珍らかに
 かくもなん。「あら／＼日出度や此方様の、御壽命申さば苦海十年、蠅がとまつて鶴は千年龜は萬年。
 浦島太郎が重箱香、紋日々々は一歳に、かす數の子も御盛んや。何時大服の茶は挽かず、揚屋にいり
 こくら蛇、替間相客宿屋駕舁のつけとゞけ、こそ／＼宿の情事、身揚分のおどもりも、東方朔が九千
 兩。それで残らすうめ干。井戸へ釣られた大黒天も、好い客踏まへた俵子や。蜜柑柑子だい／＼盡、
 子の日の松や根引きのよねん。三年前の紙纏頭空纏頭捨てた古懸。今年はくる／＼郭の全盛。火燧に
 火を爲い、牀せい酌せい。酒はこほすと仕著はいとはじ。禿がぶんぜに駒は古さに、寶引骨牌をうつ
 つら王子が八千歳。女郎に口説の痞も下り、やりてはきはの血の道なく、揚屋々々の賑ひは、二階中
 の間奥座敷、いつ客む客しつきやく入れず。扱こそ不審はるの日の、長ういらぬは見せかけ大盡、わ
 るごう末社の、ちよつと借り著に食ひ物吸ひ物、小言いふ人、親父の意見に手代の始末、一つ買うて
 は三度借る客、これが郭での惡魔外道、打拂うて西の海へさらり／＼こきやこう。」とこそ拂ひけれ。
 大將猶々御杯の、數も睡りも傾きて、伺候の女に誘はれ、寢殿深くいり給ふ。入道親子見おくり、

方には御存じなし。御身の大事とある物を、捨つるといって某に預けられ、厄拂の詞をのべてまじなへば、悪病邪氣を除くと申す。疾く行ひ奉らん。」とぞ申しける。義教公、佞臣の詞を實と信じ給ひ、「幸ひこれに先祖よりの印判、軍兵集め關所廻船、日本を治むるも此の判一個。これをしばし預くる。」と、錦の袋に入れながら、「サア捨てた。」と投げ給へば、「お厄は我等拾ひのけ、四塵三障崇りはなし。これ女子ども、都の町の厄拂、物は呪ひ出るまゝに、拂ひ申せ。」といひければ、「あつ。」とこたへて口々に、厄拂をぞまねびける。

初春厄拂

「やあら目出度や。此方の御壽命申さば、鶴は千年龜は萬年、浦島太郎が八千歳、東方朔が九千歳の西玉母が桃の核、猿豆小豆、親もまめ鳥雛鳥の、はがひ重ねに寶は集まる、家は治まる持丸長者の、四方に四萬の藏の戸前のあけ行く年から、福神達の御影向。一に市姫辨財天女、二は西の富若惠比須殿、三は三面大黒頭巾の襷の数々、十二箇月は無病息災、其の身は鐵杵打出の小槌、打つて打ち出す金錢銀錢、福徳圓滿惡魔外道、打拂うて西の海へ、さらりくさつくこきやこう。」まづ斯う祝ひ納むるは、これ上方の厄拂。さて又東國の果てにては、かくこそ厄を拂ひけれ。「お厄拂く。厄つつ拂ひ申すべし。がい目出度い此方の御壽命、語るべしなら、鶴と龜奴が何打食らつて、すつ百萬年の

事を承る御厚恩には、御身の上、奈落までも隠密ぞや。はや夜も明くる。落ち給へ。」と、別る、方の禮者の聲、物まう春の御年玉、取りかはしたる扇子箱、にほん目出度き年越や、今日から一つ年の數、ますに蒸豆福は内、鬼は外面に深翠、柎に鬼も恐る、と、鯨の頭梅が香の、ほどけ初めたる下紐は、心ありけにつちのこまで、春めく御代こそ。三重のたかなれ。御大將義教公、赤沼が館に入御あつて、追儼の御祝儀行はる。年男には熊橋犬二郎満景、御年豆を獻すれば、赤沼前司入道幸満、子息新判官則久御前に畏まり、「冥加に餘る御成り、一家の面目此の上や候べき。然れば、毎年御所にての御祝儀は、斯波島山細川などをはじめ、馬鹿勝勤の頑侍、卷舌の諸禮、折目正しき正月調、さぞ御窮屈と存じ、某が御馳走には、御供の諸大名残らず退出致させ、古流な事をさりと止め、奥方の女中の中の通り者、其の外洛中に娘子供の色好きが、御座んす詞の酒のこなし、上覽に入れん爲、召し寄せ置きて候。」と、かねて支度の色揃へ、御腰元の其の中に、心意氣も風俗も、これ當流の真中川、酒になりての名人さ。飲まずに人をおさよの君、琴三味線の撥音は、誰も袂にすがとかや。扱又町には、姉が小路の針屋の縫、紺屋のお染、白粉屋の艶、絲屋の房、舞子踊子、小唄の節、上手に座敷を持ちければ、猶御機嫌は義教公、烏帽子の紐も直垂も、打解け給ひ膝枕、足さすられつ御腰を、うつ、ともなき酒宴なり。入道時分よしと思ひ、一さて節分の夜、厄拂と申して民間には行はれ、上つ

炊介久常といふ奥小姓。此の女は御臺所に小田巻といふ御腰元。阿漕が浦のぬけ舟も、度重なりし通ひ路の、赤沼入道幸満に見つけられ、御成敗たるべきを、直に入道が計らひにて、隠密に命を助け、御所を夜脱けにせさせ、此の恩賞には、御門前に藤内太郎相詰めたり。お預りの笛を二つに切り折つて得させよといふ。心得ずとは思ひながら、一旦の恩を受け、否といふは卑怯と思ひ、扱こそ笛を切り折つたれば、入道が恩は報じたり。扱これからは其方への話。入道が根心、上へ對して其の意を得ず。御分が主人左衛門にもいひ聞かせ、必ず油斷あるべからず。某身にも望みあり、正八幡ぞいつはりなし。何と落してくれまいか。」と、理非を決して語りける。「オ、一色大炊介殿、承り及うだ。お身柄と申し、御誓文虚言はあるまじ。さりながら、明朝は御松囃のお觸なるに、はや東雲におよべども、其の沙汰なきは様子ぞあらん。御前向きを有體に、承らん。」といひければ、小田巻聞いて、「ム、さては御存じ候はぬか。昨夜俄に變替り、松囃は明日の晩、赤沼の方へ御成りにて、節分のお年取御遊覽とのお事にて、皆々お觸が廻りしに、たとひお觸がないとても、御前の事を知らぬとは、エイ好い加減な事ばかり。傍輩の中川殿と、此方様との挨拶が、たいてい竝の事かいの。奥の事はつづぬけ、飛脚よりましぢやもの。知らぬとは小面にくう、打ちたいまで。」と笑ひける。「ア、音高し音高し。さては赤沼奴が此の笛をあやまたせ、我々主従越度にせんとて、御祝儀までを延引せし。一大

内太郎は笛の役、御預りの小水龍、餘寒の風に吹きそらし、また夜も深き五更の一點、虎の御門に著きにけり。太郎持箱に腰うちかけ、「御松囃は辰の刻との御觸なれば、役人伺候の諸大名、夜の中より羣參あるべきに、御所の内ひつそとして、御門も未だ開かれず。不思議さや退屈さ。奴に持たせし煙管筒、一服ついで燻らす。目覺草は初鶏の、八聲も鐘もかすみ行く。門の檜皮を踏み越ゆる、霜の振袖角前髪、取りかはす手もわな／＼と、女が帶の若紫、茶宇の袴の忍摺、亂れ逢ひにし密通の、驅落とこそ知られけれ。「咎めて無益、見ぬ顔せん。」と、下人等にも囁きて、築地の陰に忍ぶとは、見すや知らすや門松を、傳ひ下りたる人も木も、連理の女松男松かや。太郎いよく身をかくすを、彼の若者きつと見て、打物抜いて弓手より、聲もかけず打ちかくる。刀の柄にて拳を打ち、太刀振りおとさせ、二の拍子にて、胸骨あて踏みつくれば、女は又右の方より打ちかくる。拳を打たんと持つたる笛、振り上げるをつけいつて、笛を二つに切り折つたり。「すはしれもの。」と取つて引き寄せ、二人をどうど引敷いて、「ヤアこび過ぎたる奴等かな。斯波左衛門が家來、藤内太郎家治ぞ、知つたらん。おのれ等不義の驅落見のがしにする處に、かへつて手向ひ、剩へ御預りの笛を切りをる、言語道斷の始末、白状せば許すべし。いつはらば繩をかけ、四職衆の白洲に引据ゑ、一家一門の恥を見るか。サア分別次第。」と申しける。若者臆する氣色なく、「オ、藤内太郎よく知つたり。我は一色が末子、大

雪女五枚羽子板

上之卷

樂車うつて囃した、樂車うつた見さいな藤内太郎。アリヤコリヤ。殿ハナ、笛吹きノヤ、家で、紫竹寒竹、埃をさ、さつさと拂うて、到來のく。御年玉は到來の、此方からも遣らいのと、合はせ吹いたるは、さつても吹いた笛吹きと、どつとほめて通した。門松立てて囃した。御松囃を見さいな藤内太郎。アリヤ、コリヤ、殿ハナ、斯波殿のヤ、御近習、弓矢打物お馬をさ、さつさと乗り初めや、蓬萊のく、柳搗栗膝栗毛、鬘斗昆布に川原毛と、祝ひのつたるは、さつても伊達なお侍と、どつと都にほめにける。主君斯波左衛門義將は、當家の管領たるによつて、藤内太郎が文武の器量、將軍義教公の上聞に達し、御直の諸武士同然に、年頭五節の御目見え、殊さら笛の達人にて、小水龍といふ名管を、上より預け下さるゝ。そも此の笛は、天曆の帝の御寶物、國にあやしみある時は、吹かぬにおのれと音を出す神妙あり。御先祖尊氏將軍より、代々に聞ゆる笛の音の、ひいや兵亂治まりて、寶祚百王のかためたり。時は永享八年正月三日、將軍家の御松囃、北山の御所にてあるべしと、藤

無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。」を、一つ蓮華にと、ぐつとつきぬく一刀、「わつ。」と叫びし一聲の、あはれはかなき最期なり。「今のは何處ぢや、サア知れた。」「其處か。」「此處か。」「いや、南に聞えた。」と、筋の響は氣もつかず、皆生玉へと走りける。見つけられじと徳兵衛、畠の中を西東、此處にかゞみ、彼處に忍び、「今は嬉しし一緒に。」と、房が死骸を尋ね寄る、道も心も埋れ井戸、踏みはづしてかつばと落ち、水のあはれや汲み上げて、重井筒の心中と、御法の水をぞたゝへける。

我が身にさしあて忍び泣き、男は力なみだに迷ひ、刃物持つ手も弱々と、女の膝に伏し轉び、覆ひ重なり泣き居たり。石の鳥居の彼方より、女子の泣く聲子の泣く聲。一南無三寶我が家の提灯、女房子供家來ども、見つけられては情なし。小橋の方で死ぬまいか」と、立ち上らんとせし處へ、はや道傍まで尋ね來て、間は僅かに半町に、足るや足らずも因果の隔て、百里も同じ如くにて、近き甲斐なき千賀の鹽竈、身を焦すこそ哀れなれ、妻のお辰は宵よりの、涙と霜に袖こほり、物言ふ力もなき中に、「あれ／＼夜明も近づくか、鴉がいかう啼くわいの。外の驅落走者と違つて、明日尋ねうとはいはれぬ。死に出た心中なれば、とくに命はもう無い人。あさましや悲しやな、女房子の無い人ならば、殺すまい死ぬまいものと、さぞや最期のくやみ事、お房がうらみも思ひやる。思へば私がある故に、人二人殺すよな。位牌に對うて言譯ない、冥途の旅を連れ立たん」と、下人が指いたる脇差に、取りつく處をもぎはなし、「これはいつきよう。此の子はいとしう御座らぬか」と、止むれば小市郎「母様死んで下さるな」と、嘆く聲さへ身にしみて、野邊の霜風小夜嵐、丁稚の三太もうろ／＼涙「心中といふものは、いかう寒いものぢや」とて、共に袖をぞ絞りける。徳兵衛囁きて「月は傾く東は白む。ためらうて今の間に、見つけられんはあさましし。いざ何事も、宵よりいうた通りぞや。」「おう。」とうなづくばかりにて、涙にものをいはせつゝ、夫の膝をしつかと押へ、あふのき待つたる口の内「南

も御身とわが、積る涙の雫かや。西に嵐のふき晴れて、空は泣いても我々は、戀慕の闇に暗がり、よしなき事を仕出して、東の果てに名を流す、それに劣らぬ歎きごと、いとゞ思ひにくれ竹の、節を習ひし淨瑠璃も、餘所の事よと慰みしが、今身の上以降る霜の、一足づゝに消え失せて、死に行く身の味きなや。あれ見返れば人聲の、我を尋ねて高津の町を、急ぎ遁る、鰐口や、頼みをかけし御經の、此の三界の衆生は、皆是れ吾が子と聞く時は、親諸共に到るなりけり。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。五逆の提婆は天王如来。龍女の成佛する時は、煩惱菩提となるぞたのもの。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。六萬九千三百八十四文字を、たゞ此の七字に納まりし、大曼荼羅や斑雪、雨にも風にも詣で来て、朝は現世、夕は後世、此の世彼の世の二面にけり。涙に迷ふ其のなかにも、男はさすが男にて、「なう世間を聞けば、女先立ち、男は後に死にぞこなひ、見苦しき沙汰に遇ふ、無念の上の死恥ぞや。まづ我から」と脇指を、ぬかんとすれば抱きつき、「なう待つて下さんせ。今死ぬる身といひながら、大事の夫が目の前で、朱に染つた體を見れば、氣も狼狽へ目もくれて、如何してか死なれうぞ。なから死にして恥さらし、此方様の死骸の、帯解き紐解き打ちかやし、詮議のあるをじろくと、そもや見て居られうか。私から先に」と手を持ち添へ、

つたどりつ傳ひ行く、道は三途の瓦葺、霜の劍の山近えて、此處に地獄の鬼瓦、左手も右手もおそろしく、廻れくゝて行末は、今ぞ冥途の門出と、これを限りの立酒や、樽屋町にぞ 三重迷ひ行く。

下之卷

ちしほのおぼろぞめ

眞筒井筒、井筒の水は濁らねど、今は涙にかき濁す、月も袂にかき曇る。晨の雲夕の霜、仇しが浦のうつほ船、みを無き物と知りながら、いとしくしの戯れも、しばし此の岸彼の岸の、假の現の假橋や、藻に埋もるゝ牡蠣船の、苦の隙間の燈火の、風を待つ間の影よりも、明日まで待たぬ我が命、我と失ひ兩親の、育てし御恩は如何せんと、歩みもやらす泣き居たり。送り迎への色駕籠も、しばし途絶えは何處にも、馴染々々の寐入りばな。我が身は今宵散り果つる、名残盡きせぬ濱側の、此處は竹田か夜は何時ぞ。五つ六つ四つ千日寺の、鐘も八つか七つの芝居、二人が噂世話狂言の、脚色の種となるならば、我を紺屋のかた岡に、何とか思ひ染川は、臺詞に泣いてくれよかし。包む袂のひだ之掬、ふたつ遣ひの手妻にも、かかるなり振うつすとも、此の思ひをばよも知らじ。去年のお鳥の心中の、其の井筒屋に我がいま、重井筒と篠塚に、いはれ岩井半四郎、うれひ臺詞の菖蒲草、露のおとし

る。徳兵衛兄ながらうらめしくや思ひけん、一とてもの事に眞黒に、焦ゆるまであたつてお歸りなされかし」と、いへども流石一言も、いは木をわけぬ人心、奥の一間に入りにけり。徳兵衛は小腹立ち櫓も蒲團も一つに摺んで取つてなぐれば、咸陽宮の煙の中に、顔も手足も紅の、房は目許りじろくと、物をも言はず片息の、性根も亂る、ばかりなり。漸うに抱き上げ、袂にあふぎ身をさまし、花活の水幸ひと、顔に漉ぎ口しめし、すこし心もさわやけり。「サアあにきまでが知られたり。何面目にのめのめと、人に面をまふられん。いざ此の處で尋常に」と、脇指取らんとせし處を、「さうさへ覺悟極まれば、嬉しいく。さりながら此處で中々思ふ様にもなるまい。屋根傳ひに裏へ脱け、櫓屋町の門へ下り、宗門なれば日親様の御門で、死なせて下さんせ。」「オ、尤もく、有り難い心さし、サアおぢや」と立ちけるが、「サアそなたは法華、我は淨土、願ふ所が別なれば、先のいきばも覺束なし。宗旨をかへて一緒に行かん。今題目を授けてたも、疾く／＼と手を合はすれば、房は不覺の涙にくれ、一私に淨土になれとも言はず、法華になつて下んする、さても嬉しい心やな。勿體ない事なれど、今まで毎日千遍宛、五年唱へた題目の、功德で赦したび給へ。」と、互に合掌心をしづめ、「今身より佛身にいたるまで、能く持ち奉る南無妙法蓮華經。今身より佛身に至るまで、添はせ給へ添はせて給へ。」南無妙法の力を頼みに、しつかと負うて上る二階や、三重屋根の棟、鷲の峯ごと一筋に、這う

と、火燧にあたるうたてさよ。「ヤア火燧の火が薄い。これ女房ども、火をくわつとおこいて、ひかきに二三杯持つておぢや。」と呼ばはれば、徳兵衛ぎよつとして、「まうし／＼火のきついはお毒。御無用に遊ばせ。」「いや／＼裾が冷える。膝節のこける程なが、此方は好い。」といひければ、「平にそれは火の用心と申し、膝の皿に火がついたらば、御身體の妨げ。」と、いへども兄はこらしめと思ひ、意地悪う、「火を早う持つておぢや。」とぞせがみける。「ア、申し、お前は病氣で引籠つて、世間を御存じ御座らぬ。此の冬から何方も、火の強い火燧すたりもの。北脇邊の好い衆は、大方火燧に水を入れるけに御座る。重井筒ともいはる、身が氣の通らぬ。火燧に火を入れなるとは、きりとてはお笑止な。あれおか様、火は入らぬと仰しやる、。」と身を跳く。其の間に火かきは、焦る、紅葉を盛つたる如き池田炭、遠慮もない儀が火燧にうつし、「サアあたらんせ。」と言ひ捨てて、臺所にぞ出でらる、。側で見らさへ徳兵衛、身も焦け渡る心地にて、「兄者人其の火で熱うは御座らぬか。いつその事に火炙にならしやれぬか。此處まで火氣が來する、ちと埋けて消しませう。」と、寄らんとすれば、「其のま、おきや。」と、止められては火燧より、胸を焦すは徳兵衛。房は涙の埋火に、焼きつけらる、身の苦しき、蒲團の陰より手を出し、裾に取りつき堪へんとするにたへ難き、地獄もかくやと不便なり。主人も一旦こらしめの、さのみは哀れと思ふにや、「ア、あたゝまつた、もう歸る。其方もやすみや」と立ち歸

がみつぎ、絶え入る許りに泣き居たり。「オ、聞かねど萬事至極した。さりながら其の詞嬉しい様で怨みあり、本妻あるは知れた事、同じ口で諸共に、死んでくれというてたも。京の便りを大事に思ひ、騙り同然の才覺にて、銀四百日借り出し、一時許りは懐にあつたれども、兎角二人に死脈が打つ。何處も彼處も一時に、潮のさいて来る如く、ばら／＼と首尾わるく、もとより理をもつ女ども、理窟をつめて恨み泣き、いかな張良樊噲でも、道理にむかふ矢先はない。銀も渡す其の場にて、見す見す誠の空誓文。とても漏れぬ此の罰、佛神を待たすとも、此方から當つて埒明けんと、道から胴は拵つたり。死に直しは二度ならぬ、啣ち顔は曲もなし、手に手を取つてにつこりと、死ね死なうというてたも。」と、火燵に顔を打投けて、世にあぢきなき源の體。「ナウさう思うてが定かいの。思ふが不思議か、夫婦ぢやもの。」「ほんにさうちや忝い、嬉しう御座る。」と抱き合ひ、聲を立てすのしほり泣き、炭火も消えて氷るらん。奥へかくとや聞えけん、兄の聲にて「なんと徳兵衛、痛みは好いか。」とごつ／＼せいて来る音す。「やれ隠れよ。」と狼狽へて、房を火燵に押入れ、蒲團被せて徳兵衛は、上にもたれ覆ひになり、顔もきよろ／＼なりにけり。程なく主人立ち出で、「物言ふ聲の聞えたは、誰であつた。」と不審顔。「いやそれは私寐言がな申したか。但しお前が病み毫けて、空耳でがな御座りましょ。歸つてお寝みなされ。」といへば、「イヤいかう夜が寐憎い、咄しさいた西國の物語して聞かせう。」

火燵にとんと腰も脱け、譯もなみだに我が身ながら、男の様にもなかりけり。戀の寢ばなの屋根つき、何時か思ひはやま口屋の、物干づたひ忍び来る。餘所の戀かと羨ましく、見れば雨戸の戸袋を、そつとふまへる足元も、ふるひくくの目も眩れて、「ヤア此處にかいの。」「房か、これは如何ぞ。」と許りにて、火燵を中に手を取りて、たゞ泣くより外の事ぞなき。涙の中にも男の顔、じろくくと見て、「ア、いとしほや、氣をもまんす故にやら、顔にたんと瘦せが来た。その苦は誰がさするぞい、皆私故と、それはくく忘るゝ事もあるにこそ。さりながらも苦にして下んすな。かういへば如何やら、すねていふに似たれども、微塵もさうした心もなし。私が京の父様、よしない者の請けに立ち、明日ぎりに銀立てねば、私を遣るとの判ぢやけな。私は此處へ身を賣つて、先から連れに來た時は、二重賣二重判、牢舎は鏡にかけた事。成らぬ事をくどくと、思ふは愚癡の至りなり。先だち死なんと刺刀を、手に取りは取りたれども、内儀様に見つけられ、え死にもせず居る間に、此方様の聲はする、向ひ側より呼びに来る。嬉しや先で何事も談合せんと、今まで待ちほうけになつたれども、一目逢へばこれ本望。末頼みない契りなれば、これ限りくと逢ふ度毎の觀念、今更ためていふ事なし。貞女を立てるお辰様のさけしきも恥かしい、中好うして下さんせ。互に生まれかはつたら、本妻定めぬ其の先に、早う夫婦になりませう。言ひ置く事はこれ許り、サアく戻つて下さんせ。」と、夫に聲とし

見舞ひ度う存すれども、これではお返しなされまい。あ痛く、あいたしこく。冷える加減か、俄に疝氣が起つた。かへつて養生いたしたい。「はて譯もない、夜氣にあたつてなほ痛まう、薬でも遣らうか。」「いやもう薬も通らぬ、駕籠に乗つて歸りたし。あ痛く」と呻けども、内儀推して、外へとては出すにこそ。小座敷の火燵に火をたんと入れさせて、「泊つて御座れ。」としひければ、「いやく今年の火燵は、いかう人にあたります。今も今、女どもが生姜火燵を仕懸けて、漸う詫言いたした。」と、心は先へ脱殻の、何をいふやら譯もなし。「此處になりとも寝せませ。」と、蒲團打著せ表には、内儀手づから錠下し、内外の者にめくばせし、そろく側へ退く様子。「ム、ウ氣がついた。」とそらさぬ顔、「いやく寒いに往なうより、暖かにして泊つたが、まづ此方の徳兵衛。」と、重き心を輕口に、蒲團被つて行く振も、涙くろめし。三重まぎらなり。内と外とに引き合ひの、心の駒の諸手綱、房が思ひの通ふかや。夢とはなしに現なや、顔を並へて見る様で、抱きつけば小夜蒲團、涙に濡れて冷々と、毫ほどけて身に障る。其の夜の心地しみくと、身にひき纏ひ寢て見ても、一人ころりはエ、らつちがない。心の内はむしやくしや枕、寧そあけてものけよかし。「ア、おほぬさのこの蒲團、小六も寢つろ、小夜も寢つらん、房も寢よう。引く手数多に何處の誰奴と寢くさつた。撲ちたい踏みたい叩きたい。え、くく、踏むな蒲團に科もない。今は踏んでも叩いても、房に逢はれぬ逢はせぬか。」と、

づお上りなされませ。いかう冷える酒一つ、それ爛つきやや。」とありければ、「ア、おきやくもう歸る。此の頃酒があたつて、今も今女ども、生姜酒を飲べさせうと、手づから生姜おろすやら、それが嫌さに漸うと、これへ逃けて參つたに、又酒を飲めとや。やれ逃げん。」と出る處を、女房飛び下り立ち塞がり、「何の無理に進ませう。茶でも一つ參りませ。」「いやく此の頃は茶があたります。今も今さる方で生姜茶をくれたを、漸うと逃げのびた。是非かへして。」といふ處へ、兄の主人寢間より出で、「ヤア徳兵衛ようぞく。夜が寐られぬに、夜とともににはなさう。サア此處へ。」と呼びかくれば、病人といひ兄の命、異議も言はれず不返事に、もちくしてぞ上りける。「なんと中橋架けたの、欄干渡す許り。春は町中渡りぞめ、氣色も次第に快し、寒明いたら本服せう。これといふが此の夏の、西國の御利生、ヤ三十三所の風景、一々語つて聞かせん。サアろくにゆるりと居や。」と、果てしも知れぬ長咄、徳兵衛心もだくと、可哀や房を今まで待たせ、又宿屋でもあこがれん。早う立ちたさ氣はせて、「いやまうし、今宵は我ら伊勢講、講中待つて居らるべし、罷り歸る。」と立たんとす。「まづ待ちや、今まで誰が待つものぞ。まそつと話しや。」と留められ、「いや槍屋町の隠居へ齋に參る約束、是非おかへし。」といひけれども、「はてときは明日の事。ひらに。」といふに詮方なく、「女どもが懷妊、何時産致さうも知れず、お戻しなされ下され。」と、いへども兄は聞き入れず。「遁れぬかたの自身番、

を上げもせず、たゞ、「あい／＼。」としやくりなき、延紙の幾重を絞りけり。客かあらぬか表にて、「能うござりました。」といふ聲す。「誰様ぢや。」とすまして聞けば、「いかう冷えるが、兄の氣色變る事もないか。」と云ふ。「ハア、人事言はば筈敷け。徳兵衛様さうな。」と、聞くより胸もさは／＼と、飛びも下りたき心なり。時に丁稚が門口より、「向ひの肥後屋から、房様ちやつと送らつしやれ。お客は堺の。早う／＼。」と呼ばれば、料理人不審を立て、「問ひもせぬお客のことわり、合點が往かぬ。房様はお暇が入る、成らぬ。」といふを房聞いて、「あれは何故に。」と問ひければ、「オ、さればいの、彼の宿で徳兵衛様に逢やつたゆゑ、それで遣るなといひつけた。」「エ、内儀様の譯もない。それはあつて過ぎた事。今は挨拶切れた上、徳様は此處になり、何の氣遣ひ。堺の客は正月を頼まねばならぬ人、ひらに遣つて下さんせ。」と、いふも誠と思はねども、「オ、それもさう。これなう房を送ろぞや。」と、呼ばれば下にて料理人、「そんなら道ぢや、駕籠へも一寸寄つてくれ。」「心得たる兵衛の婆々さま。」と、喚いて使は歸りけり。「サア身仕舞して早う行きや。」「いや夜もいかう更けまする。つい此の儘。」と、連れ立ち二階を下りる間に、駕籠を庭にぞ昇き寄せける。「徳兵衛様遊んでお歸りなされませ。」といへば、とほけた顔つきにて、「誰ぢや房か。際の商ひ跡をつめや。」と、餘所々々しう、口にはいひて、魂は、一つ駕籠なる番鳥、飛び立つ許りに見えにける。色を悟りて女房、「これは夜更けて御大儀な。先

後に廻りしも、さては氣色を見取られしと、悲しき怖さいや増して、更にわかちもなかりけり。さすがそれやの女房とて、世間咄に氣をゆるませ、「これなう房、何時ぞくと思ひしが、ついでにそなたに意見がある。我もはじめは勤めの身、素人の言ふことと、一つに聞けば曲がない、心鎮めて聞いたも。郭や此處の奉公は、樂しみなうては勤まらず。無下なうせくではなけれども、それにさへ猶驅引あり。必ず妻子ある人と、末の約束せぬ事ぞ。男の密夫同然にて、思ひばいかぬ物ぞとよ。徳兵衛様とも今は挨拶きつたとある。オ、く仕合々々目出度い事。お辰さまを離別させ、添うてそなたの本望ならず。最愛しい人の身のひし、一門中の憎しみ受け、そなたを鬼よと蛇よといふ。また圍はれて世を忍び、後家同然に暮しても、これが何の手柄ぞや。若木の花は一盛り、老木の枯葉色失せて、變るは男の心ぞや。餘のお山衆と違うて、十の年から兒飼にて、豆腐取て來い、八百屋へ走れ、駕籠呼んでおぢや、はき掃除、戸棚の鍵まで預けしは、小さいからの馴染だけ、我が子の様に思はれて、好い客もがな出世させ、下女の一人も連れさせたう、思ふは此方とばかりかは、皆親方は同じ事、譯もない事しいだして、惨い目見せてたもんなや。爲の好い事あるならば、今でも暇をくれといや、慾を離れたこれ證據、損というて僅かの事、不便な目を見ようかと、案じすごしがせらるゝぞや。思ひも寄らぬ憂ひをかけ、必ず泣かせてたもんな。」と、涙も聲もしめくと、残る方なき恩の程、房は顔

どれく御状は。舟が出ます。」オ、道理々々。この銀は京の私が親里へ、明日の口中に渡さねば、いかうつまらぬ銀なれども、今にさきから來ぬわいの。定めし今に來う程に、まそつとしてから來て下され。」いや最早來られませぬ、來てから今夜は出されませぬ。」と、言ひ捨ててこそ歸りけれ。房は一人とほんとして、「今夜の首尾を違へては、一代京へ繋がれて、連添ふことも限りとは、根掘知つての上なれば、如才のあらう筈もなし。皆おか様のさしこみと、思ふも地體此方の無理。身一つ胸を据ゑたれば、いつそ悲しい事もなし。」と、内へかへれば主人の内儀、「房は今まで門にか、此の寒いものすきな。總じて此の中うかくしやる、ちつと心をしめやや。」とありければ、「されば餘り餘所が賑やかさに、格子祝に出来ました。」と、言ひ捨てて二階へ上る體、氣懸りなれば目を放さず、折々心をつけけるが、房はそれともしら紙の、障子の月を明にて、剃刀出し合はせ砥に、かからましかばかくとだに、ま一度顔見て死にたいと、思へば引かる、後髪、手もわな／＼とぞ顛ひける。主人見つけて後より、「房それは何しやる。」はつと驚き振り返り、「ハア内儀様の、何ぢややらびつくりとしました。あんまり好い月影に、額たれうと思つて。」と、紛らかせばうち笑ひ、「オ、好い處へ來て仕合や。幸ひ旦那どの鬚そつてくれとある、ちと其の剃刀貸してたも。」と、引つたくり押包み、しばしは顔を打守り居たりしが、「ア、一昨日の煤掃に、たと肩がつかへた。そろ／＼揉んでたもらぬか。」「あい。」と

「又房様の忌々し。男殺そといふ事か。此方は祝うて姫小松。」「緋縮緬解く人目の隙に、東も来るなと柘や。」「雛子。」「ひしこ。」「ひともじ。」「エイ洒落臭い。」ふたせ仲居も小差出で、炊婦は来て、「火吹竹。」料理人まで、「冷物。」駕籠の彦兵衛、「膝頭。」柄杓。「緋緞子。」「蚊。」「平野菫蕪。」「菱袖。」「ひらのやゑきやう。」「肥後するき。」「サア、紙燭が皆になる。なんと房様、サア如何ぢや、如何ぢや。」と詰めかけられ、「ア、姦しい息が出ぬ。物がいはれぬ赦したも。」「息が出ずば火屋へやれ。」「そんなら火箸で焼いて退け。」「南無三寶火が消えた。サア房様の灰寄ぢや。」と、どつと笑ひしてんがうも、明日の哀れとなりにけり。火廻し半ばへ飛脚屋が、「何も御用は御座りませぬか。ヤア房様、京へ上す銀もあり、御状もあるとの御事、遣はされませぬか。」と問ひければ、「ア、能う寄つて下さんした、未だ文を書きませぬ、ま少としてから来て下され。」「それなら明日の便りになされませ、今宵は仕舞で御座る。」といふ。「尤もなれども、今夜上して、明日の間に合はせねば、きつう叶はぬ大事の用、無心ながらませつとして、ま一度寄つて下さんせ、頼みまする。」とわぶれども、返事もせずに出でにける。房は心も心ならず、日の暮までの約束が、初夜過ぎ四つのかねてより、思うたつほへあたりしと、門に出でて北を見つ、濱まで歩み西東、足も冷えて鐵釘を、胸に打たる、幾瀬の思ひ。「ヤア北から人が走つて来る、そりや徳様よ。」と走り寄り、見れば以前の飛脚屋なり。「お房様か、

も手放したり、まづ此方を仕舞うて退けうか。ハア、可哀や、房がどうぞ銀の首尾なつて、鶏卵酒飲む様に、したい事ぢやと歎きしを、氣遣ひすなといさめしが、氣の弱い女子なり、此方は儘よ。」と又立ち歸り、「思へばノ、女ども、生姜酒して待ちますと、手づから生姜おろしたる、志も不便なり。」と、辻を越えては又戻り、辻に立つたりつくばうたり、行くも歸るも定まらず、如何せうか、かうしやうが酒、熬りつく様に氣がなつて、胸かき廻す鶏卵酒、心を二つに打ちわつて、君が方へと走り行く。後は涙の玉子酒、霜の白みに 三重

中之卷

月ははや、わたり初めして中橋や、六軒町の小夜格子、唐の聖人の曰はく、色の徳には鄰あり。向ひ兩側輝かず、軒の燈火目印に、昨日も今日も明日の夜も、重井筒の釣瓶繩、たぐり來いとこの夜すがらや。中に不便や、房は變身のしなくを、心一つにはらみくの、わきが勇めば力なく、片目で笑ひ片目には、涙を包む火鉢の元、人待つ宵の火朧りや。小夜も小六も浮きくと、引裂紙の捻り元結で火廻しを、「ひのじ。」「日野絹。」「房様何と。」「私は獨寢。」「ア、忘々し。」「緋無垢。」「冷酒。」「引舟。」「火桶。」「雲雀。」「鴨。」「比叡の山の檜の枝に。」「そりや鳥指が。」「鳥でないぞや身は内午。」

の爲、兄貴の身上我が身のため、房めが後の爲も好い。其處を知らぬ身でもなし。明日は伊勢の御縁日、今宵の月に蹴殺され三世の諸佛の御罰を受け、二人の親に冥途から、睨み殺さる、法もあれ、ふつと思ひ切つたぞ。今日の女も房ではない、人おきの娘を一角で頼んだ。證據には其の銀此處にあり。」と取り出し、「明日直に返辨し、向後房とは通路せぬ。今まで心を無下にした、恨みも辛みも赦したも。さりとてはこの徳兵衛、女房の罰が當つた。罪を赦してくれよ。」とて、手を合はせてぞ泣き居たる。女房につこと打笑ひ、「エ、忝い〜。挨拶切つた捨てたのと、幾度か聞いたれども、銀まで見せての誓文、とんと心も落著いて、今日から眞の女夫、皆悦んでたもや。」とて、嬉し涙を流せしが、「とてものことに年寄つて、一夜の心も休めたし。大儀ながら隠居へ往て、今の誓文一通り、聞かせまして下されかし。これは私が御無心、御恩に受けう。」とありければ、「何がさて譲り受ければ、我が爲にも親同然。ついちよつと往て來う。」「そんならさうして下さんせ、生姜酒して待ちませう。それ生姜おろしや釜の下。」たけは手樽を振つて見る、酒の通路ひきかへて、夫は北へと出でけるが、辻にてふつと思ひ出し、「南無三寶、義理に詰つた女房のせりふ、尤も胸に徹へしより、房が大事をはつたりと忘れたり。入相限りに待て、待たう、此の手筈が違うては、生き死にの出来る銀。いや〜、親父は明日の事、ちよつと逢うて」と立ち戻る。「ア、さうもなるまいか。たつた今誓文立て、殊に銀

幸ひに、この子に著せて閒を渡したも、私が智慧ではあるまい。氏神様のなされたと有り難う思へども、恨み受けければ是非もなし。女房の口から推参ながら、言はば此方は人でなし。房と挨拶切れぬけな。餘所外でもある事か、兄御の内の奉公人、しつけ意見もすべき身が、客衆とやらのかいになり、身代の妨げと、嫂御のねすり言、聞きづらや聞きにくや。ア、それも道理。又あとの月の騒動に、一家が寺へ退いての時、見舞に往つて見届けた。餘のお山衆は押退けて、房一人を大事にかけ、此處らで心底見せ顔に、けばくしい仕方ども、側に居るは知つた衆、此方より私が顔、阿呆らしう見えたら、まぶられて歸りしぞや。それに餘り踏みつけた。先刻に房を連れて来て、女共の女房のと、印判までをひき探し、納戸戸棚も見せさらし、これが嬉しからうか。男々の恥よりも、隠しても隠したい、女子同志に恥を見せ、男は寝取られ、寢間帳臺は見探され、阿呆の數々よみつくされ、これも男の可愛いは、扱も如何なる因果ぞや。今日の事が隠居へ聞え、私は親に此られながら、科を負うて居る心。人間らしい氣があらば、三十日の一月を、せめて三日は碌々に、寢物語もあれかし。」と、心一杯理をせめて、情も深く口説き泣く、千々の思ひぞ哀れなる。徳兵衛一念發起して、「ハツアあ、過つたく。悪人とも業人とも、盗人とも騙りとも、我ながら重罪人。今までもそなたに恥、やめうやめうと思ひしが、これ程の瀬戸がなうて、うかくと盡した。我一人思ひ切れば、そなた子供隠居

入らぬ、頭痛づつうのする寢ねやうでない、又またくらひ酔ようたか。春はるは早さうくまくし出だしや、彼あの様やうな婿むこなら、二十人にんや三十人にんは、今いまの間に取とつて見みしよ、三日かと一人ひとり寢ねさせはせぬ。」と、眩くらき／＼雪せき駄だはく。内の者うちものども、「もうお歸かへりになりますか、送りませう。」といひければ、「ヤア道みちならちと送おくつて、それ言いひ立てに夜食やしよくはうといふ事ことか。」と、門かどの戸と明あくれば徳兵衛とくびやうゑ、もがりの陰かげに隠かくれしを、それとも知らで歸かへりしは、危あやふかりける次第しだいなり。入いれ違ちがうて徳兵衛とくびやうゑ、つつと通とほつて羽織はおりを後うしろへひらりと投げ、實事じつことの格かくは見覺みおぼえたり、女房にようぼうの膝元ひざもとにむんずと居ゐて、「こりや最前さいぜんからの次第しだい、門口かどぐちに聞きいて居ゐた。留守るすの己おのれを寢ねて居ゐると、親父おやぢの手前てまへは男をとこをかばふ様やうなれど、職人しよくにんに似合にあはぬ鬢びんつき付つきな男をとこを、身代みぢはりに寢ねさせたは念ねんが入いつて忝かたじけない。入婿いりむこの事ことなれば、家屋敷いえやしき家財かざいにも、罌粟けしほど程ほども疵きずはつけまいが、うぬが命いのちに疵きずつける。たつた今密夫いまみつとこをひきすり出だして見みせうぞ。」と、奥おくに飛び込こみ、何かは知らず、「わつ。」と叫きぶを胸倉むねぐら掴つかみ、宙ちゆうに引提ひつきけ躍をどり出いで、どうどひつすゑ能よく見みれば、こは如何いかに、坊主ぼうず天窓あたままの小市郎こいちろう、盆ぼんに買かうたる踊をどりの臺かづら、奴天窓やつあたまを振ふりながら、「母様かきさま怖い。」と泣なき居ゐたり。徳兵衛とくびやうゑもしまひつかず、詞ことばなければ女房にようぼうは、宵よひより積つもる憂うれき涙なみだ、一度ひとに、「わつ。」と叫きび伏ふし、消きえ入いる許ばかりりに泣なきけるが、「なう徳兵衛殿とくびやうゑどの、慘じみう御座ござる辛つらいぞや。不義ふぎせう者ものと見みするたら、何故なぜ附つき張はつても居ゐもせいで、元日げんじつから元日げんじつまで、よう往いき處ところもある事ことぞ。此方こなたの留守るすの言譯いひわけに、ふつつりと事ことは缺かく。隠居いんきよ様の聲こゑと聞きき、側そばにあつたを

まいかと、覺算置いて見て、縦ひ算が合うても、五度に三度は投げすにしまふ。側に居る同行衆が、ぐわらく投げる時には、錢を一文摘んで、肩へ手を斯う振り上げ、投げる顔で鹽の長次郎、錢は手にとまつた。斯う氣轉を利かせねば、過ぎにくい身代、四百目は何にした、行き端を聞かう。」ときめらる。女房、さては丁稚奴が咄に違ひなしと、思ひあたれば妬ましさ。いつそ言うて退けうか、いやいやそれもむごい事、如何かかうかとせきくる間に、まづ先立つは夫の可愛さ。「ア、親父様、なんぞと思へば仰山な、私ら女夫がなに借錢しませうぞ。其の銀はな、南の兄御の方に、曲輪から出た好い奉公人を抱へて、手附銀が遣り度いが、世間共に銀づまり、彼の邊は利も高し、殊に兄御は病申なり。私等が判では貸す人ありとの頼み様。銀こそはなるまいし、判捺く程は一門がひ。殊に私と他人なれば、猶しも義理は缺かれず。又用無心もあるものと、それで判を押しました。内外の者も聞くぞかし、千里萬里も違うたか。あんまりな親父様。」と、陳する心の優しさよ。徳兵衛は女房の歸らぬ先にと足早く、門口に立ちけるが、内には舅の喚き聲、「南無三寶。」と入りもせず、しばらく様子を覗ひける。舅猶も納得せず、「オ、女夫が言ひ合はせ、親を瞞して身代潰せ。寢て居るも謙ぢや、何處へ失せた。」と穿鑿す。「ハテなんの、留守なら留守と言はいでは。あれ暖簾の彼方へ。」と指させば、宗徳は暖簾打上げ、孫の事は氣もつかず、老眼の何見てか。「ム、ウまつ職人には似合はぬ、彼の贅付が氣に

小行燈提け入る有様、下女手間取は見送りて、「内儀様と旦那の仲、彼方へ支へ、此方へ言ひ、兩方で物をつかみをる。彼奴は 鋸商」と、鋸屑の言甲斐なき、猜みも下の役ぞかし。此の家の隠居吉文字屋の宗徳、代々傳はる紺屋の形と、もとに禿けたる頭を剃し、額にたえし古毛抜き、食ひ兼ねぬ世も算用づく、この家屋敷家職をば、妹娘にやり屋町、姉にかゝりて隠居分、薪の始末燈心を、日暮れて一人によつと来る。内の者ども、「あれお辰様、槍屋町の隠居様のお出で」といふ聲に、「おう。」というて立ち出づる。宗徳とがり聲にて、「入壻殿は何處へぞ。節季師走内を明けて、出るとても出すものか。これ二人目の壻ぢやぞや、彼の孫の小市郎に、父親三人持たしやんな。」と、いふ顔の不興なれば、優しくも女房は、良人の悪性押包み、「なんの餘所へ行きやりましよ。方々の贈物もの、内外の者の手は足らず、今朝早々から仕事して、風引いて頭痛するると、奥に寢て居られます、お前は何しにお出で。」といへば、「イヤコレたゞは來ぬ。たつた今そなたが歸つた其の跡へ、堀江の口入治右衛門といふものぢや。此方の娘御壻殿兩判で、銀四百目貸しました。若い人の事なれば、後日の念にちよつと知らせして置きますと、いひ置いて歸られた。聞くとおれは眼がまうて、一服の茶を飲みさいて來た。四百目といふ銀を、何にするるとて借りたぞ。食ひ込んだか、へこんだか。女夫の仲の榮耀づかひか。エ、おとましや 身代はえ持つまい、己らが談議参りして、一文投ける賽錢さへ、進ぜうか進ぜ

貸してやつて下さいやせ。」と、棲々合はせる辯舌に、口入喰うた顔つきにて、「ア、ノ、これには及ばぬ事ながら、徳兵衛殿は入家と聞く。斯う致せば後の爲、又も川を聞きかう爲、サア判をなされよ。」と手形を出せば徳兵衛、掛硯引寄せ、「これそなたの判、さらば先づ私。」と、互に印判明白なり。「丁銀四百目包の通り、吟味なされ。」と受取りわたし、「もう暮れまする、お暇申そ。」「ちとお杯いたしましよ。」「重ねてく。預けます。さらば。」といひてぞ歸りける。「さつと濟んだ、目出度し。」と銀懐に押入れ、「これ三太。この女衆を送つて、ちよつと往つて来る程に、門もしめて火も燈せ。其の中お辰が戻つたら、湯屋へ往つたと瞞して置け。必ずなんにも吐すな。」と、口をとめたる紺屋糊、「徳様早う。」と出でにけり。所帯持つても色は猶、捨てぬぞ道理紺屋の妻、月も泣え行く夜嵐に、「あ、提燈もよいわいの。」宵寝まどひの小市郎、竹が脊中にふらくと、「寐風ひかすな大事の子。」萬年町に歸りしが、問ひもせぬに三太郎、「旦那様はたつた今、湯屋へ。」といへば、「オ、くどうで湯か茶か飲みにてある。法界の男ぢやと思へば濟む。」と恨みながら、小市郎が目ざますを、暖簾の奥の小座敷に、漸うすかし寐入らせて、我も著物著換へんと、押入明くれば、こりや何ぢや、掛硯明けひろけ、夫婦の印判取り散らせり。これはくと言はんとせしが、あたりを見廻し押鎖め、「こりや三太郎、其方に大事の物遣らう、火を燈して奥へ来い。」と、いふより早く、「あいくくく、さらばしこだめ參らう。」と、

ら其の銀で、餘所々々のお山が、一つ買うて見度いと遣らる、ぢや。」と身を縮む。「これは出来た、容易い事く。して誰ぞ惚れたのがあるか、サア言へく。」と、とひかけられて恥かしがり、「私が惚れたのは、いろはの中にある。」といふ。「ヤアそんならいろは茶屋か。」「イエく、太左衛門橋筋に。」「なんぢや太左衛門橋にいろはとは、ちりぬるをわか、よたれそつねな。」と吟じ返せば、「それく其の次の、らむうけんだ」とぞ答へける。「これは上物上目利。」と、豆板一粒ばつとはすみ、「ヤイ今此處へ銀持つて来る人がある。此の女衆をお内儀様かと言はう程に、必ずい、やと言ふなえ。さて此の事を、女どもにも傍輩にも、微塵も言ふ事ならぬぞ、合點か。」といひければ、三太郎首肯き、「勿體なや勿體なや、言ふ事では御座りませぬ。若しも重ねて言ひたい心出来た時々、お前へそつと斷りませう程に、又銀を下さりませ。」と、阿呆な顔でも損をせぬ、遣る粹よりは粹ならん。時に表に、「頼みましょ。紺屋の徳兵衛殿は此方か。」と、年ばいなる仁體なり。「ヤア治右衛門様かおはひりなされ。」「御免。」といひて通りける。「あれ女房ども、内々の治右衛門様、そなたの判なら銀貸さうとおつしやる。お目にかゝつて置きや。」といへば、いひあはせてや彼の女、「これはまあく御懇親な。尤も家も商賣も、私の物とは申しながら、子なかなした中なれば、もう今では屋財家財皆主の物で御座りまする。斯うお目に懸る上からは、私が請けあひ。ふかしい事こそ、此の家屋敷相應に三貫目や五十兩は、

に未だ懸つてか。何時ぢやと思ふ、今日は師走の十五日、中の島のそうぶつ物も、昨日限りの約束、谷町の蒲團も未だ持つて往くまいな。兄貴から誂への、重井筒の暖簾もおそいというて腹立ちぢや。女房共は何處へ往た、エ、どんけな、一言おれが言はねば、もうそれほど間が明く。いひつけも見まはしも、口は一つ目は二つ、これでは水も飲まれぬ。」というた處は見事なり。下人どもは平常の事、一お内儀様は檜屋町の姉様へ、一寸往つて來う程に、お前に問うて蒲團地も、持つて往けとの事といへば、「そんなら喜兵衛持つて往きや。庄助は提灯持つて、女房どもを迎へに往け。それ坊主奴に怪我さすな。負うて歸れ。」といひつければ、「あい／＼。」いふもそこ／＼ながら、皆々表に出でにける。亭主も辻まで行くかと思へしが、三十許りの女房と、何やら私語き呟きて、連れ立ち内に入りければ、女は亭主と座を組み、お家様顔して居たりける。年季の三太すつきりと合點せず、じろ／＼見るを徳兵衛、「これ三太此處へ來い、つつと寄れ。」と膝元に呼びつけ、「此奴はずんど利口者で、言ふなといふ事はぬ奴、それで人が可愛がる。近づきになるしるしに、何ぞ遣つてたも。」といへば彼の女、「さうやらして、目元が利發に見えまする。なんと顔見世見やつたか。札買やる錢遣らうか、但しなんぞ餘の物が欲しいかいの。」といひければ、「イエ／＼私等芝居が見たけりや、六軒町の兄御様から、何程往かうと儘ぢや。私や銀が欲しい。」といふ。「ム、銀持つて何買やる。」、「ア、銀貰うてか。銀貰うてか

心中重井筒

上之卷

明夜あやさ來こいといふ字じを金紗きんしゃで縫ぬはせ、裾すそに清十郎せいじゅうらうとねた處ところ、裾すそに清十郎せいじゅうらうとねすみ色いろ。京きやうの吉岡紙子よしかがみこ染そめ。やほてりがきか、うすがきか。「正月しょうげつ前のまへきはくくに、旦那殿だんなどのは外そとが内うち、御神酒おみきすこ過すこしてうかくと、山衆やましゆといへば目めが見みえず。内うちに居ゐやんす内儀ないぎさま様、此方こちと許ほかりに打任うちまかせ、誂物あつらへものも節季せつきをも、如何どうしまはんすことぢややら、下心けしんの悪わるい旦那殿だんなどの。「やい三太さんた、そりやなんぢや。茶屋ちややへ往いきやろが、山衆やましゆを買かやろが、旦那だんなは旦那だんな。此方こちとは紺屋こうやの手間取てまどり。何事なにこともさらりつと、淺葱あさぎにいうて居ゐよいやい。」
「オ、喜兵衛きへゑの言いやることなれど、我身わがみは元もとを知るまいが、地體ぢたい旦那だんなのしたぞめはの、重井筒屋かさねつちやといふ南みなみの茶屋ちややの弟おとで、これへは入婿いりむこ。乳香子紋ちゆのみごもんを持ちながら、人ひとのみる茶ちやも構かまふにこそ。お内儀ないぎは結構けつこう者もの、柳やなぎす、たけにやつてぢやが、隱居いんきよの親父おやぢがわせると、家内いへうちはしみこほり山染やまぞめになるわいの。彼のあ様にほついては、やがて身代しんだいは木賊色とくさいいろで、おろす様やうになつてのけう。」と笑わらひける。酒漬さけづけに水みづもつくかや我が宿やどへ、歸かへりこん屋やの徳兵衛とくべゑ、忙いそがしけに立ち歸かへり、「これ庄助喜兵衛しやうすけきへゑ、崎さちが明あかぬのく。これ

方を傳へ、斷れたる筋、折れたる骨、落ちたる首も繼ぐ名人。この療治にかけたらば、夫婦が命も恙なく、千年までは千石取りが、受け取つたりや松の風、風に當つるな、身を揉むな、とりぐさまま取り繕ひ、乗物に乗せ、三味線に乗せて謠ふは、源五兵衛何處へ往きやるぞ薩摩の山の、山は寶の山とかや。

薩摩歌終

参して、會稽の恥辱をすゝぎ、武門の美名を輝かすも源五殿の御情、御恩は海山、報じても猶報じが
 たし。先づ御自分が行方を尋ね、拙者が主人を頼み入り、お國を廣う彼のおまんと、比翼の杯取り
 結ばせんと、心のかぎり尋ねても、今日まで行き方知らず。その内にあのおまん、外に縁につけさせ
 ては、恩を報ずる甲斐もなし。先づ外の手を止むるため、我等が方へ呼び取つて、靜かに貴殿を尋ね
 んと、我々夫婦が思案して、媒介頼み作り名して、言ひ入れのたのみ送つたは、この三五兵衛であつ
 たぞや。残り多や残念や、さりながら曲がない。よしこの方こそ知らずとも、笹野三五兵衛こそは、
 親の敵を討ちおほせ、本懐を達せしとは、九州にかくれなきものを、何故尋ねては下されぬ。たゞし
 今おちぶれて、諷ふまいとの身の卑下か。たゞし又拙者が、昔の恩を忘れて、見ぬ顔しさうな三五兵
 衛と見つけられたか、恥かしい。さりとは聞えぬ、恨めしい。せめて好い折對面して、詞をかはして
 満足した。後に聞いて三五兵衛に、追腹切れといふ事が、さりとは曲もない。その筈ぢやない源五
 殿。と、抱きついて泣きければ、いまはのおまんも眼を開き、じろりと見たる眼は涙。源五兵衛も手
 を合はせ、「忝い」とばかりにて、各、「わつ」と泣く涙。落ちてながれて紅の、朱の血潮も洗ひ
 けり。「ア、三五殿。御夫婦の御禮は來世でく。とても情に御介錯、早うく。」と苦しむ聲。「エ
 エ腑甲斐ない、氣遣ひすな。尤も深手といひながら、本國長崎に黄陳といふ南蠻外科。昔の華佗が仙

ばと斬る。斬られながらに刀の刃にしがみつけば、手の内くられ朱になつて逃げ廻る。おまんは母を斬らせじと、立ち掩ひ立ち隔たり、抜刃の下へと廻りける。男はおまんを除けんくとしけれど、せきにせきたる手も伸びて、見込みのかねあひ外れけん、おまんが左の肩先より、前は乳房を袈裟がけに、兩へさつと斬り下けられ、既に最期と見えにける。母はひるます大聲上げ、「やれ人殺し。切つた切つた。」と呼ばはる聲に、當町鄰町驚き騒ぎ、我もくと驅け集まり、手負を撈り、「源五兵衛取り逃すな。」とぞひしめきける。源五さわぐ色もなく、大肌脱いではずたとにらみ、「喧しい町人ども、逃すなとは誰が事。すべによつてこの源五が、立ち退かば退きません。逃ぐるといふ字が聞き憎い。刀を抜くは人斬る覺悟、人を斬れば死ぬるは覺悟、諺か實かこれ見よ。」と、左の肋に刀を突き立て、「えいやつ。」と引き廻し、かへす刀を喉吭に、立ては立てて抉りしが、腹を深く切りたれば、腕先弱りのつけに反り、半死半生哀れなり。斯かる處に風體千石ばかりなる武士夫婦、供廻りはなやかに、親新兵衛に案内させ、息をはかりに驅けつけ、「未だ死に切らぬは嬉しや。」と、夫婦の手負を看病し、耳に口寄せ大音上げ、「エ、言甲斐ない源五殿。先年京都で參會した、林と申した腰元、いまは笹野三五兵衛。これは我が妻、その時の小まん見忘れたか。不慮の縁によつて、親の敵の在處、別名まで聞いたる故、翌年敵を討ちおほせ、數年の本望遺恨を晴らし、この小まんと夫婦になり、本國本地に歸

動くな。母めも今日が明日になり、千日なりとも居たくは居よ、おまんにおいては戻さぬ。」と、既に顔色變りけり。母はもとよりのものならず。「ア、町人の淺ましき、お武士の作法は知らず、是非に及ばぬ何とせう。驅落人のお尋ね者、それでも武士が立つならば、いはれぬ肝精やかうより、町所家主を頼んで、連れて歸りませう。手間も暇も入らぬ事、皆来い。」と起たとす。おまん取り付き、「マア待つて下さんせ。町所へ斷つて、源五様を今の間に、牢へ入れうといふ事か。連れ立つて歸りましょ、先づしづまつて下さんせ。これ源五様、萬事人に逆らはず、身の慎みと申した事、必ず忘れさんすな。大事のお身ぢやが合點か、何も私が胸にある。ちよつと戻つて親達を、なだめて歸ればさらりと濟む。私次第にしていなさんせ、つい戻りましょ。」といひけれども、源五兵衛合點せず。「イヤ明日戻さば戻しせん。今日一日は、この源五が戻さぬといふ一言、首になつても言ひ通す。」と、さらさら戻す氣色はなし。母は名に負ふ我武者もの「ヤア、しやまだるい、男どもおまんを引立て連れて來い。」「かしこまつた。」と下男、牀の上へ驅け上る。源五兵衛驅け塞がり、「武士の女房に、指でもささば片端に、泥塵斬つて斬りすゑん、寄つて見よ」とねめまはす。薩摩一國名取の男源五兵衛にねめつけられ、左右なく寄りつく者もなし。母事ともせず打笑ひ、「臆病な奴等かな、昔が今に至るまで、にらまれて死んだ者はない。おまんおぢや、手を引かう」と、立寄る處を抜きうち、頬先かけてすつ

く言ひ捨てけり。おまん挨拶言はんとするを、源五兵衛押し止め、つつと出で、「これ〜昨日までは、其方へ出入り奉公下人分の事介、今日より元の菱川源五兵衛、一錢持たねど武士のちやく〜。十萬貫目持ちやつても、琉球屋の新兵衛、詞も違ひ座もちがふ。推参至極な、案内もなく踏み込んで、歸れといふは誰が事、此のおまんは身が女房。武士の妻女は夫の心次第にて、親の儘にはならぬ事。おのれが宿にて新兵衛を、廻いた格とはちがうたぞ。其方ばかりはや歸れ、長居をせはひき摺り出す」と煙草引寄せ煙吹き、取つて著くべき方ぞなき。女房さすが物仕にて、詞をやはらけ、「御尤も〜、連れて往んだら戻すまいと、悪うお心廻つたさうな。親が千萬嫌うても、主が心に好いたもの、戻さぬとても、彼の子が戻らずに居やるまじ、親も何しに留めませう。さりながら、琉球屋ともいはるゝ我々、娘一人をしつけかね、長持一箇送らぬと、外聞悪い沙汰も嫌。第一彼の子が身祝、きつと仕立てて送りませう。新兵衛心もその通り、その證據に今日は、祝うて餅を搗きます。ちよつと戻して下さりませ、ぜんさい祝うて戻ませう。サアおまん、起つておぢや、サアおぢやいの。ア、しぶとい子や。」と言ひければ、おまんは中にうろ〜と、「情なや疎ましや、あの、ものが嘔しい、ちよつと戻つてさらりつと、埒明けて來ませうか。」「何處へ〜。母めが言分皆偽り、騙しすかして連れ歸り、頼みを取つた塙の方へ送らんといふ心底、面つきに顯はれた。門より外へ一寸も出しはせぬぞ、

ども、我が手に我が身の廻向して、念佛申すが耳に入り、ふつと目が覺め恍惚と、今のは夢であつたけな。サアたゞ事ではあるまい。こな様の怪我過ちか、但し浮世を見限つて、例の短氣が起つたか。はやう逢ひたや聞きたやと、胸も心もわくせきして、帆掛船さへまだるうて、手繰りつく程氣がせいだ。此の様に無事な顔見まいかと思つたに、私やがつくりとなりました。善いにつけ悪いにつけ、夢は三日が大事のもの、必ず人に逆らはず、身を慎んで下さんせ。これこの袖見さんせ、夢に泣いた涙で、今に濡れてあるわいの。思へばく、夢の間の悲しさが、ほんの事ならどうせうぞ、夢が合うたらどうせう。」と、夫の膝にもたれふし、聲を上けてぞ歎きける。源五は男氣打笑ひ、「オ、氣がくたびれでは種々のわけもない夢見るもの、身に金が入るとて、斬らるゝは上夢。おれも去年怖い夢、天狗の鼻に取りついて、女護の島へ渡ると見た。其の翌日、餘所から松茸と赤貝を貰うた。」と、語ればおま人も吹き出して、「エイ好い加減な事ばかり。ア、久しうて笑うた、家では親の氣を兼ねて、誰に甘える者もない、私やこな様に甘える、あまやかして下さんせ。」と、頬杖枕身を横に、互に足をうちもたせ、來し方かたるぞ盡きしなき。かかる處へ母親は、下女下男引連れ、案内もなくつつと入り、「ハアアおまん此處にか、左様あらうと思つた。來るなら來ると、二人の親に何故知らさぬ。人も連れず著の儘で、親の外分構はぬ氣か。言ふ事いうて仕舞うたらきり／＼戻りやい迎へに來た。」と、前後もな

と、かつばと轉ぶ兩袖に、涙も潮も満ちにけり。夢違へしつ轉じかへ、心も浪も立ち騒ぎ、つかへは
上る山嵐、吹くや追風のそよくと、風のいろはに帆を上げて、走り行方は薩摩灣、沖の雄波にあこ
がれて、便りなきさに立雌波、身を碎くこそ 三重不便なれ。尋ね巡るやはう坊の津、鹽の辻なる裏貨
屋、豫て聞き置く目標あり。「嬉しや此處ぞ。」と走り込み、「ヤア、これは源五様、死なずにまめで御座
んすか。先のが真かこれが夢か、何れが夢やら誠やら。息が切れた水一つ、先づ飲ませて下さんせ。」
と、どうど伏してぞ泣き居たる。源五抱き上げ水含ませ、「ようこそく、心底届いた満足した。此の
上からは親里の、首尾は免もあれ角もあれ、首は首、胴は胴、甲が舍利になるとても、親の手へは渡
すまい。落著いて氣をしづめや。」と、脊なかを擦り撫でおろす。おまんも少し笑ひ顔、「こな様の顔見
たりや、胸も大方しづまつた、氣遣ひして下さんすな。さてく憂い目辛い目や、身の一代に覺えぬ
こと、裏の高擧飛び損ひ、堀へ落ちて死ぬる場を、お蘭比丘尼は命の親結ぶの神、眞實奇特な介抱ゆ
ゑ、鰐の口を遁れ出で、やうくと福山の船に乗り、九里の渡も千里の如く、とけしないやら怖いや
ら、氣がくたびれてとろくと、船梁に手枕して、寐るとも思はぬ其の間に、まさくしい夢を見ま
した。私やこな様に斬らるゝ、こな様は又腹切つて、夫婦刃の死人のためと、流灌頂七流れ、殊勝
らしい坊様が、鉦をはつてお念佛。私や悲しうてく、何やら泣いて口説いたが、言うた事は覺えね

關眺めやり、睡る鷗に誘はれて、うた、ねふりのふらくと、船に揺られて睡るらん。舟人も睡り漕
がれ行く、そも一睡の假枕、皆一心のむすほふれ、夢を結びてあり磯海、夢か現か、幻か、更にわか
ちもな、流れ、流灌頂血の上の、亡者浮ぶる法の水、哀れにもまた不思議なり。導師のお僧鉦打ち
鳴らし、釋迦は去り、彌勒は未だ世に出でず、彌陀の彼岸をたのますば、何時か火宅を出で船、乗り
おくれては誰か渡さん。なむあみだぶ、なむあみだぶ、なむあみだぶつ、なむあみだ。如
何なる人の何故に、刃の上の往生か。産のあら血か世の中は、餘所の事とも思はれず、語り給へと尋
ねれば、誰がいふとも浪の音、弔ふ人は琉球屋、おまんと申す姿の花、夫源五の手にかゝり、消えて
散つたる血刀の、のりの誓ひも淺ましや。其のおまんとは我が身の上、娑婆か冥途か如何にとも、覺
束なみだせきかぬる、浮世の恨み葛の葉の、かへす刀に腹がき破り、男は晨女は宵、一夜ばかりは
隔つれど、末の逢ふ瀬は一筋に、流れ寄る邊の水施餓鬼、語るも我が身聞くも我、心一つをいろく
に、結ぶは有漏路、解くれば無漏、萬事は夢の戯れの、手にも取られぬ沖津風、濱風潮風さつ、
さつとして覺め行く夢のあと見れば、ありしは浪の音どう／＼として、海上空しく渺々たり。おまん
は驚く楫枕、我が身は元の我が身にて、覺めても覺めぬ夢心地。淺瀬の波に下り浸り、歎きの聲に舟
人が、舵取りなほす面楫の、思ひまはせば夢なりけり。一心許なや我が夫に、怪我過ちのしらせの夢。

所ぞや。よ、の高野に逃れ来て、遊ぶ野鴈や鷺鷥、筑紫の妻を都鳥、ありやと問へどいかにとも、牧
の野馬の馬の耳、風ふく山の渡守、我が思ひはしらすけに、舟も潮も引く方に、下り行く濱は連日の
岸、高千穂の嶽高けれど、高い聲せぬ二人が中の、契りは此の世後世山隠すほど猶世に漏れて、誰ひ
らき、の、神の氏子の神歌や。唄おらは知らぬが、子供等が咄す。おまん寢處に、足や四本となんし
よばへ。寢處におまん、おまん寢處に、足や四本となんしよばへ。歌は一節舵の音、蟹の友呼ぶ聲
までも、此方が浮名の噂かと、餘所のひがごと焚きつけの、硫黄が島は一霞。流され人の彼の島で、
流す卒堵婆も立つ波に、寄り来るくよりくる絲は、くまの三筋が流れちりつる、ちんりちりつる三
味線の、渡り初めにし國とかや。琉球國に打續き、唄薩摩や、三が國に、霧雨が降らばよな。それぞ
立つ名のうき雲の、雨のもりとて濡れて行く。袖は嵐の吹きかわかして、顔は涙の水鏡。ア、あれあ
れあれ、眉の引墨臍脂落ちて、髪はばら／＼海藻若布に、縫れ亂れて何時櫛の齒の唄櫛になりたや。
ヤレサテ薩摩の櫛に、諸國娘の、ヤレサテ手に渡ろ。どうがねの、よんぢり嫁御は好い嫁御。此のな
んなんこの好い嫁。あれ見さいな霧島山の横雲、此のなん／＼此の横雲、横雲の下こそ己らが親里、
此のなん／＼此の親里、妻里が夜の間に近くなれかし。此のなん／＼此のなれかし。戀しき方も近く
なれ。潮満ち来れば水剛棹、長き日影もほの曇り、心盡しや氣盡しに、暮れぬ先より我が心、夕暮の

尼は今生で逢ふ事はこれまで。一所不住の出家の身、互に便りもこれ限り、早う／＼と別れ行く。仇を御恩の情人、名残は盡きず上方で、芭蕉の布を見る時は、形見と思つて下さんせ。「オ、此方様松葉の相生まで、私や一人寢の芭蕉布。御恩きびらの目もつまる、涙に袖は半晒。今ぞ一期の織留。」と、互の心太布の、名残は一たん裁ち切つて、二丈六尺五尺の身、戀に晒すぞ、三重哀れなる。

下之卷

源五兵衛おまん夢分船

源五兵衛何處へ往きやる、薩摩の山へ、後はおまんが涙の海よ。船も押されず、櫓擡も立たず、寄邊尋ねてうかく、うかく焦る、源五兵焦る、高き山から谷底見れば、布を晒すは、夏こそよけれ。おまん心は五寒の冬か。雪のおもかけちら／＼、ちら／＼わすれぬ源五兵、姿は四季の花なれや。時折々にはやり行く、山ぞ伊達者の山葛、引く手数々かすならぬ、心の種の笹舟に、情の上荷はねられて、思ひは沈むヤツサ、やつさ／＼の空櫓の音も、耳に悲しく遠さかる。彼の故郷の此の儘で、又歸らじと思ふにも、これが此の世を出船ごと、親を恨みの目は涙、何に生まれん鱈川、松の叢立夏木立、櫻島人打羣れて、サンサ沖に綱引き釣垂る、波の雄波をかきわけ／＼、走る兔の名

様な悪心なし。もとより源五様に露心残さぬ上、今日御二人の深い中、そもやそも此の尼が、半時も男の側に居ては、女の道立たず、三衣の罰も恐ろしく、此の世では源五様に、逢ふまい見まいと釘を打ち、明日の夜明に上方へ、幸ひ出船のつれもある。夜の中に港までと思ひ立ちしが、待てしばし、おまん様はどうしてぞ、力にも成らうと申し一言、諛にはせまじと來た證據、死なせはせまい。聲高に暇取つて、見つけられては一大事、何としてがな下さん。」と、驅け廻つて、「これ／＼たんと晒布が干してある。此の端をきつと結びつけ、こちらは此の木で留めて置く。これを手繰れば樂々ぢや。」と、石を錘に結びつけ、投けても如何届くべき、力の程もしら布の、松にかゝるぞ仕合なる。おまん嬉しさ、「恥かしやうたがひは御免あれ。」と、伏し拜み／＼、布引絞り松の木に、しつかと括りつけければ、此方は尼が締めつけて、しつくりの木に留めてけり。おまんは片手に布を取り、片手を廻し松の木に、かゝりし帯を引きはなし、左右に手繰る布引の、瀧津心の胸跳り、目まひ氣も消え絶え／＼の、雲の通ひ路天津風、尼が、「せくまい／＼。」の、聲を力にやう／＼と、向うの岸に手繰り著く、「アしてやつた、あぶなや。」と抱きおろせば夢心地、「ア、正眞の生如來、これが實の善の綱。お禮は何と申さう。」と、泣き拜むこそ道理なれ。「禮をいふ間に夜が明ける。所の人に教へるは、釋迦に經か知らねども、陸を往けば遠うて、追人の氣遣ひ、九里の渡が近いけな、一足なりとも早いが好し。此の

魂許り飛ぶ鳥の、翼折れたる如くにて、屋敷の内を此處彼處、逃げ出る隙間もがなと尋ね廻れど、
 常々に用心精しき屋造の、風の通ひもなかりけり。見つけられたらそれまでと、布織る下機取り組み
 て、庭木の松にもたせ架け、我が身ながらも恐ろしき、智慧の梯子を上るにも、盗みする氣の斯くや
 らん。顛ひくもやうくと、枝に取りつき、罌の上へは上りしが、めぐりは用水底知れず、幅一丈
 の堀切にて、下るゝに足手のかゝりなく、飛ぶことかたき石垣なり。此の上は思案もなし、思ひ切つ
 て飛んで退けう。水に溺れて死んだらまゝ、千に一つも神佛の、力もあらばと思ひきり、ひらりと飛
 べば南無三寶、帯を松に引つかけて、宙に下つてこれも彼の、畏にかゝりし野邊の雉子、夫ゆゑにこ
 そ苦しみけれ。かかる處に如何はしけん、お蘭比丘尼は紛れ来て、締めたる門口見世格子覗き歩き、
 裏へ廻つて此の姿、一目見るよりはつと驚き、怖氣立ち、念佛申して居たりけり。おまんそれと見る
 よりも、「ヤアおのれはまた来たか。思ふ夫に添ふからは、言分はあるまいが、我に恨みが残つて殺さ
 ん爲に來たよな。口惜しやこれを見よ。内は忍び出でたれども、とかく男に縁ないしるし、其方が手
 にかけいでも、しばしの知死期をまつが枝の、折る、までの命ぞや。定めて源五様も同道と覺えた、
 槍はあるまい、竹の先に小刀でも結びつけて、夫の手にかけさせて殺してくれよ。エ、苦しや、身が
 しまつて息斷れして、ア、苦しや」と悶えしは、目も當てられぬ風情なり。「なう勿體なや、我等に左

世間内證、義理一つで沙汰なしに往なす。尼めも共に出て失せう。」と常わんさんとは事かはり、道理至極に返答なく、おまん涙に正體なく、源五は手を突き頭を下け、「もとに越度ある上に、かさね重ねのあやまり、如何様になるとも御恨みとは存ぜず。唯御夫婦娘御の、御難儀のなき様に、免も角も御計らひ。」と、差しうつむいて居たりけり。情ある新兵衛も、私ならねば詮方なく、「疾くにもかくと打明けて、仰せられれば、何とぞ思案も致さうもの。近頃残念氣の毒。」と、いへばおまん縄りつき、「とてもお慈悲の上からは、私も源五様、一緒にやつて下さんせ、拜みまする。」と泣き叫ぶ。母はいよく腹を立て、「おのれが一緒に出て往んで、頼みを取つた壻殿へ、こちとは死んで見せうか。それ親父殿、奥へ連れて往かつしやれ、事が延びれば尾緒がつく。男どもは居らぬか。此奴が宿は坊の津にあるけな、家主へ渡して来い。」と心得ました。」と引つたつる。おまんは、「わつ」と聲を上げ、「なう源五様、お蘭と連れ立ち御座んすの。ア、羨ましい腹の立つ。」と、恨み歎けば源五兵衛、「往き度うては往きませぬ。今此の庭でさつぱりと、死にたいわいの。」とばかりにて、どうど伏して泣き沈む。手荒き薩男の無意氣もの、「死にたくば我が宿で、撲き殺してくれうぞ。コリヤこれを見よ。」と、振上げて振廻したる坊の津や、棒づくめにて三重送りける。何時の間に、日の暮るゝとも夜のふくるとも、おまんはわけも正體も、泣きつゞけたる嬌鳥、親のしがらむ脊戸門に、人目の綱の繁ければ、

置いてたも。西國の筑紫のとて、情の道に替りはない。そなたの様に言ふならば、西國はまだしも、唐には戀はあるまいか。これ斯う並んだ妹眷の中、そなたの様な女房が、千人萬人妨げなし、杆を入れても離れはせぬ。何が邪魔で殺さうぞ。怪我にあたるは其の身の不運、言はれぬ處のお見舞から、都衆の戀には手傳が入るさうな。薩摩の戀に味方は入らぬ、早う出て往ね。腰が起たすば綱つけて、引きすり出すが失せまいか。「いや張り合ひになつたれば、斯う居た處を動きはせぬ。」「オ、動かすとも動かせう。」と、せりあひ捻ぢ合ひ立ち騒ぐ。新兵衛驅け出で、四邊鄰家もあるぞかし、兩方黙れしづまれ。」と、制すれども聞き入れず、母親始終を聞き濟まし、水汲み扱おつとり延べ、競り合ふ申を容赦もなく、「静まれ、片端に、撲ちすゑてくれるぞ。」と、敲き廻りし勢ひは、唯山姥の山廻り、舞ひ損うたる如くなり。銅鑼のやうなる聲あらけ、「エ、親父殿が生緩い。縛し上げて置きませず、彼奴等が口説の揚屋の亭主になる氣か。やい事介、おのれはお尋ねの源五兵衛、大事の娘をそゝのかし、塞がりの此の國へ、前髪落して態を變へ、又彼の子に悪氣を付け、人の目を暗ますは、人買よりも野太い奴。唯さへお國は人改め、おのれの忍にこれのうちは、月に一度の判をする。見知らぬとて是非もない、手前にふだん飼ひ置いて、外から上へ聞えては、同罪といふ一筆の、身抜けがならうと思ふか。御吟味所へ引渡し、牢へ入るるはやすけれど、おまんが心底量つて、腹を借さぬ母のゑに

てまで歸りしが、内の騒ぎに心をつけ、暖簾の陰より覗くと、更しら刃を奪ひ合つて、やう／＼男もぎたくり、手許に置かじと力に任せ、投ぐる抜刀が一はすみ、二階の比丘尼が小腕に、鉈はづれにすつはと立つ。狙うてはよも當るまじ。障子にさつと生血ひいて、朱に染れば兩人の、口説もわきへ興覺めて、「これは／＼」と騒ぎしが、されども淺瘡甲斐々々しく、二階の梯子踏み轟かし、「これ源五兵衛殿おまん殿、流石は田舎夷よなう。男に執心ひかされて、尋ね來たとの悪推か。執心残る程ならば、あたら姿をむごたらしう、木の端と寝さいでも、人は情の心の花、花の匂ひに引かれては、深山谷の奥までも、離れ難なう慕ひ來る。戀路とても其の如く、此の胸一つすゑたらば、源五兵衛殿で御座らうが、業平殿で御座らうが、戀の絆に繋ぎ留め、物の見事に添うて見しよ。されども國のおまん故、斯うなつたとの物語。我が身の事は思ひきり、そなたに早う逢はせたく、路銀まで取りしつらひ、其の上にも其の中は、何とかなりしと氣懸りにて、とても捨てたる此の身の果て、修行がてらに餘所ながら、戀には味方の欲しいもの、役には立たずと力にもやと、八重の潮路を越えわたる、都女の戀の情、見習うて手本にしや。それに刃物を投げうちして、騙し討ちに殺さうや。コレそなたの手では得死ぬまい。サア源五兵衛殿、尋常にお手にかゝれば身の本望。」と、脇指抜いて手に持たせ、泣き喚いて武者振り付く。おまん引き退け、「これかしましいしちくどい、都の上方の、聞きともない

蘭があの尼ほど見えれば、薩摩へ戻らず京に居る。牀から出た顔見せたかつた、頭は赤熊猫脊なか、鳩胸に顔は猿、まちつとで齧になる。思ひ出すもなう嫌や。くらがりの商ひはせうもので御座らぬ。」と、まぎらかし出づれば、「いや／＼言はしやんすな。それならなせ門口で、咳拂ひしてうなづき合ひ、何もいふまい／＼とは、何の事で御座んした。命をかけ身を捨てて、親に見かへる男なれば、鼻息にも氣を付ける。ひくう言うたら聞くまいと、思はしやんすが不覺のいたり。過ぎにし事を輪廻深く、言ふ氣はさら／＼無いものを、問はれても未だ隠さしやんす。左程に隔て心を置き、未來までとは能う言はれた。お蘭が來たも皆あひけん、つもられた騙された。逢ひ初めし時の誓文を、金輪際と思ひ詰め、男を大事にかける故、今の母に逆らひて、常々疎み憎まるゝ、袈裟まで憎い世の誓へ、今日の年忌の佛まで、憎まするは我が戀ゆゑ、多くの罪をつくりしも、皆いたづらになり果てたし。死んだ跡では彼のお蘭と、心安う添はしやんせ、私や死にます」と、事介が脇指抜いて我が胸に、突き通さんとする處を、「これは短氣。」と飛び懸り、柄に取り付き、「これ／＼、今日の日天御照覽、少しも隔つる所存なし。」思ひがけなき處へ來て、我も當惑したる上、氣にかけさせて無益と思ひ、先づそでないというた分、隠し遂げる心でなし。前後の聞き分けなう、氣が短い」ともぎ取れば、「オ、氣が短うて、鈍な事見ながら生きては居られぬ。」と、又取り付いつもぎ取りつ、競り合ふ中に母親は、おも

轉寢、後も前もない戀なれど、お前様も姫御前、女のばかない心から、二人に枕替すまいと、思ひ初めたが善知識、髪容つくつてさへ、高の知れた私が嫋緻、衣を墨に天窗を圓め、戀ひ慕はれうと思はねば、いつそ氣樂で、何れ佛では御座んする。されば佛の石上樹下とて、石の上樹の下陰の、宿りも厭ひ給はねば、岩が根枕氣散じながら、寐覺めく／＼にどうやらすれば、彼の徒臥の因果めが、煩惱を起させます。」と、餘所に語りて事介を、尻目に睨むぞ氣味悪き。事介も迷惑さ。「エ、此處な佛殿、問はず語りせぬものぢや。近頃佛とも覺えぬ人ぢや。」と嫌がれども、新兵衛氣もつかす。「菩提の縁は種種、殊勝にこそ存ずれ。今日は我らが先妻の忌日。彼の中二階の持佛に、薰譽蓮清と申す位牌。あれにて念佛御廻向頼みます。」「それならあれへ通りましよ。」「いざ／＼あれへお通り。」と、二階へ上れば新兵衛、事介頼む。何ぞ一種で非時をせい。さらばお布施を包まう。」と奥の間にこそ入りにけれ。二階を見上げて事介、「エ、打見には殊勝らしく、咄を聞けば淫奔者。信心が覺めたれど、非時をせよとのいひつけ、豆腐でも取つて來う。」と、起たんとすればおまん取り付き、「コレ待たつしやれ。彼の尼は内々咄に言はしやんした、こまん様の侍女お蘭であらうが、何故だまつて隠さんす。但し私がおのお蘭を、取つて嚙まうと言ひましたか。どういふ心で御座んす。」と、問ひ詰められて顔を赤め、「ム今今の尼の咄が、蘭が噂に似たゆゑに、其處をもつての悪推か、イヤこれはいかいおはまり。彼のお

し、狭き浮世は何かせん。戀にさはりの關縫ひの。積る思ひをかたあけて、同じ刀にたちちがへ、一つ枕に伏縫して、三途の川のせ筋にて、結び留めましよ、縫ひ留めましよ。留めてとまらぬ涙の絲、襦を引き合ひ袂を引き、二人が歎き諸共に、疊み込めつ、泣き沈む、世に頼りなき戀路なり。時しもおもてに念佛も、鉦の響もあはれけに、細々と女の聲、「これは上方より諸國をめぐる修行の尼。草鞋の價頼みます。」と、聲つき賤しからざりけり。新兵衛起き上り、「ヤア事介来たか、あれ一錢取らせ。」といひければ、「なう父様。母様のお位牌に、念佛一言手向の爲、彼の修行者を持佛堂へ呼び入れても大事ない事か。」「オ、氣がついた奇特々々。殊に比丘尼の事といひ、雷奴が戻つても大事ない事。それ事介呼び入れよ。」「はい。」といふよりおもてに出で、見れば京の屋敷にて假の契りのお蘭なり。互にはつと驚く顔。事介ちやつと我が身を陰に、頭をふつて口のうち、「何も言ふまい／＼ぞ。えへんえへん。」と知らすれば、心得顔く目元にも、浮ぶ涙ぞ至極なる。「これ内方から志がしたいとある、此方へ／＼。」と案内す。「ハア御免なりませ。」と笠を脱いで腰懸くる。おまん茶を汲み饗應して、「若いお人の上方から、筑紫の果てまで修行して、發心の因縁は如何したことが知らねども、今其の身には苦もなうて、羨ましく御座んす。ほんに此の世の佛ちや。」といひければ、「あの仰しやんす事わいの。苦は色替ふる松風、通り風の吹く様に、身にも染まぬ一時戀、物言ふ間もないあだし男と、假初駄の

其方も定めて死扮装。此の誂への縫物も、其の心得に仕立つれども、心の底の袴丈は、昔も今も替らぬが、彼の袖下のいひかはし、いよく一尺一寸も、引かぬ合點が聞きたい。」と、縫物に事よせて問へば答への返縫、心通はず端縫の、詞の縁こそ哀れなれ。我もそもじもわきあけの、其の袖形のいきかたも、何も彼も未だはづしの絲の、愛しとまでに思はくの、針の本末覺え初め、互に心懸袖の、縁により絲く、り袖、針目人目も思はねば、親の躰もよしやたゞ、解くな解かじと仕立てしに、綻び易きならひとて、誰がみ、づに聞きつたへ、さがない浮世の袖口に、かけて裂かれてあぢきなや。文の音傳言傳も、誰繼ぎあてず中絶えて、何時しみるくと久振、袴丈逢うた夜半もなし。果敢なきものは女の身、親の詞に従ひの、餘所の小褌に綴ぢられて、つらや悲しや忍び泣き、涙小針にしくくと、まばら／＼に縫ひこぼす。實に道理や、とても肩身許りかうか／＼と、ながらへ果つる身巾なし。縫込み廣き身でもなし。かたの悪さに掘切れて、人を恨みん道もなし。思うた事言うた事、今は徒なる逆征、三寸おとしに裁ち切つて、此の世の契りあさ絲なれど、來世は長き絲卷を、繰り返しては繰り返し、繕れつ纏れつ合はせ絲、六道の縫目に待針して、手は遅くとも待ちぬべし。ア、跡も結ばぬ絲筋の、一筋先へ抜けんや。一人残りてまだ／＼と、誰を相手に掘合はせ、針道違ひ著にくしと、手づゝの浮名は取るまいとよ。さては頼もしなまなかに、まだ著替なき此の生は、五尺に足らぬ襟おと

い、縫物でもして居や。酒の上に泣いたれば、ア、いかうふらつく。やあえい。」と手枕すれば、「少とろくとなされませ、私も其の間に事介の頼みやつた洗濯物、つい仕立ててやりましょ。」と、取り出す我も其の人も、互に思ひ替らじと、神に誓ひを掛針や、此の血を染めし指貫なりと、思へば心みだれ絲、過ぎし其の夜を忘れかね、思ひ切りかね捨てかねて、心の底に包み綿、落つる涙の絲筋に、戀をくけ込む哀れさよ。事介は頼みの使ありと聞くより堪り兼ね、嗜む一腰ほつこんで、覺悟極めし顔色、門に驅け入り、「おまん様これ來ました。」とばかりにて、おろく涙で立ち居たり。おまん傭しく、「ハアおぢやつたか、先づ上りや。母様は留守、父様は寢轉んだばかりで、碌に寢入りはなされぬぞ。物を言やらばそつといや、お眼が覺めれば悪いぞ。」と、眼まぞ飽き知らせける。事介やがて合點し、「今日は御縁付の極めがあると承り、お出入り申す私が、お前の嫁入をおめくと、知らぬと申すは一分立たず。御心底を聞き届け、其の目出度いお座敷の、お茶の給仕を、これ急じ所をまつ此の様に、お給仕でも致さんと、脇指さして參つたが、はや御祝儀は相濟み、御縁付は極まつたか。早う聞きたい。」と、胸なで擦るばかりなり。「いかにも出入りの門の事、其方に知らせ、取り持つて貰はずば、残り多く腹も立ち、無念も嘸と思ひ遣り、種々心碎きても、先づ一旦は縁付に、遁れ難なう極まりし。嫁入する日は死扮装、葬禮の儀式と聞く。此方の胸は死用意、嫁入の供をして給らば、

てし恩があればとて、縁の道は格別ぞや。殊更今日は大事の年忌、弔ふ者は私ばかり。ほんに無縁の佛の日、出家の一人も供養せず、お墓の花も枯れ次第、持佛の香も消え次第、ざんざ所ぢや御座んすまい。但し今の母様の、仕様が好いと思つてか。嫁入は思ひも寄らぬ事、重ねていうても下さんすな、いつそ死ねなら死にます。」と、聲をあけて泣きければ、新兵衛も涙にくれ、「我が子の心底恥かしい。今の母に目がくれて、死んだ母を忘れたと、思ふ恨みか恨めしや。今日は往なさん追ひ出さんと、幾度筆は執つたれども、堪忍せしも子の可愛さ。七歳から馴染みたる彼めさへ彼の辛さ。跡に呼ぶは猶もつて、馴染は薄く氣兼して、互に隔てもある時は、苦勞に苦勞を重ねべし。世話の賢へにいふ如く、ほんの母の折檻より、鄰の人の扱ひが、痛いといふは誠ぞや。如何なる賢女貞女でも、乳房の母には似もつかぬ。斯ういふ我も其の通り、若い時分は色もあり、頭に雪を頂いて、寢覺めがちな夜なくは、稚馴染の子の親を、忘るゝ事はなきぞとよ。此の度の縁づきも、一旦心に隨うて、三日なりとも居て戻れ。其の上では如何様とも、望みの通り違へはせじ。さら／＼彼めが最良でなし。冤角心に逆らはず、可愛がらせう爲ばかり。今日の佛が不便やな、預けて往んだ此の娘、何とて粗末に思はん」と、縋り付きて泣きければ、「それなら是非に及びませぬ、必ず／＼苦に持つて、煩うてばし下さんすな。」と、親子手を取り縋り合ひ、泣き叫ぶこそ道理なれ。「こりやく／＼戻つて見をれば喧し

を、ふきはちやつと酒屋へ、決水槽に水がなさうな。吸物になにをしやうゆか、いやざつと薄味噲を、鯛炙れ。」と喧しく、連立ち奥にぞ入りにける。おまんは胸もせきかへり、サア頼みを取つてはもう遁れぬ。わざくれ焼けぢや。ばれて出て、忍び男のかまひがあると、とんというて捨てうか。寧そ内を走らうか。いや／＼源五兵衛様も日陰の身、其の上に苦を持たせては、いとしい人の身の大事。談合もするものを、今日は如何して見えぬぞ。父様を呼び立てて、へんがへして貰はうか。内の者は身ならず、心の合うた友はなし。何とせうやら彼とせうやら、やるせ涙に氣も塞がり、座敷の内をうろ／＼と、起つたり居たり泣く許り。時刻移れば奥の間に、「千秋樂は民を撫で、萬歳樂には命を延ぶ。相生の松風、さつさお暇／＼。」と、好い機嫌にて媒人は、足もひよろ／＼立ち出づる。新兵衛も送つて出で、「兔角目出たいお目出たい、おまん様おつけ好い殿持たせませ、お内儀様と申します、兔角目出たいお目出たい。」と管を巻いてぞ歸りける。母は酒氣に猶氣強く、「何とおまん見やつたか、安う積つて百兩足。なんほ四の五のいやつても、我が身の細工で、あれ程の男はちつと持ち憎かる。皆媒人の肝精。親父殿の名代に、媒人へ禮に往て、氏神へも參つて來う。何れぞ暇な女子ども、供をせき駄よ綿帽子よ。」と、引纏うてぞ出でにける。おまんは母の町内を、出離る、まで見送りて、門口より走り入り、「父様これはどうぞいの。」と、膝の上にかつばと伏し、絶え入るばかりに歎きしが、「育

じこと、私や別け隔てはせぬものを、又してはく、さしてもない事苦口言うて、我も噴恚を燃したり、人にも悪氣附けさんす。精進すなら爲ますまい、寺が嫌なら參るまい、子は親次第のものなれど、縁の道ばかりは押付け所爲には成らぬ事。頼み取りたか取らしやんせ、私や嫁入はしませぬ。せめて十一つは父様にも問はしやんせ。母に向うて口過すも、皆こな様が言はさしやんす。あんまり氣強う御座んす。」と、袂を顔におしあてて、恨み歎きの其の中にも、今日命日の亡き母を、慕ふ涙そまさりける。「オ、泣く程嫁入がしともなくば爲せまい、一期男持たずに居やるか。どれ顔見よう、オ嫌さうな顔ぢや。わが身の好きやる男はおれが嫌、親の許すはそなたが嫌ひ、押付け所爲はしますまい。おつつけたのみが来る筈、投げ返いて見せうぞ。」と、喚きちらす折しも、袴に媒人が、袷羽織もしほめ好き、大鯛昆布柳樽、五色の縮緬紅真綿、附紙臺折紙臺、三荷に擔はせ、「まづ萬事首尾なつて、私まで大慶。」と昇きこめば、女房今まで夜叉の忽ちに、愛敬柔和の高笑ひ、「まあくこれはこれに夥しい、何故に留めては下されぬ。さりながら貴方も代が一度の事。皆お媒人のお世話故、これ姉、お禮申しやいの、彼の子も今朝から悦んで、待ち受けて居ましたが、恥かしいと見えました。良人の新兵衛奥に待ち受け居られます、先づあれへお通り。供の衆は端の閒へ。男共は何處へ往た、事介はうせぬか。これおまん、目を拭うて鼻でも、かめや玉よ、此の進上物持つて來い。それ茶の下

前の氣にいりの、事介がおぢやりましたよ。事介連れて御座りませ。二「いや事介は少とお寺に障す事ある。母様のいま藏に御座る間に、はやう出たい。」といふ處へ、「ア、これく、母はいま藏から出た。動く事はなるまい。」と、笠風呂敷も取つて投げ、「参らして好けりや参らする。今日は其方の嫁入の頼みの使來る筈で、此の中夫婦が用意して、餅よ杵よと世話かくが、そなたの目には見えぬか。産み落した母御前も、七歳の年まで養育、それから此の方十何年といふものは、誰が世話で其の様に、背丈伸びたと思やる。十月の宿こそかしはせね、恩比へをして見たい、本母御前から鈎を取る。地獄にやら何處にやら、見えぬ孝行せうよりも、これ鼻の先にぎろつく、此の母に孝行なら、寺も精進も取り置いて、今日にはつこり笑うて、生臭物で祝うてたも。其の代りに來年は、祖父様の二十三年忌。それと一度に荷うて、そなたの母御は十四年忌、一年でも多ければ、弔はる、佛も徳、こつちも雜作が少ない。」と、差す手引く手に算用なり。何時もごとなり親ながら、おまんもあまりこたへかね、「もう好い加減に黙らんせ。他人でさへ恩ある方親しい中は精進して、寺道場へも参るのが、まづ道さうに御座んする。腹を借つた母様の、十三年忌の墓参りが、それ程科になりますか。第一はこな様の、外間冥加もあるものと、寺へ上げるお布施も、皆こな様の志に書きつけをしました。諺なら風呂敷見さしやんせ。死んだ人への廻向は、こな様への孝行、こな様への孝行は佛への奉公、母といふ守は同

母の二役、帷子時も前垂で、上下ともに仕舞はるゝ。入相時分に膳立して、夕飯夜食を引張り、火掻がすぐに塵取、砂糖桶に柄をつけて、柄杓を終に買はれず。狗兒しいれて鼠捕らせ、盗人の用心と一疋で埒明け、冬は時々蒲團代り、欠伸もそつにせまいとて、口開きついでに念佛、精進日には糞物一つ。其の糞物の挿木の、頭の圓いを、長老の代僧で仕舞はるゝ。慈悲ある者の眞似はせず、吝嗇い者を手本に、杓子を定規に使はるゝ。正月の飾りが釣瓶繩になるやら、七月の葶鼓が壁下地になるやら、念佛講にあたれば、熬豆ついでに灸して、來月の庚申も取越したいとのつぶやき。それに奇特な如來様が欲しいとて、佛師を呼うでの好み事。右の御手に錫杖、左の御手に縛の繩、腰から下に緋の袴、御頭には烏帽子著せ、蓮華のかはりに米俵、御面めうを眞赤いに、御口をくわつと大髭。阿彌陀如來一體で、不動地藏聖德太子、惠美須大黒、閻魔王しまうて、胴の中を空洞に鑿つて、二月堂の牛王と、お伊勢様の御祓入る様にとの誂へ。佛にさへ油斷させず、責め使ふ和郎ぢやもの、衆生を責めるは道理ぢや」と、口々そしりて歸りける。琉球と家名を聞けば唐めきて、君は和國のほつとももの、おまんは千々の物思ひ、「七歳で離れた母様の、十三年忌が二度はなし、お墓へちよつと」と加賀笠に、小風呂敷には手向草、露も涙も押包み、「なう竹、大儀ながらこれ持つて、お寺まで供してたも、參つて來たい。」と言ひければ、「お袋様に問はしやんしたか、私やわめかれたら何とせう。今にお

内より下女が走り出て、「なうこれ／＼、今日は内方のおまん様へ、御祝言の頼みが来る。それで餅を搗かつしやる。臼も杵も入る程に、まあ仕舞うて歸らしやれ。今日の働き半日拂ひにせうけれど、なまなか半手間取らうより、頼みの祝ひに皆進上にさつしやれと、お内儀様の言ひ渡し。」と言ひ捨て入れば、皆々呆れて、「何と事介聞いたか、其方が出入りの旦那ぢやが、餘りな慾面。おまん様の頼みが来るなら、祝儀は上から給る筈。其の日過ぎの半手間を、貪つて何程ぢや。それに今日はおまん様、本の母御の十二年忌、茶の子一つ配る事か。おまん様がいとしい。言うても一人の娘御、彼の名の立つた源五兵衛殿とやら尋ね出し、物さへ入れれば成る事。方々首尾を繕ひ、壻に取つて世を渡いたが先づ順といふもの。定めて頼みの来る方も、大分取れる見込で、奉公分といふであらう。其のあとへ銀持つて来る男の子を養うて、また銀のつく嫁を取り、擧句に主の連合も追ひ出し、銀持つて来る亭主を入れ、悪うしたらば内との者も置き替へ、銀持つて来る奉公人、敷銀する手間取を、尋ねられうも知れまい。傳兵衛のお方どう思やる。」と、どつと笑へば、「オ、それ／＼、お蝶の父の言やる通り、一を打つて萬を知れ。琉球屋の新兵衛様といつては、お國は愚か、筑紫九箇國隠れない富限者に、餅搗く臼杵持たずに、晒白をかねる程な吝嗇坊。彼の心で餅搗きやるは不思議でないか事介。」といや臼ばかりに限らぬ。萬の物を一色で、二色三色に兼ね割らるゝ。先づ主の身から新兵衛様を押除け、父

の役にも立つたであらう。先の人^{ひと}が侍^{さむらい}ならば、其の恩^{おん}は忘れまい。」と、心^{こころ}を舍^{なく}む言^いひこなし、お蘭^{らん}は奥^{おく}より走り出^いで、「これ待ちや〜。この鼻紙^{はながみ}入^いれ鼻紙^{はながみ}、中^{なか}にお錢^{ぜに}もあるさうな。お庭^{には}に落^おちてあつたが、其方^{そなた}のであらう。持^もつて往^いきや。」と、仇^{あだ}の契^{ちぎ}りも仇^{あだ}にせず、心^{こころ}の底^{そこ}に結^{むす}び置^おく、露^{つゆ}の情^{なさけ}ぞ哀^{あは}れなる。源五兵衛^{げんべゑ}もほろりとなり、「これは如何^{いか}にも私^{わたくし}の。お志^{こころざし}は薩摩^{さつま}でも、一^し生^{しょう}忘れはいたすまい。」と、お寢間^{ねま}の方^{かた}をじろりと見て、「ほんに切麥^{きりむぎ}でさへ此^このお情^{なさけ}、こんな事^{こと}なら箸^{はし}ついでに、饅頭^{うどん}も一膳^{ぜん}食^たべましょもの、おのこり多^{おほ}い。」と 三^{さん}重^{じゆう}出^いでにけり。

中之卷

川下^{かはしも}に布搗^{ぬのつ}くあした來^きて見^みれば、かんずる夜半^{よは}の、霜^{しも}と見るもの、霜^{しも}と見る物^{もの}、椿^{つばき}々^々、谷川^{たにがは}の椿^{つばき}、編笠^{あみがさ}形^{なり}に開^{ひら}いたら好^よかる、なほ好^よかる。さつさ薩摩^{さつま}の芭蕉布^{はせをぬの}、晒^{あび}すも織^おるも上^{かみ}方で、まなびも奈良^{なら}や玉川^{たまがは}や、うぢより育^{そだ}ちなりけらし。無慙^{むざん}やな源五兵衛^{げんべゑ}、京^{きやう}も東^{あづま}も足留^{あしどま}らず、戀^{こひ}に心^{こころ}の不敵^{ふてき}なく、また故郷^{ふるさと}に立^たち歸^{かへ}り、見^みつけられたらそれまでと、おまんに命捨^{いのちす}て杵^{きね}の、浮名^{うきな}さらしの其^その日過^{ひす}ぎ、奉公^{ほうこう}人^{にん}やら手間取^{てまどり}やら、出^で入^いり仕事^{しごと}の事^{こと}介^{すけ}と名^なを替^かへ、見^みつ見^みらるゝを取^{とり}得^えにて、語^{かた}る夜^よなきぞせうことなき。晒搗^{あびしつき}の女子男共^{をんなこども}、「ヤア事^{こと}介^{すけ}今^{いま}か。銀^{かね}が出來^できたやらゆるりとやりやる、羨^{うらや}ましい。」といふ處^{ところ}へ、

を敲き、下々わめければ詮方なく、土戸の錠を明くるとひとしく、與茂太夫つつと入り、「さてこそ新参め、縛れ縊れ。」と取り廻す。源五兵衛少しも怯まず、「いや縛らるゝ科は持ちませぬ。夜前初めて拍子木役、奥とも口とも存ぜず、戸の明いてあるからはと、しかも念入れ廻る處、女子衆が見つけて、此處へうせたは曲者、夜明まで留め置いて、おとな殿へ渡すとて、錠をおろして動かせず。蚊に喰はれて居ましたが、それでも縛らばお縛りなされ。」とさもありつべしう言ひければ、三五兵衛合點して、「いかにも彼れがいふ通り、わしが兎相で錠を忘れた、其の間にお庭に来て居ました。勝手知らぬといひながら、後で知れては奥の者の通り、夜明けて此方へ渡さうと、錠下して留めました。何の別儀も無い事」と、何れも武士の一正ども、尤もらしうぞ言ひなしける。與茂太夫頑い者、「何も奥のお道具に、見えぬ物は御座らぬか、能う吟味なされたか。」「イヤ何もお道具揃うて、うさんな事は御座らぬ。」と、言へども猶顔しかめ、「汝はすかぬ奴ぢや、第一鼻が高うて合點のいかぬ面。きつと詮議の仕様はあれど、傍へさはればやかましい。これ四十平、直に大坂へ連れ下り薩摩宿へ渡して、舟に乗るまで見届け歸れ。渡した二歩の取り替へ、返して失せう。早うく。」と睨めつくる。「ハテかましいか返します。おれが鼻が高けりや、此方が睨める筈か。一步は其方の一步、鼻はおれが鼻。それ返す。」と投げ出す。三五兵衛も我が身さへ、世を忍ぶ身は詮方なく、「これ其處な者。そちも人の一大事、詞

づらしたら、こな様斬つて捨てさんすか、さりとてはつれない人。女房可愛がつたとて、ひけになるか、恥辱になるか、武士がすたるか。八年の月日は取りかやしはなるまい。」と、思ひの限り息限り、継りついて泣きければ、二人の男も理に迫り、泣くより外の事ぞなき。三五兵衛涙を押へ、「理とも非とも、これ許りは一言も返答なし。それはよし夫婦の中。源五殿への申譯、腹を切らうと申すとも、よも切らせはなされまい、すれば入らぬ化粧業。何とも違却千萬。」と、いへば源五、「これくくく、お詞の中なれども、親の敵狙ふ身は、盗みをしても許しある。何のこれしき、お心に懸けられな。さて彼の石子久彌といふ者は、唯今名波道愚と申す雲水の身となり、或時は勢州に住ひ、または濃州信州、折々は京東山、勝軍地藏の隠遁者にもなみ、詩文など作る由、草履中間の咄なり」といひければ、「有り難き御物語、御恩の上のお情。」と、悦び合ふこそ道理なれ。夜もしらくと白むころ、家のおとな磯部與茂太夫、寄親の四十平、中間四五人引連れ、路次口敲いて、「これくく林殿。お部屋の方に男の聲が聞える。錠明けさつしやれ。穿鑿いたす林殿、林殿。」とぞどよめきける。「そりや爺父めが來をつた。」と、あわて騒いで、三五兵衛は奴振る。源五兵衛は女子の真似、「先づ小まん様隠しませ。」と、蚊帳へ入るやら驅け出るやら、更に差別はなかりけり。中にも源五物巧者、「騒ぐまい、渡り奉公した御かけ、我等次第に遊ばせ。私お家に居ぬばかり、何の氣遣ひない事」と、いふ内にも戸

とは姉妹同然に、一寸側を放さぬに、如何なる事か夜に入れば、唯寢姿を隠したががり、終に側に寢た事なく、小風呂に入れば風邪引いたの、物が出来の何のとて、伽に小風呂へ入る事なく、胸へさはるも嫌がつて、兔角乳を隠したがる。よろづ起居に心をつけ、見れば見るほど男ぢやが、さては此の小まんに執心かける奴さうな。悋氣するか試しの爲と、わざと今夜彼の人を、聞へ呼うだはこれ故。されども佛に誓ひを立てた道筋は歪むまいと、暗がりに附聲して寢させたは外の者、源五兵衛殿を騙した此の詫言は幾重にも、身のあきらかな證據を」と、蚊帳打上け手を取つて、引き出すお蘭といふお櫛上げ、髪も解けて所體なく、顔を赤めて、「源五兵衛様許して下さんせ。ア、恥かし」と袖掩ふ。三五兵衛は詞なく、手持無沙汰に赤面する。源五兵衛も胸つきしが、「ちつとも苦しからぬこと。小まん様も女子、此方も女子、人間の身にかはりなし。譬へば饅飴と切麥、汁は同じ醬油。何方でもお振舞は同然なり。」とぞ和ぐる。小まん取りつき、「わつ」と泣き、「これ三五兵衛さま、泣かすに言はうと思へども、如何も涙がとめられぬ、出来た仕様ぢや御座んすまい。わたくし明暮戀ひ慕ひ、泣き悲しむを見て居ながら、能うもだまつて居られたなう。去年の春の大煩ひも、この様故といふ事は、看病なされたお前が證據。男は松女子は藤と、もとから譬へがあるけな。松の力で藤も這ふ、男頼みに女は立つ。十二の年から十九まで、人の盛りを捨て置いて、假令道を守ればこそ、若し氣が反れていた

てかまはぬ事、しかし下郎を相手にするが無念ならば、其の無念はやめて遣ろ。コリヤ音にも聞いたか、薩摩の鹿兒島、菱川源五兵衛、雀の餌程な米を取り、馬の脊骨も跨けたもの。そつちも昔は誰にもせい、當分女子で居るからは、お腰もとの林殿。女は相手にならぬといひたい者ぢやが、それも口眞似童しい。但し女敵といふ悪名。髪きつた後家女に、女敵とは無理窟ながら、これも調べて益ない事、女敵ならば女敵、如何にとしてもお手前が、親の敵に身を碎く、此處が如何も仕か、れぬ。脇差に手もかけまい。女敵討つて門出祝ひ、親の敵を討ちめされ。それとても是非抜けならば抜かうが、身が國の習ひで、抜くと鞘を敲破り、再びささず死ぬるが、これが薩摩の正銘。ときには二人討死して、親の敵久彌たつた一人の仕合。何のやくにも立たぬ事。これ御腰元、女子衆、女敵の首斬らしやんせ、サア首斬つて取らんせ。」と、人を人とも思はぬ顔、さすがに薩摩者なりけり。「いやさく、武士の喧嘩にぐめんは入らぬ。鞘割らば破れ、碎かば碎け、サア抜け。」と詰めかくる。小まん隔たり押留めて、「さては三五兵衛様かいの。此方も男といふことは、三年前から見なれども、三五兵衛様であらうとは、尤も氣のつく筈もなく、私やはまつたか是非もなや。餘の腰元は半季でも、季を重ねれば打解けて、冬は同じ夜の物、夏は同じ蚊帳の内、女子と女子の主従は、肌を合はせて寝る程に、じやれ

てんがうも言ひ慰む。それに五年の馴染といひ、おはてなされた母様の、鐵漿親にならせられ、おれ

ば夢にも知らず。四歳で母に後れ、一門の介抱にて、十四の年跡目を繼ぎ、お手前と縁を組み、迎へ
 取るべき用意の最中、毎日門に貼紙して、狂歌俳諧種々の落書を立て、家中のびさして嘲哂する。如
 何なる故と聞き合はすれば、親の敵があるといふ。弓矢八幡知らぬ事は力なし。敵石子を討ち取り、
 此の恥を清めずば、本國へ歸るまいと、譜代の下人に心を合はせ、頼みし寺と内談しめ、三五兵衛病
 死と披露し、鱈魚といふ魚をもつて火葬を欺き、十六歳で國を出で、髪を延ばし女となり、十九歳の
 九月より、今年二十三歳まで、五年の春秋附添ひ見るに、顔も知らぬ夫の爲、下尼の身となり、まさ
 まさ側そばに居るとも知らず、朝夕我に香花取り、精進廻向歎きの様子、嬉しいやら不便なやら、部屋に
 入つては泣き暮し、各乗りて聞かせて、うれしがる顔見たいとは思つたが、いや／＼本望達するまで
 と、胸むねに包んだ数々は、船車にも餘るべし。日頃にも似す今夜しも、彼の下郎を聞へ入れ、見苦しき
 態は何事ぞ。あれ體の下司奴を、三五兵衛が女敵といふも口惜しい。況んや大事の敵を討つまでは、
 無念も恥もこらへうと、心誓文立つたれども、凡人の習ひ、目の前の怒り止み難く、かう破つて出る
 からは、討ちとも無うても討たねばならぬ。一本指せばうぬめも男、サア抜け、相手にしてくれん。
 エ、奴等風情と太刀打は、武運に盡きた口惜しい。」と、はがみをなして歎きしは、道理せまつて哀れ
 なり。源五兵衛にこゝ／＼笑ひながら、「ヤレたとひ王の子息でも、今草履取するからは、下郎と言はれ

獨寢、此處で眠るも同然。そなたも往つて早う寢や。明日逢はうぞや。」といひければ、「さればいの、今日ひよんな草紙を見て、氣が騒いで寢られぬ、何時もの様に女夫事して寢ませう。今宵は此方さんお内儀にならしやんすか、但し男にならしやんすか。」「ア、何方になつても思ひの種、男とも女子とも、見立て次第。」というて居る、下心こそわりなけれ。「いやくどうでも女子が好い。實可愛らしい女房ぢや。ならば男と生まれて、貴様と一夜寢て見たい、何うもならぬ。」と懐に、手を差し入れて抱き付けば、「ヌ、ほてくろし放さんせ。女子同士寢ようより、一人寢て本の事、夢に見たのに徳がある。」と、じやれに紛らし逃げ入れれば、「わしも夢の相伴。」と、おはへてこそは三重入りにけれ。此の聲音に源五兵衛「顯はれては身の越度、お暇申す。」と驅け出づる。小まん押留め「覺悟あつてするからは、其方に難儀かけはせぬ。ハテ高が後家の身、いたづらものといはるゝまで。思案がある待つてたも。」といへども「否々、お屋敷はどうもあれ。生國薩摩は人あらため強く、我等は今にお尋ねもの。此のこと國へ聞えては、召し返されて罪科に遇ひ、一門の恥おまんが歎き。塀を乗り越え夜の中に、大津までも。」といふ處へ、林は嗜む長刀、裾端折つて捲り上げ「奴殿動くまい。」と、縁端に跳り出でたるは、狂氣とならでは見えざりけり。「ホ、ちと合點が參るまい。これ小まん、我こそ肥州熊本笹野三五兵衛。我二歳の時、親三五左衛門は武州の遊所にて、石子久彌といふ者に討たれしを、幼少なれ

女の眞似をして、九年七年辛氣を碎くも、大事を思ひ立つたる故。念願遂げず本名顯はし、小事に大事を忘れては、今までが皆うつけの沙汰、一家一門武門の名折れ、堪忍の場思案の場、だまれ／＼人や見る」と、もとの女でしやなら／＼と立ち歸る。お寢間は愈聲高く、今ぞ別れのさ、め言、エ、おましく口惜しきに、下部の持つたる拍子木あり、「ム、ウ忍男は下郎よな。たとへ望み遂けたりとも、三五兵衛が女房を下郎に盜まれ、目の女敵見遁しにならうか。日頃塗つたる艶白粉の、つやつくろひも入らばこそ。」と、裾捻ぢ上げて足頸も、人に見せじと包みたる、紅絹地袋の色に出る、腓太股いと黒く、女の爲なる緋縮緬、足纏ひごと高褰け、男の下紐顯はなる。常に嗜む紅肌も、今宵血潮の膝の皿、鐵漿壺のくろがねも、心の鋼鋪おとし、引き寄せ／＼一刀、さし櫛弁こん小枕、小微塵になれと髪かきなで、さそくを踏んで驅け出でしが、南無三寶、刀は部屋長の長手に、取りに歸るは手延びなり、無刀でかゝるは不覺なり。夜中はんじの時計の聲、心せかするばかりなり。「ハア、彼の廊下を來る人は、傍輩のおしのゆんぢや。此奴はしやべりの轉變め。見つけられては大事ぞ。」と、からけ下して前搔き合はせ、所體つくれば目の前に、元の林となら團扇、空睡こそゆたかなれ。おしのんは何の氣もつかず、「林殿、此處に何してぞ。」といへば、わざと喫驚して、「ア、何ぞいの、けうとけな。お寢間が近い嗜めや。明日は月の十五日、鐵漿つけて寢ようか、寢て待つ男もあらばこそ、氣散じな

あるうちに、はや片附けうとあつたれども、頑是なしに道を立て、十二で小癩な髪を断り、今で後家は立つれども、若い女子の可愛と思や、妻戀ふ犬猫鳥翼、蟲にも劣つて男の肌、知らずに死ぬる。今の様な咄を聞く度に罪つぐられ、當座にしやんと嫁入つて退ければ好いものを、阿呆な斟酌仕すごいて、湯の辭儀は水になる、吸うても見せず心から、煮えこじけの若後家。一字違うて名も能うにた、三五兵衛様と思つて、其方をおまんに借りたいが、なんと一夜は貸す氣か。おまんにうけやつた五重相傳、此の小まんに授けてたも。手を合はせて拜みます。サア南無阿彌陀佛々々々々々々、これなう南無阿彌陀ちや。」と身を揉みし、笑止痛はし恥かしし。源五も困り狼狽へて、「おまんが五重相傳は、丸裸で受けました。夜は蚊が喰ふ明日。」と、逃げんとすれば引留め、「氣がつかなんだ、蚊が食はう、蚊帳へおぢや。」と抱き入るゝ。否ぢや〜もお主の威光、蚊帳打明くるあをち風、有明消えて、「これこれ、これが安養極樂世界。」何國も戀の闇ぞかし。お氣に入りの林は、宵より茶の間に寝たりしが、土戸に錠を忘れしと、手燭挑けてお寢間の次、御用もやと立ち窺へば、有明消えし襖の彼方、しめやかな男の聲、「合點いかぬ、蚊の鳴く聲か、いや〜人に紛れない。」と、縁先見れば男の草履、「サア悪性に極まつた。男は何者、襖破り飛び入つて、二つ胴に斬り重ねん。」と跳り出でしが、「ア、さうでないさうでない。笹野三五兵衛とも言はる、身が、世間は病死と披露して、葬禮まで取行ひ、あらぬ

善導か法然の化身であらうと申した。又寺の旦那に濱の町といふ處、芭蕉布屋のおまんと申すは筑紫一番、和泉式部か小式部の化身と褒めた小娘。彼奴が我等を見るたびに、齋に参れば抱き付き、暮へ参れば抱き付き、滅多無性に抱き付けども、此方合點まるるにこそ、和泉式部の化身めが、此の法然の化身と相撲を望むと覺えた、投げてくれうと存じて、或時墓へ参つた處、私ははだかになり、長老様の緞子の袈裟、腰にきつとしめつけ、さア御座れとだきついた。彼方もぬからず四つ手にくみ、汗水流してくみあふとて、何やらさ、やきつぶやいて、互に因果を晒屋の、臼から杵とは此の事。まんまと法然上人が、彼方の十念授かり、初わけの五重相傳受け、四十八夜の常念佛、互に忍び忍ばれて、物三年は夜晝なし、千日の廻向まで一日懈怠も仕らず。これが知れいであるものか、沙彌が聞けば長老が聞く、兄が知れば親が知り、髪をおろさぬ其の内に、縛首打たる、沙汰。如何も國にたまられず、おまんと後の契約して、十九の年に薩摩を出で、十方世界を駆け廻り、お尋ねなれば身の上の、願以此功德氣の氣な、お咄なり。」とぞ語りける。「さても、可笑しい様で悲しい咄。其の人はおまん、おれは小まん、身に擬へて涙が醜る。國並びの事なれば、若しは聞きやつた事もある。おれは肥後の熊本、笹野三五兵衛さまといふ人と、後紐から縁組あり。無事で御座れば疾うに肥後へ嫁入する。八年前に彼のお人、病死なされた便宜あり。一門衆も親達も、杯はせず顔は見ず。方々貫人

過ぎ早夜中、蒸しくり熱う寝憎や。」と、小萬の君の夜半起き、庭にとほんと風受けて「ア、生熱や、此方が様に肥えたものは猶熱い、男持つて瘦せたいぞ。」と獨言して「これはく、土戸の錠が下りすにある。林が鹿相で忘れたか。誰ぞ来いやい。」と召す處へ、屋敷廻りの拍子木の音、月に近寄る影見れば、新參の津摩藏「ヤアこれは好い慰み。」と、つい立ち寄るも女松の影、男氣入らぬお部屋なり。新參は勝手知らず、戸の開くまゝにつつと入り、庭の隅々拍子木打ち、爪だてて蚊帳の中、好もしさうに見る間に、そつと廻つて戸を引き立て、錠さす音に膽潰し、「申し／＼まだ私が出まする。錠開けてくださいませ。」「いや／＼此處に錠はない。むざと男の來ぬ處へ來たが不祥、明日まで待ちや。」「ヤア、それでは私首がない。これ四十平殿お助け。」と、拍子木鳴らすを「エ、驚しい／＼、拍子木置いて貰はう。」と、取つて擲つて手をとつて「コレちつとも大事ない、苦にするな。おれは此處の姉娘小萬といふ者。其方は濡れゆる薩摩を出て、賤しい奉公するといふ。大名衆の標揃聞きたうも何ともない。薩摩の戀の一通り、根から葉から聞かねば、氣にか、つて夜が寝られず。ひよんな咄を聞きさいて、睡たうて眼がうづく。謙なしに咄さうか、言はねばこれぢや。」とつめらるゝ、「あ痛／＼申しませう。私は鹿兒島で菱川源五兵衛と申して、親兄共は小知を取り、我等末子の是非もなく、來迎院と申す知行寺へ後住の約束、十三の秋から豆腐、蒟蒻、念佛の外、魚類女類は口にもかけず、

中ぶくら、お駕籠は紺に香の圖なり。阿波路路兩國主、撞木靴と丸十文字、六尺は繫菱、繫けや、永樂錢の駕籠印、黒鳥の末廣は、周防長門の萩の殿、さて九州にいたつては、御紋も黒餅、圓丸鳥毛は筑前福岡の御城主、蠟燭靴と鎌槍の筑後の久留米、天目鳥毛は同國柳川、白熊のすみ袋、杉形の中締は豊前の小倉、中津の主、白分銅は豊後の杵築。萌黄羅紗の袋靴、白滑皮の裾ぶくら、銀杏の丸の駕籠の紋、肥前佐賀の御居城。大袋は同國唐津、きん切靴に銀の笠、手杵は鳥原平戸の城主、白猪の丸筒裾ぶくら、同じく筆靴、駕籠は淺葱に山道こそ、代々肥後の御國主。劔形は日向大名、十文字は對馬の縣、黒熊の片鎌は高麗までも隠れなき、大隅薩摩の御大將。其の外諸國の御大名、數も限りもあら慮外、申すも長柄の御槍標、あらまし斯く。」と述べければ、簾の内外ざわ／＼、「能う／＼云うたり申したり。扱も／＼と稍しばし、手を拍いてぞ褒めらる、〇やれ幸ひの奉公人、此の者に極めよ。」と、四十平を召し出され、「おとな殿へ申して取りかへ渡し、吉日なれば今日中に請判きはめ、今宵からお屋敷に泊らせよ。薩摩者とあるからは、この字を除けて津摩藏とお付けなさる、あれへ立つて休みませい。」「ない／＼。」と立ちければ、四十平小隅へまねぎ、「して切米は何程欲しい。」「一半季に二兩二步下され。」四十平興さまし、「それでは一年五兩か。」「いかにも／＼近年五兩取りまする。」「すれば其方は實盛ぢや。道理で女中の氣に入つた。」と、連れて入り日も三重短夜や、秋の初夜

くつくくくく、岩槻の御城主と、名乗つて出羽の米澤は、摘鳥毛の唐人笠、六尺は重釘貫、白鳥の笠鉾鞘、煤竹羅紗の袋鞘、犬鈎打つたる印こそ、庄内の主ぞと、白熊の天目鞘、これが秋田の佐竹殿、劍鉞の中締に、六尺模様はぐるくくく、御紋も車は越後の村上、黒羅紗の輪鼓鞘、同じく桔梗十文字、紺に無紋の六尺は、加賀に梅鉢百二十萬石に、續くものなし似たるものなし。御紋ばかりは越中も、似たりや似たり杜若花、花菖蒲、菖蒲皮の角十文字、白頭の大禿、これ越前家。六角の筒鞘の二本道具は若狭の小濱。劍鉞輪鼓の鈎槍素槍は、伊賀伊勢の津の御城主。花色羅紗の巾著鞘、輪違の六尺は相州小田原。兜巾頭と大身の槍は、下總國佐倉の御城主。栗色の敲鞘、筆形の中締は、江州彦根の御大將。黒熊の如意寶珠、駕籠は輪拔けに角の棒、美濃の加納のあるじなり。青貝柄に切立鞘、信濃の松代。白柄に白鞘兜巾頭、駕籠は束木丹後の宮津。裾ぶくらの對のお道具出雲の松江。駕籠の紋は丸に蔦の葉、のきませ、退けくくとつと退けくく、鳥取鳥毛大鳥毛、因幡伯耆のお國取り。播磨の同國印も似たり。姫路は赤し明石は黒し。何れも素槍の中締にて、分銅形の一對は備前の岡山。鈎槍に白獅子の棒は備中松山、駕籠の紋は丸に虎の尾、ひんと跳ねたる備後の福山。獨樂形の白鳥毛、駕籠は紺にちぎりの染め抜き、袋鞘は安藝の廣島。さてまた四國の御大名、熊の皮の投鞘は讃州高松。同じく伊豫の松山は、黒熊の唐杯に、お道具持が酔うたとき、酔うたとき、とさく土佐の高知は

「三四五六七、押せ、振つて出ませい。」在所故郷は何國にて、小姓廻しの一通り、お江戸の勝手おほえてか。供先乗打下馬前に、大名方の目標も、知るや如何に。」とありければ、一俵九州薩摩者、推参ながら古は、大小刀もさそふ水、かなはぬ濡れに身を浸し、廣い薩摩を狭められ、近い朝鮮琉球より、遠い東都は日本の地、命菜種に油の涙、掴み奉公いたしても、戀しい奴めにま一度と、江戸に三年、都に二年、公家武家方のお小姓髪、結立ては持ちませず、六十餘州の大名様、お馬標槍標、お駕籠おさへの紋印、暗に覺えて罷り在る。御奉公は縁の者、これを取得に召し置かれれば、常江戸脇城國脇まで、申せば事も長い事、先づ一國名に高き、城主様方あらまし。」と、口拍子にて連ねけり。

諸國鍵じるし

「武家繁昌の御威勢、我らが口にかけまくも、勿體なみ風治まりし、お江戸は貴賤羣集の中、御同朋を連れらるゝは、外に數なき類なき、お家のこれがしるしなり。重ねもりばの大鳥毛、對のお道具突つ立てて、お駕籠の者は裏菊の、裾にませ薩染めたるは、名にしあう州五十四郡の旗頭、旗は白旗黒羅紗の、杉形鞘に羽織著て、お駕籠昇くのはこればかり。同國若松の主ごと、誰しら河は人身の槍、駕籠の紋は松皮菱、鱗形の腰替り、白頭の振禿、二本松の城主とかや。素槍の鈎に枝垂絲、さつと枝垂れて、枝垂鳥毛の大小は、これ南部殿、津輕殿、奥大名の長道中、奴が首も投鞘に、紺に手杵をつ

甘うまい事仕り、旦那荻茶致され、詮議まち／＼麥門冬、季中に其處を追ひ出し薬、それより心に
茸荒を張り、よしや浮世は陳皮の皮、肩に木香かたけても、地黄に大根しらがまで、かくては果てじ
と、こんのだいなし薑一片、腰に一本藥研鉢、面に鍋墨髭人參、煎じ詰めたる奉公人、誓文白朮和
中散、身を粉藥に御奉公、定齋なし。」とぞ答へける。「實に氣の藥なものなれど、女中の前の長口上、
近頃天鷲絨の半襟かけた、次の男は町の風、武士の勝手は合點か。」「さてもお目利今極め、極印打つ
て私儀は、銀座に長々使はれ、駕籠乗物のはい／＼ぶき、京者の正眞、お屋敷方は新分銅、聲に鉛は
混らねど、少といき憎いと申す故、歩を引かれても奉公の、しな替へます。」といひければ、「それでは
此方に使はれぬ。未の季までは包みの儘、宿に居やや。」と笑はる。「後な奴が國所、あもと籠の赤松
を、打割り松の煙油髭、氣味好い頭のすり鉢鬢、江戸すりがらしと見えたよな。」「御意の通りに丁稚
奴は、信州木曾の山家者。でつかく冷ゆる寒國の、髭に氷柱の朝嵐、布子一つでお供先、ふろか信濃
の信濃の、ハツアつめたいな。實に雪國で、身を寒晒唐辛、天目にごき集錢酒、一兩二歩の取り替
を、春めきながら借り越して、末白雪の買ひが、り、首だけつもる借錢の、深田に馬をかけ落ちいた
し、木曾を走つて参りし。」と、いへばおの／＼打笑ひ、「左様なものを抱へては、此方に算用あはづの
原。」と、どつと興をば催しける。お庭の隅に目をもつて、碁盤格子の染帶を、骨牌結や年配も、二十

背のすらりと眉目の好い、二十餘りな女中が受け返答を召されう。林殿とて姉御様の御氣にいら。第一此の人のいひなしとはいひつ、縁次第佳合次第」といふ處に、小庭へ廻る車戸の、かけ金はつす女の聲、「これ四十平。奉公人衆揃うたら、一人づ、お庭へ廻しや」と、言ひ捨てて立ち歸る。「それ／＼彼が林殿、簾の内は姉御様、御前が近い競合はす、下馬前をして振りませい。」「ない。」と答へて振り出す、手先上りの頭八分、腰の捻りに足取りに、すつ／＼／＼、すつ／＼砂地に膝をする、花かいらぎと散る花と、ざんざめいたる掃き庭の、縁の上には腰元衆、簾に挟みしお鼻紙、姉御様ぞと奥のかし。中にも林は手を突いて、簾の中より何事か、御意なさるれば、「あい／＼。」と、お返事申して尋ねける。「これ／＼前な絲鬘の、鬘かりつけた鎌髭奴。今までは何處に居て、在所は京か田舎か。お小姓方の奉公は、髪月代におこのみあり。手覚えあるか。」と尋ねれば、「私が生國陸奥國、七つ道具の一通り、お馬の湯洗ひ伏せ起し、武家の奉公しからせば、糠味噌汁の花散りて、近年高野に相勤め、小姓廻しはいたせしが、高野六十那智八十、きんが頭の若衆にて、つひに月代刺つた事、ごはりませぬ。」と答へける。「けうとや怖や。其の様な目出度い若衆に、升かけをきり米望み次第そや。次な男は何うぞ何うぞ。」「拙者は卒の時分より、醫者衆に相勤め、町人參や香附子方の奉公は不案内。地體我等は川芎持、同じ處に當歸まで、三百草々々と季を重ね、罷り在りし傍輩の、中居にちよつと甘草の、

源五兵衛
おまん薩摩歌

上之卷

櫻咲く、彌生の鴈の出かはりに、新參の燕おきつけて、あとを濁さぬ水の面、這ひ出の蛙二合半、首にかけたか杜鵑、木々の梢も繁藏と、誰が呼子鳥草履取、一季半季の花鳥も、とかくは御縁次第なり。流行小唄も時につれ、時の昔と何處へ往く。寛文年の頃かとよ、御城本は但馬國、京の屋敷は千本通千本立ちの植込も、若葉の錦みかけから、長者町をばおしまはし、出水通りの長屋門、この大屋敷をあづかり、京江戸、御國の御用等一人に承る、御留守居平鹿の某殿にこそ、中途に奴草履取、召し置かるれど方々より、ひきを求めてめみえする。此の頃五人三人宛、毎日吟味なざるれど、好い男さへ稀なれば、少しよめなる女房の、びかしやかふるは科ならず。中間頭寄親の、四十平下見をして、ム、何れも好い奉公人衆。さて御家の若旦那、殿様よりお小姓に召出され、親旦那御同道で、唯今は御江戸に。御若年の若旦那、氣を知つた上方者を、抱へてやらんと仰せられ、小まん様と申す姉御様、お部屋のお庭へ召出され、簾越しに御覽あり、女中よつての御極め、女中多いといふ中にも、

まや。」と、しやくりあけく、聲も惜しまず泣きければ、夫も、「わつ。」と叫びいり、流涕憧る、心意氣、理せめて哀れなれ。「いつまでいうて詮もなし。はやく殺してく。」と、最期を急げば、「心得たり。」と、脇差するりと抜き放し、「サアたゞ今ぞ南無阿彌陀々々々々々。」と、いへどもさすが此の年月、いとし可愛としめてねし、肌、刃が當てられうかと、眼も眩み手も慄ひ、弱る心を引直し、取直しても猶慄ひ、突くとはすれど切先は、彼方へはづれ此方へそれ、二三度ひらめく劔の刃、「あつ。」とばかりに喉吭に、ぐつととほるが、「南無阿彌陀々々々々々、南無阿彌陀佛。」とくりとほし、くりとほす腕先も、弱るを見れば兩手を伸べ、斷末魔の四苦八苦、哀れと云ふもあまりあり。「我とても遅れうか、息は一度に引き取らん。」と、剃刀取つて喉に突き立て、柄もをれよ刃も碎けと、ゑぐりくり／＼目もくるめき、苦しむ息も曉の、知死期につれて絶え果てたり。誰が告ぐるとは曾根崎の、森の下風音に聞え取り傳へ、貴賤羣集の廻向の種、未來成佛疑ひなき、戀の手本となりにけり。

曾根崎心中 終

も、浮名は捨てじと心がけ、剃刀用意致せしが、望みの通り、一所で死ぬる此の嬉しさ。」と云ひければ、「オ、神妙頼もしし。さ程に心落ちつくからは、最期も案ずる事はなし。さりながら臨終の時の苦患にて、死姿見苦しと云はれんも口惜しし。此の兩本の連理の木に、身體をきつと結びつけ、潔う死ぬまいか。世に類なき死様の、手本とならん。」「如何にも。」と、あさましや淺葱染、かかれとてやは抱帯、兩方へ引きはりて、剃刀取つてさらりと、「帯は裂けても主さまと、私が間はよも裂けじ」と、どうど坐をくみ二重三重、揺がぬ様に確かと締め、「能う締つたか。」「オ、締めました。」と、女は夫の姿を見、男は女の體を見て、「こは情なき身の果てぞや。」と、「わつ。」と泣き入るばかりなり。「ア、歎かじ。」と徳兵衛、顔ふり上げて手を合はせ、「我幼少にて誠の父母に離れ、伯父と云ひ親方の、苦勞となりて人となり、恩も送らず此の儘に、亡き跡までも免や角と、御難儀かけん勿體なや。罪を免して下されかし。冥途にまします父母には、おつつけ御目に懸るべし、迎へ給へ。」と泣きければ、お初も同じく手を合はせ、「こな様は羨ましや、冥途の御親に逢はんとある。我が父様母様は、息災で此の世の人なれば、いつ逢ふ事の有るべきぞ。便りは此の春聞いたれど、逢うたは去年の初秋の、初が心中取沙汰の、明日は在所へ聞えなば、如何ばかりかは歎きをかけん。親達へも兄弟へも、これから此の世の暇を、せめて心が通じなば、夢にも見えてくれよかし。なつかしの母様や、名残惜しの父さ

とて、思ひ合たるる厄祟り、縁の深さのしるしかや。神や佛に懸けおきし、現世の願を今爰で、未來へ廻向し後の世も、猶しも一つ蓮ぞや。」と、つまぐる珠數の百八に、涙の玉の數添ひて、盡きせぬ哀れ盡きる道、心も空もかけくらく、風しん／＼たる曾根崎の、森にぞたどり著きにける。彼處にか此處にかと、拂へど草に散る露の、われより先に先づ消えて、定めなき世は稻妻か、それかあらぬか、「ア、怖、今のは何と云ふ物やらん。」「オ、あれこそは人魂よ。今宵死するはわれのみとこそ思ひしに、先立つ人もありしよな。誰にもせよ、死出の山の伴ひぞや。南無阿彌陀佛々々々々々々。」の聲の中、「あはれ悲しや、又こそ魂の世を去りしは。南無阿彌陀佛。」と云ひければ、女はおろかに涙ぐみ、「今宵は人の死ぬる夜かや、あさましさよ。」と涙ぐむ。男涙をはらくと流し、「二つ連れ飛ぶ人魂を、よその上と思ふかや、正しう御身とわが魂よ。」「なになう二人の魂とや。はや我々は死したる身か。」「オ、常ならば結び留め、繋ぎ留めんと歎かまし。今は最期を急ぐ身の、魂のありかを一つに住まん。道を迷ふな違ふな。」と、抱き寄せ肌を寄せ、かつはと伏して泣き居たる、二人の心ぞ不便なる。涙の絲の結び松、櫻栢の一本の相生を、連理の契りになぞらへ、露の浮身の置きどころ、「サア爰に極めん。」と、上著の帯を徳兵衛も、初も涙の染小袖、脱いでかけたる櫻栢の葉の、其の玉は、き今ぞ實に、浮世の塵を拂ふらん。初が袖より剃刀出し、「若しも道にて追手の懸り、われ／＼になるとて

夢の夢こそ哀れなれ。あれ數ふれば曉の、七つの時が六つ鳴りて、残る一つが今生の、鐘の響きの聞きをさめ、寂滅爲樂と響くなり。鐘ばかりかは草も木も、空も名残と見上ぐれば、くも心なき水の音、北斗は亘えて影映る、星の妹脊の銀河、梅田の橋を鳥鵲の、橋と契りていつまでも、我と其方は女夫星、必ずさうと縋り寄り、二人が中に降る涙、川の水嵩も増るべし。向うの二階は何屋とも、おほつかなさけ最中にて、まだ寢ぬ火影聲高く、今年の心中善し悪しの、言の葉ぐさや茂るらん。聞くに心もくれは鳥、あやなや昨日今日までも、よそに言ひしが明日よりは、我も噂の數に入り、世に謠はれん。謠はば謠へ。謠ふを聞けば、どうで女房にや持ちやさんすまい。いらぬ者ぢやと思へども、實に思へども歎けども、身も世も思ふ儘ならず。いつを今日とて今日が日まで、心ののびし夜半もなく、思はぬ色に苦しみに、どうした事の縁ぢややら、忘るゝ隙はないわいな。それにふり捨て行かうとは。遣りやしませぬぞ、手にかけて、殺して置いて行かんせな。放ち遣らじと泣きければ、「歌も多きにあの歌を、時こそあれ今宵しも、謠ふは誰そや、聞くはわれ。過ぎにし人もわれくも、一つ思ひ。」と縋りつき、聲も惜しませず泣き居たり。いつはさもあれ此の夜半は、せめて暫しは長からで、心もなつの夜のならひ、命をおはゆる鳥の聲、明けなばうしや天神の、森で死なんと手を引きて、梅田堤の小夜鳥、明日は我が身を餌食ぞや。「誠に今年は此方様も、二十五歳の厄の年、私も十九の厄年

無垢死出立、戀路の闇黒小袖、上にうちかけ差足し、二階の口よりさし覗けば、男は下家に顔出し、招きうなづき指さして、心にものをいはずれば、梯子の下に下女寝たり、釣行燈の火は明し、如何はせんと案ぜしが、櫻欄帯に扇をつけ、箱梯子の二つめより、煽ぎ消せども消えかぬる、身も手ものばしはたと消せば、梯子よりどうど落ち、行燈消えてくらがり、下女はうんと寢返りし、二人は胴をふるはして、尋ね廻る危さよ。亭主奥にて目を覺し、「今のはなんぢや。女子ども有明の火も消えた、起きて燈せ。」と起されて、下女は眠そに目をすりく、丸裸にて起き出で、「火打箱が見えぬ。」と、探り歩くを觸らじと、彼方此方へはひまつはるゝ玉かづら、くるしき闇の現なや。漸う二人手を取り合ひ、門口までそつと出で、かきがねははづせしが、車戸の音いぶかしく、明けかねし折から、下女は火打をはたくと、打つ音に紛らかし、ちやうど打てばそつと明け、かちく打てばそろく明け、合はせ合はせて身を縮め、袖と袖とをまきの戸や、虎の尾を踏む心地して、二人續いてつ、と出で、顔を見合はせ、「ア、嬉し。」と、死に行く身を悦びし、あはれさつらさ淺ましさ。跡に火打の石の火の、命の末こそ 三重短けれ。

曾根崎心中 徳兵衛道行

此の世の名残夜も名残、死に行く身を譬ふれば、あだしが原の道の霜、一足づゝに消えて行く、

と、死んで恥を雪がいでは。」と、いへば九平次ぎよつとして、「お初は何をいはるゝぞ、何の徳兵衛が死ぬるものぞ。若しまた死んだら其の跡は、おれがねんごろして遣らう、和女もおれに惚れておやけな。」と云へば、「こりや忝かろわいの。私と懇さあんすと、此方も殺すが合點か。徳様に離れて、片時も生きてるようか。そこな九平次のどうすりめ、阿呆口を叩いて、人が聞いても不審が立つ。どうで徳様一緒に死ぬる、私も一緒に死ぬるぞやいの。」と、足にて突けば縁の下には涙を流し、足を取つて押戴き、膝に抱きつき懂れ泣き、女も色に包みかね、互に物は言はねども、肝と肝とにこたへつ、濡り泣きにぞ泣き居たる、人知らぬこそ哀れなれ。九平次も氣味悪く、「相場が悪いおぢやいの。愛なよね衆はいな事で、おれらが様に銀遣ふ大盡は嫌ひさうな。あさやへよつて一杯して、ぐわらぐわら一步を撒き散らし、そしていんだら寢よからう。ア、懐が重たうて、歩きにくい。」と悪口だらけいひ散らし、喚いてこそは歸りけれ。亭主夫婦「今宵ははや火もしまへ、泊りの衆は寢せませい。初も二階へ上つて寢や、早う寢や。」と云ひければ、「そんなら旦那さま内儀様、もうお目に懸りますまい、さらばでござんす、内衆もさらばく。」と他ながら、暇乞して閨に入る、これ一生の別れとは、後にこそ知れ、氣もつかぬ愚かの心不便さよ。「それ釜の下に念を入れ、肴を鼠に引かするな。」と、みせをあけつ門さしつ、寢るより早く高懸、如何なる夢もみじか夜の、八つになるは程もなし。初は白

れ、上り口に腰打掛け、煙草引寄せ吸ひつけて、そ知らぬ顔して居たりけり。かかる所へ九平次は、悪口仲間二三人、座頭まじくらどつと來り、「ヤアよね様達寂しさに御座る。何と客に成つて遣らうかい。なんと亭主久しいの。」と、のさばりあがれば、「夫れ煙草盆お杯。」と、ありべか、りにたち騒ぐ。「イヤ酒はおきや、呑んで來た。さてはなす事がある、これの初が客、平野屋の徳兵衛めが、身が落した印判拾ひ、二貫目の質手形で騙らうとしたれども、理窟に詰つた擧句には、死なすがひな目に遇うて、一分はすたつた。向後爰らへ來るとも、油斷しやるな。皆に斯う語るのも、徳兵衛めがうせまつかい様にいふとても、必ず誠にしやるなや。寄せる事もいらぬもの。どうで野邊か飛田もの。」と、誠にやかにいひ散らす。縁の下には齒を食ひしぱり、身をふるはして腹を立つるを、初はこれを知らせじと、足の先にて押鎮め、押へ鎮めし神妙さ。亭主は久しい客の事、善し悪しの返答なく、「さらば何ぞお吸物。」と、紛らかしてぞ立ちにける。初は涙にくれながら、「然のみ利根にいはぬもの、徳様の御事、幾年馴染み心根を、明し明せし申なるが、それはくいとほけに、みぢん譯はわるうなし。頼もしだてが身のひしで、欺されさんしたもののなれども、證據なければ理も立たず。此の上は徳様も死なねばならぬしなるが、死ぬる覺悟が聞きたい。」と、獨言になぞらへて、足で問へばうちうなづき、足首取つて喉笛撫で、自害するとぞ知らせける。「オ、その筈く。いつまで生きても同じこ

酒も飲まれず氣も濟まず、しく／＼泣いて居る處へ、鄰の妓や傍輩の、ちよつと来ては「なう初様、何も聞かんせぬか。徳様は何やら譯の悪い事あつて、たんと撲たれさんしたと、聞いたが眞か。」といふもあり、「イヤわしが客様の話ちやが、蹈まれて死なんしたけな。」といふもあり、「かたりをいうて縛られて。」の「傷判してくゝられて。」のと、條な事はひとつも言はず。問ふに辛さの兒舞なり。「あ、いやもう言うて下んすな。聞けば聞くほど胸痛み、わしから先へ死にさうな。いつそ死んでのけたい。」と、泣くより外の事ぞなき。涙片手におもてを見れば、夜の編笠徳兵衛、思ひ侘びたる忍び姿、ちらと見るより飛び立つばかり、走り出でんと思へども、おうへには亭主夫婦、上口に料理人、庭では下女がやくたいの、目が繁ければさもならず。「ア、いかう氣が盡きた、門見てこう。」とそつと出で、「なうこれはどうぞいの。こな様の評判いろ／＼に聞いたゆゑ、其の氣遣ひさ／＼、狂氣の様になつて居たわいなう。」と、笠の内に顔さし入れ、聲を立てずの隠し泣き、哀れ切なき涙なり。男も涙にくれながら、「聞きやる通りのたくみなれば、いふ程おれが非に落ちる。其の内四方八方の、首尾はぐわらりと違うてくる。最早今宵は過されず、とんと覺悟を極めた。」と、さゝやけば内よりも、「世間に悪い取沙汰ある、初様内へ這入らんせ。」と、聲々に呼び入る、オウ／＼あれぢや、何も話されぬ。私が入る様にならんせ。」と、襦袢の裾に隠し入れ、はふ／＼中戸の沓脱より忍ばせて、縁の下屋にそつと入

け、彼方此方へふし轉び、「やれ九平次め畜生め。汝生けて置かうか。」と、よろほひ尋ね廻れども、逃けて行方も見えばこそ、其の儘其處にどうと坐り、大聲上げて涙を流し、「いづれもの手前も面目なし恥かしし。全く此の徳兵衛が言ひかけしたるで更になし。日頃兄弟同然に、語りし奴が事といひ、一生の恩と歎きし故、明日七日此の銀がなければ、我等も死なねばならぬ、命がはりの銀なれども、互の事と役に立ち、手形を我等が手で書かせ、印判するて其の判を、前方に落せしと町内へ披路して、却つて今の逆ねだれ、口惜しや無念やな。此の如く踏み叩かれ、男も立たず身も立たず、エ、最前に掴み付き、食ひついてなりとも死なんものを。」と、大地を叩きはがみをなし、拳を握り歎きしは、道理とも笑止とも、思ひやられて哀れなり。「ハア斯ういうても無益の事。此の徳兵衛が正直の、心の底の涼しさは、三日を過ぎず、大坂中へ申譯はして見せう。」と、後に知らる、詞の端「いづれも御苦勞かけました、御免あれ。」と一禮述べ、破れし編笠拾ひ著て、顔も傾く日影さへ、曇る涙にかきくれかきくれ、すこく歸る有様は、目もあてられぬ 三重

戀風の身に蜷川、流れては其のうつせ貝、現なき色の闇路を照らせとて、夜毎にともす燈火は、四季の螢よ雨夜の星か。夏も花見る梅田橋、旅の鄙人、地の思ひ人、心々の譯の道、知るも迷へば知らぬも通ひ、新色里と賑しし。無慙やな天満屋の、お初は内へ歸りても、今日のことのみ氣にかゝり、

十五日、鼻紙袋を落して、印判共に失うた。方々に張紙して尋ねれども知れぬゆゑ、此の月からコレ此のお町衆へもことわり、印判を替へたいやい。二十五日に落した判を、八日に捺されうか。さては其方が拾うて、手形を書いて判をすゑ、おれをねだつて銀取らうとは、謀判より大罪人。こんな事をせうよりも、盗みをせい徳兵衛、エ、首を斬らせる奴なれど、懇甲斐に許して置く、銀になるなら仕て見よ。」と、手形を顔へうちつけ、はつたと白眼む顔付は、けんによもなげにしらなくし。徳兵衛くわつと胸急いて大聲上げ、「さてたくんだりく、一杯食うたか無念やな。ハテ何とせう。此の銀をのめくと、唯おのれに取られうか。斯うたくんだ事なれば、でんどへ出てもおれが負け、腕先で取つて見せう。コリヤ平野屋の徳兵衛ぢや。男ぢやが合點か。おのれが様に、友達を騙つて倒す男ぢやない、サア来い。」と掴み付く。「ヤアしやらな丁稚あがりめ、投けてくれん。」と胸倉取り、撲ち合ひ捻ぢ合ひ敲き合ふ。お初は跣足で飛んで下り、「あれ皆様頼みます。私が見つたお人ぢやが、駕籠の衆は居やらぬか。あれ徳様ぢや。」と身をもがく、詮方なくも哀れなり。客はもとより田舎者、「怪我があつてはならぬぞ。」と、無體に駕籠に押入る。「いや先づ待つて下んせ。なう悲しや。」と泣く聲ばかり、「急げ／＼。」と一散に、駕籠を早めて歸りけり。徳兵衛は唯一人、九平次は五人連、四邊の茶屋より棒づくめ、蓮池まで追ひ出し、たれが踏むやら叩くやら、更に分ちは無かりけり。髪も解かれ帯も解

まい。氣遣ひしやるな。ヤアお初。」講初瀬も遠し難波寺、名所多き鐘の聲、つきぬや法の聲ならん。山寺の春の夕暮來て見れば、先なは、「これ九平次、ア、ふでき千萬な。身共方へは不届して、遊山どころではあるまいぞ。サア今日埒明けう。」と、手を取つて引留むれば、九平次興覺め顔になつて、「何の事ぞ徳兵衛。此の連衆は町の衆。上鹽町へ伊勢講にて唯今歸るが、酒も少し飲んで居る。利腕とつて如何する事ぞ。龜相をするな。」と笠を取れば、「イヤ此の徳兵衛は龜相はせぬ。後の月の二十八日、銀子二貫目、時貸に此の三日切りに貸したる銀、それを返せといふ事。」と、言はせも果てず九平次、かつら／＼と笑ひ、「氣が違うたか徳兵衛、我と數年語れども、一錢借つた覺えもなし。聊爾な事を言懸け、後悔するな。」と振り放せば、連れも笠をはらりと脱ぐ。徳兵衛はつと色を變へ、「言ふな／＼九平次。身が此の度の大難儀、如何もならぬ銀なれども、晦日たつた一日で身代立たぬと歎いた故、日來語るは此處らと思ひ、男づくで貸したぞよ。手形も入らぬと云うたれば、念の爲ちや判をせうと、身共に證文書かせ、お主が捺した判がある。さういふな九平次。」と、血眼になつて責めかくる。「ム、ウ何ちや。判とは何れ見たい。」「オ、見せいで置かうか。」と、懐中の鼻紙人より取り出し、「お町衆なら見知りもあらう。コリヤこれでも争ふか。」と、披いて見すれば、九平次横手を打ち、「成程判はおれが判。エ、徳兵衛、土に食ひつき死ぬるとても、こんな事は爲ぬものぢや。此の九平次は後の月の二

問屋、常々かねの取り遣りすれば、これを頼みに上つて見ても、をりしも悪う銀もなし、ひき返して在所へ行き、一在所の詫言にて、母より金を受取つたり。追つつけ返し勘定仕舞ひ、さらりと埒は明くは明く。されども大坂に置かれまい時には、如何して逢はれうぞ。たとへば骨を碎かれて、身はしやれ貝の鯉川、底の水屑とならば成れ、わが身に放れ如何せう。」と、咽び入りてぞ泣き居たる。お初も共に啣く涙、力をつけて押留め、「さてくいかい御苦勞。皆私故と存すれば、嬉し悲しう忝し。さりながら心たしかに思召せ。大坂をせかれさんしても、盗みかやきの身ではなし、如何してなりとも置く分は、私が心にあることなり。逢ふに逢はれぬ其の時は、此の世ばかりの約束か、さうした例の無いではなし。死ぬるをたかの死出の山、三途の川はせく人も、せかる、人もあるまい。」と、氣強う勇む言葉の中、涙に咽せて言ひさせり。お初重ねて、「七日というても明日の事。とても渡す銀なれば、早う戻して親方様の、機嫌をも取らんせ。」といへば、「オ、さう思うて氣が急ぐが、そなたも知つた彼の油屋の九平次が、後の月の晦日、たつた一日いる事あり。三日の朝は返さうと、一命かけて頼むにより、七日までは入らぬ銀、兄弟同事の友達の爲と思ひて、時貸に貸したるが、三日四日に便宜せず、昨日は留守で逢ひもせず。今朝尋ねうと思ひしが、明日限りに商ひの勘定も仕舞はんと、得意廻りで打過ぎたり。晚には行つて埒明けう。彼奴も男磨く奴、おれが難儀も知つて居る。如才はある

ながら、現在の叔父甥なれば、懇切にもあづかる。また身共も奉公に、これほど油断せず、商物ももじひらなな、違へた事のあらばこそ。此の頃給をせうと思ひ、堺筋で加賀一疋、旦那の名代でかひがゝる、これが一期にたつた一度、此の銀もすはと言へば、著替賣りても損かけぬ。此の正直を見て取つて、内儀の姪に二貫目つけて女夫にし、商賣させうといふ談合、去年からの事なれど、そなたといふ人持ちて、何の心が移らうぞ。取りあへもせぬ其の内に、在所の母は繼母なるが、我に隠して親方と談合極め、二貫目の銀を握つて歸られしを、此のうつそりが夢にも知らず、後の月からもやり出し、おして祝言させうとある。其處でおれもむつとして、やあら聞えぬ旦那殿、私合點いたさぬを、老母をたらした、きつけ、あんまりな成されやう。お内儀様も聞えませぬ、今まで様に様を付け、あがまへた娘御に、かねをつけて申し受け、一生女房の機嫌取り、此の徳兵衛が立つものか。嫌といふからは、死んだ親父がいきかへり、申すとあつても、否で御座ると、詞をすこす返答に、親方も立腹せられ、おれがそれも知つて居る、鯉川の天満屋の初めとやらと腐り合ひ、かゝが姪を嫌ふよな。よい此の上はもう娘はやらぬ、やらぬからは銀を立て、四月七日までにきつと立て、商ひの勘定せよ。まくり出して大坂の地は踏ませぬと怒らるゝ。それがしも男の我、オ、ソレ畏まつたと在所へ走る。又此の母といふ人が、此の世が彼の世へ反つても、握つた銀を放さばこそ。京の五條の醬油

様を廻りまし、此處で晩までひぐらしに、酒にするぢやと贅言ひて、物真似聞きにそれ其處へ。戻つて見ればむづかしい。駕籠も皆知らんした衆、やつぱり笠を被て居さんせ。それはさうぢやが此の頃は、梨も磔もうたんせぬ。氣遣ひなれど内方の、首尾を知らねば便宜もならず。丹波屋まではお百度ほど訪ぬれど、彼處へも音信がないとある。ハアたれやらがオ、それよ、座頭の大市が友達衆に聞けば、在所へ往かんしたといへども、つんと實にならず。ほんにまたあんまりな、私は如何ならうとも聞きたうもないかいの。こな様それでも濟もぞいの。私は病になるわいの、諺ならこれ此の瘡を見さんせ」と、手を取つて懐の、うちうらみたる口説き泣き、ほんの夫婦にははらじな。男も泣いて、「オ、道理々々。さりながら言うて苦にさせ、何せうぞいの。此の中おれが憂き苦勞。盆と正月其の上に、十夜お祓、煤掃を、一度にするとスうはあるまい。心の内はむしやくしやと、やみらみつちやの皮袋、銀事やら何ぢややら、譯は京へも上つて来る。能うもく徳兵衛が命は、續きの狂言にしたらば、哀れにあらうぞ」と、溜息ほつとつくばかり。「ハテ輕口の段かいの。それ程に無い事をさへ、私にはなぜに言はんせぬ。隠さんしたはわけがある、何故うちあけては下んせぬ」と、膝にもたれてさめんと、涙は延紙を浸しけり。「ハアテ泣きやんな、恨みやるな。隠すではなけれども、言うても埒の明かぬ事。さりながらおほかたまつ濟みよつたが、一部始終を聞いてたも。おれが旦那は主

草道草に、日も傾きぬ急がんと、また立ち出づる雲の脚、時雨の松の下寺町に、信心深き心光寺、悟らぬ身さへ大覺寺、さて金臺寺大蓮寺、巡りくつてこれぞはや、三十番に三津寺の、大慈大悲の頼みにて、かくる佛の御手の絲、白髪町とよ黒髪は、戀に亂る、妄執の、夢を覺さんはくらうの、此處も稻荷の神社、佛神水波のしるしとて、蕨ならべし新御靈に、拜みをさまるさしもぐさ、草のはすはな世にまじり、三十三に御身をかへ、色で導き情で教へ、戀を菩提の橋となし、渡して救ふ觀世音、誓ひは妙に有り難し。

立ち迷ふ浮名を餘所に漏らさじと、包む心の内本町、こがる、胸の平野屋に、春を重ねし雛男、一つなる口も、の酒、柳の髪もとくくと、呼ばれて粹の名取川、今は手代と埋木の、生醬油の袖したたるき、戀の奴に擔はせて、得意を廻りいく玉の、社にこそは著きにけれ、出茶屋の牀より女の聲、「ありや徳さまではないかいの、コレ徳様々々。」と手をた、けば、徳兵衛合點してうちうなづき、「コレ長藏、おれは後から往のほどに、其方は寺町の久本寺様、長久寺様、上町から屋敷方廻つて、さうして内へ往にや。徳兵衛最早戻ると言や。それ忘れずとも、安土町の紺屋へよつて錢取りやや。道頓堀へ寄りやんなや。」と、影見ゆるまで見送りく、簾をあけて、「コレお初ぢやないか。これは如何ぢや。」と、編笠を脱がんとすれば、「ア、先づやはり被て居さんせ。今日は田舎の客で、三十三番の觀音

ちやこち風ひた／＼、翅と／＼を袷の袖の、染めた模様を花かとして、肩にとまればおのづから、紋に揚羽の超泉寺、さて善導寺栗東寺、天満の札所残りなく、其方にめぐる夕立の、曇の羽衣蟬の翅の、薄き手拭あつき日に、貫く汗の玉造、稻荷の宮にまよふとの、闇はことわり御佛も、衆生の爲の親なれば、これぞ小長谷の興徳寺、四方に眺めのはてしなく、西に船路の海深く、波の淺路に消えずも通ふ、沖の潮風身に染む鶴、汝も無常の煙に咽ぶ、色にこがれて死なうなら、しんぞ此の身はなり次第、さて實に好い慶傳寺、縁に引かれて又何時か、此處にかう津の遍明院、菩提の種や上寺町の、長安寺より誓安寺、上りやすなく下りやちよこ／＼、上りつ下りつ谷町筋を、歩みならはず行きならはねば、所體くづをれア、恥かしの、もりて裳裾がはらく／＼、はつとかへるを打搔き合はせ、ゆるめし帯を引締め／＼、しめてまつはれ藤の棚、十七番に重願寺、これからいくつ生玉の、本誓寺ぞと伏し拜む、珠數に繋がん菩提寺や、はや天王寺に六時堂、七千餘卷の經堂に、經讀む鳥のときぞとて、餘所の待宵きぬ／＼も、思はで辛き鐘の聲、こん金堂に講堂や、萬燈院に燈す火は、影もかやく蠟燭の、新清水にしぼしとて、やがて休らふ逢坂の、關の清水を汲み上げつ、手に擦び上げ口すすぎ、無明の酒の酔ひさます、木々の下風ひやくくと、右の袖口左の袖へ、通る煙管に燻る火も、道のなぐさみあつからず、吹きて亂る、薄煙、空に消えてはこれもまた、行方も知らぬ相思草、人忍ぶ

曾根崎心中 / 附觀音廻り

實にや安樂世界より、今この娑婆に示現して、我等が爲の觀世音、仰ぐも高し高き屋に、登りて民の賑ひを、契りおきてし難波津や、三つづ、十と三津の里、札所々々の靈地靈佛、巡れば罪もなつの雲、熱くろしとて駕籠をはや、おりはのむ目三六の、十八九なる顔佳花、今咲き出しの初花に、笠は被すとも召さずとも、照る日の神も男神、除けて日負けはよもあらじ。頼みありける巡禮道、西國十三所にも、むかうと聞くぞ有り難き。一番に天滿の大融寺、此の御寺の名もふりし、昔の人も氣のとほるの、大臣の君が鹽釜の、浦をみやこに堀江漕ぐ、汐波舟の跡絶えず、今も弘誓の櫓拍子に、のりの玉鉾えい、大坂巡禮胸に木札の普陀落や、大江の岸に打つ波に、しらむ夜明の、鳥も二番に長福寺、空に眩き久方の、光に映る我が影の、あれく走れば走る、これく又留れば留る、振のよしあし見る如く、心もさぞや神佛、照らす鏡の神明宮、拜み巡りて法住寺、人の願ひも我が如く、誰をか戀の祈りぞと、あだの悋氣や法海寺、東はいかに大鏡寺、草の若芽も春過ぎて、遅れ咲きなる菜種や罌粟の、露にやつる、夏の蟲、おのが妻戀優しやすしや。あちへ飛びつれ、こちへ飛び連れ、あ

羅はさもあらめ。末代淫女のためしなき、五濁の曇霽れそめて、玉と欺く萩の露、宮城野をこそ拜し
 けれ。同聲念佛大空に、響き渡れる雲の上、北の方の靈魂千壽の姫をかき抱き、繼母同じく、秀光が
 妻卯の花、眼のあたり、影の如くに顯はれしは、幻ならぬ現なり、破顔微笑の聲れい／＼と、「あら
 懐かしの人々やな。我が子の破戒によつて、八大地獄を巡りしに、有り難や教信上人朝夕の廻向、唯
 き法明上人の出家成就の功德によつて、親子諸共九品の淨利に往生す。此の結縁にひかれ、繼母の
 三毒三菩提となり、卯の花までも引接す。又宮城野の造佛供養、滅罪生善の福德限りなし。還俗の眞
 光を民部殿と二人の中、實子と思ひ育ててたべ。穢土も淨土も御佛の、光の中の我なれば、常住不退
 の姿を見よ。」と、宣ふ御聲の中よりも、親子は三十二相を現じ、二人の法燈光明遍照、十方世界に
 靈香靈雲花降り下り、天人娛樂の管絃は、有り難かりける次第なり。斯くて本家に立ち歸り、大念佛
 の大檀那、大願力の大信心、大福德の大名と、代々國富み榮えけり。

や違へて餘の人にやるな。花のかの様のサテ、花のかの様の、袖に入れかしわたせかし。極樂世界へ
届けかし。とひと書いたる字態をば、高燈籠に表して無明の闇を照らすべく、しゆびのしの字のゆら
ゆらと、香爐に煙立つ風情、上る蓮の玉の臺のはん箱梯子、すんと上り詰めては日記書、血文血判の
紅の、紅葉重ねの封ぢ文に、書きたりや散らし書、猶々書にひらりと披いて、ちらりと讀んではひ
らひらく、披いて疊んできりくく、きりくくくく、くるくく巻いては繰返し、立返し打返
し、生死の郭に生まれ来て、六塵の境に迷ひ、六根の罪を作る事も、待つ戀逢ふ戀になつむ心なるべ
し。面白や、實相無漏の硯の海に、五塵六欲の浪はたたねども、隨緣眞如の筆を染めぬ日はなし。染
めぬ日はなし。筆のすさみも何故ぞ。仇なる色に心染むるゆる。心染めずば手管もあらじ、口説もし
のぼし、門立もなく、朝込もあらし吹く、花よ紅葉よ、月雪の故事も、あらよしなや。よしや吉野の
よしや吉野の杉原の、文を合はせて縷絲の、佛像と結びつくらんと。それ月支の遺龍といひし人、妙
法蓮華經卷第一乃至八の巻までの經の外題を書きたまふ。其の功德文字の數、八八六十四佛と現じ、
父の獄苦を免れしは、それは異國の名筆。これは流れの女文字、情色めくいろは假名。それも佛體具
足して、千萬無量の玉の瑠瑠、玉章の、參るといふ字を書竝べ、八葉蓮華と拜まれ給へと、心に結び
手に結ぶ、法の絲筋金色の、光後光と御佛の、御影あらたに見え給ふ。三輩九品蓮の絲の、其の曼荼

三重 紅花の春の朝、紅錦繡の山、粧ひなすと見えしも、夕の風に誘はれ、紅葉の秋の夕、黄瀬織の林色を含むといへども、朝の霜に衰ふ。松風蘿月に詞をかはす賓客も、去つて来る事なし。翠帳紅閣に枕を拉べし妹背も、何時の間にかは隔つらん。詭の飼鳥雲を戀ひ、空行く鴉は友慕ふ。人間とてもかはらめや。戀より外は友もなき、郭住居の八重葎、からまかされし憂き世話に、詞を飾る文の數、一切經にはあらねども、凡そ七千餘通りなり。今ぞ佛に供養して、救誓の船の帆にかゝり、大悲の空の天蓋と、此の差傘をさしも草、觀世紙捻の觀世音、つくる菩薩の御誓ひ、罪を助けてたび給へ、懺悔物語申すべし。そもく水揚の下前髪のなよやかに、好色の雲をかざし、初林の夜のやもじにも、終に客衆の花ちりぬ。過ぎし御見の夕顔の、露の黄香身に染みんと、我が魂に封じ文、つもり來て今一心の、蜘蛛手に罹る八つ橋や、さりととは杜若、うら紫の恨み文、くるくしやんと引結び、身よりとばかり霞ませて、今日の一座の知らせ文、明日を頼みの届け文、紋日を逢うて勤め文、千束百束文車、榻の端書空起證、昨日の誓紙今朝の夢、寢覺め憂寢に風騒ぐ、眞葛が原の紙屑の、卿言がましや神の名も、佛の御名も口馴れて、更に怖いと思はれず。罪業如何に恐ろしや。實にや一々文々、是眞佛と聞くときは、一字の文字も佛の尊容なるものを、間夫の文として引破り、まるめくして蚊遣火の、闇の油煙や消炭を、かくし忍んでかくし文、替字替名のやつし書。文がやりたや室町筋八、取り

其の御禮に内裏普請の材木、獻上いたし候。」と、悦び勇んで申しける。斯かりし處に印南の彌七郎、熊源太姉弟を搦め捕り、「御迎へに参り候。」と、御前に引つする。人々喜悅の眉をひらき、「お手柄お手柄。」主も手柄下人も手柄。百姓は國の御寶。朝廷に訴へば、願ひも三つの車の綱、神變奇瑞の善の綱、神の綱佛の綱、先綱元綱追つかけ中綱、見事能う揃た。そろた主從揃うた親子、揃うた女夫の信心も、智慧學問も身代も、上る都ぞ道廣き。

第五

摩訶陀國に邪を防ぎて祇園をかまへ、舍衛國に鬼を驅つて、竹林を建てしこそ、佛法止住の因縁なれ。されば若君は閻魔王の請により、黄泉に到り給ひし事寂聞に達し、寂感の餘り、父祖本領に拜せられ、念佛の大檀那たるべしと、地藏菩薩の御契約、時を移さず、智古の莊に伽藍を建て、教信上人廻向の導師、幼少の甥君に法明上人の號を授け、北の方、姫君の拔苦與樂、かねては又沙界の含識平等利益、靈佛靈像安置して、百福莊嚴百味の供物、大念佛を開白あり。千佛供養の御法樂、法談讀誦管絃の聲、猿樂田樂伎樂を奏し、佛の恩を讚嘆し、苦界の衆生をすゝしむれば、天熱變じて清凉地、徳勝童子の土の餅の、果報めでたき百萬石の國中が打明けて、日々夜々の參詣は市をなしける。

ば、ありつる童一同に、「我々も歸してたべ、戻してたべ」と泣き叫ぶ。「理なれども汝等は、死して程経る者共にて、灰に焼かれ土となり、歸すべき身體なし、今眞光が結縁によつて、汝等は婆婆よりも、極樂淨土の目出度き國へ追付生まれいたるべし、それまでの父母は我なるぞ。いざ疾く／＼。」と宣へば、眞光は妹に名殘惜しくも佛敎の、重き力やかる／＼と、錫杖に取付いて、行くとばかりは一心の、跡に稚き聲々の「我も行かん歸りたし、さらば／＼。」と泣叫ぶ、涙も露も吹きはらひ吹拂ひ、花も千草もちり／＼の、嵐の野邊と三重吹き返せ、かやせ／＼の鉦太鼓の、罰利生あり佛法不思議。中務、寺僧達、尋ね廻りししるしの松陰、四人の人々安閑と、膝に抱きし眞光の、魂は色身に返ると覺えて蘇生り、夢の覺めたる如くなり。中務驅け寄つて、皆々これはと名乗りあひ、嬉し泣きにぞ泣き給ふ。眞光も正氣づき、互に冥途の物語、「師の御坊の氣遣ひがり。先づ登山」といひし處に、南の方より土民ども、一様に扮裝ちて、御川木といふ幟を押立て、「播州賀古の郡主より、大内獻上の障柱の御通り。先退け／＼、先綱元綱、えいや／＼。」と引き來る。中務たまり得ず、先に立つたる莊屋が小腕、むすを取り、どうど引きする、「賀古の郡主とは、民部殿親子ならでは外になし。但しおのれらが私か、眞直に申せ。」と、太刀抜きかけてきめければ、「ア、おゆかしの御家老様、代々の御地頭の流人を歎き、總百姓が金銀を集め、主典様の流人を申し宥め、目出度く御歸國遊ばし、

滴りて、餘の子供が寄せつけず。膏藥つけて癒して欲しや。衣服もこればかりで、夜は寒うて寐ならず、何とてか母様は、妾を憎んで、此處に一人捨て置き給ふぞや。詫言して屋形へ歸してたべ。なう兄上。」と、足摺してぞ泣き給ふ。「オ、我とても離れぬの死出の道。親子兄弟一緒とは、佛にならでは叶はぬ。」と、絶り歎くぞ哀れなる。民部夫婦は怵へかね、「不便の者やいとほしや。」と、立寄りんとせし處に、俄に川水どうくと、逆巻く煙を押分けて、面は老女の荊の白髪身は六足の黒蛇の形、「憎し妬まし繼子の末、遁すまじい。」と舌を振り、鱗を立てて馳せかゝる。「情なの祖母御前の、此處まで慕ひ給ふか。」と、兄弟手を引き逃げ給ふ。繼母は怒つて邊なる童男童女を蹴散らかし、五百山旬の河原表、追廻し追戻し、追蒐け行くぞ恐ろしき。既に危く見えし處に、地藏菩薩は紫雲に乗じ、「利劍卽是彌陀號。」と、左の御手を伸べ給へば、寶珠の光明利劍となつて、繼母の上に振りかゝれば、容も縮み角砕け、「恨みは盡きじ。」といふ聲ばかり、火焰と燃えて失せにけり。菩薩美妙の御聲にて、「如何に教信。おことが堅固の道心、諸佛の感應淺からず。今より汝が十念血脈受けたる亡者は、往生疑ひあるべからず。これによつて眞光法師が命を延べ、娑婆に歸し、念佛の大檀那となすべしと我閻魔王に請合ひたり。娑婆に歸つて精舎を建て、其の身の罪を懺悔して、親兄弟をも助くべし。」と錫杖さしのべ給ひける。眞光感涙せき敢へず、「願はくは我を留めて、妹を歸して給へ。」と泣き給へ

み、岸に上りて石を積み、花を摘み、花を摘み、花を摘み、石を積んで母の爲、水を汲んで佛様の、のゝさま
幾歳、十三二重、二重ともなき川帷子の、綻び一つ縫ひ著せぬ母は何處に隠れん坊、「父よ」と呼ぶも
木隠れて、「飯食はうなう乳吞まうし」「兄よ妹。」と叫べども、此處にと應ふる弟もなく、伴ひ賺す姉も
なし。「最早娑婆へ歸りたい。悪さもせまい跳くまい。娑婆へ歸して下されなう。家へ歸つて母様に、
衣服して貰うて踊りたい。此方の家に置いて來た、かいらぎ欲しい髭欲しい。何とてか父母は、迎へ
には來給はぬ。」と、西に呼ばはり東に走り、立てたる櫓、積んだる石、打崩し引崩し、不便や親の千
代までと、撫で擦りたる裸身を、石の上に打投げく、歎き焦る、其の聲は、廣き河原に滿ち／＼て、
蚊の鳴く聲に異ならず。眞光泣く／＼彷徨ひ來て、妹の千壽の姫、これか彼かと見給へども、互に
隔生即忘の、それと知らぬぞ痛はしき。童男童女これを見て、「あれ／＼小さい長老様。笑やく／＼。
長老の首は、振上げた首で、殿様お馬、土の子は槍持、能う槍持つた。」と、聲に子供遊びのあはれさ
よ。眞光涙の隙よりも、「これ／＼なう子供衆、我も死んで來たる者、若し此の内に播磨國賀古の民部
が娘、千壽の姫といふ人あらば教へて給へ。」と呼ばはる聲に千壽の姫、朱に染りてよろ／＼と、「なう
兄上か」とよろほひ寄れば、「これが妹か、いとほしや、淺ましの姿や。」と、抱き合ひてぞ泣き給ふ。
姫は泣く／＼、「ととてもなら何故、母様と連れ立つては下されぬ。祖母様に嘯まれし傷が、痛んで血が

苦を受け、二度逢ふ事なり難し。然るに本人の汝來る上は、母が地獄の苦に代へんと、冥官の評説頻りなり。閻魔の廳に詣でなば、阿鼻獄中に落ちん事、手を返すより早かるべし。然れども叔父教信の道心、功德佛地に通じ、とゞめて娑婆に歸さん爲、これに遮り待ち受くる。又此處に賽の河原とて、童男童女の生所あり。此處ぞ我が受取りにて、子供が待たん不便さに、我は是れより歸るぞとよ。汝等も追付きたれ。繼母が害に殺されし妹にも逢はすべし。さりながら眞光法師は死したる身、其の外者共は何れも命ある身なり。冥途の者の目に見えず。賽の河原に至るとも、詞を交す事なかれ。若しも詞をかはしなば、娑婆の惡縁きづとなつて、罪業酷た重かるべし。構へて疑ふ事なかれ。」と宣ふ聲は光明の影に乗じて失せ給ふ。ありつる獄卒聲々に「呵責の時刻。」と呼ばはつて、八方に飛び去れば、山叫び谷應へ、山河草木鳴動して、常夜の闇となりけるは、恐ろしかりける次第なり。娑婆の柵斷れ果てて、歸らぬものは行く水の、賽の河原ぞ哀れなる。渺々として果てもなく、邊も知らぬ眞砂地に、初立ちもせぬいさり火や、初子這ふ子に四つ五つ、十を頭の嬰兒は、大名高家の公達も、土民貧家の手育ても、此處に來りて隔てなく、刹利も首陀もかはらざりけり。稚き癖の面嫌ひ、人臆せしも自ら、共に冥途の友達と、馴るゝ中にも無慙やな、麻疹に死したるは、勿退けられて泣き叫ぶ。中好い同士は手を引き連れて、「地藏様の御訓への佛事して遊ばん。」と、川邊に下りて橋を摘

むる。是れを見よ。」と、鐵の華表の前にやりつけ、眞光を下し置き、車を飛ばせて失せにけり。眞光法師は闇々たる冥途の旅、臘月夜の如くにて、颯々たる風腥く、身の毛も立つて怖ろしし。茫然として立ち給ふ。人々夢とも辨へず、緋り付かんとし給へば、牛頭馬頭五色の阿呆羅利跳り出て吹きかくる火が、渦まく雲煙、隔てとなつて目を暗まし、互の聲を聞く許り、涙に咽ぶぞ傷はしき。ありつる獄卒鉦刺股を提げ、眞光法師を押取巻き、取つて引上げ手玉に突き、兩手を引張り、或は大地に引伏せて、打ちつ敲いて責めさいなむ。「なう悲しや許してたべ。父よ母よ乳母よ。叔父道心のお慈悲に、念佛申して此の苦患、少しは助け下され。」と、歎き給へば宮城野は、「皆我故の罪科の、苦しみを我が身に代へ、其の子を助けたび給へ。」と、立寄れば立隔て、其の甲斐更に奈落の責め、目も當てられぬ次第なり。誠なるかな、稱我名號下至十聲の其の功德、端嚴美麗の御僧安祥と出現あり。一止止汝等。」と、稱へ給へば、獄卒頭を垂首れて、鉦を伏せてぞ敬ひける。妙なる御聲あさやかに、「我はこれ六道能化地藏菩薩摩訶薩なり。汝假にも、まことの佛を見んと誓ひし、一度の信心ある故に、所化の孝約なさん爲、これまで迎へに來りたり。汝人の虚言に誑され、街賣女色に身を觸れ、偷盜邪淫の破戒の罪、外の罪に較ぶれば、五百生に千人の父母の首を切つたるより、一度出家を落ちたる科重しとこそは説かれたり。されば其の罪障、先立つ母の身に報い、地獄々々を経廻つて今八萬四千の

か。我こそ民部よ。」宮城野。」と、走り寄つて抱き付き、よく／＼見れば眞光なり。「なうこれぞ昔の
光明丸。唯今地藏と見違へて、見殺しに致せしか。ア、いとしい事をしました。」と、肌につけ身に
觸れても、次第に身冷え骨固まり、其の甲斐更に無かりけり。浮世を捨てたる教信も、恩愛悲嘆の涙
にくれ、「さても／＼我々親子一家には、如何なる宿業あればにや。一人や二人か三人まで、出家とな
つても盡きせぬ因果、こはそも何の報いぞや。此の小僧は北の方の死骸より、出生したる忘形見
こりや小僧、此の死骸こそお事が兄、彼れは親よ。」と教へ給へば、うろ／＼と側に寄れば宮城野も、
「母と申うて下され。」と、抱き寄すれば抱かれて、涙の中にも出家とて、兄の死骸を伏し拜み、「南無
阿彌南無阿彌、南無阿彌陀。」と、十念授くる弟の愛らしさ。死んだる兄の悲しみに、人々「わつ。」
と伏し轉び、泣き沈みたる有様は、人のあはれを聞きなれし、火屋の煙の下燃えも、涙に濕るばかり
なり。時に六種震動して、行くも來るも本地の娑婆、四土不二隔ても七幕は、八大地獄と鳴神の、山
は鐵城、水は清劍、修羅の鼓、惡鬼の怒り、大地も裂くるが如くなり。氣も魂も消え果てて、天狗
道に落ちけるかと、顧みれば抱きたる眞光の死骸はなし。「あつ。」と駭く中空の、雲中に火の車、矢を
射る如く、三重飛來り、獄卒侃々たる聲を吐き、「如何に汝等たしかに聞け。眞光法師梵行を亂り、罪業
遁る、處なく、閻魔王の赦によつて、火車上に召捕つたり。さるによつて、目前に八大地獄を見せし

阿の字には朝夕の手向種、橋の露が未來には、終に百味となるぞ頼もし。南無阿彌陀、南無阿彌陀佛、南無あみだぶ、／＼彌陀頼む／＼。人は雨夜の月星なれや。雲晴れねども西、西へこそ行け。なまうだ／＼と、誰かたのまざる。誰かちかひの網にもれなん。いたはしや甥の小僧、舌もまはらぬ念佛の、鉦も撞木もほそき足、跡にさがるを引立て／＼、「飛田の墓所に時ならぬ、羣鴉の異しさよ。」と、すかして見れば、「昨日まで無き石佛の地藏尊、誰人の建立ぞ。」と廻向をなして、「ヤア此のお地藏は宙にぶらりと下つてぢや。ハアさては首く、りか南無三寶。來世も後世も鼻の先。先づ現世を助けいでは。」と、さすがを抜いて臺石に躡けあがり、「コリヤ小僧。繩切つて下すぞ。下で見事抱へるか。」といへば、「己やそれでも怖いもの。いや己やこはい。」と泣きたまふ。「エ、なんほうの亡者にも出やはうが、今から怖うてなるものか。些と叔父坊主が死人さばきを見習へ」と、しのきんを切つて吊り下せば、新發意も恥ぢしめられ、下で抱ふる奇特さよ。飛下り、膝に抱き上げ、何國の誰とも名は知らず、息をはかりに、「小坊主やあい／＼、坊さまなう／＼。」と、呼びたすくる其の聲を、餘所に吹きやる小夜嵐、風のこだまを知るべにて、宮城野夫婦は、「彼處よ此處よ。」とたづね寄り、「粗忽ながら人を呼び生け給ふ體、誰方にて候ぞ。心懸りの事ありて、尋ねまする。」とありければ、「オ、我は七墓廻る教信といふ道心。誰かは知らず小坊主が、首縊つて死んで居る。」「ヤア教信とは、さては賀古の教信

不便なる。涙の隙より宮城野は、眞光をすかし見て、「なうこれに石の地藏のお立ちぞや。此の菩薩は稚き子の、二世を守りの御誓ひ。命あらば現世の祈禱、死に失せ給はば後の世を、助け給へ。」と諸共に、息を限りに伏轉び、涙を川と堰入れて、小田の蛙も諸聲の、鳴く音は野邊に餘りけり。稚心に無慙やな、父の名残に夫婦の歎き、涙は胸につゝ、みも切れて、目にも餘りてばらゝゝ、ほろゝほろと二人が顔に落ちかゝれば、「こは夕立の名残の雨か。未だ大降の來ぬさきに、暇申していざさらば。」とて、「願以此功德平等施一切衆生。」のはかなさは、目前我が子を見殺して、知らずもわかれ立ち歸る。後に廻向の句を繼ぎて、「發菩提心往生安樂國、南無阿彌陀佛。」と、石塔蹴放し、ひらりと飛べば、十三歳の短夜や、息を引取る善の綱、此の世の夢は早覺めて、空しき空に吹く嵐、環驚く鴉の聲、あはれゝあゝあはれ、あゝゝ哀れゝゝの鴉啼き、心にかゝる横雲の、立休らひつ立戻り、立隔てたる雨雲、我が身一つはかきくれて、また五月雨とぞ 三重

鉢たゝ

巡り見る、浮世の波にくらぶれば、阿波の鳴門は磯小舟、賀古の教信叔父勤の、連道心と七墓を、夜なく分くる露の間も、亡き人送らぬ夜半とては、南無阿彌陀佛、々々々々々々、南無阿彌陀、南無といふ聲の内より霧はれて、五色の雲に乗るぞ嬉しき。南無阿彌陀、南無阿彌陀、南無阿彌陀。

かゝる涙の間に、目もくれ心もかき曇る夜の、星も光を失へり。婆娑の儼なる雨宿り、冥途の使ひ誰をかも、雨の晴間と残すべき。残さば残せ我はたゞ、此の曉を残さじと、思ふ中にも父母を、婆娑と冥途に引分けて、逢ふも嬉しく去るも憂き。絶えぬ涙のしよろ／＼川を、これぞ三途と一足に、飛田の墓にぞ著き給ふ。「此處ぞ死ぬべき處なれ。さあ死なんとは思へども、刃物とては用意もせず。淵河あるも見えわかず。首のしめ様なほ知らず。おりや如何して死なうぞ」と、獨言して泣きたまふ。「オ、それよ、人の話に聞き置きし、しゆきんの上帯くる／＼と、時や移る。」と石塔の、蓋は碎けて苦蒸せる、三重臺に攀ち上り、しるしの松の枝垂れし、梢に帯を結び下け、輪紐を喉に纏ひかけ、すはや末期と手を合はせ、既に飛ばんとし給ふ處へ、宮城野夫婦は此處彼處、尋ねあぐみて石塔の、前に悄々立萎れ、一淺ましや斯くばかり、足に任せて廻れども、尊ぬる子には逢ひもせず。またしてもまたしても火屋三昧に来る事よ。始めの程ははかいきと、心に祝ひ直せしが、思へば最早死したりと、これや佛の知らせか」と、二人は墓の臺石に、縋り伏してぞ歎かる、眞光は、宮城野の聲と聞くより恥かしさ、顔は見えねど我が子と呼ぶは、別れて久しき父の聲、お師匠よりもなう怖や。出家落ちしと恥られて、撲たれ抓られ勘當かな。怖ろしさよと息を詰め、身を堅めたるあしたのゆく、蜂や刺蟻燈蛾、野邊の蠶蚊の顔も手も、むらがり食らふ堪へがたさ、臨終病苦の斷末魔と、齒を食ひしぼるぞ

に、廻向をなすぞいとほしき。夫婦は斯くともしら露の、小萩が下を思ふにも、我が宮城野が遺瀨な
さ、俄に胸の騒ぐこそ。「今や郭に我をたづねん恐ろしや。追手かゝりて憂目に遭ひ、年限増して見世
端に、引下さるゝはまだせめて、御身の上にも首綱の、かゝる苦患の身になれと、二人の親は産付け
ぬ。如何なる業の種蒔きし。心中するのも笑はれず。」と、泣くく歩む夏草の、かもの三味行きなや
み、男心もとほくくくと、堤に黠す狐火を、「彼は我が子の人魂よ。結びとめん。」と手を引きて、
走り近寄る先に消え、後に黠すを我が寺の、「人の来るよ。」と逃けて行く。此處に黠りて此處に消え、
親は追付く子は走る。一里の野邊を此處彼處、行返る間に幾度か、袖と袖とを振合はせ、摺違ひても
茫然と、それとも知らで別れ行く。末は小橋の果敢なや。「あやなや、それよこれよ。」とて、抱付け
ば古卒堵婆。風しんくたる夏の蟲、露も涙も争ひて、いと哀れや添へぬらん。別けて今宵の身の
上へ、無常の調子聞けとてや、難波の寺の鉦の聲、高津の墓所に夕立の、雲のむらく風早み、臨終
急ぐ雨急ぐ。死に後れじと辿れども、子供の足に雨の脚、大人の足に追ひ抜けて、煙知邊に千日の、
柴も命も一時の、惜しまぬ身さへ雨宿り、生きて居る間の習ひぞや。火屋の軒にも我々は立寄る陰も
あるぞかし。いとほしや稚き身の、濡れ萎れてあるらんと、思ひやるにも夕立に、争ふ袖の血の涙、
降れば濡れじと刈麥や、袂傾け此處彼處の、木陰を求めて隠れ笠、隠れ蓑にもあらざれば、尙降り

せて、これは親のゑ、迷子よう／＼と、呼べども人は夏山の、木の葉隠れの天つ星、朧も見えぬぞ
哀れなる。

夏野の迷ひ子 四段目

迷子に迷はかされて迷ひ行く、親子の中を雲なへだてて。二番には、親につき、佛とも師匠の恩の
山寺に、名残も後夜もつき果てにけり。かりそめに三歳住む、目標の森も林も木隠れて、迷道暗き子
心よ。追はゆる親は此處、此の面彼の面の道知らず。妻は遊女の外知らず。尋ねらるゝも尋ぬるも、
何處あてどの五月闇、長夜の暗と目も暮れて、側に立つさへ見えざれば、息をはかりの時鳥、啼く聲
聲に血を吐きて、野邊の躑躅を染むると聞く。鳥の涙は借らすとも、躑躅も松も我が袖も、我が涙に
ぞ染めつべし。それを知邊と立ち寄れば、あだし煙の梅田の火屋。出家たる身は法界の、廻向をなせ
との師の教へ、忘れじものと手を合はせ、今宵最期の身の廻向、共に手向くる念佛の聲、それぞと知
らば縄り留め、抱きかゝへても行くべきに、我が子の聲とも知らばこそ、餘所に驚く世の無常、尋ぬ
る人を残し置き、先へ／＼と一筋の、道を急ぐぞあはれなる。物思ふ身の短夜を、誰がならはしの長
良川、渡し呼ぶなる風の山彦を小耳には、我を追手の呼ぶかとして、また道かへて道もなき、野原笹原
蕪原の、火葬の燃ゆる光にも、見付けられじと身を忍び、隠るゝ中にも南無阿彌陀。出家の役と童氣

師の破戒の詮議。「南無三寶。」と御堂の軒、耳を澄まして聞き居たり。中務障子を叩いて、「これ見事恥を御存じか。某に恥ぢんより何故天道を恥ぢ給はぬ。其の宮城野は都にて父民部殿を迷はせし女。御身に取つては、親を損ふ悪魔とも、又は母とも謂つつべし。母と契るは犬鷄、生きながら畜生道。佛物を盗み取り、佛の箱を剥がすとは御坊の事よ。年にも足らで遊女狂ひ、最早出家は廢つたり。佛身より血を出すは、五逆罪の惡僧よ。其の一心の不所存故、六親眷屬地獄に墮し給ふよな。當年は御母上は第三年。佛にはなり給はで、奈落到に沈め給ふかや。宮城野のゑに父上の、汗れたる名は雪ぎはせで、末代までの名を流し、未來の業を添へ給ふか。さりとは佛罰三寶の、當り果てたる親子や。」と怒りつ歎きつ口説きける。宮城野夫婦は驚きて、「扱は御子か。」「我が子よ。」と、驅出でんとはしたれども、上人に身を恥ぢて、歎き密みておはします。や、ありて師の御坊、障子の隙を覗き給へば、眞光は無かりけり。「あら不思議や。」と、戸を明くれば、何時の間にかは落ち失せけん。扇に残せし一筆を、各驚き讀みて見れば、「一人に欺され面目を失ふ。今夜の内に身を果し、親師匠の名を雪がん。後世申うてたび給へ。」と、讀みも終らず申務、寺中、「是れは。」と騷動して、「未だ夜は更けず、遠くは行かじ。多田よ山田。」と手分して、其方へ伊丹、此方へ池田、稚き者に強意見、頂禮高じて尼が崎、先づ神崎の傾城町、太鼓鉦よと薙く中に、夫婦は歎き悔みても、誰を恨みん親心、親は子のゑに迷ひは、

の引出密と明け、譜對揚の次第書、懺法廻向の祕密の書籍、上を下へ打明け探し、施す書したる金銀を、残らず取つて搔抱き、袖より漏るゝを搔きまつべ、取落せば搔き寄せて、佛前に供へたる願禮の笈摺を、廣げて金銀を押し包み、臆て頸にぞ懸けにける。抑當寺の本尊は、聖徳太子の前生、舍衛國にて作りたまひし十一面、蓮慶湛慶の兩尊諸尊、魏々たる靈地なり。闍浮檀金の金佛の、作りこめしはいづれならん。さもあれ片端割つて見んと、庫裏の大鉦提けて、中尊の御肌に丁々と打ちければ、あら不思議や、御身より血は紅と迸しり、眞光忽ち顛倒し、「うん」とばかりに絶え入りしは、顯著なりける靈地なり。上人驚き起き給へば、中務、御弟子達、「これはく」と抱き上げ、薬を含め水そそぎ、呼び助くれれば漸うと、人心地こそつきにけれ。上人額に筋を立て、「弟子を可愛くおもふこと、子は持つて知らねども、子とても斯程はあるまじき。やれ小僧め、智者になれとは教へしが、傾城買へとは教へぬぞ。唐の明解といふ僧は、地獄にて詩を作る程の學匠なれども、出家を落ちたる科によつて、八萬地獄へ落ちしと聞く。此の笈摺もおのれに著せ、刃に死したる母が爲、願禮させんと拵へ置く、施物を盗んで包めとて、拵へはせぬぞ。」とて、打斷ひ投げ付けて、大聲上げて泣き給ふ。眞光顔振上げ、中務を一目見て、「なう恥かしや堪へたも」と學問寮に走り入り、内より障子をはたと鎖し、泣くより外は音もせず。民部少輔宮城野は、郭を密かに忍び出で、門外より窺へば、眞光法

は閻浮の塵、閻浮檀金の御佛の、罰とは後に三重知られけり。別れて後の音信も、中務光秀は所々の温泉に湯治して、金創平癒せし處に、主人流人の風説、民部少輔を尋ねんと思ひ立寄り若君の、山寺住居學問に、疲れ給ふか覺束な。聞かまほししと中山寺、密かに斯くと案内す。上人急ぎ立ち出で給ひ、小病小難の挨拶もなく、「御邊に逢はでかなはぬ所、幸ひ哉」。さて眞光法師は師弟の契約切り申す、疾うく連れて歸られよ。」と、つきもなげにぞ仰せける。中務前後を知らず、「師の命とは申しながら、孤兒といひ如何なる過失か候。學問の利鈍は生質、悪あがきは子供のならひ。如何なれ盗み亂行は候はじ。別に底意ばし候か。」と、色を變へてぞ申しける。「オ、御不審はことわり。經も人に勝れし故、木像繪像は假の寫し、誠の佛を見付けよと、教へを聞き入れて、信心堅固につとめしが、なう何時の頃より神崎の遊女町、宮城野といふ傾城に通ひ初め、什物祠堂を盗み取り、今朝夜の中から出でけるが、今において歸らず。心中でも致さうかと、今日まで意見もせず。愚僧が虚言か、神崎にて尋ねられよ。」と仰せける。中務呆れ果て、「誠にこれは善惡の評議に及ばず。所詮御寺に逗留致し、事によつて討つて捨つるか、是非を極め申すべし。」「しからば一先づ此方へ。」と、上人諸共物陰に、隠れてこそは待ち給ふ。佛を見んと眞光は、口に念佛三枚肩、門前に昇き下させ、編笠脱棄て奥を見れば、師の御坊は方丈に高野、同宿一人もなかりけり。折よしと嬉しけに、枕元にさし足して、文箱

勝しょうさに、包かまず語かたらん聞きき給たまへ。我わこそ江え口ぐちの君きみの流ながれ、普ふ賢けん菩ぼ薩ざつの化け身しんなるが、衆しゆ生じやう濟うい度どの方ほう便べんに
て、假かりに遊い女にやうと生うまれたり。誠まことの形かたちを顯あはし、拜まがまれんとは思おもへども、此この儘ままにては成なり難がたし。佛ほとけは金かね
程ほど光あかりるといふ。金いん銀ぎん澤ざん山さんあるならば、我わが身みを請うけ出だし、佛ぶつ體たいと拜まがまれて見みせ申まうさん」と、いひも果はて
ぬに眞しん光くわう禮らい拜はい合が掌じやうし、「お師し匠じやう様さまの經きやう箱はこに、小こ判はんが百ひゃくも千せんもある。閻えん浮ふ檀だん金こんといふ金かねで作つくつた觀くわん音おん
本ほん尊そんの内うちに籠こめてある。是これも盜ぬすんで遣やりましよが、どうも持もつて出いでられず。夜よに入いつて門もん前ぜんまで
取とりに來きて下くだされや。そんなら早いう往いにませう、念ねん願ぐわん違ちがひ下くださるな。」と、衣ころも著きるこそ不ふ便びんなれ。「其その
疑うたがひは悪わるい事こと。佛ほとけに偽いつはりあるものか。」と、取とつて被かける編あみ笠がさの、「空くう腹はらじうないか飯いいやか。」と、愛あい
たらして表おもてまで、送おくり出いでつゝ、孝たか房ふさに斯かくと嘯さき悦よろこびて、後うしろ姿すがたを見み送おくれど、親おや子こと知しらぬ因いん果ぐわづ
く、空そら恐おそろしくや思おもひけん。跡あと振ふり返かへつて、「何なんと金かねさへ上あげれば佛ほとけを拜まがむが定ちやうかや。」「アレまだいの。
寺てら々の奉ほう加か散さん錢せんは何なんの爲ため。臨りん終じゆうに誠まことの佛ほとけを見みたいといふではないかいの。」と、いはれてほくく打うち首うな
肯いき出いでけるが、又また振ふり返かへり、「何なんと師し匠じやうの物ものを盜ぬすんでも、利よになりはしませぬか。」「オ、盜ぬすみはおろか
佛ほとけの爲ためには師し匠じやう親おやを殺ころしても、一いち念ねん彌み陀だ佛ぶつ即じやく滅めつ無む量りやう罪ざい。お經きやうは讀よますか知しらるか。」といへば、眞しん光くわう横わう
手てを打うち、「オ、それく左さ様やうぢや、盜ぬすみませう。晚ばん方がたに風ふう呂りよ敷しき持もつて取とりに來きて下くだされ。」と、勇いみて
行いくを親おや子ことも、知しらぬが佛ほとけこれは又また、知しらぬがのゑに地ぢ獄ごくの緣えん、教をしへて罪つみをつくらせて、明あ日すの命いのち

隙に宮城野とは、それと聞くより立寄りて、「愚僧こそ民部殿の弟、花二郎教信入道教信といふ者よ。さる仔細にて發心し、旅人の荷を持ち、法界の肩をやすむる願を立て、父の流人と知らずして、此の姿を御覽せよ。名乗つて父に思ひをかけ、歎きをかけん悲しさに、包む心を推量あれ。過り故の國法にて、親助からば子は殺され、子が助からば親殺されん。一人は兄、一人は親。御身の心も同然に、一人は夫、一人は舅、いづれも思ひ捨てがたし。是れより修行を替へ、一紙半錢の頭陀を貯め、金を辨へ、親兄の命を請うて見る許り。エ、代らるゝ命なら、他人さへ惜しまぬものを。兄上に逢ひ給はば、父の詞を言ひ聞かせ、短氣の心なき様に、意見してたゞ宮城野殿。兄の形見と思はれて、名残惜しや。」と絶付き、聲も惜しまず泣き給ふ。心なき人夫ども、「こりや濡坊主、癡話は今度して貰はう。時著けの宿送り、急げ〜。」と追つ立てて、引連れ行くぞ力なき。民部少輔も堪りかね、頬冠取つて捨て騙出づるを、「これ狂人、親御様弟御の今の詞を聞きながら、名乗つて誰がためなるぞ。金を辨へ歎きを申し、其の上の生死ぞや。智慧の鏡も曇りしか。なう狼狽へて下さるな。」と、涙を流し留めければ、「オ、命を繋ぐ薬はあれど、命を賣りても金はなし。懃心を盡さんより、父諸共に。」と騙出づるを、「はて氣の短い。それにこそ手懸りあり。」と、漸う宥め、其の身は亭に驅けあがり、「ヤア最前の法師様々々々。」と呼びければ、眞光は斯くとも知らず、「何事ぞ。」と立ち出づる。「これ申し、心入が殊

の主典牢輿の物見より顔差出し、涙をはら／＼と流いて、「我が子の心を盡したる、宮城野とは和御前よな。事によつて民部が行方、知る、事もあらんとは、訴人をするか恨めしや。船は擡じて死したりと、叡聞に達せし民部少輔、死んだるは偽りと名乗つて出でて、虚言者偽者と指さされ、公家武家の交はりなるべきか。親孝行の爲なれば、民部が恥はなきにもせよ、我が子の繩に懸るを見て、親の身でおめ／＼と、此の駕籠輿が出られうか。傾城なれども民部が妻、我が爲には嫁ぞかし。恩愛妹存の執著には、親を背き主を捨て、身を損ふは凡夫の習ひ、我が子許りに限るでなし。民部はおことに身を果す、和御前は夫の訴人かや、情なの老いの身や。世の中の子を持つ人、親の命にかはらせて、殺す爲とて養育し、育つる親はなきごとよ。民部がこれへ出でたりとも、嬉しいと思はばこそ、却つてながき勘當ぞ。三十に足らぬ子の命、我が七十の命を代へ、塵芥とも惜しからず。なう預りの武夫達、配所までは遙々と、生けて憂目を見せんより、道にて害したまはれかし、情あらば殺してたべし」と輿の戸叩き口説きたて、人目も恥ぢず泣き給ふ。宮城野は目もくれて、「わつ」と許りに伏轉ぶ。民部少輔は勘當の詞に恐れ名乗りもせず。親の苦しみ親の恩、心魂に染渡り、身を悶えての包み泣き、上下の遊君往來の人、實に道理なりあはれや」と、袖を絞らぬ者はなし。木石ならぬ捨非違使等、泣く泣く牢輿昇上げさせ、次の宿へと早めける。遙かのもとより教信法師、荷持の人夫に立交り、涙の

はずと、論語に書きしも理かな。よしなき口上陳べしゆゑ、今更物を思ふよな。寶の山に入りながら、咽を空しく干しける。」と、投首してぞ眩きける。斯かる處に、「流人の牢輿揚屋町へ來りし。」といふより早く眞中に昇きするさせ、「仰せ渡しある間、町人残らず遊女共、罷出でよ。」と觸れければ、「あつ。」と答へて面々の、格子の前にぞ並びける。何心なく宮城野も、表に出でて蹲ひしが、縁こそあらめ孝房と、膝を並べて肩と肩、摺合ふ許りに思はずも、互にふつと見合はせて、驚く體を包みかね、側目遣ひに持つ涙、物は言はれず心せく。身を寄せかくる袖の下、手を取りかはし憂さ辛さ、逢ふ嬉しさの數々は、十づゝ十の指先に、おもひを締めつ數へけり。預りの檢非違使大音上げ、「此の流人は播州賀古の主典といふ者なり。嫡子民部遊女に溺れ、大内造替の金子を掠め、不行跡の餘り、身は船中にて死せしと偽り行き方なし。これによつて父の主典を人質として遠流せらる。民部若し人情あらば、傳へ聞いて罷出で、官金を掠めし科を償ひ、父が命に替れよかしと、衛府の別當の内意をうけ、扱こそ斯くは下知する。」と、言ひも敢へぬに孝房飛んで出づるを、宮城野は引留めく押鎖め、さあらぬ體にてつと出で、「我等こそ民部様の御身を亂せし、都九條の宮城野と申す遊女。今の仰せに不審の候。金をさへ辨へば、親子助かり給ふ事か、又金子を辨へても、親子の中に一人は、是非に命を取らるゝか。其の様子にて民部様、行方の知れまい物ならず、聞きましたい。」と言ひければ、父

より配符が廻つた。町衆御出でなされませ。」と觸れ廻れば、年寄行事出合はせ、「何事やらん」と立騒ぐ。「これ」差紙の面、宿送りの流人あり。人夫二十人出すべしとの書付、方々雇ひまはせども、今日の事にて、今一人不足致し、僅か尼が崎までを一貫の一步のと、足元を見濟ます。」といへば、「よし一貫が二貫でも、公用は背かれじ。」といふを聞付け民部少輔、これは見事な働きと「申し、私即ち尼が崎が駕籠の者、戻りがけの事、人が一貫取るならば、八百で参りましよ。さりながら旅籠に外れ、腹中が物さびしうて働かれず。した、めさせて下されうか。」といへば、「オ、飯でも酒でも其處らは、又町方とは違うたり。それ」早う。」と持つて来る。つい出来合ひといふ分が、太夫客の膳部にて、二汁五菜の壺平皿、尾頭付きの大焼物、味は昔にかはらめや。肴の顔も見忘れて、鯛は近づき久しけり。犬も歩けば防風の、刺身のけんによもない仕合と、悦び箸を取る處へ、町の番太が、「ア、これ待つたく。賀古の教信といふ道心、此の邊に徘徊し、報謝の爲に檀も取らず、旅人の荷物を持ち、人の肩を休むる修業者。所の爲になるならば、唯雇はれて参らんと申す。彼の者やめになされ。」といへば、「それは珍重八百のきほひ。それ膳上げよ。」と、取らんとするを、「先づお待ちなされ。据つた膳を手もつけず、餘り本意なく残念なり。其の義ならば私も、價取らずに振舞ばかり、口の上で参らん。」と引留むるを挽放し、膳を上げて入りければ、「はつ。」と、いうて力を落し、「物食ふ時んば物言

事のお首尾の程、宿への御合力、皆々来い。」と勇むれば、出入の封閣下男、鴉婦のまきは醉散らし、
「大々盡が取れたり。」と、笑ふ顔を亭主が見て、「これ申し法師様、奥に佛があるしるし、二王が迎へ
に出られた。」と、噪ぎどよめき囃立て、奥の二階に三重 移り行く。人間不定の世の習ひ、民部少輔孝
房は、古乗りし三枚も、身は一枚の夏衣、一重木綿の空色に、立つ雲介と息杖の、生きたる甲斐も涙
川、船引く者に雇はれつ、或は徒荷田の草の、露の命を繋ぎしが、宮城野は此の里にと、聞くより一
寸餘所ながら、面影ばかり見てゆかうか。いや／＼我は難風にて死失せたると言上す、京の揚屋の不
首尾もあり、如何はせんと迷ひの辻、よしやま、よの一足より、善悪千里の虎の尾を、踏む心地して
顔隠し、揚屋町をぞ通りける。實に此の處の習ひにて、深き男の方よりも、幟兜を送るとは、奪り
詰めたといふ心か。ム、聞えたく／＼義理を取りたる紋處、色と情の名を取つて、此の界ばかりが三蓋
菱、幾夜も／＼揚羽の蝶、かはるまじとの念力の、矢筈の的に三星や、賤の絲卷繰りかへし、通へ千
夜の櫻唐花、藤や立花桐牡丹、五つ輪違ひ三つ巴、丁子にほふ黛を、誰が八の字に入子菱、龜甲
鳩酸草毬鉢、鳳凰の丸扇の丸、手をつくしてぞ染めなせり。「エ、口惜しや、われ古の我ならば、宮
城野が幟をば、長さ五丈幅二丈、中將姫に誂へて、蓮の絲にて織らすべきに、一尺五寸の手拭さへ、
買ひ兼ねる此の身代、巾著の 凧、思へば無念千萬なり。」斯かる處へ郭の町代あわたしく、上上の宿

てあつかひ、「ム、怖い事いふ坊様ぢや、天魔の魅入れか怖ろし。」と、ソツと立つて逃入れば、聲を上けて、「これ申し、佛の慈悲と申さぬか、一目拜まれましませなう。假し叶はずば此の人に。」と、花紫に取付けば、「あれ坊様の勿體ない。」と、これも振切り逃入つたり。淀川、吾妻や、綱代木も、外して奥に入りければ、「わつ。」と許りに聲を上げ、「五百生の骨を粉に碎き、報恩の焼香に焚盡しても、一度の佛に逢ふ事成り難しと、師匠の教へは是れなるか。」と、足摺りしてぞ泣叫ぶ。誠の佛と思ひ込む、愚かさ哀れに殊勝なり。宮城野は涙を浮べ、「皆々人の偽りぞや。西行法師は昔の智者、江口の君は佛の化身。憂きふし辛き流れの身、煩惱迷ひに責められて、罪障深き我々が、地獄とは見ゆるとも、佛と見えん様はなし。お師匠様へ聞えては、御爲も悪しからん、歸らせ給へ。」と、賺してもたらしても聞分けなく、「イヤ抱れて寝ても、極樂の内まで入らうと申すまじ。つい帯解いて、門口から覗かせて下され。」と、人目も分かず泣き口説く。亭主聲を荒らけ、「これ御坊、金も持たいで傾城狂ひがなるものか、重ねて金を持つておぢや。はやノ、歸りや。」と威しける。法師聞きもあへず、「如何にも金は持つて来た。又黄金でも白銀でも、入り次第盗んでやらん。先づこれ取れ。」と、一步小判四五拾兩、ばらばらと投出す。亭主ぎよつと驚きて、「これはさて、我等が目には此の小判、如來と拜まれ奉る。太夫様達頼みます。間夫というては大人氣なし、客というては糟氣なし、齋坊呼んだと思召し、一夜別

我等は元武士の子、三歳にて乳母が懐離れしより、女子と寝た事なけれども、免も角も致さんが、抱れて寝れば後生になるか、菩提の種か。」と問懸けられ、園原もをかしさに、「オ、後生ともく。傾城の懐は極樂安養淨土に表し、牀に入るは極樂の樂門に入る心ぞ。」と、戯れを誠の稚心、五體を投けて感歎し、「扱こそ佛に妄語なし。人のいひしも誠ぞや。今は何をか包むべき、我等は只今父もな母もなし、兩親の爲に中山寺にて髮剃し、名は眞光と申す者。師の御坊の仰せには、木像繪像は假の寫し、誠の佛にあらざるぞ。學問勤めて一心に、誠の佛を見付けざれば、父母は助からずと、深く教へ給ふ故、天道に願をかけ、誠の佛を見せ給へと、明暮祈りの驗にや、或人の申せしは、昔の西行法師こそ、誠の菩薩を見んと思はば、江口の君を見よとある、夢想をうけ給ひしかば、江口の君といふ傾城、忽ち普賢菩薩と顯はれ、白象に打乗り、西の空に入り給ふ。汝も其の如く、神崎江口の格子を見よ、佛とも菩薩とも拜まれんとの教へに任せ、折々寺を忍び出で、格子々々を拜めども、阿彌陀とも觀音とも、見ゆる人は一人もなし。ア、情なや、父母のこれでは浮み給ふまじと、泣いてすごすご立歸り、教へし人に斯くといへば、唯は申々拜まれじ、傾城買うていとしがれ、如來と見えんと教へしが、有り難や只今の物語に疑ひ晴れ、懐の極樂生如來を拜みつけ、二人の親をも佛にせん。嬉し嬉し。サア早う抱いて寢て下され。」と、衣脱ぎ捨て帶解きて、悦び勇むぞ哀れなる。園原も持

お馴染なくばどうぞ又、遣手衆も氣が注かぬ。」と、頭を搔いていひければ、「ア、さればいな。豫て左様に承る。如何せんと思ひし處に、此の頃可笑しい事ありて、行方も知らず名も知らぬ美しい小坊主が、格子まで折々見え、幟もくれんと約束し、變つた咄があるわいな。」といふ折からに横丁より、十二三なる小法師の、紋紗の衣に紅の袖裏、編笠深く顔忍び、亭を瞰上げ、しく／＼と衣の袖を顔にあて、思入りてぞ泣き居たる。「なう唯今言ひしは彼の子の事。」といへば、一座も不審を立て、「出家といひ稚き身で、戀のあらん様もなし。」と、長立出でて、「これ小坊さま、折々格子に見えると聞く。殊に今の涙の體。尋ぬる人ばし御座るか。」といへば、法師涙を押し拭ひ、「ム、其方は傾城賣る人か。彼の宮城野といふ傾城を、俺に負けてたもらぬか。此の頃さい／＼値切れども、坊主には賣らぬとある。それで幟を約束した。これ此方の寺の靈寶徽宗皇帝の鷹の繪、此の懸物を幟にして、其の代りには宮城野を一つ負けて下され。」と、手を合はすれば亭主を始め、鴉婦秃手をたゞき、「さても變つた大盡。」と、一度に哄とぞ笑ひしが、中にも園原あはれがり、「いづれも御覽せ。童氣に大事の寶物盗み出し、女郎に逢ひたいとや。さりながら宮城野様が叶はず外でも大事ないか。」とあれば、「ア、忝し有難し、此方なりとも買ひませう。賣つて下され頼みます。」と、手を摩り頭を下け口説くにぞ、「然らば直に牀取つて、抱いて寝るが合點か。」法師不思議な顔付にて、「ム、傾城買うて抱れて寝ねば叶はぬか。

艘ぶね様。身代みしろよしの粹すま大盡だいじん、心のきれたさばき手ての、鴛うづりて婦たんとに澤山たんとも物ものくれる、好よい客きやく様さまを千人せんじんほど、つけまして下くださんせ、頼たのみます。」とぞ申しける。神崎かみざき一番いちばんの大揚屋おほあひや、懸作かげうくりの長ちやう、表おもてまで迎むかへに出いで、「これは宮城野様、此この里さとへお下くだりと言ことふより早く、度々たびぐよ呼びに進しんずれども、太夫たいふ様さまは殊ことの外客ほかきやくの御吟味ごぎんみなさるゝとて、一度いちども御出おいで下くだされぬは、少ちとお恨うらみに存ぞんぜしに、不思議ふしぎの今日けふの御出おいでは、三千年さんせんねんに花はな咲さく天竺てんぢくのうどんの粉こな、のこくくくく辛からの粉こな、のこくくくく娘むすめの子こ、これはかたじけ有あり馬ま山やま、猪名いなの小徑せびの粽ちまきの節句せつく、祝いはひません。」と、伴ともなひ座敷ざしきに通とほりけり。宮城野みやぎのは猶物なほもの思おもひ「誠まことに數かずならぬ此この身みをば、御持おんもて囉はやしは嬉うれしけれども、御聞おきき及びおよびもあるべきが、賀古川かこがわ民部みんぶ様さまと申まうす御方おんかたと郭くわくわは愚おろか、京田舎きやうのゑはびこるほどの浮名うきな立ち、おいとしや大名だいみやうの國郡くにこほりをも失うしなひて、生いきた死しんだも知しれぬ様に、成なり行ゆき給たまふも我等われら故ゆゑ。それに如何いかに勤つとめとて、此この神崎かみざきまで賣流うりながされ、繁昌はんちやうの全盛ぜんせいのと言ことはれて譯わけの立たつべきか。揚屋あひやの道みちも忘わすれる程ほどすたつてこそは宮城野みやぎのなれ、とは言いひながら、親方おつかたの難儀なんぎを思おもへば節句せつくしも、内うちに居眠いねがり居ゐる時は、茨いばらの筵じしろに居ゐる如ごとし。思おもへば佞わびしき此この勤つとめ、それに染そまりて馴なるればこそ、憂うれき身みを常つねと暮くらせし。」と、涙なみだにむせぶ其その風情ふぜい、園原そのはらの吾妻づまわ若わか紫むらさき、一家いっけの遊君いうくん諸もろ共どもに、皆みな々々袖そでをぞしほりける。亭主ていしゆも共に涙なみだぐみ、「お道理どうりく。ヤアそれにつき餘所よその郭くわくに御座おんざなき事こと、此こ處こゝの慣ならひにて、五月きつぎ菖蒲あやめの節句せつくには、深ふかいお客きやくのお方かたより、幟のぼり兜かぶとを御進上ごしんじやう。宮城野みやぎの様の節句せつく始はじめ、

の臺の花の露、南無といつばこれ歸命、阿彌陀といつば此の行。此の義を以ての故にこそ、即ち此處も唯心の、淨土と聞けば己心の彌陀、南無阿彌陀佛と十念も、おりて里へぞ歸りける。

第三

河舟をとめて逢ふ瀬の波枕、揚けて逢ふ夜のさし枕。假へさすとも、障りありとも、押して行こやれ神崎の、神崎の、町は歌仙が右左、以上三十六格子、揚屋の數は十二軒、四季に名高く都をも、下に瞰下す鷹金屋、冬には雪と結綿屋、春咲き初むる梅鉢屋、今は五月の押並べて軒の菖蒲や蓬蒿く、端午の禮の初袷、今日ぞ郭の衣更へ、夏來にけらし染めけらし、模様は京と難波津の、なかを取つたる小袷の袍に、思ひふかせてすらしりと歩みつれ、一家々々の花盡し、戀の早苗もうら若き、若衆が身装禿松、深い餘りの口説文、淺きを招く届け文、心きかせてそこくの、風を見合はす引舟や、揚屋々々の門に立ち、幟甲に長刀や、鴉婦が腰の鍵までも、今朝の祝儀の口明けと、笑ひ賑ひの、めけり。中に無慙や宮城野は、京の亡八の年の中、又此の郭に賣渡され、再び此處の新艘と、好い事がましや面目も、涙まじりの道中は、さすが名に負ふ流れとは、水際立つて知られたり。鴉婦のまきは大聲を、揚屋の門から高笑ひ、「これは宮城野様とて、元は京の太夫様、跡の卯月八日から此方の新

ひやりつ、御弟子達、衣の袖をぞ絞らるゝ。花二郎教信は親の敵病死と聞き、實否を正し極めんと、門前に走り著き、斯くと案内請ひければ、幽霊は恥かしげに、「それぞ妾が小姑よ。」と、隠るゝ體をちらりと見て、會釋もなくつと入り、小腕取つて、「これ腰抜けの表裏者。汝を誠の武士と思ひ、身の孝心に引當て、親を助けし義理を忘れ、病死と偽り葬禮をまなび、此の妾は何事ぞ。おのれ如き卑怯者に、義理も瓢箪も入らばこそ。サア葬禮は仕舞うたり。直に土へ切込まん。」と、討つて掛れば上人御弟子縫付き、「詳しく仔細は知らねども、友風病死に極まりて葬送の刻、賀古川の北の方悪人に害せられ、其の魂假に宿つて、愚僧に願ひの仔細あり。前代未聞の不思議なり、必ず粗忽なざるゝな。」と、始終を語り給へども、花二郎得心せず。「それは我等が兄嫁、末世にさることあるべきや。其處退き給へ。」と討つてかゝれば、幽霊涙の下よりも、「なうさのみ疑ひ給ふなよ。妾こそ替るとも、聲は聞き知り給ふべし。其の證見給へ。」と、襟を開いて乳を搾り、「疑ひ晴れて我が子を助け、跡弔ひてたび給へ。」と、いふ聲ばかり、魂は去るよと見えて、亡骸は花の枯木と伏しにけり。「はつ。」とばかりに花二郎、言語を絶し感ぜしが、「誠に思へば一日に、親の敵と嫂と、譬と情の無常を見る。これぞ出離の知識ぞ。」と、抜いたる刀を取直し、髻切つて教信の、文字を其の儘教信法師と戒名し、「此の嬰兒は甥の殿、我が手に育て叔父甥の、連同心。」と抱上ぐれば、上人も合掌の、十の蓮花や九つの、花

しつ寵愛は、不思議とも亦哀れなり。上人御手を拍ち給ひ、「さては賀古川の一族かや。昨日の暮程、賀古川の執權中務と申す仁、光明丸を連れ来り、愚僧を師匠と頼みし故、即ち子弟の契約し、夜前髪をも剃せし。」と語り給へば、「なに若は此のお寺にとや。法師顔を見せて給べ。中務よ秀光よ。」と、奥へ入るを、「これく、其の中務といふ人は、北の方を尋ねるとて、直に寺を出でたるぞ。又新發意との對面も、御身誠の姿ならず、此の世に住む身でもなし。稚き者に歎きをかけ、菩提心の妨げ、御身も迷ひの種ぞかし。今客殿に臥してあり。餘所ながら御覽せ。」と、遣戸を細目に開け給へば、痛はしや光明丸、牀を枕に剃立て法師、疲れ寐入りし味氣なさ。「あれは我が子が不便や。」と、「わつ。」と叫び入りけるが、「ア、いたくしの寐姿や。生まれ落ちての昨日まで、お乳が手にさへかけさせず、母が抱添ひ寝させしに、此の山寺に唯一人、見すほらしけに悄然と、頭つむじに風のしみくと、口数立つ程父母を、慕ひ歎かん可愛さよ。」と、伏ふし沈みてぞ歎かる、「ア、いとほしや、母は魂許りでも、餘所ながら寐顔を見る。御身が母を見る事は、今生にては叶はぬぞ。やれ夢には見えぬか物を言へ。出家成就學問して、母が成佛自在を得ば、又來る世には、又親子と必ず生まれあふべきぞ。なう上人様、彼の子は未だ瘡瘡せず、殊に初の子ひわづ者、齟齬して息災に、介抱頼み參らす。名殘惜しの我が子や。」と、五體を擲ち身を悶え、聲を限りの悲歎の涙。世に絆しなき上人も、恩愛親子愛別離苦、思

くべきものを、はかなき親子の契りや。」と、泣けば産兒も聞入れてや、「わつ。」と叫ぶを播り賺し、のりすかしては我も亦、共に涙の中山寺、辿り行くこそあはれなれ。御寺の門にイみて、「此の世を去りし者候。上人様に逢はせて給べ。」と、頻りに叩き呼ばはれば、待設けたる寺僧達、「そりや葬禮よ。」と用意して、眞如上人大衣を著し、門を開かせ出で給へば、友風の死姿嬰兒を抱き立ちたる體、「わつ。」と許りに御弟子達、「なう怖や南無阿彌陀、阿彌陀様地藏様、助けて下され幽靈さま。」と、顫ひまはるぞ道理なる。上人掌を合はせて、「淺ましや友風、無数の煩惱は雪を削る、摺屑五蘊離散して極檀の煙に伴ふ。色心の當體皆是阿彌陀佛。」と示し給へば、差俯伏き、涙をはらくと流して、「いや友風にては候はず。恥かしながら自らは、播州加古の主典が嫡子、民部少輔が妻候。繼母といひ、姑のさかしき瞋恚の牙にかゝり、稚き女は食殺され、妾も共に死ぬべきを、兄の若がいとほしさ、又は此の子を産まんため、痛手も重き身を持ちて、此處まで落延びしに、悪人に見付られ、身は寸断々々に魂も、宿る方なく斬割かれ、體を離れし嬰兒の、犬狼の餌食にや、餘りの事の悲しさに、上人様を頼まん爲、男の體を假初にも、女の魂罪深く、此の亡者友風の往生の妨げ、妾が業は彌増しの、罪障思ひやられたり。さりながら我が身は三途に迷ふとも、此の子が行方を上人様、偏に頼み奉る。淺まし親子の態、憐み給へ。」と泣き叫び、乳房をしほれば悦びて、口に嘔むを搔撫でて、泣いつ賺

を便りにて、あこがれ出づる母上の、魂は青柳の青き火焰と、傳ひのほるを嬰兒の、目には母ぞと泣き慕ふ。母は思ひに寄れば消え、退けば燃えつ、あこがる、柳の絲の力なき、親子の中ぞ痛はしき。既に夜半の鐘、鏡鉢、友風の葬送とて、親類下人鄰家の人々、心ざしある野邊の供。光明遍照の天蓋は、十方世界の雲に覆ひ、念佛衆生の幡の脚、攝取不捨の風に靡かせ、欲生我國の提灯に、不取正覺の輿を照らして、中山寺へと送りしは、宛ら安養寶國に、生まれつべしと頼もしく、心意も澄める折柄に、山風頻りに梢を鳴らし、河瀬の音は參々として、輿盤石を擔ふが如く、後へも前へも動かす。供の面々身の毛を立て、怖れ戰慄き立ちたる處に、北の方の魂の火焰は、鳥の飛ぶが如く、輿に入るかと見えけるが、棺榭搖ぎ鳴動して、棺を四方へ打破り、亡者顯はれ出でたりけり。「わつ。」といふより輿身役人、幡天蓋も投棄てて、皆散りくゞにぞ迷失せける。いたはしや北の方、友風が骸を假に此の世に立歸り、柳に縋りし嬰兒を、手繰り寄せつゝ抱上げ、暫し涙にくれけるが、「世上の産の習ひにて、子は生まれて母は死し、子は死して母生きたる例はあれど、御身と我は如何なる因縁因果にや。かく淺まし産養ひ、誕生は佛に似て餓鬼道の孤兒かや。母が肌には付けずとも、お乳乳母にも抱かれず、行方も知らぬ男の死人の骸を借り。」抱けばさすが魂は、親子と知つたしるしにや。冷えちぎつたる亡者の肌、母と思つて抱きつく。「ア、命あるならば母が誠の肌につけ、慍ぶ初聲聞

悦び飛んで出でけるは、傍若無人と謂つべし。友風今は堪りかね、「以前彼等が恥ぢしめし怱怱隠忍ばれず。花二郎が恨みを受けば受け、のめく生けては置かれず。手槍越せ。」と杖に突き、蹠蹠ひ聲をかけ、「返せく盗人奴等、遣らぬく。」と勇めども、長病ひに足立たず。「エ、口惜しいな無念や、臍が動かぬ。」と、彼方へよろく、此方へたじく、蹈挫いては膝摺剥き、起上つては脛を揉み、心許りは早瀬川、急来る痰火に息切れて、仰向に反つて絶えくの、今を最後と見えけるが、「エ、腕きは人の命ぞや。義理も仁義も腕立も、病には勝たれぬかや。残念なり花二郎、斯くと知らば最前に、一太刀合はず真似をして、本望遂げさすべかりしを、武夫の義を重んじて、頼む者をも匿まはず、武士の命を徒らに、病に死する本意なやな。諸佛菩薩の力にて、我が死する我が壽命、残れる親に授けてたべ。南無阿彌陀佛。」の一聲に、此の世の息は絶えてけり。下女下人驅付けて、呼び助け呼び助け、藥様々用るれども、其の甲斐更に亡骸を、抱きて奥に入相の、鐘に散りゆく花よりも、腕きは諸行無常の嵐、烈しき世には三重とまらぬ。水行末は鳴小川、北の方の亡骸は井堰に流しかけられて、血汐に染むる柵は、流れもあへぬ紅葉葉と、哀れはかなき風情なり。痛はしや子を思ふ、恩愛九輪の川波に、生死五蘊の泡消えず、胎内の嬰兒は、肋の疵を出身の、門とたのみて産聲上げ、誕生あるこそ不思議なれ。死骸に取付き乳房を尋ね、泣き叫べば口に入る。水分柳枝垂れて、浸す梢

人、山陰森の樹陰より、「一人も餘すな。」と、一度に突いて懸りしは、潮の涌くが如くなり。痛はしや北の方、「憐れ今までは、何卒都へ落上り、若を祖父御の手に渡し、自らも安々と胎内の子を悦ばんと憂目を逃れ落延びし、其の甲斐も情なや。なう中務。人手に掛るも口惜しし。胎内の嬰兒諸共に妾を害し、光明丸を出家にし、佛の契約立てたべ。」と、聲を上げてぞ泣き給ふ。「ア、お心安かれ。若君をお供し追手を切抜け、何方へも落延び、御出家なさせ申すべし。奥様は是れに御隠れあり。敵散つても候はば、都父御の御方へ落ちさせ給へ。」と、花見が捨てし筵取り被せ忍ばせて、寄せ来る追手を弓手に受け、馬手に支へて切拂へば、若君も甲斐々々しく、中務に引つ添うて大勢に切り結び、追返し追戻し、籠の岡邊に三重追うて行く。此の音に友風は、下人共に手を引かれ、這々垣に取付いて見送れば、二人の者大勢に取巻かれ、今を最期の有様なり。「ハアア、不便や危し。南無三寶、我花二郎と契約なくば、最前匿まひくれんずもの。人に預る此の命でなくば、此の病でも一方の助太刀してやらん物を、命が二つ欲しさや。」と、拳を握り齒を鳴らし、身を顫はしたる許りなり。熊源太が弟虎平次取つて返し、「女が見えぬ。」と眩きて、本草を分けて探せしが、筵の下を怪しげに引除くれば、北の方、「わつ。」と魂きり手を合はせ、「身二つになるまでの命をくれよ。」と、泣給ふを引寄せて、肋骨三刀四刀刺通し、返す刀に笛の鎖寸断々々に切散らし、死骸は遙かの谷川へ、「えいやつ。」と投込んで、

る命、大事にかけて養生し、潔く勝負せん。」「ム、嬉しし頼もしし、醫者をも代へて養生し、本復して討果さん。たとへ討つとも討たる、とも、親孝行の手向の勝負、莞爾と笑うて死ぬ。」「死なん。」

「風にあたるな身を冷すな。人参入らば言越せ。」さらば。」「さらば。」と別れける、所存の程こそ頼みなき。早暮渡る山陰の、中務秀光は我が身に數箇所の創を蒙り、懷妊の北の方、殊に臨月惱みの上に、光明丸を相具して、淡路方へと落ちけるが、先々追手隙間もなく、又都路に行く月の、熊源太が追手の者、驀地になつて追掛けたり。秀光今は詮方なく、浪人めきたる一構へ、屈竟と中務、走り寄つて案内し、「近頃龜忽千萬ながら、仔細あつて斯くの如く創を負うたる我々、追手厳しく逃れがたなき仕合。某追手を防ぐ間、足弱を暫しが程、影を隠し給はれかし。頼み入る。」とぞ申しける。友風牀の内ながら、「御覽のとほり病中、殊更故障の事あつて、かつはお爲も如何なり。御宿は叶ふまじ。」と、情なげにぞ答へける。中務無興氣に、「怵惕惴隱は仁の端。頼まぬとても侍の、斯かる哀れを見るに忍び給はんや。御身に難儀は懸け申さじ。是非に暫しの御憐愍、頼み申す。」といひければ、「ハテ頼みる、程ならば、難儀を顧みるべきか。某は敵持ち、討果す約束にて、人より預る大事の命。若し過つては一分たたず。後れたりとて笑はば笑へ、ふツつと叶ひ申さぬ。」と、戸を閉てさせてぞ臥しにける。「エ、よしなき腰抜け、頼みか、つて隙費し、何國へ落ちん。」といふ處へ、熊源太が追手の者數十

り。實父は養父の公事相手、正しく所領の敵なれども、我には聊か如才なく、猶憐みをかけらるゝ。我も亦乳房より膝懐を汗したる、養育慈愛の高恩は、誠の親にも代へ難し。此の報恩に厭足らず、父に隠して某こそ、高梨吉内左衛門友重と假名をし、討たれて父を助けん爲、徘徊したる其の内に、斯かる大病引受けて、唯今にも相果てなば、跡にて父が討たれんかと、いよ／＼病募りしに、今日御邊に出逢ふ事、討手より尙討たれ手の、某が身の幸ひ。御邊は誠の親への孝、我は養ひ親への孝、實子と養子と變れども、子といふ文字は同じ事。孝子の心を思ひ知り、父を助けて某を、疾く／＼討つて給はらば、生々世々に忘れじと、涙に咽び頼むにぞ、岩木にあらぬ花二郎、「痛はしや哀れなり。心底察し入るからは、望みをかなへ申すべし。御分は生きたる親への孝。我は親の顔も見ず、羨まし身のの上や」と、悲歎の涙にくれけるが、飛退り涙を拭ひ、「禮儀はこれまで親の敵參る。」といへば、「心得たり。」と、首を伏せて待ちたりしが、又花二郎頭を振つて、「暫く／＼。御分が望みを叶ふからは、此方も望みあり。腕も叶はぬ病人を討つては死人も同然なり。養生加へ快氣を得て、一太刀合はせられぬか。」といへば、「ハテ渡し置いたる一命、如何様とも勝手次第。さりながら若し此の分にて病死せば、跡にて父を討つまじきか。」「ア、いふにや及ぶ。正八幡も照覽あれ。御邊を除けて外に討つべき敵はなし。但し病死するならば、早速に注進せよ。随分養生頼む。」といへば、「何が扱其方より預

時宗は祐信が子となつて、曾我の名字を継ぎけれども、父の河津の敵は討つ。我もそれによも負けじと、無念さと口惜しさ、胸に徹り骨に染み、恨みの刀一太刀と、狙ふ心の走り過ぎ、無禮の至り御免あり、勝負を遂げてたべかし。」と、落涙してぞ語る。友重もや、涙ぐみ、「いはれを聞いて笑止や候。斯く孝行の心ざし承らば、疾づくに討たれ心を休め申さんものを。和殿は一生親知らず。我は生まれて三十年、今日まで親に添うたれば、思ひ置く事更になし。打つて本望遂げられよ。」と、首差延べて待居たり。花二郎肩を撃め、「これ友重、今の詞は心得ず。御分は生まれて三十年、父は討たれて二十一年。よも十歳にて討ちはせじ。仔細を聞かん。」といひければ、友重はつと思ふ景色にて、「オ、武士の子の七歳八歳にて、高名するは珍らしからず。よし十歳にも百にもせよ、中納言を手にかけて親の敵は外になし。由なき猶豫をせんよりも、はやく討て。」とぞ申しける。花二郎猶も承引なく、「いや如何に言うても御邊敵と思はれず、人違ひさせ、後代に恥かかせんとの底意かや。とても情に、本意を包まず明してたべ。」と、手を合はすれば涙をうかめ、「わりなくも問ひ給ふ。今は何をか包むべき。中納言殿を手を掛けし誠の吉内左衛門友重とは我等が父、今北國に逼塞す。某は一子政太郎友風とて、元來我は養子なり。實の親と養ひ親と、遠親類の其の中に、所領の論の候ひしが、中納言殿國司の時、非分の判きに知行を失ひ、其の恨みに因つて養父吉内左衛門が闇討に討つて立退きた

花見の貴賤幕の内、さて聞き事や面白し。變つた祭文あるならば、所望々々。」と喚きしに、彼の男
等脱ぎ棄て裾端折りて大音上げ、「これ／＼御邊は高梨吉内左衛門友重よな。我こそ先年其方が闇打に
せし坊門の中納言資雄が一子。親の敵覺悟ぞあらん。サア抜合つて勝負せよ。一寸も退かせじ。」と、
間近く寄つて詰めかくれば、「すは敵討ぞ。」と聲々に、幕辨當を踏散らし、羣集の騷動夥し。吉内左衛
門起上り、「オ、坊門の中納言殿を手にかけてし友重は我なるぞ。左右に敵を持ち乍ら、名字も變へず人
目も忍ばず、羣集の庭に面を晒す某が、何しに卑怯の働きあらん。殊に病中手足も立たず。何ぞ見
苦しく立ちはだかつて、遁さぬ遣らぬと無禮の舉動。弓馬の法を知らざるか。哀れ討手の來れかし。
見事に死して名を揚げんと、待つたる事の仇となり、汝等如き武骨人に此の首は惜しけれど、サア取
らする、寄つて討て。さりながら坊門中納言殿には、子も兄弟もなかつしが、定めて己は下人よな。
何故真直に名乗らぬ。」と、はつたと睨んで叱りける。實にこれは過つたりと、褰を下し手を束ね、「心
ざしの過分さや。御不審晴らし申すべし。某は中納言が妾腹に宿りしが、討たれし節は胎内にて父に
別れ、母にて候者、某を身に持ちながら、播州賀古の主典に身を任せ、彼の方にて誕生し、賀古の花
二郎教信と名乗り、父の主典が養育にて、誠の父のあるとも知らず年月を送りしに、不慮にかくと承
り、頻りに親の懐かしさ、寐ても寤めても忘れず。勿體なや恩深き今の親まで煩くなる。昔の祐成

の國に至つては、難波のきしに跡たれて、住吉四社の花神樂。和歌を守りの宗匠とて、西行櫻色深き、小町櫻も老いぬれば、身は百歳の姥櫻。若木櫻の足駄の笛に、寄來る／＼鹿も寄り來る。縹交ぜ緋交ぜ櫻結びの花かつら、繫ぎ留めん普賢象。普賢は流れの身を守り、ふはと打乗る雲井櫻にしつたんとん、たん／＼丹後に馴染ひ切戸の文殊垪じ給ひて兒櫻、これ佛神の御方便、猛き熊谷櫻さへ、墨染櫻諸共に、到り到らん彼の岸の、彼岸櫻は有り難く、説くや御法の庭櫻。熊野は三つの御山にて、新宮、本宮、同じく那智の瀧櫻。尾張に熱田の御社は、異國の美人と名に高き、楊貴妃櫻を勸請ある。近江國には、唐崎志賀の山櫻。また北國には、立山白山泰山府君。武藏に神田江戸櫻。湯島はたのもの天神より、まだ御鎮座は遅櫻。又櫻田の大明神。奥州に至つては松島六社、鹽釜櫻の大明神。總じて日本國中に、八百萬の枝社、讀むとも盡きぬ眞砂櫻の數々は、粟三石の米櫻、勸請申し枝下し奉る。そもそれ神すゝしめの、宮仕の左近の櫻が烏帽子櫻を傾けて、乙女櫻の小忌衣、肌白無垢淺葱櫻に樺櫻、櫻重の袖翻し、さかて櫻に白木綿襪、引掛けつつかけ、花の木陰を蔽ひ淨め奉れば、悪鬼悪魔もすつきりきり／＼、きりがやつ。來るまじきは天けんにては緋櫻や、又煩惱の大櫻。悪事災難ただりん／＼、そもそこ祟りをなすとも、唯今の御方便の功力を以て、繁昌の御酒宴。とぞ諂ひける。

に所領の争論、先年國司の裁許暗く、重代の領地に離れ、引籠り居し柴の戸も、吹荒したる花に風、咳氣の咳の何時の間に、鬱氣の病日に増り、今を限りと衰へて、頼み少くなりけるが、花より先も知らぬ身の、せめて此の世の名残とて、介抱の女の童、一僕に手を引かれて、木陰に僅かの牀を設け、往來の花見に暫しが程、氣を養うたる春の野や、幕に立ちたる歌比久尼、舞まひ物真似さま／＼の、賑ふ中に纏等被て、錫杖ふり、「櫻盡しの歌祭文、一錢。」とこそ申しけれ。看病の下女隸僕、「お氣晴らしの御養生、一ツ唄や。」といひければ、「あつ。」といふより扇を開き、口覆ひしてぞ諍ひける。

櫻 祭 文

「そもく敬つて花を眺め奉る。上は梵天山櫻、下は次第に咲く櫻、忝くも此の國の、開き初めたる初櫻、伊弉諾伊弉册二もの、連理の櫻靡合ひ、天の橋板、櫻板、薄き契りの子櫻の、三歳足立ち給はねば、天の岩樟釣舟に、下すや釣の絲櫻、釣つた姿の櫻鯛、蛭子素齋鳴八雲起つ、出雲八重垣八重櫻、さては／＼く神明伊勢櫻。天の窟戸は大日の、朝日櫻や月讀の有明櫻、雨もいや風もいや、淺間の嶽の宮居より、見ゆるぞ富士の雪櫻。都の地には、先づ玉城の地主の櫻に、稻荷祇園の薄櫻、一重櫻をお手に手に／＼、手毬櫻の一枝は、折つて手向の賀茂糺。北野は連歌の花の本。嵯峨に櫻葉大明神。毘沙門天の遷ります、鞍馬の山の雲珠櫻。正月一の虎の尾櫻、これこそ花の御縁日。さて津

霹靂、天地も崩る、三重ばかりなり。蜘蛛は空にて若君を、呑まんくと働けども、凌ぎかねたる刃の光、半身の須磨藏が、變化に優る不思議の力、蜘蛛の真中刺し通しく、弱る處を腕切落し、若君を搔抱き、八重たつ雲をくるくく、くるりくと舞下り、大地へ撞とをちこちの、變化は亡び失せければ、須磨藏が半身は若君を下し置き、さも嬉しけに死顔も、眠れる花とぞ萎みける。北の方中務、煎つたる種の生ひ出でて、石に花咲く拾ひ物、蘇生りたる若君の、悦びに猶姫君のいたいけ盛りの花は散りて歸らぬ憂き涙、落行く夜半も深手は負ひぬ。目もくれなるに暗き夜の、足はたどく身はよろくと、互に呼續ぎ呼びかはす、聲を知邊の千鳥啼く、淡路の方へと落ちにける。

第二

花の盛りは冬至より百五十日、又は彼岸の後七日などとはいへど、立春より七十五日、大様は違はずと、斯かる事にも氣を付けて、見付け書付け留めにし、智者の目鏡を違へては、田舎花とて京吉野奈良や初瀬の名木の、笑はば嘸や花の名も、惜しや牡鹿の津の國の、櫻塚こそ盛りなれ。太平の世の民草の、女子勝なる花鳥の、天も色にや酔うたとさ。酔ひても抜かず切らぬこそ、治まる御代の銘の物、價千金の春べかな。此處に當所の隠士、高梨吉内左衛門友重は、播州揖保の住なりしが、一門中

君を失ひしも、繼母姉弟よな。化物ならばおんぞろか。縦へ誠の人間にても、手練を見よ。」と、太刀差翳し討つてか、れば、北の方も長刀構へ、「我が子の敵餘さじ。」と、討つてか、れば、變化の繼母、唯陽炎の如くなり。秀光は病中なり、北の方は女業。熊源太が大勢を、腕一つにて防ぎかね、數箇所の痛手を受けながら、此處に支へ彼處に堪へ、龍虎に優る熊源太、二三度表へ驅散らし、火水になれとぞ戦ひける。時に繼母は光、丸を引摺み、梢々に絲線懸け、虚空に飛ばんともがきしは、危かりける振舞なり。斯かりし處へ須磨藏は、縛られながら驅付けて、「南無三寶。」ともがけども、高手の繩の強くして、爲べき様もあらざれば、「ヤアおのれ食ひ付いて留めん。」と、くるりくと大庭を、彼方此方へ追廻し、追詰めて繼母の弱腰しつかと咬へ、齒骨も切れよと引いたりけり。繼母は命を遁れんと、足踏みしめて前へ引く。とゞろくとどくとどくと、遣つつ戻しつ、遁れつ留めつ、白洲を蹴立てて引合ひしが、熊源太取つて返し、須磨藏が胸中を縛繩の結目をかけ、ばらりすと切下けた。腰より下は落ちながら、念力胸に生留まつて、繩は切れたり手を伸ばし、若君の指添扶持ち、突留めんと繼母を左手に摺んで振合ひける。時に秀光、北の方、よろほひ來つて熊源太を追散らし、繼母に打つて懸りしが、忽ち悪風黒雲覆ひ、七尺餘りの蜘蛛と變じ、猶若君を放しもやらす。胸半分の須磨藏が念力は死にもせず、繼付くを事ともせず、虚空に千筋の絲を張り、雲をわけて攀上れば、電光撃して

唄うた、其の喉吭に飛付きて、牙を立ててぞ食ひ締めける。「なう悲しや。」と力を出し、引けどもく放ればこそ。牙は肉を貫いて、血は瀧津瀬と流れける。何事ならんと北の方、長刀提け走り出で、「物の魅入れか浅ましや。」と、石突起延べて、丁々打ち給へば、打たれてかつばと落ちけるが、忽ち屋鳴り鳴動して、鼎の如き蜘蛛となり、軒を翺り長押を走り、喚き渡るぞ凄まじき。頭の外れに長刀の切先を打込まれ、はふく逃延び繼母の局、壁を穿つて其の儘に、形は失せてなかりけり。北の方は卯の花が傷をいたはり給へども、毒蟲に急所を食はれ、終に敢なく絶入りけり。繼母は額を切り下けられ、廊下桁縁踏躡かし、大聲あけて、「ヤア嫁御前。如何に繼しい中とても、姑は親ならずや。長刀持つて追廻し、額に創を能うつけた。長刀は遣はねど、劔まさりの齒を持つた。食ひ付いてのけたいな。熊源太は何處にある。あれ引出して討つて捨て。をりあへ出合へ。」と喚きしは、五月の雨の山川に、堤の切れたる如くなり。「心得たり。」と熊源太、家中一味の端武士、雲霞の如く馳集まり、「北の方も若君も、一所に討て。」と誓きける。今は斯うよと北の方、長刀取りのべ戦ひ給へど、大勢に女の力叶はねば、既に危く見えし處へ、中務秀光病中の枕の刀、一文字に殺到し、真中に驅隔て大音上げて、「ヤア不審なり熊源太。唯今屋形の騒動は、御屋敷に化物棲んで、小姫君を食殺し、我が女房も相果てしと、聞くや否や驅善けしに、案の外に方々が、北の方、若君を害せんと取巻くは、オ、扱は姫

いたいけ盛りの花の顔、頭を口に押込めば、口耳際まできれあがり、肩も腕も一口に、血を吸ひ呑んだる其の勢ひ。いたはしや姫君は、足を縮め苦しみしは、目も當てられぬ風情なり。渾身半分胴中まで、呑むには程もあらばこそ。股より膝口爪先も、のこさず終にぐつと呑み、腹は毬とぞ脹つたりける。光明丸は氣も付かず、花に見入つておはせしが、振返つて「あれなう千壽の姫は、祖母御前に喰殺された」と叫び給へば、忽ち姫の姿と變じ、「エ、兄様何を騒がしい。祖母様は先刻にはや、お部屋へ歸つて寢してぢや。いざ此の花でま、事して遊ぶまいか」と、花に戯れ引寄り、隙もがな若君を、取つて呑まんと眼をつけて、唯後方へと立廻る。眼の光左右の牙、人間ならぬ顔色を、見つけば命も絶えぬべし。それとは知らねど若君も、慄と身の毛も立上り、逃げんとすれば、「兄様。」と、おはへ纏れて追蒐くる。猶怖ろしく詮方なく、小太刀を抜いて拂はるゝ。されども怖るゝ氣色なく、颯と外し、ひらりと飛び、宛ら飛鳥の如くにて、「あれ兄様の」と喚く聲、中務が女房卯の花、周章て驚き走り出で、大刀奪ひ取つて、「これ若君様、又御兄妹争ひか。殿様は無し、中務は病氣なり。構ひ人ないとてあんまりな。怪我ばしあつてよいものか。いとしほなけに小姫様、此方へく。」と抱き上げ、機嫌を取つて賺しける。お乳や乳人のくせとして、昔に子を負ひ寝させて置いて、「いんの子ノ」とのたもなめなかけそ。此處な子は幾歳、十三七つ。七つになる子がいたいけな事いうた。殿が欲し。」と

輩鷹も傍輩。此の有様は何事ぞ。エ、口惜しや是非もなや。おのれ等姉弟はびこつて、民部様の御座
子殺され給はんおいとしや。奥様は何處にぞ。光明 丸様若君様、なう姫君様姫様。」と呼ばはり引か
れ出でけるは、無慚なりけり。痛はしや兄弟の人々は、「あれ須磨藏が聲として、我々を呼ぶわいの。
嬉しや父の御歸り。」と、兄弟表に驅出でて、「ヤレ須磨藏よ。父上は何國にぞ。何故に隠れ給ふぞ。」と
あらぬ隈々隅々を、尋ね廻れどあらばこそ。「なう悲しや千壽の姫。御身や我が明暮に、父を呼ぶのを
面白がり、茶道坊主の珍齋めが、欺して呼んだものさうな。侍の子といふ者は、返らぬ事をくよく
よと、泣けば人が笑ふぞや。我も泣くまいな泣きやんな。」と涙を隠し妹を、笑ひ顔して慰めしは、
穏順しやかに哀れなり。奥より繼母は、色々の花折持ちて、「なう孫達。餘所の子供は親よりも、祖母
を慕うて抱かるゝ。如何なれば和御前達は、祖父祖母同じ事なれど、主典殿には抱かれても、祖母が
膝へは寄付かず。孫を持つたも名許りで、いたいけらしい顔も見ず。愛憐の者や可愛者。サア誰なり
と此處へ来て、祖母様いと抱付いたら、此の花やらう。」と招かるゝ。若も、「何時なき祖母様の御
機嫌よし。」と悦べば、姫は膝に騙上り、「祖母様いと。」と、首筋に抱付いてあまえしは、危かりける
次第なり。繼母莞爾笑顔して、「オ、能う抱かれた出来いたな。とてもものに衣裳脱いで、祖母がほ、
に抱かん。」と、我も大肌ずんと脱ぎ、千壽の姫の帯解き、衣引剥いで裸身を、兩手に取つて差上げ、

誰をか親の泣寄りに、誠の母は悪人の、身の行末も覺束なし。」と、かこち出づるぞ道理なる。斯かる處に、門前に轡の音頼りなり。須磨藏はつと身を隠せば、繼母の弟熊源太、供人引具し來りしが、馬上よりきつと見て、「ヤア汝は須磨藏か。難風に吹き流され、民部少輔諸共に、行方知らずと披露せしが、偽るな下郎め、閑牒を入れて聞きたるぞ。民部少輔は遊女に溺れ御普請料を掠めばし、身の置き處なき儘に、難風に失せしと偽り、飄落したると聞きけるが、疑ひもなく合力受けに來りしな。それ懐を探して見よ。妻子の方か中務へ、文のあるに極まつたり、それ／＼。」と下知すれば、郎等共兩方より懐へ手を入る、悪しかりなんと振放し、「男たる身のいき懐へ、ほでをさすとは何事。」と、言捨て逃ぐるを熊源太、元首押へて、「ヤア身が言付くるに推參者。はや／＼探せ。」と武者振付く。今は斯うよと文取出し、すん／＼に引裂きて、口に入れてぞ嚙んだりける。「すは顯はれし擲めよ。」と、取付くところを取つては投げ／＼、足に縄れば蹴散らかし、腰を抱けば振放し、前にかゝるを踏み倒し、拳を堅め、寄付く者の眞甲打つて打廻し、此處を先途とはけみしが、大勢に組付かれ、脇指もがれ大童、散々に踏伏せられ、難なく繩にかゝりしは、無念なりける次第なり。「なほ拷問して問ふ事あり。牢に入れよ。」と引立つれば、須磨藏眼に角を立て、「身のほど知らずの業人め。鶏犬の類まで餌を飼ふ者には従ふぞや。所領を申受くるからは、民部様は主ならずや。斯ういふ我も御扶持人。犬も傍

念の絆の絲慕ひ参り候。」と、いひも敢へぬに花二郎「南無三寶。」と横手を打ち、「エ、淺ましや恥かしや。大悪心の母故に、北の方、光明丸に不慮の難儀出で來なば、兄民部殿に疑はれ、世間ともに言譯たたず。所詮存命へ益もなし。是れまでなり。」と、腰刀するりと抜き、既に自害と見えし處を、須磨藏縫つて、「暫くく。これ申し御心底は至極ながら天晴大事の御命。御身に取つては討たて叶はぬ親の敵の御座候。御存じなきは御道理。それを如何にと申すに、もと母君は都人、坊門の中納言といふ公家方に宮仕へ、其の時に懷妊ありし。これ殿は公家の御子ぞや。未だ胎内にまします時分、實父中納言殿、國司として當國へ御下り、諸人の訴へ聞召す中に、非道の判きの恨みによつて、御父中納言殿は闇討に討たれ給ふ。それより母御は、此の屋形へ御入りあつて奥に立ち、これにて誕生ありし故、賀古川の二男とはなり給ふ。とても死なんす命ならば、誠の親の敵を尋ね、刺違へんとは思さぬか。エ、臍甲斐なき御所存。」と、様々制し教訓す。花二郎手を合はせ、「能くも知らせし有り難さよ。今の親の名字を繼ぎ、養育の恩深けれども、誠の親の敵を持つて、討たぬは畜類同然たり。命限りに狙ひ付け、討つての後は立歸り、名字の親に孝行なさん。敵の假名實名は、申務が知つたらん。病氣によつて私宅にあり。直に立越え相談して、時を移さず打立たん。命あらば兄上にも、對面せんと申してくれよ。淺ましや今までは、一つ胤ぞと思ひしに、親と頼むも他人なり、兄といふも他人なり。

留めて、これ須磨藏。如何に秘する事なりとて、兄の身の上弟の聞かぬ事やある。是非に仔細を語れ語れ」とありければ、「アッアこれは過つたり、御物語仕らん。必ず他言遊ばすな」と小聲になつてぞ語りける。「されば貴きも卑しきも、色に傾く世の習ひ、君は此の度公用の御休息の夕な、都九條の遊女町、宮城野とまうす傾城を、人に誘はれ二三度は、一座流れの御遊び、四度馴染めば五つめは、はや睦ましき彌増り、先からとんと上り坂、戀の峠を打越して、引くに引かれぬ義理づくも、後は互の誠なしに、身を任するを御不便がり、それが嵩じて憐れがり、後は苦勞を引受けて、御身のひといきつきて、通ひくづをれ給ひし程に、はや金銀の矢種も盡き、武家の聞え、大内の御用も闕ける郭に急く。京の外聞國の恥、御切腹と候ひしを、某が計らひにて、御内衆へも知らせばこそ。難風を幸ひにさる浦方に漕著けて、海人の苦屋の御住居、餘所の藻汐の煙さへ、此方に立たぬ朝夕を、執權中務に密かに語り、合力受け歸れとの仰せにて、忍び参り候なり。申すも便なき仕合。」と、今更袖をぞ絞りける。花二郎聞き給ひ、「御痛はしや。さりながらそれ程の御艱難中務までもなし。一人の弟なり。など我等には知らせもなき。腹異りの隔てかや。曲もなき御心。」と恨み給へば、「いやく御繼母とて隔て給ふは御尤も。夜前某雲が洞を通りしに、母君一人さも怖ろしき装扮にて、繼子繼嫁係をも殺し、實子に實督繼がせて給べと、調伏の願立てに、悪神の験にや、忽ち山荒れ御繼母の、一

嫁二人の孫を食殺し、死骸を神の御供となし、我が子を家督に立て給はば、四季に四度の人身御供、供へ祭り奉らん。目前利生を見せ給へ。」と、枯木を叩き岩を踏み、跳り上つて祈りしは、身の毛も慄立つ許りなり。聞くもいぶせく恐怖ろしく、そゞろ顫うて立つたりしが、俄に山谷震動して、山風吹上け吹下し、雲霧覆ひ、咫尺も見えぬ洞の内より、火焰を吐きて七尺餘りの蜘蛛の形、千筋の絲を繰懸け繰懸け、顯はれ出づるぞ怖ろしき。織母を捉つて引纏ひ、六足伸べて引攔めば、「あれよく。」と泣き叫び、逃げんとすれど動かさず、たゞ一口にこそ呑んだりけれ。聲ばかりして姿は見えず。刀抜きかけ居たりしが、ありつる蜘蛛は忽ちに、織母と化して行く月の、影もほのかに晴れてけり。さもあれ彼奴が行く先を、尾行て見んと身を密め、遣り過したる袂より、一筋の絲引いたり。是れぞ不思議と繰り留めて、慕ひ來るとも白露の、奥山道の險しきに、木の根を傳ふ身も軽く、這ひ行く足もはや玉の、己が力に蜘蛛の、絲を控へて三重繰返し、行くとも覺えず賀古の莊、主人の館に留るにぞ、「扱は織母御前か。」と、呆れ果てたる許りなり。花二郎教信は父を送りて歸られしが、「ヤア須磨藏か珍らしや。お事が無事に歸るからは、さぞ見上もお供しつらん。如何にく。」とありければ、「ア、御沙汰なし御沙汰なし。民部様は御歸りなし。されども御命は恙なく、御家老の中務に御内意ありて参つたり。大旦那御夫婦は勿論、北の御方、若君様へも御隠密頼み奉る。」といひすてて、驅出づるを引

ん。と、旅立つ雲も丹波路の、栗毛の駒の導にも、我が子の便り文も見ぬ、生野の道や大江山、越えて都に、重差上る。月影暗き深谷の、木の葉の時雨瀧の音、さら／＼さつ／＼と、吹く風に雲起り霧降りて、物騒がしき山路かな。我が生さぬ子も子なれども、何故にうらむらさきの初草の、始めの妻の猜ましろ。妬み暮せし年月の、身は百歳の半ば過ぎ、頭の髪も白黒に亂れ碁石の織子立、數へ殺さん喰殺せ、呪ひ殺せと岩根踏み、苦踏み分くる山樵の、樵路空しき丸木橋、下は千仞萬仞の奈落々々のそこばくの、苦患を織子に見せし繩、邪神を祈る小忌衣、日に唾へし燈明の、油煙くらくる渦巻く雲の懸路、巖々峽々として、松風梢を拂つては、花を薪木に吹添へて、雪を運べる唄傳ひ、慳貪我慢の一念には、平地を行くより足輕々、山神の洞に攀登り、一息ついて休らひしは、宛ら鬼女の如くなり。民部少輔の一僕須磨藏は、主人の内意を承り、人目を忍び山越えに、夜道を故郷に歸りしが、織母君とは思ひも寄らず、一天晴如何なる非道者、山の神を駭かし、人を害する大悪人、見届けん。と、篋より附登つて岩陰に、隠れて事をぞ窺ひける。織母は斯くとも白木綿の、襪の四手を打振つて、謹上再拜雲が洞の山の神、聞召せや聞き給へ。と、手くも御神は、昔大和國葛城山に住み給ひ、それより此處に移ります。呪詛調伏の願を満てしめ、古は年毎に人身御供を受け給ふとや。今佛法盛んの世なりとも、威力朽ちずば織子を四海の波に沈め、自らに一念の鐵の牙を付けて給べ。残る織

けし申し子なるを、寵愛に絆されて出家になさんいとほしさ。月日ものびて成人し、佛の契約違ふのみか、嫁を迎へて孫まで見て、民部少輔孝房と家督に立てし此の僞り。一年母が死したるも、罰とは知れど親心、闇にはあらで子に迷ひ、兄を出家にせぬからは、後妻の子の花二郎、せめて法師にせんものを、淺ましや凡夫心、佛なしとは思はねど、物宣はぬ木像に、實には心の怠りて、斯かる愁へを見る事よ。」と、又さめんと泣き給ふ。父を諫めて花二郎、「御歎きはさる事なれども、非を改むるに憚りなし。某唯今出家せば、兄弟は同根生、兄にて候民部殿、御出家ありしも同じ事にて、懺悔の功德に父母の、佛の咎めも翻り、兄上の現未を助け、子孫も繁昌致すべし。光明丸が家督の願ひ、某が出家のお暇、唯御急ぎ候へ。」と、涙を浮べ宣へば、老母きつと睨みつけ、「ヤア何をいふぞ花二郎。彼の兄の民部はな、前の奥の石女殿、出家にする誓願で、佛頼んで産まれた子。御身を産んだ此の母は、神も佛も手傳なし。夫婦のせるで悦びしに、出家にする程ならば、何しに腹を痛めうぞ。物の順を云ふ時は、御身は兄の跡を繼ぎ、民部の出家の名代に、光明丸が頭を刮け、すほろばうにしたが好い。懸替もなき花二郎、出家にしての徳は何、勿體なや聞きともなや。ア、南無阿彌陀佛。」とませこそ言、餘所の聞えのうたてさよ。主典はこれに應答もせず、「我が子孫とはいひながら、家督の事は儘ならず。殊に公川缺くるといひ、鎌倉表計り難し。これより直に上洛して、公の御氣色窺は

引出せとの仰せによつて、去年より在京あり。國より金銀を運ばせ、攝州紀州に渡海の留守、めでたく公用調ひて、遣付歸國を祈らんと、教孝夫婦花二郎、光明丸、千壽の姫、北の御方諸共に、播磨と丹波の山境、出雲の社に大三重參籠の、宿坊とても奥山家、水尾の柚が斧の音に、山路の苦勞も思ひ遣り、尙々祈誓をかけ給ふ。斯かる處へ、京都より、乳母子の印南の彌七郎、同じく外様の侍共歸りたり」と申しける。人々、「如何に」と驚き給へば、心ならずも北の方、氣遣はし彌七郎、殿は何とて御歸りなきぞ。御文にてもなきか。」とあれば、彌七郎涙ぐみ、「さん候。大内の御普請大半成就致せしが、陽明門の樺柱不足によつて君御舟を出されしに、先月七日の難風に、熊野浦にて類船、悉く漂溺に及びし時、御草履取の須磨藏、磯に著けて御命を助けんと、傳馬船に乗せ申せば、山の様なる大浪がどうど打つて、御船は行き方知らずになつて候。假へ御命ありとても、日本の地には在さじ、何面目に主を失ひ、やみ／＼と歸らんよりは、腹切らんとは存ぜしかども、先づ御知らせ申さん爲罷歸り候。」と、語りも敢へず泣居たり。北の方を始めとして、教孝親子光明丸、東西分かぬ姫君まで母に取付き聲を上げ、「父上戀し」と泣き給へば、人々夢かと許りにて、悔み歎かせ給ひけり。主典涙の下よりも、「ア、思へば、佛の咎め程恐ろしき物はなし。我前妻に子種なく、摩耶山の觀世音に願を凝らして、一子を與へ授け給へ。」出家させて夫婦産ますの業を晴らし、佛恩を報じ奉らんと、誓ひて設

賀古教信七墓廻

第一

十王經に曰く、閻魔卒三魂を縛して關樹下に至る。二鳥棲んで掌る。一を無常鳥、二を抜日鳥と名づく。我汝が舊里においては、鵲鷦鳥と化して、別都頼宜壽と鳴くと云々。是れぞ和俗に聞くならく、冥途の鳥や卵の花月、佛降誕ましまして、因果をしめし量りなき、衆生濟度の誓願力、御法と共に文武の道、盛んの御代と著し。往日播州の總郡代、賀古川前主典藤原教孝は、代々鎌倉の被官として、家督民部少輔孝房、嫁君は檜室の中將種平朝臣の御娘、相性よしの水と金、光和ぐ光明丸、十二歳にて其の次は、在鎌倉の獨寝がち、年弱五つの千壽の姫。總領孫の顔も見ず、先立ち給ふ前妻を思召し出して、教孝の膝を放さず育てらる。二男は當奥御前の一子にて、兄に劣らぬ侍盛り。花二郎教信と名乗つて二十一、孝悌の心淺からず。嫂は姉、甥姪は我が子の如き仁愛に、似ぬ母心ひすかしに、繼子繼嫁孫君も、憎やくと押出して、詞に尖る劍先舟、家中棍をぞ取り兼ねける。其の頃大内御造營。鎌倉の沙汰として、諸國に是れを下知せらる。則ち民部少輔孝房は、熊野山の材木を

よりも尊たふときはなく皆佛性を備へたり。彼も我も一佛一體、汝が怨念消除微塵、もとの佛果に至りたまへ。おんあびらうんけんたら、たかんまん急々如律令」と精誠をぬきんで、修多羅の聲も川風も、天に響ひびきて有り難し。時に不思議や、神木の松の木の間まに、北の方の幽靈影の如ごとくに現はれ、「此の御經にひかれて、五逆の達多八歳の龍女、共に佛果を受けしぞや。恨みを晴れて今よりは、五智の佛と成るべし。」と、宣のたまふ聲もかんばしく、如意觀音と現はれ、光をはなつて失せ給ふ。此の光明に照らされて、蟬丸の御兩眼くわつと開けて、「これはく」と宣へば、君臣上下おしなべて、悦びさめき給ひけり。扱小聖に御禮厚く、御夫婦うちつれ還御ある。御子孫繁昌國繁昌、千秋萬歲萬々歲、盡させぬやどこそ久しけれ。

蟬丸 終

には陰陽の二氣、相和して一氣となり、獨鉛の形とあらはる。これを胎子と名付けて、形のはじめのつぎにて、薬師如來の請取りなり。三月めにいたつては、人倫の本身わたくしなく、始めて一念きざす。天竺の釋迦牟尼如來は佛といひ、唐土の聖人は明德と名づけ、我が朝にては神慮と仰ぐ。名づくる所はへだたれど、三教一致は、やこのの、ハツア／＼この／＼三鉛の形、文殊菩薩の請取りなり。はや四月めは、地水火風の五輪悉くつらなりて、仁義五常の五鉛の形、普賢菩薩のまもりなり。扱五月に及んで、六根手足をさいしき、五體残らず連續す。此の時より、その體に守本尊定まりて、付添ひめぐる腹帯や、地藏菩薩の請取りなり。六月になれば、好むところ欲する所自然に生じ、母の乳房にくひつきて、親の乳を吸ひ取る事、およそ三石六斗なり。則ち大悲觀世音これを守らせ給ふとぞ。扱七月に至つては、忝くも御佛は、三世の因縁壽命をかんがみ、扱こそ人間一生に、めぐる因果の小事の、輪の輪寶にきざみ付け、頭にかづけたまふとかや。彌勒菩薩の請取りなり。八月めに及んでは、阿闍善薩の守にて、輪寶變じて胞衣となる。九月には成長し、意念ある故、法界の惡魔惡靈、毒氣を吹き入れ吹きかけ注ぎ込み、此の界に出生せば、己が魔道へ引き入れんと、隙間を狙ひ窺ふなり。父母の所行所念に引かれ、善をなせば善人、惡をなせば惡人と成り、極樂地獄の界ぞとて、産神を定めおき、勢至善薩の守なり。十月は愛染明王。されば六道四生二十五有の其の中に、人

宇治の綱代木日をかさね、今日滿願の大法事、宮御夫婦は願主にて、壇の左右に著座ある。大君行幸なりければ、洛中近國かくれなく、信心の參詣は、老若男女貴賤都鄙、袖を列ねておびたゞし。かくて安居院の小聖は、役の行者の跡をつぎ、胎金兩部の峯をわけ、七峯の露を拂ひし篠掛に、不淨をへだつる忍辱の袈裟、知行おとらぬ御弟子達、左手右手に相具し、壇上にさしかり、先づ加持の讃をぞ誦せられける。「謹上再拜々々、敬つて申す、魂鎮め。それ無漏無上の法界には、自他の念更になし、悟る時んば十方空、迷ふが故に三界常、喜怒みだりに起つて、哀樂これが爲に止む事なし。花と見よ、雪と見よ。龍田の錦、吉野の雲、うつ、なければ夢も結ばず。水たまらねば月も宿らず。今ひるがへす幣帛に、阿字本不生の風を招きて、迷妄の闇をはらさん。そもく行者が修法といつば、初七日は曼陀羅供、二七日は放生供、三七日には龍女成佛水施餓鬼、四七日は光明供、五七日は妙なれや法華讖法、六七日、法要の趣理三昧、今月今日七々日の大結願と申すには、妊婦安平子安の法、今の御法に仇を忘れて、擁護の背を廻らし給へ。」と、懐胎十月の卜相を、語り給ふぞ殊勝なる。先づ初月は一氣體中に孕まれ、其の形あたかも鶏卵の如し。これ本來一とくの精水、かたちに取つては混沌未分、名にとつては太元大素、神道にては國常立の尊とまうし奉り、漢儒は天の生民を下すと云ふ。佛法にては本有の毘盧遮那、不動明王の請取りたまひて、本來の空の一物これとかや。二月め

有るべきとは存ぜず、御顔面を拜せんと、勇み歸りし甲斐もなき、定めかたなの世の中や。」と、人目もわかす聲を上げ、くどき立ててぞ泣き居たり。實に道理ことわりや」と、各袖をぞ絞らるゝ。稍あつて千手太郎、「ア、歎くまじや候。親兄弟が命を捨てしも、君を御代に立てん爲、敵を討ちて候上は、唯父母が孝養には、君御出世の御訴訟こそ有らまほしう候。」と、涙を止め申しければ、清貫聞きも敢へず、「我々もさは存すれども、先々月より直姫御懐妊の兆候故、取紛れ延引せし、いざ急に突問せん。」と、評議とりくゝなる所へ、姉宮搖ぎ出で給ひ、「千手太郎とは御身の事か。忠義感じ入つてこそ候へ。」妾は逆髪とて、蟬丸の姉なるが、因果の不具に髪倒に生えし故、父帝にも嫌はれて、かかゝるわびしき住居ながら、これは過去の因果なれば、祈るべき力なし。又蟬丸の盲目は、嫉妬に命をうしなひし、北の方の一念、現世の報いばかりなり。殊に直姫懐妊とや、彼の恨みにて生まるゝ子も、不具ならんは必定。もと北の方に仇もなければ科もなし。安居院の小聖を請じ、宇治川にて七々日、魂鎮めの法事をなし、彼の亡魂をなごめなば、蟬丸の目も開け、直姫の平産も、氣質美麗の男子ならん。とくく、「の宣へば、「皆尤も。」と同じつ、小聖に御使者あり。都の辰巳思ひ立つ日を吉日とぞ三重開白ある。

懐胎十月の由来

の鞞鞍壺かけて突きければ、馬は堪へずがつばと伏す。早廣下り立ち、「心得たり。」と、太刀を合はせて防ぎしが、一念の鈍先岩を劈く勢ひに、左の肋を貫かれ、仰向に返せばつと入り、取つて引伏せ馬乘にどうど乗りの親の敵諸人の仇、年來の恨みおもひ知れ。」と、三刀四刀さし通し、「え、嬉しし心地よし。」と、嬉し泣に泣き居たり。「先づ母上に悦ばせ奉らん。」と、首かき落し槍に貫き振擔け、蟬丸のおはします一條大宮逆髪の館へ、飛ぶが如くに急ぎける、心の中こそ三重嬉しけれ。案内にも及ばず、「千手太郎忠光、敵早廣が首取つて参りし。」と、大音揚けて呼ばはれば、希世清貫宮御夫婦、「これはく。」と走り出で、「扱もお手柄く。」と勇み悦び給ひけり。此の年月の難行、又下り松にて餓ゑに及びし時、亡者に供へし供物にて、餓ゑを凌ぎし有様具に語り、「母に申して悦ばせん。早々逢はせて給べ。」と申せば、人々は涙ぐみ、兎角の事も宣はず。「こは心得ず如何なる仔細ぞ。聞かさせ給へ。」希世涙を止め、今更語るも便なきながら、御老母の御事は、「二十日程以前より風の心地と候ひしを、醫療手を盡せし甲斐もなく、一昨日の暮方に、終に果敢なくなり給ふ。只今の物語、亡者の供物を食せしとは、それこそ御老母の供物よ。」と、語りもあへぬに忠光は、「はつ。」と許りに伏し轉び、聲も惜しまず泣き居たり。心の中こそ無慙なれ。いと涙にくれながら、「扱は亡母の供物にて、我が渴命を繋ぎ本望を達せしかや。草の陰まで子を思ふ母の一念通じたる、親子の値遇の有難さよ。かく

淨土なれば、心外無別法即心成佛。とりもなほさず居もなほらす、十方偏照の光明を放ち、金色の蓮臺に駕せられ、一瞬刹那がそのあひだに、たちまち安養無垢世界、不退快樂の都に至らん。何疑ひの有るべき」と、四とん八辯流る、如く、語り給へば往來は、皆々禮して通りけり。右大辨早廣は、丹波の方へ落ち行かんと、繩篋引きこみ驛馬に乗り、白川越に來りしが、傘にや恐れけん、早廣が乗つたる馬俄にけしとみ跳ね上り、鞍を放れてどうど落つる。早廣怒つて、「これ願人奴、馬上にも用捨せず、傘をひらめかし、落馬させつる奇怪。」と、笠取つたるをきつと見て、「ヤア親の敵早廣か。千手太郎知つたらん。」と、傘の轆轤を抜けば、長柄に槍を仕込うだり。「餘さじ」と飛び蒐れば、「南無三寶。」と馬引き寄せ打乗り、鞭を當てて歩まする。「卑怯者臆病者、返せ。」と聲をかけ、息をもつかす追つ驅けしは、只韋駄天の如くなり。半道ばかり追つかけしが、馬の足竝早廣に、十四五丁さがり、松の木陰につつ立ち、又驅け出でんとしけれども、こは如何に足立たず。野山に伏したる千手太郎、二三日五穀を食せず、咽渴してよろ／＼と、一足もひかればこそ、「エ、冥加に盡きたり口惜し。」と、齒嚙みを爲して立つたる所に、誠に天の與へかや、死人に供へし枕づけの供物、松の元に乗ててあり。「有り難し幸ひ。」と一口にぐつと食ひ、一ゆり揺つて力足を踏んだれば、金剛力士の如くなり。「さあ千里萬里も一飛び」と、又かけいだし、三重行く水の紙屋川にて程なくおつつき聲をかけ、馬

世の中は、兔にも角にも假の宿、笠一本に起き臥すも、身の程隠す我が庵と、墨の袂に角頭巾、經論少々懐中し、父の敵を狙ひゆく、瞋恚に我は迷へども、人を導く六道の、辻談義こそ殊勝なれ。一誠に淺ましいかな、歎かしいかな。今日の衆生一生造悪不斷、煩惱の塵に交はり、朝に怒り夕に悦び、貪瞋癡慢の色香に迷ひ、假にも佛法と云ふ事を知らぬ、愚かなるかな。妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者と申して、現世にて寶の山を築かせ、子孫奴にかしづかれ、花に詠じ月に嘯き、無上の榮花を極むるといへども、一息切斷臨終の嵐に、貪慾私慾の火の車、業障の雲に轟き、誘ひ行く時んば、日頃の下人も従はず、金銀衣服も身につけず、無間奈落に眞倒さまに墮つること、三つ羽の征矢よりいと早し。財寶は地獄の家苞、名聞は焦熱の爪木とも譬へたり。披如何がして各、我等佛にはなるごと申せば、有り難い事の、化城喻品に曰く、大通智勝佛、十劫坐道場、佛法不現前、不得成佛道。此の文の心は、一心の外に佛法なし。一心の外に成佛なし。されば愚癡無智の凡夫、心の外に佛を求め、穢土の外に淨土を求め、かへつて迷ひの種と爲す。これを和け、傳教大師の御歌に、悟りとして外に求むる心こそ、迷ひをめける始めなるらん。又天台の釋文にも、法華彌陀眼目の異名として、釋迦と阿彌陀は、譬へば目と云ひ眼と云ふが如くにて、一佛異名同一體、心の外に來迎なし。るながら爰も蓮華道場、寐ても佛覺めても佛、立つても佛居ても佛、行住坐臥一心不亂に念佛せば、己身の彌陀唯心の

し、長追ひに力盡き候を、火水の底もと存ぜしかど、母が有様氣遣はしく、無念ながらも打ち洩らし
 とつてかへし候。幸ひかな此の上は恐れながら母を君に預け参らせ、心身軽くし罷り出で、敵を討つ
 て歸るべし。早お暇」とぞ申しける。清貴聞きも敢へす。「オ、すゞし勇ましし。御老母は我々あづか
 り、都一條大宮に、逆髪さかみの姫宮ひめのみやとて、蟬丸せみまるの御姉宮おねのみやおはします。君諸共きみもろともに此の方へ、伴ともひ忍しのばせ奉ら
 ん。これ此の袈裟衣けさしあは、某たれが著用ちやくようして、君に巡り逢あひ奉たりし、吉左右きちざう日出度ひでたき衣あなり。貴殿きでんに
 譲ゆづり申まうすべし。修行者しゆぎやうに様さまを變かへ、狙ねらひ寄よつて本望ほんぼう遂まげ、目出度めでたく歸洛きらくせられよ」と、各門出祝おのづかは
 るれば、「オ、有り難ありがたし忝かたじけなし。此の衣ころもを賜たまはつて、姿すがたは墨すみにやつすとも、心こころばかりは染あめ残こし、彌陀みだ
 の利劍りけんを提ひげて、譬たとへば敵翼かたきつばたを生なじ、梢こゝろをかけり波なみを漕こつて、新羅百濟高麗國しんらひやくさいかうらいこく、支那天竺しあてんていしよに到いたると
 も、乾坤けんこんを出いでずんば、よしや五年ごねんが十年じゅうねんも、命終いのちのまはらば一念いっねんの、魂たま残こつて本望ほんぼう遂まげ、日出度ひでたく歸かつ
 て母者人ははちやうじん、御笑おんわらひ顔見かほみ申まうさん。「オ、御身おんみが笑わらひも見みせて給たまへ。」お暇申いひます我が君様きみさま。暇申いひまして母上ははじやう
 さま。各おのづかには老母ちやうぼが事頼ことたのみ存ぞんずる。「オ、ノノおさらば。」さらば」と出いでて行く。花はなはみ芳よし
 野人のびとは武士ぶし、譽はまは雲居くもゐに薰かりける。

第五

立つ身の黻に、瘦せて色香も無かりけり。宮もあきれてましませば、三位いよ／＼當惑し、「今朝程宿を出でさまに、たしか姫君を入れ置いたかと存するが、取違へたか知らぬまで」と、眉を撃めて居たりけり。痛はしや蟬丸は、御涙をはらくと流し、「我この姿となる事も、彼の姫故と樂しみに、情も戀も覺め果てし、天魔の所爲か冥罰か」と、御愁歎こそ道理なれ。老母は聲を聞き覺え、御顔面をも思ひつき、「なう宮様か蟬丸様か、お懐かしやゆかしや」と、縋りつけば、「ア、煩さ、免せ／＼」とおなたへ逃げ此方へ隠れ、百歳に一歳足らぬ九十九髪、もてあつかはせ給ひけり。「オ、御尤も／＼。名を申さずば、御見忘れ候べし。妾こそ君が爲早廣に討たれし、千手入道が後家、忠光が母にて候」と件のあらまし語らるれば、「實に／＼夫れよ珍らしや。これは／＼と手を打つて、一先づ不審は晴れしかど、直姫の行き方なし。」最前の騒動に、敵や奪ひ取りつる」と、未だ氣遣ひ堪へぬ所に、清貴喜藤太姫君を誘引し、「宮に出逢ひ奉らぬは、道こそ違ひつらめ。」とて、舊の庵へ歸らるれば、「こは清貴か。」「我が君か。」「それよこれよ。」と寄り集まり、泣きつ笑うつとり／＼に、語らひどよみ給ひけり。然つし所へ千手太郎、薄手少々受けながら、大汗になりて馳せ歸り、人々を見るよりも、はつと驚き嬉しさに、左右の言句も出でばこそ、夢かと思ふ氣色なり。各一度に、「やれ／＼、千手か、忠光か。事の首尾は、御老母の物語にて承る。して先づ敵は討ち止めしか。」「さん候。敵は大勢と申

所存の程こそ道理なれ。時しもあれ志賀の里にて、早廣をつけいだし、「さあ今ぞ日頃の運試し、天の
輿へあら嬉しや。」とはやれども、見れば敵は大勢にて羸り來る。「老母を何處に置くべきぞ。エ、屈竟
の庵室、御免。」と言ひ捨てつつと入り、持佛の下段の戸を押開け、母を忍ばせ奉り、「あら心安や此
の上は、腕限り太刀限り。」と、身繕ひする所へ早廣主從七人にて、「博雅の三位が庵とはこれならめ、
ほつ込んで討ち取れ。」と云ふ程こそあれ。我先にと亂れ入る。「忠光戸口に立ち塞がり、「千手太郎見忘
れたか。おのれをこそ尋ねしに、神佛のあてがひ、能くも爰へ來りしな。親の敵覺えたか。」と、無二
無三に切つて懸れば、先を取られて動顛し、おびえてさつと退きしが、踏み止れば打ちかけ、取つて
返せば切りかけ、打ちかけ、息をも續がず、逃ぐる敵におつすがひ、粟津が原へぞ三重追つ驅けけ
る。かくとは知らで博雅の三位、蟬丸の御供して、清貫とは道違ひ、麓の田而下向道、己が庵に歸り
ける。蟬丸仰せけるは、「誠に師弟の因とて、此の度の忠節淺からず。」と宣ふに、「さかかかる御用に立つ
事も生前の本望、先づは姫君さぞ御寂しく御心も盡きぬべし。」と、佛壇の戸を開け、御手を取りひき
いだせば、「ヤァこれ何ぢや。」七十有餘の老女、頭の雪もみつはぐむ、老いさらぼひて出でてける。三
位はつと飛び退けば、宮も驚き、「やれ何事ぞ、氣づかはし。」「さん候。姫君俄に白髮の姥となりたま
ふ。今の間に年の寄るは合點參らす。これ御覽せ。」と御手を取り、肌を撫つれば骨荒れて、老いの波

てて、「あら心よや、今一つ。」とさし出す。清貫も滑稽者、「腸持の梵妻殿、ちと拜み奉らん。」と、其の手を取つて引出し、能く／＼見れば直姫なり。「扱は御身は清貫か。」「なう姫君か。」と手を打つて、互にあきれおはします。されども清貫不審晴れず、「何とて爰には御入り。」と、問へば直姫聞き給ひ、「さればとよ此の處は博雅の三位とて、宮御琵琶の弟子なる故、扱妾諸共これに忍びまします。」と語り給へば、清貫悦び、「宮は何所に渡らせ給ふ。御日見得致したし。」「オ、宮は御出世の御祈誓に、坂本の山王へ日參遊ばし、今日も三位を御供にて、御參詣候が、おつつけ歸らせ給ふべし。」と、宣ふ所へ喜藤太立ち歸り、清貫をきつと見て、「彼奴も盗人の同類か、油斷は爲ぬ。」と鎌取りなほすを、姫君御覽じ、「やれ喜藤太。あれは宮の御乳人清貫と云ふ人なり。おことは氣ばし違ひたるか。」とのたまへば、「ム、扱はさうか御免々々。拙者は山にて強盜に逢ひし故、扱只今の仕合。」と、有りし次第を語りける。清貫つく／＼聞き給ひ、「否々これは盗人ならじ。早廣にうたがひなし。大勢催し此の處へ押しかけんは必定。垣一重の庵室に、長袖足弱過ち有らば後悔せん。いで山王まで姫君をも御供し、宮をも誘ひ奉り、一先づ都へ登るべし。それ喜藤太御手を引け、暮れぬ前に。」とのふ浪の、鳩の海邊を濱傳ひに、坂本さしてぞ三重急ぎける。爰に又千手太郎忠光は、父入道を早廣に討たせ、其の無念晴れやらす。老いたる母を肩にかけ、親の敵早廣を、是非一太刀と心懸け、野山に起き臥しつけ狙ふ、

け落ちける。喜藤太もこれまでと、元の所に立ち返り、「エ、何でも無い奴等に逢ひ、あつたら汗を流
 せし」と、柴に稀さしかき荷ひ、鼻歌謠ひ悠々と、志賀の里へと重歸りける。左衛門督清貫は宣旨
 とはいひながら、御幼少より仕へにし、宮を山野に捨て参らせ、あぢきなき世にすみ染の、袂にやつ
 し園々を、修行念佛他事もなし。されば古郷忘じ難し、宮の御上如何ぞと、郡に歸る漣や、滋賀の
 浦にぞ著き給ふ。古き都の所から、花ちる里の藁園ひ、楢垣透垣さ、やかに、いと故づける庵あり。
 立入り見れども主人はなし。持佛の香華細やかに、持経禮讚繕はず。本尊も昔覺えたり、如何なる遁
 世者の住家ぞや。世をいとふ身は誰とても、斯くこそあらまほしけれ。住持の歸さを待ちうけ、一夜
 語りて通らばやと思ひ、縁に腰かけ待ち居たり。時に佛壇の下より、女の聲にて「申しく」と呼び
 かくる。はつと驚き見てあれば、忍びやかに口を開けて雪の様なる手を出し、「やよこれ水一つ給べ。」
 と云ふ。大道心の清貫も、これぞ化生の業ならめと、膝わなノと震ひしが、エ、不便や、餓鬼道に
 迷ひし幽靈ごさめり。これぞ出家の役と觀じ、器物に水を入れ、「下給三途飢渴飽滿、南無阿彌陀佛。」
 と差出し、ちやくと手を引き退りしが、又恐々立ち寄りてそつと覗けば、弓矢八幡艶やかなる女房な
 り。「ム、さては御坊の梵妻よな。いやはや浮世に抜日はなし。誰かは知らねど此の庵の濡れ坊主、所
 こそ有れ佛壇に、女寢させてさめごと。」思ひまはせばをかしくて、獨り笑うて居たりしが、又聲立

廣か。「一呑々天狗の筭ならめ。」と、様々見立て笑ひける。時に向うの岡邊より、若き樵夫のこれを見て、「やれかたふ。それは此の山に捨てられましたませし、蟬丸様の琵琶の撥といふ物ぞ。賤しき者の用には立たず、我にくれよ。」と言ひければ、「ム、して又お事は何にか爲る。様子によつてやらん。」と云ふ。彼の男聞きもあへず、「オ、某は彼の志賀の里に、世を逃れ住み給ふ、博雅の三位と申す人の、一僕喜藤太といふ柴刈なるが、主君博雅の三位殿は、蟬丸さまの琵琶の弟子。其の山緒にて此の間、蟬丸様御夫婦共に、旦那が庵に入り給へば、捧け申すに是非々々所望。」と云ひければ、「扱はさうか。持つても用なし勿體なし。」と、與へて皆々通りけり。早廣とつくと聞きすまし、郎等に問せ、喜藤太を四方よりばらくと取圍み、「これく汝が主人三位の庵に、蟬丸のおはするとや。さあ案内して連れて行け、否といはば踏みころさん。」と、かさをかけてぞ申しける。喜藤太きよつとせしが、打ちうなづき、「ム、聞えた。うぬめ等は強盗よな。ヤイサおのれら氣色すればとて、主の家の盗人の引き入れがなるものか。下郎と思ひ侮るな。四も五も食ふ男でなし。足手息災な内、早々歸れ。」と怒りける。早廣怒つて、「それ引立てて案内爲せよ。」「承る。」と下人ども、飛び懸れば取つて投げ、取りつけば踏み倒し、枋取りのべ打つてかかる。早廣も抜き合はせ、二打三打働きしが、山路に馴れたる荒男、岩とも谷とも言はせばこそ、猿より軽く驅け廻れば、さしもの早廣詮方なく、轉びころんで逃

響きて、菩提の道も暗からず、悟りの夜半も明け渡る。兩眼は暗くとも、汝心月明らかなり。和歌の妙を授けん爲、我は人丸、我は赤人、二人の魂魄顯はれ出で、共に成佛得脱の、兜率に生まれん嬉しき」と、言ふ聲ばかりは逢坂山、言ふかと思へば逢坂山の、杉の嵐に立紛れてぞ失せにけり。蟬丸、「あつ。」と感歎あり。「夫れ日の本は神國の、和歌を以て道とせり、歌仙の靈魂顯はれ出で、詞を交す其の奇特、木だ天道捨て給はず」と、感涙袖を潤して、「さて直姫に逢ふ事も、神の授くる縁ぞ」と、各夢かとたどられて、猶信心の和歌の道、古き例に踏み分けて、打連れ山路に歸らる、夫婦不思議の契りとて、二度めぐり逢坂山の、名歌は今に残りける。

第 四

右大辨早廣は千手入道を討ち滅ぼし、都の住居もなり難く、遠國にさまよひしが、一兔角我が身上の敵は蟬丸なり、是非に恨みを晴らさん」と、下人等一兩輩召し連れ、逢坂山の谷峯を、草を分けて尋ぬれども、宮の行方は無かりけり。後は小關藤の尾や、かかる山家も住めば住む、奥の柴人友呼び交し、「これ／＼逢坂山にて不思議の物を拾うたり。抑何といふ物ぞ。さあ推當に言うて見よ。」と、琵琶の撥をそ出しける。山賤ども集まりて、「姿は銀杏の葉の形にて、さても合點のかぬ物。これは猿の木

の悲しさは、傍にありとも知り給はず、獨りごちたき聲を上げ、歎き慕はせ給ふにぞ。今は堪へかね
心消え、「直姫爰に。」と云はんとすれど、稚兒達、「暫し。」と留むれば、絶え入り消え入り伏し轉び、身
を悶へてぞあこがる。神ならぬ身は是非もなし。稍あつて蟬丸、琵琶も撥もかりりと捨て、「南無三
寶叶はぬ事に迷うたり。逢ふは別れの始め、獨り止まる道ならず、色も匂ひも一盛り。ア、思ふまじ
歎かじ。」と、一首の歌にかくばかり、「これや此の行くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢坂の關
朝に、別れ夕暮に、逢坂山の旅人の、往來も夢のすさみぞや。雨降らば降れ風吹かば吹け。山の奥こ
そ住みよけれ。エ、浮世の無常。今ぞ悟りの花開けし。」と、走り出でんとし給へば、人々岸より飛ん
でおり、「これ直姫よ。」と継りつく。宮も、「これは。」とばかりにて、互に手をとり袖をとり、戀しのか
しの物語、盡きせぬ物は涙なり。心ぞ思ひやられたる。時に兩人の稚兒達詞を揃へ、「如何に蟬丸、御
身色を重んじて、思ひに絆され情に沈み、數多の女を迷はせし、因果の覆心を暗まし、盲目となり
給へども、今の悟りの詠歌面白しく。三十一文字の表に旅の姿を列ね、裏にはすなはち會者定離愛
別離苦の理、逢ふは別れの始めと示し、一首に三世を顯はせり。神も心もたをやぎて、佛の教へに
逢坂の、あの關寺の鐘の聲、煩惱の夢を覺すや、法の聲も靜かに、先づ初夜の鐘を撞く時は、諸行無
常と響くなり。後夜の鐘を撞く時は、是生滅法と響くなり。晨朝の響は生滅々已、入相は寂滅爲樂と

せ給ひける。姫はあれよと見るからに、「契りし人か淺ましや。」と、縋り寄らんとせし所を、稚兒達押へて、「ア、音高し、人音すれば逃げ隠れ給ふ故、物言ふ事は叶はずとこそ、最前より申しつれ。た、音せで。」と有りければ、姫は詮方なみだに曇る、「鏡の影か我が戀は、逢ふとはすれど物云はぬ、我が山柵の色香をも、見すや知らずや淺ましや。」と、聲をも立てず忍び音に、おせかへりてぞ泣き給ふ。宮はかくともしら絲の、琵琶取り出し、盤渉を平調に調べ換へ、「やよや待て天津鴈がね音傳てん。古郷の秋は如何ならん。我は深山に住み侘びて、琵琶より外は友なし。」と、撥をあけ給ひし時、風が持て来る村雨の、紅葉遅しと夕時雨、一むら颯と降り來れば、蟬丸琵琶を濡らさじと、此所の木の下彼所の木陰、濡れても寢んと詠ぜしは、花に戯れし歌の體、我は又賤の男がく、被く袖笠笠の、雨に木の葉も亂る、初時雨、彼方へ走り、此方へ走り、ざらりくざらりくざつと、驅り彷徨ひ身は濡れ衣木陰なければ、雨もたまらず。人々見る目も痛はしく、すこし小高き阻陰より、笠をそつとさし懸くれば、宮御耳を敲てて、「不思議や雨は降りながら、身にかゝぬは木陰よな。口惜しや古は、一夜泊りし宿までも、錦の襪綾の牀、垣に金花をかけ、戸には水晶を知ねつ、鸞輿屬車の玉衣の、隙間の風も厭ひしに、かくあさましき苦席、しくともしかじ世の中よ。思ふ人とし片敷かば、玉の臺も愚かしき。かくとは知らで直姫が、哀れ何とか暮すらん。戀しの昔や、忍ばしの直姫や。」と、盲目

まりて語られよ。平に／＼と申さるゝ。彼の女顔打ちあかめ、「恥かしながらみづからは、此の山に捨てられおはします蟬丸様の思ひ者、直姫と申す者なるが、御行方の懐かしく、これまでさまよひ候へども、御在所も定かならず。人に尋ねて候へば、御身の不具を恥ぢらひて、人に面を合はせじと、山深く入り給ひ、今は牛死も知らざると、聞くより浮世の頼みも切れ、此の清水をば三瀬川、逢瀬を急ぎ候ぞや。早々死なせ給べかし。」と、又さめ／＼とぞ泣き居たる。稚兒達聞き給ひ、「扱痛はしや我は、此の關寺の稚兒なるが、山踏みの行法に、御在所は存じたり、よそながら見せ申さん。さりながら人音すれば逃げ隠れ給ふ間、必ず聲はし立て給ふな。唯御姿を見るまでならば、いで／＼案内申さん。」と、夕の雨にさす傘や、空も涙も定めなき山路なるらん。第一第二の絃は索々として、秋の風松を拂つて疎韻落つ。第三第四の宮は、我が蟬丸が調べも四つの、折柄なりける村雨かな。流るゝ水のあはれ世の、其の理も目に見えぬ、月の入るさも知らざれば、夜晝分かん方もなく、谷の泉閑子鳥、梢を渡る颺や、何を恨みて猿鳴く。落葉衣に露重く、月を擔ふに肩瘦せたり。移れば變る哀れさよ。さればにや、夕日のめぐる方をこそ、都の空と招く手に、其方の嵐懐かしく、又森々たる野分に琵琶を弾じては、過ぎし寐覺の忘れず、鹿の妻こふ聲までも、御身の上とあぢきなし。眞析の蔓青つゝら、來る人ありとも知りたまはず、楨や杵を押分けて、杖が枝折の祖傳ひ、よろほひたどら

世にて因果を果し、後世を助けん御計策、これこそは親の慈悲。捨て置きかへれ。」と宣へば、二人は彌源を流し、「此の御有様にては、盗人の恐れあり。御衣を賜はつて糞を參らせ候はん。」「ム、これは雨による田真の鳥と詠せし糞か。」「さん候。雨露の爲なれば、同じく笠をも參らす。」「これはみさぶらひ御笠と詠みし物よなう。」「又此の杖は御道案内。」「實に／＼これも突くからに、千歳の坂も越えなんと、彼の遍昭が詠みし杖か。」「夫れは千歳の菜のく杖。」「爰は所も逢坂山。」「關の墓屋の竹柱。」「かかる浮世にあふ坂の、知るも知らぬもこれ見よや。延喜の王子の成り行く果て、こはそも如何なる例ぞ。」と、聲を上げてぞ泣き給ふ。旨旨なれば人々も、名残の袂振切つて、涙ながらに歸らる。王子は跡に唯一人、琵琶を抱きて竹の杖、伏し轉びく、「さらばく。」「さらば。」の聲許り、梢の木魂山彦を、せめてそれかと力草、分けて山路に入り給ふ、桂はみのる三五の暮、名高き月に逢坂の、關の清水と聞えしは、江州一の名水なり。されば臨寺の稚兒達も、これを佛の關伽桶や、柄杓の露の玉襷、月を汲まんと秋に澄む、清水が許に出でらる。時に柳の木隠より、若き女の走り出で、石を袂に拾ひ入れ、「南無阿彌陀佛。」と云ひ捨て、既に清水に飛び入る所を、稚兒達引留め、「放生第一の靈水にて、捨身思ひもよらす。」と有れば、「いやとても存へ果てぬ身ぞ。御慈悲に見逃して死なせてたべ。」と振り放す。これ／＼、左程思ひ詰めしには仔細こそあらめ。品によつて冤も角も、先づしづ

つ、なう四つ五つ、「五文字は、歌の中山誓願寺、彼の神垣の年古りし、天の帝の御廟野よ。左手の山の岡の邊。」と、御手を取つて教ふれば、宮は左右の言もなく、世々の日繼の天津君、民を恵みの言の葉の、露の流れ汲みながら、成り行く果ての淺ましや」と、御涙せきあへさせ給はねば、清貫希世心なき牛も、尾を伏せ角を伏せ涙を流す有様に、草木も哀れ催せり。秋の田の刈穂の原や風落ちて、賤が手枕寝亂れし、かみ干す布干す又稲も刈り干す、我は袂の乾く間も、ないそな泣いそ澤邊の蛙かかる思ひはよも知らじ。紫竹交りの藪の下、春の縁のさいたづま、小笹姫行く袖に、蕪著て通へ。笠著てまたかよへ。涙の雫雨まさり、雨にはあらでや、これの木々のく木の葉が、はらりほろり、はらくくくと風に諸羽の宮所、今日を限りと伏し拜み、上り下りの旅人も、心々に今宵しも、誰が誰と伏見の山見えて、彼の黄昏の私言、今日に浮ぶ種ぞかし。急ぐとすれどとけしなき、牛の玉銚避くとも、心の駒は日に千度、戀しき方に走井の、水櫛の齒もよしやよし。何時を頼みに束つけん。我が黒髪のさね葛、逢坂山にぞ著き給ふ。清貫希世兩卿は、宮を木陰に下し參らせ、「宣旨黙し難く、これまで供奉せしめ候へども、何處に捨て置き申すべき。さるにても我が君は、堯舜以來の賢王とは申せども、現在御子を捨て給ふ、叡慮如何なる事やらん。」と、涙にくれて申しけり。蟬丸聞召し、「あら愚かや人々よ、前世の戒業拙くて、盲目となりし故。されば父帝の御情なきには似たれども、此の

きものを、況してや我が親心、身にも換へまく思へども、過去遠々の悪業は、十善王位も逃れずと、
萬民に知らしめて、天下の民を悉く、佛の道にいれん事、廣大の慈悲ならずや。子のいとほしきは
盡きせねど、國を育む我なれば、國民には換へ難し。かまへて汝ら露程もいたはらば、却つて仇とな
るべきぞ、疾くく山に捨て置くべし。果敢な浮世や淺ましの人界やと、御冠の巾子を傾けて、
御派せきあへさせ給はねば、八省百官諸共に、各袖をぞ絞らるゝ。清貫希世兩卿も、力なくく
退出ある。世のならばしぞ 三重定めなき。

蟬丸道行

結ぶの神も偽りや、何時の月日に結び初め、寢初めし夜半の夢消えて、縁さへ薄きから衣、御いた
はしや蟬丸は、何の報いか浮世の闇、戀慕の闇の暗かりに、引出す牛は昨日から、御幸の車引きかへ
て、野飼にやつす綱手繩、御身に添ふる物とは、女象の琵琶一面、清貫希世御供にて、萎れ出でさ
せ給ひける、御有様こそ哀れなれ。秋さればく、月の障りと泣き歎きつる、東の山を越え行けど、
今盲目の御身には、何の光もみづ鳥の、賀茂の河岸波越えて、契りも末の松坂と、消えばや爰に粟田
口、秋末だ若き山々に、忍びくの初紅葉、誰に著よとか錦織るらん。折々に花鳥風月の戯れも、と
もに散り行く花の山、鐘こうくと仄聞え、御心細き時しもあれ、己が夕の牀急ぐ、妻こひ鳥二つ三

ゆし頼もしし、前代未聞の勇士やと、扱は文にも残し留めつる。

第三

早廣が惡逆故、宮は虎口の御命まぬかれ、清貫が計らひにて中納言希世の館におはせしが、或時清貫希世參内あり、「扱も蟬丸の宮、往時五月の頃より、御眼病例ならず、唐の大和の藥を以て、醫療手を盡し候へども、元來宮の御事は、美男目出度くまします故、數々の女の思ひ嫉妬の恨み、御一身に逼り、醫術の及ぶ所ならず、遂に御兩眼盲ひさせ給ひ、蒼天に月日の光なく、闇夜に燈火影暗き、盲目の御容、力及ばず候。」と、詞を揃へ奏せらる。天皇はつと御氣色かはり、御落涙ましませしが、「誠に朕が第四の宮と生まれ、十善の位をもしるべき身が、生まれもつかぬ盲目となりし事、よつく前世の惡業深きゆゑ、五體不具にして佛にはなり難し、況んや此の世さへ、暗きに迷ふ盲目の、未來の闇も痛はしや。」と、やゝ御涙に呉れ給ふ。「よし／＼此の世にて、諸人に恥を懺悔して、業障を果した後世を助くるいとなみ、逢坂山に捨て置くべし。」と、綸言あるこそ哀れなれ。兩卿詞を揃へ、「宣旨にては候へども、賤山賤さへ不具なる子はいとほしし。況んや一天の若宮を、山野に捨てさせ給はん事、且は仁心薄きに似たり。」と、恐れ入つて申さるれば、「いやとよ生きとし生けるもの、子を憐まぬはな

と、痛はしや御老母、二歳の若君諸共に、唯一太刀に害せしは、目もあてられぬ次第なり。エ、天道知らずの人畜奴、一人ものがさじ。」と、枕長刀おつ取りのべ、四十餘人を左手にうけ、右手に支へて戦ひけり。千手太郎が手に懸けて、十六人とめければ、入道が長刀に、八人懸けてぞ捨ててける。残る者も深手を負ひ、颯と引いては又驅け入り、二三度四五度揉み立てし、千手親子聲をかけ、清貫は坐せぬか。宮を御供申されよ。跡を構ふなく。」と呼ばはれば、尤も。」と清貫、宮を負ひ參らせ、己が館に落ちらるゝ。其の隙に早廣、後の垣を押し破り、直姫を引立て大地に踏みつけ、拜打に振り上ぐる。「南無三寶。」と入道、横間に丁ど受け、火を散らして、切り結ぶ。太郎は父を討たせじと、討つて懸れば入道隔て、「父が命をかばふな。姫君を討たせなば、七生までの勘當。」と、云ふ聲に力なく、母と姫とを兩脇に搔い込いで、上の山へと落ち行きける。入道は面も振らず、追ひ行く敵をふせぎしが、早廣苛つて打つ太刀に、弓手の肩先打ち込まれ、七十一歳春の夜の、敢なき夢とぞ消えにける。忠光、「父は如何ぞ。」と取つてかへして、「ア、口惜しや討たせつる。目前親の敵ぞ。」と、退く敵をかさにのり、蜘蛛手に追つ立て追つ返し、半時許り驅けたりしが、早廣は行方なし。エ、無念口惜しし。おのれ天地を出でずんば、討つて父に手向けん。」と、僅かに残る雜人ども、木の葉の嵐磯打つ波、むらむらばつと追つ散らし、父が死骸の薄煙、霞の谷へと分け入りし。父父たれば子も子たり。天晴ゆ

望^{まう}遂^とけさせ申^{まう}さん。」と有^あれば、忠^{たつ}光^{みつ}悦^{よろこ}び、「夫^それは何^{いづ}國^{こく}如何^{いか}なる者^{もの}にて候^{まう}ぞ。」「オ、此^この清^{きよ}貫^{つら}こそ敵^{かたき}なれ。」入^い道^{どう}親^{おや}子^こ仰^{おぼ}天^{てん}し、「一^{いっ}圓^{げん}に心^{こころ}得^えず、何^{いか}様^{さま}仔^ま細^{さい}候^{まう}はん、承^{うけたまは}らん。」と、眉^{まゆ}を聳^{ひそ}めて申^{まう}しける。清^{きよ}貫^{つら}涙^{なみだ}をはらくとこほし、ありし段^{だん}々^く心^{こころ}底^{てい}を精^{くは}しく語^{かた}り、「宮^{みや}此^この所^{ところ}にましますとは存^{ぞん}ぜず。御^{おん}行^{ゆく}末^{すえ}の仇^{あだ}と思^{おも}ひ、不^ふ便^{びん}ながらも討^うつたりし、忠^{ちゆう}はかへつて不^ふ忠^{ちゆう}となり、仇^{あだ}は情^{なさけ}となつたりし、短^{たん}慮^{りよ}と云^いひ龜^き忽^{こつ}と云^いひ、面^{めん}目^{もく}も候^{まう}はず、今^{いま}は恨^{うら}みを晴^はれ給^{たま}へ。」と、太^た刀^{ちゆう}を逆^{さか}手にすばと抜^ぬき、既^{すで}に自^じ害^{がい}と見^みえける時^{とき}、親^{おや}子^こ左^さ右^{ぎゆう}に取りつき、「なう清^{きよ}貫^{つら}殿^{どの}、我^{われ}々^れも侍^{さむらい}なり。一^{いっ}家^か命^{いのち}を抛^{なげ}つ上^{うへ}は、さもしく悔^{くや}み残^{のこ}るべきか。大^{だい}事^じを抱^かへてこれしきに死^しなるとは、狼^{ろう}狼^{ろう}へしか、但^{たゞ}しは狂^{きやう}氣^きか。さあ死^しなれうば死^しんで見^みよ。」と、様^{さま}々^々宥^{なだ}め止^{とど}むれば、思^{おも}ひきつたる清^{きよ}貫^{つら}も、理^りに詰^つめられて死^しなれもせず、生^いきても居^ゐられず殺^{ころ}しもならず、三^{さん}人^{にん}目^めと目^めを見^み合^あはせて、涙^{なみだ}を流^{なが}すぞ道^{だう}理^りなる。早^{はや}東^{しの}雲^のに及^{およ}びし時^{とき}、右^う大^{だい}辨^{べん}早^{はや}廣^{ひろ}、青^{せい}侍^じばらに物^{もの}具^ぐさせ、直^{なほ}姫^{ひめ}の老^{らう}母^ぼ同^{おな}じく若^わ君^{きみ}奪^はひ取り、陣^{じん}頭^{とう}に引^ひ立て、千^{せん}手^{じゆ}が屋^や敷^{しき}を取りかこみ、「御^ご勘^{かん}當^{だう}の蟬^{せみ}丸^{まる}をかくまへし段^{だん}、逆^{さか}鱗^{りん}斜^なならず。太^{たい}平^{へい}の君^{きみ}が世^よに、事^{こと}を好^{この}むはしれものなり。とうく蟬^{せみ}丸^{まる}直^{なほ}姫^{ひめ}を渡^{わた}せ。異^い議^ぎに及^{およ}ばば先^まづ一^{いっ}番^{ばん}に、彼^か奴^{やつ}らを殺^{ころ}す。」と、刃^{やいば}を胸^{むね}に差^さ當^あて、「さあ返^{へん}事^じは如^い何^かに。」と、聲^{こゑ}々にめき叫^{さけ}んでよばはりける。忠^{たつ}光^{みつ}親^{おや}子^こ清^{きよ}貫^{つら}も、人^{ひと}質^{ぢち}にあぐみ果^はて、左^さ右^{ぎゆう}なくきつても出^いで難^{がた}く、如^い何^かはせんとひしめきて、兔^と角^{かく}時^じ刻^{こく}延^のび行^ゆけば、「エ、緩^{ゆる}慢^{まん}し 軍^{いく}神^{さかみ}の手^た向^む草^{くさ}、夫^それ突^つき殺^{ころ}して切^きり入^いれ。」

の所爲なんめり、追つ驅けんとはしたりしが、宮の御事氣遣はしく、立ちもやらす居もやらす、蟬丸も直姫も、慌てふためき給ひける。今を限りのばせをの前、宮をつくろ、見参らせ、苦しける息をつき、ム、夫れなるは蟬丸様、直姫御前とは御身の事か。怨めしや恥かしや。偽り多き御一言、誠と思ひ身を焦し、戀に心を悩まして、有られぬ思ひに狂ひしも、唯一筋に思ふ故。君が戀路の障りならば、思ひ切れとは宣はて、誑り殺さへ御計策か、餘りに酷き御心。情の道はさなきもの、なう憎うて人には惚れぬぞや。果敢なの戀に朽ち果てん名こそ惜しけれ。さりながら我が里にお宿を召すも他生の縁、草の陰にて君が爲、悪しかれとは祈らまじ。詞の山縁と思しなば、餘の人千度百度より、君が一度の手向草、露の命は惜しからず。なう父上様兄上様、宮の御事偏に頼み奉る。名残惜しの母上様。南無阿彌陀佛と云ふ聲も、眠れる花の夕の秋、十七歳を一期として終に果敢なくなりける。親子は夢とも辨へず、縋りついて泣きければ、蟬丸直姫聲を上げ、さりとは覺えなし。恨みを晴れよ免して呉れよ。不便の者の心や」と、抱きつき縋り伏し、泣けど叫べど甲斐ぞなき。物の哀れの限りなり。清貫案に相違して、今は堪へかね案内し、斯様々と云ひければ、「聞き及びし清貫殿か。先づ此方へ」と請じける。清貫人々に對面し、「甲斐々々しくも御かくまひ、我が身にとつて祝著」と、禮儀濃かに相述べ、「先づ以て御息女不慮の最期、御愁傷察したり。さりながら此の敵は知れ申す。本

ひ逃にけんとす。ア、くこれく、苦しからず。我われは田舎あなの旅人りよじんなるが、雨あめを凌しのぎて罷まがりある。承うけたまはれ
ば大内方おほうちがたの人様ひとさまとや、拙者せつしやどもは田夫野人でんぶやじんの遠國者えんごくもの、殿上てんじやうの交際まじはりも夢ゆめに見みた事も候ごころはず、國元くにもとの土産みやげ
に、語り聞かたかせ給たまへ。」とある。ばせを打笑うちわらひ、「田舎あなのお衆しゆは、何いづれも左様さやうに宣のたまへども、さして變かはり
し事こともなし、絲竹詩文和歌いとたけしぶんひかの道みち、取別とりわけ流行はやるは濡事ぬれこと。」と、莞爾にっこと會釋あしやくし申しける。清貫きよつらと恍とほけた顔付かほつき
にて、「エ、野のでも山やまでも棄すたらぬは戀こひの道みち、定めし上藤じやうらふかさま様も、さうした色候いろごころはん、さあく聞ききたし聞
きたし。」と云いへば、一樹じゆの宿やどりも他生たしうの縁えんと、包つます語かたるうたてさよ。「恥はづかしながら自みづからは、禁中きんちゆう
の美男びなん蟬丸せみまる様に思おもひを懸かけ、様々さまざま心こころつくし舟ふね、引ひく手數多たまたまの殿とのなれど、さ、の一夜ひとよの珠霰たまあられ、轉まろび寢はん
との約束やくそくを、由よしなき女をんなにさへられ、遂つひに思おもひの晴間はれまなき、涙なみだの雨あめに身みは朽くつる。念力ねんりき岩いはを通とほすとの、
譬たとへに儂いつはりなきならば、死しぬるとも生いきるとも、此この無念むねんは晴はらすべし。エ、面おもて伏ふせく惜をししや。や、よ
しなの間とはず語り、穴あな賢人かしこひとにな洩もらし給たまひそ。」と、又またむせ返かへりせき上あげし、袖そでは時雨しぐれに争あそへり。清貫きよつらと
つくと聞きくからに、「なう恐おそろしの一念ねん、終つひに蟬丸直姫せみまるなほひめの仇あだとならんは必定ひつじやう、如何いかなる事ことをか仕出しだし、
御命おんいのちに障さりあらば、後悔こうかいに甲斐かひあらじ。」と、近頃ちかごろ不便びんせん千萬まんながら、太刀たち抜き潛ひそめ取とつて引寄ひきよせ、胸元むねもと
を刺さし通とほす。「なう悲かなし人殺ひところし。」と呼よばはる聲こゑに、親子おやこの者門ものもんを開ひらき飛とび出いづる。悪あしかりなんと清貫きよつら
は、篠しのの小藪こやぶにかけいり、しばらく潛ひそみおはしける。母ははは繩すなりて悲かなしめば、入道にふどう親子おやこも敗亡はいもうし、盜人わすびと

け、宮の御手を引き参らせ、おのが宿所に歸りける。既に其の日も暮れ過ぎて、左衛門の督清貫は、蟬丸落ち失せ給ふと聞き、京近邊を尋ね廻り、木幡の里に著きけるが、草鞋切れて行き暮し、村雨しきる今宵しも、宮ましますとも知らばこそ。千手が門の茅葺に、晴間をしのぎ立たれけり。雨にこまれる夜半の鐘、霧の絶間を透し見れば、女姿の振袖も、いと忍びたる氣色なり。木陰に立退き見給へば、彼の女門の扉を忙しけに、「物申さん」とぞ叩きける。千手親子は、「すは追手よ。」と驅け出で、「夜中の案内何者。」と云ふ。「なうさ宜ふは兄上か父上か。ばせをの前にて候が、傍輩の譏にあひ、御所を紛れ出で候。爰開け給へ。」と云ふ聲に、母は驚き、「扱は我が子が懐かしや。」と、開けんとなれば父の入道、「ア、暫く、大事は油断より起るぞかし。宮を隠まへ奉り、夜中に門を開かん事不覺の至り。これ／＼ばせを仔細有つて、夜中に門を開く事は叶はず。今宵はそれにて明せ。明けなば内へ入れん。」とあれば、「こは心得ぬ仰せかな。如何なる憎しみ候ぞ。是非開けて給へ開け給へ。」と、かき口説きてぞ歎きける。「いや／＼憎しきはなけれども、今宵門を開きては、親兄が侍立たず。仔細は明朝語るべし。はや夜明まで程もなし。これを片敷き明せ。」とて、うちより小袖を投げ出せば、ばせをは力なく／＼も、衣引被ぎ臥し居たり。清貫ばせをと聞くからに、「彼奴こそ彼の丑の時参りござんなれ。大内の有様尋ねん」と、そろり／＼と傍に寄り、作り聲して、「まうし。」といへば、「ア、恐。」とい

事は是非もなし、見奉ればけしうは有らぬ御有様、怪しや語りおはしませ。」
「オ、我は當今第四の宮
蟬丸と云ふ者よ。これなる女は直姫とて、踏みも慣はぬ若草に妻もこもれり。追風の追手も急に來る
べし。萬事は頼む。」と宣ひて、又御涙にむせ給ふ。「ハア扱は蟬丸の宮にてましますか、某は千手太
郎忠光とて、古はかけ鞍にも乗りし者、殊に某が妹は、女院様のお末の奉公仕る。然らば大内
縁と申し、數ならぬ某を、かかる高位の御頼み、一命も惜しからず。父は千手入道とて、年まかり
よつたれども、甲斐々々しき覺えの者、一先づ私宅へ御供申し、仔細は靜かに承らん。いざさせ給
へ。」と云ふ所へ、右大辨早廣兵仗二三十、爰彼處と搜索し來り、「彼れこそ蟬丸直姫よ。搦め捕れ。」
と喚いて懸る。忠光面に立ち塞がり、「これくく、これ扱方々は追手よな。宮の御誤りはいさ知ら
ず。某は千手太郎と云ふ者よ、苟くも頼まれ參らせし。とうく歸れ。」と呼ははりける。早廣大き
に怒り、「宮は不義の誤り故、召捕れとの敕誼なるが、綸言にたてづくは、扱はうぬめは朝敵か。」と
云へば、「いやさ朝敵にもせよ、とん敵にもせよ、武士の一言綸言より重し。頼まる、と云ふからは、
命は君に奉る。悪しくよらば蹴殺さん。」と、力足をどうど踏む。早廣怒つて、「何の二才奴討ち取れ。」
と、むらがりかゝるを飛び退り、矢束くつろけ矢繼ばや、差取り引詰め空矢もなく、雨の如くに射か
くれば、早廣も叶はじと、皆散りくくに落ち失せけり。「オ、さもさうすこれまで。」と、直姫を肩にか

波岸をたゞき、あら恐ろしや、北の方の遺骸、むつくと起き上り、角はたちまち蛇身と成り、鱗を振ひ炎を降らし、浪を蹴たてて、三重捲き上り、鳥居の笠木をくるくく、くるりくとひんまどひ、虚空に向つて吐く息は、只火の雨の如くなり。人々これに怖ぢ恐れ、「わつ」と云うて逃げ散れば、大蛇は川瀬に飛び入つて、「生きかはり死に替り、世々生々に恨みを爲さん。あら恨めしや口惜し」と、云ふ聲ばかりは水底の、そこはかたなく流れゆく。宇治の川霧たえんに、明け行く空と消えてんけり。恐ろしし、凄まじし、最も果敢なし哀れなり、さて戀路は切なるおもひぞや。

第二

爰も戀路に名を立てし、情の峠程近き、木幡の里の片傍に、千手太郎忠光と云ふ者あり。元來ゆしき可取なるが、いま浪人の身ながらも、飢ゑす凍えぬ芝の庵、明暮殺生を樂しみ、尾花鞆に弓とり添へ、今日も狩場に出でける。深草山のすゞ原より、兔一疋追ひだし、弓矢取つて打ちつがひ、左手もちりに放つ矢を、手先下りに射損じて、誰が刈り積みし稻村に、はぶくら込めてすばと立ち、兔は逃れ失せにけり、「弓矢八幡射損ぜし。いで矢を取らん」と稻引き退くればこは如何に、二十許りの殿上人、二八餘りの上臈の、左の袂に矢を受けて、涙に萎れおはします。忠光はつと驚き、知らぬ

んと、堅き約束候へども、奥様せいたうつよきにや、お約束も夢となり、一人焦れ死なんより、斯く祈り申す。」と言ひもあへぬに初めの女、「我こそ宮の北の方、妾を恨むは僻事ぞ。直姫と云ふいたづら女郎のゑ、自らも捨てられし。憎い奴は直姫。」と、きばを鳴らして語らるれば、清貫聞けば餘所ならず、肝を潰して居たりしが、ばせを手を打ち、「扱奥様か。知らでお恨み申したり。戀の敵は直姫一人、いざ打殺し、ともに本意を遂げ申さん。」「オ、尤も。」と、神木に立ち並び、「鬼とも蛇ともなし給へ。」と、肝膽くだき釘取り出し、「これは直姫が兩眼にうつ釘、早つぶれよ。」と丁ど打ち、「これ首の骨胸板、五體腐れ。」とはたと打ち、四十四本の釘の數、筋骨節々つがひく、打つておもひを晴らせよと、躍り上り飛びあがり、ちやうくはたく丁どうてば、釘目より血ながれて、さしもの大木揺ぐにぞ。清貫もゆらくと、漂ふ舟の如くなり。あまりゆられて目眩き、枝踏み外しどうど落つる。二人は驚き飛んで逃ぐるを、北の方の小腕とつて立ち歸れば、その隙にばせをの前、行方も知らず逃げ失せけり。清貫今は堪られず、「これ御臺様、人にこそよれ、はしたなき御振舞、明けぬ前にさあお歸り。」と申せども聞き入れず。「人に知られて此の大願、空しかるとも一念は、死して報いを知らせん。」と、戀に浮名やたちばなの、小島が崎は大紅蓮、逆まく水に飛び入つて、哀れ果敢なくなり給ふ。清貫あわて、「松明々々。」と云ふ聲に里人ども松明提灯星の如く、「爰かしこ。」とぞどよめきける。時に小

よる。宮を墻に持つてこそ、一門親類榮花もあれ。兄が鼻までひしぐるか。夫を寢とられ口惜しうは思はぬか。これ證據を見よ。」と誓紙を出せば、北の方披見あり。宮の御手跡紛れなし。くわつとせき立つ顔面に、血筋は眞紅のあみをはり、髪さかしまに立ちのほり、瞋恚の身ぶるひ齒をならし、「エ、たらされし、口惜しや、恨めしや妬ましや。思ひ知らずや此の恨み、思ひしらせん思ひしれ。」と、天地を睨む兩眼に、血の涙をはらくくく、はら立ちや。」と、すんくに食ひ裂きすて、衛士の焼く火はものかはの、胸の煙はくるくく、狂ひわな、き出で給ふは、恐ろしくも哀れなり。いでや其の頃蟬丸の御乳人左衛門督清貫は、直姫を尋ねん爲、南都を忍び巡りしが、一先づ都に歸るさの、長池より日はくれて、物すさまじき宇治橋の、宮居にこそは著きにけれ。今宵はこれにて明さん。」と、笠を取つて向うを見ればあやしき姿「南無三寶此の社は嫉妬を守る橋姫の、丑の時詣これなんめり、窺ひ見ばや。」と神前の、松の古木に攀ぢ登り、身を細めたる振舞は、宛然梢にさゝがにの、

さぶね詣

蜘蛛の網にあれたる駒は繋ぐとも、ふた道かくる仇人を、思ふはつらし。おもはぬも、ア、ものうしの時参り。仇と情と怨念と、三つの鐵輪に燃ゆる火に、瞋恚の焼木こりもなく、煙くらべん夕闇の、空もとゞろに浮舟の、けうとく立ちし宮柱、人になつけのつま櫛も、おどろの髪も七つ八つ、夜半の

中深く入り給ふ。月かあらぬか茜さす、衛士は篝を焚きさして、さめんとぞ泣き居たる。蟬丸御覽じ、目出度き御遊の折から、希有の落涙心得難し。」と宣へば、烏帽子かなぐり、「これ御覽せ。なう御見忘れ候か。われは一年春日の里にて、假寝のお情候ひし、直姫にて御座候。有りし逢瀬の川水の、よどみくゞて月かさなり。君の御子を生み參らせ、不思議の事にて御父帝様に、老母諸共拾はれ候へども、君の浮名を憚り、夫は死せしと偽り、希世の卿にかしづかれ候が、せめてお姿見まほしく、衛士の男にいでたちし。とても賤しき此の身にて、添ひ奉るは叶はぬこと、血判を染めて給はりし、誓紙も今はよしなし事、唯今焼きすて奥様とは、おなかよし野の初櫻、火花も薫れ。」とにほひ墨、焼べんと偽しを引留め、「明けくれ忘る、ひまもなく、乳人の清貫を尋ねに出し、出家の望みと偽り、妻の傍にもぬる夜なき、我をばむけに此の誓紙、灰になせとは曲もなや。」と、かこち給へば直姫も、袂に抱きつくば川、積る戀しさ逢ふ時は、心おくれに胸さわぐ。そゞろふるひの姿なり。爰に北の方の御兄、右大辨早廣此の體をきつと見て、「今宵の衛士は蟬丸密通の女なり。あれ吟味せよ。」官人舍人我も我もと驅け出づる。聲に恐れて人々は、築地がくれに逃げ給ふ。早廣誓紙を拾ひ取り、「さあ證據は握つた。奏聞せん。」とひしめけば、人目も恥ぢず北の方、「なうはしたなし。宮の御名の立つ事ぞ。穩密にしてたべ見上様。」と、涙にくれて宣へば、早廣眼に角を立て、「エ、言甲斐なし、結構だても事に

くこそ謠ひ出しけれ。「ゆふべ／＼のわが涙川、もしや逢瀬の波枕、それを頼みにうき身をおくるえ。此の年月をえ。」宮驚き御覽あれば、北の方にておはします。お傍によりて、「これ／＼今夜の管絃はれがまし。琴を枕の假寝は、調子もや狂ひなん。誰かあるそれ／＼。」と宣へば、「はつ。」とこたへて女房達、御枕參りする。北の御方つと寄り、宮の御太刀すばと抜き、御長枕引きよせ、二つに丁ど切り給へば、宮は驚き縋りつき、「こはそもいかに狂氣か」と、呆れ果ててぞ坐しける。北の方聞き給ひ、「全く狂氣に候はず。お主様とみづからは、夫婦と成つて二年の、幾夜を重ね候へども、あはぬ縁かや、但しはお氣にいらさるか。つひに一夜も肌ふれて、枕をかはせし事もなし。釋迦でもさうはならぬもの。男持つたも名許りぞ。益もなき長枕。科はなけれど成敗。」と、恨み侘びつ、泣き給ふ。宮うなづかせ給ひ、「オ、恨みさもあらん。いひ出すべき折もなく、今までは打過ぎし。親の命をむかれず夫婦とは成りつれど、われ幼少より出家を望み、一生不犯の願を立て、佛に誓言たてしゆるゑ、是非なき事と斷念めたまへ。」と、ともに涙をながさる。北の御方涙を止め、「ム、扱は左様に候か。然らば妾も出家をとけ、此の世はわづか永き世の、心が誠の夫婦ぞや。今よりみづからも誓文立て、互に心を恥ぢしめて、身を汗さず清淨に、目出度く發心とけ申さん。しかし今宵は誓文がため、一世一度の色牀は、佛もお氣のとほらめ。」と、膝にもたれて宣へば、さすが亂る、花薄、詞に露を慕はせて、簾

給へ。」と泣き叫び、「まつたく捨子に候はず。妾老母をもち候が、今は老木の葉も落ちて、物蔭らせん様もなく、乳房をふくめ養ひ候。此の子が争ひむつかる故、暫時外方にすかし置いて候。聊か捨ては致さぬなり、返してたべ。」とぞ泣き居たる。主上御手をはたと打ち、「扱は捨子にてはなかりしな。子にかへて母をいたはる孝行、賢女ともいひつべし。して汝に夫は無きか。」「さん候。夫は去年の秋霧と、消えても残る佛の、形見は此の子。」と許りの涙も、いづれ由あつて、目元のくらる爪はづれ、育ちのかしき女なり。主上感じ思召し、中納言希世を召され、「窮民を養ふは古の道。彼が老母諸とも、汝に預け與ふる條、大内に誘引し、よく／＼養ひいたはるべし。ついでには斯かる豊年の悦び、天にうたふる兆ぞや。初菊の宴を催し、紫宸殿にて音楽を奏し、五穀豊饒を祝ふべし。」と、世に畏まる御救、仰ぐもおろか三重なりけらし。初霜よ初霜に、をらばやをらん花の宴、菊見の御遊絲竹の、其の役々を別たれし、申にも當今第四の御子、蟬丸の宮と申せしは、天性美男の御器量、天皇御寵愛淺からず。琵琶に妙を得給へり。扱又琴は蟬丸の、北の御方と定めらる。そも此の姫君は右大辨早廣が妹にて、はや十八の秋風も、ふさがで通す振袖や、二つ違ひの爪琴は、似合ひ頃とのしらべかや。「月出でなば管弦を始むべし。」との御沙汰にて、衛士は烏帽子を傾けて、月待つ程の篝火も、優に目出たき景色なり。蟬丸は唯一人、「月や出でし。」と欄干の、奥の渡殿見給へば、琴を枕に女の寢聲、斯

蟬丸

第一

諫鼓苔深うして鳥驚かず、刑鞭蒲朽ちて螢空しく去るとは、いま此の時よ秋津君、延喜の帝の御盛徳、申すもをさく有り難し。治まる國や民草の、猶其の榮え衰へを、直に觀覽有るべしとて、唐土の聖代の巡狩になぞらへ、交野のみ野の櫻狩、今日の紅葉とをりはへて、月卿雲客供奉せしめ、はや警蹕とよばふなる。御狩車の五つ緒も、五つの常の道芝や、恵みの露に轟きて、行幸有るこそ目出度けれ。禁野を過ぎてなぎさの院。賤が門田の八束穂に、竈の煙ほのくくと、戸ざさぬ御代の民百姓、管籥の聲羽鹿の美、欣欣然と悦びて、君が御狩を待ち顔に、空飛ぶ鳥も御車に、羣り慕ひ囀りしは、實に賢王の慈愛、鳥獸にも通じけん。民安全のしるしなり。時に行く手の松が根に、幼き者の泣く聲す。藏人を以て召さるれば、まだ乳ばなれぬ捨子なり。主上御涙ぐませ給ひ、「我國民を憐み育むといへども、子を捨つる邪見の者我が國に有る事、朕が不徳のあやまり。」と、かたじけなくも兩眼に、御涙をぞかけ給ふ。然る所へ十八九なる女房、あわたゞしく驅け來り、「なう其の子返させ給へ。返し

には、恨みも戀もあるべからず。」と、既に危く見えし時、小栗驅けつけ、三郎が兩足かいて取つて伏せ、因果のとゞめ受け取れ。」と、三刀四刀刺し通せば、人々おりあひ、思ひくの恨みの劍、悪魔降伏太平の、太刀風松風吹きをさまりて、枝をならさぬ君子國、五穀豐饒民安全、治まる御代こそ目出たけれ。

當流小栗判官終

たゞ稲妻の如くなり。色の者ども抜き揃へ、三郎に續いて起つ。小栗方の諸侍、鬼王鬼次兩道心、餘さじと身繕ふ。三郎怒つて大音上げ、「おのれ兼氏、たばかつてたゞ一打と思ひしに、仕損ぜし無念さよ。親兄弟も容赦すな。撫で切りて打取れ」と、きばを噛みてぞ下知しける。小栗からくと笑ひ、
「優しき愚人めが智畧だて、腕にも智慧にも、此の兼氏を討たんとは、蟻娘が斧ござんなれ。積りつもありし大悪逆、一門の恨み他門の仇、娑婆塞けのえせ者、片端切つて切り散らせ」と、一文字に入り亂る。何處にてか聞きたりけん、後藤左衛門長刀よこたへ驅け來り、一人も餘さじと真中におつとり込め、此處の眠廊彼處のつまり、打ち伏せ切り伏せ、幕原佛檀庫裏客殿、押つ返し追ひ戻し、善根解脫の大道場、修羅の街に覆し、暫し支へて三重戦ひける。元より一人當千の小栗といひ、後藤といひ、鬼王兄弟手痛く打てば、死武者の惡黨ら、此處彼處に切り伏せられ、僅かに残る奴原も、蜘蛛の子散らす如くにて、はふく逃げ失せてけり。三郎も今ははや鐵壁の力も折れ、大童に戦ひなされ、小藪の陰よりつつと出で、「もとより期したる一命、何時の時を待つべきぞ。小栗こそは漏らしつれ。我一人死なんより、親兄弟に供させん」と、奥をさして躍り入る。横山親子聞くよりも、「天命知らずの大悪人、人手にかけじ」と三人が、一つに抜きつれ取り廻す。三郎怒つてはねちがへ、太郎次郎を兩手に取り、大地に打ちつけ兩足にどうと踏み、大手を伸べて父が胸倉掻い掴み、「親子つれて死ぬる

姫君も、いさゝか恨む色もなく、一の上座に招待あり。横山申されけるは、「照手は親子の挨拶なり。小栗殿の御心底、千萬もつて恥かしし。さりながら必ず恨みを晴れて給べ。皆三郎がすゝめなり。其の證據には、我々意見を加へ候處に、却つて此の如く親兄を追ひ出し、おのれ所知を押領す。とても三郎が首を刎ね、自他の意恨を散じて給べ。」と、手を束ねてぞ申さるゝ。兼氏も慇懃に、「老體といひ親方の仰せ、わけまでも候はず。なにしに意恨はさむべき。さて三郎が我儘を振舞ふとや。シヤ小冠者奴、首ねぢきつて捨て申さん。御心安う思召し、向後隔てあるべからず。」と、既に御酒宴はじまりける。しかつし處へ色を著して十四五人、棺を寺内へ舁き入れ、「上人へ申し上げ候。我々は當國の百姓にて候。然るに此の亡者皆は無縁の者なるゆゑ、拙者ども講中として葬り納めたく候。あはれ御慈悲に御引導頼み奉る。」と、涙を流し申しける。上人聞き給ひ、「もとより出家の役義、殊に無縁とあるからは、安い程の事なれども、たゞ今は祝儀の時節かなふまじ。外を頼め。」と否い給へば、小栗御覽じ、「いや〜某が祝儀には、葬禮こそ吉相なれ。慈悲を下して御引導遊ばせかし。我等も聽聞つかまつ仕らん。それ〜。」と宣ひて、棺を縁にぞ舁かせらる。上人三衣を改め、すでに法事と見えし時、豫てかくやたくみけん、横山三郎太刀ひつそばめ、棺の内より躍り出で、兼氏に飛びかゝり、太刀を胸にあてんとす。心得たりとかんづか取り、三間ばかりかつばと投げ、太刀おつとつて立ち給ふは、

末、なんの其の破らうぞ。オ、分別あり、みづからながらへたる故に、長殿にも難をかけ、身にも愛き事聞くなれば、死しては人に恨みもなし。」と、思ひ定めて銚子を捨て、今朝の蚊帳の釣手繩、わなに結びて首にかけ、「南無阿彌陀佛。」と宣ふ聲、國司驚き驅け出で給へば、ありあふ侍長夫婦、「これは、」と抱きとめ、あわてふためくばかりなり。國司は姫の手を取つて、「捨身とは心得ず。熊野本宮の汲み湯にて、某病惱本服せし。されば車のそへがきに、上下五日の大檀那、常陸小萩とありしゆゑ、命の恩をおくらん爲、さてこそ酌とは望みつれ。よく、見れば面形の、似たる人のありけるが、國は何處。」と宣へば、あつと思へどおし沈め、「妾も殿様は見ましたやうに存するが、實のお名は聞かまほし。」とぞ仰せける。「オ、某は死して兩び蘇生りし、小栗の判官兼氏といふものよ。」「さては夫にてましますか。なう我こそは照手の姫。」「やあ實か。」「ほんに現か。」と、人目もわかず抱きつき、嬉し涙のひまもなき。三世の縁とはこれならん。御物語夜と共に、長にも數の褒美あり。「先づ藤澤の上人に、いざや謝禮を達せん。」と、打連れ積るゆかしさや。よれつもつれつ藤澤の、御寺をさしてぞ三重急がる。さきへ案内ありければ、上人立ち出で、まづ客殿に請ぜらる。一禮終つて鬼王鬼次兩道心、姫君を助けし忠節、妹君の最期の體、問うつ問はれつ盡きしなく、池の莊司が菩提をも、深く弔ひたまひける。然る折節横山は、太郎次郎に誘はれ、面目なけに來らる。兼氏も

娑婆往來ぞ有り難き。即ち上洛朝參あり。本領を安堵して入國の道すがら、美濃國青墓の萬屋長に本陣を召され、「常陸小萩といふ水仕の女を、お酌に出すべし。」との御詔にて、長は用意をしたりけり。末すむ花の染衣も、心うつらず照手の姫、主の仰せのおもければ、今は辭するに處なく、前垂襟脱ぎすてて、情模様の色小袖、追風淺くかをらせて、銚子たづさへ出で給ふは、巫山の神女雲となり、雨となり好し振も好し。三十餘人の女郎も、花の邊の深山木と、景色おされて見えければ、扱は國司の物好きも、見處ありしと聞えける。八十間の長廊下、十六間のおぼしまを、搖ぎ歩ませ給ひしは、晴れざるに何の虹、花を吐くかとあやまたる。一間此方の障子より、國司の姿をつやくと打眺め、天晴器量や殿振や、小栗殿の面ざしに、さても似たりと見る目にも、昔忍ぶの涙かな。「ア、忘れたり。長の御恩を報ぜん爲、お酌には出でたれども、國司も若き御方の、戯れごとも宣はん。たとへ命は終るとも、お酌の外は返答も、せまじとは思へども、此の道ばかりは思案の外、殊に國司が小栗殿の、容に似たるにほだされて、我知らずに我が心、移るまいものでもなし。草の陰なる小栗殿、嗚妒ましうおほされん。出でねばお主の仰せを背く、出づれば女の道を破る。さて如何せん。ア、詮方もなき此の身や。」と、不覺の涙止めかね、たゞ溜息をつくぐくと、暫し案じておはせしが、「いやく國司の權柄にて、如何なる無理を宣ふとも、よもや違背はなるまじき。ア、勿體なや、今まで立てし誓ひの

しみるゝと、其のいつぞやの下紐の、今は昔に解けよかし。解くや柳の眉ねかき、はなひ紐解け亂るれど、誰かは我を慕ひつゝ、噂流れん言の葉の、うたづめ川を打渡り、何故つくる姿見の、鏡の宿も引過ぎて、梢に響く仇浪は、琴の調べか唐櫓の音か、松風の聲でないよの、忍び車がの、廻りめぐるや瀬田の橋、引いつ引かれてひとふた夜、みよを重ねし笹竹の、大津も過ぎて關寺や、玉屋が門に車著く。あはれ此の身が儘ならば、熊野のお山にひき著けて、本宮の湯を引くべきに、宮仕ふ身は力なき、力車の善根も、これまでなり。』とゆふ暮の、松の焚きさし筆にして、『そも數ならぬ美濃國、萬屋長が水仕の下女、常陸小萩といふ女、上下五日の車の旦那、志はおもふ人頓生菩提。』とかき記し、別れて歸る道芝の、しばしが程といひながら、他生の縁これぞこの、救世の船の綱子ども、立ち歸りては、『いざさらば、さらばくく。』と袖絞る、姿も影も遠山の、霧にほのく木隠れて、涙に聲もうはがれし。

第五

菊の流れもこれなれや、生薬てふ熊野の湯、はこぶ他力に引かれ来て、忽ち心身健かに、小栗の判官兼氏と、姓名紛れなかりける。奇なるかな妙なるかな。土中より蘇生して、今又人界に立ち歸る、

照手の姫車の段

忘草わすれぐさがな種たねあらば、我が戀草こひぐさに植うゑまぜて、憂うれきが折々をろくわす忘れなん。片輪車かたわぐるまの綱手つなにも、雌綱雄綱めつなを つなは
 あるものを、ア、如何いかなれば我一人われひとり、世よに長ながらへて先立さきだてし、夫つまの菩提ぼだいを祈いのるにぞ、心こころは物ものに狂くるはね
 ど、姿すがたばかりは物狂ものぐるひ、形見かたみの烏帽子えぼし眉深まゆふかく、はつねの里の我が笹さに、露つゆの白木綿しろゆふきりかけて、引ひ
 や引ひけや此この車くるま、引ひくや佛ほとけの御手みでの絲いと、妙たへなる法のりに青墓あうはかの、長ちやうの門前もんぜんはや過すぎぬ。刈穂かりほの庵いほの夕ゆふ年しづく、
 垂井たるゐの宿しゆくはこれとかや。片破月かたわれづきのかたわれは、落おちても水みづの底そこにあり。あるかと思みえて無なきものは、
 彼かの見みし人ひとの面影おもかげを、夢ゆめに来くるやとまつ葉山はやま、天津少女あまつをとめの空灶そらだきか、雲くもな隔へだてそ、せめて故郷こきやうの空そらを見
 ん。廻めぐれや／＼此この車くるま、廻めぐる輪廻りんゑは離はなるとも、かけし誓ちかひはよも切きれじ。董交すみれまじりの淺茅原あさぢはら、旅衣たびころもつ
 ましなき、板屋いたやが軒のきに風落かぜおちて、萩はぎの裳裾もすそもふは不破ふはの關せき、數多あまたの綱子つなこ聲こゑ々に、「えいさらえい。」と引ひ
 く車くるま、音頭おんどを取りて、引ひかせうぞ。引ひけや干瀾ひがたの羣むら千鳥ちどり、諸聲もろこゑかけてはやさぬか。おひかけ中綱なかづなしめ
 て見みよ。しめて寢ねし夜よの睦言むつことの、耳みみに止とどまり懐なつかしく、美濃みのと近江あふみの界さかひなる、寢物ねものがたりや牀とこの山やま、
 枕まくらの森もりもあはれけに、二人ふたりならぶる夜半よはもがな。ア、／＼一夜ひとよだに／＼、忘れもやらぬ戀こひしさは、何
 時醒つゐめが井いの水深みづふかく、沉しづみて物ものを思おもへとや。沉しづまば沉しづめ、とんと沉しづまん戀こひの淵ふち、まぶちなはてを遙々ほろろと
 横よこぎる嵐あらしさら／＼、さつと左ひだりの振袖ふりそでを、ア、また右みぎの袖下そでしたへ、吹ふきぬくかぜは戀風こひかぜか、玉たまの肌はだへ

の道に心懸け、供養の車を引かんといふ、心いれが殊勝なり。三日の隙を取らする」と、よに頼もし
けにいひければ、女房いよ／＼腹を立て、「これ性悪。みづからも腹ではなし、情は知つた。さりなが
ら、御身が小萩を見る度に、目を細めてをかしい目付が氣に入らぬ。四十五十に餘つて、しほの眼の
時分かいの。エ、笑止な。」とありければ、長は元より律義者、「ア、迷惑々々、それは廻り氣。たとへ
小萩を天人にもせよ、そなたを除けてわき心を持つものか。彼の女に某がしほの目するといはるれ
ども、いかな事／＼、細い目見せた事もなし。此の繰る珠数を誓文」と、くわつと睨みし兩眼は、其
の儘達磨のごとくなり。女房少し柔きて、「なう勿體ない誓文に及ばうか。いやこれ長殿。みづからも
鬼畜にてもあらねども、如何にしても今までは、御身の眼元が妬ましく、思はぬ腹を立ててある。こ
れこれ小萩、後生のこととあるからは、長殿より三日の隙に、妾が二日相添へて、五日の暇取らする
ぞ。車を引いて歸れ。」とあれば、姫君嬉しく思召し、「さて有り難や此の御恩、一度は報じ申すべし。
又もや御意のかはらぬさき、はやお暇と出で給ふ。長は小萩を見送りて、「さても／＼女の身にて、か
く佛法に赴く事、若い者のさりとては／＼、ア、奇特々々」と、しばし感ずる顔ばせに、女房氣をつ
け、「それまた眼元が細うなる。それが嫌ぢや。」といひければ、長は驚き、「はて此の珠数ぢや。」と、目
を見出し、つれて奥にぞ三重入りにける。

の事にて候へば、亂れ髪も見苦しく、櫛取り上げて候なり。流れの事は何時までも御許し候へ。」と、涙とともに仰せける。女房重ねて、「やれ結ふにも時分がある。はや何時ぢやと思ふぞや。ム、合點ぢや合點ぢや。これの長殿が、何とやらん此の頃は、汝を見る目は絲薄の如くなる。合點が行かぬと思ひしに、さてはおのれが長殿を、そゝのかすと覺えたり。こりや長殿には、妾といふおか様ある。サア何として長殿の目を、彼の如く細うはしたぞ。まつすぐに申せ。」といへば、「これは近頃御無理なり。旦那様のお目の事は、みづからは知らぬ。」とある。「ヤイ賣女め、おのれを遣ふみづからが知るまいと思ふか。昨夜長殿の御湯殿しに参りし時、涙を流ししみぐと、口説いたは何事ぢや。サアこれは何事ぢや。」と、覺みかけて申しける。姫君聞き給ひ、「さん候。妾には親夫も候はず。明日をも知らぬ無縁の身。此の頃此の宿に、熊野本宮の車が著いたる由。一ひきひけば千僧供養と申すゆゑ、菩提の爲に車が引きたう候て、三日のお暇給べかしと、御訴訟申して候が、其の外には覺えなし。情は人の爲ならず、さのみに辛くな宣ひそ。」と、又さめぐとぞ歎かる。「エ、つべこべと吐したり〜。あら憎や腹立ちや。」と、鏡を取つて投げつ、胸を燃してぞ怒りける。主人の長立ちいでて、「これ〜女房、さな荒けなくし給ふな。君を思ふも身を思ふとやら、奉公するも身の可愛さ。主も人、下人も人、我々夫婦を便りにて、奉公するではあらざるか。情をかけて使はれよ、年端も行かぬ彼の女、佛

るならば、斯くと傳へよこれまで。」と、あたりの櫛笄押明けて、氷の剃刀取り出し、海松房の黒髪を愛相もなく引上げて、既に切らんとし給ふとき、時鳥一文字に飛び下り、羽風を立てて剃刀はたと打ち落す。「こは如何に。」と取り上ぐれば、又立ち歸り打ち落し、二聲三聲雲に啼き、行方は月ぞ残りける。照手あきれておはせしが、「さては草の陰なる小栗殿、我が黒髪を切らせじと、惜しみ給ひてこの如く、冥途の鳥が止めしよな。思へば夫婦は二世の縁、殿は冥途に持たるものを、男に此の身を任せながら、氣まゝに髪は切られまじ。斯程やつれし我が姿、露の陰より見給はば、いくばく無念に思されん。未來で殿御に逢ふまでは、大事の我が身何の捨てう。よね振仕上げ我が夫に、嬉しがらせて戀若やがせ、かうしてどして。」と一人ごち、鏡にむかひ玉櫛笄、つくらふ顔も中々に、やる方なさのあまりぞや。かかる處へ長が女房、「小萩々々。」と呼び立て、局に入つて火きに怒り、「ヤイ女め、何をひろいで此處に居る。おのれは何が役なるぞ。遊ばせうとて置きはせぬ。流れを立てよといひつくれば、四の五のとて嫌ふゆゑ、下の水仕に追ひ下し、十六箇所の釜を焚き、のほりくだりの客達の、洗足取つて苧をうみて、裏脊戸掃いて朝夕に、三十人の遊君の、化粧の水を汲む役ぞや。女郎どもと同じ様に、化粧粧はあた見られぬ、それ程身にかまふならば、今でもおのれ流れを立てよ。」と、帯おつとり怒りしは、さながら夜叉の如くなり。姫君は赤面し、「御奉公は何事も、残らず仕舞ひ候ゆゑ、女

小萩と名を改め、つひに見もせぬ手業にも、下職は安きならひかや。下の水仕の荒仕事、あらいとほしき心なり。元より長は海道一の有徳人、三十餘人の流れの君を持たれしが、十町彼方の清水より、化粧の水を汲み運ぶ。擔ひし桶の漣の、うき勤めとは思へども、「此の頃聞けば此の宿に、熊野本宮湯汲車の著きたるとや。此の車を一ひき引けば千僧供養と聞きし故、夫の小栗の菩提の爲、我も車を引くべきに、三月のお暇申すまで、長の心を背かじな。皆これ夫の御爲。」と、思ひなほしてしのがる。局々を掃き拂ひ、手洗化粧の玉水を、汲みかへ汲み入れ給ひしが、「口惜しやいにしへは、斯様の上臈を、數多の侍女下婢にて、かしづかれたるみづからが、ひきかへ今は使はるゝ、人の行方は定めなや。ア、さこそ容もやつれつらめ。」と、遊君達が立て置きし鏡臺引き寄せ、一目見たれば、「兩無三寶、色も容も我ながら、更に我とも思はれず。淺ましや花紅葉、月を妬みし此の身がさて、かくとやつるゝものかは。」と、鏡おしやりひれふして、しばしはこがれ沈まるゝ。涙もくもる中空に、若時鳥簷に咲く、樗の花におちかへり、本尊かけたと告げ渡るは、いと涙の種ならし。照手つくゝ聞き給ひ、「實に時鳥は冥途の鳥、死出の田長を啼くとかや。彼の鳥ならば我もまた、冥途の夫に逢ふべきもの、なつかしや羨まし。」と、少時間き入りおはせしが、「ア、よく／＼思へば、思ふ人を先立てて、何樂しみに世を立てて、誰に見すべき髮容、椽をかへて一筋に、菩提の道に入るべきぞ。汝も心のあ

其の故は愚僧の不思議の靈夢にまかせ、上野が原の閻魔堂へ參詣せしに、一つの墓より餓鬼一人顯はれ出で、指を以ておのれが胸を教へしが、非業非業、定業不定業といふ文字すわれり。正しうこれは久しき土葬の亡者なるが、善根にひかれ、閻魔大王の感應にて、再び沙婆に蘇生る。夜前の夢は此の告げぞと、即ち餓鬼を彼の輿に乗せ連れ歸り候。佛法不思議、方々の初發心の善知識、御覽せよとぞ仰せける。兄弟輿をさしのぞけば、皮肉もとけて骨あらはれ、炭の折れの如くなり。息はあれども聲出でず、六魂氣血通はねば、見聞闇に異ならず。昔は如何なる人やらん。見る目もいぶせく淺ましし。上人重ねて、「一度生を變へて冥途に至り、久しく土中にありたる身、たとへ息のあればとて、たやすく元の人間とはなり難し。熊野本宮藥の湯を汲み寄せ、一七日沐浴し、反魂の法を行ひ、壯年の形となさん。」と宣へば、鬼王兄弟承り、「これも佛の御奉公。修業の始めに、我々本宮の溫泉汲み取つて參らん。」とぞ申しける。上人聞き給ひ、「殊勝なり。さりながら他力こそなほ藥の湯。桶に車をしつらひ轡に捨て、一ひき引けば千僧供養、二ひき引けば萬僧供養、大乘慈悲の車の檀那、他力をもつて汲み寄せん。いざ此方へ。」と宣ひて、にはかに車を三重用意ある。斯くとはいさやしら玉の、照手の姫の御行方、傳へ聞くだに涙ぞや。鬼王に助けられ、父の館を忍び出で、彼方方にさすらひて、何を頼みに憂き年月をながらへし、命も辛き美濃國、青墓の宿萬屋の長が許に買ひ取りて、常陸

姫。何につけても主と頼みし横山一家、恨めしうは思はぬか。如何なる悪業悪縁に、主従とはなりけるぞ。前世の約束思ふにぞ、後の世とでもさぞあらん。」と、またさめくと歎きしが、「思へば運の盡き目なり。憂き事聞いて何かせん。百年も千年もながらへしは同じ事、寄れ刺し違へん。」「尤も。」と刀を抜いて取組みしが、「やれ待て弟、死して心は安まれず。誰を頼みに照手の姫、却つて憂日に逢ひ給はば、助けて徒となるべきぞ。さりながら館へも歸られず。此の太刀無下にもさされじ。」と、おつとり直し髻を、ふつつくと切り拂ひ、「太刀諸共に西に雲、紫深き藤澤の土人にゆかりあり。御弟子になつて後世菩提、決定往生祈らん。」と、涙ながらに出でて行く。人間萬事夢の世の、夢も夢なり夢の中、恨みも仇も樂しみも、戀も情もおしなべて、さむれば同じ現ごと、皆知れども住めば憂世なり。

第四

名のみ鬼王鬼次が、心は佛の道に入り、浮世の絆さんぎりの、鬢も亂る、藤澤や、御寺をさして急ぎける。折しも上人力者共に、張興昇かせ御歸寺ある。兄弟門前に跪き、「御剃刀を戴き候。」と、發心の趣を一々残らず申し上ぐる。上人横手を磔と打ち、「誠に各は好き折柄の發心、佛縁深く候。

し。」と立ち歸り、以前の處にどうど居て、「口惜しき身の上や。」と、五體を投げて泣くばかり。寄せ来る浪に下り没り、「なう御姉妹、愚癡愚蒙の兄め故、非業の死を遊ばせし、御心底こそいとほしけれ。なまなか某弟に生まれ、同じ恥辱に沈まん事、何程無念に存するなり。腹かきやぶり悪鬼となり、敵を取つて參らせん。」と、自害せんとせし處を、鬼王驚き走り出で、「やれ粗忽すな死するな。」と、すがりつけば飛びさり、「死に損ひの卑怯者。」と、太刀振上ぐるを、「先づ待て弟、一言聞け。疑ふは至極せり。全く照手様を殺しはせず、都方へ落し參らせ、人に似たる石を沈めて三郎をたばかりし。以前斯くと知らせたく、心はやたけにありしかど、三郎が聞く前なれば、明けてこそ言はぬとて、左程某を狼狽へしと思ふかや。恨めしやつれなし。さりとては聞えぬ。」と、涙をはらくとぞ流しける。鬼次つと寄り、「なに助けしとや。然らばいよく聞えぬわ。など一旦我にも知らせ給はぬぞ。」
「オ、談合せんとは思ひしかど、かばかりの人心、兄弟とても頼まれずと、互の底意疑ひし。これも何故お主の爲、許してくれよ弟。」と、涙を流し申しける。鬼次道理に至極して、「扱は左様に候か。よしなき人に奉公し、かかる憂目を見聞く事は、冥加にも盡き果てしか、口惜しの身の上や。」と、兄弟手を取りすがりつき、聲も惜します歎きしが、鬼次涙を押へ首を下け、「最前の慮外雜言、天の照覽畏れあり。眞平御免候へ。」と、打ちしをれてぞ申しける。「オ、何事も忠功ぞや。たゞあへなきは更衣

えたか。これなうお主なれども、媒の科人なれば、殺さでは置かぬ。サア姫君死に給へ、早死に給へ。」と責めければ、三郎も聲をかけ、「死神ついて死にたがらば、殺せ／＼。」と怒りける。姫君なほも思ひ切り、「なう死ぬるに人は頼まぬ。」と、飛び入らんとし給ふを、鬼王また抱きとめ、「狂亂か勿體なし。是非死なせぬ。」と引留むる。「やれ鬼王、我を留むるほどならば、など姉様は殺せしぞ。言譯あらば我も思ひ留まらん、何と／＼。」とつめ給へど、三郎が聞く前なれば、落したりとは言はれもせず、更衣はなほ殺されず、千々に亂るゝ鬼王が、心の内こそ不便なれ。姫鬼王をつき除けて、「おのれが様なる愚人奴に問答も無益。これ三郎殿、婿といひ妹といひ、御身の心一つにて、多くの人を失ひ、天命思ひ知り給へ。なう姉上様唯今追付き參らせん。一つ蓮。」と手を合はせ、浪に飛び入り給ひしは、さても是非なき次第なり。鬼王兄弟三郎も、「あつ。」と許りに詮方なく、手をあけてこそ居たりけれ。鬼次膝立てなほし、「こりや鬼王、一人ならず二人まで、目前主を失ひしも、御邊が一心違ひしゆる。兄と思はぬ。主君の敵遁さぬ。」と、太刀抜きそばめ飛んでかゝれば、鬼王は道理にむかふ太刀先なしと、彼方此方へ逃げ廻り、苦屋の陰に隠れけり。鬼次せいて見失ひ、走り歸れば横山三郎、「緩急者。」と打つてかゝる。「オ、主も下人もこれまでなり。餘さじ。」と切り結び、受けつ流しつ戦ひしが、死狂ひの鬼次が、はげしく討てば三郎も、かなはじと逃けて行く。何處までと追つかけしが、「エ、よしな

王間きもあへす、「御意に任せ、此の沖へたゞ今しづめにかかけ、失ひつるわ」と言ひければ、更衣夢とも辨へす、「なう情なや悲しや」と、其の儘其處に伏し轉び、「わつ」と消え入り泣き給ふ。されども鬼次のみこまず、「なんと眞實殺せしか」「鬼王詞をあらけ、「はて異な事に念をいれる。何の偽りあらん。これ三郎殿の御日の前にて殺せし。」といへば、三郎、「我が見る前にて殺させしが、それが何とした。」言ひもはてぬに鬼次、大地をはつたと打ち、「ハッア南無三寶しなしたり。これ兄者人、相傳の主君を殺し、能うもく生而下け、我々に物言はんとは思はるゝぞ。蟲同然の人外を、兄に持つたる無念さよ。エ、淺ましや腑甲斐なや。最早侍はすたつた。命が惜しくば直に彼の船に打乗り、海賊して世を渡れよ。」と、牙を鳴らして申しける。鬼王氣色を損じ、「兄にむかつて推參千萬。おのれが智慧をかつて、我侍を立てうか。殺すもお主、殺せとあるもお主、なれども姫君には、小栗殿と正しう密通の科人、助け置いてはお家の恥。事を知らずば黙つて居れ。」と、大きに怒つて申しける。更衣姫聞き給ひ、「何姉上を科人とや。其の科のはじまりは義が媒したりしゆゑ、科人はみづからぞ。殺して給へ三郎殿。さあ殺せ兄弟。」と、聲を上げてぞ歎かる。鬼次聞いて、「オ、御尤も、姉君様を先立て言譯は立ち申さじ。諸共に」と引き立て、海へ投げんとせし處を、鬼王飛びかゝり、鬼次を取つて投げはつたと睨み、「ヤイサ畜類奴、相傳のお主を殺さんとは如何に。」鬼次からんゝと笑ひ、「ム、今眼が見

こそあるべけれ。」と、とつくと思慮をめぐらし、「如何にしても殺されじ。さりながら小栗殿なくなり給ふと申しなば、よも姫君もながらへんとは宣ふまじ。所詮小栗殿、都へ歸り給ふと、こしらへすかして落し申さん。」と、とつとおいつ分別し、一人首背き歸りける、所存の底ぞ三重奥深き。過ぐる月日と散る花と、あだ競べして行く水に、暫しばかりは漂ひぬ。あはれ命のつれなさや、佛心の鬼王は、照手の姫を心安う落し參らせ、人に似たりしお庭の石、君の振袖ふりかけて、さながらそれとゆふ暗に、松明背け梶取つて、岸の岩根を漕ぎ流す、心の内こそ哀れなれ。三郎氣遣ひにや思ひけん、岸端に驅け來り大音上げ、「やあ其の船は鬼王か。何と姫は沈めしか、實檢せん。」と呼ばはりける。鬼王すはやと思ひ、「唯今沈め奉る。これ御覽ぜ。」と松明上ぐれば、三郎遙かにすかし見て、「ム、遠目の加減か姫が小さく見ゆる。聲を立てさせ聞かん。」といふ。鬼王涙くみたる體にして、「いや御涙にせかれ、御聲も立ち給はず。痛はしの御有様や。」と、すがりついて空泣す。「よいわく早く沈めよ。」其の時鬼王ふなばたに跪き、「御身より出でし不義の科、人ばし恨みましますな。サアたゞ今が御最期ぞ。南無阿彌陀佛。」と引立て、逆巻く浪間にどうと沈め、船に平伏し泣き居たり。三郎悦び、「出來た出來た。來れく。」と招きければ、面なけにしておも梶や、漸う陸にぞ上りける。然つし處へ弟の鬼次、更衣姫の御手を引き、息をはかりに走り著き、「これく鬼王殿、照手様は如何に。」といふ。鬼

る最期とかや。横山一家手を叩き、「さつても好い氣味／＼。」と、一度にとつとぞ笑ひける。「さて兼氏の死骸を、上野が原の土中に埋め。」と、下人共にいひつけて、立ち歸らんとせし時、三郎父が袖を控へ、「彼奴らを殺し候へば、妹の照手、夫の敵と我々を恨みんは必定。然らば屋の内に敵を設け何かせん。御思案あれ。」とぞ申しける。郡司打ちうなづき、「オ、氣がついた。いしくも申せし三郎。」と、譜代の家の子鬼王を招き、「おことは夕さり人知れず、照手の姫を相模が沖へしづめにかげよ。」と申しける。鬼王はつと仰天し、「科なき人を毒害さへ、都の聞えはかりがたう候に、骨肉哀愍の姫君を失ひ奉れとは、御家の破滅かや。たとへ御科候とも、譜代の御主を討てとある、御請はえぞ申すまじ。よく／＼御思案候へ。」と、涙を浮べ教訓す。三郎大きに怒り、「なまぐさき諫言だて措きをらう。横山が内に己ならで人あるまいか。外の者にいひつけん。いざ立ち給へ。」と立たんとす。鬼王、「しばし。」と押留め、「一旦は申せし事、餘の者よりは某が失ひ奉らん。」とぞ申しける。ム、しかと汝が殺すべきか。「中々の事。」「然らば仔細はあるべからず。我も行きて檢分せん。少しにても容赦せば、おのれを共に曲事ぞ。サア親父お歸りあれ。先づ一人は仕舞うた。」と、どつとどよめき歸りける。天罰如何恐ろしし。斯くて鬼王兔角思案に落ちざれば、「口惜しの奉公や。」と、途方を失ひ居たりしが、「先づ弟の鬼次に談合せん。」と、つつと立ち、「いやまでこれを見るにつけ、兄弟とても頼まれず。分別

處に意恨を結ぶべき。和談の酒盛いたすべし。それ／＼。」と宣へば、池の莊司承り、銚子杯取り出す。兄弟詞を揃へ、「中なほりの法なれば、其のお銚子を此方へ賜はり、又我々持參の酒を御邊へ參らせ、二つの杯にて、兩方一度にさし申さん。」と言ひければ、鳩毒ありともしろ金の、銚子を取り換へ給ひける。御運の末のうたてさよ。彼方の酌は鬼王といふ男、此方には池の莊司、小栗杯と給へば、先づ三郎が杯とり、一度に酌んで差し給へば、兩方互に押戴き、さらりと干して兼氏は、太郎次郎に差し給ひ、三郎が杯池の莊司にすんどさし、「サア意趣も恨みも川へ流して、一つ一つ。」といひければ、莊司手盛にだんぶと受け、ずつと干して銚子杯からりと捨て、「南無三寶許られし。やい横山、汝等が持參の酒、飲むより早く五體にしむ、正しう毒酒と覺えたり。詞にほだされ、心を許せし後悔さよ。いで一打。」と、太刀に手をかけ抜かんとしけれども、五臟六腑惱亂し、九穴より血をはいて、彼方此方へ反り返り、十八歳の夕の露、終に果敢なくなりける。強かりし兼氏も、面の色は紫立ち、刀を抜きは抜かれしが、打上げん力もなく、「エ、卑怯なり横山。押寄せ腹を切らせず、酒毒にて意趣を晴らさんとは、下郎に劣りし奴輩、刺し違へん。」と立ち上り、心ばかりは高砂の、松の翠とはやれども、呼吸も斷れて弱々と一人間僅か五十年、戀のゑ果す一生に、せめては妻を一目見ん。照手戀し懐かしや」と、二十三を一期として、かつばとまろび失せたまふ、痛はしかりけ

栗の判官兼氏の、自然佛智にかんたくし、四足を折つて禮拜し、三度嘶きしべ／＼／＼と、元の
庵に立ち歸る。本心誠を備へては、六根自在の妙ありて、鬼畜も我に従へり。いたれるかな盡せるか
な。學んで知るは智にあらず。生れながらの善は善、隠れし徳は明らけき、古人の一句誠ぞと、聞く
人たゞするばかり。

第三

横山一家の人々は、和睦の宴を催さんと、酒杯とり持たせ、小栗の館に案内す。もとより不敵の小
栗殿、兄弟に對面し、二何の爲のお出でぞやと申さる、郡司扇を笏に取り、參ら段別儀ならず。貴
公とわれ不思議の縁を結びし處に、御分とは存ぜず倅ども、去年不慮の口論致し候由、さぞ御覺え候
べし。それ故過ぎし夜初めの參會に、兄弟はつと當惑し、何とやらん品悪く、迷惑の由申し候。知
らぬ以前は是非なき事、斯様の縁者となるからは、昔の意趣は残るべからず。和睦の杯いたごせん
爲、酒杯を持參仕る。老いたる郡司が手を下ぐる。これに免じて貴方よりも酒杯をいだされ、兩方
二つ杯に、中なほりして給へ小栗殿」と、残る方なく申しける。兼氏も喜悅あり、「御慇懃の御出で
過分に候。誰とても知らぬ以前は、言分すまじきものならず。ことにいづれもこれまでのお出で、何

櫻もこきまぜて、押し分け掻き分け、露も雫も打拂ひ、いや打ちはらひはらく、はらりく〜と行く
先に、霧立ち渡るきりはらか、岩壁苔に埋もれて、岩角道をさしはさむ。行かんとすれば躡り、越
さんとするも遙かなり。岩根葛に手をかけて、錠蹴放し飛び上れば、馬は岩間を三重かいくる。稻
妻よりもなほ早く、其の身輕けにのりく、乗つた姿の、やれさてしをらしや。しばし歩ませ聲をか
け、弓手に控へ、馬手に押へてしつとと打つ、雙の錠の強弱や、馬と人との息遣ひ、しやんとしめ
たる諸手綱、肩から腰から手の内に、一つの秘傳有明の、空行く月に鞭を揚げ、二千里刹那の駿馬の
曲、これをなづけて櫻狩、父母のたづなといふとかや。りうくわうさうくわう馬瑠の鞭、手綱掻い繰
りくるく〜、ゑりくりゑん所の馬場の堤、乗り上げ乗り下け降り下し、跳りあがればしつかと留
め、乗り静めては驅け出す。馬は名馬乗者は達者、轡の音がりんく〜、松吹く風は颯々、さつと
柵引く馬煙、土を蹴立てし其の勢ひ、龍吟すれば雲起り、虎嘯けば風騒ぐ、末野の草葉胸分に、踏み
亂し踏みしだき、雲雀の牀の芝繫ぎ、とある處に三重乗り静め、ひりらと飛んで下り給ひ〜かく口弱
き此の馬を、など鬼鹿毛とはつけられしぞ。御免候へ横山殿。と、袖かき合はせ一禮ある。馬上の見
事さ鞍の内、前代當代末代に、ためし少なき達者かな。いや〜乗つたり〜と、上下思はず聲を
揚げ、どつとどよめく其の音は、暫く鳴りもしづまらず。馬は馬頭觀音の、神通威力あるゆゑに、小

ぎ、貫木蝦鉸しつとと下し、名にし負うたる鬼鹿毛や、鬼一口と悦びて、まへがきして高嘶き、天にも響く許りなり。池の莊司つとと寄り、蝦鉸擱んで、「えいやつ。」とこじ放し、八ツの鎖をねぢきりねぢきり、廢の出し口しとと打てば、大力に引立てられ、さすがの鬼鹿毛頭を垂れ、身の毛を伏せたる氣色なり。小栗御覽じ、「遂に召されぬ馬ならば、鞍器具も候はじ。裸脊に乗つて見せ申さん。」と、しめの髪を掻い擱み、ひらりと乗つてしづくと、歩ませ給へば横山一家、膽を消し苦り切つて見えけるが、三郎心に思ふ様、力に任せ乗つたりとも、曲乗は叶ふまじ。恥をかかせて腹癒んと、棊盤架梯取り出し、「さあ一曲。」とぞ望みける。「易かなれ殿ばら達、馬上の達者御覽ぜよ。」と、犬追物の拍子にか、つて、先づ平地をぞ 三重

小栗鬼鹿毛曲乗の段

乗つたりける。抑馬に七箇の祕事、三箇の手綱五箇の鞍、陰陽の鞭、朝嵐大轟小轟、運び延足地取足、霰ながしといふ曲を、乗り返し引つ返し、祕曲を盡して乗り給ひ、なほ馬場乗を見せんとて、櫻の馬場に 三重乗り出し、手綱取りのべ悠々と、横ぎる風に雲の足、天にも上る氣色あり。漢の光武は一日に千里の馬を得たりつる、昔を我が身の上にしら泡嚙ませ、お、さ、せ、遙かに行きて引つ返す、鞍の山形山近く、踏みもならさぬ馬場のうち、砂磔まじりの石あらく、繁り合ひたる袖摺松、柳

「増殿にへんべん。」とぞ申しける。「いやあまり急に候へば、此處は一ツ押へ申す。」とありければ、三郎からくと笑ひ、「さても都の小栗は、物の作法を知られぬよ。かかる儀式の杯を、押ふるといふ事は、當國にははやらぬ。」といふ。「ム、それは兔も角も、我も詞は無になされず。是非押へた」とつきもどせば、「いやさ、嫌というては千度もいやなり。」と、膝立て直せば池の莊司つと出で、「何れも御免候へ。某は小栗が下人、池の莊司と申す者。杯に推參なし。さらばお合ひ仕らん。」と、三獻ほして、「これさ御自分にも三杯。」と、膝の上に乗り懸り、八方を睨め廻し、太刀ひねくつて申しける。三郎戦々顫ひながら、三獻酌んでほしけれど、半ばは顫ひ翻しけり。父の郡司は始終を知らず、「杯の張合ひ、必ずお氣にかけられな。某收め申すべし。祝うて花増殿、御肴。」とありければ、三郎聞きもあへず、「とてもならば我が家に、鬼鹿毛といふ荒馬あり。一馬場所望」と言ひ出す。太郎次郎も合點し、鬼鹿毛に喰ひ殺せん幸ひと、「所望々々」と申しける。照手驚き、「なう其の馬は、遂に乗りたる事もなく、人を食らふ荒馬ぞや。平に無用。」と宣へども、「しや何事か候はん。御身も出でて見物あれ。さあ御案内候へ。」と、打連れ馬場に入り給へば、夜はほのくと三重明けにけり。「すはや小栗の最期を見ん。」と、横山一家老若男女、我もくと見物す。かくて兼氏主従は、廢の體を見給ふに、八角の楠四方にゑり込み、四寸四角の鐵にて、蜘蛛手格子を切り組み、鎖を以て八方へ繫

の譽、先づ御使を立てらるべし。」と、装束改め用意して、照手の局に入りける。夜も闇になりし時、父上より見參の御使と申しければ、姫君悦び、烏帽子直垂著せ參らせ、席を設けて待ち給ふ。時刻移さず人々は、引出物取持たせ、乾の出居に移らる。男なればとて、横山を上座に移し、互の禮儀慇懃に、千代の堅めの杯は、親しみ深うぞ見えにける。三郎暫く思案し、火影にすかしよくよく思へば、彼奴は日外口論したる男なり、「南無三寶」と、太郎次郎に目を合はせ、太刀に手をかけ身構ふ。小栗はもとより覺悟の上、後藤にきつと目くはせて、事もあらばと氣をくばり、一座しらけて見えにけり。されども小栗手竝は見せつ、何事かあるべきと、「此の杯を三郎殿へ、目出たく慮外申さん」と、おぼやうにさし給ふ。三郎むつとしながら、ちやうと受け、此の酒つらに打ちかけ、飛びかゝつて斬るべきか。冤や斯くやと分別し、胸をさすつて居たりけり。留守に残りし池の莊司、何時になき胸さわぎ、「あら氣遣はし」と、腹巻取つて打懸け、飛ぶが如くに驅けきたり、中門をつつと入り、障子のすきより見てあれば、横山一家居流れて、顔色かはつた有様なり、「先づ君は恙なし。あらい心やすや。されども彼奴らが面付は只ならず。事出来なば、障子一間踏み破り、三郎が首ねぢきり、残る奴ばら蹴殺して、將棊倒にせんすもの」と、そゞろにはやるぞ頼もしき。照手仔細は知りたまはず、兄上達の色かはり何故にやと恐ろしく、兼氏に引添うて、目を配つて坐せしが、三郎が杯を、

ねての思ひ今宵しも、晴れみ曇りみ初時雨、厭ふまでとの傘も、さすが忍びし風情にや。後藤一人お供にて、深き意趣ある横山の、館に忍び給ひしは、戀路の習ひとはいへど、不敵にもまたあはれなり。二十日餘りの夜半なれば、月は名のみに照手の姫、うはべは急かぬ振なれど、心の内の早瀬川、螢の籠を燈火と、後藤が女房先に立て、庭に下りるて來る人を、まつの嵐のばらりとなるは、「ハア人か。いや、君はこするに。」寢鳥の騒ぐ、寢卷の裳裾ほらくと、ひつ扱き帶しやら解けし、「しどけなや。」とて結ぶとすれば、「ア、よいわいの。今にはや解くもの。」と、包むにもる、詞の露、置き所なき思ひかや。外より後藤しはぶけば、「さてこそ。」と女房は、懸金外し戸を明くれば、互に、「はつ。」とばかりにて、さしうつぶいておはします。「かくて夜も更け候へば、端近くてそゞろなり。いざお牀へ。」と女房は、案内の螢、「足音が、高いく。」と打ちさゞめき、二人誘ひ入り給ふ。お寢間は嬉し恥かしき、新牀の中 三重なつかしし。さる程に横山の郡司信久は、三人の子供を招き、「照手が局へは、小栗殿の今宵忍びておはするよし。某伊豆相模を押領し、何に不足はなけれども、させる氏も系圖もなし。申しても小栗殿は三條家の御末、官位めでたき雲の上人、かかる人を婿に取り、高官にまじはらば、子孫までの面目なり。今宵則ち酒をすゝめ、婿舅の杯せん、如何あらん。」とありければ、太郎次郎は云ふに及ばず、無法破りの三郎も、いつぞやの口論を、兼氏とは夢にも知らず、「子孫繁昌家門

急げ小倉山、小倉の野邊の一本薄、何時か穂に出てみだれ、みだれ逢ふ夜は玉蟲や、幾重の關も越え行かん、矢竹心の罫蟲、鳴く音は品々候」と、面白うこそ賣りにける。照手の姫聞召し、「實に珍らかなり。残らず庭に放たせよ。さりながら螢は夏の物なるに、今の螢は偽りならん。たとへ有るとも火はとほさじ。」と宣へば、後藤が妻承り、「されば螢は、水に随ひ流れて下り候故、都方にも、瀬田より宇治は遅きとかや。川水の果て埋れ澤秋の螢と古歌にも連ね、光は夏より明らかなり。今宵お庭に放されて、とほさぬ螢一つにても候はば、如何様とも計らひ給へ。」と、螢よりけに詞の光あざやかにこそ申しけれ。女房達聞き給ひ、「然らばお事は、今宵こなたに泊り、證跡を御覽に入れよ。若しも螢に光なくば曲事ならん。」と、はしたなくの、しりて、皆々奥へ入り給へば、幸ひと了承し、夫にきつと目くばせし、後藤はお暇申しつゝ、小栗殿へぞ急ぎける。女房嬉しさ斜ならず、何卒姫君に知らせたやと、思ふ折柄飛石に、駒下駄の音しきりにて、更衣姫出で給ふ。女房悦び走り寄り、「これお姫様。我等は實は商人ならず。小栗様に御恩を得し後藤左衛門夫婦なるが、御媒申さん爲、小栗様を今宵忍ばせ申すべし。姉君様に御傳へ、はや／＼。」と急ぎければ、更衣夢の心地して、「それは誠か先づ姉君に申し上げ、悦ばせ參らせん。何事もたゞ好き様に、御身に任せ置く。」霜の、更け行く夜半をぞ三重待ち給ふ。身は濱松の根柵れてほれて、柳の絲の亂れ心忘れめや。人の心を兼氏の、か

と、妻の女房に蟲籠しつらひ取り持たせ、物商人に出で立ちて、照手の姫のおはします、乾の局の前
渡り、「蟲召せく。色を音に鳴く蟲召すまいか。」と、賣りにける。女房達は聞き給ひ、「珍らしき商人
や。呼び入れて姫君達の御慰みに召さすべし。商人これへ。」と招きける。照手更衣諸共に、端近く出
で給ひ、「庭の淺茅に放ち飼ひ、秋の野にして慰まん。蟲は何々持ちたるぞ。所によりて蟲の音も、訛
あると聞くものを、名所をも名乗りて賣れ。それく。」と宣へば、蟲籠種々しつらひて、一々にこそ
三重賣りにけれ。「數々咲ける露草や、露にむつる、聲々の、文を込め戀を込め、人に哀れを知れとて
や、如何につれなき中だにも、一夜を逢うてくれごとに、何を松蟲何時までか、何時こほろぎも白萩
に、亂れて鳴くはたから蟲。神樂が岡に鳴く蟲は、神の心をすゞ蟲や、あらぬ方より吹く風に、尾花
頷く振見えて、堰いて逢はせぬ轡蟲。胡蝶の翼濡れそめて、蟲さへ情あればこそ、戀の重荷の我がつ
まを、背にきつと背負うて、人目思へば聲たてぬ、蜻蛉、蜻蛉、金龜子、世を空蟬の羽衣の、薄きえ
にしはなまなかに、ふつつりばつたり、眞から實から、はつたと思ひきりぐす、歌詠む蛙こと問へ
ば、夕を待たぬかけろふの、命の夢の通路を、通車のわざくれに、おのが怒りの斧をもて、妬む蠶
娘優しやな。あの宮城野の絲萩の、絲をくるくく繰りためて、風にはたく機織蟲、野原篠原狩りく
らす、袖の綻つゞりさせ、待つとしきかば忍ぶ夜の、雨も厭はぬ蓑蟲や、胸の焰の螢火に、闇をも

は、すさまじかりし。三重いきほひなり。横山一家恐れを爲し、皆逃げ散つて寄りつかす。されども山形曲者にて、搔潛つて後より、兩足取つて伏せんとす。さしたりと二三間、鳥より軽く飛び返り、持つたる大石指上げ、「えいやつ」と投げ給へば、山形が眞向を胴中まで打ちみしやがれ、微塵になつてぞ失せにける。すぐに驅け入り、「三郎が雑言吐いたる口引裂かん」と、飛んで出でしが、「いや待てしばし、姫の情は捨てがたし」と、門の立石元の如くに押直し、「お暇申す横山殿。手竝はこれまでこれまでなり。重ねて姫に通ふ爲、案内を見置かん」と、心靜かに練築地、高塲高垣高遣戸、裁込泉水築山を、彼方へ廻り此方へ廻り、衣紋繕ひ鬢を撫で、悠々として歸らる。文武兩道誰ととも、男はかくこそありたけれ。

第 二

後藤左衛門むしづくし

諸共に心通ひて寄り添はぬ、申や鳥居の二柱、二歳の春秋を、妹の更衣心あり。文の使の渡船 焦れて月日を送らる。後藤左衛門國忠は、小栗殿の情にて命をつぎ、疵本服したりしが、御恩を報ぜん所もなし。此の君の妹し、一夜逢はせまゐらせ、首尾よくは奪ひ取つて、思ひを晴れさせ申さん

渡し申す。」といへば、小栗聞き給ひ、「暫くく。全く某狼藉はせず。一通りを聞かれよ。」と、今朝の次第を詳しく語り、「此處は我人、侍たる身の遁れぬ處と、御邊の牛を斬り、其の血を以て欺き、彼の者はおとせしなり。これ見よ。某に血の出でん疵もなし。證據には屋の内に手負牛のあるべきぞ。侍は相互、誰が身にもあるべき事。聞き分けて給へ横山殿。」と、理を盡してぞ仰せける。山形聞きもあへず、「さては今朝、彼奴めが我をたばかりしよな。よし此の上は汝を代りに誅せん。」と、飛んでかゝれば飛びしさり、「これ横山殿。彼の者こそせいたる上、各も名ある武士、事の道理は知り給はん。人の命を助くるからは、我が命はすつる覺悟、一命は惜しからねど、望みある此の身なり。侍ならば頼み申す。」と、くりかへし仰せける。三郎重ねて、「然らば汝何しに此處へは忍びたるぞ。」
「オ、御邊の牛を斬つたれば、牛飼どもが難儀せん不便さに、便宜を窺ひ言譯して得させんためよ。」
「いやく其の言譯は立ち難し。盜賊に疑ひなし。其の上牛を斬つたれば、我が爲にも下人の敵。疾う疾う山形引いて歸られよ。」とぞ申しける。小栗つつ立ち、「ム、さてはふつつと聞き入れぬか。ヤイサ畜生ども。おのれ誠の侍と思ひ、詞を下けし口惜しさよ。いで物見せん。」と心を張り、えいやつと身を振り給へば、七重八重の縛めが、はらりふつつと切れてけり。早業輕業力業、身に兼氏がてなみを見よ。」と、門の据石輕々と捉け、羣る中を縦横に、打ち据る雜ぎ据る、飛んづ返りつ打つたてし

御存じ、我も此の鳥何せん」と、顔打振つて入相の、兼氏の有様は、世に現なくわりなしや。かかる處へ件の牛、家路忘れず馳せ來り、にれ打ちかみて驅け廻る。姫は驚き逃げ入り給へば、小栗もあわてて的場の射菜に、立ち隠れてぞおはしける。時をうつさず山形兵衛、血を慕うて追つかけ、大音上け、「此の内へ狼藉者をつけ込うだ。出せく」と呼ばはつたり。横山太郎同じく次郎、中に取つても三郎は、大力のあふれ者、門外につつと出で、「ム、方々は當國山形兵衛といふ人よな。さて途方もなき事をいふ者かな。狼藉者をつけこみしとは、何を以て申すぞ。此の横山が館に踏ん込み、案内はかば一人も生けて歸さぬ合點か」と、はつたと睨んで申しける。山形ちつとも臆せず、「ヤア證據なくて言はうか。血を慕うてつけ込うだり。これ見よ。」と怒るにぞ、門のけはなし朱に染み、白洲に生血流れたり。太郎次郎詞を揃へ、「此の上は門内へ手負入りたるに紛れなし。さりながら武士の家へ驅け込む者を出すべき作法なし。出す事はならぬ。」といふ。三郎つつと出で、「いやこれ兄達。われくくに對ひ頼むといはば、命かけてもかくまふべきが、斷りなしに入つたるは、法を知らぬ狼藉者、探し出して揃めて渡せ。」と承る。と郎黨ども、上を下へとかへせしが、「射菜の陰に物こそ見ゆれ。やれ此奴よ。」と、兼氏を縛めて引き出すは、さても是非なき次第なり。三郎眼に角を立て、「おのれ何處のうず蟲め。案内なく驅け込みしは、作法を知らぬうろたへ者、我々を恨むな。これく山形殿、狼藉者を

宣のたまひしは虚そらごと事ことか。」と詰つめられて、詮せん方もなく兼かね氏うちも、うじくとして入いり給たまふ。顔かほに紅ももぢ葉ぢや照てる手ての姫ひめしばし詞ことばは無なかりしが、思おもひこほれてつゝと寄より、小栗をぐりの御手おんてをしかと取り、「あつはれ此この鳥替とりか徳とくぞや。此この世よはおろか來らい世せまで、手飼てがひに馴なり給たまへや。」と、手てを引ひき寄よせてしめ給たまふ。兼かね氏うちは赤あか面めんし、「お志こころは嬉うれしけれども、人ひとを鳥とりとは迷めい惑わく。」と、聲こゑもふるひて申まうさる、「いやこれ鳥とりでないとは言いはれまじ。我等われらが爲ための命いのちとりといふ鳥とりよ。なづけやなづけ。」と寄より添そへば、呆あきれてなほも返へん辭じなし。「なう更衣きぎ、以前いぜんの鳥とりは詞ことばを聞きき、わがいふ様やうになりたりしが、これはさもなし。もとの山雀やまがらかへしや。」と、又またこそ御機嫌ごきげん損そんじけれ。更衣きぎいと迷めい惑わくがり、「未まだ人馴ひとなれぬ鳥とりなれば、さも候きふらはん。これ何事なにことも御心おこころに隨したがひてたべ。なう氣きの毒どくや。」とありければ、小栗をぐりも今は包つみ兼かねね、「我われこそ流人るじん小栗をぐりの判官兼はんわんかね氏うちよ。お姿すがたといひお情なさけに、譯わけ知らぬ身みも繫つなぎ馬うま、配所はいしょの月つきの廻めぐり逢あふ、御縁ごえんもがな。」とほのめけば、「ム聞きき傳つたへし小栗をぐり様さまか。女をんなに物ものを思おもはせて何なんのお手柄てがら。なう強つよいも事ことにより竹たけの、好よいをり時分じぶん、ア壽命じゆみやうの毒どくめ。」とうちもたれ、袖そでより入いるゝ手先てさきには、如何いかなる戀こひか籠こもるらん。更衣きぎさすが妬ねんましく見みずも居をられず見みもやらず、わくせきしたる折柄せりからに、以前いぜんの山雀やまがら歸かへりけり。「これく姉様あねさま、元もとの山雀やまがら返かへしません。其その鳥とり此方こちへ。」と、引ひき除のくれば、「いや其その鳥とりは最もう入いらぬ。餘よの鳥とり千疋せんぢ萬疋まんぢより、此この命いのちとりたゞ一人ひとり、其その山雀やまがらは祕藏ひざうなれども、そなたに遣やらん。」と宣のたまへば、「ム、姉様あねさまも好よい事ことは能よう

翼も軽く氣も軽き「ア、可愛の鳥や。」と愛で給ひ、「なう更衣、鳥類ながらも此の鳥の、我が言ふ事を聞き分けし。天が下に此の鳥ほど、かはいいものはよもあるまい。」と宣へば、更衣も興に入り、「まうし姉様、いざ此の鳥に砂水かけて、最早休ませ申さん。」と、籠引き寄すれば何とかしけん、籠の戸開けて山雀は、中空かけて三重飛び上る。「これはく」と、慌てふためき給へども、其の行き方は無かりけり。照手色を損じ給ひ、「一命にもかへぬ大事の鳥を何事ぞ。なう更衣、捕へてかやしや。山雀が無きならば、姉とも思ふな。妹とも思はぬぞ。山雀かやしや、かやしやく」とせめ給ふ。更衣も詮方なく、「ハア悲し何とせん。遠くへは行くまじ。」と、屏中門を押開き、走り出づれば兼氏に、會釋もなく行き當り、はつと上氣の紅に、はや男見る目遣ひあり。稍あつて更衣、「何方とは知らねども、姉様の秘藏の山雀取り放し、御機嫌損ひ迷惑なり。捕へて給べ。」とぞ仰せける。小栗聞き給ひ、「これにてあらまし聞き候が、嚙御難儀といとほしし。命なりとも參らせん。空飛ぶ鳥は何とも。」と、情ありけにのふ日影、照手遙かに御覽じて、魂深く染め渡る、色は詞に綻びて、「これなう更衣。まこと山雀歸らずば、鳥のかはりに其の殿を、捕へてかへしや堪忍せん。」と宣へば、更衣悦び、「近頃率爾な事なれども、姉上の御機嫌なほして給べ。偏に頼み參らする。」と、袖を引はどもうちつけに、さすがの小栗も興さめて、當惑したる風情なり。更衣重ねて、「なう最前のお詞に、命なりとも用ならばと、

畠も踏み散らし、行き方知らずなりければ、草刈共は肝を消し、皆ちり／＼にぞ逃げにける。案の如く追手の者、「此處。」「彼處。」とどよめきて、「これ／＼此處へ手負は來ぬか。」と問うた。さてこそと池の莊司、「ム、誰とは知らず深手を負ひ、彼の畦道を落ちたりし。これ／＼のりを引いたり。血のある方へ追つかけられよ。」と、牛の血を教ふれば、追手は悦び、「疑ひもなくこれなりき。過分々々。」と、牛の血を慕ひてこそはおつかけれ。時の閒の善を爲し、人を助くる發明は、總明教智身の内の、盡きせぬ寶ぞ 三重ありがたき。さて其の後に、兼氏つく／＼と思せしは、牛を放せし童ども、言譯は何とかせし、覺束なし。」と、横山の門外に佇みて、しばし窺ひ立ち給ふ。されば横山の郡司信久は、伊豆相模をしるよしし、五人の子をもたれしが、末は照手更衣とて、二人の娘戀知りの、二八三五の玉簾、情をぐする閨の内、「秋風寂しいざ給へ。的場の庭の雨の後、石などりして遊ばん。」と、姉妹連れて出で給ひ、「ア、ほんに氣が晴れた。」と、につと笑顔の花桂、雲の黛寂寞として、眼元にしほの闌干たり。兼氏遙かに垣間見て、「都優りの娘ども、戀の種蒔これこそ。」と、屏中門に身を寄せて、うかと見入りておはしける。見る人ありともしら砂に、山雀籠を据ゑさせて、柳にとまる蝶々や、松葉に巢がく蜘蛛取りて、籠に放ちて振る袖の、手飼になづく山雀が、とんと返りて輪を抜けて、其方へくるり此方へくるり、くるりくるみ姫、くるみ姫が詞について、廻れやく、めぐれしやんと羽返す、

て三國無雙の名馬あり。彼の御馬と申すは、神變不思議の相を得て、春は梅花の香を食らひ、夏は卯の花萬蒲草、今は折から秋草の、露を其の儘糝に飼ふ。若しまた彼の馬ある、時は、人秣を飼はざれば、廢にも立て難し。さるによつて近國野山にて、毎日百荷の草花を、假初ながらこれとても、君が爲」とぞ語りける。かかる處に二十歳許りの侍の、大傷三箇所受けながら、太刀に縫つてよろほひ來り、「これ／＼お侍と見受け申す。某は後藤左衛門國忠と申す者。當國の佳人山形兵衛と申す、親の敵を討ち損じ、御覽の如く深手を負ひ、嚴しく追手のかゝり候。人手にかゝるも無念のいたり、介錯頼み存する。」と、既に自害と見えし時、小栗主従すがりつき、「やれ待て若者、如何に深傷を負うたるとて、親の敵をうちそんじ、死なんとは何事ぞ。叶はぬまでも逃げ延び、重ねて本意を遂けうとは思はぬか。某は流人小栗判官兼氏、此の上は死なせぬ。追手か、らば我々に任せよ。サア落ちよ若者、エ、臆れたかうろたへたか。如何に／＼。」と宣へば、後藤左衛門聞きもあへず、「さては承りおよびし小栗殿にてましますか。御教訓至極仕り候。其の儀ならば落ち申さん。萬事は頼み奉る。此の度の御厚恩全く忘れ申さじ。」といへば、「イヤ禮までもなし。これ幸ひの物あり。」と、鳥威の蓑笠を左衛門に打被け、いそげ／＼と力をつけ、あらぬ道へぞおとしける。もとより小栗案深く、彼の草刈が牛引寄せ、太刀引抜いて胴中を、した、かに切り下け追つ放せば、牛は猛つて朱に染み、畦も

當流小栗判官

第一

昨日まで早苗とりしが何時の間に、稲葉戦ぎて秋の野や、萩の朝あけ萩の夕ぐれ、月の桂も色まし
て、大抵四時心總てねんごろなり。中に就いて腸を斷つ秋の天、と作りし唐の歌さへ身に染みて、
目出たき秋の眺めなり。扇の嵐何時しかに、今朝は野分と吹きかはり、一本薄穂に出でて、世にかく
れなき美男たる、東三條の末流小栗判官兼氏は、往んじ春流人となり、相模が原の配所の庵、せめて
慰む方もやと、池の莊司を御供にて、外面の野邊に立ち出でて、都に知らぬ山畑や、一葦粟の鳥おど
し、鳴子に馴るゝ友鶉、妹春兔の孕むてふ、桔梗が露に戯るゝ。野菊紫蘭の亂れては、袖もさながら
花摺衣、裾野に響く草刈笛、尙目がれせす見給へば、十二三なる草刈ども、牛追立てて鎌振り上げ、
花をかるかや女郎花、押分けく來りける。小栗御覽じ、「心なし童ども、牛馬に飼はん爲ならば、
花なき草こそあるべけれ。露も盛りの秋の花、如何に田夫の汝らも、つれなし。」とありければ、童ど
も承り、「御道理やさりながら、我々は此の國の押領使、横山殿の御内の者。されば横山殿兎鹿毛と



よりは、君にひかれて萬代やへん、と子の日の松の行末も、久しかるべき例ぞと、君を祝ひし名歌なり。十八番のをはりには、左に平の兼盛が詠歌を見れば、くれて行く秋のかたみにおく物は、我がもとゆひの霜にぞありける、と老いをいとひてよむ歌も、たゞ我々が身の上に、思ひしらるゝことわり、むかしにかはる黒髪は、霜のおきなと衰へて、過ぐる月日はあづさゆみ、ひくにとまらぬ世の中の、生老病死の有様を、悟れとよめる心なり。右のとまりは中務、是れこそ伊勢がひとり姫、母に劣らぬ名人なり。つらねしうたは、黄鳥のこゑなかりせば雪きえぬ、山里いかで春をしらまし、と實に心なき鳥類も、時を忘れぬ初こゑに、四方の春をやしらすらん。されば花に鳴く鶯、水にすむかはづのこゑ、何れか歌をよまざるや。神も佛もおしなべ納受あるは此の道なり。ヤア弓馬の家に生るゝとも、歌の道をもたしなむべし。」と、一々次第にかたらせ給ひ、すぐに還御なされける。今にたえせぬ大日本、王法佛法國法は、萬劫經るともよも盡きじと、貴賤上下押しなべて、悦びの眉をぞひらきけり。

百日曾我終

をば隠せども、妻こひかぬるをりくは、けいくほろ、となく聲に、よその袂もぬれぬべし。右の方の第三は山邊の赤人のつらねしうたは、和歌の浦にしほみちくればかたをなみ、あしべをさして田鶴なきわたる。實に此の浦のならひとて、女浪は立たで片男浪、蘆邊の田鶴の立ちさわぎ、行方もしらぬこゝろなり。在原の業平の歌のことばは、世の中にたえてさくらのなかりせば、春の心はのどけからまし、と花に心を染川の、ふかき情をあらはせり。僧正遍照の詠歌には、すゑの露もとのしづくや世の中の、おくれさき立つためしなるらん。實に世の中の有様は、今日は人のうへ、あすは我が身を白露の、風まつ程の命ぞと、思ひしれとのをしへなり。猿丸大夫は、遠近のたつきもしらぬ山中におほつかなくも呼子鳥かな、とたよりにき身をおく山の、鳥の心にたとへたり。小野の小町が、わびぬれば身をうき草のねをたえて、さそふ水あらばいなんとぞ思ふ、とよみけん歌の心こそ、ことに優れて哀れなれ。むかしの花の一盛り、世におちぶれし行末は、水のうへなる浮草の、さだめかねたる身のほども、思ひやらるゝことばかな。こゝに左の十六に、藏人左近と聞ゆるは、是れも女の歌仙なり。いは橋のよるのちぎりもたえぬべし、あくるわびしきかづらきの神、と詠める心は、いにしへの役の行者の、かづらきやくめぢにかけし岩はしの、渡しもやらで中々に、神にうきめをみしめなは、ながきうらみをむすびける、夜のちぎりぞ哀れなる。大中臣の能宣が、千とせまでかぎれる松も今日

も、是れは神道の根本佛果菩提の妙文なり。人間生死の有様を浦漕ぐ舟になぞらへ、弘誓の海を渡り
涅槃の岸に至るべき、其の行末を思ひやる、深き心をよまれしなり。狂言綺語のたはぶれも讚佛乘の
因縁とは、よくこそ是れを傳へたれ。扱右の第一は紀の貫之の詠歌に、櫻ちる木の下風は寒からで、
空にしられぬ雪ぞふりける。此の貫之と申すは、延喜のみかどの御時に、歌のほまれ世にたかく、御
書所を承り、住吉玉津島蟻通しの明神にも逢ひ奉る歌人なれば、是れ又凡人ならずとて、かの人丸と
諸共に、和歌の祖師とぞ定めらる。歌の心を尋ぬるに、嵐の誘ふ山ざくら、木陰の雪と積れども、照
る日のひかり曇らねば、空にしられぬことわりの、實にたぐひなき名歌かな。左の二番は是れも又、
同じ延喜の御宇に有りし凡河内の躬恆なり。詠める歌には、住吉の松を秋風ふくからに、聲うちそふ
る沖つ白なみ。歌の心ははま松の、こすゑのひぎき沖つ風、立つ白浪もおとそへて、神の心をすゞし
めの、さつ／＼の聲とや聞ゆらん。右の二番の歌人に、伊勢といへるは女なり。書かれし歌は、みわ
の山いかに待ちみん年ふとも、尋ぬる人もあらじと思へば。歌のしさいを尋ぬるに、是れは枇杷の左
大臣仲平と申せし人の、心がはりを恨みつゝ、大和國へおもむく時、よみて送りし歌なれば、さてこ
そ所も三輪の山、しるしの杉のふる事を、我が身の上によそへたり。扱左の第三は中納言家持。春の
野にあさる雉子のつまごひに、おのがありかを人にしれつゝ、とは春の狩場にすむ雉子の、草葉に身

も、太平の代の秋津若。仁義の道や白旗の、裾野の社に御参詣。忝くも大將御父子曾我兄弟の神靈に御手を合はさせ給ひければ、近習外様の召具の人、残らず法施をさ、けられ、取分き今日は重陽の、折に幸ひ曾我菊や、種たやさじと若共に、河津の本領三萬町、安堵の御判の墨色も、深きめぐみに取りそへて御恩をになふ木瓜の、紋も再び榮えける。目出度かりける。三重次第なり。

歌
仙

さて其の後頼朝公拜殿に立ち出で給ひ、數の歌仙を御覽じて、「いかに方々聞き給へ。何れの宮社頭にもみな萬民の宿願にて、繪馬歌仙をかけ奉る。中にも此の三十六枚の歌仙と申すは、是れ雙びなき名歌たり。あるとのみ許りにて事の心をよもらじ。いで、此の歌のしななを、あらまし説いて聞かすべし。こなたへ参れかたふ」と、一々次第にのべ給ふ。「そも、此の歌仙といつは、申比四條の大納言公任といひし人、選びおかれし人々なり。歌仙と書いては歌のひじりと是れをよむ。されば三十六人の歌人は、世にたぐひなき名人なり。先づ左の第一番は橘本の人丸。此の人丸と號すは忝くも大聖文殊の化身たり。和歌の道をひろめんため、かりに人間とあらはれ、奈良の帝にみやづかへ、位正三位に至り、一代の詠歌の數五千三百八十首、みな眞言の祕密なり。中にもこゝに書かれたるは、ほのゝと明石の浦の朝ぎりに、島隠れ行く舟をしぞ思ふ。此の歌の口傳様々なりと申せど

が有らうと思ふか。うき世も命もすて坊主、いつの時をか待つべきぞ。鎌倉中の大名の總名代には不足なれども、己が相手ぢや、逃さぬ。」と、腕捲りし怒りしは、凄まじかりける勢ひなり。彼の者笠をとつて捨て、「オ、頼もししく。必ず龜忽せらるゝな。某は頼朝公の御近習大友の一法師、元服して大友の左近の將監に任ぜられ、若君へ付けられ、唯今は頼家公につかへ申すよ。然るに祐成時宗前代未聞の勇士とて、君御感まししく、照明荒神現人神と齋ひ、富士の裾野に社を立て、兄の宮弟の宮觀請あり、近日御社參との御事なり。其の節兄弟の忘れ形見のをさなき者共、所領を下され頼家公の御伽に、召し出されんと、御内意なり。然れどもかたぐ久しく沉淪流浪の家、俄の用意見苦しかるべし。沙汰なしに此の黄金手に入れおくと、忝くも頼家公御懇切の尊意なり。必ず龜忽し給ふな。」と、いひもあへぬに禪師坊、「あつ。」と頭を地につくれば、老母を始め虎少將、鬼王兄弟轉び出で、「世に有り難き御恵み、いつの世にかは忘るべき。是れに付けても祐成や時宗が浮世に存へ、此の仰せを同じ様に承る程ならば、いかに嬉しかるべき。」と、先立つ物は涙なり。大友重ねて、「御内意なれども此の首尾にて、斯様に顯はし申す上は此の通りを披露致し、追付け御社參あるべき間、其の節罷り出でむかひ、御目見え候べし。委細は和田殿秩父殿より申さるべし。先づお暇。」と有りければ、唯御前をば宜しき様に。」と禮儀をのべ、いとま乞ひつゝ、用意ある。歎きはうせて目出度さの、曾我の出世の悦び

一イヤ是れは我一人の金子にあらず。鎌倉の大名衆かたゝをみつぎの爲、少しづつ奉加をいたされ集められたる金なれば、恩に被給ふ事でもなし。平に取つて置き給へ。」と、虎に渡せばじたいする。少將にやれども手にとらず。然らば御兄弟精靈に參らする。」と、さし置いて逃けて行く。禪師坊外より歸り、包みし黄金を取つて彼の者になけ付け、襟元つかんでどうとひつすゑ、いづくの誰とはしらねども、慮外千萬なる奴めかな。身こそ貧なれ伊東が孫、曾我兄弟が追善ぞや。但しおのれは茶をうる出茶屋と見たか。先祖より此のかた曾我一家が、物を賣つて商賣したる例なし。おのれ誠の心ざしならば、縦へ一紙半錢なりとも、寺へ持參し三寶に供養すべき事。縦へ千金萬金にもせよ、羣集の中に茶のあたひを取つて、日本無雙の五郎十郎が、潔きしかばねに泥をぬるか、推參者。殊に鎌倉中の大名が奉加してあつめたと、エ、胸わるや穢らはしや。左程曾我を大切に思ふならば、兄弟が存生に心ざしも有るべし。など時宗が一命をも申し受けて助けざりしぞ。祐經が威勢に恐れ世間をばばかり、見ぬ顔せし腰ぬけ共が、なんぢや此の目腐り金。兄弟の者共には忘れがたみの子供等あり。若しもの事の有るならば、物共に腹卷せさせ、此の法師が衣の上に鎧なけかけ、坊主頭に兜をいたゞき、瘦せたる馬に打乗つて、太刀脇挟み一陣に進んで、能き敵と引組み討ち取り一方を切り破り、かうなる者の子々孫々と後代に名を留めんと、朝暮念する我々が、諸大名の奉加を受け、生きたる甲斐

精靈の、棚に折りしく蓮葉の、盃蘭盆祭る哀れなり。痛はしや母上は、虎少將がくろかみの、思ひ切つたる姿を見て、「面影に立つ我が子の顔、物忘れする老いが身に、など是れ許りは忘れぬぞ。」と、日のくれ夜半のあくるにも、折ふしにます歎きなり。もとより貧家の曾我の末、なほ御勸氣は強くなり、世間ひろき弔ひを、すべき便りもなかりけり。「誠や菩提の死靈は、法界の廻向にしくはなしと聞くぞ。」とて、祐成や時宗の最期場に、日覆ひかまへ籠をまうけ、接待に天台乳花の茶を煎じ、往來の人に施し、一遍の廻向をうくべしと、鬼王兄弟水薪折りくみはこべば、虎少將母上も諸共に、取る茶杓柄の廻向の念佛。往來の僧俗男女貴賤をわかす聞き及び立ちどまり、「是れ廣大の功德ぞ。」と、皆々茶をうけ手向をなし、「一杯に喉を潤し、二杯に暗き心をあきらめ、三杯に枯れたる魂をさぐり、四杯に輕き汗をおこして平生不平の氣を散じ、五杯には肌潔く、六杯にはおのづから仙靈に通達し、七椀喫する其の中に、清風に乗じて不退地の雲に遊ぶ。」と、みな禮拜して念佛す。妙なる功德と聞えけり。かかるところに編笠にて、顔隠したる侍一人、茶をのみて廻向をなし、懷中より黄金一包取り出し、「近頃殊勝千萬。たゞさへ不勝手の曾我殿、御兄弟にはなれさぞ不自由に候はん。貧者の御茶ただのみ申すはいかゞなり。」と、膝において立たんとす。老母御覽じ、「お心ざしは嬉しけれども、子供が追善にほどこす茶、あたひを受けん様はなし。返辨いたす。」とかへさるゝ。彼の男小こゑになり、

方、新田は悦びなるべきが、此の海野は立ち申さず。御邊が馬を盗みし故、某召取つたる禪師坊を忠常に助けさせ、争ひの有る此の馬を新田にやるは何事ぞ。それでは海野が一分たつた。料簡し直せ朝比奈」と、いへば義秀ええ笑ひ、「イヤこしやくな一分だて、じたいあの馬は御邊などには似合はず。お主たちには牛がよし。其の上あの馬は手柄三度したる者に賜はらんとの御詞に、ろくな手がらを一度もせいで、御馬を望むは、經もよますに布施とるか。今でも手柄にサア此の朝比奈をなけて見よ」と、大手をひろけおひ廻せば、「我儘者の無法やぶり、かまひはせぬ」と口の内、ぶつくさ／＼つぶやきて、表をさして逃げ出づる。新田朝比奈どつと笑ひ、禪師坊おや子の人に禮儀をなせば、人々も、「朝比奈の心ざし新田殿の御情、敵にてはなかりけり。草のかけなる兄弟も、さぞ悦びのみつせ川、かへらぬ水のあはれ世に、ながらへ一所にあるならば、いかゞはうれしかりなん」と、なほ繰言のくやみ草、わかし戀草しのぶふく、ふせ屋にいざなひ歸らるゝ。實にやたのしみかなしみは、定めがたなき人界なるわと、今こそ思ひしられたれ。

第五

數ならぬ身にも宿にもくる秋は、折もたがへぬ風の音。去年まで魂を祭りし身が、今年はかけも新

田殿、生々世々の御慈悲なるわ。」と、忠常ををがむやら禪師坊をさするやら、行きつ戻りつ泣いつ笑うつ、嬉しさ足も地につかず、暫しどよめき悦びし、心ぞ思ひやられたる。かかる所へ朝比奈の三郎松島月毛の口をとり、御白洲にはせさんじ、「義秀めは盗みを仕り、直に立ちのき候へども、思案を仕り、我と我が身を訴人に罷り出で候。盗んだ所は罪深けれども、自身訴人の御褒美に、此の馬は朝比奈が拜領致し申すべし。若し御聞入れなくば訴人致して益もなし。一層元の盗人なり。和田の一門九十三騎、三浦の一黨同類を組し、盗みを致す程ならば、恐らく鎌倉中東八ヶ國を盗み立て、後には何を盗まうもしれ申さず。時には却つて我が君の御損たらん。理をまけて義秀に拜領仰付けられかし。」と、恐れなくこそ申しけれ。頼朝笑はせ給ひ、「朝比奈が我儘今に始めぬ事ながら、是れは餘り興がつたり。さりながら、和田一家に免じてとらするなり。」と仰せける。朝比奈かうべを地に付け、「有り難し有り難し。」と御禮申し、「扱こりや新田、お主は近比でかいたり。あの禪師坊が命は、日本國が御訴訟しても叶はぬ所、先づかうせうと思ひ、扱此の馬を盗んだり。朝比奈と同腹中、でかいたく。サア此の馬を朝比奈が引出物に和殿にやつた。是れでどこも圓うなる。名は朝比奈となのれども、智慧はふかひな分別義秀。ほめてくれよ。」と、どつと笑へば、我が君も伺候の人々一同に、興に入つてぞ感じける。かくて大將簾中に入り給へば、海野太郎行氏役所よりかけ來り、「コレ朝比奈殿、御邊の仕

はらんとぞ申しける。君聞召し、「それは沙汰にも聞きぬらん。新聞を使にて汝が方へ引かせし所に、朝比奈が狼藉にて盗み取り、行き方しらす。それ故義盛を初め三浦一黨閉門をせさせ、新聞までも出仕をとめ置きつるわ。」と宣へば、新田大きに不興し、「いや是れは御詫とも覺えず。以前君の仰せには、三度の手柄仕れ。それまでは頼朝が預つたりとの御意なれば、畢竟我らの預け物。盗まれしとは大將の御意とも存ぜず。馬を得ん許りに祐成を討つて候間、是非に於てお馬を、後ともいはす、たつた今賜はらん。」とぞねだれける。垣の外には母上、「憎き奴が詞やな。縦へ龍馬千疋萬疋にもせよ。人の大切のひざう子を、馬にかへて討つたるとは、人非人の畜生め。」と、聲を上げてぞなき給ふ。頼朝もあくませ給ひ、「其の義ならば外の物を何にても望め。」とある。新田邊を見まはし、「然らばお馬のかはりに、此の禪師坊を申しうけ候べし。」「いや、彼は大事の囚人、かなふまじ。頼朝が重代、ひげ切膝丸にても望め。」とある。新田かぶりをふり、「イヤ馬は四足有る物に、足も手もなき御太刀はいやにて候。ぞひ禪師坊を賜はらずば、但し始めの通り松島月毛を賜はるか。二つに一つの御返答承らぬ其のうちは、全く此處を立ち申さじ。」と、どうど座をくみ居たりけり。頼朝思案につきたまひ、「此の上は説方なし、禪師坊をとらする。」と御詞も納まらぬに、「こは有り難し。」と罷り立ち、繩きり解き塵打拂ひ、「是れく曾我の母御、疾うくつれて歸られよ。」「ハッ。」と許りに手を合はせ、「神か佛か新

る。不輕菩薩は打擲せられ憎まれながら、妙覺の佛の位に至り給ふ。皆是れ一念信解のとく。それ
六字の名號といつば、華嚴經にて南の字を表はし、阿含經にて無の字をせつし、方等經にて阿の字を
ひらき、大般若にて彌の字をつめ、法華經を以て陀の字を皆會し、南無阿彌陀佛と申すなり。妙樂
大師の御釋に、諸經所讚多在彌陀緣深厚故とのべ給ふも、深き心や有明の、一心三觀のむねの月は、
圓頓止觀のそらにかゝり、隨緣眞如のはつしほは、同一鹹味の岸にみつ。中道實相の車は、無二無三
のかどに轟き、一乘菩提の駒は、平等大慧の園に嘶ふ。等覺深位の時鳥は、妙覺究竟の峯になき、二
乗作佛の鷲は、無作三身の谷にさへづり、諸行無常の春の花は、是生滅法の嵐に散り、生滅滅已の
秋のしぐれは、寂滅爲樂の紅葉をそむ。一子出家の功力によつて妙莊嚴の悟りを得。韋提希夫人の無
生忍にあやかり給へ、母上様。禪師が素懷是にあり。思ふ事もいふ事も是れまでなり。人々サア我が
首を召されよ。」と、目をふさいでぞ居たりける。頼朝重ねて「學問といひ武勇の法師、近頃惜しき者
なれども力なし。此の上は罪な作らせそ。早々討つてすてよ。」と有る。然る所へ新田の四郎忠常、「言
上のこと有り。」と、簀戸をひらかせ伺候する。人々は涙ながら「あれ祐成討つたる敵。人こそ多きに
あの者が討つたるか。恨めしや面にくや、腹立ちや口をしや、食ひ殺してのけたや。」と、齒がみをな
して歎かる。忠常御前に向ひ、「曾我の十郎を討ちとめ、高名三度の都合あうて候。御契約の御馬賜

らせて、満座の諸武士下々まで、袖を絞らぬものはなし。

三ぶきやう

や、あつて禪師坊、ア、愚かなり母上さま、疾病におかされ劔にふし、火に入り水におほる、も前世の業、品こそかはれ生死の縁、のがる、道のあるべくは、世尊入滅あるべしや。十神力をあらはせば、一日も百千ざい。迷ひの衆生は以如半日、あかず惜しと思ひなば、千歳の夢の心ぞや。母も姉も聞き給へ。禪師坊がさいごに、自受用即身成佛の御法をといて聞かすべし。御前伺候の人々も、なりをしづめて聞き給へ。それ世尊一代五千七千の經卷は、そも華嚴寂滅場に始まり、法華涅槃に書き終る。其の中間の五時八教。中にも薩達磨芬陀利花、妙法蓮華と翻じたり。三世の諸佛出世の本懐衆生成佛の直路、超八醍醐の鷲の峯、うへなき法と説かれたり。こゝにしばらく縁なき衆生を度せんがため、方便の門をかまへて妙法蓮華の、五字をかくして南無阿彌陀佛の六字に攝す。五戒十善の窓の前には、顛倒の霧立ちのほり、坐禪の牀には、煩惱の眠り深く、修行の天地にいたりかたき愚癡の凡夫は、六字を稱して極樂に往生す。娑婆分段の凡身には、恩あり仇あり貧福あり。善惡上下のしなじなも、冥途の道に入りぬれば、利利も首陀もかはらざりけり。己心の彌陀、唯身の淨土なれば、本來無東西、何處有南北と觀すべし。提婆達多は前生にて佛の師匠たりし身が、阿鼻に墮して苦をうく

それもお心次第。さりながら愚僧を助けおかれうならば、あつばれ御身の一大事。明暮君を見るたびに、うらめしや先祖のあだ、恨めしや／＼と思ひつもつて何處ぞでは、御首ほしくなり申さば、龜忽いたさんは必定。然れば虎の子を飼ふに似たり。よつく御思案候へ。」と、猶はゞからず申しけり。御前伺候の諸大名、「誠に河津が子なりし。」と、舌を巻かぬはなかりけり。君も感涙押へかねさせ給ひ、「あつばれ猛き勇士どもや。彼等兄弟召しつかはば、頼朝が一方の用にも立たんずものなれども力なし。時宗が最期の所へ引出し、討つて暇をとらずべし。」「畏まつて候。」と、引立てんとする所へ、老母二の宮虎少將、警固も番もおぢばこそ、外垣二かは押通り、御白洲の内がきにひし／＼とすがり付き、「やれ母こそきたれ禪師坊、淺ましの有様や、やれ可愛の者や。」と泣きさげび、「なう我が君も聞召せ。老中達も聞き給へ。そも出家は佛子とて、衣を墨に染むるなり。釋迦如來の御子となり、此の世の父母兄弟とは、他人になつたるあの法師に、何の科の候ぞ。侍の子の敵うつたが不思議かや。時宗が切られしさへよに御恨みに思ひしに、遠國波濤の隅々まで、さ程にさがし曾我一家を、絶さで叶はぬ事なるか。あの子許りは助けてたべ。なう御慈悲なるわ人々よ。申しなほして給はれ。」と、理非をもわかず聲を上げ、垣にすがり伏しまるび、きえ入り絶えいり泣き給ふ。今まで勇む禪師坊、母の歎きを一目見て、朝日にきゆる初霜の、たゞしを／＼と心くれ、前後もわかぬ其の有様、君を初め參

誰人にかは渡すべき。」「お二人の御最期にも、一足ちがうて逢ひもせず、わすれ形見に禪師様を、見んと思ひてはるふ、ときたる甲斐なき旅衣。ひだりまへなる世の中や。」と、歎くも心便りなし。「此の上は越後に行きて益もなし。曾我に歸りて母御様に一先づ知らせ申さん。」と、今きし道を立ち返る、心の内こそ侘しけれ。去る程に右大將頼朝公「曾我一類の落著は、富士野にて御沙汰あるべし。」と、未だ假屋に逗留ある。かかりし所へ海野の太郎、禪師坊を召しとつて御前に引据ゆる。君御覽じて、「和法師は河津が末子よな。兄共が敵討ちしを知つるか。但し知らせざりつるか。」と御説ある。禪師居丈高になり、「恐れながら大將軍の仰せとも覚えぬ物かな。一ツ腹一生の兄が親の敵をうつと申すに、しらぬ顔する人間や候べき。但し法師なればしつても討つまじき奴と御覽せられて候か。我が君天下を知召すも文覺と申す法師の力。此の坊主文覺程こそ候はずとも、一寸の蟲に五分の魂、かくとしらする程ならば、祐經を兄共におし向け、愚僧は御座近く推參致し、祖父伊東入道が御恨みをも申すべかつしものを、残念や本意なや。」と、はやかる氣色はなかりけり。頼朝なほも心ざし引き見んと思召しけん、「オ、さもこそあらめ。汝はさせるとがもなし。伊東が所領をあたふべきが、還俗して頼朝に奉公してんや。」と宣へば、禪師眼に角を立て聲をあら、け、「よつく某を腰拔と御覽どしな。兄共は誅せられ、三衣になはをかけられて、所領がほしい命がをしい、還俗いたさんと申さうか。但

露の牀、こちよれ枕ひきよせて、寄せてもしめても又恨みても、抱きぢからなき草枕、投げそ枕にとがもなや。「いざ。」とて二人よりそへど、女子同士の徒臥や、我は眞紅のヨウヤヨヤヨ結ほれいと、の、解けぬこゝろが辛ござる。トヨエいよつろござる。とけぬ心の氷室もり、夏の氷もあればある。團雪の扇雪なれど、消えてものこる世のなかに、ア、いかなれば我々は、戀の瀬越をいくせとも、越えて甲斐なきな、せ川、四十八ヶ瀬うちすぎて、こしのしらやま白雪の、つもるは富士に似たれども、裾野の原に我が思ふ、魂の在所はあらしふく、松江の里くれゆけば、暫くやすらひ、三重たちたまふ。日も暮れ行けば人々は、宿をからんとやすらひ給ふに、「曾我一類の囚人此所の泊りにて、外の旅人は一人もこよひの宿は叶はぬ。」といふ。「南無三寶。」と膽を消し、「曾我一類の囚人とは誰なるらん。」と問ひければ、「五郎十郎が弟、越後國國上の寺禪師坊といふ法師を、海野太郎行氏殿が承り、召取つて御通り、用心かたく仰せ出され、旅人の泊りはかなはぬ。」と、言ふうちにはや牢輿の前後厳しくとりかこみ、御家人さきを打ちはらひ、海野の太郎は押へを乗つて、弓に矢つがひ長刀のさやはづし、朝敵謀反の生捕なんどの如くにて、驛路のなかへかき入れしは、見る目もあはれに淺ましし。「聞き給ひしか少將様。」「こはいかにせん虎様なう。」「せめて御兄弟のうつりにもなれかし、又は母御の御なくさみ、便りをだにもと心ざし、はるく下る甲斐もなく、はや召捕られ給ひては、なき人の御形見も、

戀風を、よそに吹かせてやつし行く、世の習はしこそ果敢なけれ。人は免もいへ我が身には、三國一の殿もちて、富士さへ次に見し山の、今は上なき雲のみね、月を招きしあふぎにも、見しはかへらで面影の、なほなつかしみ御影堂。城殿があふぎ召すまいか。夏をわすれて涼しさは、秋と白地や淺葱地や、さつとくまどる一筆がらす、なにをうらみに仇し世を、墨繪彩色いろくに、情の種をまき砂子、すかし扇に唐扇、あふぎく、あふぎ召せく。あふぎとは空言よ。あはでぞ戀は、どれくそれます、それます鏡團扇や奈良團扇。扱繪團扇のしなくは、武者繪のたけき武士も、心やはらくおやま繪や。浮世男繪立髪に、ながい刃をさすぞ杯やつこのく、奴がうけし武藏野の、くさ花づくし青によし、丹や縁青ぬり團扇。羨やましきは高砂の、夫婦いもせのとも白髪、我になけとや箔うちは、風をあきなふ其の身さへ、空の曇さは凌がれぬ。しのの石原日にやけて、蝶も翼を休めかね、千鳥鶴鶴足ひやす、清水がもとのやなぎかけ、風を見つけて走りつき、立ちやすらへばさらくく、さつと時雨の雨かとて、ころにかさきる夏の蟬、春秋しらぬ可惜世を、よそに聞きしも身の上と、是れも涙を添へぬべし。ならばぬ旅の憂き泊り、夢さへ薄く閑遠なる、蚊帳のつり手のみじか夜を、来ては水鶏のことくくと、格子た、くに聞きまがひ、思ひまがひつ見まがへて、雲まにさわぐ稻妻と、行方もしらぬ思ひぞや。身はならばしの假寝にも、あひなれし夜のくせわるく、ひとり寝られぬ

ぢかけける。新開ほうどもて扱ひ、「所望ならば御前にて直に訴訟候へ。某はお使なれば罷り通る。」と行かんとす。「どつこい／＼、扱はしかとなるまいか。朝比奈は悪いくせ。あるひは敵の首でも城でも、欲しいと念をかけてからは、取らずに置いたる例なし、是非に及ばず此所で山賊して盗み申す。後日に盗人とあつて、切腹仰付けられんは必定。馬と朝比奈とは頼朝こそ換損なれ。サアぬすんだ。渡せ。」といへば、「ヤアこいつ男を見ちがへたか。新開なるぞ盗んで見よ。」と氣色する。朝比奈くつくとふき出し、「イヤ見違ひはせぬ。なるほど／＼、曾我兄弟に出合ひ小柴垣をおしやぶり、たかばひして逃げたる新開見しつた／＼。サア馬を盗む留めて見よ。」と、取つて突きのけ馬取り中間蹴倒し、手綱かいくりひらりと乗る。主従、「やらじ。」とよる所を、馬引きかへし八方へ、ふみちらし／＼鞭うちくれてかくをいれ、雲をかすみに飛ばせける。新開は力なく、童の手を切つたる如くにて、恨めしさうに打眺め、「待て己覺えてをれ。」と、御所の假屋へ三重立ちかへる。

とら少將道行

戀といふ文字の字形を判じもの、言葉しがらむから縁の、解くにとかれぬした心。いとほしや虎少將、母の歎きをいさめかね、慰めかねつせんかたも、涙のうちに思ひつき、すこし力を越後なる、禪師の君に告げばやと、旅だつ姿此の儘は、人や見しるとさしかさず、扇あき人團扇うり、昔しのぶの

明王は一人の爲に其の法をまけずとかや。されば頼朝、曾我兄弟が有様甚だ感じ思召し、時宗が死罪を宥めまほしく思せしかど、國法もだし難くして、明くる二十九日に誅せらる。叔父新田の四郎には、高名三度の御契約相違なく、松島月毛に金覆輪の鞍あぶみ、五色のあつぶさ馬よろひ、新開の荒四郎御使を承り、新田が假屋へひかせける。朝比奈の三郎義秀は、曾我兄弟の墓詣して歸るさに、此の體を見て無益しくや思ひけん、つか／＼とより「ヤア新開殿、見申せば君御ひさうの名馬をひかせて、どれへがな。」といへば、新開聞いて「わ殿は御存知ないと見えた。新田の四郎忠常拜領なり」とこたふ。朝比奈とほけた顔にて、「ムウ珍らしや。此の馬は池月磨墨にもまさつたりとて、秋父北條我らが親父をはじめ、此の義秀さきとして、皆々願ひ申せしかど、下されぬ御秘藏を、新田には何として。オ、ウ合點々々。値がよさに賣らせらるゝの。」といふ。新開重ねて「ハテ悪口を申さるゝ。新田は富士の人穴へいり、希代の猪をのりとめ、曾我の十郎をうちとめ、高名三度に及びし故、御契約にて拜領なり。」と、いはせもはてず朝比奈から／＼と笑ひ、「イヤしやらくさい腹筋千萬。三度や五度の高名を珍らしさうに何事だ。但し高名して御馬を貰ふならば、保元平治より源平の合戦まで、高名有る者数をしらす。此の朝比奈もお耳にたつたる覚えあらん。高名づくにて貰はるゝ御馬ならば、新田までやらせうか。此の朝比奈が拜領まうした。ふせうながら新開殿、お取次よい様に頼み申す。」とに

様の殿御とのごとある御兄弟に、そもや如才じよさいをいたさうものか。宵よひにはや御兄弟の危き所をたすけ參らせ、こよひの御本意とけがたかりしを、わらは心のはたらき故、扱みづからに組みとめよとの御契約ごけいやく候。』と、よひの次第をあらましに、語るも聞くもいそがはしく、「サア此のうへはこゝの勝手かつてを案内あんないして、御兄弟ごんじやうに今生こんじやうで今一度あはせてたべ。はや今のまもお命しれず。はや尋ねん。』といふ所に、夜廻りの本田の二郎馬上ながら大音上げ、「曾我そがの十郎祐成は新田の四郎が討ちとめ、弟の五郎時宗は五郎丸がくみとめて、はや事ことはをさまりぬ。御所の假屋かりやは安全あんぜんなり。鎮まり候へしづまれ。』と、館々やかたくをふれまはる。人々、「はつ。』と耳みみにたち、「あれ聞き給へ。』と、魂たましひもきゆる許りに身にこたへ、「若しや／＼のたのしみの、心の綱つなもきれはてたるか情なや。同じ道に。』と走り出で、かけ出で／＼歎かる、は、目もあてられぬ許りなり。龜菊やう／＼慰めて、すかしいさむる詞のつゆ、「共にともきえては誰人か、ながき來世をとぶらはん。此の世許りはみじかよの、その明けぐれに星消えて、澤さはの螢ほたるや鳴く蛙かはづ、昨日きのふの聲にかはらねど、今のあはれを忍しのび音ねに、とぶらひかはす八聲こゑのとり／＼、野寺のでらの鐘かねのひゞきまで、又まつ宵よひにいつ聞かん、これや限かぎりのきぬ／＼ならん。』と、泣く／＼つれてぞ歸りける。

第四

た。」というてしつかとだく。時宗ふり返りきつと見て、「扱は龜菊ござんなれ。今少し死ぐるひに、よき侍二三百も切りとめたくは思へども、契約なればヤア搦めよ。あつばれおのれは日本一の剛の者をぐんでうすよ。」と手をまはすを、高手小手にからみ付け、大音あけて、「天魔波旬と呼ばれたる曾我の五郎時宗を、御所の五郎丸が生け取つたり。をりあへやつ。」と、うすぎぬ取れば童なり。「南無三寶、はやまつて搦捕られし口惜しや。」と、はぎりをなしちだんだふみ、かゞみの様なる兩眼に、涙を流すぞ哀れなる。是非なく大勢をりかさなり、千筋の繩を四方へ取り、引立て行くこそ無念なれ。かくとはしらで黄瀬川の龜菊は、曾我の五郎に契約あり、組止めんと顔かくし、繩をかいこみ此處彼處目をくばつて尋ねける。虎少將も、「兄弟はまだ討たれ給ふまじ。此さわぎの其の内に、ちらとなりとも顔を見て、冥途の契りを結ばん。」と、おなじ所を行きかへり、立ちまふ揚羽の直垂は、宵に見たりし時宗なり。「あまさじ。」と飛びかゝり、「黄瀬川の龜菊ぞや。時宗やらぬ。」としつかとくむ。くまれて少將振放さんくと悶ゆれども、龜菊ははなさじと捻ぢあふ所を、虎御前兩方へおしわくる。顔を見れば少將なり。龜菊、「あつ。」と驚きて、暫し呆れて詞もなし。やゝあつて虎少將、「つれないぞや龜菊殿。昨日今日までかう三人は、兄弟よりも底意なく、あかしあひたる中ぞかし。時宗やらぬのがさぬと、女子の際にあんまりな。さうしたものではないぞや。」と、言ひ捨て行くを引留めて、「御恩をうけし皆

妙や。蛇は一寸にして兆あらはれ、頻伽は卵の内にて其の聲諸鳥にすぐるとは、殿原達の御事よ。幼少より日陰の身、武士の參會も絶え百姓土民に打ちまじはり、弓馬の道もとり失ひ給ふべきかと悔りしに、異國の子路が勇にもまさる。唯今御扶持を下さる、鎌倉武士は多けれども、誰か殿原に優るべき人はなし。河津殿の御子なりけるぞ。勇力孝行仁義の道、か程たつせし祐成を、いかに契約なればとて、新田などがむざ／＼と御首を給はるは、天の咎め弓矢の罰、縁の人の歎きの程、思ひやられて今更に、いづくに太刀をあつべきぞ。忠常討たるればうたる、までよ。運に任せ勝負あれ。なう祐成殿十郎殿。」と、尙せきかぬる感涙は、理せめて哀れなり。十郎も涙にくれ、「嬉しき人の詞や候。年月ねらひし敵を討ち、御邊の様な弓取の、手にかゝつて死なんこと、祐成はなんほう果報のもの、成佛までも疑ひなし。はや首を取り給へ。」と、涙をとゞめいひけれども、忠常は目もくれて、討つべき氣色はなかりけり。祐成怒つて、「エ、曲もなし忠常、雑兵の手にかゝつて名をくたせとの事なるか。ぜひに及ばず自害せん。」と立ちあがれば、忠常「オ、誤つたり御免あれ。南無阿彌陀佛。」と諸共に、水もたまらず打ちおとし、きつさきに首つらぬき、「鬼神とよばれたる曾我の十郎祐成を、武藏國の住人、新田の四郎忠常討ち取つたり。」とぞ名乗りける。無慙やな、時宗はにぐる敵をおつけしが、「今は何をか期すべき。」と、御所の假屋へはしりこむ。簀戸の陰より女の姿、薄衣かづいて、「時宗を捕つ

兄弟左右より諸騰もろたけなぎ、四つ五つに切りちらし、門外もんがいさして切り出づれば、「すは夜討こそ入りたれ。」と、弦なき弓に矢をつがひ、つなぎ馬に鞭を打ち、太刀のつかをこしにさし、上を下へと三重かへしける。太樂たいらくの平馬へいばの丞じょう、「祐經すけのりが討たれし上は、狼藉ろうじやく者は曾我殿原そがのどの。いで／＼きやつらを討ちとめて、狩場かりばの猪しの恥辱ちじよくをす、け。」と、愛甲安西あいさうあんせい海野うみの白杵しろきねが、いれかへ／＼打ち出づる。兄弟は事ともせず、小柴垣こしばきを小楯こたてに取り、もみにもうでぞ戦たたひひける。多勢たせいとは云ひながら、曾我殿原そがのどのが死狂しきやうひに、手負討ておひし死に四百人、足のふみどもなかつし所に、新田にんたの四郎忠常しろうちね、「祐成すけなりに契約けいやく有り。首をとらん。」とかけ出でしが、「イヤ新田にんたの四郎しろうと名乗りなば首さしのべんは必定。それは武士の本意ならず、運うんづくの勝負しょうぶせん。」と、祐成すけなりにわたしあひ、切りむすび切りほどき、た、かふひまにも祐成すけなりは、「本望ほんぼうは達たつしたり。をしからぬ命なれども、新田にんたの四郎忠常しろうちねに、預つたる我が首を、人手には渡さじものを。」と、呌かきながら打ち合ひたり。新田にんた是れを聞くよりも、「やさしき者の心さし。」と、なほ恥はち入りて名乗りもせず。物のあいろも見えざれば、松明たいまつ出せ。」とよばはるこゑ。祐成すけなり、「はつ。」と飛びしさり、「さいふ和殿わのどのは新田殿か。」「オ、忠常。」と答ふ。「南無三寶なんぶさんぼうこはいかに。それともしらす最前さいぜんより、太刀を合はせしくやしさよ。厚恩こうおんといひ契約けいやくの誓文せいもん違たがへし面目めんぼくなさ。サア契約けいやくの首取り給へ。」と、太刀を投げすて座ざをくみて、首さし延べてぞ待ちあたる。新田にんた涙をはらくと流し、「扱あも／＼優やさしき今の振舞ふるまひ、頼たのもしや神しん

「アレ夜廻りか番衆か。見付けられてはあしかりなん。一先づのけ。」と一叢の、森を目あてに走りすぎ、逢はでわかれし本意なさよ。兄弟は祐經が假屋の外垣切りやぶり、中門につゝ、といれば、郎等若黨悉く、晝の狩には仕疲るゝ、雨を頼みのゆだん酒、みな高いびきして伏したりけり。所々のともし火をふきけしく、そろりゝと差足して、なんなく敵祐經が、一間の寢所に忍びつき、溜息ほつとついたりし、心の中こそ嬉しけれ。「サア是れまではしすましたり。今暫くぞ、南無八幡、箱根兩所伊豆三島、力をくはへ給へや。」と、近付きよつて見てあれば、祐經沉醉高枕、前後もしらぬ其の有様、「一眼の龜の浮木にあひ、優曇鉢華の三千年の、春にあひたる心地ぞや。優曇華のさく時はをがみて枝を折るとかや。まれに逢うたる親の敵、をがみ打ちにうてや。」とて、につこと笑うて立つたりし、うれしさ類はなかりけり。兄弟刀をぬきはなし。祐經がむないたに、あてては引きひいてはあて、大音上げて、「河津の三郎が嫡子十郎祐成。」「次男五郎時宗なり。」「おきあへや祐經、左衛門やッ。」といふ聲に、「心得たり。」と、枕の太刀とらんとするを、祐成左手の肩より右手の脇、衾をかけて切り付くる。「五郎是れに。」といふ止に、腰のつがひを板敷まで、きれもきれたり年月の、仇と怨みと一時に、今打ちとくる氷の太刀、折れもせよ碎けもせよと、寸々にこそ切り付けけれ。側にふしたる大藤内、太刀風に目を覺し、「狼藉あり出であへ。」と、裸身ながらかけ出でて、あなた此處とわめきまはるを、

許りか勤めたる身の總恥なり。どうもお返事なり難し。わるうは聞いてくだんすな。」と、あぐみし色ぞ道理なる。時宗聞いて、「オ、至極したく。日本一の思案あり。兄弟祐經うつての後、御所へきつていらん時、百萬人がかゝつても、事ともせぬ我々なれども、御身向つて此の時宗を組みとめ給へ。女と見たらば某がやすくと搦められん。時には御身も親分を討つたる者を、女の身にてくみとめしと名をとれば、身一分の道は立ち、我々も本意を遂ぐ。ひらに頼む。」と手をすれば、龜菊も恐ろしながら、「おいとしや其の義なら、祐經病氣と中にて御所へお返事申し、今宵のお成りをとめ申さん。御本意とけられ其の後は、みづからに組止められ、我が一分を立ててたべ。」と、いへども流石女心の、身もふるはれて聲こもり、「あれ供人の立ちかへる。一言たがへな。」「たがへじ。」と、左右へ別る、雨のあし、行く方くらく風さわぐ。虎少將は寝ねがての、枕に残る書置を見るより驚き、年比の契りはこゝぞ冥途まで、遅れじ物とかねてより、思ひそめおく蝶千鳥の、装束引つかけ太刀かたな、髻小枕取つてすて、地髪ばかりをはちまきし、假屋まぢかく忍び入り、出立小柄にり、しくて、女とさらに見えざりけり。勝手はしらす雨夜なり、二人手をくみ隈々を、「祐成やおはする。」「時宗やまします。」と、小こゑに呼うでうそくと、尋ねまはるは過ぎし夜の、手くだに似ても事かはり、胴慄はる、許りなり。かくとはしらす兄弟は、袖打鬘し松明に、足もと許りてらさせて、遙かに見ゆる虎、少將、

の一手もまひならひ、上手でもないものを、私が仕合にてまた跡の月、祐經にうけ出され、即ち主の親分にて、唯今は頼朝様へ御奉公に出され、御酒宴のお肴の、舞や謡や琴琵琶にて、御前をつとめ候が、最前お顔はちよつと見る。供の者が見付けしが、刀の先でも當りましてはと、よきちゑを出して下部どもを去なせしが、定めし日頃のお望みならん。さりとはあぶない。首尾はあはくと思ひし故、是れ瘡が上つた。御無事なかほ見てお嬉しや。虎様はまめなかや。少將様は赤子うまんしたか。杉の疝氣はおこらぬか。猫の子はどうしたえ。かぶろどもは今に穴一しますか。」と、急な所に取りまぜし、女郎はあどなきならはしなり。兄弟氣はせく耳へもいらす、「一だんのお仕合。シテ先づ今宵はいづくへ。」とあれば、「さればとよ鎌倉殿、さみだれの夜のつれづれに、祐經の假屋へ御成りなされんと有るお使に參る。」と、いひもはてぬに時宗、「イヤ是れ、日頃しつての事なれば何を隠さう。こよひ祐經を打つ覺悟。それに頼朝入り給ひては、本望とけぬのみならず、仕損ぜんは目前なり。何とぞ思案し、頼朝公こよひの御成りをとめてたべ。生々世々の厚恩、曾我兄弟が一生に、人を拜むは是れが初め。」と、手を合はせてぞ頼まるゝ。龜菊しばし答へもせず、「是れはよぎなき御頼み。虎様や少將様の、うつりといひお二人を、じよさいに思ふ心でも、祐經かばふ心でも、誓文くされなければども、親分を討つ人に、ならびてなどとの後日の沙汰、傾城のはては道しらす、尤もかなといはれん事、妾

くやみの歎きは是れ一つ。「この宮の姉、禪師坊、彼是つきぬ思ひの涙、敵を討つて本意をとけん。うれし涙も様々の、雨にあらそひ袖と袖、絞りかねたる許りなり。時宗涙の隙よりも、「あれ御覽せ十郎殿。御所の假屋の方より、供人具したる乗物の、庵に木瓜付けたる提灯こそ、祐經と見しはいかに。」

「オ、うたがふ所なし。こゝにて待受け本望とけん。」「もつとも。」と、松ふみしめし、天にもあがる噂しさに、足のたてども覺えばこそ。漫ふるひて待ちかけたなり。程なく近づく左右方より、二ツの提灯ばた／＼と切り落す。「あは狼藉。」と夕やみの、刺すとも突くともしらぬ夜に、中間若黨縦横に、打物ぬいて難ぎ廻れど、二人は小わきに身を潛む。危かりける有様なり。輿の内には女のこゑにて、「必定夜盗と覺えたり。大道へ出でつらん。此處を捨てて外垣より、山ぎはを捜されよ。」と、あらぬ方へ教ふれば、愚かの下人、「尤も。」と、しどろになつて追つかくる。稍あつて女輿より出で、小聲になつて、「十郎様、五郎様、是れなう申し、最前ちらりと御兄弟と見付けたり。大じない時宗さま、祐成さま。」とよぶこゑは、きいた様な物ごしなれども、粗忽にあつともいはれぬ時宜。兔角の思案もなきうち、女はせいて、「ア、辛氣。なうお二人様、だんないわいなあ。黄瀬川の龜菊ぢやわいなあ。」兄弟ほつと力をえ、「オ、いかにも五郎、十郎なり。シテ龜菊殿のかうした事は合點ゆかず。」と、いふ聲をしるべに近より、「先づお久しや、なつかしや。扱わし事は、虎様や少將様の御苦勞になされし故、舞

置くまじきぞ。此の富士山は死出の山、富士川は三途の川、兄弟せぶみの門出の酒宴せん。」と、笑ひたはぶれ立ちかへる。そろひにそろひし武夫の、手本なりかゞみなり、をしへなるわと後の世まで、つきぬは曾我のはなしなり。

第三

身は蜉蝣の憂き命、憂き命、暮るゝや限りなるらん。頃しも五月二十八日、空さみだるゝ黄昏の、虎が涙や少將の、夜の雨さへ頻りなるに、兄弟最後の晴小袖、母の手づからぬひ仕立て、請けし五體の胎内へ、歸る心に本來の、經帷子と觀念し、あけ羽のてふや村ちどりも、翼しをるゝ風情にて、松明かゝけ笠ふりあけ、兄弟かほを見合せて、涙ぐみたる哀れさよ。「いかに時宗、和殿三歳祐成五歳、竹馬のむちを打ちしより、片時はなれぬ兄弟の、六度契りて兄となり、七度むすびて弟となるとつたへしが、今宵裾野の五月雨、くさの雫と消えはてて、未來の逢瀬は定めなし。今ぞ此の世の見をさめぞ。御身が顔をよつく見ん。」「母上見奉ると思ひ、祐成殿の御顔を今一度見せ給へ。こととはぬ草も木も、雲水空のなごりまで、今をかぎりのわかれとや。」「いつも風はふきけれども、今宵の風ぞ身にはしむ。虎少將が書置を、あけなば歎かんふびんさよ。」「鬼王や團三郎、最後の供にはづれたる、

「兔角は詞多からず。」と、籠をさして近經は、我が假屋へぞ歸りける。祐經鹿を見うしなひ、谷をへだてし岡のべの、小松の中を乗りまはる。「祐成あはや。」と谷ごしに、馬引寄せ打乗れば不思議や此の馬身の毛をたて、四足を縮めて立ちすくむ。「南無三寶。」と打てどもくあふれども、ちつとも動かすはねあがり、前足折つて祐成を、眞逆様にはね落せば、祐成は枯杖に、弓杖ついて下りたつたり。落して馬はかろくと、谷をくだりにかけてゆく。折しも時宗はるかに見付け、走りかゝつて馬の口、しつかととめて引き來り、「扱よき所へ参りたり。鞍心しらぬ馬主をきらふと覺えたり。鐙を踏みしめしつかととめせ。」「心得たり。」と翻然と乗れば、又此の馬高いな、きし、躍り上つて祐成は、屏風がへしにどうど落ち、岩角に胸うちあて、氣をうしなひたる許りなり。時宗兄をいだきあけ、「エ、にくや此の馬は目前の敵、刺し殺さん。」ととびかゝる。祐成はつと心づき、「やれまで時宗、まつたく馬のあやまりならず。花野が新田にあたへつる、虎のいきづめ懐中せしが、恐れたるに紛れなし。」と、守よりとり出し、はるか谷へ投げすて、駒引きよせうち乗つて、引立て見れば不思議やな、元の如くにあゆみゆく。「つゞけや時宗來れや五郎。」と、谷を乗りこえ乗りおろし、岡の茅原籠の松原、追ひつ返しつ尋ねれども、はや祐經は見えざりけり。兄弟目と目をきつと見合はせ、こぶしを握り牙をかみ、「寶の山に入りながら、むなしく歸る口惜しさよ。よし／＼今日はたすくるとも、明日までいけては

と、につこと笑ふ顔と顔、主從此の世の見納めとは、後にぞ思ひ三重しられたる。其の日の御狩も列卒をあけ、息をやすむる午の刻。「お辨當。」とふれければ、狩場も暫し静まりける。こゝに富士の根方より、七年物の牡鹿八股の角ふり立て、險阻苦路をのさくと、北をさしておとしける。秩父の家臣本田の二郎近經、「天のあたへ。」と弓と矢つがひ、駒を直路に歩ませよせ、既に矢ごろと見えし所へ、工藤左衛門祐經一さんにあふりかけ、「コレく木田、あの鹿は祐經が見付け射とむるぞ。粗忽すな。」と聲をかくる。「御詮にて候へども狩場のならひ、目がけし鹿を人に渡す法はなし。はづれんまでも近經が、射とめて御らんに入れ申さん。」と、なほ引絞れば祐經いかつて、「ヤアおのれは緩怠者。秩父が下人陪臣の分として、此の祐經に慮外をなし、主の爲もあしからん。」と、廣言はいて乗り出す。近經無念に思へども、慮外といへば力なく、「エ、おのれ祐經め、矢印になのりなくば、遠矢に射落しくれんもの。」と、こぶしを握つてひかへし所に、曾我の十郎祐成、祐經をはるかに見、竹笠引込み弓をふせ、繁みを分けて忍びよる。本田きつと見、「是れ申し祐成殿、忍んで御狩の御供の由、主人重忠聞き及ばれ、御用あらば承れと申し付けられ候。貴公數年御狙ひの鹿こそ見えて候。さりながらかれは馬上、貴公は步行。幸ひ近經も當座の遺恨候へば、此の馬を貸し奉る。召されて鹿のまつた中、うらみの矢壺ははづれ申さじ。人目あればお暇。」と、おり立ち馬を與ふれば、祐成手綱をおしいたゞき、

預り申せしやつなればくるしからず。人をそへて汝に預けん。かれを岡鳥にからめ取つて、我に手がらをさせてくれよ。それ／＼角田兵五兵六、兄弟かれに付いてゆけ。随分ぬかるな。沙汰ばしすな。判官の末頼を、おほくもいらぬ一兩人、生捕つてくる、なれば、コリヤ此の海野は手もおろさず、かませてのんだる大手柄、屹度禮は重ねて／＼、急け／＼。」と別れしは、愚かにも又あさましし。角田兄弟、「是れはふしぎの同道。いざ參らん。」とぞ申しける。時宗あたりを見廻し、「海野は遙かに行き過ぎたり。」鬼王に陶し、二人を左右へばた／＼と蹴倒せば、「コハ狼藉者。」と起き上るを、鬼王團三郎つ、とよつてしつかと取る。時宗から／＼と笑ひ、「我を誠の町人と思ふか。河津が次男曾我の五郎時宗といふ者。此の入道は鬼王團三郎が父、津藏の入道といふ者。我々をかばひ、辨慶親辨眞と偽りしを、鎌倉中の大名小名の髷口へ、うまく／＼ときこしめしたるをかしさよ。何とぞ奪ひ返さん爲、和田殿へ參る折から、海野殿の蓮のつき、よい所で出くはせ、時宗にたらされてお預りの大事の囚人、ふかふかと渡さるゝは、猫に鱈、武士に似合はぬあまい事。是れこゝな生ぶし達、うぬらが首よりつまさきまで、みぢんに削つて兄祐成が、手がひの虎に悦ばせん。それ／＼。」と引起し、口に込環、いきほねたすな。山ぎはにて討つて捨てよ。入道妹は古郷へおくれ。某は祐成の狩場の出立氣遣はし。追付けて本望とけん。門出よければ行く先の、仕合は手に取つたり。吉左右しらせん。」「待ち奉る。」

とも、御難はかけじ何方までも、請人出でてさばきがみ、油もとのゆひ紅はな紙、あしだせきだに至るまで、仕著の外は身の入立との定めなり。もし又ふかき縁のあり、戀ぞ積りてみな川の川、さそふ水とて請け出す、あたひ千金萬金なりとも、それは主人の得分たるべし。もし誰人ぞ流れの身に、横波かけてさまたけの、さしでの磯のものがり舟、押しいてまを取らば、衣裳残らずはぎす、きの、奉公かまひ給ふべし。總じてつとめの其の間、下戸なりとも酒飲み習ひ、文には諺をかき習ひ、牀にて人をやきならひ、ねぶたくとも居睡らず、泣きともなくとも後朝の、わかれに泣かせ申すべし。起請誓紙に身の内の、血をばをしませ申すまじ。指は切損、かみも切損、申しぶん候まじ。其の外浪華のよしあしに付き、後日の爲の傾城奉公、請狀の趣くだんの如し」と、天もひゃけとよみ上げたり。海野の太郎疑ひはらし、「扱は仔細もなき者なり。疾くく通れ。」と許しけり。時宗しすまじたりと思ひ、「御間分有り難し。扱さいぜんより承れば、判官殿のゆかり御尋ね候とや。我らが本國奥州には其の末々の多く候へども、今日まで手をおき誰構ふ者もなし。あの辨眞めが我々を、打擲致せし憎さも憎し。拙者に預け下されかし。擲めて國へ罷り下り、辨慶が親をとらへしと國中に風聞せば、義經のゆかりども、堪忍せずあつまらん、所を皆々かりもよほし、擲取つて參らせん。一つは旦那の御奉公。」と、誠しやかに囁けば、海野ほつかりとたらされ、「イヤ是れはできた。きやつは某我が君より、

も、思ひやりたる忍びねの、歎きをかくしてうつぶけり。海野重ねて、「是れ若者、以前汝はあの者が主人といひしが、いづくの町人、商賣は何ぞ。」時宗聞きもあへず、「さん候某は、奥州伊達の郡の傾城屋にて候が、あれなる女を金銀出し、傾城にめしか、へ、唯今つれて下り候。」海野なほもうたがひ、「エ、然らば定めて請狀あらん。それにて讀め。聞かん。」といふ。

けいせい請狀

もとより請狀あらばこそ。懐中より時宗が夏書しかけし普門品をとり出し、請狀と名づけ、たからかにこそ讀み上げけれ。「傾城奉公請狀の事、一此のなみと申す娘、流れの道に身をしづむ。建久四年癸の丑五月十五夜突出し女郎。何所の雲もさはりなき、影も丸年十年きつて、金子百兩たしかに手取の身は籠の鳥。親は他國の死に目なりとも、年の間は郭のほかへ、一足にても踏みも通はぬ、遠國波濤へ賣りて遣手や姉女郎の、おきて背かず勤めさせもが露ほども、奉公に如才なく、客をばふらす心にかけて、まはる紋日を一日も、おこたらせ申すまじ。第一には間夫狂ひ、浮名ほくろに入れ性根する男あつて、勤め龜末に致すに於ては、著の儘ながらの端におろされ、又はみづしの下女にせられて、竈の火を焚き湯殿の水くみ、門はき背戸はき、庭の掃除のちりや芥や紙くづのはの、恨みとぞんじ候まじ。萬一此の者年のうち、郭をにけて走り井の、水に身を投げ刃にふし、心中して死したり

るよな。こゝでの論はむやくの事。あやまりなくば御前にて、すみやかに言分せよ。御所の假屋へ同道せん。早あゆめさあ来い。」と、言はれてさすがの時宗も、御前へ出てはあしかりなんと、返答遅々して見えにける。人道是れぞ一大事と思ひ、大聲上げて氣色をかへ、「扱々おのれらは何者なれば、何の用もなき事を、仔細有りけに言ひなす故、科もなき判官殿、彌御とが深くなる。勿體なくも御骸に、苦患をかくる後生のまよひ。いか様かたりか物取りか。エ、腹立ちやにつくいやつ。暫し御免。」と郎等が、ついたる桿棒おつ取つて、つゞけ打ちに時宗を、ちやうくくと打つたりける。「是れは。」と言つて鬼王兄弟立ちよる所を、「ヤア己等とても唯おかうか。」と、はらひ打ちに叩き付けく、「傳へ聞く判官殿御存生の折から、東下りの忍び路や、安宅の關にて我が子の辨慶、判官殿をうつたるとや。それは富樫をたばかりの、智畧の棒の歪みなき、此の辨眞が心底を、海野殿への言分に、叩き殺して見せ申さん。」と、口にはいへど心根は、主君なり我が子なり、思ひの色を腹立の、涙に見せてうつ杖も外れよかし反れよかしと、打てばこなたは覺られじと、用捨もなく身にうくる、互の心ぞあはれなる。海野我を折り、「ヤレさなせそ辨眞。殺してはいかゞなり。もうよいわ。」と引きとむる。「いやた、き殺さん。」と、猶振上ぐるを棒もぎ放せば、「エ、残念や口惜しや。草のかけにて判官殿、さぞや悲しくおほされん。」と、義經にかこつけて、胸にたもちし涙をぞ、わつと泣き出す其の心。鬼王兄弟時宗

よ今思ひ合はすれば、熊野山のどこやらにて、一寸見たる御坊にて候。サア御通し候へ。」と、つ、と行かんとする所を、「どつこへく、エ、己めらは癡者かな。入りもせぬ長口上、紛らかして通らんとや。熊野山にて見たるとて、につこらしく言ひまはす。察する所、己は義經の家來、熊野の住人鈴木龜井が一族よな。此の辨眞めと心を合はせ、鎌倉殿へ仇をなす御敵の張本、搦めとつて高名にせん。ソレ遁すな。」と、ひしめく所へ五郎時宗、編笠取つて大手をひろけ、「ヤア權柄な御侍、あの者どもは某が、大分の給銀にて召抱へたる下人ども、最前より何れもの我儘、はらわたがもえ返り、胸の蟲がむか／＼と耐へかねて候へども、無事にすまば濟まさんと、齒をくひしぱり控へし所に、理非もろくに聞きとゞけす、なんぢや搦捕らんとは、いか様の科がある。さあ承らん。もし科もないに下人を縛りからめさせ、主人の身にて堪忍ならず。町人なれば太刀かたなの、お相手にはかなはずとも、腕や腰の力は御侍にも負け申さぬ。はりごくら踏みごくらは、此の膝骨のくだくるまで。」と、すね打叩いて呪め付くる。海野ちつともひるます、「イヤこりや若い者。縦へ其方が下人にもせよ、是れは頼朝公の御敵。判官殿の因縁を尋ねもとむる穿鑿なれば、いうても天下の御大事。誰をか憚ることあらん。こいつは辨眞が親熊野の別當辨眞。それにしたしきものなれば、熊野そだちの鈴木龜井が一族ならんと、答むるが僻事か。彼奴を下人といふからは、扱は汝は義經の、おとし子の有り」と聞きしがそれな

「イヤまでく、かれらがしかた、兩方見知つたるに紛れなし。サア何者ぞまつすぐにいへ。さなくばいつかな後へも先へもやらぬ。」といふ。鬼王兄弟つゝと出で、「御尤も千萬。我等は上方の貧者にてござ候。是れなるは妹。老いたる親を養育みの爲、奉公かせぎに方々召連れ廻りし時、何方にてやらの御坊見たる様に候故、叔唯今の通り。」といひ捨てて通らんとす。海野眉をしかめ、「どこへく、シテ其の見たるといふは何所にて見たるぞ。胡亂ならば通しはせぬ。勿論もどしもせぬ。搦めおくがいかにく。」と一面にとり廻す。鬼王兄弟大事と思ひ、「是れは近頃不祥なる所へ参りか、つて候物かな。妹が奉公かせぎの爲、方々廻りし事なれば、何方とは覺え候はねども、先づ上方の女の習ひ、大内がたを望む故、中宮女院仙院十二の對の局々の女嬬お末、内侍所への刀自采女、公家に松殿すゝき殿、近衛關白政所、一條殿や九條殿、久我菊亭に花山の院、頭の中將頭の辨、儀同三司女三の宮、お比丘尼御所までかせぎしが、御所の風にはあはずとて、兩六波羅の屋敷方、武家は行儀むつかしく、こゝもありつき縁うすき、衣の棚や珠數屋町。めぐりくゝて室町の、絲屋組屋ひさぎ女に、御影堂の扇折、ほね身をくだきかせけども、都の奉公口もなく、西國がたへ身をしほる。豊後國の染殿や、そこをも既に立ちわかれ、因幡丹後の紙すき奉公。それより紀州熊野には、能き奉公の口ありと、聞くをしるべに立越えしに、それは小歌比丘尼とて、尼にするよし承り、逗留もせず歸りしが、お、それ

田と武功のあらそひ、蝸牛の角のつのめ立ち、挑みはけむといへども、新田が猪に乗つたりし、功名につゞく手がらもがなと、心は強情に手も立たず、空しく根氣を費しける。もとより祐經縁者といひ中よしなれば、彼の辨慶が父辨眞となのりし津藏の入道を、鬼王が親とは夢にもしらす、和田に預け置かれしを、工藤祐經取成にて、暫く申し預り、此の辨眞を目印にて、狩場の見物羣集の中を、東西南北引通り、もし見知りたる者あらば、それぞ義經のけらい筋、鎌倉殿の御敵と、召捕つて高名し、新田が功名をふみつけんと、たくむ思案もまはり遠き、野山を引いてぞめぐりける。曾我兄弟は聞き及び、「譜代の下人を囚人となし、なからん後まで恥辱なり。人も多きに和田殿の、御預りこそ仕合なれ、密かに歎き申して見ん。さりながら祐成は人見しれり。昨今の元服にて、五郎は見しる人なし。」と、鬼王兄弟妹の花野、和田の假屋へ急ぎける。海手山手をかぎりにて、大垣亂杭逆茂木引き、東海東山三十三ヶ國の大小名の、假家のしるし所々に木戸を打ち、御家人給人商人見物、行きかふ人に紛れても、時宗は此の夕、敵討たんとおもひこみ、眼を四方に見くばりて、案内窺ひ通りける。所こそあれ海野が持ちの木戸口にて、靦面にはたとあふ。花野父の入道を見付け、「あれよ。」といへば鬼王圍三郎、「是れはいかに。」と仰天す。入道いかつて、「やあ某は見知らぬ奴等。何者なればうろたふる。此の入道に知られては穿鑿がむつかしい。早く通れ。」とつかうどにいひはなす。海野さとき男なれば、

故。其の契約に虎御前を助け候へば、お禮はかはせに仕る。此爪返辨申す間、花野とやらんに返してたべ。某は祐經めを討たてて叶はぬ意趣あり。」と、とんで出るを引留め、「是れ申し重ねくの御無心なれども、祐經は我々が大事の親の敵。御自分に討たれては曾我兄弟が侍立たず。暫しの無念を息められ、彼奴を我等に討たせてたべ。易々と討ちおほせ御所近く切り入らん時には、狼藉入りたりと、をり合はんは必定、千騎萬騎が防ぐとも、我々兄弟、ものの數とは存せねども、新田の四郎忠常と御名乗を聞くならば、首さしのべて討たれ申さん。然れば我等も本望とけ、貴殿は三度の高名なり。聞き分けてたべ新田殿。」と、理をつくしたる詞の末。忠常うなづき、「オ、できた／＼面白し。さあらば祐經討ち給へ。和殿が首は貰うたぞ。」「いかにもやつた、忝い。それまで随分御健固に。」「そなたも御無事に。」「お暇申す。」「御さらうか。」「首をとつたりやるまでの。」「先づ是れが。」「お暇乞。」と、互の一禮細々と、ふる五月雨や袖傘の、竹笠取つて打被き、新田は假屋、曾我は伏屋に立ちかへる。述べも述べたり答へも答へた武夫の、詞の末は神妙、神妙々々なりとして、後に聞く人感じけり。

第二

己が人に及ばざるを恨みず、人の己にすぐるゝを嫉むは小人のならひ。されば海野小太郎行氏、新

の威勢にや恐れけん。とあるふし木につまづきて、弱る所を誤たす、差添ぬいてあばらほね、四五枚ばらりとかき切れば、四足を土にふみ入れて、立竦縮になる所を、頓てひらりと飛んでおり、數のとどめをさしもの猪、しとめて新田は悠々と、扇を遣うて立つたれば、大將軍を始めとし、大名小名列卒狩人、足輕荒子一同に、「のつたり新田、とめたり四郎、でかいた／＼手柄々々。いや／＼こじつとわめく聲、山も崩る、如くなり。頼朝御感限りなく、「新田が振舞、千度百度の高名にも優りたり。松島月毛をとらするなり。」と宣へば、祐經進み出で、松島月毛の事は、高名三度ある者に賜はらんと仰せなるに、縦へ鳴雷と組めばとて、三度の都合も合はざるに、忠常に賜はりては、海野の太郎に腹きれよとの仰せかや。先づ此の度は御無用。」と、たつてとむれば力なく、「先づ／＼休息仕れ。」と、御本陣に入り給へば、大名小名人數をまき、皆々假屋に入り給ふ。新田の四郎忠常、本意なけに見送り、「エ、につくい祐經、海野とおのれと縁者故、彼奴にほまれを付けん爲、度々我に恥辱を與ふ。出頭一の祐經が首取つて、高名三度の都合にせん。」と立ち上る所へ、若者一人木陰よりつ、と出で、「申し申し新田殿、前代末闇の御手から、目をおどろかし候。拙者は曾我の十郎祐成と申す者、先刻くるわにて虎が難儀を御身に受け、救はせ給ふ御懇切、生々世々の御厚恩、御禮申し上げ候。」と、頭を地につけ禮儀をなす。「扱は承り及ぶ十郎殿か。其の猪をとめたるも、御家來鬼王が妹、虎の爪を與へし

で齒をならし、唯一かけと喰りけり。此の勢ひに恐れをなし、突棒からりと投げ捨て、鹿垣を押破り、高ばひして逃げければ、數萬の狩人聲をあけ、一度にどつとぞ笑ひける。海野小太郎行氏眞一文字にかけ來り。「この猪を組み留めなば、高名三度にたらずとも、御馬を拜領致さん。」と、小太刀をかいこみ躍り懸れば、猪はすかさず一足に、飛ぶとぞ見えしが小太郎が、膝口より踝まで、まつくだりにかけて通せば、片足立つてちがくと、列卒の中にぞ逃げ入りける。今はをりあふ者もなく、いたづらに守り居る所へ、新田の四郎忠常遅ればせに驅けつき、「あら物々し、仰々し。漢の李廣は石虎を射る。明の金氏は女なれども、猛虎をうつて夫をたすく。縦へ鐵石を丸めたる猪なりとも、しや何事か有るべき。」と、箴竹笠かなぐりすて、「ゑいやおふ。」と聲をかけ、二丈餘り飛び上り、向うさまに乗り移れば、倒にこそ乗つたりけれ。猪は乘られて怒りをなし、土をけたて木の根を穿ち、雲と霞にわけ入つて、飛びこえ跳ねこえ、驅け上りかけ下り、虚空を飛んで廻りしは、周の穆王法の爲、八疋の龍馬に乗り、萬里を利那に至りしも、斯くやらんとぞ見えてける。新田は馬上の名人にて、樂天が三つ頭、王良が祕密の鞭、尾筒を手綱にしつかととり、腰も切れよとしめつけく、履行膝は山おろしに、さら／＼と断れてのけば、大童に亂れなつて、たゞ落ちじく落ちまじとぞ耐へける。小笹茅原巖石枯木、打ちつけく猛りをかき、落ちばかけんとあがきしが、新田は虎の爪をもつ、其

へば、武藏國の住人太樂の平馬の丞、「某とめて御酒宴の御肴に。」と、夕日にかやく大太刀かざし出でたりける。猪はいは根に身をふせて、飛びかゝらんとする氣色、たゞ牛鬼ともいつつべし。詞には似ざりけり。面もふらず逃けてゆく。平馬が姉婿、愛甲の三郎、熊手引つさけかけ向ふ。猪は身をふり飛びかゝり、左手の腕を懸けければ、熊手を捨ててぞ入つてけり。安西の彌七郎、「返せく。」と聲をかけ、長刀かまへかけ向ふ。猪はいかつて齒をみがき、唸りてかゝる其の聲も、高股をひつかけて、三間許りふり上げしは、鞠の曲ともいつつべし。白杵の八郎景信、續いて懸れば隙間もなく、眉間を二つに引きかけられ、眼くらんで引いたりけり。御所の黒彌五是れを見て、大の突り矢打番ひ、暫しかためて切つてはなす。矢よりも早く飛び來り、腰の番ひを横がけに、ざつふとかけてぞおとしける。岡部の三郎、原小二郎、槍ひつさけて兩方より、上段下段のつゝみ突き、はつしくと突き懸る。猪は一期の死に狂ひ、ひらりと飛んではかつしとはね、くるりと廻つてちやうどかけ、くるりくるりはたしく、蝶鳥などの如くにて、怯むけしきの見えざれば、二人もあぐんでさつと引く。猪は巖根に身をちぢめ、鼻の嵐にたけりをかき、息つぎしたる有様は、すさまじかりける次第なり。新開の荒四郎、「憎し、きたなし、かたしくよ。鬼神にてもあらばこそ、あの畜生を恐れては、誠の合戦なるべきか。某が打殺し、皮引剥いで障泥にせん。」と、突棒取りのべ打つてかゝる。猪はにらん

據は證據は。」とひどく問はれて、「ム、シテ證據あらば有免あらうな。後に否とはいはせぬが。」と、詞をつめても證據はなく、心をくだき思ひ付き、花野が與へし猛虎の爪、守より取り出し、「コレ此の書付を見たまへ。虎の生爪と書いてあり。はなしくれたる虎が爪、守にかけたる闘犬男。疑ひめさるは合點々々。今朝の遺恨に胎内の、せがれを殺さうのむさい心底、白痴きかぬ。」とぎしめければ、誠とや思ひけん、勢ひにや恐れけん、「ア、みじかし忠常、證據あれば疑ひなし。帳面もむづかしし。」と、虎は病に片付けける。新田が思案なかりせば、あやふき曾我の運命なり。かかる所へ海野が方へ、祐經よりはや使、「富士野の御狩まつ最中。然るに唯今いく年經るともしれぬ猪あれ出で、列卒四五十人かけ殺し、各あぐんで見え候。御詮議早く御しまひ、此の猪とめて高名し、望みの御馬拜領あれ。こと急なり。」とぞ告げたりける。海野は「あつ。」と言ふよりも、挨拶もなくかけ出す。おくれじものと新田の四郎、一散にかけ出で、後になり先になり、足もためず走りしは、さながら競馬の三重如くなり。案の如く狩場には、いく年ふりし猪の、牙は劍の如くなるが、鹿矢三つ四つ負ひながら、近づく者を懸倒し、おちあふ者を踏みちらし、大きに猛つて巖窟をこだてに構へ、鼻をふき、寄らばかけんず其の勢ひ。人々馬を立てかねて、列卒も亂れてたゞよひける。養山が術、きよりくりうが神變も、かなふべしとは見えざりけり。君團扇を閃かし、「誰かある。あの猪とめ高名せよ。」と呼ばはり給

れのうき身をすててんあるノ、或人の申されしは色も顔も、お腹も脈も只ではない。さだめてく
 あん青梅、好きやらば悪阻でござろ。めいよなふしぎや、中戸の豫言がはや七月」とぞ答へける。扱
 その次は虚御前、おめる色なく二人の前に立ちながら、「お尋ねなれども自らは懐妊にては候はず。勤
 めのうさが支へとなり、かかる病を受け候。よし又懐妊なればとて、夜なノ替る男の数、どれがど
 れやら何の其の、夫れに覺えの有るものか。」と、言ひすて歸れば海野の太郎、「ヤイノ寶女奴待ちを
 らう。ヤアのぶとい奴め、己と曾我の十郎こと、知るまいと思ふか。祐成が子に極まつた。サア吐さ
 ぬか。」とぞ嚇しける。新田曾我といふ聲に、花野が契約思ひ付き、「イヤ海野殿。浪人なれども祐成も
 侍、推しつけてさうもいはれず、病とあらば病にして、帳面をすまされよ。」といへば、海野聞きも入
 れず、「宥免するも事による。曾我は君の御仇、不吟味にはなり難し。腹をさかん。」とひしめきける。
 忠常ちやくと思案を出し、「エ、是非もなし。今は何をか包み申さん。あれは拙者が子にてあり。某虎
 に通ひしかど、世間を憚り、曾我と云ふ假名をして、遣手かぶる郭中、懐妊するまでかくせしが、手
 詰なれば打明ける。沙汰なしに頼み申す。」と、いへば虎は嬉しく、「ハテ卑怯千萬な。たとへ今死ねば
 とて、夫れを今言ふことか。」と、詞を合はする利發さよ。海野頭を振つて、「おいやるなノ。此の場
 をさまし重ねて曾我がゆかりとて、一人の手柄にせんたくみ。當座のでき合。但し虎と馴染の有る證

きしめて、晝まで寝るを作法にて、他ともんちの揚屋町、くつわの亭主下々まで、それを習ひに朝寢する。大磯小磯化粧坂、朝顔しらぬ里ぞかし。町の番太あわたゞしく、「何事やらん御詮議とて、新田殿海野殿御出でなり。」とふれありく。町の年寄五人組、寢惚髪に袴肩衣、土にひれふし居たりける。程なく兩人入り來り、「此の度仔細あつて、孕みたる傾城の父親を御詮議ある。少しも偽るに於ては、腹を切裂き吟味する。懷妊の傾城ども残らず出せ。」と申しける。町人ども承り、「懷妊と申しても三四人ならでは候はず。それ先づ藤屋の竹とり出でよ。」と言へば、戀には恥ぢぬ傾城も、包む色にや胸高の、帶でかくすもしをらしし。海野新田詞をそろへ、「汝が孕みし子の親は何者ぞ。帳に記し鎌倉殿御覽あるぞ偽るな。」「さればとよ、此の子の親は京の衆。偶とは云ながら、勤めであはねば眞實の、人目を包む闇の夜や、烏丸の烏帽子屋折様。」と言ひければ、海野帳にぞとめにける。次に出でしは、「井筒屋のひがきと申す新造。」と、傍からいふも恥かしく、桂の褌打合はせ、見せじとすれど振袖の、下よりもるゝふくよかさ。「其の子が父は誰なるぞ。」問はれて顔も赤くなる。「紅葉が谷の客なるがひよつと變るな變らじの、其の言の葉ではらみ匂や、連歌師の山様。」と、同じく帳にぞ付けにける。其の次は眉目悪く、歩きぶりさへ横町の、「青柳と申し候なり。」「扱汝が胎内の子の親は何者ぞ。」「誰と申して我が身には、二人の客も荒磯の、荒井の宿の馬かた、本名は六藏、替名は四の二、物思ふ流

は伊東の末なれば、我が君の御仇。海野に先をこされ、彼の御馬をとられては、某腹を切る許り。此の事に於てはなり難し。外の事は何なりとも、無心あらば聞くべし。」と、云ひ捨てて乗り出す。「なうお情なし。」と、尾筒を取つて引戻し、「御ことわり至極致したり。誠にお侍の手柄にせんと、思召すを止むる不調法。その返禮に進ずる實の候。」と、守袋より一包取り出し、「是れは韃靼國より渡りたる虎の生爪にて候。死したる虎の爪はあれども、生爪は稀なる物。誠や虎は獸の王にして、地を走る獸。おぢ恐るゝは必定。妾が在所三河國阿部山の狩人、此の虎の生爪をまもりにかけて狩に出づるに、いかなる荒熊、荒猪も、やすく手取に致す事、猫の鼠を取る如し。これを只今參らせん。御身につけて御狩場にて、猪とも熊とも引組んで、人の及ばぬ手柄を遊ばさば、海野が先はよも越さじ。いで〜證據を見せ申さん。随分御馬に鞭うち給へ。」「心得たり。」と乗り出す。娘は先に立ちふさがり追戻せばたぢ〜と、とゞろ〜と千鳥足、四足を折つて恐れしは、不思議なりける次第なり。忠常も我ををつて悦び、「奇代の重寶手に入るからは、御狩にて高名し、海野が望みの御馬を拜領して名を揚げん。此の上は曾我兄弟いかなる狼藉ありとても、子孫までも見逃しなり。弓矢八幡大菩薩此の詞に偽りなし。お事が父も和田殿と内通してたすくべし。人見付けては如何ぞ。」と、「さらば〜。」もよそごとに、聞き捨てて行く時鳥。五月の空の雨曇りに、まぎれてこそは 三重別路の、宵の移香燻

其のお詞は違ふまいな。「ハテ疑はしくば誓文立てうか。」イヤそれまでも及ばず。さあらば語り申すべし。自らは今朝御狩場にて、海野殿に捕はれし入道が娘花野と申す者にて候。そも其の入道が武藏坊辨慶が父辨眞と名乗りしは偽り、實は曾我の兄弟の下人鬼王團三郎が父、津藏の入道と申す者。御主の敵祐經に一矢と思ひ忍び入り、思ひの外に召捕られ候を、御前にて鬼王團三郎が親と、有りの儘に名乗りなば、御勘氣の曾我殿の大事と思ひ、名を隠し辨慶が父辨眞と、あらぬ事を申せしと存するなり。夫れにつけて鎌倉殿より、父親しれぬ子のあらば、懷妊なりとも腹をさき、詮議せよとの御諛を承り給ふとかや。頼み申すはこゝの事。曾我兄弟の人々は、浪人のつれづれに折々の色里通ひ、馴染の方もありと聞けば、遊女の腹に情のたねのやどるまい物でなし。よし其の事はかまはねども、それからそれがどうこけて、御兄弟の御身に萬一お祟りある時は、もと自らが親入道が仕損じより事おこる。是れを哀れと思召し、御聞きとゞけ候ひて、もしも曾我殿の子だねなど候はば、御料簡頼み奉る。」と、理をつくし事をわけ、手を合はせてぞ歎きける。新田聞きもあへず、「扱はお事は聞き及ぶ鬼王が妹。今朝の入道も辨慶が父とは偽り。鬼王兄弟が親なるとや。扱々餘儀なき頼み事、心得たりといひたいが、こゝに一つの難儀あり。海野と某御前にて、松島月毛と云ふ名馬をあらそひ、三度の手柄ある者に賜はらんと、御諛を蒙り、兩人が我さきに何をかな手柄にと、意地をはる最中、曾我

も海野も静まれく。是れは雙方道理にて、頼朝が無念なり。先づ彼の馬を只今は頼朝が預りたり。二人共に今までに一度づゝの譽あり。是れより後兩人の中、二度づゝの手がらをして、以上三度の高名あらん者に相違なく取らすべし。此の詞僞らば氏の神の御罰をえん。と、忝くも御大將御誓言ありければ、二人は、「あつ」と頭をさけ、恐れ入りたる禮儀の體。大將軍の御料簡、おのゝ感ずる許りなり。重ねて仰せ出さるゝは、「今辨眞が詞によつて案すれば、平家の餘類を始め義經の家人等、錦戸が一族、伊東入道の末葉なんど、頼朝に恨みある者多かるべし。敵の末は根をたつて葉を枯らせ」と傳へたり。新田海野にいひ付くる。「父親しれぬ幼き者を尋ね出して吟味せよ。大磯小磯の遊君はいふに及ばず、其の父分明ならぬ子は、懷妊たりとも腹をさき、きつと詮議を加ふべし。」と、仰せ厳しき御狩場の、番手々々の槍印、御馬印の目に高き、富士の裾野に出で給ふ。新田の四郎忠常は大事の仰せを承り、「あはれ然るべき御敵の末を詮議仕出し、高名三度の數を合はせ、松島月毛を拜領し、海野工藤に手柄を見せん。」と、駒を早むる大磯の、波こゝもとや竝木の陰より、若き女のつゝと出で、「是れ申し新田様、お侍と見受たり。ちと頼み度き事あり。」と、轡つらしつかと取る。をなご力も駒なづむ。郎等ども立騒げば、新田もとよりさる者にて、「さなせそく。見かけて頼むとあるからは、聞き届けでは通られず。シテ女郎仔細によつて頼まれうが、無心とは何事。」とあれば、「先づ以て忝し。」

を望め。」と仰せある。海野面目ほどこし、「御詫冥加に叶ひ候。然らば御祕藏の御名馬陸奥より召されたる松島月毛を賜はりなば、千町萬町の御加増にもまさりて悦び奉らん。」と、申しもはてぬに祐經、「オ、何しに御意に異變あらん。誰かある、馬引け。」と取持つ所へ、新田の四郎忠常、はゞからずつと出で、「暫く、工藤殿、彼の御馬には言分あり。某先年富士の人穴へ入り、御褒美望めとありし時、松島月毛拜領を願ひしかど、御出陣の召料とて、某願ひかなはぬ所に、老いほれの瘦法師召しとつたる御褒美とて、只今海野に賜はつては、忠常が武士道立ち難く、且は上の御依怙に似たり。よしそれとても工藤殿の御取持にて、是非海野に下されなば、某も思案候が、御返答承らん。」と、色をちがへて申しける。祐經えせ笑ひ、「緩急なり忠常、以前は以前今は今。御邊が望みあればとて、日本の武將として、誰に恐れて御詞を違へらるべきぞ。此の祐經が取持にて、海野に拜領せせんが、して御分が思案とは、どうした思案、聞かん。」といへば、「いや只思案までもなし、彼の御馬を胸中より二つに切り、先は某頭の方、海野にはともの方、御前にて半分づ、切り取るなり。」と怒りける。海野もせいて膝立てなほし、「某が拜受の御馬半分づ、切り取るとは、愛宕白山指もささば堪忍せぬ。」とつめかくる。忠常も刀に手をかけ、「オ、拜領したくばしても見よ。諏訪八幡も照覽あれ。馬人共に一討ち。」と三方論議の意地つくは、危くもはれがましく、各手に汗握りし時、大將扇を上げ給ひ、「新田

入道弓矢たづさへほのぐらきに、御假屋の邊忍んで徘徊いたす體、さながら山賊強盜とも見えす、必定平家の餘黨と存じ、早速召捕り候。きつと御糺明有るべし。」とぞ申しける。頼朝聞召し、「先年大佛供養の時、悪七兵衛景清が頼朝を狙ひしためしもあり。いか様おのれ仔細あるに紛れなし。まつすぐ白狀すべし、陳じなばがうもんせん。いかにく。」と仰せければ、此の入道ちつともおくせず、「いまは何をか包み申さん。某は一とせ奥州衣川にて、御腹召されし九郎判官義經の家臣、武藏坊辨慶が父、熊野の別當辨真が生き残りたる身の果て候。忝くも我が君今天下の武將と仰がれ給ふは、全く判官殿の戦功なるに、讒人の口によつて、一日も安堵の思ひなくうしなはれさせ給ひ、子にて候辨慶も冥途の御供仕りぬ。せめて無念をはらさん爲、討死したる御家人どもが、産みすてし子にても候はば、幼少なりともかりあつめ、心許りのとぶらひ軍仕らんする血祭に、先づ讒者を一矢と心がけ、忍びよつたる甲斐もなく、海野とやらんに見付けられ、白狀無念の至りなれども、君故すつる老いの命、とくく首を召されよ。」と、返答すしく申しける。頼朝聞き給ひ、「是れ一應の事ならず、後日に評議あるべき條、先づそれまでは勞れ。」とて、和田の義盛に預け置かれけり。時に工藤左衛門祐經進み出で、「誠に彼の法師其のまゝ置かば何事が仕出し、御遊興の妨げならんに、いしくも仕つたる海野の太郎、御褒美下され然るべし。」と取りなせば、君御悦喜の餘り、「オ、尤もく。何にても褒美

百 日 曾 我 (一名團扇曾我)

第 一

文宣王は大野に狩して麒麟を得。韓退之が獲麟の解にいはく、麟は徳を以てして形を以てせずと云云。麟は仁獸にして生けるをくらはず、生草を踏ますともいへり。道ある君が御狩場や、麒麟を得ずといへども、農業を妨げず。民をたすけて山田もる、火串の光明々として、斐たる君子の一遊一豫。國をなびかす旗棹の、直なる掟樂しめり。維時建久四年仲夏下旬、征夷將軍頼朝卿、富士の御狩の當日を、待つも程なきみじか夜や、御發向は寅の一點、假屋の木戸も明がたに、御出馬の御ふれあり。昵近外様の大小名、狩裝束に美をつくし、列卒の人数は所領の高下、面々持の場所にまとひを立て、組子には思ひくの笠印袖印。授御鷹はつみ、ゑつさい、さしば、せう、隼、このり、鷲、鵬、はくてうどりの朝鮮鷹、そろへて三千餘居なり。逸物の犬唐犬、是れも同じく三千疋、馬鞍皆具のきら飾り、花と紅葉をむさしのに、一どに眺むる如くにて、御感は斜ならざりけり。こゝに信濃國の住人海野の小太郎行氏、八十許りの老入道を御前にひつする申す様、「唯今御假屋へ參勤仕る所に、此の

かりけり。(竹本義太夫正本)

大覺大僧正御傳記 終

飛び來り、龍女をはたと蹴落して、「オ、潔し。若作障礙即有一佛魔境の力、今こそ本望唯遂けてあり。猶うき雲の關守ぞ。」と、聲ばかりして失せにけり。日像上人御覽じ、「いかに大覺。捨邪歸正の行法只今なるぞ。」と、佛前に手を合はせ、「頭破作七分如阿梨樹枝の誓ひを現はし給へや。」と、一心に觀念し、せめかけく祈らるゝ。法力忽ち金色の跳題目と現はれて雲中に見えけるが、經といふ文字の兩の引きすて地に下れば、龍女悦び縋り付き、軒端に傳ふ蜘蛛の、いとも危く三重したひけり。左右なく雲に乗ぜし處に、又狗賓顯はれ出で、「扱懲りもなし。おのれいつくへ餘さん。」と、羽風を立て翔け來る。龍女恐れて雲の足はやく逃ぐるや妄執の、輪廻の黒雲渦卷きて、くるりくと廻りしは、せつなくもまた三重すさまじし。されども達多が法敵の、五逆の罪のためしにや、狗賓あへなくはたと落ち、大地二つにさつと裂け、奈落の底へ落ちければ、日像不便に思召し、大覺諸共高聲に、提婆品を讀誦あり。時に龍女手を合はせ、「南無妙法蓮華經。」と、となふる聲のうちよりも、即身即佛目のあたり有りがたかりける次第なり。まことに妙なる法力にて、魔障も我慢のほほ消え、ともに成佛得脱の蓮華に浮み出でしとき、御法の雨は車軸のごとく、都鄙遠郷に降りわたれば、帝叡感限りなく、此のたびの御法施に宗祖日蓮大菩薩、日朗日像菩薩號。さて大覺は大僧正といとかしこき綸言の、今の世までもとまりて、宗旨繁昌國繁昌、五穀成就萬歲樂、日出たかりともなかく申すばかりはな

しくは、尋ね來て見よ法華經の、八卷が奥の九名皁諦＊みやくかうたい。」と詠じ給ひ、虚空に上らせ給ひけり。御聲みこゑに御夢驚かせ給ひ、「こはそも不思議の次第や。」と、諸卿残らず御前に召され、右の御靈夢一々御物語ましまし、「急に其の沙汰あるべし。とくく。」との宣旨なり。おのく驚き思召し、宣旨に任せそれよりも、敕使を立てさせ給ひける、例たのめ少なき 三重事共なり。さる程に、日像大覺は佛神擁護むかひごの名僧故、ふたゝび帝都に歸洛あり。叔救誕に任せ、降雨成就かううの祈りの爲、御寺を龍華王院りうけわういんと改め、三寶四菩薩日蓮の御影みえいの莊嚴しやうごん、善盡し美盡しつゝ、素幡華鬘すはたけまん種々の香花を供へつゝ、金銀珠玉日に映じ、軒いらかも蕤らも光添ふ。かくて日像大覺は、禮拜恭敬らいはいくぎやうましくて、第一の卷序品より一心不亂に讀誦あり、第三等雨法雨うほううの文に至り給ふ時、雨夜の前佛前に聽聞申しおはします。大覺御覽じ、「なうお事は雨夜の前にてあらざるか。我こそ昔の兄月光よ。」と宣へば、「あら有り難の御事や候。恥かしながら今は何をか包むべき。我本人間われもとにて候はず。長く蛇道の苦を請うけし龍女にて候が、靈山會場りやうざんまじやうの古を聞くにつけてもうらやましく、此の御經にたよらん爲、假かりに御身と連枝となる。いよく佛法堅固にして、五濁ごじよくの衆生を度し給へ。我も像師の結縁けちえんにて、朝暮拜する曼陀羅の、妙法蓮華の功力により、變成男子へんじやうなんし疑ひなし。此の報恩に今此の度、雨を降らし妙經の威力みりきを現あらはし申さん。」と、夕立つ空の浮雲を、搔き分け押分け 三重飛行ひびやうある。不思議や俄に如意が嶽の方よりも、電光頻いなびかりりにて魔風梢を吹き折り、時平天狗

つ空に風遠近の、山河草木震動し、矢を射る如く飛び去りけり。御所中一度に肝を消し、「あな有り難や。さりとては、かかる貴き妙法の御宗旨にならでは」と、老若男女二百人念珠を切つて、「今身より佛身に至るまで能く持ち奉る。南無妙法蓮華經。」と、唱ふる所の信心は、「これぞ得入無上道速成就佛身なるわ。」と、悦ばざるこそなかりけれ。

第五

いで其の頃は延文中、天下大きに早して、五穀果實の種を絶ち、餓葶野外に充ち満ちて、行人道路に倒るれば、徒事ならずと帝より、諸國の神社へ奉幣使を立てられ、神泉苑大堰川、賀茂桂川の邊にて諸寺の高僧貴僧に仰せ、大法祕法を修せらるれども、遂に小雨も降らざりけり。君宸襟を痛ましめ、「朕が不徳なる故か。」と、朝餉を止められ、綾羅に霧を、かけまくも忝き寂慮にて、暫し御寢と見えけるが、角髪結うたる童女一人忽然と現はれ、帝に向つて宣ひしは、「此の度天下旱魃し、萬民憂へに沈む事、一乘弘通圓頓の行者日像大覺といふ二人の法師を、佞人僞つて備前國に流し置く。諸天龍神これを悲しみ、慈悲の雨露を惠まさず。急ぎ兩僧を迎へ、妙法の法水を乞ひ受けよ。」とありければ、帝御夢の中にして、「御身は何處の人ぞ。名は何といふぞ。」と御尋ねありければ、其の時童女、「戀

何とせん方あら恨めしの浮世や。」と、流涕こがれ歎かる。時平えせ笑ひ、「ホ、結構な有様、ちつとさうも御座るまい。先程よりの悪口の返報、いで／＼暇取らせん。」と、飛びかゝり膝に引敷き、柄も拳も碎くるばかり、刺し貫くぞ哀なる。「今は存念晴らせし。」と、死骸を引立て見てあれば、有り難や姫君の御守曼陀羅を、すたく／＼に刺し通し、題目より流るゝ血は、たゞ瀧つ瀬の如くなり。時平呆れ、「こは如何に、野狐の所爲か。」と見廻せば、思ひも寄らぬ廣縁に、姫は佇みおはします。「エ、無念や仕損ぜし。」と、側に掛けたる長刀を、柄長く押取り、「遁さじ。」と走りかゝつて丁ど斬る。引外し飛び上り、長刀はたと踏み落し、其の隙に曼陀羅を拾ひ上げ捲き返し、押戴きてぞ坐す。「扱無念や。」と振廻し、苛つて蒐れば弓手へこし、馬手へ跳ね越え飛びしさり、裾を拂へばこは如何に、虚空に乗り、持ち給ふ彼の曼陀羅を、時平が眉間にはたと打付くる。のつけにどうど倒れ伏し、暫しが間閻絶し、「なう耐へがたや勿體なや。十界互具の本尊より、血を出せし嚴罰立處に報い來て、熱湯の責めに遭ふ。あら悲しや。」と叫びぬる、口より猛火燃え上り、五體の繼ぎ目／＼より、断れ／＼にさばけしは、あさましかりける苦しみなり。暫くあつて寄りこぞり、元の形となりけるが、兩眼光り鼻長く、さも凄まじき羽がひ生ひ、「我佛法に仇をなし、魔道に入るを幸ひに、己を掴みひしがんと思へども、恐ろしや三十番神十羅刹守護し給へば力なく、唯今は立ち去るなり。重ねて思ひ知らせん。」と、夕立

約はせられうとも、末代家の瑕となれば、御身と夫婦になる事は、ふつ／＼思ひ寄らぬぞや。ならぬぞならぬ。」と仰せける。時平愈腹を立て、「なにさ關白の娘とて、女房にせられまい物か。此の上は男の我、適れ天子の娘なりとも女房にして見せう。是非いやならば暇にはこれ、これなるわ。」と、太刃をすばと抜きけれども、姫君これにも怪顛なく、「やあ道知らずの悪人め。如何に慾に耽ればとて、眼前世嗣のある家を横領せんとて、自らを妻にせんとは扱いか。せめて氏ある身ならばこそ。賤しき下々の分として、攝家の跡目を望む事、天命知らずの驕り者。これにつけても母上の、慳貪邪見の心から、如何に繼しき子なればとて、妾が爲には兄なるを、疎み嫉みてあの如き、放埒無慙の下々ばらを、夫に持たせん壻にせんとは、扱情なき心入や。」と、恨みかこたせ給ひけり。時平飽くまで恥ぢしめられ、「最早堪忍ならぬ。」とて、既に討たんとせし所へ、母上騙け出で縄り付き、「こは情なし。お事は氣ばし違ひしか。姫が行方の知れざれば、在るにも在られずいつとなく、泣き歎きしを知りながら、歸ると知らせぬのみならず、殺さんとは扱如何に。お事は妾が敵かや。殺さで叶はぬ道ならば、先づ我から。」と縄り付き、悶え焦れて叫ばる。時平母上を取つて伏せ、「何娑婆塞ぎ面倒な。死に度くば死なせん。」と、胸元を三刀に刺し殺し押伏する。姫君氣も消え心消え、「なう情なや。母上を何の科にて殺せしぞ。口惜しや自らが、女の身の果敢なさは、親を殺せし敵をば、目の前に置きながら

うかま占野しめのに竝ならびの岡。此所こそな、のやのだけの、紫竹舟岡鷹たかが峯、見やり見返り眺めこし、やうやう北野に三童著くわんくわつき給ふ。然る折節時平は、北野下向と打見えて、編笠深く顔隠し、下人少々召しつれて、寛閑くわんくわつらしく來りしが、姫君と行き違ひ、「はて田舎者さうなが、よい風の。」と、立止たちどまつて眺むれば、姫君笠を押し傾おしだたげ、足早に行き給ふ後姿うしろすがた歩みぶり、「八幡堪忍ならぬわ。」と、追つ付き御手を引ひ止とむ。高則が妻押退おしけて、「これなう田舎者と見て侮り給ふか。主ぬしあるお子をしやほに大膽な。」といへば、「なに主がある。其の主のあるが面白い。此の上は無理と出る氣さし。」とむすと抱いだき顔を見て、「やお事は雨夜ならずや。扱あよい所で出會うたり。これは北野の引合せ。」と、供の者共諸共に、ひしくと取圍もわみ、無體に引つ立て連れ行けば、時雨あまりの悲しさに、「やれ狼籍者。あたりに人はあらざるか。あれ取返し給はれ。」と、起きつ顛まくらびつ追ひ行くを、散々に叩き伏せ、跡をも見ずして連れかへるは、情なうこそ三童見えにけれ。御所にもなれば、先づ母君に押隠し、とある一間に連れて行きて、「やい爰こゝないたづら者、何に不足あつて抜け出てはありけるぞ。親の合點せらるゝ上は、否いでも應おても我が女房。サア従ふや従はぬや、早く返事をさらへ出せ。」と、眼まなこをいら、けはつたと睨み、牙かを嚙かんでぞ嚇おどしける。姫君ちつとも恐れ給はず、「いやこれなう時平殿、先づ心を静め思うても見られよ。自らは誰たあらう、天下ひとに一人の關白せきの娘。いうてもお事は武士ならずや。例へば母の不合點にて、契

方と踏み迷ふ。小野の淺茅に置く露の、樹も小褌もしほたる、蟹の小舟や小鹽山。あれく御覽せ
野も山も、紅葉色どる四方の景、えやは筆にも及ぶまじ。捨てられし身は、昔ながらも哀れさは、今
更増る野の宮の、杜の木枯吹き散らす、木の葉の里の賤の女が、刈り置く稻をかつきつれ、
つれた、ア、形振を、立寄りうつす姿の池、濁る浮世の塵ひぢも、積りくへて高尾山。愛宕参りに
袖をひかれた。これも愛宕の御利生かの、面白や。」と歌ひつれ、九折くる櫓が原、はらく通る村時
雨、袖をかざして衣笠山、さがなや嵯峨の女郎花、尾花招けば立止り、しばし座しき刈萱の、桔梗白
菊たはれぐさ、引く手を取りて地榆、はや歸らんと夕顔や、歌しのぶ草葉末にむすぶ白露の、たま
たま來ても早往のとは何事ぞ。せめて二十日の月の出づるまで、暫し假寐の岡のべに、蟋蟀はたおり
益斯、りんくくと鳴く鈴蟲に、駒も勇むや轉蟲、たれ松蟲の聲澄みて、濁る時なき清瀧の、瀬々の網
代木水車、廻れく品よく廻れ、くるりくるり、まだくるりきりきりくたよくと、波に
搖らる、川柳、枝垂柳は風に揉まる、都の牛は車に揉まれて、とろくと轟の、橋にしばく
休らへば、もの鵝の鳥の羣れ居るに、驚く魚を追ひ廻し、かづき上げすくひ上げ、隙なく魚を食ふ時
は、罪も報いも後の世も、忘れ果てつ、面白や。けに思ひ出し、石和川石に御法を書き留めて、弔ふ
ためしも有柄川、いざとて諸とも手を合はせ、妙法蓮華の手向草、江河の鱗、山野の獸、草木國土

庭の面、さながら夢のこゝちにてあきれながらも人々は、自我偽を讀み法樂し、首題を唱へたてまつる。「まことに是人於佛道、決定無有疑の金言に、正しく入りし人々かな。」とて、押しなべ感するばかりなり。

第四

いたはしや雨夜の前、兒鳥が妻の情にて、嵯峨野の奥の山陰に、月日を過させ給ひしが、いつぞや高則は、お寺詣と立ち出でて歸りもせず。音信をまつに時雨の物思ひ、案じ暮して居たりしが、餘り待ち侘び、女房は、「妾お寺へ参り様子を尋ね参らんに、お寂しながら待たせ給へ。」といひければ、「こは現なや、いかで一人はあられうぞ。妾も共に。」と宣へば、「誠に一人置きましては氣遣はし、お供せん。去りながら其のお姿ではなか／＼人や咎めん。」と、里歸りする初嫁の、振袖田舎模様にて、其の身は下女の姿になり、鶯袖のゆきあはぬ夫を尋ぬる 三重

雨夜の前道行

小牡鹿のつま戀ふ聲に秋を知る。山里ながら住み馴れて、しばし名残は有明の、空灶しめる雨夜の、濡れし姿は自ら、時雨や誘ひ眞菅笠、雫とく／＼立ち出でて、覺束なくも行く道を、彼方や此

是れぞ諸法實相の風。無間に沈む悪人なりとも、今臨終の期に及び、此の法を聞入れ一心結定して首題を唱へ奉らば、即身成佛せん事何疑ひかあるべき。若し此の詞虚言ならば、日蓮を始め日朗日像、かう申す大覺、阿鼻大城に忽ち墮ち、無量劫を経るとも浮ぶ世更に候まじ。必ず疑ふ心なく日蓮の法水を汲み、今此の火宅を離れずば、又ぞや生死流轉して浮ぶ世更にあるまじ。」と御教化半ばに、不思議やな虚空に花降り音楽聞え、星の數々天降り、猶望月の照りまさり、輝き渡る庭上に、寶塔忽ち涌出ある。日像暫く合掌あり、「如何に高則。日蓮が偽りなき即身即佛の證據を見給へ。忝くも釋尊の此の法華經を説かせ給ふ時、六種震動し多寶如來現はれ出で、今世尊の説法は皆是眞實なりと末世の證據に立ち給ふ。只今爰に出現も、御分が迷ふ心あるを晴らさしめん御利益。」と、宣ふ下より寶塔の、扉四方へ開きけり。「あれく正身の多寶佛拜み給へ。」とありけれども、兒鳥が目には寶塔の光り輝くのみにして、更に拜まれ給はぬ上、扉はたと閉ちければ、「扱あさましや業惡の疑ひの雲眼に覆ひ、尊容拜まれましたさす。今は何しに疑ふべき。許させ給へ。」と手を合はせ、不覺の涙に咽びけり。上人聞召し、「オ、尤もさぞあらん。然らば一念決定し、題目を唱へよ。」と、寶塔にさし向ひ、「如却關鑰開大城門。」と唱へさせ給ふ時、扉ばつと開け如來の尊影儼然たり。高則信心肝に銘じ、こは有りがたやたふとや。」と、頭を地につけ禮拜す。夜も明けがたの月の影、星のひかりも薄ぐもり、霧立ちかくす

是等は皆無一不成佛の經文、空しからざる故と遊ばされて候。何とく會得致されたるか。」兒鳥道理に至極して、唯緩々として言葉もなく控へしが、暫くあつて申しけるは、「して、其の善惡不二の妙理より、迷ひの凡夫となるは如何。」時に大覺笏取直し、「善哉々々よき難勢。さあらば示し申さん。先づ一切衆生の迷と悟は、水と波との如し。それ心性の水は波もなく風もなし。然るに一念顛倒の風起る時、千波萬波の浪となる。波もと水なり、水全う波なれば、煩惱即菩提、生死即涅槃にして、眞如海の内には衆生佛の隔てなく、一體不二の妙理なれども、無明煩惱の迷ひの縁によつて衆生となり、一乘一實の妙法の縁に引かれては、如我等無異の佛となる。是れを佛種從縁起是故說一乘といふなり。されば世語にも面白や。實相無漏の大海に、五塵六慾の風は吹かねども、隨緣眞如の波の立たぬ日もなしと、常に人の口號み申さず候や。あれく見給へ。心なき草木さへ、それんの縁にひかれ、青陽の春の園には花は紅柳は緑、夏は繁りて梢となり、秋は紅葉の色をなす。冬は野山も音さびて、皆白妙の示しなり。されば歌にも、妙の名は八卷許りに限らじな。松竹櫻當位即妙と連ねたり。然れば衆生の迷ひといつば、煩惱の山高く妄執の雲覆ふ故、眞如の月立隠れ迷ふ心の暗となる。其の迷ひを晴らさんと思はば、事に觸れ折につき後生を心につけ、花の春雪の朝も是れを思ひ風騒ぎ村雲迷ふ夕にも妙法を忘れ給ふな。出る息入る息を待たぬ夢の世に、唯他念なく南無妙法蓮華經と唱へられよ。

高則膝立て直し、それはなほく心得がたし。例へばな、人の口に火々と言へども、手に取らざれば暑からず。水々と口に言へども、飲まざれば咽喉の渴き止むまじ。まつその如く唯題目ばかりを口に唱へ、其の心を知らぬ悪人の、惡趣を免わ得道するとは、何とも道理聞きがたし。」と、座を打つて申さる、一オ、難ぜられたりく。併し今示す所の妙法は、諸教中王の御法にて、功一期に高く、化度三説にすぐれたれば、餘經の及ぶ所にあらず。たとへば師子王の筋を一筋琴の絃にかけ、一度彈すれば残る十二の絃一度に悉く切れ、梅干のすき聲を聞けば、口中に酸溜り口を潤す。世間の不思議さへ斯くの如し。如何に況んや出世一大事の法華經の不思議、凡智の及ぶ所にあらず。それ小乘四諦の名許りを嚙りし鸚鵡さへ天に生じ、三歸ばかり持ちし人大魚の難を遁れたり。ましてこの法華經は八萬聖教の肝心、一切諸佛の眼目なれば、我等これを唱へ四惡趣を離れん事、何の疑ひのあるべきぞ。さるによつて提婆品に、法華修行の輩に以上五つの功力を擧げ給ふ。一つには三惡道に墮ちず、二つには十方の佛前に生まれ、三つには所生の處に常に此の經を聞き、四つには若し人天の中に生まれては勝妙の樂を受け、五つには佛前に在つては蓮華より化生せんと説き給ふ。これく拜み給へ。此の心を大聖人の御書に、提婆が三逆も羅睺羅が二百五十戒も同じく佛に成る。嚴王の邪見も舍利弗の正見も同じく授記を蒙り。爰をもつて大惡をも歎く事なかれ。一乘を修行せば提婆が後を繼ぎなん。

と釋し、一念の裏にも一心亂ぜざるを誠の修行といふ。これをよくよく心得修行致されよ。それ／＼大覺。」と宣へば、畏まつて笏を取り、「鐘鼓獨り鳴らす、打つに隨ひ響あり。不審あらば愚僧答へん。問はせ給へ。」とありければ、兒鳥につこと笑ひ、「けに頼もしし。さあらば尋ね申すべし。されば妙法の經力にて即身成佛と説き給ふ。然れども女人は地獄の使よく佛の種を絶つといひ、又内典には五障と嫌ひ、外典には三従と選ぶ。されば榮啓期が三樂を歌ひしにも、女人に生まれざるを一樂とすと捨てたり。かかる重惡の女人、法華の力如何なれば、龍畜蛇身の女人の身の、南方無垢世界に成道を遂ぐるとは、これ疑はしし。」と難す。大覺答へて、「それは御身方便の經に心を寄せ、即悉頓成の妙理を忘れ給ふな。それ女人を選び惡人を捨つるは、法華以前の餘經の沙汰。此の經の功力は無差平等の妙理にて、惡人善人有智無智、戒を持つも持たざるも、男子女人の隔てなく、諸の川水の大海に入れば皆潮となり、須彌山に近づく鳥の金色となるが如く、法華經をだに持てば、總じて十界の衆生、殘らず成佛の素懷を遂ぐる御經なれば、平等大惠眞淨大妙法とも、十界皆成佛の妙經とも申すなり。されば其の證人を出し聞かすべし。先づ惡人には提婆妙莊嚴王、有智は舍利弗、無智は槃特、有戒は聲聞、無戒は龍女なり。かかる衆人の成佛は、皆妙法の威力にあらずや。」高則聞きもあへず、「扱は無智愚鈍の凡夫の、何の辨へもなくとも、たゞ題目をさへ唱へ候へば、四惡趣を離れ候か。」「中々の事。」

大蛇碎けし舟板悉く取りまき、微妙不思議の聲を上げ、一如波得船。南無妙法蓮華經。」と唱ふれば、舟板おのれと一つに集まり、蕪の如くの舟となる、奇妙なりける次第なり。人々奇異の思ひをなし、日像を初め、各舟に乗り給へば、其の時大蛇立ち上り、忽ち形を變じ妙法五字の帆柱となり、尾を以て潮を捲くと見えけるが、有り難や界如三千の帆を揚げて、諸法實相の追風を得、風に任せてそれよりも、備前の兒島へ三重吹かれ行く。かくて聖人、高則が情にて僅かの庵室引結び、去年と過ぎ今年と暮れ月光公も今ははや、御修行の功積り御剃髪なされ、即ち御法名を大覺と改めさせ、像師諸共妙法の、御法を弘め給ひけり。頃しも九月十三夜、今宵は高祖日蓮の御難の夜とて、高則は日像大覺招待し様々と饗應申し、昔語りの序よく、兒島申しけるやうは、「我が父在鎌倉の節、日蓮上人の御教化をうけ、受法せしと承れども、某幼稚にて親に後れ、田舎住のはかなさは、宗旨の有り難き事をも承らず。然る故や、もすれば諸宗の論に心移り、法華に不審の思ひなす。恐れながら佛道修行の御教化に預り度く候。」と、謹んで申しけり。像師聞召し、「オ、尤もかな。それ法華修行の肝心は信心をもつて根本とす。愚鈍第一の我が名を知らぬ弊特も、智慧第一の舍利弗も、同じく佛と成る事は、唯信心の二字にあり。さるによつて華嚴經には、佛法は海の如し。たゞ信を以てよく入ると。又佛舍利弗に示して曰く、信を以て入る事を得たり。己が智分に非すと述べ給ふ。されば各信といつば、無疑惑心

覺高則をさもあらけなく縛めて、道中嚴しく守護しつゝ、難波の浦より出船し、風に任せて播磨灣。爰は西國二箇所の難所、ところこそよけれど、半平つつ立つて、「これく流人のかたぐ。この海にて沈めにかけてよとの宣旨に任せ、只今爰に沈むるなり。覺悟あれ。」と呼ばはれば、各はつと驚き給ふ。中にも兒島齒がみをし、「エ、勿體なや。假令如何なる科にもせよ、法衣を著せし上人を、期様に行ふ法やある。かく暴悪の天子とは知らで、心を盡し北條一家を討ち滅ぼし、寂慮を息め申さんと、智謀を碎きし後悔さ。あつばれ繩目の身ならずば、己等一々掴み裂き、直に内裏へかけ行きて、帝にもせよ王にもせよ、唯一太刀に恨みんもの、扱口惜しや無念や。」と、舟底どうくと、抜くるばかりに踏み鳴らすは、凄まじかりける氣色なり。半平嘲笑ひ、「扱腹筋痛きあだ威言。やれ此の世の王は最早叶はじ。追つ付け閻魔王を恨み腹を癒よ。いでく暇取らせん。それく。」と下知すれば、畏まつて警固の武士立ちかゝるを、どうくと弓手馬手へ蹴倒せども、大勢ばつと折り重なり、牢輿諸共智覺正覺海へだんぶと投げ入れしが、忽ち蒼波紅蓮を返し、千尋の大蛇現はれ出で、舟を揺り上げ揺り下し、惡風毒氣を吹きかくれれば、「こは悲しや。」と警固の武士、前後を忘じ目も眩み、みな嘔血を吐きけるが、舟は微塵に碎けつゝ、底の水屑と三重なりにけり。されども二つの牢輿智覺正覺高則は、少しも波にひたりもせず、剩へ牢輿は雙方へさばけ、舟板諸共暫しが程に、波に漂ひ見えけるが、時に

のなせる所と云ひながら、誠※は諸餘怨敵皆悉摧滅※の、御奇特あらはし給ふ處なるわ。と、聞く人感にぞ堪へにける。

第三

危き命逃げ延びて、立歸れども靜まらぬ、胸もどき／＼時平は、猶いやまさる無念さに、高橋半平といふ浪人を招き、金銀をとらせ酒をすゝめ、「さて頼みたき事あり。」と、巨細こまごま残らず語り、「月光が儀は言ふに及ばず、日像共に沙汰なしに、殺す思案はあるまいか。」と、餘儀なく頼めば半平は、暫しうつぶき眼まなこを閉ぢ、「これは格別の儀なれば大事の思案、はあ何とがなエ、思案袋の口が解けて候。綸言りんげんと偽りにせら偽ご敕使しやくしをたて、月光君を訴へもなく引込み置く科とがによつて、遠流せんりゅうと偽り無體むたいに各牢輿かうごに乗せ、寺中残らず搦め取り、西海の沖中にて沈めにかけて失はば、誰知るものも候まじ。但し如何いかん。」といひければ、「さて解とけたり智慧袋、これに如しくべき智畧ちりやくなし。とてもこの事に御身敕使になつてたべ。偏ひとに頼む。」とありければ、「はて此の上は免も角も。然らばお手の人々を仰付けられ候へ。晝は人目いかゞなり、夜をこめ都を出で申さん。」「實かに尤も。」と夕まぐれ、槍長刀とひしめいて御寺をさしてぞ三重急ぎける。けにや天子の御威光は、偽とても誠ごと、思ひも寄らぬ牢輿に、日像月光乗せ申し、智覺正

いッかに所領が欲しいとて、現在の御實子を殺させ、其の跡を取らんとは、悉皆夜盜強盜のやから。己法師とならずんば、首引抜いてくるべけれども、我々が出家はいぬめが仕合、とうく歸れ。」と罵れば、時平大きに怒り、「あれ物な言はせそ。亂れ入つて討ち取れ。」と、苛つて下知をなしければ、兄弟腹に据ゑかね、太刀も刀もあらざれば、飛びかゝりく取つては引伏せ押伏せ、其の太刀を奪ひ取り、羣りかゝる大勢を、はらりくと三重斬り伏せけり。されども敵は大勢故、此處彼處より亂れ入り、勿體なくも上人を兩方へ引張り出し、月光はいづくに隠せし。眞直に白狀せずば、此の太刀が問ひ狀ぞ。」と、御胸板に押當てしは、危かりける仕業なり。かかる折節兒鳥の三郎、今日は父の忌日とて、彼の御寺へ参り合はせ、此の體を見もわかず、「はつ。」と驚き驅け入つて、つき退け引退け取つて投げ、上人を押隔て二王立に立つたるは、面を向くべきやうぞなき。時平齒がみし、「あれ餘すな。」と悶のれば、高則あたりを見廻し、二丈有餘の材木を軽々とひつさけ、「三衣の僧に敵たふやから畜生に劣りしを、刀汗して詮なし。」と、毆り立てく算を亂して三重打ち伏する。時平今は敵はじと、跡をも見ずして逃げ去れば、「オ、さもさうすく。」と、しづくと立歸り、上人の御目にかゝり、「扱々危き處へ参り合はせし珍重さよ。定めて斯くては果すまじ。たとひ重ねて寄せ來り、幾千萬騎候とも、某かくてある上は御心安かれ。」と、門戸きびしく差固め、御寺を守護し居たりける。「これ高則が勇力

まづ私宅へ御供し、御所の様子を窺はん。」と、夫婦諸共御供申し、庵をさしてぞ三重歸りける。これは扱置き、御繼母は月光君を殺さんとの、巧みもあだに成る上に、月雪花と思ひ手の雨夜の前、いつちへか知らぬ行方をあこがれて、身も絶えなんと歎かるゝ。時平もはたと胸に迫りしが、いやは申しつくづくと思案致すに、姫も彼奴等が勧めにて、咬せしと覺えたり。其の上聞けば、平井兄弟仰せを無にするのみならず、月光諸共日像法師に受法し、出家せしと承る。いよく憎き仕業。縦ひ出家にならばなれ、某直に行き向ひ、月光共に首を刎ね、鬱憤晴らさせ申さん。」と、究強の若者五十人、著込鉢巻高股立、とるま遅しと三重急ぎけり。さる程に月光君平井兄弟諸共に、日像上人の御弟子となり、御寺に忍びおはせしが、元よりも月光君、無邊行菩薩の再來のゑ、自解佛乘の悟りを開き、化一切衆生皆令入佛道の願ひに適はせ給ひけり。兄弟は法師となり、兄は智覺弟は正覺と法名し、即身即佛の媒、唯此の五字の名目ぞと、眞實妙に入りけるは、殊勝なりける次第かな。然る所へ時平は、手勢引具しつゝと入り、「やあ兄弟の生道心ばら、主命そむくのみならず、何の意趣あつて、斯く法師とはなりけるぞ。あつばれ憎き仕業。先づく月光は何處に在るぞ。急ぎこなたへ渡せ、早く出せ。」と、太刀抜き寛け、はつたと睨んで立つたりけり。兄弟聞きもあへず、かつらくと笑ひ、「なに主命を背きしとは、どの主の事なるぞ。我々が主としては月光君より外になし。いやはや腹筋いたし。

れば、黙止しがたなく濡れし身の、又ぞや御身に靡きなば、二道かくるまめ男、いやなりませぬ。」と仰せけり。まだ殿なれねどわけ知りも、逃ぐるばかりのしなせぶり。とんと腰骨抜け、「高則いつそ殺して給はれ。」と、よれつもつれつする所へ、兒島が女房ひだり脇わき笠の下に、小筒を携へ來りしが、此の體を見付け、燃え立つ焰胸ほのほを裂き、身悶えながら石を拾ひ、「扱腹立ちや。」と投げかくる。高則驚き、「はあ大事の所へ魔がさいた。エ、因果めが。」と呟つぶやきて、舟差寄すれば女房は、角も生ゆべき顔ばせて、舟底の抜くる程どうど飛び乗り、「これこゝな上臈、美しい顔をして、人の男に心をかけ、ようもく暖かに、此の舟へは乗られたなう。男ひでりはゆくまいに、扱恥知らずや。」とひしるにぞ、姫そゞろ恐ろしく、「こは難題や。自らはさうした者にて更々なし。語るまじとは思へども、御身の胸を晴はらさん爲。」と、月光君の御行方尋ね出でさせ給ふ事、始終を殘らず宣へば、夫婦横手を丁ど打ち、「こは如何にあさましや。如何に存ぜぬ事とても、餘りとあれば勿體なき、法に洩れたる慮外の段、眞平許させ給へや。」と、五體を投げてぞ歎きける。姫君不審に思召し、「して方々は誰なれば、斯程までは宣ふぞ。」「さん候。某は兒島三郎高則と申す浪人にて御座候。扱女房は其の以前、君の御父上時雨の御所にて召使はれ、かくれさせ給ひて後某妻女に仕り、それ故名をば時雨と申し候。然れば御恩の君の姫君を、いかで粗畧に存すべき、此の上は身不肖ながら御先途見届け奉らん。見苦しく候へども、まづ

節もがな天下を覆し、宸襟を安んぜ奉らんと、世をためらひ嵯峨の奥に、たゞ夫婦のみ隱家の、瓢
額川に口漱ぎしも、かくやと思ひしらま付、いるさや月の桂川、一葉に棹さして、釣のいとなみうつ
つなや。實に古も五湖に浮べる船の内。それは功なり名遂げ、身退きての樂しみを羨むばかり。有
明の月をうかゞふ猿よりは、猶あだならん我が心、よしやかなはで玉の緒の、絶えなば絶えよながら
へば、石に立つ矢と思ひ出の、ひとり楽しむ舟の内へ、「物申さん。」と呼びかくる。「や、何事ぞ。」と見
返れば、遂に見馴れぬ顔かたち、ぞつと時雨のぬれ姿、さも恥かしげに笑みながら、「自らは人を尋ぬ
る者なるが、其の舟に乗せ向うへ越させ給はれ。」と打ちなづみたる物越に、高則心とけくくと成
り、「はて若い上臈の、お連もなく供もなし。いとほしや嚙便りなく在すらん。いでく乗せて參らせ
ん。」と舟差寄すれば伽羅の香の、薫じ渡れる天津風、雲の通ひ路絶え果てて、乙女や迷ひ來るらん。
なんでも爰は濡れかけてとは思へども、流石又下女や婢にあらざれば、つつかけても口説かれず、如
何と思ひいつの間に、舟川下へ流るれば、「はつ。」といひさま押し直す。權のしたゞり姫君の、御身に
ばつとかゝるにぞ、「南無三寶。」と、高則迷惑さうに見えければ、「はてちつとも苦しからず。これ程の
事に心弱きお人ぢやわ。」と、につと笑顔の御簪に、水溜れかし身を投げん。「お心ならお姿なら、いや
はやなりませぬ。」と、御手を取れば、「はてわけもない。御身はいかい横著人かな。權の雫が濡れか、

いつの榮耀えいやうを期こせんとて、數代すだいの主君を討ち奉らん。尤も早速言ふべきを、兄弟といひながら、實は心が置おかされて、これまで延引致せしぞ。天神地神も照覽あはれ、全く虛言きつごんこれなき。」と、涙を流し口説どくにぞ、さしもの一角しやく悄悄しやくとなり、「さて勿體なや淺あましや。かかる事とは存ぜずして、法に背そむける慮外の段眞平許させ給へや。」と、手を合はせてぞ詫わびにける。禮儀の程こそ殊勝しゆせうなれ。上人この由御覽みじて、「さて見事なる兄弟の所存、尤もかうこそあるべけれ。我は法華の弘通くわうつう日像にっざうなるが、方々かたぐが忠信あつく、又は愚僧ぐそうが信かに適なひ、いづれも怪我の無き内に來りぬるこそ珍重ちんちゆうなれ。いざ先づ月光げっこうを伴ひ我が寺に忍ばせん。時刻移る。」と宣へば、兄弟大きに悦よろこびて、「さて有り難ありがたき御仰せ。いよく頼たのみ奉る。」と、上人の御供し、大覺寺へと急いそぎける。「彼の兄弟は義を守り、命を的に隠かくれなき、弓矢きうしとる身の手本てほんなるわ。」と、褒ほめざる人こそなかりけれ。

第 二

其の頃相模守平の高時天下の執事しゆじを取り行ひ、上君主の徳にそむき、下臣しもの禮を失ふ。さるによつて四海安からず、手足しゆそくを置くに所なし。伯夷はくいが如き賢人も時に遇はねば力なく、空しく朽つる其の中に、備前國の住人に兒島の三郎高則とて、文武の達者ありけるが、高時たかときが驕おごりを憎み、あはれさせて時

所存と覺えたり。あつはれ犬に劣る心底、最早兄とは思はぬぞ。主の敵遁さじ。」と、太刀をすばと抜きければ、「やれ待て一角。此の儀には思案あり。暫し〜。」と制すれども、「なに思案とは卑怯なり。」と、無二無三に打ち來れば、森廣是非なく抜き合はせ、受けつ流しつ三重戦ひけり。兄弟共に手利の達者、暫くあつてむすと組み、上を下へと振ち合ひしが、一角兄を取つて伏せ、首をかんとしたりしが、流石思へば親兄の、禮に畏る、武士の、やたけ心も手もなえて、詮方涙に眼くれ、途方を失ひ居たりけり。然つし所へ日像上人は息をもつがす、暗紛れより此の體を御覽じて、南無三寶月光を害すかと思召し、「やあく〜何者なるぞ。狼藉はせさせじ。」とあれば、一角透し見て、「さ宣ふは御出家と見えし。近う寄つて此の體を御覽じたべ。これに組み伏せしは拙者が兄にて候が、主人に敵する悪人故、討つて棄てんと思へども、さすが親兄の禮に畏れ此の仕合、御料簡。」といひも果てぬに、「なう其の主人といはるゝは、若し月光殿ならずや。」一角、「はつ。」と驚きして、「さ宣ふは誰人にて渡らせ給ふぞ。さら〜不審晴れ申さず。」といふ。「オ、尤もかな。此の儀に於ては仔細あり。詳しく語りまうさん。先づそこを放ち給へ。」と、是非に引きわけ給ひ、雨夜の前の書置の次第始終を残らず宣へば、兄弟、「はつ。」と呆れ果て、兎角も言はず居たりしが、稍あつて森廣、「やあ一角よ。誠に汝は弟ながら、恥ぢ入つたる心入れや。現在連枝の囚を捨て、主君への忠義返す〜も頼もしけれ。我も幾年長らへ

志。老少不定の境、明日をも知らぬ人の身の、後生菩提の肝心は、唯南無妙法蓮華經の口唱の修行に如くはなし。尤もかなや此の經は、諸經中王最爲第一、法華一部の肝要は、全う首題に留まれり。いで二世了達の守曼陀羅參らせん。」と、早速認め賜はれば、「こは有り難や。」と押戴き、「重ねて參詣申さん。」と、御前を立つて出で給ふが、御髮ふつと半ばに切り、御寺の内へ投げ入れて、御行き方は見えざりけり。「こは如何に。」と御弟子達、彼の黒髪を取上ぐれば、書置一通添へてあり。急ぎ御前に差上ぐれば、上人披き御覽するに、「恥かしながら自らは、前の關白經忠が娘候。叔も兄月光公と申すは先腹故、妾が母とは繼しき中、互に疎み兄君は、浮世の嵯峨の大覺寺に引籠りましますを、今宵の中に現とも夢ともわかぬ我が心、兄に従へば親への不孝、母にたよれば兄弟の道立たず。中に立つ身は梓弓ゐるかひもなき世の中に、存へ物を思はんより、自ら兄の身代りに、立つより外はありそ海、深き障りの女の身、刃にかゝる後の世を偏に頼み參らす。」と、御涙にくれ讀みも終らず、「やれ方々。これを其の儘置く道ならず。たとひ二人が身に代り、段々に斬らるゝとも、それぞ誠の菩薩の行。妙法蓮華。」と唱へられ、御衣を結びあげ、足をはかりに驅け給へば、御弟子達も追々に、息をはかりに三重 急がるゝ。黄昏時に平井兄弟常磐の里に懸りしが、一角いふやう、「如何に大炊殿。これまでではさりととも御身、言葉を出されうと思ひ同道はしけれども、其の一言のなきは必定若君を、害し奉らん

てくれよ。喰ひ付いても。」ト悶えられしは、恐ろしかりける巧みなり。第一角進み出で、「いや申し、若君に於て左様の不義なる御心入れ、ゆめく／＼以て候はず。それは皆讒者の業。先づ思召しても御覽ぜよ。科もなき若君を討たせ、姫君を御寵愛ましまさば、さればこそ増君を世に立てん巧みと、世上の取り沙汰上への聞え。兎角御血は分けられずとも、誠は故君の御愛子、姫君の御爲には眼前の兄君なれば、以ては御實子同然なり。唯々我等兄弟に、御機嫌直され下されば、生々世々の御恩ならめ。」と、理を盡してぞ歎きける。御繼母面の色變り、「生推參なる意見だて。それ程の事を知るまじきと思ひ悔つて申すか。女とこそ生まれうすれ、言ひ出せし事を反故にはせぬぞ。さあ今一度言葉を返せ。」と、はつたと睨み給ひしは、夜叉の荒れしも斯くやらん。大炊介につこと笑ひ、「御立腹の段至極仕り候。兎角申すもお爲づく、何しに御意を背かん。」と、兄弟座敷を立ちけれども、母の思慮なきはかなさは、まだ睨め付けて、「早う急げ。」と言ひ捨て、奥にぞ三重入り給ふ。これは扱置き、其の頃妙法の首題を弘め、都鄙遠境の果てまでも、恰く受法し奉る、日像上人と申せしは、元より佛の應化故、衆生濟度の其の爲に、都の北に御寺を立て、毎日の御法談、貴賤羣集は限りなし。或夕暮にやごとなき少人一人參詣あり。「我は前の關白經忠が一子、月光と申す者なるが、上人の御結縁にて佛道の願ひあり。あはれ二世安樂の御法御示し給はれ。」と、しみ／＼と宣へば、像師殊勝に思召し、「扱々やさしき

蓮華經の五字を書き、兩の脇に釋迦多寶の二佛を竝座に勸請し、「さて高祖口蓮大聖人報恩の御爲、日像之を營む。」と、光を放ちありくと、拜まれ給ふぞ有り難き。月光心肝に銘じ、「扱は發願成就せり。」と、晝夜法華に身を委ね、衆生利益の御志、けに凡人の三重胤ならぬ。世に辛きかな、御繼母は月光公の出奔を、願ふ處と悦び、御實子雨夜の前を寵愛あり。其の頃都六波羅鹽谷左近時益が甥、同左京時平といふ無骨者を養子とし、雨夜の前に娶せんと、既に婚姻の日限も、早近々に極めらる。されども御繼母思案あり。常の家さへあるものを、まして況んや此の家をや。月光を生け置きては後日の障りと思召し、御家人平井大炊介弟一角といふ兄弟を召され、「近頃わりなき無心なれども、方々大覺寺へ立越え、密かに月光を討つてくれよ。仔細は重ねて語るべし。偏に頼む。」とありければ、兄弟しばし言葉なく、さし俯向いて居たりしが、稍あつて兄大炊介顔を擡け、「扱々驚き入つたる仰せかな。誠に我が君御臨終にも、若君を恙なく守り育て奉り、御跡目を繼がせ奉れと、數ならぬ我々までも仰せ置かれ候ひし。然れども若君御歎きの餘りにや、御出家の思し立ち。たとへお恨みましますとも。是非々々思し止らせ給へ。」と、涙を流し諫言す。御繼母聞きもあへず、「いやとよ大炊介。いかに繼子なればとて、大方の事にて斯く言ふべきか。やれ月光が寺籠りを菩提の爲と思ふかや。妾を憎みて調伏し、殺さん爲と聞いてある。さすれば現在我が身の敵。片時も早く首を討ち、妾に一目見せ

救ふ。これぞ誠の孝ならめ。何はにつけて自らは、憂目みかさの晴れ聞なく、暮れ行く空の雲の色、有明がたの月の光までも、心もよほす許りなり。所詮出家遁世し、父の御菩提弔ふべし。」と、唯一筋に思ひ切り、世の憂き嵯峨の大覺寺へ、密かに入らせ給ひつゝ、明し暮させおはしけり。頃しも文月初めつかた、や、月上る庭の面、蟲の音までもしんくと、風に瞬く燈籠は、あはれ亡き世の靈祭、いと、涙もまさるらし。月光僧正へ向はせ給ひ、「自ら未だ若年なれば、精靈得脱の廻向の御經、いづれを讀誦し然るべからん。教へさせたまへ。」とある。僧正聞召し、「オ、殊勝なり」と。およそ眞言の奥義は究竟にして事むつかし。有縁無縁無差平等の手向には、只法華經に如くはなし。」と、教へ給へば若君は、「さて有り難し。」と御前を立ち、暮れ行く夜半を待ち給ふ、心ざしこそ殊勝なれ。すでに其の夜も、丑の刻に及びけり。其の時月光我が行業を試さんと、なほ山深く入り給ふ。大覺寺の奥山に人を葬る廟所あり。人跡絶えし三昧に、萬木空に覆ひ、日月影をうつさず、狐狼四面に驅り、猪犬牙を鳴らし、諸木嵐に動じ木の葉雨の如し。されども大覺志氣勇健にましませば、少しも恐るゝ心なく、塔前に座を構へ、一心に自我偈を讀みておはします。其の時不思議や山中の諸石塔、皆一同に動き出で、月光と同音に自我偈を讀むこそ不思議なれ。中にも一つの石塔自餘の石塔より聲音高く、音律感に堪へ、其の聲殊勝に聞えければ、月光奇異の思ひをなし、やがて立寄り見給へば、中尊に妙法

大覺大僧正御傳記

第一

此※妙法蓮華經しめうほふれんげきぎょうじや者、本地甚深之奧藏也、三世如來之所證得也。かるが故に如來の金言に、自證無上道大乘平等法。若し小乘を以て化する事乃至一人に於てもせば。我則ち慳貪に墮せんと云々。たゞ願ふべきは釋尊出世の本懷、唯爲一大事因縁の妙法なり。されば忝くも法華の高祖、末法有縁の大導師日蓮大聖人四代の權者、大覺大僧正の御俗姓を尋ぬるに、前の攝政近衛經忠公の御公達、月光公と申し奉り、三五の春の花盛り。されども父上世を早う過ぎ行く月日の重なりて、憂きが上にも物憂きは、なさぬ中とて御繼母の、憎み疎ませ給ふ故、過ぎにし父母の御事を、身にしみんと感に堪へ、つくづく思召すやうは、誠まことに父母の恩徳は、外典三千餘卷にも孝行を以て旨とし、内典五千餘卷には孝養を以て眼とす。一日三時に自身の肉を裂き、父母の恩を報ずるとも、謝するに足らずと傳へ聞く。然るに我が幼少にして父母に後れ、寸志の孝をもなさざる事、思ふにつけて本意なけれ。それ釋尊は母の御爲切利天に昇り、一夏九旬摩耶報恩經を説き給ふ。又日蓮七月の供養も専ら青提女の苦を

だれるたりけり。頼朝はなはだ御感あり。前代未聞の侍かな。平家の恩を忘れぬごとく、又頼朝が恩をもわすれず、末世に忠をつくすこと、仁義の勇士武士の手本は景清」と、數の御褒美淺からず。鎌倉差して入り給へば、なほ景清は觀音に、三萬三千三百卷の普門品を讀誦して、日向國を本領し、悦びく退出す。「なほ源氏の御繁昌、國靜謐の始めなるわ」と、みな萬歳をぞとなへける。

源平たがひに見る目も恥かし。一人をとめん事は案のうち物小脇にかいこんで、某は平家の侍悪七兵衛景清よと名乗りかけ、手取にせんとて追うて行く。三保の谷が著たりける兜の鍔を取り外し取り外し、二三度逃げ延びたれども、思ふ敵なれば逃さじと、飛びかゝり兜をおつとり、えいやと引くしほに、鍔は切れてこなたにとまれば、主はさきへ逃げのびぬ。遙かに隔てて立返り、「さるにても汝恐ろしや、腕の強き。」といひければ、景清は、「三保の谷が、首の骨こそ強けれ。」と、笑つて左右へ退きにける。昔を忘れぬ物語、お恥かしう候。」と、語り給へば人々は、一どにどつとぞ感じける。かくて我が君御座を立たせ給ひければ、大名小名續いて座敷を立ち給ふ。景清君の御後姿をつくづくと見て、腰の刀をすりと抜き、一文字に飛び懸る。おのゝ、「是れは。」と氣色をかへ、太刀の柄に手をかくれば、景清すさつて刀を捨て、五體をなけうち涙を流し、「あゝ南無三寶あさましや。何れも聞いて給はれ。かくあり難き、御恩賞受けながら、凡夫心の悲しさは、昔に返る恨みの一念、御姿を見申せば主君の敵なる物をと、當座の御恩は早忘れ、尾籠の振舞面目なや。眞平御免をかうぶらん。誠に人のならひにて、心にまかせぬ人心。今より後も我とわが身をいさむるとも、君を拜むたびごとにとても此の所存は止み申さず、却つて仇とやなり申さん。とかく此の兩眼のあるゆるなれば、今より君を見ぬやうに。」と、いひもあへず差添ぬき兩の眼玉をくり出し、御前にさし上げて頭をうな

のならば、觀世音の御手にかゝると思ふべし。此の上は助け置き、日向國宮崎の莊をあて行ふ。」と、御懇情の御詞に御判をそへて給はりける。景清涙をとゞめかね、誠まことに身に餘りたる御誕の段、生々世世に有り難き、魂たましひに徹つて覺え候。かく情ある我が君と知らで、狙ねらひ申せし景清が所存の程こそくやしけれ。」と、御前をも打忘れ聲を上げてぞ泣きゐたり。さて御土器賜はり、諸國の大名残りなく皆々杯みなくさかづきさし給ふ。重忠仰せけるは、「かかろめでき折といひ、かつは我が君御慰みのため、和殿屋島にて功名の様子かたつて聞かせ給へ。内々君も御所望ありしぞ。ひらに／＼。」とありければ、頼朝公をはじめ參らせ、満座の人々一同に、「はやく／＼。」とのぞまる。景清辭するにおよばねば、袴の裾をたかく取り、御前に色代し、すぎし昔を語りける。「いで其の頃は壽永三年三月下旬の事なりしに、平家は船源氏は陸、兩陣を海岸に分つて、互に勝負を決せんとほつす。能登守教經宣ふやうに去年播磨の室山備中の水鳥、鴨越に至るまで、一度も味方の利なかりし事、偏に義經が謀いみじきによつてなり。いかにもして九郎を討ち取る謀こそあらまほしけれ。」と宣へば、景清心に思ふ様、判官なればとて鬼神にてもあらばこそ。命をすてば易かりなんと、教經に最期のいとまごひ、陸にあれば源氏の兵、餘すまじとてかけ向ふ。景清是れを見て、物々しやと夕日影に、打物ひらめかいて、切つて懸ればこらへずして、刃向ひたる兵は、四方へばつとぞ逃けにける。さもしや方々よ。

盗人の業にやと、御戸を開きて候へば、觀世音の御頭きれて失せさせ給ひ、切口より血流れて、體盤長牀朱に染み、勿體なき御風情に拜まれさせ給ひ候故、驚き入つて注進申し上げ候。」と、事の次第を申し上ぐれば、君を始め奉り、畠山も高綱も供奉の上下おしなべて、あつと感ずる許りなり。君信心の感涙を流させ給ひ、「誠や景清、年來清水寺の觀世音を信じ奉り、十七の春より三十七の今日まで、毎日三十三卷の普門品を讀誦懈怠なく修行せしと聞きけるが、疑ひもなく觀世音、兵衛が命に替らせ給ふ有り難さよ。」と、御手を合はせ給ひければ、僧俗男女下々まで、皆々禮拜恭敬して、涙を流さぬ者はなし。重ねての御説には、「かくては如何勿體なし。急ぎ千人の僧を供養し、一萬座の護摩をたかせ、御頭をつぎ奉れ。法事の上にて景清にも對面致すべし。いざ賴朝も參詣せん。」と御身も咲く花の、千手の誓ひぞ有り難き。かくて賴朝御法事も事畢り、佛の御頭をつぎ參らせ、宿坊に入らせ給ひける。時に佐々木畠山、景清夫婦を伴ひ御前に出でらる。賴朝御覽じ、「珍らしや景清、我を平家の敵とて、狙ひ討つべき心ざし神妙々々。尤も武士の憤り、けにさうも有るべけれ。然れば賴朝が爲には御邊亦敵なれば、うつて捨つべき者なれど、汝が身には觀世音、入り替りまします故、二度害せば觀音の御頭を二度打つ道理、もつたいなし。もし又賴朝運盡きて、御邊に討たる、も

ども、重忠は今朝景清が生顔を確かに見て参り候。」と、いひもはてぬに佐々木の四郎つゝと出て、「いや是れ畠山殿筋なき事な申されそ。其の景清は某仰せを承り、高綱が手にかけ首を刎ね、我が君の寶檢に供へ、三條殿に獄門にかけて候ものを、景清が二人あるべきか、近頃粗忽千萬。」と、嘲笑うてこそ申さるゝ。重忠聞き給ひ、「尤も〱御分が手にもかけつらめ。又重忠も確かに見て候はいかにも高綱色を違へ、はて埒もない事。一度切つたる景清が蘇生るべきやうもなし。それは定めて血迷うて、何かな見られつらん。但しは寐ほれて、夢をばし見給ふか。」「いやさ御分がうろたへて、よしなき者を景清と思ひ切つたるか。」「夢を見たるか。」「慌てたるか。」「是れ目を覺して思案せよ。」「と、氣色かはつて争ひける。頼朝だん〱間召し〱いか様佐々木畠山そこつある人にてなし。不思議千萬晴れやらす。是れより取つて返し、頼朝直に見分くべし。各しづまれ〱。」と、御馬の鼻を立てなほし、都にかへらせ三重給ひける。さる程に三條殿に景清の首を切りかけ、平家の一族謀叛の棟梁悪七兵衛景清と、高札を添へられたり。頼朝立ちより御覽あり、高綱重忠を招き、「是れ見られよ。」と仰せける。重忠も不審晴れず。諸大名立ちかゝり、よく〱見れば今まで景清の首と見えけるが、忽ち光明赫奕として、千手觀音の御頭と變じたまひける。歴劫不思議そありがたし。しかつし所へ清水寺の大家、我も〱と馳せ参じ二扱も一昨日の夜中に、佛前の薙おの〱あきて候ゆる、もし

又大宮司や小野の姫、憂目を見んは必定なり。」と、思ひ定めて立歸り、もとの牢屋に走り入り、内より貫木しとと締め、千筋の繩を身に纏ひ、さあらぬ體にて普門品、讀誦の聲はおのづから、卽心菩薩の變化ならんと、皆感ぜぬ者こそなかりけれ。

第五

かくてその後、右大將頼朝公南都の大佛御再興まし、既に成就と訴ふれば、供養の報謝に、いそぎ大赦を行ふべしと、天が下の科人、京鎌倉の牢を開き、のこらず御免なされける。中にも悪七兵衛景清は、朝敵重罪なれば、助くるに所なく、佐々木の四郎に仰せられ、終に首を刎ねられ、今は四海太平なり。大佛供養御聽問有るべしと、諸國の大名御供にて、南都に御下向なされける。路次の行列、三重花やかなり。すでに我が君巨椋堤にさしか、り給ふ時、畠山の重忠息をはかりに馳せ來り、御馬の前に跪き、さても悪七兵衛景清は御成敗のよし承り候へども、いまだ恙なく牢の内に罷有り候。一大事の囚人なれば早々首を刎ねられ然るべく候はん。」と謹んで申し上ぐる。頼朝聞召し、「不思議の事を申す物かな。景清は佐々木の四郎に申しつけ、一昨日の暮程に首を打たせ、則ち其の首頼朝が見參して、獄門にかけさせしが、ひが事なるか。」と仰せける。重忠重ねて、「其の段は存せず候へ

かに觀音經讀誦する嬉しさに、慰み半分に牢舎して有るものを、緩怠過ぎたる讒言つき、二言と吐かば擱みひしいで捨てんす。」と、はつたと睨んで申さるれば、十藏からくくと笑ひ、「其の縛めにあひながら、某を擱まんとは腕なしのふりすんばい、傍いたし事をかし。幸ひ此の頃瘡癩痛きに、ちつとつかんで貰ひたし。」と、空うそぶいてぞるたりける。景清腹にするかね、「いでものみせん。」といひもあへす、「南無千手千眼生々世々、一聞名號滅重罪、大慈大悲觀音力。」と、金剛力を出し、「いやはつ。」と身ふるひすれば、大釘大繩はらくすんど切れてのいた。貫木取つて押しゆがめ、扉をかつばと踏み倒し、大手をひろけて躍り出で、八方に追ひ廻すは、荒れたる夜叉の三重如くなり。むらがりかかる若黨中間、はらりくと蹴倒し、十藏を搔擱み取つて押伏せ、背骨も折れよとどうとふまへ、「何と景清を訴人して御褒美にあづかり、榮花といへるは此の事か。」と、二つ三つふみつくれば、「なう悲しや、骨も碎けて息も絶え入り候。御慈悲に命を助け下され。」と、聲を上げて泣きにける。景清手を叩き打笑ひ、「お、某が褒美には廣い國をとらせん。」と、兩足取つて逆さまに引上げ、肩をふまへて、「いはいやつ。」と裂きければ、胸中より眞二つに、さつと裂けてぞのきにける。「え、心地よし氣味よし。」と、左手右手へからりと捨て、「さあしすましたり。此の上は關東へや落ち行かん、いや西國へや立ち退かん。」と、行きつ歸りつ、戻りつ行きつ、一町許り走りしが、「いやく此の度落ち失せなば、

あ今は恨みを晴らし給へ。むかへ給へや御佛。」と、刀を咽に押しあてて兄弟が死骸の上にかつばと伏し、共に空しくなり給ふ。さても是非なき風情なり。景清は身を悶え、泣けど叫べどかひぞなき。「神や佛はなき世かの。さりとは許してくれよ我が妻よ。」と、鬼を欺く景清も、聲を上げてぞ泣きたり。物の哀れの限りなり。かくとはしらで伊庭の十藏、梶原がとりなしにて、少々勳功に預り、若黨小者數多連れ、遊山より歸りしが、此の體を見て肝を潰し、「是れは扱しなしたり。不便の事を見る物かな。これ侍ども。我此の如く御恩賞を受け、榮耀榮華に榮ゆるも、きやつ等を世にあらせんため、この頃方々尋ねしかども、その行方のなかりしが、扱は何者ぞ偏執を起し害せしか。但しは宮司が計らひと覺えたり。よし何にもせよ、猶景清に言分あり。先づく死骸を取りおけ。」と、傍に葬らせ、牢屋に向つて立ちはだかり、「是れさ妹婿殿。いかに怨みあればとて、現在の妻子を殺させ、腕かなはずばなどいき骨でも立てざるぞ。ないくは某御邊が命を申しうけ、出家させんと思ひしが、最早ほつてもならぬく。侍畜生大たばけ。」と、いかつはいてぞ申しける。景清くつくとふき出し、「こりやうろたへ者。あの者共はおのれが貪慾心をかなしみ、自害したるが知らざるか。それさへあるに、うぬ奴が口から侍畜生とは誰が事ぞ、命をしむ程ならばかかる大事をたくむべきか。まつた生きようと思ふ程ならば、へろく柱の五十や百、此の景清が物の數と思ふべきや。心靜

るまじきか。」「お、くどい／＼。見苦しきに早々かへれ、思ひ切つたぞ。」「なうもはやながらへて、何方へかへらうぞ。やれ子供よ。母があやまりたればこそ、かく詫言いたせども、つれなき父御の詞を聞いたか。親や夫に敵と思はれ、おのしらとても生きがひなし。此の上は父親もつたと思ふな。母ばかりが子なるぞや。みづからもながらへて、非道の浮名流さん事、未來をかけて情なや。いざ諸共に死出の山にて言譯せよ。いかに景清殿、わらはが心底是れまで。」と、彌石を引寄せ、守刀をすはと抜き、「南無阿彌陀佛。」とさしとほせば、彌若驚き聲を立て、「いや／＼我は母様の子ではなし。父上たすけ給へや。」と、牢の格子に顔を差入れ／＼逃げあるく。「え、卑怯なり。」と引きよすれば、「わつ。というて手を合はせ。」許してたべ、こらへてたべ。明日からはおとなしう月代も剃り申さん、灸をもすゑませう。叔も邪見の母上様や。助けてたべ父上様。」と、息をはかりに泣きわめく。「お、理よ。さりながら殺す母は殺さいで、助くる父御の殺さるゝ、あれ見よ兄もおとなしう死したれば、お事や母も死なでは父への言譯なし。いとしい者よよう聞け。」と、すゝめ給へば聞き入つて、「あ、それならば死にませう。父上さらば。」といひ捨てて、兄が死骸によりかゝり、打ちあふのきし顔を見て、いづくに刀を立つべきと、阿古屋は目もくれ手もなえて、まろび伏してぞ歎きしが、「え、今は叶ふまじ。必ず前世の約束と思ひ、母をばし怨むるな。おつつけ行くぞ南無阿彌陀。」と、心元をさしとほし、「さ

切つたる景清も、不覺の涙はせきあへず。やゝあつて涙を押へ、「やれ子供よ、父がかやうになつたるはな、皆あの母が悪心にて、繩をも母がかけさせ、牢にも母が入れるぞ。邪慳の女が胎内より出でたる者と思へば、汝らまでが憎いぞや。父とも思ふな子とも思はじ。はやく歸れ。」と叱るにぞ、子供は母に縋りつき、「なう父をかへしや、父上かへしや。」と、ねだれ歎きし有様は、目もあてられぬ次第なり。阿古屋は餘りたへかねて、「よし此の上はみづからはともかくも、可愛やな兄弟に、優しき詞をたゞ一言、さりとてはかけてたべなう。子は可愛うは思さぬか。」と、又せき上げてぞなげかる、。景清重ねて、「おことがやうなる悪人に、返事もせじとは思へどもな、今のくやみをなど最前には思はざりしぞ。されば天竺に獅子といふ獸あり、身は畜生にてありながら、智慧人間に超えたれば、獵人にもとられず、却つて人を取り食らふ。されども腹中にとどくといへる蟲あつて、此の蟲毒を吐く故に、體を破つて自滅すなり。されば女の嫉妬の仇、人を恨むと思へども、夫婦は同じ體なれば、皆是れわが身をせむる道理。和御前がやうなる我慢愚癡の猿智慧を、獅子身中の蟲に譬へて、佛も戒め給ふぞや。汝が心一つにて本望とけず、あまつさへ恥辱の上の恥辱を取り、今言譯して妻子が歎くを不便よとて、日本一の景清が再び心をかへすべきか。何程いうても、汝が腹より出でたる子なれば、景清が敵なり。妻とも子とも思はぬ。」と、思ひ切つてぞるたりける。「さては何程申しても、御承引あ

六波羅に走りつきて此の體を一目見て、「なうあさましの御風情やな。やれあれこそ父よ、わが夫。」と
牢の格子にすがりつき、泣くより外の事ぞなき。景清大の眼にかどを立て、「やれ物知らずめ、人聞ら
しく言葉をかくるも無益ながら、かほどの恩愛をふりすて、夫の訴人をしながら、何の生而下けて今
此の所へ來りしぞ。おれの指一つかなひなば、掴みひしいで捨てん物を」と、齒がみをしてぞるられ
ける。一實に御うらみは理なれども、わらはが事をも聞き給へ。兄にて候十藏訴人せんとせしを、
再三留めて候所に、大宮司の娘小野の姫とやらんより親しき御文參りしゆゑ、女心のあさましさ
は嫉妬の恨みに取りみだれ、後さきのふまへもなく、當座の腹立やるかたなく、ともかくも申しつ
る、後悔さきに立たばこそ。さはさりながら嫉妬は殿御のいとしさゆゑ、女のならひ誰が身の上にも
候ぞや。申譯いたすほど皆いひおちにて候へども、今までのよしみには道理一つを聞き分けて、唯
何事も御めんあり、今生にて今一度、詞をかけてたび給はば、それを力に自害して、わが身の言譯立
て申さん。」と、地にひれ伏してぞ泣き居たる。むざんやな彌石、父が姿をつくづく見て、「なう父上程
の剛の者が、なぜやみくとは捕はれ給ふぞ。いで押しやぶつて助け奉らん。」と、柱に手をかけ、
「えいやく」とおせども搖がばこそ。不便なりける所存なり。弟の彌若はほだしの足に抱きつき、
「痛いかな父上様、なう痛むかや。」と撫で上げ撫で下げ擦り上げ、兄弟「わつじ」と叫びければ、思ひ

の大筒おほづつを、三本さんぼんまでかづかせたり。「諸人しよじんに見せて恥はぢかかせよ。」と、番ばんも警固けいこもつけざれども、なかなか五體たいはたら働かす。されば文王ぶんわうは羨里いりに捕とらはれ、公冶長こうやちやうはけいりくにか、れり。君きみがため名なのため、何ぞかつて憂うれへんと、觀音くわんおん經きやうの讀誦どくじゆのほか、世間せけん口くちを閉とぢたれば、聲聞しやうもん耳みみにとさせり。動くものは兩眼りやうがんのみ。見るめもかなしくあはれなり。いたはしや小野せのの姫ひめ、不思議ふしぎの命助いのちたすかり、牢屋らうやちかきに宿やどを取とり、酒菓物さけくだものをと、のへて、牢らうの格子かうしに立たちかゝり、いたはり給たまふぞ哀あはれなり。やう／＼として景清かへきよ心地ちよけに酒さけを飲のみ、「今日けふは一しほ骨髓こつぞうにとほつて候さふらふ。まことに御身おんみの心こころざし、いつの世よにかは忘わすべき。さてかりそめながら某それがしは天下てんかの朝敵てうてき、さだめて最期さいごも遠とほからじ。今景清いまかへきよが生いきたる顔かほをかたみにて、とう／＼御身おんみは尾張をはりへ下くだり、後世ごせ弔とうてたび給たまへ。これにつけても阿古屋あこやめが心底しんていの恨うらめしさよ。二人ふたりの子供こどもも今は早殺はやころして捨すてつらん。思おもへば／＼景清かへきよが運うんのつきこそ口惜くちをしけれ。」と、恨うらみかこちて泣なき給たまふ。姫君ひめぎみも涙なみだをながし、「御仰おんおほせはさる事ことなれども、とてもみづからは御最期ごさいごの先途せんどうを見みとゞけ、兔とにも角かくにもなり参まゐらせん。一日いちにちも一時ときも御命おんいのちのあらん中は、往生わうじやうの御おんいとなみを心こころにかけて、何事なにことも定さだまる事ことと思召おぼしめし、人ひとを恨うらみ給たまひそよ。いつまでも是これにありたく候さぶらへども、人目ひとめ繁しげう候さぶらへば、明日あす又また参まゐり申まうさん。」と、泣なく／＼歸かへり三重さんじゆ給たまひける。是これは扱あおき阿古屋あこやの前まへ彌いやし石いし彌わか若わか諸もろ共ともに、山崎山やまざきやまの谷陰たにかげに深ふかく隠かくれておはせしが、景清かへきよ牢舎らうしやと聞きくよりも、我わが身みもあるにあらればこそ。

えしかば、重忠大宮司を同道にて、六條河原に馳せ來り、「扱も景清、人の難儀を救ひ、我が身を名乗りて出でらる、段、近頃神妙、尤もかうこそあるべけれ。此の上は小野の姫大宮司共に御救免なさる條、景清に繩をかけ急ぎ引立て申すべし。」畏まつて人々、「繩よ綱よ。」とひしめけば、景清喜び、「それこそ望む所よ。」と、千筋の繩をかゝり、先に進めば小野の姫、「なうみづからも諸共。」と、驅け出で取りつき泣き給ふを、大勢中を押隔て、あたりを拂つてひつ立て行く。かの景清の心底、勇あり義あり誠あり。前代末聞の男子なりとて、皆感ぜぬ者こそなかりけれ。

第四

かくてその後、けにや猛將勇士も運盡きぬれば力なし。不便やな景清、鎌倉よりの評定にて、六波羅の南おもてに、始めて牢を立てさせらる。櫟白樺楠の木梅の木、長さ一丈にとらせ、地へは七尺掘り入れ、上三尺の詰牢に、しこの木をもつて蜘蛛格子に切組んで、一尺二寸の大釘の裏をかへさず打つたれば、劍をうゑたる如くなり。七尺ゆたかの景清を、二重に取つておし入れ、髪を七把にたばねて、七方にこそ吊つたりける。足を牢より引出し、左手右手へ取り違へ、山だし七十五人して、曳いたる楠の木にて上羈絆を打たせ、しつ錠詰金、唐々櫛千引の石、材木を積みかさね、首にはねほり

ちつと上つて見給はぬか、是れへ〜と有りければ、景時腹にするかね、「扱々しぶとき女かな。此の上は引きおろし火責にせよ。」と、炭薪をつみかさね、團扇をもつてあふぎ立て〜、天をかすめし黒煙、焦熱地獄といつつべし。すでに責めんとせし所に、悪七兵衛景清いづくにてか聞きたりけん。諸見物の其の中を、飛び越え跳ね越え垣の中に躍りいり、「こりや景清ぞ見參。」と、あたりをはつたとねめまはし、二王立にぞ立つたりける。姫君はつと肝潰れ、立寄らんとし給へば、人々取つてひつすゑ、「すは景清を逃すな。」と、一度にはらりと取りまはす。景清から〜と笑ひ、「え、ぎやう〜し。此の景清が隠れんと思はば、天にも昇り地をもくゞらんすれども、妻や舅が憂目をみるかなしさに、身をすてて出でたれば、もはや氣遣ふ事はなし。さあよつて繩をかけ、六波羅へ連れて行き、妻や舅を助けよ。」と、手向ひしてんす氣色なし。姫君涙を流し、「口惜しの有様や。みづからや父上は、生きてかひなき憂身なるに、御身はながらへ本望遂げんとは思さず、何とて是れへは出で給ふ。淺ましの御所存や。」と、又さめぐ〜と泣き給ふ。景清も涙をおさへ、「お、頼もしの心底や。人は素性がはづかしし。子なかをなせし阿古屋めが、夫の訴人をしたりしに、御身は命にかはらんとは、頼もしや嬉しやな。さりながら父大宮司の御事心もとなう覺ゆれば、御身は是れよりとう〜歸り、菩提をとうてたび給へ。」と、鬼をあざむく景清も、不覺の涙を流しける。理せめて哀れなり。この事六波羅に聞

が奉行にて、方一町に垣をゆひ、突棒刺又鐵の棒、兵具ひつしと竝べしは、さながら修羅の獄卒が、八逆五逆の罪人を荷責にかくる如くなり。いたはしや小野の姫、あらし風にもあてぬ身を、はだかになして繩をかけ、十二の梯子に胴中を縛りつけ、哀れもしらぬ雜人ども、湯桶に水をつぎかけ、おちよくとせめけるは、只瀧津瀬の如くにて、目もあてられぬ景色なり。無慙やな小野の姫、息もはやたえなくに、心も亂れ目くるめき、既に最期と見えけれども、いやく武士の妻となり、心よわくてかなはじと、さあらぬ體にもてなし、いかにかたなく、夫の景清常に清水寺の觀世音を信仰し、我にも信じ奉れと深く教へ給ふゆゑ、今とても尊號をたえず唱へ奉れば、此の水は觀音の甘露法雨と覺えたり。今この水にて、死する命は惜しからず、夫の行方は知らぬぞや。千日千夜も責め給へ。南無や大悲觀世音」と、苦しき體をおしかくし、いさぎよくは宣へども、さすが強き拷問に、聲も濁りて身もふるひ、よわくとなり給ふは、扱も悲しき次第なり。此の分にてはおちまじきぞ。やれ古木責にせよや」とて、細首に繩をつけ、松の枝に打ちかけて、「えいやく」と引きあぐる。下せば少し息をつぎ、引きあぐれば息たゆる。あはれといふも餘りあり。たとへいかなる鬼神も是れにてはおつべし」と、二三度四五度責めければ、今はかうよと見えるが、又目を開き、なう榊原殿、此の木のの上に吊上げられ、世界を一目に見おろせども、夫の行方は見え申さず。かたなくも慰みに、

りて坂の下、谷の川瀬にからころと、なるは鰻の鳴く聲か、小石流れて行く音か。いや水の泡ちる玉でないよの。唄駒のひざぶしちりからからりの鈴鹿山、賤が草鞋のいとなみに、ふけてわら打つ土山や、だての旅路にゆくならば、買うてもたもれ水口の、葛小笠に露もりて、おのがまゝなる鬢水は、櫛にたまらぬ亂れ髪、とくく行けば洛陽や、六波羅にこそはつかれけれ。さて父上のおはします牢屋はいづこなるらんと、こゝかしこにたゝすみ給へば、をりもこそあれ梶原源太、町まはりしてかへるさに、此の體をきつと見て、「彼奴が有様たゞものならず、何者さふ。」と咎めける。姫君聞召し、「さん候。みづからは尾張の大宮司が娘なるが、故もなきに父をとられ候ゆゑ、我命にかはらん爲、是れまで参り候。」と、いはせもはてず景季、「お、皆までもいふな。おのれが親の大宮司に、景清が行方をいへといへども知らぬといふ。おのれは夫婦の事なれば、よも知らぬ事は有るまじ。既に清水坂の阿古屋は、子のある中さへふりすてて、一度注進申せしぞや。ありのまゝに白状せよ。」と、小腕取つて怒りける。「なう恨めしや命をすてて、是れまで出づる程の心にて、たとへ行方を知つたればとて申さうか。此の上は水責火責にあふとても、夫の行方は存せぬなり。只父土を助けてたべ。」と、聲もをします泣き給ふ。「お、いふまでもない事さ。おのれおちすばた置くべきか。」と、高手小手に縛りつけ、六條河原に引出し、種々に拷問したりしは、なうなさけなうこそ 三重見えにけれ。梶原親子

人につらくはあたらねど、何の報いや袖の露、枯れも果てなで小野の姫、いたはしや去年の春、夫は都へいにしより、阿古屋の松の夕しぐれ、染めつけられて若紅葉、こひ散らんとあけ暮に、人めづつみてくい／＼と、案じ煩ふ身の上に、父は都の六波羅へ、擲となりてあさましや、憂目にあはせ給ふとの、その音信を聞きしより、思ひに思ひつみかさね、せめては憂きにかはらんと、乳母ばかりを力にて、旅の衣手なみだつめたき紅に、もみうら濡れてゆふされし、空飛ぶ鳥のかへるさに、物忘れせぬ故郷の、風もわが身にふきかへて、今の門出をはりぞと、國の名残もつ、ましく、身の種まきし産土の神、熱田の宮居伏し拜み、父と夫とを安穩に、悪魔はらへと取る弓の、桑名の舟に梶枕しきねの苫の荒筵、膚にあれてつられければ、戀するあまが鴛鴦の、夜のふすまとみるめ刈る、かつく刈藁はなに／＼ぞ。歌によまれし鹿尾菜藻や、加太和布甘海苔春もまた、若布交りの目刺ほす、しほやが軒に竹見えて、をさな鶯音をぞなく、花にまがひのさくら海苔、天をひたせば雲のりに、月を包みてかるとはすれど、手にはとられぬ桂男の、あゝいぶりさは、いつ青海苔もかだのりと、身のさがらめをなのりそや。明あらめづらしと荒布かる、二見の浦ははる／＼と、松の村立ち色の濱、蒔繪によくもにたるよな。あとは白雲とばかりを、故郷の夢とそらさめて、庄野につゞく龜山は、誰がため長き萬代と、かこつ涙はせきもせて、何をか關の地藏堂、せめて未來を頼まばや。のほりくだ

かくてその後、悪七兵衛景清行方しれずなりたれば、もつとも天下の御大事と、諸國の所縁を詮議あり。中にも熱田の大宮司は現在の舅とて、千葉の小太郎搦め取つて、警固厳しく打ちつれさせ、六波羅に引据ゆる。梶原源太大宮司に對面し、「汝は當家の大敵平氏の落人景清を壻にとるのみならず、剩へ行方もなく落しける、罪科甚だ輕からず、いづかたへ落しけるぞ。まつすぐに申せ。すこしも陳ぜば拷問せん。」と、はつたと睨んで怒りける。大宮司聞き給ひ、「仰せの如く景清とは縁を結び候へども、去年の春國許を立ち出で、今に便りも候はず。土も木も源氏一統の御代なるに、一旦陳じ申すとて、隠しとけられ申すべきか。壻に取りしを曲事とて、誅せられんは力なく候。行方においては存せぬ。」と、詞すゞしく申さるゝ。重忠仰せけるは、「尤もく。たとへ行方を知つたればとて、壻の訴人は致されまじ。たつては此の方の不調法。いかに梶原殿、かの景清は仁義第一の勇士なれば、所詮太宮司を牢舎させしと傳へ聞かば、舅の難を救はん爲、おのれと名乗つて出でん事は目前に見え候。此の儀はいかに。」と有りければ、おのく、「評定尤も。」と、六波羅の北の殿に新造の牢を建て、大宮司を押込めさせ、厳しく番をぞ三重せさせける。

小野の姫道行

に血をあやす奇怪さよ。とても世になき某が、おのれらが身の爲ならば、何條命をしからん、人おほく打たせんより、女房兄弟をりあひて、搦めとれ。」とぞ喚きける。十藏が下人二三太といふ者、分別もなく飛んでかゝる。景清につこと打笑ひ、側にありける雙六盤、片手に取つて投げつければ、二三太が真向に、響き渡つてはつしとめたれば、首は胴にぞにえこみける。お、でつくともせぬ丁稚奴が、手柄しさうに見えたれども、ぐし／＼となりけるは、誠に愚人夏の蟲。」と、たはぶれて立つ所を、十藏續いて切つてかゝる。景清長刀おつとりのべ、蟲同然のこつば武者、婆娑の訴人は是れまでぞ。闇魔の聴にて訴人せよ。」と、受けつ流しつ切り結ぶ。江開の軍兵是れを見て、「訴人討たすな加はれ。」と、どつと連れておし隔つる。「心得たり。」と景清は、西門を小楯に取り、いれかへく大勢を左右にうけ、眉間真向鎧のはづれ、嫌はずあまさず三重打ちたつる。こは叶はじと軍兵ども、十藏をひつつ、み、六波羅さしてぞ引きにける。景清今は是れまでと、音羽の山の峯を越え、梢をふみわけ巖をおこし、飛び越え跳ね越え、利那が間に飛ぶが如くに、東路さして落ち行きしは、實に希代の武士やと、叔感せぬ者こそなかりけれ。

しは、料簡もなき三重次第なり。かくとは知らで景清は、清水寺に参籠し、轟の御坊に通夜申し、同宿達に雙六打たせ、助言してこそゐられけれ。頃は卯月十四日、夜半許りの照る月に、直乳五百餘騎、江間の小四郎大將にて、訴人の十藏眞先にかけて、轟の御坊二重三重に取りまはし、鬨の聲をぞ作りける。元來こらへぬ荒法師、門外につゝ立つて、「そも此の寺は田村將軍此の方守護不入の靈地なるに、狼藉は何者ぞ、夜盜なんどと覺えたり。あれ打ちとれ小僧ども」と、聲々によばはれば、江間の小四郎駒かけよせ、「さな言はれそ法師たち。御坊に咎はなけれども、平家の落人惡七兵衛景清今宵こゝに籠りしよし、伊庭の十藏訴人によつて、義時討手に向うたり。異議に及ばば寺ともいはせじ、沙門ともいはすまじ。かたはし切つて切りちらせ。」といひもあへぬに、「惡七兵衛是れにあり。」と切つて出づる。常陸の律師永範此の由を見るよりも、「慈悲第一の此の寺にて、信心の行者を空しく討たせて、觀世音の誓願はいかならん。防げや／＼法師ばら、さ、へよや下僧共。」「承り候。」と、衣の袖を絞り上げ、獲物々々を提げて、三十餘人の荒法師、五百餘騎につつ支へて、命を惜します。三戰ひける。五百餘騎が四方に分つて、隙をあらせず防けども、景清飛鳥の術をえたれば、さうなく討たれんやうもなし。雙方しろみて控へたり。景清縁端につつ立つて、「今宵の訴人は妻の阿古屋。おなじく兄の十藏と覺えたり。おのれ數年の恩愛をふりすて、大愆にふける愚人ども、勿體なくも此の御寺

御旅宿所は、これにてや候やらん。」と、やがて文箱を出しける。十藏出であひ、「いかにも、是れは景清殿の旅宿にて候が、宿願あつて兵衛殿は清水參詣致され候。御文をあづかり置き、歸られ次第見せ申さん。明日御出で候へ。」と、飛脚をかへし、兄弟文を開いて見れば、小野の姫の文にてあり。「かりそめに御のほりまし、いなせの便りもし給はぬは、かね、聞きし阿古屋といへる遊女に御したしみ候か。未來をかけし我が契り、いかゞ忘れ給ふか。」と、細々とぞ書かれける。阿古屋は讀みも果て給はず、はつとせきたる氣色にて、「恨めしや腹立や、口惜しや妬ましや。戀にへだてはなき物を、遊女とは何事ぞ。子のある中こそ實のつまよ。かくとは知らではかなくも、大切がりいとしがり、心を盡せしくやしきは、人に恨みはなきものを、男畜生いたづらもの、あゝ恨めしや無念や。」と、文すん／＼にひきさきて、かこち恨みて泣き給ふ。道理とこそ聞えけれ。十藏悦び、「それ見たか、此の上は片時も早く訴人せん。最早思ひ切つたか。」といへば、「お、何しに心の残るべき。せめて訴人してなりとも、此の恨みを晴らしてたべ。」「けによき合點。」と立ち出づれば、又「暫く。」と引きとゞめ、「とは云ひながら、如何に恨みがあればとて、夫の訴人はなるまいか。いや又思へば腹も立つ。にくいは女め。え、是非もなや。」と、あるひは止めあるひは勧め、身をもだえてぞなげかるゝ。十藏袂をふり切つて、「え、輪廻したる女かな。そこ退け。」と突きのけて、六波羅さして急ぎ

と覺えたり。兵衛はいづくにありけるぞ。はや六波羅へ訴へて、一かど御恩にあづからん。いかにいかに。」と申しける。阿古屋はしばし返事もせず、涙にくれてゐたりしが、「なう兄上、そもや御身は本氣にて宣ふか。たゞしは狂氣したまふかや。妾が夫にて候へば、御身の爲には妹婿、此の子は甥にて候はずや。平家の御代にて候はば、誰かあらう景清と、飛ぶ鳥までも落ちし身が、今この御代にて候へばこそ、數ならぬ我々を頼みて御入り候ものを、たとへば日本に唐土をそへて給はるとて、そもや訴人なるべきか。飛ぶ鳥懐に入る時は、獵人も助くるとよ。昨日までも今朝までも、隔てぬ中をそもやそも、除かれう物かさりとては、人は一代名は末代、思ひわけても御覽ぜよ。」と、泣いづくといつとゞめける。十藏からくと打笑ひ、「やれ名ををしんで得をとらぬは、昔風の侍とて、當世は流行らぬふるい事、其の上御邊が夫よ妻よなんどとて、心中だてはしけれども、あの景清はな、大宮司が娘小野の姫に最愛し、御身が事は當座の花、後悔するとも叶ふまじ。女さかしくて牛賣られぬとは御ぶんが事ぞ、諸事は兄に任せよ。」と、とんで出づれば又引きとゞめ、「いや大宮司のむすめは人のいひなし悪口ぞや。景清殿にかぎりさやうの事は候まじ。よし人はともかくも、わらはが二世のつまぞかし。さ程に思ひする給はば、子供もわらはも害して後、心のまゝになし給へ。やあ生けらん内はかなはじ。」と、縄りついてぞ泣き給ふ。しかる所へ「熱田の大宮司よりの飛脚なり。景清様の

憂身といひ、殊更敵を持つたる身が、せめて一年に一度の便りをもし給はず。お、それも道理よ。此の頃聞けば大宮司の娘、小野の姫とやらに深い事と承る。尤もかな、みづからは子持筵のうらぶれて、見るめにいやと思すれども、子にほだされて御出でか。恪氣するではなけれども、浮世狂も年による。しやほんにをかしいまで、よい機嫌ぢや。」と有りければ、景清打笑ひ、「是れはめいわく。其の大宮司の娘小野の姫には、しかく物をも言はばこそ。八幡々々さうした事で更になし。そちらならで世の中に、いとしい者が有るべきか。」と、なほこそもたる、袖枕、阿古屋も心打解けて、思ふ餘りの戀いさかひ、犬が食ふとや是れならん。銚子杯たづさへて、彌石に酌とらせ、三年積りし物語、語らひ明し給ひける、契りの程こそゆかしけれ。景清のたまふやう、「我久しく尾州に蟄居して観音参詣怠れり。在京の間は、一先づ日参の志あり。さりながら是れより毎日往來せば、人の咎めも如何なり。蘇の御坊にて、一七夜は通夜申し、やがて歸り對面せん。」と、編笠取つて打被き、表をさして出で給へば、彌石門まで送り出で、「さらばく。」の小手招き、しをらしかりけるおひさきなり。爰に阿古屋が一腹の兄伊庭の十藏廣近は、北野詣をしたりしが、大息ついでわが家に歸り、妹の阿古屋を傍に招き、「是れを見よ、誠に果報は寢てまてとや。悪七兵衛景清を討つてなりとも、搦めてなりとも参らせたるものならば、勳功は望み次第との御制札を立てられたり。我らが榮華の瑞相此の時

清も、つねに清水寺の觀世音を信じ奉り、參詣の道すがら、清水坂のかたほとりに、阿古屋といへる遊君に、かりそめぶしの假枕、いつしかなれて今ははや、二人の若をぞ儲ける。兄の彌石六歳、弟の彌若四歳にて、よにおどなしくぞ見えにける。阿古屋はもとより遊女なれども、妹脊のなさけ濃やかに、世になき景清をいとほしみ、二人の子供を養育し、兄には小弓小太刀を持たせ、父が家督をつがせんと、ならはぬ女の身ながらも、兵法の打太刀し、武道を教ふる心ざし、たぐひ稀にぞ三重聞えける。かかる所へ、悪七兵衛景清は重忠を打ちそんじ、やう／＼として清水や、阿古屋が庵に著き給ふ。女房子供を引連れ、「こは珍らしや、何として御上り候ぞ。先づこなたへ。」と請じける。景清申しけるは、「内々御身も知る如く、我平家の御恩を報ぜん爲、鎌倉殿を狙へども其のかひなく、一兩年は尾張國熱田の大宮司にかくまはれ、空しく月日を送りし所に、此の度畠山の重忠、東大寺再興の奉行に上るをよきしほと、先づ重忠を狙はん爲、我が身を卑しき下郎にしなし、すでに間近くつけよせしが、運強き重忠にて、我らが智畧現はれ、本意なくも討ち損じ、一向に重忠と刺し違へ、死なんとは思ひしが、思へば御身がなつかしく、子供が顔をも見まほしく、無念ながらもながらへて、さてたゞ今の仕合なり。誠に久しく逢はぬ間に、子供もいたう成人し、御身もすんど女房をしあけたり。なんでも今宵はしつほりと、積るつらさを語らん。」と、しととよれば、「え、榮耀らしい。かく浪人の

が恐ろしさに、面影に立ちけるか。よし何にもせよ、是れ程まで雑言せられ、堪忍罷りならず。景清程こそあらずとも、そつと手なみを見せんす。」と例の痣丸小脇にかひこみ、多勢が中になつて入り、水火になれとぞ三重切りあひける。時刻もうつらぬ其の内に、十四五人切りふせ、「重忠に見参せん。」と、此處のつまり彼處のくまに驅け入り、騒けども、大勢に隔てられ、今ははや是れまでなり。深入して雑兵に手負うせられては、景清が末代の名折なり。またこそ時節あるべけれ。いでおつ拂うて落ちぬかんと、番匠箱をおしひらき、大鑿小鑿、手斧鋸、遣跑、屈竟一の手裏剣と、押取り、打立つれば、さしもに勇む軍兵ども、「わつ。」というてはさつと引き、なほも寄せ来る者どもを、小屋の小柱ひんぬいて、八方むぐうに三重ふり廻れば、秋の嵐にちる紅葉、むらくばつとぞ逃げにける。「お、さもさうすさもあらん。此のたびは仕損すとも、此の景清が一念の、劍は岩を徹さんものを。」と、跳りあがり飛びあがり、齒がみをなして行く雲の、月の都に上りける。悪七兵衛が力業、早業、輕業神通業、たゞ飛ぶ鳥のごとくなり。」とて、恐れぬ者こそなかりけれ。

第二

さる程に、誠やたけきもの、ふも、戀にやつるゝならひあり。薪を負へる山人も、立ちよる花の景

叩け。」と下知すれば、中間共承り、一度にはらりと取りまはす。番匠の棟梁此の由を見るよりも、「いや是れ本田殿、彼奴は其の日雇の人足にして差別も知らぬ下郎なれば、さぞ推参も候べし。さりながらかかる目出たき折なれば、たゞ何事も穩便に計らひ給へ。」と申しける。本田聞きも入れず、「いやさ、彼めはちと人に似たるもの、候。」といへば、「扱珍らしや本田殿、人が人に似たるとは事新しう候。いかに下郎め、おのれ大分の錢を取りながら、かだをして働かず、横著ひろぐゆゑにこそ、人々にも怪しまれ、祝儀に邪魔をなしけるよ。價を損にするまでぞ。罷り歸れ。」と叱りければ、よき幸ひと景清は、擔ひし櫃を下し棄て、迷惑さうに揉手をして、表にこそは出でらるれ。重忠幕の内より御覽じて、「暫くく、いかにかたぐ、平家の落人こ、彼處に忍びるて、君を狙ふと聞きけるが、唯今の入足正しく悪七兵衛景清と見しは僻目か。やあ彼あますな。いうても是れは一大事の柱立の淨めの庭、穢らはしてはいかゞなり。前なる野邊に追ひ出し、討つて捨てよ。」と宣へば、もとよりはやる關東武者、我もくとかけ向ふ。景清是れを見て、擔ひ棒に仕込みたる、件の疔丸するりと抜いてさし翳し、大勢を左手にうけ、頭を叩いてからくと笑ひ、「是れお侍、某は尾羽を枯らせし鎌倉の浪人者にて候が、朝夕にせまり、かかる佗しき營みを仕る。さすが人目の恥かしく、面をかくして有りければ、なんぞや某を悪七兵衛景清とは、眼がくらみてありけるか。但しは其の景清

唐竹牡丹に獅子、豹と虎とが威勢を争ひ、百千萬の獸をほつたてく、くるりくと巖に追ひ上げ追ひ下し、風に嘯く波間より、紫雲を巻いて登り龍、またくだり龍、玉をつかんで虚空にさ、け、鱗を立てたる其のいきほひ、手をつくさせて彫りつくし、さて棟瓦軒瓦、金銀瑠璃玻璃、神珠瑪瑙、珊瑚琥珀水晶をふきたてく、珊瑚樹のこまひをひつしと打つたる臺には、金欄錦に柱を包んで、黄金の鋌を輝かせん。棟木を負ふの柱をして、南畝の農夫よりもおほく、梁に架するの檼は、機上の工女よりも多く、釘頭の磷々たるは、庖にあるの粟よりも多く、且暮の説法讀誦の聲は、市人の言語よりも多からしむ、佛法繁昌四海鎮護の大伽藍、如意満足の柱立、めでたしくオ、めでたしと、手斧おつ取りちやうくく、槌おつ取つてはしつていく、鉋取りのべさらく、えいさらくくさらちやうくと、打ち始め取り始め、三三九度の御酒をさ、け、千たび百たび祈念して、重忠に色代し、棟梁座をぞ下りける。手斧はじめも事すぐれば、數千番匠下々まで、皆々小屋にぞ三重入りにける。はるかの後より、四十ばかりの男なるが、人足と思しくて、晝餉の櫃をになひ、頬冠して通りける。秩父の執權本田の二郎きつと見て、「ヤアこれなる下郎めは、かかる晴の庭なるに、頬冠は緩怠なり、色代せよ。」下答むれば、かの男小聲になり、「作法もしらぬ下々なれば、御免。」といひてつ、と通る。「どこへく、さてくぞんざい千萬なる奴めかな。頬冠を取らずんば、誰かある、それ打て

村濃の大幕打たせ、續いて見えしは本田の二郎、其の外の侍ども、帳場々々にしるしを立てて、弓槍長刀吹貫に、柳櫻をこきまぜて、花やかなりける御普請なり。かくて番匠の棟梁、木工のかみ修理のかみ、おのがしなれる出立、吉方にうちむかひ、まづ屋固めの祭文を唱へつゝ、御幣をふつて再拜し、手斧はじめのその儀式、嚴重にこそつとめけれ。むべもとみけりさきくさの、みつばよつばの大伽藍を、手斧はじめのことぶきに、千代をかためて柱立、春は東に立ちそむる、是れ萬物の始めなり。夏は南にめぐる日の、あやめが軒やかをるらん。秋は又西の空、つきせぬ契りかたどりて、天の川原に橋柱、しらけたつるや突鉦、雲をそなたに遺鉦、冬は北にて筒井筒、水こそ家の賣なれ。めぐれやまはれ井戸車、かまど賑ふ竈殿、先陰陽の二柱、二本の柱は女神男神を表したり。三本の柱は三世の諸佛、四本の柱に四天王、四海泰平民安全と、祝ひこめたる墨つほの、絲のすぐなる國なれば、寶や宿にみつめ錐、鋸屑のかすくと、濱の眞砂と君が代は、數へつくさじおもしろや。しかるにこの大伽藍と申すは、聖武皇帝の御建立、三國無雙の靈場なり。兜率天の内院を、さもありくと移さるゝ。堂の高さは二十丈、佛の御丈は十六丈、雲につゞけばおのづから、月を後光と三笠山、柱のかすは天台の、一念三千の機をあらはして、三千本とさだまれり。軒の垂木は法華經の文字のかす、六萬九千三百八十四本なり。山門には獅子の狛。さて正面より、四方四面の、扉々の彫物には、松に

に此の處をうつて通り候よし。たとへば頼朝七重八重の城郭にとりこもり、天地に黒鐵の綱を張つて、用心きびしく候とも、此の景清が一念にてなどか狙はで候べき。さりながら重忠常に頼朝の側を離れず、神變不思議を兼ねたれば、其の身は都にありながら、心はなほ鎌倉殿の側にあり。かう申す景清は二相を悟り候へども、重忠は四相を悟る。頼朝に出で合ひ、既に討たんとせしこと三十四度に及べども、かの重忠に隔てられ、竟に本望遂げ申さず、然れば先づ重忠をさへ討ち取らば、頼朝を討たん事踵を旋らすべからず。重忠この度東大寺の奉行にのほる事、幸ひかな仕合かな。天の時來りたり。忍びやかに南都に下り、重忠が首ひつさけて參らんに、早お暇」と申さるゝ。大宮司聞き給ひ、「實に屈竟の時節でござんなれ。かまへて人に悟られ給ふな、急いて事を仕損ずな。片時も早く」とありければ、北の方も悼びて、宗盛公よりたび給ふ、あざ丸といふ名劍を景清に給はり、「首尾よく仕おほせ給ひなば、一日も逗留なく、早く御歸りませ」と、門出の杯出さるれば、たがひに千秋萬歳と、獅子の勢ひ龍の勢、勇みくゝて行く虎の、尾張國を立ち出でて、奈良の都へ、三重上らるる。いで其の頃は文治五年、春過ぎて夏きにけらし白旗の、源氏の大將頼朝は、南都東大寺大佛再興の御願にて、畠山の重忠奉行職を承り、松にも花をかすが野や、飛火の野邊に假屋をうたせ、横目帳付勘定方、大和大工に飛騨匠、杣人木作こと畢り、今日吉日の柱立。わが身は棧敷に一段高く、

出世景清

第一

扱もその後、妙法蓮華經觀世音菩薩、普門品第二十五は、大乘八軸の骨髓、信心の行者、大慈大悲の光明に與り奉る、觀音威力ぞ有り難き。こゝに平家の一族悪七兵衛景清は、西國四國の合戦に討死すべきものなりしが、死は軽くして易し、生は重くして難し、所詮命を全くして、平氏の怨敵右大将頼朝を一大刀恨み、平家の恥辱を雪がんと、落人となり、尾張國熱田の大宮司に、いさゝかしるべありければ、深く忍びて居たりけり。もとより大宮司は平氏の重恩の人なれば、深くいたはり、ひとりの姫をのの姫と聞えしを景清にめあはせ、子とも婿ともかしづき給ふ志こそわりなけれ。景清大宮司の御前に出で、「誠にそれがし無二の御懇志に預り、ながく在居仕り、身は埋木と朽ち果てん、末頼みなき身ながらも、せめて頼朝を一大刀うかひ、君父の恨みを散じ、その後は腹切つて、兔も角も罷りならんと、空しき月日を送り候。然る處に、今朝屈竟の事を聞き出し候。其の故は、鎌倉殿は南都東大寺の大佛殿を御再興あるべしとて、秩父の重忠かの奉行を承り、きのふの暮ほど

案ず。

猪甘連 四百年前顯宗天皇蒙塵し給ひし際、御糧を乞はれしを惜しんで斬殺されき。後に弘法大師行道の時、車大路にて猪甘の幽靈現はれて罪障消滅を請ふ。大師爲に説法し、外五鉗智拳印を結べば、有り難やと叫んで其の姿忽ち五輪の石塔となり、幽魂悪右馬尉仲成の体内に入りて橋判官勝藤に殺され、又柰原の牛の腹に宿りて守敏僧都に殺され、また大炊介仲經の一子と生まれて餓鬼道の苦患を受けて殺され、遂に龍王となつて天上の果を得。

格闘せしが、その心を知つて相和し、共に大海原王子を狙ひ弘法大師零御修法の場にて王子を刺す。

悪右馬尉仲成　猪甘連の末孫なり。大海原王子の逆心に一味せしも難病に罹りて死し、猪甘連の魂魄と結んで蘇生し、大海原王子と共に嵯峨天皇を攻めんとして橘判官勝藤に斬り殺さる。

花世　仲成の女にして、橘判官勝藤に嫁す。父逆心を懐き大海原王子に一味して勝藤の敵となる。勝藤乃ち

仲成を殺して妻を離別す。是に於て花世果物賣となり、嵯峨の離宮に行きて舅の濱頼に邂逅し、伴うて我が家に歸り孝養を盡せしが、不在中何者にか舅を奪ひ去られ、其の行方を尋ねて狼谷に至り、高札を讀んで兄の大炊介仲經が舅を奪ひて殺したるを知り、兄を殺さんと決心したる際、勝藤に邂逅して相共に兄の宅に斬り入りしが、深き事情を知つて兄の心に感じて我が身の輕忽を謝し、仲經の妻と共に四國八十八の札所を經巡りて都に上る。

前判官濱頼　勝藤の父なり。歳九十三、嵯峨の御所に赴きて拜する際、勝藤が離別せし嫁の花世に邂逅し、互にその情愛に咽び、遂に花世に連れられて其の家に行き介抱せられしが、大炊介仲經に奪ひ去られて厚遇せらる。勝藤が仲經を父の仇と信じて斬り入りし時、濱頼這ひ出でて仲經の義心を談じて勝藤を諷す。

多治見左衛門春國　大海原王子の臣なり。敕使と伴りて又次郎を欺き、其の飼牛を牽かせて北岩倉の深山に連れ行きしが、又次郎に斬り殺さる。

與茂作　山城國西の岡檜原の土民なり。朋輩九郎右衛門、太次兵衛等十五六人と共に又次郎を訪ひ、又次郎の

飼牛の玉を見て目出度しと言うて變應せしめんとせしが、又次郎の亡父の因果話を聽いて己等が亡父の菩提を

ひ、其の法力によつて苦しめらる。

小 蛎 稻荷大明神の社人庵の大夫の娘にして美貌なり。大海原王子亂入せしとき、これをたらしめて殺さんとせしが、王子に悟られて危き場を遁る。

嵯峨天皇 大海原王子の逆臣に宸襟を惱ませ給ひ、北嵯峨の離宮に移らせたまふ。前判官瀆頼來つて離宮を拜せる際、嘗て己が子の勝頼に離別されたる嫁花世に邂逅して互に情に泣く。爲に救護ありて花世の家に舅瀆頼を差はしめ給ふ。後、天皇、弘法大師零御修法の場に行幸し給ふ。

守 敏 我慢邪愆の悪僧なり。空海の法力に及ばぬを猜んで大海原王子の反逆に組し、北岩倉の深山に籠り、大威徳の法を修して天下を覆さんとして、大炊介仲經に追拂はる。是に於て邪法を以て龍神を水瓶に封じ、天下早する罪を嵯峨天皇に歸して流し奉らんとして、空海と法力を比ぶることとなり、空海の眞言祕法により龍王の爲に惨死す。

太次兵衛 山城國西の岡樫原の土民なり。朋輩等と共に又次郎を訪ひ、又次郎の飼牛の玉を見たりと稱して其の祝を勧め、精進料理を出されたるを怒りしが、又次郎より其の理由を聞いて心解く。

大炊介仲經 父仲成の逆心を諫めて勘當せられ、山城國西の岡樫原の土民となり又次郎といふ。多治見春國に欺かれて牛を牽き北岩倉の深山に入り、大海原王子等の反逆を見て大いに怒り、力戦して敵を破り春國を殺して我が家に歸る。かくて亡父の仇橋勝藤を狙へども行方知れず。よつて勝藤の父瀆頼を奪ひ去り、我が子を殺して妻の乳を與へて厚遇しながらも、外面作つて瀆頼を殺したる高札を立て、勝藤の斬り入るを待ち受けて

嵯峨天皇甘露雨

大海原王子 嵯峨天皇の從弟なり。生年二十三。惡右馬尉仲成と謀りて反逆を企て空海に看破せらる。また

惡僧守敏と共に北岩倉の深山に籠りて大威徳の法を修し、天下を覆さんとして大炊介仲經に追捕はる。後遂に天皇を嵯峨の離宮に幽閉し參らせ、自ら僭して帝と稱し放逸驕奢に耽りしが、竈の大夫を攻めて利あらず。弘法大師の零修法の際、嵯峨天皇に飛び掛らんとして橘勝藤、大炊介仲經の兩人に刺殺さる。

橘判官勝藤 前判官濱賴の子なり。瀧口武者所を勤め、惡右馬尉仲成の娘花世を妻とす。仲成反逆に黨する

に及んで、之を斬つて妻を離別したり。後に仲成の子の大炊介を我が父の仇と思ひて斬り入りしが、その然らざるを知るや直に仲經に降服し、相和して弘法大師零修法の場に大海原王子を刺殺す。

竈の大夫 稻荷大明神の社人にして、弘法大師の弟子なり。大師より頼まれて大炊介仲經、橘判官勝藤の兩人を隠まひしが、大海原王子に亂入せられて危かりし時、眞言陀羅尼を念誦して王子等を追捕ふ。

空海 弘法大師なり。嵯峨天皇の御代逆臣あるを豫想し、闕下に奏して大海原王子の逆心を觀破す。また車大路の藪陰にて猪甘連の幽靈に遇ひて説法す。これより玉體安全の祈禱に餘念なかりき。弘仁八年天下大いに旱す。空海これを守敏僧都の法力によるものと知り、爲に零の法を修し、眞言の法力を以て甘露の大雨を降らす。

百濟大納言 大海原王子の逆心に一味し、嵯峨天皇を流し奉らんとして牢輿を押立てて行く途中、空海に遇

笛蘇生し、志賀幸崎大明神に參詣して、建禮門院より横笛等召遣の使者戸無瀬に遇ひ、相共に都に上る。

左京之進義次

平重盛の家士にして、越中次郎兵衛盛次の弟なり。養和元年九月北山に茸狩の御遊ありし

夜、建禮門院の侍女刈藻と密會せるを、加賀郡司師高に探し出されて惡評を立てられ兄の盛次に幽閉せられ、師高の奸策によりて死罪に處せられんとせしが、重盛の仁慈によつて救はれ、僧となつて嵯峨の奥に住む。或日横笛、頼方を尋ねて來る。こゝに於て相共に頼方を尋ねて雪中にさまよひ、一家を見付けて宿を請へば、これぞ頼方と刈藻の住所なりしかば、互に奇遇を喜び、連れ立つて志賀幸崎大明神に參詣し、戸無瀬局の難を救うて師高を搦め、師高の部下岩村源九郎、鎌須無藏を斬る。此の時盛次等重盛より召遣の使者となつて來れるに遇ひ、相共に都に上る。

齋藤瀧口頼方

平重盛の家士にして、齋藤左衛門尉勝頼の子なり。養和元年九月北山に茸狩の御遊ありし

夜、竊かに建禮門院の侍女横笛と山中に密會せるを、加賀郡司師高に見付けられて惡評を立てられ、父に叱られて遁世の身となり、西俊と法名して嵯峨の奥往生院に引籠り、夜な／＼洛外三昧所を巡りしが、舟岡山にて刈藻が岩村源五に斬られんとする場に出遇ひ、源五を欺きて刀を奪ひ源五を追拂ひ、刈藻を連れて去り、志賀の里に小庵を結びて、刈藻及び其の幼兒を養育せしが、或雪夜左京之進義次、横笛を伴ひて來る。是に於て互に奇遇を喜び、志賀幸崎大明神に參詣し、師高に出遇うて之を搦め、義次と協力して師高の部下岩村源九郎、鎌須無藏を斬る。此の時父の勝頼等重盛より召遣の使者となつて來れるに邂逅し、相共に都に上る。

侍女横笛の檢死を命ぜられて建禮門院の御所に至る。然るに建禮門院はこれを聞かれて憤怨せらる。盛次乃ち師高の讒より事起れるものと察し、勝頼と和睦して師高の行動に注意す。かくて建禮門院より横笛の首桶を出されしを開き見れば、笛を折りて土を盛りてあり。義次の首桶を開けば、義次の髻に石を入れてありしかば、深く建禮門院と重盛公との仁心厚きに感泣す。かくて後重盛公の命によりて頼方、義次召還の使者となり、志賀辛崎大明神の邊にて義次等に遇ひ相共に都に上る。

加賀郡司師高

戸無瀬局の弟なり。建禮門院の侍所を勤め、門院の侍女横笛及び刈藻を横戀慕す。養和元年

九月北山に茸狩の御遊ありし夜、横笛は頼方に、刈藻は義次に密通せるを探知し、頼方等と口論し、また刈藻を捕へて口説けども、其の意に従はざるを怒り、奸策を廻らして刈藻、横笛、義次を殺さんとして、師高の罪を露顯し、追放せられて岩村源九郎、鎌須無藏と共に強盜となり、志賀辛崎大明神にて姉の戸無瀬局を搦めて掠奪せんとして、義次等と戦ふこととなり、搦められて奥に押込められたるを源九郎、無藏に刺殺さる。

横 笛

建禮門院の侍女にして、平重盛の家士齋藤頼方と相思の仲なり。或日頼方が重盛の使者となり、來つ

て山雀を建禮門院に獻ず。横笛これを取次いで頼方と戯れ、過つて山雀を籠より逃して加賀郡司師高に罵詈せらる。養和元年九月北山に茸狩の御遊ありし夜、頼方と密會せるを師高に見付けられ、師高の奸策によりて死罪に行はれんとせしを、建禮門院の仁心によりて救はる。これより頼方の行方を尋ね、嵯峨の奥なる庵室に至りて、頼方の朋輩左京之進義次に遇ひ、相共に頼方を尋ねて雪中に彷徨ひ、漸く家を見付けて宿を請へる間に横笛凍死す。然るにこの家は頼方の宅なりしかば、頼方等愁歎に暮るゝ際、刈藻が燻べたる薬玉香によつて横

しを建禮門院出でて和げ給ふ。かくて北野に茸狩の御遊ありし時總ての籠鳥を放たる。また御歌かるたの催ありし時師高奸策を廻らし、重盛公より横笛の首を受取る使者の來れるを言上す。建禮門院これを聞かれて悲歎に沈ませ給ひしが、憤然として起ち横笛を伴うて入御し給ふ。戸無瀬局出でて横笛の首を重盛の使者に渡す。其の首桶を開けば、笛を折つて入れ土を盛つてあり。

小松内大臣平重盛　賢明仁慈の徳に富む。養和元年九月九日建禮門院より北山に茸狩の催あるやう申し越され、其の奉答使に献上の山雀を持たせて遣はす。或日加賀郡司師高が建禮門院の使者と稱して來り、左京之進義次を死罪に行ふべきを命ず。重盛不審に思へども門院の命令なれば詮方なく、義次を召して奥に連れ行き、義次の誓を切つて首桶に入れ、石を添へて重りとなし、齋藤左衛門尉勝頼及び越中次郎兵衛盛次に其の首桶を持たしめて建禮門院の許に遣はす。

戸無瀬局　建禮門院の侍女にして、加賀郡司師高の姉なり。養和元年九月九日建禮門院の御使となりて平重盛の邸に至り、北山に茸狩の催あるやう御意を傳ふ。後また建禮門院の御代參として志賀幸崎の大明神に參詣し、師高の強盜となれるに搦められしが、左京之進義次に助けられて相共に都に上る。

鎌須無藏　師高手下の強盜となり、志賀幸崎大明神にて戸無瀬局を搦めて掠奪せんとして、一物も獲られざるを怒つて戸無瀬を刺さんとし、過つて師高を刺し、左京之進義次、齋藤瀧口頼方に殺さる。

越中次郎兵衛盛次　内大臣平重盛の家士にして、左京之進義次の兄なり。義次が建禮門院の侍女刈藻と密通したる悪評を聞きて義次を幽閉す。盛次當番の日齋藤左衛門尉勝頼と軋み合ひしが、重盛公より建禮門院の

きに感泣す。後、重盛公の命により頼方、義次召還の使者となり、志賀辛崎大明神の邊にて頼方等に逢ひ、共に都に上る。

刈藻

建禮門院の侍女なり。平重盛の家士左京之進と契り、加賀郡司師高に横戀慕せらる。養和元年九月北山に茸狩の御遊ありし夜、義次と密會せるを師高に知られて遁れしが、懷妊となつて浮名立ちし爲、宮仕のお暇を願へど、師高に妨げられ舟岡山にて殺されんとせしを、齋藤龍口頼方に助けられて志賀の里に養はる。ある雪の夜義次、横笛を伴ひ來つて宿を請ふ。こゝに於て夫婦相逢ふを喜べる際、横笛寒氣に堪へずして絶息す。刈藻乃ち嘗て建禮門院より賜はりたる薬王香を焚いて横笛を蘇生せしむ。後、義次と共に辛崎大明神に參詣し、建禮門院より召還の使者戸無瀬の局に邂逅し俱に都に上る。

岩村源九郎

岩村源五の一族なり。惡漢師高に屬して強盜となり、志賀辛崎大明神にて戸無瀬を刺さんとして過つて師高を刺し、左京之進義次等に殺さる。

岩村源五

加賀郡司師高の部下なり。師高の命を奉じて刈藻を舟岡山に連れ行き、之を斬殺さんとして齋藤頼方に追拂はれ、卵塔の陰に隠れしを、源五の部下ども逃げんとして卵塔に押寄せし爲、卵塔崩れて壓死を遂ぐ。

建禮門院

安徳天皇の御母君にましまし、仁慈の徳に富ませ給ふ。養和元年九月九日侍女戸無瀬局を御使として内大臣重盛へ北山に茸狩の催あるやう申し遣はさる。重盛その奉答に齋藤頼方をして獻上の山雀を持たしめて遣はす。建禮門院の侍女横笛、頼方に戯れたる際過つて山雀を逃す。加賀郡司師高之を咎めて口論となり

林 河内道明寺の老尼なり。ある日虚無僧來り和琴の前を預けて去る。尋いで龍門家の後室及び舞樂の前來つて此の寺の尼となる。此の時石川五右衛門幼兒を背負ひて寺内に竊込み、大釜の中に隠れしを官人追及して縛し去る。是に於て林は龍門家の後室等と共に刑場に行き、幼兒の赦免を哀訴す。

和琴の前 龍門家の女にして、舞樂の前の異母妹なり。母が姉を惡むを悲しんで家をしのび出で、吉野川に投身せんとせるを石川五右衛門に捕はれて、大阪三軒屋町御手洗屋に賣られて遊女となり吉野と名乗る。ある日憲法來つて吉岡と交換せられて、河内道明寺に連れ行かれ、尋いで母及び姉に遇ふ。此の時石川五右衛門幼兒を背負うて、寺内に逃げ込みしを捕吏に捕へらる。是に於て和琴の前は道明寺の老尼等と共に五右衛門の刑場に赴き、幼兒の赦免を哀訴す。

娥歌加留多

齋藤左衛門尉勝頼 平重盛の家士にして、齋藤澁口頼方の父なり。佛法に歸依して法名を西頼と稱す。頼方が惡評を聞き、頼方を叱つて出家せしめ、自らは還俗して出仕し、越中盛次と札み合ひしが、重盛公より義次の首桶を携へて建禮門院の御所に行き、横笛の首を入れて歸るべしとの命を奉じ、建禮門院の御所に至る。然るに建禮門院は加賀郡司師高よりこの由聞かれて憤怒し給ふや、勝頼乃ち師高の譏より事起れるものと察し、盛次と和して師高の言動に注意す。かくて建禮門院より横笛の首桶を受取りて開き見れば、笛を折り土を盛りてあり。而して義次の首桶を開けば、義次の鬚に石を入れてありしかば、深く建禮門院と重盛公との御仁心厚

舞樂の前　大和國宇陀郡龍門家の女にして、和琴の前の異母姉なり。繼母に悪まれて、香春顯定と祝言の席上にて顯定諸共に殺されんとせしを、繼母、顯定の母の善心に感じて惡心を續し、舞樂の前も發心し、繼母諸共に河内國道明寺の尼となる。ある日石川五右衛門、憲法の子の久吉を脊負ひ、寺内に逃げ込みて大釜の中に潛匿せしを官人追及して捕縛す。是に於て舞樂の前は道明寺の老尼等と諸共に五右衛門の刑場に至り、久吉の爲に哀訴す。

又五郎　大阪三軒屋町御手洗屋の主人なり。虛無僧來つて懇請するを容れて抱妓の吉野と吉岡とを交換し、後にて其の虛無僧こそ官より尋ね人となれる憲法なるを知り、捕へて恩賞に預らんものと其の跡を追ひかく。其の夜強盜石川五右衛門に押入られて多くの財物を奪ひ去らる。

醒井民部左衛門　夜廻りの物頭なり。大阪三軒屋町御手洗屋に強盜石川五右衛門が闖入せしを取押へんとし身仕度して飛入つて五右衛門に斬殺さる。

吉岡　貧家に生まれ、母の病氣を救はん爲身を賣りて、江戸吉原遊郭三浦の内の遊女となり、憲法と馴染みて久吉を生む。憲法財産を蕩盡して行方不明となりしかば、吉岡は父と共に久吉を連れて京都に來り、憲法を尋ねて三人路頭にさまよひ、三味線を弾じ唄を謠ひて、惠みを往來の人々に乞ふ。偶朱雀にて憲法の母に遇ひ、また大阪三軒屋町にて憲法に邂逅し、やがてこの町の御手洗屋に身を賣ることとなる。其の夜石川五右衛門押入り、吉岡をして遁れしめしが捕吏に召捕られ、五右衛門縛に就くに及んで放免せられ。後久吉釜煎にせらるゝ場に來つて愁歎に暮る。

や、其の場に來つて懇款に暮れ、官人に對して久吉に何の罪があるかを詰り、遠坂舍人を掴んで沸返る釜中に投込む。

石川五右衛門

江戸にて憲法に兵法を學び、師と共に流寓して京都に來り、大橋詰錦屋にて憲法の異母兄顯定の荷物を掠奪せしを手始めに遂に強盜の巨魁となる。吉野川に投身せんとする龍門家の姫君和琴の前を勾引して大阪三軒屋町御手洗屋に賣り、部下を率ゐて御手洗屋に押入り、財物を奪うて捕吏に圍まる。五右衛門數多の捕吏を殺し、憲法の子の久吉を奪負うて河内國道明寺まで逃延び、接待の大釜中に潛匿せしを捕へられて釜ながら京に送られ、七條河原にて釜煎の酷刑に處せらる。刑場に於て辭世の歌を詠んで曰く、「石川や濱の眞砂は盡くるとも世に盜人の種は盡きせじ。」時に慶長十五年なり。

舟越惣馬

大和國宇陀郡龍門家の重臣なり。遠坂舍人等と奸策を廻らし、香春大炊之助顯定婿入の宴席にて、顯定を殺さんとして顯定の異母弟憲法の爲に妨げらる。後、禁中御能の會の誓固を勤め、故意に棒を以て憲法の頭を毆打して憲法に刺殺さる。

遠坂舍人

龍門家の次女和琴を妻となして以て龍門家を奪はんとし、龍門家の奸臣舟越惣馬等と謀りて遂に龍門家を奪ひしが、石川五右衛門が釜煎の刑に處せられたる場に於て、憲法の爲に沸返る釜中に掴み込まれて惨死を遂ぐ。

久吉

父を憲法、母を吉岡といふ。石川五右衛門に奪負はれたる儘捕縛せられて釜煎の酷刑に處せらる。時に三歳。

し、以て半七、お花を遁れしむ。

傾城 吉岡 染

香春大炊之助顯定

因幡國澁山の城主の裔にして生來跛者なり。大和國宇陀郡龍門家の息女舞樂の前との婚約成りて其の婿入の際、異母弟憲法は龍門家の奸策を豫知し、兄の危急を救ふ爲顯定と作り、龍門家に來つて祝言の席に臨む。顯定は弟の心を知らずして之と口論せしが、其の實を知るに及んで感に堪へず、髻を切つて出家の身となる。後に憲法の子久吉罪なくして石川五右衛門と共に釜煎の刑に處せらるゝや、官命じて久吉の償に顯定を本領に安堵せしむ。これより龍門家繁榮することとなる。

香春久太郎憲法

放蕩の爲に家を放逐せられ、江戸の本郷に住んで染物業を營み劍道を教授し、吉原の遊女吉岡と馴染みて久吉をまうけしが、財産を蕩盡して行方を晦まし、弟子石川五右衛門の合力を受けて京都に放浪す。兄の顯定が龍門家に婿入して辱めを受けんとする噂を聞き、之を救はん爲に自ら顯定と稱して龍門家に至り、尋いで兄と口論することとなり、母に叱られて去る。後に禁中御能の拜觀に出で、見物人の中に交りしが、龍門家の重臣舟越惣馬、憲法を見るや、故意に其の頭高しとて棒にて毆打す。憲法立退きしが平素の遺恨を晴らさんものと七首を懷にして引返し、見物人に紛れ惣馬に近寄つて之を刺殺し、直に名乗を上げ奇手を斬拂ひて逃走す。これより虚無僧となり、大阪三軒屋に來つて妻の吉岡に遇ひ、遊女屋の主人又五郎に談じて抱妓吉野と吉岡との交換を請ひ、吉野を伴うて去る。慶長庚戌年久吉が五右衛門と共に釜煎の酷刑に處せらるゝ

父を恨んで其の意に従はず。此の時お花の愛人刀屋の手代半七現はれて九兵衛を突除く。九兵衛怒つて半七と格闘し、半七の髻を掴んで引立つ。

甚五郎 大阪長町に住し、半七の義伯父なり。

太郎左衛門 京都四條石懸町娼家井筒屋の主人なり。

お花 京都四條石懸町の娼家井筒屋の遊女なり。刀屋石見某の手代半七と馴染み、半七の伯母と偽りて刀

屋に半七を訪うて會談せる際、半七の伯母も訪ひ來る。こゝに於てお花の偽り露顯す。石見怒つて半七、お花を毆打せしが、伯母の執成しによつて事なきを得たり。お花の養父九兵衛井筒屋に來り、お花の勤めの年期を延ばして二十兩を得んとす。お花養父の意に従はずして毆打せらる。坊主客に連れられて西石懸の色茶屋に行き、朋輩妓と阿彌陀の光といふ遊戯をなし、揉圖に當りて豆腐買に出でて半七に逢ひ、相携へて大阪長町なる半七の伯母を訪ふ。

刀屋半七 京都下立賣刀屋石見某の手代にして、井筒屋の遊女お花と馴染む。お花、半七の伯母と偽り、刀

屋に半七を訪うて逢へる際、半七の伯母來る。石見主人これを見て、さては以前の女は娼婦と知つて大いに怒り、お花半七を毆打す。半七、伯母より信國作の刀の細工を頼まれてこれを賣り、下阪作の刀に買替へて金二十兩を著服してお花を訪ふ。此の時お花の養父九兵衛井筒屋に來つてお花の年期を増さんとす。半七乃ち九兵衛と喧嘩し、懐にせる二十兩を其の面に抛ち、お花と相携へて大阪長町なる伯母を訪ふ。伯母の夫甚五郎は下阪の刀に取替へられたるを知らずして武家に届けしかば忽ち悪事露顯す。是に於て伯母其の罪を引受けて切腹

萩野八重桐

萩野屋の遊女なり。坂田時行と馴染みて夫婦となる。時行亡夫の仇を報ぜんとして夫婦離別す。

或日八重桐、澤湯姫の邸前を通り掛りて三味線の音に耳を澄まし、尋いで時行と邂逅し、澤湯姫の問ひに應じて我が身の上を語り、時行の薄情を詰りて意見す。時行身を恥ぢて自刃し、其の魂魄火焰の轉風となつて八重桐の胎内に入る。八重桐之より飛行通力の女となり、清原高藤の寄手を追拂ひ雲を分けて去り、山姥となつて信州上路の山に棲息し快童丸を生む。偶源頼光に遇うて我が身の上を語り、快童丸を頼光の家來となし、暇を告げ山を驅廻りて行方知れずなりぬ。

攝津守源頼光

濱松のあたりに紫雲鬘鬘せるを目當に寶劍を尋ね、家士渡邊綱を伴うて佐夜の中山に泊す。

時に齡十八。其の夜小絲喜之介が亡父の仇物部平太を斬り、遁走して來れるを助けて、清原高藤平政盛の寄手と戦ひ、竊かに美濃路を指して落ち行き、高藤に譏奏せられて救勘の身となり、美濃の能勢判官仲國に身を寄せ、美濃路をさまよひて深山に迷ひ入り、山賊に遭うて之を家來となし、信州上路の山中にて山姥に遇ひ、其の子快童凡の非凡の力量に感じてこれを家來となし、坂田公時と命名して四天王の一に加へ、公時を先導として江州高懸山の惡鬼を退治す。功を以て鎮守府將軍に任ぜられ、救誕によつて岩倉大納言兼冬卿の女澤湯姫と婚す。

長町女腹切

西陣の九兵衛

京都四條石垣町井筒屋の抱妓お花の養父なり。お花を年期増して二十兩を得んとす。お花養

之介の兩人が物部平太を斬り、遁走して來り頼る。綱これを助けて清原高藤、平政盛と戦うて勝つ。美濃路を通り、山姥に導かれて信州上路の山に分入り頼光に會ふ。これより江州高懸山の惡鬼退治に従ひて惡鬼を生擒し、高藤、政盛の罪惡を奏訴して政盛及び惡鬼を殺す。

坂田藏人時行

坂田前司忠時の子なり。萩野屋の遊女八重桐と馴染みて父より勘當を受く。父が物部平太に殺されてより平太の行方を尋ねて仇を報ぜんとし、八重桐と離別し源七と名乗つて燗草賣となり、澤湯姫の侍女より三味線の一部を所望せられて之を弾じ、八重桐と邂逅し其の意見に感じて自刃せしが、其の魂魄火焔の轉風となつて八重桐の胎内に宿り、公時となつて再生す。

能勢判官仲國

美濃の住人にして源氏の家士なり。源頼光の來れるを厚遇し、種々の燈籠を飾りて其の心を慰む。孟蘭盆會の日頼光と酒宴の後竊かに妻を呼び、清原高藤の差出したる封書を見せて其の心中を問ふ。妻思案して頼光を討ち奉らんといふに同意し、次の間に隠れて其の様子を窺ふ。然るに妻は我が子の冠者丸を斬つて頼光の身代りたらしめ、尋いで自刃せんとす。仲國乃ち妻の自刃を制止して頼光を落し參らす。

物部平太

坂田前司忠時を殺して平政盛の家來となる。ある日佐夜の中山の旅人宿菱屋に清原高藤の保護を頼みて同宿し、下女の小絲に蓬髪を刺らせ、親の敵と聲を掛けられて、小絲の情夫喜之介に殺さる。

右衛門頭平政盛

清原高藤に従ひて佐夜の中山に赴き、高藤と共に菱屋に同宿せんとして渡邊綱と喧嘩し、高藤に物部平太の保護を頼みて去る。其の夜平太が喜之介小絲に殺さる。是に於て政盛怒つて喜之介を頼光の旅舎に襲ひ、渡邊綱と戦うて敗る。後に頼光の四天王に訴へられて斬罪に處せらる。

たる手紙を出して其の心意を尋ねらる。其の文意に、頼光を斬つて内應するに於ては冠者丸を取立つべしとあり。小侍從忠案の末、頼光を討つ由を答へて助勢を頼み、然も心底には冠者丸を斬つて頼光の身代りたらしめんとし、冠者丸を持佛堂に招き、經を讀誦せしめて其の背後より一討にせんと思ひ定めしが、親子の情に絆されて果すを得ず、感極まつて聲を上ぐ。冠者丸怖れて逃げまどふを母引捕へて首を刎ね、其の髻を解けば中に一通の文あり。其の文意に、世の無常を云ひ親の恩を謝し、母御歎きに沉ませられて手を下し給はでは本意ならず。されば殊更に卑怯の舉動をなし、憎しみを受けて殺され奉るとの由を記す。母悲歎に暮れ自殺せんとし、て夫の仲國に制せらる。

卜部季武

初め卜部熊武と云ふ。美濃の深山に住み、旅人の首を刎ねて梢に吊す。ある日源頼光の通るを呼び掛け、其の威に服して臣となり、卜部季武と命名せらる。これより主従共に信州上路の山に分入りて山姥に遇ひ、江州高懸山の惡鬼退治に従うて武功あり。

清原中納言右大將高藤

天曆帝の御宇驕奢を極む。諸國を遊覽して佐夜の中山に來り、源頼光の宿せるを追拂ひて菱屋に泊す。折しも平政盛來つて物部平太の同宿を請ひ其の保護を依頼す。高藤之を諾す。此の夜平太、喜之介に斬らる。是に於て喜之介を捕へんとして頼光の宿舎を襲うて渡邊綱に破られ、都に歸つて頼光を讒奏す。また部下の者を岩倉大納言兼冬卿の邸に遣はし、澤湯姫を奪はんとして果さず。後罪を得て鬼界島に配流せらる。

渡邊綱

源頼光の臣なり。主に陪して佐夜の中山に赴き、宿舎のことより平政盛と口論す。其の夜小絲、喜

坂田公時 坂田藏人時行の魂魄萩野八重桐の胎内に入るや、八重桐忽ち山姥と變じ、信州上路の山中にて公

時を生む。幼名を快童丸と云ひ、顔面朱の如く、獸肉を裂いて食となす。ある日源頼光に逢ひ、母の命により荒熊と格闘して非凡の力量を發揮し、頼光の臣となつて公時と名乗り、四天王の一人となる。江州高懸山の惡鬼退治の先導をなし、惡鬼と奮闘して武功を立つ。

冠者丸

幼名を美女御前と云ひ、源滿仲の子。母を小侍従といふ。母に従ひて能勢判官仲國に養はる。孟蘭

盆會の日源頼光の身代りとなつて母に斬られんとするを推知し、菟爾として母に對面し、髪を梳る間に竊かに一通の文を認めて髪の中に結び込む。その文に、世の無常をいひ父母の恩を謝し、母御歎きなき様に慈と卑怯の舉動をなし、憎しみを受けて殺されん由を記し、白帷子を著て持佛堂の前に坐し、從容として經を念誦す。母歎いて斬ること能はず。是に於て慈と臆病の舉動をなして母に斬らる。

小 絲

小萩の替名。坂田前司忠時の女にして、坂田藏人時行の妹なり。父が物部平太に殺されてより佐夜

の中山の旅人宿菱屋の下婢となり、同家の下男喜之介と情交密なり。ある夜物部平太來つて泊し理髪を請ふ。乃ち髻を剃りながら竊かに喜之介と謀し合はせ、忽ち親の敵と名乗るや、喜之介即ち平太の首を刎ね、小絲と共に出奔して源頼光に頼る。

小侍従

源滿仲に仕へ、滿仲の胤を孕みて冠者丸を生む。後に冠者丸を連れて能勢判官仲國に嫁す。偶源頼

光來つて身を寄す。仲國夫妻これを厚遇せしが、孟蘭盆會の日小侍従頼光を變應する席に侍して哭し、頼光に怪しまる。乃ち我が身及び冠者丸の來歴を語る。かくて宴終りたる後竊かに尖に呼ばれて、清原高藤より寄せ

大森彦七盛長

足利尊氏の臣にして勾當内侍に懸想す。和田源秀女装して駕籠に乗り來れるを内侍と思ひ、其の手を取りて源秀に追拂はる。また新田義貞が西の宮に敗れて退くを追撃し、小山田高家の首を討ちて義貞の首と思ひ、尊氏に見せて恩賞にあづからんとす。かくて後勾當内侍が三種神器を捧持して吉野に至るを道に要して奪はんとせし時、忽ち神器奇特を顯はして盛長を追拂ふ。

新田義貞

青麥を刈り盜む二十餘歳の女を捕へしが、其の女の言を聞き哀みて鎧を與へ放免す。生田森の戦に小山田高家を組伏せ、其の著たる鎧の嘗て女に與へたるものなるを見、憐んでこれを助く。かくて後に吉野の内裏に至り、尊氏と和陸することとなる。

嫗 山 姥

澤湯姫

岩倉大納言兼冬卿の女にして、源頼光と婚約あり。然るに頼光は清原右大將高藤に讒せられて行方不明となるや、姫鬱々として暮す。ある日煙草賣の源七を呼び入れ、三味線を弾かして心を慰む。後に頼光高懸山の鬼神を退治して武功を立つるや、澤湯姫四位に敍せられ、救命ありて頼光と結婚の日を定めらる。

喜之介

佐夜の中山の旅人宿蓑屋の下男を勤め、下女小絲と情交密なり。或夜小絲の亡父の仇物部平太來つて泊す。是に於て小絲と心を合はせ平太の言を刎ね、小絲と共に遁れて源頼光に頼り碓井貞光と改名す。清原高藤、平政盛の追手と戦つて之を破り、山姥の導きによつて信州上路の山に分入り、こゝに頼光と會し、江州高懸山の惡鬼退治に従ひて武功を立つ

首を刎ねんとして、其の鎧を見憐んで之を助く。高家深く義貞の恩に感激す。義貞戦敗れて窮せる時、義貞の身代りとなつて大森彦七盛長に斬らる。

小山田前司高春

大森彦七が討取つたる新田義貞の首を尊氏見て疑ひを懐く。高春一見して我が子高家の首なるを知りしが、一旦獄門にかけて義貞か否かを正すべきをいひて其の首を梟す。高家の妻も勾當内侍も來つて其の首を見て泣く。高春乃ち高家の妻より高家が義貞の恩に感じて其の身代りとなりたることを聞き、其の行爲を褒め且曰く、義貞を助けたる子の親は、尊氏には不忠となるとて自刎す。

名和又太郎長年

出雲の住人にして忠臣なり。飲食物行商人となり、又六と稱して、坊門清忠が後醍醐天皇を幽閉し奉れる番所に來る。折しも小山田高家の妻比丘尼に扮して番人に酒を勧め、酔はせて眠らしむ。其の間に又六堀を破り、天皇の御供して大和路を指して逃ぐる途に楠正行母子に遇ひ、相共に天神森に據つて義旗を擧げ、寄來る敵を破り、天皇に供奉して吉野に急ぐ。

楠正成

足利尊氏西國の兵を率ゐる海陸より都へ攻上る。正成一時その銳鋒を避けんとして謀を獻ぜしが、坊門清忠に妨げられて用ゐられず。是に於て正成死を決し、櫻井驛にて子の正行を教訓して故郷に歸し、湊川に尊氏と戦うて利あらず、退いて民家に入り、弟正季に謂つて曰く、吾子何處にか魂を託せんと欲する。正季曰く、願はくは七度人間に生まれて國賊を滅ぼさんと。正成欣然として死す。

楠正行

幼少の時足利尊氏と戦はんとして走出でて、母に制止せらるゝ際、名和長年が後醍醐天皇を守護して來るに遇ひ、相謀りて天神森に陣して朝敵を破り、長年と共に天皇に供奉して吉野の内裏へ急ぐ。

し、銀子一枚を與へて忠兵衛と共に御所街道に遁れしむ。かくて兩人其の途上捕吏に取押へらる。

龜屋妙閑

大阪淡路町飛脚商龜屋忠兵衛の義母なり。

吉野都女楠

坊門宰相清忠

後醍醐天皇に仕へ、楠正成が奏上したる謀を難じ、足利尊氏に内應して天皇を幽閉し奉り、

後また勾當内侍等が三種神器を捧持して吉野に至る途中を要して、神器を奪ひ内侍を生擒らんとして和田源秀に殺さる。

和田新發意源秀

楠氏の一族にして容貌魁偉膂力あり。櫻井驛にて新田義貞の室勾當内侍が難儀に遭へる

を見て之を救ひ、自ら内侍の駕籠に乗りて、大森盛長の宅に行き盛長を追ひ拂ふ。後、内侍等が三種の神器を捧持して吉野に至る途中、坊門宰相清忠等之を路に要して奪はんとするに會ひ、源秀乃ち清忠を追うて之を斬る。

勾當内侍

救命によりて新田義貞の室となる。坊門宰相清忠に搦められて大森盛長の宅に送らるゝ途中、櫻

井驛にて和田源秀に救はる。後に小山田太郎高家の首を新田義貞と稱して梟せる場に狂女となつて來り、また三種の神器を捧持して吉野に至る途に、坊門清忠に要撃せられしも和田源秀に救はる。

小山田太郎高家

足利尊氏に仕へ、怒りに觸れて浪人となり貧困に生活す。其の妻新田義貞より鎧を惠まれ

て歸る。高家その鎧を著し、尊氏の軍に屬して出陣し、西の宮にて義貞と戦つて組伏せらる。義貞將に高家の

龜屋忠兵衛

大和國新口村の農夫勝木孫右衛門の子にして、大阪淡路町飛脚商龜屋の養子なり。大阪新町遊

郭龜屋の遊女梅川と馴染み、之を落籍せんとして、丹波屋八右衛門の爲替金五十兩を私消す。八右衛門爲替金の交附を迫るに及び、忠兵衛泣いて具に情實を告げ其の猶豫を懇請す。八右衛門之を諾す。忠兵衛の義母妙園はかかる事とは知らず、忠兵衛をして八右衛門に爲替金を渡さしめんとす。是に於て忠兵衛鬻水入を包み、小判金の如く見せてこれを渡す。八右衛門熟忠兵衛の身の行末を案じ、まづ遊女をして忠兵衛を疎ましめんとし、新町遊郭越後屋に赴きて鬻水入を示し、忠兵衛の窮狀を揚言して罵詈す。此の時忠兵衛藏屋敷の侍の委託金三百兩を懐にして越後屋に來り、外に立聞きして大いに怒り、八右衛門と口論して五十兩を投付け、梅川をも落籍して郷里新口村に伴ひ、舊友忠三郎の宅に立寄る。時に捕吏の追求急なるを聞き、御所街道に遁走せんとして途に捕縛せらる。

丹波屋八右衛門

龜屋忠兵衛の條に述ぶ。

勝木孫右衛門

大和國新口村の農夫にして忠兵衛の父なり。

まゝん

龜屋忠兵衛の飯焚女なり。

梅川

大阪新町遊郭龜屋の抱妓なり。龜屋忠兵衛と馴染む。忠兵衛花屋敷の侍の委託金三百兩を横領して

梅川を落籍す。梅川一時喜びしが、其の請出金が委託金なりしを知るに至つて、深く嘆きながら忠兵衛に連れられて大和國新口村に赴き、忠三郎の家に立寄る。折しも忠兵衛の父孫右衛門鎌田村の寺院に參詣する途中、下駄の緒を切つて泥田に轉び込みたるを見、走り行きて懇に勞る。孫右衛門その様子を熟視して梅川なるを察

霧の生みし子を養ひ、夕霧を請出して其の乳母たらしめんとして成らず。かくて後に夕霧の病革る際金を贈りて之を請出さんとす。

夕霧 大阪新町九軒町の遊郭扇屋の名妓なり。藤屋伊左衛門と馴染みて源之介を生む。伊左衛門落魄するに及び、夕霧乃ち源之介を平岡左近の胤なりと稱して左近に養はしむ。左近の妻雪が夕霧を請出して源之介の乳母となさんとして、源之介は伊左衛門の子なること發覺し、源之介と共に左近の邸を放逐せられて扇屋に復歸す。夕霧病篤し。伊左衛門、源之介を伴ひて扇屋に夕霧を見舞ふ。此の時伊左衛門の母妙順金二千兩を贈りて夕霧を請出す。

扇屋了空 大阪新町九軒町の遊郭扇屋の主人にして、名妓夕霧の抱主なり。夕霧病篤き際、藤屋伊左衛門の母妙順及び平岡左近の妻雪より夕霧を請出さんとして金を送り來る。了空其の金を私せずして夕霧に與ふ。

忠兵衛
梅川 冥途の飛脚

伊兵衛 大阪淡路町飛脚商龜屋忠兵衛の手代なり。

清 大阪新町遊郭越後屋の女主人なり。

忠三郎 大和國新口村の農夫にして、龜屋忠兵衛の故朋輩なり。忠兵衛、梅川相伴ひて大阪を脱走して、忠三郎の留守中其の家に立寄る。忠三郎歸宅して兩人を見、捕吏の兩人を追求すること急なるを告げ、兩人をして直に御所街道へ遁走せしむ。

藤屋伊左衛門

大阪新町九軒町扇屋の名妓夕霧と馴染みて豪遊を極め、七百貫の借財を負ひ、家を放逐せられて落魄す。阿波の士平岡左近の妻雪男装して、井筒屋に夕霧を招き癡態をなす。此の時伊左衛門鄰室にありて、この體を見怒つて夕霧を罵詈す。夕霧、雪に落籍せらるゝや、伊左衛門は夕霧の昇夫となつて我が子の源之介に逢ふ。夕霧扇屋に戻つて病革るや、伊左衛門は源之介を伴ひ、扇屋の門前にて聞の山の唱歌を唄うて夕霧と逢ふ。

吉田屋喜左衛門

新町九軒町吉田屋の主人なり。藤屋伊左衛門落魄して來りしを優遇す。扇屋の名妓夕霧が平岡左近に請出さるゝ約なるや、夕霧を連れて左近の宅に届けしも約破れ、夕霧を連れて扇屋に歸る。

平岡左近

阿波の藩士なり。大阪上本町に別宅を構へ、九軒町扇屋の名妓夕霧を慕うて屢之を井筒屋に揚げ、夕霧の子の源之介を我が子と信じて之を引取り、遂に夕霧を請出して其の乳母たらしめしが、源之介は伊左衛門の胤なること發覺するや、夕霧、源之介を放逐す。

たけ

阿波の士平岡左近の下婢なり。奴の種右衛門と契り、夫の放埒を忍んで親切を盡すを左近の室に聞かれ、其の心をめでられて錢百匹を惠まる。

梅庵

醫師なり。扇屋の名妓夕霧の病氣を診察し、病篤くして醫藥も效なきを語る。

妙順

藤屋伊左衛門の母なり。伊左衛門の馴染める扇屋の名妓夕霧の病氣革ると聞き、金二千兩を贈りて之を請出し、かつ見舞に行く。

雪

阿波の士平岡左近の妻なり。男装し左近と名乗つて、扇屋の名妓夕霧を井筒屋に揚げて其の心を試し、夕

は姨の内大阪北野鐵鋸餅屋三郎兵衛方へ身を寄せしが、こゝも家運衰へ剩へ姨病氣となる。こかん、姨を救はんとして身を賣り、堀江の色茶屋に勤め、轉じて曾根崎新地平野屋の遊女となり、鍛冶職大文字屋の手代平兵衛と馴染む。折しも國元よりこかんを取戻さんとして使者來る。是においてこかん、平兵衛と別るゝを悲しみ、平兵衛に請出されんとして得ず、身の不遇を歎き、國元の使者和田傳内及び姨に暗に別れを告げ、深夜平兵衛と共に走り出て、神明宮附近の藍畑にて情死す。

和田傳内

播磨の人にして幼名を石松と云ひ、こかんの乳兄妹なり。こかんを連れ歸らんとして大阪に來り、こかんが堂島新地平野屋の遊女となれるを聞き、和泉屋にこれを招き、こかんの歸國を嫌ふを諫めて意見す。

平兵衛

大阪鍛冶職大文字屋利右衛門の弟子なり。堂島新地平野屋の遊女こかんと馴染む。ある日大文字屋の内儀等と北野不動に詣で、堂島新地の遊郭見物の案内して歸る。折しもこかんの伯母來れるに遇ひ、國元よりこかんを連れ歸らんとして來れる者ある由を聞き、早くこかんを請出さんとして、穢多より請合ひたる雪踏の裏金を調べて、其の代金を身請金にせんとせしを、主人より拒絶せられ争うて放逐せらる。是に於てこかに逢ひて共に死を決し、夜中神明宮附近藍畑に走つて情死す。

大文字屋利右衛門

大坂の鍛冶職なり。手代平兵衛かねての惡所狂ひを知つて案ぜる際、平兵衛が穢多の雪踏の裏金を請合へるを怒つて之を放逐す。

夕霧阿波鳴渡

於てきさ竊かに姉の家を脱け出て二郎兵衛と會し、相共に今宮惠比須森に走つて情死す。年二十七。

二郎兵衛 菱屋の手代なり。同家のお針女きさと相愛す。菱屋の別家由兵衛、きさに横戀慕し、きさの親を

して娘を由兵衛に與へんとの證文を作らしむ。きさ、二郎兵衛この證文を奪はんとし、主人に灼灸する間に主人の鍵を奪うて、戸棚に藏めたる證文を破り、由兵衛に見付けられて難儀に遭ひしを、菱屋の隠居貞法の説諭によつて改心し、破りし證文をよく見れば、七貫五百目の家實證文なるに當惑して死を決し、おきさと共に今宮惠比須の森に走つて縊死を遂ぐ。行年二十一。

菱屋四郎右衛門 大阪本町新物店菱屋の主人なり。

太郎三郎 三田村の農夫にして、菱屋の下女おきさの父なり。

貞法 菱屋の隠居なり。

澀川卜庵 菱屋の主人四郎右衛門に灼灸す。

由兵衛 大阪安堂寺町菱屋別家の主人なり。菱屋のお針女きさを戀慕す。嘗て大川に舟遊びせる際、菱屋の手代二郎兵衛に礫石を投げ付けられて怒り、二郎兵衛を殴打せんとして過つて侍に無禮を加へ、侍よりいたく殴打せらる。きさ二郎兵衛の愛を割かんとして、遂に兩人をして情死せしむ。

心中刃は氷の朔日

こかん 幼名をおつやと云ふ。父は播州鷹匠頭に奉公せしが、鷹を逃したる罪によつて浪人となり、こかん

惣兵衛

江戸屋勝二郎の手代なり。主人の放埒に乗じて許多の金を騙著し、忠義の手代新七を放逐せしが、遂に悪事をたくらみしこと露顯し、官より其の一味の徒と共に粟田口にて刑せらる。

太郎左衛門

大阪新町井筒屋の主人なり。茨木屋の太夫吾妻を連れて八幡に赴く途中、江戸屋勝二郎追放せらるゝに遇ふ。是に於て吾妻の身請金二百兩の不足を引請けて吾妻を勝二郎に渡す。

仁三郎

奈良の遊郭吉田屋の主人なり。藤五郎の爲に吾妻を請出す周旋し、吾妻に腰刀の身を奪はれたるを氣付かず。

お半

江戸屋勝二郎の手代新七の妻なり。勝二郎の豪奢放逸を諫めて用ゐられず。爲に深く主人の身を憂慮し病を得て死す。

龍田の藤

實名を藤五郎と云ひ、新七の弟なり。遊女吾妻を請出して勝二郎に與へんとして吾妻に刺殺さる。

妙慶

奈良の遊郭吉田屋の主人仁三郎の母なり。遊女吾妻が客の藤を殺さんとして夜中目をさませるを、其の心を知らずして來つて話し掛く。

二郎兵衛
おきさ
今宮心中

きさ

大阪本町新物店菱屋のお針女なり。同家の手代二郎兵衛と相思の仲となる。菱屋の別家の由兵衛もきさに懸想す。きさ、二郎兵衛が主人の鍵を盗み、きさの父がきさを由兵衛に與へんとの證文を奪はんとして

戸棚を明けたるを由兵衛に見付けられて鬨著を起し、きさ悪名を負ひ主家を出されて姉の所に預けらる。是に

の煙草を吸付けて清十郎に吞ませ、清十郎の自害を見て、捕吏の槍を奪うて咽喉を突きしかども死せず。尼となつて清十郎の菩提を弔ふ。

淀鯉出世瀧徳

あづま

大阪新町茨木屋の太夫なり。八幡の富豪江戸屋勝二郎に落籍せられ、井筒屋太郎左衛門に連れられて八幡に行く途中、勝二郎官より追放せらるゝに遇ふ。太郎左衛門乃ち吾妻の身請金二百兩の不足を引請けて吾妻を勝二郎に渡す。これより夫婦奈良に落ち行き、吾妻は太郎左衛門に二百兩を支拂はんため再び遊女となり、龍田の藤五郎に落籍せられんとするを嫉ひ、藤五郎を刺殺して二百兩を奪ひしが、忽ち露顯して大騒ぎとなりしを、藤五郎の兄新七の執成しによつて事なきを得たり。

江戸屋勝二郎

八幡の富豪なりしが、遊女吾妻に馴染みて豪遊を極め、悪手代惣兵衛を信任し、吾妻を請出すことより滅亡の禍機をなして、官より追放せられ、吾妻と共に奈良に落ち憂目を見しも、遂に舊手代新七夫婦等の忠義によつて救はれ、再び家を興すに至る。

紀太夫

八幡の神主なり。早飛脚を以て江戸屋勝二郎追放の罪赦されたるを本人に通知す。

新七

江戸屋勝二郎の手代なり。主人の豪奢放逸を諫め、同僚の惣兵衛に陥れられて追出さる。其の後も屢勝二郎を諫めて用ゐられず。勝二郎資産を蕩盡して官より追放され奈良に落ち行くや、新七忠勤を怠らず。

官新七の忠勤に感じて勝二郎の罪を救す。

りて清十郎を陥れ、清十郎がお夏より借りたる金を奪はんとする奸策を談合せしが、この夜清十郎に殺さる。
佐治右衛門 和泉國水間の里の農夫にして清十郎の父なり。娘おしゆん及び清十郎許嫁の女おさんを伴ひて

大阪見物に出で、清十郎の相手代勘十郎に騙されて、清十郎の主人の娘お夏の嫁入道具の發送を差止む。清十郎これが爲に主人の嫌疑を受け、罪を負うて主家を放逐せられ、捕吏に縛されて刑場に引出さる。佐治右衛門其の場に来つて勘十郎の罪を明らかにす。

おさん 清十郎の許嫁の女なり。清十郎罪を犯して失踪するや、おさん比丘尼となりて清十郎を尋ね出でて刑場に逢ふ。

おしゆん 佐治右衛門の娘にして清十郎の妹なり。清十郎罪を犯して失踪するや、おしゆん比丘尼となりて清十郎の行方を尋ね、清十郎の刑せらるゝ場に巡り逢ふ。

清十郎 佐治右衛門の子なり。但馬屋九左衛門の手代となり、主人の娘お夏と情交を結び、友手代の勘十郎及び源十郎の奸策に陥れられ、冤罪を負うて主家を放逐せらる。清十郎悲憤に堪へず、勘十郎を刺さんとして誤つて源十郎を殺し、脱走して長崎にて捕へられ、刑場に引出されたる際、お夏の來れるを見て喫煙の火を貰ひ、煙管にて咽喉を突破りて自殺す。行年二十五。

お夏 但馬屋九左衛門の娘なり。龍野の某家に婚約あり。然るに手代の清十郎を愛して龍野に嫁するを青せず。清十郎主家を放逐せらるゝや、お夏狂亂となり、清十郎の跡を慕ひて家を出で、熊野修行者となつて清十郎の許嫁の女おさん等に遇ひ、相共に清十郎の刑場に赴き、埒外に狂奔して死を共にせんことを請ひ、一服

本田彌三左衛門 あつと 東の高家入開殿の奥家老なり。丹波領主山留木侯の女しらべの姫を迎へに來り、姫に陪從

して歸る途に、伊勢國關の宿にて馬追三吉竊盜して捕へらるゝや、しらべの姫の乳母滋野井の愁歎を察して三吉の罪を救す。

伊達與作 丹波領主山留木侯に仕へ、登用せられて奏者役番頭千三百石に取立てられ、侯の侍女滋野井と通

じて與之助を説く。後に江戸の邸に勤仕し、放蕩の爲に改易を命ぜられ、落魄して馬追となり、關宿の出女小萬と馴染み、馬方八藏と賭博し負けて喧嘩す。此の夜馬追兒三吉を教唆して、しらべの姫の金袋を奪はしめしが、三吉夜廻の侍に見付けられて捕へらる。此の時與作は三吉が我が子の與之助なるを知り、愁歎に暮れ小萬と共に死せんとして迷ひ出でしが、滋野井・しらべの姫君に救はれて士籍に復す。

おなつ
清十郎 五十年忌歌念佛

勘十郎 但馬屋の手代なり。相手代清十郎の父佐治右衛門を騙して、主人の娘お夏の嫁入道具の發送を差止めしめて、主人より預れる嫁入道具の支拂金を著服し、主人に讒訴して罪を清十郎に負はしむ。清十郎處刑の場に勘十郎の罪狀暴露して刑に處せらる。

但馬屋九左衛門 播州姫路本町米問屋の主人にしてお夏の父なり。手代清十郎がお夏と情交をむすべるを怒り、又悪手代勘十郎の言を信じ、遂に清十郎を放逐す。

源十郎 但馬屋の手代なり。相手代清十郎が主人の娘お夏と密通せるを相手代勘十郎に報告し、勘十郎と謀

笠屋與兵衛

長兵衛等に勧められて僧となり、助給と法名して大和平羣谷の庵室に籠り亡妻の菩提を弔ふ。

ある日幻に亡妻に逢うて物語をなし、目覺めて愁歎に暮れて遂に死を決し、大阪の伯父、伯母、在所の親に書置を残して自刃す。時は四月十七日にして行年二十二。

高野山 女人堂 心中 萬年草

祐辨律師

高野山南谷吉祥院の僧にして、寺小姓成田久米之介の念者なり。久米之介が雜賀屋のお梅と情交あること露顯するや、祐辨怒つて久米之介を毆打して放逐す。

お梅

神谷宿雜賀屋與次右衛門の女なり。成田久米之介と情交ありて、吉祥院の法印と久米之介とに渡すべき二通の手紙を九兵衛に託せしが、其の手違ひの破綻より、久米之介寺を放逐せらる。この日お梅は親の命によつて美濃屋作右衛門と祝言することとなり、久米之介もお梅も窮して、遂に陰曆二月七日の夜高野山女人堂の傍に情死す。行年十八。

岸和田の九兵衛

駕籠舁なり。雜賀屋お梅の書狀の使をなし、久米之介吉祥院を放逐せらるゝや、兩人相伴うて雜賀屋に來り、九兵衛諧謔を交へつゝ久米之介お梅を夫婦たらしむべきをいふ。

成田久米之介

成田武右衛門の子なり。十二歳の時鶏合の喧嘩より其の友伊吹卯之助を殺し、高野山に登りて南谷吉祥院の寺小姓となり、神谷宿雜賀屋のお梅と情を通ず。お梅の書面よりお梅との情交吉祥院の法印の知る所となり、祐辨律師及び伊吹千右衛門に毆打されて吉祥院を放逐せられ雜賀屋に來る。此の日お梅の親、

となし、お種が己の意に従はざる意趣にお種源右衛門の姦通を言ひ觸らす。

のら 小倉彦九郎の妹なり。彦九郎の妻お種が宮地源右衛門と姦通せるを語り、彦九郎に其の證を請られて、磯邊牀右衛門より得たる兩人の袂を出して之を示す。お種悔悟して自刃す。ゆら乃ち彦九郎等と連立ちて源右衛門を襲ひ、遁ぐるを追ひて堀川橋上に斬殺す。

あとお
ひ心中 卯月の潤色（緋縮緬卯月艶
よりつゞく）

お今 お龜の死口を寄せたることよりしてお今傳三郎の悪行暴露す。長兵衛の姉大いに怒り、杖を以てお今を毆打し、長兵衛に迫つてお今傳三郎を放逐せしむ。

笠屋お龜 伯母より死口を寄せられて、お今、傳三郎を痛罵し、與兵衛の身の上を頼む。またお龜の幽霊大和國平藁谷の庵室に助給を尋ねて物語す。

笠屋長兵衛 お今等と連立ちて養子與兵衛を河内なる其の親元に預けて歸る途に、神子町の梓巫女お辻の宅を訪うてお龜の口寄せを頼む。お龜乃ちお辻の口を藉りてお今等の悪行を語る。長兵衛の姉之を聽いて大いに怒り、長兵衛に迫りてお今等を放逐せしむ。

傳三郎 お龜の死口を寄せて、傳三郎等の悪事暴露するや、長兵衛の姉に毆打せられ、長兵衛より放逐せらる。

ふり お龜非業の死を遂げたる後、長兵衛の供して神子町を通り、お龜のことを思ひ出して泣く。

守中にその妻お種の不義ありしことを諷す。

お種 小倉彦九郎の妻なり。夫が江戸詰の留守中養子文六の鼓師匠宮地源右衛門を襲し、強飲して夜に及

ぶ。彦九郎の同役磯邊牀右衛門兼てお種に懇想す。この夜竊かに來つてお種を挑む。お種欺き明夜を約して歸らしむ。源右衛門鄰室にありて之を聞き、謠に託して諷刺す。お種愧ぢて源右衛門に他言せざらん事を請ひ、醉狂の過ちより不義に陥る。牀右衛門再び來つて兩人姦通の證を捉ふ。彦九郎歸國し妻の不義を傳聞して大いに怒る。お種悔悟して持佛堂に自刃す。

小倉彦九郎 因幡の藩士なり。江戸詰の留守中に妻お種、宮地源右衛門と姦通す。彦九郎歸國して之を聞知

し、妻を持佛堂の室に呼ぶ。お種悔悟して自刃す。彦九郎その止めを刺し、妹ゆら、養子文六、お種の妹お藤と共に女敵討に出で、源右衛門の宅に斬入り、遁ぐるを追ひて堀川の橋上に斬殺す。

お藤 小倉彦九郎の妻お種の妹なり。彦九郎の留守中お種宮地源右衛門と姦通す。お藤は姉の不義を彦九郎に聞知せられんことを憂ひ、自ら艶書を彦九郎に送り、姉を離別せしめて之を救はんとして成らず。お種悔悟して自刃するや、お藤は彦九郎と共に源右衛門の宅を襲ひ、其の遁ぐるを追うて堀川橋上に殺す。

文六 小倉彦九郎の養子なり。鼓を宮地源右衛門に學びしが、義母お種、源右衛門と姦通したる事露顯して自刃す。是に於て義父等と共に源右衛門の宅を襲ひ、其の逃ぐるを追ひ堀川橋上にて斬殺す。

磯部床右衛門 因幡の藩士なり。相役人小倉彦九郎の妻お種に懇想し、之を挑みて拒絕せらる。後刻再びお

種の父忠太夫と名乗つて來る。其の夜お種、宮地源右衛門と不義に陥る。床右衛門兩人の袂を奪うて不義の證

頼み、常に家内不和合のために胸を痛め、病へ傳三郎より挑まれて大いに怒り、身の不運を嘆きて夫と共に死を謀り、五月十七日の夜陰に乗じて家を出で、梅田堤に走つて死す。行年十五。

笠屋長兵衛 大阪北久太郎町古道具商なり。妾いまの言を信じて養子婿與兵衛を疎み離縁せんとす。これが爲に娘お龜死するに至る。

傳三郎 笠屋長兵衛の妾お今の弟なり。長兵衛の娘お龜と夫婦となつて、長兵衛の家督を奪はんとして奸策を廻らし、お龜の夫與兵衛を陥る。

ふり 笠屋長兵衛の下女なり。長兵衛の娘お龜の供して神子町黒格子辻の宅に立寄る。

笠屋與兵衛 笠屋長兵衛の女お龜の増養子なり。養父の妾お今及び其の弟傳三郎に窘められ、養父に悪まれて家出せしが、お龜を慕ひて立寄るを、長兵衛お今に見付けられて益悪まれ、遂にお龜と共に梅田堤に走り、情死せんとして妻は死し、己は里人に助けらる。

堀川波鼓

宮地源右衛門 京堀川下立賣に住み鼓の師匠なり。因幡の藩士小倉彦九郎の養子文六に鼓を教授し、彦九郎の妻お種と不義に陥り、かねてお種を横戀慕せる磯邊床右衛門の爲に言ひ觸らさる。後に彦九郎等の爲に堀川橋上にて女敵討に遭ふ。

政山三五平 小倉彦九郎の妹婿なり。彦九郎江戸詰を終へて歸國するや、三五平眞字を贈りて、彦九郎の留

難儀の身となるや、お島もともに憂ひ、市郎右衛門と最後の宴を近江屋に張り、歸途善次郎に遇うて怨言を述べ、天満屋に歸りて暗に別れを告げ、夜更けて市郎右衛門の戸外に咳する聲を聞き、窗より鏡を出して星影を映し、無言の中に心中を示し合うて自刃す。

介右衛門

長柄の百姓なり。報恩講の金を預り、懸硯の抽斗中に收めて其の鍵を置き忘る。後その金の無きに驚き、義子市郎右衛門が盗みたるものと早合點し、之を毆打して放逐す。

善次郎

市郎右衛門の弟なり。酒色に耽つて借財嵩み、其の返済に窮して父の預れる報恩講の金を盗み、其の罪を兄に嫁す。兄遂に自殺するや、我が身の非を悔いて兄の屍を納む。

お吉

長柄の農夫介右衛門の子にして、市郎右衛門の妹なり。天満屋の遊女お島より市郎右衛門に送られたる手紙を受取りて父に奪はる。

道具屋
おかめ 緋縮緬卯月栴

お今

大阪北久太郎町古道具商笠屋長兵衛の妾なり。弟傳三郎をして、長兵衛の息女お龜の婿養子たらしめ、よつて以て長兵衛の家督を奪はんとして、傳三郎と共にお龜の夫與兵衛を陥れ、長兵衛をして深く與兵衛を悪ましめたり。

お龜

古道具商笠屋長兵衛の女にして與兵衛の妻なり。與兵衛が舅の妾いま及び其の弟傳三郎にいぢめられて家出するや、お龜は夫の身を案じて大阪二十二社に詣で、神子町の梓巫女お辻の家に立寄つて夫の口寄を

修理之介正澄 土佐將監光信の門弟なり。元信の畫きたる虎生動せるを正澄その畫虎を抹殺し、光信より土

佐光澄の名を貰ふ。

浮世又平重起 土佐光信の弟子にして吃なり。家貧しく大津繪を畫きて口を糊す。土佐の名を望み光信に懇

請して拒絕せらる。又平失望して自害せんとし繪像を畫く。然るに其の繪石を穿つ。光信感じて光起の名を授く。又平また銀杏の前を助け、雲谷等と戦ひて之を破る。

心中二枚繪草紙

市郎右衛門

長柄の百姓介右衛門の義子なり。大阪規川新地天満屋の遊女お鳥と馴染む。ある日お鳥が明石

の貞と云ふ客に連れられ、舟に乗りて淨瑠璃を語る。市郎右衛門陸よりその舟の後を追ひ行くを貞に見咎められて罵詈せらる。かくて後親の預れる報恩講の金を盜める嫌疑を受け、遂に死を決して最後の宴を近江屋に張り、長柄の川邊に迷ひ行き、お鳥の靈魂と相行交ひつゝ自殺す。

明石の貞

大阪規川新地天満屋の遊女お鳥を伴うて芝居見物に行き、歸途舟に乗り、お鳥をして淨瑠璃を語

らしむ。お鳥の愛人市郎右衛門陸より其の舟の後を附け行くを見咎め、口論して之を辱む。

お鳥

大阪規川新地天満屋の遊女なり。長柄の百姓市郎右衛門と馴染む。嘗て明石の貞と云ふ客に連れら

れて芝居見物に行き、歸途舟に乗りて淨瑠璃を語る。市郎右衛門陸より其の舟を注視す。貞これを見咎めて市郎右衛門と一鬨者を起ししが、お鳥の斡旋によりて事なきを得たり。市郎右衛門弟善次郎の爲に冤罪を負うて

不破入道道犬 六角左京大夫頼賢の家老なり。頼賢の抱繪師雲谷等と黨を結んで、狩野四郎二郎及び名古屋山三春平を放逐す。春平浪人となつて道道犬の子件左衛門を京都鳥原遊郭の大門口に斬殺す。道道犬怒つて春平を竊盜殺人罪に訴へしが、却つて人を誣ふる罪に處せらる。

傳三郎 京都鳥原遊郭舞鶴屋の主人なり。名古屋山三春平が不破伴左衛門を斬つて捕吏の取調を受くる際、傳三郎は鶴老のお宮と共に春平を辯護して之を助く。又狩野元信祝言より五日後に其の宅を訪うてお宮の死を語つて悲しむ。

等 巖 六角左京大夫頼賢の抱繪師雲谷の弟子なり。雲谷と共に土佐又平を攻めて敗績す。

遠山 土佐將監光信の女にして幼名を光と云ふ。越前氣比の遊女となりて遠山と名乗る。狩野元信に逢うて奥州武隈の松を畫く祕傳を授け、かつ慇懃を通ず。遠山はかくて後諸方に流轉し、越前三國町にありては勝山と云ひ、伏見にては淺香山と云ひ、奈良の木辻にては三つ山と云ひ、京の鳥原にてはお宮と稱す。元信の恩人名古屋山三春平が不破伴左衛門をきり殺すや、お宮乃ち春平を辯護して殺人の罪を免れしむ。元信が六角左京大夫の妾腹の女銀杏の前と結婚するに及んで、お宮失戀して憂死し、其の魂魄留まつて元信と夫婦となり、靈魂相伴うて熊野權現に詣づ。

不破伴左衛門宗末 不破入道道犬の嫡子なり。父と謀りて狩野元信を放逐す。京都鳥原の遊女葛城を請出さんとし、大門口にて名古屋山三春平に斬殺さる。

藤袴 銀杏の前の侍女なり。五十餘歳の醜女なるが、狩野元信を慕ひて抱付く。

銀杏前 江州高島の館左京大夫頼賢妾腹の女なり。狩野四郎二郎元信の妻となる。

雅樂介 狩野四郎二郎元信の弟子なり。元信の敵雲谷と戦うて痛手を負ふ。

長谷部雲谷 江州高島の館左京大夫頼賢の抱繪師なり。狩野四郎二郎元信の畫才あるを嫉み、不破入道道犬等と黨を結び、四郎二郎を苦しめしが遂に流罪に處せらる。

葛城 京都鳥原の遊女なり。名古屋山三春平に請出されて其の妻となる。

名古屋山三春平 六角頼賢の家老なり。同役不破道犬の讒によりて浪人となり、京都鳥原の遊女葛城と馴染み、道犬の子の伴左衛門を大門口に斬りしが、傳三の同情によりて殺人犯の罪を免る。また頼賢妾腹の子銀杏の前を狩野四郎二郎に嫁約す。道犬其の黨雲谷と共に山三を訴へ、伴左衛門を殺して其の所持金三百兩を奪ひたりとなす。是に於て山三は伴左衛門を殺しし時に、其の所持金を屍の肺腑中に入れ置きしを取出して道犬に示す。爲に道犬却つて人を誣ふるの罪に處せらる。

狩野四郎二郎元信 狩野祐勢の嫡男なり。文龜年間天滿宮の御告げにより、奥州武隈の松を畫かんとして越前氣比浦に赴く。時に土佐將監光信の娘光遊女となり、遠山と名乗つてこの地に在り。元信、遠山に逢うて武隈の松の秘傳を授かり且之と契る。後、江州高島の館左京大夫頼賢に仕へしが、道犬、雲谷等に憎まれ、弟子雅樂介と共に遁れて又平の宅に潛む。頼賢妾腹の娘銀杏の前と婚約するや、光ために失戀して憂死し、其の魂一魄留まりて元信と契る。大永七年元信大嘗會の屏風を畫きて從四位下越前守に任ぜられ、光信を推舉して共に繪所に出仕す。

しめ、義將と稱して内に入る。

藤内四郎光治 藤内太郎家治の弟にして鼓の藝人なり。足利將軍義教に従ひて反臣赤沼父子を吉野城に攻めて軍功を立つ。

藤内二郎盛治 藤内太郎家治の弟なり。家貧しく、本阿彌清祐の刀を得んとし、清祐の女玉椿を唆して其の屋内に入り、賊名を負ひ妻の身賣金三十兩を與へて免るゝを得たり。後に斯波義將が琵琶姫と婚するを聞き、義將が敵の術中に陥らんとするを憂ひ、尋ね行きて面會を求むれば、義將と聞きしはその實我が妻の小婿なるに驚く。此の時赤沼の軍に襲はれ、盛治夫婦奮戦して之を退け、琵琶姫を伴ひて走る。かくて斯波義將に従つて赤沼父子を吉野城に攻めて滅ぼす。

足利義教 足利六代將軍なり。赤沼幸滿の逆心を覺らず、招かれて其の邸に行きて印判を預け、斯波義將に諫められて大いに怒る。幸滿反するや義教亡命して斯波義將等に救はる。

斯波左衛門義將 管領職を勤む。足利將軍義教の身を氣遣ひて赤沼幸滿を訪ひ、中川の幽靈に逢うて赤沼父子の逆臣を知り義教を諫む。義教大いに怒り細川勝秀に命じて義將を討たしむ。義將自刃せんとするも勝秀制して其の心事を聽き、相和して別る。後に義將、勝秀共に赤沼父子を攻めて之を誅す。

紵卷 足利義教の奥方の侍女なり。奥小姓一色久常と密通し、相共に屋根を傳ひて遁る。

傾城反魂香

小 晒 藤内二郎盛治の妻なり。夫を救ふ爲に金三十兩に身を賣り、男装して斯波義將と稱し、義將の許嫁

の女長也姫の所に行く。姫の兄之を疑つて斯波家の系圖を尋ぬ。小晒出鱈目を言散らして胡魔化す。時に盛治來つて義將に面會を求む。乃ち小晒出でて逢ふ。此の時赤沼の軍の襲撃に遭ひ、夫と共に奮闘して敵を退く。

藤内二郎武治 太鼓、鼓の藝人なり。兄盛治の意見に従はず、反臣赤沼幸滿に屬して斯波義將を古川權頭清氏の邸に攻めて捕縛せらる。後に前非を悔い、盛治と和して赤沼父子を攻む。

玉 椿 本阿彌右衛門太郎清祐の娘なり。藤内二郎盛治に羽子を拾はれて話し合ひ、盛治に名刀を得させんとし、之を屋内に引き入る。

中 川 足利義教御臺所の侍女にして、藤内太郎家治と懇勲を通ず。赤沼幸滿反心あり、中川を欺いて義教の刀を奪はしめて、中川を雪中に凍死せしむ。中川時に歳二十。乃ち幽霊となつて斯波義將及び家治に逢ひ、赤沼の反心及び悲惨なりし己が最期の情を告ぐ。後に又中川の幽霊出でて、赤沼父子を引き立てて義教の前に突き出す。

一色大炊介久常 足利義教の奥小姓を勤め、御臺所の侍女紵卷と密通して赤沼幸滿に見付けられ、幸滿これを見通す代りに藤内太郎家治の持てる小水龍といふ笛を折るやう頼まれて、家治の手にせる笛を折りたる後、家治に赤沼が反心を懐けるを語る。後に義教にも赤沼にも疑はれ自殺せんとして、鞘を割れば一通の書出づ。亡父の筆蹟にて己は藤内五郎忠治といふ者なるを記したり。

琵琶君 古川權頭清氏の女なり。斯波左衛門義將を戀慕して病となる。清氏乃ち藤内二郎盛治の妻を男装せ

密會し、互に身の上を嘆けるをお房の抱主に悟られて、火燵責めの苦を受けて益世をはかなみ、お房と共に出奔し、高津上鹽町大佛殿勸進所にて情死す。

お房 大阪六軒町の娼家重井筒屋の遊女なり。紺屋徳兵衛と馴染み、親に送るべき金の調達を頼み、徳兵衛の家に行きて、口入業治右衛門に會ひて、徳兵衛に丁銀四百目を貸さしめて歸り、朋輩と火廻の戯をなせる際飛脚來る。房未だ託すべき金を徳兵衛より受取らずして苦悶す。後に徳兵衛來つて、互に身の上を嘆きたるを抱主に覺られて火燵責めの苦を受け、徳兵衛と共に高津上鹽町大佛殿勸進所に走つて情死す。

雪女五枚羽子板

藤内太郎家治 斯波左衛門義將の家來にして笛に妙を得たり。北山御所の門前に立てる際俄に一色大炊介久常に笛を切らる。後に義將に陪して赤沼幸滿の家に行き、計らずも妻中川の幽靈に遇ふ。赤沼父子反するや、主と共に之を吉野城に攻めて功を立つ。

赤沼前司入道幸滿 節分の夜將軍足利義教を饜して其の印判を奪ひ、又管領斯波義將を罪に陥れん爲に、一色大炊介に命じて義將の家來藤内太郎の携へたる笛を義教の名笛小水龍と誤信して之を折らしめ、又藤内太郎の妻中川を欺きて義教の太刀を盗ましめ、遂に反して兵を擧げしが、斯波義將等と戦ひ敗れて滅ぶ。

細川右馬丞勝秀 足利義教の命によつて斯波義將の討手に向ひしが、義將の心事を聞いて深く感じ相和して別る。後に赤沼幸滿反旗を擧ぐるに及び、乃ち義將と共に赤沼父子を攻めて之を誅す。

に比丘尼となつて隣摩に下り、芭蕉布商琉球屋に來り、源五兵衛に刀を投げられて怪我す。琉球屋の娘お萬が源五兵衛の後を追うて裏堀を越ゆる際、帶松枝に懸りてぶらさがる。お蘭乃ち布を松枝に投懸けて之を助く。

心中重井筒

小一郎

萬年町紺屋徳兵衛お辰の子なり。お辰が小一郎に跡の髪を被せて寐せれば、舅宗徳それを見て徳兵衛と誤り、また徳兵衛はお辰の情夫と思つて引据うれば、奴天窓を振りながら母様怖いと泣く。

三太郎

紺屋徳兵衛の手代なり。徳兵衛の馴染の遊女房より小粒銀一つを貰うて、房の來れるを口外せざるを誓ひ、また徳兵衛の女房辰より銀を貰つて用命を聽く。

吉文字屋宗徳

紺屋徳兵衛の義舅なり。口入業治右衛門の通知によつて徳兵衛夫妻が借金せしことを知り、怒つて徳兵衛の宅を訪ひ、お辰に會して借金の理由を詰問す。

お辰

大阪萬年町紺屋の女にして徳兵衛の妻なり。子を伴つて鎗屋町なる姉を訪うて歸れば、夫は留守にして懸硯明けたる儘に夫婦の印判取散らしてあるに驚ける折しも、舅來つて口入業治右衛門より借金したる理由を詰問す。お辰良人の悪性を押包み體よく誤魔化して歸らしめ、夫の歸るを待受け其の改悛を促して泣く。この夜夫出でて歸らねば、或は馴染遊女の房と情死もやせんと案じて其の行方を尋ね出づ。

紺屋徳兵衛

大阪萬年町紺屋の入婿なり。遊女お房に馴染み、お房の難を救はんとして堀江の口入業治右衛門より丁銀四百目を借りしも、妻の貞實に感じ我が身の非を謝してその金を妻に渡し、井筒屋に行きてお房と

を教へ、身は女中部屋に入りたる科によつて放逐せられ、薩摩に歸りて事介と替名し、芭蕉布屋の丁稚となりておまんと關係を續けしが、おまんの繼母に追出さる。おまん源五兵衛を尋ね來り、おまんの繼母も後を追うて來り、おまんを連れ歸らんとす。源五兵衛怒つておまんの繼母に斬付け、また誤つておまんをも斬り、自らも割腹せしが、笹野三五兵衛に救はる。

小 萬

肥後熊本の上笹野三五兵衛と婚約ありしが、三五兵衛病死せりと聞いて國を出で、但馬城主の京都の邸に勤仕し、侍女の林を我が夫の變装せるものとは知る由もなかりしが、偶菱川源五兵衛を挑みしことより引いて林の我が夫たるを知るに至る。後に夫と共に源五兵衛を尋ねて薩摩に下る。

笹野三五兵衛

肥後熊本の上なり。幼時父武州の色里にて石子久彌に殺さる。三五兵衛長じて之を知り、父の仇を討たん爲、女装して但馬城主の京都の邸に住込んで小萬の侍女となる。ある日菱川源五兵衛と癡情の喧嘩よりして久彌の居所を教へられ、親の敵を討取るを得て、其の禮を述べんとして薩摩に下つて源五兵衛を訪ふ。折しも源五兵衛切腹して傷を負へる際なりしかば、助けて名醫の許に連れ行く。

お 萬

鹿兒島濱の町芭蕉布屋新兵衛の女なり。菱川源五兵衛と懇勲を通ず。お萬の繼母これを知つて他に嫁せしめんとす。お萬乃ち脱走して裏塀を越ゆる際、帶松枝に懸りて吊下る。お蘭これを見てお萬を助く。かくて後お萬源五兵衛相逢へる際、繼母來つて喧嘩となり、お萬傷を負ふ。

四十平

但馬城主の京都の邸に仕へ、中間頭の寄親となる。

お 蘭

但馬城主の京都の邸に仕へてお櫛上げを勤む。ある夜小萬の媒介によつて菱川源五兵衛と契る。後

平次に銀二貫目を詐取せられ、かつ罵詈雑言打されたるを聞いて復讐せんとす。この時九兵次も天満屋に来つて徳兵衛を罵詈雑言して歸途、印判のことより徳兵衛より銀二貫目を詐取したることの露見せんことを嘆きしを、久右衛門竊かに其の背後にありて聴き、直に聲を掛け匕首を突付けて其の言を確め、殿打して代官所に渡す。

平野屋徳兵衛

大阪内本町醬油商平野屋久右衛門の手代なり。主人は徳兵衛の叔父にして、徳兵衛に妻の姪を娶らせて家業を譲らんとし、銀二貫目を徳兵衛の母に與へて其の婚約の證とす。然るに徳兵衛は規川遊郭天満屋のお初と馴染みて叔父の意に従はず。婚約の證銀二貫目を主人に返済せんとして母より請取りしも、悪友油屋九平次に欺かれて奪はれたる上、罵詈雑言打せられて憤懣に堪へず、お初と共に身の不幸を悲しんで曾根崎の森に情死す。行年二十五。

お初

大阪規川天満屋の遊女なり。田舎客に連れられて大阪三十三番の觀音を廻り、生玉社の出茶屋にて愛人平野屋徳兵衛に逢ふ。折しも九平次來つて徳兵衛と喧嘩す。お初は徳兵衛の身を思ひ跪けども、強ひて駕籠に入れられて歸る。朋輩妓等お初に徳兵衛の悪評を語る。此の時徳兵衛來つてお初と逢ふ。九兵次も來り徳兵衛を罵詈雑言す。こゝに於てお初愛人の爲に覺悟を定め、其の夜相共に曾根崎の森に情死す。行年十九。

源五兵衛
おまん 薩摩歌

菱川源五兵衛

薩摩者なり。同所來迎院の小僧となり、濱の町芭蕉布屋の娘おまんと通じ、罪を得て京上り、但馬城主の京都の邸に奉公し、勤仕女の小萬に挑まれたるより事起り、笹野三五兵衛にその父の仇の居所

熊源太と戦つて淡路に落ち、中山寺の眞如上人を頼んで光明丸をその弟子となす。後また中山寺を訪うて光明丸の放埒を意見せし爲、光明丸出奔するや其の行方を尋ね、飛田の墓地にて孝房等と邂逅す。

法明上人

藤原民部少輔孝房の末子なり。母横死して其の肋の疵より生まれ出で、眞如上人の弟子となり、叔父の教信に従ひて七墓を巡り、飛田の墓地にて兄眞光の縊死を發見し、教信と協力して之を蘇生せしむ。後に賀古莊の寺に住して亡母亡姉の追福を祈る。

宮城野

京都九條の遊女なり。藤原民部少輔孝房と馴染む。神崎に鞍替へ、孝房の父教孝の配流せらるゝを目撃し、其の罪を贖はん爲に眞光を唆して金を得んとす。眞光これが爲に失踪するに至り、宮城野は遊郭を脱走し、孝房と共に眞光の行方を尋ねて飛田の墓所を彷徨す。

印南彌七郎

賀古川民部少輔藤原孝房の家士なり。主と共に京に出でしが、賀古に歸つて主が熊野浦にて難船に遭ひ溺死したる由を報告す。かくて後熊源太兄弟と闘つて之を搦む。

曾根崎心中

油屋九平次

平野屋徳兵衛を欺きて銀二貫目を奪ふ。生玉社の出茶屋にて徳兵衛に逢うて其の返済を督促せられ、徳兵衛を罵詈毆打して逃ぐ。後に天満屋より歸る途にて、徳兵衛の叔父久右衛門の爲に毆打され、かつ代官所に訴へらる。

平野屋九右衛門

徳兵衛の叔父なり。徳兵衛を尋ねて天満屋に來り、遊女お初に逢うて徳兵衛がその悪友九

教信等に邂逅す。此の時賀古郡主より大内献上の禰柱を引き來ることなどありて、孝房遂に本領安堵となり、賀古の莊に伽藍を建立す。

高梨政太郎友風

高梨吉内左衛門友重の養子なり。友重が坊門中納言資雄を殺害するや、友風は養父が敵討

に遣はんことを慮り、其の身代りにならんとして友重と稱し、櫻塚に赴ける際、資雄の子の教信より敵討の聲を掛けられ、敵より病身を討つは本意にあらずとて、全快の上勝負を決せんことを約して別る。ある日中務秀光が熊源太等に追撃せられて遁れ來り、女子供を隠まはれんことを懇請せられ、これを拒絶せしが、熊源太等の暴戻を見るに忍びず、秀光に助太刀せんとして病身の爲に斃れ、中山寺に葬送せらるゝ途中、熊源太等の爲に横死したる藤原孝房の室の亡魂その死骸に入る。

虎平次

熊源太の弟なり。兄と共に藤原孝房の室及び中務秀光等の淡路の方へ落ち行くを追撃し、孝房の室を殺害するなど悪行多かりしが、遂に印南彌七郎に搦めらる。

藤原花二郎教信

坊門中納言資雄の子なり。幼時母に連れられて藤原教孝に養はる。長じて實父は高梨吉内

左衛門友重に殺されたるを聞き、亡父の仇を報ぜん爲變装して祭文を語り、櫻塚にて友重と名乗るものに逢ひしが、その病身なるを見て、全快の上勝負を決せんことを約して別る。後に中山寺に行きて、友風の死骸に我が嫂の亡魂の入り替れるを知り、人生の無常を歎きて發心し、嫂の末子を佛門に入れて補佐し、七墓地を巡りて飛田墓所に緘死せる甥眞光を蘇生せしめ、賀古の莊に寺院を建てて廻向の大導師となる。

中務秀光

藤原教孝の重臣なり。教孝の長男孝房の室及び其の子光明丸が蜘蛛に害せられんとするを救ひ、

卯花

播州總郡代賀古川前主典藤原教孝の重臣中務秀光の妻なり。教孝の孫光明丸を奪ひて難し機嫌を取れる際、光明丸の妹千壽姫に化けたる蜘蛛に噛まれて死し、後に教信上人の廻向によりて成佛の姿を現す。

熊源太

藤原教孝の後妻の弟なり。教孝の嫡子民部少輔孝房の僕須藤磨藏を殺し、孝房の室及び中務秀光等の淡路をさして落ち行くを追撃して孝房の室を害せしが、後遂に印南彌七郎に搦めらる。

光明丸

播州賀古川の民部少輔孝房の子なり。祖母に化けたる蜘蛛及び熊源太の爲に、將に殺されんとし、漸く免れて中山寺に赴き、眞如上人の弟子となりて眞光と法名す。人に騙されて遊女宮城野を菩薩と信じて、閻浮檀金の観音像を奪ひて宮城野に與へんとし、眞如上人に見付けられ、深く恥ぢて飛田墓所に縊死す。時に齡十三。然るに叔父教信の信心堅固の功德によつて蘇生す。

須磨藏

播州賀古川民部少輔藤原孝房の僕なり。孝房の繼母が孝房夫妻及び其の子の死を雲が洞に祈るを目撃して、これを孝房の異母弟教信に語る。かくて後變化及び熊源太と力戦して死し、其の念力胴に留まりて變化を退治す。

千壽姫

藤原孝房の子なり。祖母に化けたる蜘蛛に呑込まれ、死して寒の河原に遊ぶ。後、叔父教信及び弟の法明上人の廻向の功德によつて極樂に往生し、母に抱かれて朦朧の姿を現す。

藤原民部少輔孝房

播州の總郡代賀古前令吏藤原教孝の長男なり。大内修造の命を蒙つて京に滞在中、遊女宮城野の色香に溺れて御普請料を浪費し、世には熊野浦に溺死せりと伴つて海人の苦屋に潛匿す。宮城野が神崎の遊女に轉ぜるを尋ね行きて、計らずも我が子の眞光の行方を尋ねる事となり、飛田の墓地を彷徨して弟の

蟬丸 延喜帝の第四皇子なり。琵琶に妙を得。木幡の里にて右大辨早廣の兵に襲撃せられ、千手入道父子の

忠勤によつて免る。蟬丸美男なりしかば、數多の女より戀慕され、うらみられもして盲目となり、逢坂山に棄てらる。ある日愛人直姫との情事を思ひ出して逢坂山の歌を詠じ、計らずも直姫及び人麿赤人の神靈に逢ふ。

早廣平定の後、蟬丸の北の方を供養す。是に於て女の怨靈去つて、蟬丸の兩眼忽ち開く。

千手太郎忠光 浪人して木幡の里に住し、狩獵に目を送る。ある日深草山にて免を射んとして、蟬丸の袖を

射たるを謝して其の臣となり、蟬丸の敵右大辨早廣と轉戦して功あり。辻談義に身を偷して早廣を殺す。

直姫 蟬丸と契りて子を生みて棄て、右大辨早廣の亂を避けて小幡の里千手入道の家に隠れ、早廣の襲撃

に遭ひしも、千手入道父子の忠勤によつて免る。蟬丸盲目となりて逢坂山に棄てられたるを直姫尋ね行きて之と逢ふ。

芭蕉 千手入道の女にして女院の水仕女なり。蟬丸に懸想し、蟬丸の愛人直姫を如みて宇治の橋姫社に丑

の時詣でをなし、三善清貫に見らる。後に父の家の門前にて清貫に斬らる。

右大辨早廣 蟬丸の室の兄なり。蟬丸を襲撃して千手入道を殺し、忠光と戦うて敗る。また逢坂山に蟬丸を

襲ひしが、遂に忠光に斬り殺さる。

中納言希世 延喜帝の繪旨を奉じ、三善清貫と共に歩いて蟬丸を逢坂に棄つ。

賀古教信七墓廻

横山三郎重次 小栗判官兼氏を悪んで之を縛す。兼氏怒つて縛繩を切る。是に於て重次驛馬鬼鹿毛をして兼氏を殺さしめんとして成らず、兼氏の館を訪うて之を毒殺す。後視兄を放逐し、藤澤寺に行きて蘇生したる兼氏を刺さんとして殺さる。

照手姫 横山郡司信久の娘なり。小栗判官兼氏と慇懃を通じ、兄三郎重次に殺されんとして鬼王に助けられ遁走し、美濃の宿萬屋長に買はれ、常陸小萩と名乗つて水仕女となる。或日藤澤上人の供養の車を挽きしが縁となりて兼氏と邂逅し、夫妻相伴うて藤澤寺に參詣す。

横山郡司信久 伊豆相模を領し、太郎次郎三郎照手更衣の三男二女あり。信久三郎の言を聽いて小栗判官兼氏を毒殺す。後三郎に放逐せられて前非を悔い、蘇生したる兼氏を藤澤寺を訪うて謝罪す。

山形兵衛 後藤左衛門國忠を殺さんとして小栗判官兼氏に妨げられ、兼氏を殺さんとして却つて殺さる。

蟬丸

喜藤太 博雅三位の僕なり。逢坂山にて蟬丸の敵右大辨早廣の軍と戦つて之を破る。

左衛門督二善清貴 蟬丸の愛姫直姫の行方を尋ねて宇治橋姫の森に至る。折しも蟬丸の北の方及び侍女芭蕉の前が直姫を妬みて、丑の時詣でして恠氣譁をなせるを見、千手入道を訪うて芭蕉の前を殺し、蟬丸と直姫とに出會ひたるを喜べる際、右大辨早廣の兵に襲撃せられ、千手入道父子と協力して敵を破る。蟬丸盲目となるや、宣旨を奉じて之を逢坂山に棄て、墨染の衣を着て念佛修行者となり、博雅三位の宅を訪うて直姫に逢ふ。

鬼 次 横山郡司信久の家士なり。主君の娘更衣姫の入水を見て主君の無情を恨み、兄鬼王と共に童變して、

藤澤上人の弟子となる。横山重次が小栗判官を藤澤寺に襲撃せし時、鬼次之と戦ふ。

鬼 王 横山郡司信久の家士なり。信久より其の娘照手姫を相模沖に沈むべき命を受け、竊かに姫をして逃

れしめしが、照手姫の妹更衣姫の入水を見て主君の無情を恨み、弟鬼次とともに童變して藤澤上人の弟子となる。横山重次が小栗判官を藤澤寺に襲撃せし時、鬼王之と戦ふ。

小栗判官兼氏 流人となりて相模にあり。義心を以て後藤左衛門國忠の危急を救ひ、横山郡司信久の女照手

姫と契りて、其の兄三郎重次と隙を生ず。國忠は兼氏の恩を感じ、妻を蟲賣に扮せしめ兼氏を手引して照手姫と契らしむ。重次等相謀り兼氏を驛馬鬼鹿毛に乗せて殺さんとして能はず、つひに兼氏及び其の家士池莊司を毒殺す。かくて後兼氏の靈上野が原の墓中より餓鬼となつて現はる。藤澤上人これを連れ歸つて熊野の藥湯に浴せしめ反魂の法を修す。また照手姫が信心の功德によつて、兼氏本復して本領安堵となり、照手姫と共に藤澤寺に參詣し、重次と戦つて之を殺す。

更衣姫 横山郡司信久の娘なり。姊照手姫の山雀を取逃したる爲、其の機嫌直しに小栗判官兼氏を姊に媒介

す。後に兄重次が姊を入水せしめたるを悲しみ、遂に海に投じて死す。

後藤左衛門國忠 親の敵山形兵衛を討たんとして、反討に遭うて危き場を小栗兼氏に救はる。國忠其の恩返

しに妻を蟲賣となし兼氏を手引して照手姫と契らしむ。横山三郎重次が兼氏を藤澤寺に襲撃せし時、國忠驅付けて重次と戦ふ。

二十八日の夜富士野の假屋に闖入して、亡父の仇工藤祐經を殺し、嘗て恩を受けたる龜菊の手にかゝらんとし
て、女装せる五郎丸に生捕られて刑に就く。

虎御前 大磯の遊女にして曾成祐成と契る。曾我兄弟が亡父の仇工藤祐經を殺して刑に就きしを禪師坊に知
らせんとして旅に出で、松江の里にて禪師坊召捕られたるを聞き、尼となつて祐成の菩提を弔ふ。

花野 曾我兄弟の下人鬼王の妹なり。新田四郎忠常に猛虎の生爪を贈つて、大磯の遊女虎御前の懐胎を見
遁すやう頼み込む。

海野小太郎行氏 源頼朝の臣なり。武藏坊辨慶の父辨眞と名乗る老入道を捕へ、其の賞として頼朝の名馬松

島月毛を得んとして新田忠常に妨げらる。また大磯の遊女虎の懐胎を詮議して忠常に誑さる。また鬼王兄弟及
び花野を捕へしも、曾我時致に誑されて皆免し、後に曾我二子の弟禪師坊を捕へて頼朝の前に引く。

朝比奈三郎義秀 新開荒四郎が、名馬松島月毛を牽きて新田忠常を訪ふ途に其の馬を奪ふ。忠常が頼朝に請
ひ、高名に代へて禪師坊を助けたる時、義秀喜んで松島月毛を忠常に返す。

源頼朝 曾我兄弟の神靈を拜し、其の社殿に掲げたる三十六歌仙の繪に就いて物語る。

當流小栗判官

池莊司 小栗判官兼氏の家士なり。兼氏と共に相模の配所に暮し、後に横山三郎重次の爲に兼氏と共に毒殺

せらる。行年十八。

百日曾我

總 菊 喜瀬川の遊女なり。富士裾野の狩場に招かれて、歸途曾我兄弟に逢うて狩場の様子を語り、曾我兄

弟をして工藤祐經を討たしむるやう便宜を圖る。

工藤一筋祐經 源頼朝の權臣なり。頼朝に従ひて富士裾野の狩に行き、建久四年五月二十八日の夜、曾我兄弟に其の寢所に斬り入られて殺さる。

曾我十郎祐成 新田忠常に逢うて嘗て虎御前が恩に預りたるを謝し、亡父の仇工藤祐經を殺したらば忠常の手にかゝりて死すべきを約し、建久四年五月二十八日の夜遂に祐經を殺して忠常に殺さる。

少 將 假粧坂の遊女にして曾我時致と契る。時致が亡父の仇工藤祐經を討取らんとして富士裾野に赴きし後、枕邊に残せる書置を見て其の跡を追ふ。時致刑に就きし後、尼となつて時致の菩提を弔ふ。

禪師坊 曾我二子の弟なり。曾我二子が亡父の仇を報じたる後、禪師坊は海野小太郎行氏に召捕られ、母悲一歎に暮れしかば、即ち三部經を説きて之を悟し、忠常によつて死を救はる。

新田四郎忠常 虎御前の難を救ひ、富士野の狩に出でて大猪を刺し、曾我二子頼朝の狩屋に亂入の時祐成を斬り、その恩賞に代へて禪師坊の死を救ふ。

津藏入道 曾我兄弟の下人鬼王の父なり。海野小太郎行氏に捕へられ、伴つて熊野別當辨眞と稱す。

曾我五郎時致 傾城請狀を讀んで海野小太郎行氏を誑し、行氏より鬼王と花野とを取り戻す。建久四年五月

時平が日像の寺院を襲撃したる際、これと奮戦す。

大覺大僧正 近衛經忠公の子にして月光と云ふ。幼時兩親を失ひ繼母に疎まれ、嵯峨の大覺寺の僧となり、

日像の徳に感じて法華經の行者となる。或日鹽谷左京時平の爲に難に遭ひしも、法華經の功力によつて免れ、また日像と共に祈雨の修法をなして雨を降らし、叡感によつて大僧正の號を賜はる。

兒島二郎高則 備前の住人なり。嵯峨の奥に隱栖し、雨夜の前を保護し、日像の寺に參詣して、鹽谷時平と戦つて之を破り、尋いで高橋半平に欺かれて死せんとせしを、法華經の功力によつて難を免れ、日像等と佛法の問答をなし、妙法の不思議に感じて法華信者となる。

鹽谷左京時平 近衛家の養子となり、月光の師事せる寺院を襲撃して、兒島高則に敗られ、尋いで日像、月光等を播磨沖に沉めんとして成らず。また雨夜の前の己が意に従はざるを怒り、養母を弑して佛罰を受く。

日像上人 日蓮宗の高僧なり。月光を弟子となし、月光の臣平井兄弟をも佛道に歸依せしむ。嘗て時平に襲撃せられ、また半平に欺かれて死せんとせしを、妙法の功力によりて難を免れ、高則と佛法の問答をなして妙法の不思議を見せ、また救命により月光と共に祈雨の修法をなす。

高橋半平 鹽谷時平の意を受け、日像、月光等を播磨沖に沉めんとして成らず、佛罰を受けて溺死す。

平井大炊介森廣 近衛家の家人にして一角の兄なり。主君月光公のことより日像の弟子となり、智覺と法名す。鹽谷時平が日像の寺院を襲撃したる際、防戦して敵を退く。

出世景清

阿古屋 京都清水坂の遊女なり。景清と契りていや石、いや若を生む。景清に他に愛人あるを知つて嫉妬に燃

え兄十藏をして景清を訴人せしめしが、後に非を悔い、景清の獄舎に来て罪を謝し、三子を殺して自刃す。

憲七兵衛景清 平家滅亡後、落人となつて頼朝を狙ひしが、己が爲に愛人小野姫が慘酷なる拷問に遭へるを

聞き、乃ち出でて縛に就き、三條駟の刑場に引かれたる時、清水觀音その身代りに立ち給ふ。頼朝景清の罪を

赦して、日向國宮崎莊に封ず。是に於て自ら不具者となり、觀音經を讀誦して世を終ふ。

伊庭十藏廣近 頼朝の恩賞に與らんとして、景清を訴人せしが、遂に景清に殺さる。

江間小四郎義時 五百餘騎を率ゐて、景清を京の清水寺に襲撃す。

小野姫 熱田大宮司の女にして、景清の妻なり。梶原景季に捕へられて、景清の行方を白狀せしめんとして、

慘酷なる拷問にかけらる。

大覺大僧正御傳記

雨夜前 月光の異母妹なり。日像上人より法華經の功德を聽聞して尼となり、兒島高則の家に養はれしが、北

野にて時平に捕へられ、將に殺されんとせしも、法華經の靈驗によつて免る。

平井一角 近衛家の忠臣にして大炊介森廣の弟なり。日像上人に諭されて其の弟子となり、正覺と法名す。

上演人物解説

目次

標 題	解説	本文	標 題	解説	本文	標 題	解説	本文
出世景清	共	一	傾城反魂香	三七	三七三	心中刃は氷の朔日	八六	六五七
大覺僧正御傳記	共	三	心中二枚繪草紙	七六	四三二	夕霧阿波鳴渡	八九	六八九
百日曾我	六〇	五九	道具屋おかめ緋縮緬卯月栴	七七	四四三	忠兵衛梅川冥土の飛脚	九一	七二五
當流小栗判官	六一	一〇九	堀川波鼓	七六	四六五	吉野都女楠	九三	七四三
蟬丸	六三	一四一	あさおひ心中卯月の潤色	八〇	四九一	姫山姥	九五	七九七
賀古教信七墓廻	六四	一八一	高野山女人堂心中萬年草	八一	五二一	長町女腹切	九九	八四三
曾根崎心中	六七	三三五	丹波與作待夜の小室節	八三	五三四	傾城吉岡染	一〇一	八七一
源五兵衛おまん薩摩歌	六八	三三三	おなつ清十郎五十年忌歌念佛	八四	五七一	娥歌加留多	一〇四	九二一
心中重井筒	七〇	三九七	淀鯉出世瀧徳	八六	五九九	嵯峨天皇甘露雨	一〇九	九七五
雪女五枚羽子板	七一	三三一	二郎兵衛おきさ今宮心中	八七	六三九			

果物せりふなど、巢林子の詞藻は又なく美しい。

簡單なる解題を畢つて、最後に附記すべきは、本卷に添へたる『上演人物解説』、及び『註釋』は、樋口慶千代君の筆に成つたもので、其の他にも同君に負ふ所が少なからずある。猶巢林子の批評に就いては、下卷の解題に譲つてこゝにはこれを省く。

解 題 終

語』にある瀧口横笛の情事を脚色したもので、曲中には『小鳥盡し』『横笛道行』などがある。然し此の横笛は大堰川に入水もせで、末は目出度、小松内大臣より歸參の奉書、本領安堵の朱印を頂戴して、夫婦兄弟親子の奇縁、忠孝の徳、和歌の徳、神の威徳と、勸善懲惡の義を全うした目出たい作である。

嵯峨天皇甘露雨

正徳四年十月十五日より竹本座上演。筑後掾歿後初めての上演で、此の節の太夫は竹本頼母、内匠理太夫、竹本政太夫、豊竹萬太夫、竹本文太夫などであつた。

弘法大師と行敏僧都と祈雨の術較べで、大師の行法あらたかに、一天俄にかき曇り、平等一味の甘露の雨が沛然と降つて來るのである。大海原の王子の逆心、行敏僧都の加擔、それに従ふ惡臣右馬尉仲成に配するに、仲成の婿で忠臣の橘判官勝藤、節婦の花世、其の兄仲經などを以てして、操向きの舞臺の變化が著しく當時の見物人を喜ばせた事であらう。黄牛を吊して油を取るくだりなど、殊に出色の場面であつたと思はれる。『四國遍路』の名所讀込や、「山家なれども京近く振も會釋もよい女房の、肩に棒おく露がおく、在所はいづく、梅が畑とて香に勻ふ、物賣聲。」の

傾城吉岡染

正徳二年十一月二日より竹本座上演。巢林子六十歳の作。

豪賊石川五右衛門の釜煎の刑と憲法染とに基き、憲法染の創作者を因州の武士香春憲法とし、其の情人を傾城吉岡として、其の間に於ける波瀾と、五右衛門の義侠とを描いたものである。

憲法(兼房と書くのが正しからう)は吉岡氏で、劍道をもつて名を得てゐるが、べつに染法を創め、これを憲法染、或は吉岡染と云つたとの事であるが、劍道家と此の染家と同一人であつたかは疑はしい。西鶴の『日本永代藏』に、「風俗も自ら都めきて、新在家衆の衣裳をうつし、油屋絹の諸職をけんほう染の紋付。」とありて、寛永頃からあつた染で、黒茶染である。

歌舞伎では、延享二年春、大阪中村十藏座で、『昔形吉岡染』と題して上演し、其の後、安永五年には改作して、『けいせい布引山』と題して上演した。

娥歌加留多

正徳四年八月一日より竹本座上演。巢林子六十二歳の作、竹本筑後掾最後の語り物。『平家物語』

『外題年鑑』に元祿十三年正月上演とあるは誤りで、正徳二年、巢林子六十歳の作と思はれる。
元祿十一年十二月二十一日、大阪道修町刀屋の手代半七と、京都石垣町井筒屋の遊女お花との情死一件に、翌十二年にあつた長町の女腹切とを配合して脚色したものである。此の曲には例に依りて、お花半七道行の玲瓏たる名文が光彩陸離としてゐる。

長町女腹切

寶曆十四年五月、近松半二、竹本三郎兵衛の合作で、お花半七心中一件を『京羽二重娘氣質』と題して、竹本座が上演してゐる。歌舞伎では、寛延元年、江戸森田座で、『露時雨裳浪』、寶曆二
年秋、江戸中村座で、『お花半七笹結渡涉船』、同十一年五月、森田座で、『お花半七道行尾形船』、安政六年七
月、市村座で、『由色縁萩紫』が演ぜられてゐる。豊後節には、『雙紋刀の銘月』、富本節には、『笹
結渡涉船』、宮園節に『京羽二重娘氣質』、お花半七開帳場口舌の段』、『掛行燈』などがある。

なし。」「我が國の三つの寶のあらん限りは、國富み民も豊かにて、敵するもののあるべきか。」と虚空に妙なる託宣ありて、寶劍は盛長の頭を貫き、三種の神器の威徳を述べて、篇をむすんでゐる。尊王主義を闡明した淨瑠璃で、江戸時代の此の種のものとしては甚だ珍らしく、巢林子の識見の高きを見るに足りる。正閏を分たずして、「量仁親王に新帝の位を授け、後醍醐天皇は院の御所と仰ぎ、帝都は尊氏これをかため、吉野の都は義貞守護し奉れ。」との神敕は面白い。

嫗こもぢ 山やま 姥うば

正徳二年七月十五日より竹本座上演。時に巢林子六十歳。

謠曲の『山姥』を本とし、これに頼光と四天王との傳説を結びつけたもので、當時女形の名優として知られた萩野八重桐の舞臺風を其の中に取入れて、初めは其の役名を萩野屋八重桐と命名したが、後には山姥と名づけた。巢林子が操と歌舞伎とを調和せんとする工夫を偲ぶべきである。

此の作は後世歌舞伎に幾多の影響を與へてゐるが、山廻りの段は所作事として舞踊に取扱はれてゐる。一中節には『嫗山姥頼光道行』、常磐津節には『四天王大江山入』、『雪振袖山姥』、『有則戀重荷』、『紅葉袖名残錦繪』、『親子連枝鶯』、『極彩色山路曙』、『新負雪間の市川』、富本節には

近松巢林子は此の好題目を美化して、『封印切』は永く歌舞伎の見せ所となつた。本曲下之巻は例の名文にて婉曲自在の妙を極め、「借駕籠に日を送り、奈良の旅籠屋三輪の茶屋、五日三日夜を明し、二十日餘りに四十兩、遣ひ果して二分残る。」の文句は後世の改作淨瑠璃にも其の儘轉用されて人口に膾炙してゐる。正徳三年豊竹座にて再演の折、外題を『傾城二度笠』と改めた。

安永二年十二月、菅專助、若竹笛躬等が改作して、『けいせい戀飛脚』と題し、豊竹座にて上演した。之を添削して歌舞伎にて演出したのが、『戀飛脚大和往來』である。然し現在では近松の原作が其の儘に歌舞伎に脚色されて上演されてゐる。

一中節では『二度笠相合籠道行』、富本節では『道行戀飛脚』、宮園節では『梅川』などがある。

吉野都女楠

正徳元年九月十日より竹本座上演。巢林子五十九歳の作。

『太平記』に依りて、楠、新田、名和等忠臣の事蹟を脚色し、其の間に、大森彦七の悪逆、山田高家の忠節、勾當内侍、高家の妻の情愛を點綴し、後醍醐天皇の吉野潛幸、小楠公母子の守護警衛などありて、未段、新田、足利の和睦、兩皇統の合一にて、「天に二つの日なし、地に二人の王

同じく藤十郎の演じたものである。同三年、近松は操淨瑠璃に書き直して、『遊君二世相』と題した。又の名『夕霧三世相』とも云ふ。『夕霧阿波鳴渡』は、夕霧狂言の大成したものである。此の曲には『相の山』と云ふ美しい、大珠小珠、盤上を旋轉するやうな名文がある。

明和五年六月近松半二、竹田文吉等が改作して、『傾城阿波の鳴門』と題し、竹本座にて上演した。『夕霧筐の袂』『浪花文章夕霧塚』『夕タギり廓文章』等、種々の夕霧狂言がある。富本節の淨瑠璃では、『春夜障子梅』『道行菜種裳』、宮菌節では、『ゆかりの月見』などがある。

忠兵衛
梅川 冥途の飛脚

正徳元年三月、竹本座にて上演。巢林子五十九歳の時である。

寶永七年十二月、大阪淡路町の飛脚屋龜屋忠兵衛が新町槌屋の遊女梅川にうつゝを抜かした結果、西國方より送り來りたる三百兩の封印金を流用して獄に投ぜられ、久しからずして牢死し、梅川は剃髪して尼となり其の菩提を弔うたと云ふ事實に依りて脚色したものである。此のいきさつは一たび翌寶永八年正月、京都都萬太夫座にて、『けいせい九品淨土』と題して、歌舞伎に上演されたことがある。

寶永七年の作、巢林子五十八歳の時である。同年六月十六日より竹本座にて上演。

寶永七年六月一日の朝、曾根崎神明の森にて鍛冶屋平兵衛と北の新地平野屋の小勘とが情死を遂げたのを脚色したものである。

夕霧阿波鳴渡

寶永七年正月竹本座上演と傳へられてゐるが、正徳二年の作と覺しい。

大阪新町扇屋四郎兵衛方の抱へ夕霧は名妓の名が高くあつたが、延寶六年正月六日、無常の風に誘はれて、名花一朝にして散り失せたので、浪華の市中では知るも知らぬも惜しまぬものがなかつた。同年二月三日、大阪荒木與次郎座にて、『夕霧名残の正月』と云ふ追善劇の興行がありて坂田藤十郎が藤屋伊左衛門を勤め、夕霧は霧浪千壽と云ふ女方が勤めた。此の狂言大當り、藤十郎出世の初めて、彼が三十四歳の時である。同年六月、藤十郎は再びこれを演じ、更に十月と十二月これを重演し、其の一生の中に十八回上場したと云ふを見ても、此の狂言の大當りで、藤十郎の妙技であつた事を知るに足りる。『夕霧』の脚本は近松の作であるかの様に傳へてゐるが、事實はさうではあるまい。其の後貞享元年に『夕霧七年忌』の作があつて、近松の筆に成つてゐる。

に浮名は辰五郎。」とありて、大當りを取つた。其の他にも改作上演したものは數多い。宮蘭節にては、『傾城黃金鷄』がある。

二郎兵衛
おきさ
今宮心中

寶永七年正月十三日から竹本座にて上演。巢林子五十八歳の時である。初めは『掛鯛心中』と題したのを、後に改題したのである。其の後、正徳二年四月、紀海音が改作して、『今宮心中丸腰連理松』と題し、豊竹座にて上演したが、固より原作に及ばざること遠い。

寶永六年八月四日、大阪本町二丁目菱屋四郎左衛門の手代次郎兵衛が同家のお針おきさと今宮の我の森で、日野絹一反松の木にかけて、縊首して情死を遂げたのを脚色したものである。其の相抱いて縊死を遂げた様を美しく、正月の儀式に門松に掛けた雙對の干鯛に見立てたのである。歌舞伎に上演されたものには、享保五年三月大阪角座にて、『この頃噂の今宮心中』と云ふのがある。

心中刃は氷の朔日

背笠紐』等がある。歌舞伎にては、いろ／＼と改作して上演されてゐる。

淀鯉いせ出世しゅつせ瀧徳たきのぼり

『外題年鑑』に、元祿十三年四月上演とあるは誤りで、寶永六年の作であらう。大阪の豪商淀屋辰五郎の末路を脚色した者で、八幡の富豪江戸屋勝二郎と替名して、茨木屋吾妻に耽溺した擧句其の身受の金に困じ、悪手代の謀判に坐して闕所追放となつた顛末、其の間に處する忠僕新七夫婦の苦節を巧みに敘述した者である。淀屋家の闕所となつたのは寶永三年十一月の事で、其の闕所目録中には、「有金八萬五千貫目、家屋敷大阪表一町四方の家十二箇所、八幡知行二百石、田地十町、淀に家五箇所、田地十二町、伏見に家三箇所、田地七町、京に家五箇所、大和に田地十二町、堺に家二軒、泉州に田地八町、河内に田地五町、阿波に田地四十八町、大名貸金壹億程。」ありて、其の他の家寶は無數であつた。辰五郎が奈良に逼迫して後、手代等八幡の田地頂戴を歎願せんが爲に江戸に下つた事實により淀川の名物鯉の瀧上りに擬して命題したと云ふ事である。

歌舞伎にては、享保十七年春江戸中村座にて、『大竈商會我』が上演され、河東節の淨瑠璃『神樂獅子』にて、「是で寶の山崎や、淀の渡りに名も高き、淀屋こあんが獨子に撞木島原新町の、色

おなつ
清十郎 五十年忌歌念佛

寶永六年正月二日より竹本座にて上演、巢林子五十七歳の時である。

寛文二年の頃、播州姫路の旅籠屋但馬屋の手代清十郎が主人の娘お夏と密通し、露顯して暇を出されたので、お夏と共に大阪に出奔しようとして捕へられ、主人の娘を誘拐した罪に依りて、同年五月清十郎は刑に處せられた。お夏は一時發狂したが其の後快復し、同國片上に茶店を出して七十餘歳まで生存したと云ふ事である。此のことは西澤一風の、『亂經二本槍』に見えてゐる。

「向ひ通るは清十郎ぢやないかいの、ヨイ／＼笠がよく似た菅の小笠が、さりとはいいやらえいそりや、サアえいやらえい、笠が似たとてな、清十郎であろわいの、ヨイ／＼お伊勢参りはの、清十郎か、さりとはいいやらえい。」とはお夏の狂亂をよんだ流行歌であつた。西鶴も、『五人女』に其の顛末を例の妙筆で敘述してゐる。『外題年鑑』に依ると、寶永二年十一月竹本座にて『おなつ笠物狂』を上演したとあるが明らかでない。此の篇の笠物狂の段は、凄艶比なしと稱すべき名文である。

一中節に『おなつ笠物狂ひ道行』、豊後節に『ひめぢ笠』、富本節に『道行比翼の蘭蝶』、『おなつ清十郎家名所妹』

云。』の唄である。關の小萬も巷説で名高かつた。延寶五年十一月、初代嵐三右衛門は京都四條北側の芝居にて『丹波與作』と題して演出してゐる。又元祿三年京都村山座にて富永平兵衛作の『丹波與作手綱帶』が演ぜられた。巢林子はこれ等を粉本として、この出色の名作を作り上げたのである。正徳二年三月、再演の折には、『丹波與作』と改題し、更に享保十七年六月竹本座で演じた時は『伊達染手綱』と改題してゐる。其の後、寶曆元年二月、吉田冠子、三好松洛との合作で改修して竹本座で上演したものを『戀女房染分手綱』と題した。此の年秋、江戸中村座で、二代目中村七三郎が與作となりて、此の改作を歌舞伎で演じてゐる。

猶歌舞伎で書替へたものには、寛政五年四月大阪中座に於ける辰岡萬作作の『東海道戀關札』、寛政七年十一月、京都南側芝居に於ける奈河篤助作の『新版道中雙六』、文化二年八月、江戸市村座に於ける竝木五瓶作の『小室節錦江戸入』等がある。

他の淨瑠璃への影響としては、一中節に『丹波與作ゆめぢのこま』、豊後節に『丹波與作道行』、宮蘭節に『三吉うれひの段』等があり、長唄に『與作』がある。

危急を遁れたが、女人堂で果敢ない浮世を觀じて情死を遂げる。國許から尋ねて來た彘之助の姉が其の折女人堂にゐて、「お山の萬年草を水に浸して人の生死を占ふとわかる」との事で、今日も谷川の水につけると、半時許りで次第に枯れて凋んだ。」と、現在弟の彘之助とは知らず、其の物語をする條があるので、此の篇の名としたのである。此の情死は寶永五年三月十八日のことなりとも傳へられてゐる。

明和八年五月、豊竹和歌三座で、竹本三郎兵衛作の『お梅つひのじたひうらみのじややなぞ彘之助角額嫉蛇柳』と題して上演せられたのは、此の篇と蛇柳傳説とを取り合はせたものである。歌舞伎では、寛保元年二月江戸市村座にて初代佐野川市松が彘之助を勤めた事があり、寶曆四年四月同じく市村座で『わがころもてはちのすの我衣手蓮曙』と題し、明和七年春中村座で、『鏡池佛會我』の二番目にこれを仕組んで上演した。豊後節の淨瑠璃には、『高野萬年草』がある。

丹波與作待夜の小室節

寶永五年の作。『外題年鑑』に、寶永四年六月上演とあるは誤りであらう。丹波與作はやくから俗謡にて知られてゐた。『與作丹波の馬追なれど、今はお江戸の刀差ぢや、しやんとさせ與作云

永三年八月板)を綴つてゐる。巢林子は此の醜き事件を巧みに美しく人情の機微に觸れて描き出したのである。

あとおひ
心中 卯月の潤色いろあひ

寶永四年の上演。巢林子五十五歳のときである。『卯月艶』の後篇で、三卷のうち、上卷は『卯月艶』のをはりの方、「此の世からなる地獄かや、あはれ果敢なき有様なり。」より以下を改作し、中下二卷を新作して、與兵衛(剃髪して助給)がお龜のあとを慕ひ、自害することを脚色したのである。「昨日の旦那今朝の幻、夢の浮橋一つ橋跨げぢや、合點ぢや跨げぢや合點ぢや、手にも取れぬ臙駕籠。」より文情到れり盡せる感がある。

高野山
女人堂 心中萬年草

寶永五年四月十六日より竹本座にて上演。巢林子五十六歳の時である。

高野山吉祥院の寺小性成田桑之助と紙谷宿の雜賀屋お梅と契りを結んだが、桑之助は戒を破つたが爲に山を追はれ、お梅は他の人との結婚を強ひられたので、二人はお梅の母の計策に依りて

ると云ふ筋である。此の上演の歲月に就いては、『外題年鑑』の寶永四年説は誤つてゐるやうで、寶永三年夏と見るのが至當らしい。

堀河波鼓

寶永四年二月十五日から、竹本座上演。再演した時には、『堀江川波鼓』と改題して、多少の添削が施されてゐる。此の作の基づく事實は次の如きものである。

因州鳥取殿松平右衛門殿に、大藏彦八郎と申、臺所役人相勤罷在候處、去酉六月、主人參府に付、供仕り、江戸へ罷下り、當五月十五日鳥取へ下著仕候、留守之内女房たね、宮井傳右衛門と申者と密通仕候由、家中にて風聞仕、其上私妹くら竝たね妹ふう兩人相知候に付早速吟味仕候へば、不義之段委細白狀仕候故、五月廿七日女房儀指殺、同廿九日組頭迄書置暇乞托仕罷上り、同四日京著仕候而、右之趣昨日御斷申上候、右傳右衛門下立賣通堀川東へ入角に住居仕候を見付、今朝五日過打留申候、私父子儀、去る六月より江戸に罷在先月中旬に歸國仕、外に親類ども無御座候故、留守之内右くらふう度々異見仕候へども、承引不仕候旨申候、私義傳右衛門を見知り不申候に付、兩人の女を召連罷上り申候。

此の女敵討は京都の出來事であつただけ、當時は盛んに取囃され、錦文流は『熊谷女編笠』(寶

寶永三年、巢林子五十四歳の作。其の年三月二十七日から竹本座にて上演せられた。前年（寶永二年）十一月十二日、『曾根崎心中』のお初を出した同じ北の新地天満屋のお島と、長柄村の豪農の養子である市郎右衛門と、女は天満屋の二階、男は長柄堤で、場所を換へて合意の情死を遂げたのを脚色したものである。然し當時は男が死んだとも、まだ生きてゐるとも巷説とりぐであつたから、生死二枚繪草紙と云ふ意味から二枚の名が冠せられてゐる。即ち、「弟善次は川端に、捨てし衣裳と書置を、拾ひ驚き驅けつけて、見れば敢なく事切れたり。南無三寶と歎けども、詮なし甲斐なし面目なし、せめては兄の報恩と、恥も骸も衣裳からだに包み、負うて一先づ立退きける。扱てこそ世上に此の男死んだ風説、死なぬ沙汰、しやうじ二枚の繪雙紙に、戀路の廻向を受けにける。」とあるが如くである。『知死後の道行』は、『誠の形、影の人』を描いて、作者苦心の處が偲ばれる。

與兵衛
おかめ

緋縮緬卯月艶

寶永三年の作と思はれる。大阪北久太郎町道具商笠屋の一人娘お龜と養子長兵衛との夫婦仲は至つて睦まじかつたが、儘ならぬ浮世の風波の爲に梅田堤で情死を遂げ、女は絶命し、男は助か

傾城反魂香

寶永二年の作と云はれてゐるが、同五年のものらしい。繪畫史を取扱つたもので、狩野元信が土佐光信の婿となり、和漢の畫風を調和して、こゝに狩野派を現出し、繪所預となりし事蹟に本づき、これに吃の又平、不破名古屋等をあしらつたものである。岩佐又兵衛と大津繪の又平と稱するものとは、此の時代頃にも既に混じてゐるものと見える。此の一篇は變化に富み、結構巧妙で、出色の作である。

これを改作したものに、享保十七年五月七日から豊竹座で上演せられた『今様傾城反魂香』があり、吉田冠子、三好松洛の合作で、寶曆二年三月二十三日から竹本座で上演せられた『名筆傾城鑑』があるが、いづれも原作に及ばないこと遠い。

これを歌舞伎に演じたものも種々あるが、其のうち安永六年九月、江戸中村座に於ける『反魂香名殘錦繪』、享和元年九月同座の『けいせい反魂香』など當り作であつた。

心中二枚繪草紙

二上り 藤内次郎殿わいの、笛吹のや役で、紫竹漢竹のやつこのほこりをさ、さつ／＼とも拂うての、とらいの／＼ 笛人の物はとらいの、我物はやらいのと、合せ吹いたるは、さつても吹いた笛吹と、どつと褒めて通しただんじり打つて難した、だんじり打つた見さいな、藤内三郎殿は小鼓の名人であらうの、胴に加賀革、くれなゐの調緒、ちん鳥がけにかけさせ、ちゅつち、ちゅつぽ／＼、たつぽ／＼つたつた／＼／＼、合せ打つたるは、さつても打つた小鼓と、わつと褒めて通した、だんじり打つた見さいな、藤内四郎殿わいの、大鼓の役でしたんに、しつたん／＼／＼しつたん作る御百姓、明年は八反ぢや、さ明年は十六たん／＼、丹波の國のお百姓とあはせ打つたるは白癩上びやくらいの町下の町、どつと褒めて通した、藤内五郎殿わいな、太鼓打の役で、大まいの太鼓を、あそこもとに置かせて、金の撥を手に持ち、つく／＼／＼つてん／＼てれつくには、づんでんとん、てれつく／＼つてん／＼、とんからつとんとうつぼれた、なるかならぬか戀の中の町、中の／＼の中の町を通りたうはなけれど、生蛸なまだこつかんだ天窗を見たか、熊野小比丘にんが、ちとくわん／＼／＼、くわんとも鳴るは夜明の鐘は、つん／＼つらいか、づんでんとうから、櫓太鼓の音に寄り来る。

本篇の趣向は赤松滿祐が將軍義教を己が邸に招き、能樂『鶉羽』を上覽に入れて、遂にこれを殺した史實に據り、管領斯波氏の家臣藤内兄弟五人が各其の得意の技藝を見せての働きは甚だ賑やかなものである。

雪女五枚羽子板ゆきをんな

寶永二年の刊行。但し其の上演を七月十四日よりとするに就ては異説がある。目先の變化多い操向きの作で、古來、『國性爺合戦』『曾我會稽山』と合はせて、近松の時代物三傑作と云はれてゐる。上中下三卷で、其の冒頭はいづれも名優嵐三右衛門の、『藤内太郎だんじり出端』の文句を以て始めてゐるが、其の舞臺姿を人形ぶりで見せようとする所が、其の身上である。『藤内太郎だんじり』は嵐家の六法で、初代三右衛門の工夫になつてゐる。従來行はれた六法に新しい試みをしたもので、『羽織に色ある袴を著し、股立高く取りなし、袴の腰は、羽織の馬乗を括り、袴の腰紋は金の焼付、大小も生の金拵へ、本身の容らぬばかり、六法のうち皆所作事に仕立て、出端も神樂つしま、三味線も手替りを弾きかけ、鳴物に出づれば。』(『棠大門屋敷』)と云ふ出で立ちと、演じ方とであつた。初代は寛永十二年から元祿三年まで、二代は寛文元年より元祿十四年まで、三代は元祿十年から寶曆四年まで在世した人で、家の藝として此の六法を演じてゐた。此のだんじり出端の本歌は『松の落葉』卷三に出てゐるから、こゝに抄出する。

藤内だんじり出端

林子はおまん源五兵衛に配するに、小萬三五兵衛を以てして敵討の趣向を一寸織り込んでゐる。後に薩摩の侍早田八右衛門が大阪北の新地櫻風呂の菊野殺しの一件を附會して、別殊の源五兵衛が出来上つた事は、『脚本集』の『五大力戀緘』の解題に説いて置いた。宮蘭節にては、『二世の縷絲』がある。

此の曲中には、『諸國槍じるし』と、『源五兵衛おまん夢分船』とがあつて、作者の詞藻が美しく輝いてゐる。

心中重井筒かまねるづ

寶永元年の作と云はれてゐるが、同四年の作らしい。すると作者が五十五歳の折の作である。大阪六軒町重井筒屋の抱へお房と、上町紺屋徳兵衛と、高津大佛かうづの勸進所で相對死をした事件を美化したものであるが、此の事實は寶永元年三月二十九日のことと云ひ、又十二月十五日の事も云はれて確かでない。

此の作は歌舞伎となり、享保五年四月、お房徳兵衛の十七回忌に江戸三座にてこれを演出し、其の後又種々に書き替へて、興行されてゐる。常磐津節にては、『夢結塙野蝶』がある。

年九月、江戸市村座では、『露時雨曾根崎心中』などを初めとして、數多くある。豊後節にては、『曾根崎追善』がある。

節も單純で、短篇ではあるが、其の文章の精彩あり、婉曲自在、清艶玉を轉するが如くあるので殊に有名である。其の道行に至りては、萩生徂徠が案を拍つて絶賞したと云はれる程名高い。此の心中は四月二十三日のことなりとも云ひ、又四月七日の出來事なりとも云はれてゐるが、後説がよささうである。曾根崎天神は此のためにお初天神と呼ばれることになつた。

源五兵衛
おまん
薩摩歌

寶永元年正月十五日より竹本座にて上演。巢林子五十二歳の時である。其の題名に薩摩歌と云つた如く、「源五兵衛どこへ行く云々。」の流行唄から著想したもので、源五兵衛おまんの心中はいつの頃か確かでないが、西澤一風の『傳奇作書』に寛文三年とあり、此の曲のはじめにも、「流行小唄も時につれ、時の昔とどこへ行く、寛文年の頃かとよ。」とあれば、寛文年間のことと見える。西鶴の『好色五人女』にも、『世にはやり歌源五兵衛』と云ひ、「源五兵衛どこへ行く、さつまの山へ云々。」の歌を載せてゐるから、此の「源五兵衛どこへ行く」の唄は流行したものであつたのだ。巢

以て突如としての出現と見なすべきものではない。此の年五月、竹本座にて上演。享保二年、同座にて再演の時は増補し、享保十八年二月、豊竹座にて三度目の上演には、『お初天神記』と改題した。

大阪の本町醬油屋平野屋忠右衛門の手代徳兵衛が、北の新地天満屋のお初に馴染んで、深く契つてゐたので、主人の妻の姪と結婚するを厭ひ、悪友油屋九平次に金子を欺き取られて、遂に曾根崎の森で心中した其の際物を取扱つたものである。作曲は近松巢林子、語手は竹本筑後掾、お初の人形は人形使ひの名人辰松八郎兵衛が遣つて、人形に珍らしい世話物であつたから、満市の好評を博したのは云ふまでもない。

これの改作を試みこれが翻案を企てた淨瑠璃は、其の後に少なくない。『おぼつ徳兵衛』曾根崎模様『若竹笛射、浅田一鳥等作、寶曆十一年五月豊竹座上演』だの、『きのふのお初けふの徳兵衛よみ賣三巴』（近松半二等作。明和五年七月竹本座上演）だの、『往古曾根崎噂』（近松半二等作。安永七年九月、竹本染太夫座上演）だの、いろいろあり、又歌舞伎にも作りなされて、享保四年四月には、江戸中村座で、二代目團十郎が徳兵衛の役を勤め、寶曆十年八月には、大阪中山文七座で、『女夫星浮名天神』と云ふ題で上演せられ、寛政九年九月、江戸河原崎座では、『とく様參お初天神』、天保七

と呼びつ。而るに今夜既に死しぬ、嫗年老いて年來の夫に今別れて泣き悲しむなり、亦この侍る童は教信が子なりと、勝鑿これを聞いて返り至りて勝如上人に此の事を委しく語る。勝如上人これを聞いて涙を流し悲しび貴んで、忽ちに教信が所に行きて泣く／＼念佛を唱へてぞ本の庵に返りにける。其の後勝如愈心を至して日夜に念佛を唱へて怠る事なし。而る間彼の教信が告げし年の月日に至りて終に終り貴くて失せにけり。(此の前に教信の靈が勝尾寺の門を叩いて上人に其の死期を告げ知らせた事がある。)これを聞く人皆必ず極樂に往生せる人なりと知りて貴びけり。彼の教信妻子を具したりといへども、年來念佛を唱へて往生するなり。然れば往生は偏に念佛の力なりとなむ、語り傳へたるとや。」とある。此の念佛往生の古人の名を假りて、奇々怪々の趣向を立て、操らしい場面の變化を構へ、上方の風習なる盂蘭盆會にて墓廻りをすると云ふ、極めて抹香臭い作品をこしらへたのである。

曾根崎心中

元祿十六年、巢林子五十一歳の作。世話物の初作とされてゐるが、延寶六年、『助六心中蟬のぬけがら』は世話物であるし、時代物の中にも世話に碎けた所がすくなからねば、必ずしもこれを

元祿十四年、巢林子が四十九歳の作。竹本義太夫が筑後掾藤原博教を受領した時の祝ひに作り與へたものであることは前に述べた如くである。蟬丸を環りての四角關係で、情人直姬や、乳人清貫、芭蕉の前の兄千手太郎の忠節を點綴し、北の方、情人芭蕉の前の嫉妬の炎で失明した蟬丸の眼が佛力の爲に開くに至る始末を敘述したものである。道行の文章は、まことに典雅清麗を極めてゐる。西澤一風、竝木千柳の『女蟬丸』(享保九年十一月豊竹座上演)は摸倣したばかりか、本曲に比して、遙かに劣つてゐる。

賀古教信七墓廻

元祿十五年の作。賀古教信のことは、古くは、『今昔物語』卷十五の「播磨國賀古驛教信往生語」に見えてゐる。「彼の驛(賀古驛)の北の方に小さき庵あり、其の庵の前に一の死人あり、狗鳥集りて其の身を競ひ噉ふ、庵内に一人の姫、一人の童あり、共に泣き悲しむ事限なし。勝鑿(勝尾寺勝如上人の弟子)これを見て庵の口に立寄りて、こは如何なる人のいかなる事ありて泣くぞと問ふに、姫答へて云はく、彼の死人はこれ我が年來の夫なり、名をば沙彌教信と云ふ、一生の間、彌陀の念佛を唱へて、晝夜寤寐に怠る事なかりつ、然れば鄰り里の人皆教信を名づけて阿彌陀丸

『團扇曾我』の作られた年代はあきらかでないが、元祿十年、巢林子が四十五歳の時これを添削して『百日曾我』と改題したのである。もとは宇治加賀掾の爲に作つたものであるが、大入りにて百日餘も上演したので、此の名に改めたと云ふことである。勸進帳に擬へた、五郎時致が高らかに讀み上げる傾城請狀なるものは、當時特に囃されて有名なものであつた。『傾城請狀』元祿十四年七月、正本屋丸兵衛板、三卷物)の各卷々のはじめには、京の卷に、「團扇曾我けいせい請狀、宇治嘉太夫正本」、大阪の卷に、「百日曾我けいせい請狀、竹本義太夫正本」、江戸の卷に、「關東曾我けいせい請狀、林和宗太夫正本」とあるほどに此の作は評判であつた。

當流小栗判官

元祿十一年二月、竹本座上演の作。小栗判官の事は鎌倉大草紙に見えてより、種々の傳説がありて、古淨瑠璃にも取扱つたものであらう。猶小栗判官を題材とした歌舞伎も此の後にあり、稗史にもこれを取扱つたものが少なくない。

蟬丸

形光琳も、洒脱の畫を以て世態風俗を畫いた英一蝶も、皆法華信者であつて、それらに清新の氣を藝術界に鼓吹してゐるのは、流石に宗教界の偉人日蓮上人の感化を受けてゐると云はねばならない。元祿四年十一月十三日、京都の妙顯寺にて日像上人三百五十回忌の大法會があつたので、これを機として、此の年に此の作が新作せられたのであらう。大覺大僧正（前攝政近衛經忠の子月光君）と其の妹雨夜の前の艱苦を經とし、其の師日像上人の徳法を緯として大僧正の傳記を作り上げたのである。『本化別頭佛祖統記』の日像上人傳を按ずるに、「正和二年癸丑の春、師（日像）北野の傍にして說法すること七日、西山大覺寺主、洛に入るの次で、路法筵に臨み、欣然として聽受し、密乗を棄てて、吾が宗（日蓮宗）に歸す。」「滅後大僧正大覺以聞して救賜菩薩號を拜す。」などとありて、其の關係は甚だ密接であつた。此の日像上人は三たび京より放逐せられ、折伏の結果として、屢々迫害を受けた。巢林子はこれ等の事實に依りて西海の波濤に漂ひながら、奇特の助けを得たことを結構してゐる。雨夜の前が龍女となりて日像上人の祈雨を助けたのは、高祖日蓮上人の女人成佛の教理が自づとそこに現はれてゐる。

國の一所もあらばこそ、平家一味の者としては、夫の景清許りなり、包むとするも、此の事遂には漏れて討たれうず、景清討たれて、其の後に不慮に思ひをせんよりも、九年連れたる情には、二人の若のあるなれば此の事敵に知らせつゝ、景清を討取らせ、二人の若を世に立てて、あとの榮華に誇らんと思ひすましたあこわうが心の中ぞ恐ろしき。「舞の本『景清』とある自我に囚はれたあこわうを、巢林子は女の嫉妬とかへ、景清が二人の子を刺殺すのを、阿古屋が先非を悔いて我と我が子を刺殺して自刃する事に替へた處に、自然の人情味が横溢してゐる。末段五段目の八島軍物語は、謠曲『景清』から出てゐる、三段目に小野姫を梶原が水責火責で拷問するところは、後の『壇浦兜軍記』に於ける阿古屋琴責と變化したのである。猶古淨瑠璃『かけきよ』も此の作に影響してゐると云ふことである。

大覺大僧正御傳記

法華經の功德の有難きを本として、其の間に家庭の風波、義理人情のいきさつを織り成してゐる。巢林子は日蓮宗徒だけに、妙法の廣大無邊の徳を説いたものだ。幕府の御用繪師の狩野氏と云ひ、裝飾畫、蒔繪、陶器、書法に新機軸を出して藝術界に革命の波を揚げた本阿彌光悦も、尾

我が生涯は五十兩づゝにて足りぬ、死後に及びて、其のまし金を倅（倅は醫師にて馬鹿なり、名不知）へ合力して給はるべしと云ひける故約束の如く、歿した後、竹本座より倅へ一年五十兩づゝ送りしは、又巢林子の餘澤なりと、吉田鬼眼語りき。」と萬象亭の『反故籠』に見えてゐるが、これも果して事實であらうかどうか。これを要するに斯の大自然の一生は混沌として今も猶不明であるが、今後果して其の雲霧を開き得る時代が来るであらうか。恐らくは永久の謎ではあるまいか。

出世景清

貞享三年、巢林子二十四歳の作で、前にも述べた通り、竹本義太夫の爲に、新作したものである。同年二月より竹本座にて上演した。初段、東大寺大佛供養のをり、景清が源頼朝を刺さんとしたところは、謡曲『大佛供養』に據り、四段目、景清の愛妾阿古屋が景清を訴人するくだりは、幸若舞の『景清』を粉本に取つてゐる。「かかりけるところに清水坂のかたはらに、あこわうと申す女、北野詣でをしけるが、京白川の辻々に立てたる札を讀んで見るに、九年つれたる我が夫の悪七兵衛景清を討たんと書いてたててあり。あこわう餘りの物憂さに此の札を盗み取り、加茂川桂川へも流さばやと思ひしが中にて心を引返し、待て暫し我が日本六十六箇國に平家の知行とて、

年には『本朝三國志』『平家女護島』『傾城島原蛙合戦』、同五年には『井筒業平河内通』『雙生隅田川』『日本武尊吾妻鑑』『心中天網島』、同六年には『津國女夫池』『女殺油地獄』『信州川中島合戦』同七年には『唐船噺全國性爺』『心中宵庚申』を新作した。彼の傑作の大部分は此の頃に述作されてゐる。

然し寄る年波には敵し難く、享保九年、『關八州繫馬』を其の絶筆として、其の歳十一月二十二日(法妙寺の墓石には二十一日とあるが、廣濟寺の墓石にあるを正しとすべきであらう)、七十二歳を以て其の一生を終つた。其の歿したのは或は大坂寺島の船問屋尼崎屋吉右衛門方なりと云ひ又は大阪南堀江鑄物師山城屋宗左衛門方なりと云ひ、一説には、廣濟寺なりと云つて、定まらぬ。其の墓として傳ふるものは、(一)肥前唐津の近松寺にあるもの、其の墓碑には、「遺言を以て當寺の墓地に歸葬す。」とあり、(二)大阪東區谷町八丁目日本覺山法妙寺にあるもの、(三)兵庫縣川邊郡小田村字久々知の廣濟寺にあるもの、以上三箇處にある。其のうち最も信用すべきものは、廣濟寺のものらしい。其の妻は山城屋宗左衛門の娘であつたと云ふ説もあるが、これも明かでない。其の子には多門、由泉、女子等があつたと云はれてゐるが、共に詳かでない。「西の座(竹本座を云ふ)より一年の給金五十兩なり。増して百兩にせん事をいひければ、(巢林子)辭して曰く、

負せ、若竹政太夫と號し、始めて豊竹座を二年勤めらるゝ内、ふしはかせに心をつけて、工夫せられ、段々と淨瑠璃に實り、三年目に竹本座へ住んで立物となり、筑後掾の跡替りを勤めらるゝは、かねて心がけの深き故と衆人の稱美淺からず。」と稱し、猶此の人の藝風を評して、「竹本政太夫は歌仙第三文屋康秀の歌の意に同じ、淨瑠璃は巧者にして其の體俗に近し、譬へば商人の能き衣著たるが如し。」と云つてゐるが、一體に、小音で、節廻しが細かであつたらしい。筑後掾の跡を襲いだ時には、まだ二十四歳の若年者であつた爲に、世間の氣受けもよろしからず、先輩大和太夫等の憤然として退座するありて、さしも由緒ある竹本座も一時危急に瀕したが、巢林子は斯道の爲に、將た故友の爲に、此の年少聲樂家を助けて、正徳五年には、『大經師昔曆』『持統天皇歌軍法』『生玉心中』『國性爺合戰』を新作してこれに與へた。中にも、『國性爺合戰』は作意の妙と舞臺装置の奇と相待ちて、未曾有の好評を博し、其の興行十七箇月の久しきに涉り、空前の大入り大當りを取つた。こゝに於て政太夫の聲名は頓に擧り、一たび退轉したる大和太夫等も復歸して、竹本座の基礎はまた動かすなつた。

享保二年には『國性爺後日合戰』『槍權三重帷子』『聖徳太子繪傳記』、同三年には『山崎與ねびき次兵衛ねびき壽門松』、『日本振袖始』『曾我會稽山』『傾城酒吞童子』『酒吞童子枕言葉』の改作)、『博多小女郎波枕』、同四

殿鶉羽産家』『姫山姥』『長町女腹切』『傾城吉岡染』、同二年には『天神記』『穠靜胎内拮』『同四年には、『相模入道千正犬』『娥歌加留多』『嵯峨天皇甘露雨』が作られた。此の年九月十日、筑後掾は六十四歳を一期として、身まかつたのである。『娥歌加留多』は其の最後の語物であつた。巢林子は其の多年の同心異體を失つて、嘸かし痛嘆したことであらう。

これより先、寶永六年十一月一日、坂田藤十郎は六十五歳を以て歿した。巢林子の狂言本は此の頃から跡を絶つて、其の後は淨瑠璃のみを創作してゐる。狂言本の重なるものには、前に挙げたものの外に、『一心二河白道』(元祿十一年)、『阿彌陀池新寺町』(元祿十二年)、『傾城富士見里』(元祿十四年)、『辛崎八景屏風』(元祿十五年)、『傾城三の車』(元祿十六年)、『吉祥天女安産玉』(寶永元年)、『傾城金龍橋』(寶永五年)、『御曹司初寅詣』(寶永六年)等がある。

筑後掾の歿後には、其の門人に陸奥茂太夫、竹本大和太夫、竹本幾世太夫、竹本萬太夫、竹本頼母、内匠理太夫、竹本浪花、竹本文太夫、多川源太夫等幾多の語り手があつたが、筑後掾の遺言に従ひて、竹本政太夫が其の跡を承ける事になつた。政太夫は其の後二代目竹本義太夫となり又受領して播磨掾藤原喜教と稱した。『竹豊故事』に此の人のことを敘して、『大阪の出生、中紅屋長四郎とて、いまだ前髪立の比より淨瑠璃を好み、竹本豊竹の流義に執心厚く、まんまと藝に仕

所に思ひよらぬ引込思案、二三年勤めて給はらば、拙者座元仕り、萬事の世話を引受け、貴殿内證入用銀御用次第つゞけ、不自由させまじと、同行衆を以て頼みしかば、下地は好きなり御意は面白し、いか様ともの詞をきはめ、杯すんで、其の暮、顔見世淨瑠璃といふを初め、『用明天皇職人鑑』作者近松門左衛門をかゝへ、太夫竹本筑後掾、座元竹田出雲と看板竝べ、三段目かね入の出語り、涙川戀の氷に閉されて、身を切りくだくおもひより、浮川竹のながれの身、辰松八郎兵衛(人形遣ひの名人)出づかひ身ぶりよく、見物の氣を取つてのかね入藏入。」とある。此の年には『雪女五枚羽子板』『傾城反魂香』『寶永五年の作と云ふ説がよからう)、同三年には、『源義經將棊經』『本領曾我』『心中二枚繪草紙』『兼好法師物見車』『棊盤太平記』『卯月の栞』『曾我扇八景』『加増曾我』此の年の作であらう)等、多くの作品を出してゐる。同四年には、『吉野忠信』『堀川波鼓』『今川了俊』(此の年舊作を再演す)、『卯月の潤色』『酒香童子枕言葉』をいだし、同五年には、『心中萬年草』『丹波與作待夜の小室節』、同六年には、『五十年忌歌念佛』『梶狩劔本地』『淀鯉出世瀧徳』、同七年には、『曾我虎が磨』『今宮の心中』(『掛鯛心中』の改題)、『大原問答青葉笛』(『念佛往生記』の改作)、『百合若大臣野守鏡』『心中刃は氷の朔日』『孕常磐』『源氏冷泉節』『夕霧阿波鳴渡』、正徳元年には、『冥途の飛脚』『吉野都女楠』『大職冠』、正徳二年には、『傾城懸物揃』『弘徽

を加へて敬意を拂つてゐる。斯くの如く淨瑠璃作者としても、將た狂言作者としても、他に比肩するものなく、元祿時代の斯壇を獨占してゐたのであつた。然も操に歌舞伎の結構を輸入し、歌舞伎に操の趣向を加味し、兩者をして俱に向上せしめたのは、巢林子絶大の力の致す所で、又彼の天才の然らしめた所以である。筑後掾と藤十郎との天才は又巢林子をして思ふやうに其の筆力と著想とを自由に發揮せしめ、巢林子の天才は、筑後掾と藤十郎とをして縦横に其の技巧を發揚せしめたのである。

『曾根崎心中』の新作せられたる元祿十六年には、『最明寺殿百人上臈』の刊行あり、寶永元年には『薩摩歌』の作あり、『心中重井筒』は、『外題年鑑』に依ると、此の年の事としてあるが、多分は寶永四年の作であらう。同二年には竹田出雲掾が筑後掾に代りて、竹本座の座元となつた。巢林子は『用明天皇職人鑑』を作り、「時にあふみや世に出雲。」の文句をさしはさんで、其の前程の洋々たるを祝した。『今昔操年代記』に、前に抄記せる『曾根崎心中』にて、竹本座が福々となつた其の後を承けて、「此の上に望もなしと、後生心になり、奇妙無量壽如來に身を任せ、芝居も是切に安樂國土きはめんと、明暮御堂に参り、あさじ日中お八つをかかさず、一心不亂に正信偈、御和讃の節猶殊勝に聞えぬ、折ふし竹田氏(出雲掾)参會し、未だ老木と云ふにあらず、今町中賞美する

根崎心中』を稿した。これ彼が心中物の初物である。如何に其の大當りで市民の大喝采を博したかは、竹本座が負債を償還して、富裕となつたと云ふにても知られる。『今昔操年代記』に、前の抄記について、「藝者の譽四方に輝くといへども、ほつこりした藏入なく、三八の十八にて合はぬ算盤、胸算用合うて合はぬは世間竝、次の替りの談合、一杯庄兵のば、さまさしあひ、刺身は鯉にこせう、當り淨瑠璃何をかするめといふ所へ、やれ曾根崎の天神が、見事な心中、有馬藥師、藥がまはつた、是れを一段淨瑠璃にあしらへ、曾根崎心中と外題を出しければ、町中悦び、入るほどにけるほどに、木戸も芝居もえいたう／＼こしらへに物は入らず、世話事の初と云ひ、淨瑠璃は面白し、少しの間に餘程の金を儲け、諸方のとゞけも笑ひ顔見てすましぬ。」とあるほどの大入りを占めたのである。

一方に名聲樂家竹本筑後掾を助けて、幾多の金玉の什篇を提供した近松巢林子は、又他方に名優坂田藤十郎と提携して、之が爲に狂言脚本を創作した。元祿九年の『傾城阿波鳴渡』、元祿十二年の『傾城佛の原』、元祿十五年の『傾城壬生念佛』の如きは、其の一例である。又元祿三年には、名優水木辰之助の爲に『水木辰之助たち錢振舞』を作つた。元祿十二年の評判記『役者姿記評判』には巢林子を贊して、「花に酔へり其の近松の門の海老。」と云ひ、『耳塵集』には、彼だけに特に氏の字

作し、若しくは上演してゐる。

元祿十四年、義太夫は受領して筑後掾藤原博教となつた。近松は其の名弘めの爲に音曲家の祖神と仰ぎまつる『蟬丸』を創作して、これを祝した。『今昔操年代記』に、「剩へ筑後掾藤原博教と、受領まで申し請け、西國おもて、山路ふみわけ木こる杣人、海邊に迷ふ海士の子も、御痛はしや蟬丸といへば、又常閑の雲晴れて、日月かゝり輝けりと、吉野忠信のさいもん、何所どこからどこまでいかぬものなく、筑後掾の威勢、夜まし日増の繁榮。」と云つてゐるほどに、筑後掾はもてはやされたが、其の近松に負ふ所の多大であつたことは云ふまでもない。猶此の歳には、『天鼓』『大掛物十幅一對』『頼義北國落』の改作、『曾我五人兄弟』の作があり、同十五年には、『大磯虎稚物語』『賀古教信七墓廻』の著があつた。

翌十六年には、生後久しく住み馴れたる京都を去りて、大阪に移る事となつた。筑後掾や其の他環境の人達が彼を慫慂した結果であらう。當年取つて五十一歳、押しも押されぬ淨瑠璃作者、狂言作者の巨擘であつたから、萬人の尊重を受けて、大阪の新居に身を置くことになつたのである。時候は恰度春逝いて、初夏の風がそよくと淀川の上を渡る四月であつた。偶曾根崎天神の境内でおはつ徳兵衛なるものの心中があつたから、近松は取り敢へず實際の新事實を捉へて、『曾

し、やかましく候、是れも鯛青鷺二色にお申付け、煮さまし眞竹一種しやれてよく候、割海老青豆のあへ物、吸物鱸雲わた引、肴小鱈の鹽煮、たいらけの田樂、又吸物燕巢にきんかん麩、いづれも味噌汁の吸物無用に候、酒三獻で膳はお取なされ、後段に寒曝のひやし餅、又吸物きすこの細作り、酒一つ飲まれて後、早鮓、蓼はたべられず候、山椒はじかみ置きあはせてお出し、その跡に日野眞桑瓜に砂糖かけ出し、御茶は菓子なしに一ぶくづゝたて切りになさるべし。とても御馳走にちひさき御座舟に湯殿をしかけ、暮方に行水いたされ候やうに御用意、これまでにて夜の仕立一色も御無用に候、はや太夫元へ十九日の事、旦那申し遣はされ候、日くれがたよりあがり申候。」とあるほどに、町人は食道樂となつてゐたのである。町人本位の歌舞伎やあやつり操の盛んになつたことは云ふまでもなく、義太夫節の流行したのも當然である。

元祿元年には『本朝用文章』、同二年には、『天智天皇』『津戸三郎』『門出八島』の改作)、同三年には『十二段』、同四年には、『大覺大僧正御傳記』、同五年には、『日本西王母』『南大門秋彼岸』の改題)、同六年には、『佛母摩耶山開帳』、同七年には、『松風村雨束帶鑑』、同八年には、『釋迦如來誕生會』、『鎌田兵衛名所盃』、同十年には、『賴朝伊豆日記』『百日會我』『團扇會我』の改作)、同十一年には『當流小栗判官』、同十二年には、『源氏烏帽子折』(舊作の再演)、同十三年には、『浦島年代記』を創

した。實に貞享三年二月の事で、近松は三十四歳、義太夫は三十六歳であつた。これよりして此の二天才は互に結託して關西の淨瑠璃界を風靡したのである。『今昔操年代記』に、「是れより義太夫節とて持囃しぬ。其の上に近松門左衛門つゞいて新作をこしらへ、追て面白き趣向に、かはり文句はたらき、義太夫の語り盛り、日々夜々音聲に實りふし詞に花を咲かせば、聞く人見る人此の太夫ならではと持囃しぬ。」とあるが如く、義太夫は近松を得て雲蒸龍變するの勢ひとなつた。

貞享五年は元祿と改元して、世は混々として太平の春を楽しんだ。西鶴の『世閒胸算用』（元祿五年板）に「殊に近年はいづ方も女房ぬし奢りて、衣類に事もかかぬ身の、其の時の浮世模様の正月小袖をたゝみ、羽二重半疋四五匁の地絹よりは、千種の細染百色がはりの染賃は高く、金子一兩宛出して、是れさのみ人の目立たぬ事に、あたら金銀を捨てける。帯とても昔渡の本縞子、一幅に一丈二尺、一筋につき銀二枚が物を腰に纏ひ、小判二兩のさし櫛、今の直段の米にしては本俵三石、天窗に戴き、湯具も本紅の二枚襲ね、白ぬめの足袋はくなど、昔は大名の御前方にもあそばさぬ事、思へば町人の女房の分として、冥加恐しき事ぞかし。」とある程に、町人の女房が衣服に、憂き身を裏した時代であつた。『萬の文反古』（元祿九年板）に、「旦那も此の程は病後故、美食好み申されず候、無用と存じ候分に黠かけ申候、大汁の集め雜喉一段竹輪皮鯨おのけあるべ

が、いつしか此の兩者の間は水火相容れざるものとなつた。竹庄は當時の淨瑠璃界を物色して、理太夫に著目し、こゝに二人者の提携となり、一まづ京都を離れて西國に下つた。洛の天地に雄視した嘉太夫は受領して加賀掾宇治好澄となりて、其の勢ひは斯壇の覇者たるを以て任じ、「名人は播磨、上手は嘉太夫。」と稱せられた。斯くて理太夫の五郎兵衛は數年の練磨を經、竹庄と共に西國より大阪に歸り、名を竹本義太夫と改め、貞享二年、竹本座に於て勇ましく旗揚した。淨瑠璃は嘉太夫が語りて好評を博したる近松の作『世繼會我』を出し、續いて『藍染川』、『以呂波物語』を出したが、いづれも滿都の好評を博し、其の年の暮は泉州堺にて興行し、いよく評判好く、播磨以來の名人との賞讃を得た。『今昔操年代記』に、「是れ義太夫大音にて萬揃よろづひたる上に、理兵衛嘉太夫を吞込み、面白き節をつけて語らるゝは、鬼にかなさい棒。」と云つてゐる。

翌年早春宇治加賀掾は、これに挑戦せんがために大阪に下り、井原西鶴の作なる『曆』を語つたが、義太夫はこれに對して近松の『賢女手習並新曆』を出して應戰した。義太夫の聲譽は加賀掾を壓したので、加賀掾は『曆』を中止して、近松の『凱陣八島』を以てこれに代へて其の勢ひを挽回したが、偶興行中失火したので、加賀掾は退いて京に歸つた。こゝに於て義太夫は近松に新作を乞ひ、近松も其の前途を壽ぎて、『出世景清』を作つて之に與へた。乃ちこれを二の替りとして出演

夫の出づるありて、好漢は好漢を知り、惺々は惺々を惜しむの縁を結んだのである。

竹本義太夫は通稱を五郎兵衛と云ひ、攝津東生郡天王寺村の人である。天性音曲を善くし、淨瑠璃を好んで、清水理兵衛の門に遊びて、其の脇を勤め、京都四條の芝居に出演し、遂に宇治嘉太夫の知る所となりて其の一座に加はつた。『今昔操年代記』に當時の事を記して、「三年めの正月より天王寺五郎兵衛をワキにかゝへ、西行物語といふ淨瑠璃の二段目、藤澤入道夜盜の修羅を、五郎兵衛語られしが、もとより大音にて、甲乙かんおつともにそろひ、まないたに釘かすがひを打ちたる如く、何程の大入にても届かぬといふ事なし。字どめ字頭の文字消えず、文のあやよく聞えければ、見物悦ぶ事限りなし。嘉太夫、五郎兵衛淨瑠璃には心置き、後に我ほこさきのかひになるべきは此の男と云はれしは、流石の嘉太夫と、後にぞ思ひ知られぬ。」とある。斯くて彼は清水理太夫と號し、獨立して、『日本王代記』『松浦五郎』など云へる淨瑠璃を語つたが、此の人大音聲なれども、優婉で老巧なる嘉太夫には敵せず、特に清雅典麗で節廻し細かき語口を悦ぶ京都士女の歡迎する所とはならなかつたと見え、『今昔操年代記』に云ふ如く、「出たり引込んだり、半年つゝかぬ芝居、見るに氣のどくの天窗をかきぬ。」と云ふ體たらくであつた。

嘉太夫は、京都の興行界に於ける大立物竹屋庄兵衛と結託して其の地位を獲得したのであつた

曰、此の人作られける近代の上るり、詞花言葉にして、内典外典、軍書等に通達したる廣才のほど明けし、其の徳惜しむべきは此の人と、はうび餘つて今こゝに云々。」と評してゐる。富永平兵衛が番附に狂言作者として署名してゐたので、憎まれたと云ふ話は、『耳塵集』にも見えてゐる時代であるから、近松も亦狂言作者として名を署したのを攻撃されたのである。然し、「内典外典軍書等に通達したる廣才のほど明けし。」と賞讃されたほどに既に高名であつたのである。殊に評判記では役者を評して作者に及ぼすのを例とするが、近松に對しては特に斯かる評を加へたのを見ても、當時近松が盛んに賣出してゐたのを知るに足るべく、又相當に多くの作を世に出してゐたことをも推察されるのである。

作者となりて一身を立てんとした彼の勇猛心は、此の間に於て、其の學殖を深くし、其の詞采を練り、心織筆耕して已まなかつたので、三十歳を越えた頃には次第に油が乗つて來たのである。和漢の書は固より、名僧知識に就いて佛典の研究をも敢てしたのであつた。淨嚴和尚との相識はいつの頃であるか明らかでないが、彼は佛書に目をさらし、佛教の知識を會得するにも努めたのであつた。必ずしも近松寺の門に入りて佛弟子となつたとするにも當るまい。彼の知識慾は儒道、歌書、物語、軍記のみならず、更に佛書にまで及んだのである。偶音曲界の天才竹本義太

貞享元年の作としては『甲子祭』『夕霧七年忌』『百夜小町』『以呂波物語』、同二年の作としては、『一心五戒魂』『賢女手習并新曆』が傳へられ、此の他にもまた種々ある。然し近年の傾向としては、其の著作の数が次第に増し行くことである。云ひ換へると推定の範圍が擴大されるのであるが、やがては研究の結果、其の推定が又次第に減少されて、其の範圍が狹まるのではあるまいかと思はれる。偉才近松の研究、談容易ならんや。

近松門左衛門の聲名は、竹本義太夫と握手する頃に於て、既に嘖々として聞えてゐた。貞享四年板の評判記『野郎立役舞臺大鏡』に、「おかしたいものは、南京のあやつり、近松が役者附。」とありて、猶其の次に、「又ある人の曰、よい事がましよう上るり本に、作者書くさへ、ほめられぬ事ぢやに、此の頃は狂言までに作者を書く、剩へ芝居の看板、辻々の札にも、作者近松と書きしるす、いかい自慢と見えたり、此の人歌書か、物語を作らば、外題を近松作者物語となん書き玉ふべきや。答に曰、御不審尤もには候へども、とかく身すぎが大事にて候、古ならば何とて、あさあさしく作者近松などと書き玉ふべきや、時ぎやうに及びたる故、芝居事で朽ち果つべき覺悟の上なり。然らばとても事に、人に知られたがよい筈ぢや。それ故おしだしも萬太夫座の道具直しにも出玉ひ、堺の夷島で榮宅とくんで、つれづれの講釋もいたされけるなり。雙方和睦の評に

作者であつた彼は、又他方に於て狂言作者であつたので、此の點に於て彼は、歌舞伎と操との津梁であつた。

貞享三年、門左衛門が竹本義太夫と初めて提携して、義太夫のために『出世景清』を作つたまでは、播磨掾の爲に、將た加賀掾の爲に淨瑠璃を作り、又都萬太夫座の狂言作者として、幾多の脚本をもつた。延寶六年、坂田藤十郎が伊左衛門に扮したる『夕霧名残の正月』は、門左衛門の作の如く云ひ傳へらるゝが、まことは門左衛門の作でなさうである。此の狂言は大阪の荒木與次兵衛座で上演されたもので、都萬太夫座附の狂言作者たる彼が、當時大阪まで手を延ばしたとは思はれない。後年近松は藤十郎と意氣投合して、彼の爲に幾多の脚本を作つたから、猶遡つて推測したものでもあらうか。獨り此の狂言のみならず、加賀掾の正本や、狂言本やの中には近松作として推定されるものが近來多々あるやうであるが、果して其の推定が當を得てるか否やは疑はしい。既に淨瑠璃作者となり、狂言作者となつた彼であるから、此の頃にも幾多の述作があつたことは事實である。現に延寶六年の作としては、『助六心中蟬のぬけがら』『三社託宣由來』、同七年の作としては、『牛若干人切』、同八年の作としては、『赤染衛門榮花物語』、天和元年の作としては、『つれづれ草』『東山殿子日遊』『戀塚物語』、同三年の作としては、『龜谷物語』『世繼會我』、

傳記と著作

近松門左衛門は姓を杉森、名を信盛、通稱を平馬と云ひ、巢林子、不移山人、散人不移子、平安堂等の號があり、作者名を近松門左衛門と稱した。京都に生まれて、京都に育つたと云ふのがどうも確からしい。承應二年を以て生まれた。堂上家に仕へたと云ふことではあるが、其の年限は決して長くはなかつたらう。彼が作家生活に第一歩を踏み入つたのは、延寶四年の事で、彼の二十四歳の時である。即ち宇治嘉太夫の爲に同年五月、『源氏供養』を作り、山本角太夫の爲に同年十二月、『瀧口横笛』を作つたのである。嘉太夫は後の加賀掾で、角太夫は後の相模掾である。嘉太夫の語口については、『今昔操年代記』に、「播磨風を表とし、ふしくばりこまかに、よわくたよく美しく。」とあれば、播磨風に加味するに優婉清麗を以てし、節細かく語り出したのである。角太夫も亦哀艶を以て其の特色としてゐたやうである。

これより後、門左衛門は、如賀掾のために屢筆を執つた。延寶五年には、都萬太夫座の爲に藤壺の怨靈が藤の花から大蛇に變ずる趣向を作つて、好評噴々たるものがあつた。即ち彼の脚本として最も古いものである。此の頃よりして彼は都萬太夫座の狂言作者となつた。一方には淨瑠璃

して置かねばなるまい。廣濟寺の近松の墓表に、其の法諡と相竝んで刻んである一珠院妙中日事信女とは、其の妻の法名であらうが、其の俗名は傳はつてゐない。其の子に梅信多門ありとのことであるが、これも亦確かでない。

自像畫讚に、「三槐九卿に咫尺して。」とあるのが、従一位正親町殿に仕へたとも云ひ、又阿野家の雜掌であつたと云ふ説も傳はつてゐるが、其のいづれが真で、どのくらゐの地位を得てゐたかは更に知れてゐない。要するに、彼は其の著作以外に何等の明確なる傳記を残してゐないのである。彼ほど有名な人であるのに、彼の傳記は今日なほ五里霧中に彷徨してゐる。偶語り傳へらるるものは、云はば雲間の片鱗に過ぎない。なほ其の著作にしても、彼の作であるか否やに就いては、議論の餘地のあるものが少なからずある。

異説の多い近松の傳記中、最近に發表された、父の名が信義で、其の遠祖は江州に住し、後に淺井氏及び豊臣氏に仕へたる淀藩士の杉森氏の分家で、一たび越前家に仕へたが、後に浪人して京都に歿し、其の二男であつた信盛は、一條禪閣惠觀公に仕へたと云ふ説は、從來の諸説に比して、自像畫讚を説明するに足りる確實性を帯びてゐる。然しまだ／＼研究すべき點は多々あり、疑ふべき餘地は多く存してゐる。

は大阪谷町八丁目の法妙寺にある。法妙寺の過去帳には、父の法諡を智妙院道喜日歡信士、母の法諡を芳淨院妙閑日桂信女と云ひ、廣濟寺の過去帳には父の法諡がなくして、母の法諡を智法院貞松日喜信女と云つてある。これを確實なものとして考へて見ると、法妙寺の父の法諡に對しては、廣濟寺にあるのが、母の法諡であらう。法妙寺の母の法諡と稱するものは、正保二年四月十八日歿とあるに依りて見ても、近松未生の前であるから、これは他人（或は祖母）の法諡とおもはれる。父母の法諡はこれなりとするも、其の在世の俗名は明らかでない。

山岡元鄰の著にかゝる寛文十一年板の俳書『寶藏追加』（もと酒竹文庫藏、東京帝國大學國文學研究室現在）に杉森信盛の名で、「しら雲やはななき山の恥かくし。」と云ふ句が載つてゐる。猶此の他に杉森氏の信親、信義、信秀、喜里の四人の句も見えてゐるが、此等の人々と近松との關係は詳かでない。多分は其の一家の人達であらうと推定されるのみである。『攝津名所圖繪』には、近松の同胞について、「近松門左衛門の兄は相國寺の宗長老、弟は岡本一抱子と云ふ名醫なり、妹を錦江といふ、俳諧師にて、大阪に住す、兄弟みな世に名高し。」と云つてあるが、容易に信を措き難い。岡本一抱のことに關しては、近松の逸話をも傳へてゐるが、これにもまだ疑はしい個處が少なからずある。父母同胞については今日までの研究では詳かでないと云ふのを以て、穩當と

それよ辭世さてもそののち數々に

殘す櫻のはなしにほはば

近松門左衛門杉森姓信盛

號平安堂巢林子

阿耨院穆矣日一具足居士

此の二つの者に就いて、若し何れを取るべきかと云ふと、松山氏藏の方が一體に調つてゐると思ふ。殊に辭世の如きは、「さるほどにさてもそののちに。」とある方が面白い。猶、「のこれとは。」の一首が添へてあるので、餘計に興味がある。これを近松の自像畫讚なりとして考へて見ると、「甲冑の家に生まれて。」と云ひ、「三槐九卿に咫尺しつかへて。」とあるが、桑門に入つたとも、緇衣となつたとも見えない。して見ると、唐津の近松寺に居たとか、近江の近松寺に居たとか云ふ説は殆んど成り立たないやうに思はれる。畢竟するに、其の著作中に佛理を説き佛語に明らかなくところが多いから、近松の名と結びついて、此等の説が行はれたのではあるまいか。

近松の父は楢杜主殿助廣品と云つたなどと、まことしやかに傳へてゐるものもあるが、甚だ當にならない。近松の墓は二つありて、其の一つは攝津國川邊郡久々智の廣濟寺にあり、他の一つ

もし辭世はと問ふ人あらば

それぞ辭世去ほどに扱もそののちに

残る櫻が花しにほはば

享保九年中冬上旬

入寂名 阿耨院穆矣日一具足居士

不俟終焉豫自記春秋七十二歳 卍

のこれとはおもふもおろかうづみ火の

けぬまあだなるくち木かきして

今一つは曲亭馬琴が其の著『壬戌羈旅漫録』中に、摸寫して置いたもので、大阪金屋橋熊野屋彦九郎の所藏とある。これを前者に比すると、其の文章も辭世も體裁も幾分づゝ違つてゐる。

甲冑の家に生まれて、武林をはなれ、三槐九卿に咫尺しつかへて寸爵なく、市中にさまよひて商賣しらず、隱に似て隱にあらず、賢に似て賢ならず、世のまがひもの、神釋儒道と歌有職弓馬郢曲歌舞滑稽まで事しり顔に一ををいひちらし、今はの際のいふべき眞の一大事、半言もなき倒惑、至愚の甚しき、心に心の恥おもへば、あぶなき我が世經ぬらし

あらう。大阪は船舶の輻湊する所で、取分け西國者の集まる所であつた。近松の丹念なる、必ず此等の徒に接して、或は地理を聞き或は風俗を問ひ、其の方言を穿鑿したことであらう。東國人に接する機會の少なかつた彼は、おのづから東國に就いての知識を缺いてゐたかの如く察せられる。猶彼は旅行家でなかつた。恐らくは足近畿地方を出でなかつたのではあるまいか。井原西鶴が南船北馬したのとは異なつてゐる。近松に至りては、江戸にすら往かなかつたのである。

近松は武門に生まれ、桑門に入り、公家衆に仕へたと云はれてゐる。此のうち、武門に生まれ公家衆に仕へたと云ふのは其の自像の畫譜に依るのであるが、此の肖像畫も二種傳はりて、其のいづれが真か、二つとも真か、將た又其の或ものは否か、確かでないのである。其の一は卷頭に掲げた松山氏藏の畫幅で、

代々甲冑の家に生まれながら、武林を離れ、三槐九卿に仕へ咫尺し奉りて寸爵なく、市井に漂て商賣しらず、隱に似て隱にあらず、賢に似て賢にあらず、ものしりに似て何もしらず、世のまがひもの、からの大和の教ある道々、伎能雜藝滑稽の類までしらぬ事なげに、口にまかせ筆にはしらせ、一生を嘯りちらし、今はの際にいふべくおもふべき眞の一大事は、一字半言もなき倒惑、こゝろに心の恥をおほひて、七十あまりの光陰、おもへばおぼつかなき我が世經畢。

を名乗る者は、元祿の初から十年頃までに近松梅之助、近松勘之介、近松京之介などがある。近松門左衛門と云へる名も、近松門流の左衛門語り(祭文語り)と云ふやうな意味で附けた一種の雅號であらう。然し近松も役者としては先輩を凌ぐ事難く、都萬大夫の部屬下でも、ほんの祭文語りより出来ないので、役者としても、將た狂言作者としても、餘りに成功されぬと思ひ諦めて、此に別方面を開拓せんと、淨瑠璃に向つて修練を積んだのではあるまいかとのことであつた。

これは一説として確かに傾聽すべきものである。然し臆測すれば、都萬大夫座附の役者で近松氏を名乗つたのは、或は近江の近松寺と何等か縁故があつたかも知れぬ。門左衛門と近松寺と縁故はなくても、氏名と近松寺との間には關係のあつたのではあるまいか。間接の關係が後世では直接の關係あるかの如くに囃し立てられるに至つたのかも知れない。近松寺は蟬丸宮の別當であつて、蟬丸は琵琶に縁故が深い故、琵琶法師等はこれを尊崇し、延いて作曲家の祖と崇められ、説經節の口宣の如きは其の別當なる近松寺から出たのである。都萬大夫座の役者が近松を名乗つた其の淵源は近松寺と縁故があつたらうと思はれる。

近松門左衛門の著作中、西國に關する地理や其の方言が正確に記されてゐるので、其の生國若しくは少年時代を西國と指定するものが多いが、單に此の事實だけでしかく斷定するのは早計で

のと、長門大津郡深川村の人だと云ふ二説がある。同じ長門産の説にしても深川以外に萩の出生だと云ふ説もあるし、鄰國周防の産と説くものもあるが、深川説の方がやゝ合理的である。然し近江説も長門説も決して確證のあるわけではなく、共に傳説に止まるのである。然し此等の説よりも、むしろ京都生まれと云ふのが、どうやら眞實らしい。彼が平安堂と名乗つたのも、其の消息を漏らすものではあるまいか。彼の作なる『國性命後日合戰』中の道行に、「柳が浦のいと長く、何處いづくに露をくりためて、所も萩の唐錦、故郷の空に翻す袂の色。」とあるに依りて、萩、若しくは其の附近を故郷ではあるまいかと推測するのは、附會の説である。

彼は其の少年時代を肥前唐津の近松寺に過したと云ふ説と、江州近松寺にゐたと云ふ二説があるが、此等は何れも近松門左衛門と云ふ雅號から出た臆測説と思はれる。果して近松寺なるものと雅號とが縁故ありやと反問せねばならぬ。此の事に關しては、久しく疑問を抱いてゐたから、近松研究の權威者なる樋口慶千代氏に尋ねた所、氏は實に近松寺關係の否定論者であつた。氏の説に依れば、近松が少時狂言作者であり、舞臺へも出たことは、元祿時代に近松の作と推定される狂言の多きと、評判記に、「萬太夫の道具直しにも出でられし。」「若き時は都萬太夫座の拍子木も打ち給ひ。」とあるにて推察される。近松は都萬太夫座に屬してゐたが、此の座の役者に近松氏

南に住所を構へ、浪花の腹ふくれ衆を集め、碁、將碁、茶の湯、連伴の座敷なれども、あるじ播磨風を語り出せしより、皆音曲稽古場となれり。」とあるは、大阪町人が泰平の春を樂んだを見るに足りる。播磨掾について、宇治加賀掾があつた。「幼少より音曲に妙備はり、第一謠をよく鍛錬し、鳴物一通り疏からず。」(『今昔操年代記』)遂に一流を語り出した。之と殆んど時を同じうして出で、上方の淨瑠璃を集大成したものは、實に竹本義太夫であつた。義太夫の天才はさる事ながら、作者近松門左衛門と相提携するに至りて、彼の妙技は光輝を放つたのである。

門左衛門は淨瑠璃作家として古今獨歩である。彼の前に彼なく、彼の後に彼はない。我が邦が出した文學者として、彼ほどの偉才は殆んど他に匹儔稀なりと云ふも、誰か抗言する者があらうか。輓近に至りて、彼の研究は相當に微細に入つたが、餘地は猶多々に存するのである。往年丸善書店にて『近松著作全書』を出し、其の後、武藏屋にて一篇づゝの出版あり、近年に至りては、數種の近松全集を出し、諸家の研鑽は日に進んだものの、近松には猶未知の境地が少なからずある。第一に彼の傳記は依然として茫漠の裏に残つてゐる。

先づ彼の生地はいづくであるか。これに就いては、幾多の異説がありて、今に定まる所を知らない。此のうち最も有力なものは、近江の國大津に近き高觀音と稱する近松寺に生まれたと云ふ

河原にして、鎌田の政清が事を語りて、人形を操り、其の後がうの姫、阿彌陀の胸割など云ふことを語りける。次に河内左内といふもの出でたり、女にも南無右衛門、左門、よしたか、などと、淨瑠璃を語りけるを、歌舞伎と一同に、女はとゞめられぬ。近き頃に、江戸より宮内といふ者上りて左内とせり合ひ、いろく珍らしき操を致しける。程なく宮内は死せり。左内もなくなり、今は其の子ども打ちつゞきて、操をいたし、めんく受領して、がだらつく中に、喜大夫といふ者、上總の掾になりて、太平記を語る。其の曲節、平家とも、舞とも、謠とも知れぬ鳥者なり。」と。西宮の夷かきは手使ひ人形師であつたが、支那舶載の絲操も同時に行はれたから、一般にこれを操と稱した。然し絲操の方は衰へて、手使ひの方が進歩して行はれることとなつた。

淨瑠璃の一派は東下したが、一派は上方に残りて發達した。即ち町人全盛の大阪を中心として四代將軍家綱の頃から頼に刮目すべき時代に入つたのである。即ち井上播磨掾出づるに及んで淨瑠璃界は目覺しきものとなつた。『今昔操年代記』に評して、「播磨太夫少年の頃より音曲を好み、フシ、チクリ、三重、チン、フシチクリ、ハル、ギン、此の類に心を配り、就中愁ひ、修羅を第一にかたられしかば、云々。」とありて、天性の高聲なる上に、節細かに愁嘆、修羅を語るに長じてゐたのである。播磨の門人に清水理兵衛があつた。おなじ『今昔操年代記』に、「此の安居天神の

ある。柴屋軒宗長の『宗長日記』に、「小座頭あるに、淨瑠璃を唄はせ興じて一杯に及ぶ。」とあるを見て、足利季世頃は、淨瑠璃は盲法師の歌ふものであつた。然るに門閥階級の打破せられて、平民級が活躍を初めた時代であるから、久しからぬうちに盲法師等専門家の手を離れて、民間に流通したのである。

平家が琵琶を弾すると異なりて、淨瑠璃節では三味線を用ゐた。三味線は琉球傳來の蛇皮線を改造したものである。淨瑠璃が民間に流通すると共に、これに操人形を合はせて興行する事を初めたのである。人形使ひの事は、古く大江匡房の『傀儡子記』に見えて、「傀儡子は定居なく、當家なく、穹廬毘帳、水草を逐ひて以て移徙し、頗る北狄の俗に類す。」と云ひ、「夜は則ち百神を祭り鼓舞喧嘩、もつて福助を祈り、東國にては美濃、參河、遠州等の黨を豪貴となし、山陽にては播州、山陰にては馬州土黨これに次ぎ、西海の黨を下となす。」とあるが如く、もと一定の住所なく諸國を巡遊して生計を營んだので、朝鮮より渡來したものらしい。後世攝津の西宮に多く住し、惠比壽神像に形つた人形かたどを使ひて、諸方を歴遊してゐたのである。此に著目した興行師は、淨瑠璃節と人形との握手を計つた。淺井了意の作と云はれる『東海道名所記』に云ふ、「また淨瑠璃は、其の頃、京の次郎兵衛とかや云ふ者、後に淡路丞と受領せし、西の宮の夷かきをかたらひ、四條

なるべし。〔『堂島舊記』〕とあるのが、當時の大阪であつた。幕府にても地子銀を除いて之が恢復をはかり、寛永二年には、北組、南組、天満組、三郷の人数は二十七萬九千六百十人となり、寛文九年には、四十萬七千三百四人となつた。

元和五年に堺の町人が二百五十五石積の商船に積荷して、江戸に輸送してから、關西と關東との間に通運は開かれ、大阪は之に倣つて、江戸積の間屋を設けて、廻船を送つた。即ち云ふところの菱垣船である。一方には海運業が盛んになると共に、他方には諸大名の回漕米を糶賣する市場が、初めは淀屋橋附近に設けられ、後には堂島に移り、延米賣買をも始めて、大阪の商業は俄然として、隆昌に趣き、町人の富裕なるものは數多くなつた。町人文化は従つて振興せねばならなかつた。

京都四條河原に始めて興行せられた歌舞伎と操あやつりとは、江戸にも大阪にも流行して、民衆の歡樂に供せられた。操は淨瑠璃節と相待ちて、民衆の耳目を喜ばせたのである。淨瑠璃の名稱は、淨瑠璃物語に出たのであらう。よし淨瑠璃物語は淨瑠璃節の最も古き唯一の語物ではなかつたにせよ、最も古きものの一には相違なかつたと思はれる。其の段數に依りて、世に之を十二段草子と云ふのである。淨瑠璃節は平家から起つて、新しい創意が加へられた、極めて民衆的な音曲で

解題

文學博士 笹川種郎

疑問のかずく

泉州堺に於て町人全盛の曙光を開き、金權萬能の力を發揮し、町人文化の端緒を創めたが、やがて其の商權は大阪に移ることとなつた。政權に於ては豊臣氏の勢力が長からぬために失敗したが、久しからぬうちに財界に於て次第に其の地歩を確保することとなつた。

夏冬二役後に於ける大阪は暫く荒廢の狀であつた。天満、船場、上町の離散した町人をひき戻し、荒地損じ家を引渡して建築させたが、表通りは僅かに藁葺の家屋で、伏見から二百餘町が引移りて、漸くこれを補足したほどの、惨めな狀況であつたのである。御陣鎮まり、立戻り候町人共、誠に手と身とに相成候事故、建家藁葺竹垣、裏は畑にて作り物致し、水道石垣もこれなく、井路同然、今の天下茶屋村邊の姿なり、家買人これなく、銘々持ちあぐみ、町人に金銀甚だ拂底

解題

文學博士 笹川種郎……卷頭—一五

上演人物解説

……同 卷頭—一二三

註釋

……卷尾—一三三

目次終

目次

忠兵衛
梅川 冥土の飛脚 七五—七四三

吉野都女楠 七四三—七九五

姫山姥 七九七—八四三

長町女腹切 八四三—八六九

傾城吉岡染 八七一—九一九

娥歌加留多 九三—九七四

嵯峨天皇甘露雨 九七五—一〇三七

あとお
ひ心中 卯月の潤色……………四九一—五〇九

高野山
女人堂 心中萬年草……………五一—五三四

丹波與作待夜の小室節……………五三五—五七〇

おなつ
清十郎 五十年忌歌念佛……………五七一—五九八

淀鯉出世瀧徳……………五九九—六二七

二郎兵衛
おきさ 今宮心中……………六三九—六五五

心中刃は氷の朔日……………六五七—六八七

夕霧阿波鳴渡……………六八九—七四四

曾根崎心中……………三三五—三五一

源五兵衛
おまん 薩摩歌……………二五三—二九五

心中重井筒……………二九七—三〇〇

雪女五枚羽子板……………三三一—三七一

傾城反魂香……………三七三—四三〇

心中二枚繪草紙……………四二一—四四三

道具屋
おかめ 緋縮緬卯月栴……………四四三—四六四

堀川波鼓……………四六五—四九〇

近代
日本文學大系 第六卷目次

出世景清……………一—三〇

大覺僧正御傳記……………三一—五七

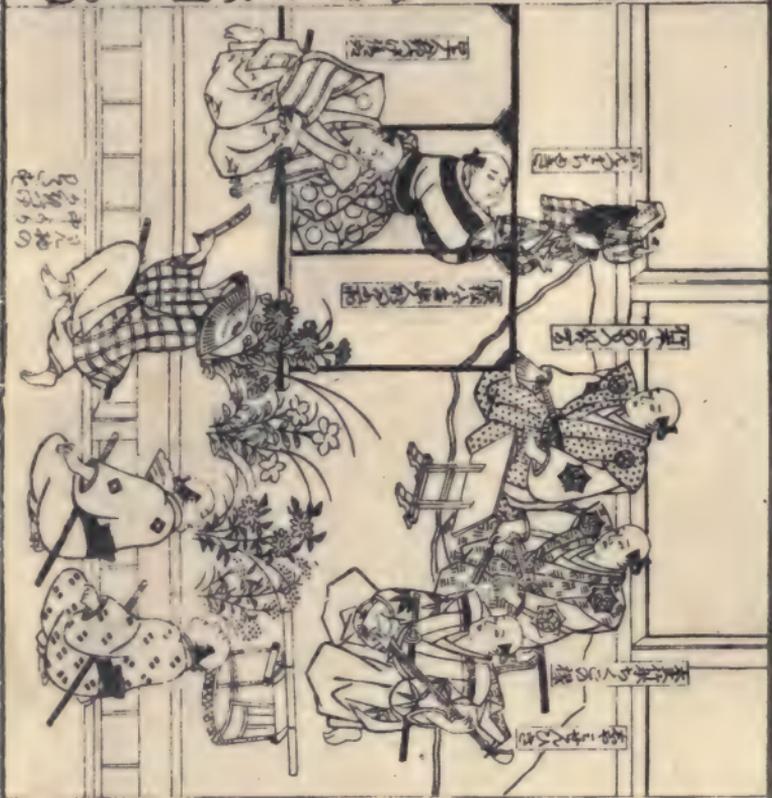
百日曾我……………五九—一〇七

當流小栗判官……………一〇九—一四三

蟬丸……………一四五—一七九

賀古教信七墓廻……………一八一—二三四

天 香林 中
 主 松門左衛門
 他 著 人 中 八郎 志 松



香林 中
 主 松門左衛門
 他 著 人 中 八郎 志 松

PL

793

.4

A6

1927

v. 1



PL
752

近
松
門
左
衛
門
集

上



PL
793
.4
A6
1927
v.1

Chikamatsu, Monzaemon
Chikamatsu Monzaemon shu

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

